酒々井町飯積原山遺跡 2

縄文時代編

— 酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書３ —

平成26年11月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構

公益財団法人　千葉県教育振興財団

正　誤　表

頁	行	誤	正
図版目次	図版11	・(10)SK484	・(10)SK485
図版目次	図版14	(12)SI039	(12)SI037
図版目次	図版20	(33)SI058	削除
111	2	、図版13	削除
111	下から7	図版14	図版74
113	1	図版75	図版74
144	15	図版54	図版54・77
144	下から12	図版77	図版77・78
163	下から2	図版79	図版79・80
171	下から9	図版82	図版80
175	3	第143図、図版117	第142図、図版113
175	7	石器	石器(第143図・図版117)
189	10	図版56・57・83	図版56・57・82・83
202	15	図版59・86	図版58・86
217	9	図版89	図版113
235	14	右の文章を追加	堅果類は千葉大学大学院園芸学部准教授百原新准教授によりすべてクヌギと鑑定された。
251	10	図版	図版96
273	9	図版	図版101
274	下から11	図版101	図版65・101
278	25	第183図、図版43	第183図、図版44
285	18	図版66・	図版65・66・
293	下から9	出土状況は不明である。1は隆線	出土状況は不明である。行変え　土器(第244図、図版105)行変え　1は隆線
295	下から7	図版105	図版106
297	下から6	図版106・107	図版106
411	1段目の左から3個目	76	77
413	12	図版67・109)	図版67)
図版11	左列1段目	・(10)SK484	・(10)SK485
図版14	左列2段目	(12)SI039	(12)SI037
図版20	右列4段目		削除
図版29	中列2段目		削除
図版37	中列3段目	SK051・SK052	SH051・SH052
図版45	中列2段目		削除
図版51	左列1段目	(4)SI058-6	(4)SI058-4
図版66	左列4段目	(29)SK944-9	(29)SK944-10
図版73	左列2段目	(11)SI1012の2と3	2を3へ、3を2へ入れ替え
図版78	右列1段目	(29)SI709の11と14	11を14へ、14を11へ入れ替え
図版83	右列2段目	(7)SK220の2	(7)SK220の3
図版85	左列1段目	(7)SK238の20	(7)SK238の22
図版89	左列1段目	(10)SK347	(10)SK357
図版91	右列1段目	(10)SK404の4と3	3を4へ、4を3へ入れ替え
図版95	左列2段目	(10)SK572	(10)SK572・(10)SK578
図版102	左列1段目	(29)SK826	(29)SK826・(29)SK827
図版103	左列2段目	(29)SK947の3と4	3を4へ、4を3へ入れ替え
図版108	右列1段目	(33)SK056の4と5	4を5へ、5を4へ入れ替え
図版108	右列2段目	(33)SK108	(37)SK108
図版109	左列2段目	(2)区	(3)区
図版113	下段	SI240・SI260・SI272・SI277・SI278・SI283	SK240・SK260・SK272・SK277・SK278・SK283
図版115	上段	(27)区	(29)区
図版115	下段	(8)SI016の37と38	37を38へ、38を37へ入れ替え
図版117	上段	(30)SI016	(33)SI016
図版117	下段	(9)SK158	(9)SK168

酒々井町飯積原山遺跡 2

縄文時代編

― 酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書３ ―

(10)SK471 ピット内石器出土状況

(29)SI705 土器片囲い炉

(29)SI705 炉　出土土器

(29)SI711 斜位土器埋設炉

(29)SI711 炉　出土土器

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第731集として、独立行政法人都市再生機構の酒々井南部地区土地区画整理事業に伴って実施した酒々井町飯積原山遺跡の２冊目の発掘調査報告書（縄文時代編）を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の集落跡が検出され、また大量の土器・石器等の遺物が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年11月

公益財団法人　千葉県教育振興財団

理　事　長　堀　田　弘　文

凡　　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による酒々井南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡酒々井町飯積字宮田台535－2ほかに所在する飯積原山遺跡（遺跡コード322－005）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は調査研究部長　伊藤智樹、整理課長　今泉　潔の指導のもと、主任上席文化財主事　木原高弘、上席文化財主事　西川博孝・橋本勝雄が担当した。執筆分担は、木原が第１章第１節、第２章の遺構、西川が第１章第２節、第２章の土器・土製品、第３章、橋本が第２章の石器である。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導、御協力を得た。
千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、酒々井町教育委員会、柳澤清一、長山明弘、百原　新

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。
第１図　都市再生機構　1/2,500現況図（平成６年作成）
第19図　国土地理院　1/25,000地形図「酒々井」（N1 - 54 - 19 - 10 - 4）
第20図　参謀本部陸軍部測量局　1/20,000第一軍管地方迅速測図「成田村」「八街村」「中川村」「佐倉」（明治15年測量）を1/25,000に縮小して使用。

8　調査地周辺の航空写真は、京葉測量株式会社が1972（昭和47）年３月に撮影したものを、約1/10,000に拡大して使用した。

9　本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）で、図面の方位はすべてその座標北を示す。

10　遺構実測図で使用した記号は、●は土器、■は土製品、▲は石器の出土位置を示している。

本　文　目　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と経過…… 1
　　２　調査・整理の方法…… 6
　第２節　遺跡の位置と環境…… 29
　　１　遺跡の位置と地形…… 29
　　２　周辺遺跡の概要…… 29
　第３節　調査成果の概要と時期区分…… 34
　　１　成果の概要…… 34
　　２　時期区分…… 35
第２章　遺構と出土遺物…… 37
　第１節　竪穴住居跡・掘立柱建物跡…… 37
　第２節　土坑等…… 192
　第３節　遺構外出土遺物…… 413
　　１　土器…… 413
　　２　土製品…… 425
　　３　石器…… 429
第３章　まとめ…… 436
報告書抄録…… 巻末

挿 図 目 次

第１図　グリッド名称例 …… 6
第２図　調査対象範囲と地形 …… 7
第３図　振替後の調査区割り全体図 …… 9
第４図　縄文時代遺構分布分割枠図 ……13・14
第５図　遺構分布図（1）……15
第６図　遺構分布図（2）……16
第７図　遺構分布図（3）……17
第８図　遺構分布図（4）……18
第９図　遺構分布図（5）……19
第10図　遺構分布図（6）……20
第11図　遺構分布図（7）……21
第12図　遺構分布図（8）……22
第13図　遺構分布図（9）……23
第14図　遺構分布図（10）……24
第15図　遺構分布図（11）……25
第16図　遺構分布図（12）……26
第17図　遺構分布図（13）……27
第18図　遺構分布図（14）……28
第19図　遺跡の位置と周辺の縄文時代中期遺跡 ……31
第20図　遺跡の位置と地形 ……32
第21図　(4) SI058……38
第22図　(6) SI004……39
第23図　(6) SI005……40
第24図　(6) SI007……40
第25図　(6) SI010……41
第26図　(6) SI011……42
第27図　(7) SI206……43
第28図　(7) SI226（1）……45
第29図　(7) SI226（2）……46
第30図　(7) SI232……47
第31図　(7) SI256……48
第32図　(7) SI257……49
第33図　(7) SI262（1）……50
第34図　(7) SI262（2）……51
第35図　(7) SI273……53
第36図　(7) SI275・(7) SI276 ……54
第37図　(7) SI288……55
第38図　(7) SI289……57
第39図　(7) SI296……58
第40図　(7) SI380・(7) SI381 ……59
第41図　(8) SI010……61
第42図　(8) SI015……61
第43図　(8) SI016（1）……62
第44図　(8) SI016（2）……63
第45図　(8) SI020（1）……65
第46図　(8) SI020（2）……66
第47図　(8) SI030……67
第48図　(9) SI148……69
第49図　(9) SI182・(9) SI183・(9) SI184 …70
第50図　(9) SI186……71
第51図　(10) SI312 ……72
第52図　(10) SI313 ……74
第53図　(10) SI314 ……75
第54図　(10) SI328 ……76
第55図　(10) SI337 ……77
第56図　(10) SI339 ……78
第57図　(10) SI341 ……79
第58図　(10) SI342 ……81
第59図　(10) SI353（1）……82
第60図　(10) SI353（2）……83
第61図　(10) SI355 ……84
第62図　(10) SI356 ……86
第63図　(10) SI363 ……87
第64図　(10) SI459 ……88
第65図　(10) SI489・(10) SI492・(10) SI493 …89
第66図　(10) SI497 ……90
第67図　(10) SI521 ……91
第68図　(10) SI522 ……92
第69図　(10) SI529 ……93
第70図　(10) SI530 ……94
第71図　(10) SI531 ……95

第72図　(10) SI564 ……96
第73図　(10) SI565 ……97
第74図　(10) SI569 ……98
第75図　(10) SI570 ……99
第76図　(10) SI574 …… 100
第77図　(10) SI651 …… 101
第78図　(11) SI1011…… 102
第79図　(11) SI1012…… 103
第80図　(11) SI1013 (1)…… 104
第81図　(11) SI1013 (2)…… 105
第82図　(11) SI1013 (3)…… 106
第83図　(11) SI1014…… 107
第84図　(11) SI1015 (1)…… 108
第85図　(11) SI1015 (2)…… 109
第86図　(11) SI1017…… 110
第87図　(11) SI1018…… 111
第88図　(11) SI1019…… 112
第89図　(12) SI014 …… 113
第90図　(12) SI024 …… 114
第91図　(12) SI026 …… 115
第92図　(12) SI037 …… 116
第93図　(12) SI053 …… 117
第94図　(14) SI140 …… 118
第95図　(15) SI005 …… 119
第96図　(15) SI006 …… 120
第97図　(16) SI003 …… 122
第98図　(17) SI012 …… 123
第99図　(17) SI013 …… 124
第100図　(17) SI014 …… 125
第101図　(17) SI015 (1) …… 126
第102図　(17) SI015 (2) …… 127
第103図　(26) SI001 …… 128
第104図　(26) SI003 …… 129
第105図　(26) SI004 …… 130
第106図　(26) SI005 …… 131
第107図　(26) SI006 …… 132
第108図　(26) SI007 …… 133
第109図　(26) SI018 …… 134
第110図　(29) SI701 (1) …… 136
第111図　(29) SI701 (2) …… 137
第112図　(29) SI702 …… 138
第113図　(29) SI703 (1) …… 139
第114図　(29) SI703 (2) …… 140
第115図　(29) SI704 …… 142
第116図　(29) SI705 …… 143
第117図　(29) SI706 …… 145
第118図　(29) SI707 (1) …… 146
第119図　(29) SI707 (2) …… 147
第120図　(29) SI708 …… 148
第121図　(29) SI709 (1) …… 150
第122図　(29) SI709 (2) …… 151
第123図　(29) SI710 (1) …… 152
第124図　(29) SI710 (2) …… 153
第125図　(29) SI711 (1) …… 155
第126図　(29) SI711 (2) …… 156
第127図　(29) SI711 (3) …… 157
第128図　(29) SI713 (1) …… 159
第129図　(29) SI713 (2) …… 160
第130図　(29) SI714 …… 161
第131図　(29) SI860 …… 162
第132図　(30) SI008 …… 163
第133図　(30) SI009 …… 164
第134図　(30) SI010 (1) …… 165
第135図　(30) SI010 (2) …… 166
第136図　(30) SI011 (1) …… 167
第137図　(30) SI011 (2) …… 168
第138図　(33) SI011・(33) SI093・
(33) SB066 (1) …… 169
第139図　(33) SI011・(33) SI093・
(33) SB066 (2) …… 170
第140図　(33) SB099 …… 172
第141図　(33) SI014 …… 173
第142図　(33) SI016 (1) …… 174
第143図　(33) SI016 (2) …… 175
第144図　(33) SI017 …… 176
第145図　(33) SI018 (1) …… 178
第146図　(33) SI018 (2) …… 179
第147図　(33) SI019 (1) …… 180

第148図　(33) SI019 (2) …… 181
第149図　(33) SI020 …… 183
第150図　(33) SI075 …… 184
第151図　(33) SI100 …… 185
第152図　(35) SI001 …… 186
第153図　(37) SI004 …… 187
第154図　(37) SI103 …… 188
第155図　(37) SI104 (1) …… 190
第156図　(37) SI104 (2) …… 191
第157図　土坑等 (1) …… 308
第158図　土坑等 (2) …… 309
第159図　土坑等 (3) …… 310
第160図　土坑等 (4) …… 311
第161図　土坑等 (5) …… 312
第162図　土坑等 (6) …… 313
第163図　土坑等 (7) …… 314
第164図　土坑等 (8) …… 315
第165図　土坑等 (9) …… 316
第166図　土坑等 (10)…… 317
第167図　土坑等 (11)…… 318
第168図　土坑等 (12)…… 319
第169図　土坑等 (13)…… 320
第170図　土坑等 (14)…… 321
第171図　土坑等 (15)…… 322
第172図　土坑等 (16)…… 323
第173図　土坑等 (17)…… 324
第174図　土坑等 (18)…… 325
第175図　土坑等 (19)…… 326
第176図　土坑等 (20)…… 327
第177図　土坑等 (21)…… 328
第178図　土坑等 (22)…… 329
第179図　土坑等 (23)…… 330
第180図　土坑等 (24)…… 331
第181図　土坑等 (25)…… 332
第182図　土坑等 (26)…… 333
第183図　土坑等 (27)…… 334
第184図　土坑等 (28)…… 335
第185図　土坑等 (29)…… 336
第186図　土坑等 (30)…… 337
第187図　土坑等 (31)…… 338
第188図　土坑等 (32)…… 339
第189図　土坑等 (33)…… 340
第190図　土坑等 (34)…… 341
第191図　土坑等出土土器 (1) …… 342
第192図　土坑等出土土器 (2) …… 343
第193図　土坑等出土土器 (3) …… 344
第194図　土坑等出土土器 (4) …… 345
第195図　土坑等出土土器 (5) …… 346
第196図　土坑等出土土器 (6) …… 347
第197図　土坑等出土土器 (7) …… 348
第198図　土坑等出土土器 (8) …… 349
第199図　土坑等出土土器 (9) …… 350
第200図　土坑等出土土器 (10)…… 351
第201図　土坑等出土土器 (11)…… 352
第202図　土坑等出土土器 (12)…… 353
第203図　土坑等出土土器 (13)…… 354
第204図　土坑等出土土器 (14)…… 355
第205図　土坑等出土土器 (15)…… 356
第206図　土坑等出土土器 (16)…… 357
第207図　土坑等出土土器 (17)…… 358
第208図　土坑等出土土器 (18)…… 359
第209図　土坑等出土土器 (19)…… 360
第210図　土坑等出土土器 (20)…… 361
第211図　土坑等出土土器 (21)…… 362
第212図　土坑等出土土器 (22)…… 363
第213図　土坑等出土土器 (23)…… 364
第214図　土坑等出土土器 (24)…… 365
第215図　土坑等出土土器 (25)…… 366
第216図　土坑等出土土器 (26)…… 367
第217図　土坑等出土土器 (27)…… 368
第218図　土坑等出土土器 (28)…… 369
第219図　土坑等出土土器 (29)…… 370
第220図　土坑等出土土器 (30)…… 371
第221図　土坑等出土土器 (31)…… 372
第222図　土坑等出土土器 (32)…… 373
第223図　土坑等出土土器 (33)…… 374
第224図　土坑等出土土器 (34)…… 375
第225図　土坑等出土土器 (35)…… 376

第226図　土坑等出土土器（36）…… 377
第227図　土坑等出土土器（37）…… 378
第228図　土坑等出土土器（38）…… 379
第229図　土坑等出土土器（39）…… 380
第230図　土坑等出土土器（40）…… 381
第231図　土坑等出土土器（41）…… 382
第232図　土坑等出土土器（42）…… 383
第233図　土坑等出土土器（43）…… 384
第234図　土坑等出土土器（44）…… 385
第235図　土坑等出土土器（45）…… 386
第236図　土坑等出土土器（46）…… 387
第237図　土坑等出土土器（47）…… 388
第238図　土坑等出土土器（48）…… 389
第239図　土坑等出土土器（49）…… 390
第240図　土坑等出土土器（50）…… 391
第241図　土坑等出土土器（51）…… 392
第242図　土坑等出土土器（52）…… 393
第243図　土坑等出土土器（53）…… 394
第244図　土坑等出土土器（54）…… 395
第245図　土坑等出土土器（55）…… 396
第246図　土坑等出土土器（56）…… 397
第247図　土坑等出土土器（57）…… 398
第248図　土坑等出土土器（58）…… 399
第249図　土坑等出土土器（59）…… 400
第250図　土坑等出土土器（60）…… 401
第251図　土坑等出土土器（61）…… 402
第252図　土坑等出土土器（62）…… 403
第253図　土坑等出土土器（63）…… 404
第254図　土坑等出土土製品（1）…… 405
第255図　土坑等出土土製品（2）…… 406
第256図　土坑等出土石器（1）…… 407
第257図　土坑等出土石器（2）…… 408
第258図　土坑等出土石器（3）…… 409
第259図　土坑等出土石器（4）…… 410
第260図　土坑等出土石器（5）…… 411
第261図　土坑等出土石器（6）…… 412
第262図　遺構外出土土器（1）…… 414
第263図　遺構外出土土器（2）…… 415
第264図　遺構外出土土器（3）…… 417
第265図　遺構外出土土器（4）…… 419
第266図　遺構外出土土器（5）…… 421
第267図　遺構外出土土器（6）…… 423
第268図　遺構外出土土器（7）…… 424
第269図　遺構外出土土製品（1）…… 426
第270図　遺構外出土土製品（2）…… 427
第271図　遺構外出土土石器（1）…… 431
第272図　遺構外出土土石器（2）…… 433
第273図　遺構外出土土石器（3）…… 434
第274図　縄文時代時期別遺構分布図 …437・438

表　目　次

第１表　発掘調査面積一覧…… 2
第２表　地区割り一覧…… 8
第３表　遺構種別一覧…… 10〜12
第４表　縄文時代中期周辺遺跡一覧…… 30

添付ＣＤ
附表１　遺構一覧表
附表２　土器一覧表
附表３　土製品一覧表
附表４　石器一覧表
附表５　石器一覧表（非掲載分）

図　版　目　次

巻頭図版　(10) SK471ピット内石器出土状況
(29) SI705土器片囲い炉、(29) SI705炉出土土器、(29) SI711斜位土器埋設炉、(29) SI711炉出土土器

図版１　遺跡周辺の航空写真

図版２　(7) 区西から、(7) 区北西から、
(9) 区東から

図版３　(10) 区、(10) 区東から、
(11) 区南から

図版４　(29) 区、(33) 区南から、
(33) 区北から

図版５　(4) SI058、(4) SI058遺物出土状況、
(6) SI004、(6) SI005、(6) SI007、
(6) SI010、(6) SI011、(7) SI206

図版６　(7) SI214、(7) SI218、(7) SI226、
(7) SI232、(7) SI256、(7) SI257遺物出土状況、(7) SI262、(7) SI262遺物出土状況

図版７　(7) SI273、(7) SI275、(7) SI276、
(7) SI276遺物出土状況、(7) SI288、
(7) SI289、(7) SI296、(7) SI380

図版８　(8) SI010、(8) SI015、(8) SI016、
(8) SI020、(8) SI030、(9) SI048・
(9) SK159、(9) SI182、(9) SI183

図版９　(9) SI184、(9) SI186、(9) SI189A・
(9) SK189B、(9) SK189B 遺物出土状況、
(10) SI312、(10) SI312炉・遺物出土状況、(10) SI313、(10) SI314

図版10　(10) SI327、(10) SI328、(10) SI341、
(10) SI342、(10) SI353、(10) SI355、
(10) SI355遺物出土状況、(10) SI356

図版11　(10) SI363・(10) SK364・(10) SK484、
(10) SI489、(10) SI492、(10) SI493、
(10) SI497、(10) SI522、(10) SI529、
(10) SI530

図版12　(10) SI531、(10) SI570遺物出土状況、
(10) SI574、(10) SI576、(10) SI651遺物出土状況、(11) SI1011、
(11) SI1011遺物出土状況、(11) SI1012

図版13　(11) SI1013、(11) SI1014、
(11) SI1015、(11) SI1015炉・遺物出土状況 (11) SI1017、(11) SI1018、
(12) SI014、(12) SI014炉・遺物出土状況

図版14　(12) SI024、(12) SI026、(12) SI039、
(12) SI053、(14) SI140、(15) SI005、
(15) SI005炉、(16) SI003

図版15　(16) SI003炉・遺物出土状況、
(17) SI012遺物出土状況、
(17) SI013、(17) SI014、(17) SI014炉、
(17) SI015、(26) SI001、
(26) SI001炉・遺物出土状況、

図版16　(26) SI003、(26) SI003炉・遺物出土状況、(26) SI004、(26) SI005、
(26) SI005遺物出土状況、
(26) SI006、(26) SI007、(26) SI018

図版17　(29) SI701・(29) SK926、(29) SI701炉・遺物出土状況、(29) SI702、
(29) SI703・(29) SK924・(29) SK925、
(29) SI704、(29) SI704遺物出土状況、
(29) SI705・(29) SK932、(29) SI705炉・遺物出土状況

図版18　(29) SI706・(29) SK922、(29) SI707、
(29) SI708、(29) SI709、(29) SI709炉・遺物出土状況、(29) SI710、
(29) SI711、(29) SI711炉・遺物出土状況

図版19　(29) SI713、(29) SI713炉・遺物出土状況、(30) SI008、(30) SI009、
(30) SI010、(30) SI010炉・遺物出土状況、(30) SI011、(33) SI011・
(33) SI093・(33) SB066

図版20　(33) SI014、(33) SI016、(33) SI016炉・遺物出土状況、(33) SI017・(33) SK074、(33) SI018、(33) SI019、(33) SI019遺物出土状況、(33) SI058
図版21　(33) SI075、(33) SI075遺物出土状況、(33) SI093、(33) SI100、(35) SI001、(35) SI001遺物出土状況、(37) SI103、(37) SI104
図版22　土坑等 (1)
図版23　土坑等 (2)
図版24　土坑等 (3)
図版25　土坑等 (4)
図版26　土坑等 (5)
図版27　土坑等 (6)
図版28　土坑等 (7)
図版29　土坑等 (8)
図版30　土坑等 (9)
図版31　土坑等 (10)
図版32　土坑等 (11)
図版33　土坑等 (12)
図版34　土坑等 (13)
図版35　土坑等 (14)
図版36　土坑等 (15)
図版37　土坑等 (16)
図版38　土坑等 (17)
図版39　土坑等 (18)
図版40　土坑等 (19)
図版41　土坑等 (20)
図版42　土坑等 (21)
図版43　土坑等 (22)
図版44　土坑等 (23)
図版45　土坑等 (24)
図版46　土坑等 (25)
図版47　土坑等 (26)
図版48　土坑等 (27)
図版49　土坑等 (28)
図版50　土坑等 (29)
図版51　住居跡出土土器 (1)
図版52　住居跡出土土器 (2)
図版53　住居跡出土土器 (3)
図版54　住居跡出土土器 (4)
図版55　住居跡出土土器 (5)
図版56　住居跡出土土器 (6)
図版57　住居跡出土土器 (7)
　土坑等出土土器 (1)
図版58　土坑等出土土器 (2)
図版59　土坑等出土土器 (3)
図版60　土坑等出土土器 (4)
図版61　土坑等出土土器 (5)
図版62　土坑等出土土器 (6)
図版63　土坑等出土土器 (7)
図版64　土坑等出土土器 (8)
図版65　土坑等出土土器 (9)
図版66　土坑等出土土器 (10)
図版67　土坑等出土土器 (11)
　遺構外出土土器 (1)
　住居跡出土土器 (8)
図版68　住居跡出土土器 (9)
図版69　住居跡出土土器 (10)
図版70　住居跡出土土器 (11)
図版71　住居跡出土土器 (12)
図版72　住居跡出土土器 (13)
図版73　住居跡出土土器 (14)
図版74　住居跡出土土器 (15)
図版75　住居跡出土土器 (16)
図版76　住居跡出土土器 (17)
図版77　住居跡出土土器 (18)
図版78　住居跡出土土器 (19)
図版79　住居跡出土土器 (20)
図版80　住居跡出土土器 (21)
　掘立柱建物跡出土土器
図版81　住居跡出土土器 (22)
図版82　住居跡出土土器 (23)
図版83　住居跡出土土器 (24)
　土坑等出土土器 (12)
図版84　土坑等出土土器 (13)
図版85　土坑等出土土器 (14)
図版86　土坑等出土土器 (15)

図版87　土坑等出土土器（16）
図版88　土坑等出土土器（17）
図版89　土坑等出土土器（18）
図版90　土坑等出土土器（19）
図版91　土坑等出土土器（20）
図版92　土坑等出土土器（21）
図版93　土坑等出土土器（22）
図版94　土坑等出土土器（23）
図版95　土坑等出土土器（24）
図版96　土坑等出土土器（25）
図版97　土坑等出土土器（26）
図版98　土坑等出土土器（27）
図版99　土坑等出土土器（28）
図版100　土坑等出土土器（29）
図版101　土坑等出土土器（30）
図版102　土坑等出土土器（31）
図版103　土坑等出土土器（32）
図版104　土坑等出土土器（33）
図版105　土坑等出土土器（34）
図版106　土坑等出土土器（35）
図版107　土坑等出土土器（36）
図版108　土坑等出土土器（37）
図版109　土坑等出土土器（38）・遺構外出土土器（2）
図版110　遺構外出土土器（3）
図版111　遺構外出土土器（4）
図版112　遺構外出土土器（5）、住居跡出土土製品（1）
図版113　住居跡出土土製品（2）・掘立柱建物跡出土土製品、土坑等出土土製品（1）
図版114　土坑等出土土製品（2）、遺構外出土土製品（1）
図版115　遺構外出土土製品（2）、住居跡出土石器（1）
図版116　住居跡出土石器（2）、住居跡出土石器（3）・掘立柱建物跡出土石器
図版117　住居跡出土石器（4）、土坑等出土石器（1）
図版118　土坑等出土石器（2）、土坑等出土石器（3）
図版119　土坑等出土石器（4）、遺構外出土石器（1）
図版120　遺構外出土石器（2）、（10）SK475出土炭化堅果

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構（平成７年１月１日契約時は住宅・都市整備公団、平成11年～16年まで都市基盤整備公団）は、千葉県印旛郡酒々井町において、酒々井南部地区土地区画整理事業を計画した。実施に当たり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には飯積原山遺跡・飯積上台遺跡が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年８月以前は財団法人千葉県文化財センター、平成17年９月からは財団法人千葉県教育振興財団）に委託した。

酒々井南部地区の調査対象総面積は482,600㎡で、今回報告する飯積原山遺跡は426,600㎡である。飯積原山遺跡の調査対象範囲内の北側は『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）』[1)]に記載された飯積藤株遺跡・飯積宮田台遺跡・飯積台畑遺跡の３遺跡が含まれる。いずれも種別は「包蔵地」であり、遺跡概要の時代（時期）・遺物はそれぞれ異なり、台地の北側に位置する飯積藤株遺跡は、「縄文（中），平安」・「縄文土器（阿玉台Ⅲ・Ⅳ・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ），土師器」、中央東側の飯積宮田台遺跡は、「縄文（中・後），平安」・「縄文土器（加曽利ＥⅠ・Ⅱ・加曽利ＢⅢ），土師器」、中央西側の飯積台畑遺跡は、「縄文（中）」・「縄文土器（加曽利ＥⅢ・Ⅳ）」と記載されている。確認・本調査の結果、飯積原山遺跡からは旧石器時代遺物集中地点、縄文時代中期から後期の集落跡、奈良・平安時代の集落跡、近世の牧跡などが見つかった。

本書では、飯積原山遺跡の平成22年度分までの発掘調査成果のうち、既に平成25年度に『飯積原山遺跡１』として報告済みの旧石器時代及び奈良・平安時代から中・近世までを除いた縄文時代について報告する。

発掘面積は第１表に示したとおりである。平成６年度から平成22年度 H2203調査地点までの対象面積は325,052㎡、延べの上層確認調査面積は31,872㎡、上層本調査面積は108,312㎡である。同期間における調査完了面積は318,412㎡であり、6,640㎡は本調査未了面積である。本調査未了範囲内において確認調査時に検出された遺構・遺物の報告は本書には所収しておらず、本調査終了後に併せて報告する予定である。

調査年度ごとの発掘調査期間・担当者などは以下のとおりである。以下の期間・面積は縄文時代以外の調査に要した分も含んでいる。

平成６年度　　調査期間　　平成７年１月６日～平成７年３月31日
　　調査研究部長　西山太郎
　　印西調査事務所　所長　谷　旬
　　調査担当者　土屋潤一郎

平成７年度　　調査期間　　平成７年12月１日～平成８年３月27日
　　調査研究部長　西山太郎
　　印西調査事務所　所長　谷　旬
　　調査担当者　花島理典・佐藤　隆

第１表　発掘調査面積一覧（㎡）

調査年度・調査次名称	規模	確認				本調査		備考
		上層	対象	下層	対象	上層	下層	
H6	43,000	4,300	43,000	1,396	43,000	－	－	
H7	56,564	5,656	56,567	1,980	48,720	100	0	
H8	47,352.1	5,135	47,352.1	1,545	36,660	－	－	
H9	58,520	5,852	58,520	2,340	58,520	－	－	
H10	43,700	4,370	43,700	1,748	43,700	－	－	
H11	11,000	－	－	200	5,100	11,000	0	本調査は塚１基
H12	40,381	－	－	512	12,800	39,969	860	
H13	31,400	1,694	16,942	904	22,682	18,100	688	
H19　H1901	1,259	130	1,259	12	544	0	0	
H19　H1902	1,778	200	1,778	64	1,778	484	0	
H19　H1903	3,270	337	3,270	132	3,270	3,040	0	
H19　H1904	6,280	710	6,280	290	6,280	0	0	
H19　H1905	6,966	－	－	－	－	6,966	－	
H19　H1906	5,500	－	－	232	5,500	5,500	－	
H20　H2001	1,656	166	1,656	68	1,656	0	0	
H20　H2002	4,151	－	－	204	4,151	4,151	0	
H20　H2003	5,156	－	－	208	5,156	5,156	0	
H20　H2004	1,614	－	－	68	1,614	1,614	0	
H20　H2005	1,456	－	－	60	1,456	1,456	0	
H20　H2006	1,710	316	1,710	－	－	220	－	
H21　H2101	6,666	495	4,956	172	6,666	6,446	0	
H21　H2102	100	－	－	－	－	－	100	
H21　H2103	3,839	384	3,839	76	3,839	2,830	0	
H21　H2104	4,903	484	4,903	60	4,903	1,280	0	
H21　H2105	700	700	700	21	700	0	0	
H22　H2201	146	146	146	－	－	0	－	
H22　H2202	6,100	610	6,100	136	6,100	0	0	
H22　H2203	1,440	187	1,440	－	－	－	－	
計		31,872		12,428		108,312	1,648	

平成８年度　調査期間　平成８年12月１日～平成９年３月27日
調査部長　西山太郎
北部調査事務所　所長　谷　旬
調査担当者　平野雅一・落合章雄

平成９年度　調査期間　平成９年12月１日～平成10年３月27日
調査部長　西山太郎
東部調査事務所　所長　石田廣美
調査担当者　石塚　浩・廣瀬和之

平成10年度　調査期間　平成10年12月１日～平成11年３月26日
調査部長　沼澤　豊
東部調査事務所　所長　三浦和信
調査担当者　石塚　浩

平成11年度　調査期間　平成11年８月１日～平成11年12月24日
調査部長　沼澤　豊

	東部調査事務所　所長　三浦和信
	調査担当者　石塚　浩
平成12年度	調査期間　　平成12年４月３日～平成13年３月30日
	調査部長　　沼澤　豊
	東部調査事務所　所長　折原　繁
	調査担当者　遠藤治雄・加藤正信・大榔一美・豊田秀治・行川　永・矢野敬夫・
	鈴木弘幸・小笠原永隆
平成13年度	調査期間　　平成13年６月１日～平成14年３月29日
	調査部長　　佐久間豊
	東部調査事務所　所長　折原　繁
	調査担当者　柴田龍司・香取正彦・大野康男・遠藤治雄・大榔一美・植草　均・大内千年
平成19年度	調査期間　　平成19年10月１日～平成19年10月26日
(H1902)	調査研究部長　矢戸三男
	北部調査事務所　所長　豊田佳伸
	調査担当者　土屋潤一郎
平成19年度	調査期間　　平成19年10月29日～平成19年12月26日
(H1903)	調査担当者　土屋潤一郎・小林信一
平成19年度	調査期間　　平成19年11月１日～平成19年12月７日
(H1904)	調査担当者　小高幸弘・小林信一
平成19年度	調査期間　　平成19年12月６日～平成20年２月29日
(H1905)	調査担当者　小高幸弘・小林信一
平成19年度	調査期間　　平成20年２月12日～平成20年３月28日
(H1906)	調査担当者　小林信一・井上哲朗
平成19年度	調査期間　　平成20年３月11日～平成20年３月27日
(H1901)	調査担当者　島田裕之
平成20年度	調査期間　　平成20年４月４日～平成20年４月30日
(H1906 (2))	調査研究部長　大原正義
	北部調査事務所　所長　豊田佳伸
	調査担当者　小林信一
平成20年度	調査期間　　平成20年５月１日～平成20年５月23日
(H2001)	調査担当者　小林信一
平成20年度	調査期間　　平成20年５月12日～平成20年７月31日
(H2002)	調査担当者　島田裕之
平成20年度	調査期間　　平成20年７月22日～平成20年10月29日
(H2003)	調査担当者　宮　重行
平成20年度	調査期間　　平成20年12月１日～平成21年１月15日
(H2004)	調査担当者　篠﨑健一

平成20年度　調査期間　平成21年１月16日～平成21年３月26日
(H2005)　調査担当者　篠﨑健一
平成20年度　調査期間　平成21年３月１日～平成21年３月26日
(H2006)　調査担当者　鈴木弘幸
平成21年度　調査期間　平成21年４月１日～平成21年８月10日
(H2101)　調査研究部長　及川淳一
北部調査事務所　所長　野口行雄
調査担当者　宮　重行・相京邦彦・内山　健・雨宮龍太郎
平成21年度　調査期間　平成21年４月１日～平成21年５月８日
(H2102)　調査担当者　猪鼻慎二
平成21年度　調査期間　平成21年６月15日～平成21年９月14日
(H2103)　調査担当者　宮　重行・雨宮龍太郎・内山　健
平成21年度　調査期間　平成21年９月15日～平成21年11月６日
(H2104)　調査担当者　雨宮龍太郎・内山　健
平成21年度　調査期間　平成21年11月９日～平成21年11月13日
(H2105)　調査担当者　内山　健
平成22年度　調査期間　平成22年10月６日～平成22年10月19日
(H2201)　調査研究部長　及川淳一
北部調査事務所　所長　野口行雄
調査担当者　蔀　淳一
平成22年度　調査期間　平成22年12月１日～平成22年12月27日
(H2202)　調査担当者　池田大助
平成22年度　調査期間　平成22年12月16日～平成23年１月21日
(H2203)　調査担当者　池田大助・柴田龍司

年度ごとの整理作業の概要は以下のとおりである。
平成11年度　整理期間　平成11年１月１日～平成11年３月31日
整理内容　記録整理・水洗・注記・分類・接合・復元・実測の一部
調査部長　沼澤　豊
東部調査事務所　所長　三浦和信
整理担当者　石塚　浩・大槻一美
平成13年度　整理期間　平成13年９月１日～平成13年９月30日・平成14年１月１日～平成14年１月31日・平成14年３月１日～平成14年３月31日
整理内容　記録整理の一部、水洗・注記の一部
調査部長　佐久間豊
東部調査事務所　所長　折原　繁
調査担当者　植草　均・大内千年

平成18年度　整理期間　平成19年１月１日～平成19年１月31日
整理内容　記録整理の一部、水洗・注記の一部、分類・接合の一部
調査研究部長　矢戸三男
北部調査事務所　所長　古内　茂
整理担当者　土屋治雄・川島利道
平成22年度　調査研究部長　及川淳一
北部調査事務所　所長　野口行雄
整理期間　平成22年４月１日～平成23年３月31日
整理内容　記録整理の一部・水洗・注記の一部、分類・接合の一部
整理担当者　平井真紀子
平成23年度　調査研究部長　及川淳一
調査研究部副部長兼整理課長　西川博孝
整理期間　平成23年４月１日～平成24年３月31日
整理内容　記録整理の一部、分類・接合の一部、拓本の一部
整理担当者　上守秀明・木原高弘
平成24年度　調査研究部長　関口達彦
整理課長　高田　博
整理期間　平成24年４月１日～平成25年３月31日
整理内容　分類・接合の一部、実測、拓本の一部、トレースの一部
整理担当者　新田浩三・木原高弘・西川博孝
平成25年度　調査研究部長　伊藤智樹
整理課長　今泉　潔
整理期間　平成25年４月１日～平成26年３月31日
整理内容　トレースの一部、挿図作成、写真撮影、写真図版作成、原稿執筆、編集
整理担当者　木原高弘・西川博孝・橋本勝雄
平成26年度　調査研究部長　伊藤智樹
整理課長　今泉　潔
整理期間　平成26年４月１日～平成27年11月29日
整理内容　校正、報告書印刷、刊行
整理担当者　木原高弘・西川博孝

注１　千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』

2　調査・整理の方法（第１～３図）

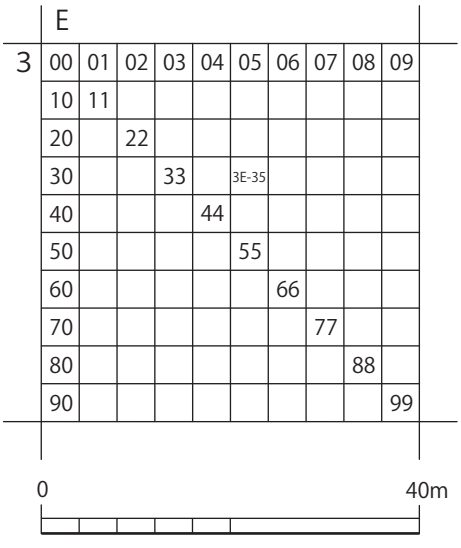
発掘調査は、酒々井南部地区の事業地の全域を公共座標（旧座標‥国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網で覆って実施した。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、起点から南へ１・２…、東へＡ・Ｂ…と振っている。その内部を100分割した４ｍ×４ｍが小グリッドである。大グリッド内は北西隅の小グリッドを00とし、00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、南東隅が99である。小グリッド名は大グリッドと組み合わせて17P-29のように表記した。大グリッドの交点の一つである18Ｌ－00は、旧座標でX=-31,900.0000、Y=42,100.0000である。JGD2000系変換値ではX=-31,544.7849、Y=41,806.2120、北緯35°42′53″、東経140°17′43″である[1)]。

上層の確認調査は、対象面積の10％を原則としてトレンチを設定し[2)]、遺構及び遺物の分布状況を調べた上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、堆積土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。確認調査及び本調査のための表土除去等については、重機を使用した。

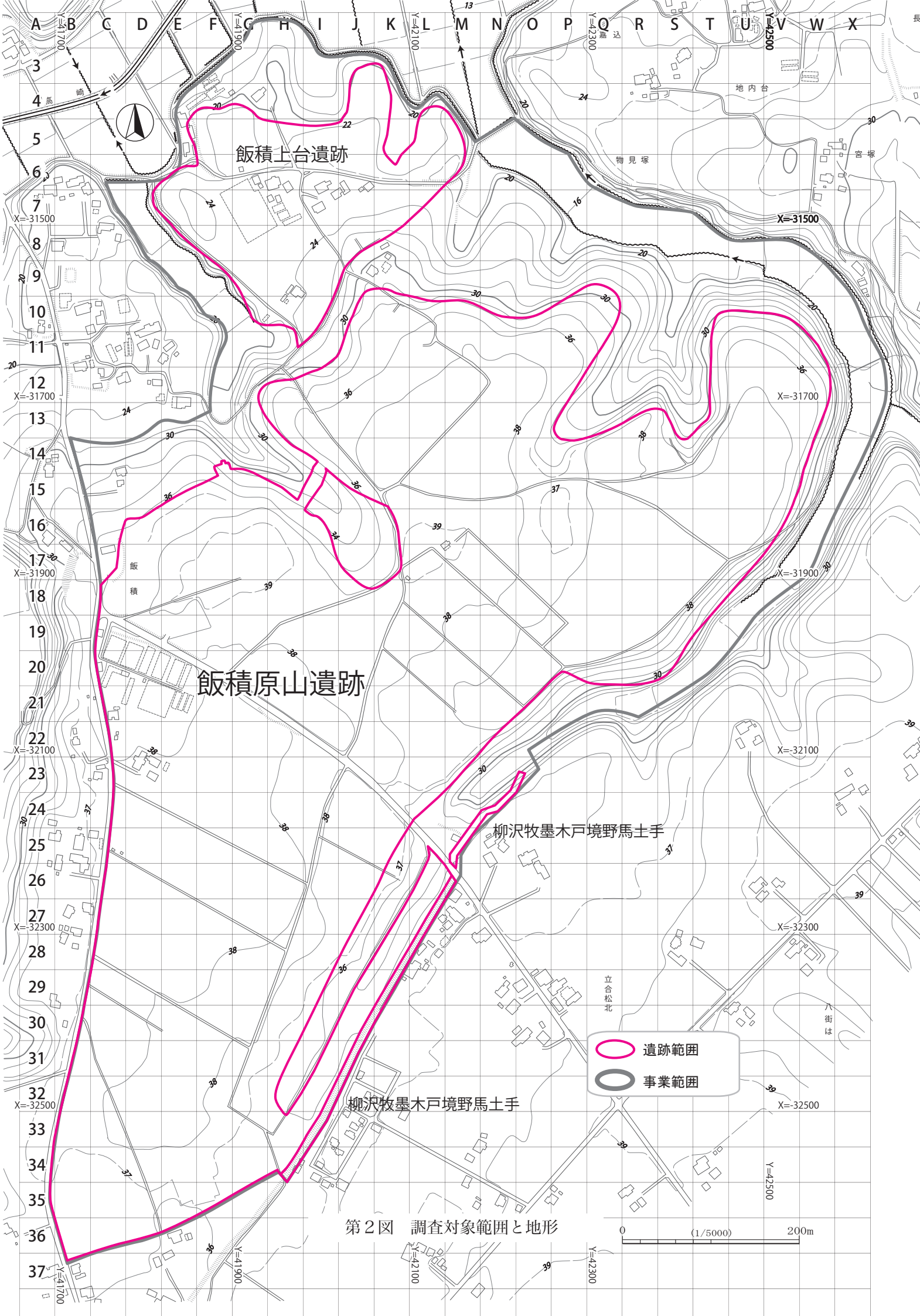
整理作業はまず記録類の整理、遺物の水洗・注記を行った。注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号を順に書き込んだ。遺構外出土遺物については、上記の遺構番号がグリッド名に替わる。注記後、遺物を遺構ごとに種別分類し、接合作業等を実施した。その後、遺物出土状況図・遺物台帳に記載された位置と高さをもとに、接合関係等の遺物出土状況図を平面と断面で作成した。土器・土製品・石器の実測は写真及び手計測による。遺物の拓本、遺構及び遺物実測図等のトレース、挿図作成、写真撮影、写真図版作成、原稿執筆、編集、校正を行い、本報告書の刊行となった。

飯積原山遺跡の調査次数は本報告分だけでも29次を数え、調査地点は分散している。また、同一の調査次でも平成12年度の仮１ａ区、仮２区、平成13年度のＢ区、Ｇ区などのように便宜上調査区を分けている場合があり、様相は複雑である。本報告ではより整った状態で報告するために、整理段階で各調査区についておおむね北西から南への順で（1）区、(4）区などのように地区割りの通し番号を新たに付与した（第３図)。この番号は本調査時の調査区を基本に、それ以外の確認調査のみで終了した区域についても付与した。調査年度・調査区と地区番号の関係は第２表に記した。また、地区番号を振った遺構分布図を第４～18図に示した。

調査段階での遺構番号は、平成13年度までは遺構の種別に関わらず、数字のみの番号が付されている。平成12年度までは３桁の通し番号であるが、(11）区の平成13年度Ａ地点調査では1001番から通し番号を付けている。また、平成19年度以降の調査では、遺構種別を表すSI等の略号と３桁の数字を組み合わせてSI001のように呼称しているが、調査次数ごとに001から番号が付けられているため、同一の遺構番号が複数存在する。また、調査次数によって、遺構種別ごとに001から付けられている場合、遺構種別に関わらず番号は通しで付けられている場合など、統一性がなかった。そこで本報告では、遺構番号を地区割り番号＋略号＋数字で表記することとした。一例を示すと、(9）SI157であり、これにより下３桁の数字が同じであっても



第１図　グリッド名称例



第２図　調査対象範囲と地形

第２表　地区割り一覧

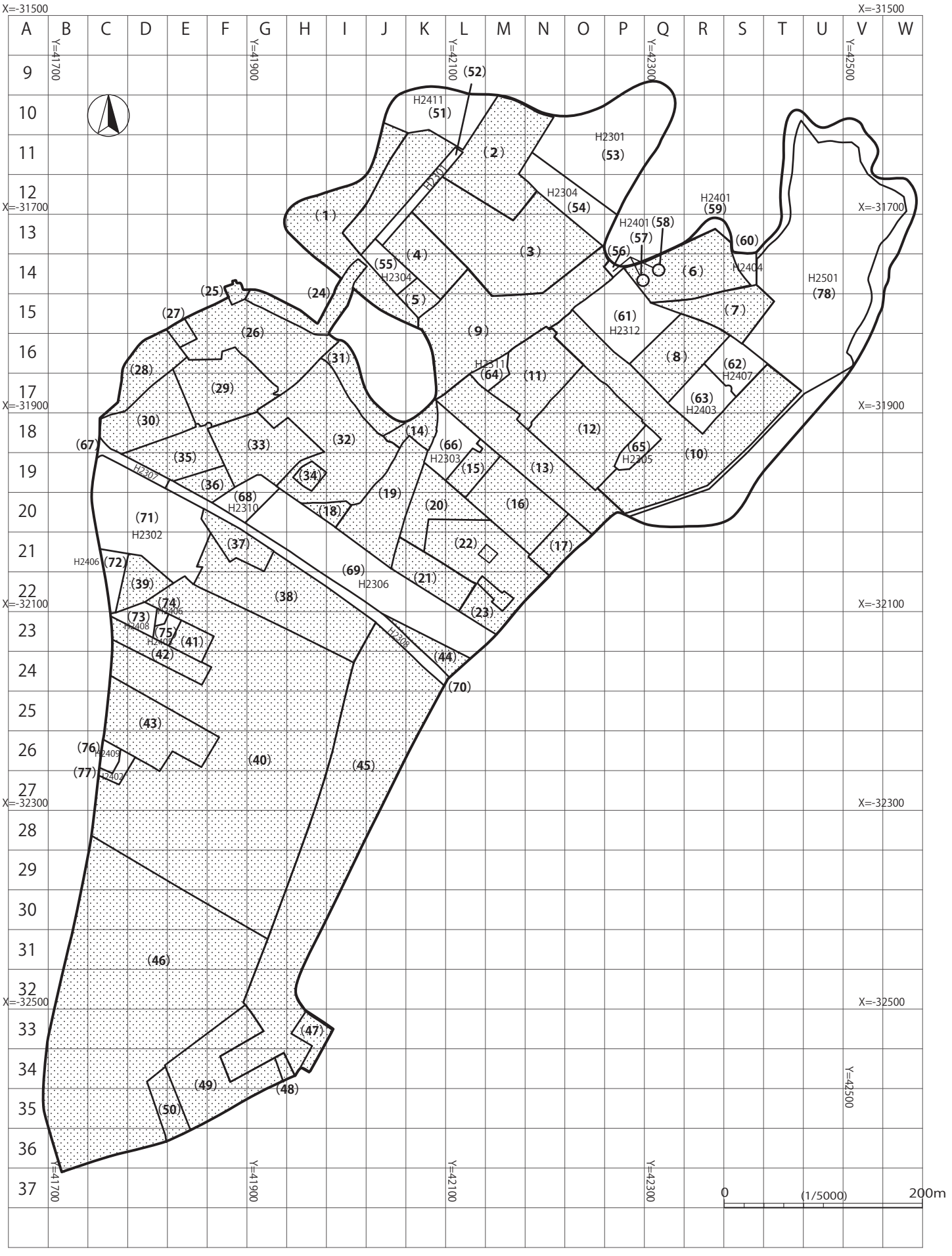
地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区
1	H1904	18	H12仮1a区（H8確認調査）	35	H2104B
2	H10確認調査	19	H13C区	36	H10確認調査
3	H9確認調査G区	20	H13B区（H8確認調査）	37	H11C地点（H10確認調査）
4	H11A地点	21	H13H区	38	H8確認調査
5	H10確認調査	22	H13B2区（H8確認調査）	39	H1902
6	H1906	23	H13B3区（H8確認調査）	40	H7確認調査
7	H12仮2区（H10確認調査）	24	H2203	41	H2105
8	H2002	25	H2201	42	H13D区確認調査
9	H12仮1d区（H9確認調査A･B･F･G区）	26	H2101	43	H2202
10	H12仮3区（H9確認調査E･M･N区）	27	H2006・H2101	44	H8確認調査
11	H13A区（H9確認調査C･D区）	28	H2104A	45	H10確認調査
12	H1905（H9確認調査C･D区）	29	H13G区（H8確認調査）	46	H6確認調査
13	H12仮4区（H7確認調査）	30	H2103	47	H1901
14	H12仮1c区（H8確認調査）	31	H2001	48	H1901
15	H2004	32	H8確認調査	49	H13F区確認調査
16	H2003	33	H11B地点	50	H10確認調査
17	H2005	34	H12仮1b区		

一つだけのものとして、他と区別できる。なお、下３桁または４桁の数字については調査時のものを踏襲しているが、これは遺物に注記された遺構番号と本報告の遺構番号の対比が容易であることを考慮したためである。

本書で報告する遺構の略号を記すと、竪穴住居がSI、掘立柱建物がSB、土坑･小竪穴･陥穴がSK、ピット・柱穴と思われる小規模な土坑（群）はSHとしている。整理時に遺構種別を変更したものについては、添付CD所収の附表１　遺構一覧表の備考欄にその旨を記載した。また、整理時に複数の遺構が重複することが判明したものについては、遺構番号の後ろにA、B、Cなどのアルファベットを付すことで区別することとし、(11) SK1050A、(11) SK1050Bなどと呼称することとした（第３表)。なお、遺構図面･遺構写真･遺物台帳・遺物実測図などの記録類、遺物の注記に記載された遺構番号は、すべて発掘調査時に付された番号のままである。

本遺跡は遺構数が多く、重複も激しいことから、遺存状態が不良なものも多く存在した。本報告書では、基本的に出土遺物の実測図・拓影・写真を掲載しなかった遺構については、遺構図・事実記載を割愛した。掲載しなかった遺構の平面形・規模等については、第４～18図、附表１を参照されたい。

注１　変換値はWeb版TKY2JGD　Ver.1.3.79　パラメータ　Ver.2.1.1による。
２　新田浩三ほか　2014『酒々井町飯積原山遺跡１－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書２－』(公財）千葉県教育振興財団　第４図参照



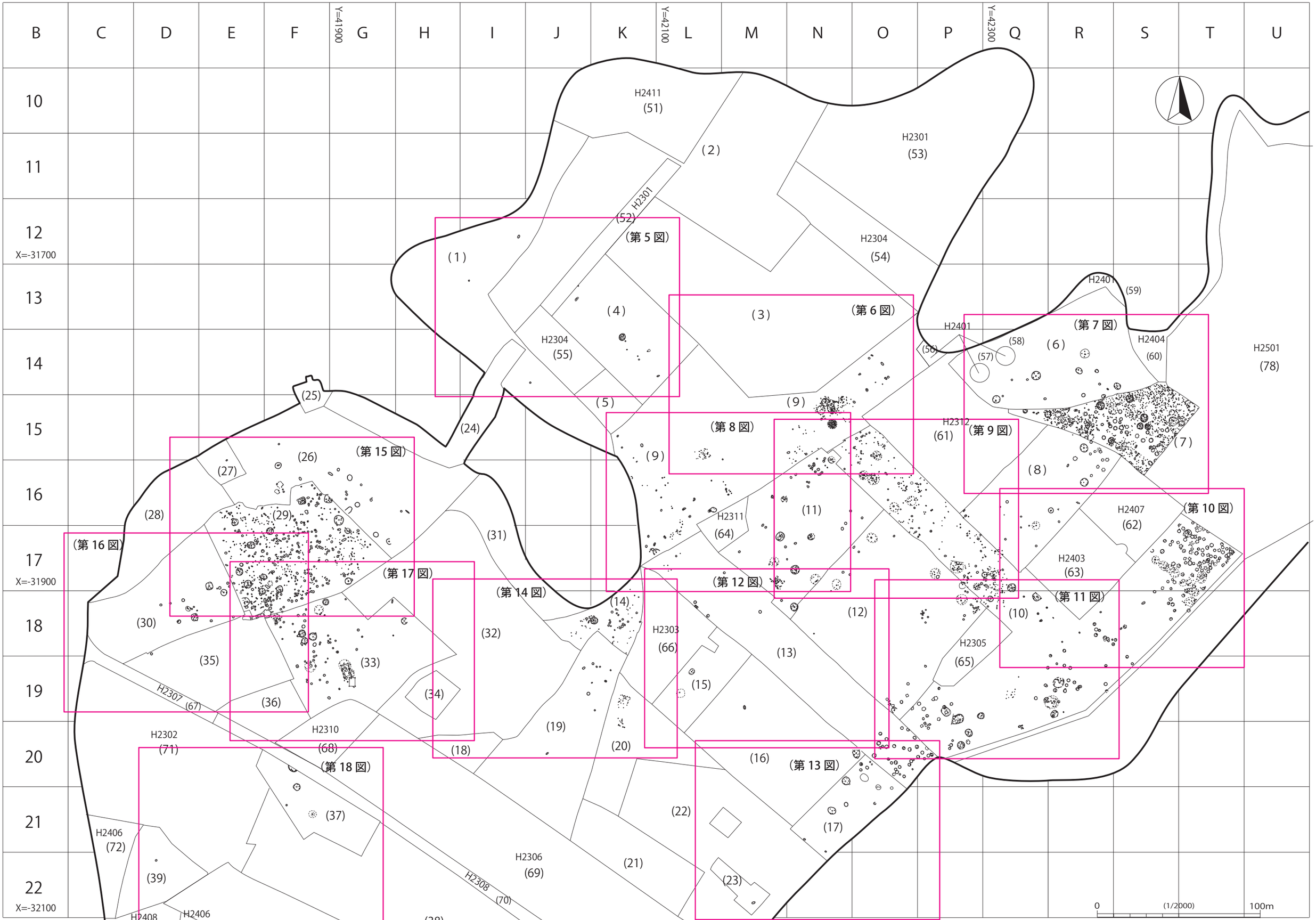
第３図　振替後の調査区割り全体図

第3表　遺構種別一覧　　**太字**は遺構図掲載

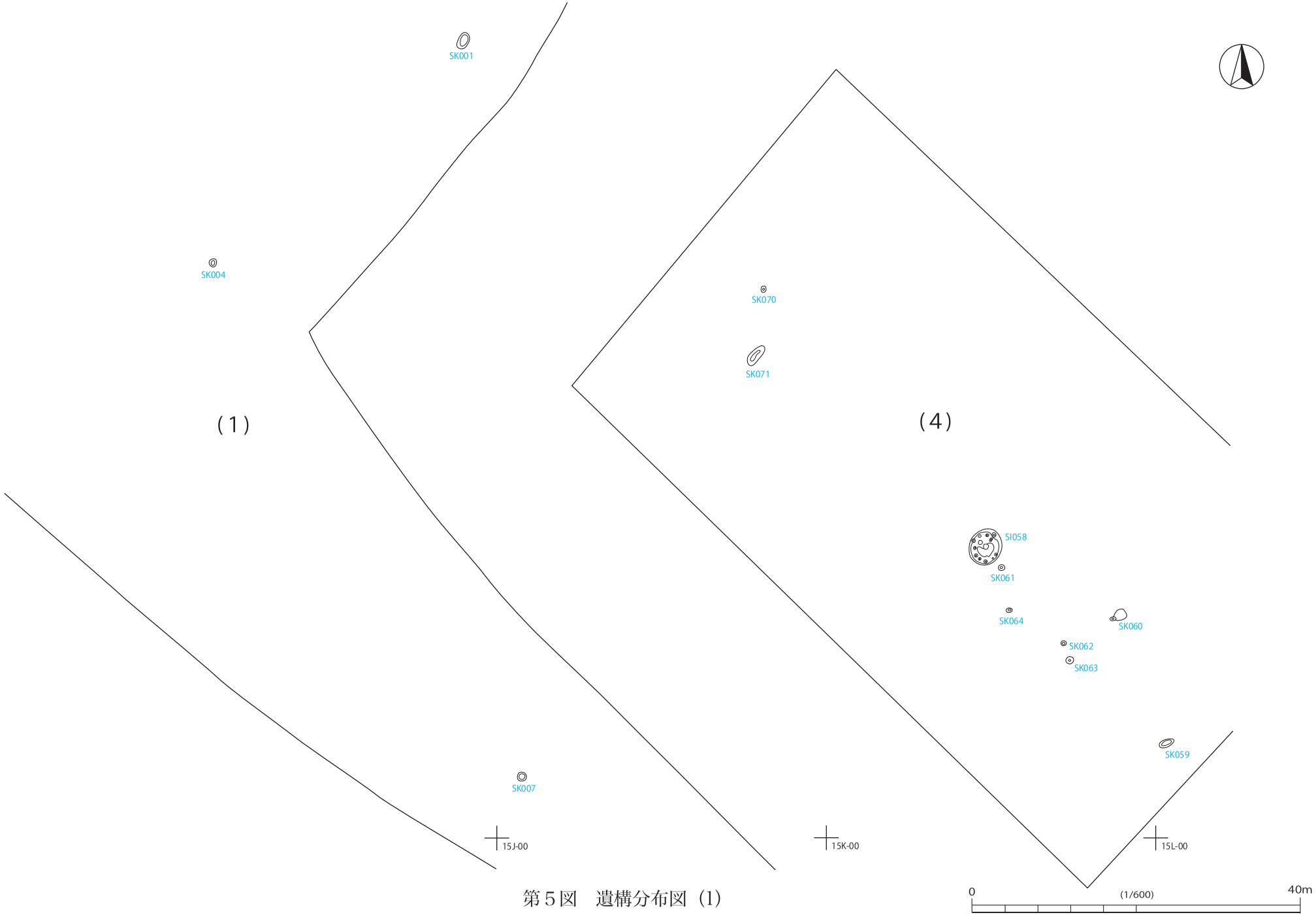
種　別	地区	遺　構　番　号
竪穴住居跡	(4)	**SI058**
	(6)	**SI004**,**SI005**,**SI007**,**SI010**,**SI011**
	(7)	**SI206**,SI214,SI218,**SI226**,**SI232**,**SI256**,**SI257**,**SI262**,**SI273**,**SI275**,**SI276**,**SI288**,**SI289**, **SI296**,**SI380**,**SI381**
	(8)	**SI010**,**SI015**,**SI016**,**SI020**,**SI030**
	(9)	**SI148**,**SI182**,**SI183**,**SI184**,**SI186**,SI189A
	(10)	**SI312**,**SI313**,**SI314**,SI327,**SI328**,**SI337**,**SI339**,**SI341**,**SI342**,**SI353**,**SI355**,**SI356**,**SI363**, **SI459**,SI465,**SI489**,SI490,**SI492**,**SI493**,**SI497**,SI498,**SI521**,**SI522**,**SI529**,**SI530**,**SI531**, SI552,**SI564**,**SI565**,**SI569**,**SI570**,**SI574A**,**SI574B**,SI576,**SI651**
	(11)	**SI1011**,**SI1012**,**SI1013**,**SI1014**,**SI1015**,SI1016,**SI1017**,**SI1018**,**SI1019**
	(12)	**SI014**,**SI024**,**SI026**,**SI037**,**SI053**,SI077
	(14)	**SI140**
	(15)	**SI005**,**SI006**
	(16)	**SI003**
	(17)	**SI012**,**SI013**,**SI014**,**SI015**
	(26)	**SI001**,SI002,**SI003**,**SI004**,**SI005**,**SI006**,**SI007**,**SI018**
	(29)	**SI701**,**SI702**,**SI703**,**SI704**,**SI705**,**SI706**,**SI707**,**SI708**,**SI709**,**SI710**,**SI711**,SI712,**SI713**, **SI714**,**SI860**
	(30)	**SI008**,**SI009**,**SI010**,**SI011**
	(33)	**SI011**,**SI014**,**SI016**,**SI017**,**SI018**,**SI019**,**SI020**,**SI075**,**SI093**,**SI100**
	(35)	**SI001**
	(37)	**SI004**,**SI103**,**SI104**
掘立柱建物跡	(33)	**SB066**,**SB099**
土坑・小竪穴	(1)	SK001,SK004,SK007
	(4)	SK059,SK063,SK064,SK071
	(6)	**SK001**,SK002,**SK003**,**SK006**,**SK009**,**SK012**,**SK014**,**SK015**,**SK016**
	(7)	SK208,SK209,SK210,SK211,**SK212**,SK216,**SK217**,**SK219**,**SK220**,SK221,SK222,SK224, SK225,SK227,SK228,**SK231**,SK233,**SK234**,**SK235**,**SK236**,**SK238**,**SK239**,**SK240**,SK241, **SK242**,**SK243**,**SK244**,**SK251**,**SK252**,**SK253**,**SK255**,SK258,**SK259**,**SK260**,**SK261**,**SK263**, **SK265**,**SK266**,**SK267**,**SK268**,SK269,**SK270**,**SK271**,**SK272**,SK274,**SK277**,**SK278**, **SK279**,SK282,**SK283**,**SK287**,**SK290**,SK291
	(8)	**SK001A**,**SK001B**,SK002,SK003,SK005,**SK007**,**SK009**,**SK011**,**SK012**,**SK013**,SK014, **SK017**,**SK019**,**SK021**,**SK022**,**SK023**,**SK024**,**SK025**,**SK026**,**SK027**,**SK029**,SK031, SK032,**SK035**,**SK037**
	(9)	SK153,**SK155**,SK156,SK158,SK159,SK161,SK162,SK164,SK165,SK167,SK169,SK173,SK177, SK185,SK187,SK188,**SK189B**,**SK190**, **SK195**
	(10)	SK300,**SK301**,SK302,**SK303**,**SK304**,SK305,SK306,**SK307**,**SK308**,SK309,**SK310**,SK311, SK316,SK319,**SK321**,**SK326**,SK331,SK332,SK333,SK334,SK335,SK336,**SK338**, **SK340**,**SK343**,**SK344**,SK345,**SK347**,**SK348**,**SK349**,**SK350A**,**SK350B**,SK351,**SK354**, **SK357**,SK359,SK361,**SK362**,**SK364**,**SK365**,**SK366**,**SK367**,**SK368**,**SK369**,**SK370**, **SK371**,SK372,**SK373**,**SK374**,**SK375**,**SK376**,**SK377**,**SK378**,SK379,**SK382**,**SK383**, **SK384**,**SK385**,**SK386**,**SK387**,**SK388**,**SK389**,**SK390**,**SK391**,**SK392**,SK393,**SK394**, **SK395**,**SK397**,SK398,**SK399**,**SK400**,**SK401**,**SK402**,**SK403**,**SK404**,**SK405**,SK406, **SK407**,**SK408**,**SK409**,**SK410**,SK414,SK415,SK416,SK417,SK423,**SK424**,SK425,SK426, **SK427**,SK428,**SK429**,SK431,SK433,SK435,SK438,**SK439**,SK442,**SK443**,**SK444**,SK447, **SK451**,SK452,**SK453**,**SK454**,**SK455**,SK457,**SK458**,**SK460**,SK461,**SK462**,**SK463**,**SK464**, **SK466**,**SK467**,**SK468**,**SK469**,**SK470**,**SK471**,**SK472**,SK473,SK474,**SK475**,**SK476**, **SK477**,**SK478**,**SK479**,**SK480**,**SK481**,**SK482**,**SK483**,SK485,**SK486**,SK487,**SK488**, **SK494**,SK495,**SK496**,SK499,**SK501**,SK502,SK505,**SK506A**,**SK506B**,**SK506C**,**SK507**, SK510,SK511,**SK519**,**SK520**,**SK523**,**SK525**,**SK526**,SK527,SK528,**SK532**,SK537,**SK538**

種 別	地区	遺 構 番 号
土坑・小竪穴	(10)	SK539,SK541,**SK542**,**SK543**,**SK544**,**SK545**,**SK546**,**SK547**,SK548,**SK549**,SK550,SK551, **SK553**,**SK555**,**SK556**,**SK557**,**SK558**,SK559,SK561,**SK562**,**SK563**,**SK566**,**SK567**,SK568, SK571,**SK572**,SK573,**SK575**,**SK577**,**SK578**,**SK579**,**SK652**,**SK653**,SK654,**SK655**,**SK658**
	(11)	**SK1020**,SK1022,**SK1025**,**SK1026**,**SK1027**,SK1028,**SK1030**,SK1031,SK1032,SK1033, **SK1034**,**SK1037**,SK1038,**SK1039**,SK1040A,SK1040B,**SK1041,SK1042**,**SK1045**,SK1046, SK1047,**SK1048**,**SK1051A**,**SK1051B**,**SK1051C**,**SK1051D**,**SK1052**,SK1054,SK1055
	(12)	**SK007**,**SK008**,SK009,**SK010**,**SK011**,**SK012**,**SK015**,**SK025**,**SK028**,**SK029**,**SK030**, **SK031**,**SK032**,**SK033**,**SK034**,**SK035**,SK036,**SK039**,**SK040**,SK041,**SK043**,SK055,SK056, SK059,SK060,SK061,**SK062**,SK063,SK064,**SK065**,SK066A,SK066B,**SK070**,**SK071**,SK074, SK076,SK078
	(13)	SK601,SK602,SK603,SK604,**SK605**,SK606,**SK607**,**SK608**,SK609,**SK610**,**SK611**,**SK612**, SK613,SK614A,SK614B,**SK615**,**SK616**,**SK617**,**SK618**,**SK619**,SK620,**SK622**,SK623,SK624, **SK625**,SK626,SK634,**SK635**,SK640,**SK641**,**SK642**,**SK643**,**SK644**,SK645,**SK646**,**SK647**, **SK649**,**SK650**,SK659,**SK660A**,**SK660B**,**SK660C**
	(14)	SK122,**SK123**,SK124,**SK125**,**SK127**,**SK128**,**SK130**,SK131,**SK132**,**SK133**,**SK134**,SK135, **SK136**,**SK137**,**SK138**,SK139,**SK141**,**SK142**,**SK143**,**SK145**,**SK146**,SK149,SK151,SK178, SK179
	(17)	**SK009**,**SK011**,**SK012**,SK013,**SK014**,SK015,SK016,**SK017**,**SK018**,**SK019**
	(19)	**SK681**,SK683,**SK685**,**SK686**,SK687A,SK687B,SK688,SK689,SK690,SK691
	(26)	SK003,**SK017**,**SK019**,SK021,**SK022**,SK024,SK025,**SK026**,**SK027**,**SK028**,**SK029**,**SK030**, SK033
	(29)	**SK715**,**SK716**,SK717,SK718,SK719,SK720,SK721,SK722,**SK723**,SK724,SK725,SK726, SK728,SK730,SK732,SK733,SK734,**SK736**,SK737,SK738,SK739,SK740,SK741,**SK742**, **SK743**,SK745,SK749,SK750,SK752,SK753,**SK755**,**SK756**,SK757,SK758,SK759,SK760, **SK761**,**SK762**,**SK763**,**SK764**,**SK765**,**SK766**,**SK768**,**SK769**,**SK770**,**SK771,SK772**, **SK773A**,**SK773B**,**SK774**,**SK775**,**SK776**,**SK777**,**SK778**,**SK779**,**SK780**,**SK781**,**SK782**, SK783,**SK784**,SK785,SK787,**SK788**,**SK789**,**SK790**,SK791,SK792,**SK793**,**SK794**,**SK795**, **SK796**,**SK798**,SK799,SK800,**SK802**,**SK803**,SK804,**SK805**,SK806,**SK807**,**SK808**,**SK809**, **SK810A**,**SK810B**,**SK811**,**SK812**,**SK813**,**SK815**,**SK816**,**SK817**,**SK818**,**SK819**,SK822, SK823,SK824,SK825,**SK826**,**SK827**,**SK828**,**SK829**,**SK830**,SK832,SK833,**SK834**,**SK835**, SK836,SK838,SK839,SK840,SK841,SK842,SK844,SK846,**SK847**,SK849,**SK850**,SK851, SK852,SK854,SK855,**SK856**,**SK858**,**SK859**,**SK861**,SK862,SK863,SK867,**SK871**,**SK872**, SK874,SK875,SK876,SK879,SK880,SK881,**SK882**,**SK883**,**SK884**,**SK885**,SK886,**SK887**, **SK888**,**SK889**,SK891,**SK892**,**SK893**,SK894,SK895,SK896,SK898,**SK900**,SK901,SK902, SK903,SK904,SK905,SK906,SK907,SK908,SK909,SK911,**SK912**,SK913,**SK914**,**SK916**, **SK917**,(29)SK919,**SK920**,SK921,**SK922**,**SK923**,SK924,**SK925**,SK926,**SK927**,**SK928**, SK931,SK932,SK934,SK935,**SK936**,**SK937**,SK938,SK940,SK941,**SK942**,SK943,**SK944**, **SK945**,**SK946**,**SK947**,**SK948**,SK949,SK950,**SK955**,**SK956**,SK957,SK958,SK959
	(30)	**SK034**,**SK035**,**SK036**,**SK037**,**SK038**,**SK039**,**SK040**,**SK041**,**SK042**,SK043,**SK044**, SK045,**SK046**,**SK047**
	(33)	**SK012**,**SK013**,**SK025**,**SK026**,**SK027**,**SK028**,**SK029**,**SK030**,**SK031**,**SK032**,**SK034**, **SK036**,**SK037**,**SK038**,**SK039**,**SK040**,**SK042**,**SK043**,**SK044**,**SK045**,**SK046**,**SK047**, **SK048**,**SK049**,**SK050**,**SK051**,SK052,**SK053**,**SK056**,**SK067,SK068,SK069**,SK073, SK074,**SK076**,**SK077**,**SK078**,SK079,**SK080**,SK081,**SK082**,**SK083**,**SK084**,SK086,**SK087**, SK088,SK089,SK090,**SK094**,SK095,**SK096**,**SK098**,**SK102**,**SK109**
	(35)	**SK021**,SK022
	(37)	**SK108**
	(39)	**SK003**
陥穴	(8)	SK018,SK028
	(9)	SK154,**SK168**,SK172,SK191,SK192,SK194,SK196
	(10)	SK657
	(11)	**SK1021**,SK1035,SK1036,SK1056
	(16)	SK004,SK005

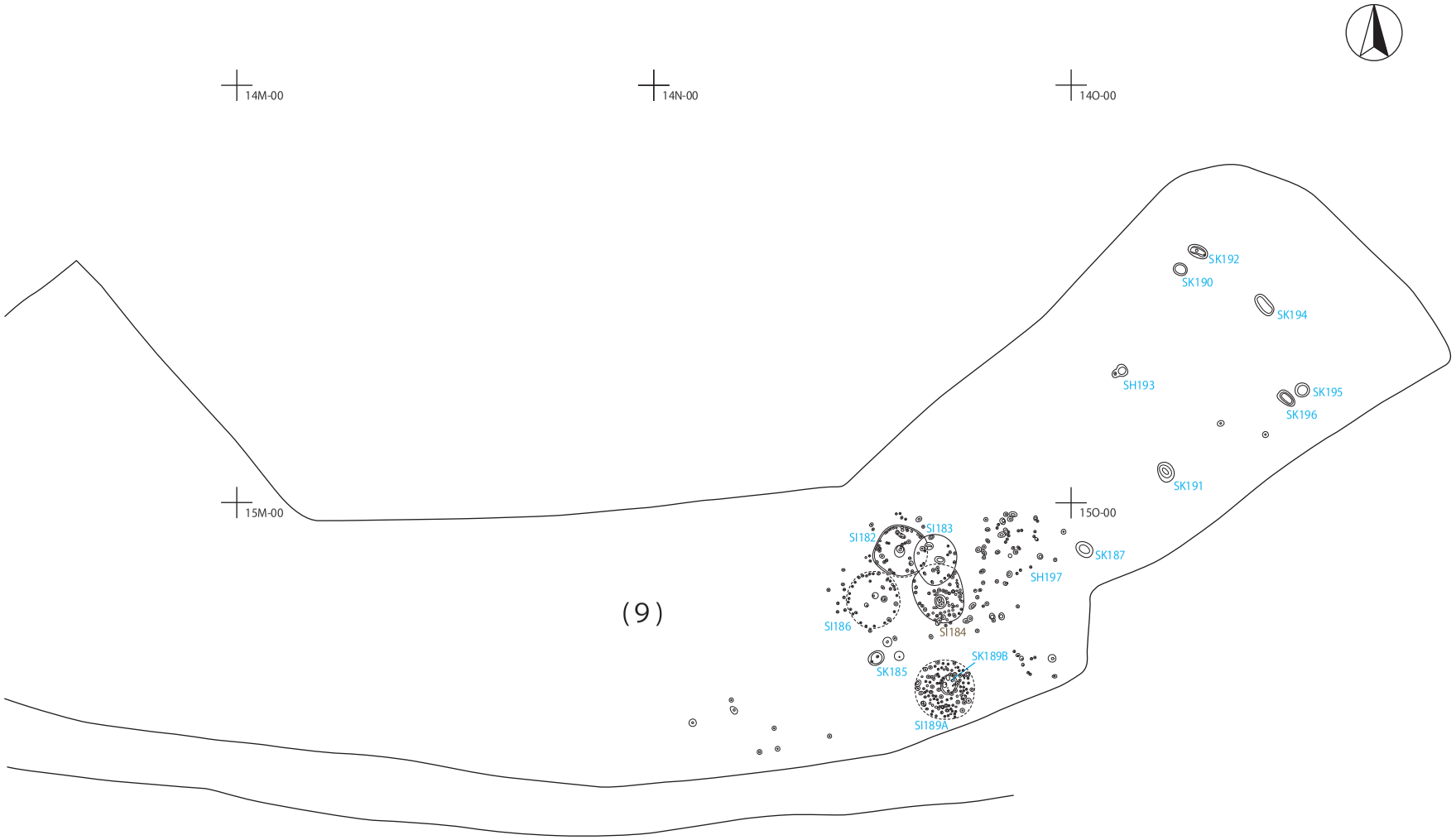
種 別	地区	遺 構 番 号
陥穴	(19)	SK692
	(23)	SK668
	(26)	SK023,**SK031**,SK032
	(27)	SK001
	(29)	SK727,SK801,SK814,SK918,**SK922**
	(33)	SK072
ピット(群)	(4)	SH060,SH061,SH062,SH070
	(7)	SH207,SH213,SH215,SH230,SH280,SH284,SH292,SH293,SI297,SH298,SH299
	(8)	SH004,SH006,SH008,SH034,SH036
	(9)	SH170,SH171,SH174,SH176,SH193,SH197
	(10)	SH245,**SH317**,**SH315**,**SH318**,**SH320**,**SH323**,SH330,SH352,SH360,SH500,SH534
	(12)	SH046,SH047,SH048,SH049,SH050,SH051,SH052,SH054
	(20)	SH672,SH673
	(29)	SH729,SH731,SH744,SH746,SH747,SH748,SH751,SH754,SH767,SH786,SH797,SH820, SH821,SH831,SH837,SH843,SH845,SH848,SH853,SH864,SH865,SH866,SH868,SH869, SH870,SH873,SH877,SH878,SH890,SH897,SH899,SH929,SH930,SH939



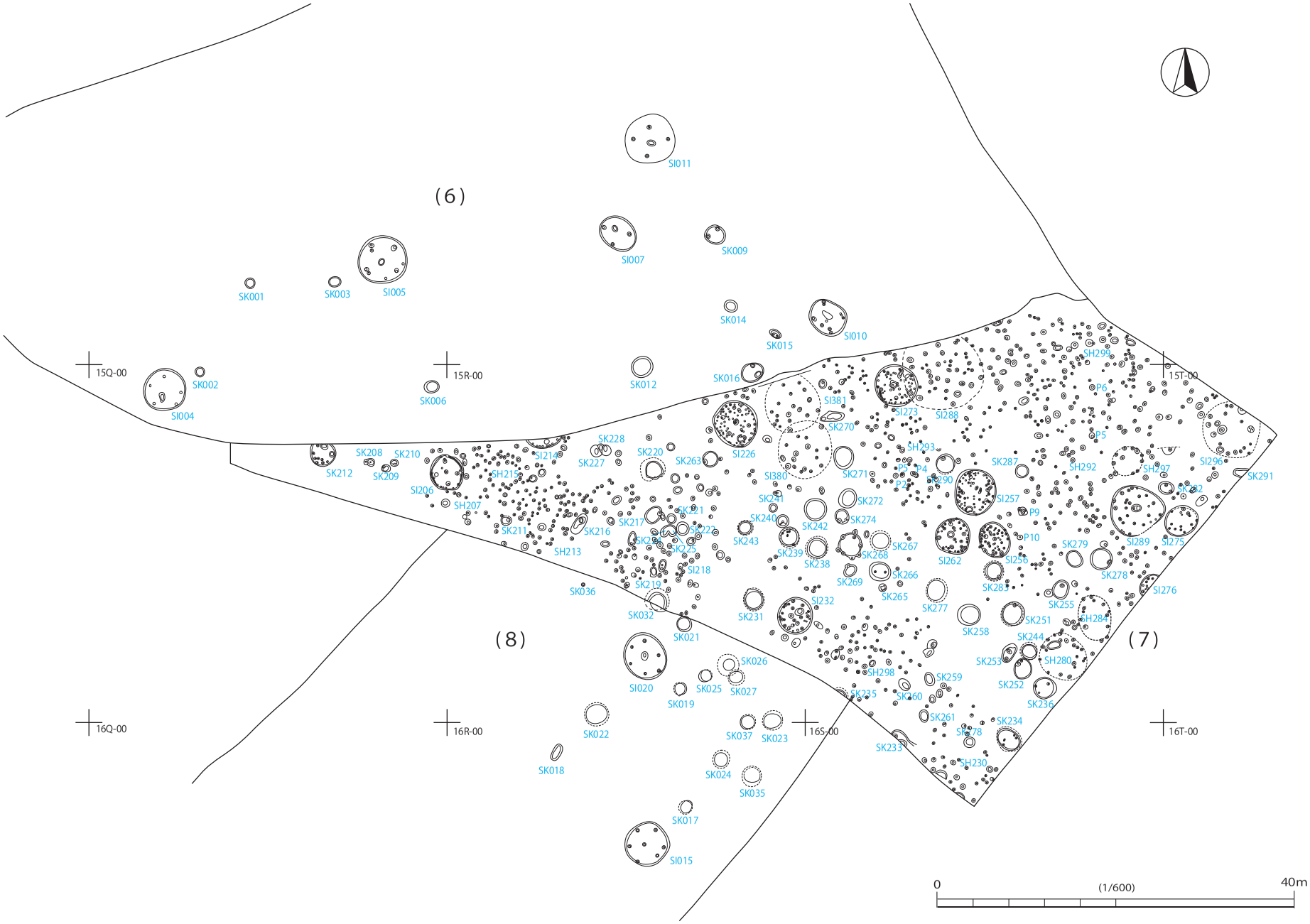
第 4 図　縄文時代遺構分布分割枠図


SK001
SK004
SK070
SK071
(1)
(4)
SI058
SK061
SK064
SK060
SK062
SK063
SK059
SK007
15J-00
15K-00
15L-00
0
(1/600)
40m

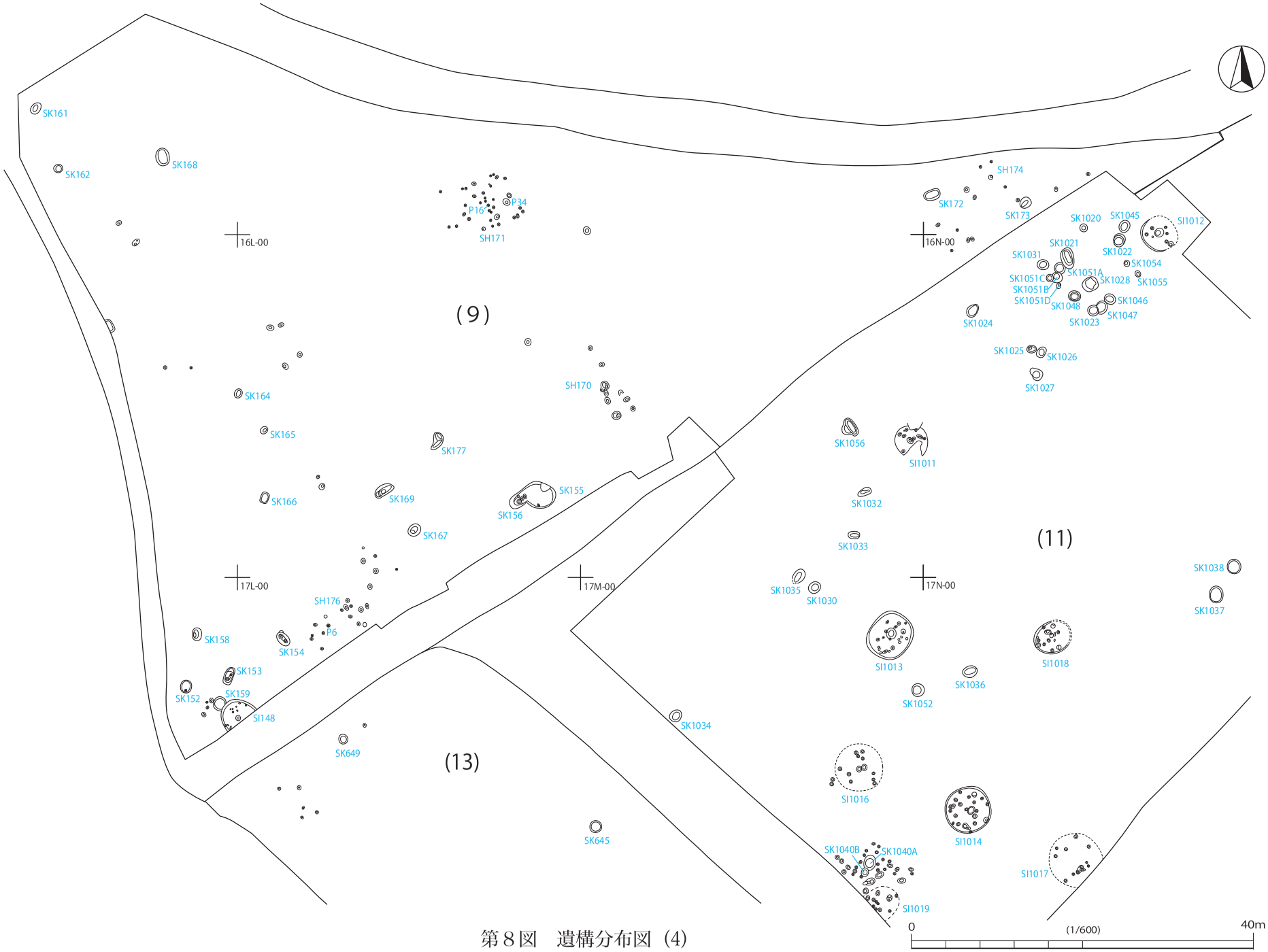
第５図　遺構分布図（1）


14M-00
14N-00
14O-00
15M-00
15O-00
SK192
SK190
SK194
SH193
SK195
SK196
SK191
SI182
SI183
SK187
SH197
SI186
SI184
SK189B
SK185
SI189A
(9)
0
(1/600)
40m

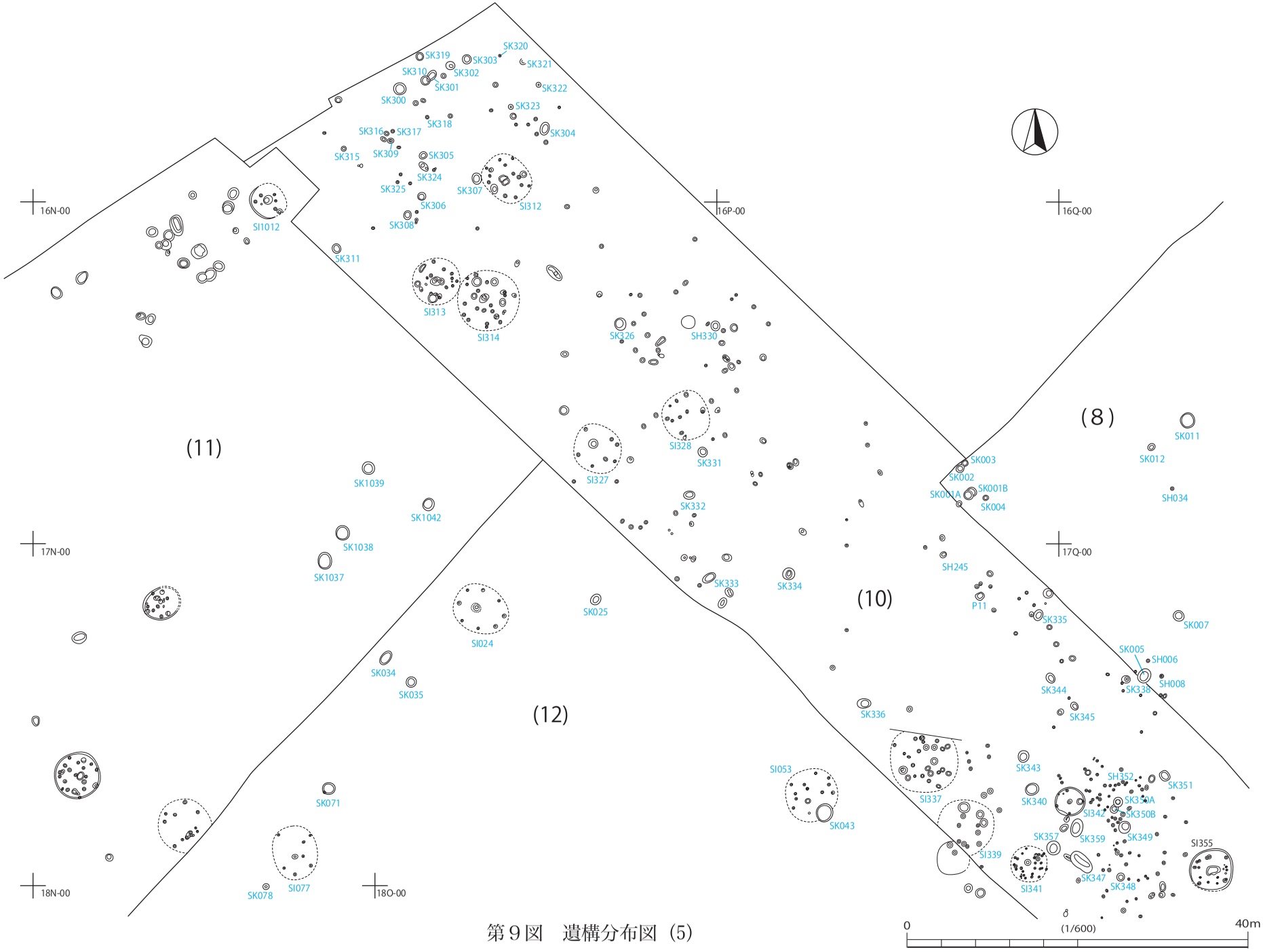
第６図　遺構分布図（2）


(6)
(7)
(8)
15Q-00
15R-00
15T-00
16Q-00
16R-00
16S-00
16T-00
SI011
SI007
SK009
SK001
SK003
SI005
SK014
SI010
SK015
SK002
SI004
SK006
SK012
SK016
SI381
SI273
SI288
SH299
P6
P5
SK270
SH293
SK287
SH292
SH297
SI296
SK291
SK212
SK208
SK210
SK209
SI206
SH207
SK228
SK227
SI214
SH215
SK220
SK263
SI226
SI380
SK271
P4
P3
SI257
P9
SK241
SK272
SK274
SK240
SK242
SK211
SK216
SK217
SK221
SK222
SK243
SK239
SK238
SK268
SK267
SI262
P10
SI256
SK279
SI289
SI275
SH213
SK224
SK225
SI218
SK269
SK266
SK265
SK283
SK278
SI276
SK036
SK219
SK032
SK231
SI232
SK277
SK255
SK251
SH284
SK258
SK244
SK021
SK253
SH280
SK026
SH298
SK259
SK252
SI020
SK025
SK027
SK235
SK260
SK236
SK019
SK261
SK234
SK022
SK037
SK023
SK278
SK233
SH230
SK018
SK024
SK035
SK017
SI015
0
(1/600)
40m

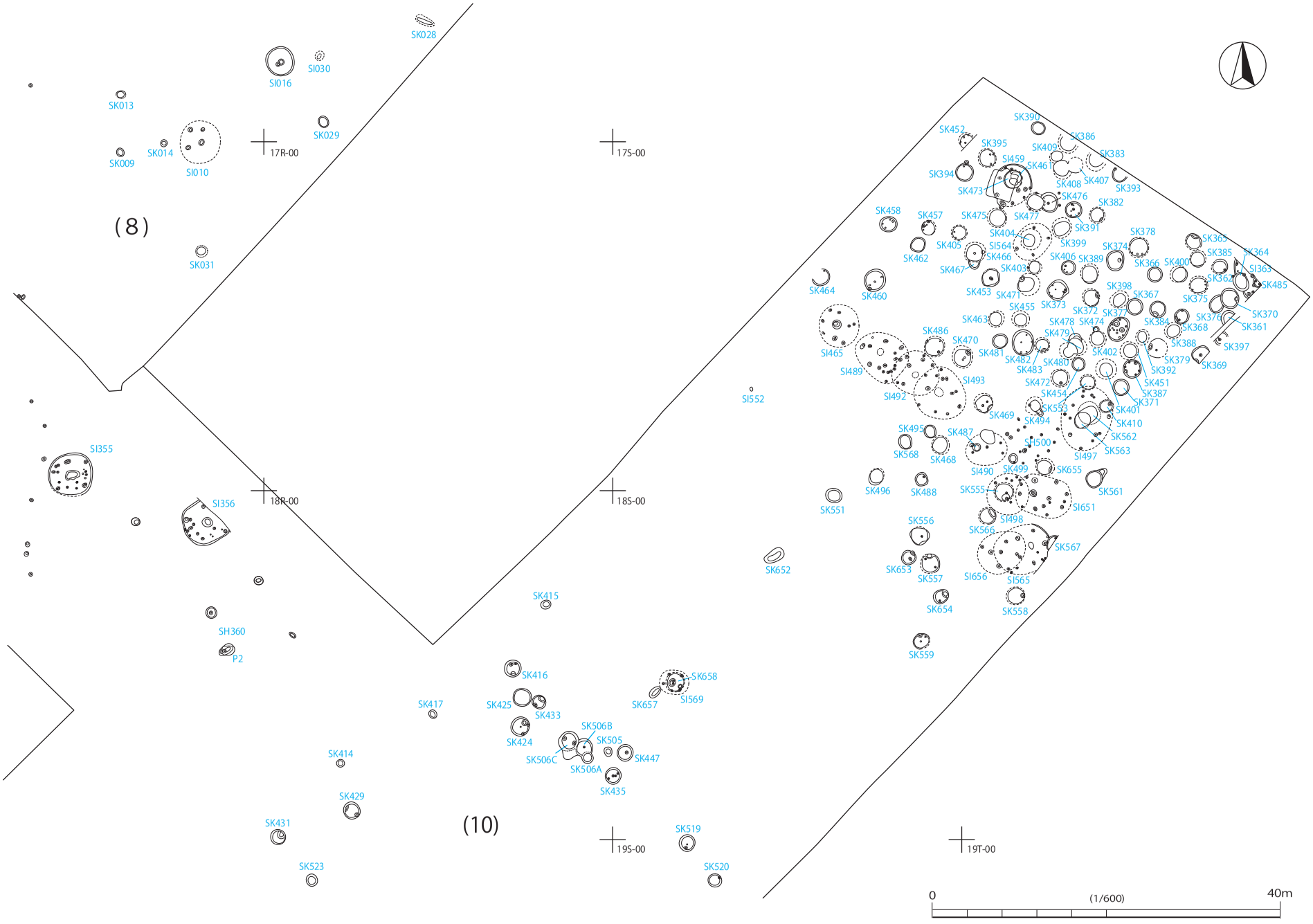
第７図　遺構分布図（3）


SK161
SK162
SK168
16L-00
P16
P34
SH171
(9)
SH170
SK164
SK165
SK177
SK166
SK169
SK155
SK156
SK167
17L-00
17M-00
SH176
P6
SK158
SK154
SK153
SK152
SK159
SI148
SK649
(13)
SK645
SK1034
SH174
SK172
SK173
16N-00
SK1020
SK1045
SI1012
SK1021
SK1022
SK1031
SK1054
SK1051C
SK1051A
SK1028
SK1055
SK1051B
SK1051D
SK1048
SK1046
SK1047
SK1024
SK1023
SK1025
SK1026
SK1027
SK1056
SI1011
SK1032
SK1033
(11)
SK1035
SK1030
17N-00
SK1038
SK1037
SI1013
SI1018
SK1036
SK1052
SI1016
SI1014
SK1040B
SK1040A
SI1017
SI1019
0
(1/600)
40m

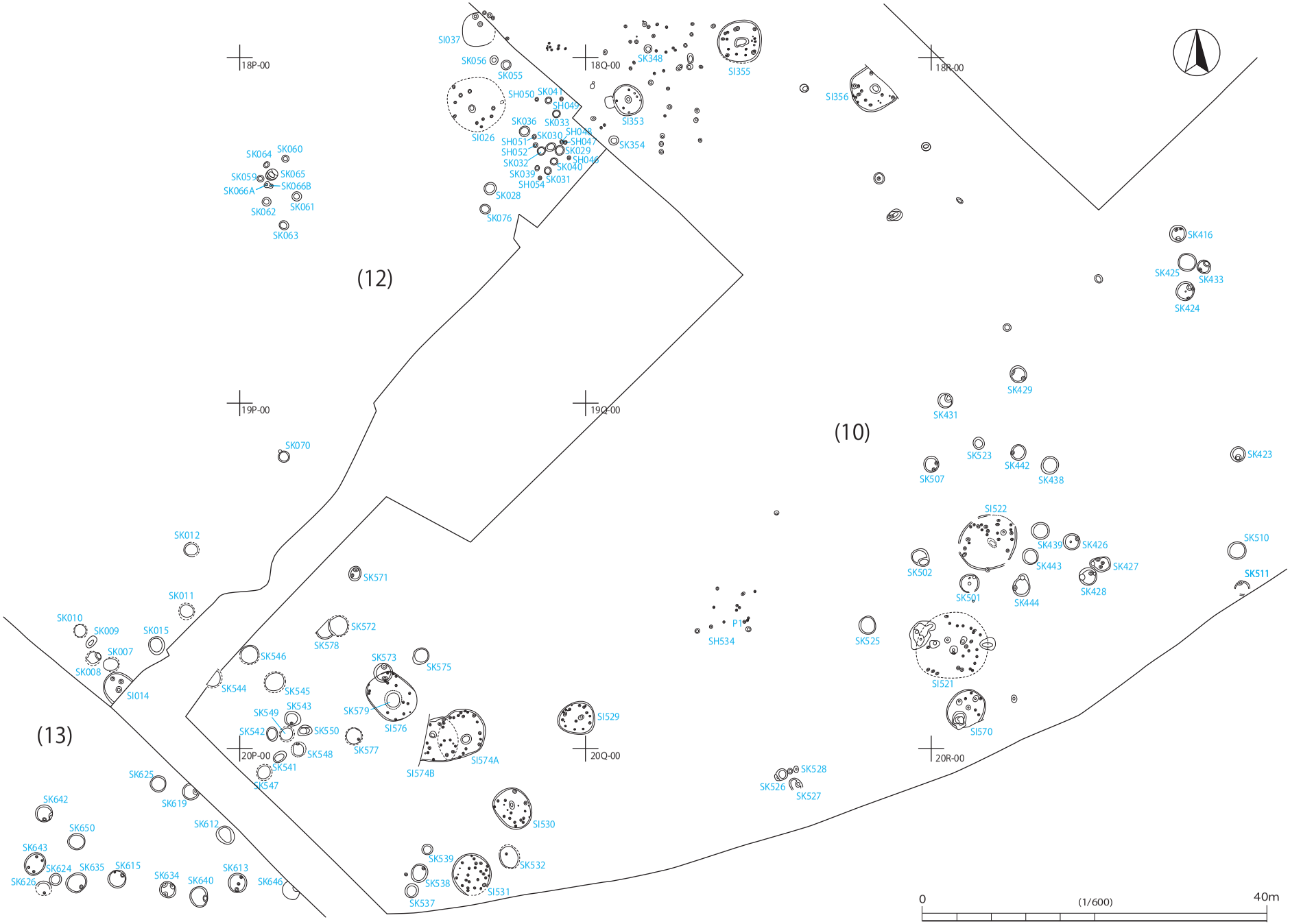
第８図　遺構分布図（4）


16N-00
16P-00
16Q-00
17N-00
17Q-00
18N-00
18O-00
(11)
(12)
(10)
(8)
SK319
SK320
SK303
SK321
SK310
SK302
SK301
SK322
SK300
SK323
SK318
SK316
SK317
SK304
SK315
SK309
SK305
SK324
SK325
SK307
SI312
SK306
SK308
SI1012
SK311
SI313
SI314
SK326
SH330
SI328
SK331
SI327
SK332
SK1039
SK1042
SK1038
SK1037
SK333
SK334
SK025
SI024
SK034
SK035
SK071
SK078
SI077
SK003
SK002
SK001A
SK001B
SK004
SH245
P11
SK335
SK336
SK344
SK345
SK005
SH006
SK338
SH008
SK007
SK011
SK012
SH034
SI053
SK043
SI337
SK343
SH352
SK351
SK340
SK350A
SI342
SK350B
SK357
SK359
SK349
SI339
SI341
SK347
SK348
SI355
0
(1/600)
40m

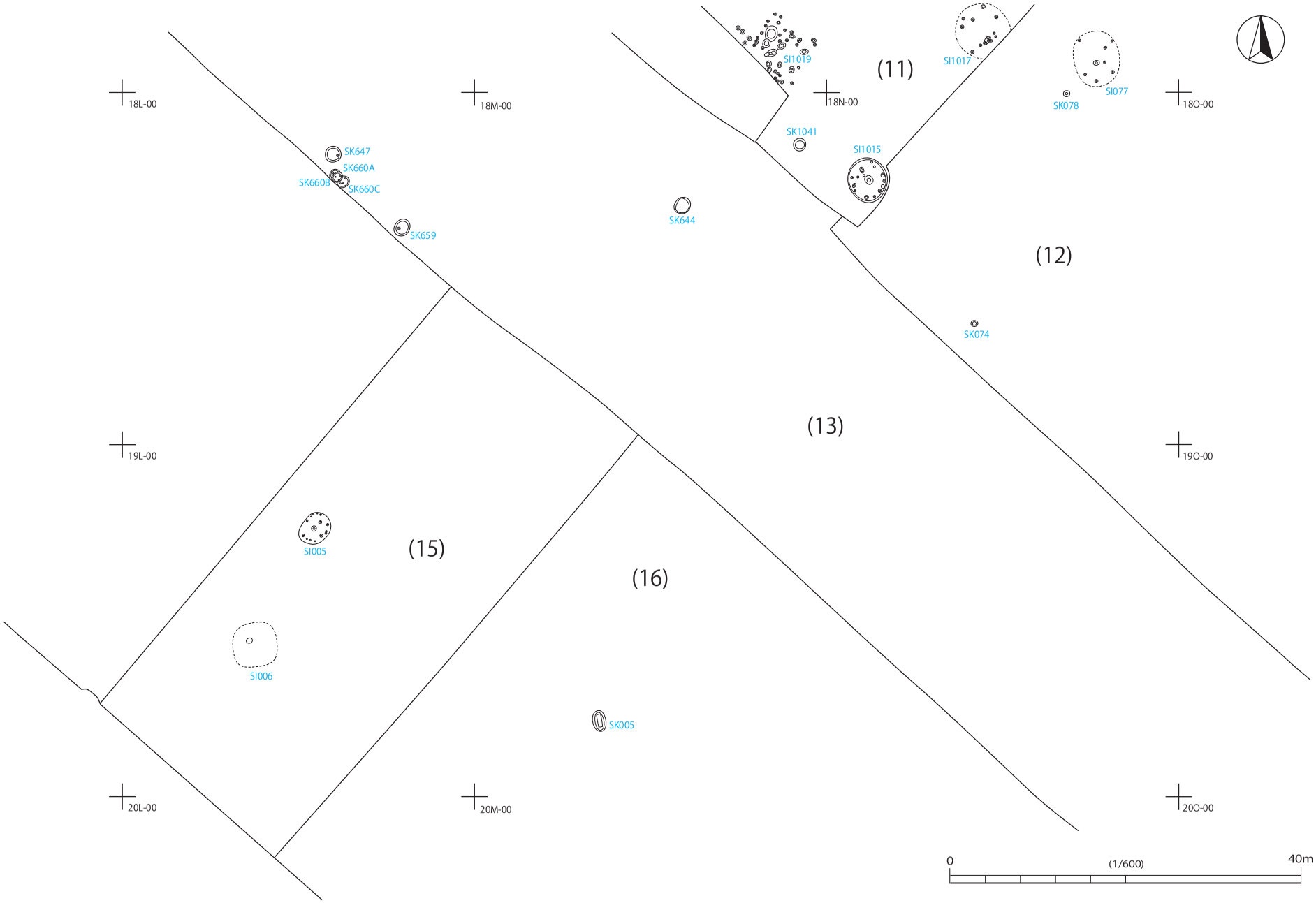
第９図　遺構分布図（5）


(8)
(10)
17R-00
17S-00
18R-00
18S-00
19S-00
19T-00
SK028
SI016
SI030
SK013
SK029
SK009
SK014
SI010
SK031
SI355
SI356
SH360
P2
SK415
SK416
SK425
SK433
SK424
SK417
SK658
SI569
SK657
SK506B
SK505
SK506C
SK506A
SK447
SK435
SK414
SK429
SK431
SK523
SK519
SK520
SI552
SK652
SK390
SK452
SK395
SK386
SK409
SK383
SI459
SK461
SK394
SK407
SK408
SK393
SK473
SK476
SK382
SK458
SK457
SK475
SK477
SK391
SK404
SK378
SK405
SI564
SK399
SK374
SK363
SK385
SK364
SK462
SK466
SK406
SK389
SK366
SK400
SI363
SK467
SK403
SK362
SK485
SK464
SK460
SK453
SK471
SK398
SK367
SK375
SK455
SK373
SK372
SK377
SK370
SK463
SK478
SK474
SK384
SK376
SK361
SK486
SK479
SK368
SK397
SK465
SK470
SK481
SK482
SK402
SK388
SK379
SK369
SK489
SK483
SK480
SK392
SI493
SK472
SK451
SK492
SK454
SK387
SK371
SK469
SK553
SK401
SK494
SK410
SK495
SK487
SK562
SK568
SK468
SI500
SK563
SI497
SK499
SK655
SI490
SK496
SK488
SK555
SK561
SK551
SI651
SI498
SK556
SK566
SK567
SK653
SK557
SI656
SI565
SK654
SK558
SK559
0
(1/600)
40m

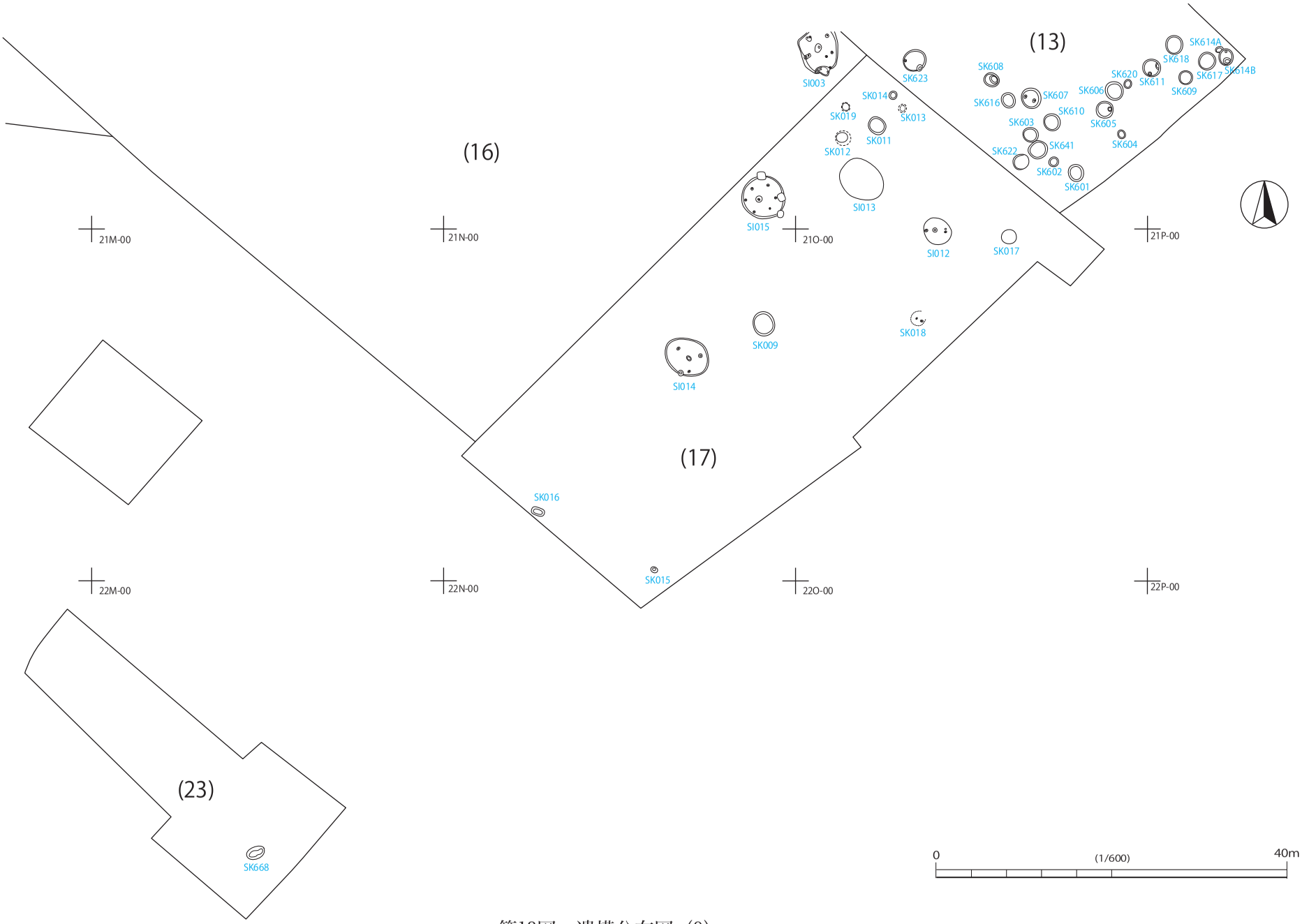
第10図　遺構分布図（6）


18P-00
18Q-00
18R-00
19P-00
19Q-00
20P-00
20Q-00
20R-00
(12)
(13)
(10)
SI037
SK056
SK055
SI026
SH050
SK041
SH049
SK036
SK033
SH048
SH051
SK030
SH047
SH052
SK029
SH046
SK032
SK040
SK039
SK031
SH054
SK028
SK076
SK348
SI355
SI353
SK354
SI356
SK064
SK060
SK059
SK065
SK066A
SK066B
SK062
SK061
SK063
SK070
SK012
SK011
SK010
SK009
SK015
SK007
SK008
SI014
SK571
SK572
SK578
SK546
SK544
SK545
SK573
SK575
SK579
SI576
SK543
SK549
SK542
SK550
SK548
SK577
SK541
SK547
SI574A
SI574B
SI529
SK625
SK619
SK642
SK650
SK612
SK643
SK624
SK635
SK615
SK626
SK634
SK640
SK613
SK646
SI530
SK539
SK538
SK537
SK532
SI531
P1
SH534
SK525
SK528
SK526
SK527
SK429
SK431
SK523
SK442
SK438
SK507
SK423
SK416
SK425
SK433
SK424
SI522
SK439
SK426
SK443
SK427
SK428
SK502
SK501
SK444
SK510
SK511
SI521
SI570
0
(1/600)
40m

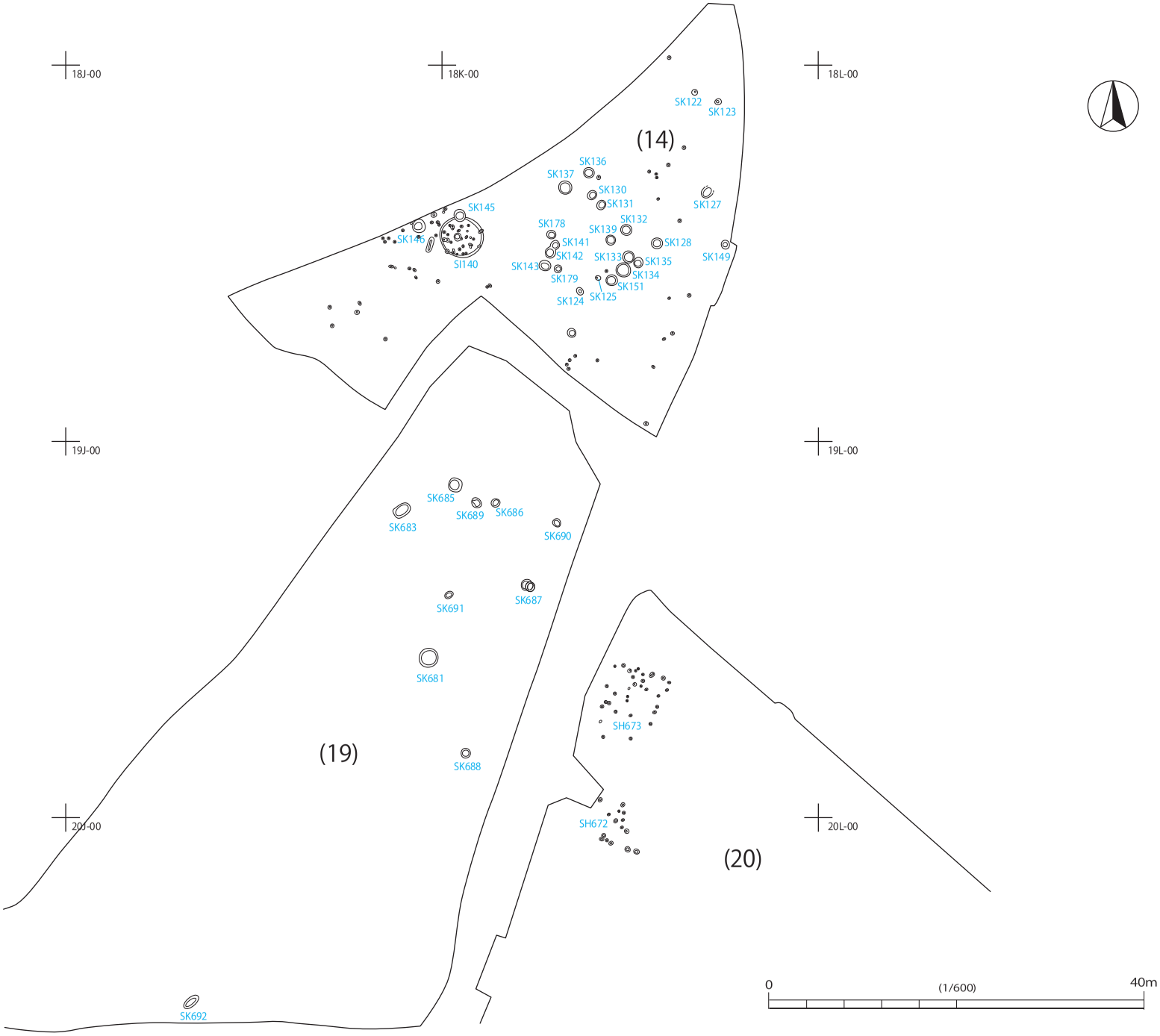
第11図　遺構分布図（7）


18L-00
18M-00
18N-00
18O-00
19L-00
19O-00
20L-00
20M-00
20O-00
SK647
SK660A
SK660B
SK660C
SK659
SK644
SI1019
SI1017
(11)
SK1041
SI1015
SK078
SI077
(12)
SK074
(13)
SI005
(15)
(16)
SI006
SK005
0
(1/600)
40m

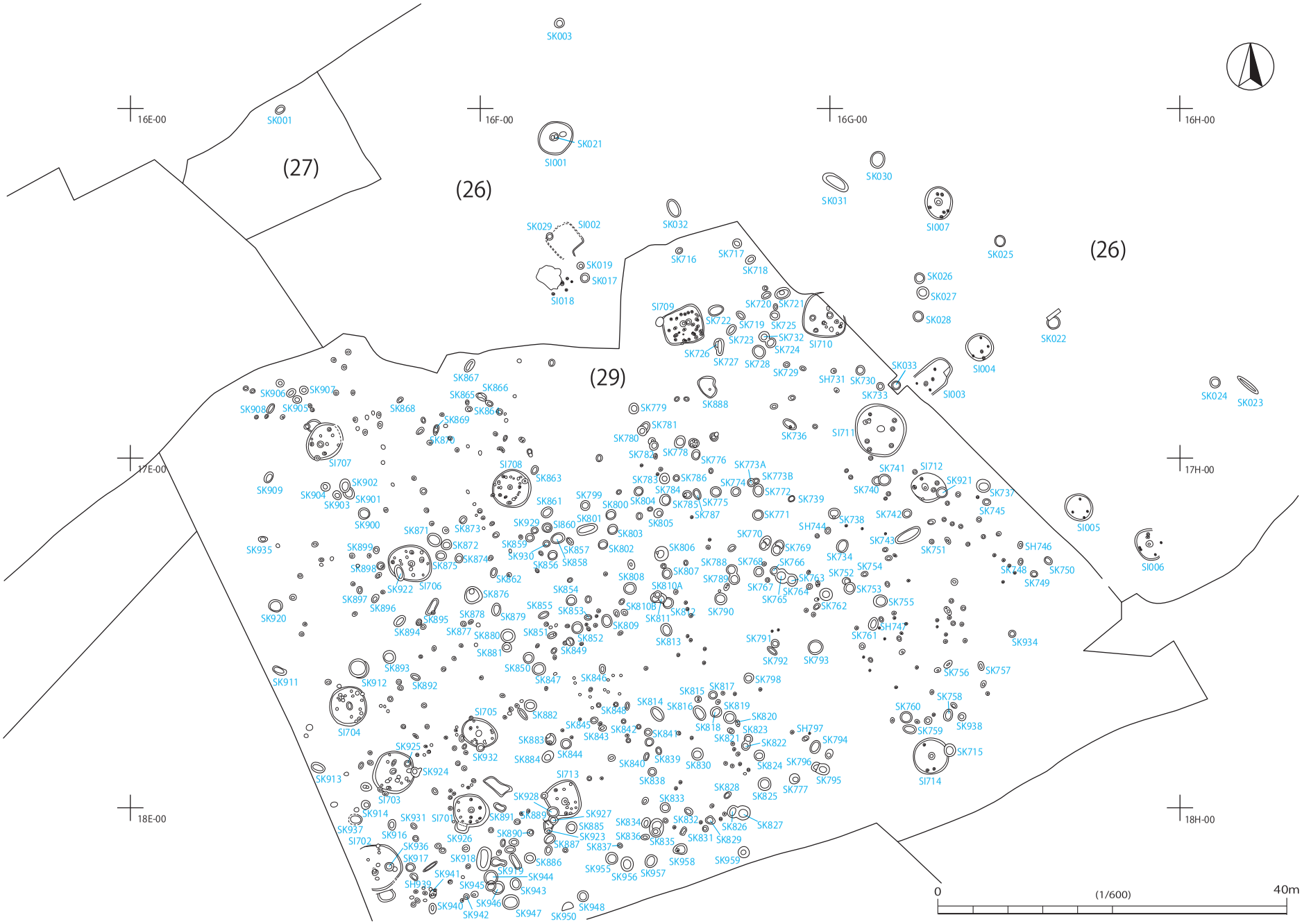
第12図　遺構分布図（8）

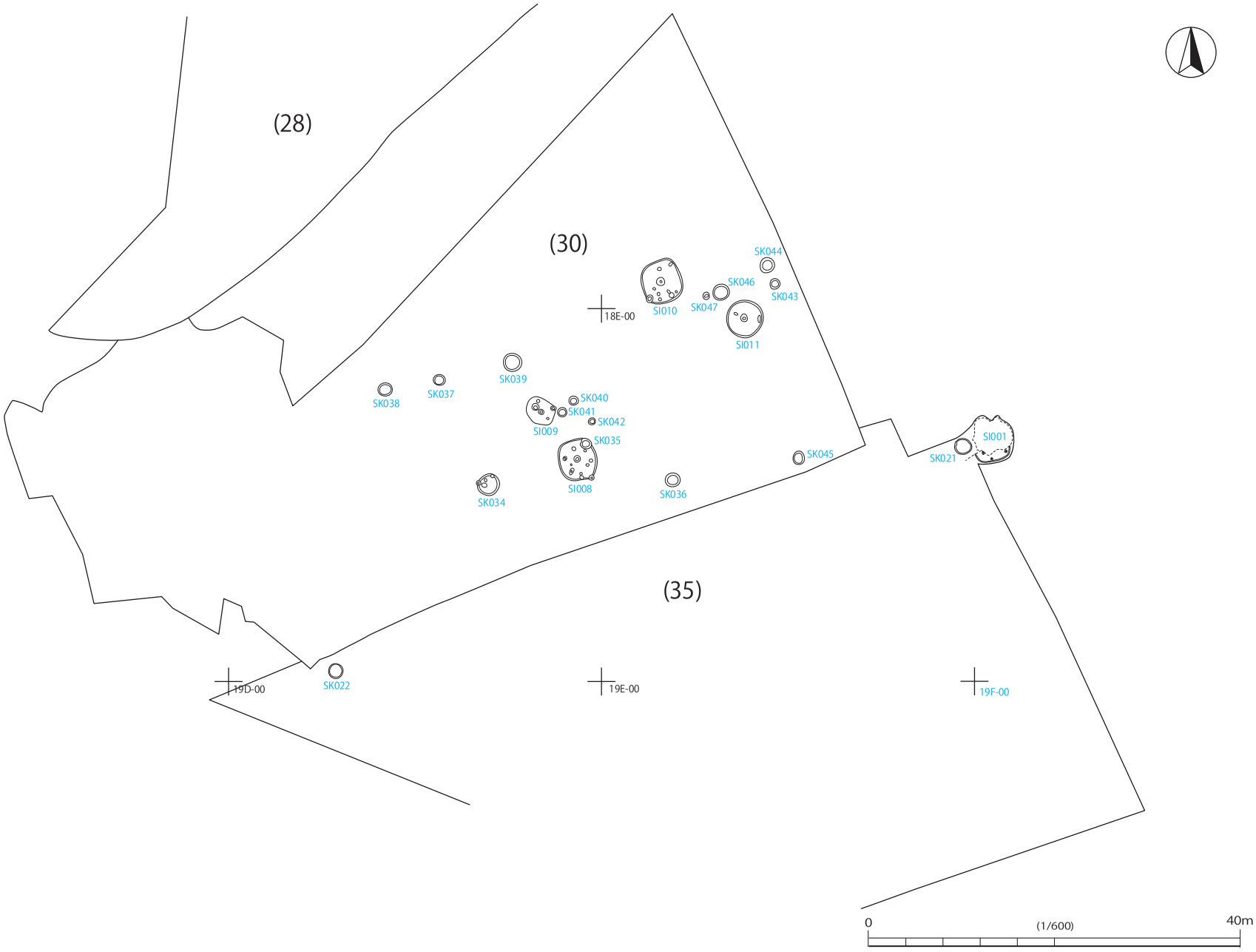

(13)
(16)
(17)
(23)
SI003
SK623
SK614A
SK618
SK614B
SK617
SK620
SK611
SK609
SK608
SK606
SK607
SK616
SK610
SK603
SK605
SK604
SK641
SK622
SK602
SK601
SK014
SK019
SK013
SK011
SK012
SI013
SI015
SI012
SK017
SK009
SK018
SI014
SK016
SK015
SK668
21M-00
21N-00
21O-00
21P-00
22M-00
22N-00
22O-00
22P-00
0
(1/600)
40m

第13図　遺構分布図（9）

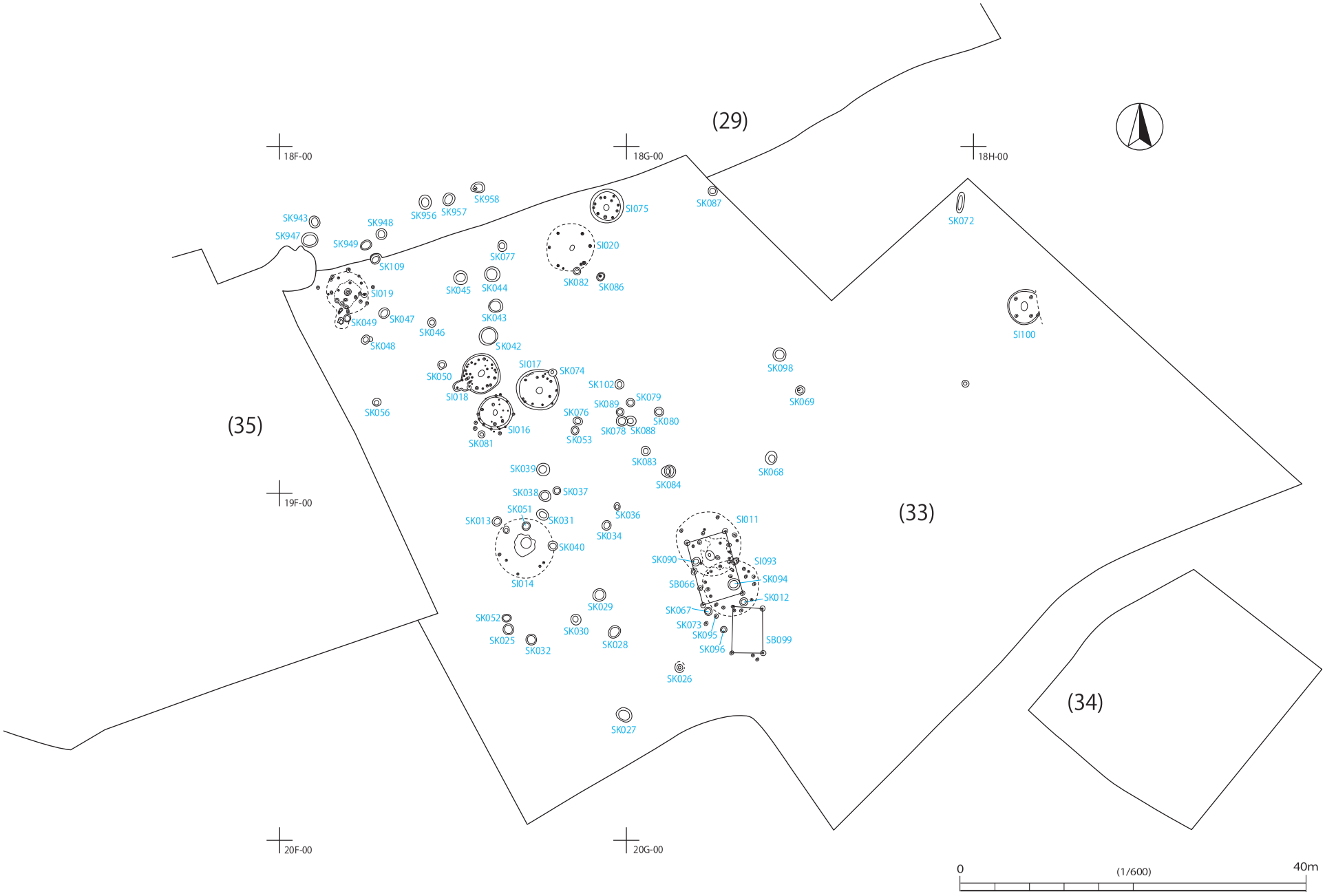


第14図　遺構分布図（10）

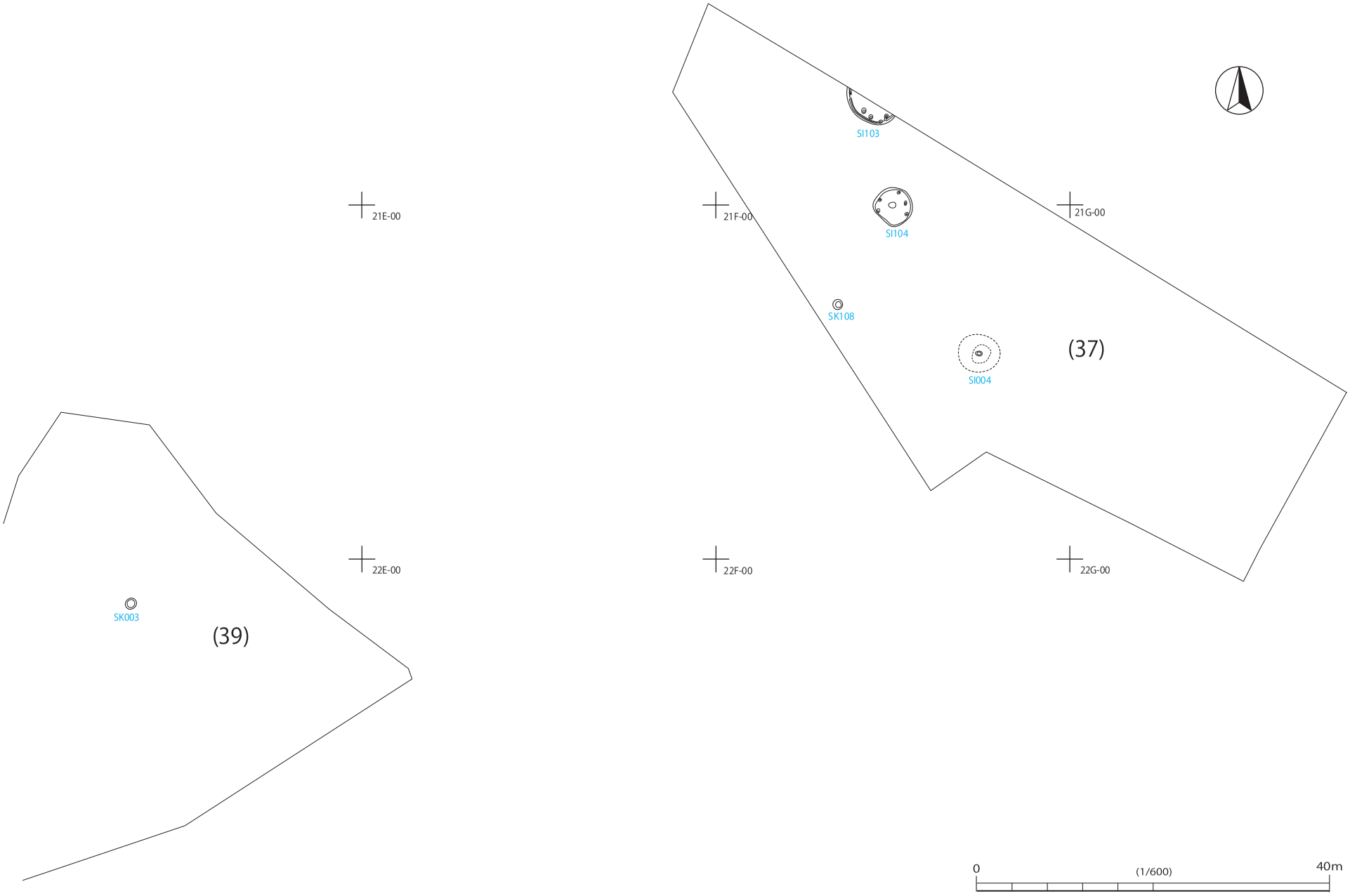

16E-00
16F-00
16G-00
16H-00
17E-00
17H-00
18E-00
18H-00
(27)
(26)
(29)
(26)
SK001
SK003
SI001
SK021
SK029
SI002
SK019
SK017
SI018
SK032
SK030
SK031
SI007
SK025
SK026
SK027
SK028
SK022
SI004
SI003
SK024
SK023
SI005
SI006
SK033
SH731
SK730
SK733
SK888
SK736
SI711
SK741
SI712
SK921
SK737
SK740
SK745
SK742
SH744
SK738
SK743
SK751
SH746
SK748
SK750
SK749
SK734
SK754
SK752
SK753
SK755
SK762
SK761
SH747
SK934
SK756
SK757
SK758
SK760
SK759
SK938
SK715
SI714
SK716
SK717
SK718
SI709
SK720
SK721
SK722
SK719
SK725
SK723
SK732
SK724
SK726
SK727
SK728
SK729
SI710
SK867
SK866
SK865
SK906
SK907
SK908
SK905
SK868
SK869
SK870
SI707
SK779
SK781
SK780
SK782
SK778
SK776
SK773A
SK773B
SK774
SK772
SK739
SK786
SK783
SK784
SK785
SK775
SK787
SK771
SK770
SK769
SK788
SK768
SK766
SK763
SK789
SK767
SK764
SK765
SK790
SK791
SK792
SK793
SK798
SK815
SK817
SK814
SK816
SK819
SK820
SK818
SK823
SK811
SK822
SH797
SK794
SK824
SK796
SK795
SK777
SK828
SK825
SK833
SK832
SK826
SK827
SK834
SK836
SK835
SK831
SK829
SK837
SK958
SK959
SK955
SK956
SK957
SI708
SK863
SK861
SK799
SK800
SK804
SK801
SK805
SK929
SI860
SK803
SK859
SK857
SK802
SK930
SK856
SK858
SK806
SK807
SK808
SK862
SK810A
SK810B
SK812
SK811
SK809
SK813
SK854
SK855
SK853
SK852
SK849
SK850
SK847
SK846
SK848
SK845
SK842
SK843
SK841
SK839
SK840
SK838
SK830
SK844
SK883
SK884
SK882
SI705
SK932
SK925
SK924
SK913
SI703
SI713
SK928
SK927
SK889
SK891
SK885
SK923
SK890
SK887
SK886
SK944
SK943
SK948
SK950
SK947
SK946
SK942
SK940
SK945
SH739
SK941
SK917
SK936
SK916
SK926
SK918
SK914
SK931
SI701
SK937
SI702
SK935
SK899
SK898
SK897
SK896
SK920
SK922
SI706
SK895
SK894
SK876
SK878
SK879
SK877
SK880
SK881
SK911
SK912
SK892
SK893
SI704
SK902
SK909
SK904
SK903
SK901
SK900
SK871
SK873
SK872
SK874
SK875
SK898
SK862
SK876
SK878
SK879
SK880
SK881



第16図　遺構分布図（12）



第17図　遺構分布図（13）



第18図　遺構分布図（14）

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と地形（第19・20図、図版１）

飯積原山遺跡は千葉県の北部、下総台地の中央に位置する印旛沼の南東側に立地する。行政域では印旛郡酒々井町の南東端に所在し、北東は富里市、南東は八街市に近接する。

本遺跡は、北側を流れる高崎川によって開析された標高36m～38mの台地上に立地する。高崎川は約６㎞南西側の富里市・八街市付近を水源とし、西流した後、約6.5㎞西方の佐倉市寺崎付近で西印旛沼の南西部に注ぐ鹿島川に合流する。遺跡周辺の高崎川低地の標高は約12mである。遺跡の北半は高崎川から入り込んだ谷に挟まれ、南端は南部川支谷の谷頭部に接する南北約1,250m、東西約800mの扇状の平面形を呈する。高崎川の南岸は同様な比較的広い台地が南部川側を付け根に東西に連なり、低地に面する北端には標高15m～20mのテラス状の低位段丘面が形成されている[1)]。高崎川を挟んで本遺跡の対岸台地は、北側に広大な印旛沼の低地が接している。

２　周辺遺跡の概要（第19・20図）

周辺遺跡は、『酒々井町飯積原山遺跡１』[2)]において旧石器時代、『酒々井町飯積上台遺跡１』[3)]において縄文時代、古墳時代、奈良･平安時代について既に概説しているので、それらを参照していただきたい。今回報告する縄文時代では、検出された遺構・遺物の大半が中期中葉から後期初頭のもので、他に早期・前期などの遺物も検出されたが、量的に少ないことから、周辺遺跡も縄文時代中期に焦点を当てて見ていきたい。

第19図に示したのは、縄文時代中期の遺跡の分布図である[4)]。図中の記号は、●は既調査で遺構が検出された遺跡、▲は既調査で遺構は検出されず、遺物のみが検出された遺跡、○は未調査の遺跡を示した。遺跡の分布は、印旛沼に直接面する地域より、高崎川流域の方が多い。時期的には、中期の前葉は少なく、中期中葉から後葉に属する遺跡が多数を占め、他地域と同様に加曽利Ｅ式期の後半以降に遺跡数が急増する傾向が窺える（第４表)。ここでは周辺地域における主な既調査遺跡の成果を紹介し、地理的条件による遺跡のありかたの違い、集落の立地や遺構の分布など時期的な傾向の把握に努めたい。

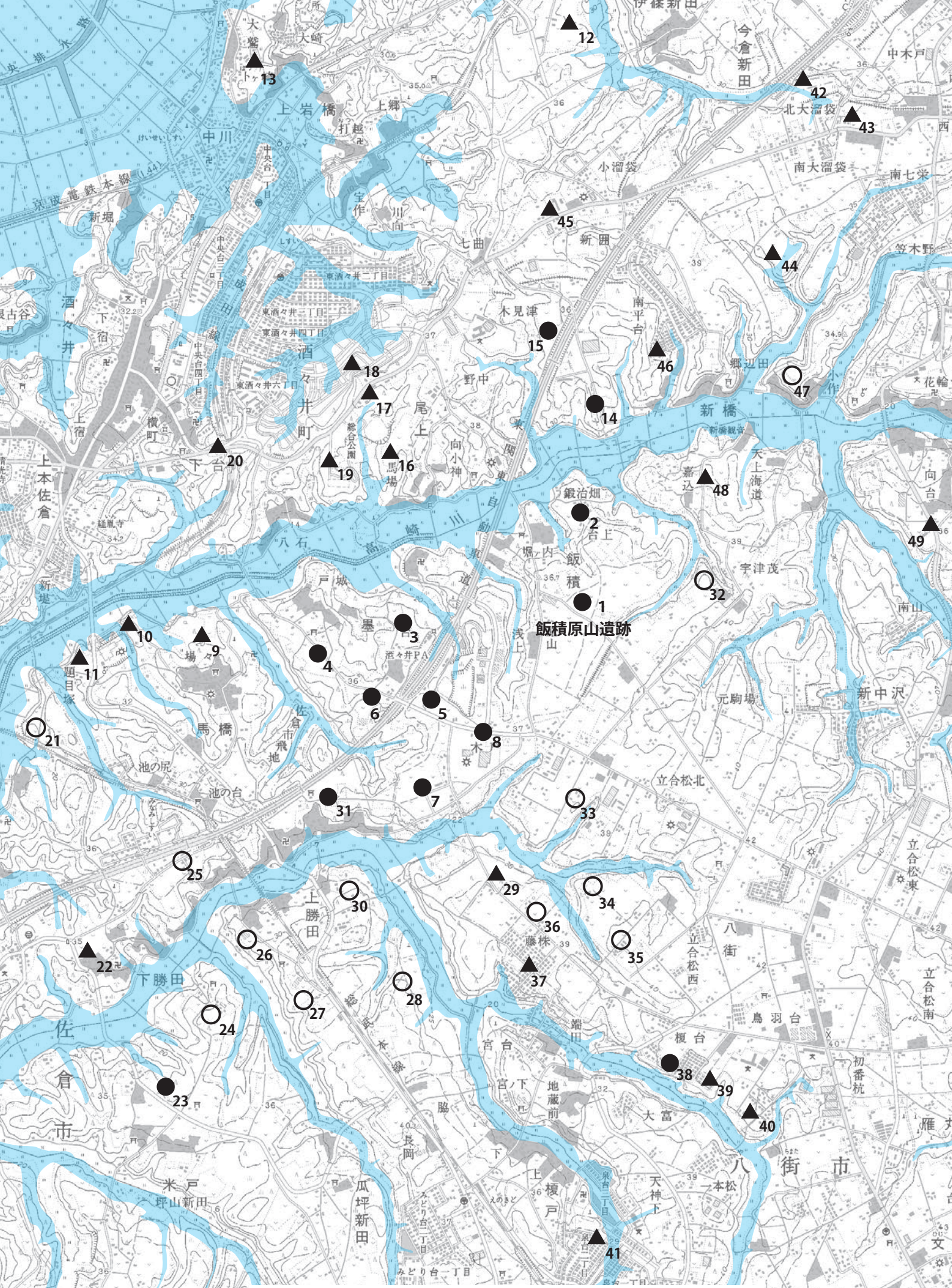
飯積上台遺跡（第19・20図２）は、本遺跡の北側河岸段丘上に位置する。既報告の平成19年度までの調査区42,326㎡から、加曽利Ｅ3式期２軒、加曽利Ｅ4式期１軒の竪穴住居跡が検出された。

本遺跡の西側約500mに位置し、高崎川と南部川に挟まれた酒々井町墨地区は、ここ20数年間に比較的まとまった規模の調査が行われ、多くのデータが蓄積されている地域である。

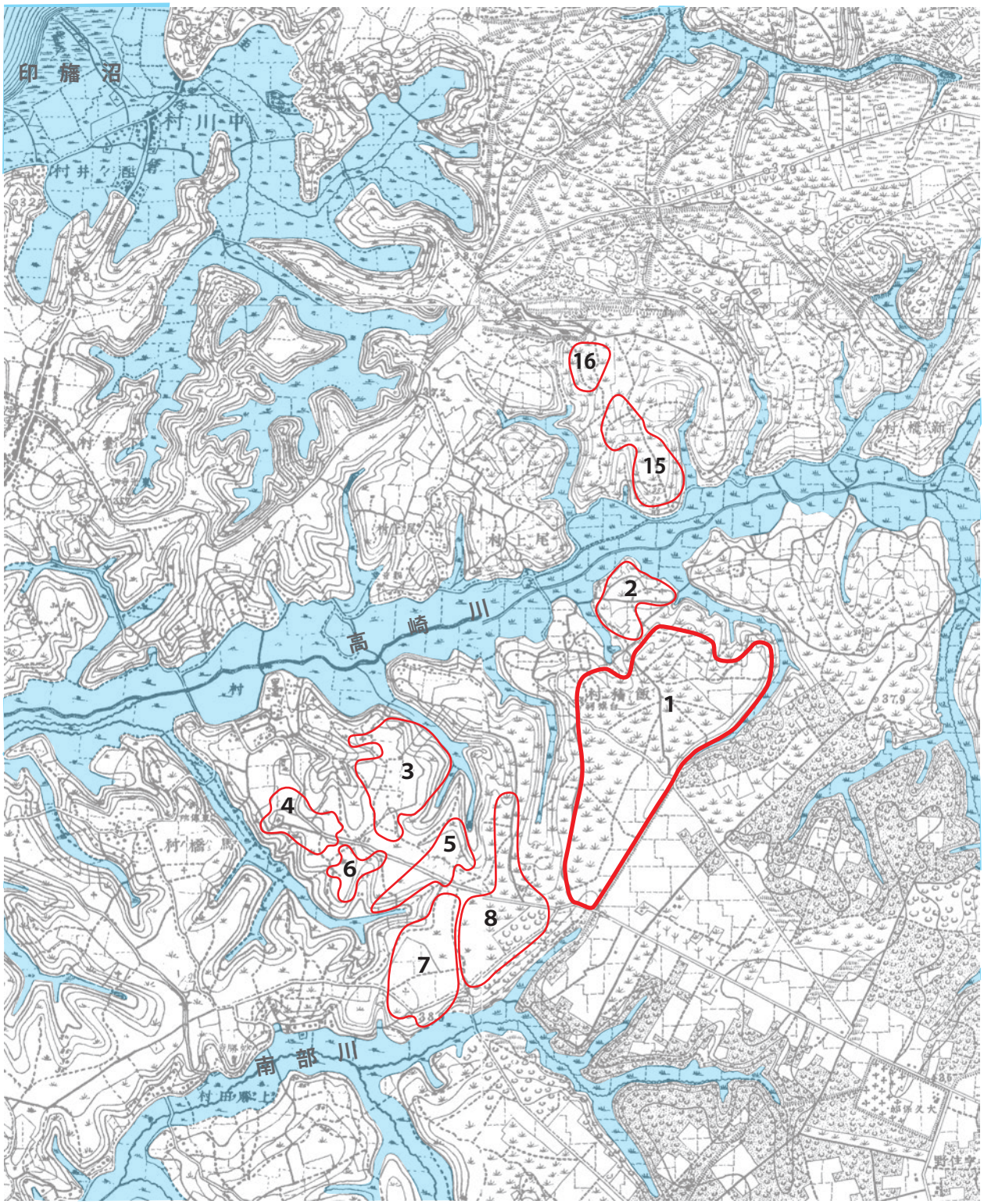
墨古沢遺跡[5)]（第19・20図３）は、飯積原山遺跡との間に細長い台地を挟んだ西側の台地に位置する。高崎川から谷が北西方向から半円状に入り込む点など台地北側の形状・規模が、飯積原山遺跡と近似している。調査されたのは北東側の谷に面する地点で、面積は38,742㎡である。阿玉台１ｂ式期～加曽利Ｅ3式期の竪穴住居跡約80軒、柱穴列４軒、小竪穴・土坑等約200基が検出された。集落域は北区と南区に分かれるが、調査区中央部は中世遺構によって広範囲に失われており、本来は連続していたと考えられている。竪穴住居跡は阿玉台１ｂ式期が８軒で､以後10軒内外で推移すると考えられる。南区は遺構が密集し、上記の時期の遺構が重複しながら継続して築かれており、集落の中心域とみられる。阿玉台式期は全体に分布するが、加曽利Ｅ式期になると南区に集中するようになる。小竪穴・土坑は住居跡とそれほど離れていない位置に築かれており、群在するような状況はみられない。集落は加曽利Ｅ3-4式と思われる１軒を

第４表　縄文時代中期周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	調査歴	主な土器型式	主な検出遺構
1	飯積原山遺跡	○	阿玉台1b～4, 加曽利E1～4, 称名寺1	竪穴住居132, 掘立柱建物2, 小竪穴・土坑744, 陥穴28, ピット(群)81
2	飯積上台遺跡	○	加曽利E2-3～3	竪穴住居3
3	墨古沢遺跡	○	阿玉台1b～4, 加曽利E1～3-4	竪穴住居82, 掘立柱建物4, 小竪穴・土坑204, 陥穴7
4	墨広畑遺跡	○	阿玉台2, 加曽利E2～3	竪穴住居3, 土坑5
5	墨古沢南Ⅰ遺跡	○	加曽利E3～4	竪穴住居58, 土坑290
6	墨古沢南Ⅱ遺跡	○	加曽利E, 称名寺	竪穴住居3, 土坑2
7	墨新山遺跡	○	加曽利E3～3-4	竪穴住居17, 土坑41, 陥穴13
8	墨木戸遺跡	○	加曽利E1・3～4	竪穴住居55, 土坑56
9	墨大広台遺跡	○	阿玉台	
10	馬橋鷲尾余遺跡	○	加曽利E	
11	馬橋鷺田遺跡	○	阿玉台直前, 加曽利E	
12	伊篠白幡遺跡	○	阿玉台直前～3, 加曽利E1～3	
13	上岩橋岩崎遺跡	○	阿玉台	
14	尾上木見津遺跡・駒詰遺跡	○	阿玉台1b, 加曽利E3	土坑約150
15	尾上平台南遺跡	○	阿玉台直前～1a, 加曽利E3	竪穴住居1, 土坑17
16	尾上広畑遺跡	○	加曽利E, 称名寺	
17	尾上柳作遺跡	○	五領ヶ台, 加曽利E4	
18	尾上藤木遺跡	○	加曽利E, 称名寺	
19	墨総合公園内遺跡	○	五領ヶ台, 阿玉台2～3, 加曽利E3, 称名寺	
20	下台遺跡	○	加曽利E3, 称名寺	
21	八木亀井台遺跡		阿玉台, 加曽利E	
22	下勝田台畑遺跡	○	中期前半	
23	下勝田殿台東遺跡	○	阿玉台1b～4, 加曽利E1～3	竪穴住居4, 掘立柱建物1, 小竪穴23, 炉跡2
24	下勝田天神台遺跡		加曽利E	
25	上勝田市ノ坪遺跡		加曽利E	
26	上勝田道谷津遺跡		不明	
27	上勝田白畑山遺跡		不明	
28	上勝田八双山遺跡		不明	
29	上勝田瀧向遺跡	○	中期後葉	
30	上勝田遠坪遺跡		不明	
31	上勝田鎌田遺跡	○	阿玉台・加曽利E	土坑1
32	元駒場Ⅰ遺跡		不明	
33	立合松北Ⅱ遺跡		不明	
34	藤株Ⅴ遺跡		不明	
35	藤株Ⅰ遺跡		不明	
36	藤株Ⅱ遺跡		不明	
37	藤株Ⅳ遺跡		不明	
38	鉄砲作遺跡	○	加曽利E2～3	竪穴住居2
39	一之綱Ⅰ遺跡	○	阿玉台, 加曽利E1～3	
40	一之綱Ⅱ遺跡	○	中期初	
41	榎戸第Ⅰ遺跡	○	加曽利E2～3	竪穴住居2, 土坑1
42	伊篠新田遺跡	○	阿玉台, 加曽利E	
43	北大溜袋遺跡	○	加曽利E	
44	南大溜袋遺跡	○	不明	
45	小溜袋遺跡	○	阿玉台, 加曽利E	
46	寺沢遺跡	○	阿玉台3, 加曽利E1・3	
47	宿辺田遺跡		不明	
48	新橋遺跡	○	阿玉台1a～4, 加曽利E1・3	
49	梅田台遺跡	○	不明	



第19図　遺跡の位置と周辺の縄文時代中期遺跡　（S＝1／25,000）



第20図　遺跡の位置と地形

最後に一端断絶し、後期に至って復活している。

墨広畑遺跡[6]（第19・20図４）は、高崎川に面する傾斜面から台地上にあって、墨古沢遺跡と谷を挟んで西側の対岸に位置する。調査区は台地中央を通る幅約８ｍの細長いトレンチ状で、面積は4,639㎡である。縄文時代の遺構群は、遺跡の南東側から阿玉台２式期の竪穴住居跡１軒・土坑３基、加曽利Ｅ式期の竪穴

住居跡２軒・土坑１基が検出されている。

墨古沢南Ⅰ遺跡[7)]（第19・20図５）は、墨古沢遺跡とは同一の台地の小谷を挟んだ南西側に立地する。調査されたのは遺跡の中央付近の２地点で、面積は13,900㎡である。遺構は、中期後葉の加曽利Ｅ3式期から後期初頭の称名寺１式期の竪穴住居跡58軒・土坑等290基・ピット群が検出された。南側の調査区は中央部に広場を持つ環状集落であるとされている。加曽利Ｅ3式中段階から同4式中段階までの各段階の竪穴住居跡49軒が展開し、確実に称名寺１式期と考えられる竪穴住居跡が１軒ある。土坑は住居跡の領域と分布が重なり、ピット群は中央の広場付近に集中する。北側の調査区でも加曽利Ｅ3式～Ｅ4式期の住居跡８軒、土坑14基が検出されている。なお、調査地点に隣接する台地の先端部分は古沢南Ⅱ遺跡[8)]として確認調査が実施されており、加曽利Ｅ式期の遺構・遺物が検出され、北側の調査区と併せた遺構群の存在が予想される。

墨新山遺跡[9)]（第19・20図７）は、墨古沢南Ⅰ遺跡と高崎川の支谷を挟んだ南側に位置する。遺跡の南端は南部川の谷に面する。調査地点は遺跡中央付近の61,584㎡である。遺構は加曽利Ｅ3式中段階～3-4式期の竪穴住居跡17軒、土坑41基、陥穴13基が検出された。これらの遺構は、調査区全体に散漫な状況で分布しており、調査区外にも広がっている可能性が高い。

墨木戸遺跡[10・11)]（第19・20図８）は墨新山遺跡の東側に隣接し、南部川の北岸に立地する。調査対象は南側全域の82,996㎡で、東側は飯積原山遺跡の南端に近接する。遺構は２時期に分かれ、調査区の南西側にいわゆる中峠式・加曽利Ｅ1式期古段階の竪穴住居跡２軒・フラスコ状土坑９基が分布する。調査区の中央から南側には加曽利Ｅ3式古2段階～3式新段階の竪穴住居跡53軒、土坑約47基などが分布する。この集落も墨新山遺跡より遺構は集中しているが、やはり分散型の集落であろう。なお、同3-4式～4式の土坑はごくわずかである。

高崎川の北岸は、南岸に比べると中期の遺構がまとまって検出された遺跡は少ない。

尾上木見津遺跡・駒詰遺跡[12)]（第19・20図15）は、飯積原山遺跡の真北、高崎川の対岸に位置する。第１～第３地点までの合計19,350㎡が調査された。縄文時代とされる土坑は約150基で、報告された第１地点では、平面形が楕円形や不整形で、深さは30㎝以下のものが大半である。出土遺物は少なく、中期初頭の下小野式・阿玉台１ｂ式・加曽利Ｅ3式などの土器が出土している。

尾上平台南遺跡[13)]（第19・20図16）は、尾上木見津遺跡・駒詰遺跡と同じ台地の北側に位置する。調査対象は11,753㎡である。遺構は高崎川の支谷に面する遺跡の南端部から、加曽利Ｅ3式中段階の竪穴住居跡１軒・土坑17基などが検出された。

以上、遺跡数の多い高崎川南岸地域の方が、少ない高崎川北岸から印旛沼に面した地域の遺跡より、住居跡が多く検出され、安定的な集落が営まれていることがわかる。北岸の地域は南岸に比べて平坦部が狭く、海水が湾入しその影響も受けやすかったと考えられるが、南岸地域は平坦部が広く、北側には段丘が形成され、高崎川への移動も容易であったと考えられ、南岸地域の方が居住地としては好適地であったと考えられる。

南岸地域でも調査事例の多い墨地区の遺跡群の動向をまとめてみると、まず高崎川に近い台地の北側に中期中葉の継続的な集落が営まれる。墨古沢遺跡は、阿玉台１ｂ式から加曽利Ｅ3式新段階まで継続し、拠点的な集落とみられる。西側の墨広畑遺跡は狭い調査範囲から阿玉台２式・加曽利Ｅ式期の住居跡が検出されている。継続的に営まれた集落かどうか今のところ判断できない。

高崎川と南部川の中間付近から南部川に面する南側では、墨木戸遺跡においていわゆる中峠式・加曽利Ｅ1式期古段階の住居跡２軒と土坑９基からなる小規模な遺構群がみられるが、一旦断絶してしまう。この地域の主体となる集落は、加曽利Ｅ3式期の集落で、少しずつ出現と終焉の時期が異なるものの加曽利Ｅ3式中～新段階は明らかに同時存在していた。墨古沢南Ⅰ遺跡は加曽利Ｅ3式中段階に出現し、称名寺１式まで継続するようである。墨新山遺跡は加曽利Ｅ3式中段階に出現し、同4式期には遺構は見られない。墨木戸遺跡はこれら２遺跡よりやや早く加曽利Ｅ3式古２段階に出現し、同式新段階までで竪穴住居跡はなくなってしまう。したがって、加曽利Ｅ4式期から称名寺１式期に存在するのは墨古沢南Ⅰ遺跡のみとなり、その後は入れ替わるように墨古沢遺跡が復活するようである。

なお、遺構について特筆される点は、墨古沢遺跡において、茨城県南部と千葉県北西部を中心に分布する有段式竪穴住居跡が９軒検出されたことである。時期は阿玉台２式期から加曽利Ｅ1式期のものである。墨古沢南Ⅰ遺跡・墨新山遺跡・墨木戸遺跡では、東北地方に分布の中心がある炉の底面に土器を斜めにはめ込んだ斜位埋設炉をもつ加曽利Ｅ3式中～新段階の竪穴住居跡が検出されたことが挙げられる。

注１　道沢　明ほか　1982『北総線』東京電力北総線遺跡調査会
２　新田浩三ほか　2014『酒々井町飯積原山遺跡１－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書２－』（公財）千葉県教育振興財団
３　新田浩三ほか　2013『酒々井町飯積上台遺跡１－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書１－』（公財）千葉県教育振興財団
４　小倉和重ほか　2007『印旛の原始・古代－縄文時代編－』（財）印旛郡市文化財センター
５　横山　仁ほか　2007『東関東自動車道水戸線酒々井ＰＡ埋蔵文化財調査報告書４－酒々井町墨古沢遺跡－』（財）千葉県教育振興財団
６　石倉亮治　2013『地方特定道理整備委託埋蔵文化財報告書－酒々井町墨広畑遺跡・墨古沢南Ⅱ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団
７　横山　仁ほか　2005『東関東自動車道水戸線酒々井ＰＡ埋蔵文化財調査報告書１　－酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡－　縄文時代編』（財）千葉県文化財センター
８　木内達彦　1987『古沢南Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
９　小谷龍司ほか　1997『墨新山遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
10　中山俊之　1995『墨木戸』（財）印旛郡市文化財センター
11　小倉和重　1999『墨木戸遺跡（第２次)』（財）印旛郡市文化財センター
12　小牧美知枝 2011『尾上木見津遺跡（第１地点）・駒詰遺跡（第１地点)』（財）印旛郡市文化財センター
13　斉藤　毅　2012『尾上平台遺跡・尾上平台南遺跡（第１・２・３・４・５地点）新込野馬土手』（財）印旛郡市文化財センター

第３節　調査成果の概要と時期区分

１　成果の概要（第４図）

今回報告する（1）～（50）区までの地区内で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡132軒、掘立柱建物跡２棟、土坑772基、ピット（群）81基である。土坑には貯蔵穴と思われるフラスコ状土坑・たらい状の土坑、墓坑と思われる楕円形の土坑、陥穴などを含むが、一括して報告することとした。陥穴を除き、遺構の時期は中期後半のもので、密度に差はあるものの、おおよそ22大グリッドライン以北に分布する。このうち、遺跡北東側に位置する（7）・（8）区北側・（10）区北側ではいわゆる中峠式から加曽利Ｅ式前

半の遺構群が集中して検出された。この集中部は平成25年度に調査を行ってきわめて密度の濃い遺構群が検出された（78）区に続く遺構群と考えられる。また、同時期の遺構が（78）区の北から東、さらに南西へと入り込む小谷に面する（10）区南半から（17）区にかけて、密度は薄いながら分布している。また、(10) 区中央の18Ｐ・Ｑグリッドから、北は（9）区東半、西は（14）・(15)・(19) 区にかけての範囲に加曽利Ｅ式後半の遺構群が散漫に分布し、さらに一端途切れて（26）・(29)・(30)・(33)・(37) 区にも加曽利Ｅ式後半の遺構群が散漫に分布している。

出土土器は草創期後半の撚糸文土器、早期の沈線文土器、前期の関山式・黒浜式・浮島式、中期の前葉の五領ケ台式直後、中葉の阿玉台式直前から１ａ式、阿玉台１ｂ式～４式、勝坂式、後葉のいわゆる中峠式及び近縁の諸類型・加曽利Ｅ1式～4式及び大木式系土器、後期の称名寺式・堀之内１式・加曽利Ｂ式・安行１～２式、晩期安行３式が出土している。このうち、遺構に伴って出土した中峠式・加曽利Ｅ1式～4式・称名寺式が主体的な土器で、他は遺構外から少量出土した。

２　時期区分

遺構の時期区分と土器の分類は次のとおりとした。

このうち、中期阿玉台３式以前及び後期堀之内１式以降は時期区分を行わなかった。

前１期　草創期後半　撚糸文土器、早期　沈線文土器、前期　関山式・黒浜式・浮島式
　　中期　五領ケ台式直後、阿玉台式１ａ式・１ｂ式・２式・３式
１ａ期　阿玉台４式・勝坂式末期・いわゆる中峠式及び近縁の諸類型・加曽利Ｅ1式古段階
１ｂ期　加曽利Ｅ1式新段階
２ａ期　加曽利Ｅ2式古段階
２ｂ期　加曽利Ｅ2式新段階
２ｃ期　加曽利Ｅ2–3中間式
３ａ期　加曽利Ｅ3式古段階
３ｂ期　加曽利Ｅ3式中段階
３ｃ期　加曽利Ｅ3式新段階
４ａ期　加曽利Ｅ3–4中間式
４ｂ期　加曽利Ｅ4式古段階
４ｃ期　加曽利Ｅ4式中段階
４ｄ期　加曽利Ｅ4式新段階
５期　　称名寺１式
後５期　後期　堀之内１式・加曽利Ｂ式・安行１～２式、晩期　安行３式

１ａ期については各型式の同時期性について問題のあるところだが、ここでは議論せず、集落形成過程を理解する都合上同一時期として扱うこととした。中期土器の分類に当たっては、阿玉台式については西村正衛編年を基準とし、１ａ期の各土器の理解については下総考古学研究会による諸研究を参考とした。また、加曽利Ｅ式については前半を山形真理子編年、後半を柳澤清一･長山明弘編年を基準とした。なお、

柳澤・長山編年では各期がさらに小細別されているが、土器の出土量が少ない遺構ではその認定が困難となるため細別段階にとどめた。個別の土器で認定できたものについては可能な限り小細別まで記載した。各々、理解に誤りがあれば報告者の責任である。

参考文献

西村正衛　1984 『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部

高橋良治他　1998 「＜特集＞中峠式土器の再検討」『下総考古学』15　下総考古学研究会

高橋良治他　2004 「＜特集＞房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18　下総考古学研究会

山形真理子　1996・1997 「曽利式土器の研究（上)・(下)」『東京大学考古学研究室研究紀要』14・15　東京大学文学部考古学研究室

柳澤清一　1997 「千葉県における加曽利Ｅ（新）式編年の検討－下総　利根川下流域の遺跡変動にふれて－」『東邦考古』21　東邦考古学研究会

柳澤清一　2006 「千葉県における縄紋中期末葉・後期初頭編年の再検討－『縄文セミナー』千葉県編年案の標本資料から（１）－」『東邦考古』30　東邦考古学研究会

柳澤清一　2006 「縄紋時代中・後期の編年学研究－列島における小細別編年網の構築をめざして－」『千葉大学考古学研究叢書』3

長山明弘　2010 「加曽利Ｅ（新）式における土器系列の研究（１）－「連弧文土器」から「Ｙ字文土器」へ－」『古代』第124号　早稲田大学考古学会

長山明弘　2012 「関東北に於ける土器系列の相関(１)－「懸華状連接区劃文土器」の分布と加曽利E3式土器の終末(上篇)」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念　考古学論攷Ⅰ－岡本東三先生退職とともに－』千葉大学文学部考古学研究室　考古学論攷編集委員会

第２章　遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居跡・掘立柱建物跡

(4) SI058（第21図、図版５）

遺跡北部､14Ｋ－05･15･15･16グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で､径約4.00m､深さ19㎝を測る。炉の南東側を中心に床面が硬化していた。ピットは11か所検出された。ほぼ円形に配列される。北側の方がおおむね大きく、径40㎝～60㎝、深さ13㎝～30㎝を測る。P2・P10は壁に掘り込まれる。炉は不整楕円形を呈し、長軸87㎝、短軸77㎝、深さ14㎝を測る。底面は焼けていなかったが、覆土中に多量の焼土が含まれていた。

遺物は、床面中央付近を中心に土器が出土した。床面からやや浮いた状態で出土したものが多い。所属時期は覆土中出土遺物から３ｂ期～３ｃ期であろう。

土器（第21図、図版51・67）

１は太い沈線に挟まれた隆線による口縁部文様帯の上部区画文が､２は沈線による同様の区画文が残る。３の上端には沈線による口縁部文様帯の下部区画文が認められる。３の胴部文様、４～６はいずれも磨消懸垂文で､その幅は広くない。４は底部が完存する。外面は大部分が二次的火熱による荒れが顕著である。いずれも加曽利Ｅ3式中～新段階と思われる。

(6) SI004（第22図、図版５）

遺跡北東部､15Ｑ－01・02・11・12グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、径約4.7m､深さ13㎝を測る。ピットは５か所、円形に配列される。深さは12㎝～42㎝を測り、不統一であるが、主柱穴と捉えておく。炉は南北方向に長い不整な楕円形を呈する。長軸1.15m、短軸65㎝、深さ14㎝を測る。全体によく焼け、底面は硬化していた。

遺物は、北東側を中心に土器・土製品・石器が出土した。８の耳栓は北西側から出土した。所属時期は時期の異なる土器が混在しており、絞り込めない。３期としておく。

土器（第22図、図版67）

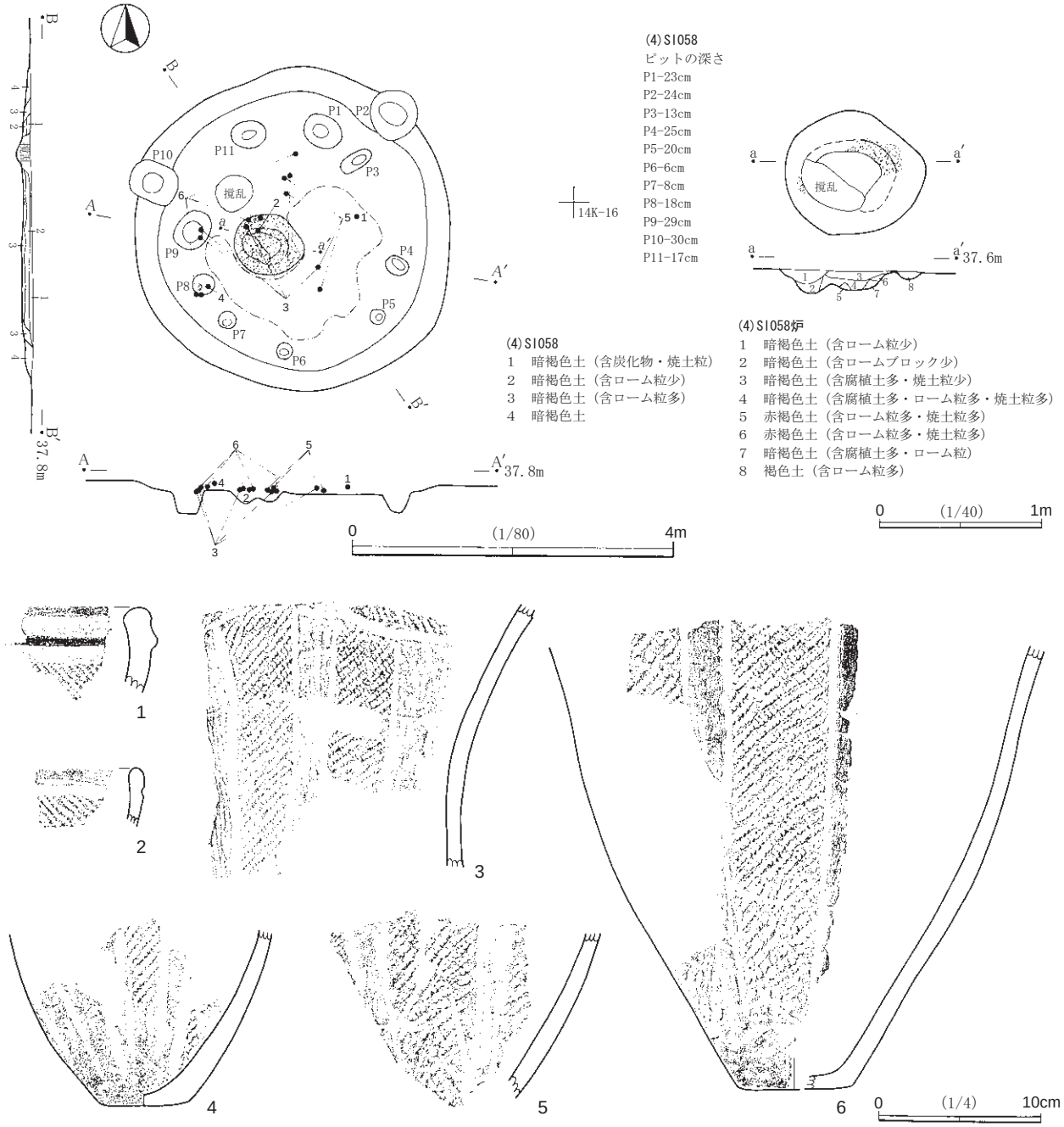
１・２は幅の狭い磨消懸垂文が認められる。３は沈線による口縁部文様帯の楕円形区画文と幅の広い磨消懸垂文を施す。４は３本の平行する波状沈線を施す。連弧文のくずれた文様か。５・６はおそらく同一個体で、断面蒲鉾形の隆線による文様を施す。いわゆる梶山類または胴部隆帯文土器と呼称されるものである。いずれも加曽利Ｅ3式で、１・２は古段階、３・５・６は同新段階であろう。

土製品（第22図、図版112）

８は耳栓である。円形で中央が窪んでいる。胎土は精良で、色調は黒褐色である。表面及び側面は丁寧に調整されて滑沢を帯びるが、裏面の調整は雑である。直径55㎜、厚さ18㎜を測る。

石器

ガラス質黒色安山岩製の石鏃１点・剥片１点、流紋岩製の石鏃未成品１点、チャート製の石鏃未成品１点・剥片３点・砕片３点・石核１点、黒曜石の石核１点・剥片１点、安山岩製の石皿の断片１点・剥片１点、石英斑岩製の敲石１点が出土した。

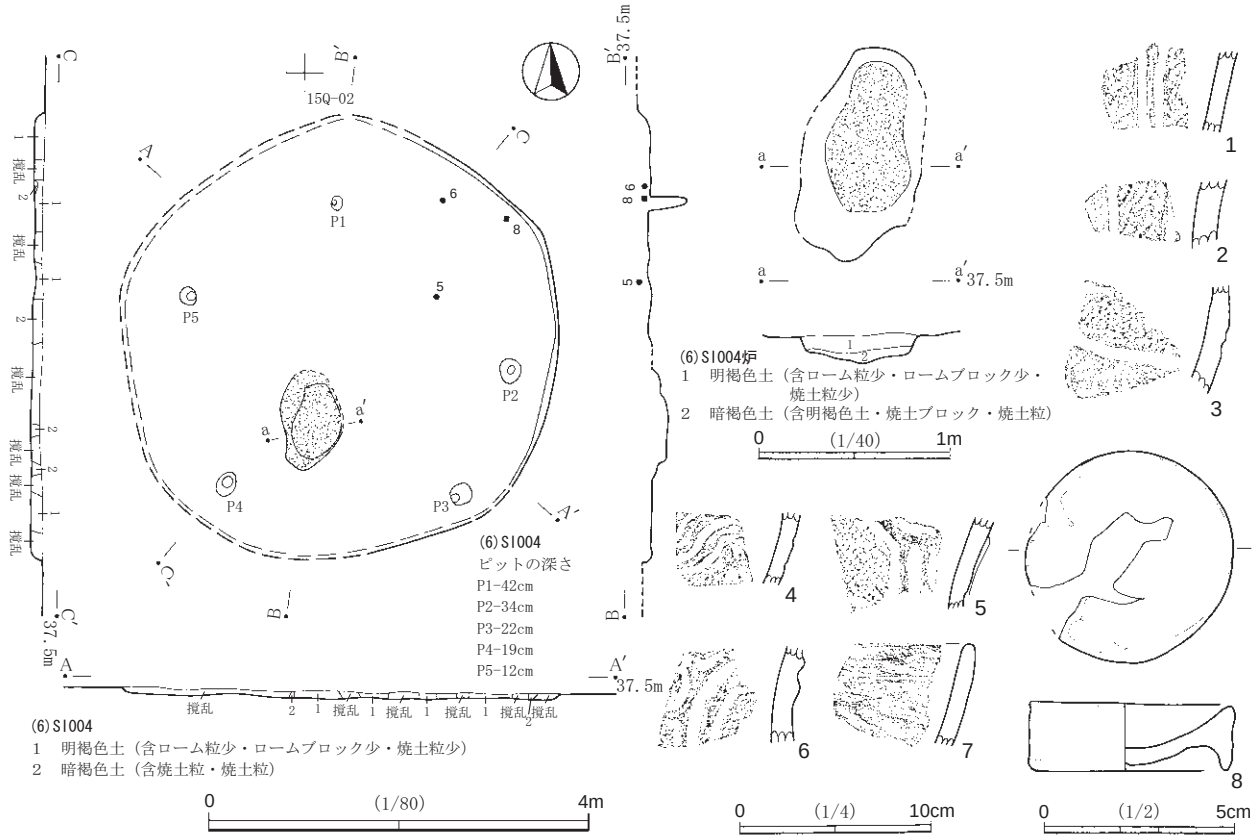


第21図　(4) SI058

(6) SI005（第23図、図版５）

遺跡北東部、14Q－67・68・69・77・78グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、長軸5.40m、短軸5.00m、深さ25cm を測る。ピットは８か所検出された。P1・P2・P6・P8は深さ72cm ～79cm を測る均一なもので、主柱穴と考えられる。近在する P5･P7は主柱穴の可能性がある。炉は南北方向に長い楕円形を呈する。長軸84cm、短軸63cm、深さ９cm を測る。

遺物は、住居西側を中心に土器・石器が出土した。図示した４点の土器は、いずれも床面から浮いた状態で出土した。所属時期は覆土中出土遺物から３期と考えられる。



第22図　(6) SI004

土器（第23図、図版67）

１は両耳壺と思われる器形で、無文の口縁部下に半渦巻文を、その下に無文地に懸垂文を施す。２～４の磨消懸垂文はいずれも幅が狭い。１は加曽利Ｅ3式中段階、２～４は同古～中段階であろう。

石器

黒曜石の砕片が１点出土した。

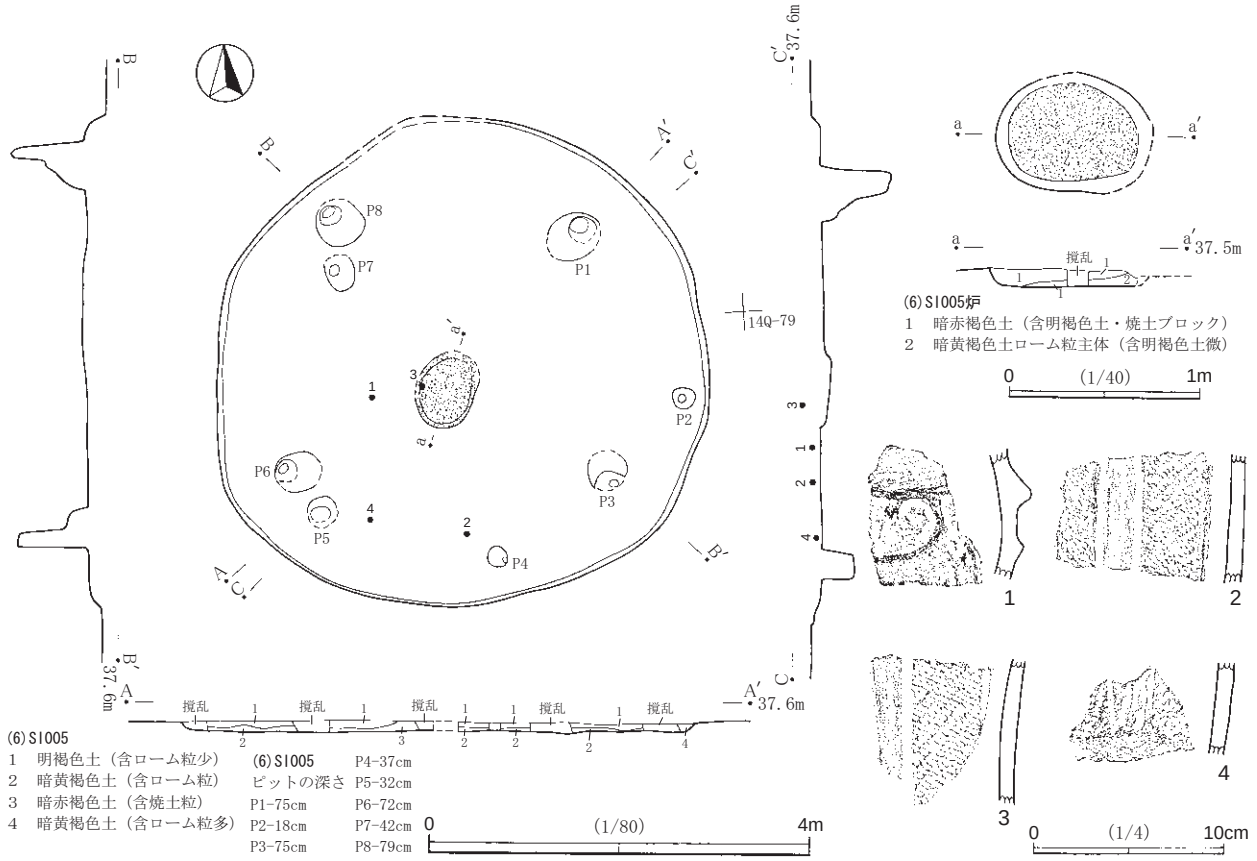
(6) SI007（第24図、図版５）

遺跡北東部、14Ｒ－54・55・64・65グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸4.20m、短軸3.58m、深さ14cm を測る。ピットは３か所検出された。深さ57cm ～67cm を測る。対応する北東側のピットは検出されなかったが、主柱穴と考えられるものである。炉は南北方向に長い楕円形を呈する。長軸76cm、短軸49cm、深さ９cm を測る。

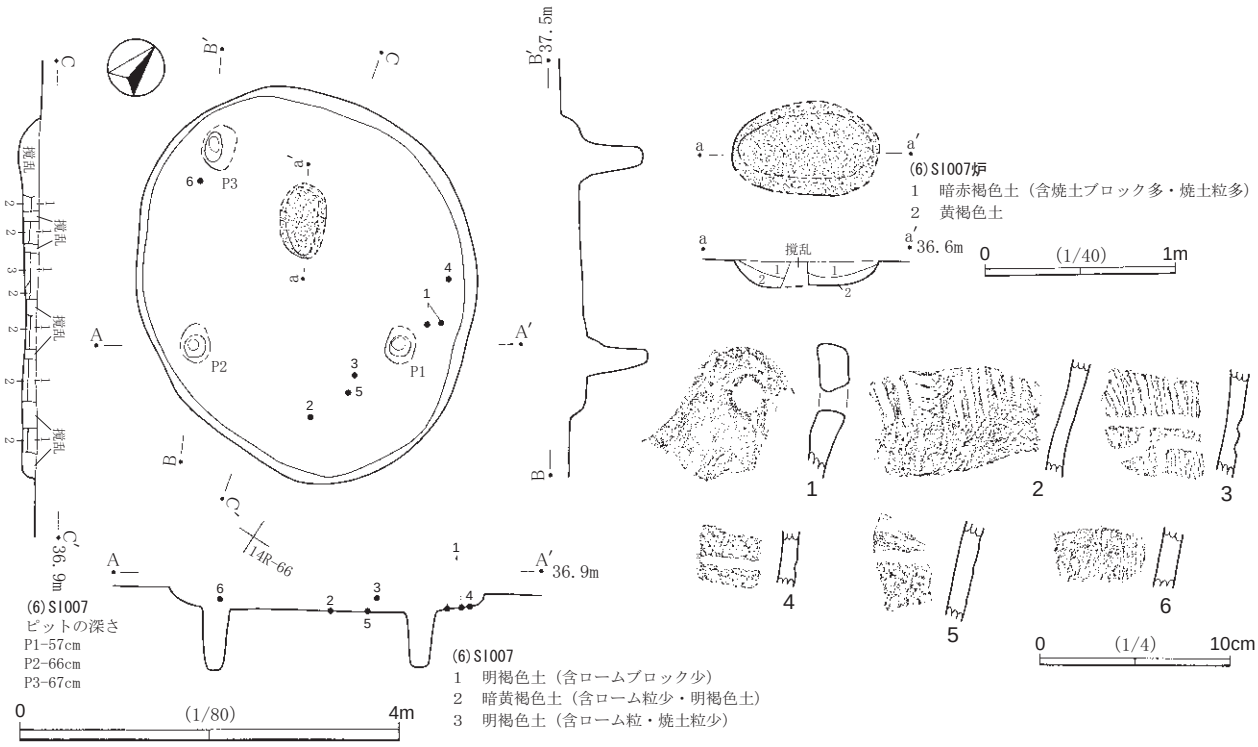
遺物は、南東側及び炉の北側を中心に土器・石器が出土した。所属時期は時期の異なる土器が混在しており、絞り込めない。

土器（第24図、図版67）

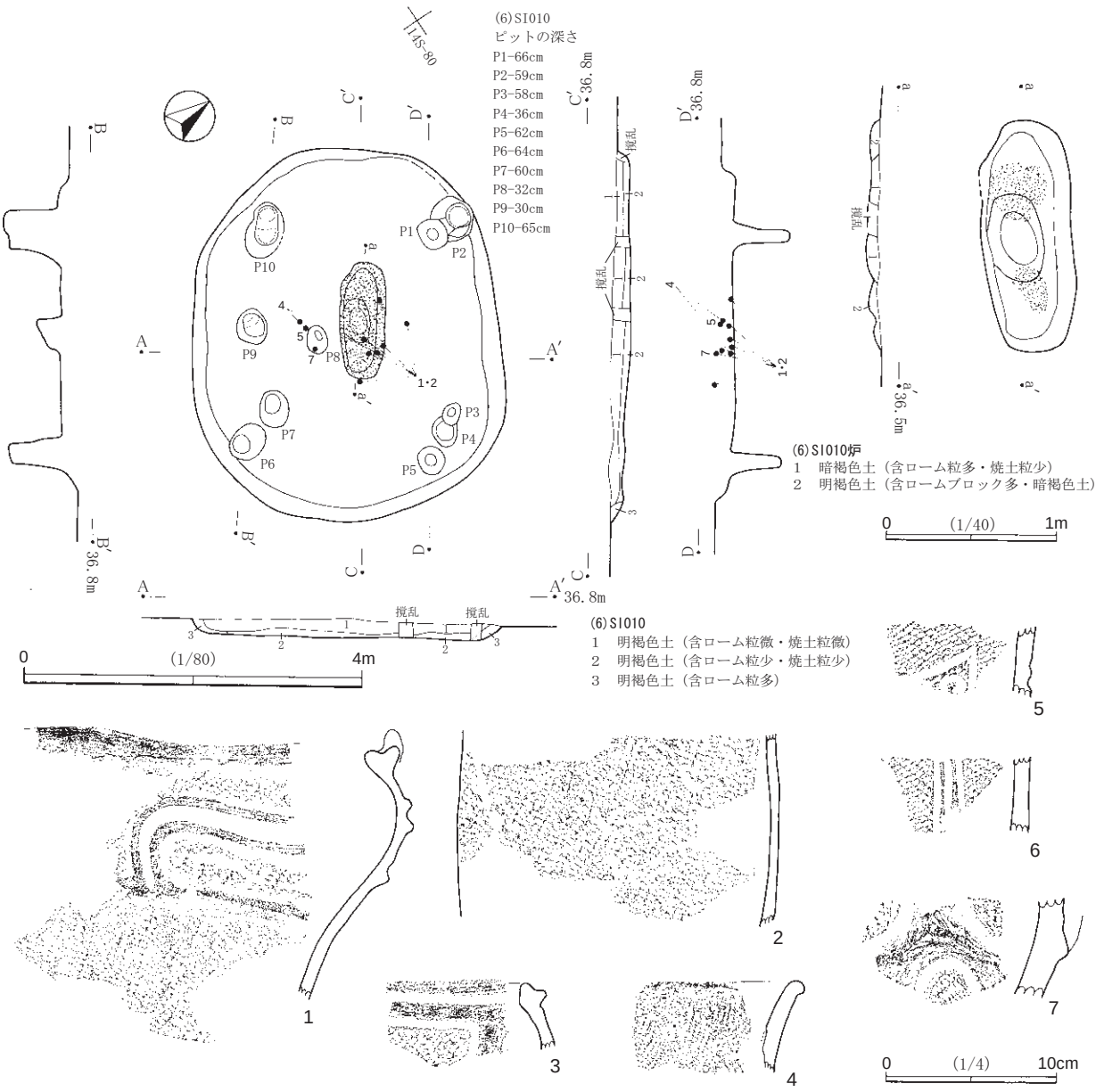
１は中央に貫通孔を持つ山形突起である。突起下には縄文を施す。２は口縁部文様の下端から胴部にかけての破片で、口縁部文様は背割れ隆帯による区画文と沈線による充填文からなる。３は撚糸文を地文にやや太めの沈線による区画文を施す。４・５は縄文地に沈線文様を施し、６は櫛歯状工具による縦位条線と蛇行条線を施す。２は加曽利Ｅ1式、３は同3式か。



第23図 (6) SI005



第24図 (6) SI007



第25図　(6) SI010

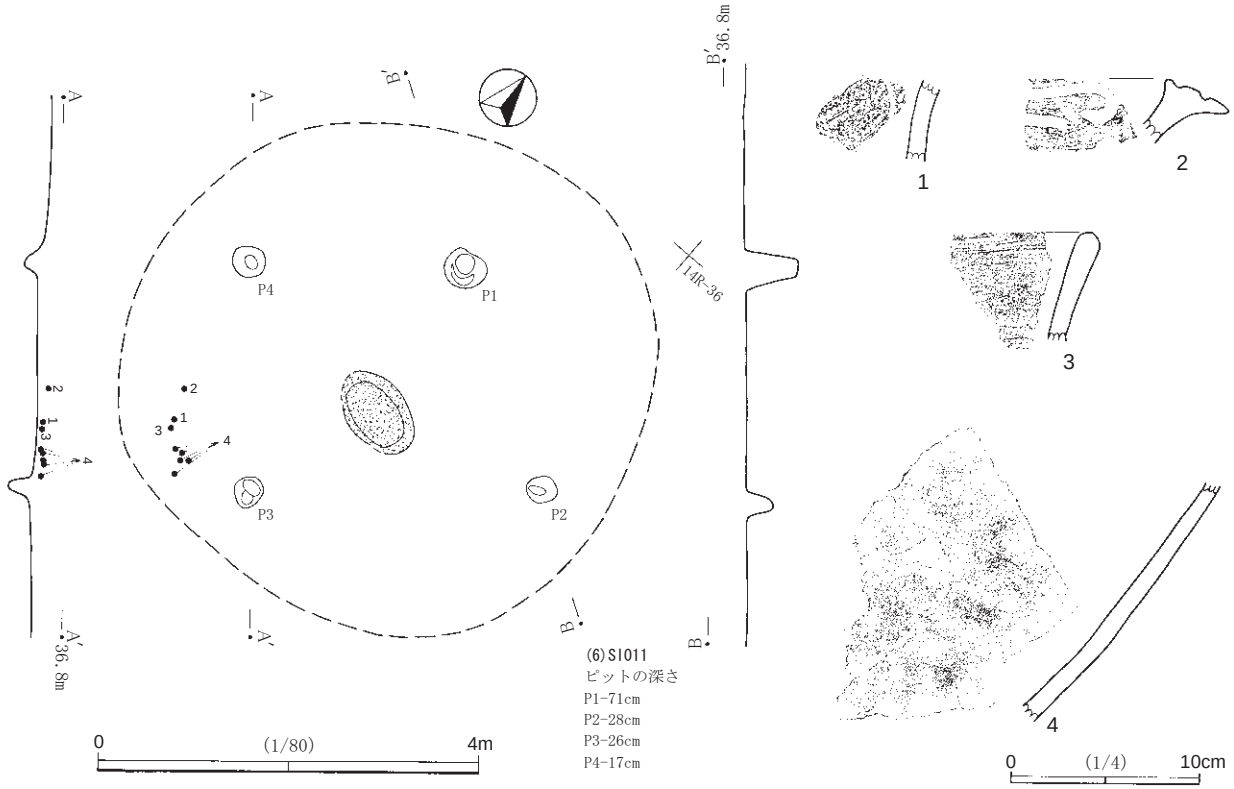
石器

黒曜石の砕片が１点出土した。

(6) SI010（第25図、図版５）

遺跡北東部、14Ｓ－80・81・90・91グリッドに位置する。楕円形を呈し、長軸4.30m、短軸3.70m、深さ20㎝を測る。ピットは10か所検出された。ピットは重複もしくは隣接するものがあり、P1・P2、P3～P5、P6・P7、P10の４か所は主柱穴で、柱の据え替えがなされている。新旧関係は不明だが、住居の拡張に伴うものと考えられる。炉は長楕円形で、長軸1.36m、短軸55㎝、深さ８㎝を測り、硬化面が２か所検出されている。土層断面には北西側が南東側を切っている状況が観察されることから、住居の拡張に伴って炉が作り替えられたと判断される。

遺物は、炉周辺を中心に土器・石器が出土した。所属時期は時期の異なる土器が混在しており絞り込めないが、１・２が大型破片でより下位から出土しており、１ａ期と考えたい。



第26図　(6) SI011

土器（第25図、図版67）

１・２は同一個体である。口縁部文様帯は背割れ隆帯によるクランク文で、胴部は縄文のみ施す。３は口縁部文様帯の隆帯区画に沈線が沿う。５・６も同一個体で、５には沈線による剣先文を、６には３条１単位の沈線による磨り消しのない懸垂文を施す。７は口縁部文様帯の下部区画文と胴部文様帯の磨り消された逆Ｕ字文が認められる。沈線は指頭による幅広の沈線である。１・２は加曽利Ｅ1式古段階、３～５は同2式、７は同3式中段階であろう。

石器

黒曜石の剥片が３点、メノウの剥片が１点出土した。

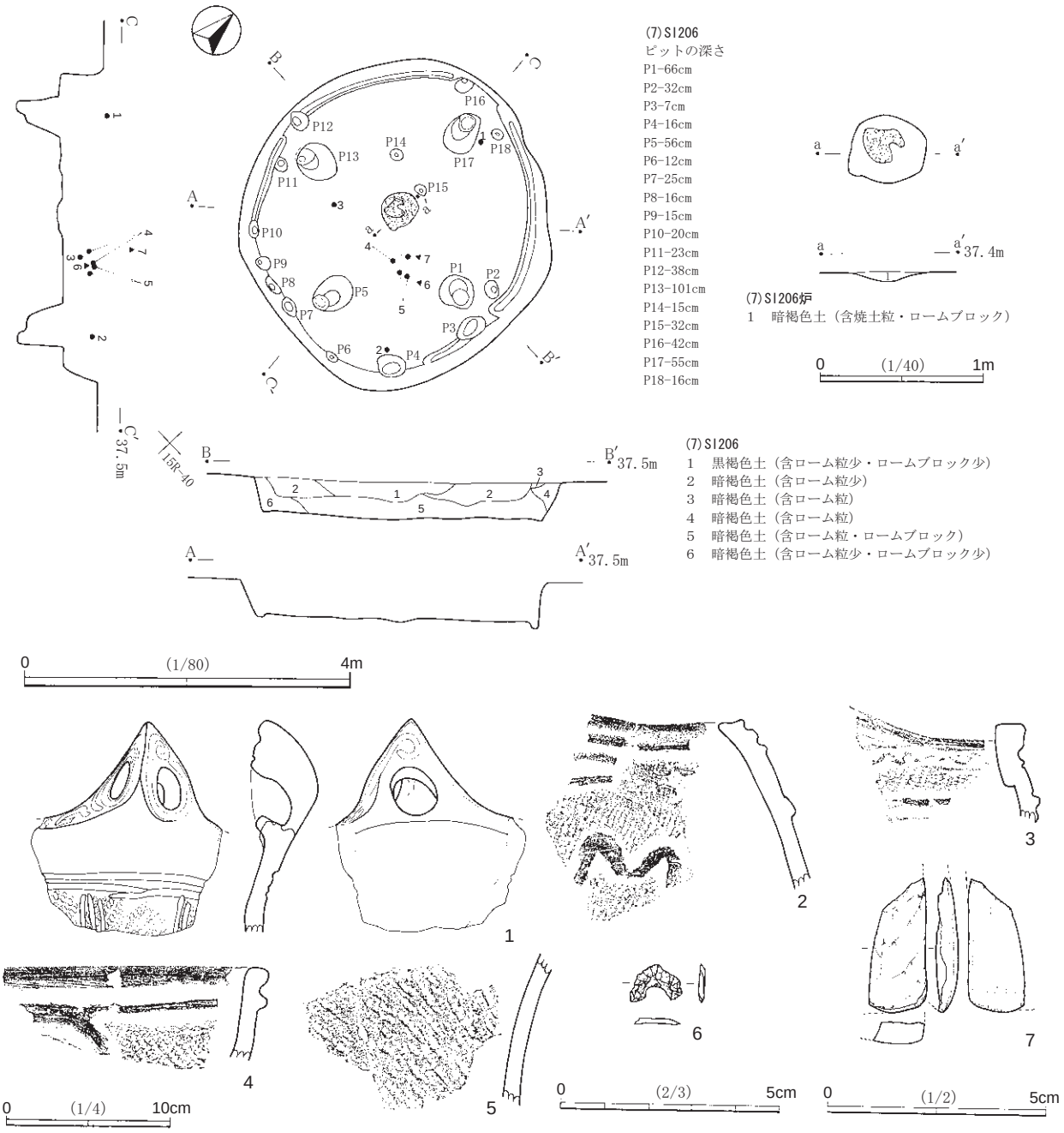
(6) SI011（第26図、図版５）

遺跡北東部、14Ｒ－35・36・45・46グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは４か所検出された。炉を中心とした配置から主柱穴と考えられるが、深さは17㎝～71㎝と不統一である。炉は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸65㎝、深さ12㎝を測る。

遺物は、南西側から床面より浮いた状態で土器が出土した。所属時期は出土土器が貧弱なため絞り込めない。１期～２期としておく。

土器（第26図、図版68）

１は楕円形の区画沈線が認められる。２は浅鉢で、幅広に突出した口縁に半渦巻文を施す。３・４は同一個体の浅鉢で、４には表全面に黒色塗料ないしは油煙が見られる。２は加曽利Ｅ1～2式であろう。



第27図　(7) SI206

(7) SI206（第27図、図版５）

遺跡北東部、15Q－29・39、15R－20・30グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、壁は垂直から斜めに立ち上がるしっかりとしたものである。規模は長軸4.08m、短軸3.80m、深さ46cm を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、自然堆積状を示す。壁下には南西側を除いて深さ５cm ～10cm の浅い周溝が断続的に施されていた。ピットは深さ55cm ～1.01mの主柱穴が４か所と壁下に壁柱穴と思われるものがある。炉は不整楕円形を呈する。長軸54cm、短軸42cm、深さ６cm を測る。

遺物は、覆土上層の１層・２層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は時期の異なる土器が混在しており絞り込めない。１期～２期としておく。

土器（第27図、図版68）

１は山形の眼鏡状突起を持つ口縁部から胴部の破片である。突起は表面に２孔、裏面に１孔を開け、各孔は末端が半渦巻文になる沈線で縁取りされる。口縁部は幅の狭い無文帯で、胴部との境を２条の沈線で画し、以下３条１単位の沈線で懸垂文を施す。２は樽状の器形で、口縁に平行して背割れ隆帯を施し、その下にやや離れて波状に隆線を貼り付けている。３は突起に掛かる口縁部破片で、交互刺突文を口縁下に施す。４は口縁部文様帯の隆線による渦巻文と枠状文の一部が残る。５はきわめて粗い縄文である。１・２は加曽利Ｅ1式、３は同式古段階、４は同2式であろう。

石器（第27図、図版115）

６は黒曜石製の凹基無茎鏃である。全体の形状が寸詰まりで先端部の表裏に新たな部分加工がみられる。この状態は欠損後の再加工を示唆している。７は定角式磨製石斧である。刃部隅を取り込んでおり、使用時により欠損した破片と考えられる。図示した以外では、黒曜石の砕片が２点出土した。

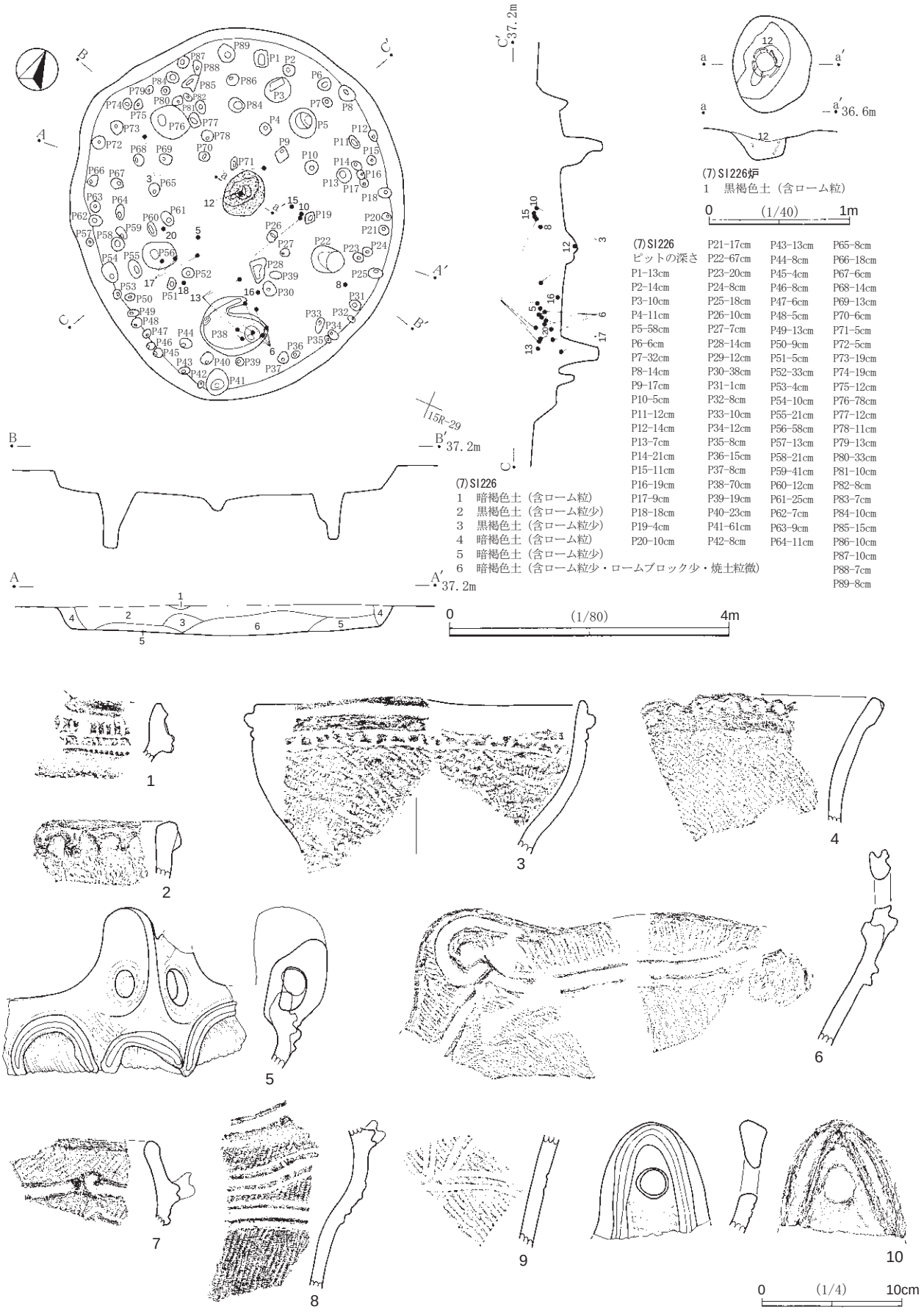
(7) SI226（第28図、図版６）

遺跡北東部、15Ｒ－17・18・27・28グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸5.38m、短軸4.80m、深さ43㎝を測る。覆土は、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土を主とし、自然堆積状を示す。床面には深さ58㎝～78㎝を測る４か所の主柱穴のほか、壁下を中心に89基の小ピットが検出された。深さ10㎝以下のものも多く柱穴とは考えられない。土坑状のP38は深さ約11㎝で内部に深さ70㎝のピットがある。壁際のP41は深さ61㎝を測る。炉は楕円形を呈する土器片囲い炉である。長軸68㎝、短軸57㎝、深さ22㎝を測る。

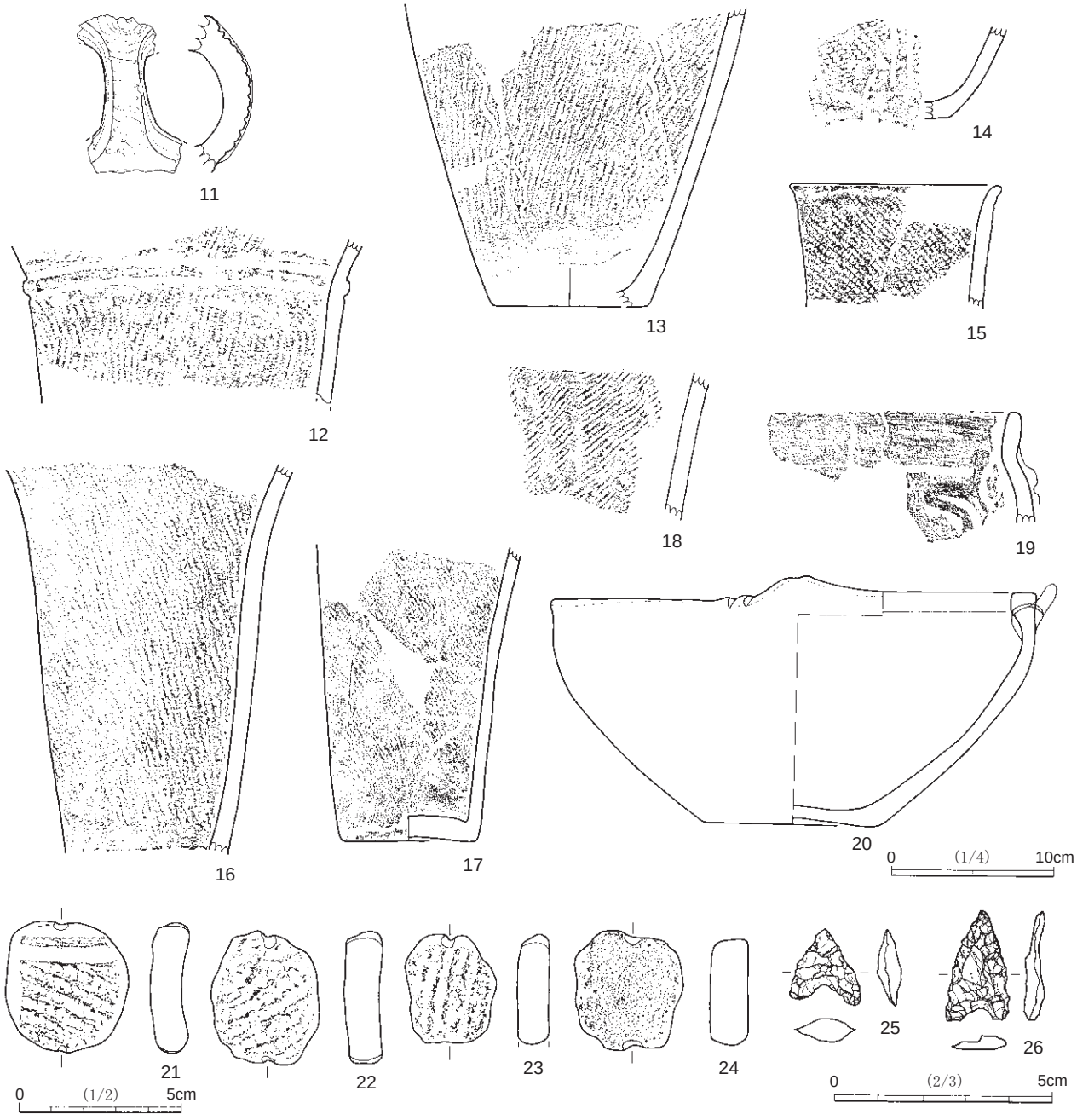
遺物は、炉体土器12のほか覆土上層の２層を中心に土器、土製品、石器が出土した。所属時期は主体となる土器から１ａ期と考えられる。

土器（第28・29図、図版51・68）

１は隆帯状に肥厚した口縁と刻みの付く背割れ隆帯で画された狭い口縁部文様帯の中を、ペン先状工具によって下から上へ押引文を施す。２は肥厚した口縁下端に指頭圧痕を施す。その下は櫛歯条線文である。３は口縁下に雑な交互刺突文が巡るが、一部は縦の刺突文に省略されている。４は肥厚した口縁上端に軽く指頭圧痕を施す。５は眼鏡状突起を持つ口縁部破片で、口縁部には背割れ隆帯による連続弧線文と集合沈線文を施す。６は中央に貫通孔を配した山形突起を持つ口縁部破片で、山形突起には貫通孔を取り巻く背割れ隆帯の半渦巻文を施し、口縁部文様帯の下部を画する背割れ隆帯による弧状文と連結させている。口縁部文様帯内は集合沈線文、胴部は櫛歯条線文である。７は口縁部文様帯の下部区画帯が高く膨隆した背割れ隆帯となり、その末端は半渦巻文となっている。８は口縁部文様帯の上下区画文及びその中の波状文様がともに背割れ隆帯となる。９は多方向に沈線文様が認められる。10は舌状の突起部破片で、表裏とも隆線で縁取りされ、中央には貫通孔を配し、その下に横位の沈線を施す。11は大型の橋状突起で、突起の上端には小型の渦巻文が認められる。12は炉体土器である。胴部の約3/4が遺存する。横位の隆帯の上下に沈線が沿う。内面は二次的火熱による荒れが著しい。13は２条１単位の蛇行沈線を施す。14は磨り消しのない懸垂文が認められる。15～18は縄文のみを施したもので、16は胴部が完存するが、底部は輪積み部分で剥落する。胴下部内面に炭化物が付着する。17は内外面ともほぼ全体に二次的火熱による荒れが顕著である。18の縄文原体はＲＬの０段４条である。19・20は浅鉢である。19には胴上部に背割れ隆帯による半渦巻文の一部が認められる。20は推定口径30㎝、器高15.3㎝を測る。口縁部の1/2と胴部の一部を欠く。



第28図　(7) SI226 (1)



第29図　(7) SI226 (2)

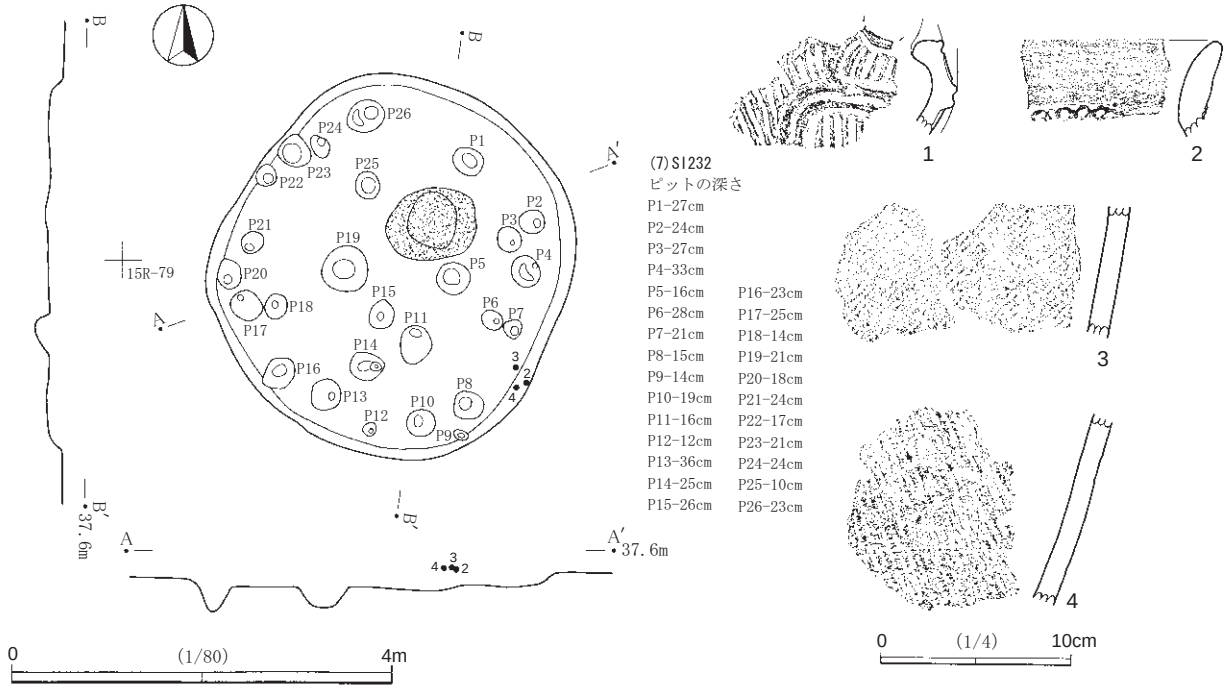
低い山形の突起脇に２条の沈線が認められるが、その他は欠損のため不明である。１・３はいわゆる中峠式、５・６・８は加曽利Ｅ1式古段階、７は同式新段階と思われる。

土製品（第29図、図版112）

土器片錘が４点出土した。いずれも小型である。21～23の糸掛けは細く、24は太い。

石器（第29図、図版115）

図示した２点は凹基無茎鏃で、いずれも完形品で黒曜石製である。25は両面加工、26は半両面加工となっている。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品１点・剥片４点、・砕片２点・石核２点、磨石類２点、石皿１点、チャートの原石１点が出土した。



第30図　(7) SI232

(7) SI232（第30図、図版６）

遺跡北東部、15Ｒ－69・79、15Ｓ－60・70グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸3.90m、短軸3.67m、深さ17cm を測る。ピットは不規則に配列される。深さは10cm ～20cm 台のものが多く、壁に近いものは壁柱穴の可能性がある。炉は楕円形を呈し、長軸97cm、短軸76cm、深さ５cm を測る。覆土上層中に焼土が多く含まれていた。

遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第31図、図版68）

１は口縁突起を欠く口縁部破片で、背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線文が認められる。２はくびれた頸部にくずれた交互刺突文を施す。ともに加曽利Ｅ1式古段階と思われる。

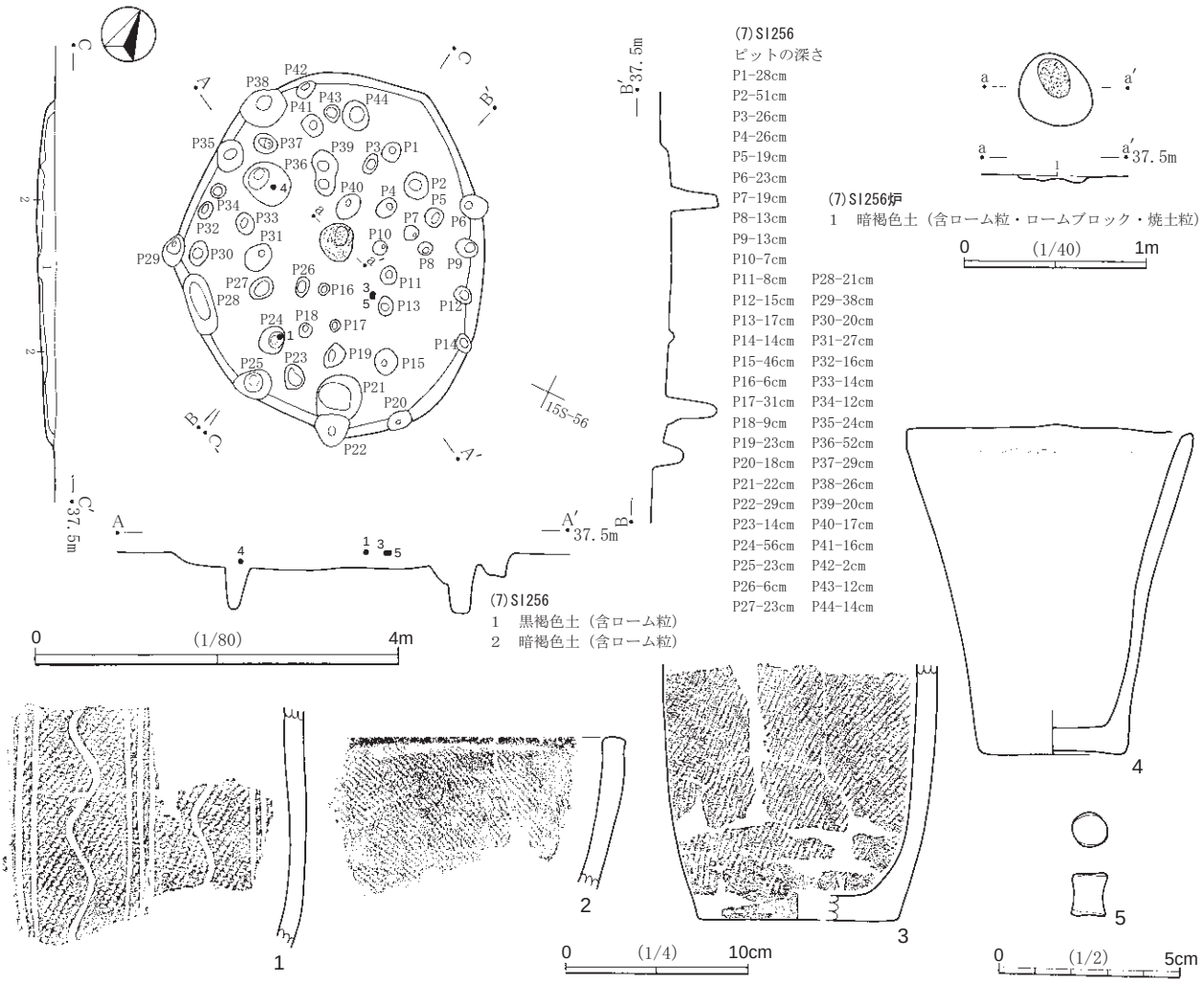
(7) SI256（第31図、図版６）

遺跡北東部、15Ｓ－44・45・54・55グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸4.12m、短軸3.55m、深さ18cm を測る。ピットは床面及び壁面に多数検出された。P2・P15・P24・P36は主柱穴である。深さ46cm ～56cm を測り、ややばらつきがある。炉は不整円形を呈し、長軸43cm、短軸37cm、深さ４cm を測る。

遺物は、覆土上層を中心に土器・土製品が出土した。所属時期は出土土器の特徴が少ないため絞り込めない。１期～２期としておく。

土器（第31図、図版51・68）

１は３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を繰り返し施す。２・３は縄文のみ、４は無文である。４は口径16cm、器高18cm、底径8cm を測る小型土器で、口縁部の1/3を欠くほかは完形である。１は加曽利Ｅ1～2式であろう。



第31図　(7) SI256

土製品（第31図、図版112）

５は耳栓である。最大径10㎜、厚さ11㎜ときわめて小さい。片側の側縁の一部が欠損している。二次的火熱を受けているようで、赤褐色でやや脆い。

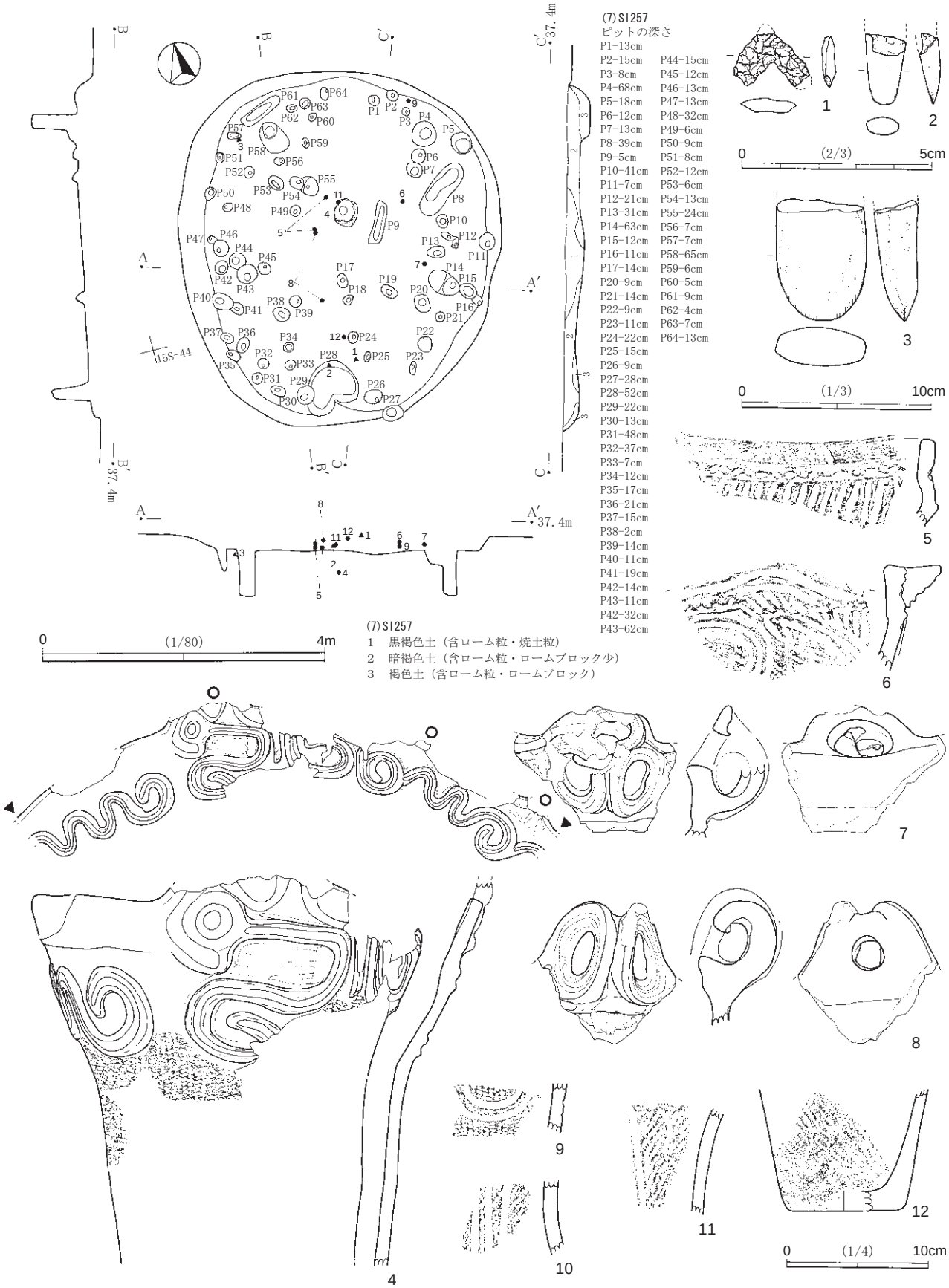
(7) SI257（第32図、図版６）

遺跡北東部、15Ｓ－34・35・44・45グリッドに位置する。平面形はほぼ卵形を呈する。規模は長軸5.05m、短軸4.60m、深さ27㎝を測る。ピットは64か所検出された。P4・P15・P44・P59は主柱穴で、深さ62㎝～68㎝を測る。その他のピットは深さ10㎝台から20㎝台のものが多く、壁際に配列されているものは壁柱穴の可能性がある。炉は埋甕炉で、主柱穴の対角線の交差する付近に検出された。胴部下半を欠いた４の深鉢が正位の状態で埋設されていた。掘り方の状況は記録を欠くが、床面から深さ25㎝ほど埋められ、上部は口縁部から頸部が６㎝ほど炉の底面から露出していた。

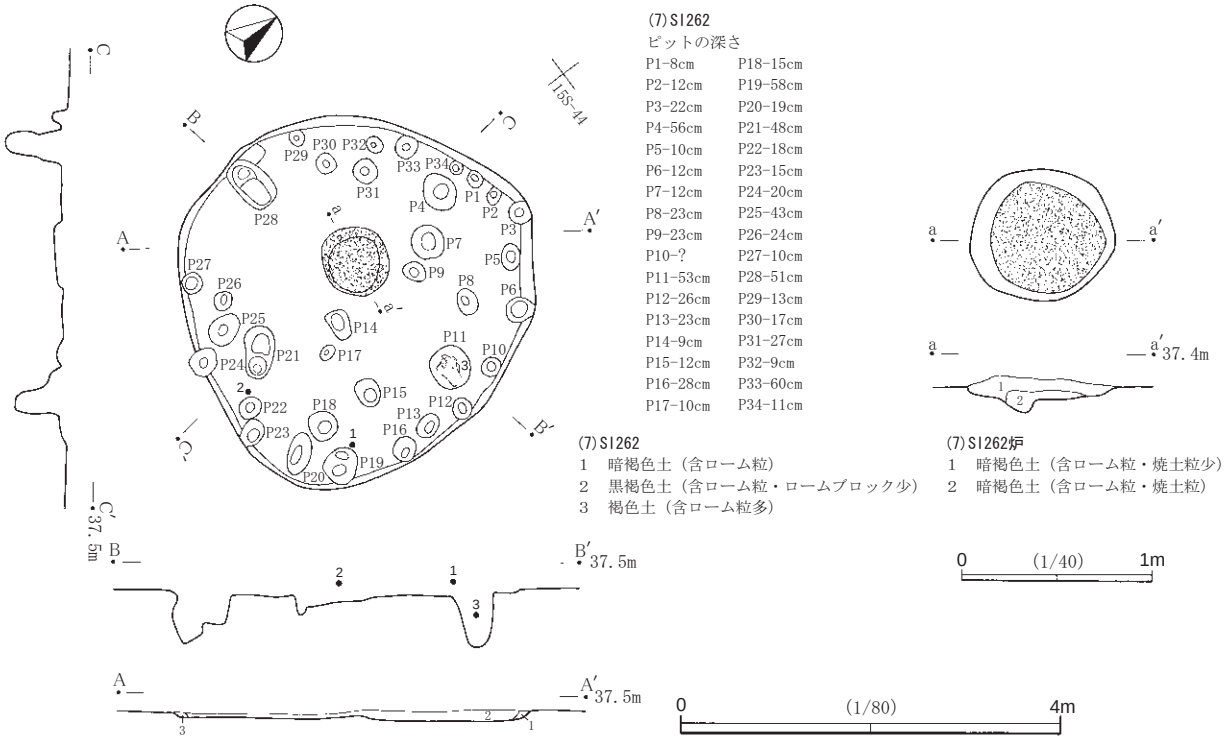
遺物は、炉以外では覆土中層から下層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は炉体土器などから１ａ期と考えられる。

石器（第32図、図版115）

１は石鏃である。凹基無茎鏃で黒曜石製である。先端部と両脚が欠損している。黒曜石は信州系と推定


(7)SI257
ピットの深さ
P1-13cm
P2-15cm P44-15cm
P3-8cm P45-12cm
P4-68cm P46-13cm
P5-18cm P47-13cm
P6-12cm P48-32cm
P7-13cm P49-6cm
P8-39cm P50-9cm
P9-5cm P51-8cm
P10-41cm P52-12cm
P11-7cm P53-6cm
P12-21cm P54-13cm
P13-31cm P55-24cm
P14-63cm P56-7cm
P15-12cm P57-7cm
P16-11cm P58-65cm
P17-14cm P59-6cm
P20-9cm P60-5cm
P21-14cm P61-9cm
P22-9cm P62-4cm
P23-11cm P63-7cm
P24-22cm P64-13cm
P25-15cm
P26-9cm
P27-28cm
P28-52cm
P29-22cm
P30-13cm
P31-48cm
P32-37cm
P33-7cm
P34-12cm
P35-17cm
P36-21cm
P37-15cm
P38-2cm
P39-14cm
P40-11cm
P41-19cm
P42-14cm
P43-11cm
P42-32cm
P43-62cm
37.4m
15S-44
0 (1/80) 4m
(7)SI257
1 黒褐色土（含ローム粒・焼土粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
0 (2/3) 5cm
0 (1/3) 10cm
0 (1/4) 10cm

第32図 (7) SI257



第33図　(7) SI262 (1)

される。２・３は定角式磨製石斧である。いずれも基部が欠損している。石材は２が斑糲岩（はんれいがん）、３が粗粒玄武岩である。３の刃部には若干損傷がみられる。図示した以外では、安山岩製の磨石類３点、石鏃製作に伴う黒曜石の剥片16点・砕片75点が出土した。

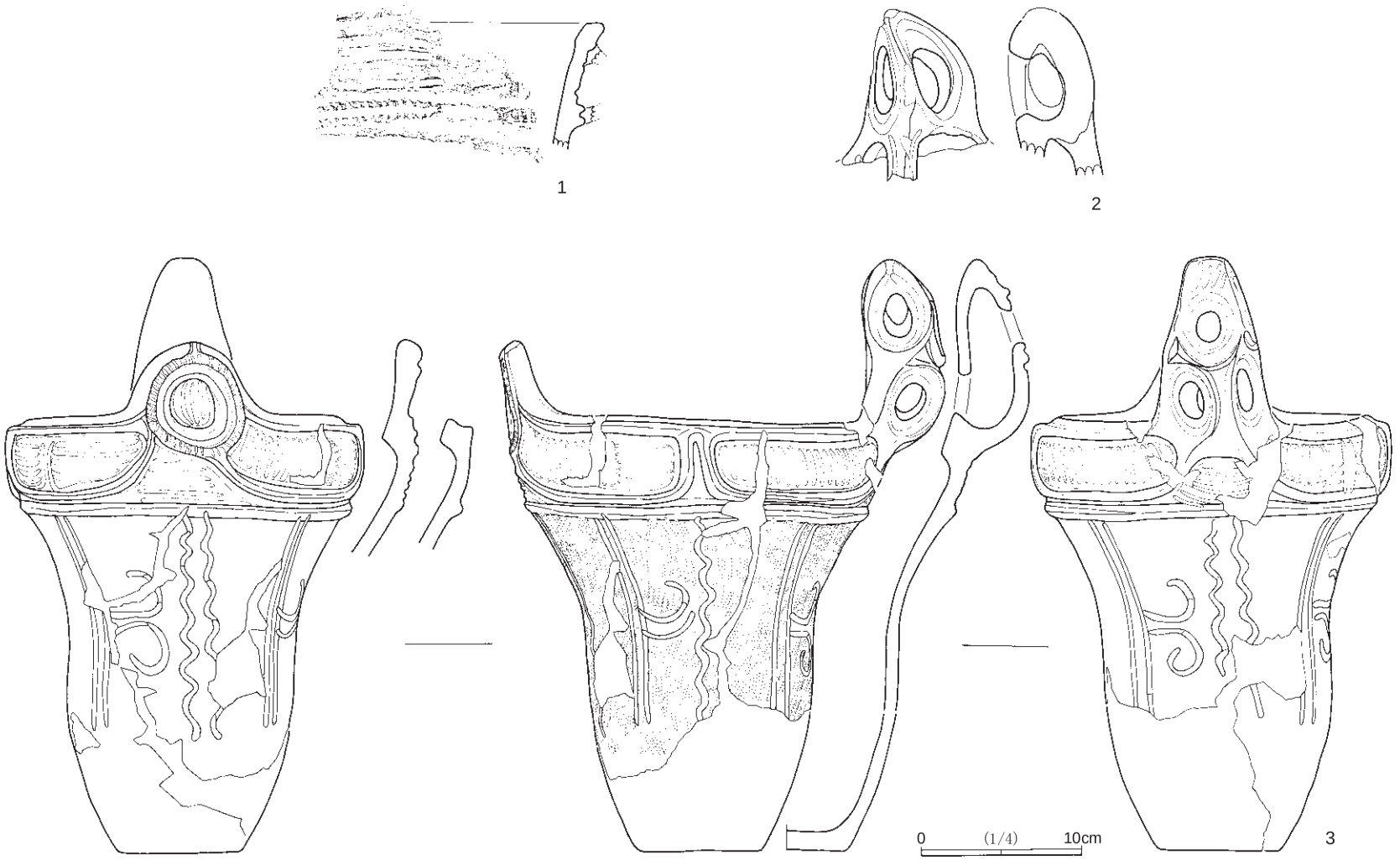
土器（第32図、図版51・68）

４は炉体土器である。口縁の2/3及び口縁突起､胴下部以下を欠く。口縁突起は炉体土器に使用するため、意図的に打ち欠いているようである。口径28㎝、現存高28㎝を測る。口縁の欠損部に軽い二次的火熱を受けている。口縁突起は図の○印の位置にあったと考えられ、貫通孔が部分的に残る。口縁部文様は背割れ隆帯による半渦巻文と蛇行文であるが単位ごとに文様が異なり、突起下には隆帯による円文や沈線文様が加飾されている。５・６は口縁下に交互刺突文を配し、その下に集合沈線文を施す。６には背割れ隆帯による区画文も認められる。７・８は口縁突起である。ともに眼鏡状突起で、７には突起の上部と内面にも孔が開き、８には内面にも孔が開く。９～11は磨り消されない懸垂文や蛇行沈線文を施す。４は勝坂式末期、５～８は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(7) SI262（第33図、図版６）

遺跡北東部、15Ｓ－43・44・53・54グリッドに位置する。平面形は南側がやや張り出す不整円形を呈する。規模は長軸4.00m、短軸3.83m、深さ10㎝を測る。ピットは34か所検出された。P4・P11・P21・P28は主柱穴で、深さ53㎝～60㎝を測る。P21・P28は底面に段を有し、側面がオーバーハングしていることから、柱の抜き取りがなされたものと考えられる。壁際のものは壁柱穴と考えられる。炉は不整円形を呈し、長軸76㎝、短軸70㎝、深さ15㎝を測る。

遺物は、土器・石器が出土した。P11からはほぼ完形の深鉢３が倒れた状態で出土した。その他の土器は床面から20㎝ほど浮いた状態で出土した。所属時期はピット出土の３から１ａ期と考えられる。



第34図　(7) SI262 (2)

土器（第34図、図版51・68）

１は橋状突起を欠く口縁部破片で、口縁部文様帯の下部区画隆帯は刻みが付くが、片側の隆帯は背割れである。２は上下２段の眼鏡状突起である。３は胴下部の1/3ほかを欠くが、ほぼ完形である。口径28㎝、器高38㎝、底径８㎝を測る。胴下部外面に二次的火熱によるあばた状の荒れが認められる。口縁突起は２単位で、大型の主突起の対面に舌状の従突起を配する。主突起は眼鏡状突起の上に正面と左右に孔が開く突起を重ね､従突起には刻みの付いた隆帯による円文を施す｡口縁部文様帯は隆帯による枠状区画によって４単位に分割され、区画内には単位ごとに異なる集合沈線文を充填する。胴部文様帯は２本１単位の懸垂文によって等間隔に４分割され、その中に蛇行沈線と懸垂文から派生した蕨手状文を施す。加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器

砂岩製の砥石１点、黒曜石の砕片４点、石英の剥片２点が出土した。

(7) SI273（第35図、図版７）

遺跡北東部、15Ｓ－02・03・12・13グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、長軸4.76m、短軸4.51m、深さ27㎝を測る。覆土は黒褐色土が主体で、自然堆積状を示す。ピットのうちP4・P29・P44・P55は主柱穴で、深さ67㎝～83㎝を測る。壁際のピットは壁柱穴とみられる。炉は円形基調で、北側に張り出しと火床面を有する。長軸96㎝、短軸91㎝、深さ７㎝を測る。

遺物は、覆土中層の２層中から土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土製品（第35図、図版112）

１・２は土器片錘である。いずれも小型で、１は櫛歯条線文、２は縄文のみである。

土器（第35図、図版51・52・68）

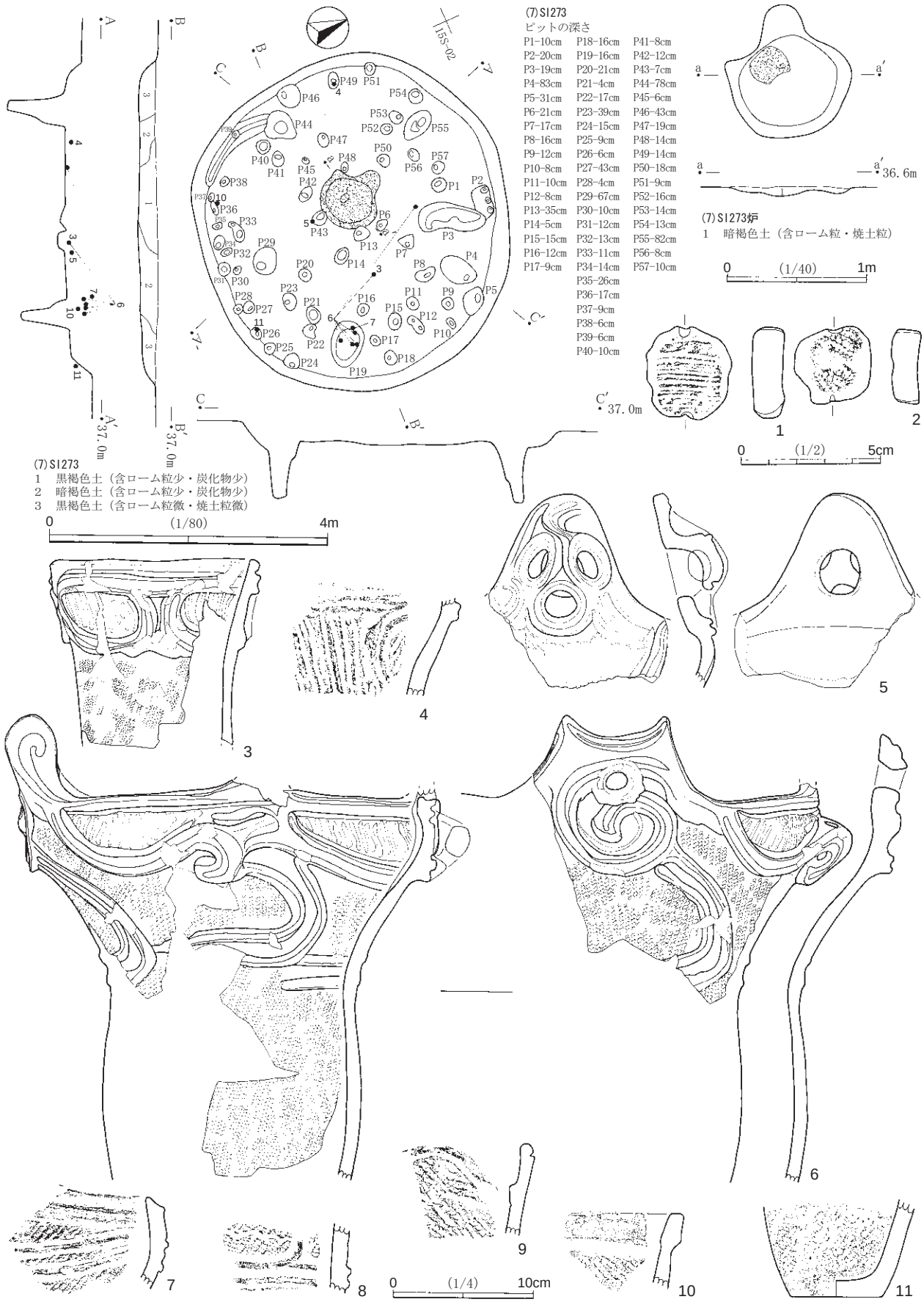
３は口径14㎝の小型土器で、口縁部や胴部の一部を欠くが、胴下半を除き全周する。口縁部文様帯は背割れ隆帯による楕円区画文を４単位配し、その中に集合沈線文を充填する。楕円区画文同士は隆帯で連結する個所と連結しない個所がある。４は背割れ隆帯と集合沈線文が認められる。５は大型の立体突起が付く口縁部破片で、突起には正面に３孔、内面に１孔が開く。口縁部文様は４と同種である。６は胴上部から口縁にかけて約1/2が遺存する。推定口径23㎝、現存高34㎝を測る。対向する口縁主突起のうち１個が残り、主突起間には小型の波状突起を配する。主突起は２尖の板状で、正面中央に孔が開き、両側面には沈線による小型の渦巻文が付く。口縁部文様帯は上下２段に分けられる。上段は主突起下に背割れ隆帯による渦巻文を配し、口縁下に背割れ隆帯により弧状に垂れ下がる区画文を配する。弧状の区画文は小型の波状突起下で半渦巻文となり、隣から延びる同様の弧状区画文と連結し、連結個所は上部と左右に孔が開く、橋状突起となる。下段は幅広の背割れ隆帯が各突起下の上段文様から垂れ下がり、横Ｕ字状に頸部へと延びている。７は口縁部文様に細めの隆線が２条認められる。８は枠状の区画隆線内に波状沈線が見える。９は舌状の口縁突起の破片で、突起に沿って沈線を施す。11は完存する底部である。外面全体に二次的火熱による荒れが著しい。３～６はいずれも加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器

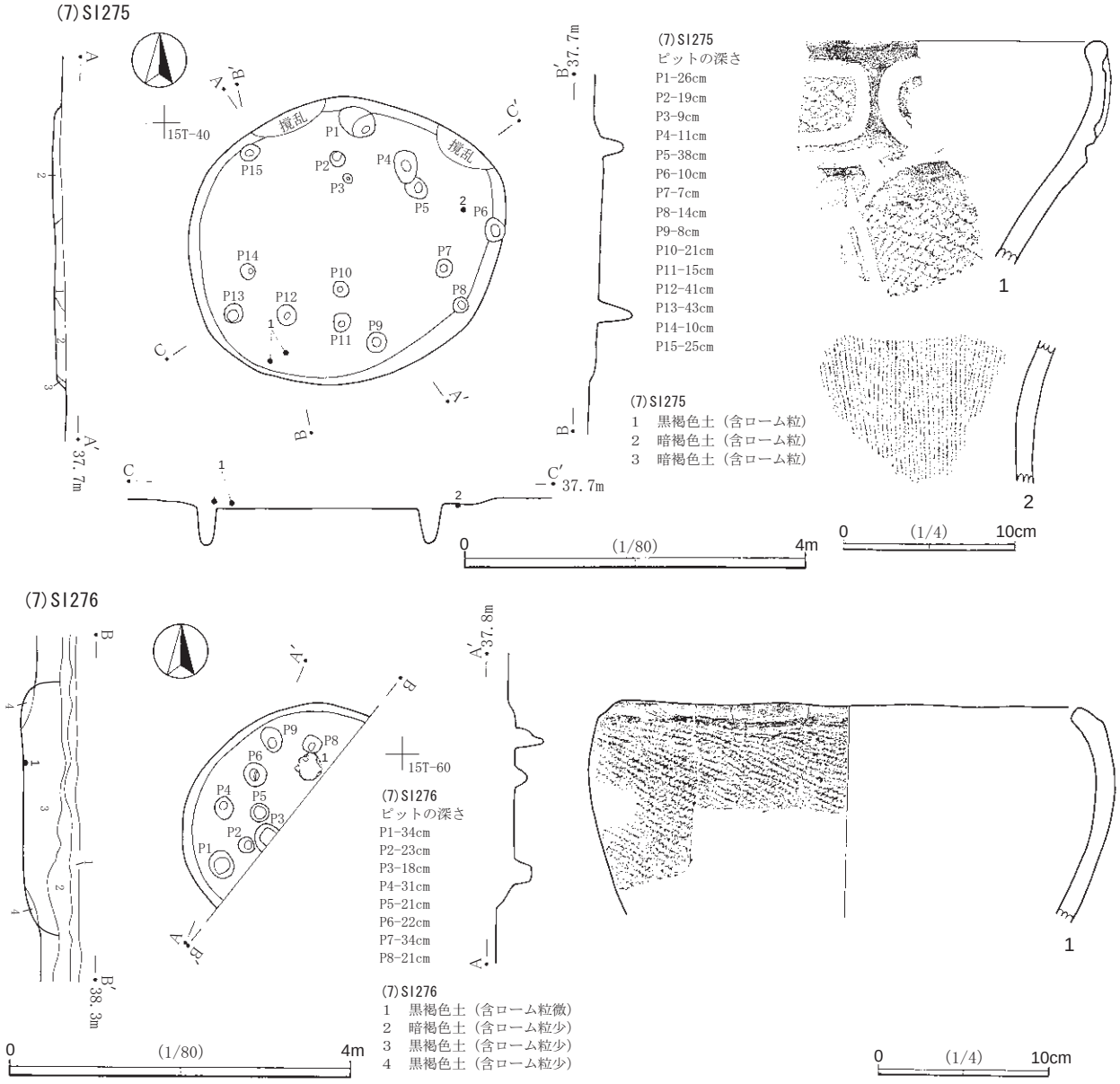
黒曜石の剥片２点・砕片４点が出土した。

(7) SI275（第36図、図版７）

遺跡北東部、15Ｔ－30・40グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸3.86m、短軸3.30m、深さ11


(7)SI273
ピットの深さ
P1-10cm P18-16cm P41-8cm
P2-20cm P19-16cm P42-12cm
P3-19cm P20-21cm P43-7cm
P4-83cm P21-4cm P44-78cm
P5-31cm P22-17cm P45-6cm
P6-21cm P23-39cm P46-43cm
P7-17cm P24-15cm P47-19cm
P8-16cm P25-9cm P48-14cm
P9-12cm P26-6cm P49-14cm
P10-8cm P27-43cm P50-18cm
P11-10cm P28-4cm P51-9cm
P12-8cm P29-67cm P52-16cm
P13-35cm P30-10cm P53-14cm
P14-5cm P31-12cm P54-13cm
P15-15cm P32-13cm P55-82cm
P16-12cm P33-11cm P56-8cm
P17-9cm P34-14cm P57-10cm
P35-26cm
P36-17cm
P37-9cm
P38-6cm
P39-6cm
P40-10cm
(7)SI273
1 黒褐色土（含ローム粒少・炭化物少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物少）
3 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
0 (1/80) 4m
(7)SI273炉
1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒）
0 (1/40) 1m
0 (1/2) 5cm
0 (1/4) 10cm
A 37.0m
B 37.0m
C 37.0m

第35図 (7) SI273



第36図　(7) SI275・(7) SI276

cm を測る。北東側には焼土、南側からは粘土の堆積がみられた。ピットは不規則な配列で、長軸線上付近に位置する P5・P12・P13が比較的深い。炉は検出されなかった。

遺物は、土器・石器が出土した。図示した土器は床面近くから出土した。所属時期は３ａ期と考えられる。

土器（第36図、図版69）

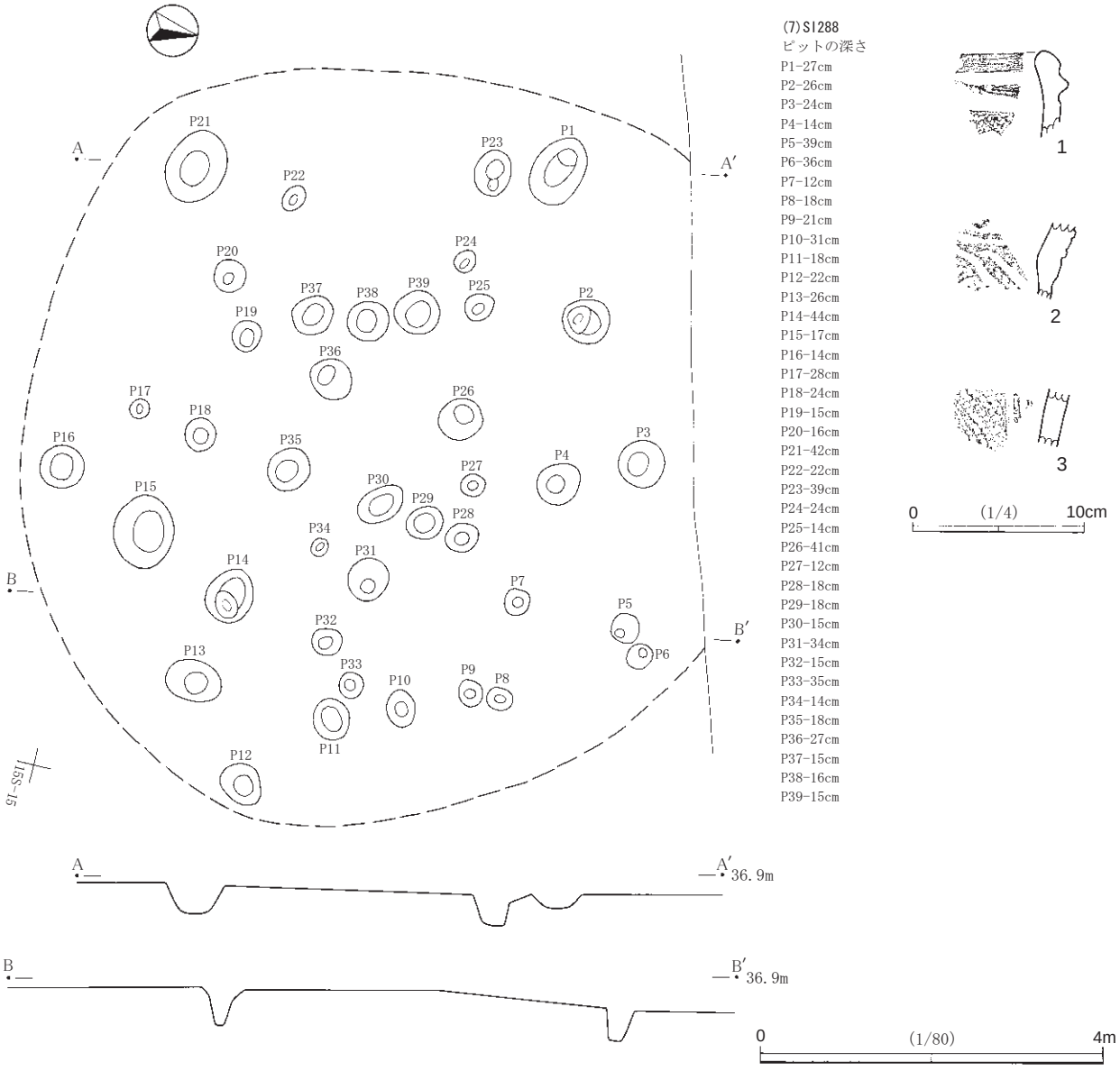
１は口縁部に低い隆線による渦巻文の一部が見える。胴部は幅の狭い磨消懸垂文である。２は全面に撚糸文が付く。１は加曽利Ｅ3式古段階であろう。

石器

安山岩製の石皿片が１点出土した。

(7) SI276（第36図、図版７）

遺跡北東部、15Ｓ－59・69グリッドに位置する。南東側は調査区外に及んでおり、北西側壁付近の一部



第37図　(7) SI288

が検出された。深さ66cm を測る。ピットは８か所検出された。ほとんどが深さ20cm 以上を測るしっかりとしたものである。

遺物は、１の深鉢がやや北側の床面上から正位の状態で出土した。その他の遺物の出土状況は不明である。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第36図、図版52）

１は口径27cm を測る。口縁部の一部を欠く。口縁直下の狭い無文帯を不明瞭な微隆起線で画する。口縁部の縄文は横走し、以下は右傾する。加曽利Ｅ3-4式と思われる。

(7) SI288（第37図、図版７）

遺跡北東部、14Ｓ－93・94、15Ｓ－03・04・13・14に位置する。西側に (7) SI273が位置する。壁の掘り込みは検出されなかった。ピットは39か所検出された。比較的径が大きく外側に位置する P1・P2・P3・

P12・P13・P15・P21・P23は深さ20㎝以上を測る深いものが多い。炉は検出されなかった。

遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は２期であろう。

土器（第37図、図版69）

１は隆線が断面蒲鉾状でしっかりしている。３は磨り消されない懸垂文を施す。小片のため明言できないが、１・３とも加曽利Ｅ2式頃であろう。

(7) SI289（第38図、図版７）

遺跡北東部、15Ｓ－48・49・58・59・15Ｔ－08・09グリッドに位置する。南側の壁面は遺存状態が悪く検出できなかった。平面形は東側が張り出すほぼ卵円形で、長軸6.18m、短軸5.60m、深さ10㎝を測る。ピットは不規則な配列で、深さも統一性がない。炉は楕円形で、長軸1.08m、短軸83㎝、中央部の深さ約５㎝を測り、底面の東側は17㎝、西側は15㎝深く掘り込まれ、西側からは14の土器が正位で出土した。

遺物は、上記の14の他、炉周辺を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は４を混在としても時期の絞り込みは難しく、１期～２期としておく。

土製品（第38図、図版112）

１・２は土器片錘である。いずれも小型で、１は波状沈線、２は磨り消されない懸垂文が残る。

石器（第38図、図版115）

３は黒曜石製の凹基無茎鏃である。ほぼ完形品である。図示した以外では、チャートの二次加工のある剥片１点・砕片２点、黒曜石の砕片２点が出土した。

土器（第38図、図版52・69）

４は扇状突起で、中央の円孔を中心として隆帯による半渦巻文を施す。また、隆帯に沿ってペン先状工具による押引文が見られる。突起下には細かな縄文を施す。６は口縁部文様帯の部分破片で、背割れ隆帯による渦巻文と枠状区画内の集合沈線文が残る。８～11は頸部から底部付近までの破片で、磨消されない懸垂文や蛇行沈線を施す。12は14とともに出土した破片で、割れ口が二次的火熱を受ける。全面に撚糸文を施す。13は無文の浅鉢である。14は炉体土器である。口径約18㎝の比較的小型の土器で、口縁部の約1/3と胴下部が欠失する。口縁部は二次的火熱を強く受け、淡褐色に変色し、脆くなっている。４は阿玉台３式、６は加曽利Ｅ1～2式、７～11も加曽利Ｅ式前半のものであろう。

(7) SI296（第39図、図版７）

遺跡北東部、15Ｔ－11・12・21・22・23グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは19か所検出された。P1・P13は断面形が擂鉢状で、径１m以上を測る。P1・P3・P10・P15の４か所は主柱穴の可能性がある。南側に20㎝～50㎝間隔で配列されるP6～P9は壁柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。

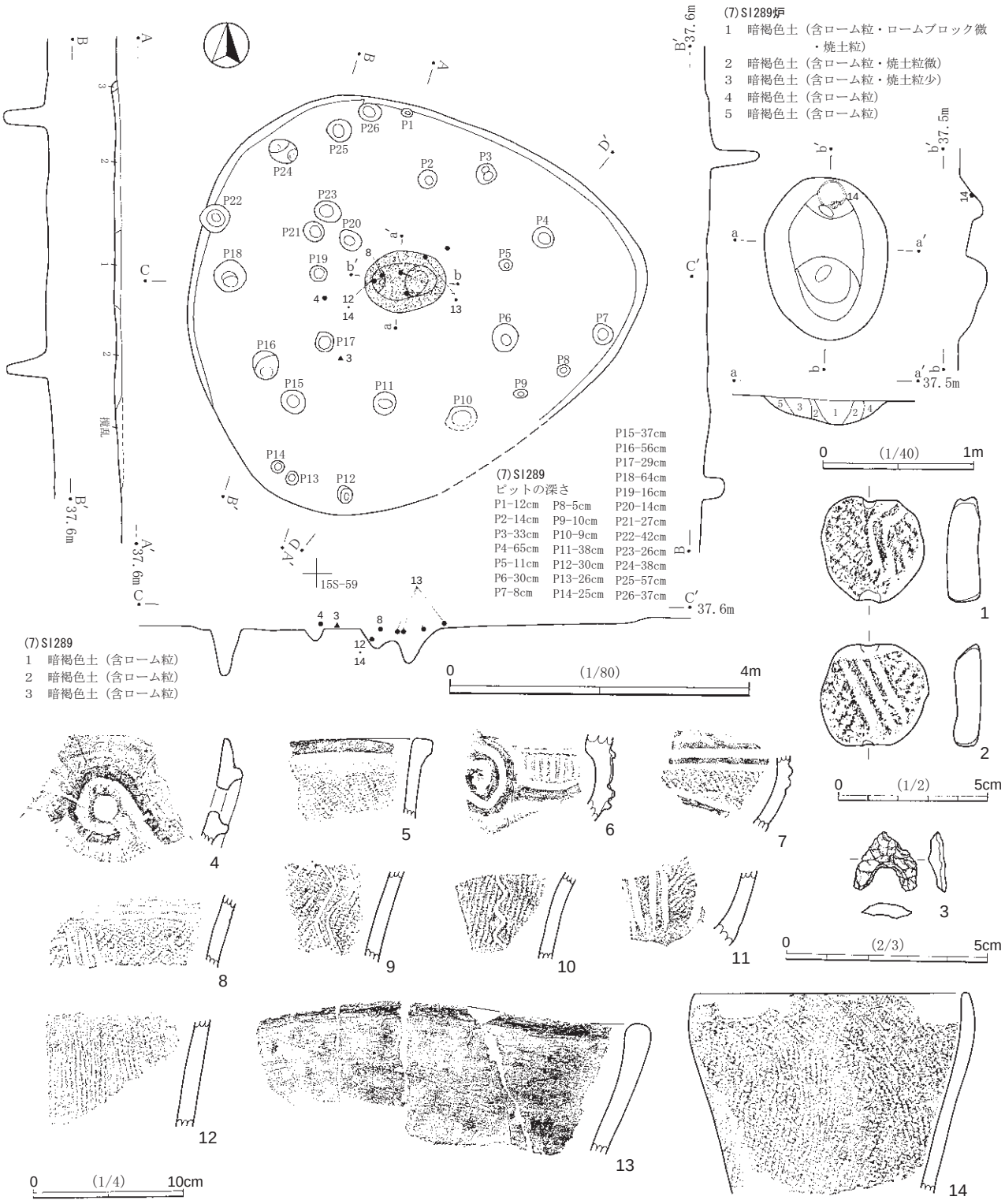
遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は判断できない。

土器（第39図、図版69）

１は背割れ隆帯とこれに沿った集合沈線文を施す。２は縦位の微隆起線文が認められる。１は加曽利Ｅ1式、２は同4式であろう。

(7) SI380・(7) SI381（第40図、図版７）

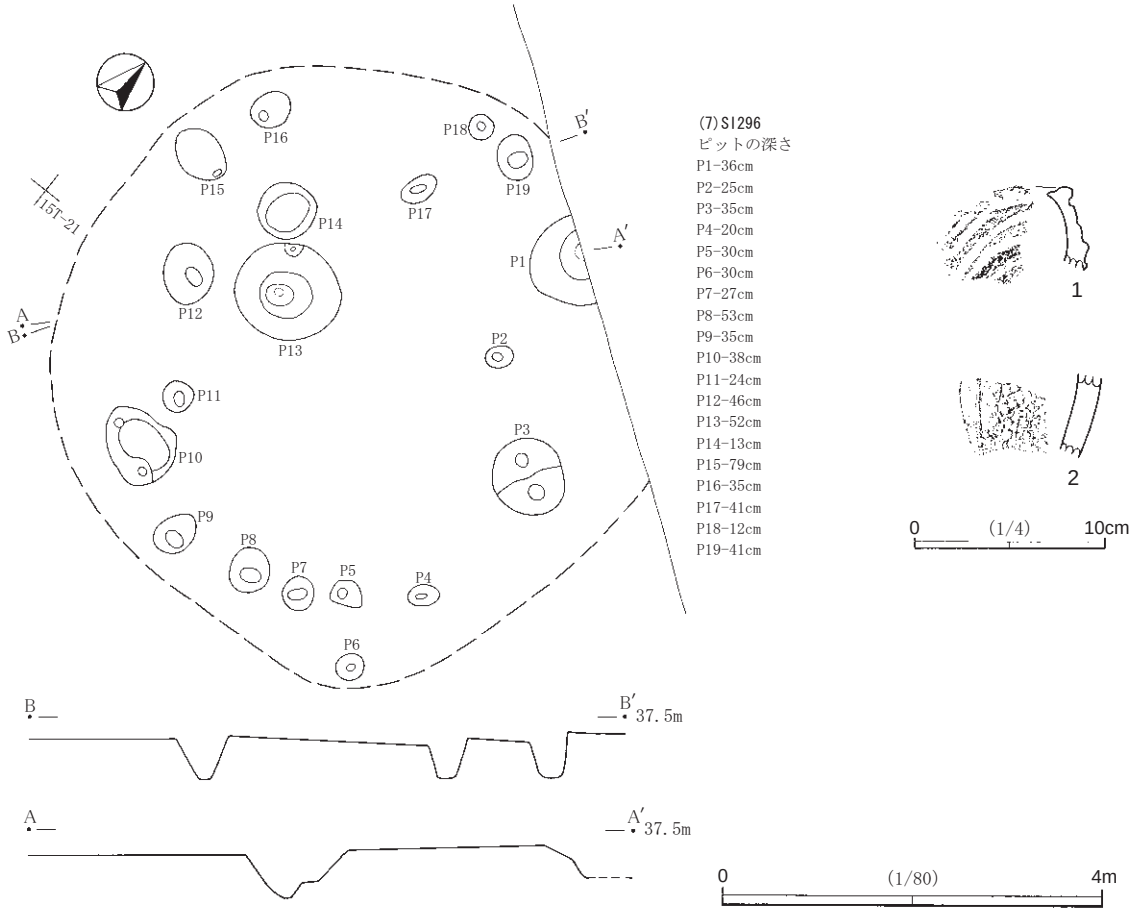
遺跡北東部、15Ｒ－09・19・29・39、15Ｓ－00・10・20グリッドに位置する。壁の掘り込み、炉は確認できなかったが、２軒の住居が重複するものと思われる。ピットは (7) SI380が17か所、(7) SI381が18



第38図 (7) SI289

か所検出された。いずれも配列は不規則である。炉は検出されなかった。

遺物は、(7) SI380のP18から1の土器が出土したのみである。(7) SI381はピット内から土器片が出土した。どちらも出土遺物がわずかであり、所属時期は判断できない。



第39図　(7) SI296

土器（第40図、図版69）

(7) SI380の１は縄文を縦位施文した小破片である。土器型式を特定できない。(7) SI381の１は太い沈線と背の低い隆線が認められる。加曽利Ｅ3式と思われる。

(8) SI010（第41図、図版８）

遺跡北東部、16Ｑ－97・98、17Ｑ－07・08グリッドに位置する。撹乱が著しく、壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは３か所検出されたが、東側にも存在したと思われる。炉の北西側に位置する。深さは14㎝～55㎝を測る。炉は楕円形を呈する。長軸77㎝、短軸45㎝、深さ15㎝を測る。

遺物は、土器・石器が出土した。出土状況は不明である。出土遺物がわずかであるため所属時期は判断できない。

土器（第41図、図版69）

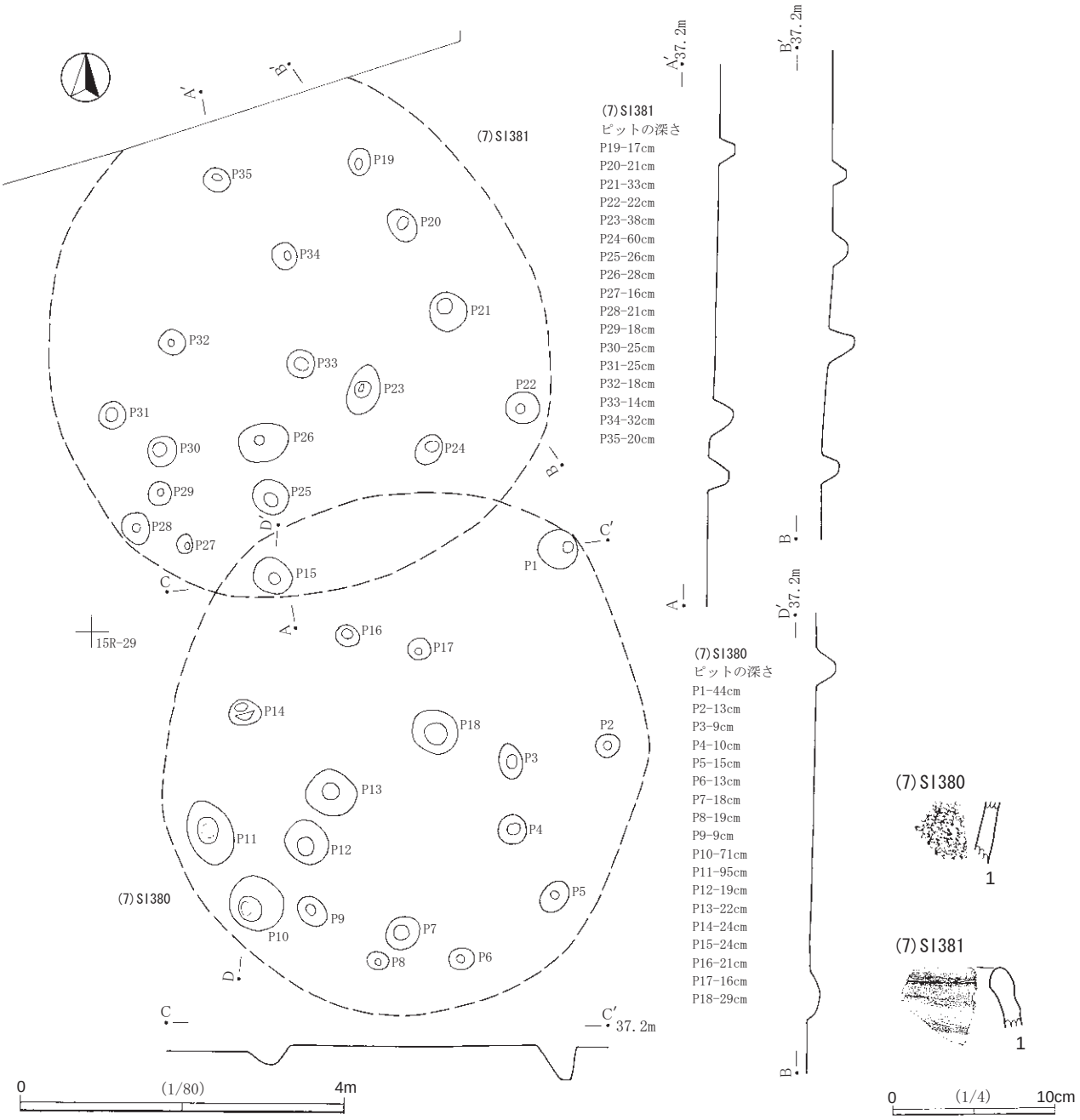
１・２とも磨消懸垂文を施す。３は逆Ｕ字状区画文内に縄文を施す。加曽利Ｅ3式と思われる。

石器

安山岩製の石皿片が１点出土した。

(8) SI015（第42図、図版８）

遺跡北東部、16Ｒ－25・34・35・36・45グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、長軸5.09m、短軸4.80m、深さ17㎝を測る。ピットは６か所検出された。壁付近に98㎝～1.35m間隔で配列され、壁柱穴と判



第40図　(7) SI380・(7) SI381

断される。深さは56cm ～72cm を測り、いずれもしっかりとしたものである。炉は土器２・３を利用した楕円形を呈する部分的な土器片囲い炉である。底面は火熱により硬化していた。長軸48cm、短軸43cm、深さ11cm を測る。

遺物は、土器・石器が少量出土した。１は床面から出土した。内面が二次的火熱を受けており、炉から抜き取られたものかもしれない。所属時期は、床面の１の土器から１ａ期と考えられる。

土器（第42図、図版69）

１は背割れ隆帯による口縁部文様の下を３条の沈線によって胴部と画している。隆帯の上部には鋸歯状

沈線が、胴部には２条１単位の蛇行沈線が認められる。内面に二次的火熱を受ける。２・３は炉囲いの土器で、ともに内面と表面上部に二次的火熱を受ける。２は胴部区画隆帯と口縁部隆帯文様の一端が認められる。３は背割れ隆帯と懸垂文と思われる沈線が残る。４・５は沈線ないしは低い隆線による口縁部文様帯の枠状文様を施す。１は加曽利Ｅ1式古段階であろう。４・５は加曽利Ｅ2式～3式にかけての口縁部破片で、混在であろう。

石器

黒曜石製の剥片・砕片が各1点出土した。

(8) SI016（第43図、図版８）

遺跡北東部、16Ｒ－70・80グリッドに位置する。遺存状態は良好であった。ほぼ円形を呈し、長軸3.37ｍ、短軸3.12ｍ、深さ29㎝を測る。床面は全面が硬化していた。壁下には幅約20㎝、深さ５㎝～10㎝を測るしっかりとした周溝が全周する。ピットは検出されなかった。覆土は黒褐色土を主体とする。南東側壁下には厚さ８㎝ほどの白色粘土の堆積がみられた。覆土中には焼土･炭化物を含む。炉は中央に位置し、ほぼ円形を呈する。径約65㎝、深さ16㎝を測る。

遺物は、炉を中心とした径約２ｍの範囲を中心に極めて多量の土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第43・44図、図版52・69）

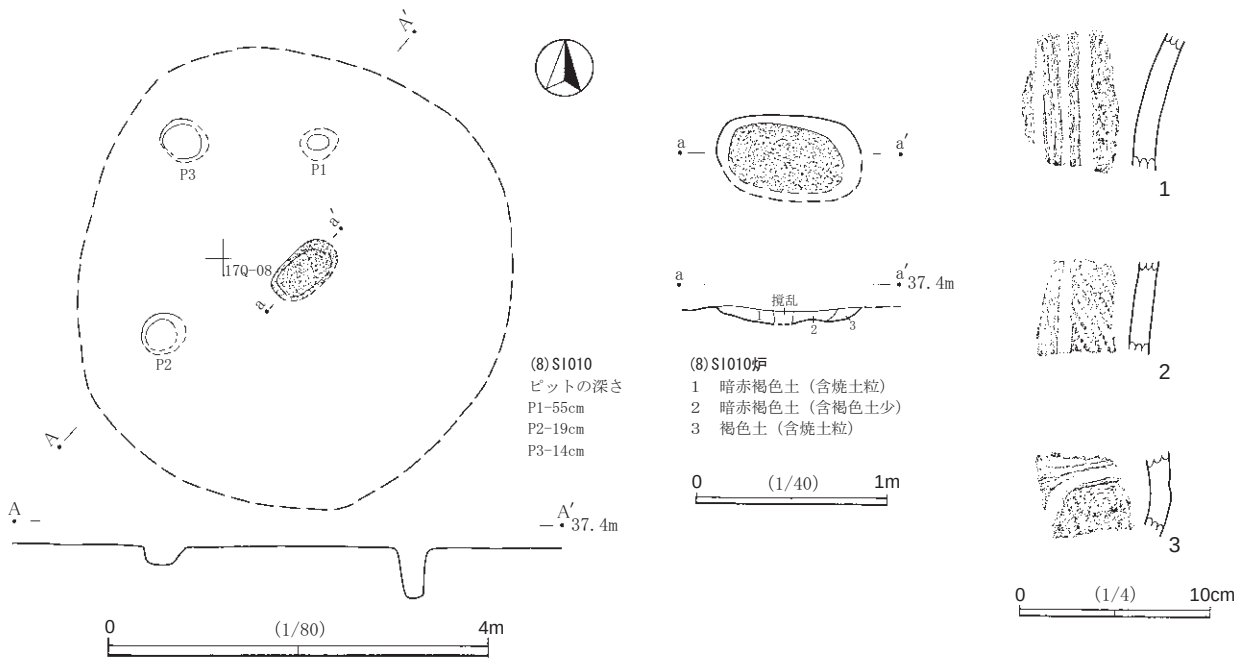
１～６は同一個体である。器壁の最も厚い所で18㎜を測る大型土器で、胴下部は内外面とも器面調整が粗い。口縁部には両脇を磨り消した隆線が弧状に展開し、胴部には同様の隆線が垂下する。いわゆる懸華状連接区劃文土器であろう。７は低い隆線による口縁部区画文様を持つ。８～10はいわゆる梶山類（胴部隆帯文土器）で、８は２条の隆線、９・10は１条の隆線による文様を施す。11は大型土器の口縁部破片で、口縁下に断面蒲鉾状の隆線が付く。拓影左下には磨消部が認められる。12は口縁下に凹線を巡らす。縄文部との境は微隆起線状に盛り上がっている。13は断面蒲鉾状の細い隆線とこれに沿った沈線で縄文部を区画する。無文部及び内面は赤彩されている。有孔鍔付土器と思われる。14～16は沈線による区画文様を施すもので､14･15の沈線は幅５㎜～６㎜と太く､16の沈線は浅く乱雑である。17～19は櫛歯条線文を施すが､19は縄文を同時施文する。20・21は瓢箪型注口土器で、21は鍔部に孔が開く。20は口縁から胴下部の約1/3が遺存する。口縁直下の無文帯を画する微隆起線が左右から胴下部へ盛り上がりながら垂下し、口縁部及び胴くびれ部下の２か所で平行する微隆起線同士を渡す橋状突起となる。微隆起線区画の内部文様は上下２段に分かれ、ともに縄文を充填した沈線による長楕円形区画文となるが、下段には蕨手文が加えられる。21は胴下部までの小破片が多数あるが、これ以上接合しなかった。口縁直下無文帯を画する隆線及びこれから垂下する横渡し橋状突起を伴う隆線はやや太く断面蒲鉾形になるのに対し、内部文様である渦巻文は断面三角形である。７を除き加曽利Ｅ3式新段階であろう。７はこれらよりやや古いと思われる。

土製品（第44図、図版112）

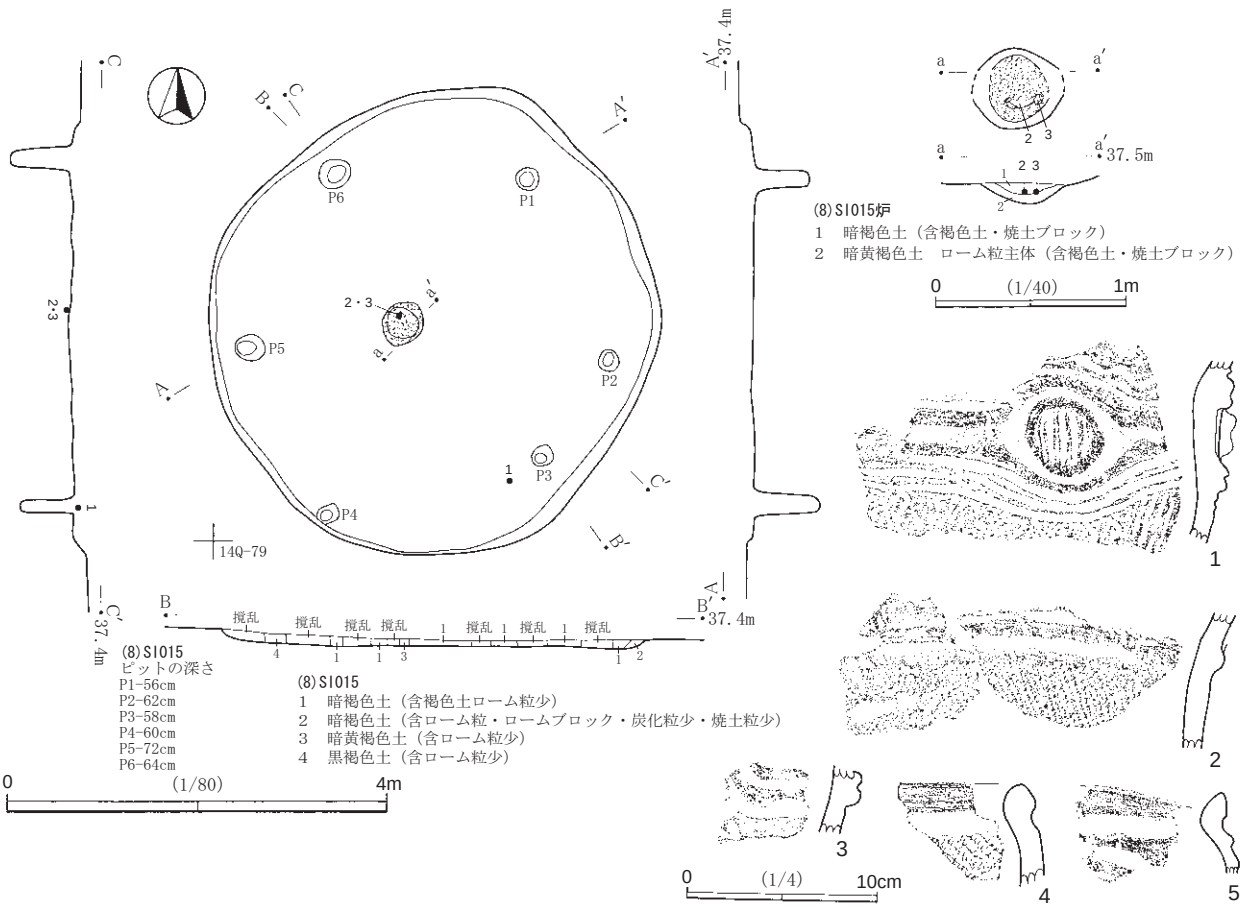
22～25は土製円板である。いずれも周縁の磨りは深い。22・23は両面穿孔である。

石器（第44図、図版115）

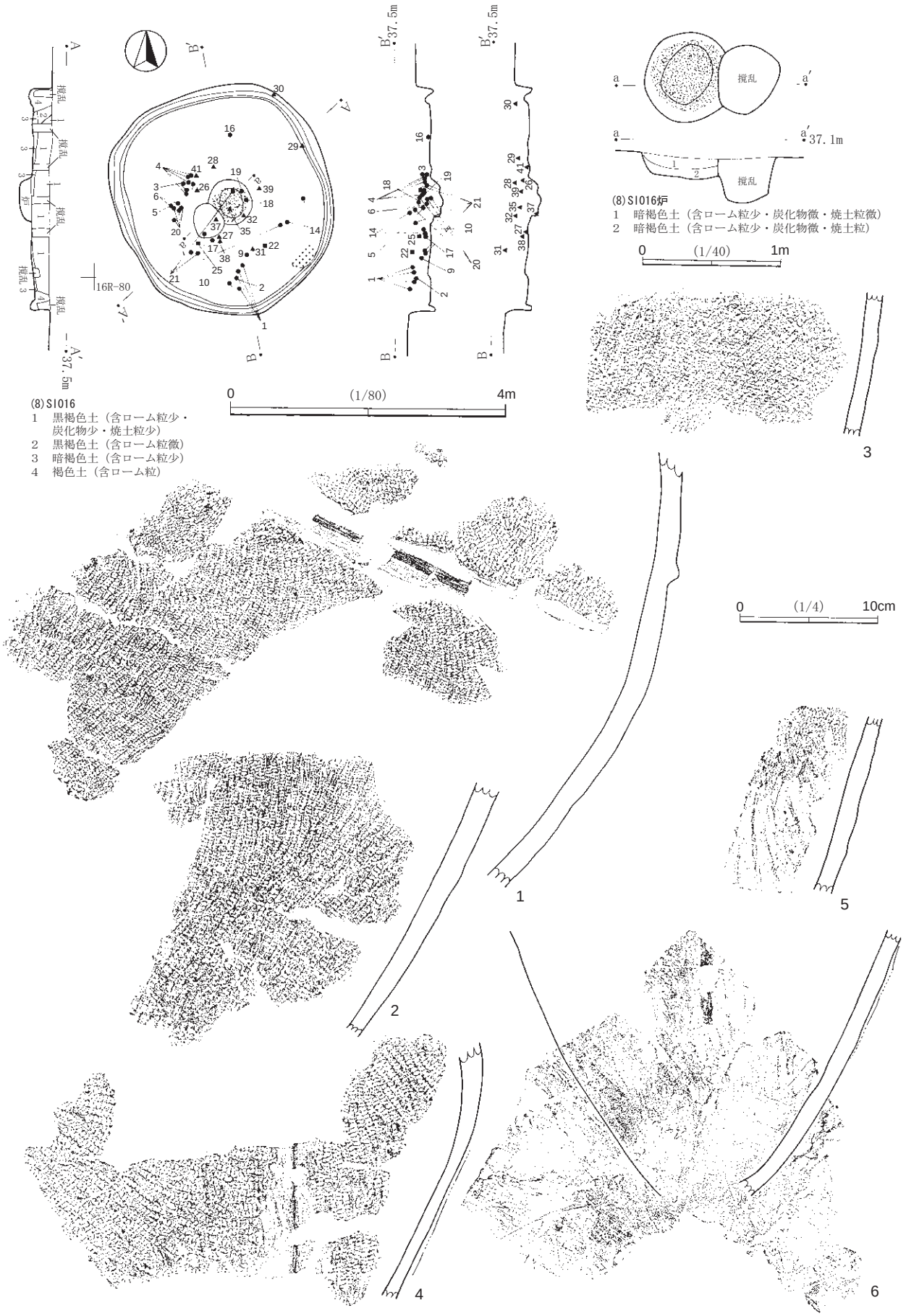
石器は535点出土した。大半は石鏃製作に伴うものである。図示したのは石鏃10点、石鏃未成品５点、及び石錐１点である。石鏃は39が平基の三角形鏃のほか､いずれも凹基無茎鏃である。26～30､39が完形品、32～34、37が欠損資料である。石材は黒曜石１点（26)、チャート７点（27・28、30、33・34、37、39)、



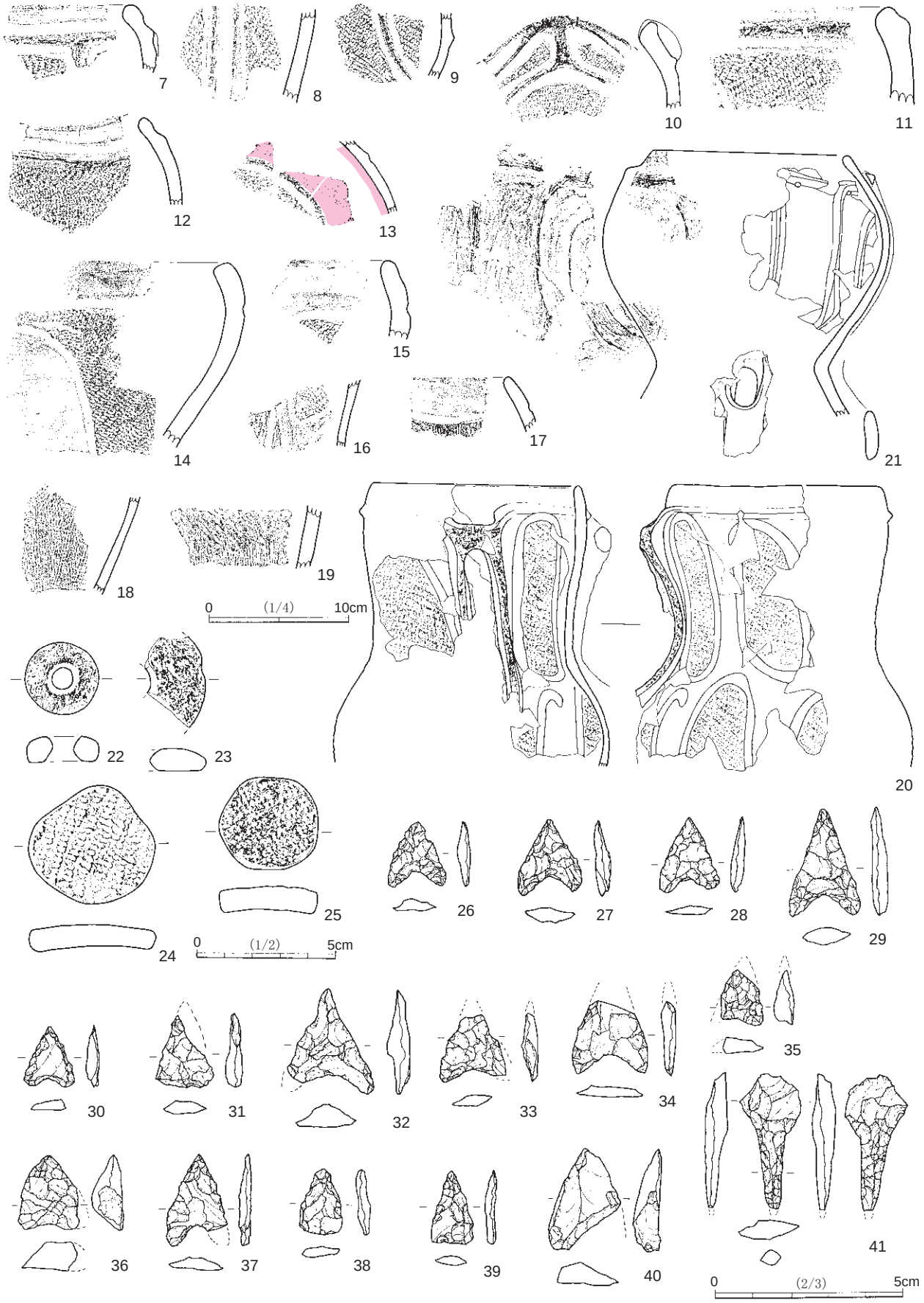
第41図 (8) SI010



第42図 (8) SI015



第43図 (8) SI016 (1)



第44図　(8) SI016 (2)

トロトロ石（29）、及びガラス質黒色安山岩１点（32）となっている。石鏃未成品（31、35・36、38・40）は大きさが石鏃に比べ一回り大きく加工も粗雑である。石材はガラス質黒色安山岩２点（31、40）、黒曜石（35・36）、チャート１点（38）となっている。石錐（41）はチャート製で、基部に撮（つま）み部を有している。精緻な両面加工によって棒状の錐部を作出している。先端部が欠損している。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品４点・剝片36点・砕片193点・石核１点・原石１点、黒曜石製の剝片11点・砕片215点・石核４点など石器製作に伴うもの、ホルンフェルス製の打製石斧１点などが出土した。

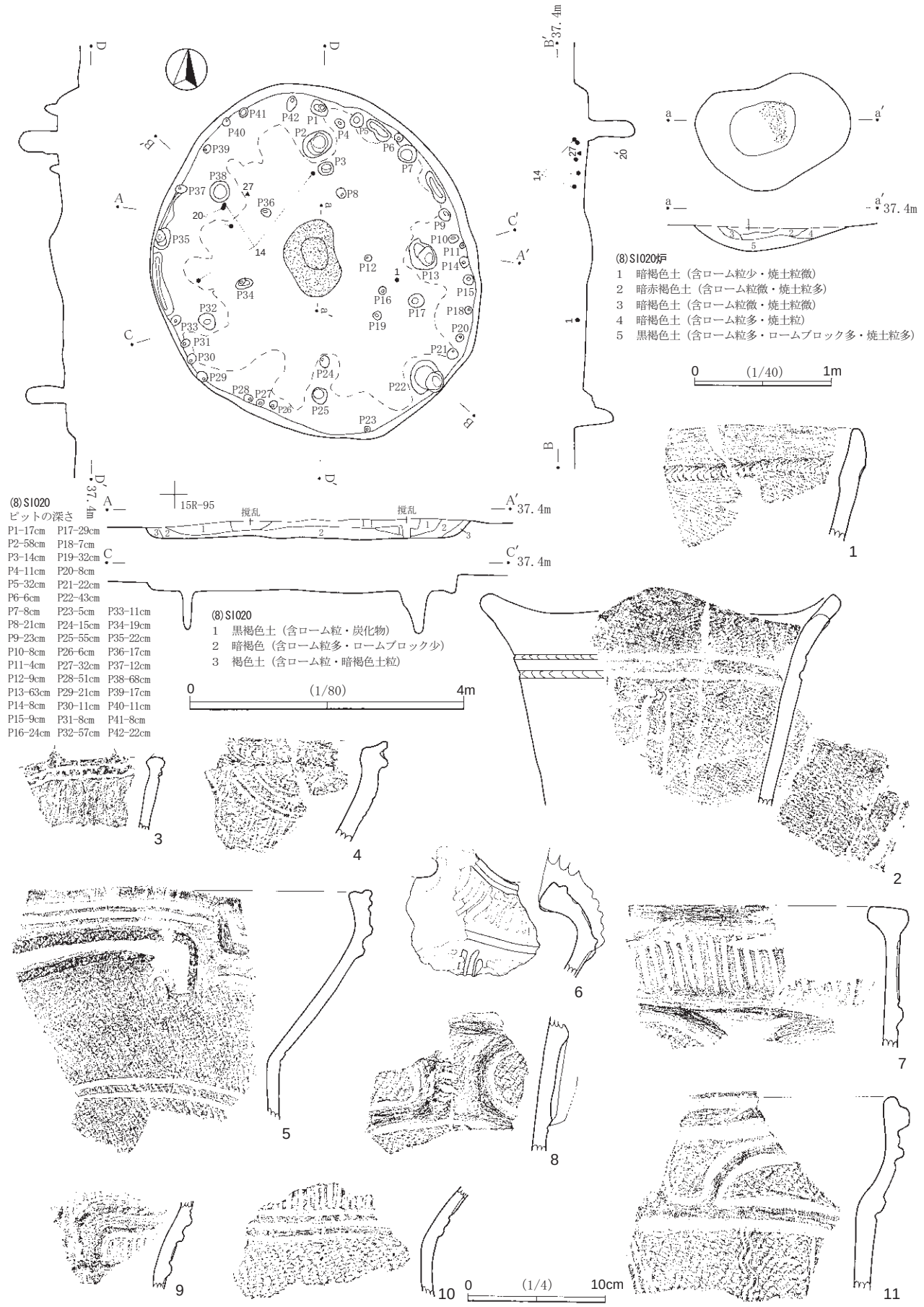
(8) SI020（第45図、図版８）

遺跡北東部、15Ｒ－75・85・86グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸5.37m、短軸4.68m、深さ30㎝を測る。ピットは42か所検出された。炉の40㎝～80㎝外周には深さ約10㎝台の小ピット、その30㎝～50㎝外側には深さ50㎝～60㎝台の主柱穴が６か所、壁下には深さ10㎝台内外の壁柱穴が配列される。壁柱穴は北から東側及び南西側に集中して施されており、北東及び北西側にはピット間に周溝状の溝が認められる。主柱穴付近から内側の床面はよく踏み固められていた。炉は不整な楕円形を呈する。長軸1.14m、短軸75㎝、深さ18㎝を測る。底面付近の覆土は焼土を多く含む。

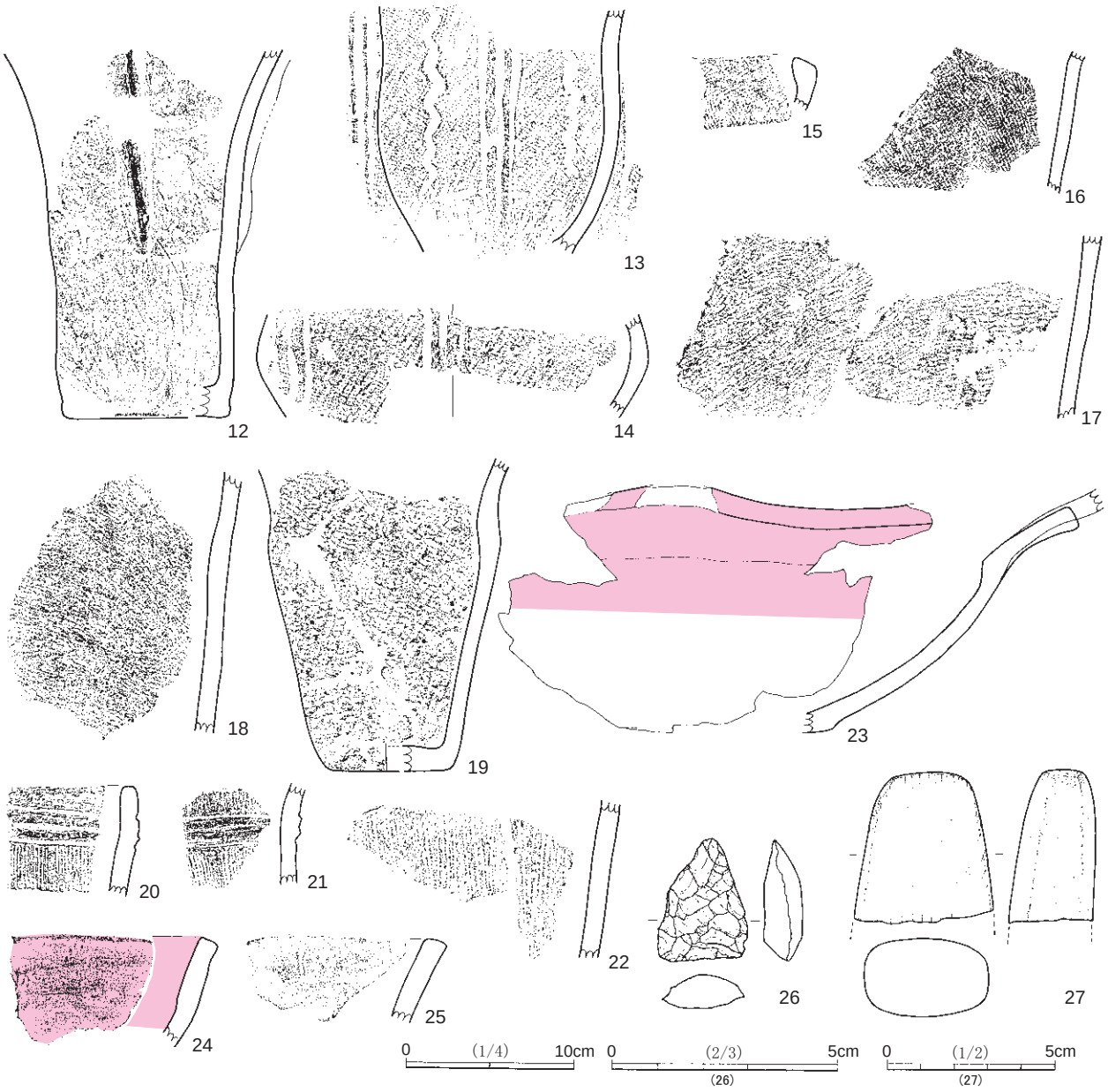
遺物は、土器・石器が多量に出土したが、いずれも床面から浮いた状態で出土した。土器１は（8）SK023出土の破片と、(8) SK023の18は本住居跡出土の破片と接合している。また、14は（8）SK023出土の11と同一個体である。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第45・46図、図版52・70）

１は口縁部無文帯下に爪形の連続刺突文を配し、以下縄文となる。２は波状突起を持つ大型破片である。横位２条の区画文は編棒状の工具による整っていない押引文である。胴部には逆Ｕ字形の沈線文様が３単位残るが、上端の描き出しも押引文となる。３は口縁突起を欠く小型土器で、口縁下に稚拙な交互刺突文を施す。４は口縁直下の２条の隆線間に半截竹管による刺突文を施す。隆線上には縄文が付く。その下は末端が弧状につながる平行沈線による弧線文が２段と蛇行沈線文が認められる。５は挿図作成後、(7) SK219-6と接合した。半球状に開いた大型口縁部破片で、連結しないクランク状の隆線文様と２条の平行沈線を口縁部に施し、くびれた胴部との境にも２条の沈線を施す。左側の隆線上には縄文が付くが、右側隆線には縄文は付かない。６は突起を欠く口縁部破片で、上下２段の口縁部文様帯になると思われる。上下とも集合沈線文を充填するが、上部文様帯の上端には交互刺突文が付く。７は上下を隆帯に挟まれた口縁部文様帯内に集合沈線文を充填するが、文様帯内はさらに隆帯で区画されるらしい。胴部は縄文地にＹ字状の隆帯区画の一部が認められる。８は断面が左右で異なる隆帯による楕円区画文を施す。左側楕円区画は断面三角形で外側裾には刻みが付く。９は背割れ隆帯による口縁部クランク文の一部と充填文である集合沈線文が認められる。10は背割れ隆帯による口縁部文様帯下部区画帯とその上に集合沈線の充填文が認められる。11は口縁部文様帯に波状の隆線文様を、胴部文様帯に半截竹管による蛇行沈線と懸垂文を施す。12は推定底径10㎝、残存高22㎝を測る筒型の胴下部の破片で、縄文地に背の高い隆線が垂下する。13は底部直上から胴下部の破片で、３条１単位の磨り消されない懸垂文と蛇行沈線を交互に施す。14も３条１単位の磨り消されない懸垂文を施す。15～19は縄文のみ施されたもので、15と16は同一個体である。19は底径８㎝、現存高19㎝を測る。底面に使用による擦れと二次的火熱による荒れが顕著である。20・21は同一個体で、横位の背割れ隆帯と櫛歯条線文を繰り返し施す。23～25は浅鉢で、23は波状口縁となる。23の口縁端部から胴上半にかけてと24の内外面には赤彩の痕跡が残る。１・７・８は在地製作の勝坂式、



第45図 (8) SI020 (1)



第46図　(8) SI020 (2)

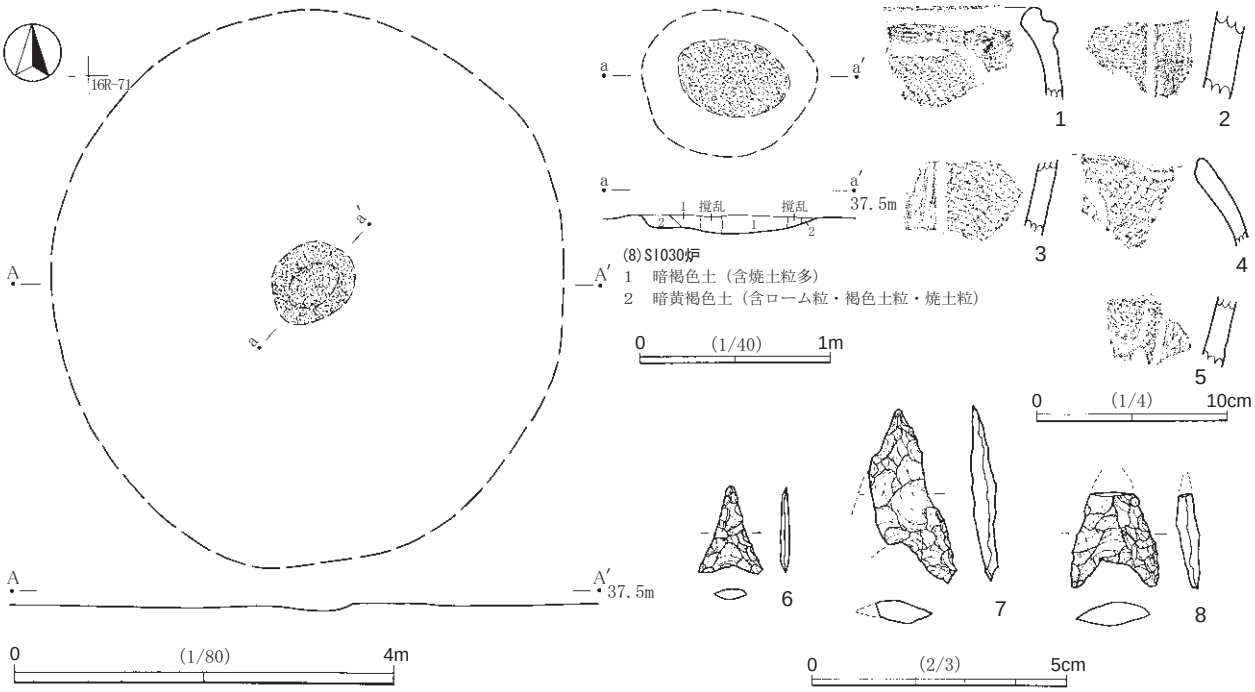
５は阿玉台４式の影響を強く残す。６・９は加曽利Ｅ1式古段階、10・11は同Ｅ1式であろう。また、２～４は加曽利Ｅ1式古段階に伴うものであろう。

石器（第46図、図版115）

26は黒曜石製の石鏃未成品である。両面加工で分厚く抉り部の作出に至っていない。27は定角式磨製石斧の基部の破片である。石材には粗粒玄武岩を用いている。図示した以外では、砂岩製の磨石類１点、黒曜石の剥片１点、砕片３点が出土した。

(8) SI030（第47図、図版８）

遺跡北東部、16Ｒ－71に位置する。撹乱が著しく、炉を検出したのみである。炉は楕円形を呈し、長軸93㎝、短軸77㎝、深さ９㎝を測る。底面上には焼土が検出された。



第47図　(8) SI030

遺物は、土器・石器が出土した。一括で取り上げられているため、本遺構に確実に伴う確証がないことから、所属時期は確定できない。

土器（第47図、図版70）

１は断面蒲鉾状の隆線による口縁部文様帯区画が認められる。２・３は比較的幅の狭い磨消懸垂文である。４は太く浅い沈線による逆U字状文が残る。５はU字状沈線と磨消懸垂文を施す。いずれも加曽利E3式で、４は同中段階であろう。

石器（第47図、図版115）

６～８は石鏃である。いずれも両面加工の凹基無茎鏃で、７は片脚、８は先端部が欠損している。石材は６が黒曜石、７・８がチャートである。図示した以外では、ホルンフェルス製の石鏃１点、チャート製の石鏃未成品１点、チャートの剥片１点、チャート・黒曜石の砕片が各３点出土している。

(9) SI148（第48図、図版８）

遺跡北部、17K－39・49、17L－30・40グリッドに位置する。南東側は調査範囲外に及んでいた。平面形は隅丸方形に近い楕円形である。規模は長軸4.10m、短軸3.90mほどと推測され、深さ29cmを測る。ピットP2・P3・P8は主柱穴の可能性がある。炉は円形を呈し、径55cm、深さ20cmを測る。底面付近は火熱により硬化していた。

遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第48図、図版70・71）

１は推定口径46cmを測る大型土器である。口縁部から胴上半はキャリパー状であるが、胴下半との境のくびれは弱い。ゆるい波状突起を中心に、断面蒲鉾状の低い隆線で文様が展開する。口縁直下は無文帯となり、隆線で画している。口縁部から胴上半は突起下にの字状の区画文様を配し、その左右はU字状の

同種文様を施す。胴下部は逆U字状の区画文様が上部文様と対応することなく配置されるようである。区画内は太い沈線で縁取りされて縄文を充填するが、無文部側には沈線の縁取りがない。2・3は同一個体で、口縁下に円形刺突列を施し、その下に沈線によるU字状の縄文充填文様が展開する。４も同種文様である。５は口縁直下の無文帯とその下の縄文施文部との境が微隆起線ではなく、段状となる。６は胎土に長石・石英粒を多量に含む、縄文のみの破片である。７・８は櫛歯条線文で、７は口縁直下の無文帯を太めの浅い沈線で画する。6を除き、いずれも加曽利Ｅ3-4式であろう。1はいわゆる梶山類であるが、文様が異なる。

(9) SI182（第49図、図版８）

遺跡北部、15Ｎ－05・06・15・16グリッドに位置する。南東側は (9) SI183と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整円形で、南北方向の規模は4.80ｍを測る。ピットは、P7・P15・P25・P44が深さ34㎝～70㎝を測り、主柱穴と捉えられる。壁下に多数検出されたものは、壁柱穴と考えられる。炉は楕円形で、長軸1.08ｍ、短軸96㎝、深さ20㎝を測る。底面は火熱により硬化しており、底面直上の覆土は焼土を多量に含んでいた。

遺物は、少量の土器・石器が出土した。５の石錐は炉底面より出土した。所属時期は確定できない。

土器（第49図、図版71）

１～３ともにやや太めの沈線を施す。１は口縁下の横位沈線とその下に逆U字状の沈線のみが認められる。２は磨消懸垂文で、磨消部内の沈線は蛇行沈線ないしは蕨手文であろう。３は逆U字状沈線内に縄文を充填する。いずれも加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

石器（第49図、図版115）

４はチャート製の石鏃未成品、５は硬質頁岩製の石錐、６は緑色凝灰岩製の定角式磨製石斧である。４・５は完形品であるが、６は基部が敲打により損傷しており、転用の可能性がある。刃部の表裏には使用痕（線状痕）がみられる。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品１点、黒曜石・チャートの剥片５点、黒曜石・チャート・頁岩の砕片53点が出土している。

(9) SI183（第49図、図版８）

遺跡北部、15Ｎ－06・16・17グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できず、不整な円形に配列されたピットが検出された。西側は (9) SI182、南側は (9) SI184と重複する。新旧関係は不明である。楕円形の P66・P67からは焼土は検出されていない。

遺物は出土しなかった。

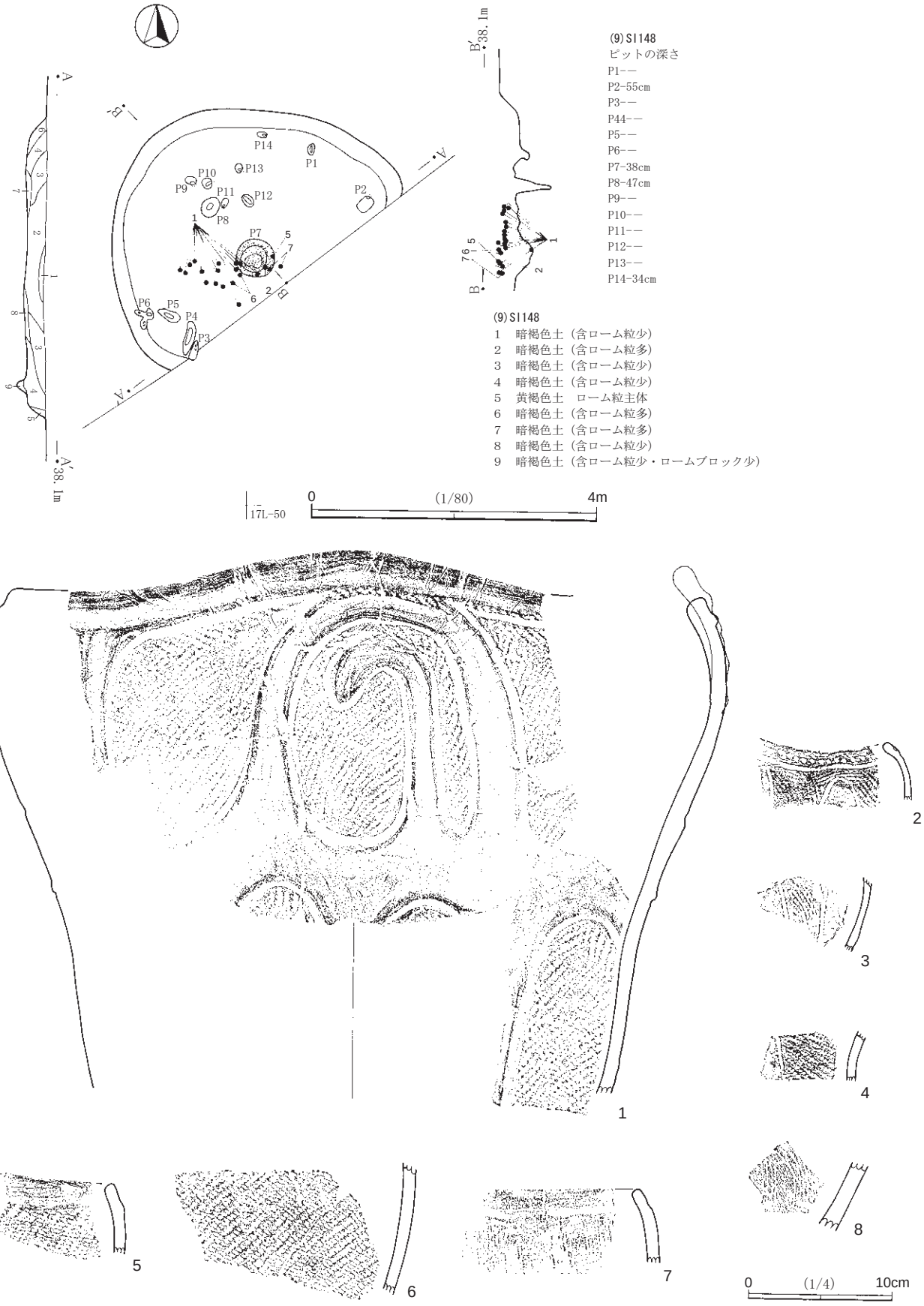
(9) SI184（第49図、図版９）

遺跡北部、15Ｎ－16・17・26・27グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。北側は (9) SI183と重複する。多くのピットが検出され、壁柱穴と考えられる周縁に楕円形に配されたもの、炉の周囲に配されたものがある。深さ10㎝～20㎝台のものが多い。主柱穴は明確ではない。炉は楕円形で、長軸1.47ｍ、短軸1.12ｍ、深さ27㎝を測る。底面は凹凸があり、よく焼けていた。底面付近の覆土には焼土が多く含まれていた。

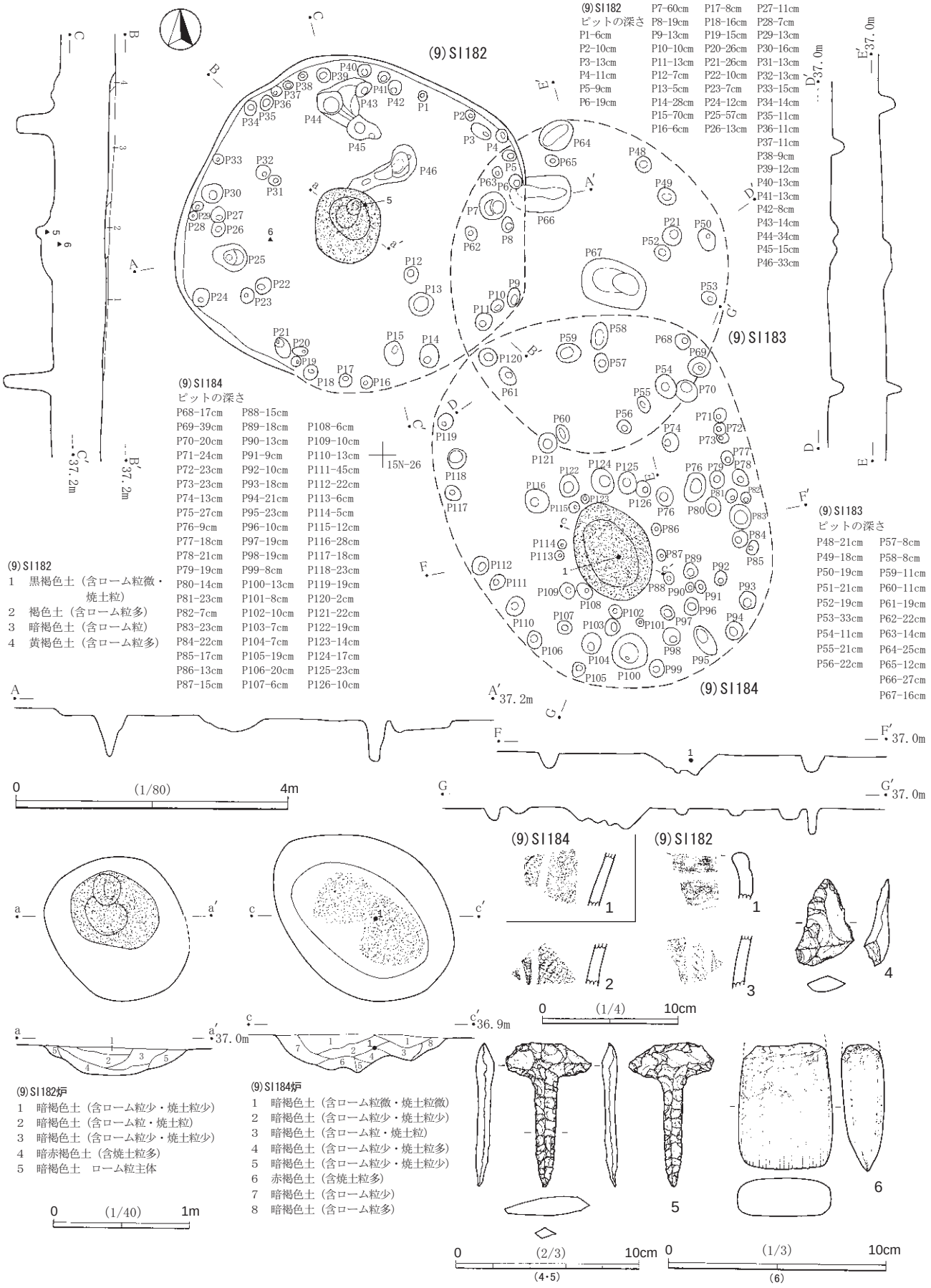
遺物は、少量の土器・石器が出土した。全て一括で取り上げられているため、出土位置は不明である。所属時期は確定できない。

土器（第71図、図版71）

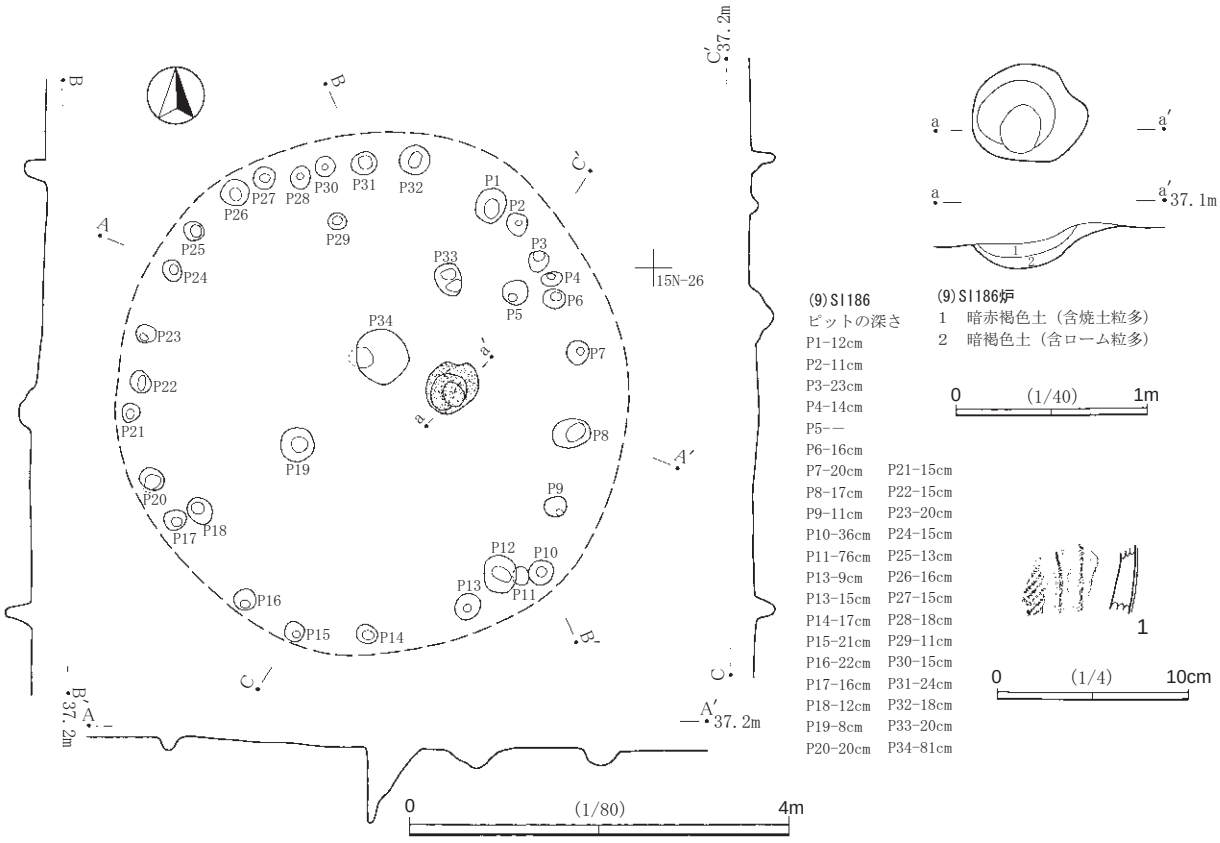
１はやや幅広の磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式後半であろう。


A
A′
38.1m
B
B′
38.1m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
(9)SI148
ピットの深さ
P1−−
P2−55cm
P3−−
P44−−
P5−−
P6−−
P7−38cm
P8−47cm
P9−−
P10−−
P11−−
P12−−
P13−−
P14−34cm
(9)SI148
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 黄褐色土 ローム粒主体
6 暗褐色土（含ローム粒多）
7 暗褐色土（含ローム粒多）
8 暗褐色土（含ローム粒少）
9 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
17L−50
0
(1/80)
4m
1
2
3
4
5
6
7
8
0
(1/4)
10cm

第48図 (9) SI148



第49図　(9) SI182・(9) SI183・(9) SI184



第50図 (9) SI186

石器

チャート製の石鏃未成品１点、チャート・メノウの剥片10点、黒曜石・メノウ・チャート・硬質頁岩・ガラス質黒色安山岩の砕片が19点出土した。

(9) SI186（第50図、図版９）

遺跡北部、15N－14・15・24・25グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットのうち円形に配列されたものは壁柱穴と考えられる。深さ10cm～20cm台のものが多い。中央に施されたP34は深さ81cmを測る。炉は不整楕円形を呈し、長軸61cm、短軸50cm、深さ17cmを測る。覆土中には焼土粒を多く含む。

遺物は、少量の土器・石器が出土した。全て一括で取り上げられているため、出土位置は不明である。出土遺物が少なく、所属時期は確定できない。

土器（第50図、図版71）

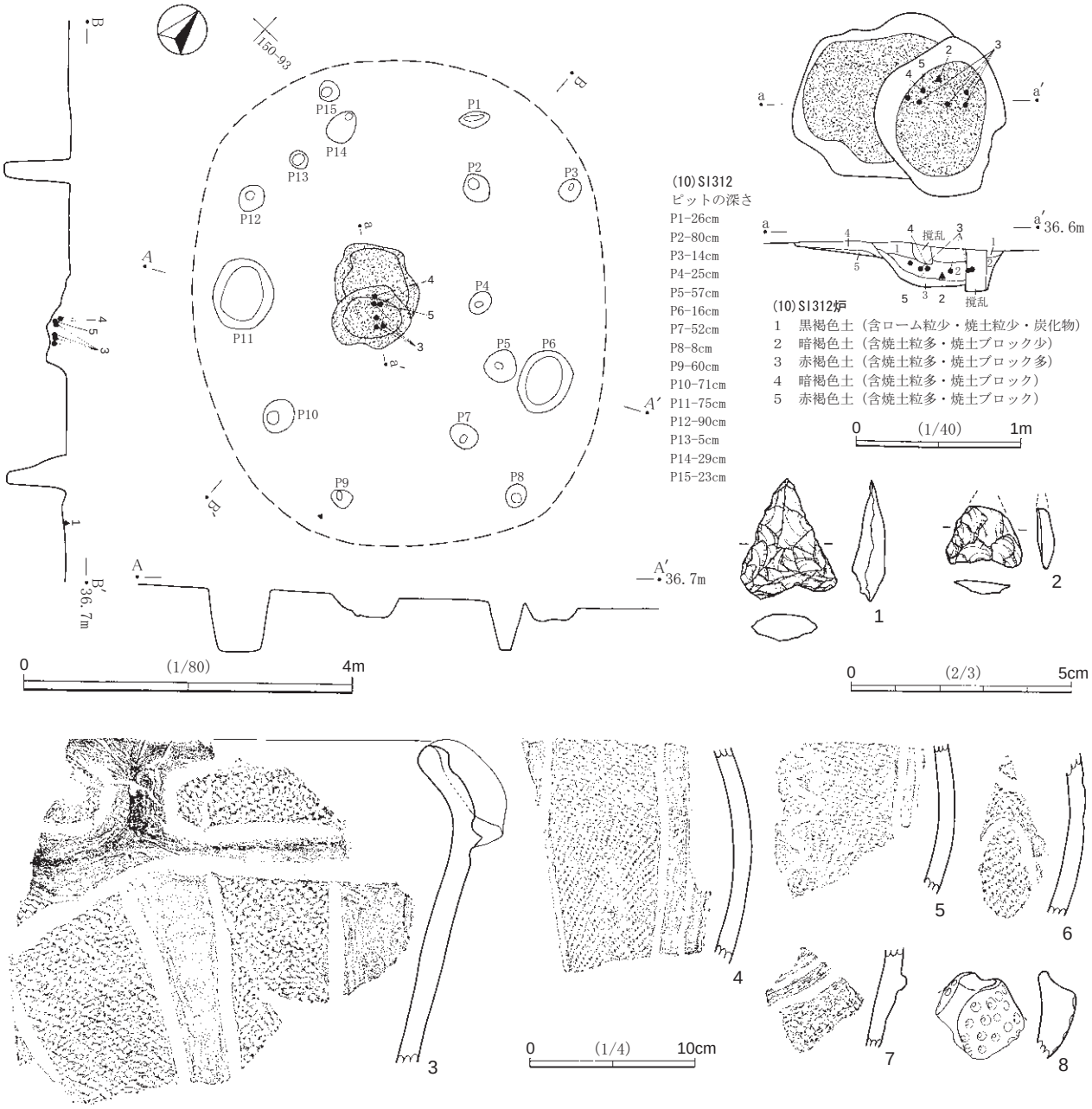
１は２条の平行する微隆起線が認められる。

石器

チャートの砕片が１点出土した。

(10) SI312（第51図、図版９）

遺跡北西部、15O－83・82・93・94・95、16O－03・04グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは15か所検出された。P6・P11が径80cm～90cmで比較的大型である。P2・P7・P10・P12



第51図　(10) SI312

の４か所は主柱穴と考えられ、深さ52㎝～90㎝を測る。炉は不整な楕円形を呈し、長軸1.26m、短軸1.00m、深さ最大25㎝を測る。火熱による硬化面が２か所あり、南側の掘り込みが北側の硬化面を切っていることから、位置を南側にずらして作り替えていることがわかる。建て替えの可能性がある。

遺物は、南側炉内を中心に土器・石器が出土した。３・４・５の深鉢の破片は南側炉の焼土上からまとまって出土した。これらの土器から所属時期は３ｂ期と考えられる。

石器（第51図、図版115）

１は凹基無茎鏃の石鏃未成品である。チャート製で平面形は完成品に近いが、中央部の高まりが除去されていない。２は硬質頁岩製の石鏃である。凹基無茎鏃で先端部が欠損している。図示した以外では、石

鏃製作に伴うチャート製の石鏃未成品が１点、黒曜石・チャート・ガラス質黒色安山岩の剥片10点・砕片58点、流紋岩質凝灰岩・石英の砕片が各１点出土した。

土器（第51図、図版71）

３は口縁部文様帯の隆線渦巻が突出する。区画隆線に沿う沈線、胴部磨消懸垂文に用いられる沈線はきわめて太い。４・５は同一個体で、磨消懸垂文と蛇行沈線を施す。地文の縄文は２種類の縄が使われている。６はU字状、逆U字状の区画沈線が認められる。７は弧状に垂れ下がる口縁部文様帯下部区画隆線が認められる。いわゆる懸華状連接区劃文土器であろう。８は口縁突起の破片で、突起頂部に巻き上がった太い沈線と全面に施された円形刺突文が認められる。１は加曽利Ｅ3式中段階であろう。

(10) SI313（第52図、図版９）

遺跡北西部、16O－11・12・21・22グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは炉を中心として円形に配列され、西から南側には大型のピットが位置する。P2・P8・P12・P18の４か所は深さ45㎝～59㎝で、他より深く主柱穴の可能性が高い。炉は東西に２基の炉が重複し、ダルマ形を呈する。長軸1.65m、短軸1.04m、深さ最大26㎝を測る。底面付近の焼土の土層断面の観察によれば、西側の方が新しく、東側の炉は円形に配列されたピットの中心に位置するため、住居の西側への拡張に伴い炉も西側に移した可能性がある。

遺物は、土器・土製品・石器が出土したが、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は出土量が少なく、確定的ではないが３ｂ期～３ｃ期と考えられる。

土器（第52図、図版71）

１は断面三角形の隆起線による口縁部文様で、渦巻文が消失して枠状文のみになると思われる。２の隆起線も断面三角形である。３・４は磨消懸垂文で、４は磨消部の幅が広い。６の口縁下無文帯を画する沈線は太い。１は加曽利Ｅ3式新段階、他も同中～新段階であろう。

土製品（第52図、図版112）

７・８は土製円板である。ともに周縁の磨りは深い。７は両面穿孔で、櫛歯条線文が残る。８は無文である。

石器（第52図、図版115）

９・10はチャート製の凹基無茎鏃、11はチャート製の石鏃未成品である。11は片脚が部分的に欠損している。図示した以外では、チャートの剥片・砕片が各４点、黒曜石の砕片が３点出土した。

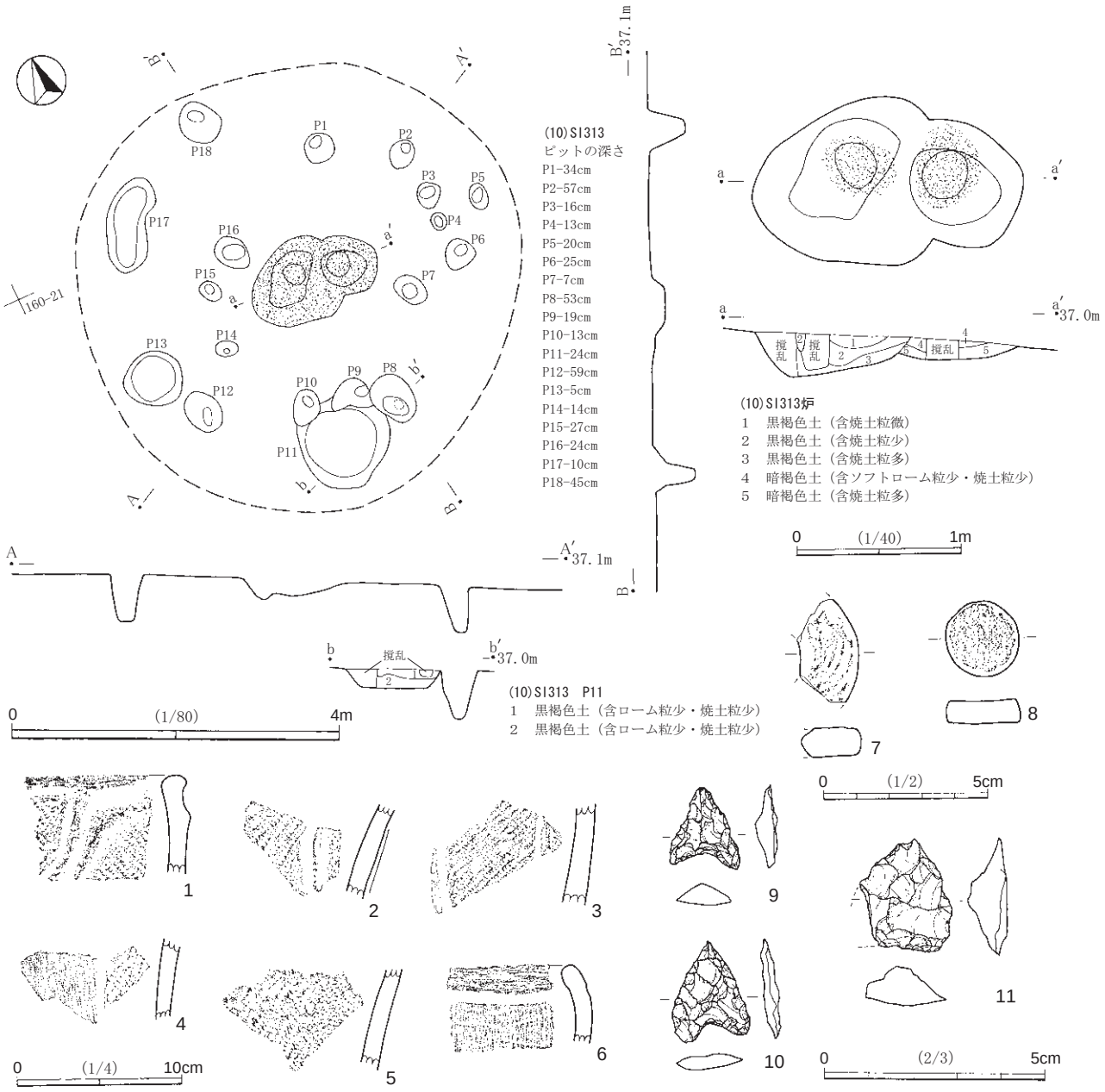
(10) SI314（第53図、図版９）

遺跡北西部、16O－22・23・24・33グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは不規則な配列であるが、比較的深いP4・P8・P17・P21・P22は主柱穴の可能性がある。炉は不整な楕円形を呈する。大形のピットの覆土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む。火熱による硬化面は中心から北側に延びている。長軸1.14m、短軸87㎝、深さ25㎝を測る。

遺物は、土器・石器が出土したが、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は３ｂ期～３ｃ期と考えられる。

土器（第53図、図版71）

１は口縁部文様帯に波状隆帯を施す。２は沈線区画のみで口縁部文様を施す。胴部の磨消懸垂文の幅は狭い。３は巻きのゆるい渦巻文である。４は厚手、大型土器の破片で、低い隆帯による枠状の口縁部文様



第52図　(10) SI313

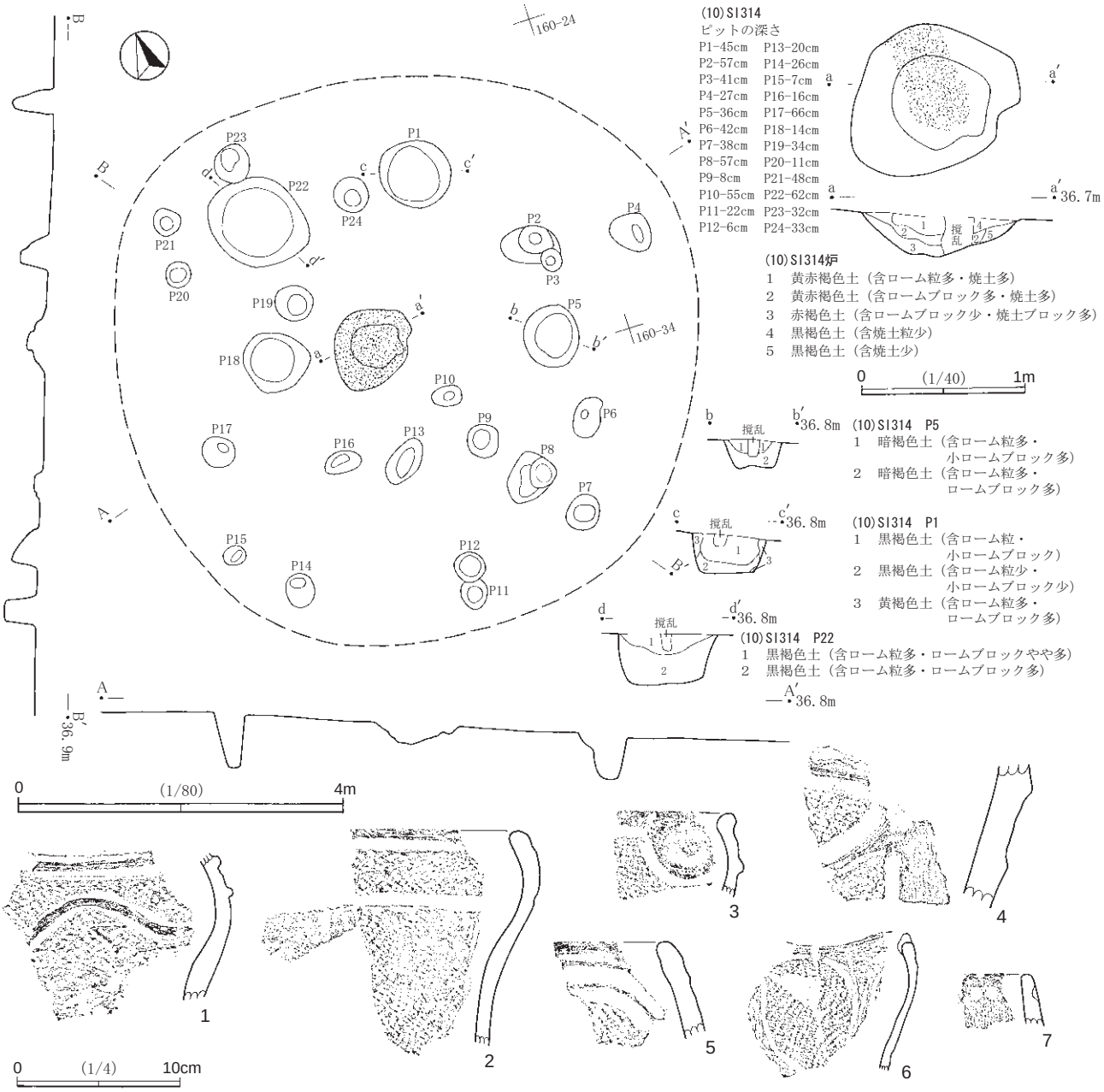
と幅の広い胴部磨消懸垂文が認められる。５は隆起線による大型の渦巻文となるらしい。６は波状突起を持ち、浅い沈線による楕円区画内に縄文を充填する。７は櫛歯条線文の上に円形の刺突列が認められる。１は加曽利Ｅ1式、他はいずれも同3式中～新段階であろう。１は混在と思われる。

石器

凝灰岩製の砥石１点、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点、チャートの剥片２点・砕片３点、黒曜石の砕片２点が出土した。

(10) SI328（第54図、図版10）

遺跡北西部、16O－58・59・68・69グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは、



第53図　(10) SI314

方形に配置されるP1・P3・P5・P8の４か所は、深さ37㎝～60㎝を測り、他のピットより比較的深く、主柱穴と考えられる。炉は長軸43㎝、短軸35㎝、深さ５㎝の楕円形を呈する小規模なものである。

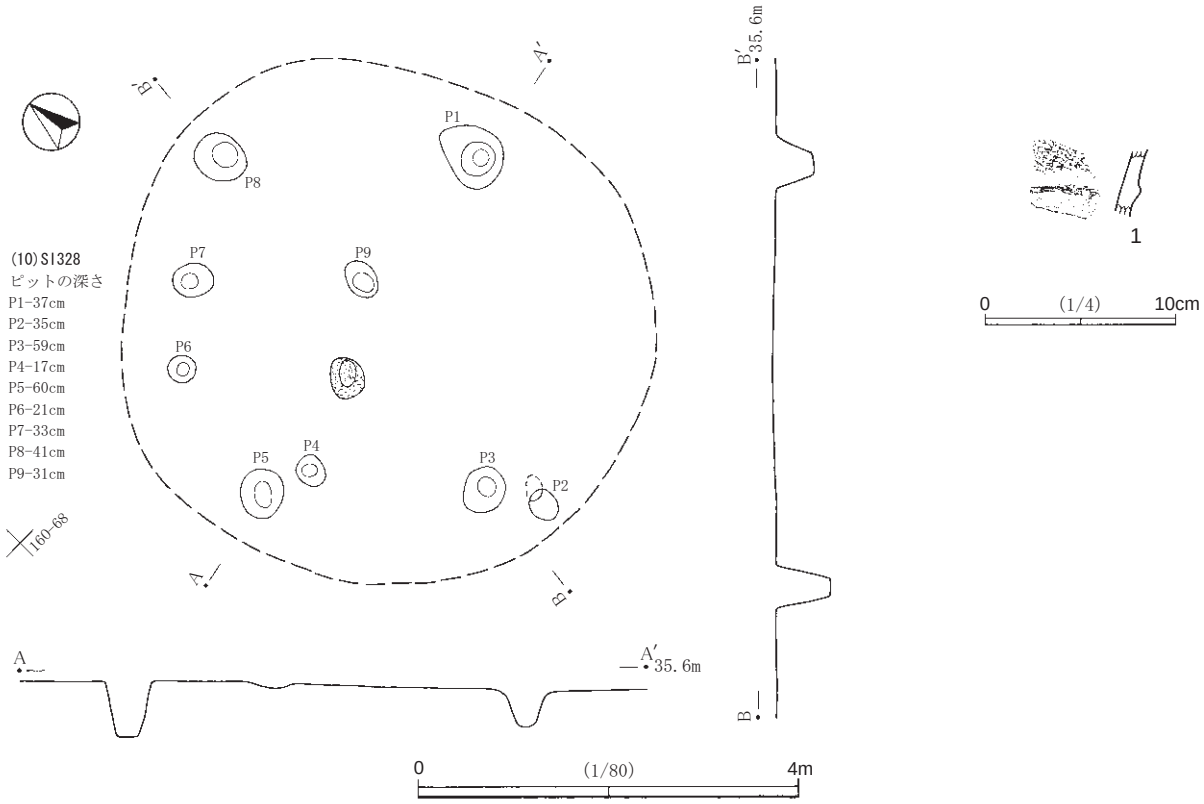
遺物は、土器・石器が出土したが、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。出土土器がわずかであり、本遺構の時期は確定できない。

土器（第54図、図版71）

１は口縁部文様帯の一部であろう。加曽利Ｅ3式か。

石器

黒曜石の剥片１点・砕片２点が出土した。



第54図　(10) SI328

(10) SI337（第55図）

遺跡北西部、17Ｐ－55・56・65・66・75・76グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。炉が２か所あり、２軒の住居が重複したものである可能性もある。ピットは23か所検出されたが、不規則な配列である。西側の炉は不整な円形で、径約80㎝、深さ10㎝を測る。覆土は焼土主体で、底面の西側が火熱により硬化していた。東側の炉は隅丸方形を呈し、長軸95㎝、短軸78㎝、深さ15㎝を測る。北西側は火熱により硬化していた。覆土は下層に焼土を多く含む。

遺物は、土器・石器が出土したが、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第55図、図版71）

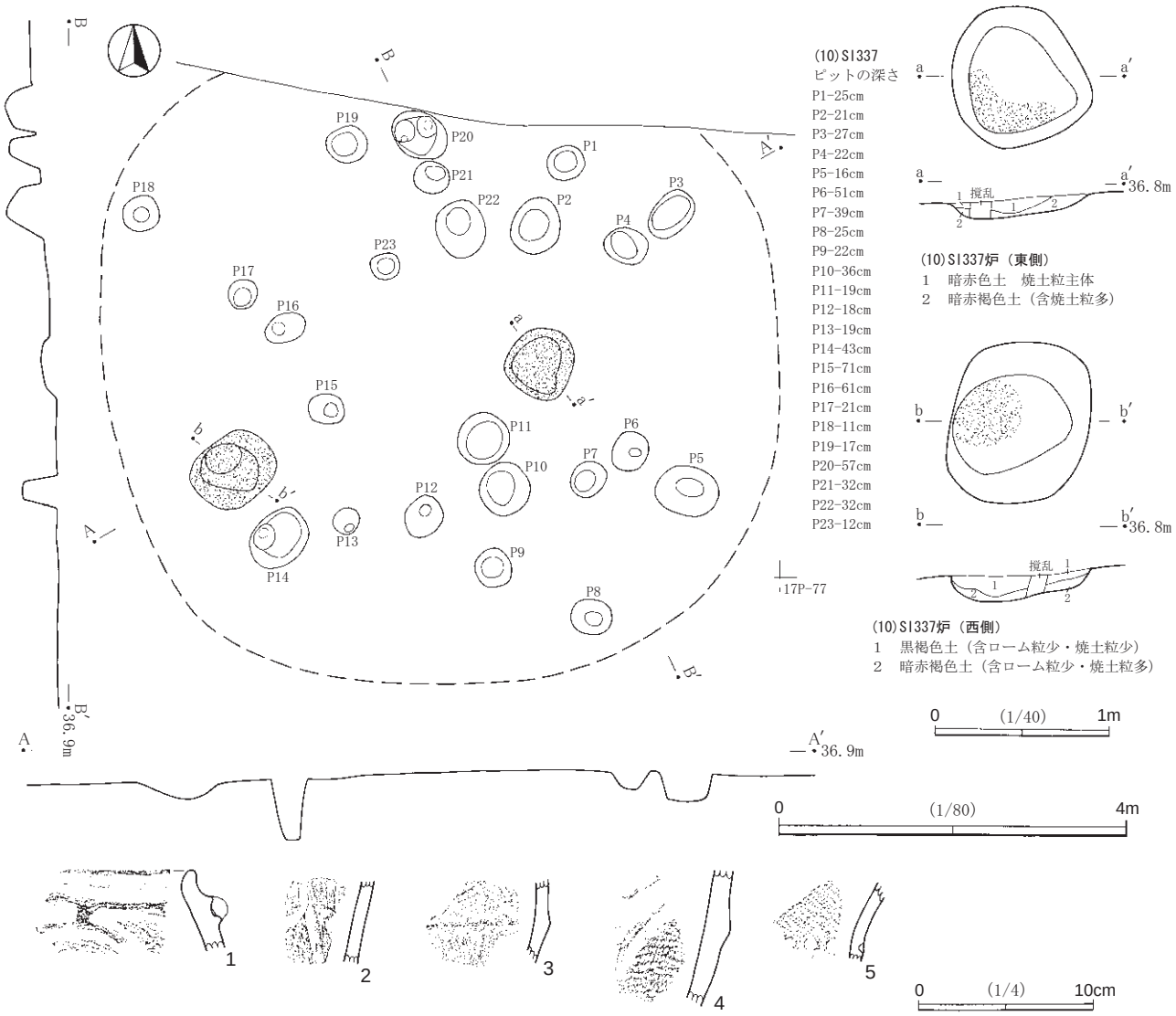
１・４は断面蒲鉾状の隆線による大型の渦巻文を施すと思われる。いわゆる梶山類であろう。２は磨消懸垂文にU字状文が付く。３は微隆起線を境に上部に縄文、下部に櫛歯条線文を施す。５はくびれ部に円形刺突列を施す。３を除き加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

安山岩製の石皿の断片１点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品１点、黒曜石の剝片１点、チャートの砕片２点が出土した。

(10) SI339（第56図）

遺跡北西部、17Ｐ－77・86・87・88・96グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。炉は２か所見つかっており、２軒の住居に分かれる可能性もある。ピットは11か所検出された。規則性は認め



第55図 (10) SI337

られない。大型で、土坑状のP1・P3の覆土は、ローム粒・ロームブロックを多く含む。北側の炉は不整円形を呈し、長軸1.05m、短軸90cm、深さ13cmを測る。南側の炉は長軸61cm、短軸53cmを測る。深さは不明である。

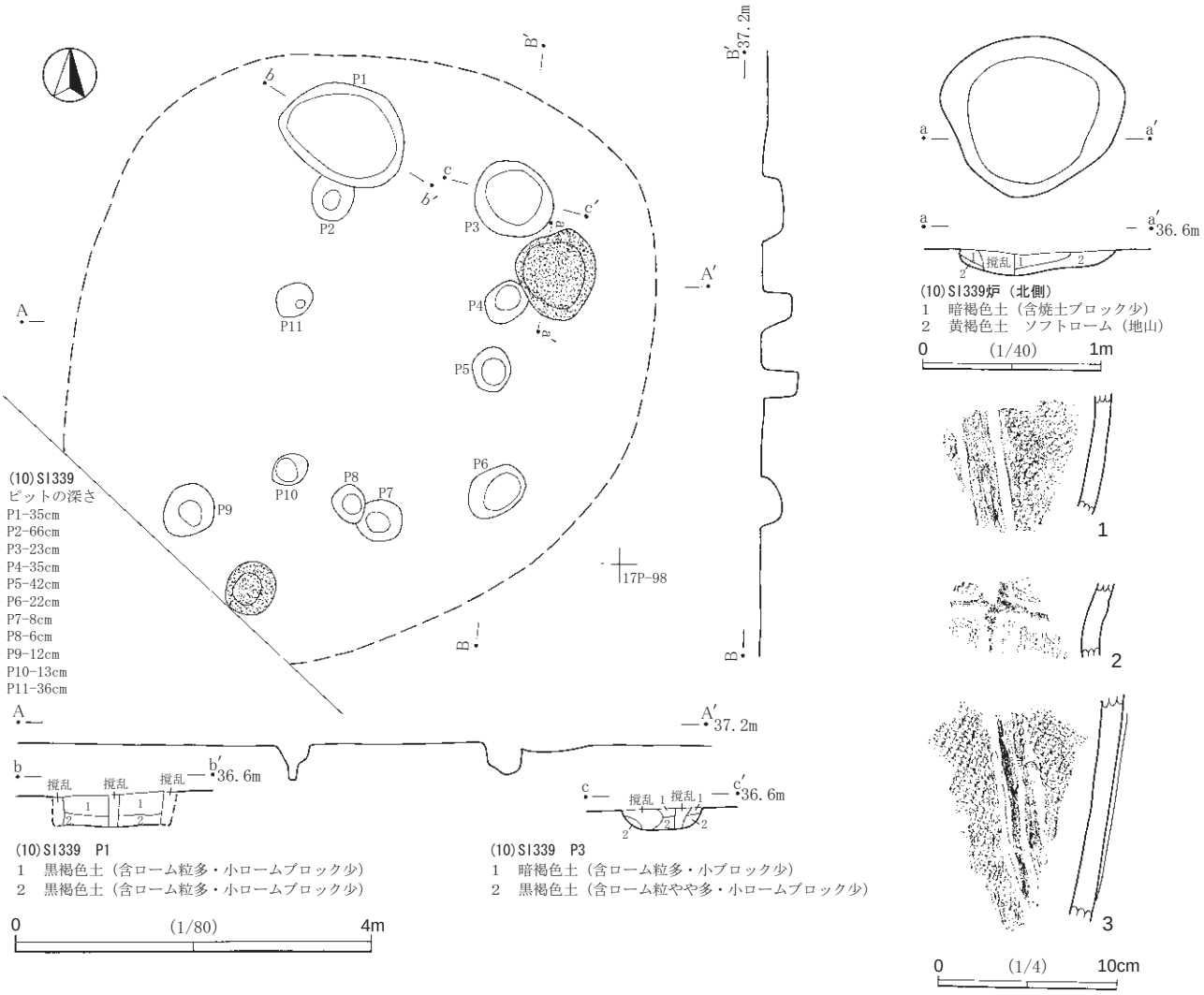
遺物は、土器が出土したが、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は３ｂ期～３ｃ期と考えられる。

土器（第56図、図版71）

１は磨消懸垂文、２・３は隆線により器全体に文様を施すいわゆる梶山類の一種であろう。２・３は加曽利Ｅ3式新段階、１はやや古く中段階であろう。

(10) SI341（第57図、図版10）

遺跡北西部、17Ｐ－89・98・99グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは炉を中心に円形に配列される。北西側は径約30cm～50cmの大型のもの、南東側は径20cm内外の小ピットが多い。



第56図 (10) SI339

炉は径68㎝～73㎝、深さ38㎝の不整円形を呈する。覆土に含まれる焼土は少量であった。

遺物は、土器・土製品・石器が出土した。６は床面上から出土した。２～６の土器から本遺構の時期は３ｃ期と考えたい。

土製品（第57図、図版112）

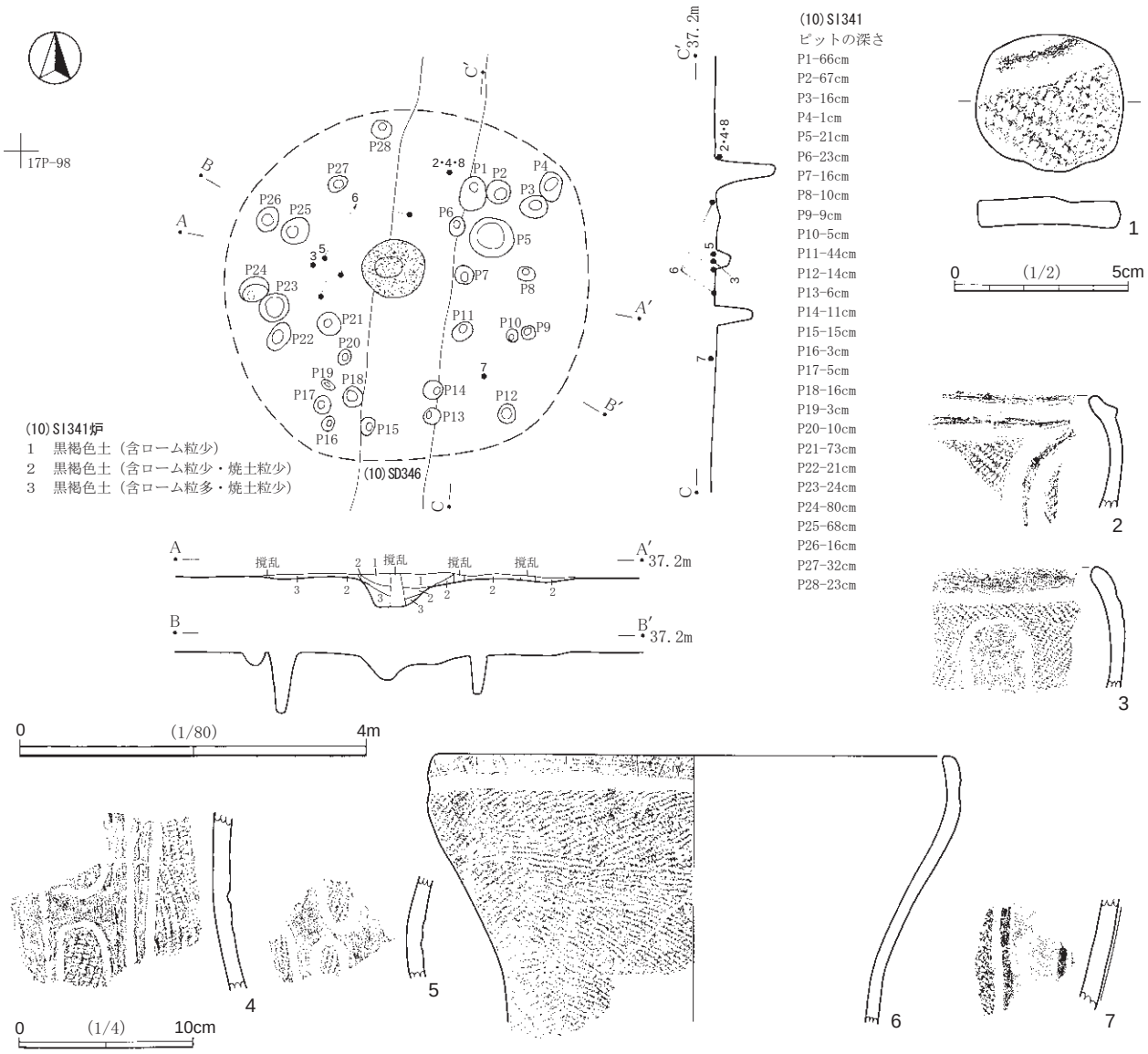
１は土製円板である。周縁は打ち欠きのみで、断面三角形に近い隆線文様が残る。

土器（第57図、図版71）

２は隆線により大型の渦巻文を構成するものと思われる。３は口縁直下の無文帯を太い沈線で画し、その下に内部を無文とした逆Ｕ字状の沈線区画文を施す。４・５は同一個体で、Ｕ字状、逆Ｕ字状の沈線区画内に縄文を充填する。沈線は太い。６は口径30㎝を測る個体で、口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。キャリパー型の器形であるが、口縁部の内弯度は弱く、くびれの度合いも強くない。７は微隆起線文が認められる。２～６は加曽利Ｅ3式新段階、７は同4式と思われる。

石器

黒曜石の剥片１点、チャート・ホルンヘルスの砕片が各１点出土した。



第57図　(10) SI341

(10) SI342（第58図、図版10）

遺跡北西部、17Ｐ－79、17Ｑ－70グリッドに位置する。平面形は東西方向に長い略円形で、長軸3.36m、短軸3.07m、深さ25cm を測る。壁下には北西側・南東側を除いて断続的に周溝が施されている。ピット７か所はいずれも壁近くで検出された。P1は径70cm ～80cm、深さ30cm の土坑状である。その他は小型で、壁柱穴と考えられる。炉は中央に位置し、長軸60cm、短軸48cm、深さ28cm を測る。底面付近には焼土を多く含む。

遺物は、土器・土製品・石器が北東側を中心に１・２層から出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第58図、図版52・71）

１・２は同一個体で、口縁部及び胴部に大型の渦巻文を施すものと思われる。中段のくびれ部には幅の広い無文帯が認められる。いわゆる梶山類である。３～５・10も同種のもので、３～５は１・２より渦巻文がやや退化しているように見える。６は底部のほか、口縁部及び胴上部の各1/3を欠くがほぼ完形で、

口径27㎝、現存高28㎝を測る。器形はキャリパー型で、口縁部は内弯し、くびれが強い。口縁直下の幅の狭い無文帯を沈線で画する。沈線は太くない。７はU字状、短冊状の沈線区画内に縄文を充填する。８は底部付近の破片で、左上端に沈線が認められる。９は無文地に微隆起線による文様を施す。瓢箪型ないしは壺型土器であろう。内面は赤彩されている。11～13は同一個体で、他に同大の破片が５点ある。櫛歯条線文を全面に施し、くびれ部及び胴部に粗大な指頭状圧痕が施された隆帯を施す。14はこれらとは異なる櫛歯条線文の土器である。大部分は加曽利Ｅ3式新段階と思われる。11～13は曽利式系土器でこれらより古く混在であろう。

土製品（第58図、図版112）

15～18は土製円板である。15・17は周縁が打ち欠きのみで、16は磨りがやや浅く、18は磨りが深い。15はいわゆる梶山類である。17は磨消懸垂文が残る。

石器（第58図、図版115）

19～21は石鏃である。いずれも凹基無茎鏃で、19は先端部が欠損している。石材はチャート（19・21）とガラス質黒色安山岩（20）からなる。22･23は石鏃未成品である。石材はいずれも信州系黒曜石である。22の右側縁には凹基の一部が残存しており、再加工品の可能性が高い。図示した以外では、チャート製の石鏃１点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃・石鏃未成品各１点、黒曜石・緑色凝灰岩・ガラス質黒色安山岩・チャートの剥片18点、チャート・黒曜石の砕片33点が出土した。

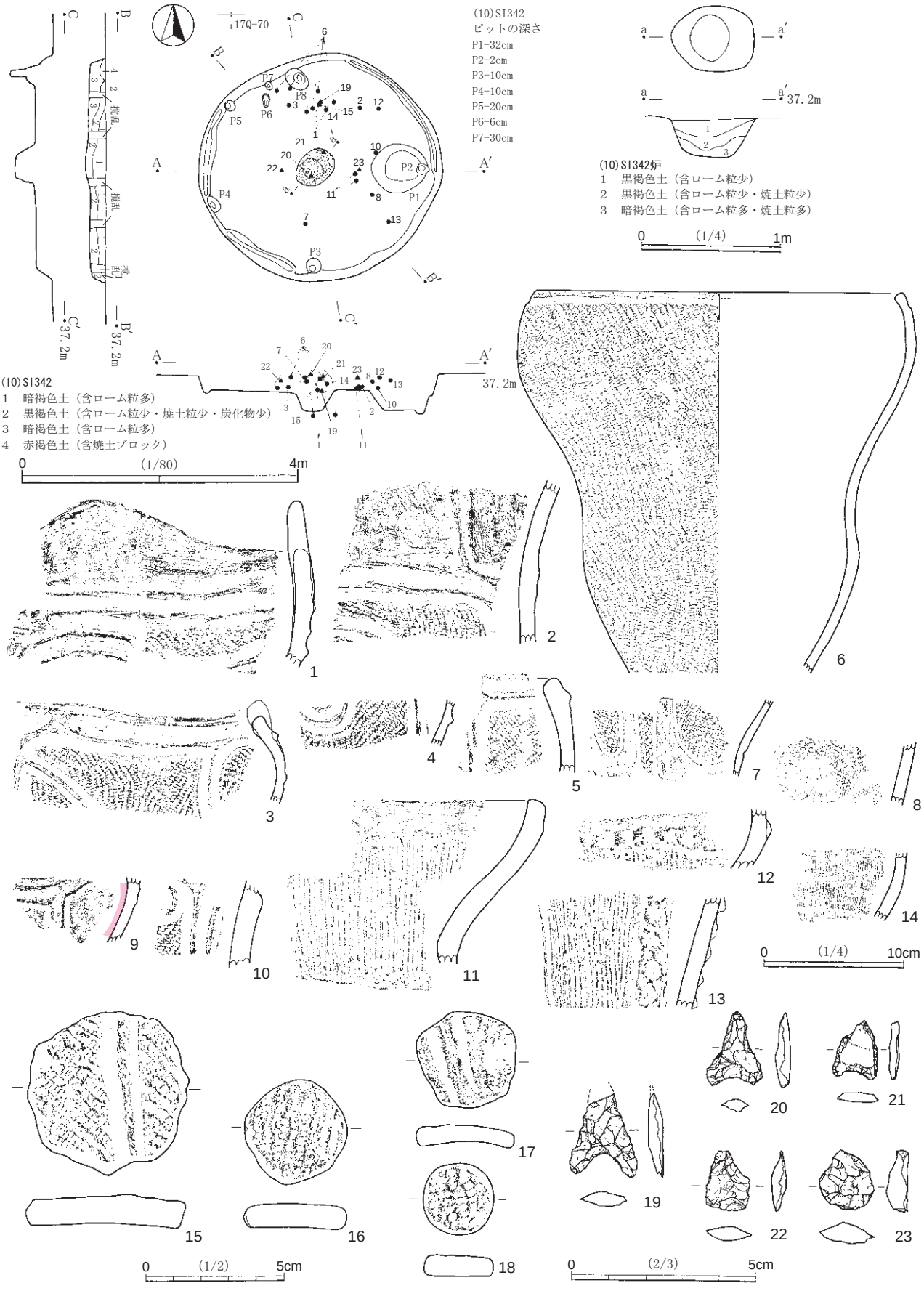
(10) SI353（第59図、図版10）

遺跡北西部､18Q－00･10･11グリッドに位置する｡平面形は不整な楕円形を呈する｡長軸3.81m､短軸3.25m、深さ23㎝を測る。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体とする。ピットは北東及び南西壁側で検出された。いずれも小型で、壁柱穴と考えられる。炉は不整円形を呈し、径84㎝～88㎝、深さ66㎝を測る。土坑上に設置されている土坑は主にロームブロックによって40㎝～50㎝埋め戻されており、炉の底面は床面から15㎝～20㎝である。

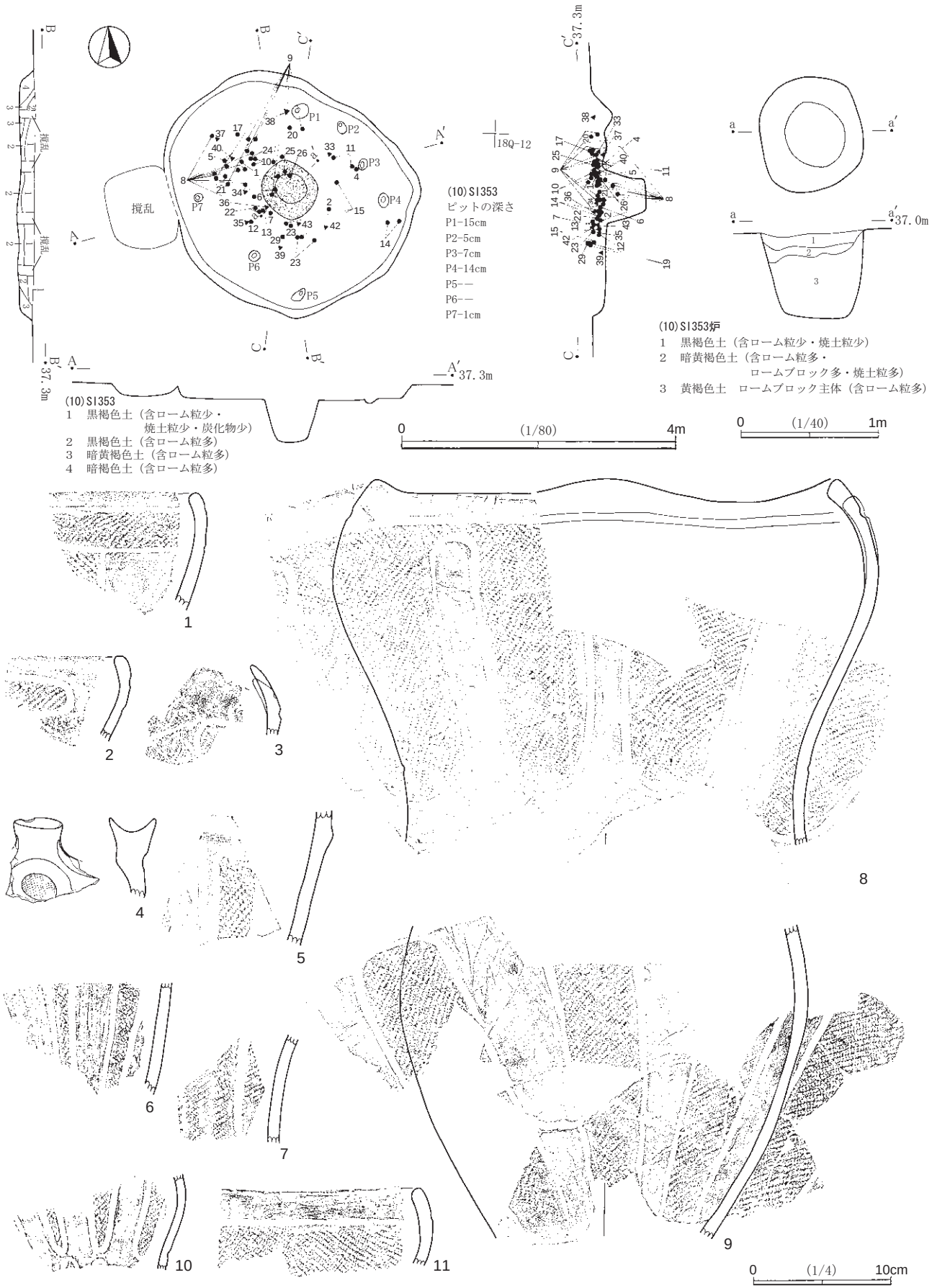
遺物は、土器・土製品・石器が炉周辺の１・２層を中心に出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第59・60図、図版52・72）

１・２は沈線による枠状の口縁部文様を施す。１の胴部磨消懸垂文は幅が広い。３は小型の舌状突起を持つ破片で、口縁部文様は雑な区画となっている。４は盃状の突起を持つ。突起下には渦巻文が退化した円文を施す。５は口縁部文様帯との境を低い隆線で画し、胴部に蕨手文を伴う磨消懸垂文を施す。６は胴下部の破片で、磨消懸垂文を施す。縄文帯がきわめて狭い。７は単一の沈線が垂下する。８・９は同一個体で、口縁部から胴上半と胴下半がそれぞれ約1/3遺存する。推定口径34㎝とやや大型で、キャリパー型の器形をなし、口縁部は内弯してくびれが強い。ゆるい波状口縁で、口縁直下の無文帯を沈線で画し、U字状の連続区画を描いて縄文を充填している。胴下部は逆U字状区画文となり、上部区画文様とは10と異なり対応していない。沈線は太い。10は８・９と近似の文様で、上下の縄文を充填した区画文様が対応している。11は口縁直下の無文帯を沈線で区画するだけのようである。12～18は隆線による大型の渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。12は口縁部に窓枠状の区画文と思われる文様が認められる。13から17は単一隆線である。18には内面及び表面の無文帯に赤彩が残る。19は縄文、20～23は櫛歯条線文の土器である。24は瓢箪型ないしは壺型土器と思われ、無文地に微隆起線文様を施す。25は底部片、26は底部が完存する。ともに使用による擦れが残る。１～７は加曽利Ｅ3式新段階、８～11は同3-4式、14・15は3-4式に



第58図 (10) SI342



第59図 (10) SI353 (1)

第60図　(10) SI353 (2)

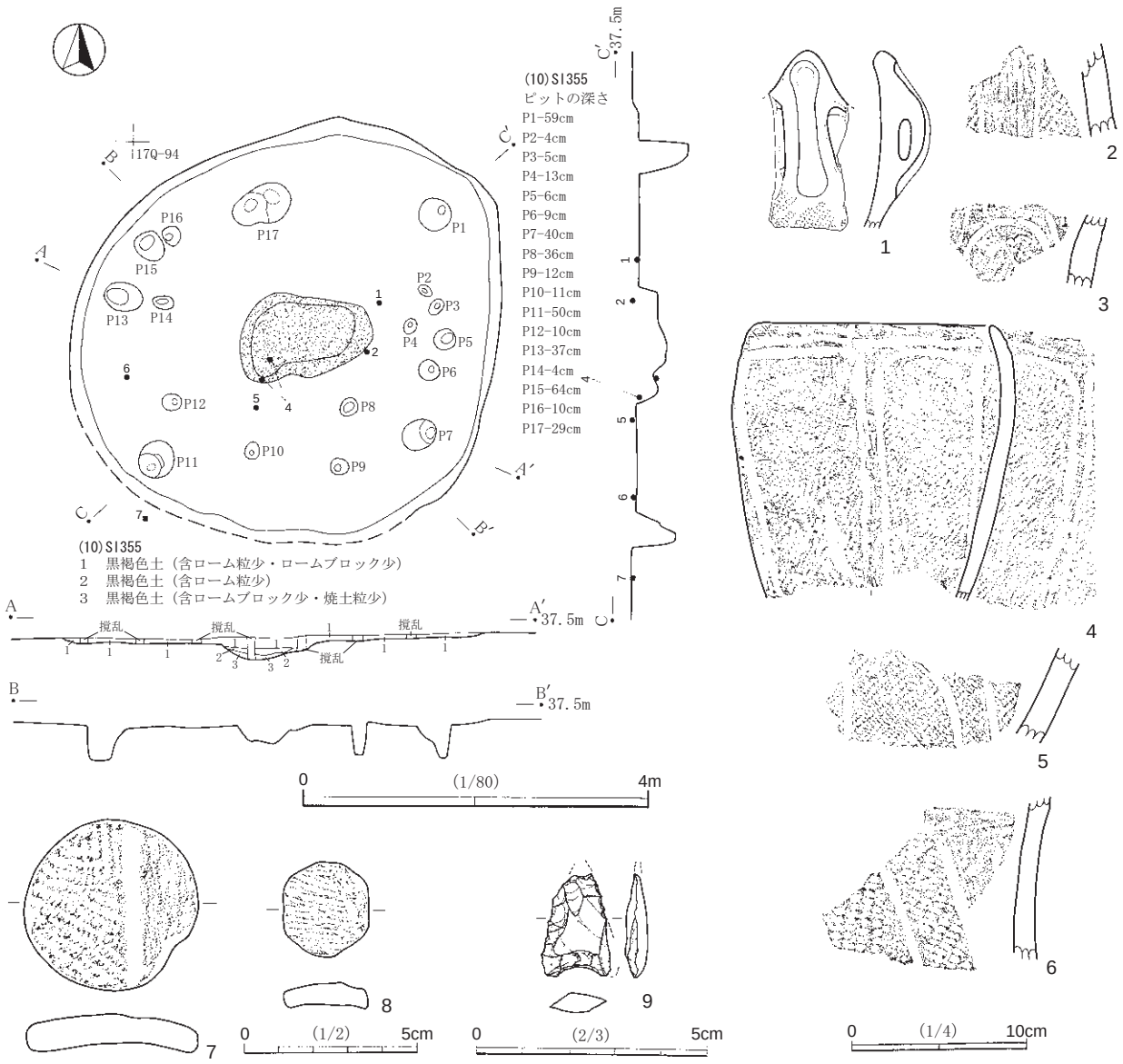
伴うものであろう。12・16はこれらよりやや古いと思われる。

土製品（第60図、図版112）

27～32は土製円板である。27の周縁は磨りが深い。28は打ち欠きのみ、29は磨りがごく浅い。30は磨りがやや浅く、31・32は磨りが深いが一定ではない。また、27は両面穿孔で、28は両面穿孔であるが貫通していない。29はいわゆる梶山類で、30は太めの沈線、32は櫛歯条線文が認められる。

石器（第60図、図版115）

33～39は石鏃である。石材はガラス質黒色安山岩1点（33)、黒曜石３点（34､36･37)、チャート３点（35、



第61図　(10) SI355

38・39）となっている。いずれも欠損しているが、33と37の先端部には、石鏃等の刺突具に特有の使用痕（「縦溝状剥離」）が看取される。40･41は石鏃未成品である。いずれもチャート製である。42は敲石である。安山岩製で両端と片面中央部に敲打痕がみられる。43は磨石類である。器体の約半分が欠損しており、表裏とも中央部に凹み痕がみられる。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品６点・楔形石器１点・石核１点・剥片13点・砕片31点、黒曜石の剥片13点・砕片12点、石英安山岩製の磨石類１点、砂岩製の敲石１点、ガラス質黒色安山岩の剥片４点、トロトロ石の砕片１点が出土した。

(10) SI355（第61図、図版10）

遺跡北西部、17Q－93・94・95、18Q－04グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形を呈する。長軸5.10m、短軸5.00m、深さ８㎝を測る。ピットは17か所検出された。比較的規模が大きく、方形に配列されるP1・P7・P11・P15は主柱穴である。一部のピットは重複しており、炉も作り替えられていることから、建て替えが行われたと考えられる。炉は東西方向に長い東側の炉と南北方向に長い西側の炉が重複してい

るが、新旧関係は不明である。長軸1.56m、短軸1.05m、深さ21㎝を測る。

遺物は、土器・土製品・石器が床面上を中心に出土した。４の小型の深鉢は西側炉の南西側底面上から出土した。４から、所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第61図、図版52・72）

１は凹線が加えられた橋状突起である。２は磨消懸垂文でやや幅が広い。３・６は同一個体で、６は上端に口縁部文様帯の背の低い区画隆線が残り、その下の磨消懸垂文はやや斜めとなる。３は沈線による逆Ｕ字状区画内に縄文を充填している。４は炉体土器で、口径14㎝、残存高16㎝を測る。底部及び口縁の一部を欠くほかは完存する。全体に二次的火熱を受け、器面は内外面とも著しくあばた状に荒れている。内弯した口縁直下に沈線を引き、その下に縄文を充填した逆Ｕ字状文を７単位配する。逆Ｕ字状文間は狭い磨消帯となるが、１か所のみそれがない。５は懸垂文が磨り消されていない。２～６のいずれの沈線も太めである。５は加曽利Ｅ2式、他は同3式で、４は新段階であろう。

土製品（第61図、図版112）

７・８は土製円板である。７は周縁の磨りが深く、８は磨りが浅い。７は口縁直下の無文帯を画する太い沈線が、８は櫛歯条線文が残る。

石器（第61図、図版115）

９は凹基無茎鏃である。チャート製で先端部が欠損している。加工が粗雑であり、未成品の可能性もある。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品・剥片各１点、ガラス質黒色安山岩の剥片・砕片各１点、黒曜石の砕片１点が出土した。

(10) SI356（第62図、図版10）

遺跡北西部、18Ｑ－07・08・17・18グリッドに位置する。北東側は調査区外に及んでいる。楕円形を呈すると思われる。南北方向の軸長は5.03m、深さ21㎝を測る。ピットは15か所検出された。深さ数センチの浅いものが多いが、80㎝以上を測るP7・P13は主柱穴となる可能性がある。炉は不整な楕円形を呈する。長軸1.23m、短軸1.17m、深さ26㎝を測る。底面付近の覆土には焼土が多く含まれていた。

遺物は、土器・土製品・石器が出土した。覆土上層の１層から出土したものが多い。所属時期は３ｃ期と考えたい。

土器（第62図、図版72）

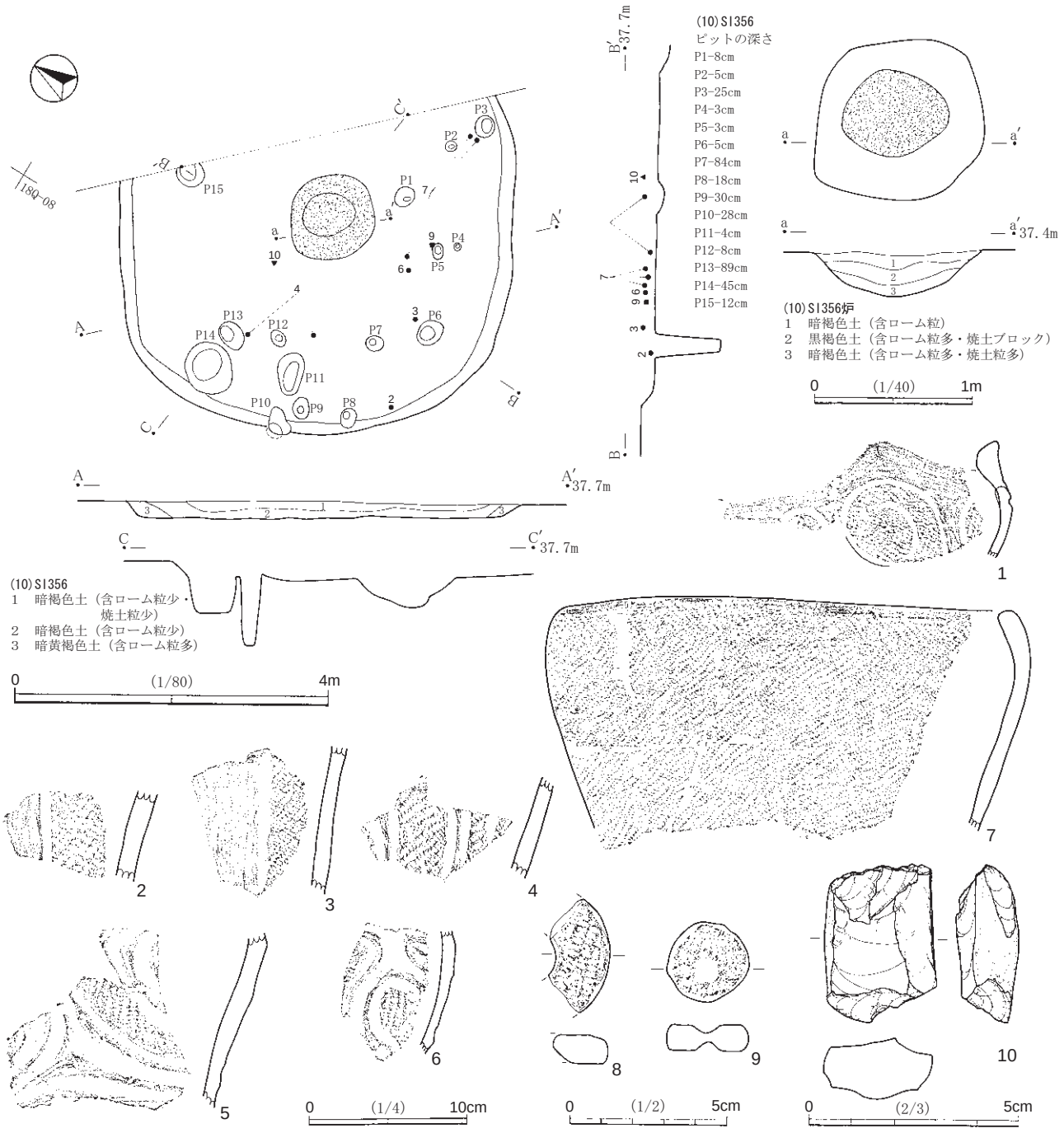
１は小型の舌状突起を持つ口縁部破片で、突起下にやや太めの沈線で渦巻文を描く。その左右は縄文を充填した逆Ｕ字状文となる。２・３は幅の広い磨消懸垂文、４～６は低い隆線により渦巻文を器面全体に施すいわゆる梶山類である。７は推定口径29㎝を測る大型破片で、口縁部のみ縄文を横位施文し、以下は縦位施文としている。胎土にすりつぶした土器片粒を混入する。いずれも、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第62図、図版356）

８・９は土製円板で、８は周縁の磨りが深く９はやや浅い。８は両面穿孔であるが、裏面の孔が格段に大きい。９は両面穿孔であるが貫通していない。表面の孔は中心からはずれている。

石器（第62図、図版115）

10は楔形石器である。下端部が欠損している。自然面が表裏にみられることから、素材が扁平な小型礫であったことがわかる。図示した以外では、チャートの石核１点・剥片３点・砕片６点、ガラス質黒色安山岩の剥片１点が出土した。

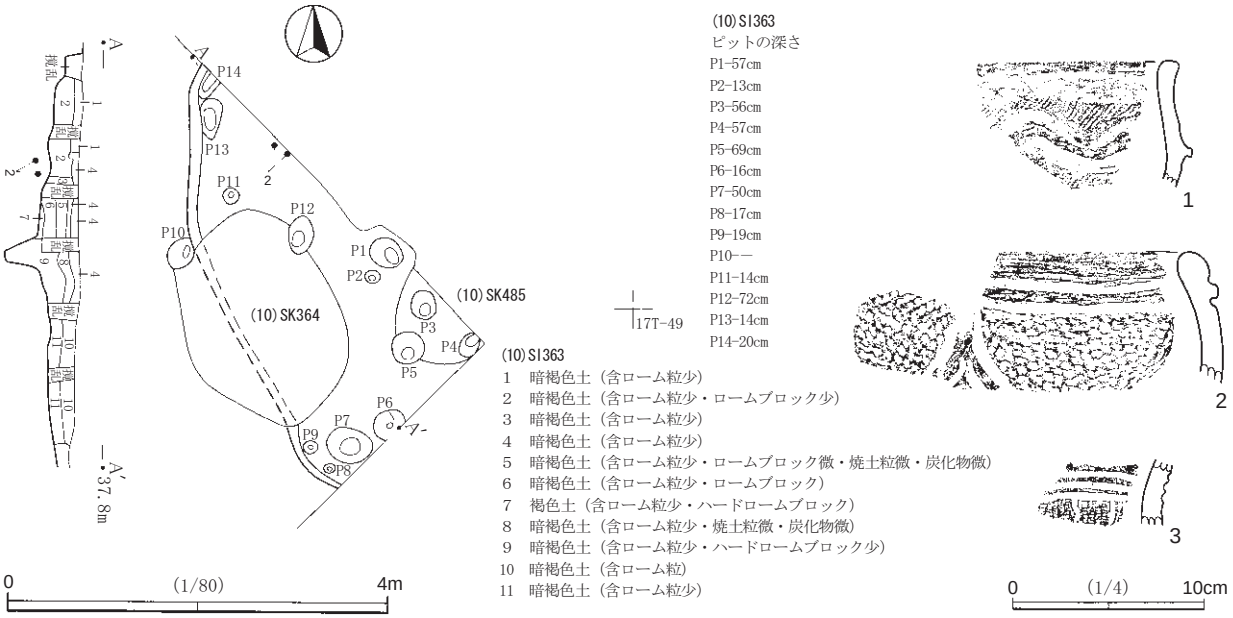


第62図　(10) SI356

(10) SI363（第63図、図版11）

遺跡北西部、17Ｔ－37・38・48グリッドに位置する。東・南側は調査区外に及んでおり、北西側を中心とする一部分を検出したのみである。また、(10) SK364・(10) SK485と重複する。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする。ピットは14か所検出された。深さ50㎝以上を測るものは東側の調査区際付近に集中する。

遺物は、土器・石器が少量出土した。２は床面上から出土した。この２から所属時期は２ａ期としておきたい。



第63図　(10) SI363

土器（第63図、図版72）

１は口縁部に隆帯による波状文を施す。２は口縁部文様帯内の隆線が剣先状となる。３は３条の沈線で胴部文様帯を区画している。１は加曽利Ｅ1式、２・３は同２式古段階であろう。

石器

黒曜石・流紋岩の剝片が各１点出土した。

(10) SI459（第64図）

遺跡北西部、17Ｔ−10・11グリッドに位置する。(10) SK461、奈良・平安時代の (10) SI396が重複し、(10) SK461より新しい。卵円形を呈し、長軸5.52mを測る。ピットは13か所検出された。P1・P2・P6・P9・P10・P12は深さ52㎝～70㎝を測り、主柱穴と考えられる。P7・P8は出入口部施設と思われる。炉は楕円形を呈し、長軸97㎝、短軸86㎝、深さ30㎝を測る。覆土中層に焼土を多く含む。

遺物は、炉及びその北東側を中心に土器・土製品・石器が出土した。２・３・４の土器は炉内から出土した。この炉内出土土器から本遺構の時期は１ａ期と考えられる。

土製品（第64図、図版112）

１は土器片錘で、半欠品である。

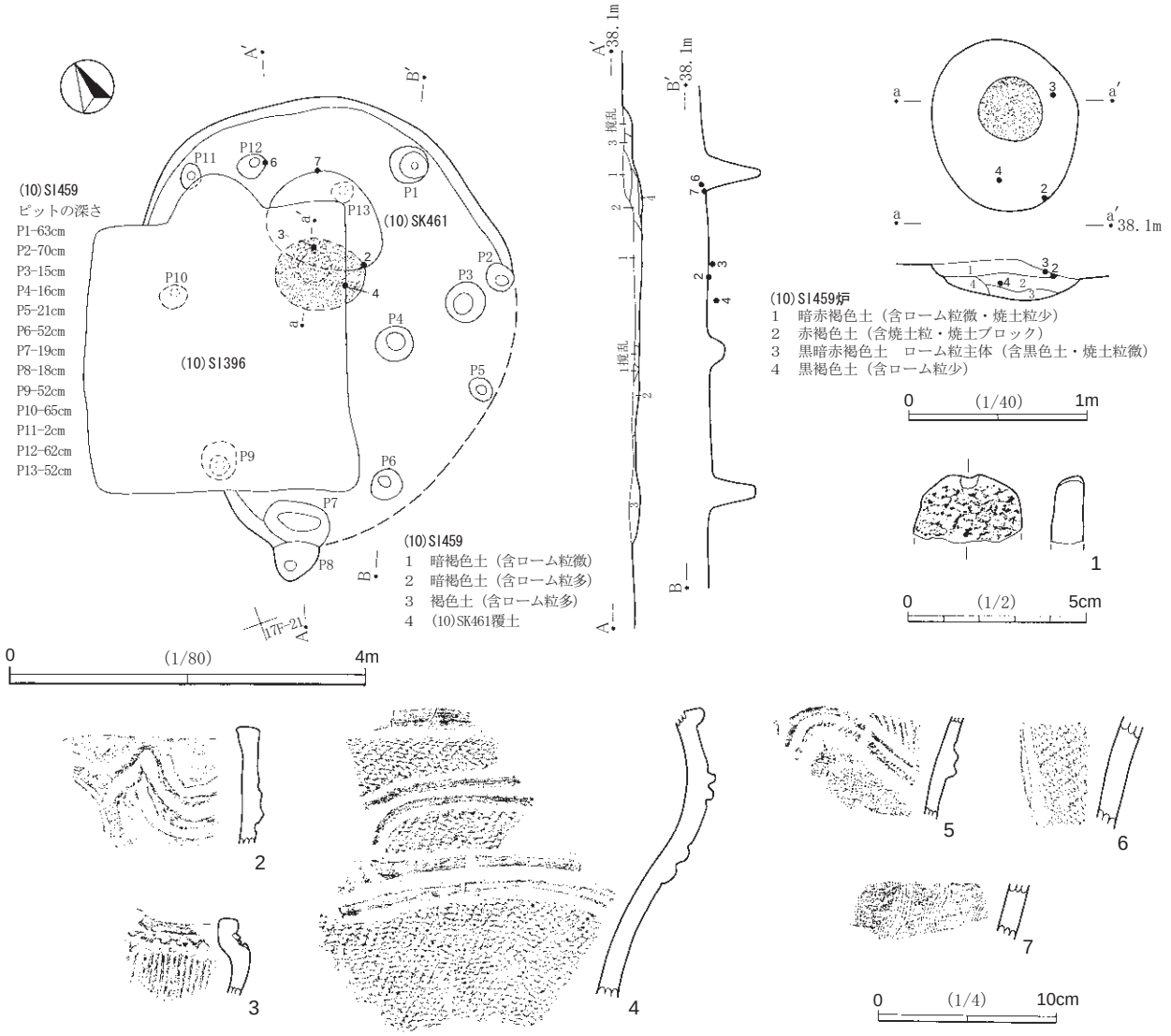
土器（第64図、図版72）

２は無文地に背割れ隆帯で不規則な波状文様を施す。３は口縁直下に交互刺突文を、その下に集合沈線文を施す。４は背割れ隆帯によるクランク文である。５は背割れ隆帯の間に鋭い刻み目が入る。６は幅の狭い磨消懸垂文、７は櫛歯条線文を施す。２は勝坂式末期と思われる。３～５は加曽利Ｅ1式古段階であろう。６は混在であろう。

石器

黒曜石片が１点出土した。

(10) SI489・(10) SI492・(10) SI493（第65図、図版11）



第64図 (10) SI459

遺跡北西部、17S－57・58・67・68グリッドに位置する。いずれも炉の痕跡とピットが隣接して検出され、壁の掘り込みは確認できなかった。(10) SI489と (10) SI492、(10) SI492と (10) SI493は重複していると思われる。ピットは、(10) SI489は17か所、(10) SI492は９か所、(10) SI493は10か所検出された。円形ないし不規則な配列であった。

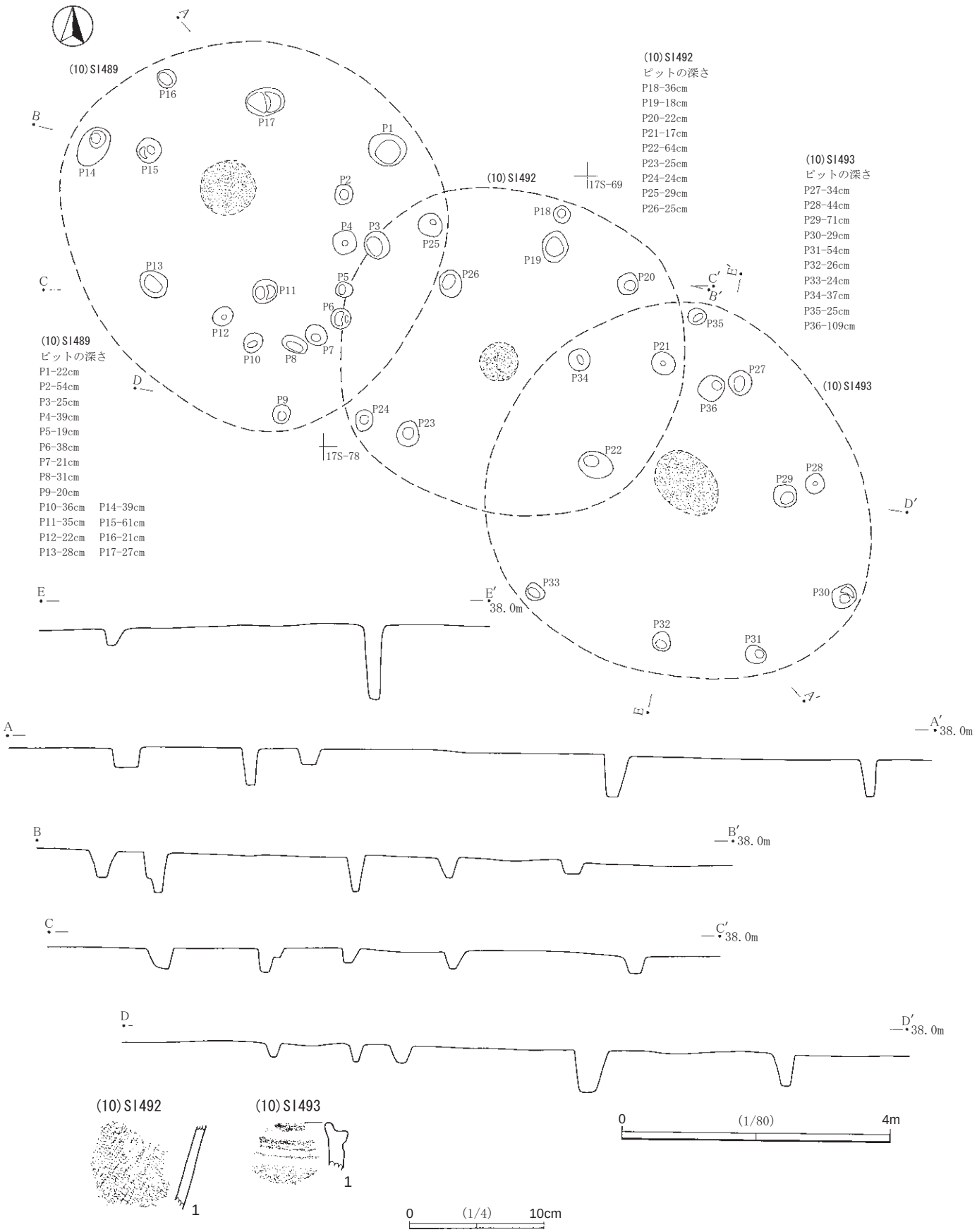
遺物は、(10) SI489は P15、(10) SI492は P5、(10) SI493は P4・P10から土器が出土した。３軒の住居跡とも遺物が少なく、所属時期は確定できない。

土器（第65図、図版72）

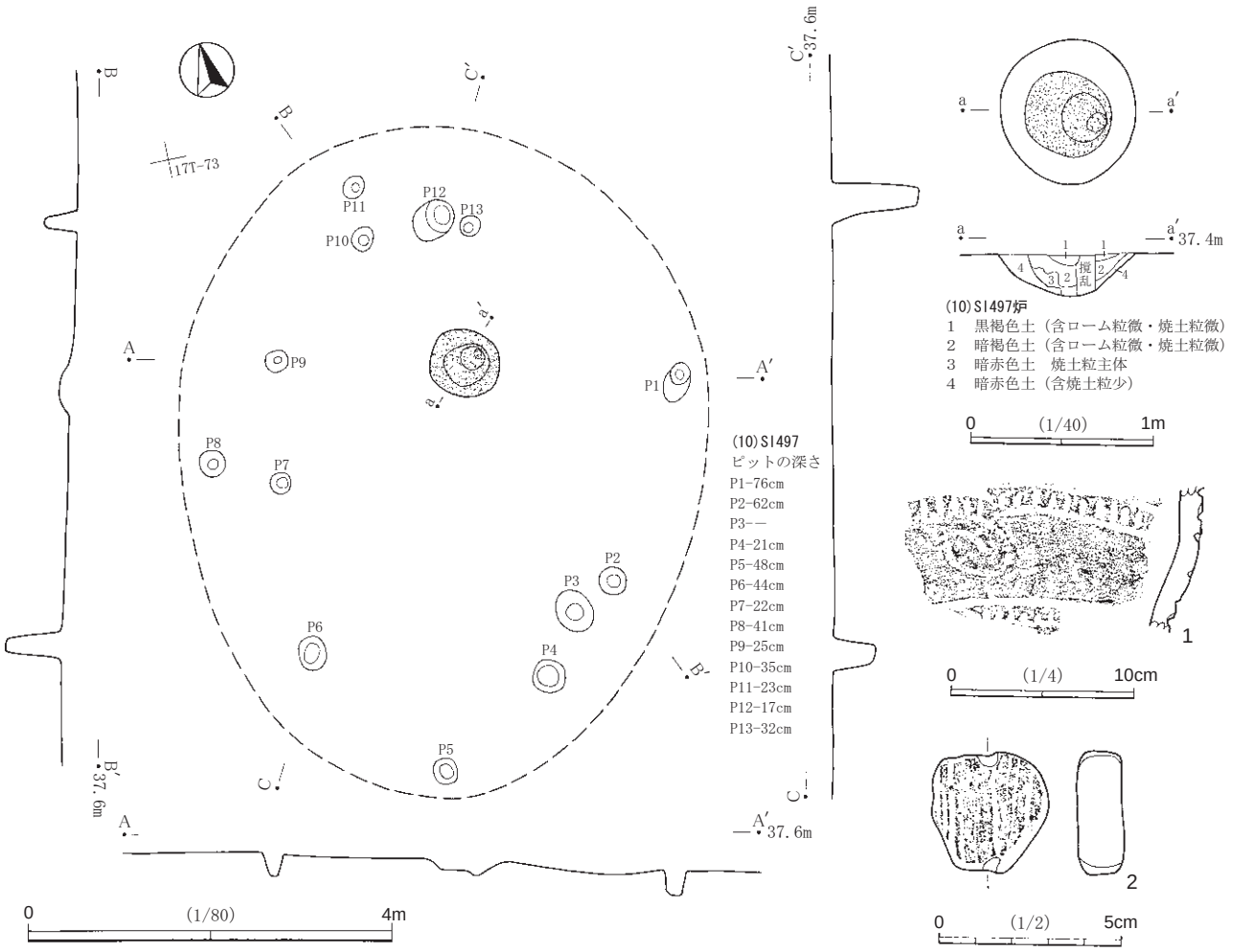
(10) SI492の１は縄文のみ、(10) SI493の１は口縁下の隆線が突帯に近い。いずれも加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SI497（第66図、図版11）

遺跡北西部、17S－72・73・74・83・84グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは概ね楕円形に配列される。P1・P2・P12は62cm 以上と比較的深い。炉は、平面形は円形、断面形は擂



第65図　(10) SI489・(10) SI492・(10) SI493



第66図 (10) SI497

り鉢状を呈し、径77㎝～81㎝を測る。中央付近の底面は火熱により硬化しており、直上には焼土が多くみられた。

遺物は、炉・ピット等から少量の土器・土製品が出土した。１はP3、２の土器片錘はP5から出土した。１から所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第66図、図版72）

１は刻み目が加えられた平行沈線文が上下２段認められる。上段の平行沈線は片側末端が押引文となり渦巻文を描く。いわゆる中峠式であろう。

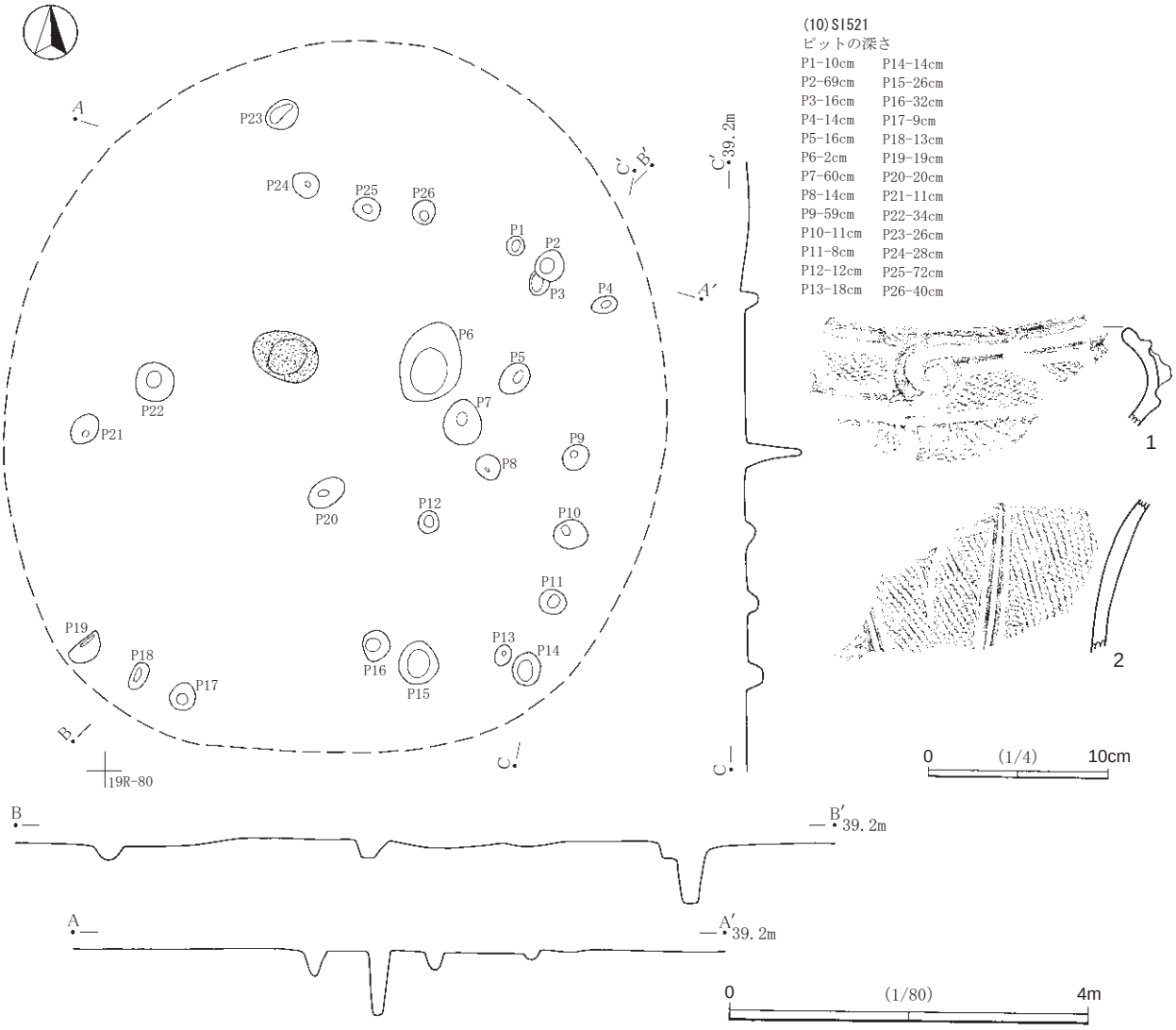
土製品（第66図、図版112）

２は土器片錘である。櫛歯条線文が残る。

(10) SI521（第67図）

遺跡北東部、19Q－69・79、19R－60・61・70・71グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは26か所検出された。配置に規則性は見出せず、炉の東側を中心として検出された。炉は楕円形を呈し、長軸74㎝、短軸54㎝を測る。

遺物は、ピット内を中心に少量の土器が出土した。１・２はともにP7から出土した。所属時期は２ｂ



第67図　(10) SI521

期と考えられる。

土器（第67図、図版72）

１・２は同一個体である。口縁部文様帯の渦巻文はしっかりと渦が巻き、胴部文様帯には３条１単位の懸垂文と剣先文が認められる。加曽利Ｅ2式新段階であろう。

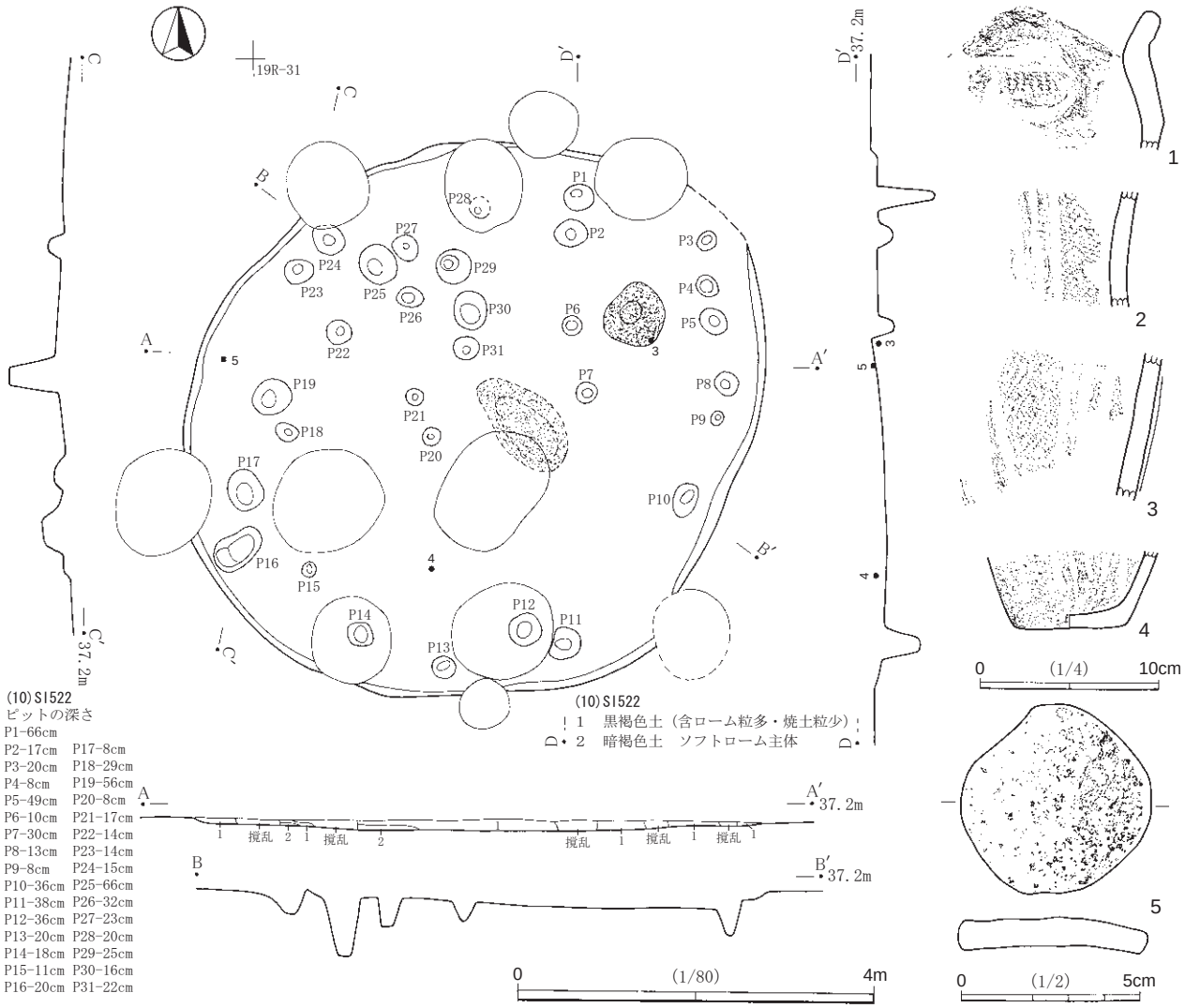
(10) SI522（第68図、図版11）

遺跡北東部、19Ｒ－30・31・32・40・41グリッドに位置する。奈良・平安時代の掘立柱建物跡群と重複する。卵円形を呈し、長軸7.00m、短軸6.00m、深さ12cm を測る。ピットは31か所検出された。壁下及び北西側に分布する。深さ10cm ～20cm 台を測るものが多い。炉は２か所検出された。北西側の炉は径約70cm の不整円形、中央付近に位置する炉は長軸70cm、短軸52cm の楕円形を呈する。

遺物は、炉内及び覆土中から土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｂ期～３ｃ期としておきたい。

土器（第68図、図版52・72）

１は舌状突起を持つ口縁部破片で、突起下にごく低い隆線により形骸化した渦巻文が認められる。２・



第68図 (10) SI522

４には磨消懸垂文が、３は２条１単位の隆線が垂下する。４は底部が完存しており、底径は6㎝を測る。いずれも加曽利Ｅ3式で、１は中ないし新段階、３はいわゆる梶山類であろう。

土製品（第68図、図版112）

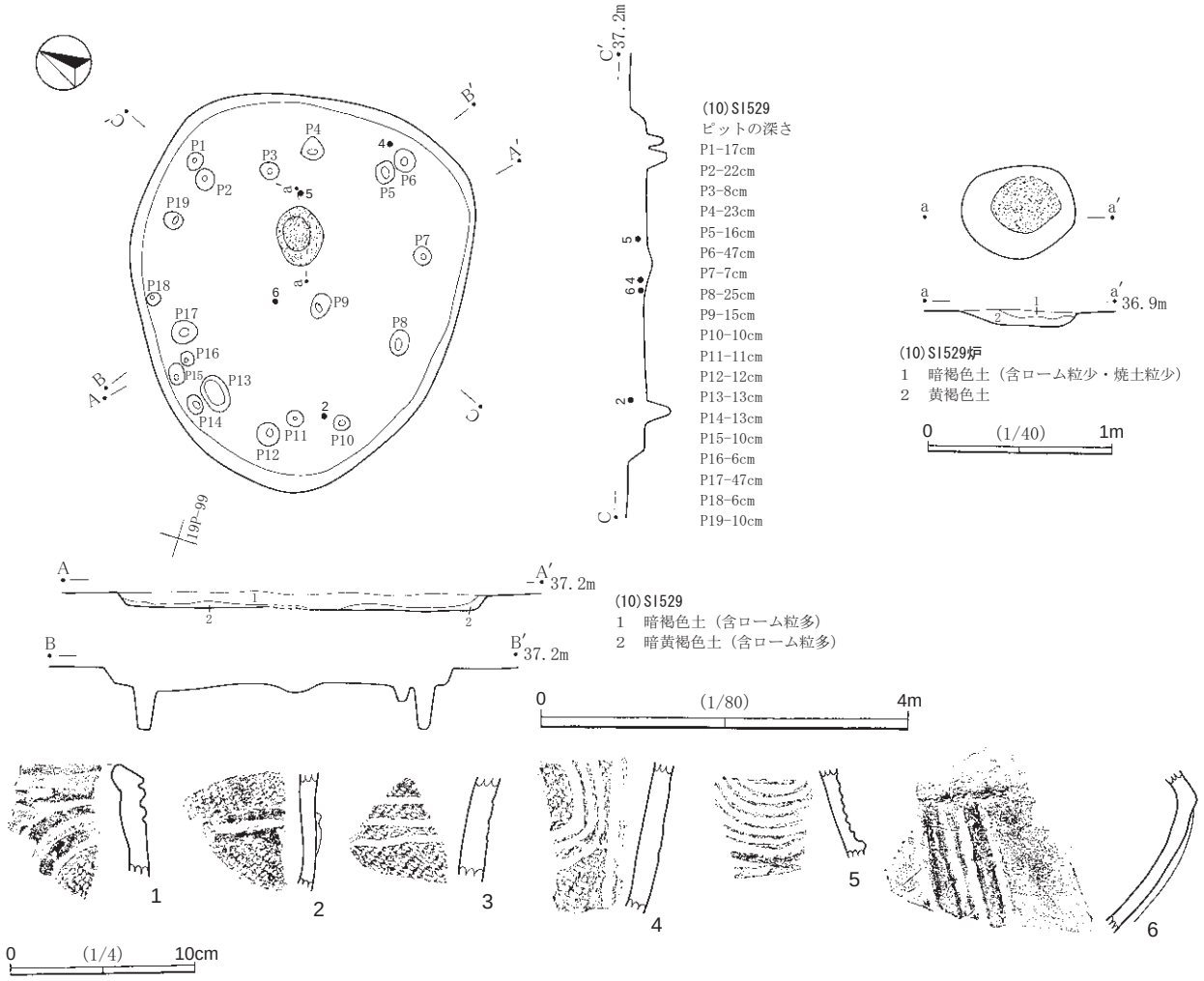
５は土製円板である。周縁の磨りは深い。表裏面とも土器使用時の二次的火熱を受け、表面はあばた状に荒れている。

石器

チャートの石核が１点出土した。

(10) SI529（第69図、図版11）

遺跡北東部、19Ｐ－89・99、19Ｑ－80・81グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸4.37m、短軸3.72m、深さ20㎝を測る。ピットは19か所検出された。壁付近に約１m間隔で比較的均等に配列される。深さ10㎝～20㎝台のものが多く、壁柱穴と考えられるが、P12・P17はともに深さ47㎝を測る。炉は楕円形を呈し、長軸63㎝、短軸54㎝、深さ７㎝を測る。底面は火熱により硬化していた。



第69図 (10) SI529

遺物は、覆土中より土器が出土した。破片数は多いが、接合するものは少なかった。所属時期は１期と考えられる。

土器（第69図、図版72）

１・２は背割れ隆帯を施す。３は胴部文様帯の区画文、４は磨り消されない懸垂文が認められる。５は口縁部文様帯を充填する集合沈線文、６は有孔鍔付土器になると思われる。１・２・５は加曽利Ｅ1式であろう。

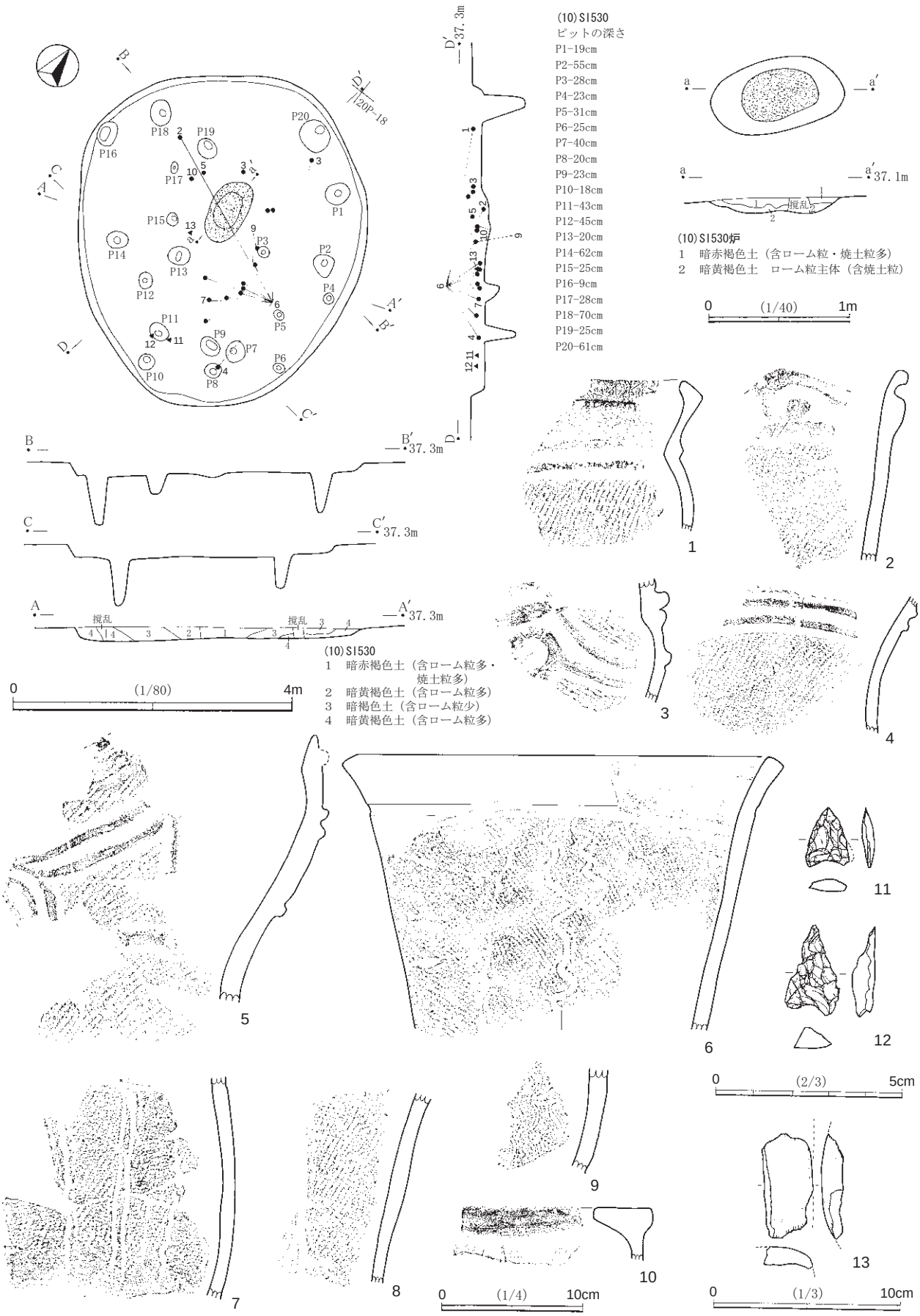
(10) SI530（第70図、図版11）

遺跡北東部、20Ｐ－17・18・27・28グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸4.93m、短軸4.20m、深さ21㎝を測る。ピットは20か所検出された。壁付近に配列されるP2・P7・P11・P14・P18・P20の深さは40㎝～70㎝を測る。炉は楕円形を呈し、長軸97㎝、短軸53㎝、深さ13㎝を測る。覆土上層に焼土を多く含む。

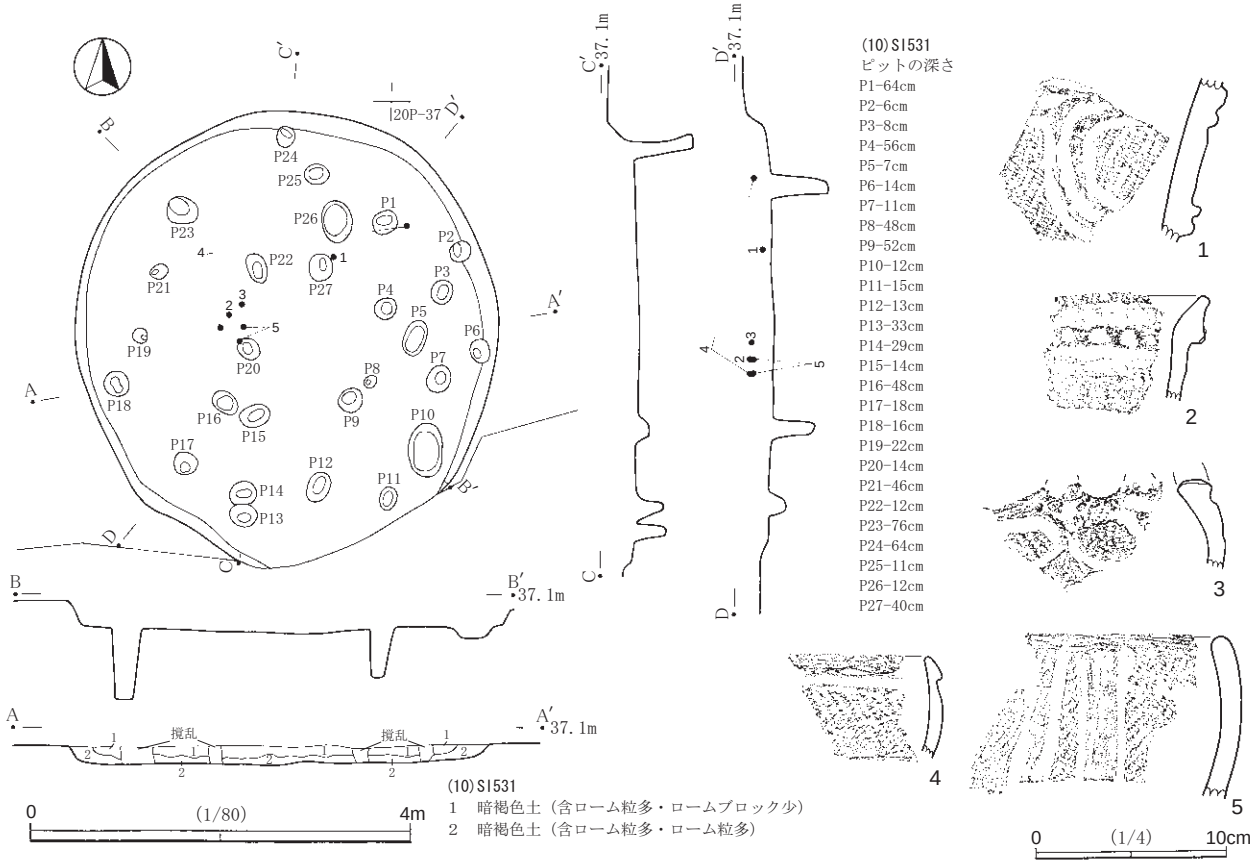
遺物は、中央付近を中心に土器・石器が出土した。覆土中の床面よりやや浮いた状態で出土したものが多い。所属時期は１ｂ期と考えられる。

土器（第70図、図版73）

１は屈折した口縁下が無文帯となる。内面に炭化物が広く付着し、表面は二次的火熱を受けてあばた状



第70図 (10) SI530



第71図 (10) SI531

に荒れている。２は舌状突起部に隆帯による半渦巻文を配する。３・４は２本隆線により、５は背割れ隆帯により口縁部文様を施す。６は推定口径30㎝、現存高20㎝を測る。外反する口縁部を無文とし、胴部に２条１単位の蛇行沈線をおそらく４単位施す。７は口縁部文様帯の区画沈線から底部直上までの破片で、磨り消されない懸垂文と蛇行沈線を交互に施す。８は磨消懸垂文、９は櫛歯条線文である。10は口縁が鍔状に厚くなる浅鉢である。大部分は加曽利Ｅ1式新段階、８は同３式であろう。

石器（第70図、図版115）

11・12は凹基無茎鏃である。いずれも黒曜石を用いている。12は分厚く形も不整形なことから未成品の可能性がある。13は定角式磨製石斧の破片である。石材は蛇紋岩であり、(7) SI206出土の７と接合関係にある。図示した以外では、黒曜石の石核１点・剥片２点・砕片４点、軽石２点が出土している。

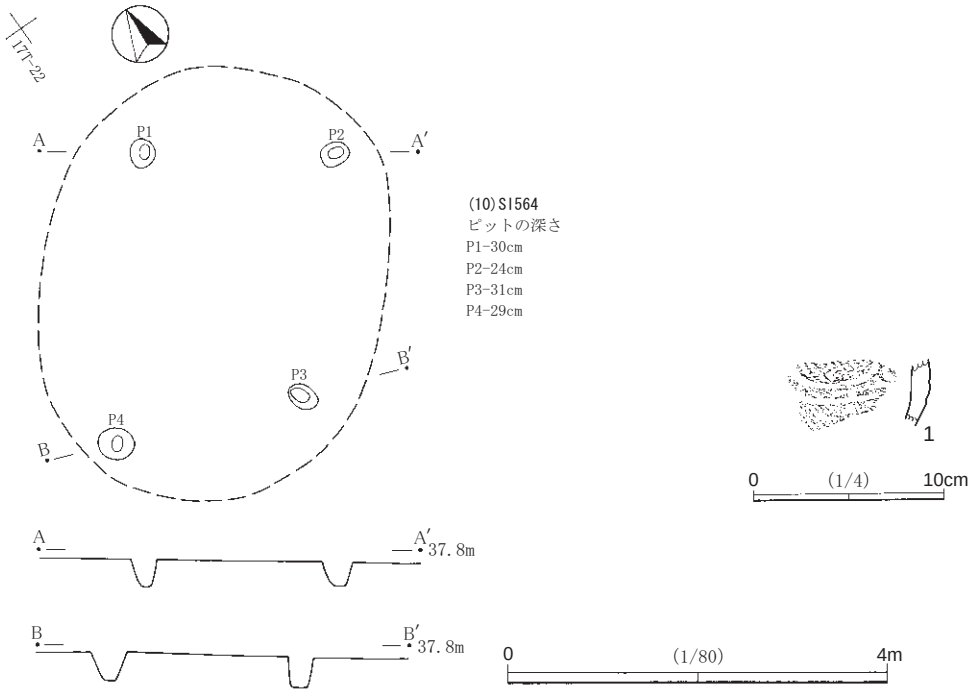
(10) SI531（第71図、図版12）

遺跡北東部、20Ｐ－36・37・46・47グリッドに位置する。南側は調査区外に及んでいた。南北に長い卵円形を呈する。規模は長軸4.80m以上、短軸4.50m、深さ30㎝を測る。ピットは27か所検出された。比較的深いP1・P4・P8・P9・P16・P21・P23・P27は北側から中央付近に分布する。炉は検出されなかった。

遺物は、中央付近の覆土上層（１層）を中心に土器・石器が出土した。遺物は２時期に分かれ、本遺構の時期判定は難しいが、古い遺物を混入とみて３ｃ期と考えたい。

土器（第71図、図版73）

１は背割れ隆帯の付く口縁部破片で、２は指頭圧痕の付く折り返し口縁となる。３・４は同一個体で、



第72図　(10) SI564

貫通孔を持つ口縁突起を欠く。口縁部文様帯は沈線で区画され、突起下に円文、その横に枠状文を配する。５は口縁部文様帯のない個体で、磨消懸垂文のみを施す。１・２は加曽利Ｅ1式、３・４は同3式新段階であろう。

石器

安山岩製の磨石類１点、軽石１点が出土した。

(10) SI564（第72図）

遺跡北東部、17Ｔ－21・22・31・32グリッドに位置する。壁の立ち上がりは確認できなかった。ピットは４か所検出された。比較的均一で主柱穴の可能性がある。深さ24㎝～31㎝を測る。炉は検出されなかった。

遺物は、ピット内から少量の土器が出土した。１はP4から出土した。出土遺物が少なく、本遺構の時期は確定できない。

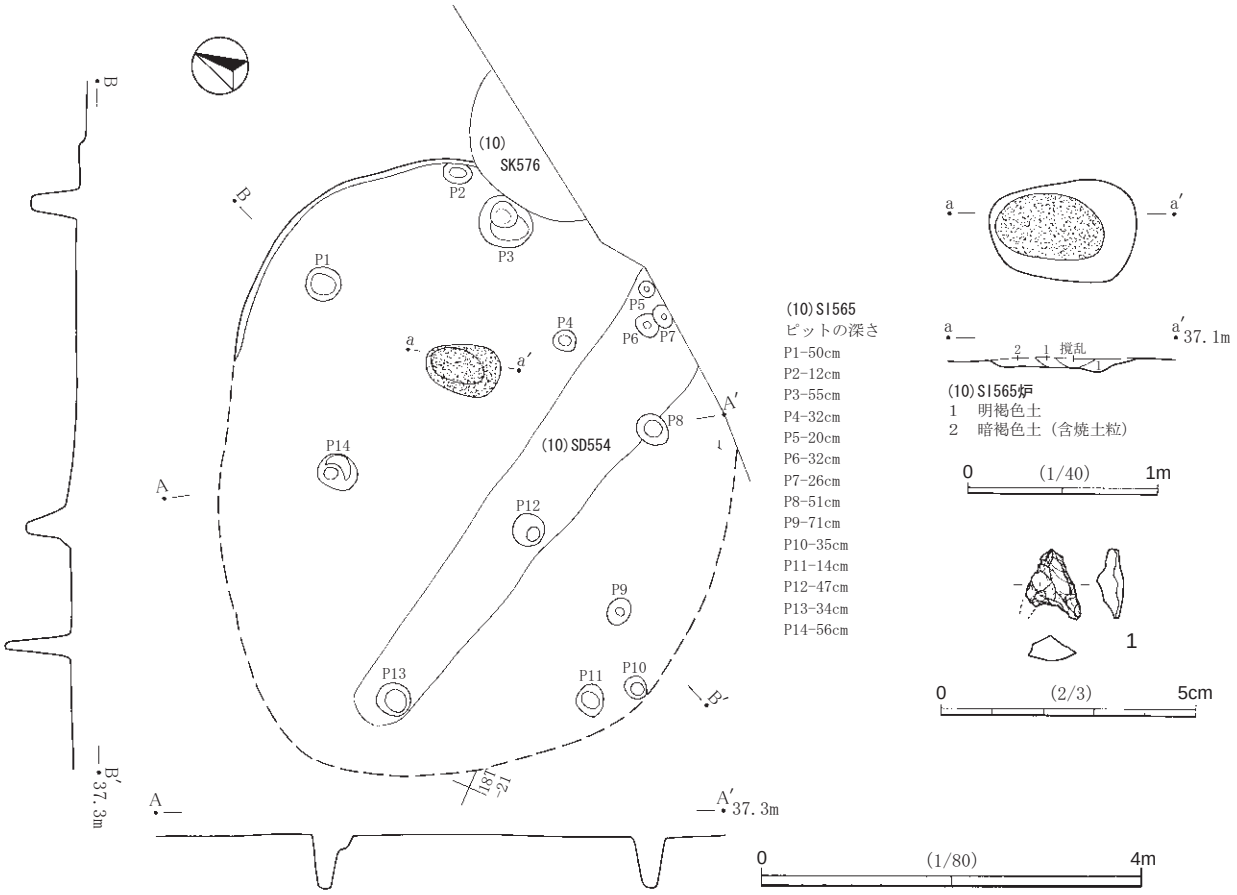
土器（第72図、図版73）

１はおそらく沈線による口縁部の枠状区画部分の破片と思われる。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SI565（第73図）

遺跡北東部、18Ｔ－01・02・11・12・21・グリッドに位置する。(10) SD554に南東側を一部切られる。壁は北東側の一部しか遺存していなかった。ピットは14か所検出された。P1・P3・P8・P12・P14は深さ47㎝～56㎝を測り比較的均一であるが、西側のピットは不統一であることから、本来東側の炉を中心とした南北を主軸とする住居であった可能性もある。炉は不整な楕円形を呈し、長軸78㎝、短軸59㎝、深さ10㎝を測る。底面は火熱により硬化していた。

遺物は少なく、加曽利Ｅ式土器の小片が１点、石器が２点出土した。所属時期は確定できない。



第73図　(10) SI565

石器（第73図、図版115）

１は石鏃である。黒曜石製の凹基無茎鏃で、先端部と片脚が欠損している。図示した以外では、黒曜石の剥片が１点出土した。

(10) SI569（第74図）

遺跡北東部、18Ｓ－51・52グリッドに位置する。壁の立ち上がりは確認できなかった。ピットは５か所検出された。炉を中心にほぼ円形に配列され、主柱穴と考えられる。深さは13㎝～31㎝を測る。炉は卵円形を呈し、長軸97㎝、短軸75㎝、深さ21㎝を測る。覆土中には焼土を多量に含む。

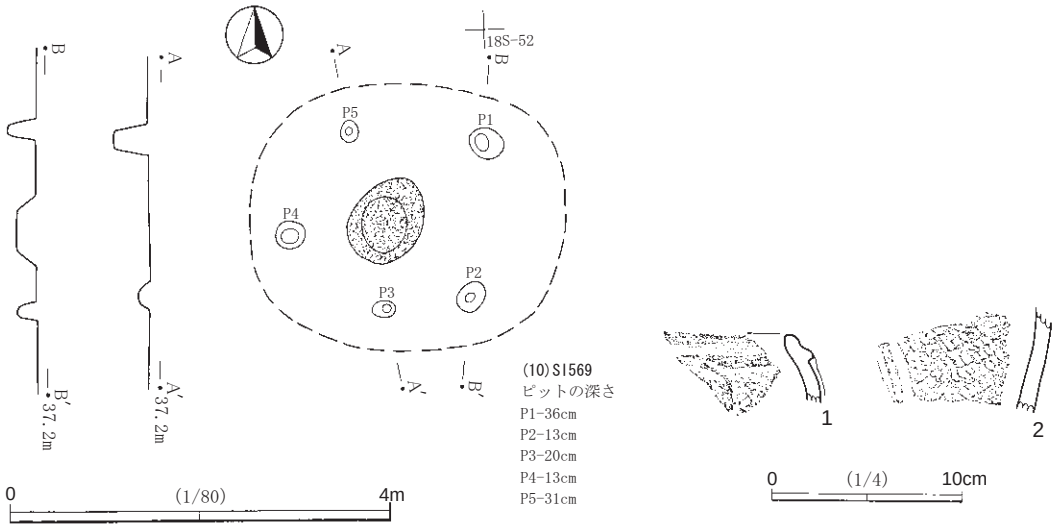
遺物は、少量の土器がピット及び炉内から出土した。１・２は炉内から出土した。所属時期は確定できない。

土器（第74図、図版73）

１・２は同一個体で、１は背割れ隆帯による文様を、２は磨り消されない懸垂文を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SI570（第75図、図版12）

遺跡北東部、19Ｒ－80・81・90・91グリッドに位置する。南側を奈良・平安時代の掘立柱建物跡群の柱穴に切られる。南北方向に長い卵円形を呈し、長軸4.8m以上、短軸4.12m、深さ６㎝を測る。ピットは９か所検出された。P1・P4・P7は深さ60㎝～72㎝を測り、４本柱の主柱穴のうちの３か所と考えられ、



第74図　(10) SI569

もう１か所は西側の掘立柱建物跡で切られた位置に存在していたものと思われる。炉は埋甕炉で、１の胴下部を欠く深鉢が中央付近に埋設されていた。炉自体はほぼ円形を呈し、径約50㎝、深さ23㎝を測る。

遺物は、炉外で少量の土器・石器が出土した。炉体土器から所属時期は１ｂ期と考えられる。

土器（第75図、図版53・73）

１は炉体土器で、口縁部の約1/2と胴下部を欠く。推定口径31㎝、現存高23㎝を測る。口縁部文様帯に背割れ隆帯による不規則な枠状文と半渦巻文を配する。２は単一の隆線による渦巻文と一部に背割れ隆帯が認められる。１は加曽利Ｅ1式新段階であろう。

石器

チャートの剝片が１点出土した。

(10) SI574（第76図、図版12）

遺跡北東部、19Ｐ－95・86・96、20Ｐ－05・06グリッドに位置する。東西に２軒の住居が重複する。調査時に新旧関係の判定はできなかったが、遺物の出土状況等から判断すると、東側が西側の住居より新しいと考えられ、東側をＡ、西側をＢと呼称することとした。

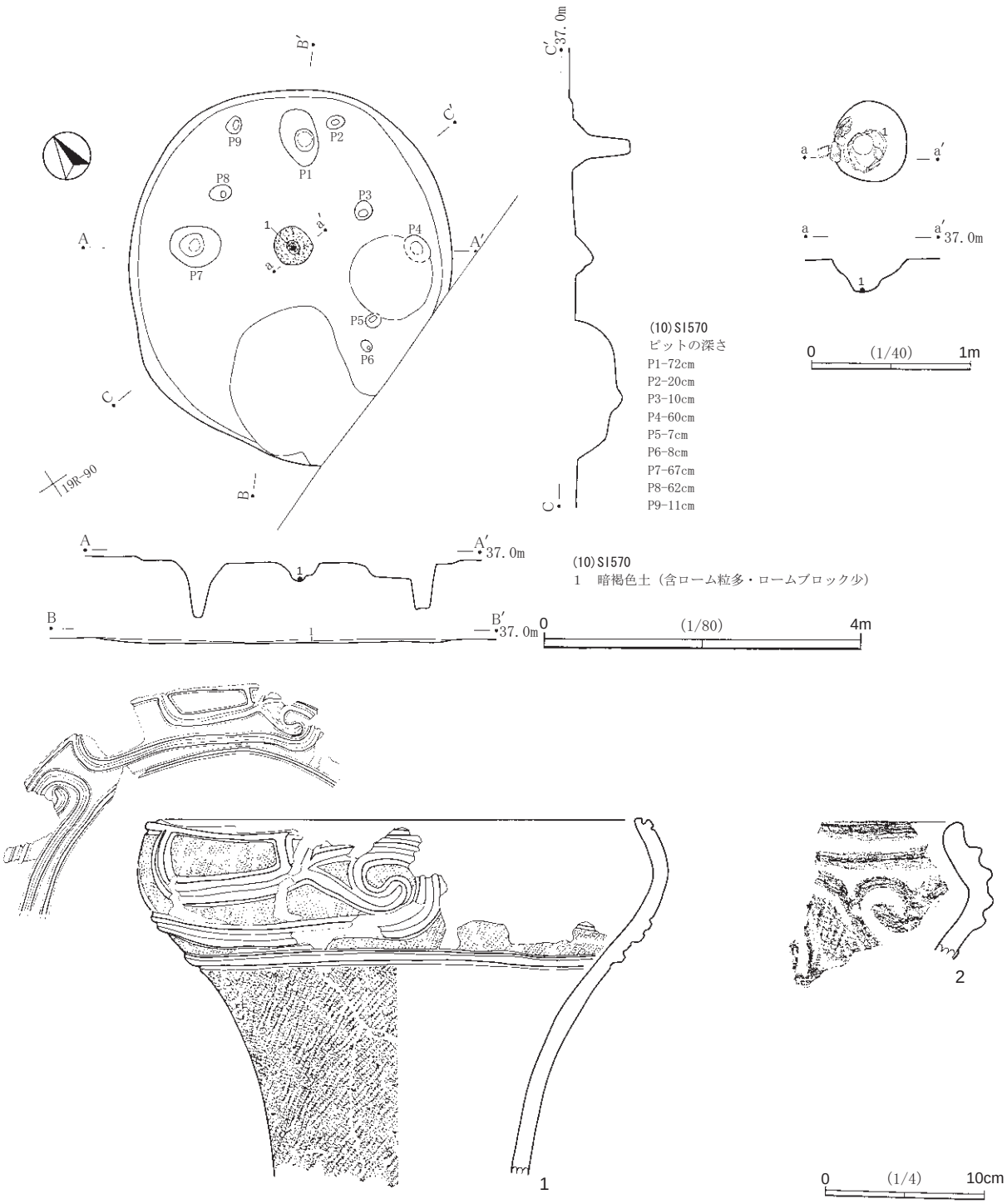
(10) SI574Aは卵形を呈し、長軸6.20m以上、短軸5.40m、深さ17㎝を測る。ピットはおおむね壁に沿って配列される。炉は楕円形を呈し、長軸1.17m、短軸1.03m、深さ９㎝を測る。

(10) SI574Bは西側を (10) SD535に切られている。本来は東西方向に長い卵円形を呈するものとみられる。短軸5.10m、深さ24㎝を測る。ピットの配列は不規則である。炉は楕円形を呈し、長軸81㎝、短軸65㎝、深さ７㎝を測る。

遺物は、２軒とも覆土中の床面よりやや浮いた状態で土器・土製品・石器が出土した。遺構の切り合いにより、遺物が動いているようで、１～５は (10) SI574B、６～９は (10) SI574Aに帰属するものと考えられる。(10) SI574Bが２ａ期、(10) SI574Aが３期と思われる。

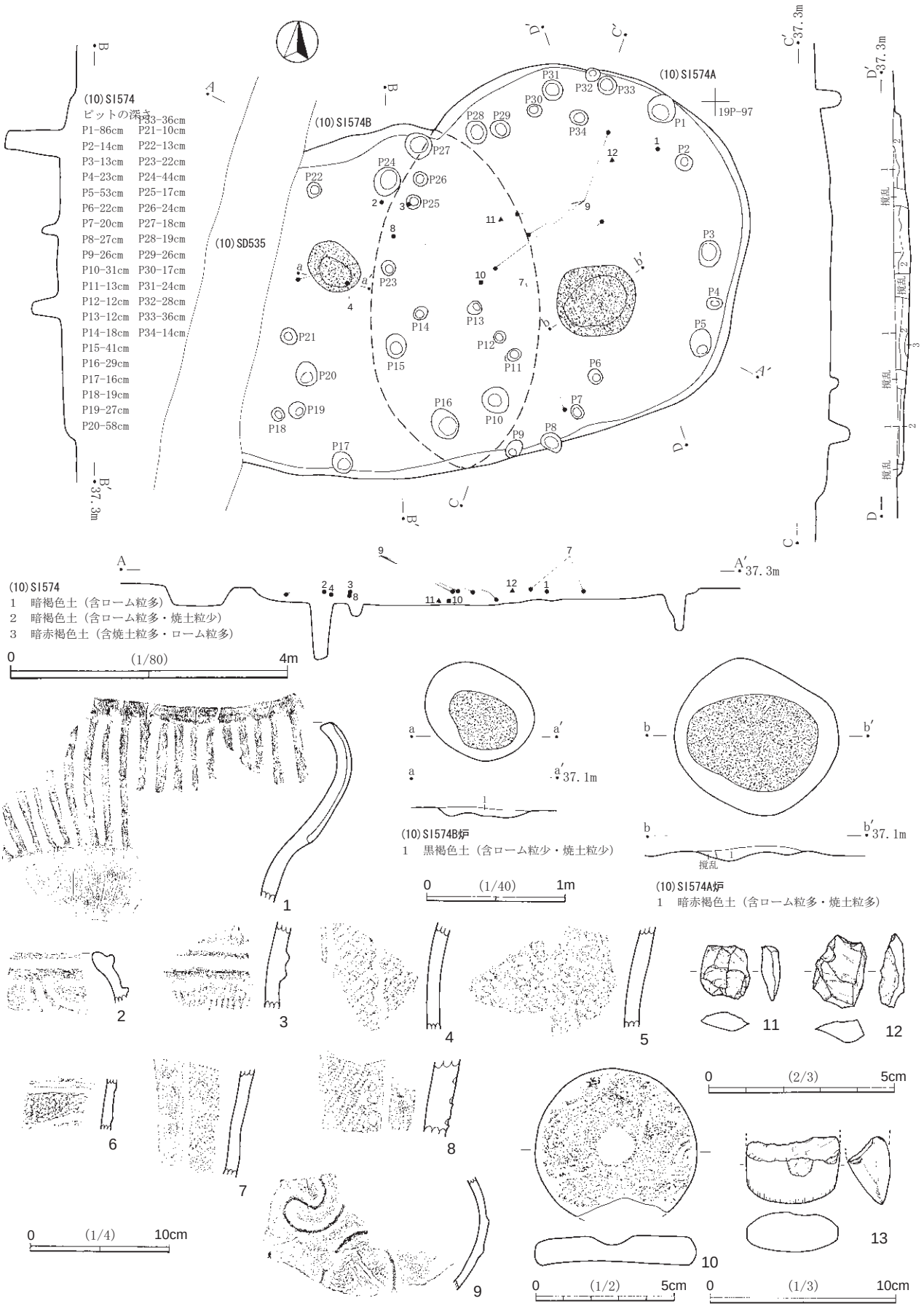
土器（第76図、図版73）

１は強いキャリパー型の器形で、隆線と太く深い沈線を縦位施文している。(10) SK575の２・３と同一個体である。一部で沈線が途切れており、別種の文様を付けた可能性がある。いわゆる縦位隆帯貼付文土

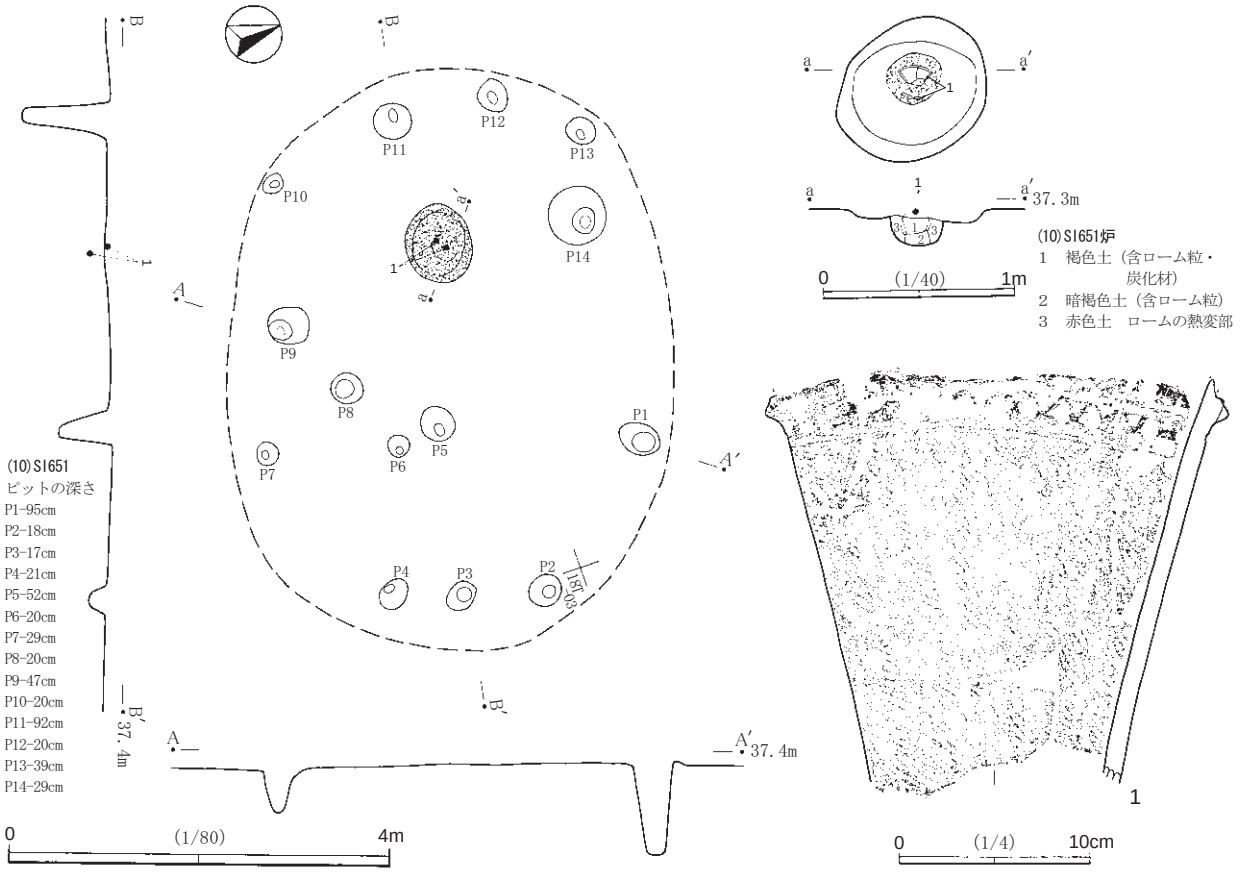


第75図　(10) SI570

器の類である。頸部は無文帯となる。２・３は背割れ隆帯による口縁部文様を持つもので、４は磨り消されない懸垂文と蛇行沈線を施す。６は沈線間が磨り消される連弧文土器である。７・８は磨消懸垂文の破片で、８には円形刺突列が伴う。９は無文地に微隆起線で渦巻文様を施すもので、有孔鍔付土器の類であろう。１は加曽利Ｅ2式古段階、２・３は同1式新段階、６～８は同3式でその内６の連弧文土器は古段階であろう。



第76図 (10) SI574



第77図　(10)SI651

土製品（第76図、図版112）

10は土製円板である。周縁の磨りは深いが一部を欠損する。表面にのみ未貫通の孔がある。櫛歯条線による蛇行文が認められる。

石器（第76図、図版115）

11・12は石鏃未成品である。いずれも黒曜石製の楔形石器を素材としている。基部付近の部分的な加工にとどまり、先端部の作出には至っていない。13は定角式磨製石斧の刃部破片である。砂岩製で刃部は、使用によりやや磨耗している。図示した以外では、黒曜石の剥片２点・砕片１点が出土した。

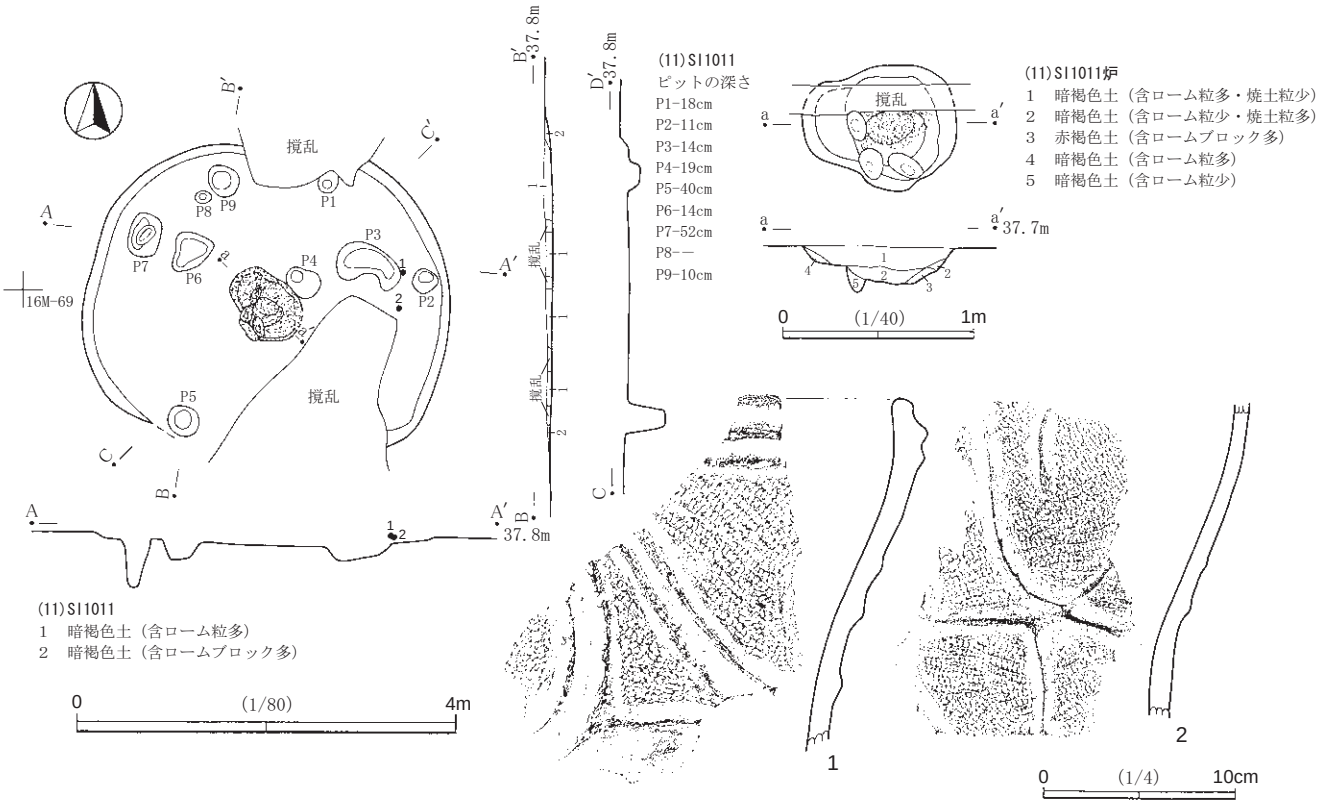
(10) SI651（第77図、図版12）

遺跡北東部、17Ｔ－91・92、18Ｔ－01・02・03グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは14か所検出された。おおむね楕円形に配列される。深さに規則性はない。炉は、楕円形を呈する埋甕炉である。長軸84㎝、短軸69㎝を測るが、トレンチャーによる撹乱が中央に入っていた。やや北東側に偏って胴部下半を欠いた１の深鉢が正位の状態で埋設されていたが、撹乱により1/2が失われていた。覆土はローム粒・炭化物を含む褐色土である。

遺物は、１の土器以外は出土しなかった。所属時期は１期と考えられる。

土器（第77図、図版73）

１は炉体土器である。胴部の1/3ほどの大型破片で、内面は下部ほど二次的火熱を強く受け、表面は上



第78図 （11）SI1011

端のみ二次的火熱を受けている。口縁部は輪積み部分で欠落し、胴部文様帯の区画隆帯は指頭圧痕が付き、太く背が高い。胴部の縄文は縦位の帯状施文である。時期的特徴が乏しいが加曽利Ｅ1式と思われる。

（11）SI1011（第78図、図版12）

遺跡北部、16Ｍ－59・69、16Ｎ－50・60グリッドに位置する。北側と南側は撹乱されている。東西方向に長い楕円形を呈し、長軸3.85m、短軸3.2m以上、深さ12㎝を測る。ピットは９か所検出された。配置は不規則である。炉は不整な楕円形を呈する。長軸83㎝、短軸66㎝、深さ20㎝を測る。南西側は円形に深く掘り込まれており、底面付近の覆土は焼土を多く含む。

遺物は、炉の東側を中心に土器・石器が出土した。床面より浮いた状態で出土したものが多い。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第78図、図版73）

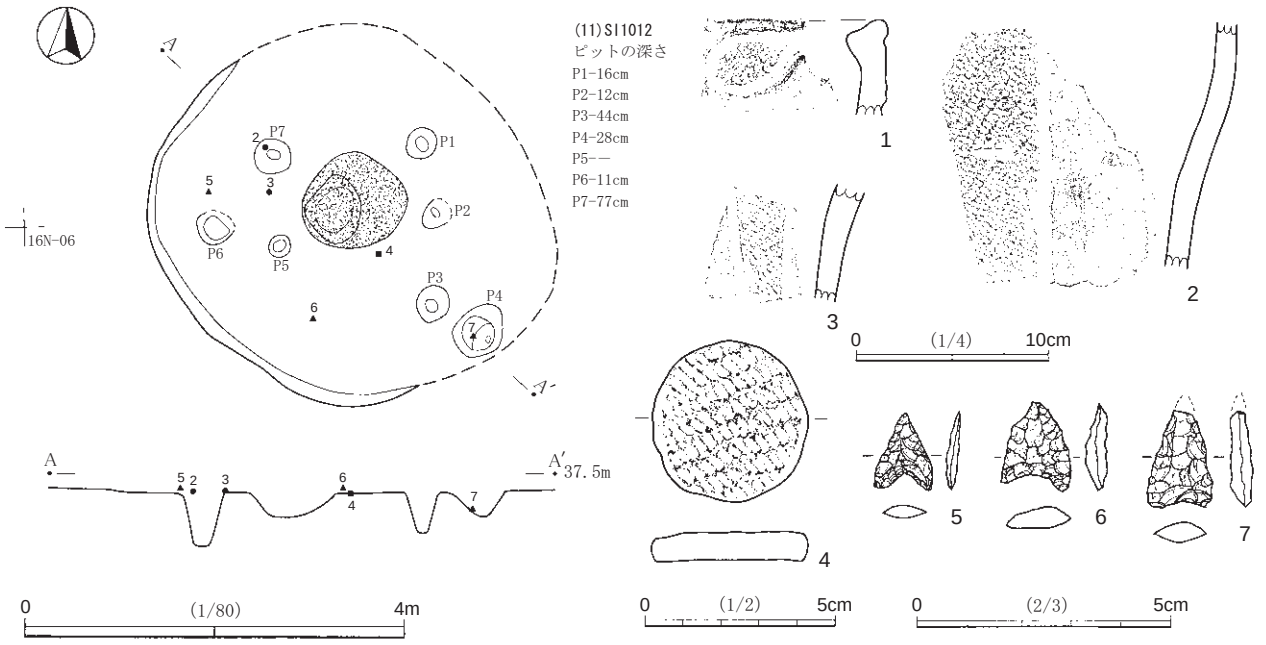
１・２とも隆線で大型の渦巻文を施すいわゆる梶山類である。１は２本隆線で、隆線は高く太い。２は単一隆線で、隆線は低く細い。渦巻文は縦長となる。１・２とも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャート砕片が１点出土した。

（11）SI1012（第79図、図版12）

遺跡北部、15Ｎ－96・97、16Ｎ－06・07グリッドに位置する。北から東側の壁は確認できなかった。東西方向にやや長い卵円形を呈する。長軸4.40m、短軸3.80m、深さ４㎝を測る。ピットは７か所検出された。不規則な配列で、P3とP7が比較的深くしっかりしている。炉は長軸1.04m、短軸1.00m、深さ26㎝を測る。



第79図　(11) SI1012

西側が深く掘り込まれている。

遺物は南から南西側を中心に土器・土製品・石器が出土した。床面上から出土したものが多い。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第79図、図版73）

１は口縁部文様帯の渦巻文が退化した楕円文となっている。２・３は磨消懸垂文の破片で、２の磨消帯は広い。いずれも、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第79図、図版112）

４は土製円板である。周縁の磨りは深い。

石器（第79図、図版115）

５～７は凹基無茎鏃である。石材は黒曜石（５）・チャート（６）・流紋岩（７）各１点となっている。７の先端部は一部欠損している。図示した以外では、チャート製の楔形石器１点・二次加工のある剥片１点・剥片７点・砕片14点、黒曜石の剥片１点・砕片３点、ホルンフェルスの剥片が１点出土した。

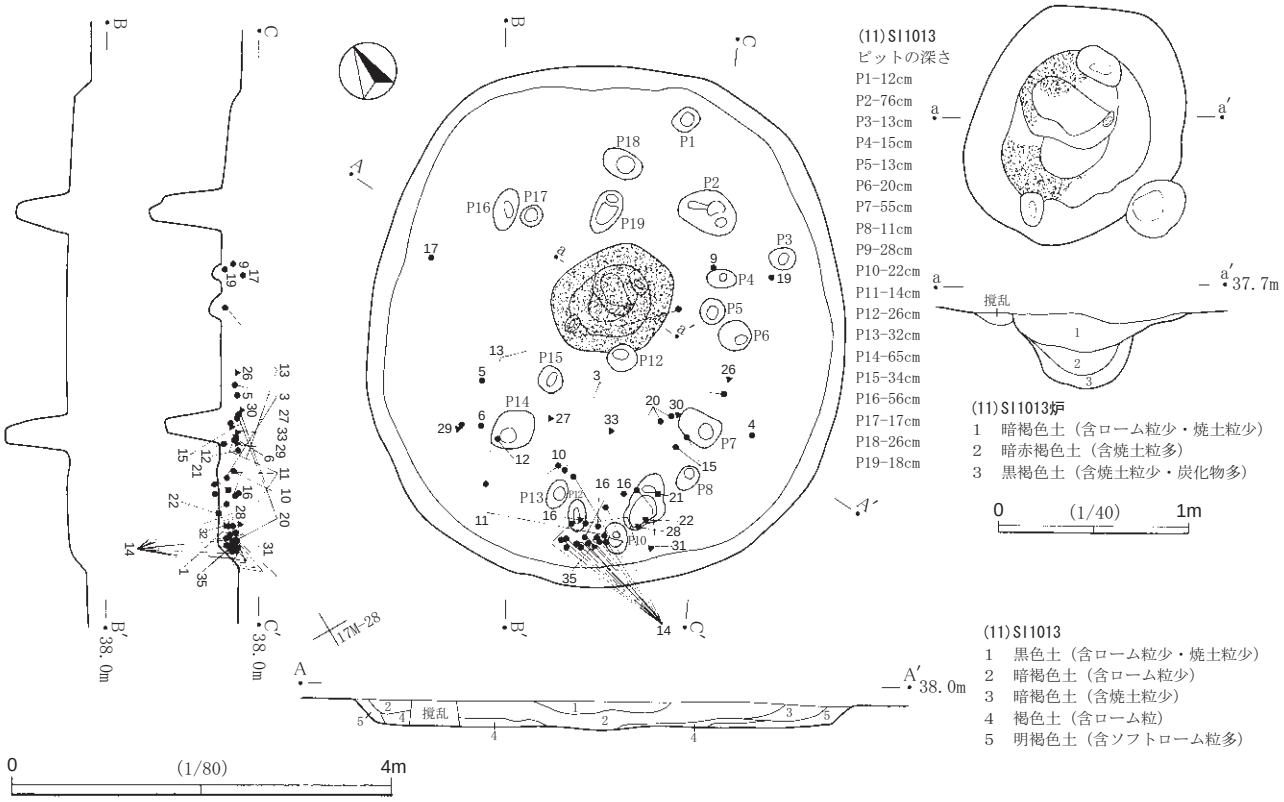
(11) SI1013（第80図、図版13）

遺跡北部、17M－08・09・18・19グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸5.50m、短軸5.00m、深さ30㎝を測る。ピットは19か所検出された。他より深く55㎝～76㎝を測るP2・P7・P14・P16は方形に配列され、主柱穴と判断される。炉は東西方向に長い楕円形を呈する。長軸1.33m、短軸1.14m、深さ40㎝を測る。北東側が深く掘り込まれている。覆土中層に焼土を多く含む。

遺物は、南西側を中心に土器・土製品・石器が出土した。２・３層から出土したものが多い。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第81図、図版53・73）

１は波状口縁で、太く浅い沈線で円文を描く。２は無文部が広く隆帯状に盛り上がる。縄文は明らかに



第80図　(11) SI1013 (1)

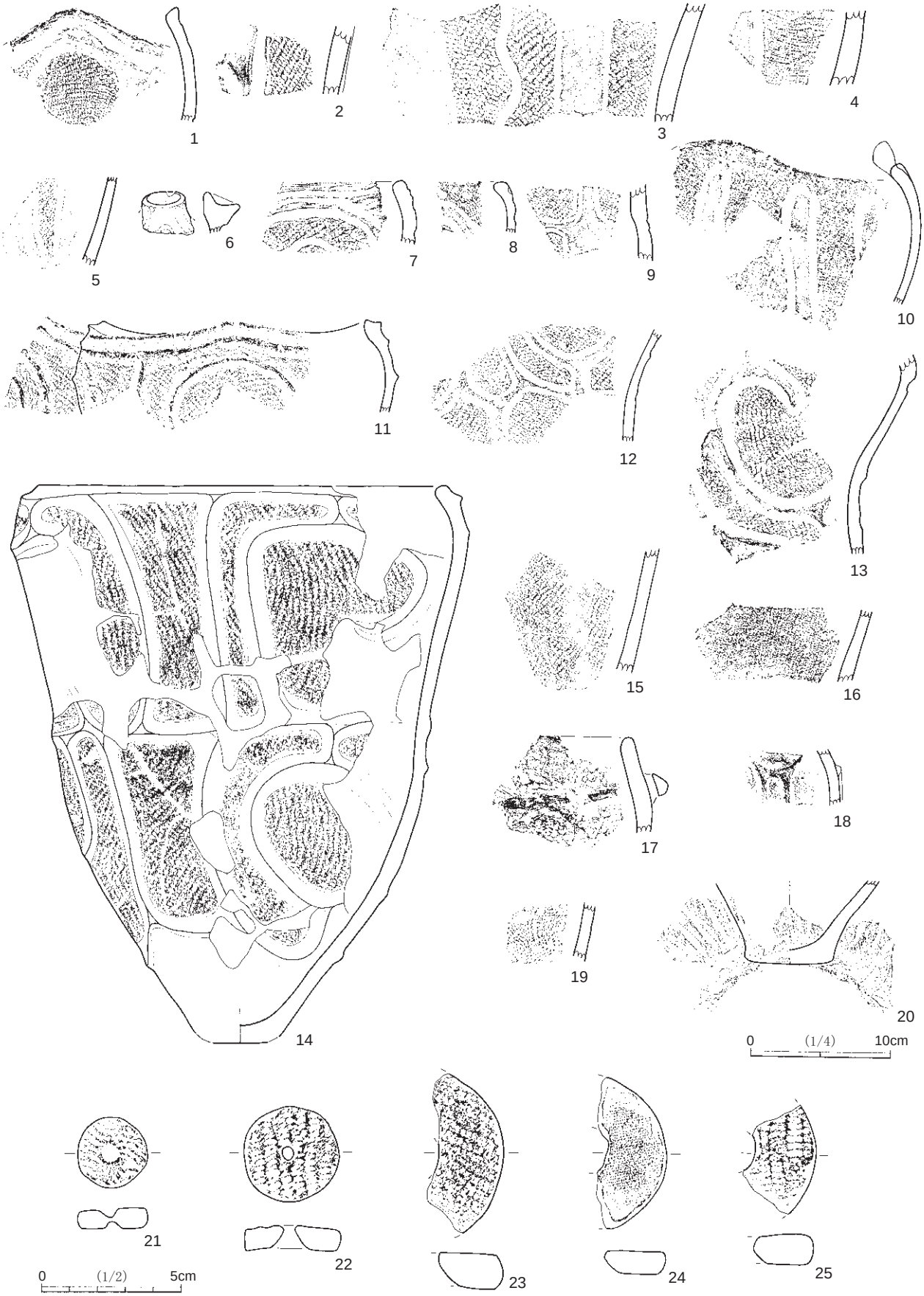
太さの異なる原体を撚り合わせており､附加条と思われる。３～５は磨消懸垂文で､３は磨消帯の幅が広く､縄文帯には蛇行沈線を施す。５は底部直上の破片である。６は突起破片で頂部が凹み、頂部下には沈線を施す。７～10は沈線文様のもので、７･10は太く浅い沈線、８は中位の太さ、９はやや細めの沈線である。また、８には口縁直下に円形刺突列が付く。11～14は隆起線による大振りの文様が展開するいわゆる梶山類である。いずれも単一隆線による。14は推定口径29㎝､器高40㎝を測る。胴下部から底部はほぼ完存し、口縁部から胴部は1/2弱が遺存する。底部縁が使用により著しく摩耗し、胴中央部と口縁部内面に二次的火熱を受ける。また、胴下部内面には炭化物が付着する。隆線による文様は上下２段で、上段の渦巻は巻きが弱く、下段は渦を巻かずに円文になるらしい。また、上段の渦巻文は口縁下区画隆線と短隆線で連結し、下段の円文は胴部区画隆線及び最下部区画隆線と短隆線で連結している。17は中位の大きさの有孔鍔付土器で、18は小型の同種土器である。15・16は縄文のみ、19は櫛歯条線文である。全体的にみて大部分は加曽利Ｅ3式新段階、3-4式直前であろう。11は隆線が断面三角形で、3-4式と思われる。

土製品（第81図、図版112）

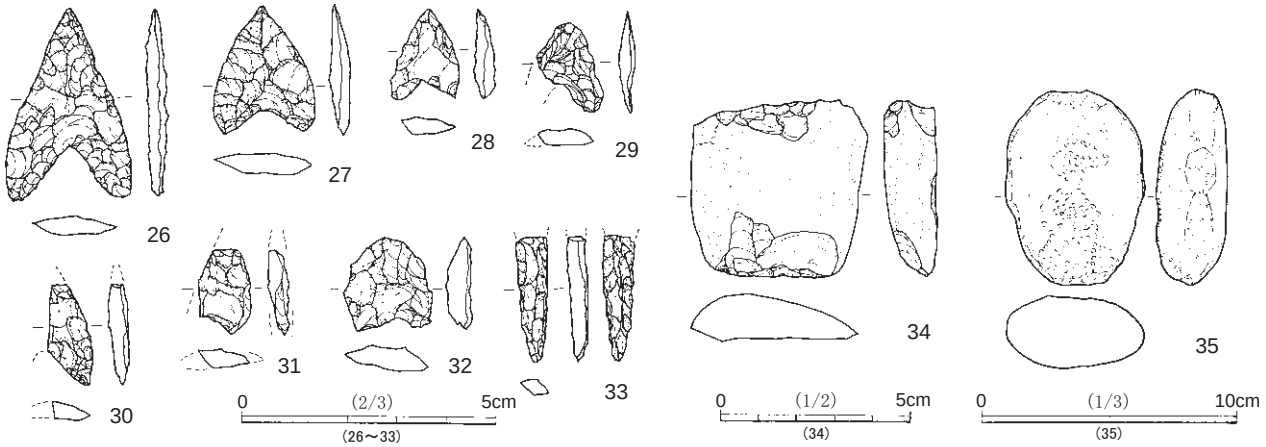
21～25は土製円板である。周縁の磨りはいずれも深いが、22は他に比べやや浅い。21は孔が未貫通である。22～24は裏面穿孔のみで、25は両面穿孔であるが裏面の孔の方が大きい。なお、23・24の孔は回転穿孔によるものではなく、平らな磨り面が複数認められる。

石器（第82図、図版115）

26～31は凹基無茎鏃である。中でも26は極めて大型で加工も精緻である。石材は黒曜石３点（26、29、31)、チャート３点（27・28、30）である。29～31は欠損品で、31の先端部には使用痕（「縦溝状剥離」）



第81図　(11) SI1013 (2)



第82図　(11) SI1013 (3)

がみられる。32は凹基無茎鏃の未成品である。石材には信州系黒曜石を用いている。33はチャート製の石錐である。先端部破片であり、基部が欠損している。34は楔形石器である。ガラス質黒色安山岩の剥片を素材としている。35は砂岩製の磨石類である。全面に磨耗痕、表裏に凹み痕（各２)、全周に敲打痕が観察される。やや赤化しており被熱礫の可能性が高い。図示した以外では、メノウ・チャート製の石鏃未成品が各１点、黒曜石製の石核１点・剥片５点・砕片８点、チャートの剥片12点・砕片７点、ガラス質黒色安山岩の剥片１点・砕片６点、ホルンフェルスの剥片１点、軽石５点が出土した。

(11) SI1014（第83図、図版13）

遺跡北部、17N－60・61・70・71グリッドに位置する。略円形を呈する。長軸5.37m、短軸5.27m、深さ10cm を測る。ピットは22か所検出された。16か所は壁付近に位置する。径46cm ～60cm、深さ77cm ～105cm を測る大型の P1・P8・P14・P19は主柱穴と判断される。炉は不整な隅丸方形を呈し、長軸1.00m、短軸87cm、深さ30cm を測る。底面付近の覆土は焼土を多く含む。

遺物は、少量の土器・土製品・石器が出土した。炉周辺では覆土上層から出土したものが多い。所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第83図、図版74）

１は口縁部文様帯に低い隆線による巻きのゆるい渦巻文を施す。胴部文様帯は幅の狭い磨消懸垂文を施す。２は太く浅い沈線で口縁部に渦巻文を施す。３は幅広の磨消懸垂文と縄文帯内に２条の沈線によるU字状文が見える。４は口縁部文様帯と胴部文様帯の境が段状となる。胴部の磨消懸垂文は狭い。５はいわゆる梶山類、６は櫛歯条線文の底部付近の破片である。いずれも加曽利Ｅ3式であるが、１・４は中１段階、２・３は中２段階と思われる。

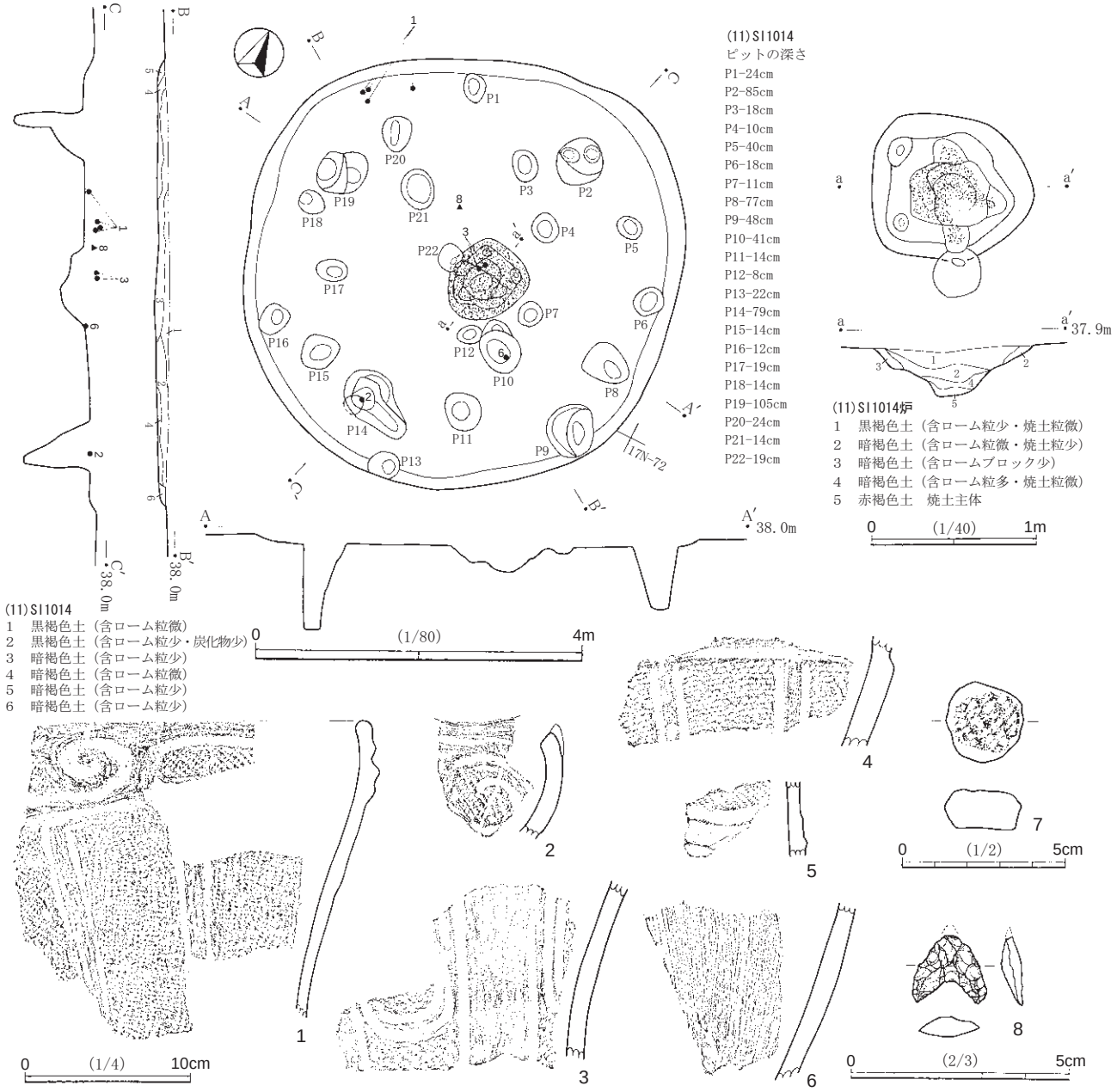
土製品（第83図、図版113）

７は土製円板である。周縁の磨りはやや浅い。

石器（第83図、図版115）

８は黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部が欠損しているが、これはガジリによるものである。図示した以外では、黒曜石の石核・砕片が各１点、チャートの剥片２点・砕片９点が出土した。

(11) SI1015（第84図、図版13）



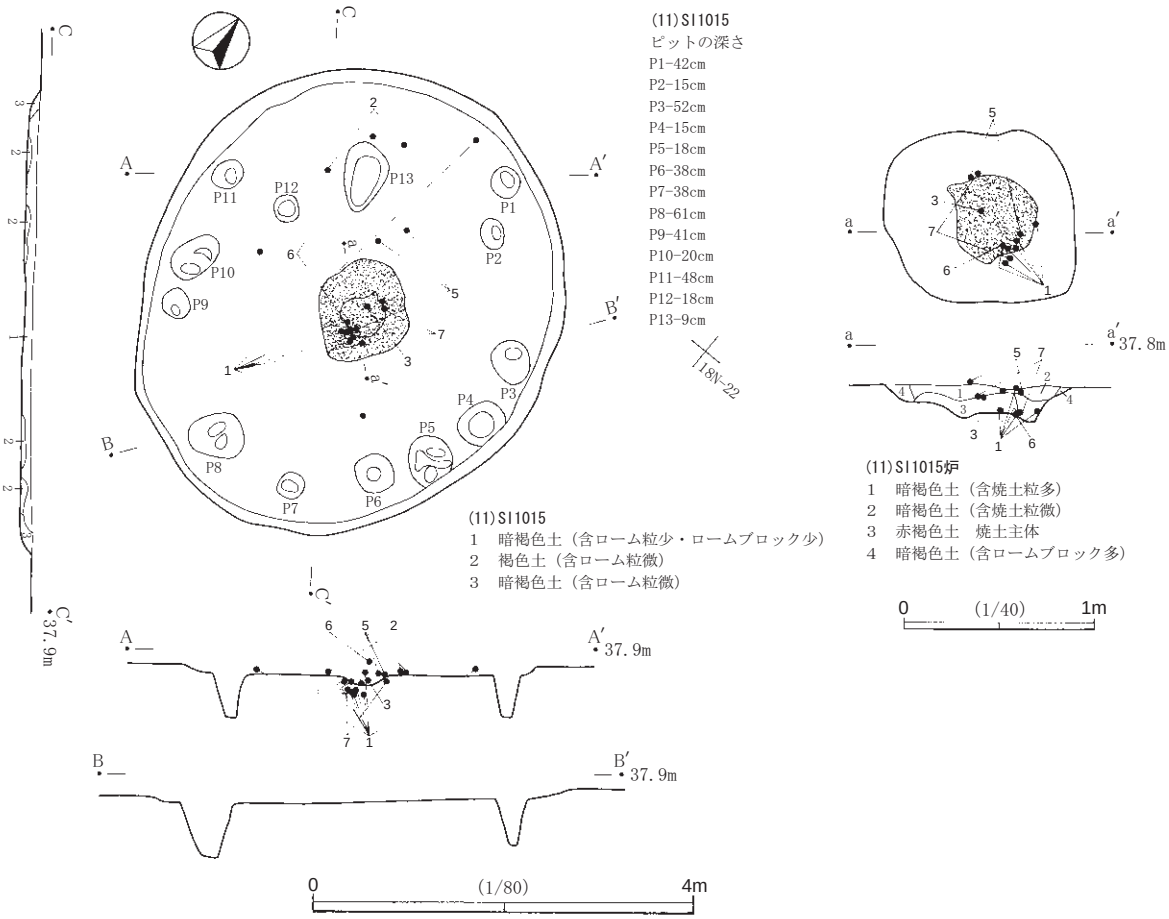
第83図 (11) SI1014

遺跡北部、18N－20・21・30・31・40・41グリッドに位置する。南北方向に長い卵円形を呈する。長軸5.08m、短軸4.39mを測る。ピットは13か所検出された。P2・P12・P13を除いて壁付近に配列される。P1・P3・P8・P11が深さ42cm～61cmを測り、比較的他より深い。炉は不整な隅丸方形を呈する土器片囲い炉で、長軸1.15m、短軸1.00m、深さ20cmを測る。底面付近には焼土が厚く堆積していた。

遺物は、土器・石器が炉内及び北側床面近くを中心に出土した。１・３・５～７は炉囲いの土器で、２は床面上からまとまって出土した。これらの土器から所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第85図、図版53・74）

１は推定口径42cm、現存高33cmを測る。口縁から胴上部にかけて約1/2、胴中央の約2/3が遺存する。口縁部文様帯は低い隆線で楕円文と枠状文を４単位で交互に配する。胴部の磨消懸垂文はやや幅広で、８



第84図 （11）SI1015（1）

単位ないしは９単位である。２は口径28㎝、現存高23㎝を測る。口縁から胴上部はほぼ全周する。口縁突起は４単位で、突起頂部をくぼませた凹線は口縁に沿って右隣の突起側面に達する。口縁部文様帯は隆線による巻きのゆるい渦巻文と枠状文からなり、渦巻文は基本的に突起下に配されるがずれる所もある。胴部文様帯の磨消懸垂文は10単位と思われる。３は舌状突起の破片で、突起下に沈線で円文を施す。４～６は同一個体で、太めの沈線による磨消懸垂文の上に渦巻がからんだ複雑な文様を施す。７は推定口径34㎝、現存高29㎝を測る両耳壺である。口縁部は約1/2が遺存する。幅広の口縁部は無文で、その下に低い隆線で楕円文と枠状文を交互に４単位施す。いずれも加曽利Ｅ3式中１段階であろう。

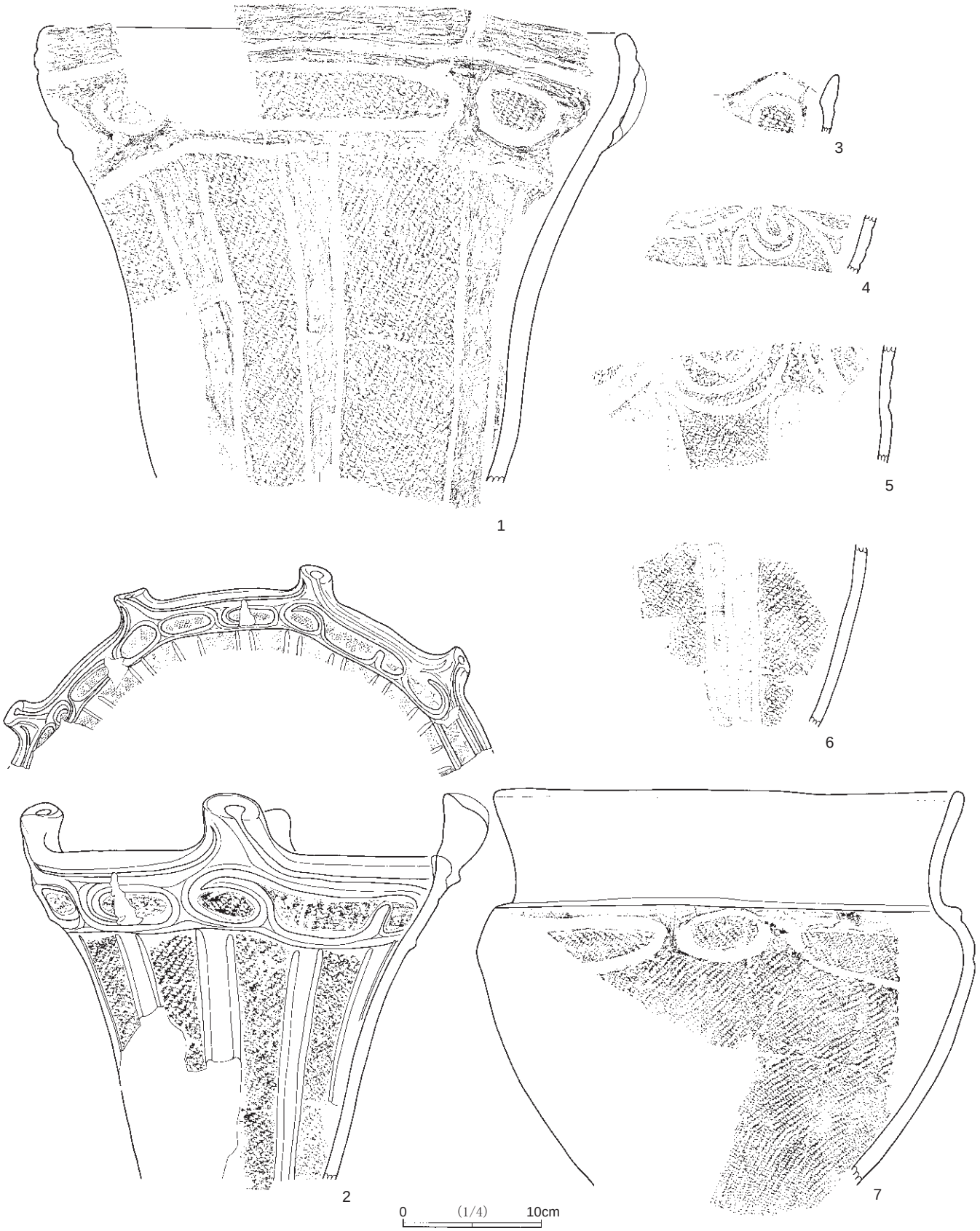
石器

ガラス質黒色安山岩製の剥片２点、黒曜石製の砕片１点が出土した。

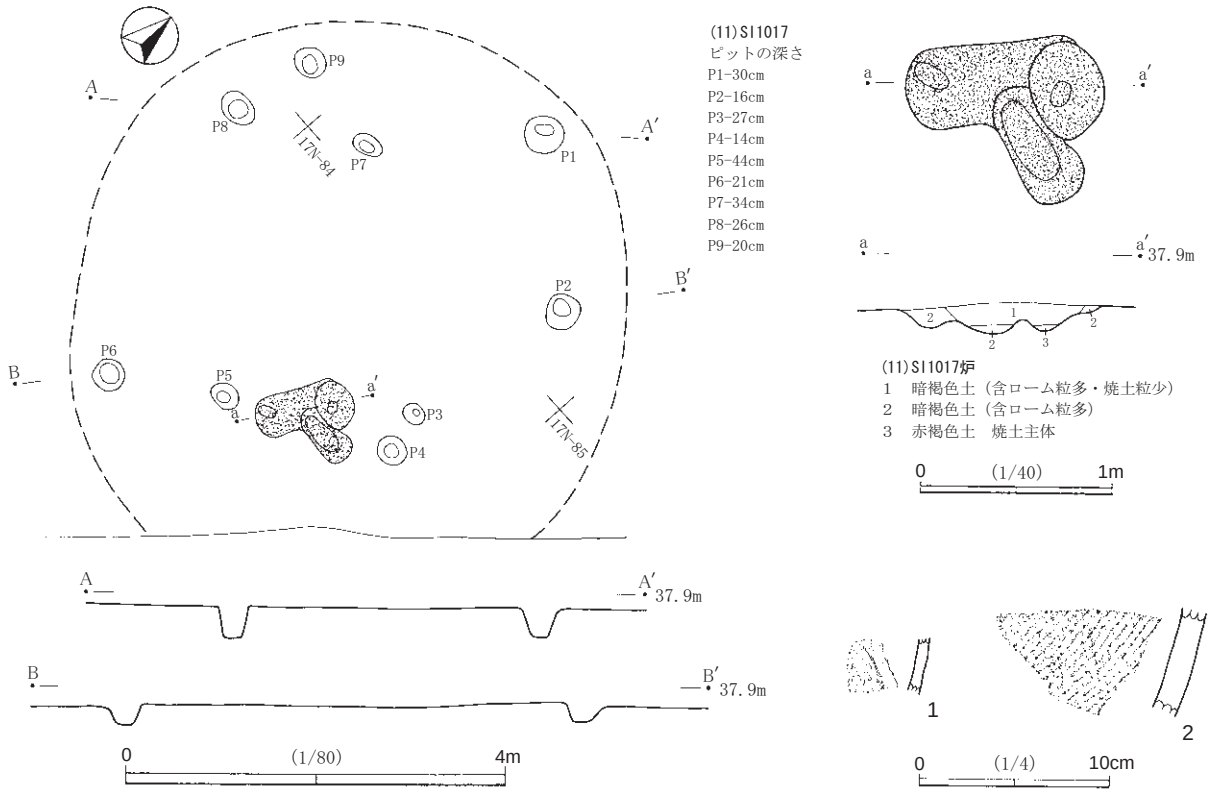
（11）SI1017（第86図、図版13）

遺跡北部、17Ｎ－73・74・83・84・93・94グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは９か所検出された。深さ20㎝～30㎝台のものが多い。炉は掘り込みが重複しており、東側に張り出しが付される形状である。土層断面によれば、張り出し部分から北側が新しいと思われる。長軸1.05m、短軸87㎝、深さ15㎝を測る。底面付近には焼土が堆積していた。

遺物は、覆土中・炉内より少量の土器が出土した。図示した２点は覆土中一括で取り上げられたものである。所属時期は確定できない。



第85図　(11) SI1015 (2)



第86図 (11) SI1017

土器（第86図、図版74）

１は微隆起線文を施す小型土器で、２は縄文のみである。いずれも小破片であり、確実に本遺構に伴うものかわからない。

(11) SI1018（第87図、図版13）

遺跡北部、17N－13・23・24グリッドに位置する。東側は確認トレンチにより削平されており壁を確認できなかった。楕円形を呈すると推測され、長軸4.45m以上、短軸3.62m、深さ９㎝を測る。ピットは15か所検出された。配列は不規則である。P2・P6・P12は深さ57㎝～71㎝を測り、比較的深い。P10・P13・P14・P15は炉に切られている。炉は南北方向に長い不整な楕円形を呈する。長軸60㎝、深さ10㎝を測る。

遺物は、土器・土製品・石器が出土した。５はP4内から出土した。出土遺物に時期幅があり、所属時期を確定できない。

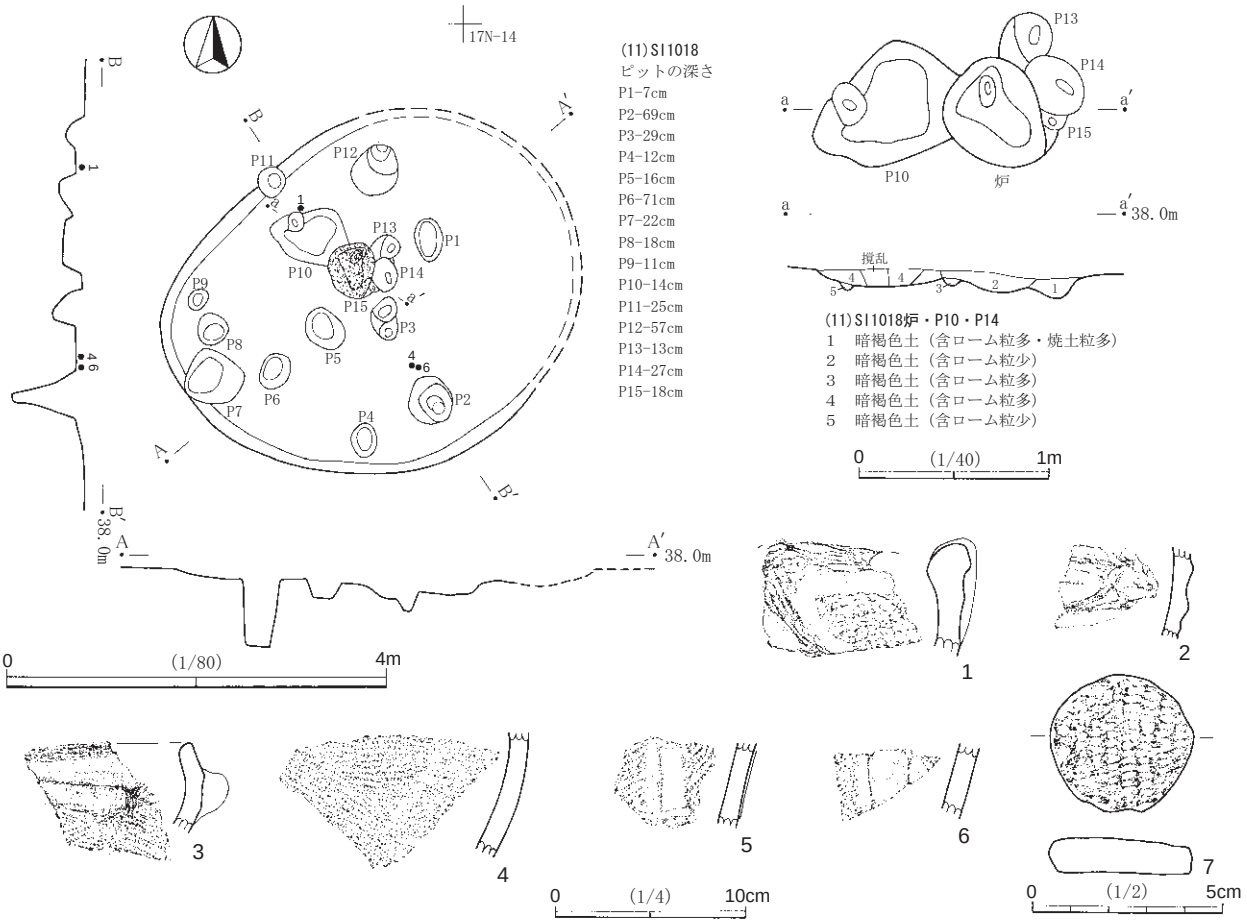
土器（第87図、図版74）

１・２は隆線による枠状文を施す。３は口縁部無文帯下に左右から伸びた指頭による凹線がぶつかってつまみ状に盛り上がっている。５・６はともに微隆起線区画による帯状の無文帯が認められる。１・２は加曽利Ｅ3式のおそらく新段階、３・５・６は同4式であろう。

土製品（第87図、図版113）

７は土製円板である。周縁の磨りはやや浅い。裏面に未貫通の小孔がある。

石器



第87図　(11) SI1018

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(11) SI1019（第88図、図版13）

遺跡北部、17M－87・88・89・98・99グリッドに位置する。南西側約1/3は調査区外に及んでいる。北側に (10) SK1040A・B が重複する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは24か所検出された。配列は不規則である。深さ10cm 台のものが多く、最も深い P16が56cm である。炉は２か所検出された。いずれも平面形は楕円形で、東側は長軸95cm、短軸62cm、深さ10cm を測る。西側は長軸70cm、短軸60cm、深さ10cm を測る。西側の炉には焼土を多く含む。

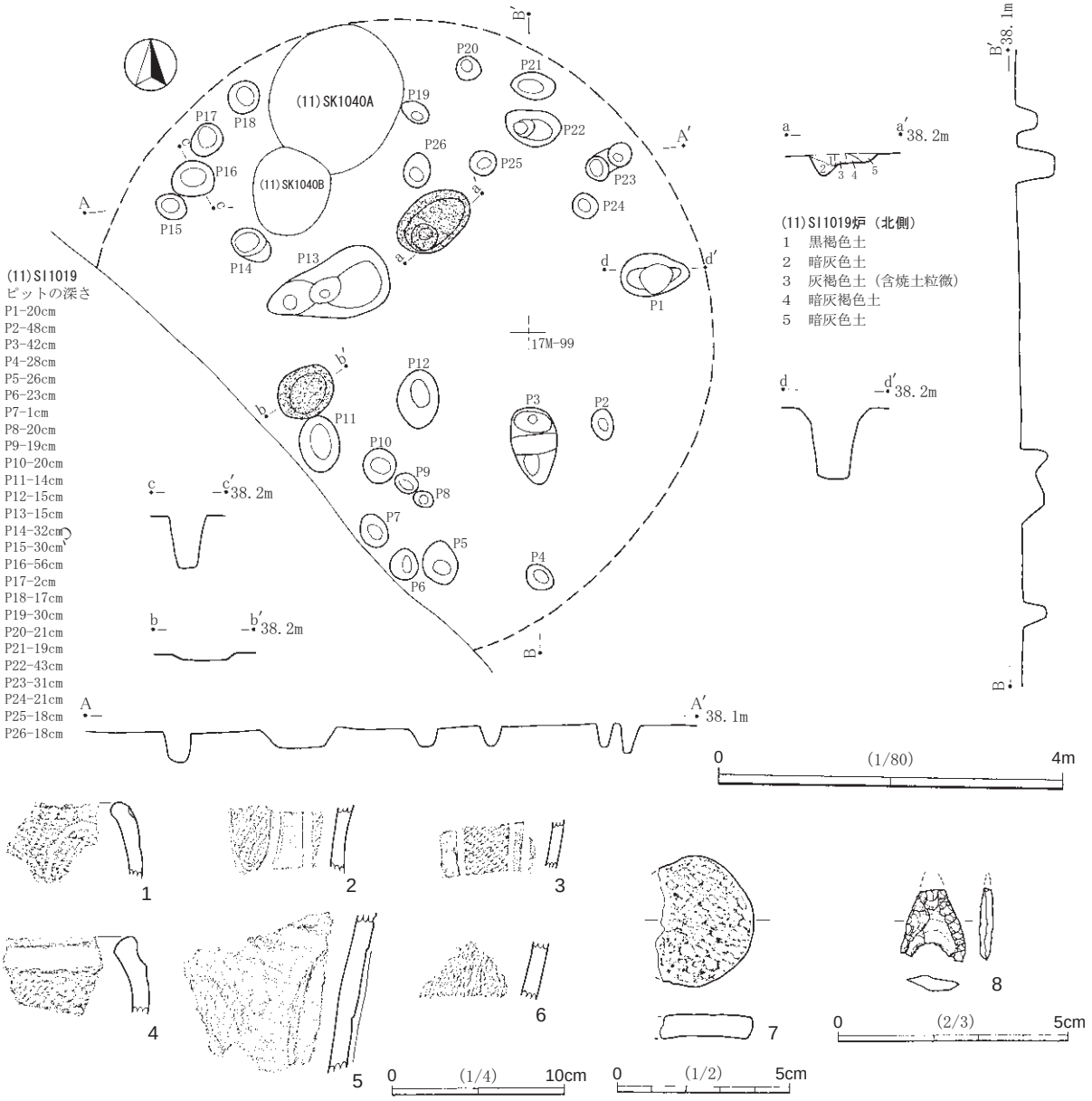
遺物は、土器・土製品・石器が出土した。１・３・４は P10内、５は P25内から出土した。その他は一括で取り上げられたものである。所属時期は３ｃ期～４ａ期であろう。

土器（第88図、図版14）

１は口縁直下の太い沈線内に刺突列が入り、その下には沈線で逆U字状文を施す。２は太めの沈線によるU字状文内に縄文を充填する。３は磨消懸垂文、４は口縁下に指頭による凹線を施す。５は無文地に低い蒲鉾状の隆線文様を施す。いわゆる梶山類であろう。６は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式新段階～3-4式、４は3-4式、５は3式新段階であろう。

土製品（第88図、図版113）

７は土製円板である。周縁の磨りは深く、破損している。



第88図　(11) SI1019

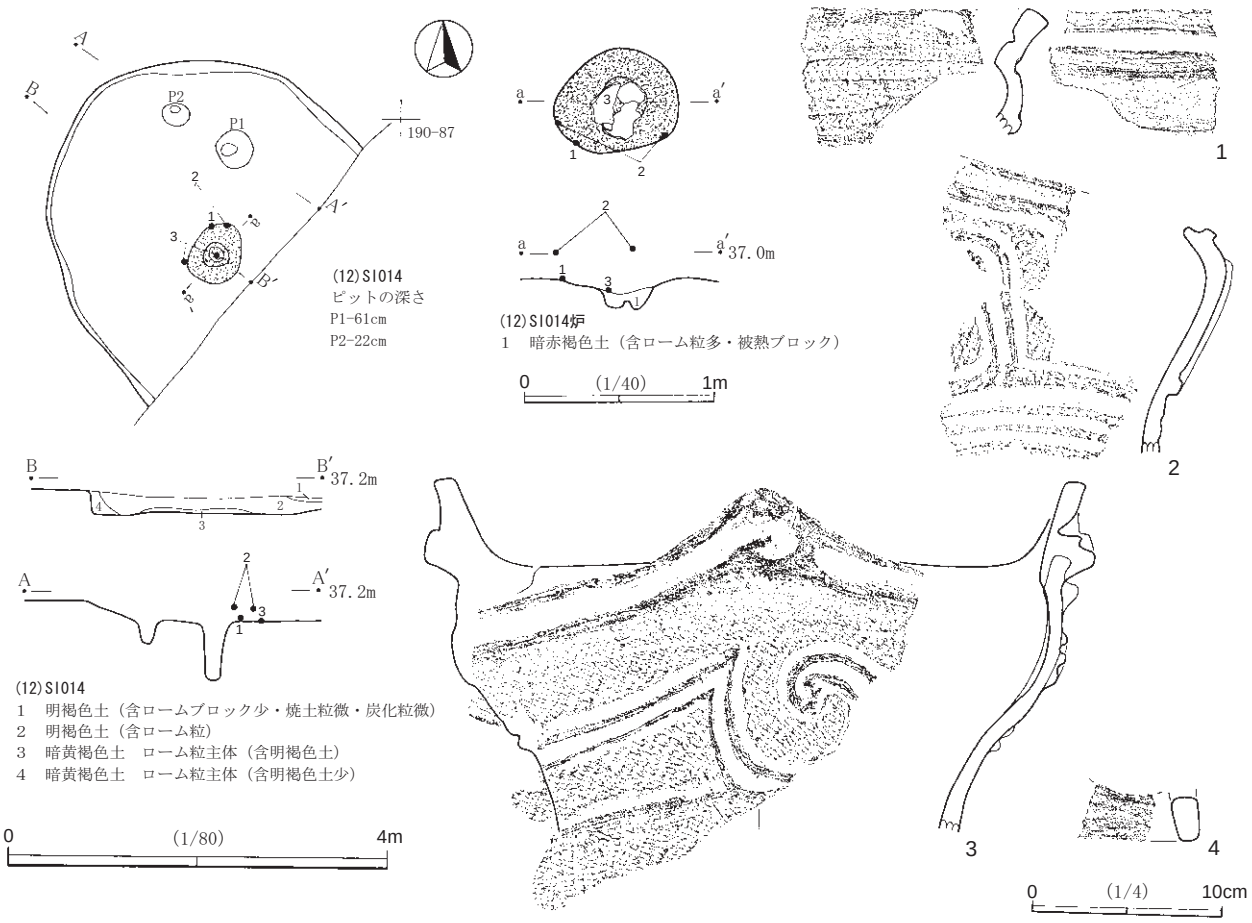
石器（第88図、図版115）

８は凹基無茎鏃である。先端部と片脚が欠損しているが、後者は後世のガジリによるものである。石材は信州系黒曜石である。

(12) SI014（第89図、図版13）

遺跡北東部、19O－76・86グリッドに位置する。南西側は調査区外に及んでいた。南北方向に長い楕円形もしくは卵円形を呈する。短軸3.50m、深さ24cmを測る。ピットは２か所検出された。炉は土器片囲い炉である。炉は卵円形を呈し、長軸66cm、短軸54cm、深さ20cmを測る。中央付近の炉底に３の破片が敷かれ、１は炉の外縁から出土した。

遺物は、炉外では覆土中から土器が出土した。２は確認面近くで出土した。３の土器から所属時期は１ｂ期と考えられる。



第89図　(12) SI014

土器（第89図、図版75）

１は口縁部無文帯下の屈折部に太い沈線を引き、その下に無文部をはさんで隆線を配する。沈線内および隆線の内側に沿ってペン先状の工具による押引文を施す。内面には沈線が認められる。２は口縁部文様帯に背割れ隆帯によるクランク状の文様を施し、その下は太い３条の沈線で文様帯を画する。３は炉底に敷かれてあった土器で、図示した破片のほかに２点の大型破片がある。推定口径30㎝で、口縁の山形突起に小型の半渦巻文、その下の口縁部文様帯には背割れ隆帯による大型の半渦巻文を配する。４は孔があく器台である。２・３は加曽利Ｅ1式新段階であろう。

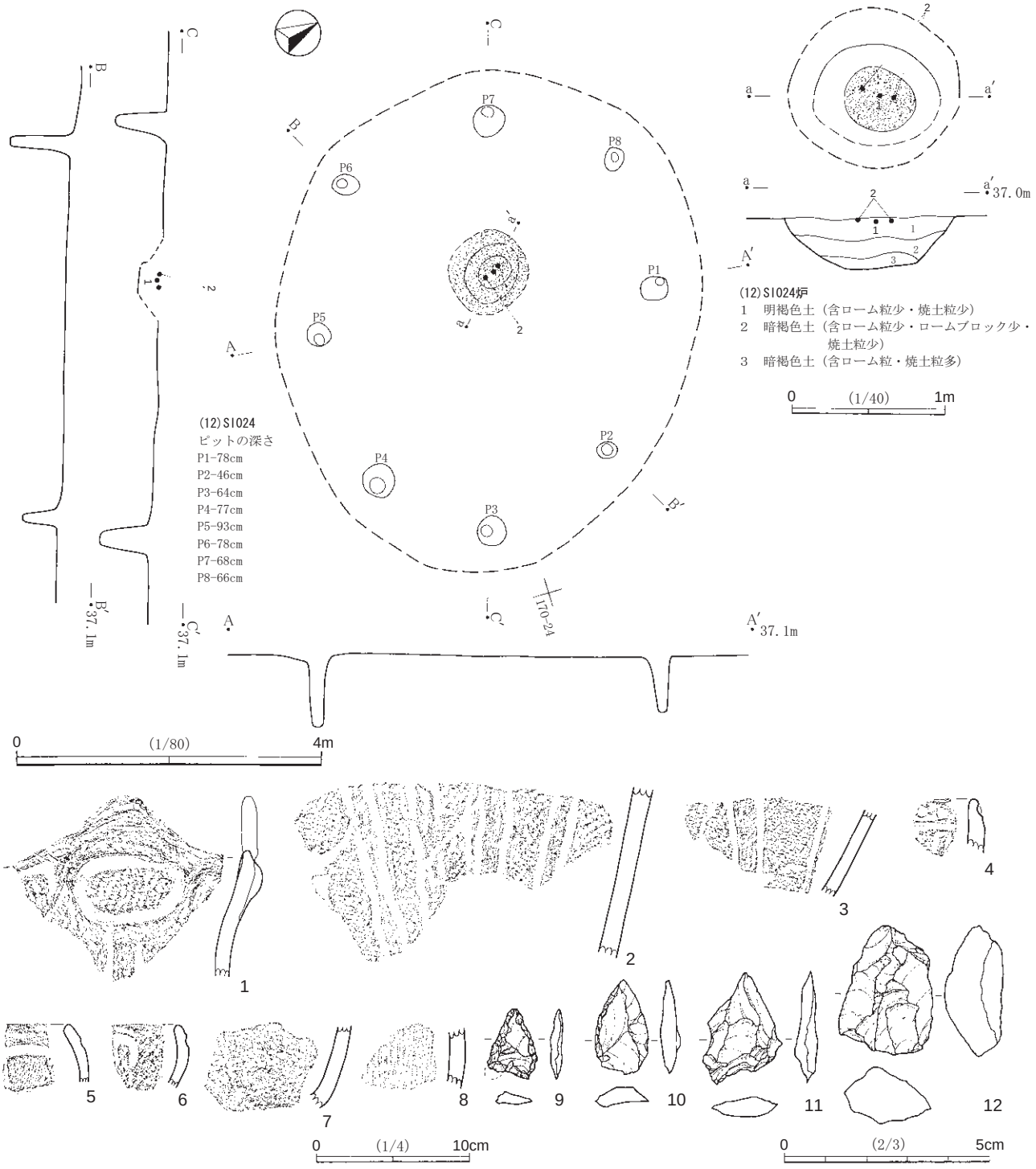
(12) SI024（第90図、図版14）

遺跡北東部、17Ｏ－12・13・22・23グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは８か所検出された。卵円形に配列され、壁柱穴と考えられるものである。炉は土器片囲い炉で、楕円形を呈し、長軸1.13m、短軸1.05m、深さ34㎝を測る。底面は火熱により硬化し、直上の覆土は焼土を多く含む。

遺物は、土器・石器が出土した。２は炉囲いの土器である。所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第90図、図版74）

１は舌状の口縁突起を持つ破片で、突起下の口縁部文様帯には低い隆線による楕円文を配する。その下は磨消懸垂文である。２・３は磨消懸垂文の胴部片である。４は口縁直下に円形刺突列と沈線を施す。その下は懸垂文と思われる。５は太めの沈線による逆Ｕ字状区画文内に縄文を充填する。６は同様の太さの

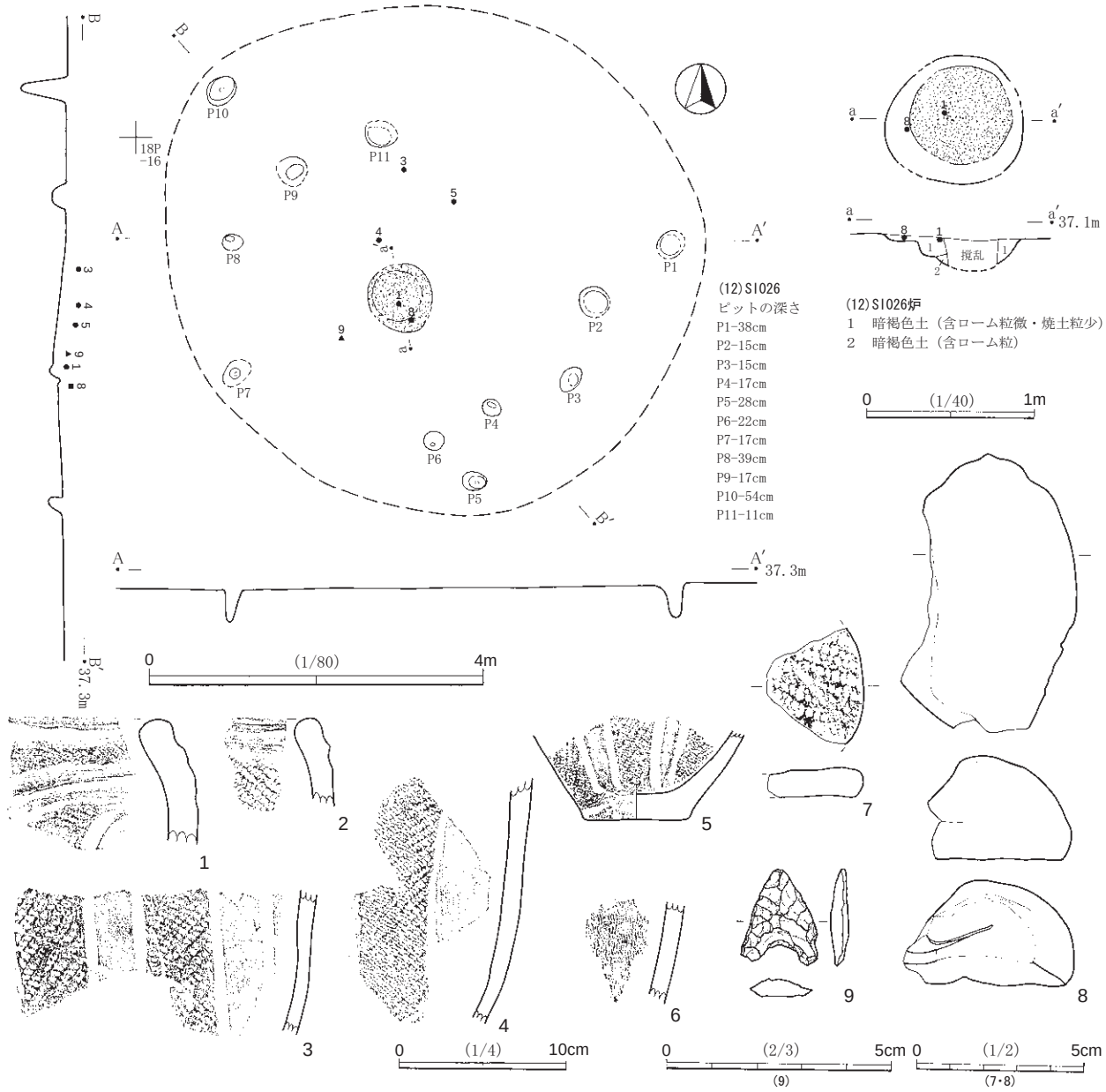


第90図　(12) SI024

沈線で蕨手文を施す。７は底部付近の破片で、磨消懸垂文が消えかかっている。８は櫛歯条線文である。いずれも加曽利Ｅ3式中段階であろう。

石器（第90図、図版115）

９はチャート製の凹基無茎鏃である。10～12は石鏃未成品である。10・11は横長剝片の一部に、12は楔形石器の一部に二次加工が施されている。いずれもチャート製である。図示した以外では、チャート製の



第91図　(12) SI026

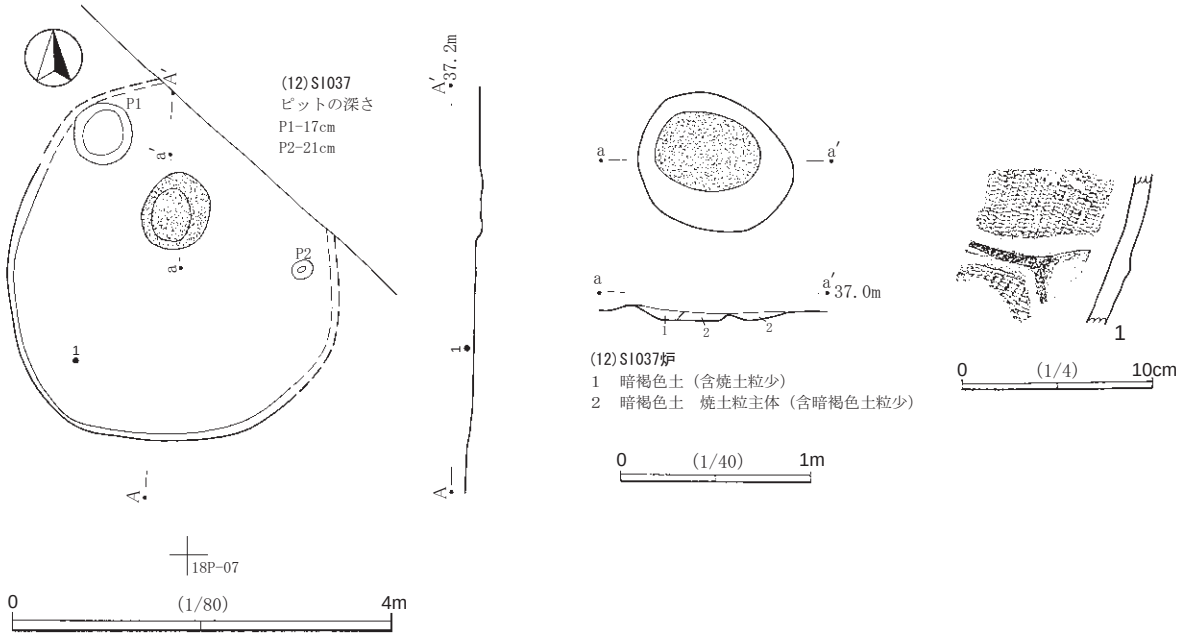
石鏃未成品５点・剥片２点・砕片９点・石核１点、黒曜石の剥片４点・砕片17点、ガラス質黒色安山岩が１点出土した。

(12) SI026（第91図、図版14）

遺跡北東部、18Ｐ－06・07・16・17・27グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは炉を挟んで南東側（P1～ P6）と北西側（P7～ P11）に分布する。深さは10cm 台のものが多い。炉は土器片囲い炉であったと思われ、不整円形を呈し、長軸84cm、短軸78cm、深さ20cm を測る。

遺物は、覆土中より土器・土製品・石器が出土した。床面から浮いた状態で出土したものが多い。８の焼成粘土塊は炉内から出土した。所属時期は、３ｃ期と考えられる。

土器（第91図、図版53・74）



第92図 (12) SI037

１は土器片囲い炉を構成していた破片である。大型の土器で、器壁の厚さは下端で17㎜を測る。低平な隆線で渦巻状の文様を展開する、いわゆる梶山類であろう。２も隆線は低い。３～５は幅広の磨消懸垂文で、４は沈線がゆるくカーブしており、逆U字状になるかもしれない。５は胴下部から底部が完存する。磨消懸垂文は９単位である。６は蛇行する細かい櫛歯条線文である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第91図、図版113）

７は土製円板である。周縁の磨りは深く、小さめの孔は貫通している。８の焼成粘土塊は手で握り込める大きさで、板状の粘土を二つ折りにした痕が認められる。上下端及び左側縁を欠く。

石器（第91図、図版115）

９はチャート製の凹基無茎鏃である。図示した以外では、チャートの剝片２点・砕片１点、ガラス質黒色安山岩１点が出土した。

(12) SI037（第92図）

遺跡北東部、17Ｐ－86・87・96・97グリッドに位置する。北東側は調査区外に及んでいた。南北方向に長い楕円形を呈すると思われる。長軸3.80m、短軸3.48m、深さ10㎝を測る。ピットは２か所検出された。いずれも深さ10㎝台を測る。炉は楕円形を呈し、長軸80㎝、短軸68㎝、深さ10㎝を測る。

遺物は、土器・石器が少量出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第92図、図版74）

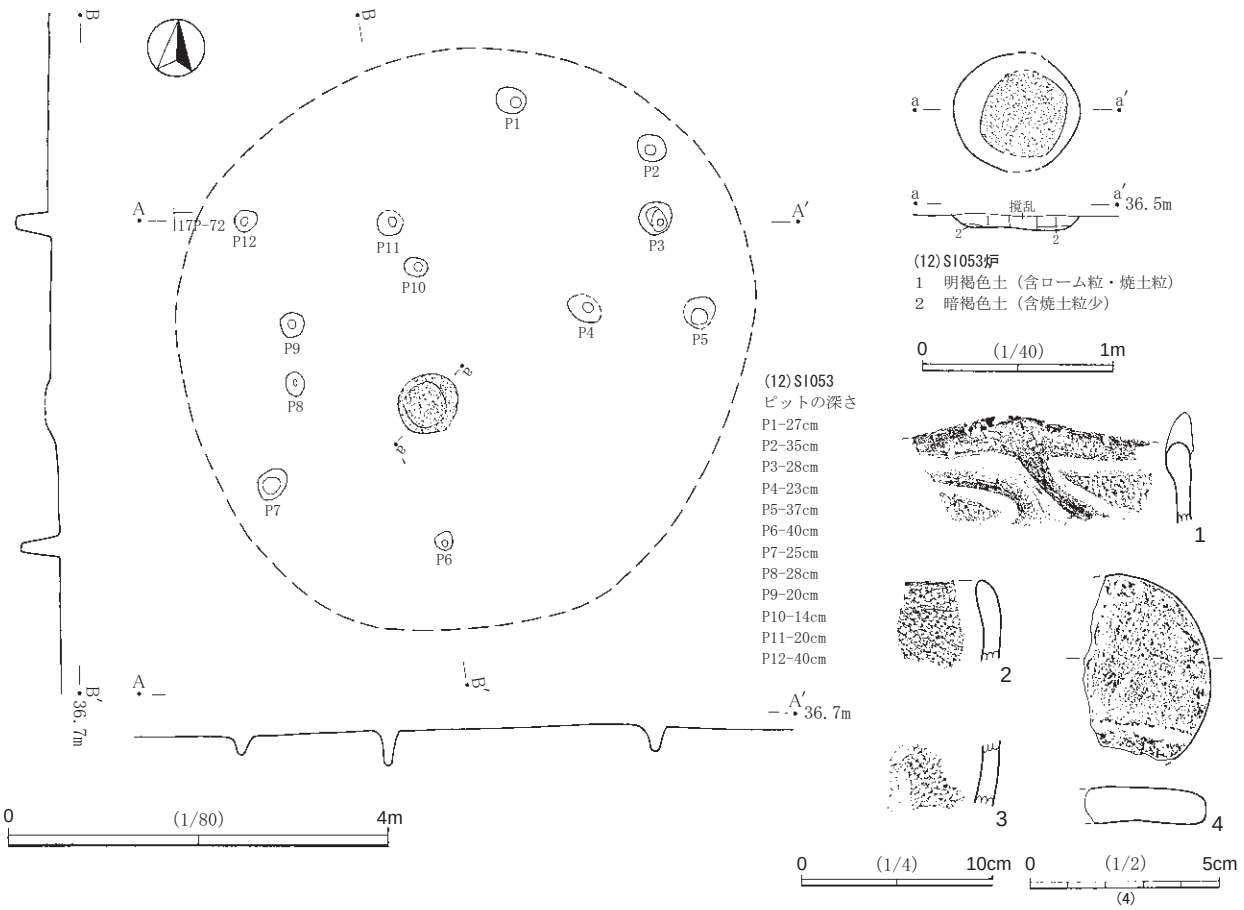
１は低平な隆線に沿って指頭で縄文を磨り消している。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャートの剝片２点、黒曜石の砕片１点が出土した。

(12) SI053（第93図、図版14）

遺跡北東部、17Ｐ－62・63・72・73・82グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは不規則な配列で、炉の北側から西側を中心に12か所検出された。深さは20㎝台のものが多い。炉は



第93図 (12) SI053

不整円形を呈する。径約80㎝、深さ15㎝を測る。

遺物は、土器・土製品がピット内より出土した。図示した４点はP6から出土した。所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第93図、図版74）

１は波状突起を持ち、口縁部文様帯は低い隆線による横に流れた枠状文となる。２は複節縄文で、口縁下で横位回転、以下は縦位回転施文する。３は磨消懸垂文である。いずれも加曽利Ｅ3式で１は中段階であろう。

土製品（第93図、図版113）

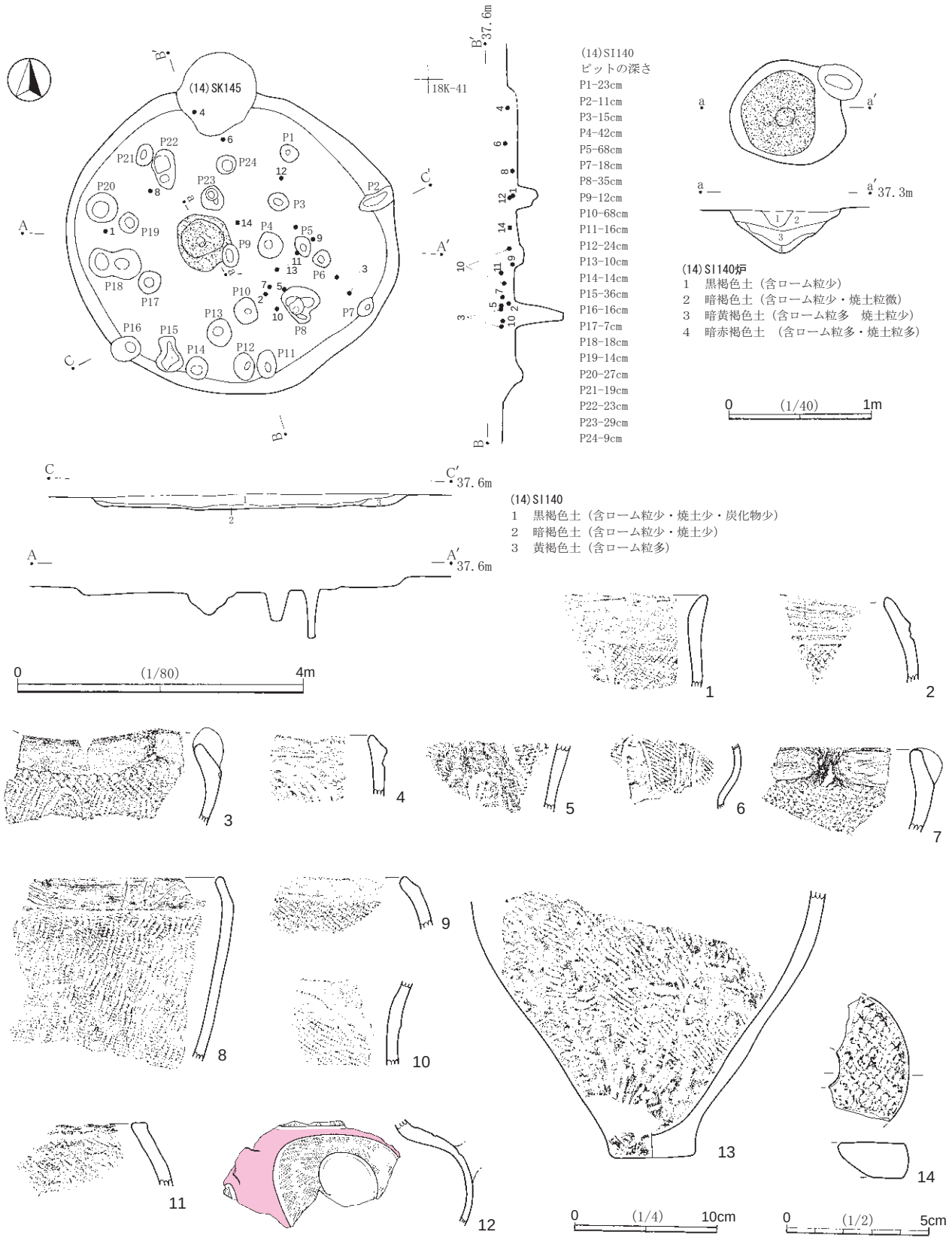
４は土製円板の欠損品である。周縁の磨りは深い。

(14) SI140（第94図、図版14）

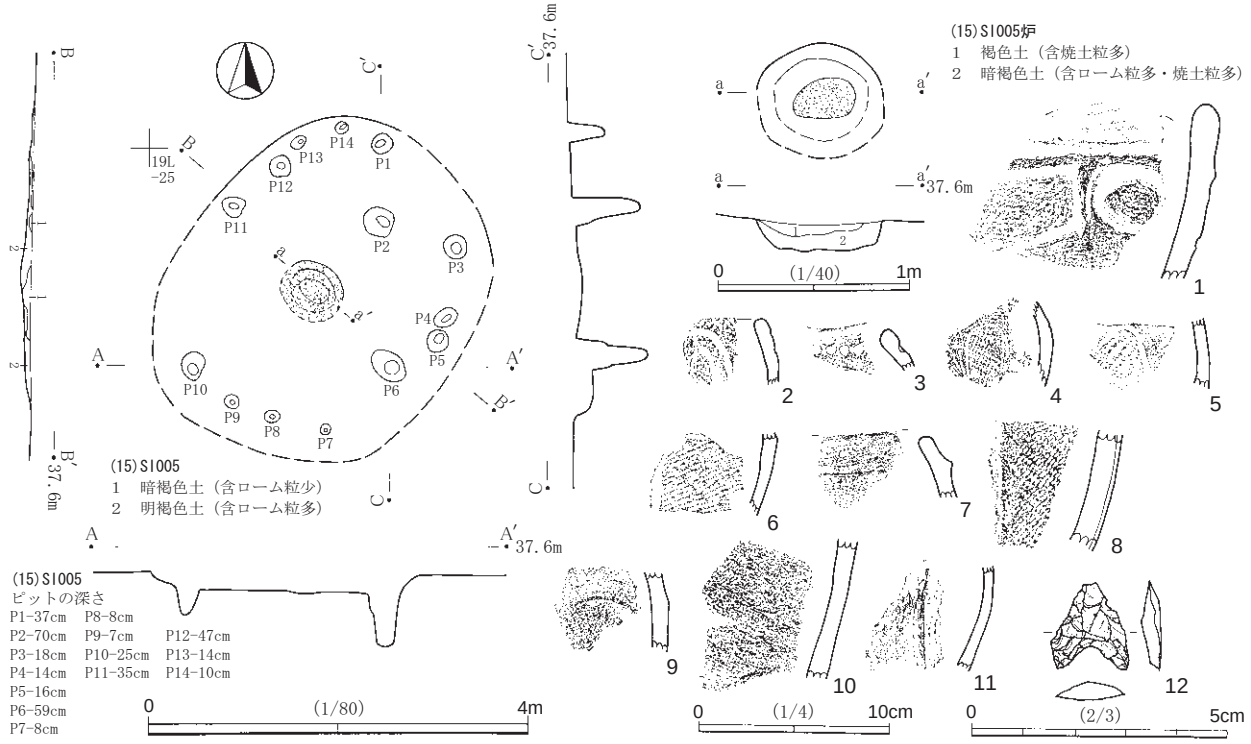
遺跡中央部やや北寄り、18Ｊ－49・59、18Ｋ－40・50グリッドに位置する。北側を（14）SK145に切られていた。平面形は楕円形で、長軸4.73m、短軸4.28m、深さ20㎝を測る。覆土中には炭化物・焼土粒が少量含まれていた。ピットは不規則に配列され、東側のP5･P8が他より深い。炉の平面形は不整楕円形、断面形は擂鉢状を呈する。長軸84㎝、短軸73㎝、深さ30㎝を測る。底面近くに焼土が多く含まれていた。

遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第94図、図版53・74）



第94図 (14) SI140



第95図　(15) SI005

１は直口口縁で、口縁部に幅広く無文帯を設け、その下に内側が無文の逆U字状区画文をやや太めの沈線で施す。２は口縁部無文帯下が微隆起状となり、その下に平行沈線を施す。３は波状突起下で、左右の口縁部無文帯がぶつかって盛り上がる。その直下の刺突文は半截竹管を立てて下から上に刺突したものである。その下は逆U字状区画文で区画内を無文としている。４は口縁部無文帯下が段となり、その下に太い沈線で逆U字状区画文を施し、縄文を充填する。５は胴部中段の破片で上半にU字状、下半に逆U字状区画文を施し、中を縄文で充填する。沈線は太く浅い。６は小型土器で、沈線による波状文を施し、縄文を充填する。７は左右の口縁部無文帯がぶつかって盛り上がる。８・９は口縁部無文帯下にわずかな段が付く。10は微隆起線文が見え、微隆起上に縄文がかかる。無文部は広い。11は口縁部が内傾する器形で、縄文と櫛歯条線文を施す。12は壺型状の器形で、逆U字状区画文内に縄文を充填する。横渡の橋状突起も認められ、無文部はほとんど落ちているが赤彩されていたらしい。13は胴下半から底部がほぼ完存する。底径６㎝、現存高19㎝を測る。全面縄文のみである。小破片が多いが、大部分は加曽利Ｅ3-4式であろう。

土製品（第94図、図版113）

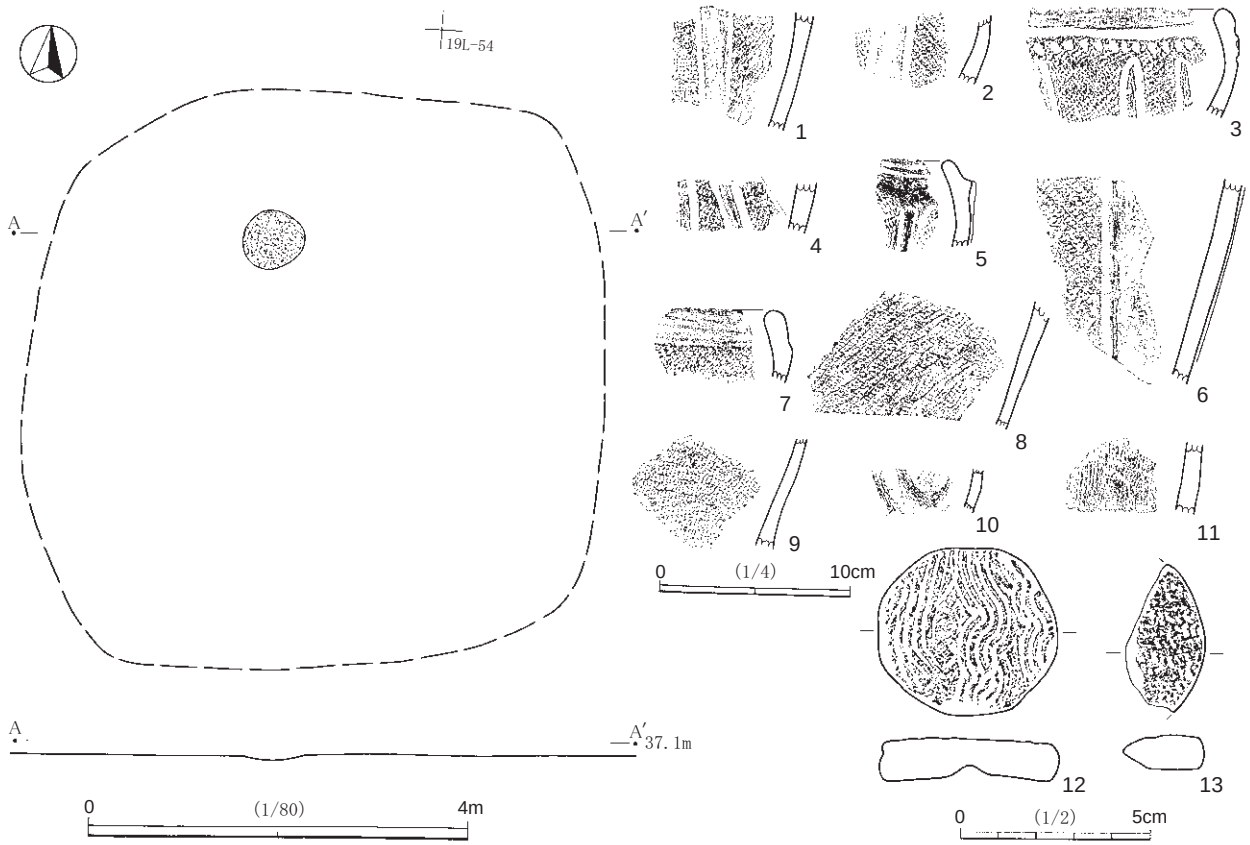
14は土製円板の欠損品である。周縁の磨りは深く、孔は裏面からの片面穿孔である。

石器

チャート製の石鏃未成品１点・剥片２点・砕片１点、黒曜石製の石鏃１点・剥片３点・砕片３点、メノウ製の石鏃１点、緑泥片岩製の石皿１点・剥片１点、流紋岩の剥片１点が出土した。

(15) SI005（第95図、図版14）

遺跡北部、19Ｌ－15・25・26グリッドに位置する。南側はほとんど撹乱されており、壁の痕跡が検出されたのは北側及び東側の一部にすぎない。規模は、長軸約3.8m、短軸約3.1m、深さ21㎝を測る。ピッ



第96図　(15) SI006

トは14か所検出された。壁下に楕円形に配列されるものが主で、壁柱穴と捉えられる。深さに統一性はない。径の大きいP2・P6は壁柱穴より深い。炉は楕円形を呈し、長軸66㎝、短軸62㎝、深さ17㎝を測る。覆土は焼土を多量に含む。

遺物は、土器・石器が出土した。一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は出土土器に時間幅があり、絞り込めない。

土器（第95図、図版74）

１は口縁部無文帯下に低平な隆線による円文と枠状文を施す。２～６は沈線による逆U字状区画文を施すものである。２は二重の沈線区画内を磨り消す。３は口縁に沿う沈線内に円形刺突を施す。４～６は逆U字状区画内に縄文を充填する。沈線は２・５・６はやや太め、３・４は細い。７～９は微隆起線文を施す。10は底部付近の破片で、縄文のみ施す。11は無文地に微隆起線文を施す。瓢箪形ないしは壺形の土器であろう。以上、加曽利Ｅ3式中段階から同4式まで時間幅がある。

石器（第95図、図版115）

12は凹基無茎鏃である。先端部が欠損しており使用痕（「縦溝状剝離」）が認められる。石材には信州系黒曜石を用いられている。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品１点、チャート製の石鏃未成品１点、ガラス質黒色安山岩の剝片１点が出土した。

(15) SI006（第96図）

遺跡北部、19Ｌ－53・54・63・64グリッドに位置する。撹乱が著しく、炉と考えられる焼土粒の集中を

検出したのみである。破線で示したプランは遺物の出土範囲から推定したものである。

遺物は、土器・土製品・石器が出土した。一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は確定できない。

土器（第96図、図版75）

３は口縁に沿って沈線を引き、その下に刺突列を施す。その下は内部が無文の幅の狭い逆U字状区画が認められる。沈線は太めである。１・２・４は無文部と縄文施文部が隣り合う。１・２は充填縄文であり、磨消懸垂文とはならない。５は断面蒲鉾状の隆線がT字状に認められる。６の隆線も断面蒲鉾状である。７は口縁部無文帯と以下の縄文施文部の境に段が設けられる。８・９は縄文のみ、10は瓢箪形ないしは壺形土器の小破片、11は櫛歯条線文である。３・６は加曽利E3式新段階であろう。

土製品（第96図、図版113）

12・13は土製円板である。周縁の磨りは12はやや浅く、13は深い。12は裏面に未貫通の孔がある。13も裏面に孔があるが、欠損のため貫通しているかどうか不明である。

石器

チャート製の石鏃未成品１点･剥片１点、黒曜石の剥片２点、多孔質安山岩製の石皿片１点が出土した。

(16) SI003（第97図、図版14・15）

遺跡北東部、20O－40・41・50・51に位置する。北側を（8）SD001に切られる。卵円形を呈し、長軸5.00m以上、短軸4.40m、深さ16㎝を測る。南側には浅い土坑状の掘り込みが取り付いている。出入口部の可能性がある。周溝は東側及び西側の一部で施されている。幅約16㎝、深さ約５㎝を測る。ピットは７か所検出された。P1・P2・P8・P9は主柱穴で、深さ65㎝～102mを測る。南側の掘り込み内のピットはP6・P7ともに深さ50㎝台を測る。炉は楕円形を呈する。長軸1.04m、短軸73㎝、深さ16㎝を測る。土器片囲い炉で、中央付近に８の胴部片が正位で埋設され、６・11・12も炉内から出土した。

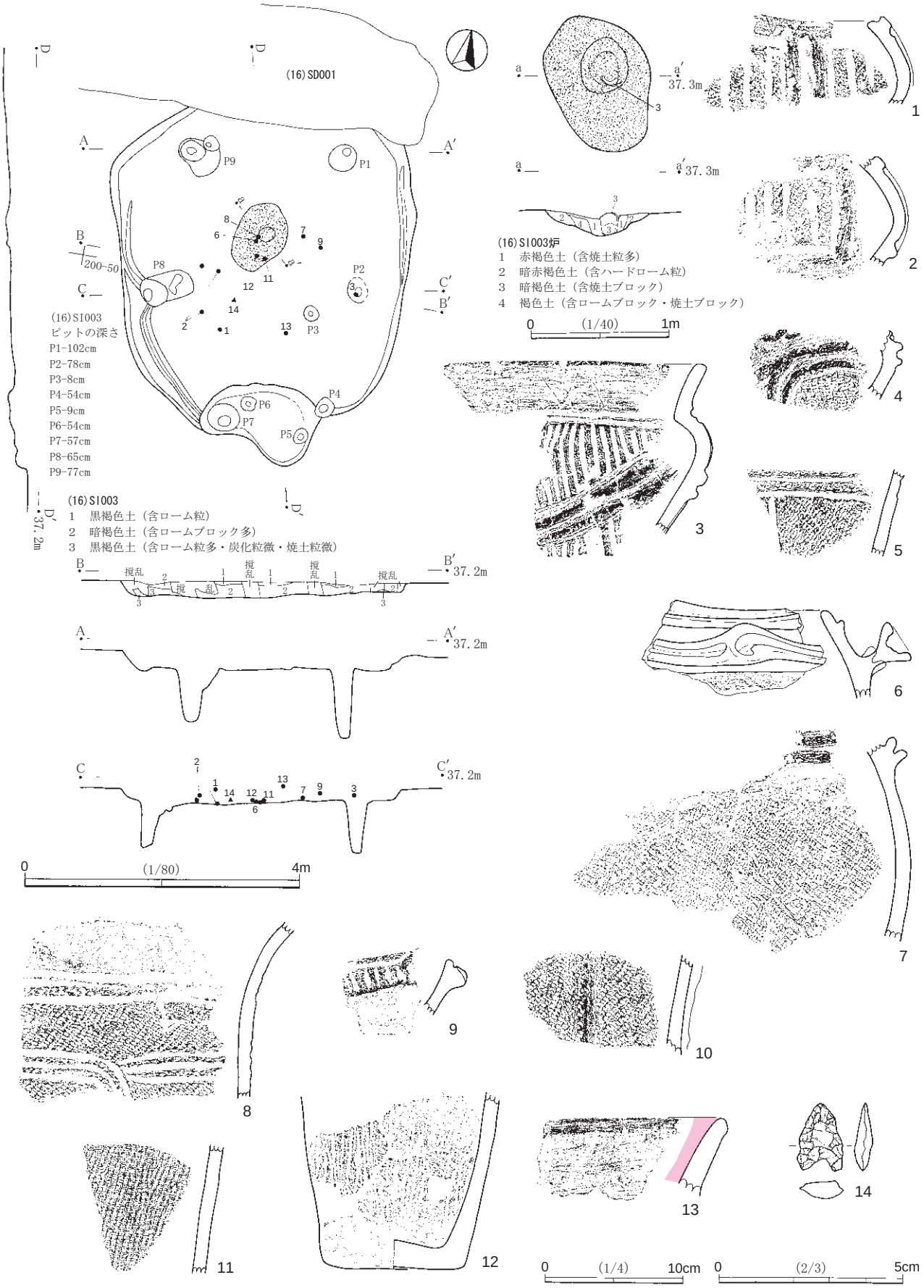
遺物は、土器・石器が炉の南側を中心に出土した。所属時期は１期としておきたい。

土器（第97図、図版53・75）

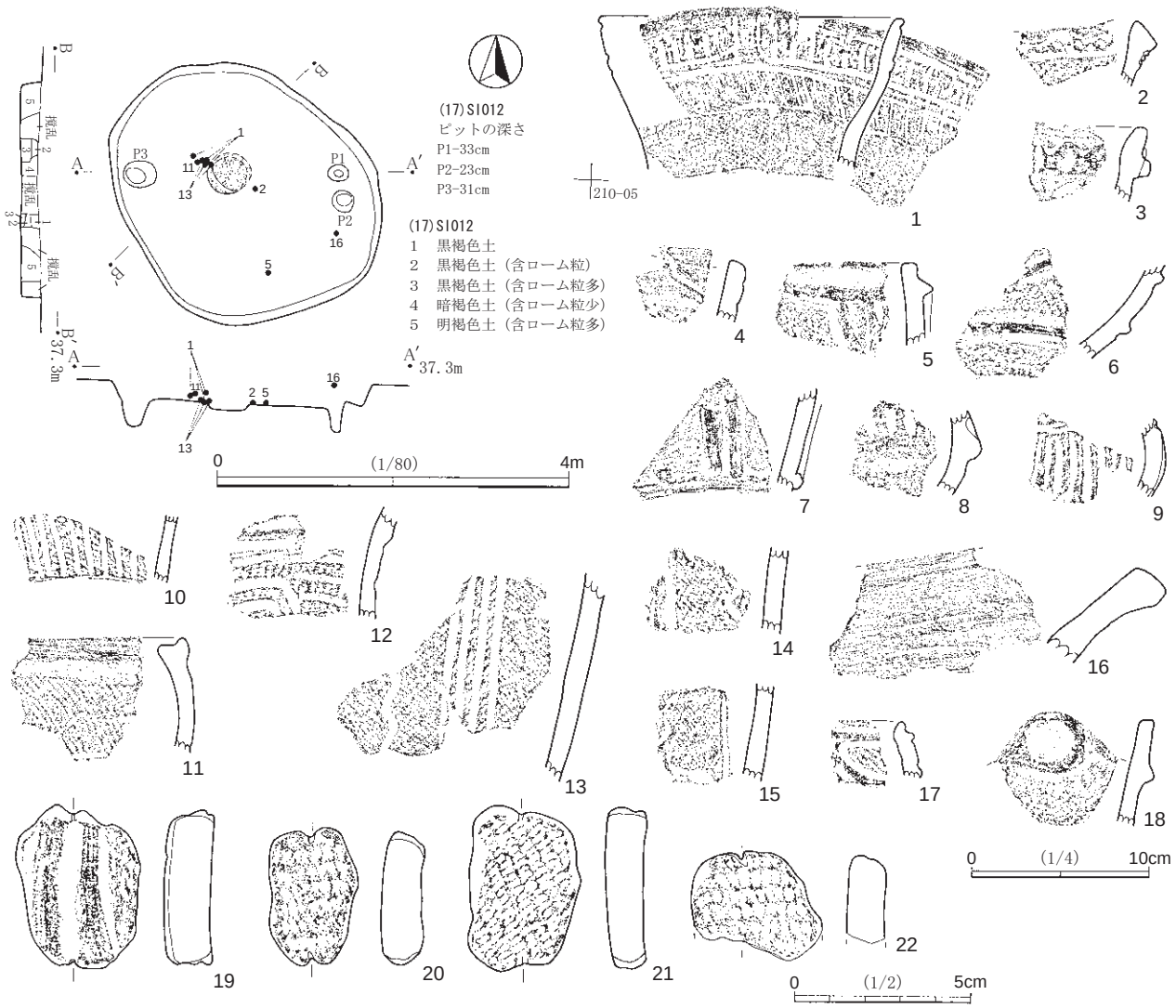
１・２・８は同一個体である。８は炉体土器で内面と外面上半に二次的火熱を受けあばた状であるが、１・２も炉外であるにもかかわらず内外面に二次的火熱を強く受けている。炉体土器の一部が廃棄時に抜き取られたのであろう。１・２は隆帯で上下を画した口縁部文様帯を縦位隆帯で縦割りし、その中に集合沈線文を加えている。８は頸部から胴上部の破片で、頸部は無文、胴部は３条１単位の太い沈線による文様を施す。３は口縁部無文帯下に背割れ隆帯と集合沈線文が認められる。４は口縁付近の破片で、背割れ隆帯によるクランク状の文様とその上に交互刺突文が認められる。５は頸部から胴上部の破片で、胴部文様帯の区画沈線と懸垂文がみえる。６・７は同一個体で、胴がふくらむ器形をなす。口縁下の背割れ隆帯は高く突出して半渦巻文が乗る。９は厚い口縁端部に、刻みと沈線を施す。10は断面三角形の隆線上にも縄文がかかる。12は底径10㎝を測る。全面に撚糸文を施す。13は浅鉢と思われ､内面に赤彩の痕跡が残る。大部分が加曽利E1式であるが、古段階と新段階がともに出土している。10は阿玉台３～４式の可能性がある。

石器（第97図、図版115）

14は黒曜石製の凹基無茎鏃である。完形品である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品２点・砕片３点、チャート製の石鏃未成品１点が出土した。



第97図 (16) SI003



第98図　(17) SI012

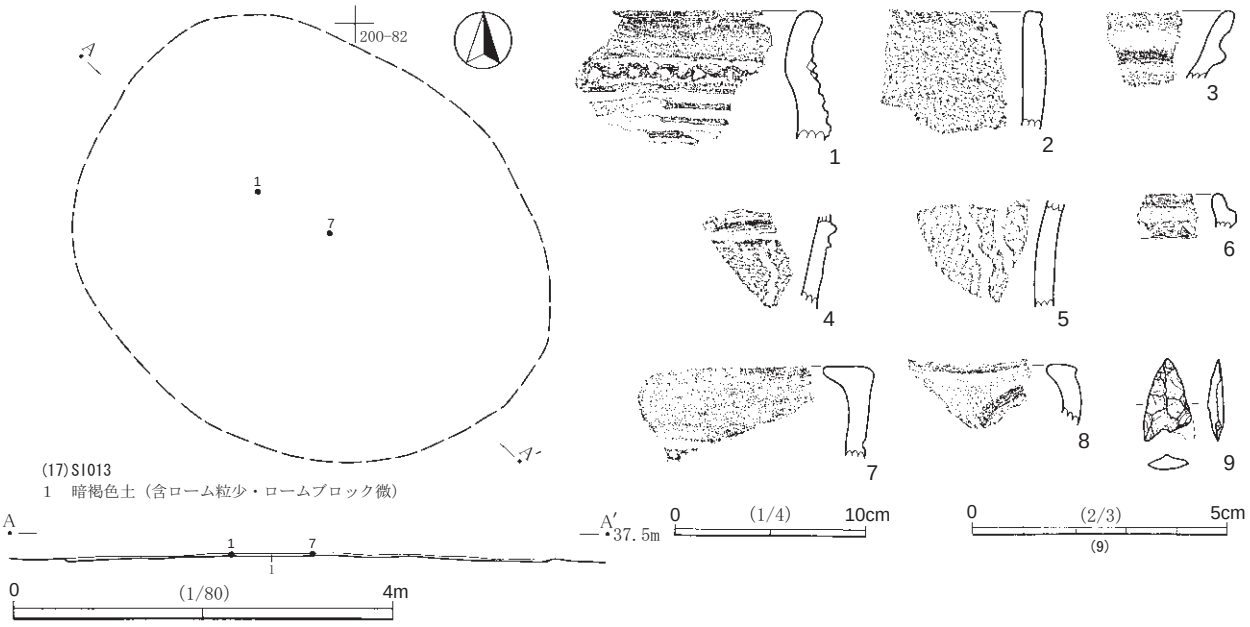
(17) SI012（第98図、図版15）

遺跡北部、20Ｏ－93・94、21Ｏ－03・04グリッドに位置する。北西から南東方向に長い不整楕円形を呈し、長軸3.30m、短軸2.75m深さ25㎝を測る。ピットは３か所検出された。深さ約30㎝を測るP1・P3は、炉を挟んでほぼ直線上に位置する。炉は西側のほとんどが撹乱されていた。不整円形を呈し、長軸50㎝、短軸45㎝、深さ９㎝を測る。

遺物は、１層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第98図、図版75）

１は推定口径18㎝の小型土器で、口縁から胴上部の約1/3が遺存する。口縁部に細い半截竹管の背ないしは腹で枠状区画文と横位沈線文を施し、その中を同工具の腹による集合沈線文を充填している。さらに、その下にはへらによる斜沈線を施す。２は波状口縁で、交互刺突文を施す。３は幅広の隆帯上に指頭圧痕が付く。４は口縁部無文帯に弧状の沈線が付く。５には２条の平行する隆線が残る。６と12は同一個体で、口縁部は隆線文様、頸部は太い沈線による文様を施す。７は粘土紐を縦位に平行して貼り付けている。８



第99図　(17) SI013

は深い沈線を縦位に施す。９は口縁部付近の破片で、口縁部文様帯の集合沈線文とその上に交互刺突文が見える。10も同様の集合沈線文を施す。11は太い沈線による口縁部文様帯の枠状区画が認められる。13～15はいずれも磨り消されない懸垂文と蛇行沈線の胴部破片である。16は浅鉢の波状口縁で、胎土に金雲母を含む。17は小型土器で、細い隆線による枠状区画の口縁部文様帯がみられる。18は舌状突起の破片で、突起部に円形の窪みを付ける。大部分は加曽利Ｅ1式から2式で、１～３はいわゆる中峠式を含む1式古段階であろう。11・17・18は同3式で混在と思われる。

土製品（第98図、図版113）

19～22は土器片錘である。22は半欠品で、他は糸掛けに対して左右非対称であるが、完存品と思われる。19には背割れ隆帯が認められる。

石器

黒曜石の剥片が２点出土した。

(17) SI013（第99図、図版15）

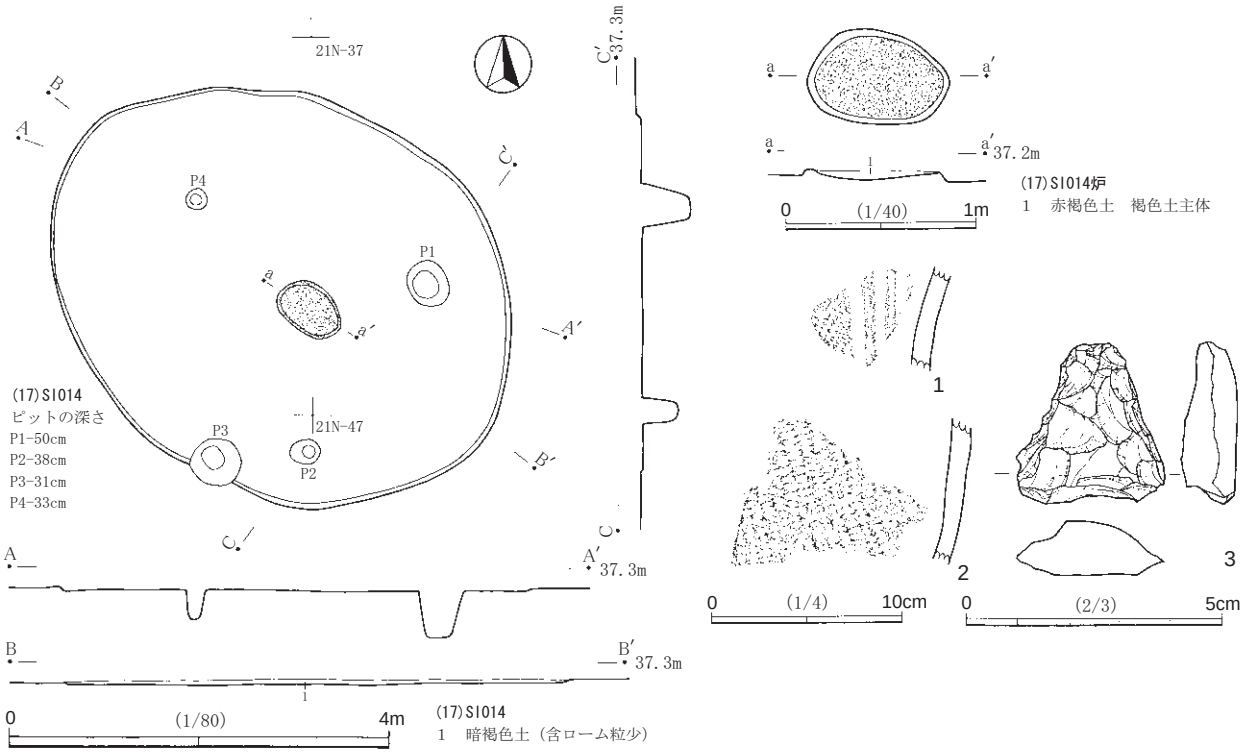
遺跡北部、20Ｏ－81・82・91・92グリッドに位置する。確認面からの掘り込みがほとんどなく、プランを確認できたのみである。北西から南東方向に長い卵円形を呈し、長軸5.23m、短軸4.30mを測る。

遺物は、土器・石器が少量出土した。土器はいずれも床面上から出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第99図、図版75）

１は口縁部無文帯下に交互刺突文と平行沈線を施す。２は角張った口縁断面を持つ縄文のみの破片で、４・５は蛇行沈線の胴部文様がみえる。６は隆線上に鋸歯状の刻み目が付く。７・８は口縁が内側に突出する。１は加曽利Ｅ1式古段階と思われる。２・７は勝坂式であろうか。

石器（第99図、図版115）



第100図 (17) SI014

９は凹基無茎鏃である。片脚が欠損している。石材は信州系黒曜石である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品１点・砕片１点が出土した。

(17) SI014（第100図、図版15）

遺跡北部､21Ｎ－36･37･46･47グリッドに位置する。北西から南東方向に長い卵円形を呈する。長軸5.18ｍ、短軸4.01ｍ、深さ５㎝を測る。ピットは４か所検出された。不整な配列で、P3は壁外に及んでいる。深さは31㎝～50㎝を測る。炉は楕円形を呈し、長軸71㎝、短軸67㎝、深さ４㎝を測る。

遺物は、土器・石器が少量出土した。一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は３期と考えられる。

土器（第100図、図版75）

１は磨消懸垂文、２は縄文のみである。１は加曽利Ｅ3式である。

石器（第100図、図版115）

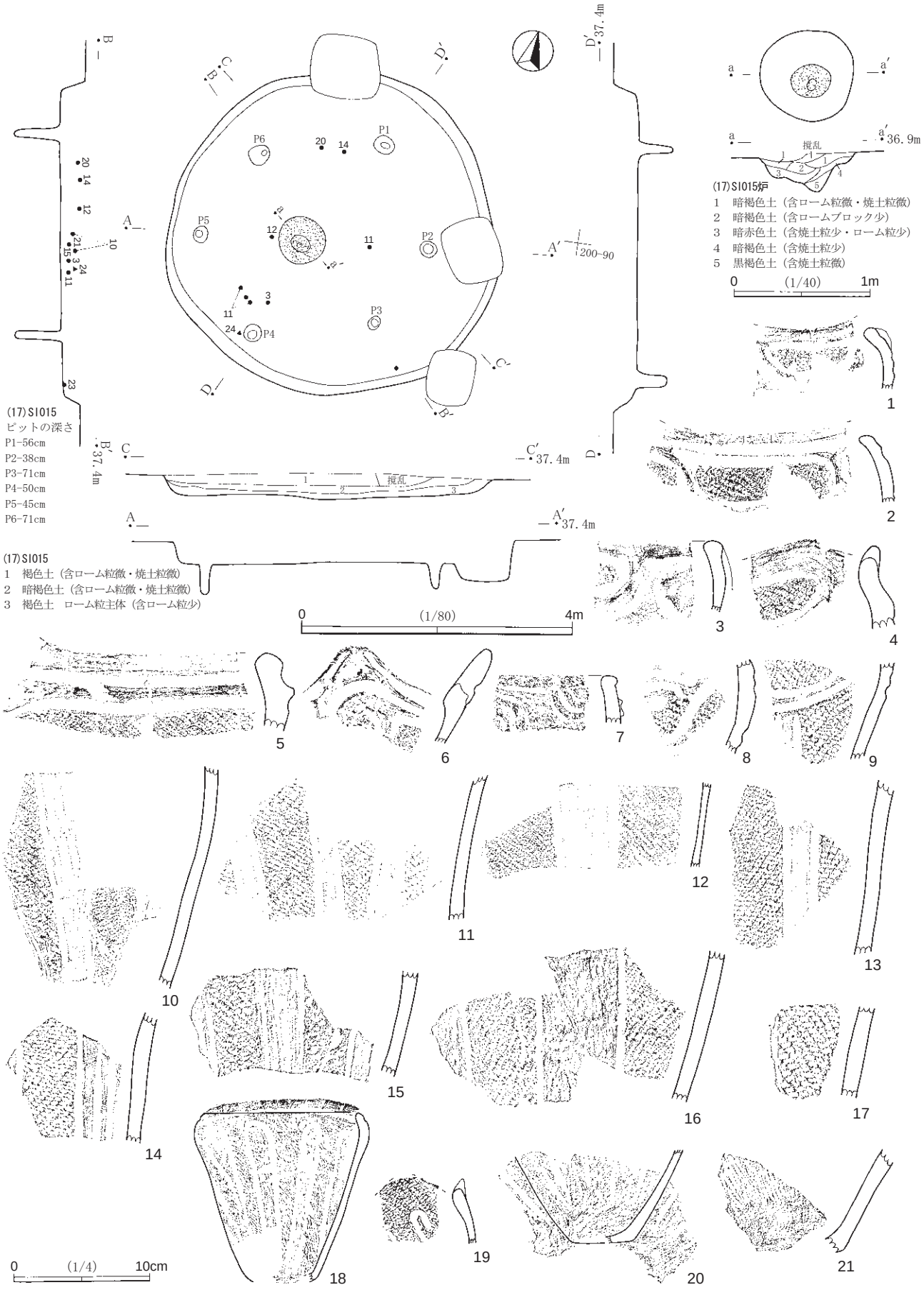
３は石鏃未成品である。楔形石器を素材としている。石材はチャートである。

(17) SI015（第101図、図版15）

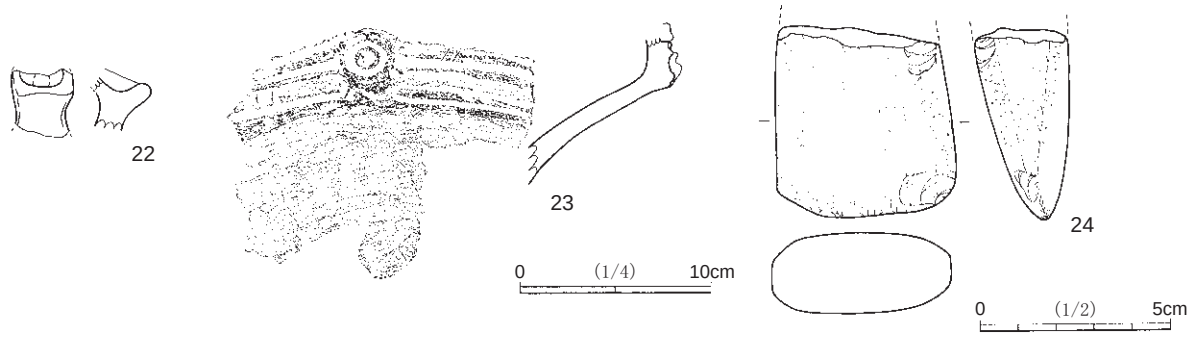
遺跡北部、20Ｎ－88・89・98・99グリッドに位置する。奈良・平安時代のSB002に切られる。略円形を呈し、長軸4.94ｍ、短軸4.86ｍ、深さ39㎝を測る。ピットは５か所検出された。炉と壁の間に1.1ｍ～1.5ｍ間隔で円形に配置される。深さ45㎝～71㎝を測る。炉は不整円形を呈し、長軸径約67㎝～69㎝、深さ27㎝を測る。

遺物は、１・２層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第101・102図、図版75）



第101図 (17) SI015 (1)



第102図 (17) SI015 (2)

1～5は口縁部文様帯に隆線で枠状区画を施す。このうち、4・5は同一個体である。6は波状突起下に低平な隆線で巻きのゆるい渦巻文を施す。7は背割れ隆帯によるクランク状の文様を施す。8・9は同一個体で、太い沈線による巻きのゆるい渦巻文や枠状区画文とその下に幅の狭い磨消懸垂文を施す。10～17は磨消懸垂文の胴部破片で、10と15は同一個体である。12・16は特に磨消部の幅が広い。17の縄文は複節縄文である。18は小型土器で、口縁部から底部縁までの約1/3が遺存する。推定口径11cm、器高12.5cmを測る。口縁直下を横位沈線で画し、その下に内部を無文とした逆U字状文と蕨手文を施す。縄文は細い無節で、沈線は太めである。19は波状口縁で、太い沈線による蕨手文が認められる。20は磨消懸垂文、21は櫛歯条線文を施した底部から胴下部である。22は橋状突起の破片である。23は浅鉢と思われ、直立する口縁部には円文を中心とした背割れ隆帯と沈線文様を施す。大部分は加曽利E3式で、幅広の磨消懸垂文は新段階の可能性があるが、他は中1段階であろう。7・23は加曽利E1式で混在と思われる。

石器（第102図、図版115）

24は定角式磨製石斧の刃部破片である。刃部には使用による損傷がみられる。石材は粗粒玄武岩である。

(26) SI001（第103図、図版15）

遺跡北西部、16F－01・02・11・12グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、長軸4.13m、短軸3.76m、深さ22cmを測る。ピットは5か所検出された。東から南側に分布し、深さはいずれも10cm台を測る。P2は土坑状で、長軸80cm、短軸60cmを測る。炉は楕円形で、長軸1.05m、短軸89cm、深さ15cmを測る。東側は火熱により硬化しており、2～4の破片が西側から出土した。土器片囲い炉と考えられる。

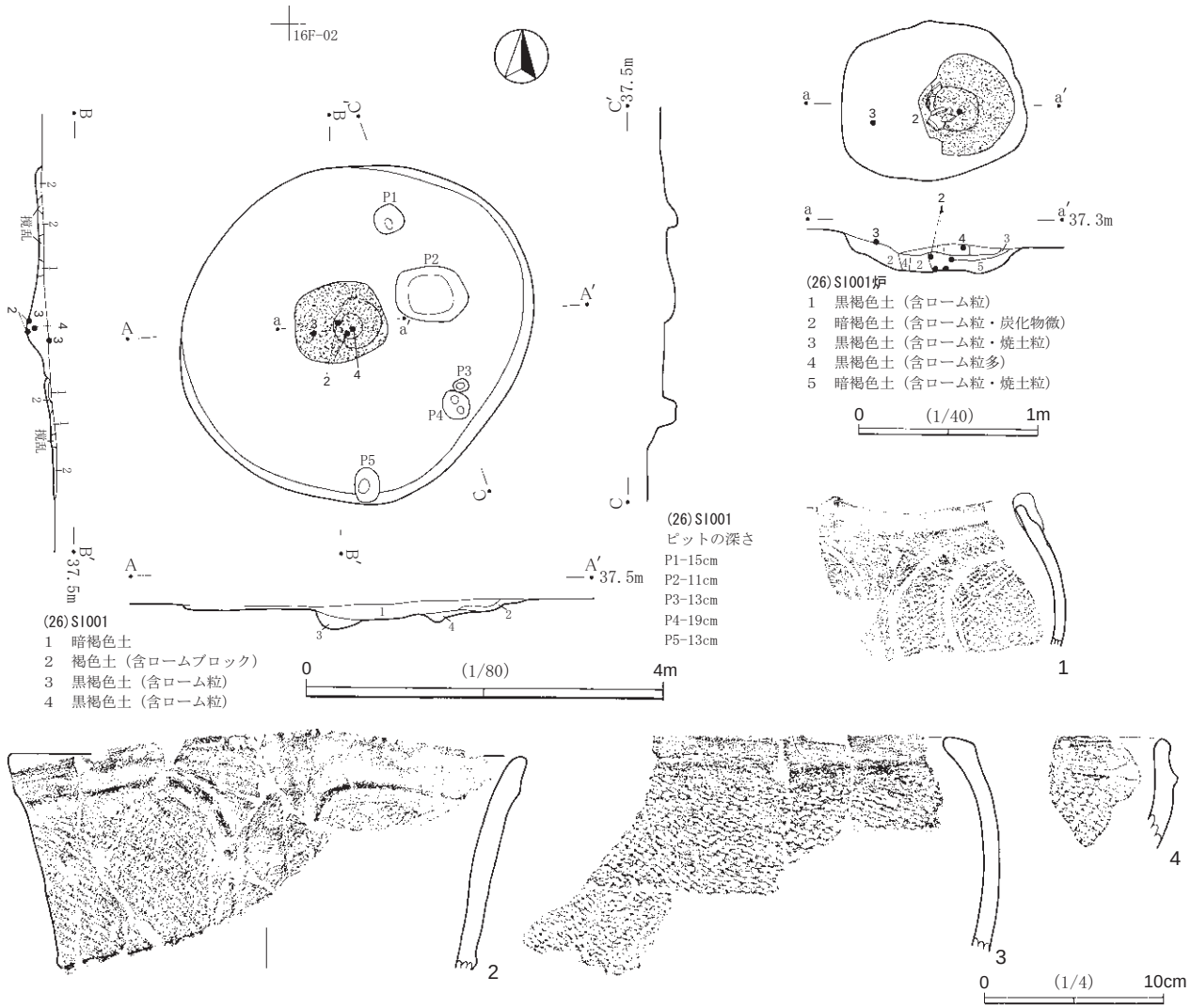
遺物は、炉外からは少量の土器が出土したのみである。所属時期は4a期と考えられる。

土器（第103図、図版76）

1は波状突起の下で左右の口縁部無文帯がぶつかってつまみ状に盛り上がる。その下には沈線による渦巻状の文様が2単位認められ、単位間は無文となる。2は炉体土器で、口縁部の約1/3が遺存する。推定口径29cm、現存高12cmを測る。口縁の内面が二次的火熱によりあばた状に荒れている。直口口縁で、微隆起線による大きな枠状区画内に縄文を施す。3は口縁端部が角張る。4は口縁直下が凹帯となり、凹帯の下端は微隆起線状に盛り上がる。以下の文様は沈線による逆U字状区画内に縄文を充填している。いずれも加曽利E3-4式で、2は梶山類の系統を引くものと思われる。

(26) SI003（第104図、図版16）

遺跡北西部、16G－72・73・82・83グリッドに位置する。南側は(26) SD004に切られていた。北東か



第103図　(26) SI001

ら南西方向に主軸をとる不整長円形を呈し、北東側の壁が内側に屈曲する形状である。長軸4.38m以上、短軸3.10m、深さ17cm を測る。北東壁際の床面は三角形のテラス状の高まりがみられる。床面との段差は約７cm である。ピットは４か所検出された。配置に規則性はみられない。炉は長軸56cm、短軸45cm、深さ19cm を測る。焼土を多量に含む層が堆積し、１の深鉢が倒れ込むように出土した。

遺物は、炉外からは少量の土器・石器が出土した。１の土器から所属時期は４ａ期と考えられる。

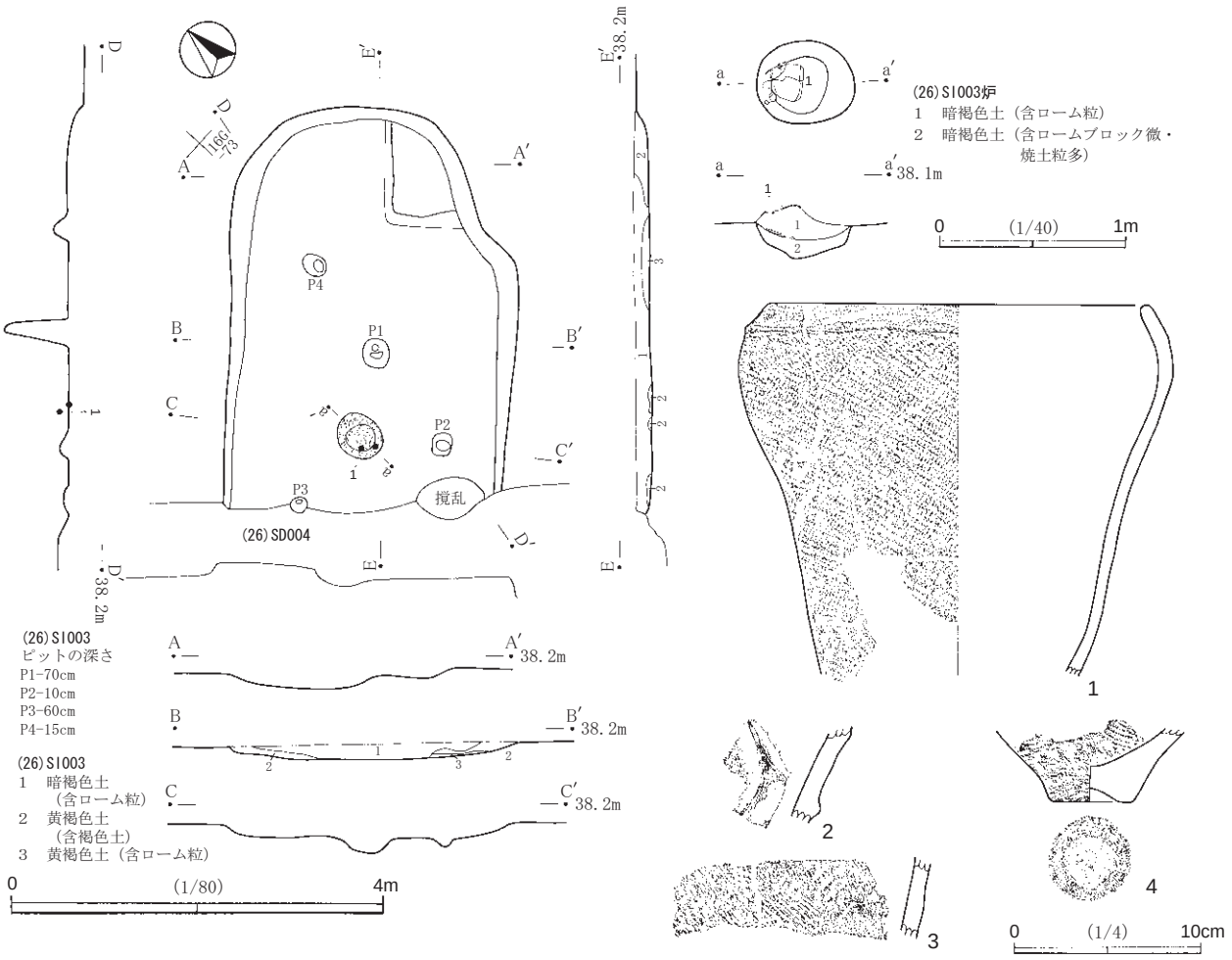
土器（第104図、図版53・76）

１は胴下部以下を除き、ほぼ完存する。口径21cm、現存高20cm を測る。キャリパー型の器形であるが、胴部のくびれは弱い。口縁直下は幅の広い無文帯となり、その下端はわずかに微隆起状に盛り上がる。以下は縄文となり、口縁部付近は横位施文である。２は断面蒲鉾状の隆線が認められる。３は櫛歯条線文、４は高台風の底部である。１はおそらく加曽利Ｅ3-4式であろう。

石器（第104図、図版115）

ガラス質黒色安山岩の剥片１点出土した。

(26) SI004（第105図、図版16）



第104図　(26) SI003

遺跡北西部、16G－63・64・73・74グリッドに位置する。隅丸方形の小竪穴状の住居跡である。長軸3.04m、短軸3.01m、深さ30cmを測る。覆土中にはロームブロックを多く含む。ピットは５か所検出された。深さ11cm～32cmを測る。P4・P5は壁にかかっている。炉は検出されなかった。

遺物は、北・南側を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１を重視して４ｂ期と考えたい。

土器（第105図、図版76）

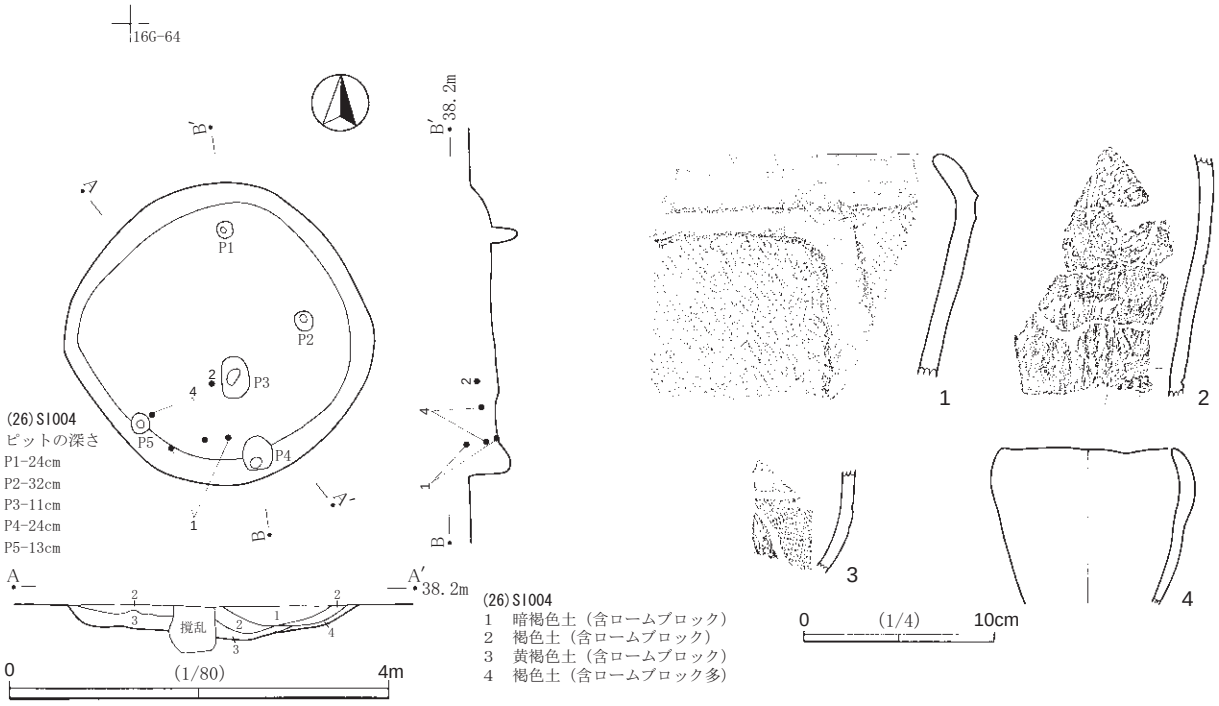
１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。その下には微隆起線区画による帯状の無文帯が鍵の手状に展開する。２は沈線区画内に縄文を充填したU字状文が上半に、逆U字状文が下端に認められる。沈線は細く稚拙で、無文部が広い。３は口縁部無文帯区画と内側を無文とした逆U字状文をしっかりした沈線で施す。４は推定口径９cmの小型土器で、口縁から胴下部までの1/2弱が遺存する。胴上部のくびれが弱いキャリパー型の器形で、無文である。１・２は加曽利Ｅ4式で１は古段階、３は同3-4式であろう。

石器

黒曜石製の石鏃1点、石英斑岩製の敲石１点、ガラス質黒色安山岩の剥片１点が出土した。

(26) SI005（第106図、図版16）

遺跡北西部、17G－16・17グリッドに位置する。ほぼ円形の小竪穴状の住居である。長軸3.26m、短軸



第105図 (26) SI004

3.05mを測る。ピットは４か所検出された。深さ11cm～30cmを測る。配置は不均等であるが主柱穴の可能性がある。炉は検出されなかった。１の深鉢が中央付近から横位で出土した。

遺物は、中央から北東側にかけて土器・石器が出土した。床面からやや浮いた状態で出土したものが多い。１の深鉢は中央付近から横位で出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第106図、図版53・76）

１は口縁部から胴上半の約1/2を欠くが、その他は底部までほぼ完存する。推定口径26cm、器高34cmを測る。胴のくびれの強いキャリパー型の器形で、幅の広い口縁部無文帯の下端は微隆起線状に盛り上がり、その下に編み棒状工具による刺突列を施す。２は口縁部に橋状突起が付く。以下は微隆起線区画による帯状の無文帯が逆U字状に展開する。３も微隆起線区画による逆U字状文で、縄文施文部には編み棒状工具による刺突列を施す。４も微隆起線文が認められ、５は口縁部に凹線が巡り以下櫛歯条線文となる。６は櫛歯条線文と縄文を施す。１～４は加曽利Ｅ3-4式であろう。

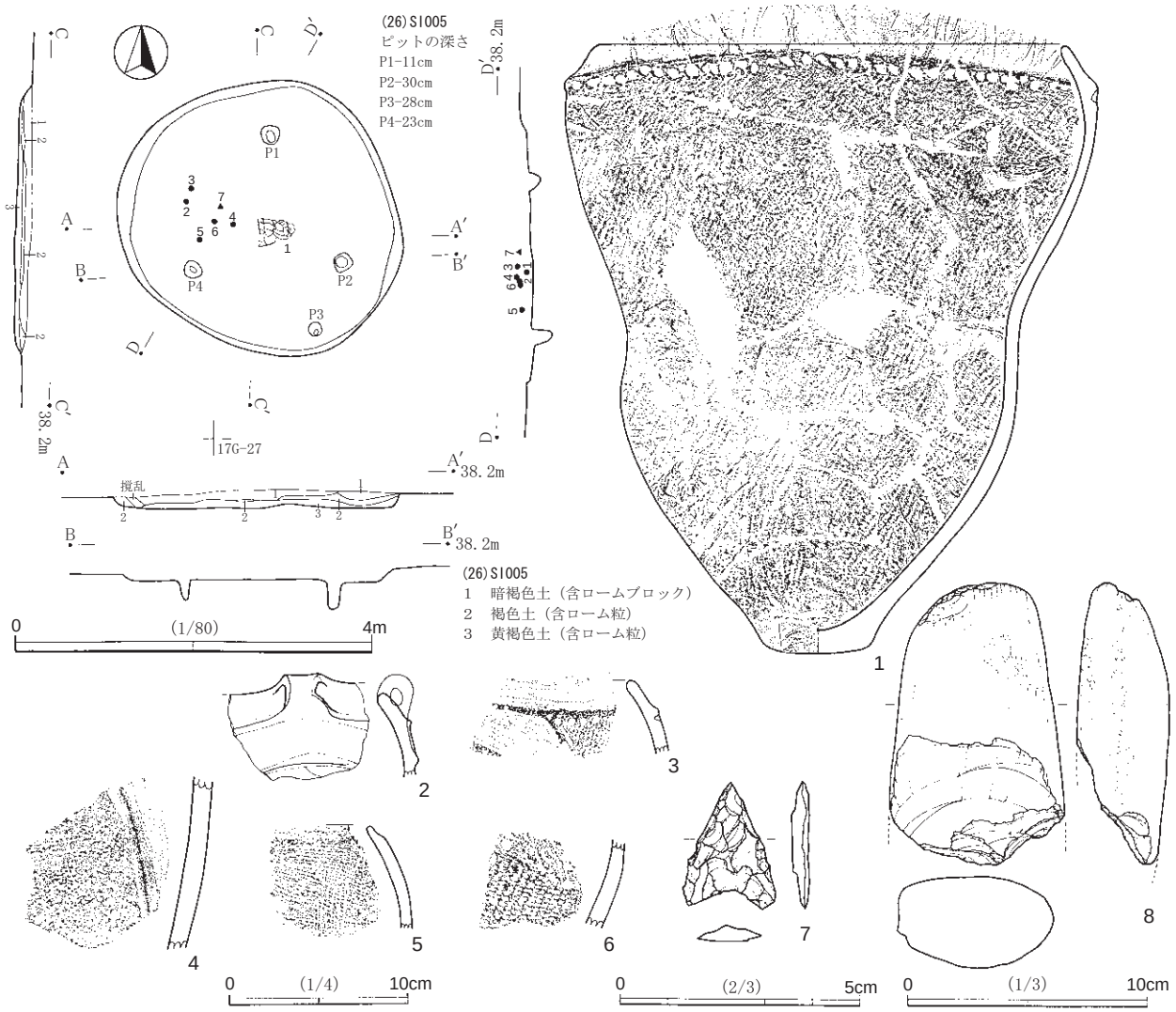
石器（第106図、図版115）

７はガラス質黒色安山岩製の凹基無茎鏃、８はホルンフェルス製の打製石斧である。８は形態から大型の定角式磨製石斧の転用と推定される。図示した以外では、ガラス質黒色安山岩の剝片１点が出土した。

(26) SI006（第107図、図版16）

遺跡北西部、17Ｇ－28・29グリッドに位置する。東側を (26) SD007に切られる。北西から南東方向に長い楕円形を呈すると思われる。長軸3.70m、深さ28cmを測る。ピットは５か所検出された。P2・P3・P4・P8は深さ22cm～35cmを測り、主柱穴と捉えられる。P4、P6・P7は支柱穴と思われる。炉は南北方向にやや長い楕円形を呈し、長軸85cm、短軸74cm、深さ26cmを測る。

遺物は、中央付近から多量の土器・石器が出土した。覆土上層の１層中から出土したものが多い。所属



第106図 (26) SI005

時期は４ａ期と考えられる。

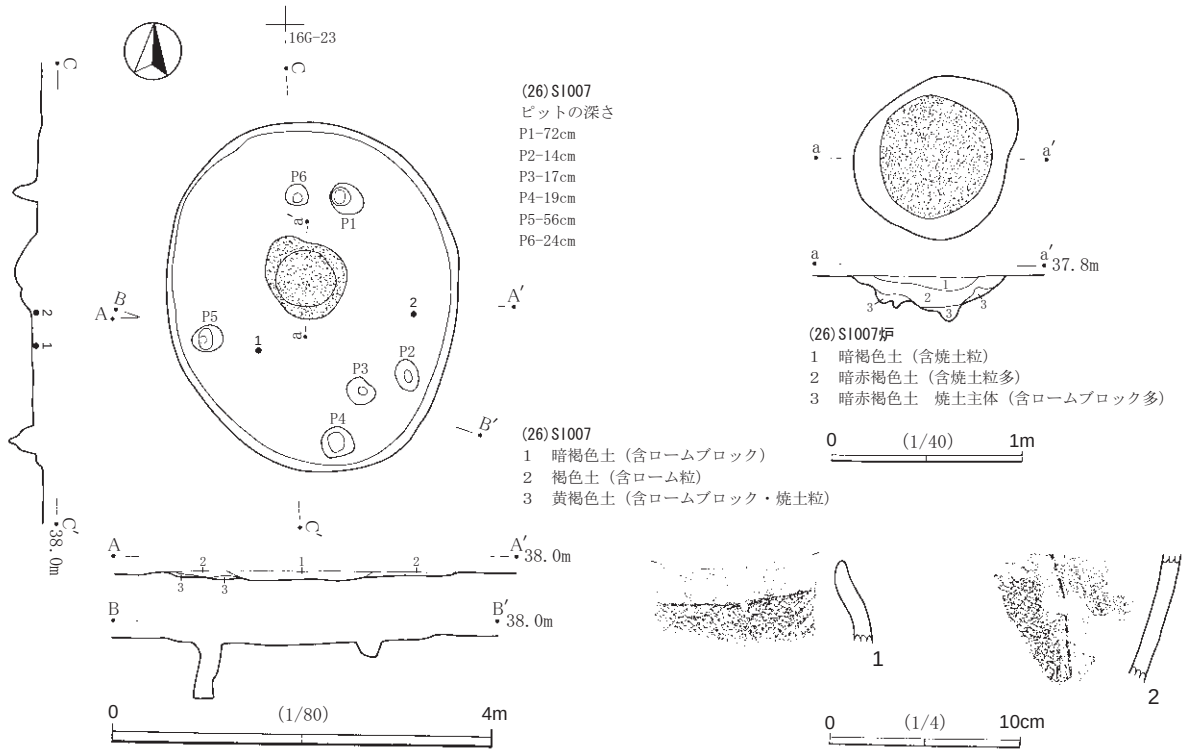
土器（第107図、図版76）

１は波状口縁で、口縁は強く内弯する。棒状工具による刺突列と沈線を２段口縁直下に施し、以下には沈線区画が認められる。２は口縁直下の無文帯を微隆起線で区画し、以下沈線区画が認められる。３は円形に近いU字状と逆U字状の沈線区画内に縄文を施す。４～７は口縁直下の無文帯が凹帯となるか、微隆起線で画する。４は不明瞭な微隆起線で右端に低い盛り上がりが認められる。５は明瞭な微隆起線、６・７は凹帯である。８・９は口縁部下や胴部に微隆起線区画による帯状の無文帯が認められる。10は胴のくびれが強いキャリパー型の器形で、くびれ部に櫛歯条線文、口縁部と胴下部に縄文を施す。11は胴部から底部直上までの破片で、縄文のみを施す。12・13は同一個体で、微隆起線文のみを施す。大部分は加曽利Ｅ3-4式で、２・９は同4式と思われる。

石器（第107図、図版115）

14～16は凹基無茎鏃である。14は片脚、15は後世のガジリにより片脚、16は先端部を欠損している。

第107図 (26) SI006



第108図 (26) SI007

14･15がチャート､16が信州系黒曜石を石材として用いている。17は撮み部を有する石錐である。完形品で、良質半透明な信州系黒曜石を用材としている。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品１点･剥片５点･砕片２点、流紋岩製の楔形石器１点、チャートの剥片１点、ガラス質黒色安山岩の剥片１点が出土した。

(26) SI007（第108図、図版16）

遺跡北西部、16Ｇ－13・23・32・33グリッドに位置する。南北方向に長い卵円形を呈する。長軸3.70m、短軸3.13m、深さ10㎝を測る。ピットは６か所検出された。配置は不規則である。炉は北西側に張り出す不整円形を呈する。長軸95㎝、短軸80㎝、深さ18㎝を測る。底面は凹凸が著しく、覆土は焼土を多く含む。

遺物は、南側を中心にまばらに土器・石器が出土した。所属時期は４期としたい。

土器（第108図、図版76）

１は口縁部に凹帯が巡る。２は微隆起線文の胴部破片で、胎土中に金雲母を多く含む。１は加曽利Ｅ3-4式、２は同4式であろう。

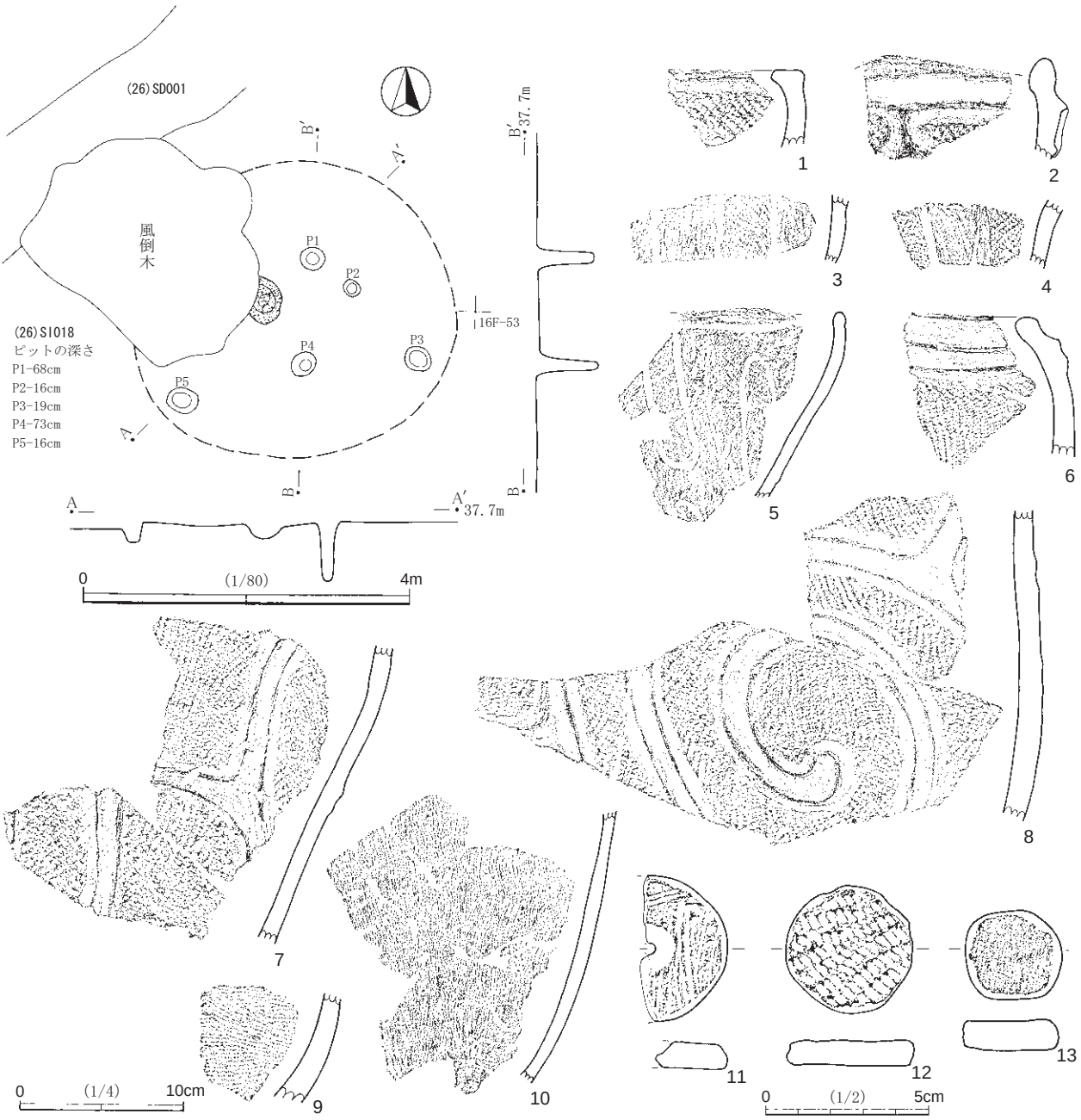
石器

チャートの剥片が１点出土した。

(26) SI018（第109図、図版16）

遺跡北西部、16Ｆ－52・53グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。炉の北西側は風倒木によって撹乱されている。ピットは５か所検出された。P1・P4は深さ約70㎝を測る。炉は南北方向に長い楕円形を呈すると思われる。長軸60㎝以上、短軸40㎝以上、深さ18㎝を測る。

遺物は、炉に隣接する風倒木の南東側を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考



第109図　(26) SI018

えられる。

土器（第109図、図版76）

１は口縁内側に厚みを持ち、２は低い波状口縁となる。いずれも口縁部に隆線による枠状の文様帯を配すると考えられる。３・４は磨消懸垂文を施す胴部破片である。５は口縁直下に沈線を引いてごく狭い無文帯とし、その下には縄文を充填したU字状・逆U字状文が不揃いに並ぶ。縄文は意図的にはみ出して施している。６～８は同一個体で大型の土器である。断面三角形の微隆起線に近い隆線で大振りの渦巻文様を施すいわゆる梶山類である。９は縄文、10は櫛歯条線文である。２は加曽利Ｅ3式中段階、他は新段階であろう。

土製品（第109図、図版113）

11～13は土製円板である。側縁の磨りは13が深く、11・12は13に比べてやや浅い。11の孔は両面穿孔であるが表面の孔が大きい。裏面の孔は表面の孔とは位置がずれ、斜めに穿孔が行われている。

石器

チャートの剝片が１点出土した。

(29) SI701（第110図、図版17）

遺跡北西部、17Ｅ－99、17Ｆ－90、18Ｅ－09グリッドに位置する。南西側で(29) SK926と重複する。不整円形を呈する。長軸4.03m、短軸3.72m、深さ25cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とし、ピットは11か所検出された。おおむね円形に配列される。炉は土器片囲い炉である。径約60cm、深さ25cmを測り、側面に13の石皿片、１と２の土器片の外面を炉内に向けて設置していた。

遺物は、炉の北西側を中心に床面からやや浮いた状態で土器が出土した。所属時期は４ｃ期と考えられる。

土器（第110・111図、図版54・76）

１は炉囲いの土器で、推定口径41cm、現存高49cmを測る大型土器である。口縁から胴下部にかけて約1/3が遺存する。破片の右側寄りが二次的火熱を強く受けている。文様は口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、その下に胴上半までのU字状区画文と胴下部まで達する逆U字状区画文を交互に配し、その中に縄文を充填する。逆U字状文が口縁直下の微隆起線と接する個所は突起状に盛り上がっている。２も炉囲いの土器で、まったく同じ文様構成をとる。１とは縄文が異なる。４は２と同一個体である。３は口径21cm、現存高21cmを測る。口縁突起１個と胴下部を欠くほかは完存する。口縁突起は４単位で、橋状突起と口縁直下の無文帯が左右からぶつかって盛り上がるつまみ状突起がそれぞれ対向する。文様構成は１・２とほとんど変わらないが、縄文を充填した逆U字状区画文は独立している。５は浅い沈線による二重の逆U字状区画文内を無文としている。６は縄文を充填するU字状区画文と三角区画文を施す。７は縄文のみ、８・９は櫛歯条線文で、８は一部磨り消されているように見える。10はＸ字状の橋状突起の破片で、胎土中にはすりつぶした土器片粒を多く含む。11は４条の沈線内に縄文が付くがその外側は無文である。12は太い沈線区画による縄文帯が認められる。１～４・６は加曽利Ｅ4式で、炉囲い土器の１・２及び６は中段階、覆土出土の３は古段階であろう。５は3-4式か。12は称名寺式である。

石器（第111図、図版116）

13は石皿の破片である。表面は凹み、裏面は平坦である。表裏とも縁辺に凹み痕が巡り、それぞれ７孔、８孔を数える。石材は粗粒の安山岩である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃１点、石英斑岩製の磨石類が１点出土した。

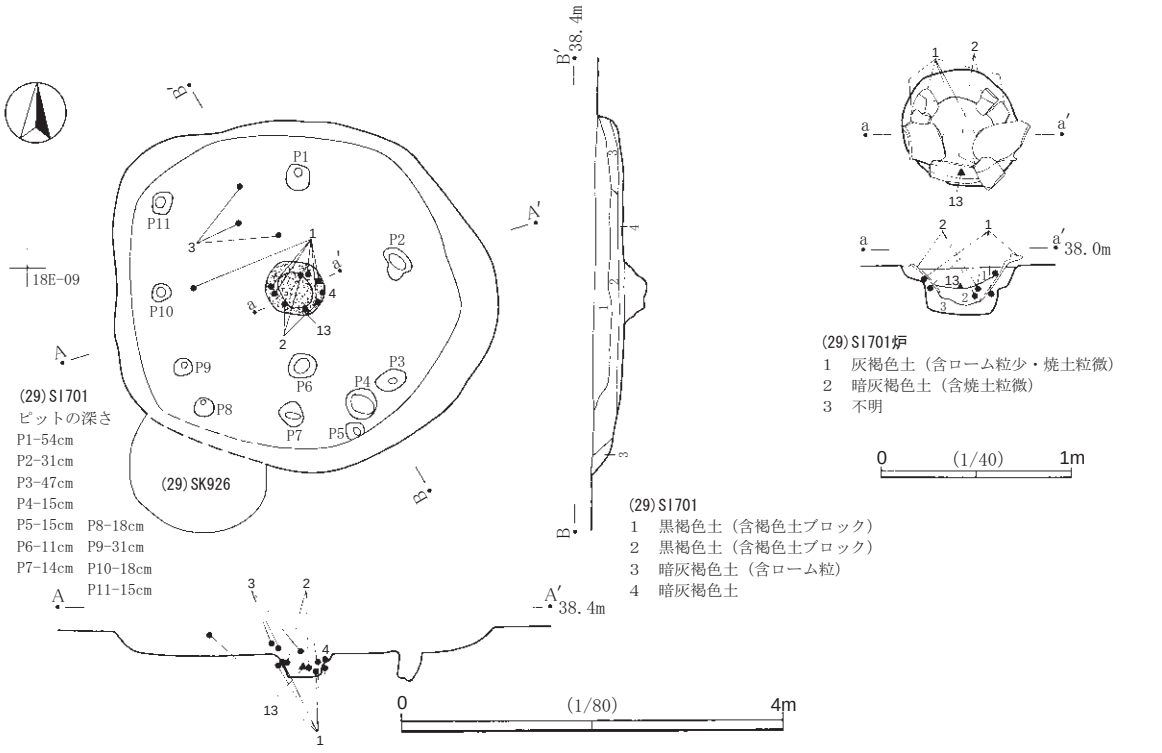
(29) SI702（第112図、図版17）

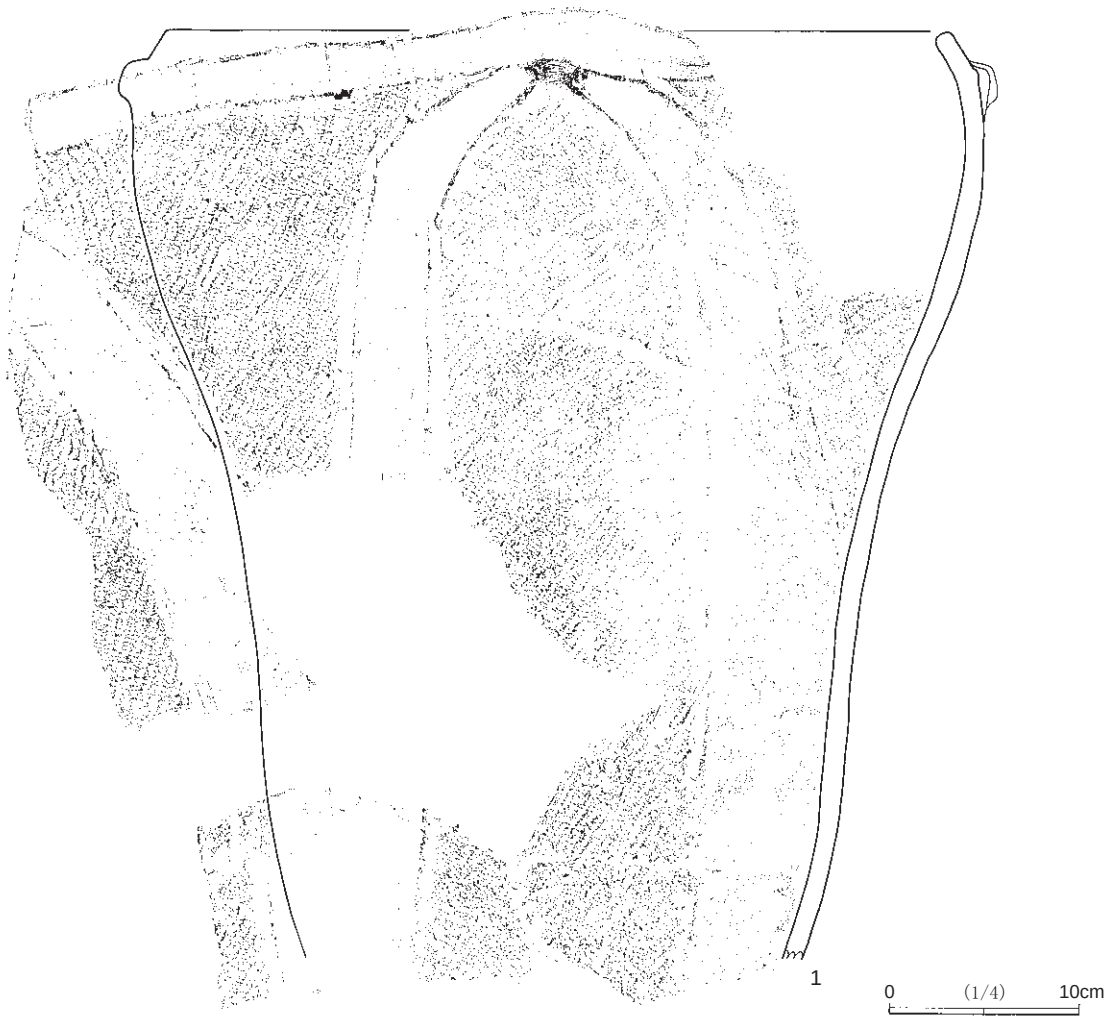
遺跡北西部、18Ｅ－16・17・26・27グリッドに位置する。(29) SK936と重複する。南北方向は5.25m、深さ10cmを測る。ピットは８か所検出された。P7・P8はともに深さ42cmを測り、主柱穴の可能性がある。炉は検出されなかった。

遺物は、少量の土器・土製品が覆土中から出土したのみである。所属時期は４期と考えられるが、絞り込みができない。

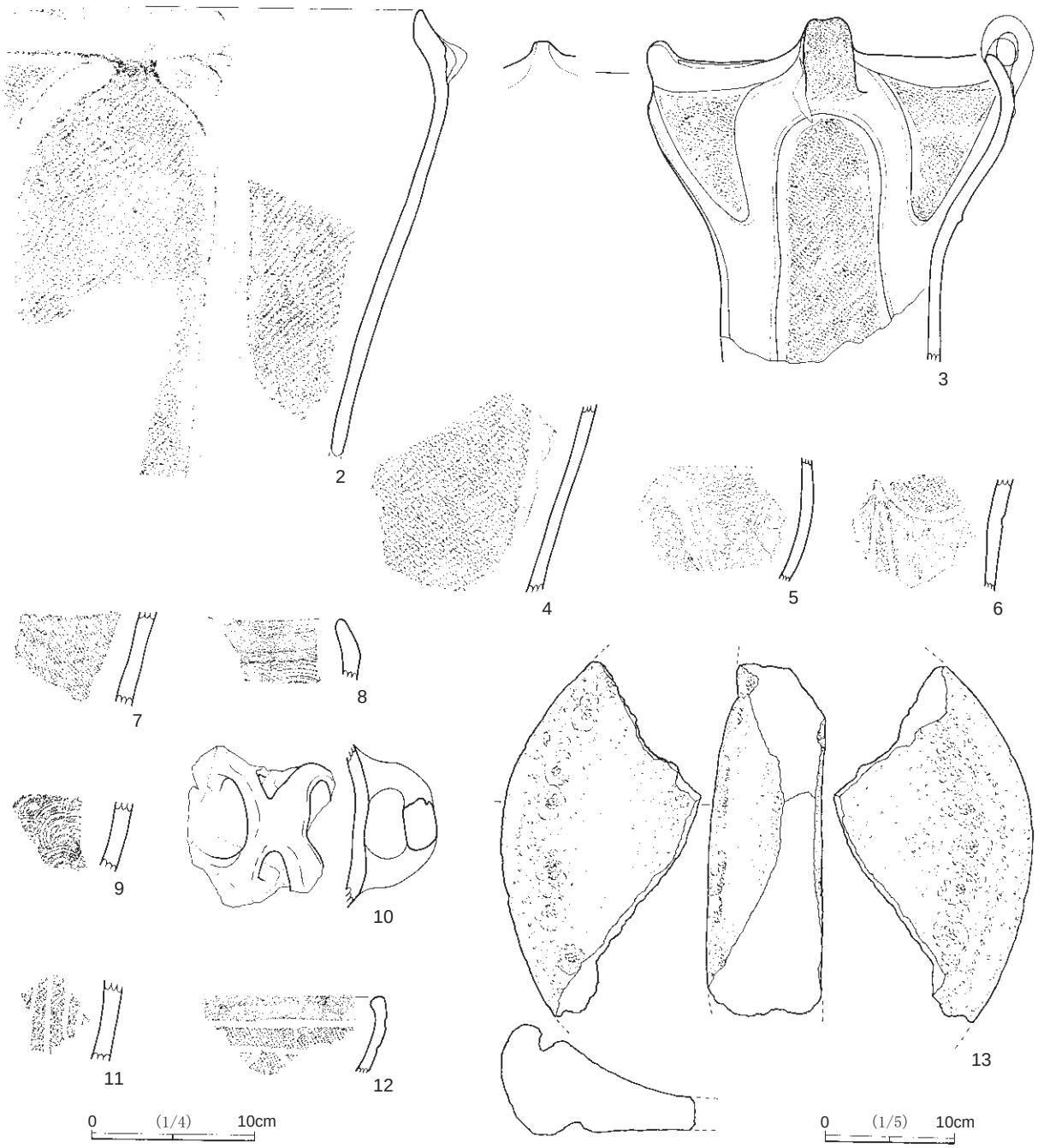
土器（第112図、図版76・77）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２・３は口縁突起である。２は縦長の貫通孔が開き、突起





第110図 (29) SI701 (1)

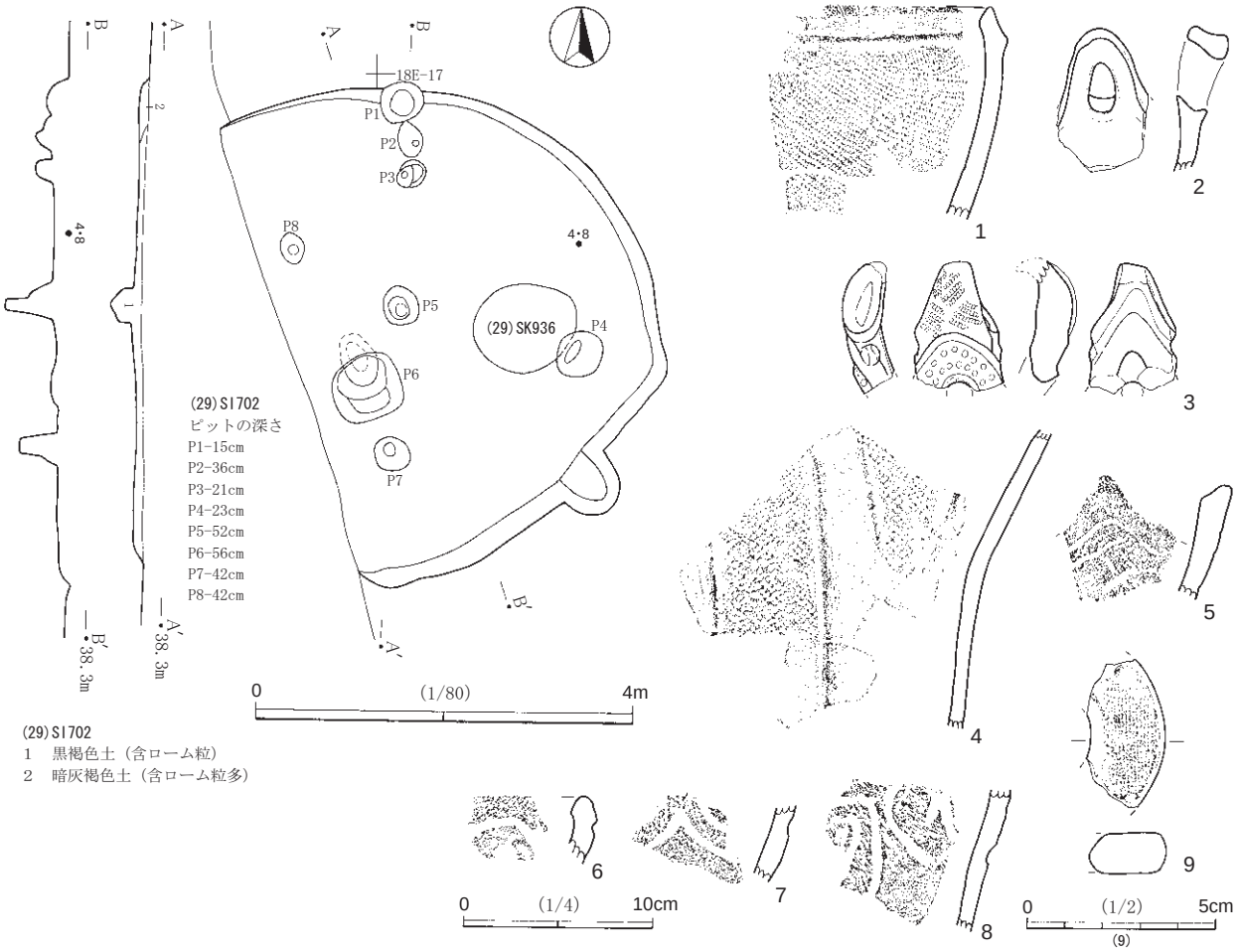


第111図　(29) SI701 (2)

の縁は微隆起線となる。３はいわゆる鳥形突起である。くちばし状になった先端部には縄文がかかり、その下に貫通孔を取り巻く円形刺突帯を微隆起線で画している。５～８は沈線区画内に縄文を充填した帯状縄文の土器であるが、８はくずれた帯状縄文である。１・３・４は加曽利Ｅ4式で、３は古段階であろう。６～８はこれらに伴う西日本系の土器と思われる。

土製品（第112図、図版113）

９は土製円板である。裏面を図示した。表面は無文である。周縁の磨りは深い。両面穿孔で、裏面の孔の方が大きい。



第112図 (29) SI702

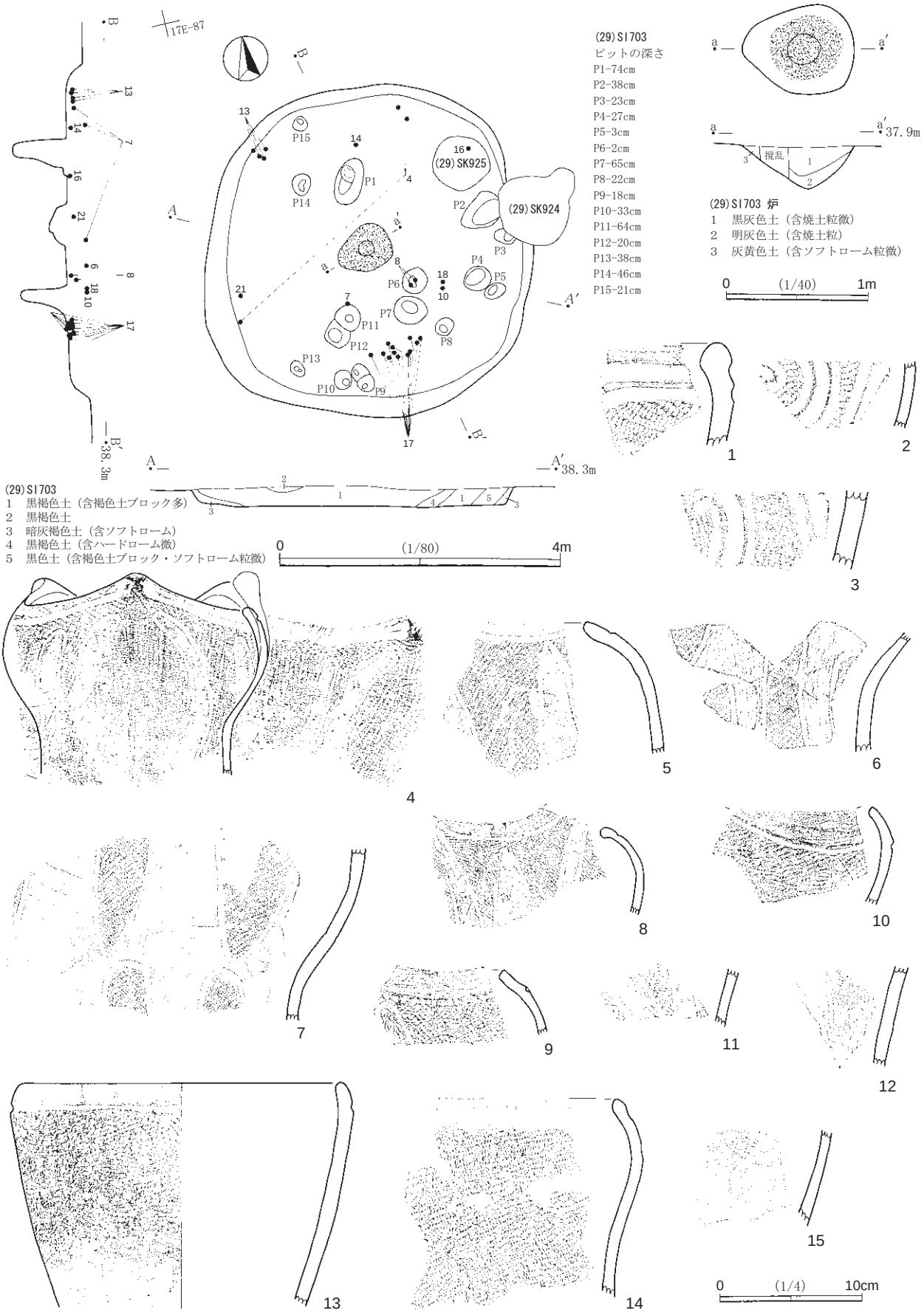
(29) SI703（第113図、図版17）

遺跡北西部、17Ｅ－86・87・88・96・97・98グリッドに位置する。東側で (29) SK924・SK925が重複する。ほぼ円形を呈する。長軸4.75m、短軸4.33m、深さ30㎝を測る。覆土は自然堆積状を示す。ピットは15か所検出された。配列は不規則であるが、比較的深いピットは中央付近にあり、P1・P7・P11は深さ60㎝以上を測る。炉は中央に位置する。南西側に張り出す形状で、断面形は擂り鉢状を呈する。長軸80㎝、短軸64㎝、深さ30㎝を測る。

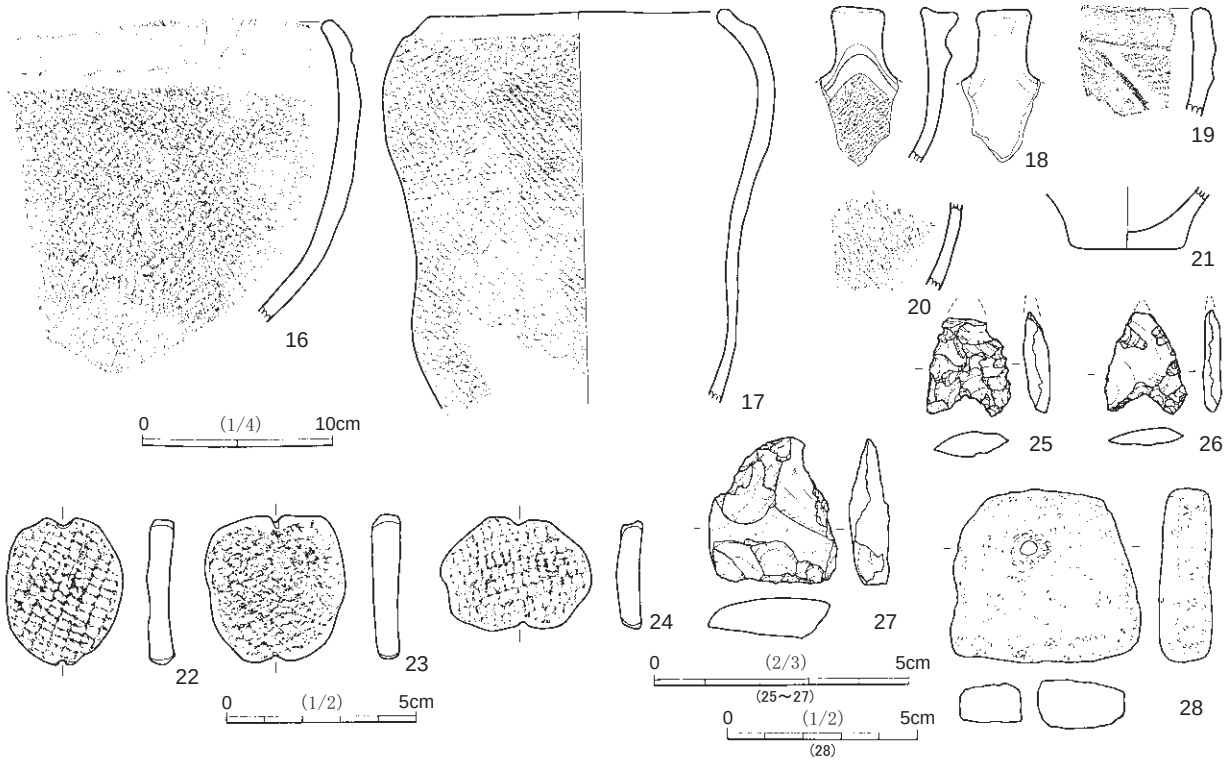
遺物は、土器・土製品・石器が出土した。17が床面付近から出土したほかは、多くが床面ややより浮いた状態で出土した。なお、16は (29) SK925に属する可能性もある。所属時期は、混在はあるものの主体となる土器から４ａ期と考えられる。

土器（第113・114図、図版54・77）

１は大型土器の破片で、口縁部文様帯の低平な隆線による枠状文がみえる。２・３は隆線による大型の渦巻文の一部がみえる。４は推定口径16㎝、現存高15㎝を測る。口縁から胴上半の2/3強が遺存する。キャリパー状の器形であるが、胴部のくびれは弱い。３単位の波状突起で、突起直下はつまみ状に盛り上がる。口縁下に太い沈線が巡るが、この沈線はつまみ部裾で半渦巻となる。文様は沈線区画によるもので、突起下で上半が縄文を充填する抱球文、下半が逆Ｕ字状文となり、突起間は上半が内側無文のＵ字状文、下半



第113図 (29) SI703 (1)



第114図　(29) SI703 (2)

が内側無文の逆U字状文となる。沈線は中位の太さである。５～12も沈線区画文様の土器で、５・６は同一個体である。５～８は縄文を充填したU字状文、逆U字状文あるいは三角文となる。９は口縁下に微隆起線が巡り、その下に編棒状工具による刺突列が沿う。沈線区画は抱球文となろう。沈線は５～７がやや太く、他は中位の太さである。13は推定口径23㎝、現存高16㎝を測る。口縁から胴部にかけて1/2弱が遺存する。口縁部無文帯を沈線で画し、胴上半までが縄文、その下が櫛歯条線文である。14は口縁下に指頭による幅広の沈線が巡る。器形は４に近い。15は底部付近の破片で、太さの異なる縄を撚り合わせた縄文である。16の口縁下に巡る沈線も指頭によるもので、上半は縄文、下半は櫛歯条線文である。17は胴下半を欠くほか完存する。口径16㎝、現存高21㎝を測る。器形は４に近く、口縁直下を強くなで付けて無文帯としている。18は頭部の窪んだ棒状の口縁突起で、突起下で微隆起線が山形になる。19も微隆起線文が認められる。20は櫛歯条線文である。１～３は加曽利Ｅ3式新段階、その他は、部分が3-4式であろう。

土製品（第114図、図版113）

22～24は土器片錘である。24は短軸方向に糸掛けがある。

石器（第114図、図版116）

25・26は凹基無茎鏃である。いずれも信州系黒曜石を用材としており、先端部が欠損している。25には使用痕（「縦溝状剥離」）が観察される。26はガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品である。楔形石器を素材としており先端部の周辺に粗雑な加工がみられる。27は軽石製の浮子である。板状の軽石の上端部を穿孔している。図示した以外では、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点、砂岩製の磨石類２点、黒曜石の石核２点、チャートの剥片１点が出土した。

(29) SI704（第115図、図版17）

遺跡北西部、17Ｅ－65・66・75・76グリッドに位置する。ほぼ円形を呈する。長軸4.55m、短軸4.10m、深さ20㎝を測る。ピットは17か所検出された。不規則な配列である。P3には１の深鉢が正位で埋設されていた。P4は壁面に及んでいる。炉は楕円形を呈する。長軸98㎝、短軸71㎝、深さ17㎝を測る。北側が深く掘り込まれている。

遺物は、土器・石器が出土した。１以外は床面より浮いた状態で出土したものが多い。１の土器から所属時期は４ｃ期と考えられる。

土器（第115図、図版54・77）

１は埋甕で、口縁端部をわずかに欠くほか、完存する。口径35㎝、器高50㎝、底径６㎝を測る。底面は二次的火熱により荒れ、内面も胴下部以下が荒れており、実際に煮炊きに使用されていたものが埋甕に転用されたのであろう。口縁下に１か所のみ未貫通の補修孔がある。器形は胴中段がわずかにくびれ、口縁は軽く内弯する。微隆起線で画された口縁直下の無文帯は４か所で途切れて弧状に盛り上がり、突起状となる。文様は縄文を充填した微隆起線によるU字状区画文と長楕円区画文を交互に配する。２は橋状突起を持つ。口縁下に沈線が巡り、突起下には縄文を充填した逆U字状区画文、その左右にはU字状区画文を配する。３は沈線による三角形区画文が認められる。４～７は微隆起線文を施す。いずれも加曽利Ｅ4式で、１は中段階であろう。

石器（第115図、図版116）

９はチャート製の凹基無茎鏃である。10・11は石鏃未成品である。10はホルンフェルス製である。加工が粗雑で中央部に自然面をとどめている。11は両極剝片を素材としており、石材はガラス質黒色安山岩が用いられている。図示した以外では、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点、チャートの剝片１点・砕片１点、黒曜石の剝片２点、ホルンフェルスの剝片１点が出土した。

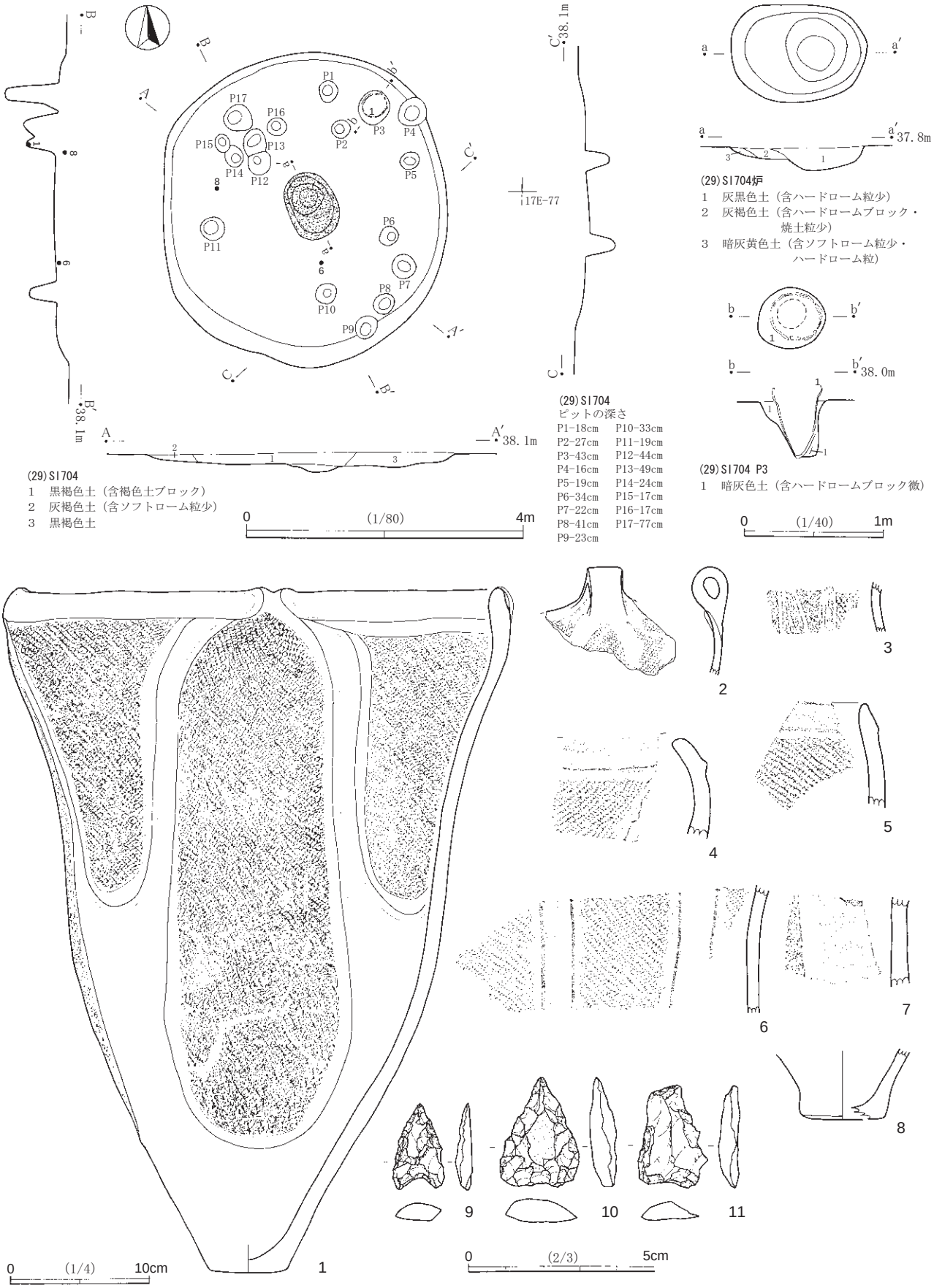
(29) SI705（第116図、巻頭図版、図版17）

遺跡北西部、17Ｅ－79・89、17Ｆ－70・80グリッドに位置する。東西方向に長い楕円形を呈する。長軸4.05m、短軸3.10m、深さ16㎝を測る。南側の床面上に灰白色の粘土ブロックの堆積がみられた。ピットは13か所検出された。深さ10㎝～20㎝代を測るものが多く、南東から南側の壁下付近には壁柱穴と思われるピットが配列される。炉は土器片囲い炉である。楕円形を呈し、長軸75㎝、短軸66㎝、深さ25㎝を測る。裏込めを施した後、側面に１と２の土器片の外面を炉内に向けて配置していた。

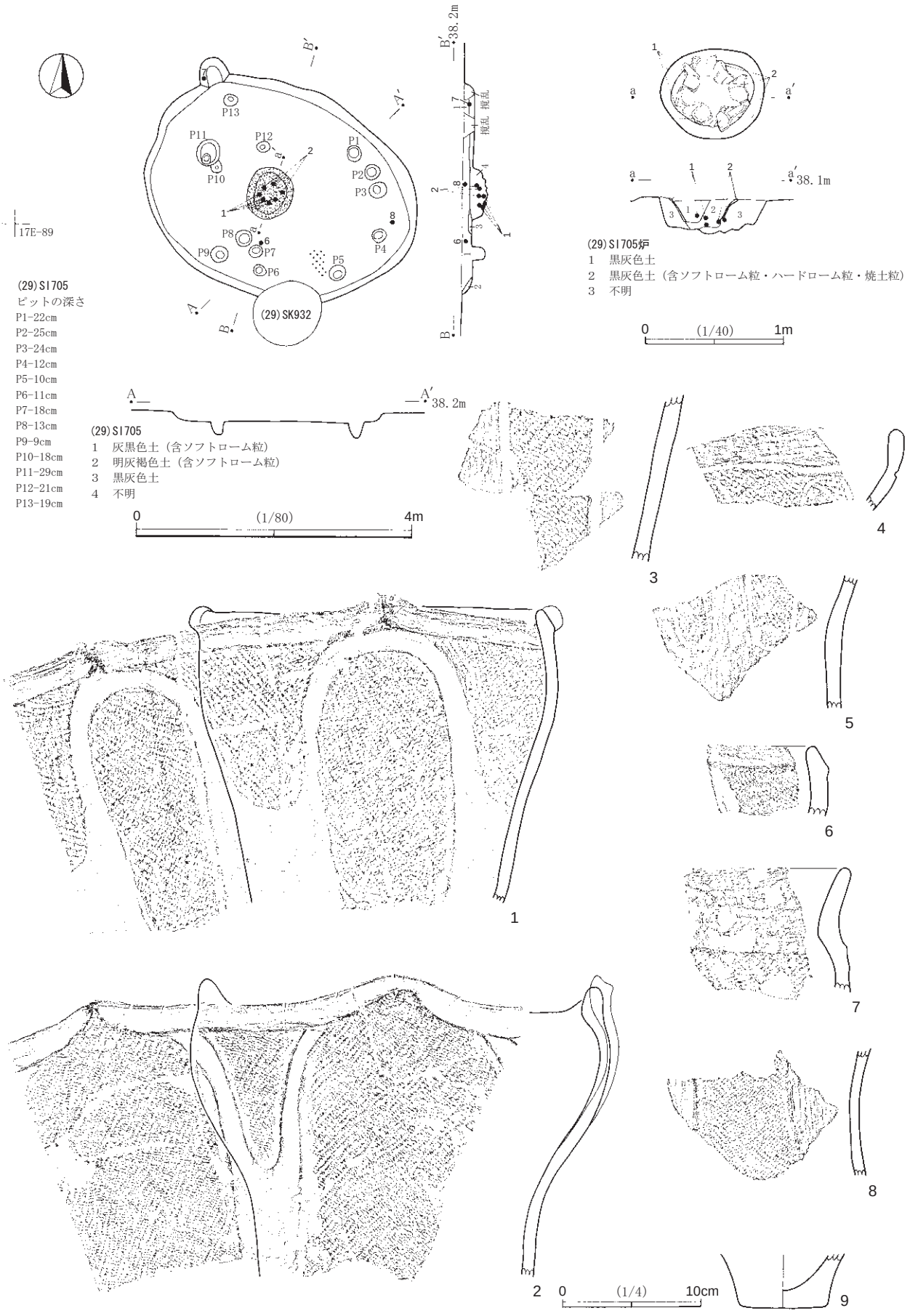
他の土器・石器は、１層中の床面より浮いた状態で出土したがものが多い。所属時期は１・２から４ｂ期と考えられる。

土器（第116図、巻頭図版、図版54・77）

１・２は炉囲いの土器である。１は口縁部の一部と胴下部を欠く。口径24㎝、現存高22㎝を測る。表面の一部と内面のほぼ全体が二次的火熱を受け、あばた状に荒れている。ごくゆるいキャリパー型の器形で、微隆起線で画された口縁部無文帯は４か所でつまみ状に盛り上がる。このつまみの下に縄文を充填した長楕円区画文、つまみ間に縄文を充填したU字状区画文を施す。２は口縁部から胴部上半の3/4が遺存するが、突起２個を欠く。推定口径28㎝、現存高22㎝を測る。表面のごく一部と内面のほぼ全体に二次的火熱を受け、あばた状に荒れている。１より強いキャリパー型の器形をなし、口縁はゆるい山形と波状の突起を対向させている。微隆起線で画された口縁直下の無文帯は波状突起部でつまみ状に盛り上がる。



第115図　(29) SI704



第116図　(29) SI705

縄文を充填した突起下の長楕円文は幅が広く、間のU字状文は幅が狭い。３は幅広の磨消懸垂文である。４は内部が無文の逆U字状区画文が、５は縄文を充填したU字状区画文が認められる。６・８は微隆起線による区画文の一部が認められる。７は口縁部が幅広い無文帯となり、胴部との境が微隆起線文となる。両耳壺であろう。３は加曽利Ｅ3式中～新段階、４～７は同3-4式、その他は同4式でこのうち１・２は古段階であろう。

石器

ホルンフェルス製の磨石類１点、黒曜石製の剥片１点・砕片１点、ガラス質黒色岩の砕片３点、チャートの砕片２点、流紋岩の剥片２点、メノウの石核１点が出土した。

(29) SI706（第117図、図版18）

遺跡北西部、17Ｅ－27・28・37・38グリッドに位置する。東西方向に長い卵円形を呈する。(29) SK922と重複する。長軸5.06m、短軸4.10m、深さ10cmを測る。ピットは17か所検出された。不規則な配列である。炉は楕円形を呈し、長軸72cm、短軸56cm、深さ23cmを測る。中央付近が１段深くなっていた。

遺物は、１層中の床面より浮いた状態で土器が出土した。胴部下半を欠く１の深鉢は炉の直上より出土した。所属時期は１の土器から４ｂ期と考えられる。

土器（第117図、図版54）

１は口縁部から胴部にかけての大型破片の集合で、推定口径37cm、現存高31cmを測る。ややゆるいキャリパー型の器形をなす。大型になるためか微隆起線で画された口縁直下の無文帯の幅が広い。２は注口土器と思われる。現存高14cmで、胴部から底部までの1/2弱が遺存する。微隆起線が連結した横渡しの橋状突起と細い沈線による渦巻文が見られる。１は加曽利Ｅ4式古段階と思われる。

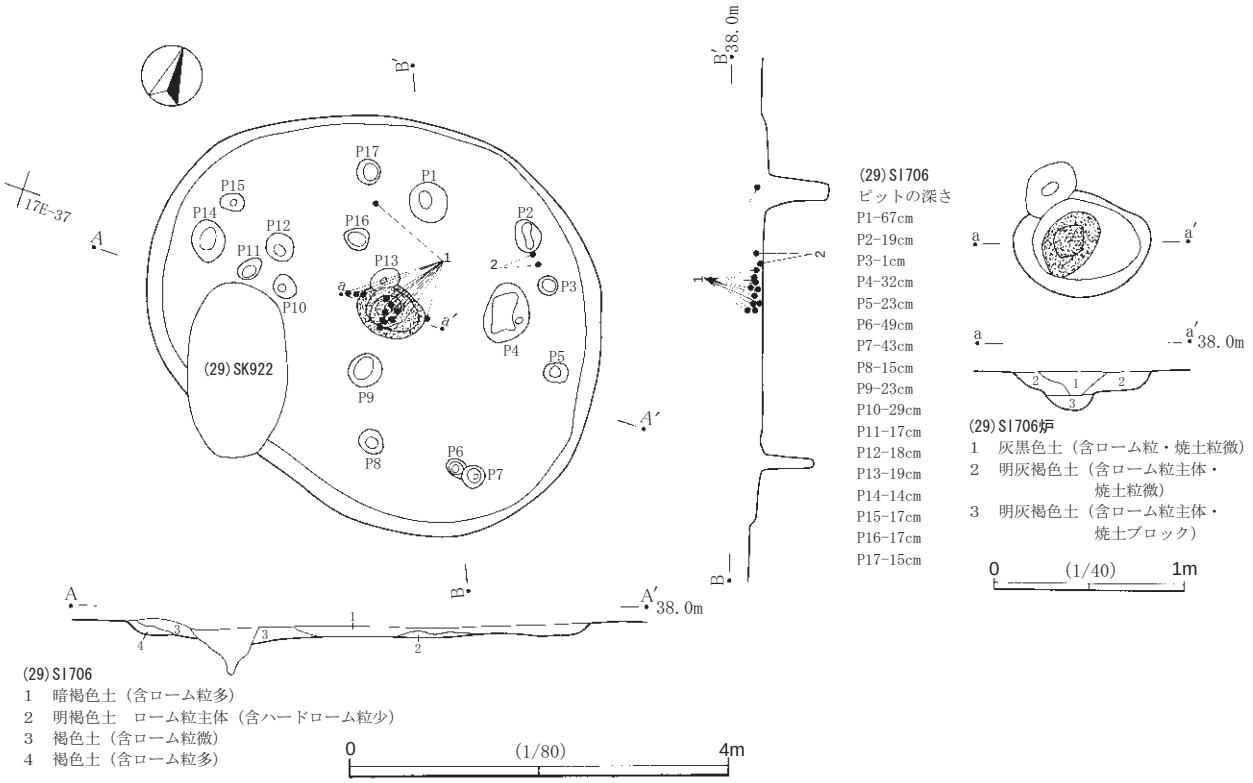
(29) SI707（第118・119図、図版18）

遺跡北西部、16Ｅ－95・96、17Ｅ－05グリッドに位置する。卵円形を呈し、長軸4.61m以上、短軸3.71m、深さ23cmを測る。ピットは９か所検出された。不規則な配置である。P6は壁面に施されている。炉は不整円形を呈し、長軸74cm、短軸67cm、深さ26cmを測る。

遺物は、南西側の炉上及び周辺から土器・土製品・石器が出土した。１層中の床面より浮いた状態で出土したものが多い。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第118・119図、図版77）

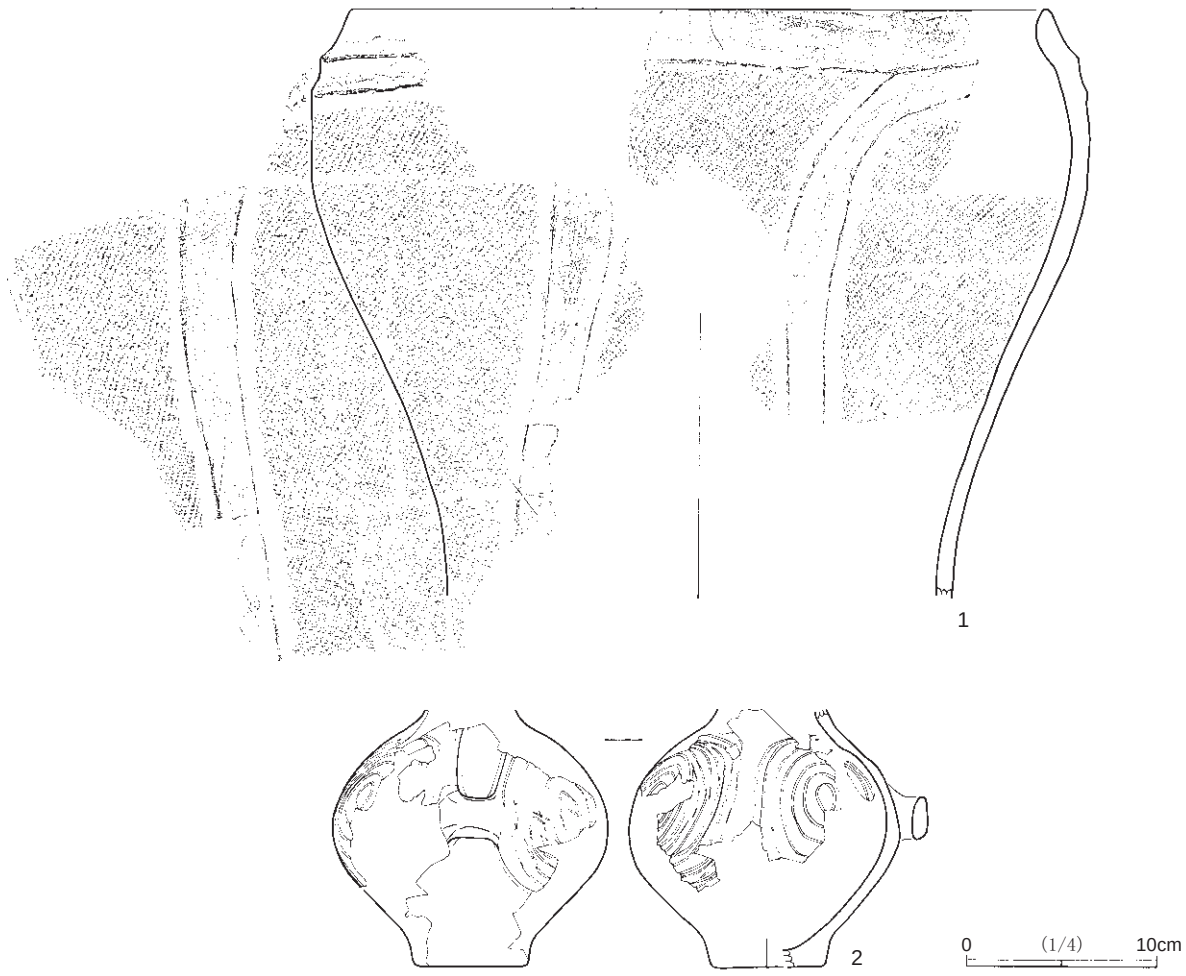
１は沈線で口縁部文様帯の枠状文を、その下に幅広の磨消懸垂文を施す。２・３は磨消懸垂文で、２は幅広である。３は底部近くの破片である。４はゆるい波状口縁で、口縁直下の狭い無文帯を沈線で画し、その下に内部が無文の逆U字状区画文を施す。５もゆるい波状口縁で、縄文地に太めの沈線で逆U字状文を施す。６は口縁直下の縄文帯内に沈線内刺突で囲った無文部を作る。７は縄文を充填した太い沈線によるU字、逆U字状区画文を施す。８は内部が無文の細めの沈線による三角状区画文となる。９～16は隆線で大振りの渦巻文を描く、いわゆる梶山類である。12・13・16が２本隆線で文様を描き、他は単隆線で文様を描く。９・10は同一個体で、大型の土器と思われる。12・13も同一個体で、やはり大型の土器であろう。14は底部付近の文様帯の下端がみえる。17は口縁直下の無文帯に橋状突起が付く。縄文は細かい複節縄文である。18・19は縄文のみ、20は細かい櫛歯条線文を多方向に施す。21は無文で、指頭によるなでが顕著である。23は高台付きの底部であろう。24は口縁下に枠状の沈線と三角彫刻文を施す。25は半截竹管による押引文を４段施す。口端には刻みが付く。大部分が加曽利Ｅ3式、中でも１及び９～16の梶山類か



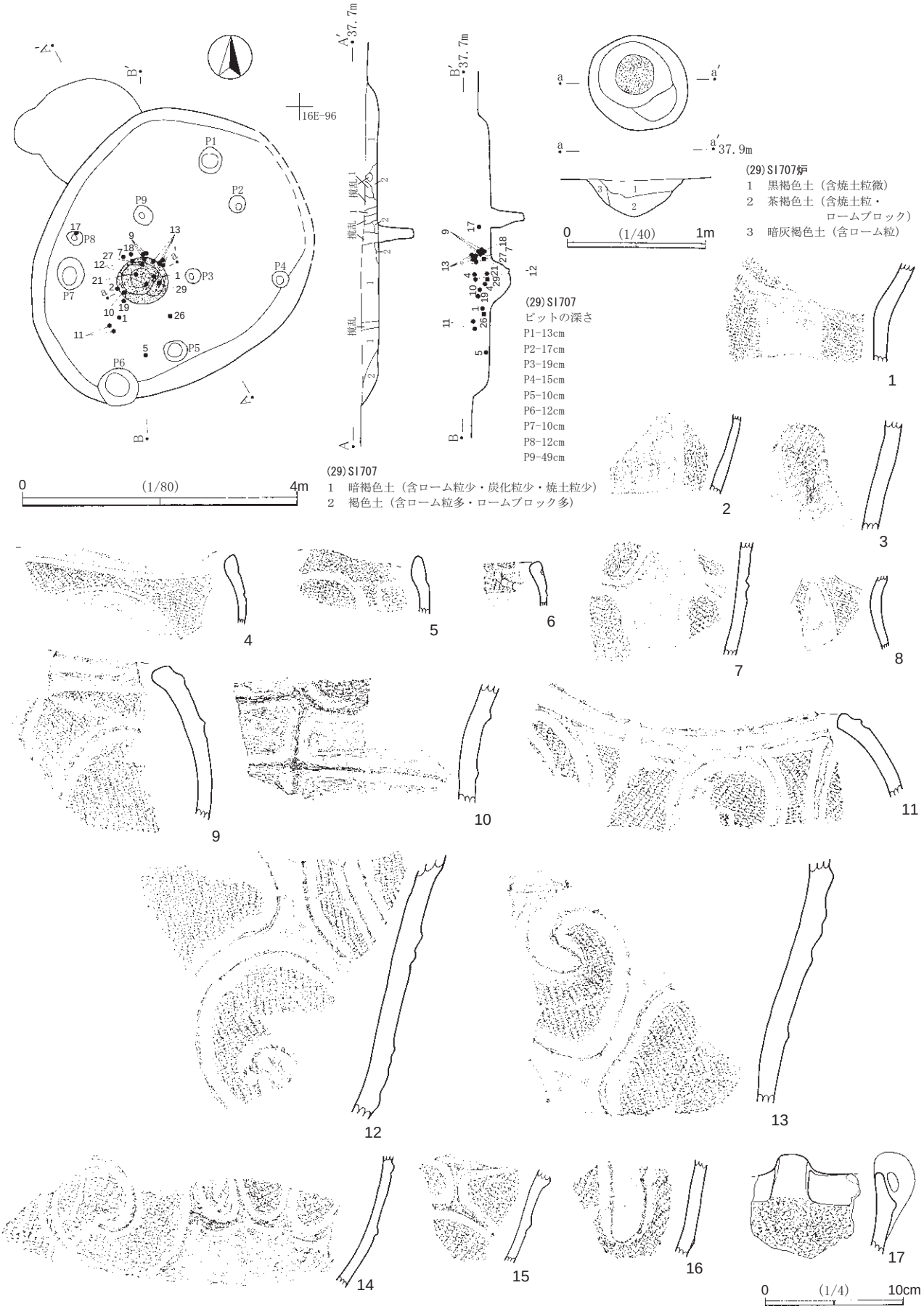
(29)SI706
1　暗褐色土（含ローム粒多）
2　明褐色土　ローム粒主体（含ハードローム粒少）
3　褐色土（含ローム粒微）
4　褐色土（含ローム粒多）

(29)SI706
ピットの深さ
P1-67cm
P2-19cm
P3-1cm
P4-32cm
P5-23cm
P6-49cm
P7-43cm
P8-15cm
P9-23cm
P10-29cm
P11-17cm
P12-18cm
P13-19cm
P14-14cm
P15-17cm
P16-17cm
P17-15cm

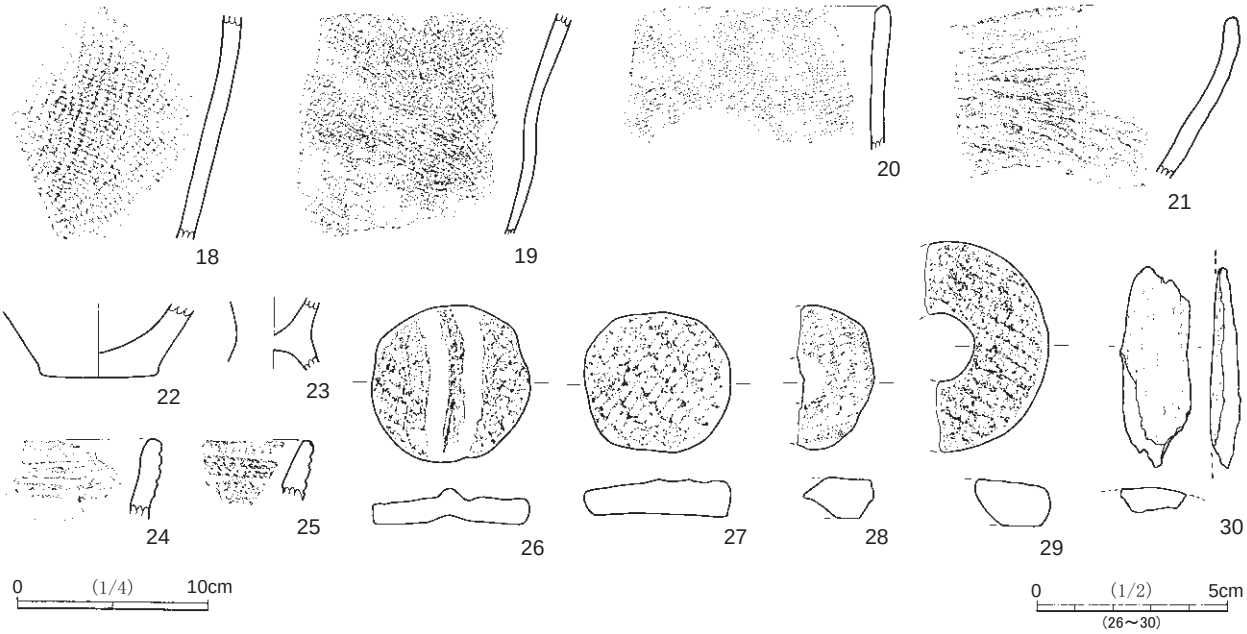
(29)SI706炉
1　灰黒色土（含ローム粒・焼土粒微）
2　明灰褐色土（含ローム粒主体・焼土粒微）
3　明灰褐色土（含ローム粒主体・焼土ブロック）



第117図　(29) SI706



第118図 (29) SI707 (1)



第119図　(29) SI707 (2)

ら新段階と思われる。４・６・８・17は同3-4式であろう。なお、24・25は五領ケ台式直後で混在である。

土製品（第119図、図版113）

26～29は土製円板である。27・29は周縁の磨りが深く、26・28はこれらに比べてやや浅い。また、26は裏面に未貫通の孔が、28は両面に未貫通の孔がある。29は裏面からの片面穿孔である。

石器（第119図、図版116）

27は緑泥片岩製の石棒の破片である。図示した以外では、安山岩製の磨石類１点、チャートの剥片１点・砕片１点、ホルンフェルスの剥片１点が出土した。

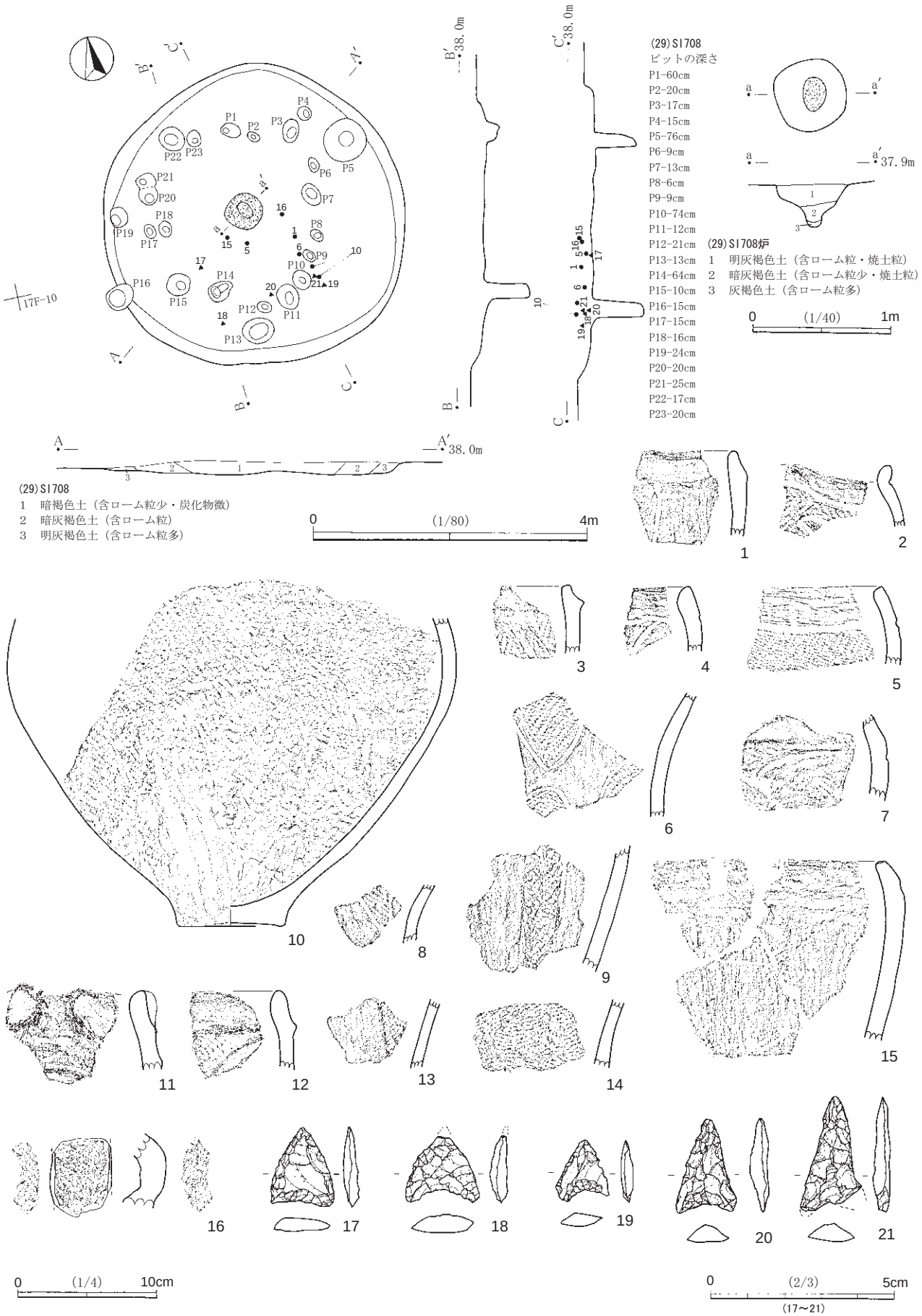
(29) SI708（第120図、図版18）

遺跡北西部、17Ｆ－00・01・10・11グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、径4.40m、深さ20㎝を測る。ピットは23か所検出された。壁付近のP5・P13・P16・P19以外は、炉と壁の間に方形に配列される。深さに規則性はない。炉は径53㎝、深さ33㎝の不整円形を呈する。

遺物は、炉の南側を中心に土器・石器が出土した。床面から浮いた状態で出土したものが多い。多時期にわたる土器が混在しているが、主体となるのは４ａ期である。

土器（第120図、図版55・78）

１は口縁下を強くなでつけて浅く窪んだ無文帯とし、その下に磨消懸垂文を施す。２・４・５は口縁直下の無文帯を沈線で画する。３は微隆起線で画する。２～４はいずれも口縁部下に沈線区画文が認められ、３の沈線は細く鋭い。６は縄文を充填したU字状区画文と逆U字状区画文が、８は縄文を充填した三角状区画文である。７は摩耗していてよく分からないが、舌状の口縁突起下に沈線で枠状文を施したものと思われる。９は胴下部の破片で、磨消懸垂文であるが左側磨消部には沈線が見られない。10は1/3弱が遺存する胴部から完存する底部にかけての破片で、現存高23㎝、底径８㎝を測る。16の橋状把手片と縄文が同じであることから、同一個体と判断した。両耳壺であろう。11～13は微隆起線文を施すもので、11は微



第120図 (29) SI708

隆起線で画された口縁直下の無文帯は途切れて盛り上がっている。14は縄文のみ、15は口縁直下の幅広の無文帯に不明瞭な凹線が付く。以下は細かな櫛歯条線文を施す。器面調整は粗い。９は加曽利Ｅ3式で、１・２・４～７・15は同3-4式、３・11～13は同4式と思われる。

石器（第120図、図版116）

17～21は凹基無茎石鏃である。18は先端部、21は両脚が欠損しているが、他は完形品である。石材はホルンフェルス１点（17）、流紋岩１点（18）、黒曜石２点（19､21）、ガラス質黒色安山岩１点（20）となっている。黒曜石はいずれも信州系である。図示した以外では、緑色凝灰岩を石材とする定角式磨製石斧の断片１点、緑泥片岩の剝片１点、軽石1点が出土した。

（29）SI709（第121図、図版18）

遺跡北西部、16Ｆ－55・56・65・66グリッドに位置する。逆台形状の隅丸方形を呈する。長軸4.70m、短軸4.30m、深さ19㎝を測る。ピットは29か所検出された。炉の北側から北西側は炉と壁の間に50㎝～70㎝間隔で規則的に配列されるが、南・東側は不規則である。炉は２か所あり、東西に重複している。東側の方が新しい。いずれも径69㎝～76㎝の不整円形を呈し、深さは西側が36㎝、東側は14㎝を測る。西側の炉の底面付近の覆土には焼土が多く含まれていた。

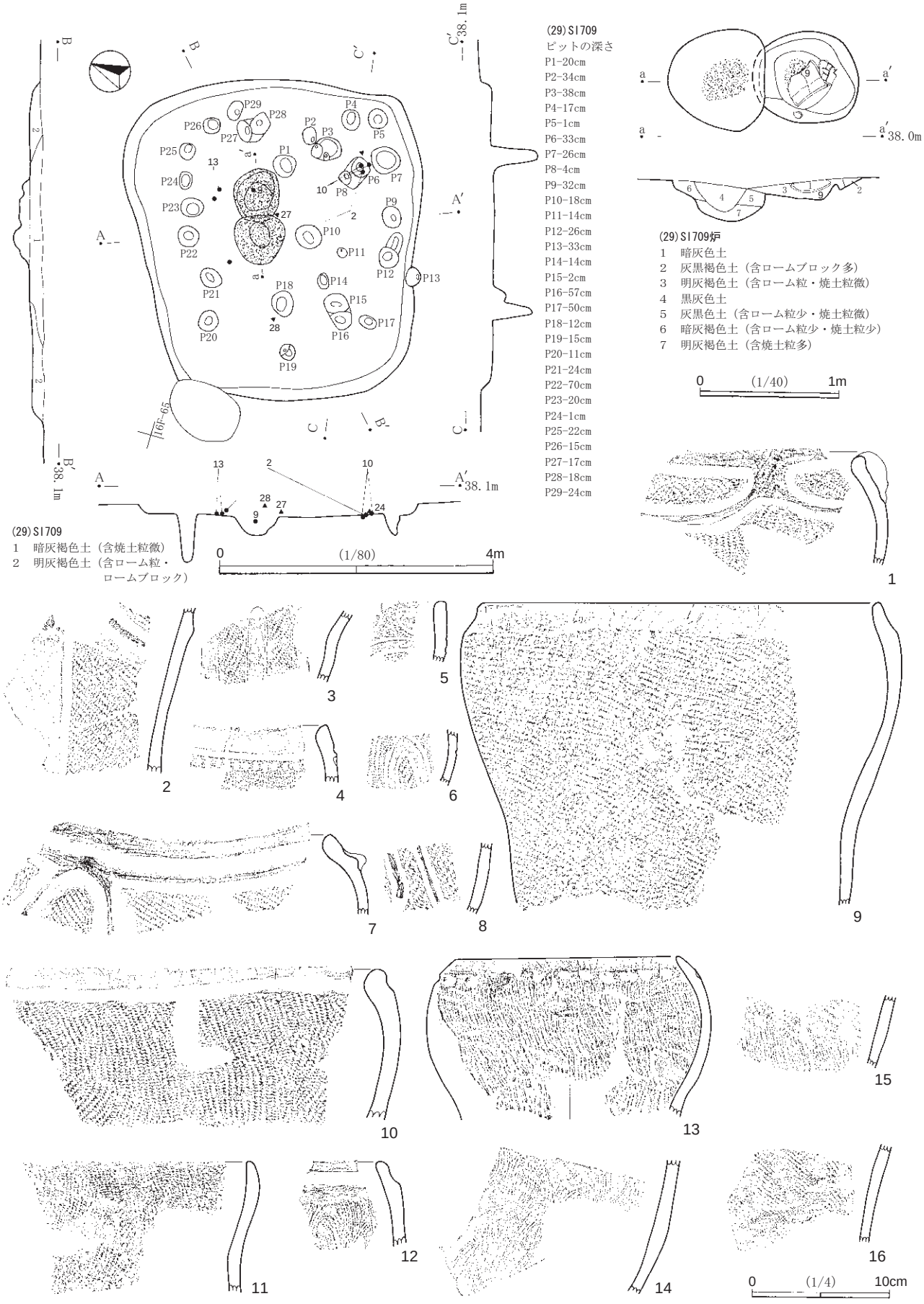
遺物は、炉の北側の床面上を中心に土器・石器が出土した。９は東側の炉底面から出土した。出土土器は東側炉の９などの４ａ期のものと３ｂ期のものとがあり、したがって、東側炉は４ａ期、西側炉が３ｂ期と考えられる。

土器（第121・122図、図版55・78）

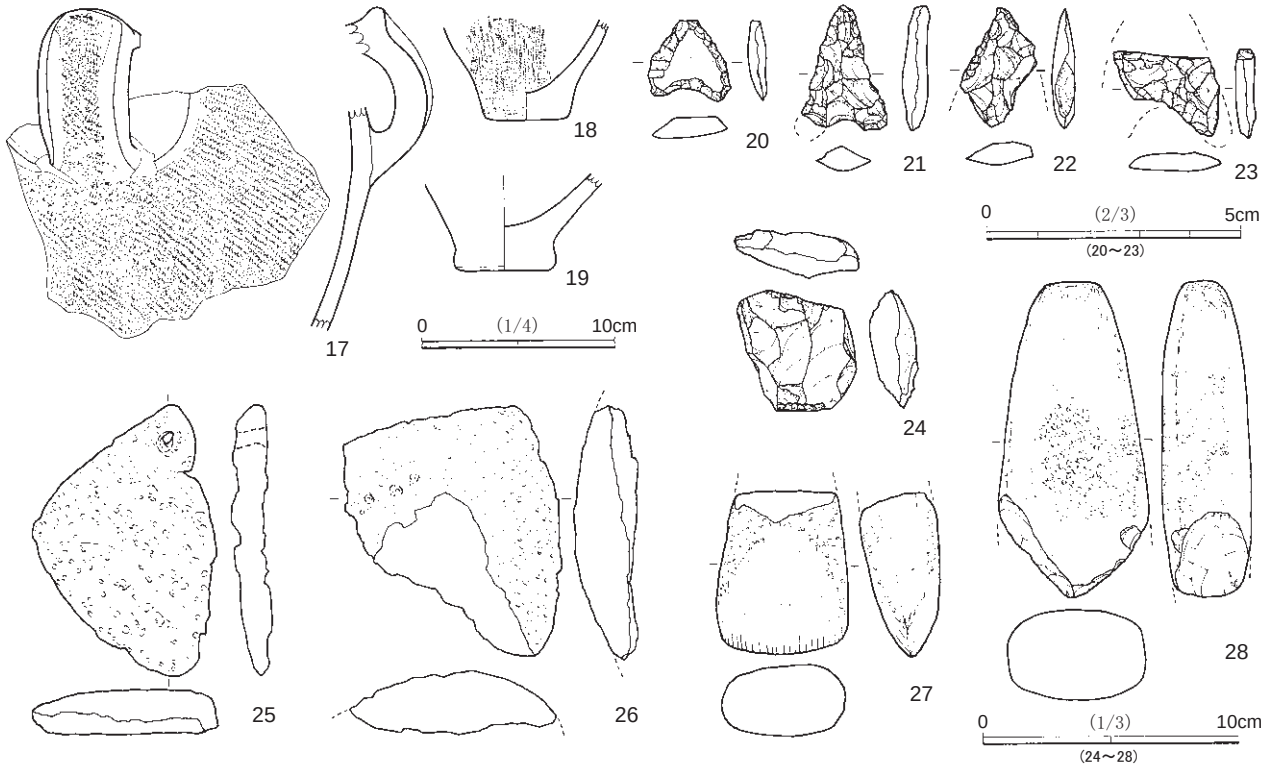
１は口縁部文様帯が隆線による枠状文のみとなり枠状文間は盛り上がって縄文がかかる。胴部の磨消懸垂文は見えない。２は口縁部文様帯の枠状隆線と幅広の磨消懸垂文が認められる。３は沈線が細く、磨消懸垂文ではなく逆Ｕ字状区画文であろう。４は口縁直下の無文帯を沈線で区画し、その下に棒状工具による刺突列が巡る。５・６は同一個体で、内部が無文の沈線区画文様が展開する。７・８は隆線による大振りな文様が展開するいわゆる梶山類の一種であろう。９は口縁から胴上部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径29㎝、現存高22㎝を測る。器表面のほぼ全体が二次的火熱を受ける。キャリパー型の器形であるがくびれは弱い。口縁下に浅く窪んだ無文帯が巡り、以下全面縄文である。10は大型土器であったと思われる。口縁下に太い沈線が巡る。11は軽いキャリパー型の器形となる縄文のみの破片である。12～14は櫛歯条線文を施す。12は口縁下に指頭による凹線が巡る。13は口縁から胴上部にかけて約1/3が遺存する。推定口径16㎝、現存高12㎝を測る小振りの土器である。強いキャリパー型の器形である。浅く窪んだ口縁部無文帯下に大型の円形刺突列が並ぶ。15は縄文と櫛歯条線文、16は縄文のみである。17は両耳壺で、橋状突起の上下の基部を左右とも弧状の微隆起線で結んでいる。１・２は加曽利Ｅ3式中２段階、３～６・９・12・13は3-4式であろう。

石器（第122図、図版116）

20～23は凹基無茎鏃である。いずれも破損品であり、その状況は先端部欠損（20）・片脚欠損（21）・片脚破片（22）・基部破片（23）各１点となっている。石材は20がガラス質黒色安山岩、21がチャート、22・23が黒曜石である。24は楔形石器である。ガラス質の流紋岩の扁平礫を素材としている。25は軽石製の浮子である。三角形に成形された板状の軽石の一端に穿孔を施している。26は石皿の破片であるが、詳細な部位は不明である。27・28は定角式磨製石斧である。27は基部が欠損しており、両側面にも敲打痕が



第121図　(29) SI709 (1)



第122図　(29) SI709 (2)

みられる。刃部はやや損耗している。石材は粗粒玄武岩である。28は刃部が欠損しており、両面中央部には線状の敲打痕が重なり合っている。このことから、本例は、欠損後、楔形石器関連の台石に再利用されたものと推定される。石材は緑色凝灰岩である。図示した以外では、流紋岩製の石鏃未成品２点・楔形石器１点・剥片１点・砕片１点・石核１点、流紋岩質凝灰岩製の石鏃未成品１点、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器２点、メノウ製の楔形石器１点、チャート製の楔形石器１点・剥片３点、黒曜石の剥片１点、軽石１点が出土した。

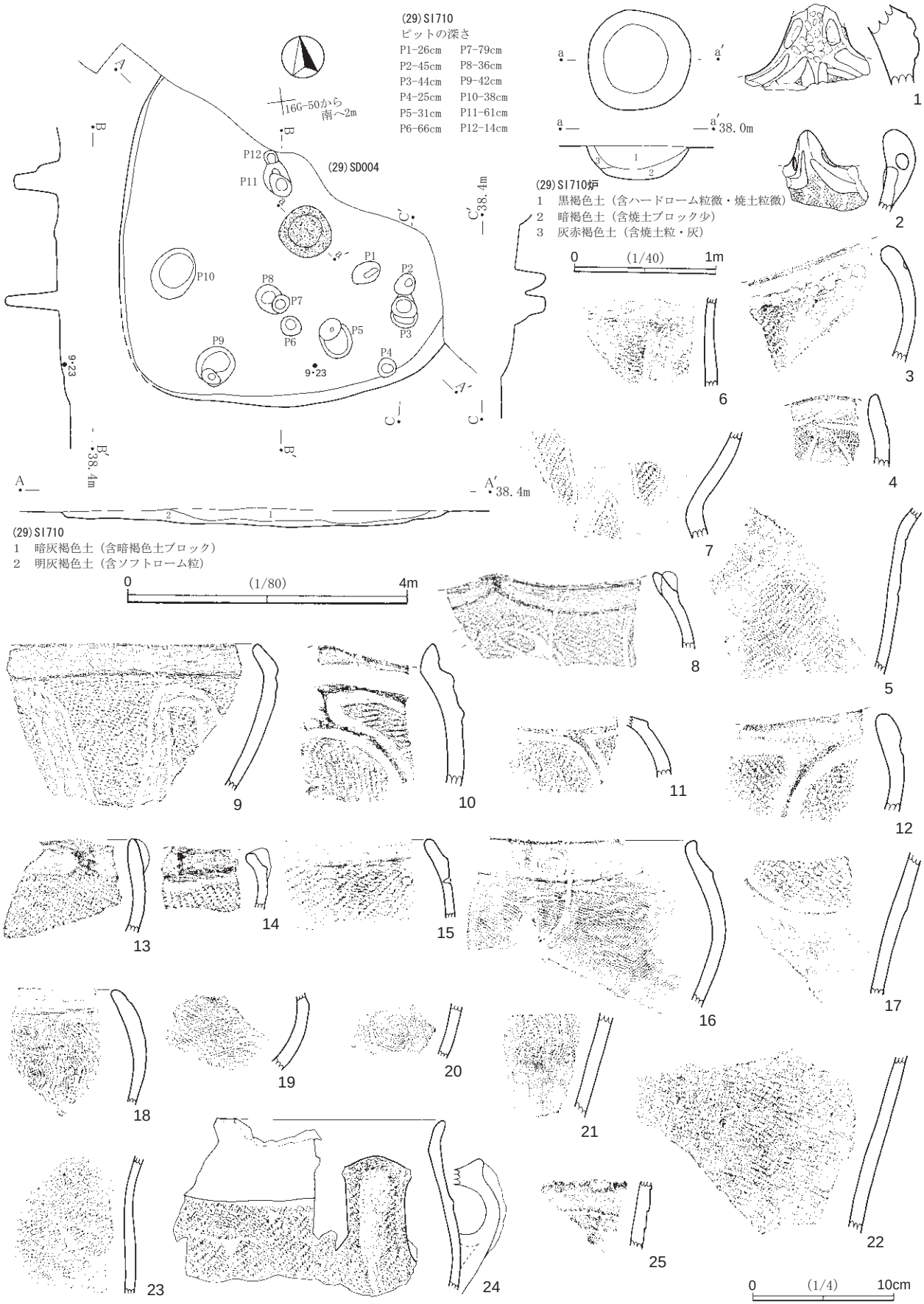
(29) SI710（第123図、図版18）

遺跡北西部、16Ｆ－59・69、16Ｇ－50・60グリッドに位置する。北西側は (29) SD735に切られていた。一辺4.9m以上を測る隅丸方形を呈すると考えられる。ピットは12か所検出された。P2・P3・P9が42㎝～45㎝、P6･P7･P11が61㎝～79㎝と比較的深いものが多い。炉は不整円形を呈し、径73㎝、深さ23㎝を測る。

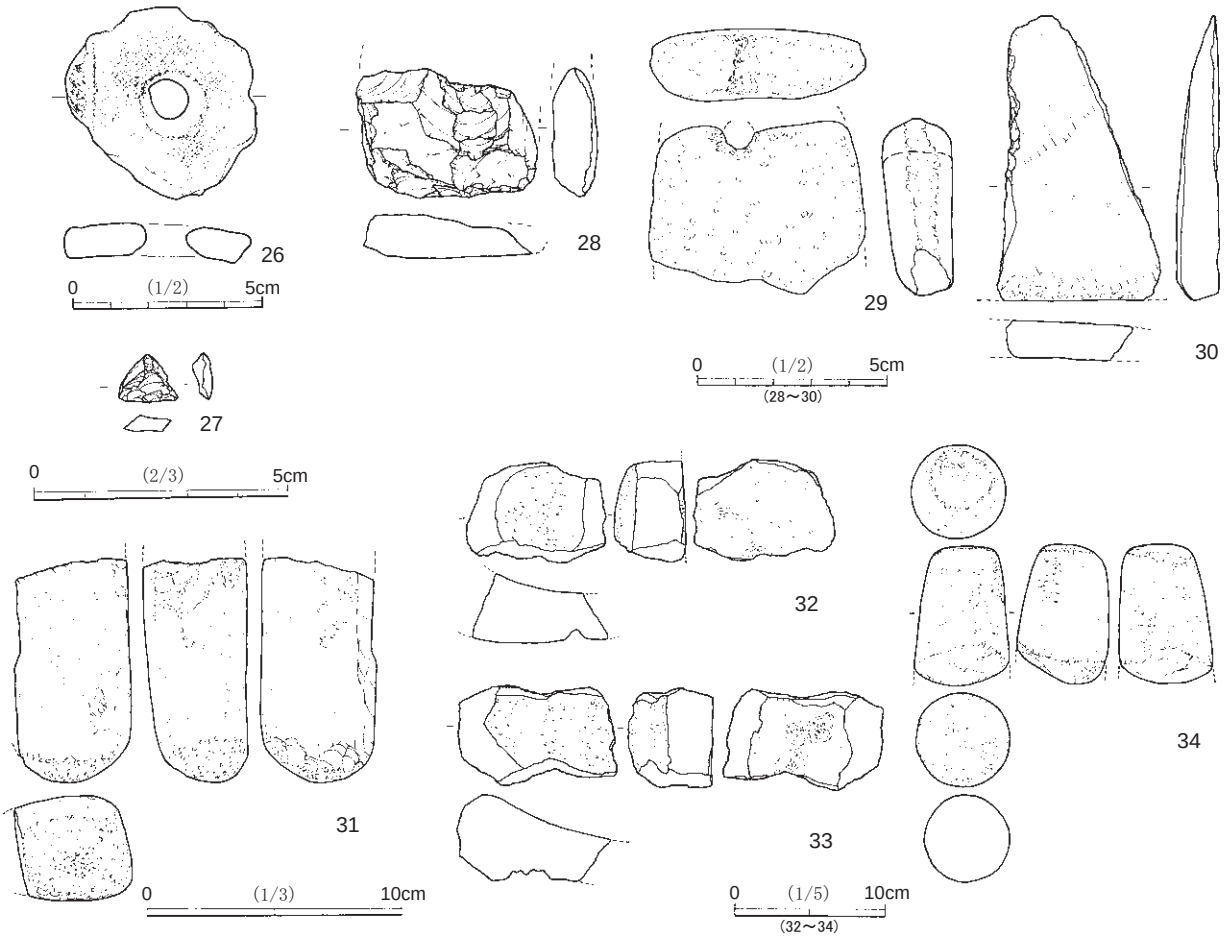
遺物は、土器・土製品・石器が出土した。９が南側の床面上より出土したほかは、一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第123・124図、図版78）

１・２はいわゆる動物形象突起と呼ばれるものである。１は先端を欠く。両脇に楕円形の窪みが付き、刺突文が加えられる。２は先端が丸みを持ち、裾両脇の孔が貫通する。３は口縁下を巡る凹線上に大型の円形刺突列が乗る。その下には内部が無文の逆Ｕ字状区画文を施すが、沈線は不明瞭である。４は縄文を充填した区画沈線が左右非対称であり、先端が集結していない。５は縄文を充填した逆Ｕ字状区画文の上にも左右非対称の区画文が認められる。６は沈線が浅く不明瞭である。７はくびれの強いキャリパー型の



第123図　(29) SI710 (1)



第124図　(29) SI710 (2)

器形で、縄文を充填したU字状区画文、逆U字状区画文を施す。８は波状突起を持ち、微隆起線で画された口縁直下の無文帯が突起下でつまみ状に盛り上がる。文様は､沈線で内部無文の抱球状の区画文を施す。右側にも類似の文様が展開するらしい。９は無文の屈折した口縁部下に弱い段を付け、その下に太めの沈線で内部無文の大型波状区画文を描く。10～12はいわゆる梶山類である。12は隆線渦巻が口縁部に直結し、縄文は充填縄文である。13～16は口縁直下に無文帯を置き、以下縄文のみを施すが、無文帯のあり方がそれぞれ異なる。13は単純な磨消無文帯で、無文帯は途切れてつまみ状に盛り上がる。14・15は微隆起線で画し、14の無文帯は途切れて小さなつまみ状となる。微隆起線下は磨り消されている。15には未貫通の補修孔が内外面に開く。16は強いキャリパー型の器形で、口縁直下の無文帯は浅く窪んで、縄文施文部との境に段が付く。縄文はきわめて細かく多方向に施す。17は微隆起線による区画文である。18～21は櫛歯条線文で、18は口縁の狭い無文帯を太い沈線で画する。22・23は縄文のみ施す。24は両耳壺の大型破片で、橋状突起の中央がくぼんで磨り消されている。25は無文で、輪積み痕が多段に残る。10は加曽利Ｅ3式新段階、17は同4式、その他はいわゆる動物形象突起を含め、ほとんどが3-4式であろう。

土製品（第124図、図版113）

26は土製円板である。周縁は打ち欠きのみで、孔は両面穿孔である。

石器（第124図、図版116）

27は石鏃の先端部破片で、石材は信州系黒曜石である。28は小型の打製石斧である。形態は短冊形を呈する。石材はホルンフェルスである。29は扁平な軽石を用いた浮子である。上下両端が欠損しているが、上端部に穿孔の痕跡をとどめている。30・32・33は石皿の破片である。30は緑泥片岩、32・33は安山岩が用いられている。32・33の断面形は表面が凹み裏面が平坦である。裏面にはともに凹み痕がみられる。31は砂岩製の砥石片である。表裏に平坦な研磨面を有している。下端部に敲打痕がみられる。34は石棒片である。頭部に近い部位の破片であり、下端部に磨耗痕があることから磨石類としての再利用が考えられる。石材は石英安山岩（デイサイト）である。図示した以外では、チャート製の石鏃１点、メノウ製の楔形石器１点、ガラス質安山岩製の楔形石器１点、黒曜石の剝片３点、ホルンフェルスの剝片２点、軽石２点が出土した。

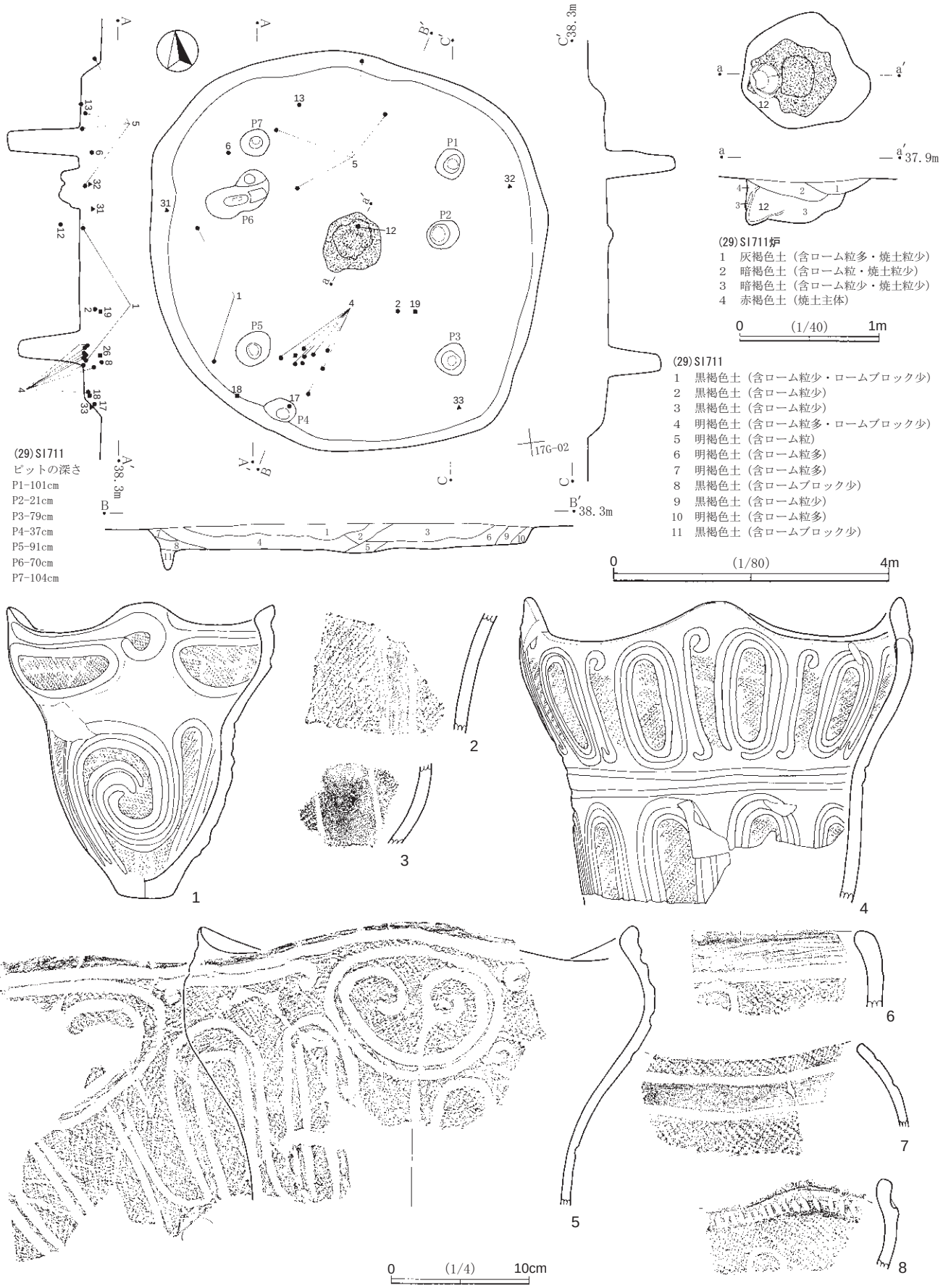
(29) SI711（第125図、巻頭図版、図版18）

遺跡北西部、16Ｇ－80・81・82・90・91・92グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、径5.80m、深さ37㎝を測る。ピットは５か所検出された。P1・P3・P5・P7の４か所は深さ79㎝～104㎝を測るしっかりとしたもので、主柱穴である。炉は南西方向にやや張り出す不整な楕円形を呈し、長軸95㎝、短軸86㎝、深さ36㎝を測る。北側側面には12の深鉢が完存状態で斜位埋設されていた。

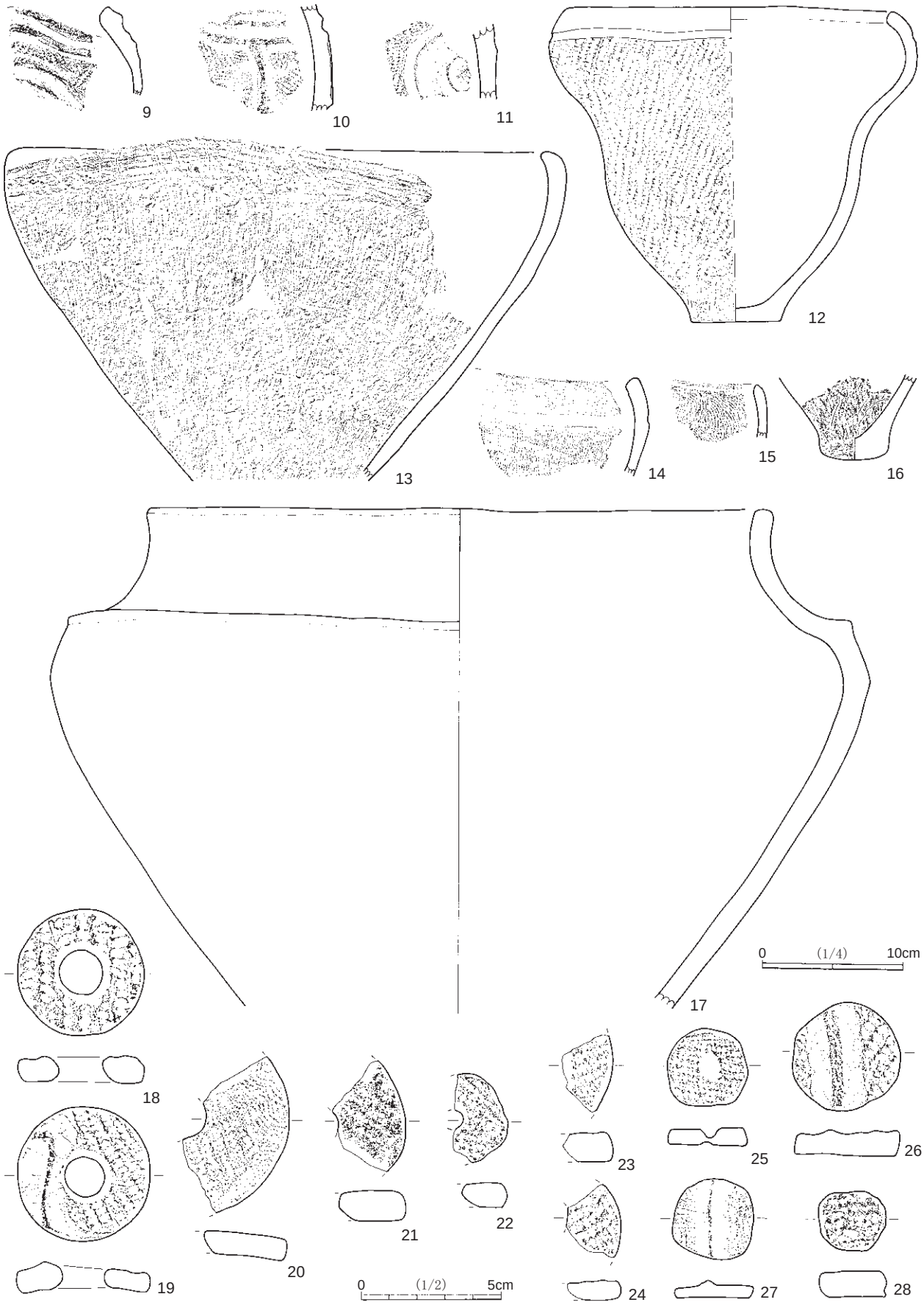
遺物は、床面付近を中心に完形、半完形、大型破片の土器及び土製品、石器が出土した。所属時期は３ｂ期と考えられる。

土器（第125・126図、巻頭図版、図版55・78・79）

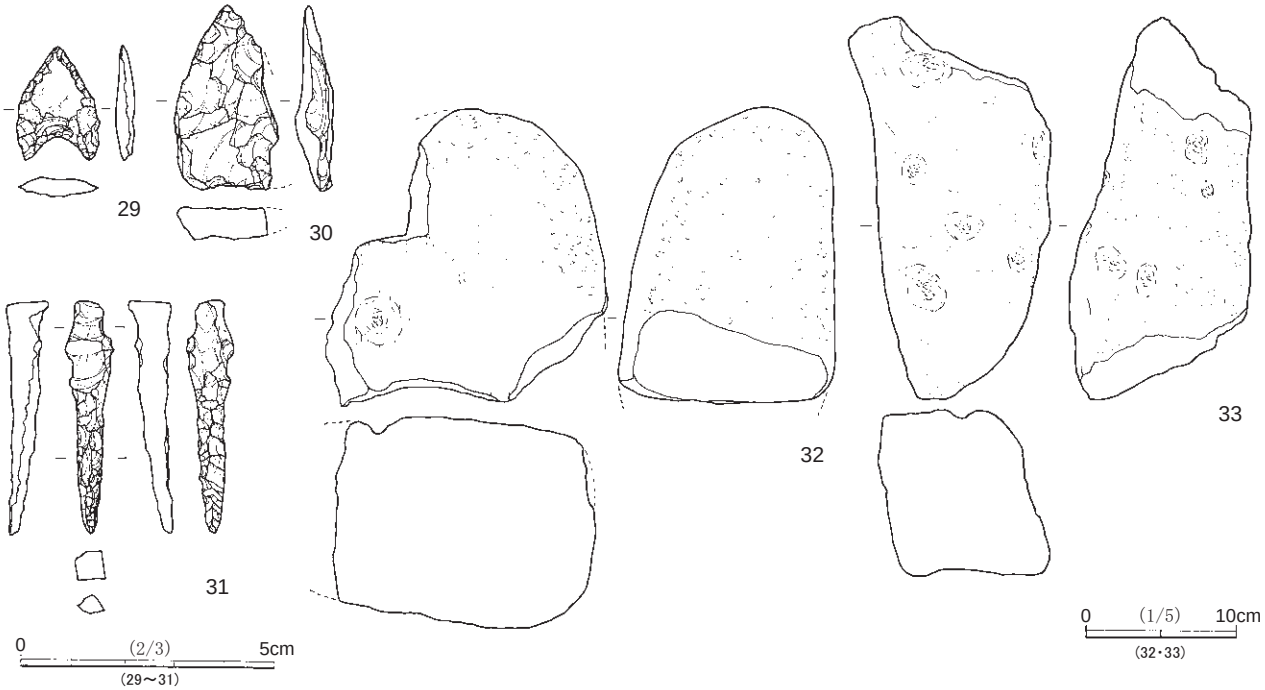
１は部分的に欠損するが、ほぼ完形である。口径19㎝、器高22㎝、底径４㎝を測る小型土器である。底面縁辺は使用による擦れが顕著である。波状突起は４単位で、突起下に指頭による凹線で巻きのゆるい渦巻文を施し、その間に枠状区画文を置く。頸部はやや広い無文帯となる。胴部には低い隆線による大型の渦巻文を３単位施す。２・３は磨消懸垂文の胴部破片である。４は胴下部を欠くほかは完形である。口径28㎝、現存高22㎝を測る。４単位の波状突起を持ち、ゆるいキャリパー型の器形で、くびれは弱い。口縁からくびれ部までに太い沈線による内部縄文の二重楕円文と蕨手文を交互に配する。くびれ部には２条の沈線を引いて胴部と画し、胴部は上部文様と同様の二重楕円文を施す。５は胴上半までの1/2が遺存する大型破片で、推定口径31㎝、現存高22㎝を測る。強いキャリパー型の器形で、おそらく４単位のゆるい波状口縁となり、その頂部は厚くなりわずかに外反する。文様は同時期の磨消懸垂文と同じ指頭による凹線で施している。口縁に沿って１条が巡り、波頂部下には楕円文内に双渦文を配する。楕円文間のあいた空間には口縁に沿って蕨手文を施す。楕円文下から胴下部にかけては、内部無文で上端が逆Ｕ字状に連結した連続Ｈ字状区画文が展開しているが、その左端は楕円文とＨ字状につながるのに対し、右端は楕円文とつながっていない。また、拓影右端には縦方向の蕨手文が認められ、胴部文様は単位ごとに異なるようである。なお、縄文は充填縄文である。６は指頭による凹線が口縁直下の無文帯を画し、その下に内部無文の太い沈線による逆Ｕ字状区画文を施す。７は波状口縁で、強いキャリパー型の器形となる。口縁に平行する２条の沈線は太い。８も波状口縁で、口縁直下の無文帯は浅く窪み、さらに幅広の刺突列を施す。無文帯の下部には段が付く。その下には６と同様の逆Ｕ字状区画文が認められる。９～11は隆線による大型の渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。12は炉体土器で、胴部と口縁のごく一部を欠くほか完存する。ほぼ内面全体が二次的火熱を受け脆くなっている。口径23㎝、器高23㎝を測る。強いキャリパー型の器形をなす。口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。以下は全面縦位施文の縄文である。13は



第125図　(29) SI711 (1)



第126図　(29) SI711 (2)



第127図　(29) SI711 (3)

鉢形の大型破片で、口縁から底部直上までが遺存する。推定口径38㎝、現存高24㎝を測る。口縁直下の幅広の無文帯は調整が雑である。以下は全面に雑な櫛歯条線文を施す。14・15も櫛歯条線文を施す。14は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。17は広口壺形の大型破片で、口縁から底部付近まで遺存する。推定口径45㎝､現存高36㎝を測る。強くすぼまりながら直立する口縁部と胴上部の境には隆線が巡る。両耳壺かもしれない。１・４・５をはじめ大部分は加曽利Ｅ3式中２段階であろう。

土製品（第126図、図版113）

18～28は土製円板である。18～21・23・24は周縁の磨りが深く、その他は浅い。両面穿孔は18・19・21・22・25で、25は未貫通である。裏面からのみの穿孔は20・21・24で、23は裏面からの穿孔は確認できるが、表面からの穿孔は破損のため確認できない。26～28は孔がない。19・26・27には隆線文様が認められ、いわゆる梶山類であることがわかる。20には縄文と櫛歯条線が見える。

石器（第127図、図版116）

29は流紋岩製の凹基無茎鏃、30はチャート製の石鏃未成品である。30の素材は横長剝片と推定される。31はチャート製の石錐である。完形品で撮み部を有する。32は大型の石皿の破片である。表裏とも平坦で表面に凹み痕がある。石材は斑糲岩（はんれいがん）である。33は台石である。表裏に複数の凹み痕がみられる。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品１点・砕片11点、チャートの剝片６点・砕片２点、ガラス質黒色安山岩の剝片１点･砕片１点、斑糲岩の剝片１点、緑泥片岩の剝片２点、軽石１点が出土した。

(29) SI713（第128図、図版19）

遺跡北西部、17Ｆ－91・92、18Ｆ－01・02グリッドに位置する。南西側で (29) SK927・(29) SK928と重複する。台形状の隅丸方形を呈する。長軸4.34m、短軸3.90m、深さ31㎝を測る。ピットは13か所検出された。おおむね方形に配列される。深さは不統一である。炉は楕円形を呈する。長軸96㎝、短軸

68㎝、深さ23㎝を測る。４～７・９が底面に敷きつめられたような状態で出土した。

遺物は、土器・石器が出土した。炉外では床面より浮いた状態で出土したものが多い。炉内出土土器から４ｃ期と考えられる。

土器（第128・129図、図版55・79）

１は隆線による枠状文が認められる。２は突起破片で上下の剝落部は橋状になるかもしれない。微隆起線が突起裾から派生している。３～９は微隆起線文の土器で、４・５は同一個体、７もこれらと同一個体と思われる。３は２尖の突起が口縁上に付く。４は口縁から胴上部までの大型破片が２点あるが、接合しない。推定口径35㎝を測り、軽いキャリパー状の器形となる。内外面とも強く二次的火熱を受け、あばた状に荒れている。口縁直下を微隆起線で画された無文帯は３㎝ほど途切れてつまみ状に盛り上がり、縄文が付く。微隆起線による逆Ｕ字状文のみをつまみの下に配している。５は４の底部で、上半は内外面とも二次的火熱を受けている。底部外縁にわずかに細かい欠けが残るが、底面は焼成時のままのように新鮮である。６は口縁から胴上部にかけてと胴下部の大破片で、互いに接合しない。附加条気味に撚り合わせた縄文の特徴から同一個体と判断できる。推定口径33㎝を測る。内面は二次的火熱を強く受け、著しくあばた状に荒れている。４よりキャリパーの度合いが弱く、微隆起線で画された口縁直下の無文帯は3.5㎝ほど途切れて末端が盛り上がって突起状となる。文様は微隆起線による区画文で、この突起下に逆Ｕ字状文を、突起間にＵ字状文を配する。９は口縁部の1/3と胴部の大半を欠く。口径23㎝、推定器高33㎝を測る。内外面とも二次的火熱を強く受けてあばた状に荒れている。特に底部は顕著で、胴下部が失われたのはこのためであろう。器形は６に近いがキャリパーの度合いはさらに弱く、器厚が薄い。口縁直下の無文帯を画する微隆起線は低く、段状である。以下の縄文は多方向施文である。８は無文帯の一方の側が微隆起線、他方の側が沈線となる。10は完存する底部で、底部縁辺の欠けが著しい。細く鋭い沈線でＶ字状区画文を４単位施す。１は加曽利Ｅ3式中段階、他は同4式中段階であろう。

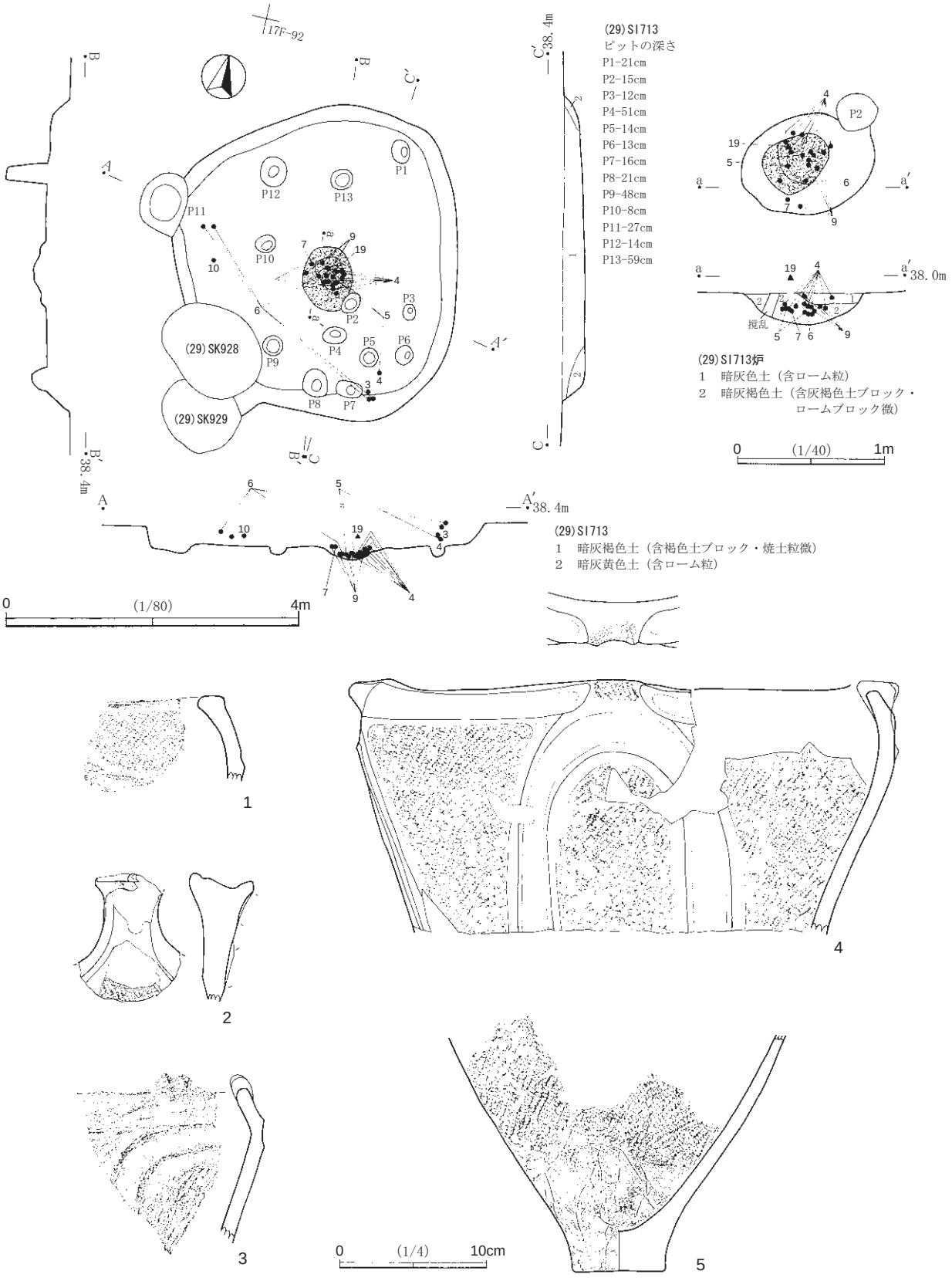
石器（第129図、図版116）

11・12・14・15は凹基無茎鏃である。11と14は完形品であるが、12は片脚の断片であり、15は両脚が欠損している。石材は11が硬質頁岩、12が黒曜石、14が流紋岩、15がガラス質黒色安山岩である。13・17・18は石鏃未成品である。いずれも大型・厚手で加工が粗雑である。石材は13が流紋岩、17がホルンフェルス、18が信州系の黒曜石となっている。16は小型の有舌尖頭器である。先端部が欠損しているが基部が舌状に突出している。形態的には「柳又型」に該当する。石材には良質半透明な信州系黒曜石を用いており、用材の面で稀有な資料といえる。19は磨石類である。小型の扁平礫を素材としており、上下両端と表裏に敲打痕が認められる。図示した以外では、メノウ製の楔形石器１点、チャートの原石１点、石英斑岩製の磨石類１点、ガラス質黒色安山岩の剝片４点、流紋岩の剝片１点、黒曜石などの砕片５点が出土した。

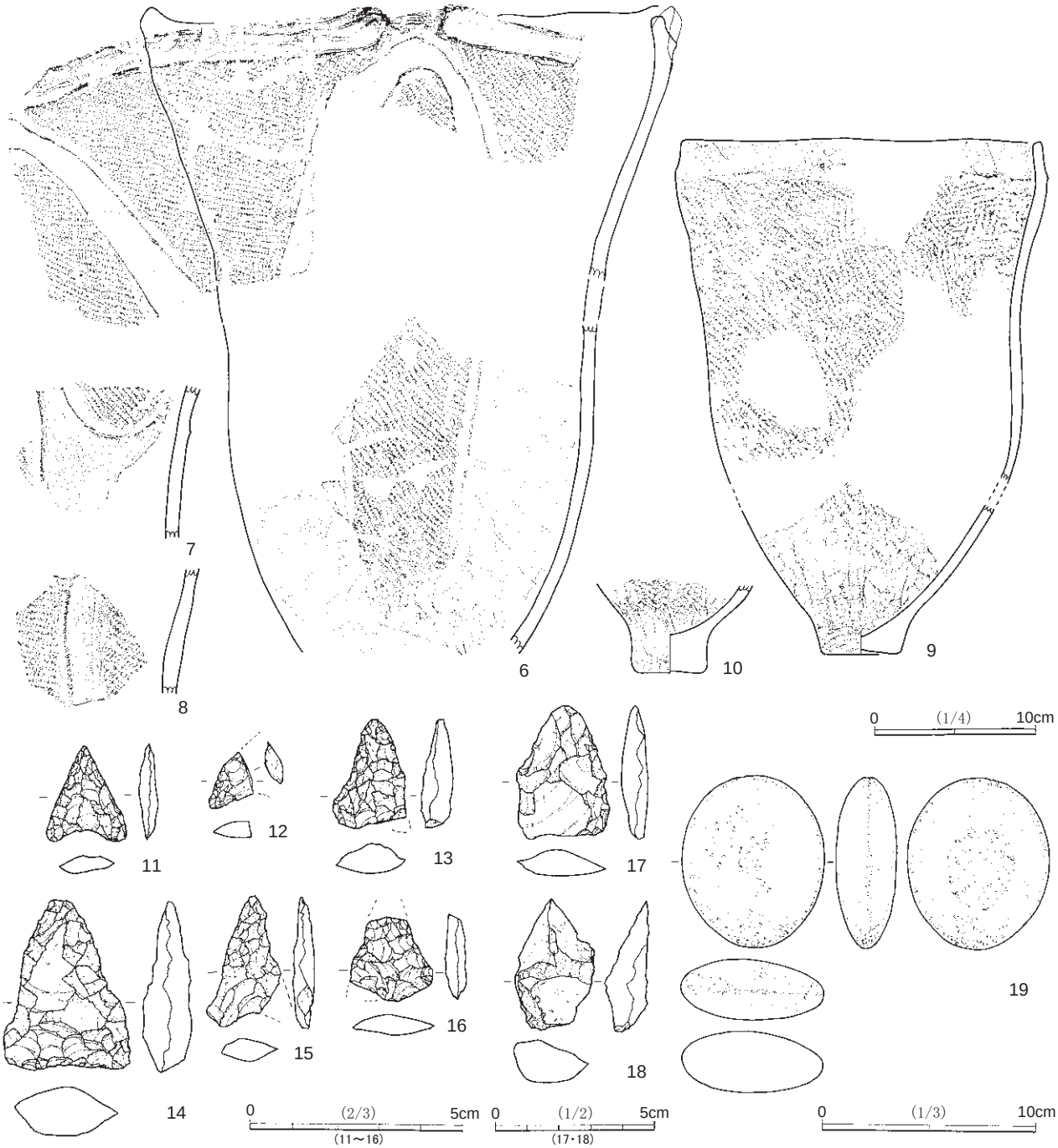
(29) SI714（第130図）

遺跡北西部、17Ｇ－82・83・92・93グリッドに位置する。北東側に (29) SK715が重複する。ほぼ円形を呈する。長軸4.20m、短軸4.10m、深さ21㎝を測る。ピットは３か所検出された。いずれも壁付近に位置する。炉は略円形を呈し、径約80㎝、深さ23㎝を測る。断面形は擂り鉢状である。底面の中央付近には火熱による硬化面が見られる。

遺物は、土器・石器が少量出土した。全て一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は出土土器が少なく確定できない。



第128図 (29) SI713 (1)



第129図　(29) SI713 (2)

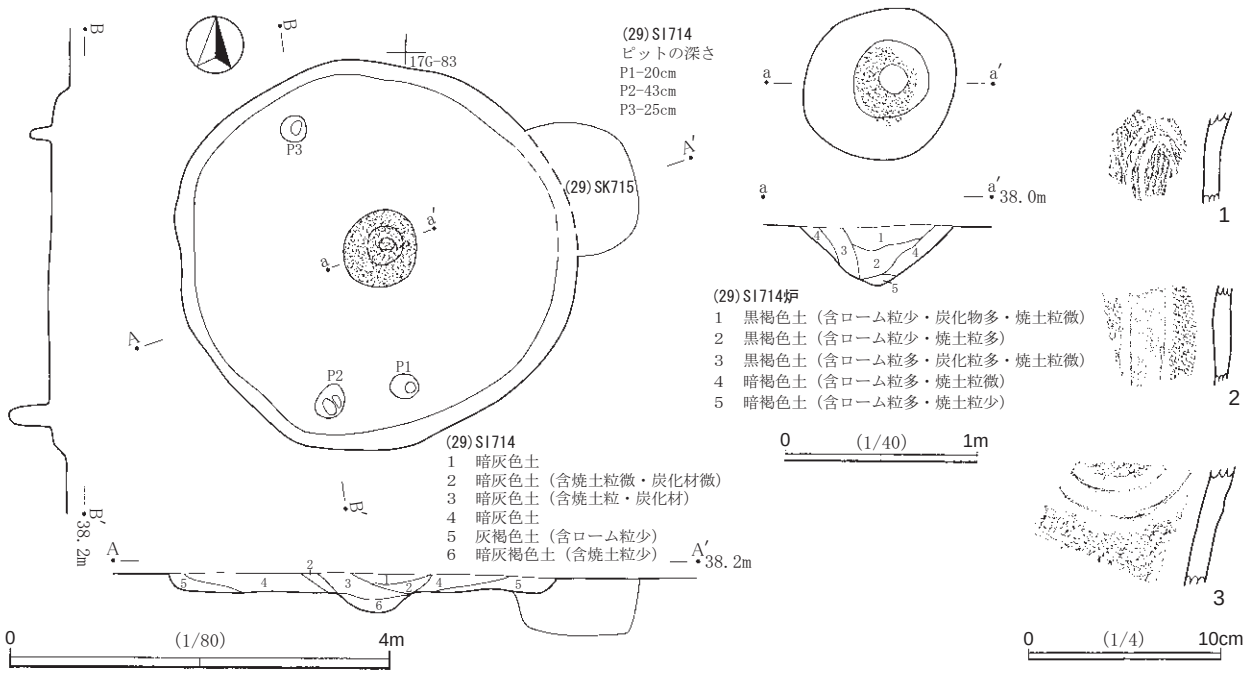
土器（第130図、図版79）

１は稚拙な沈線で逆Ｕ字状区画文を施す。２は磨消懸垂文を、３は隆線による大振りの渦巻文を施す。２・３は加曽利Ｅ3式中～新段階、１は同3-4式と思われる。

石器

チャートの剝片が２点出土した。

(29) SI860（第131図）



第130図　(29) SI714

遺跡北西部、19F-11・12・21・22グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。４基の土坑が重複する。ピットは２か所検出された。深さ約20㎝を測る。炉は径約1.10m、深さ32㎝を測る。土器片囲い炉で、西側側面に２の土器片の外面を炉の内側に向けて設置していた。

遺物は、土器が出土した。２以外は一括で取り上げられているため出土状況は不明である。所属時期は土器２から４ａ期と考えられる。

土器（第131図、図版79）

いずれも微隆起線文の土器である。２は炉囲いの土器である。口縁から胴下部までの破片で、現存高47㎝を測る大型土器で、内外面とも二次的火熱を受けてあばた状に荒れている。キャリパー型の器形であるが、くびれは弱い。不明瞭な微隆起線で画された口縁直下の無文帯は幅広である。１・２は加曽利Ｅ3-4式であろう。

(30) SI008（第132図、図版19）

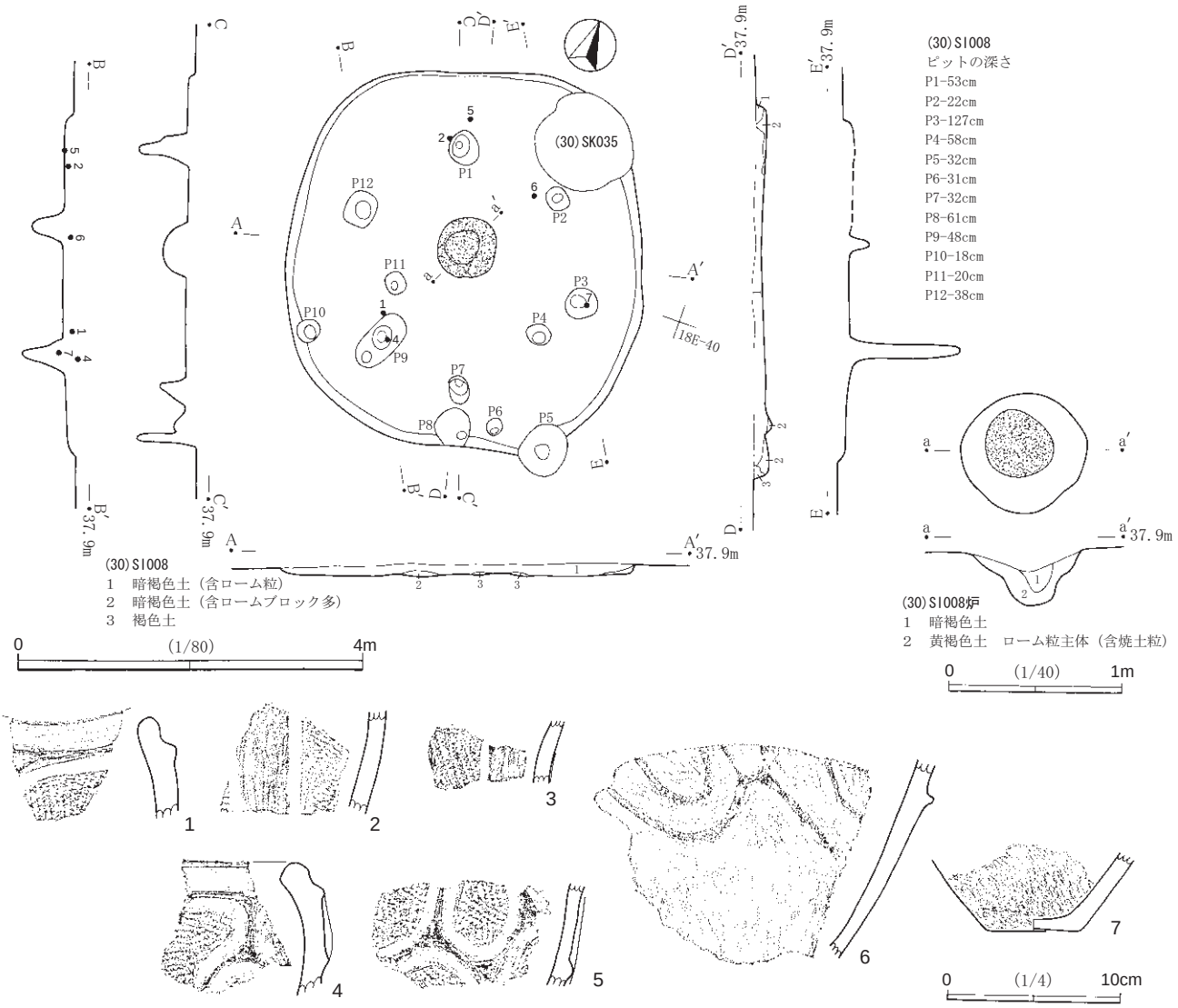
遺跡北西部、18Ｄ－38・39・48・49グリッドに位置する。北東壁付近は（30）SK035と重複する。やや南北方向に長い隅丸方形を呈し、長軸4.45m、短軸4.20m、深さ14㎝を測る。ピットは12か所検出された。炉を中心として80㎝～１m間隔で円形に配列されるP1・P2・P4・P7・P9・P12の６か所は主柱穴と思われる。南西壁にかかるP5・P8間は出入口部の可能性がある。炉はほぼ円形を呈し、長軸75㎝、短軸70㎝、深さ33㎝を測る。

遺物は、床面よりやや浮いた状態で少量の土器・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第132図、図版79）

１は隆線で口縁部に枠状文を施す。２は幅広の磨消懸垂文である。３は微隆起線に沿って沈線が認められる。４～６は大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類で、６はその下端部文様が見える。３は加曽利

第131図　(29) SI860



第132図 (30) SI008

E3-4式、他は同3式新段階であろう。３は混在と思われる。

石器

砂岩・チャートなどの剥片が４点、軽石１点が出土した。

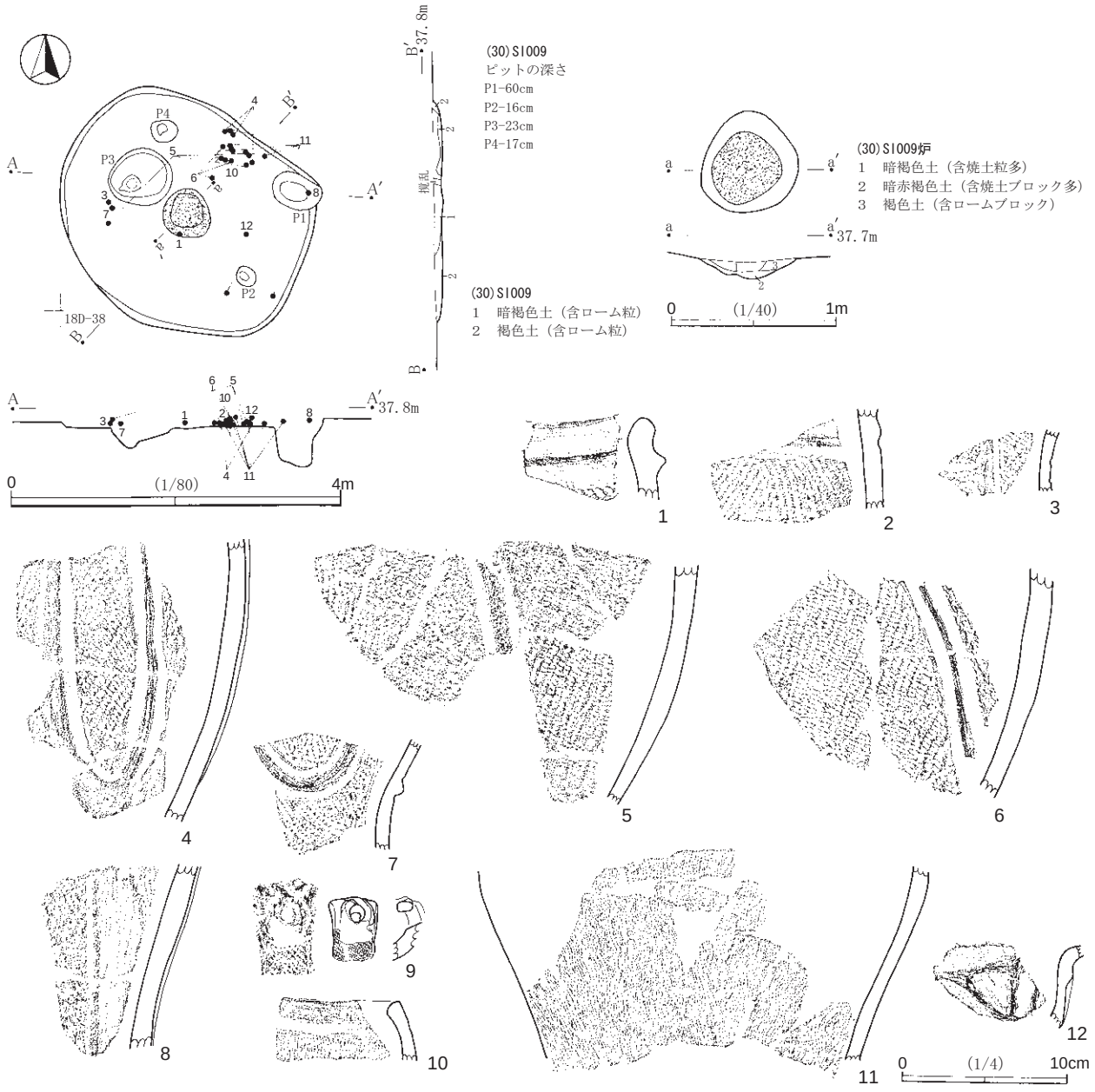
(30) SI009（第133図、図版19）

遺跡北西部、18D－27・28・38グリッドに位置する。東西方向に長い楕円形を呈し、長軸3.15m、短軸2.75m、深さ12cmを測る。ピットは４か所検出された。不規則な配列で、P2・P3は炉を挟んで直線上に位置する。P1は壁面にかかり、深さ60cmを測る。炉は不整円形を呈し、径約60cm、深さ12cmを測る。底面付近の覆土は焼土を多量に含む。

遺物は、北東側を中心に土器が出土した。４・５・11は床面上から出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第133図、図版79）

１・２は隆線による口縁部文様帯の枠状文の一部と思われる。３は沈線による内部無文のH字状区画文

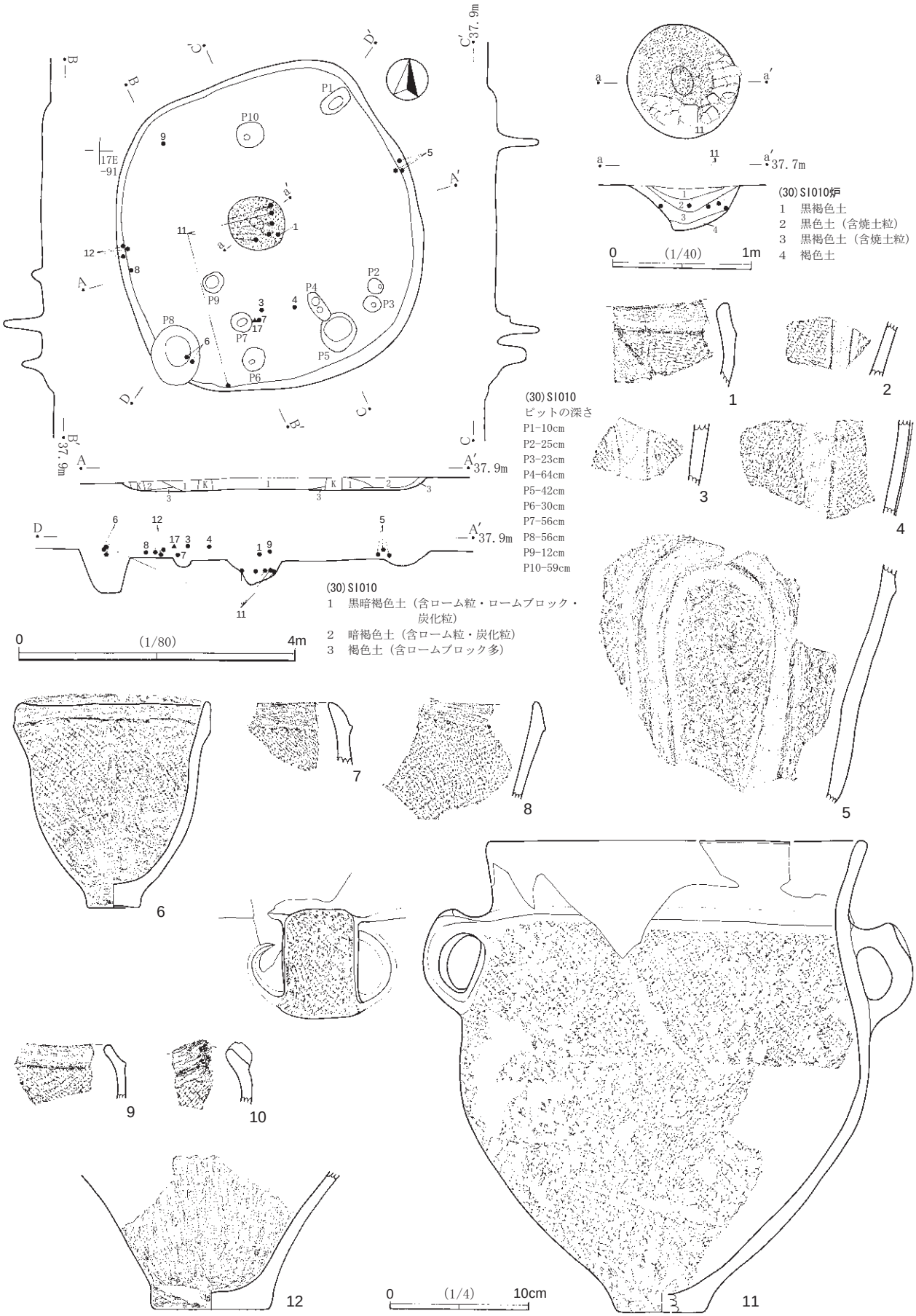


第133図　(30) SI009

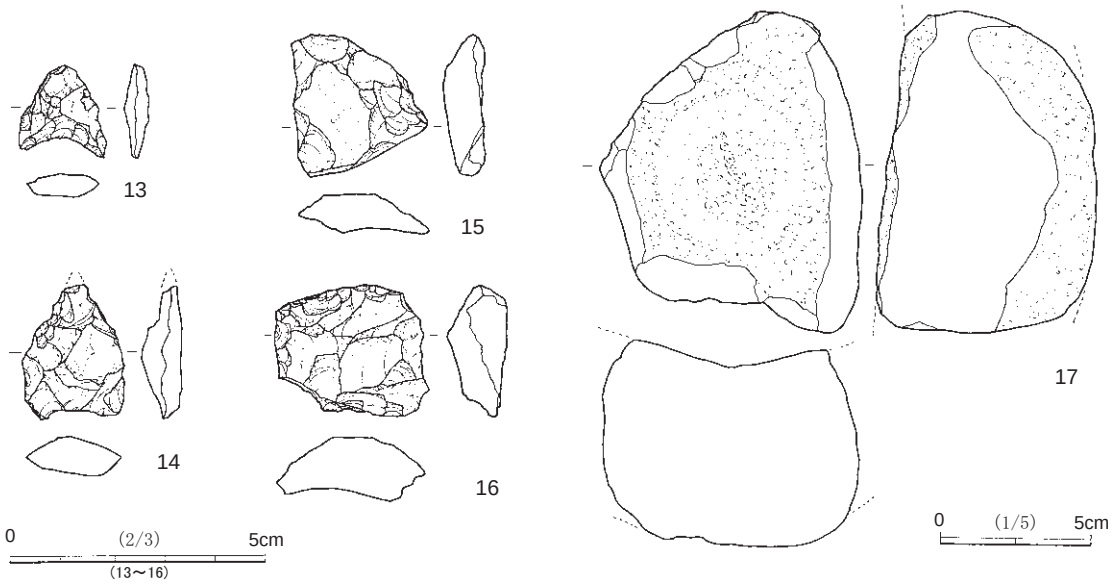
である。４～６は同一個体で、単隆線で大振りの渦巻文の簡素化した文様を施したものであろう。７も同種のもので、８は微隆起線文が認められる。９は小型の橋状突起で、２孔に絡ませた細い隆線による８字状文を施す。10･11は同一個体で、口縁直下の無文帯を太い沈線で区画し、以下櫛歯条線文を全面に施す。12は無文地に微隆起線で渦巻文を施すようである。８を除き、大部分は加曽利Ｅ3式新段階と思われる。

(30) SI010（第134図、図版19）

遺跡北西部、17Ｅ－81・82・91・92グリッドに位置する。隅丸方形を呈し、長軸4.60m、短軸4.45m、深さ18cmを測る。ピットは10か所検出された。やや東から南側に偏った配列である。炉は不整円形を呈し、長軸84cm、短軸78cm、深さ33cmを測る。東側面に11の両耳壺の破片の外面を炉の内側に向けて配列していた。



第134図 (30) SI010 (1)



第135図　(30) SI010 (2)

他の遺物は、土器・石器が床面から浮いた状態で出土した。所属時期は４ｂ期としておく。

土器（第134図、図版55・56・80）

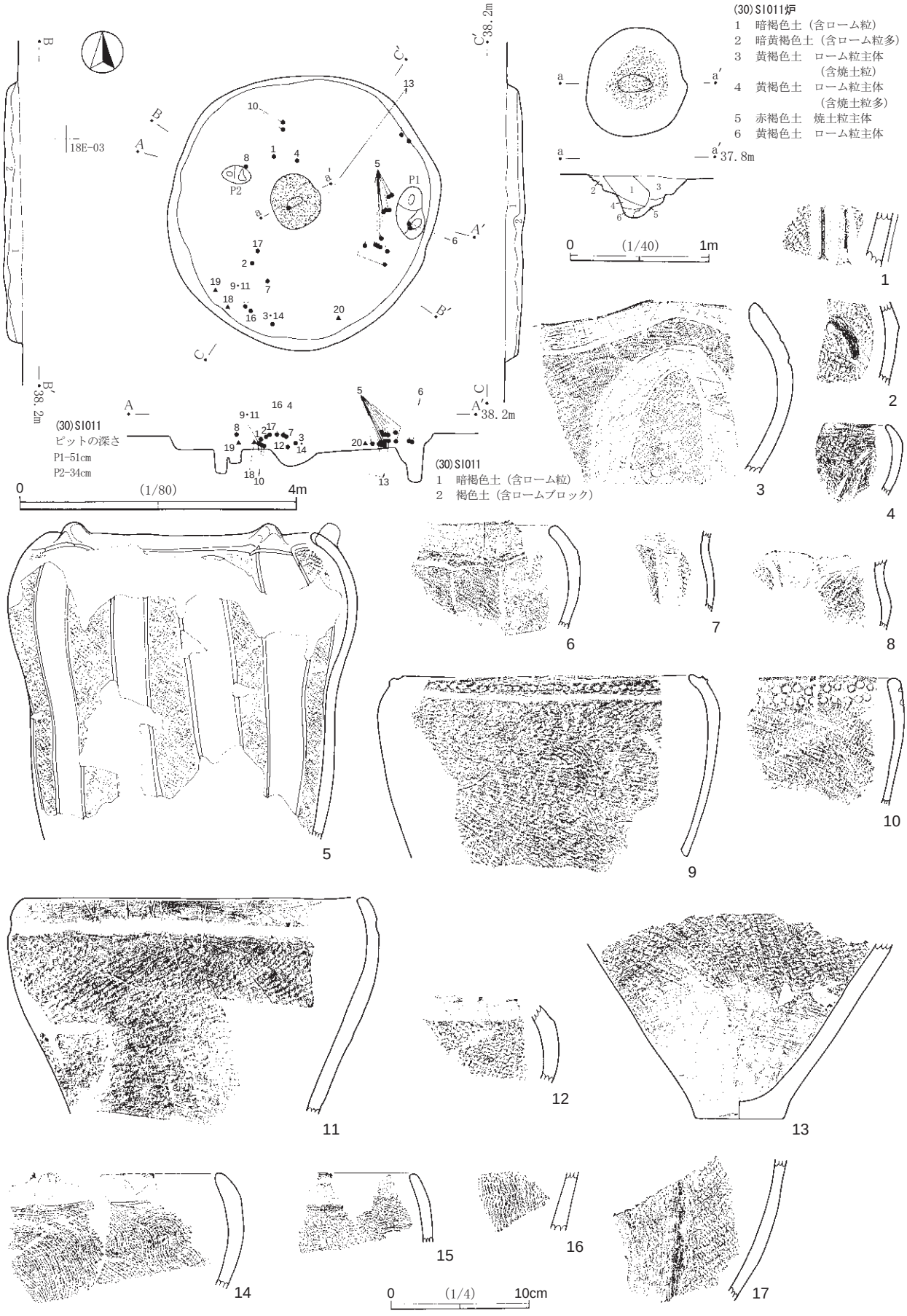
１～10は微隆起線による文様を施したものである。５は微隆起線が断面蒲鉾形に近く、長楕円区画文を描く。６は推定口径14㎝、器高15㎝の小型土器で、底部は完存し口縁から胴下部の1/2弱が遺存する。胴下部は丸みを持ち、口縁は直立する。口縁の一部に煤が付着する。口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。７～10も同様である。７・８は同一個体で、10は波状突起下で無文帯がつまみ状に盛り上がる。11は炉囲いに使用された両耳壺である。胴下部の1/3、口縁部の2/3を欠く。口径27㎝、器高34㎝を測る。内外面とも全体に二次的火熱を強く受け、あばた状の荒れが著しい。幅の広い口縁下無文帯を微隆起線で胴部と画し、これに接して橋状突起が２個対向して付く。橋状突起の上下の基部は左右とも弧状の微隆起線で結んでいる。12は無文の底部で、底部縁は欠けが多く、使用頻度が高かったことを示している。いずれも加曽利Ｅ4式で古段階であろう。

石器（第135図、図版116）

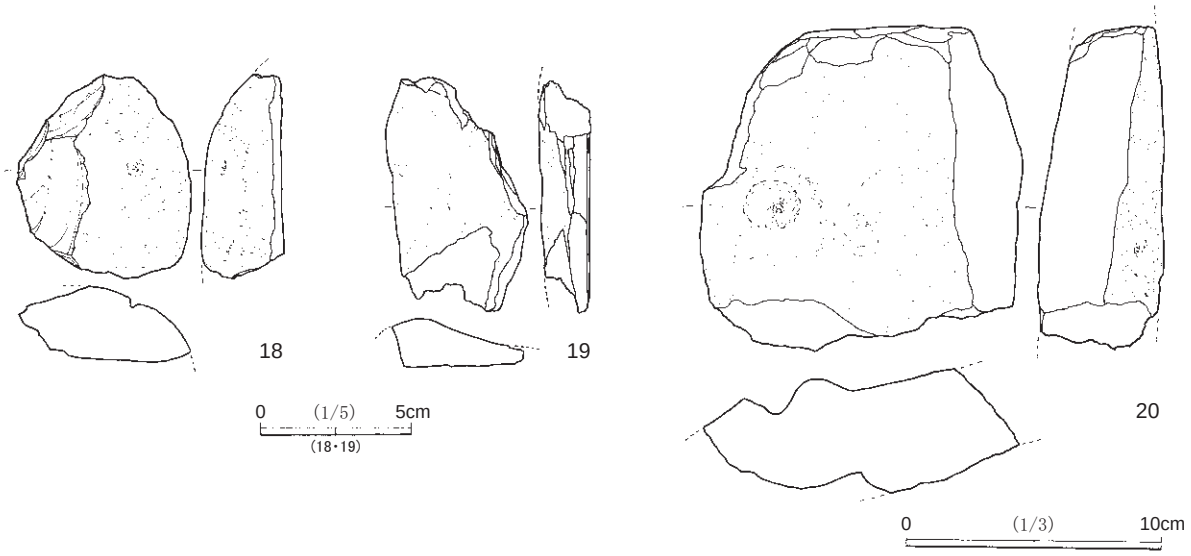
13は凹基無茎石鏃である。粗雑な加工で、先端部が若干欠損している。石材はガラス質黒色安山岩である。14・15は石鏃未成未成品である。いずれも楔形石器を素材としている。石材はチャートと流紋岩である。16は楔形石器である。石材に茨城県久慈川流域で採集可能な白色の珪質頁岩を用いている。17は石皿の破片である。断面形は表面が凹み、裏面が平坦である。裏面に凹み痕が１孔みられる。石材は斑糲岩である。図示した以外では、流紋岩製の石鏃未成品２点・楔形石器１点・剥片１点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品１点・剥片２点、砂岩・黒曜石などの剥片77点が出土した。

(30) SI011（第136図、図版19）

遺跡北西部、17Ｅ－93・94、18Ｅ－03・04グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、径4.00m、深さ27㎝を測る。ピットは２か所検出された。炉を挟んだほぼ直線上に位置する。いずれも２段に掘り込まれており、柱の抜き取りが行われた可能性がある。炉は不整な楕円形を呈し、長軸81㎝、短軸73㎝、深さ31㎝を測る。底面付近の覆土は焼土を多く含む。



第136図 (30) SI011 (1)



第137図　(30) SI011 (2)

遺物は、１層中から土器・石器が出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第136図、図版56・80）

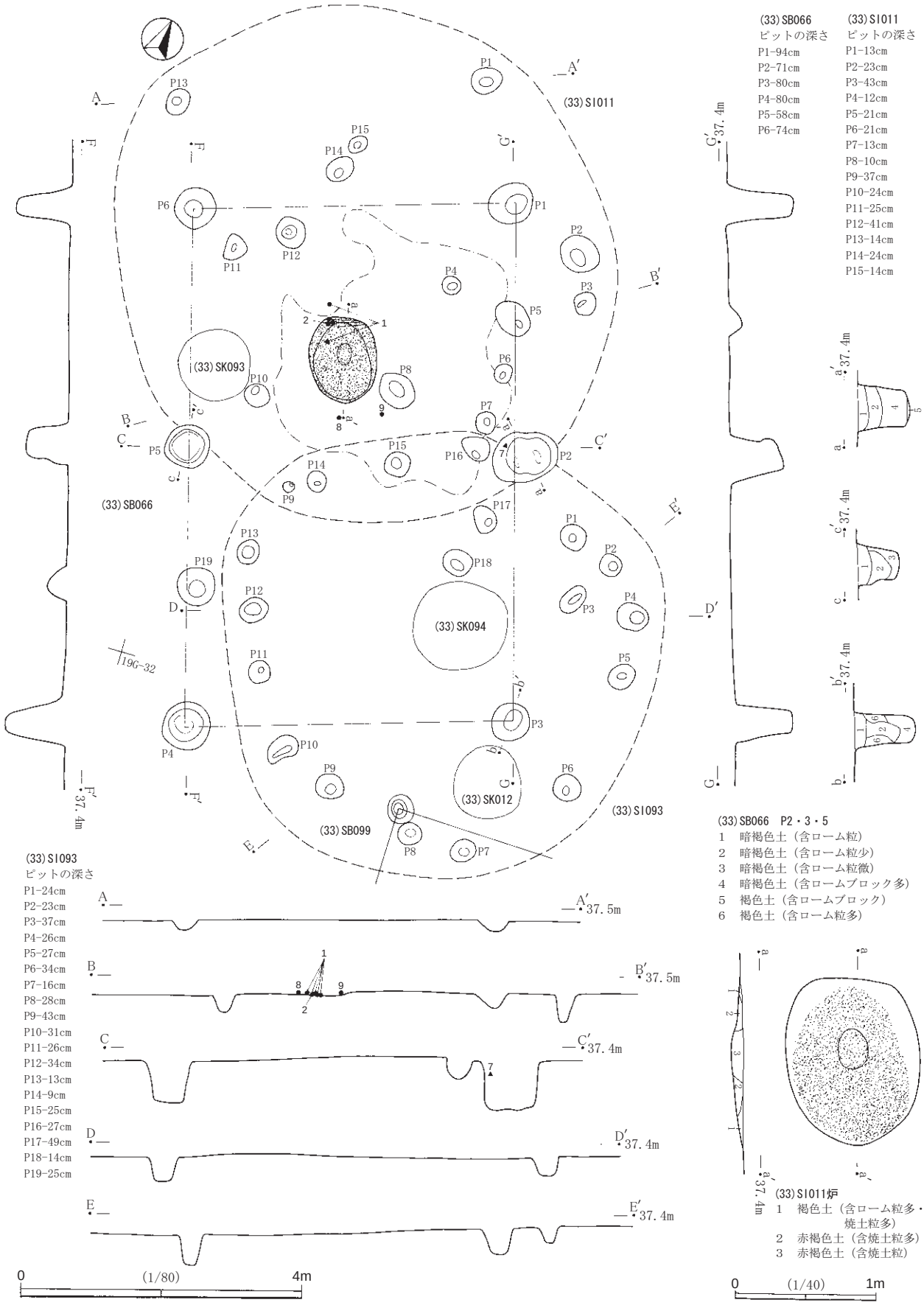
１・２は隆線文様のもので、２は渦巻文の末端であろう。３は波状口縁で、口縁直下の無文帯を沈線で画し、その下に逆U字状区画文を施す。４も同様の文様であるが、沈線は３が明瞭であるのに対し、不明瞭である。８は４と同一個体である。５・６も同一個体である。５は口縁から胴上部までの1/2弱が遺存する。推定口径19㎝、現存高23㎝を測る。キャリパー型の器形であるがくびれは弱い。口縁直下は無文で、つまみ状の小突起が４単位で付く。沈線による短冊状区画文が繰り返されるが、その上端は稚拙な沈線で弧状に結ばれている。７は小型土器で、細い沈線で縄文を充填した逆U字状区画文を施す。９は口縁直下に円形竹管列が乗る細隆線と指頭による太い凹線を施す。10は同じく口縁直下の無文帯に編棒状工具で２段の刺突列を施す。11は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。12は口縁直下の無文帯が浅く窪み、その下に段が付く。13は胴下部から底部にかけて約1/2が遺存する。14～16は櫛歯条線文の土器で、14・15は12とは逆に口縁直下の無文帯が凸帯状となる。17は微隆起線文が認められる。17は加曽利Ｅ4式、他は大部分が同3-4式と思われる。

石器（第137図、図版117）

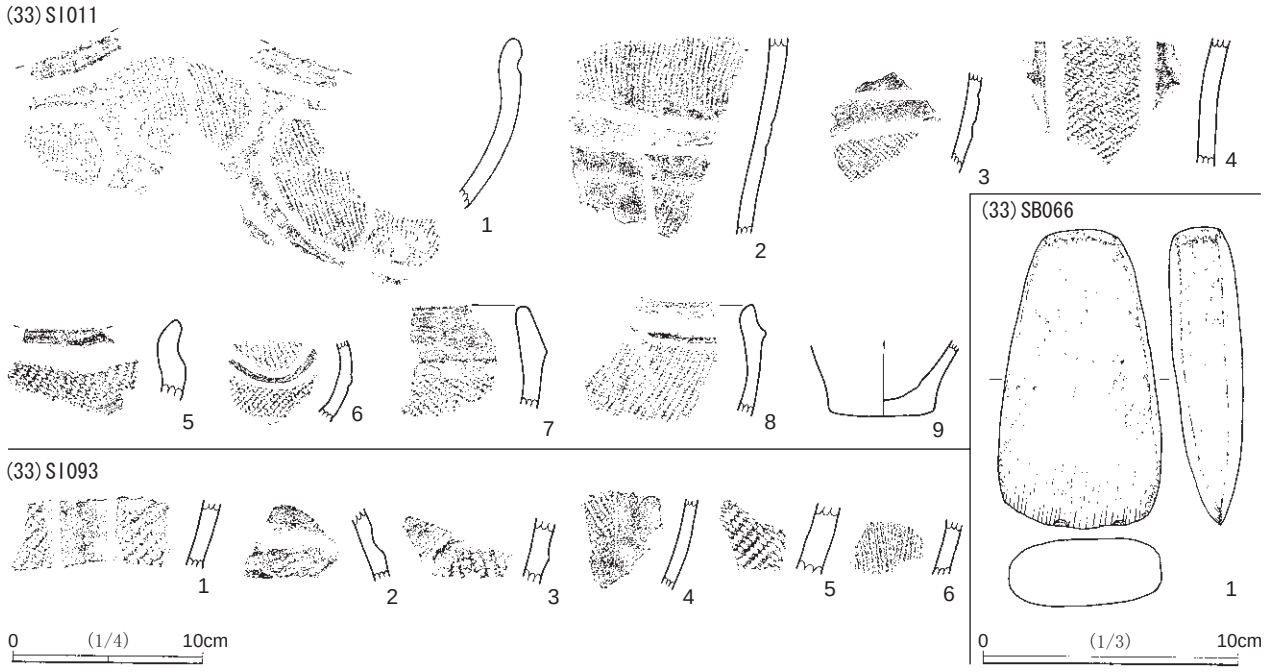
18は大型の石棒の頭部破片である。石棒の再加工により生じたものと推定される。石材は安山岩である。19・20は緑泥片岩製の石皿片である。ともに断片的で、20には凹み痕がみられる。図示した以外では、石英斑岩製の磨石類１点、流紋岩製の磨石類１点、ホルンフェルス製の敲石１点、安山岩製の石皿の断片１点、ガラス質黒色安山岩・硬質頁岩などの剥片３点が出土した。

(33) SI011（第138図、図版19）

遺跡北西部、19Ｇ－01・02・03・11・12・13・21・22・23に位置する。(33) SI093・(33) SB066・(33) SK090と重複する。新旧関係は不明である。壁の掘り込みは確認できなかった。炉の北東から南東側の床面は硬化していた。ピットは不規則に配列され、径はおおむね40㎝～50㎝、20㎝～30㎝のものに分かれる。炉は楕円形で、長軸1.2m、短軸96㎝、深さ８㎝を測る。側縁部の覆土に焼土が多く含まれていた。



第138図　(33) SI011・(33) SI093・(33) SB066 (1)



第139図　(33) SI011・(33) SI093・(33) SB066 (2)

遺物は、炉内を中心に土器が出土した。所属時期は出土遺物に時期幅があるが、主体となる土器から３ｃ期と考えたい。

土器（第139図、図版80）

１～３は同一個体である。１は波状突起下に太い沈線で巻きのゆるい渦巻文を施し、両脇に同じ太い沈線による枠状文を配する。２では幅広の磨消懸垂文が認められる。４も磨消懸垂文で磨消部内に沈線文様がうかがえる。５は口縁直下に指頭による太い沈線で枠状文を施す。６は弧状の単隆線が見える。７・８は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。１～６は加曽利Ｅ3式で１～３は新段階、７・８は同4式であろう。

(33) SB066（第138図、図版19）

遺跡北西部、19Ｇ－11・12・13・21・22・23グリッドに位置する。(33)SI011・(33)SI093と重複する。(33)SB099は約１ｍ南側に位置する。南北方向２間、東西方向１間の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－17°－Ｗである。規模は南北7.40m、東西4.60mを測り、南北方向の柱間は3.40m～4.00mである。ピットは径約55㎝～60㎝、深さ71㎝～94㎝を測る。覆土は、下層にはローム粒を多く含むしまりのある層、中層にはしまりの弱い層が堆積しており、南東隅のP3には中層中央に径約18㎝の柱痕跡がみられた。P2は東西に重複した形状となっており、柱の据え替えをした可能性がある。底面はいずれも平坦である。

遺物は、P2から石器４点、P3から少量の土器が出土した。

石器（第139図、図版116）

１は扁平な定角式磨製石斧である。刃部に使用による損傷が若干みられるが、完形品といって差し支えない。石材は粗粒玄武岩である。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品１点・剥片１点、砂岩製の磨石類１点が出土した。

(33) SI093（第138図、図版19）

遺跡北西部、19Ｇ－22・23・32・33グリッドに位置する。(33) SI011・(33) SB066・(33) SB099・(33)

SK012・(33) SK094と重複する。ピットは円形に配列され、壁柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。

遺物は、少量の土器が出土した。所属時期は出土遺物に時期幅があり、量的にも少ないことから、確定できない。

土器（第139図、図版80）

１は磨消懸垂文である。２は口縁直下の破片で、口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。３は微隆起線文、４は細く鋭い沈線による区画文を施す。５は縄文のみ、６は櫛歯条線文のみである。１・２は加曽利Ｅ3式、３・４は同4式と思われる。

(33) SB099（第140図）

遺跡北西部、19Ｇ－33・43グリッドに位置する。(33) SI093と重複する。南北方向に長い１間×１間の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－２°－Ｅである。規模は南北方向3.30m、東西方向2.40mを測る。ピットは径38㎝～65㎝、深さ77㎝～96㎝を測る。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土や褐色土を主体とする。P2・P3の中層に幅約20㎝～26㎝のしまりを欠く柱痕跡とみられる層が認められた。P2の西から南西側にピットが２か所あるが、本跡との関係は不明である。

遺物は、各ピットから少量の土器・土製品が出土した。所属時期は確定できない。

土器（第140図、図版80）

１・２は口縁部文様帯の枠状文ないしは渦巻文を配すると思われる。３・４は磨消懸垂文、５は縄文地に３条の沈線が垂下する。６は口縁直下の浅く窪んだ無文帯下に編棒状工具による刺突列を施す。７・８も口縁直下が無文帯となり、７は指頭による凹線で画し、８はわずかな段が付く。９は縄文のみ、10は櫛歯状工具による弧線文を施す。土器はいずれも加曽利Ｅ3式新段階から3-4式と思われる。

土製品（第140図、図版113）

11・12は土器片錘である。小型で不定形であるが、糸掛けが明瞭に残る。

(33) SI014（第141図、図版20）

遺跡北西部、19Ｆ－06・16・17・26・27グリッドに位置する。(33) SK051・(33) SK040が重複する。壁の掘り込みは確認できなかった。炉の南側を中心とした範囲の床面は硬化していた。ピットは円形または楕円形を呈し、不規則に配列されるが、おおむね壁柱穴と考えられる。径30㎝～50㎝のもの、60㎝～70㎝のものがある。炉は楕円形で、長軸1.55m、深さ24㎝を測る。底面は火熱により硬化していた。覆土は焼土粒を多く含む層を主体とする。

遺物は、覆土中から少量の土器・石器が出土した。所属時期は主体となる土器から４期と考えたい。

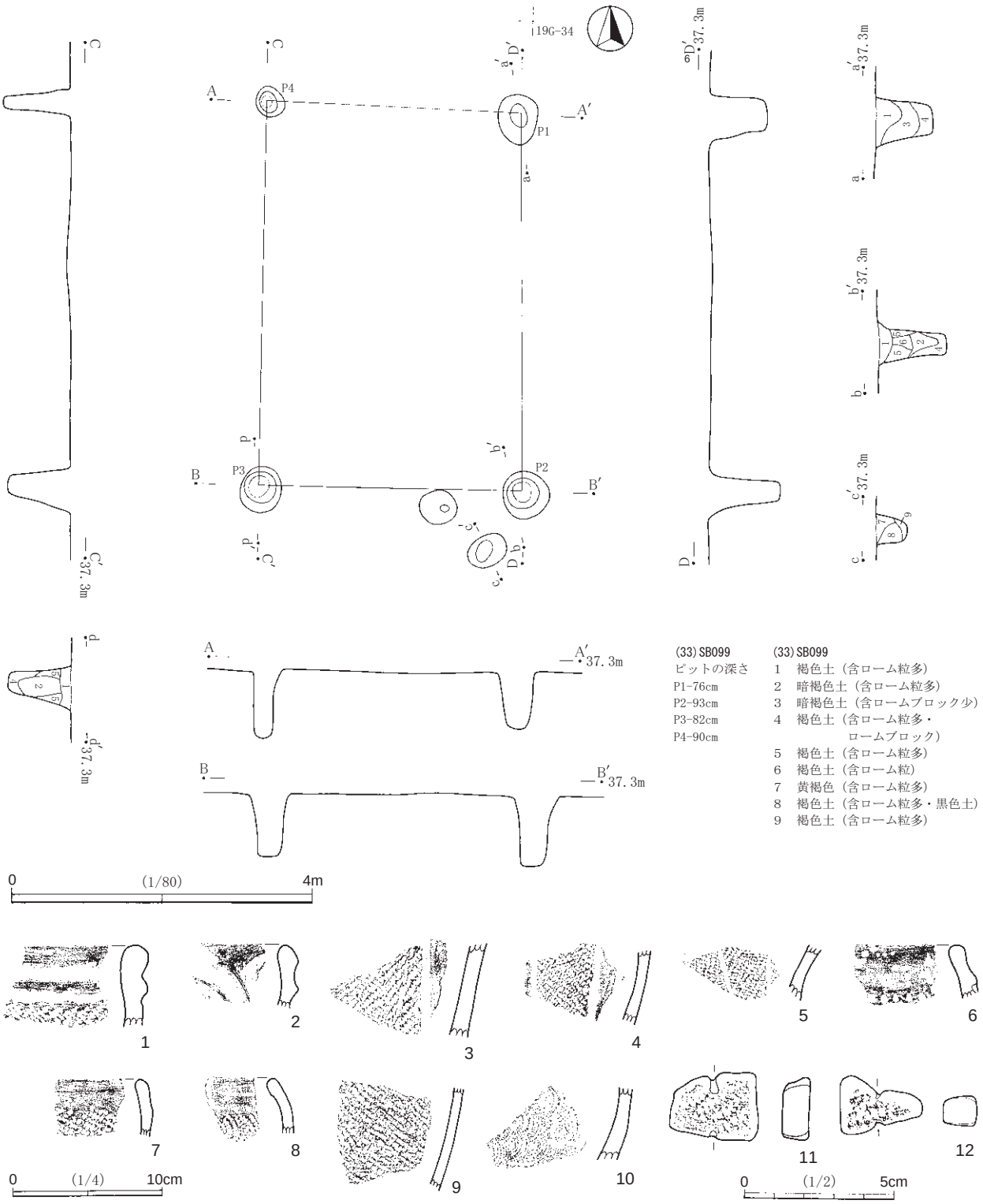
土器（第141図、図版82）

１はゆるい波状口縁で口縁に沿って沈線で楕円文を施し、その下には紡錘文を施す。沈線の引き方が粗雑で、一部が飛んでいたり二重になる所がある。内部は細い縄文を充填する。２は１に近く、太い沈線の楕円文が見える。３は隆線による枠状文の部分であろう。４・５は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。４では微隆起線下に縄文施文部と無文部があるが、微隆起線区画がない。３は加曽利Ｅ3式、４・５は同4式、１・２は後者に伴う西日本系の影響を受けた土器であろう。

石器

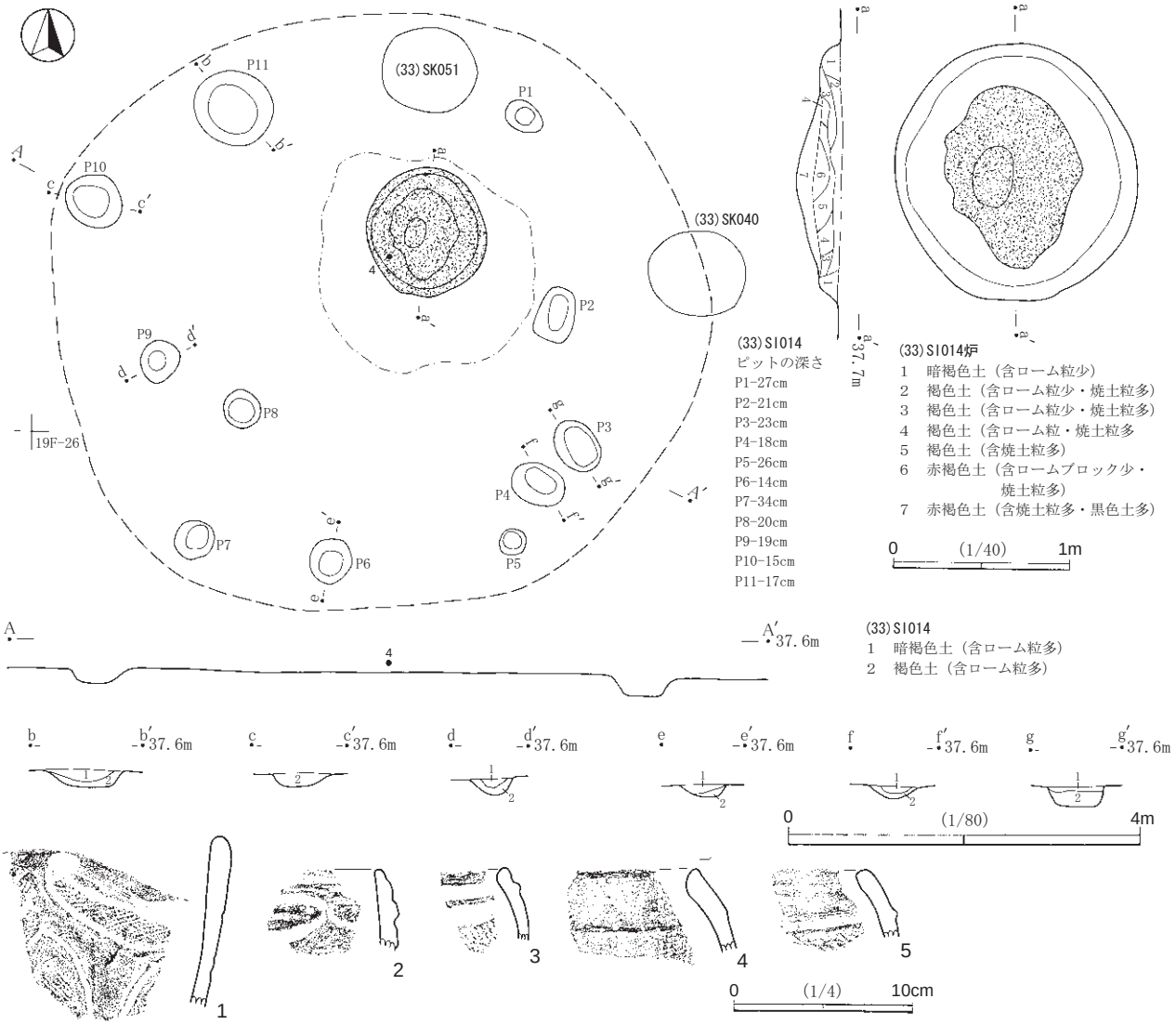
メノウ製の石鏃・砕片各１点、トロトロ石の剝片１点、チャートの砕片１点が出土した。

(33) SI016（第142図、図版20）



第140図　(33) SB099

遺跡北西部、18Ｆ－75・76・85・86グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、長軸4.10m、短軸3.86m、深さ16㎝を測る。ピットは不規則に配列される。壁面から壁外にかけて壁柱穴が施されている。径約20㎝、深さ10㎝台のものが多い。住居外の南側に近在するピットが４か所あるが、本住居跡には伴わ



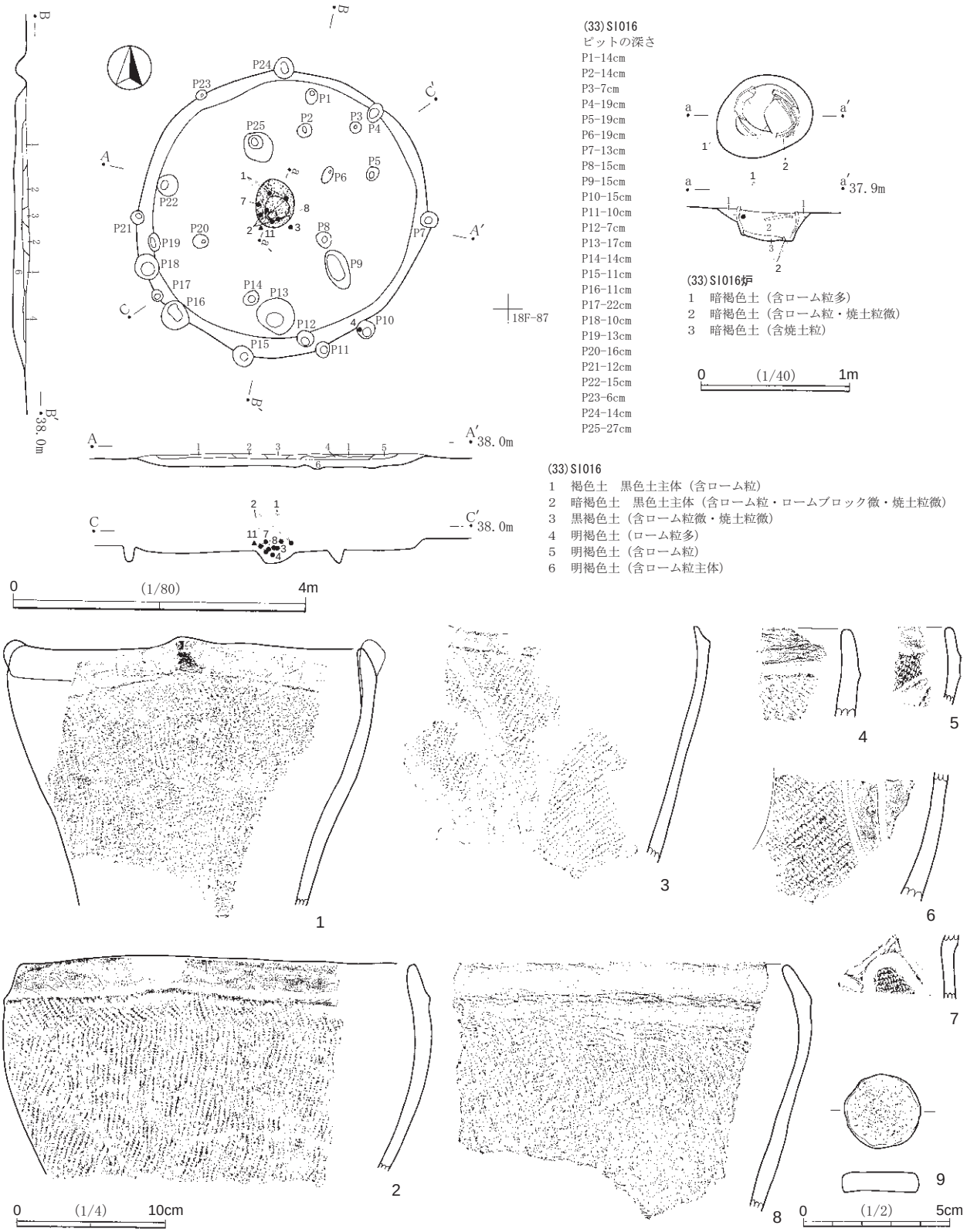
第141図　(33) SI014

ないものと判断した。炉は土器片囲い炉である。楕円形を呈し、長軸66㎝、短軸53㎝、深さ23㎝を測る。中央付近からは１・２・８の破片がほぼ円形に配置されていた。

遺物は、炉内及び周辺を中心から土器・土製品・石器が出土した。所属時期は炉体土器の中でも新しい時期の土器から４ｂ期と考えられる。

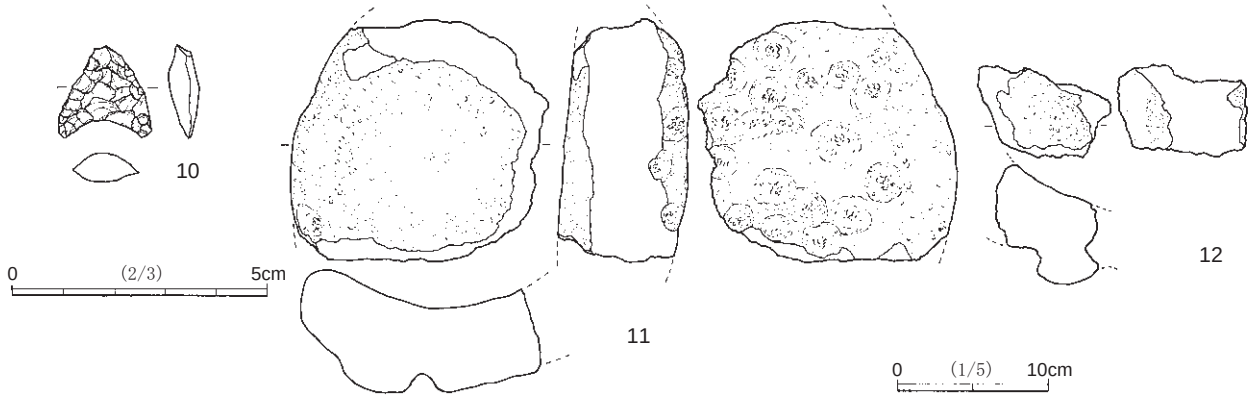
土器（第142図、図版56・80）

１は炉囲いの土器で、胴下部を欠損するほかは完形である。口径24㎝、現存高18㎝を測る。内面には二次的火熱を受けてあばた状に荒れる個所とそうでない個所がある。破片状態で炉に設置されたためであろう。口縁直下の無文帯を微隆起線で画するが、無文帯は4か所で途切れてつまみ状の小突起となる。２も炉囲いの土器で、口縁から胴上部にかけての約1/3の破片と口縁部約1/4の破片に分れる。やはり内面に二次的火熱を強く受ける。キャリパー型の器形で、口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。３は口縁下の無文帯が狭く、以下には細く鋭い沈線で内部に縄文を充填した楕円区画文、Ｕ字状区画文、逆Ｕ字状区画



第142図　(33) SI016 (1)

文を施す。４・５は微隆起線の土器、６は太めの沈線で大型の渦巻文を描くかもしれない。７は隆線区画が見られる。８も炉囲いの大型破片で、内外面とも胴上部に二次的火熱を受ける。やや内側に屈折した口



第143図　(33) SI016 (2)

縁部を無文帯とし、屈折部下に指頭による凹線を引く。以下は細い櫛歯条線文である。２・４～８は加曽利Ｅ3-4式、１・３は同4式古段階であろう。

土製品（第143図、図版117）

９は土製円板である。周縁の磨りはごく浅い。10は石鏃未成品である。先端部に素材剥片の打面部が一部残存している。石材は白色のメノウである。11･12は安山岩製の石皿の破片である。ともに表面は凹面、裏面は凸面を呈する。裏面には多数の凹み痕が密集しており、蜂の巣状となっている。

石器

チャート製の石鏃未成品１点・砕片２点、黒曜石の剥片１点が出土した。

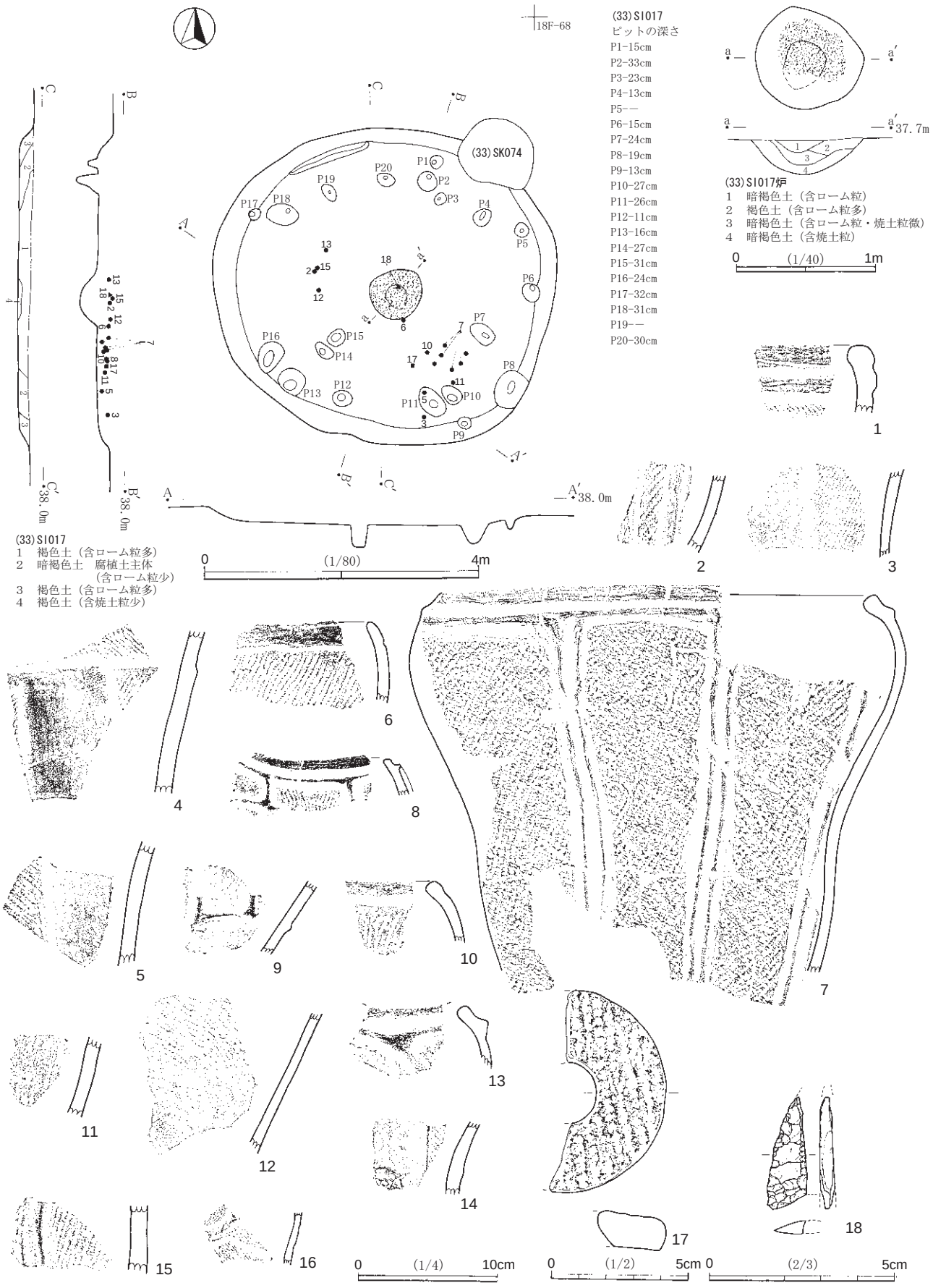
(33) SI017（第144図、図版20）

遺跡北西部、18Ｆ－66・67・76・77グリッドに位置する。北東側は (33) SK074に切られていた。平面形は長軸5.03m、短軸4.60mのほぼ円形で、深さは23cm を測る。北西側壁下に長さ1.25mほど周溝が検出された。ピットは円形に配列され、径約20cm、深さ10cm ～20cm 台のものが主で、壁柱穴と考えられる。炉は床面中央付近にある。長軸78cm、短軸75cm の不整円形を呈し、深さは23cm を測る。底面は火熱により硬化しているが、覆土中に焼土はあまり含まれていない。

遺物は、床面南東側の覆土上層を中心に土器・土製品・石器が出土した。出土土器に時期幅があるが、主体となる土器から所属時期は３ｃ期と考えられる

土器（第144図、図版56・80・81）

１と４は同一個体で、口縁部に隆線で枠状文を、胴部には幅広の磨消懸垂文を配する。２・３も磨消懸垂文の胴部で、３はやはり磨消部が幅広い。６は口縁直下を幅の狭い無文帯とし、その下に中位の太さの沈線が巡る。７は口縁部が約1/3、胴上部はほぼ全周する。推定口径32cm、現存高28cm を測る。キャリパー型の器形で、口縁下に指頭による凹線と断面蒲鉾形の隆線が巡り、隆線からは２条１単位の隆線が計10単位垂下する。ただし、右側の隆線は口縁部の隆線と連続しない。８・９は同一個体で、隆線による大振りの渦巻文が展開する土器の一部であろう。10は口縁下に指頭による太い沈線が巡り、その下に条線文を施す。11は櫛歯条線文、12は縄文のみの破片である。13～15は微隆起線文が、16は太めの沈線による帯状縄文の一部が認められる。１～10は加曽利Ｅ3式で大部分は新段階、８・９は同時期の文様が簡素化した梶山類、７も同時期の梶山類の一種と思われる。13～15は同4式、16は薄手で焼成良く、称名寺１式であろう。



第144図 (33) SI017

土製品（第144図、図版113）

17は土製円板である。大型で周縁の磨りは深い。孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が大きく、かつ真円となっていない。

石器（第114図、図版117）

18は凹基無茎石鏃の破片である。石材は良質のチャートである。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品１点・剥片１点が出土した。

(33) SI018（第145図、図版20）

遺跡北西部、18Ｆ－55・56・64・65・66・75グリッドに位置する。柄鏡形の住居である。長軸5.76m、短軸4.50m、深さ約27㎝を測る。張出部は長さ1.10m、幅1.15m、深さ38㎝を測り、床面より深い。ピットは深いもののうち、P3・P8・P20・P26は主柱穴、P11・P14は出入口に関連する柱穴、壁に沿って円形に配列されたものは壁柱穴と考えられるが、これらの内側に巡るように確認されたP4・P24・P28・P32などもあり、拡張された可能性もある。炉は円形部の中央にあり、長軸85㎝、短軸66㎝、深さ24㎝を測る。底面付近の覆土は焼土を多量に含んでいる。

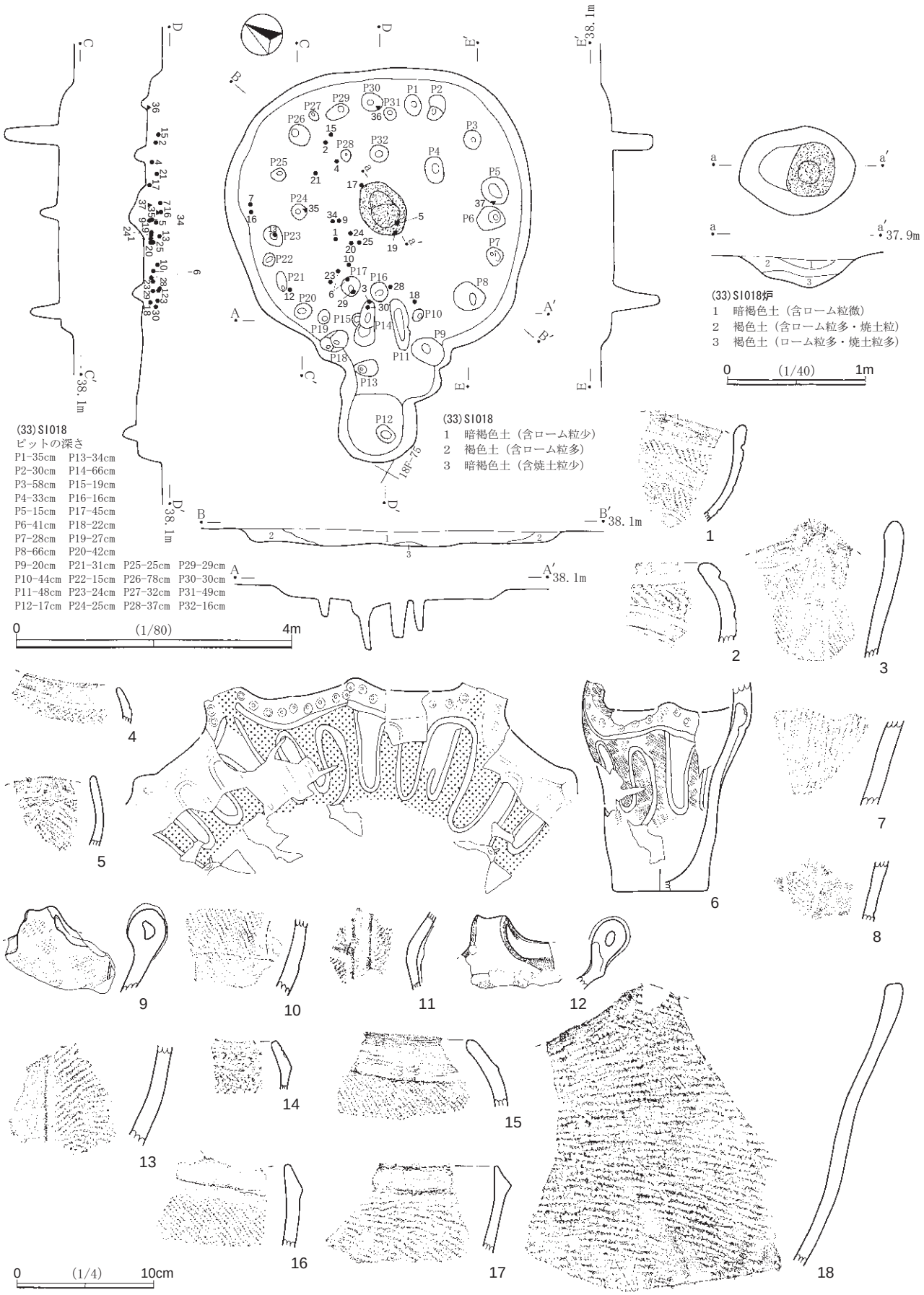
遺物は、覆土上層から中層を主体に土器・石器が出土した。所属時期は出土土器に時間幅があって確定できない。４ａ期から５期にかけて断続的に営まれた住居跡であろう。

土器（第145・146図、図版56・81）

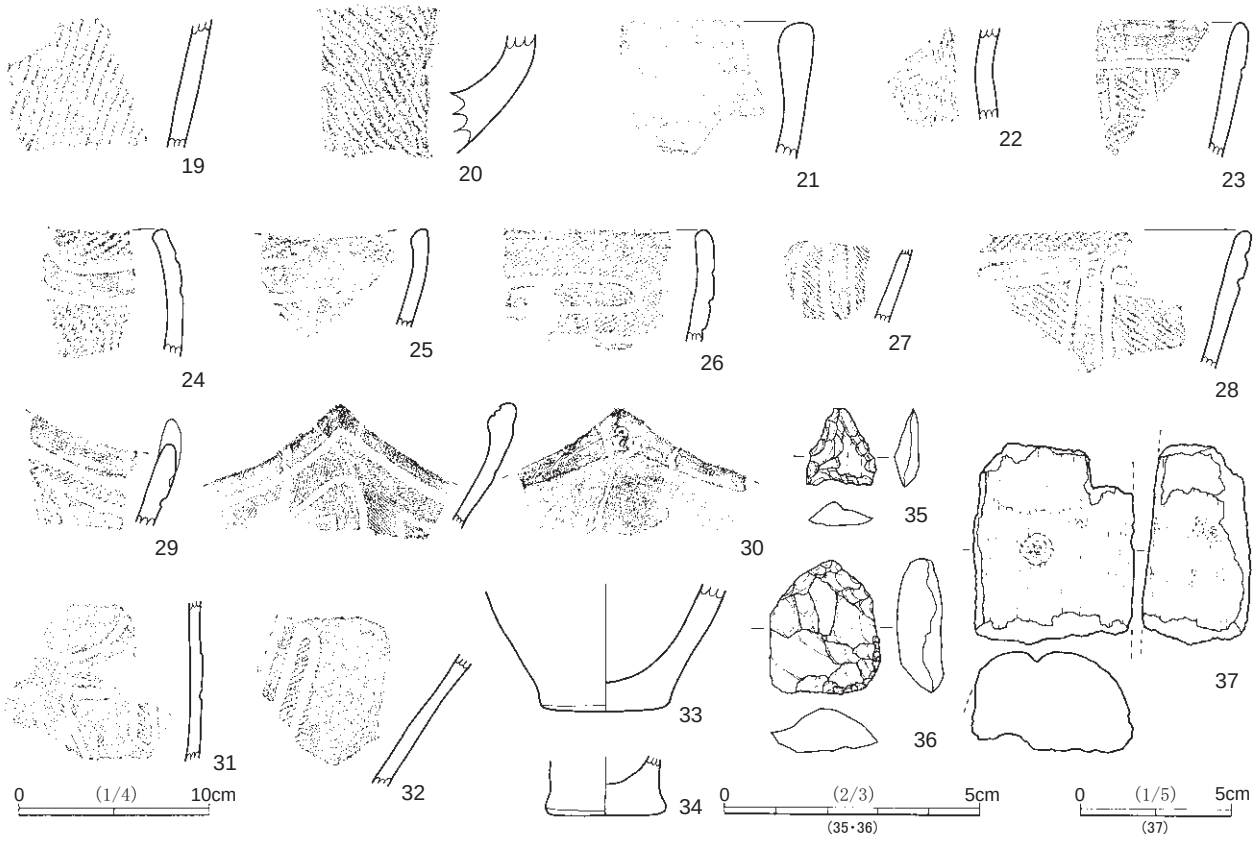
１～10は沈線文様の土器である。１・２は口縁直下にやや太めの沈線が巡り、その下に内部無文の細目の沈線による渦巻状の区画文様が展開すると思われる。３は波状突起を持つ破片で、稚拙な沈線で三角形状の区画文様を描き、縄文を充填する。４は口縁を巡る沈線下に逆Ｖ字状区画内を無文としている。５は４と同一個体である。低い山形の波状口縁で、口縁直下に巡る沈線は波頂部で途切れている。その下には内部に縄文を充填した抱球文を配する。６は口径10㎝、器高15㎝、底径７㎝を測る小型土器である。口縁部の約1/2、胴部の一部及び対向する主突起を欠く。対向する主突起は上方でつながって釣手土器になると思われ、釣手間には小型の波状突起を配する。円形刺突列と沈線が口縁を巡るが、沈線は釣手基部で途切れ、刺突列と縄文が釣手を飾るらしい。口縁下の文様は欠損部があるため不確実であるが、大きくω字状にうねる沈線文様を大小３単位施すと思われ、沈線は突起下から始まり胴下部で終わるらしい。一部にはＪ字状の沈線も見える。縦位施文の縄文を施すが、縄文施文部は区画内にうまく納まっていない。９は橋状突起を持つ破片で､細く鋭い沈線が右端に見える。11は断面三角形の隆線による文様が認められる。12～17は微隆起線文を持つものであるが、14の口縁部微隆起帯は内折する程度で不明瞭である。橋状突起を持つ12とともに刺突列が付く。18・19は縄文のみを施し、18は波状の突起が付く。20は両耳壺の橋状突起である。21は無文で、浅鉢になるかもしれない。22は櫛歯条線文を施す。23～32は沈線区画による帯状文を施したものである。このうち、24・25は同一個体、30は波状突起で、突起の内面には３個の円形竹管刺突が付く。１～11は加曽利Ｅ3-4式、12～17は同4式、23～32は4式に伴う西日本系の土器及び後期初頭の称名寺1式であろう。23～32の中・後期区分は難しいが、29・32は称名寺式と思われる。

石器（第146図、図版117）

61点出土した。石鏃製作に伴う未成品・剥片等が多い。35は半両面加工の凹基無茎鏃である。石材は黒曜石である。先端部がガジリによりやや欠損している。36はメノウ製の石鏃未成品である。楔形石器を素材としている。部分的に礫面をとどめている。37は大型石棒の胴部破片である。被熱により全体的に赤化



第145図 (33) SI018 (1)



第146図　(33) SI018 (2)

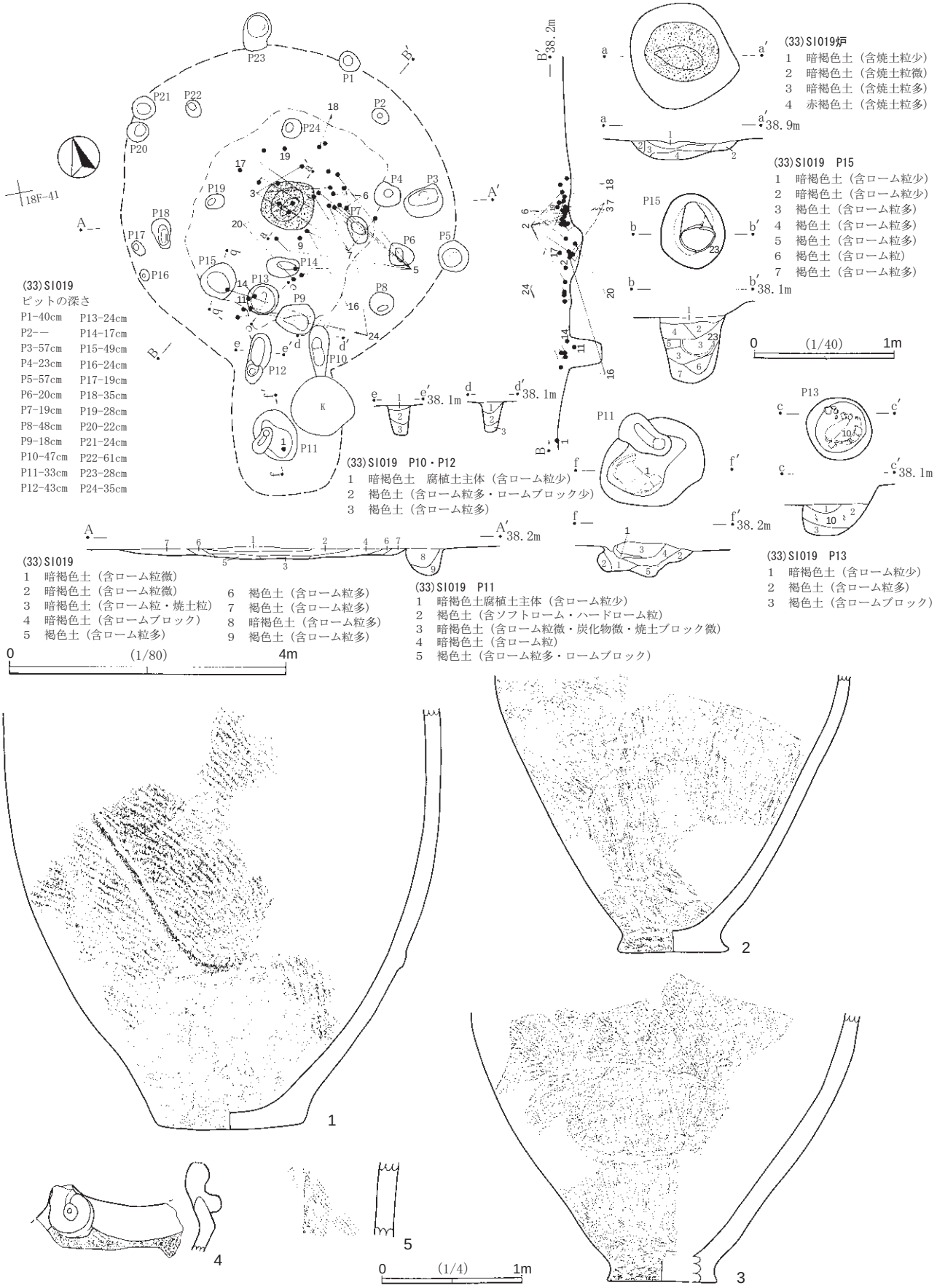
している。表面は原形をとどめているが、裏面は割れ面となっている。表面の中央には凹み痕がみられ、欠損後凹石として転用されたことがわかる。石材は白雲母緑泥石片岩である。図示した以外では、ホルンフェルス製の石鏃１点・石鏃未成品１点、チャート製の石鏃未成品４点・楔形石器３点・剥片７点・砕片４点、流紋岩製の石鏃未成品１点・二次加工のある剥片１点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品１点・楔形石器１点・剥片２点・砕片１点、安山岩製の磨石類１点・剥片１点、黒曜石の剥片６点・砕片12点、メノウの石核１点・剥片１点、トロトロ石・珪質頁岩などの剥片４点が出土した。

(33) SI019（第147図、図版20）

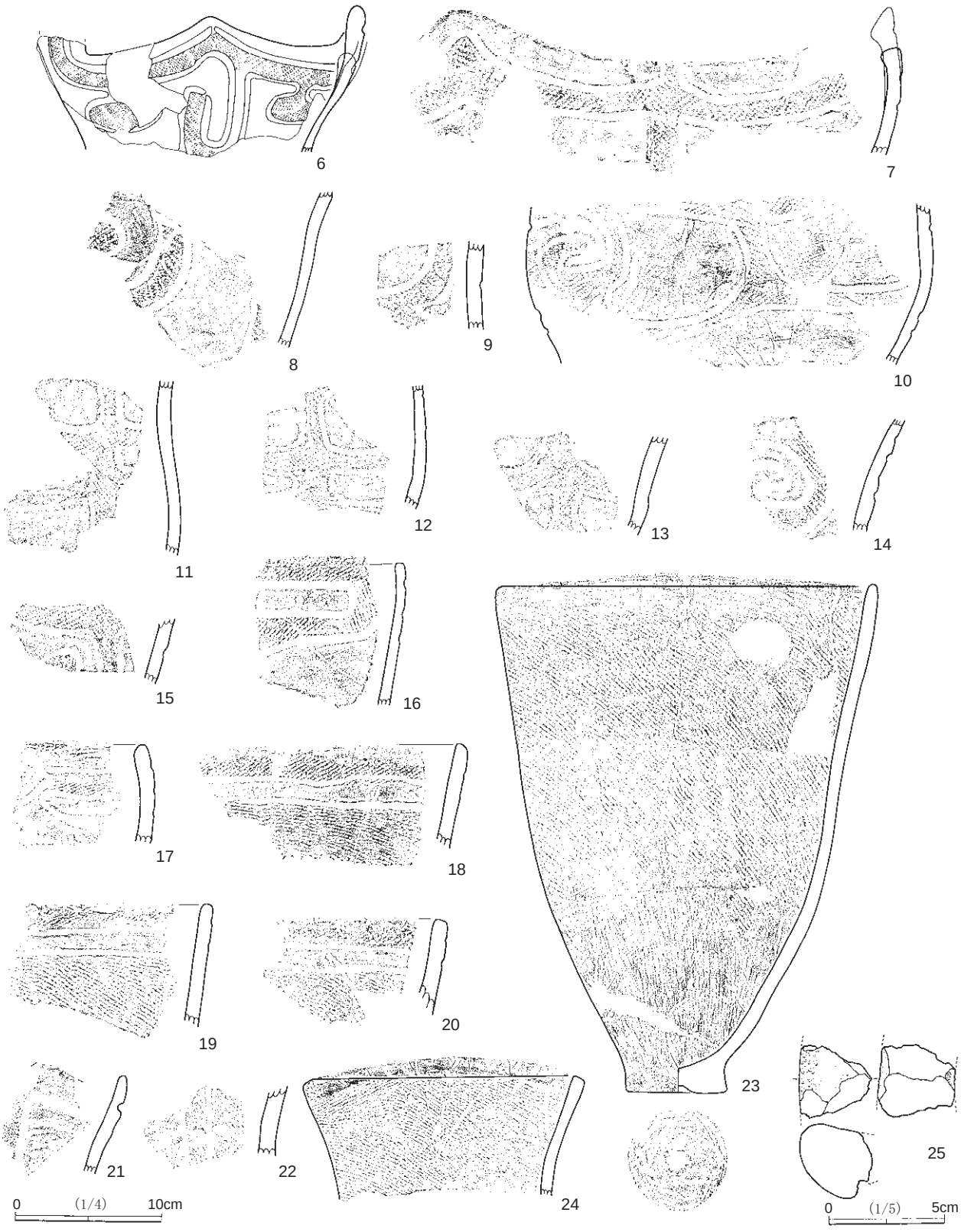
遺跡北西部、18Ｆ－31・32・41・42・51・52グリッドに位置する。柄鏡形の住居である。(33) SK049に南側を切られる。壁の掘り込みはやや不明瞭であることから、プランは破線で示した。長軸約７m、短軸約５m、張出部は、長さ約1.9m、幅約1.8mを測る。ピットは不規則に配列されるが、比較的深いもののうち、P3・P8・P18・P22は主柱穴の可能性がある。P10・P12は入口に関わるピットで、張り出し部のP11には土器１、入口に近いP13には土器10、同じくP15には土器23が埋設されていた。炉は中央に位置する。不整円形を呈し、径70㎝～75㎝、深さ14㎝を測る。覆土中には焼土が多量に含まれていた。

遺物は、上記のピット外では中央付近の覆土上層から中層を中心に土器・石器が出土した。埋甕をはじめとする出土土器に時間幅が有ることから本住居跡は長期間に渡って、あるいは断続的に使用されたと考えられる。４ａ期～５期と考えたい。

土器（第147・148図、図版56・81）



第147図 (33) SI019 (1)



第148図　(33) SI019 (2)

1は張り出し部のP11から出土した埋甕である。底部は完存するが、胴中段までは部分的にしか残っていない。割れ口は新しく、近年の撹乱により大部分が失われたと思われる。底径14㎝の大型土器で、胴

は膨らみを持つ。底面の縁辺は使用による擦れが顕著に残る。文様はU字状の微隆起線文が１単位のみ残り、縄文を全面に施す。２・３は底部縁が突出する特徴を持つ個体で、焼成は良好である。底部径はどちらも８㎝を測る。ともに胴下部は広い無文帯となり、胴中段に無節の縄文が残る。２の底部縁にはわずかな使用時の欠けがあるほか使用痕はほとんどない。４は小型土器の口縁部破片で、波状突起部に微隆起帯を半渦巻状に巻いた装飾が付く。５は微隆起線文が認められる。６は管状の主突起を含む口縁部の約1/4を欠く。口径20㎝を測る。主突起の対面は背の高い波状突起が付き、その中間には背の低い波状突起を配する。文様は突起下にＪ字文、その中間に寸詰まりのスペード状文を配する。７～９は同一個体で、全体にパネル文様が展開するが、８では渦巻に近いＪ字状文が見える。10～15は同一個体で、P13から出土した埋甕である。十字状文とＪ字文を重ねるパネル文様が展開するが、描線はやや雑で縄文帯であるべき個所が無文となっている所がある。16は枠状のパネル文様を施す。縄文は無節で、口縁端部にも付く。17と22は同一個体で、口縁部のパネル文様は不完全である。胴部には垂下する帯縄文が認められる。縄文は無節である。18～20も同一個体で、口縁下に２条の沈線による無文帯が巡る。縄文はやはり無節で、口縁直下は横位施文、無文帯下は縦位施文している。21は太く深い沈線で鍵の手状に帯状文を施す。縄文はきわめて細い無節の縄文である。23はP15から出土した埋甕である。胴腹部など部分的に欠損するが、ほぼ完形である。口径26㎝、器高35㎝、底径７㎝を測る。底部縁はわずかに突出するが、ほとんど屈曲のない器形である。焼成良好で、底面には使用による擦れがほとんど認められない。胴下部は広い無文帯となり、口縁直下にも狭い無文帯を置いている。全面に縦位回転の無節縄文を施す。24は口縁部の約1/3が遺存する。推定口径18㎝の小型土器で、焼成は良好である。無節の縄文を施す。炉周辺出土の６・７～９・P13の埋甕10～15は称名寺1式、P15の埋甕23も同時期の粗製土器、４は加曽利Ｅ4式新段階、16～22は同４式期の西日本系の土器、P11の埋甕１は胴が膨らむ加曽利Ｅ3-4式と思われる。

石器（第148図、図版117）

25は安山岩製の石皿片である。断面形は表面が平坦、裏面が凸面となっている。断片的であるため全体の形状は不明である。図示した以外では、安山岩製の磨石類１点、メノウの砕片１点、流紋岩の砕片１点が出土した。

(33) SI020（第149図）

遺跡北西部、18Ｆ－27・28・29・37・38・39グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できなかった。ピットは、炉を中心として、外側には壁柱穴と考えられる径23㎝～46㎝の大型もの、内側には径10㎝～14㎝の小型のものがそれぞれ円形に配列される。炉は径約70㎝の範囲に焼土が若干分布していた程度であった。

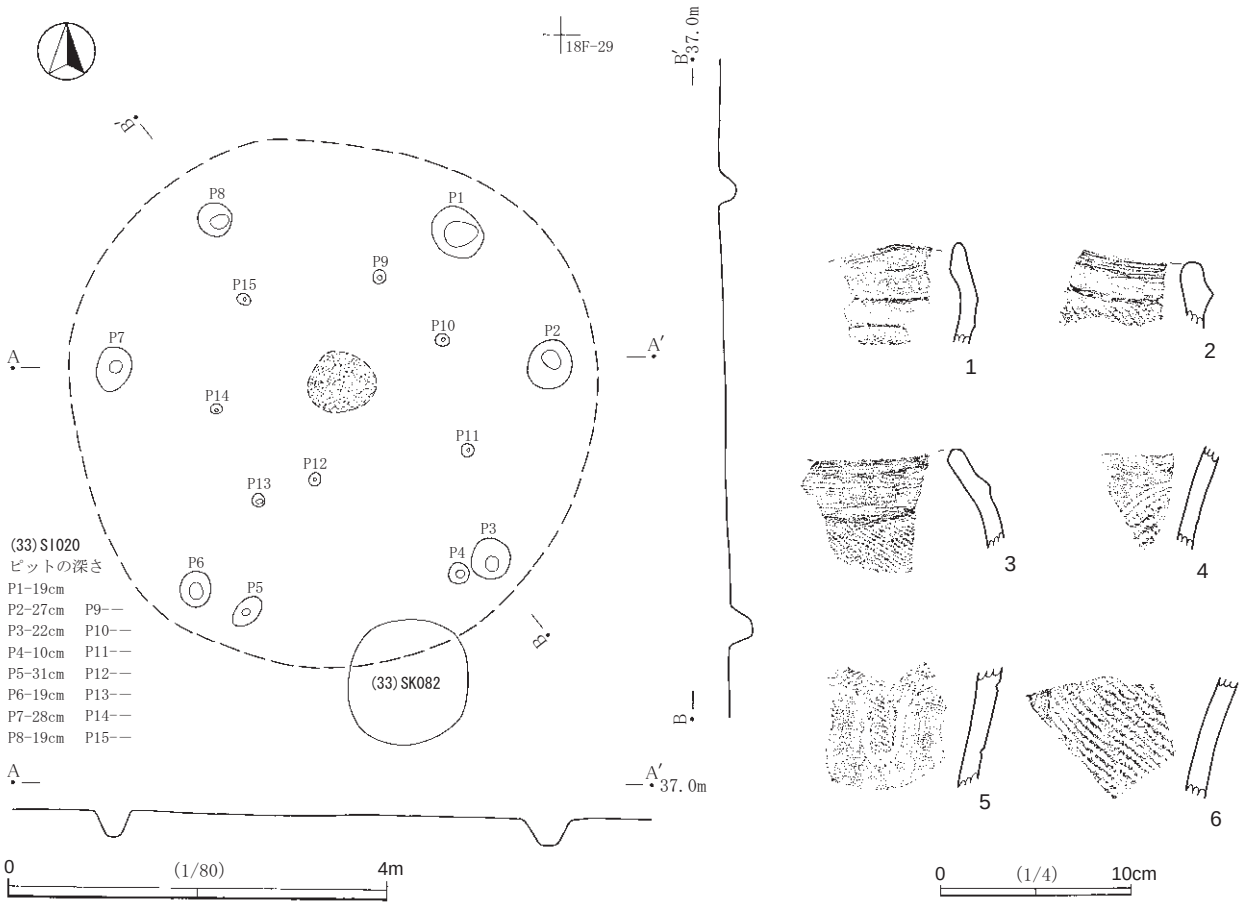
遺物は、少量の土器が出土した。全て一括で取り上げられているため、出土状況は不明である。所属時期は出土遺物が少なく、時期の絞り込みもできないが、４期としておく。

土器（第149図、図版81）

１は低い山形突起を持つ。口縁部無文帯下に微隆起帯が認められる。２・３は口縁直下に微隆起帯が巡る。４は逆U字状の、５は舌状の区画沈線内に縄文を充填する。６は拓影左端に微隆起帯が見える。いずれも加曽利Ｅ4式で、５は西日本系の土器であろう。

(33) SI075（第150図、図版21）

遺跡北西部、18Ｆ－18・19・28・29グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、壁は皿状に立ち上がる。



第149図　(33) SI020

長軸4.03m、短軸3.85m、深さ18cmを測る。ピットは円形に配列される。深さは６cm～43cmを測り、炉は不整楕円形を呈し、長軸71cm、短軸64cm、深さ12cmを測る。底面は火熱により硬化していたが、覆土中に含まれる焼土は少量であった。

遺物は、土器・石器が出土した。覆土下層の２層上面から出土したものが多い。７の石皿片は炉底東側から出土した。所属時期は土器６から４ａ期としておきたい。

土器（第150図、図版81）

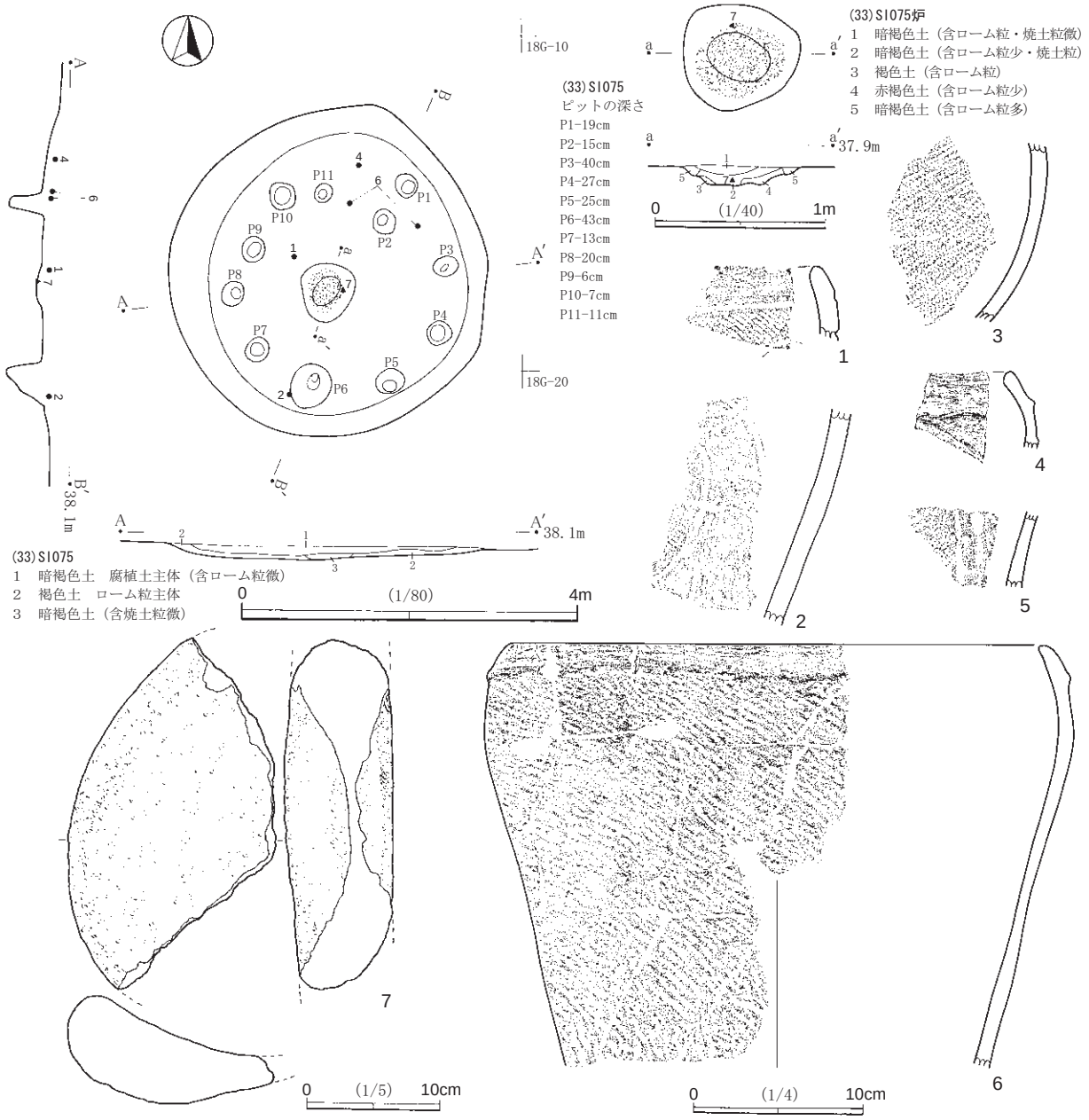
１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、その下に沈線による帯状区画文が認められる。２は同じく沈線による渦巻状の区画文が残る。４・５は微隆起線文、３は縄文のみである。６は口縁から胴上部にかけて約1/3が遺存する。推定口径32cm、現存高25cmを測る。ゆるいキャリパー型の器形をなす。口縁直下の無文帯を不明瞭な微隆起線で画し、以下粗い縄文を全面に施す。１・２・６は加曽利Ｅ3-4式であろう。

石器（第150図、図版117）

７は石皿片である。比較的大型の破片で、断面形は表裏とも凹面である。裏面には凹み痕が３孔みられる。石材は安山岩である。図示した以外では、安山岩製の石皿の断片１点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品１点、砂岩製の砥石１点、頁岩製の二次加工のある剥片１点が出土した。

(33) SI100（第151図、図版21）

遺跡北西部、18Ｈ－41・51グリッドに位置する。南東側を（33）SK101、東側を近世の溝状遺構（33）



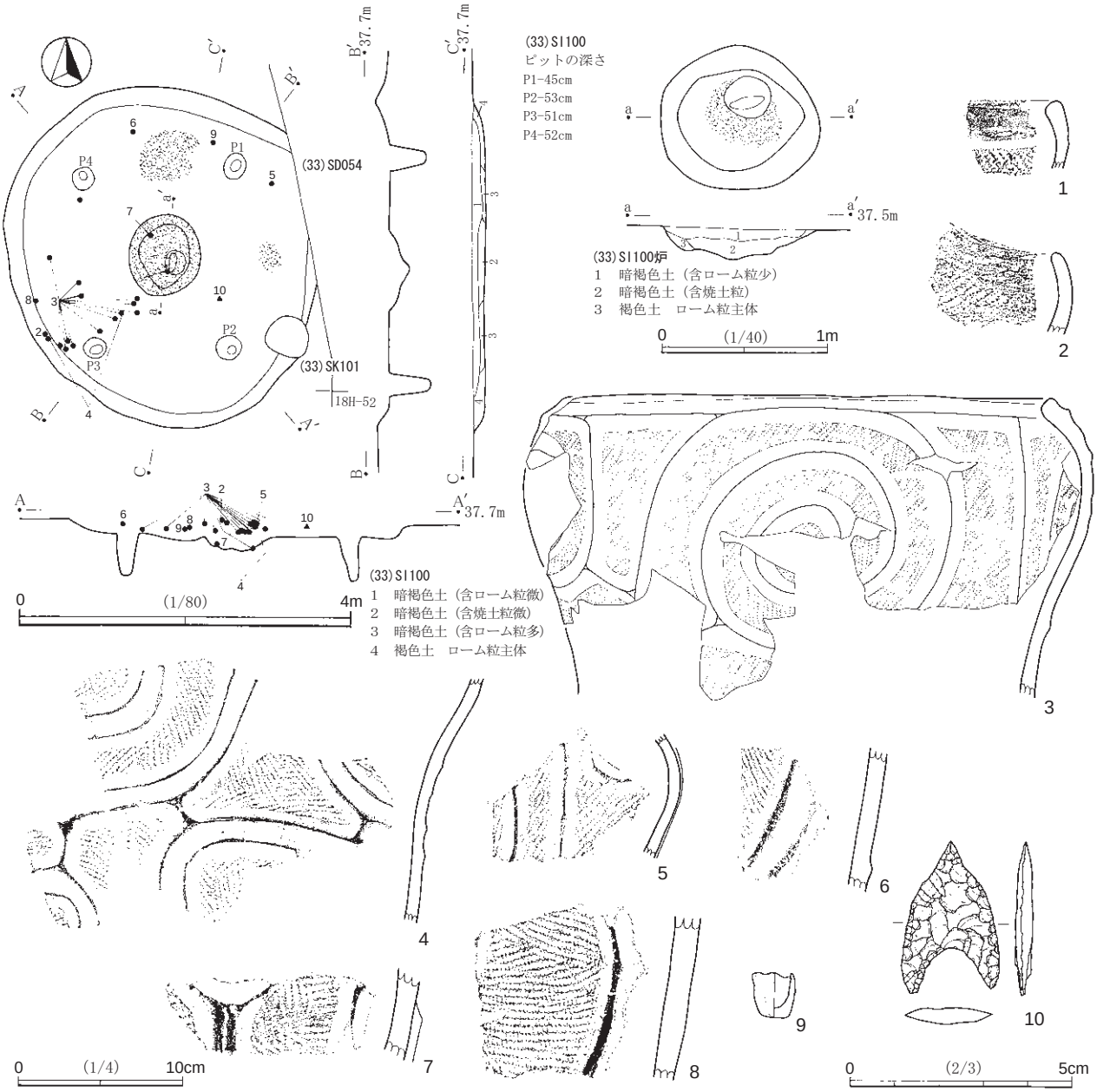
第150図　(33) SI075

SD054に切られていた。平面形は楕円形で、長軸4.23m、深さ16cmを測る。北側と西側に焼土の堆積がみられた。ピットは主柱穴が４か所検出された。深さ45cm～53cmを測る。炉は楕円形を呈し、長軸98cm、短軸88cm、深さ18cmを測る。底面は火熱により硬化していた。

遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第151図、図版56・82）

１は口縁直下の無文帯を中位の太さの沈線で画する。２は波状口縁で、口縁直下を磨り消して無文帯とするが、縄文との境は不明瞭である。３は口縁から胴上部にかけての約1/3と約1/4の大型破片などからなる。推定口径29cm、現存高18cmを測る。断面三角形の微隆起線１条で大振りの渦巻文様を施す、いわゆる梶山類である。渦巻文は口縁直下を巡る微隆起線と連結し、渦巻文同士は短隆線でつながっている。４



第151図 (33) SI100

は３と同類で、上下の大振りの渦巻文が部分的に残る。微隆起線は２条１単位で、渦巻文はやや角形となっている。５～８も同類の土器で、７・８は同一個体である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

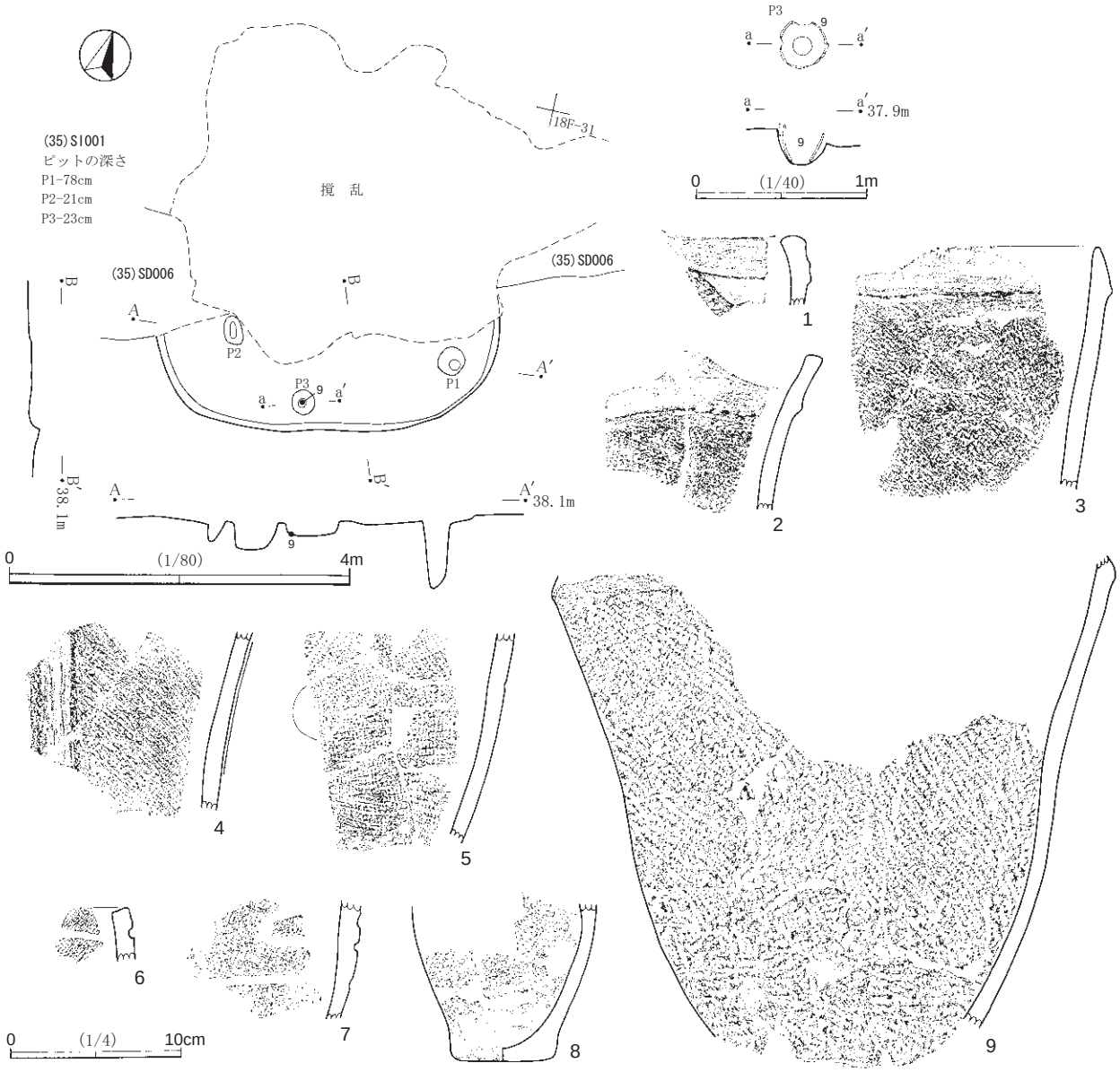
９はミニチュア土器である。指を差し込んでつまみ上げただけの手捏ねである。上面観は隅丸三角形で、高さ2.7㎝を測る。

石器（第151図、図版117）

10は凹基無茎鏃である。先端が錐のように細長く突出しており、いわゆる「先端突出形」の範疇に属する。二次加工が精緻で、石材も良質な信州系黒曜石を用いており優品といえる。

(35) SI001（第152図、図版21）

遺跡北西部、18Ｆ－30･40グリッドに位置する。北側は (35) SD006に切られ、大きく撹乱もされていた。



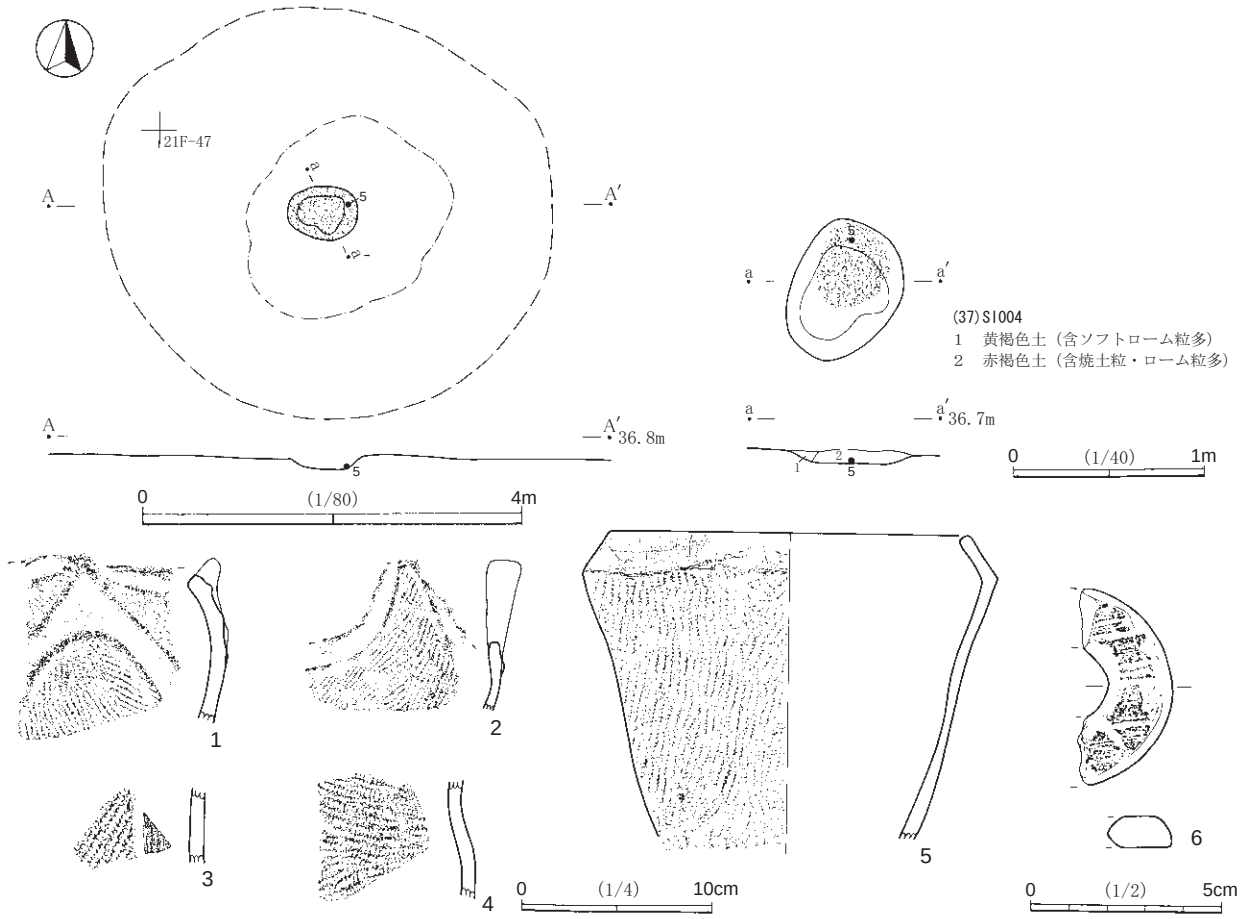
第152図　(35) SI001

南壁周辺の一部を検出したのみである。遺存部分は隅丸方形を呈し、東西方向の規模は4.06m、深さ11cmを測る。ピットは３か所検出された。P3は径28cm～30cm、深さ40cmを測り、底部を欠く９の深鉢がほぼ正位の状態で埋設されていた。

遺物は土器が出土した。９以外は覆土中より出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第152図、図版56・82）

１～４はいずれも微隆起線文の土器である。２・３は口縁直下にのみ微隆起線が巡る。５は胴下部の破片で、沈線で弧状と短い蕨手状の文様を施す。６・７は同一個体で、６の口縁断面は特徴的な角形である。胎土にすりつぶした土器片粒を多く含む。沈線は深く、太い。縄文は区画沈線内に納まっていない。８は２個所に細い沈線によるU字状区画文が残る。９は埋甕である。口縁直下から胴下部にかけて遺存し、胴上部以下はほぼ完存する。現存高29cmを測る。わずかに残る口縁部は内折し、不明瞭な微隆起線が巡る。



第153図　(37) SI004

胴の中段はわずかにくびれ、胴下部は丸みを持つ。縄文を全面に施すが、胴上部は縦位施文、胴下部は右下がり方向に回転施文している。９は加曽利Ｅ3-4式、他は同Ｅ4式で古段階と思われる。５～７は西日本系の土器である。

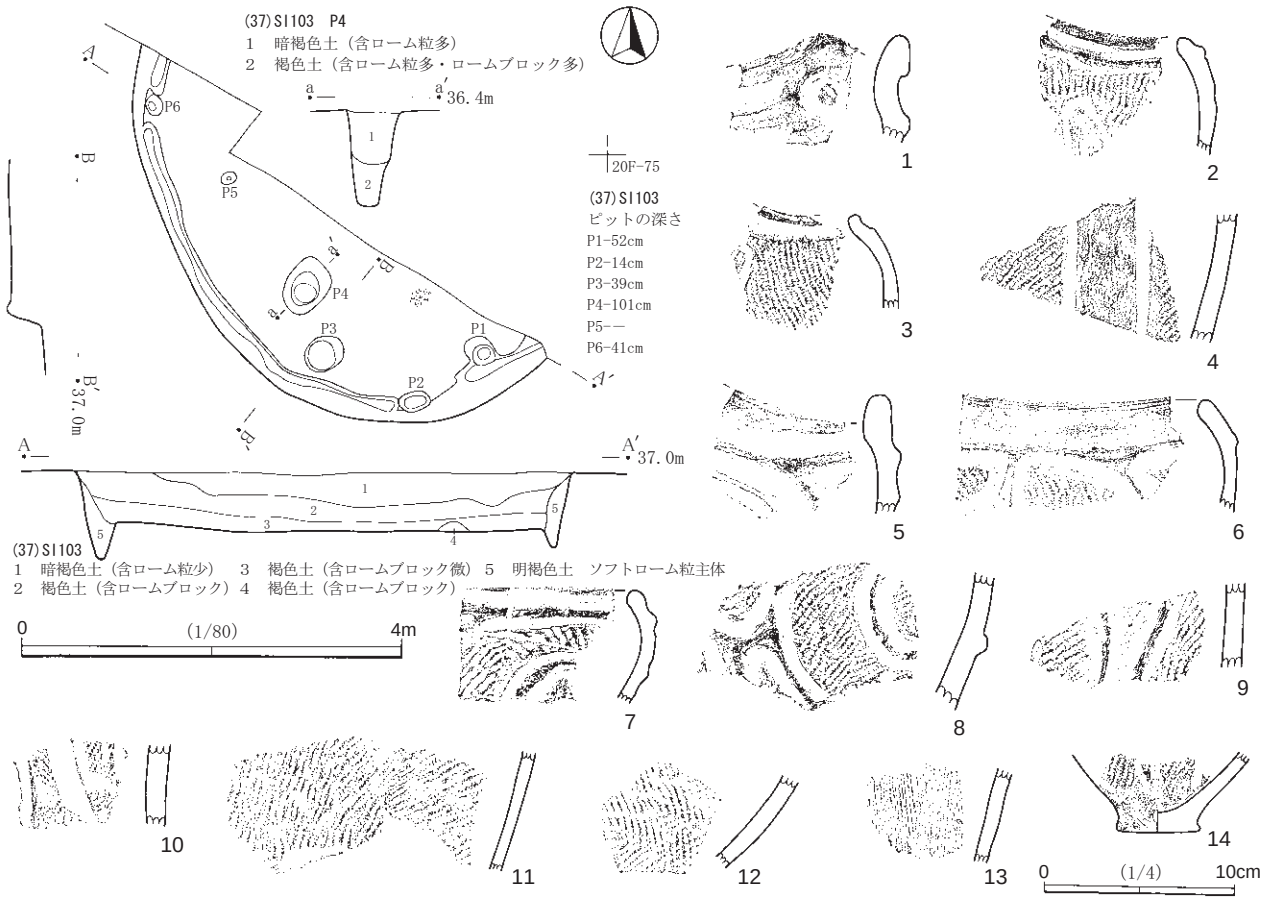
(37) SI004（第153図）

遺跡中央部やや西寄り、21Ｆ－36・33・36・47グリッドに位置する。壁の掘り込みは確認できず、炉とその周囲の硬化面が検出された。炉は長軸76㎝、短軸60㎝の不整楕円形で、深さは６㎝を測る。覆土中には微量の焼土が含まれている。

遺物は、５が炉内から出土したほかは覆土中から少量の土器・土製品が出土した。土器５から所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第153図、図版82）

１は口縁の小突起部分で口縁直下の無文帯を画する微隆起線とＵ字状区画文の微隆起線が集合している。２は舌状に突出した口縁突起で、口縁直下の微隆起線が突起頂部を巡る。３は磨消懸垂文である。５は口縁から胴下部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径19㎝、現存高16㎝を測る。口縁は内折し、胴部のくびれはきわめて弱い。内折した口縁はやや幅広の無文帯で、不明瞭な微隆起線が縄文帯との間に巡る。３は加曽利Ｅ3式、５は同3-4式、他は同4式でいずれも古段階であろう。



第154図 (37) SI103

土製品（第153図、図版113）

６は土製円板である。周縁の磨りは深く、孔は両面穿孔であるが、裏面からの穿孔は真円ではない。

(37) SI103（第154図、図版21）

遺跡中央部西寄り、20Ｆ－63・64・73・74グリッドに位置する。北東側2/3は調査範囲外に及んでいた。平面形は円形基調と推測される。最大長5.40m、壁高は約60㎝を測る。壁下には周溝が断続的に施されており、幅18㎝～30㎝、深さ10㎝～20㎝を測る。ピットは、P4は深さ1.01ｍを測り、主柱穴の可能性が高い。周溝間のP2・P6は壁柱穴の可能性が高い。

遺物は、１層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第154図、図版82）

１は山形の口縁突起下に渦巻文が退化した凹線が認められる。２は口縁直下の無文帯に太い沈線を引き、その下の段に沿って不明瞭な沈線を施す。３も口縁直下に指頭による凹線を引く。その下は２・３とも内側を無文とした逆Ｕ字状区画文が認められる。４は幅広の磨消懸垂文である。５～９は断面蒲鉾状の隆線で大振りの渦巻文様を施す、いわゆる梶山類であろう。６～８は単一の隆線、５・９は２条１単位の隆線で文様が展開する。10の隆線は断面三角形である。12は２種類の縄文をそれぞれ羽状に施す。13は櫛歯条線文である。14は小型土器の底部で、底部縁が突出している。縁辺は使用によりほぼ全体に欠けが認められる。断面蒲鉾状の隆線が垂下しており、５などと同様、いわゆる梶山類と思われる。いずれも加曽利Ｅ

3式で、大部分は新段階であろう。

石器

安山岩製の石皿の破片が１点出土した。

(37) SI104（第155図、図版21）

遺跡中央部西寄り、21Ｆ－03・04・13・14グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸4.60m、短軸4.18m、深さ29cm を測る。ピットは６か所検出され、主柱穴または支柱穴になると思われる。炉は不整楕円形を呈し、長軸68cm、短軸56cm、深さ23cm を測る。覆土上層に焼土を多く含んでいた。

遺物は、中央付近から多量の土器・土製品・石器が出土した。覆土上層の１層中から出土したものがほとんどである。出土土器に時期幅がかなりあり、所属時期は確定できない。

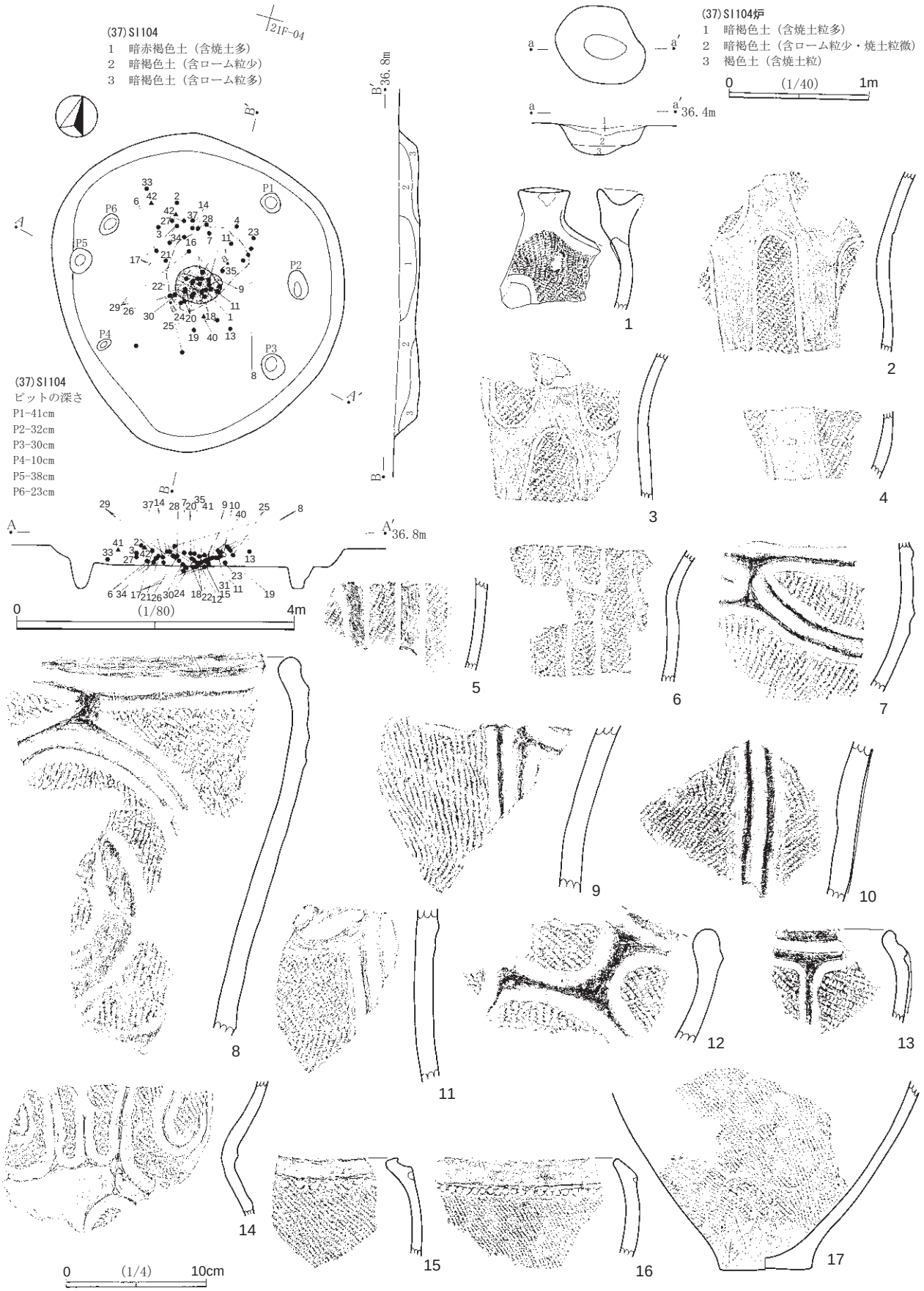
土器（第155・156図、図版56・57・83）

１は盃状の突起を持つ口縁部破片で、口縁直下には凹線が巡り、その下に太い沈線で内部無文の逆Ｕ字状区画文を施す。２・３は同一個体で、上半には内部縄文のＵ字状区画文、下半には同様の逆Ｕ字状区画文を施す。上下の区画文様は入れ子状になる。沈線は中位の太さである。４は内部無文の逆Ｕ字状区画文である。沈線は細めである。５は磨消懸垂文、６は縄文地にＵ字状区画文と逆Ｕ字状区画文が対向している。６の沈線は中位の太さである。７は胴部に低い隆線による大小の楕円文様が展開する。おそらく、両耳壺であろう。８～11は同一個体で、２条１単位の隆線で大振りの渦巻文が展開する、いわゆる梶山類である。12～14も同様の文様が展開するが、単隆線を用いている。15は口縁直下に指頭による凹線を、16は同じく段付きの無文帯を巡らせ、その下に丸棒状の工具による刺突列を施す。17は16と同一個体である。底径７cm、現存高13cm を測る。内面全体と外面の一部は二次的火熱により、あばた状に荒れている。18は内傾する口縁部破片で、口縁直下を浅く窪んだ幅広の無文帯とし、その下には指頭による幅広の浅い沈線を施して、間は微隆起線状になる。19も内弯する口縁部破片で、口縁直下の無文帯下に太く、浅い沈線が巡る。20・21は口縁直下が単なる無文帯のままである。20はその下の縄文は横位施文、以下縦位施文であるが、その境は厳密ではない。21の無文帯下は縦位施文の縄文で、以下は櫛歯条線文である。22は21とは別個体の同文様の土器である。

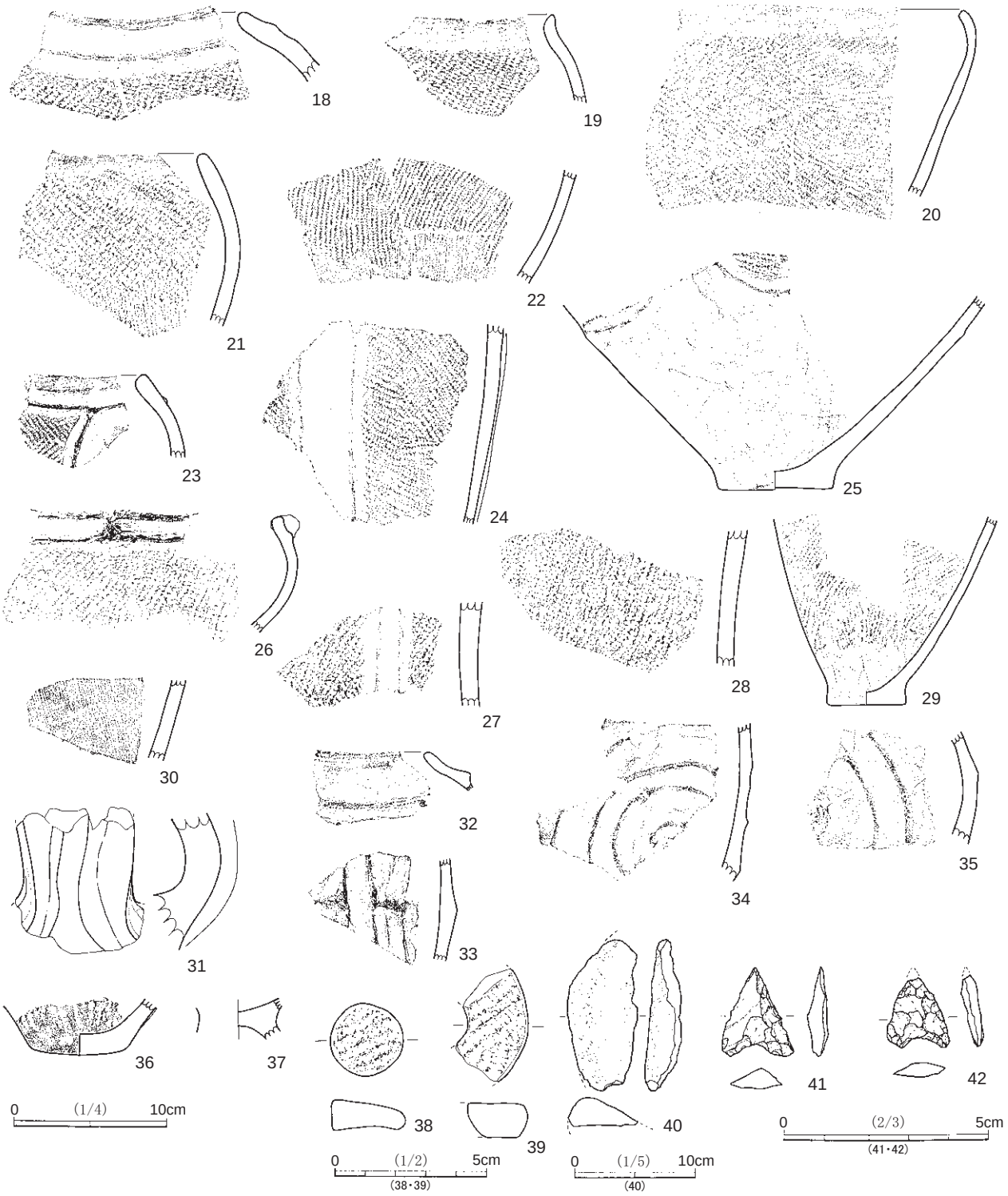
23～27は微隆起線文の土器である。24・25は同一個体で、25は底面が完存する。底径８cm、現存高12cm を測る。底面は使用による欠けがほとんどなく、一部に炭化物が付着する。24の内面にもほぼ全体に炭化物が付着する。26は微隆起線で画された口縁直下の無文帯の一部がつまみ状に盛り上がる。27と28は同一個体である。28は微隆起線が認められない。29は小型土器の胴下部から底部にかけて1/2程度が遺存する。底径５cm、現存高12cm を測る。底面は二次的火熱を受けて荒れている。30は櫛歯条線文の破片、31は橋状把手の破片で、厚さが2.2cm あり、きわめて大型の両耳壺に付いていたと思われる。32～35は同一個体で、無文地に大振りの渦巻文を施す。注口ないし壺形土器であろう。36は底面が丸みを持つ底部で、底部直上に微隆起線文が認められる。37は台付土器である。覆土一括資料に見えるが、加曽利Ｅ3式中段階から同4式古段階まで、時期幅がかなりあると思われる。６・７はＥ3式中段階、８～13は同新段階、１～４・15・16・18～21・23・26は3-4式、24・25は4式であろう。

土製品（第156図、図版113）

38・39は土製円板である。39は周縁の磨りが深く、孔は裏面からの片面穿孔である。38の周縁の磨りは39よりやや浅い。



第155図　(37) SI104 (1)



第156図　(37) SI104 (2)

石器（第156図、図版117）

40は安山岩製の石皿片である。41・42は凹基無茎鏃である。いずれもチャートを用材としている。41は完形品であるが、42は両脚が欠損し、先端部には欠損後再加工が施されている。図示した以外では、石英斑岩製の敲石１点、チャート製の剥片１点、黒曜石の砕片２点が出土した。

第２節　土坑等

土坑・小竪穴はフラスコ状土坑、円形でたらい状の断面を持つもの、楕円形で浅い皿状断面のもの、陥穴状のもの、柱穴に近い小型のピットなど多種の形態があるが、住居跡と同様地点ごとに本項で一括して記載した。また、時期的にまとまった遺物や明らかに伴うと考えられる遺物が出土した遺構についてのみ所属時期を記載することとし、出土遺物がないか、少量の土器片しか出土しなかった遺構については個別の遺物の型式のみ記載し、所属時期は明記していない。

(6) SK001（第157図、図版22）

遺跡北東部、14Q－74グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.23m、短軸1.11m、深さ35㎝を測る。覆土は上層に焼土粒を混入する。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第191図、図版83）

１は胴部破片で、縄文を充填した逆Ｕ字状区画文を施す。磨消帯の幅は狭い。上端に沈線による口縁部文様帯の縁取りの一部が見える。加曽利Ｅ3式古～中段階であろう。

(6) SK003（第157図、図版22）

遺跡北東部、14Q－76グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.35m、短軸1.12m、深さ30㎝を測る。遺物は、覆土中層から下層を中心に土器が出土した。

土器（第191図、図版83）

１は縦位施文の縄文のみ、２は磨消懸垂文が認められる。加曽利Ｅ3式であろう。

(6) SK006（第157図、図版22）

遺跡北東部、15Ｒ－00グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.66m、短軸1.49m、深さ59㎝を測る。西側壁面中位にはテラス状の段を有する。覆土は焼土粒を混入する。遺物は、覆土中層の２・３層を中心に土器が出土した。

土器（第191図、図版83）

１は赤彩された幅広の口縁部無文帯下に段を持つ。浅鉢と思われる。２は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(6) SK009（第157図、図版22）

遺跡北東部、14Ｒ－67グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸2.22m、短軸2.06m、深さ40㎝を測る。壁面際には２か所ピットがあり、いずれもしっかりした掘り込みである。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第191図、図版83）

１は口縁部破片で、端部を欠く。交互刺突文が認められる。加曽利Ｅ1式であろう。

(6) SK012（第157図、図版22）

遺跡北東部､15Ｒ－05グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸2.45m、短軸2.28m、深さ1.06mを測る。遺物は、土器・石器が出土した。所属時期は２期と考えられる。

土器（第191図、図版57・83）

５～８は底面上から出土した。１は口縁部文様帯の枠状区画の一部が見える。２は縦位施文の縄文地に沈線が３条認められる。３・４はいわゆる連弧文土器で、４は撚糸文を地文とし、３は連弧文間を磨り消している。５は底部直上から胴下部の1/2弱が遺存する。６・７は同一個体の浅鉢で、内側全面と外面の

口縁から文様施文部に赤彩の痕跡があり、外面の文様施文部以下には油煙状の物質が広く残る。文様は隆線による巻きのしっかりした渦巻文である。８は肥厚した口縁端部に弧状沈線が認められる。１・３・４は加曽利Ｅ3式で、３・４は古段階、６・７は同Ｅ2式であろう。

石器

黒曜石の剥片・石核が各１点が出土した。

(6) SK014（第157図、図版22）

遺跡北東部、14Ｒ－87グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.49m、短軸1.29m、深さ58㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第191図、図版83）

１は隆線による口縁部文様帯の枠状区画が認められる。加曽利Ｅ2式～3式であろう。

(6) SK015（第157図、図版22）

遺跡北東部、14Ｒ－99グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.49m、短軸80m、深さ17㎝を測る。底面にはピットが２か所ある。覆土には焼土を混入する。遺物は、土器が少量出土した。

土器（第191図、図版83）

１は口縁部文様帯の渦巻文と枠状区画が認められる。両者の境は鰭状に隆線が突出する。２は口縁部と胴部の両文様帯の境の破片で、胴部には磨消懸垂文を施す。1・２とも加曽利Ｅ3式で、1は古段階であろう。

(6) SK016（第157図、図版22）

遺跡北東部、15Ｒ－08グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸2.54m、短軸2.18m、深さ35㎝を測る。ピットは壁面際に２か所あり、いずれもしっかりとしたものである。遺物は、覆土下層の２層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第191図、図版57・83）

５は底面出土である。１は口縁部文様帯を枠状に区画する隆線に刻みが付く。３は外反する幅広の口縁部下に隆線による渦巻文と枠状文を施す。外反する口縁の内面及び外面の口縁から文様施文部に赤彩の痕跡が残る。４は磨消懸垂文である。５は底部から胴部にかけてほぼ完存する。底径10㎝、現存高18㎝を測る。ほぼ全体に二次的火熱を受け、底部縁のほとんどに欠けが認められる。複節縄文のみを施す。３は加曽利Ｅ2式新段階、４は同3式であろう。

石器

黒曜石の剥片が１点出土した。

(7) SK212（第157図、図版22）

遺跡北部、15Ｑ－26グリッドに位置する小竪穴である。北側は調査区外に及んでいる。平面形は不整円形で、規模は東西方向径2.85m、深さ13㎝を測る。ピットは10か所検出された。P1・P2は径60㎝～70㎝、他は径20㎝～34㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は、土器が少量出土した。

土器（第191図、図版83）

１は輪積痕が、２は磨消懸垂文が認められる。１は阿玉台式、２は加曽利Ｅ3式であろう。

(7) SK217（第157図、図版22）

遺跡北東部、15Ｒ－45グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸2.05m、短軸1.72m、深さ10㎝を測る。南東側に長さ80㎝、幅50㎝の溝状の張り出しを有し、付け根には深さ82㎝のピッ

トがある。遺物は、土器・石器が少量出土した。

土器（第191図、図版83）

１は無文の口縁部破片である。

石器（第256図、図版117）

１の局部磨製石斧は底面上から出土した。緑色凝灰岩の小型扁平礫の一端を研磨し、鋭利な刃部を作出している。図示した以外では、石英製の楔形石器が１点出土した。

(7) SK219（第158図、図版22）

遺跡北東部、15Ｒ－65グリッド付近に位置する。南西側は調査区外に及んでいた。平面形は楕円形、断面形はフラスコ状である。規模は開口部2.25m、底部2.70mを測る。壁面は北側がオーバーハングする。覆土はローム粒・ロームブロックを含み、南東側から流れ込んだような状況を示す。遺物は、中層の３層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第191・192図、図版57・83）

遺物は、覆土中層の３層を中心に多量の土器・石器が出土した。１は角押文を多用する。細い隆線による半渦巻文上にも角押文を付けている。２は直口口縁で、口縁下に巡る２条の隆線の一方にのみハの字形に刻みを付ける。３は浅鉢で、口縁部無文帯下を文様帯としている。交互刺突文と矢羽根状の押引文を施し、胴部との境の隆帯上にも矢羽根状の押引文を施す。胴部は粗い縄文である。４は口縁部文様帯に集合沈線を施す。文様帯の下部区画隆帯は３と同じく矢羽根状押引文が付き、拓影左端で眼鏡状突起となる。５は大型の浅鉢で、口縁から体部にかけて約1/2が遺存する。推定口径43㎝、現存高20㎝を測る。口縁部無文帯下に文様帯を配し、体部との境は鍔状に突出する。交互刺突文と刻みの付いた鍔状突出部の間の文様帯は刻みを伴う縦位分割沈線と連結した渦巻文、ｂ字状文、楕円文が順を違えて並んでいる。６は挿図作成後、(8) SI020-5と接合した。半球状に開く大型口縁部破片で、環状と思われる口縁突起を欠く。突起下から派生した隆線によるクランク文と口縁との間の空間には沈線文様が入る。クランク文には縄文がかかり、くびれ部は２条の沈線が巡る。７は左右非対称の立体的な突起を有する推定口径33㎝の大型破片である。突起は外面の上下及び左側に貫通する孔が、内面の中央に貫通する孔が１個開く。外面左側の孔は無文の円環で縁取り、上方の孔は沈線の縁取りと突起頂部と繋がる刻み付の隆線が付随する。下方の孔は背割れ隆帯の半渦巻文が絡む。口縁部文様はこの半渦巻文とクランク文で、空間部を集合沈線で充填しているが、突起脇では渦巻文となっている。８は口縁付近から底部までの大型破片である。現存高25㎝、推定底径11㎝を測る。口縁部には背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線を、胴部には３条１単位の沈線による懸垂文と蛇行沈線を施す。９・10は同一個体で、９は背の高い山形の口縁突起を、10は左右非対称の眼鏡状突起を持つ。口縁部文様帯には上下に二分するような背割れ隆帯と集合沈線が認められる。山形突起裾には小型の沈線渦巻が付く。

11～13は突起の破片である。11は中央に円孔が貫通する舌状の突起で、孔を沈線と矢羽根状押引文で縁取っている。12は左右非対称の立体的な突起で、左側面に２孔、右側面に１孔が貫通する。左上方の孔には隆線が半渦巻状に絡み、右側面の孔には沈線の縁取りの上に三叉文と刻み目が乗る。13は円環状の突起で、沈線と刻み目の縁取りが付く。14は隆線による弧状の区画文様が認められる。15・16は同一個体で、平行沈線で懸垂文と連結した渦巻文様を施す。この平行沈線は内皮を抉った半截竹管内側を使い、３回施文の４条を１単位とするものである。17・18は同一個体で、推定口径18㎝の小型土器である。大振りの

逆U状区画沈線と櫛歯条線による蛇行文様を施す。19は胴下部から底部が完存する。底径８㎝、現存高11㎝を測る。20・21は浅鉢である。20は口縁端部から内面全体に二次的火熱を受けてあばた状に荒れている。口縁部無文帯下に半渦巻文と連結した隆線による枠状文内に交互刺突文と一部が三叉状となる枠状沈線文を施す。文様内に赤彩が残る。21は無文で、口縁部裏側に段を持つ。１は七郎内Ⅱ群土器とされるものである。５は勝坂式末期、その他の大部分はいわゆる中峠式・加曽利Ｅ1式古段階である。６は阿玉台4式であるが、クランク状の隆帯及び沈線文様は加曽利Ｅ式に近い。15・16は大木８ａ式後半であろう。

石器（第256図、図版117）

２は石鏃未成品である。周辺加工により全体の形状は五角形に整えている。石材は神津島産黒曜石である。図示した以外では、石英の剥片１点、軽石１点が出土した。

(7) SK220（第158図、図版22）

遺跡北東部、15Ｒ－46グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸2.06m、短軸1.97m、底面で長軸2.89m、短軸2.56mを測る。深さ1.29mを測る。壁面は大きくオーバーハングする。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第193図・図版57・83・84）

１は浅鉢であろう。口縁部無文帯下に指頭による交互刺突文が巡り、その下に沈線による区画文と刻み目が残る。２は眼鏡状突起を持つ口縁部の大型破片である。推定口径27㎝を測る。口縁部文様帯と胴部文様帯を背割れ隆帯で画する。口縁部文様帯は貼付隆線で渦巻文や弧線文を施すが､一部は剥落している。胴部文様帯は３条１単位の懸垂文と蛇行沈線である。３は口縁部付近の破片で、背割れ隆帯と集合沈線が認められる。４は太く浅い沈線で懸垂文や蛇行文様、逆U字状文などを施す。上端に口縁部との区画沈線が残る。５は口縁部と胴部との区画沈線が、６は胴部文様である沈線渦巻文が認められる。７～９はそれぞれ個体の異なる縄文施文の土器である。10は底部から胴下部が完存する。底径９㎝を測る。底部縁には部分的に欠けが見られる。１は加曽利Ｅ1式古段階、２は同新段階であろう。４の複雑な文様や６の半渦巻文を持つ胴部破片は大木８ａ式の影響が指摘できよう。

(7) SK231（第158図、図版23）

遺跡北東部、15Ｒ－68グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.54m、短軸2.34m、底部で長軸2.55m、短軸2.26m、深さ1.13mを測る。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ｂ期と考えたい。

土器（第193図・図版57・84）

１は口縁直下に巡る隆線と隆線渦巻を３本の短隆線が連結している。３・４は同一個体で、無文の口縁部に波状の隆帯が付く。４には隆帯下に沈線による懸垂文が見える。５は口縁部無文帯下に指頭圧痕が乗る隆線が巡る。６は浅鉢底部が完存する。底部縁は使用による擦れが顕著である。１は大木８ａ式後半の影響がうかがえる。３～５は加曽利Ｅ1式に伴う粗製土器と思われる。

(7) SK234（第158図、図版23）

遺跡北東部、16Ｓ－05グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.91m、短軸2.10m、底部で長軸3.04m、短軸2.65m、深さ1.10mを測る。覆土はローム粒･ロームブロック・炭化物を含む。遺物は、上・中層の１～６層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１

ａ期と考えたい。

土器（第193図・図版84）

１・２・４は口縁部文様帯に背割れ隆帯による波状文様を施す。１・４は集合沈線を空間部に充填し、１には左上端の口縁直下の隆線下に連続の爪形文を、４には背割れ隆帯の上縁に沿って矢羽根状押引文を施す。３は直口する器形で、口縁部を区画する２条の沈線とフック状の沈線文様を施す。５は口縁部に沈線による大振りな文様を施すようである。口縁直下の縄文は横位施文で、以下は縦位施文となる。６は胴部区画沈線と磨消されない懸垂文が認められる。７は小型の土器で円孔を持つ口縁突起を欠く。狭い口縁部文様帯には隆線による枠状文様を施す。８はバケツ状の器形をなし、ゆるい波状口縁を持つ。口縁部の広い無文帯を沈線で画する。９は２尖の口縁突起となるようである。口縁下のくびれ部に２条の沈線に挟まれた波状沈線を施す。10・11は胴下部の破片で、10は３条１単位の沈線による懸垂文と蛇行沈線文を、11は沈線による凵形文様を施す。12・13は縄文のみ、14は櫛歯条線文のみを施す。１・２・４・７は加曽利Ｅ1式古段階であろう。３・９は勝坂式の影響が認められ、５は阿玉台４式と思われる。

石器

黒曜石の二次加工のある剥片・砕片が各２点出土した。

(7) SK235（第158図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－90グリッド付近に位置する。南西側は調査区外に及んでおり、全体の約1/3を検出できたにすぎない。断面形は袋状である。検出範囲での規模は開口部で径1.64m、底部で径1.88m、深さ94㎝を測る。覆土は全体にローム粒・ロームブロックを含み、中層の７層は焼土・炭化物を含んでいる。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第194図・図版84）

１は背割れ隆帯による半渦巻文を施す。２は口縁部無文帯下に間隔の開いた交互刺突文と弧線文を施す。３は２条の平行する隆線が認められ、４は櫛歯条線文である。１～３は加曽利Ｅ1式であろう。

(7) SK236（第158図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－96グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.55m、短軸2.35m、底面で長軸2.50m、短軸2.30m、深さ87㎝を測る。ピットは３か所検出された。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、底面付近及び中層の５層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第194図・図版84）

１は口縁から底部直上までの1/4弱の破片と口縁から胴上部にかけての1/2弱の破片からなる。推定口径23㎝、現存高34㎝を測る。内弯する口縁部に２条の指頭圧痕の付いた隆帯を配する。口縁部の縄文は横位、胴部の縄文は縦位施文である。２は(7) SI219の８と同一個体である。３は折り返した隆帯に沈線が沿う。４は浅鉢の波状突起片で、内面に段を持つ。内面には赤彩が残る。１は加曽利Ｅ1式古段階に伴うものであろう。

(7) SK238（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－50グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.38m、短軸2.58m、底部で長軸2.53m、短軸2.46m、深さ1.05mを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、底面付近及び中層の５層を中心に多くの土器・石器が出土した。所属時期は

１ａ期と考えておきたい。

土器（第194・195図・図版57・58・84・85）

１・２は刻み目の付いた隆線文様と条線が認められる。３は断面三角形の隆線上にも縄文がかかる。４は耳状の大型突起を持つ口縁部破片である。突起の中心にある孔は盲孔である。キャリパー型に大きく張った口縁部には刻み目付きの隆帯を環状に配し、中に太い沈線を充填する。右側の環状隆帯は特に発達し、その右端は突出している。さらに隆帯の裾部にはペン先状の押引文を伴う。５は小型土器で、耳状の突起が付き、口縁直下に稚拙な交互刺突文を施す。６は環状突起で、８は舌状の突起に沈線渦巻などを施す。７は左右の枠状隆線が接触して盛り上がっており、裾に短沈線を施す。右側の枠状隆線は背割れになるらしい。９は口縁の1/3と胴部から底部にかけての2/3を欠く。口径24㎝、器高31㎝を測る。大型の眼鏡状突起を持ち、対向個所にも欠損した小型の突起が付く。口縁に肥厚した無文帯を置き、以下は全面縄文のみである。10は口縁部から胴上部の約1/3が遺存する。推定口径19㎝を測り、樽形の器形をなす。左右非対称の大型眼鏡状突起が口縁に乗る。左側の孔は沈線で縁取りされ、その一部は三叉文の名残を留める。突起左側の口縁端部にも沈線文様が付くが、これも玉抱三叉文の名残を留めている。なお、突起内面にも孔を中心に押引文を施す。文様は胴部上半に展開する。口縁下には交互刺突文が巡り、胴下部との境には隆線が巡る。両者によって区切られた幅広の文様帯は、縄文のかかる隆線でさらに縦区画し、その中を弧状沈線と集合沈線で充填している。11は交互刺突文下で背割れ隆帯が剝落している。12は口縁部文様帯に波状隆線が、13は頸部に波状沈線が認められる。14は樽形の器形をなし、口縁下の背割れ隆帯が突出している。その下には細い半截竹管による３本１単位の平行沈線文様を施すが、上端文様は同じ半截竹管による有節線文である。15も14と同様の平行沈線文様である。

16～19は浅鉢である。いずれも口縁下の内傾個所を文様帯としている。16は断面角型の工具による沈線と連続刺突文を施す。17は交互刺突文下に沈線による渦巻文と三叉文を施す。18は底部から口縁部下までの1/2強が遺存する。底径11㎝、現存高15㎝、最大外径42㎝を測る。底部縁には使用による擦れが認められ、体部の一部には二次的火熱の痕が残る。文様は深い沈線による渦巻文などである。19は口縁部の小片であるが、口縁端部から口縁部の赤彩は鮮やかで、朱の可能性がある。20は胴上部がほぼ全周する。口径24㎝、現存高31㎝を測る。内面がほぼ全体に荒れている。口縁下に幅広の無文帯を設け、以下の縄文との境に段を設ける。さらに、縄文のかかった隆帯が、対向する位置に口縁端部から胴上部まで垂下する。21は口縁から胴下部まで欠損部が多いがほぼ復元できた。推定口径20㎝、現存高21㎝を測る。21と同様口縁部に広い無文帯を置き、以下の櫛歯条線文との境に段を設ける。22・23は底部である。22は底面の縁に網代痕がわずかに残る。また、全面に使用による擦れが残る。23は底部から胴部にかけて約2/3が遺存する。底径10㎝、現存高18㎝を測る。底面の一部は二次的火熱を受け、縁辺は幅広く使用による擦れが認められる。１・２・４は勝坂式、３は阿玉台３～４式、５はいわゆる中峠式に相当しよう。10は口縁部が勝坂式、胴部は阿玉台Ⅳ式の文様であろう。11・12は加曽利Ｅ1式で、11は古段階であろう。14・15は大木８ａ式後半、16～18の浅鉢も加曽利Ｅ1式に伴うものであろう。

石器（第256図、図版117）

３は石鏃未成品である。楔形石器を素材として周辺部に粗雑な加工が施されている。石材は神津島産黒曜石である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品３点・二次加工のある剝片１点・剝片30点が出土した。

(7) SK239（第159図、図版23）

遺跡北東部､15Ｒ－49グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状で、側面は南側に偏ってオーバーハングする。規模は、開口部で長軸2.20m、短軸2.10m、底部で長軸2.20m、短軸2.05m、深さ91㎝を測る。ピットは５か所検出された。南端のP5は深さ80㎝を測る。覆土はローム粒・大粒のロームブロックを含む層を主体とする。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期と考えておきたい。

土器（第195図、図版58・85）

１は顎状に張り出す口縁部に眼鏡状突起が付く。口縁部文様帯は沈線で縁取りされ、集合沈線を充填する。(7) SK240-１･(7) SK242-４と同一個体である。２は舌状の突起破片で、刻みの付いた隆帯が垂下し、突起の縁辺には縄文を施す。４は疎らな撚糸文を地文として、貼付隆帯が付く。５は口縁が内折する。広い口縁部無文帯下に交互刺突文が巡り、その下には縄文地に三叉の沈刻文が認められる。７は底部で、底径7㎝を測る。底面は縁辺に使用時の擦れが残るが顕著ではない。１・３・５は勝坂式末であろう。

(7) SK240（第159図、図版23）

遺跡北東部､15Ｒ－49グリッドに位置する。平面形は楕円形､断面形はたらい状である。規模は長軸1.50m､短軸1.34m､深さ60㎝を測る。中央付近に深さ35㎝のピットを有する。覆土はローム粒･ロームブロックを多く含む。遺物は、土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えておきたい。

土器（第195図、図版85）

１は扇状の口縁突起を欠く口縁部の大型破片である。口縁突起から垂下した背の高い隆線は顎状に張り出す隆帯に連絡して三角形の口縁部文様帯を形成する。口縁部文様帯の最も狭くなった個所には眼鏡状突起が付く。同一個体の（7）SK239-１・(7) SK242-４の破片はこの部分である。三角形区画内は沈線で縁取りし、集合沈線を充填する。なお、(7) SK240-１の眼鏡状突起の右側には刻みが付き、その左側の口縁部文様の顎状隆帯側には沈線の縁取りがない。器形は阿玉台式末であるが、このような左右非対称文様はいわゆる中峠式の特徴であり、加曽利Ｅ式的な集合沈線の充填文様と合わせて、この土器が複雑な構成で成り立っていることがわかる。

土製品（第254図、図版113）

第254図１は土器片錘である。周縁は磨りで整形されている。

石器

黒曜石製の石錐が１点出土した。

(7) SK242（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－40グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。底面は壁面から中央付近に向かってゆるやかに傾斜する。規模は開口部で長軸2.50m、短軸2.39m、底部で長軸2.40m、短軸2.15m、深さ79㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多量に含む。遺物は主に上層の１層中から出土した。出土状況は不明である。土器９を重視して、本土坑は１ｂ期と考えたい。

土器（第195・196図、図版85）

１は（7）SK240-１に近い突起破片である。突起頂部から垂下した隆帯の左右の文様は非対称の交互刺突文と沈線文様である。２は狭い口縁部文様帯の片側のみに刻みを付けた背割れ隆帯による横Ｓ字状文が展開するものと思われる。３は小型の舌状突起上に隆線による半渦巻文を施す。その下には橋状突起が付

き、狭い口縁部文様帯は沈線の縁取りと粗雑な集合沈線を施す。５は大型の交互刺突文と口縁部文様の集合沈線が認められる。６は胴下部の破片で、隆線による方形区画内に集合沈線を充填する。文様帯の下部区画は背割れ隆帯である。７・８は同一個体である。口縁部文様帯に貼付隆線によるクランク状の文様を施し、頸部には半截竹管内側による平行沈線を施す。９は３条１単位を基本とする平行沈線で半渦巻文や蛇行沈線などの文様を施す。上端の４条残る平行沈線は胴部文様帯の区画沈線である。10･11は浅鉢である。10は波状突起を持ち、口縁部内側に低い段を持つ。口縁端部から口縁部にかけて赤彩が残り、体部下半にはタール状の物質が付着する。大部分はいわゆる中峠式を含む加曽利Ｅ1式古段階であろう。６は勝坂式の影響が認められる。９は大木８ａ式であろう。拓影右下には渦巻文が屈折してから垂下しており、８ｂ式とも思えるが剣先文がない。８ｂ式直前と考えたい。したがって、９は他より時期が下ることになろう。

石器

黒曜石の剥片が３点出土した。

(7) SK243（第159図）

遺跡北東部、15Ｓ－48グリッドに位置する。平面形は円形である。断面形はおおむねたらい状であるが、壁面の一部がオーバーハングしており、元は袋状であったと考えられる。規模は長軸1.50m、短軸1.48m、深さ87㎝を測る。遺物は、覆土上層の３層を中心に土器が出土した。時期は１ａ期と考えられる。

土器（第196図、図版85）

１は貫通孔を持つ口縁突起を欠く胴下部までの大型破片である。胴部で約1/3が遺存する。推定口径15㎝、現存高18㎝を測る。口縁部文様帯を隆線で枠状に区画し、枠内には交互刺突文や沈線文様を施す。枠間にも沈線を施し、下部区画隆線上には指頭圧痕が付く。胴部には粗い櫛歯条線文を施す。２は環状の口縁突起片である。３の隆帯は口縁部文様帯の下部区画隆帯と思われ、指頭圧痕が付く。地文に粗い縄文が認められる。５は口縁部の隆線による枠状区画内に沈線と地文の撚糸文が認められる。７は蛇行する櫛歯条線文を施す胴下部の破片である。１はいわゆる中峠式の一類型であろう。

石器

軽石が１点出土した。

(7) SK244（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－86グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.85m、短軸1.63m、底部で長軸2.00m、短軸1.85m、深さ1.02mを測る。壁面は北西側がオーバーハングする。遺物は、覆土中層の３層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第196図、図版58・85）

１・２の土器は倒れた状態で出土した。１は底部の1/2弱及び口縁の一部を欠くほかは完形で、ひびもわずかである。口径17㎝、器高25㎝を測る。口縁部の橋状突起は３単位で、これと連結する隆帯で囲まれた口縁部文様帯内には集合沈線を施す。下部隆帯は背割れで、その下には雑な交互刺突文が巡る。胴部の縄文は多方向である。２は大小の口縁突起２個と胴下部を欠く。上面観がく字状に折れる主突起と２尖の従突起が各１個残るが、同様の突起が対向して配置されたと思われる。口径25㎝、現存高27㎝を測る。胴下部に勝坂式特有の段を持つ。口縁部文様帯を上下に沈線を伴う隆帯で胴部と区画し、口縁下には細かい交互刺突文が巡る。口縁部文様帯は主突起から垂下した隆帯が弧状ないしは波状に展開して上下に二分され、上半は２条の沈線による枠状文を描いた上で集合沈線で埋めている。下半の枠状沈線は不明瞭で、

集合沈線は主突起下で綾杉状や半渦巻状となる。３は背割れ隆帯が口縁部文様帯に認められる。１・２はいわゆる中峠式であろう。

(7) SK251（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－76グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.65m、短軸2.43m、底部で長軸2.63m、短軸2.47m、深さ82㎝を測る。北側の底面に深さ56㎝のピットが１か所ある。遺物は、覆土中層を中心に土器が少量出土した。

土器（第197図、図版85）

１の底面には使用による欠けや擦れがほとんどない。加曽利Ｅ式前半であろう。

(7) SK252（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－85グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸2.30m、短軸1.98m、深さ48㎝を測る。壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。底面は凹凸がある。ピットは北西壁面際に２か所ある。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第197図、図版85）

１は半截竹管による重弧線文を施す。加曽利Ｅ3式前半に伴う曽利式土器である。

石器

黒曜石の剝片が１点出土した。

(7) SK253（第160図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－86グリッド付近に位置する。平面形は不整長楕円形で、規模は長軸2.22m、短軸1.43m、深さ41㎝を測る。ピットは２か所ある。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第197図、図版85）

１は幅の狭い磨消懸垂文が認められる。縄文は複節縄文である。

(7) SK255（第160図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－67グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸2.00m、短軸1.92m、深さ57㎝を測る。断面形はたらい状である。北側にピットが１か所ある。遺物は、土器・石器が覆土中層を中心に出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第196図、図版58・85）

１は貫通孔のある山形突起を伴う大型口縁部破片で、２の眼鏡状突起片は同一個体と思われる。山形突起には貫通孔を取り巻く半渦巻文を配し、口縁部文様帯には背割れ隆帯によるクランク文を施す。３は隆線が細く低い。４は４条１単位の磨り消されない懸垂文を施し、５は撚糸文のみを施す。６は底面に使用による欠けや擦れはほとんどなく、胴下部欠損部に著しい二次的火熱痕が認められる。１は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器

黒曜石の剝片・砕片が各１点出土した。

(7) SK259（第159図、図版23）

遺跡北東部、15Ｓ－73グリッド付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.52m、短軸99㎝、深さ30㎝を測る。底面は凹凸がある。遺物は土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第197図、図版58）

１の胴部下半を欠く深鉢は北西側の底面上から出土した。口縁部から胴上部にかけて部分的に欠損がある。推定口径36㎝、現存高25㎝を測る。内面は二次的火熱による荒れが顕著である。平縁で、幅広の無文帯下に口縁部文様帯を配する。背割れ隆帯による半渦巻文がおそらく５単位で展開する。交互刺突文は半渦巻文の頂部周辺で途切れている。胴部の３条１単位の懸垂文と蛇行沈線も５単位と思われる。加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(7) SK260（第159図）

遺跡北東部､15Ｓ－82グリッド付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.05m、深さ23㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器・土製品が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第197図、図版58）

１の大型の深鉢は南側覆土上層から破片が散らばった状態で出土した。口縁から胴上部にかけての1/2強及び胴下部の一部が遺存する。内面にも１孔がある眼鏡状突起を対向して一対配し、その下には口縁部文様帯を上下に渡す橋状突起が付く。口縁部文様帯の下部区画隆帯は背割れ隆帯であるが、背割れが部分的に途切れて盛り上がっている。口縁部文様帯内の集合沈線は太く粗い施文である。いわゆる中峠式の近縁の土器であろう。

土製品（第254図、図版113）

円板が３点出土した（２～４）。いずれも有孔の欠損品で、周縁の磨りは深い。孔は３点とも両面穿孔であるが、４は裏面からの穿孔が強い。

(7) SK261（第159図、図版24）

遺跡北東部､15Ｓ－83グリッド付近に位置する。平面形は楕円形､断面形は皿状である。規模は長軸1.65m、短軸1.05m、深さ23㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第198図、図版58・85）

１は外面に４孔が認められる立体突起片で、おそらく２と同一個体であろう。２は口縁部から胴下部にかけての大型破片で､口縁部は1/3程度が遺存する｡口縁部文様帯の半渦巻文は単一隆帯によるものである。３も１・２と同一個体である。加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(7) SK263（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｒ－72グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.69m、短軸1.65m、深さ43㎝を測る。南西側の壁面際に深さ48㎝のピットが斜めに掘り込まれている。覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。遺物は、土器・石器が少量出土した。所属時期は１期と考えられる。

土器（第198図、図版58）

１の深鉢は北西側の底面上より出土した。胴下部から底部にかけて完存する。底径7㎝、現存高12㎝を測る｡底面は二次的火熱を受けるが軽微である｡横に連絡した懸垂文様を４単位施す｡大木８ａ式であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品が１点出土した。

(7) SK265（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－62グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸94㎝、短軸86㎝、深さ

37㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。　遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第198図、図版85）

１は口縁部下部区画隆帯及び胴部の蛇行沈線と横走沈線が認められる。大木８ａ式古段階の文様であろう。

(7) SK266（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－51グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸2.43m、短軸2.18m、深さ54㎝を測る。底面には２か所ピットがある。西側の壁際に部分的に浅い溝がみられる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第198図、図版85）

１は垂下する断面蒲鉾状の隆線上に縄文がかかる。

(7) SK267（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－52グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は長軸2.10m、短軸2.00m、深さ80㎝を測る。覆土はほぼ全層にローム粒・ロームブロック、中層の２層は焼土粒・炭化物をわずかに含む。遺物は２層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第198図、図版59・86）

１は口縁から胴上部にかけて約2/3が遺存する。口径22㎝、現存高15㎝を測る。口縁突起は貫通孔を持つ舌状で４単位中１単位のみが残る。口縁下には巻きの異なるフック状の隆帯を各１単位配し、その間を直線の隆帯が連結する。隆帯上と口縁突起の貫通孔のまわりには幅広の角押文を施す。２は肥厚した口縁から派生した隆線がχ字状となる。その下の刻み付きの隆線にはペン先状の押引文が沿う。３は口縁から胴下部までの約1/4が遺存する。推定口径21㎝、現存高23㎝を測る。内面のほぼ全体と外面右下端に二次的火熱による荒れが認められる。口縁直下の無文帯下に不揃いの交互刺突文が巡り、以下櫛歯条線文となる。４・５は突起の破片で、４は左右非対称の眼鏡状突起、５は逆ハート形の隆線文様が突起に付く。７は交互刺突文と縦位集合沈線帯の下に背割れ隆帯による文様帯区画と半渦巻文を施す。８は内面全体が二次的火熱によって脆くなっており、外側の底面まで及んでいる。１は大木８ａ式、２は勝坂式末期、７はいわゆる中峠式、３は同時期の半租製土器であろう。

(7) SK268（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－51グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、断面形は円筒状である。規模は長軸2.64m、短軸2.54m、深さ90㎝を測る。開口部には確認面からの深さ28㎝～80㎝のピットが７か所取り付いている。底面は北東側にピットがある。覆土は全層にロームブロックを含む。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第198図、図版86）

１は背割れ隆帯が付く口縁部付近の破片で、２は幅の狭い磨消懸垂文の破片である。１は加曽利Ｅ1式、２は同3式古段階であろう。

(7) SK270（第160図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－11グリッド付近に位置する。平面形は溝状の不整長楕円形で、規模は長軸2.74m、短軸1.10m、深さ53㎝を測る。底面は西側に段を有する。覆土はローム粒を含む黒褐色土である。遺物は、西側の覆土上層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は２期と考えられる。

土器（第198図、図版59・86）

１は口縁部文様帯の渦巻文と枠状区画文の一部が残る。２・３は浅鉢である。器形はほとんど同様で、２は推定口径32㎝、３は同じく44㎝である。２は口縁部、３は全面に赤彩の痕跡が残る。１～３は加曽利Ｅ2式であろう。

石器（第256図、図版117）

４は定角式磨製石斧である。平面形は撥形を呈する。ほぼ完形であるが刃部に部分的な損傷がみられる。石材は緑色凝灰岩である。

(7) SK271（第161図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－21グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.55m、短軸2.25m、底部で長軸2.02m、短軸1.92m、深さ90㎝を測る。覆土は全層にローム粒・ロームブロックを含み、上層の１・２層には炭化物を少し含む。遺物は、全層にわたって多くの土器・石器が出土した。所属時期は主体となる土器から１ａ期と考えられる。

土器（第199・200図、図版59・86）

１は口縁部から胴部の一部と胴下部を欠く。口径25㎝、現存高16㎝を測る。対向する上向きの環状突起から口縁部文様帯のクランク文に向かって斜めの橋状突起が付く。環状突起には二重の沈線と２列の刻み目が巡る。口縁部文様帯の上端には交互刺突文が巡り、背割れ隆帯によるクランク文は４単位で短隆線によって互いに連結している。２は大型突起を持つ口縁部が約1/3遺存する。推定口径31㎝を測る。大型突起は内面が眼鏡状、外面が単孔で上部に向かって尖っており、突起の下には橋状突起が連続している。外面の孔は沈線と刻み目で縁取りされ、橋状突起も刻み目が付く。口縁部文様帯は背割れ隆帯によるクランク文を配し、集合沈線を充填する。地文の縄文がわずかに残る。３は上下に２孔が並ぶ大型突起を持つ。口縁部の1/2弱が遺存し、推定口径31㎝を測る。大型突起は２孔を沈線で８字状に縁取り、両側面に集合沈線と左裾に渦巻文を施す。突起下は破損しているが、２と同様橋状突起となり、幅広で背の高い口縁部文様帯の下部区画隆帯につながると思われる。口縁は強く顎状に張り出し、その下のくびれ部には集合沈線を施す。胴部には２条１単位の蛇行沈線を施す。４は舌状突起を持つ口縁部破片である。突起部には内部に縦位沈線を施した隆線による円文を配し、その内面は円形に窪ませている。５～７は背割れ隆帯による半渦巻文などを施す。８は胴下部の破片で２条の蛇行沈線を施す。９・10は同一個体で、小波状と平行沈線による頸部文様と懸垂文の胴部文様が残る。11は小型土器で口縁から胴下部にかけての1/3が欠損する。口径14㎝、器高16㎝、底径７㎝を測る。底面縁辺は使用による擦れと二次的火熱による荒れが顕著である。口縁に波状突起が１個付き、その対面の小型突起には隆線による楕円文が付く。両突起の間の口縁部には隆線による小型の半渦巻文を配する。12は交互刺突文下に蛇行沈線と懸垂文を施す。13は口縁から胴下部にかけて約1/3が遺存する小型土器である。推定口径12㎝を測る。口縁部は軽く段が付き、無文帯となる。14は口縁部から底部にかけて1/2程度が遺存する。推定口径18㎝、器高32㎝を測る。口縁端部は厚く張り出し、以下単純な深鉢形となる。縄文と櫛歯条線文を施すが両者の境は一定ではない。15～18は縄文のみの胴部及び底部である。15は底部から胴下部の大部分を欠くが、底面には網代痕が認められる。18は底径10㎝を測る。底面に使用による欠けや擦れはほとんどない。19は内折した口縁の浅鉢、20は浅鉢の底部から体下部の破片である。21は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。１はいわゆる中峠式、３は中峠式の近縁の土器、２・４・７・12は加曽利Ｅ1式古段階、９・10は大木８ａ式、21は加曽利Ｅ4式で

あろう。

石器（第256図、図版117）

５は黒曜石製の凹基無茎鏃である。６は軽石製の磨石類である。表面がやや突出しており、裏面は平坦である。

(7) SK272（第161図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－31グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸2.21m、短軸1.97m、深さ50㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、南東側の覆土上層から土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１期と考えられる。

土器（第200図、図版59・86）

１は口縁部文様帯を背割れ隆帯で区画している。２は口縁部文様帯の沈線区画内が撚糸文である。３・４は同一個体で、背割れ隆帯下の胴部に沈線文様が認められる。５は胴上部の約1/3が遺存し、底部から胴下部は完存する。底径８㎝、現存高18㎝を測る。底面縁辺に使用による擦れがわずかに残る。粗い撚糸文を全面に施す。１・３・４は加曽利Ｅ1式であろう。

土製品（第254図、図版113）

土器片錘は５の１点が出土した。周縁は軽く研磨され、文様に背割れ隆帯が認められる。

石器（第256図、図版117）

７は凹基無茎鏃である。石材には信州系黒曜石が用いられている。図示した以外では、黒曜石の剥片が１点出土した。

(7) SK277（第161図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－63グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。開口部で長軸2.46m、短軸2.18m、底部で長軸2.28m、短軸1.98m、深さ1.04mを測る。覆土はローム粒･ロームブロックを含む黒褐色土･暗褐色土が主体である。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器・土製品が出土した。

土器（第200図、図版86）

１は突起を欠く口縁部破片である。口縁下に交互刺突文と背割れ隆帯による半渦巻文が認められる。一部の沈線内に赤彩の痕跡が残る。２の頸部波状沈線は半截竹管内側によるものである。３は沈線文様を施した胴部破片である。４は口縁直下に幅広の半截竹管内側による押引文を施す。１は加曽利Ｅ1式古段階、２・３もＥ1式であろう。

土製品（第254図・図版113）

土器片錘は６の１点が出土した。小型で、周縁は軽く研磨される。無文であるが、胎土から伴出土器と同時期と思われる。

(7) SK278（第161図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－58グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.50m、短軸2.30m、深さ85㎝を測る。底部で長軸2.05m、短軸2.10m、深さ85㎝を測る。南西側の壁面近くには深さ80㎝のピットが１か所ある。覆土はローム粒･ロームブロックを含む暗褐色土･黒褐色土が主体である。遺物は、主に中層から上層にかけて土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第201図、図版59・86）

１は南側壁面際から倒れた状態で出土した。ごく一部を欠くほか完存する。口径23㎝、器高34㎝、底径11㎝を測る。胴上部は軽く膨らむ胴長の器形となる。底部縁辺の▲印の位置に刻みを付けている。また、底部縁辺は使用による擦れが認められ、内面には部分的に二次的火熱によるあばた状の荒れが残る。口縁部から胴下部まで薄く炭化物の付着が認められる。文様は口縁に３単位の小型突起が付き、その内の１個には孔が開く。口縁直下の肥厚帯に２条の沈線と刻みを施し、この肥厚帯が突起部をフック状に巻き込んでいる。刻みは省略された部分がある。肥厚帯下には３条１単位の沈線でU字状文と短い懸垂文を各１単位のみ施す。２・３・５は口縁突起の破片である。２は舌状の突起部に刻みの付いた隆線渦巻を配している。３は眼鏡状突起で突起部には沈線を短刻している。口縁部文様は交互刺突文と集合沈線である。５は大型の眼鏡状突起で、上方には楕円形の孔が、内面には円孔が開く。孔は沈線及び刻み目で縁取りされる。突起両脇から背割れ隆帯が派生すると思われる。４は狭い口縁部文様帯を背割れ隆帯で画している。６は背割れ隆帯に刻みが付き、上半の無文部には垂下する沈線が見える。７は（8）SK023の２と同一個体である。薄手、小型の土器で縄文地に横位の沈線文様を施す。口縁端部にも縄文が付く。９は貼付隆線による半渦巻文と波状文を施す。11は両面に二次的火熱を受け、脆い。口縁端部と直下に沈線を施す。12は大型深鉢土器の底部である。底面縁辺に使用による擦れが残る。13は浅鉢で口縁部の約1/3が遺存する。推定口径35㎝を測る。沈線による方形文様を縦位沈線で区切っている。２・３・５は勝坂式の影響が残る加曽利Ｅ1式古段階、１・４・８も同段階、６・７は勝坂式と思われる。

土製品（第254図、図版113）

土器片錘は７～９の３点が出土した。いずれも完存品で、７・８の周縁は軽く研磨され、９の周縁はよく研磨されている。伴出土器と同時期のものであろう。

石器（第256図、図版117）

８は石錐である。凹基無茎鏃の欠損品を再加工している。石材は信州系黒曜石である。図示した以外では、黒曜石の剝片が３点出土した。

(7) SK279（第161図、図版24）

遺跡北東部、15Ｓ－57グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.04m、短軸1.69m、底部で長軸1.80m、短軸1.70m、深さ81㎝を測る。覆土は、ほぼ全層にローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、土器・石器が出土した。

土器（第201図・図版86）

５は底面上から出土した。１は肥厚した口縁部に凹線による半渦巻文を施す。２は中心に孔が開く山形突起である。５は浅鉢で、沈線の末端が三叉状の沈刻となる。いずれも加曽利Ｅ1式であろう。

石器

石英斑岩製の打製石斧１点、安山岩製の磨石類１点が出土した。

(7) SK283（第161図、図版24・25）

遺跡北東部、15Ｓ－55グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.08m、短軸1.96m、底部で長軸2.25m、短軸2.20m、深さ89㎝を測る。南西壁面際に深さ41㎝のピットが斜めに掘り込まれている。覆土はほぼ全層にローム粒・ロームブロックを含み、焼土・炭化物もわずかに含む。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器・土製品が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第202図・図版60・86）

１は中央付近から倒れた状態で出土した。主突起２個を欠くほかは割れがあるものの完形である。口径27㎝、器高30㎝、底径８㎝を測る。底部は使用による擦れや欠けはないが、胴下部及び底部内面は二次的火熱を受け、特に底部内面は強く受けて脆くなっている。また、胴下部内面は黒みを帯び、胴部表面も煤が付着している。文様は対向する波状の主突起と山形の従突起を配し、主突起から垂れた隆線が従突起へつながって幅の狭い口縁部文様帯を形成する。文様帯内には集合沈線、波状沈線、半渦巻文を施す。口縁直下の肥厚帯には縄文が付く。２は口縁から底部直上までのもので、胴下部はほぼ全周し、胴上部以上は1/3程度が遺存する。推定口径16㎝、現存高19㎝を測る。口縁直下を無文帯とし、浅い不明瞭な沈線で胴部と画する。３・４は同一個体で、蛇行文などの沈線文様を施す。６は胴部の1/2弱が遺存する。下半部内面は二次的火熱を強く受け、脆くなっている。胴上部に沈線文様が認められる。７は底部から口縁付近にかけての浅鉢大型破片である。底径10㎝、現存高17㎝を測る。底面は完存し、縁辺に使用による擦れが残る。１はいわゆる中峠式の一種で、他も同時期と思われる。

土製品（第254図・図版113）

土器片錘が1点出土した。10は大型の完存品で、周縁は軽く研磨される。文様に結節縄文が認められ、伴出土器と同時期と思われる。

(7) SK287（第161図、図版25）

遺跡北東部､15Ｓ－36グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.54m、短軸1.49m、深さ46㎝を測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第202図、図版86）

１は口縁突起を欠く。背割れ隆帯と集合沈線の口縁部文様である。２は全体に二次的火熱を強く受けている。口縁下に小振りの交互刺突文と頸部に区画沈線を施す。いずれも加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品１点・剥片１点が出土した。

(7) SK290（第161図、図版25）

遺跡北東部、15Ｓ－23グリッド付近に位置する。平面形は円形で、規模は径2.10m、深さ64㎝を測る。北側壁面際に深さ19㎝のピットが斜めに掘り込まれている。覆土ほぼ全層にローム粒・ロームブロックを含み、焼土・炭化物もわずかに含む。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は土器２から１ｂ期と考えられる。

土器（第202・203図、図版60・87）

１は眼鏡状突起を持つ口縁部破片である。眼鏡状突起を形成する隆帯は横走して口縁との間に狭い文様帯を形成する。隆帯上には２条の沈線が乗り、脇には刻みが付く。その下には背割れ隆帯区画を挟んで集合沈線が２段認められる。２は口縁部の3/4強が遺存する。口径27㎝、現存高20㎝を測る。耳形を左右に合わせたような突起が単独で付く。耳を縁取る隆線は口縁端部と口縁部文様帯のクランク文とつながっている。クランク文は２本隆線で３単位遺存しており、残り１単位は枠状文になるらしい。胴部は２本１単位の沈線による懸垂文と蛇行沈線がそれぞれ４単位配されるようである。３は突起を欠く口縁部破片で、突起下に刻みの付いた隆線と口縁部文様帯の交互刺突文及び集合沈線が残る。４はχ字状に貼り付けた眼鏡状突起である。５は背割れ隆帯による口縁部枠状文が見える。８は口縁から底部直上まで約1/3が遺存

する。推定口径18㎝、現存高24㎝を測る。内面上半が荒れ、脆くなっている。軽いキャリパー型の器形で全面に縄文を施し、細い２条の沈線による懸垂文を口縁から離して施す。１・３は加曽利Ｅ1式古段階、２は同新段階、８は加曽利Ｅ式前半であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品が１点出土した。

(8) SK001（第162図、図版25）

遺跡西部､16Ｐ－87グリッドに位置する。２基の土坑が重複する。西側をＡ、東側をＢと呼称した。(8) SK001Aが (8) SK001Bを切っている。(8) SK001Aは、平面形は不整円形で、規模は長軸1.03m、短軸1.00m､深さ41㎝を測る。覆土は焼土を少し混入する。(8) SK001Bは､規模は最大径1.08m､深さ35㎝を測る。遺物は、(8) SK001Aは覆土上層の１層を中心に土器が出土した。

土器（第203図、図版87）

１は太い沈線による逆Ｕ字状文内に縄文を充填する。２は磨消懸垂文、３は櫛歯条線文である。加曽利Ｅ3式古～中段階と思われる。

(8) SH006（第162図、図版25）

遺跡西部、17Ｑ－32グリッドに位置するピットである。規模は長軸36㎝、短軸35㎝、深さ44㎝を測る。遺物は、土器が少量と土製円板の破損品が１点出土した。出土状況は不明である。

土製品（第254図、図版113）

11は円板で、周縁の磨りはやや浅い。孔は両面からほぼ均等に穿孔されている。

(8) SK007（第162図、図版25）

遺跡西部、17Ｑ－14グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.22m、短軸1.15m、深さ48㎝を測る。遺物は、土器・土製品・石器が出土した。

土器（第203図、図版87）

１は磨消懸垂文、２は口縁部文様帯の区画沈線が残る。加曽利Ｅ3式古～中段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

12は円板の破損品である。周縁の磨りは深く、孔は両面穿孔であるが表面からの穿孔が強い。

石器

チャート製の石鏃未成品１点、ガラス質黒色安山岩製の剥片２点・砕片４点、メノウ製の剥片２点、黒曜石製の砕片２点が出土した。

(8) SK009（第162図、図版25）

遺跡西部、17Ｑ－05グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.04m、短軸94㎝、深さ27㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第203図、図版87）

１は小型注口土器の注口部である。内外面に赤彩が残る。２は底部直上の破片で、縄文のみが残る。

(8) SK011（第162図、図版25）

遺跡西部、16Ｑ－63グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸1.72m、短軸1.54m、深さ43㎝を測る。覆土は、全層に焼土粒・炭化粒を含む。遺物は、覆土下層から底面上を中心に土器・石器が出土した。

土器（第203図、図版87）

１は口縁部文様帯の隆線による楕円区画内に刺突文が認められる。２・３は磨消懸垂文、４は断面三角形の微隆起線で大振りの渦巻文を施す。５は口縁部無文帯に浅い凹点が並ぶ。６は蛇行する櫛歯条線文である。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品１点・石核１点・剥片５点が出土した。

(8) SK012（第162図、図版25）

遺跡西部、16Ｑ－72グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸87㎝、短軸71㎝、深さ95㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含み、締まりを欠くため人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第203図、図版87）

１は磨消懸垂文で、加曽利Ｅ3式である。

(8) SK013（第162図、図版25）

遺跡西部、16Ｑ－85グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.18m、短軸93㎝、深さ15㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第203図、図版87）

１は太めの沈線による逆Ｕ字状文内に縄文を充填する。２・３は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式中段階であろう。

(8) SK017（第162図、図版25）

遺跡西部、16Ｒ－26グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.50m、短軸1.20m、底面で径1.55m、深さ52㎝、を測る。遺物は、覆土上・中層の１・２層を中心として土器が出土した。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第203図、図版87）

１は縦位区画隆帯が背割れで、縄文も施している。(8) SK022の１と同一個体である。２は段の付く胴下部破片で、間にペン先状の押引文を挟んだ２条の縦位区画隆線を２単位配し、その間を短沈線で埋めている。３・４は眼鏡状ないしは環状突起片である。５は縦横２方向の波状沈線を施す。６・７は縄文のみのもので、７は内折した口縁端部にも付く。５を除き、勝坂式末期であろう。

(8) SK019（第162図、図版25）

遺跡西部、15Ｒ－96グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.49m、短軸1.30m、深さ46㎝を測る。遺物は、覆土上層の１層を中心として土器が少量出土した。

土器（第203図、図版87）

１は口縁部の枠状隆帯に沿って２条に沈線を施す。隆帯には縄文が付く。２は太めの浅い沈線文様である。１は阿玉台４式、２は加曽利Ｅ1式であろう。

(8) SK021（第162図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－76グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は、長軸1.78m、短軸1.62m、深さは52㎝を測る。遺物は、覆土上層の１層を中心として土器が出土した。

土器（第203図、図版87）

１は口縁突起を欠く。狭い口縁部文様帯に隆線によるクランク文を施す。加曽利Ｅ1式であろう。

(8) SK022（第162図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－94グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.48m、短軸2.26m、底面で長軸2.68m、短軸2.46m、深さは82㎝を測る。遺物は、覆土中・下層を中心として土器・石器が出土した。時期は土器11を重視して２ａ期と考えたい。

土器（第203・204図、図版87）

１は（8）SK017の１と同一個体で、口縁部無文帯下を背割れ隆帯によって縦位に区画し、沈線文様を施す。２は広い口縁部無文帯を交互刺突文で画し、以下に２条１単位の沈線を縦位と斜位に施す。３は環状突起の破片で、突起下にはさらに眼鏡状突起が付く。４は突出した狭い口縁部文様帯に左右で異なる文様を施す。５は波状突起下に小型の半渦巻文が付く。６は隆線上にも縄文が付く。７は背割れ隆帯と集合沈線が残る口縁部付近の破片である。８は口縁に段付きの無文帯を、９も幅広の無文帯を配し、胴部には粗い縄文地に沈線文様を施す。10は山形突起下に眼鏡状突起が付く。眼鏡状突起には左右で向きの異なる半渦巻文が絡み、山形突起上縁にも半渦巻文が絡む。これらの半渦巻文は背割れ隆帯というより口縁部隆線文様と同様の２条の貼付隆線と理解したい。11は貼付隆線によるクランク文の先端に半渦巻文と剣先文が付く。12は口縁部文様帯に背割れ隆帯による十字状の区画文が認められる。13は口縁部に大型の半渦巻文、14は同じく大型のクランク文を施す。13の口縁部には炭化物が付着する。１は勝坂式、４はいわゆる中峠式、５・７は加曽利Ｅ1式古段階、10は同新段階、11～13は同Ｅ2式古段階であろう。

石器

黒曜石の剝片が１点出土した。

(8) SK023（第163図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－98グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.00m、短軸1.67m、底面で長軸1.92m、短軸1.87m、深さは65㎝を測る。覆土は上層に焼土粒・炭化粒を混入する。所属時期は１ａ期と考えられる。遺物は、土器・石器が出土した。出土状況は覆土上・中層と床面付近に垂直分布が分かれる。４・５・14・19は底面上から出土した。中層出土の18の浅鉢は（8）SI020出土の破片と接合した。

土器（第204図、図版60・87・88）

１は舌状の突起片で、多重沈線を施す。２は（7）SK278の７と同一個体である。３は交互刺突文、４は枠状の隆線を施す。５は左右非対称の眼鏡状突起を持つ大型破片である。突起から派生した隆帯は口縁部文様帯を２帯に分けている。６～８は口縁部文様帯部分の破片で、背割れ隆帯や交互刺突文、集合沈線を施す。11は（8）SI020の14と同一個体である。12・13も同一個体で、半截竹管内側による平行沈線を施す。16・17は底部で、使用による縁辺の擦れ等は顕著ではない。17の底面には網代痕が残り、▲印個所に浅い刻みが付く。18は小型の浅鉢で、口縁から体部にかけて2/3が遺存する。口径19㎝、現存高９㎝を測る。無文で、口縁部に横渡しの橋状突起が付く。19も同様の突起である。20は浅鉢で、口縁部内側に段が付く。５～８はいわゆる中峠式ないしは加曽利Ｅ1式古段階、12・13は大木８ａ式であろう。

石器（第256図・図版117）

９は定角式磨製石斧の基部破片である。石材は砂岩であろう。図示した以外では、砂岩製の磨石類が１点出土した。

(8) SK024（第162図、図版26）

遺跡西部、16Ｒ－08グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.57m、短軸1.46m、底面で長軸1.92m、短軸1.87m、深さは65㎝を測る。覆土は下層の４層はローム粒主体である。遺物は、覆土上・中層の１～３層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は土器１を重視して、１ａ期と考えたい。

土器（第205図、図版60・88）

１は口縁から胴下部の約1/3を欠く。推定口径33㎝、器高42㎝、底径11㎝を測る。器面は表裏面及び底面とも二次的火熱で荒れている。使用による破損で廃棄されたのであろう。口縁部文様帯は交互刺突文下を無文帯として沈線で区切るのみである。頸部に２条の沈線を施す。２は部分的に刻みの付いた隆帯を口縁部に枠状に配し、その中に交互刺突文や平行沈線を施す。３は口縁部無文帯下に粗い平行沈線を施す。８は背割れ隆帯による口縁部文様帯の下部区画と拓影右端に懸垂文が認められる。４・５は沈線文様の胴部破片で、同一個体である。６・７はともに口縁部文様帯の部分破片で、６は口縁部文様帯下部区画帯の一部途切れた背割れ隆帯と集合沈線、７は貼付隆線による波状文が認められる。１・２はいわゆる中峠式、４～８は加曽利Ｅ1式であろう。

石器

安山岩製の磨石類が１点出土した。

(8) SK025（第163図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－87グリッドに位置する。平面形は卵円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.45m、短軸1.20m、底面で長軸1.40m、短軸1.23m、深さは45㎝を測る。覆土は、下層は炭化物を混入する。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第205図、図版88）

１・２は沈線や隆線による口縁部区画と集合沈線が認められる。３は縄文のみである。加曽利Ｅ1式であろう。

(8) SK026（第163図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－87グリッド付近に位置する。南東側を（8）SK027と接する。平面形は不整円形、断面形は三角フラスコ状である。規模は、開口部で長軸1.31m、短軸1.24m、深さ1.30mを測る。覆土は、ローム主体である。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・土製品が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第205図、図版88）

１は正面に開いた大きい円孔に眼鏡状突起が組み合わされ、さらに上方にも円孔が開く立体的な突起が付く。各孔は刻み目付きの隆帯と沈線で縁取りされる。狭い口縁部文様帯には交互刺突文と２段の刻み目が認められる。２・５は同一個体である。２は交互刺突文下に背割れ隆帯と集合沈線を施す。５は隆線による横Ｓ字状文や半渦巻文と縦位区画文が組み合っている。隆線は一部背割れ隆帯となり、沈線で縁取りして集合沈線を充填する。縁取りの沈線は一部小波状となる。無文の胴下部とは隆線で区画している。１・２・５はいわゆる中峠式で、５は胴部に煩瑣な文様を持つ当地域では異例の土器である。

土製品（第254図、図版113）

土器片錘が13～16ほか５点出土した。いずれも完存品で、15は周縁を丁寧に研磨するが、他は軽く研磨している。

(8) SK027（第163図、図版26）

遺跡西部、15Ｒ－88グリッド付近に位置する。北西側を（8）SK026と接する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は長軸1.56m、短軸1.10m、深さ70㎝を測る。遺物は、覆土下層の５層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第205図、図版60・88）

１は口縁部無文帯下に交互刺突文と背割れ隆帯を配する。円文になると思われる隆帯内には細い矢羽根状の押引文を施す。２は表面に二次的火熱による荒れが顕著である。口縁突起を欠き、背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線を施す。３は口縁部無文帯下に交互刺突文と沈線のみを施す。４は貼付隆線による渦巻文が認められ、５は隆線による枠状文を重ねて配している。６は欠損部が部分的にあるが、ほぼ完存する。口径12㎝、器高15㎝、底径７㎝を測る。底部縁辺には使用による擦れがわずかに残り、内面は二次的火熱を受けて荒れている。口縁下に２条の沈線を引き、その下に稚拙な蛇行沈線を５単位施す。沈線はへら描きである。浅い縄文がごく一部に残る。１～３・５・６は加曽利Ｅ1式古段階、４は同2式古段階であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品１点・剥片１点が出土した。

(8) SK029（第163図、図版26）

遺跡西部、16Ｒ－91グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、長軸1.20m、短軸1.12m、深さ35㎝を測る。遺物は、土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第206図、図版88）

１・２とも隆線による渦巻文様を施すものであろう。縄文は充填縄文である。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャート製の砕片２点、黒曜石製の砕片２点が出土した。

(8) SH034（第163図、図版26）

遺跡西部、16Ｑ－83グリッド付近に位置するピットである。規模は長軸39㎝、短軸35㎝、深さ51㎝を測る。遺物は、土器・石器が少量出土した。

石器（第256図・図版117）

11はチャート製の凹基無茎鏃である。両脚が欠損している。

(8) SK035（第163図、図版26）

遺跡西部、16Ｒ－18グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.80m、短軸1.53m、底面で長軸2.25m、短軸2.13m、深さ1.00mを測る。遺物は、覆土全層から土器・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第206図、図版60・88）

１は欠損部が多いが口縁から胴上部まで全周する。口径32㎝を測る。口縁部文様帯に刻み付きの隆線をフック状に４単位配し、その上には交互刺突文と集合沈線を施す。２は眼鏡状突起を２段重ねた雄大な口縁突起の破片である。孔はそれぞれ沈線で縁取りされ、一部には刻みも付く。口縁部文様は背割れ隆帯が展開し、中を交互刺突文と集合沈線で埋めている。３は縄文のかかった背割れ隆帯で大振りの半渦巻文

を配し、半渦巻文の中を集合沈線で埋めている。４は隆線上にも縄文がかかる。５は小型土器で、交互刺突文が頸部に認められる。６～８は貼付隆線で口縁部文様を施す。９は平行沈線で半渦巻文や横位に連繋する文様を施す。10～13は縄文地に沈線を施す。14は胴下部が全周し、底部が輪積み部分で脱落している。３条１単位の懸垂文を６単位施す。17の底面には網代痕が残る。18の浅鉢は口縁部の約1/3が遺存する。推定口径35㎝を測る。短沈線が付く隆帯で枠状区画し、その中に集合沈線等を充填している。19の浅鉢は赤彩の痕跡が残る。１～８・18はいわゆる中峠式や加曽利Ｅ1式古段階、９は大木８ａ式の影響が考えられる。

石器（第256図、図版117）

10は凹基無茎鏃である。先端部に欠損後の再加工の痕跡がみられる。石材は信州系黒曜石である。図示した以外では、黒曜石製の二次加工のある剥片１点・剥片１点・砕片１点、安山岩製の磨石類１点が出土した。

(8) SK037（第163図、図版26）

遺跡西部、16Ｒ－08グリッド付近に位置する。平面形ほぼほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.51m、短軸1.35m、底面で長軸1.70m、短軸1.56m、深さは59㎝を測る。上・中層に焼土を混入する。遺物は、土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第206図、図版88）

１は刻み付きの隆線に沿ってペン先状の押引文を施す。２は磨消懸垂文である。1は加曽利Ｅ1式古段階、２は同3式であろう。

石器

ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品が１点出土した。

(9) SK155（第164図、図版27）

遺跡北部、16L-88グリッド付近に位置する小竪穴である。平面形は東西方向に長い楕円形で、断面形は皿状である。長軸3.75m、短軸3.00m、深さ15㎝を測る。ピットは南西端に１か所検出された。遺物は、土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１・２は隆線による渦巻文や近似文様を施す。加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

17･18は円板である。17は周縁の磨りは深く、孔は裏面からのみ穿孔している。18の周縁の磨りは浅く、裏面に未貫通の小孔が認められる。

石器（第256図、図版117）

12は凹基無茎鏃である。片脚が欠損している。石材は信州系黒曜石である。図示した以外では、黒曜石製の剥片が１点出土した。

(9) SK168（第164図、図版27）

遺跡北部、15Ｋ－77グリッド付近に位置する陥穴である。平面形は南北方向に長い隅丸長方形である。規模は長軸2.05m、短軸1.60m、深さ2.14mを測る。覆土は、ローム粒・ロームブロックを含み、下層ほどロームブロックの混入が多い。遺物は、覆土下層を中心に土器・石器が出土した。

石器（第256図、図版117）

13は二次加工ある剝片である。先端部の破片で、表面の周辺に連続的な二次加工が施されている。石材は珪質の流紋岩である。旧石器時代の槍先形尖頭器の可能性もある。図示した以外では、凝灰岩の剝片１点、黒曜石の剝片１点が出土した。

(9) SK189B（第164図、図版９）

遺跡北部、15Ｎ－46グリッド付近に位置する。(9) SI189に付帯するピットとして調査されたが、整理時の検討により、住居跡に重複する土坑と判断した。報告では住居跡を (9) SI189A、土坑を (9) SK189Bと呼称することとした。(9) SK189B は (9) SI189A の中央付近を切っている。平面形は南北方向に長い楕円形で、規模は長軸1.84m、短軸1.58m、深さは (9) SI189A の床面から18㎝を測る。ピットは７か所ある。深さは10㎝台の浅いものが多い。P6は火熱により硬化しており、(9) SI189A の炉の底面の一部と考えられる。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３b 期であろう。

土器（第206図、図版88）

１は舌状の口縁突起下に巻きのゆるい渦巻文を施す。いわゆる懸華状連接区劃文土器である。２は隆起線による大型渦巻文を施す梶山タイプであろう。３・４は比較的幅の狭い磨消懸垂文、５は口縁下に刺突列を施す。１・２は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

19は円板である。周縁の磨りは深く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。

石器

チャートの剝片２点、黒曜石の砕片１点が出土した。

(9) SK190（第164図、図版27）

遺跡北部、14Ｏ－42グリッド付近に位置する。平面形は東西方向に長い楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.25m、短軸1.15m、深さ65㎝を測る。覆土はローム粒･ロームブロックを含む。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は幅広の低い隆線と太い沈線が残る口縁部文様の一部である。加曽利Ｅ3式であろう。

(9) SK195（第164図、図版27）

遺跡北部、14Ｏ－75グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.37m、短軸1.32m、深さ53㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は底部直上の破片で、磨消されない懸垂文が認められる。

(10) SK301（第164図、図版27）

遺跡北東部､15Ｏ－61グリッドに位置する。南西側は (10) SK310を切っている。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.40m、短軸96㎝、深さ23㎝を測る。覆土はローム粒･ロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は口縁直下の無文帯を浅く太い沈線で画する。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(10) SK310（第164図、図版27）

遺跡北東部、15O－61グリッドに位置する。北東側は（10）SK301に切られる。平面形は楕円形で、規模は長軸1.14m、短軸1.01m、深さ26cmを測る。遺物は、不明の無文土器が２点出土したが、図示することはできなかった。

(10) SK303（第164図、図版27）

遺跡北東部、15O－52グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸98cm、短軸94cm、深さ66cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は口縁直下の無文帯を凹線で画する。２は粗い縄文のみが認められる。１は加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(10) SK304（第164図）

遺跡北東部、15O－73グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は皿状である。規模は長軸1.53m、短軸1.34m、深さ20cmを測る。覆土はローム粒を少し含む黒褐色土である。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK307（第164図）

遺跡北東部、15O－93グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.11m、短軸1.03m、深さ30cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK308（第164図、図版27）

遺跡北東部、16O－01グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状である。規模は長軸1.07m、短軸92cm、深さ15cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は櫛歯条線文である。

(10) SH315（第164図、図版27）

遺跡北東部、15N－89グリッド付近に位置する不整円形のピットである。規模は長軸65cm、短軸63cm、深さ26cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版88）

１は口縁下に隆起線が弧状に残る。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SH317（第164図）

遺跡北東部、15N－70グリッドに位置する長楕円形のピットである。規模は長軸48cm、短軸27cm、深さ19cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は磨消懸垂文である。縄文の走向が一部で異なる。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SH318（第164図）

遺跡北東部、15O－71グリッドに位置する楕円形のピットである。規模は長軸39㎝、短軸32㎝、深さ29㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1は磨消懸垂文である。加曽利E3式であろう。

(10) SH320（第164図）

遺跡北東部、15O－53グリッドに位置する円形のピットである。規模は長軸28㎝、短軸25㎝、深さ30㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1は磨消懸垂文である。加曽利E3式であろう。

(10) SK321（第164図）

遺跡北東部、15O－54グリッドに位置する。北東側約1/3は調査区外に及んでいた。ピット状の土坑である。規模は長軸80㎝以上、短軸70㎝以上、深さ53㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1は磨消懸垂文である。加曽利E3式であろう。

(10) SH323（第164図）

遺跡北東部、15O－73グリッド付近に位置する。不整楕円形のピットである。規模は長軸52㎝、短軸42㎝、深さ86㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1・2は隆起線で大振りの渦巻文を施すいわゆる梶山類で、加曽利E3式中～新段階であろう。

(10) SK326（第164図、図版27）

遺跡北東部、16O－37グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は皿状である。規模は長軸1.31m、短軸1.25m、深さ30㎝を測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1は区画沈線が逆U字状文になると思われる。縄文は下部が途切れている。加曽利E3式中～新段階であろう。

(10) SK338（第164図、図版27）

遺跡北東部、17Q－32グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.50m、短軸1.48m、深さ51㎝を測る。覆土はロームブロックを多量に含み、埋め戻しによるものと思われる。遺物は、土器・土製品・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

1は磨消懸垂文で、加曽利E3式であろう。

土製品（第254図、図版113）

20は円板である。周縁の磨りはやや浅く、円形に仕上がる前に破損したようである。

石器

軽石が1点出土した。

(10) SK340（第164図、図版27）

遺跡北東部､17Ｐ－79グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状である。規模は長軸1.33m、短軸1.30m､深さ57㎝を測る。覆土は全体的にローム粒･ロームブロックを多く含み､焼土を少量混入する。埋め戻しによるものと思われる。遺物は、土器・土製品が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は２条の隆線が認められる。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

21は円板である。周縁の磨りは深く、孔は裏面からの穿孔が主で、表面からの穿孔はわずかである。

(10) SK343（第165図、図版27）

遺跡北東部、17Ｐ－79グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.29m､短軸1.12m､深さ45㎝を測る。覆土はローム粒･ロームブロックを含み､上層は焼土を少量含む。埋め戻しによるものと思われる。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は薄手で縄文のみ、２は微隆起線文と思われる。２は加曽利Ｅ4式の可能性が高い。

石器

チャート製の剥片１点、斑糲岩製の敲石１点が出土した。

(10) SK344（第165図、図版27）

遺跡北東部、17Ｐ－39グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸99㎝、短軸94㎝、深さ49㎝を測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。埋め戻しによるものと思われる。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK347（第165図）

遺跡北東部、17Ｑ－90グリッドに位置する。平面形は不整な長楕円形で、規模は長軸3.05m、短軸1.60m、深さ93㎝を測る。覆土は記録を欠くため不明である。陥穴であろう。遺物は、少量の土器・石器が覆土中層から出土した。

土器（第207図、図版89）

１は２条の隆線が認められる。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャートの二次加工ある剥片１点、剥片６点･砕片25点が出土した。剥片･砕片の石材はチャート22点、黒曜石６点､ガラス質黒色安山岩２点､ホルンフェルス1点である。石鏃製作後に廃棄されたものであろう。

(10) SK348（第165図）

遺跡北東部、17Ｑ－91グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸87㎝、短軸85㎝、深さ37㎝を測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒･ロームブロック､下層は炭化物片を含む。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(10) SK349（第165図、図版27）

遺跡北東部、17Q－81グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸1.32m、短軸1.24m、深さ62cmを測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒・ロームブロック・焼土・炭化物を含む。遺物は、石鏃製作に伴う未成品・剥片等が下層の２層を中心に20数点出土した。土器等は少量である。

土器（第207図、図版89）

１は磨消懸垂文、２は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式であろう。

土製品（第254図、図版89）

22は円板である。打ち欠き後の磨りは浅い。文様に平行する２条の隆線が認められ、加曽利Ｅ3式新段階のいわゆる梶山類であることが分かる。

石器（第256図、図版117）

14は凹基無茎鏃である。片脚が欠損している。石材には信州系黒曜石が用いられている。図示した以外では、多孔質安山岩製の石皿の断片１点、石鏃製作に伴う黒曜石の二次加工のある剥片１点・剥片４点・砕片５点、チャートの剥片３点･砕片10点、メノウの剥片１点、ガラス質黒色安山岩の剥片１点が出土した。

(10) SK350（第165図、図版28）

遺跡北東部、17Q－71グリッドに位置する。北側と南側に２基の不整円形の土坑が重複するもので、北側が南側の土坑を切っている。北側をＡ、南側をＢとした。規模は、(10) SK350Aは長軸1.00m、短軸98cm、深さ34cm、(10) SK350Bは長軸95cm、短軸83cm、深さ20cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は太い沈線で口縁部文様帯を画する。２は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK354（第165図、図版28）

遺跡北東部､18Q－20グリッドに位置する｡平面形は不整円形､断面形はたらい状である｡規模は長軸1.20m、短軸1.13m、深さ53cmを測る。覆土は全般にローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は、上層の１層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第207図、図版89）

１は口縁直下から懸垂文が始まる。２は磨り消されない懸垂文か。

石器

石鏃製作に伴う剥片・砕片が55点出土した。石材はチャート・黒曜石・ガラス質黒色安山岩からなり、チャートが40点と最も多い。

(10) SK357（第165図、図版28）

遺跡北東部､17Ｐ－89グリッドに位置する。平面形は卵円形､断面形はたらい状である。規模は長軸1.43m､短軸1.21m､深さ71cmを測る。覆土はローム粒･小ロームブロックを多く含む。遺物は､覆土上層の１・２層を中心に土器・土製品・石器が出土した。

土器（第207図、図版89）

１は磨消懸垂文である。２・３は隆線が認められる。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

23は小型の円板である。二次的火熱を受けた土器片を利用しており、周縁の磨りはやや浅い。

石器（第256図、図版117）

石鏃製作に伴う未成品・剥片・砕片等が97点出土した。石材はチャートが81 点と最も多い。15は石鏃未成品である。チャート製で片面加工である。

(10) SK362（第165図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－37グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は長軸1.77m、短軸1.74m、深さ55㎝を測る。南東壁際にはピットが１か所ある。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は縄文がかかった隆帯区画内に集合沈線を施す。２は（10）SK385の２と同一個体である。逆Ｔ字形の隆線が認められる。地文はへらによる集合沈線である。３は磨消懸垂文である。１はいわゆる中峠式に近いもの、３は加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK364（第165図）

遺跡北東部、17Ｔ－48グリッドに位置する。北側に（10）SI363のピットが重複する。平面形は南北方向に長い不整楕円形、断面形は皿状である。規模は長軸2.34m、短軸1.64m、深さ30㎝を測る。遺物は、土器・石器が出土した。

土器（第207図、図版89）

１は波状口縁で、頸部に隆線を施す。２は広い口縁部無文帯を２条の沈線で画する。３は上端が開いた磨消懸垂文である。１・２は加曽利Ｅ式前半、３は同3式であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品が１点出土した。

(10) SK365（第165図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－26グリッドに位置する。平面形は楕円形で、短軸側の断面形は袋状である。長軸2.02m、短軸1.68m、深さ53㎝を測る。ピットは２か所あり、P1は北側の壁面に取り付き、規模は長軸84㎝、短軸45㎝、深さ11㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含み、上層には焼土・炭化物を少し含む。遺物は、底面上を中心に土器・石器が出土した。

土器（第207図、図版89）

１・２は同一個体である。おそらく３条１単位の磨り消されない懸垂文で一部はフック状に途切れる。加曽利Ｅ1式であろう。

石器

砂岩製の磨石が１点出土した。

(10) SK366（第165図）

遺跡北東部、17Ｔ－35グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.70m、短軸1.62m、深さ27㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第207図、図版89）

１は肥厚した口縁端部に沈線と刻みを施す。２は渦巻文を施した口縁突起を持つ。その下からはクランク状に隆線が派生する。１はいわゆる中峠式近似、２は加曽利Ｅ2式であろう。

(10) SK367（第165図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－45グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸2.07m、短軸1.93m、深さ32㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第207図、図版89）

１は左右非対称の眼鏡状突起を持つ。突起下には刻み付きの隆線と刻みを伴う沈線文様を施す。２は口縁突起を欠く。口縁部無文帯を２条の隆線で画し、頸部には波状沈線を施す。３は波状突起上に半渦巻文を施す。４は口縁直下の隆帯に指頭圧痕を付ける。５は底部で、底面縁辺には使用による擦れがほとんど認められない。１は勝坂式末期、２は加曽利Ｅ式前半であろう。

石器

黒曜石の砕片が１点出土した。

(10) SK368（第166図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－56グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.87m、短軸1.60m、深さ51㎝を測る。底面の南西側は段があり、８㎝ほど低くなる。ピットは２か所ある。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器が出土した。土器１・２から本土坑の時期は１ａ期と考えたい。

土器（第208図、図版89）

１は口縁部から頸部にかけての大型破片である。推定口径40㎝を測る。口縁部無文帯下に幅の広い文様帯を配する。文様帯の上縁を交互刺突文、下縁を隆帯と沈線で画し、その中を背割れ隆帯による半渦巻文と集合沈線を施す。胴部は櫛歯条線文である。２は口縁から胴上半にかけて1/3弱が遺存する。推定口径18㎝の小型土器である。おそらく、口縁突起が欠けている。文様は１に近い。３は無文の浅鉢で、内外面に赤彩の痕跡が残り、外面の下半には黒色塗料と思われる物質がほぼ全面に付着している。１・２はいわゆる中峠式であろう。

(10) SK369（第166図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－67グリッド付近に位置する。南東側は調査区外に及んでいる。平面形は不整円形、断面形はたらい状である。規模は最大径2.08m、深さ60㎝を測る。ピットは２か所あり、中央付近のP1は深さ67㎝、P2は南側壁面から張り出している。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。遺物は、土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第208図、図版89）

１は隆線の上下で縄文の走行が異なることから、隆線は口縁部文様帯の下部区画と考えられる。２は頸部区画の沈線、３は磨消されない懸垂文である。いずれも加曽利Ｅ式前半であろう。

石器（第256図、図版117）

16は黒曜石製の凹基無茎鏃である。

(10) SK370（第166図、図版28）

遺跡北東部､17Ｔ－57グリッド付近に位置する。南西側は(10)SK376を切っている。平面形は不整円形で、

規模は長軸2.30m、短軸2.05m、深さ61cmを測る。断面形をたらい状である。ピットは東側壁面際に位置し、深さ61cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む褐色土が主体で、底面の中央付近には焼土の分布がみられた。遺物は、覆土上層の３層を中心に土器が出土した。

土器（第208図、図版89）

１は浅鉢であろう。横走する沈線と刻みが認められる。２・３は同一個体で、櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK371（第166図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－74グリッド付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.84m、短軸1.83m、深さ50cmを測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第208図、図版89）

１は底部直上の破片で、懸垂文と蛇行沈線が認められる。加曽利Ｅ式前半であろう。

石器

砂岩製の磨石類が１点出土した。

(10) SK373（第166図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－42グリッド付近に位置する小竪穴である。平面形は隅丸方形、断面形は皿状である。規模は長軸2.31m、短軸2.11m、深さ33cmを測る。ピットは６か所あり、深さ10cm～31cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第208図、図版89）

１は胴部に多方向の沈線文様を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK374（第166図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－34グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形は皿状である。規模は長軸2.30m、短軸2.02m、深さ34cmを測る。底面の東側に位置するP1は斜めに掘り込まれており、深さ40cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体で、焼土をわずかに混入する。遺物は、土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第208図、図版89）

１は波状口縁で、口縁部に隆線が残る。加曽利Ｅ式前半であろう。

石器

ホルンフェルス製の打製石斧１点、メノウ製の石鏃未成品１点、黒曜石の剥片１点が出土した。

(10) SK375（第166図、図版29）

遺跡北東部、17T-46グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.04m、短軸1.90m、底部で長軸2.13m、短軸2.03m、深さは70cmを測る。ピットは壁際付近に５か所あり、小規模なものである。覆土は、下層はローム粒・ロームブロック主体の暗褐色土で、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第208図、図版89）

１は波状突起下に縄文のかかった隆線で半渦巻文を施す。２は口縁から胴部にかけて1/3ほどが遺存す

る。推定口径10㎝、現存高11㎝を測る小型土器である。山形突起を持ち、口縁端部と直下に角形の押引文を施す。その下には指頭圧痕付きの隆線が巡り、胴部には稚拙な沈線で上下に連結したクランク状の文様を施す。３は口縁直下の隆帯に縄文を施し、以下に２条の交互刺突文を施す。４は交互刺突文と平行沈線、５は交互刺突文と刻み目を施す。６は多方向の沈線が認められる。１～５はいわゆる中峠式及び近縁のものであろう。

石器

砂岩製の磨石類が１点出土した。

(10) SK376（第166図、図版28）

遺跡北東部、17Ｔ－47グリッド付近に位置する。北東側は（10）SK370に切られている。平面形は不整楕円形の浅い土坑で、規模は長軸2.20m、短軸1.90m、深さ18㎝を測る。遺物は土器が出土した。

土器（第208図、図版89）

１は背の高い隆線が付いた口縁突起の破片である。２は口縁突起直下にしっかりと巻かれた隆線の渦巻文が付く。１は勝坂式末期、２は加曽利Ｅ2式であろう。

(10) SK377（第166図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－54グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形は皿状である。規模は、長軸2.97m、短軸2.33m、深さ49㎝を測る。ピットは14か所あり、中央付近に２基の大型ピットが位置する。P2は径55㎝～60㎝、深さ10㎝、P13は径64㎝～77㎝、深さ10㎝を測る。その他は径10㎝～30㎝、深さ９㎝～40㎝を測る。覆土は、上層は暗褐色土を主とし、ローム粒・ロームブロックの混入は少ない。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第208図、図版89）

１は口縁が欠損した破片で、背割れ隆帯による半渦巻文と集合沈線を施す。上端には整った小型の交互刺突文が認められる。２も口縁直下の破片で口縁部文様帯の波状隆線が残る。３は口縁部文様帯の隆線による渦巻文が認められる。４は撚糸文を地文としている。上端に沈線を施す。５は細い沈線による懸垂文と蛇行文である。６には横走する沈線も認められる。７は磨消懸垂文である。１は加曽利Ｅ1式古段階、２はＥ1式、３は同2式、７は同3式であろう。

(10) SK378（第167図、図版29）

遺跡北東部、17T-34グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.21m、短軸2.17m、底面で長軸2.27m、短軸2.29m、深さ67㎝を測る。ピットは南側に３か所あり、深さ16㎝～30㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロック主体である。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第208図、図版90）

１は口縁部文様帯に背割れ隆帯が見える。２と５、３と４はそれぞれ同一個体である。１は加曽利Ｅ1式、２はＥ式前半であろう。

(10) SK382（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－23グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.63m、短軸1.55m、底面で長軸1.86m、短軸1.80m、深さ71㎝を測る。ピットは南側壁面際に１か所ある。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。

土器（第209図、図版90）

１は波状と横位の隆線が残る。３は口縁直下に沈線を巡らせてその下を無文帯とし、幅の狭い逆U字状文を縄文地上に施す。４は胴部の大型破片で、上部に不規則な条線を施す。１・２は加曽利Ｅ式前半、３は同3式中～新段階であろう。

(10) SK383（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－03グリッド付近に位置する。北東側約1/3は調査区外に及んでいた。断面形はフラスコ状である。規模は、開口部の最大径1.69m、底面の最大径2.38mで、深さは97㎝を測る。下層はローム粒主体である。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第209図、図版90）

１は口縁部の約1/3が遺存する。推定口径16㎝を測る。山形突起の中央に孔が開き、縄文のかかった隆線が孔を半渦巻状に巻いて口縁部文様帯の枠状文につながる。枠状文内は角押文を充填している。２はミニチュア土器で、口縁部の背割れ隆帯下に沈線による半渦巻文が見える。３は口縁直下に整った小型の交互刺突文が巡り、口縁部文様帯には背割れ隆帯が認められる。４は磨消されない懸垂文である。５は上端に胴部区画沈線が残る。１は阿玉台3式、３は加曽利Ｅ1式古段階、４は同2式であろう。２は大木８ｂ式ないしその影響を受けた土器であろう。

(10) SK384（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－45グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.80m、短軸1.73m、深さ52㎝を測る。南西壁際に深さ４㎝の段がある。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第209図、図版90）

１は口縁から胴下部にかけて約1/3が遺存する。推定口径29㎝、現存高23㎝を測る。内面のほぼ全体、表面の右側欠損部周辺が二次的火熱を受け、荒れている。平縁で、口縁部無文帯の上下に隆線が巡る。２は背割れ隆帯と集合沈線が残る口縁部付近の破片である。１・２は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(10) SK385（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－36グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.79m、短軸1.69m、底部で長軸1.83m、短軸1.82m、深さは52㎝を測る。ピットは浅いものが２か所ある。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第209図、図版90）

１は口縁部文様帯に集合沈線を充填した円文を配する。円文からは刻み付きの隆線が派生し、その上下に沈線文様やキャタピラ文を施す。２は（10）SK362の２と同一個体である。胴下部の逆Ｔ字型の隆線区画内に弧状の沈線が見える。地文はへらによる集合沈線である。３は中央に孔の開いた山形突起の破片である。沈線が孔を半円状に縁取る。４は底部の1/2の破片である。胴下部寄りに横位の沈線が残る。１は勝坂式末期、２・３も勝坂式であろう。

(10) SK386（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－02グリッド付近に位置する。北東側約1/3は調査区外に及んでいた。断面形はフラスコ状である。規模は、開口部の最大径1.80m、底面の最大径2.45mで、深さは1.03mを測る。遺物は、覆土下層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第209図、図版90）

１は狭い口縁部文様帯内に角押文を施す。２・３は同一個体で、交互刺突文、背割れ隆帯に集合沈線を施す。胴部は櫛歯条線文である。４は波状突起を持つ浅鉢片である。１は清水台式や狢沢式と近縁の土器、２・３は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器（第257図、図版118）

32の打製石斧は短冊形をなし、長大である。素材は剝片であり、大型の石塊の表皮に近い部分を剝離している。表面の先端部と基部にある自然面がそのことを如実に物語っている。先端の表裏には磨耗痕がみられる。石材は砂質ホルンフェルスである。

(10) SK387（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－64グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は、長軸2.26m、短軸2.14m、深さ40㎝を測る。壁際にはピットが６か所あり、大型のP1・P4は最大径40㎝前後、深さ６㎝～９㎝である。他の４か所は径15㎝～25㎝、深さ20㎝～44㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第209図、図版90）

１は突起を欠く口縁部破片である。交互刺突文と沈線文様が残る。加曽利Ｅ1式古段階であろう。

石器

黒曜石の剝片が１点出土した。

(10) SK388（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－55グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.54m、短軸1.40m、底面で長軸2.02m、短軸1.88m、深さ72㎝を測る。覆土は下層にローム粒・ロームブロック主体である。遺物は、覆土下層を中心に土器・石器が出土した。17～19の石斧は北側底面の壁際に斜めに差し込まれた状態で出土した。

土器（第209図、図版90）

１は口縁部文様帯の下部区画隆帯が水平に巡っていない。文様帯内には粗雑な沈線を施し、隆帯の上下には部分的に半截竹管による刺突列が付く。阿玉台3式であろう。

石器（第256図、図版118）

17は磨製石斧である。本来は定角式であったが、両側縁と基部には敲打痕や調整痕がみられ、ほぼその痕跡は打ち消されている。さらに刃部の損傷も甚大である。石材は緑色岩と考えられる。18は打製石斧である。裏面に大きく礫面が残されており、磨石類を転用した可能性が高い。19は定角式磨製石斧である。基部の一部が欠損している。刃部に細かな損傷と磨耗痕がみられる。石材は砂岩である。

(10) SK389（第167図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－33グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.07m、短軸1.74m、底面で長軸2.19m、短軸2.08m、深さは71㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロック主体である。遺物は、底面付近を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第209図、図版90）

１は胴下部の破片で、刻み付きの隆線区画と沈線文様が残る。２は縄文がのる背割れ隆帯で半渦巻文が展開する。この隆帯と口縁の隆帯は橋状突起でつながっていたことが破片右端でわかる。上下の隆帯間は

集合沈線と半渦巻沈線を施す。３は浅鉢で口縁部の1/3弱が遺存する。推定口径39㎝を測る。交互刺突文下に沈線で小型の渦巻文を連繋させ、渦巻文間には三叉状の線刻を施す。１は勝坂式末期、２・３はいわゆる中峠式であろう。

(10) SK390（第168図、図版29）

遺跡北東部、16T-92グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形はたらい状であるが、一部南東側は袋状である。規模は長軸1.63m、短軸1.35m、深さ65㎝を測る。所属時期は１ａ期と考えたい。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器が出土した。

土器（第209図、図版90）

１は指頭圧痕の付いた隆帯が山形突起の頂部から垂下する。２は口縁部無文帯下に隆線によるフック状の文様が連結するらしい。隆線上には角押文が乗る。３は正面と両側面に孔が開く突起破片である。正面の孔は沈線で縁取りされ、両側面の孔は背割れ隆帯による半渦巻文が絡む。内面に小孔が開く。４・５は背割れ隆帯と集合沈線による口縁部文様帯を持つもので、５には未貫通の孔が口縁突起に付く。１は勝坂式末期、２はいわゆる中峠式と近縁の土器、３～５は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(10) SK391（第168図、図版29）

遺跡北東部、17Ｔ－32グリッド付近に位置する。平面形は東西方向に長い卵円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.94m、短軸1.72m、深さ43㎝を測る。ピットは６か所あり、中央のP6が深さ32㎝で最も深い。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器・土製品が出土した。

土器（第210図、図版90）

１は波状突起を持ち、無文の口縁下には段が付く。２は外折した舌状突起裏に沈線による渦巻文を施す。口縁部文様帯には背割れ隆帯上に渦巻文を施す。２は加曽利Ｅ1式新段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

24は小型の円板である。周縁の磨りはやや浅く、裏面に未貫通の小孔が認められる。器壁の厚さが一定していない。

(10) SK392（第168図、図版30）

遺跡北東部、17T-55グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.41m、短軸1.15m、底面で長軸1.77m、短軸1.56m、深さは85㎝を測る。ピットは西側に２か所ある。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第210図、図版60・90）

１はミニチュア土器で波状口縁となる。口縁に沿って沈線を施し、他は同一原体による角押文である。２は口縁から胴下部まで部分的に欠損するがほぼ全周する。口径13㎝、現存高19㎝の小型土器である。器面には二次的火熱を受けた個所が目立つ。中央に小孔の開く山形突起が２個対向する。狭い口縁部文様帯は交互刺突文の下に背割れ隆帯による区画帯と連結したたらこ状文が突起下とその中間に計４個付く。３は中央に孔が開く舌状突起片で、沈線、刻み目、細いペン先状押引文を施す。４は枠状隆帯の下部及び上部隆帯の内側に沿って刻み目を施し、枠内に沈線を充填している。５は胴部文様帯の枠状文様が認められる。１は阿玉台式直前、２～４はいわゆる中峠式、５は加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK394（第168図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－10グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形はたらい状である。北側にピッ

ト（P2）が壁面外に突出する。長軸2.13m、短軸1.83m、P2を含む径は2.45m、深さ68㎝を測る。ピットの深さは、P1は20㎝、P2は底面から15㎝、検出面から78㎝を測る。遺物は、覆土上層の２層を中心に土器・石器が出土した。５の深鉢は倒立した状態で出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第210図、図版61・90）

１は刻み目の付いた隆線による楕円形区画が残る。２は口縁直下に交互刺突文を配する。背割れ隆帯が認められる。３は太い沈線による頸部文様であろう。４は眼鏡状突起の破片で、突起頂部を欠く。孔は隆線と沈線で縁取りされる。突起下には背割れ隆帯による口縁部文様が認められる。５は胴下部以下を欠くほかは完形である。口径22㎝、現存高29㎝を測る。内面には胴下部に向かうほど二次的火熱によるあばた状の荒れが多く残る。大型の突起と小型の突起がそれぞれ対向するが、形状や文様はみな異なる。大型突起の一方は舌状で外面基部に大きな１孔、内面に小さい２孔が開く。内外面の孔はそれぞれ背割れ隆帯によって内面はＳ字状、外面はＵ字状に囲われ、余白には沈線を施す。もう一方の大型突起は外面と両側面に孔が開き、外面の孔は背割れ隆帯によってＣ字状に囲われ、左側面の孔は沈線で囲われている。小型突起は２個とも外面は背割れ隆帯の半渦巻文が付くが、内面は一方が円形の凹文、もう一方がハート形の凹文となる。口縁部文様帯は枠状隆帯で囲われた交互刺突文と縦位集合沈線の２段となる。１は勝坂式、２・４は加曽利Ｅ1式古段階、５はいわゆる中峠式であろう。

石器

黒曜石製の楔形石器１点・二次加工のある剝片１点・剝片２点が出土した。

（10）SK395（第168図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－00グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.09m、短軸1.87m、底面で長軸2.20m、短軸2.00m、深さ70㎝を測る。ピットは東側に３か所ある。深さ11㎝～12㎝である。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。５の完形の浅鉢は正位の状態で出土した。所属時期は１期であろう。

土器（第210図、図版61・90）

１は口縁から胴上部にかけて1/3弱が遺存する。推定口径16㎝を測る。口縁は内側に突出し、口縁部には大型のＵ字状区画内に沈線渦巻を施す。２は浅鉢と思われ、太い沈線による渦巻文が認められる。３・４はともに磨消されない懸垂文を施す。４には蛇行沈線も付く。底面は二次的火熱により剝落している。５は鉢形で胴下部の一部を欠くほかは完形である。口径23㎝、器高15㎝、底径９㎝を測る。底面縁辺は使用による擦れが目立つ。口縁部を無文とし、頸部に交互刺突文を施す。体部は縦位施文の縄文とともに２条１単位の結節回転文がほぼ等間隔に４単位付く。６は各部位に欠損があるが、ほぼ完形である。口径12㎝、器高19㎝、底径８㎝の小型土器で、内外面とも二次的火熱による荒れが認められるが、底部側が特に著しい。口縁下の一部に縄文を施す。１は勝坂式末期、５は加曽利Ｅ1式であろう。

（10）SK397（第168図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－57グリッドに位置する。南東側は調査区外に及んでおり、北西側は撹乱によって欠失していた。平面形は円形基調と考えられ、断面形は袋状である。規模は、最大径1.37m、深さ58㎝を測る。ピットは中央付近に２基ある。遺物は、底面付近を中心に土器が出土した。

土器（第211図、図版90）

１は隆線と集合沈線を施す口縁部付近の破片である。２は波状口縁をなす。口縁下に２条の沈線が認め

られる。３は口縁に小突起が付く。口縁部文様帯には背割れ隆帯による波状文様を施す。４は突起部片で、頂部に渦巻文を施す。５は縄文のみ、６は無文の口縁部破片である。１・３は加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK399（第168図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－22グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.00m、短軸1.57m、底面で長軸2.35m、短軸2.20m、深さは75㎝を測る。ピットは東側の壁面際に楕円形のものが１か所あり、深さ19㎝を測る。覆土は、下層はローム粒主体である。遺物は、覆土下層の７層を中心として土器・石器が出土した。

土器（第211図、図版90）

１は口縁部文様帯の下部文様が認められる。対向するフック状の沈線と縦横位の刻み目を施す。２は口縁部文様帯の上部区画隆線と渦巻文を結ぶ短隆線が残る。３は頸部に貼付隆帯が巡る。拓影上端にも隆線が残る。４は櫛歯条線文の胴下部の破片である。５は浅鉢で波状の隆帯を施す。１は勝坂式、２は加曽利Ｅ2式であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品１点・剥片１点が出土した。

(10) SK400（第168図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－36グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は長軸1.75m、短軸1.60m、深さ71㎝を図る。覆土は、下・中層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第211図、図版90）

１はくずれた交互刺突文と沈線が認められる。

(10) SK401（第169図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－64グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸1.63m、短軸1.46m、底面で長軸2.40m、短軸2.32m、深さは1.02mを測る。所属時期は１ａ期と考えたい。遺物は、主に覆土上層の１・２層と底面付近から土器が出土した。

土器（第211図、図版91）

１は突起裾部の口縁部破片で、口縁直下には縄文が付く。その下には交互刺突文が間を空けて２条認められる。２はいわゆるたらこ状文である。３は橋状突起を持つ口縁部破片で、孔に絡んだ背割れ隆帯は口縁部文様帯の下部区画隆帯へ続く。背割れの沈線は先端が小型の半渦巻文となる。口縁部文様帯内は交互刺突文と集合沈線である。４・５は同一個体で、４は胴下部の屈曲部である。１・２はいわゆる中峠式、３は加曽利Ｅ1式古段階、４・５は勝坂式であろう。

(10) SK402（第169図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－53グリッドに位置する。北側はSK474と重複する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.65m、短軸1.32m、底面で長軸1.93m、短軸1.83m、深さは71㎝を測る。南側の壁面際にピットが１か所あり、深さ15㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は、底面付近を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第211図、図版61・91）

１・２は口縁突起の破片で、１には1孔が、２には２孔が残る。１は交互刺突文と背割れ隆帯が、２に

は孔を縁取る刻み付きの隆線と交互刺突文が認められる。３は口縁部から胴下部にかけて部分的な欠損があるがほぼ全周する。口径28㎝、現存高28㎝を測る。対向する主突起を欠くが、その間に置かれた山形の従突起は完存する。図正面の主突起は上端に孔の痕跡が残り、その下には突出した刻み目付きの環が付く。裏面の主突起直下は文様がないことから橋状ないしは眼鏡状突起が剝がれたものと思われる。従突起に配された背割れ隆帯による渦巻文はそのまま垂れて口縁部文様帯の下部区画帯となって波状に巡り、空隙には集合沈線や一部に沈線渦巻を充填している。胴部区画の隆線は二重であるが、平行ではなく螺旋であって、その末端は胴部を垂下する隆線とつながっている。胴部を垂下する隆線は４単位で縄文がかかる。無文となる胴下部との境は段はないが、膨らみを持つ。４は口縁から胴上部にかけての破片２点からなる。口縁直下に背割れ隆帯が巡り、半截竹管による平行沈線で口縁部文様帯の上下を画する。文様帯内には平行沈線による大小の稚拙な半渦巻文が並ぶ。胴上部はより大型の半渦巻文を施す。１は加曽利Ｅ1式古段階、２は勝坂式末期、３は多分に勝坂式の要素が強いが、背割れ隆帯は加曽利Ｅ式のものである。４は大木８ａ式の影響を受けていると思われる。

石器（第256図、図版117）

20は凹基無茎鏃である。片脚が欠損しており、石材は神津島産黒曜石である。図示した以外では、同じ石材の石鏃の脚部片が１点出土した。

(10) SK403（第169図、図版30）

遺跡跡北東部、17Ｔ－32グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.46m、短軸1.27m、底面で長軸1.56m、短軸1.38m、深さは54㎝を測る。西側の壁面際にピットが１か所あり、深さ17㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第212図、図版91）

１・２とも胴部文様である懸垂文及び蛇行沈線が認められる。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK404（第169図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－21グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸1.53m、短軸1.28m、底面で長軸2.57m、短軸2.18m、深さは1.06㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は、覆土中層の４・６・８・12層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第212図、図版61・91）

１～３は同一個体である。１は粘土板を三角形に貼り合わせて中空の突起としている。突起には沈線による左右非対称の半渦巻文を配し、突起から離れた口縁２ではこれらの沈線が収斂して単なる波状沈線となる。突起下には波状沈線と短刻沈線を施す。３の胴部破片には２段の波状沈線と下端には右傾と縦走する沈線が認められる。４は口縁部からくびれ部の約1/4が遺存する。推定口径23㎝を測る。口縁部文様帯は隆線で三角形状に区画され、その中に集合沈線と交互刺突文を施す。その下には背割れ隆帯による大型の半渦巻文と集合沈線を施す。５は楕円形の貫通孔を持つ口縁突起の破片である。基部にも２孔が開く。６・７は浅鉢で、６は赤彩の痕跡が残る。８は口縁の約1/2と底部を欠く。底部は輪積み部分で欠落しているのが分かる。口径17㎝、現存高18㎝を測る。全くの無文で、器面調整も粗雑である。１～３・５は勝坂式末期、４はいわゆる中峠式であろう。

土製品（第254図、図版113）

25は円板である。周縁の磨りはやや浅い。孔はない。

石器

黒曜石の石核４点・剥片１点が出土した。

(10) SK405（第169図、図版30）

遺跡北東部、17Ｔ－20グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.53m、短軸1.28m、底面で長軸2.57m、短軸2.18m、深さ1.06㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第212図、図版91）

１は肥厚した口縁下無文帯の下に櫛歯条線文を施す。口縁には突起が付くらしい。２は口縁直下の無文帯をにぶい微隆起線で画する。１は加曽利Ｅ式前半、２は同3-4式であろう。

石器（第256図、図版117）

21は凹基無茎鏃である。片脚が欠損しており、石材は信州系黒曜石である。

(10) SK407（第169図、図版31）

遺跡北東部、17Ｔ－03グリッド付近に位置する。北西側を（10）SK408に切られる。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で最大径1.90m、底面で最大径1.96m、深さ62㎝を測る。所属時期は２期であろう。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。

土器（第212図、図版91）

１は口縁が1/2弱遺存する。推定口径17㎝を測る。波状突起は４単位で、突起部に隆線による小型の半渦巻文を配する。口縁部文様帯には隆線による枠状文を施す。２は低い山形突起に隆線渦巻を配する。１・２とも加曽利Ｅ2式であろう。

(10) SK408（第169図、図版31）

遺跡北東部、17Ｔ－03グリッド付近に位置する。南東側は(10)SK407を切っている。平面形は不整楕円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部の最大径が1.78m、底面の最大径が2.25m、深さは70㎝を測る。遺物は、覆土下層から中層を中心に土器が出土した。土器１・２から所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第212図、図版91）

１は波状口縁で左端欠損部には突起があったようである。口縁部無文帯下に細かい交互刺突文が巡る。２は口縁部文様帯を背割れ隆帯で弧状に区画し、その中を交互刺突文と細かい集合沈線で埋めている。３は無文で、浅鉢の破片であろう。４は肥厚した口縁に指頭状の圧痕が付き、以下は無文である。１はいわゆる中峠式の類、２は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(10) SK409（第169図、図版31）

遺跡北東部、17Ｔ－02グリッド付近に位置する。南側は（10）SK408に切られる。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の最大径1.41m、底面の最大径1.67m、深さ60㎝を測る。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第212図、図版91）

１は口縁部無文帯下に背割れ隆帯でフック状の文様が連結すると思われる。背割れは沈線ではなく、押引文で行われている。２は交互刺突文が突起に合わせて立ち上がっている。３は口縁突起の破片で、涙滴状の粘土紐を左右から貼り合わせて口縁上に乗せ、外面側に２孔、内面側に１孔を開けている。４は無文

の浅鉢で、口縁の1/4強が遺存する。推定口径44㎝を測る。１は大木８ａ式、３は勝坂式末期、２はこれらと同時期のものであろう。

(10) SK410（第169図、図版31）

遺跡北東部、17Ｔ－74グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状で、北西側は袋状にオーバーハングする。規模は長軸1.65m、短軸1.45m、深さ48㎝を測る。東側壁面際には径約45㎝、深さ23㎝のピットが１か所ある。遺物は、Pl内から土器が少量出土した。

土器（第212図、図版91）

１は口縁直下の隆帯の背割れが一部途切れる。２は蛇行沈線、３は櫛歯条線文である。４は底部片で底面には使用による擦れは認められないが、内面は二次的火熱を受けて荒れている。１は加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK424（第169図、図版31）

遺跡北東部、18Ｒ－67グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸2.13m、短軸2.00m、深さ61㎝を測る。ピットは中央から東側に４か所ある。規模の大きい北東側のPlは径約64㎝、深さ71㎝を測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は口縁部文様帯に背割れ隆帯による半渦巻文を配し、これと連結する下部区画隆帯上には縄文が付く。２は口縁部文様帯に隆線による渦巻文と枠状文を施す。隆線は低い。胴部の懸垂文は磨消かどうか判断できない。３は磨消されない懸垂文を施す。１はいわゆる中峠式、２は加曽利Ｅ3式古段階、３は加曽利Ｅ式前半であろう。

石器（第256図、図版117）

22は凹基無茎鏃である。精緻な加工が施されており、両側縁は細かな鋸歯状を呈する。石材は白色系のメノウである。片脚の先端が僅かに欠損している。

(10) SK427（第169図、図版31）

遺跡北東部、19Ｒ－44グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、円形の土坑の西側に張り出しが付されたような形状である。規模は長軸2.40m、短軸1.80m、深さ22㎝を測る。ピットは中央から西側に３か所ある。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は口縁部を無文帯としている。２は磨り消されない懸垂文を施す。３は縄文のみである。１は加曽利Ｅ3式中～新段階、２は加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK429（第170図、図版31）

遺跡北東部、18Ｒ－92グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.83m、短軸1.77m、深さ27㎝を測る。断面形は皿状で、ピットは南東壁面際に１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は磨り消されない懸垂文と蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK439（第170図、図版31）

遺跡北東部、19Ｒ－33グリッド付近に位置する。北側で（10）SK420と重複する。平面形はほぼ円形で、

径2.00m、深さ37㎝を測る。ピットは中央に１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は２b期と考えたい。

土器（第213図、図版91）

１は口縁部文様帯に隆線によるしっかり巻き込まれた渦巻文を配する。胴部には３本１単位の沈線による文様が展開する。２は浅鉢片で、無文である。１は加曽利Ｅ2式新段階であろう。

(10) SK443（第170図）

遺跡北東部、19Ｒ－42グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は皿状である。規模は長軸1.86m、短軸1.77m、深さ21㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は口縁部文様帯の下部区画隆線と頸部の波状沈線が認められる。２は拓影右端に懸垂文の一端が残る。ともに加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK444（第170図、図版32）

遺跡北東部、19Ｒ－52グリッド付近に位置する。平面形は卵円形である。西側壁面際に深さ32㎝のピットが１基ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は磨消されない懸垂文と蛇行沈線が認められる。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK451（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－64グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.67m、短軸1.70m、底面で長軸2.13m、短軸2.01m、深さ81㎝を測る。ピットは北側壁面際に斜めに掘り込まれている。底面の中央付近には粘土の分布がみられた。遺物は、覆土中層の４層を中心に多くの土器、石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第213図、図版61・62・92）

１は口縁から胴下部までの1/4強が遺存する大型破片と口縁から胴上部の破片からなる。推定口径24㎝、現存高37㎝を測る。内面のほぼ全体が二次的火熱を受けて荒れている。口縁部文様は狭く、沈線による枠状文内に粗雑な波状沈線を入れている。枠状文を区切る２条の単線とU字文は押引文である。別破片では口縁部文様はさらに狭くなり、枠状文内は波状文ではなく左傾と右傾の短刻となる。縄文は粗い単節の縦位施文で、無文となる胴下部にはこの縄文の撚り戻った無節縄文が部分的に付く。２は山形突起の中央に円孔が開く。円孔は多重沈線で縁取りされ、口縁部文様は突起右側が２段の交互刺突文、左側が平行沈線間に刻み目を施している。３は左右非対称の眼鏡状突起である。内面にも１孔が開く。４は口縁直下に指頭状圧痕が付く隆帯が巡り、その下に集合沈線を施す。５は広い口縁部無文帯下に押引文でフック状の文様を施す。以下は櫛歯条線文である。６は口縁から胴上部まで約1/4が遺存する。推定口径15㎝を測る小型土器である。表面は全体が二次的火熱により脆くなっている。７は磨り消されない懸垂文を施す。８は胴下部から底部が完存する。底面縁辺は使用による擦れがわずかに残り、内面は二次的火熱を受けほぼ全体に脆くなっている。９は口縁直下に沈線が２条巡り、沈線内には円形刺突を加えている。また、拓影下端には弧状の沈線が残る。１は加曽利Ｅ1式古段階の半租製土器、２・４・５はいわゆる中峠式及び近縁のもの、３は勝坂式末期、９は連弧文土器で、混在であろう。

石器

砂岩製の磨石類１点、黒曜石の剥片類２点が出土した。

(10) SK453（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－30グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.07m、短軸2.00m、底面で長軸2.28m、短軸1.80m、深さ45㎝を測る。中央には深さ51㎝のピットが１基ある。覆土は下層に焼土の混入がみられた。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は口縁部文様帯の逆Ｕ字状隆線の上に押引文を施す。いわゆる中峠式近縁の土器であろう。

石器

黒曜石の楔形石器が１点出土した。

(10) SK454（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－63グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.66m、短軸1.42m、深さ28㎝を測る。北側にピットが１か所あり、深さ14㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版91）

１は全体に二次的火熱を受けて荒れ、文様が分かりにくい。波状突起を欠く口縁部破片で、隆帯で上下を区画した口縁部文様帯には縄文地に沈線を施す。口縁直下の隆帯にも縄文が付く。阿玉台4式であろう。

(10) SK455（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.47m、短軸1.41m、底面で長軸2.07m、短軸2.00m、深さ61㎝を測る。北側壁面際にピットがある。覆土は、下層はローム粒・ロームブロック主体である。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版92）

１は口縁突起が剥がれたように欠損している。突起部には貫通孔が認められ、突起下には交互刺突文と集合沈線を施す。いわゆる中峠式近縁の土器であろう。

石器

黒曜石の剥片が１点出土した。

(10) SK458（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｓ－27グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿状である。規模は長軸1.91m、短軸1.75m、深さ21㎝を測る。ピットは壁面近くに４か所あり、深さ12㎝～23㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第213図、図版92）

１は口縁突起を欠く。突起下には背割れ隆帯によるクランク文を施す。２は磨消懸垂文である。１は加曽利Ｅ1式、２は同3式であろう。

(10) SK460（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｓ－37グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸2.53m、短軸2.38m、深さ34㎝を測る。ピットは底面中央、壁面際などに３か所ある。深さ27㎝～41㎝を測る。遺物は土

器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第214図、図版92）

１は雑な交互刺突文と櫛歯条線文を施す。２は口縁部文様帯に波状の隆線が残る。１・２とも加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK462（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｓ－38グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.84m、短軸1.72m、深さ25㎝を測る。遺物は、２層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第214図、図版92）

１は突起裾部の口縁部破片である。口縁及びその下に背割れ隆帯を施す。２は２条の貼付隆線によるクランク文であろう。３は半截竹管内側による平行沈線である。４蛇行沈線を施す。５は縄文のみ、６は櫛歯条線文のみを施す。１・２は加曽利Ｅ1式、３・４はＥ式前半であろう。

石器

流紋岩質凝灰岩製の石鏃が１点出土した。

(10) SK463（第170図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－50グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.75m、短軸1.65m、底面で長軸1.95m、短軸1.70m、深さ75㎝を測る。覆土は、下層にロームブロックを多く含む。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第214図、図版92）

１は小型の土器で、口縁部文様帯に対向する弧状の背割れ隆帯が認められる。３は垂下する断面三角形の隆帯に縄文がかかる。１は加曽利Ｅ1式、３は阿玉台3～4式であろう。

石器

黒曜石の石核が１点出土した。

(10) SK464（第171図、図版32）

遺跡北東部、17Ｓ－45グリッド付近に位置する。北西側は調査区外に及んでいる。平面形は円形である。規模は最大径1.87m、深さ25㎝を測る。ピットは北東側壁際に１か所ある。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は、覆土上層を中心に多くの土器・石器が出土した。所属時期は土器３から１ａ期と考えたい。

土器（第214図、図版62・92）

１は口縁部に隆帯で大型の楕円文を施す。隆帯上には半截竹管内側による連続押捺が付く。胴部は縄文地に半截竹管で平行沈線文様を描く。２は口縁突起の破片で、外面は1孔、内面は２孔の眼鏡状となる。３は口縁から胴部にかけて1/4弱が遺存する。推定口径21㎝を測る。口縁部文様帯の中段には突出した背割れ隆帯による半渦巻文が付く。４は口縁部文様帯の背割れ隆帯によるクランク文で隆帯上にも縄文がかかる。５はやはり口縁部文様帯のクランク文類似の文様であろう。隆線は細い。６・７は磨り消されない懸垂文である。８は口縁の約1/2と底部を欠損するが胴部は全周する。口径15㎝、現存高18㎝を測る小型土器である。外面の片側全体が二次的火熱を受け、あばた状に荒れている。口縁のゆがみ具合から突起が１個付いていたと思われる。９・10は浅鉢である。10は（10）SK470の３と同一個体で、推定口径38㎝を測る。口縁端部から内面の一部に赤彩が認められる。１・２は勝坂式、３～５は加曽利Ｅ1式古段階であ

ろう。

石器

黒曜石の剥片が１点出土した。

(10) SK466（第171図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－30グリッド付近に位置する。南側は（10）SK467と重複する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.75m、短軸1.65m、底面で長軸1.95m、短軸1.70m、深さは75㎝を測る。ピットは中央と東側壁面際に１か所ずつある。底面付近に粘土の分布がみられた。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。

土器（第214図、図版92）

１は懸垂文が拓影の左右両端に残る。２は胴下部の破片で底部が輪積み部分で剥がれている。１は加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK467（第171図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－30グリッド付近に位置する。北側は（10）SK466と重複し、検出できたのは全体の約1/2である。規模は、最大径1.87m、深さは26㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第214図、図版92）

１は上面観がく字状に折れた口縁突起片である。沈線による渦巻文を施す。２は波状突起の破片で、突起頂部に隆線による渦巻文が付く。３は浅鉢で､口縁部文様帯に弧状の沈線文様を施す。１は勝坂式末期、２・３は加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK468（第171図、図版32）

遺跡北東部、17Ｓ－89グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.00m、短軸1.70m、底面で長軸2.13m、短軸1.96m、深さ63㎝を測る。ピットは西側の壁面際を中心に６か所ある。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第214図、図版92）

１の口縁直下は背割れ隆帯であろうか。２・３には磨消されない懸垂文を施す。いずれも加曽利Ｅ式前半であろう。

石器（第256図、図版117）

23は石皿の破片である。右側縁に凹み痕の痕跡をとどめる。石材は緑泥片岩であろう。

(10) SK469（第171図、図版32）

遺跡北東部、17Ｔ－70グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.05m、短軸1.84m、底面で長軸2.15m、短軸2.10m、深さは68㎝を測る。ピットは４か所あり、中央付近のP1が51㎝と最も深い。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第214・215図、図版92）

１は隆線による矩形の口縁部文様が見える。２は肥厚した口縁直下が無文帯となる。３は（10）SK464の10と同一個体の浅鉢である。いずれも加曽利Ｅ式前半であろう。

石器（第256図、図版117）

24は本遺跡で唯一の三角形鏃である。信州系黒曜石を用材としている。

(10) SK470（第171・215図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－60グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸2.05m、短軸1.84m、底面で長軸2.15m、短軸2.10m、深さは68㎝を測る。ピットは４か所ある。所属時期は２ａ期と考えたい。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第215図、図版92）

１は口縁部文様帯に貼付隆線による剣先文を施す。２は浅鉢片である。１は加曽利Ｅ2式古段階であろう。

(10) SK471（第171図、巻頭図版、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－42グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸1.98m、短軸1.71m、底面で長軸2.60m、短軸2.43m、深さは57㎝を測る。ピットは北西側の壁面際に１基あり、径55㎝～75㎝、深さ43㎝を測る。所属時期は１期としたい。遺物は土器・土製品・石器が出土した。土器等は覆土中層を中心に出土した。33～35の石器はピット（P1）内から出土した。

土器（第215図、図版62・92）

１・２は同一個体の口縁突起と思われる。１は外面に上下２孔、内面に１孔が開く。各孔は沈線で縁取りされ、裾部の空間には沈線を施す。２は眼鏡状突起が２段重なり、上段の眼鏡状突起には正面にさらに１孔が開く。また、上部にも三角形の孔が開く。各孔は沈線で縁取りされ、突起右側裾部には交互刺突文が認められる。なお、内面にも１孔が開いている。３は小型の浅鉢で、口縁から底部までの1/2弱が遺存する。推定口径15㎝、器高12㎝、底径10㎝を測る。全体に二次的火熱を強く受け、変色、ひび割れ、剝落、荒れがひどい。口縁直下に小波状の貼付隆線が巡り、その下に背割れ隆帯による弧状文や渦巻文を配するが多くは剝落している。４は口縁部文様の一部である背割れ隆帯が、５は胴部文様である縦横の沈線文様が認められる。６は蛇行沈線と懸垂文が残る。７・８は同一個体で、半截竹管による蛇行沈線と多条の懸垂文が認められる。９は口縁がわずかに波状になる。10は底部がほぼ完存し、胴上部近くまでの約1/2が遺存する。底径10㎝、現存高25㎝を測る。底面の縁辺には使用による擦れが顕著に残り、内面は二次的火熱による荒れがほぼ全面に残る。半截竹管内側による３条１単位の懸垂文は６単位で巡るようである。11も10とほぼ同様の破片で、底径８㎝、現存高19㎝を測る。底面の縁辺には使用による擦れが顕著に残る。また、縁辺には▲印の個所に刻みを付けている。１・２はいわゆる中峠式ないしは近似の土器、３は加曽利Ｅ1式であろう。

土製品（第254図、図版113）

26は小型の土器片錘である。周縁は軽く研磨されている。

石器（第257・258図、図版118）

33は短冊形の打製石斧である。大型剝片を素材としており、表面の上端と下端には素材剝片の自然面が残されている。下端部の表裏には顕著な磨耗痕があり、二側縁の中央部には着柄痕と思われる潰れがみられる。34は乳棒状磨製石斧の優品である。断面形は棒状で、先端部は両刃の蛤刃を呈する。刃部は若干損傷しており、細かな刃こぼれがみられる。被熱により全体的に赤化している。石材は緑色岩である。35は磨製石斧である。上半部が二側縁の敲打によりすぼまっており、全体的にはやや撥形を呈する。刃部は両刃であり、表裏ともトロトロに磨耗し、やや偏刃をなす。側縁に広く施された敲打により、あまり明瞭ではないが、わずかに残る痕跡から原形は定角式であった可能性が高い。石材はホルンフェルスである。図示した以外では、黒曜石の剝片２点、チャートの原石が１点出土した。

(10) SK472（第171図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－62グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.97m、短軸1.84m、底面で長軸2.17m、短軸2.05m、深さは57㎝を測る。ピットは南東側を中心に３か所ある。所属時期は１ｂ期と考えたい。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第215図、図版92）

１～４はすべて同一個体である。口縁部文様帯には背割れ隆帯による半渦巻文が展開すると考えられる。加曽利Ｅ1式新段階であろう。

石器

黒曜石の剥片が１点出土した。

(10) SK475（第171図、図版33・120）

遺跡北東部、17Ｔ－21グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、底面はやや西側に偏在し、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.10m、短軸1.75m、底面で長軸2.30m、短軸2.26m、深さは80㎝を測る。所属時期は１期と考えられる。遺物は、東側の４～６・８層を中心に土器、石器及び炭化した堅果類の破片が約170点出土した。

土器（第216図、図版62・93）

１は口縁端部が内側に突出する。大の字状の沈線文様の一端が残る。２は眼鏡状突起と片側に盲孔を持つ突起が連続している口縁部破片である。３は眼鏡状突起の片側が欠損している。突起から派生した上下２条の隆帯は背割れ隆帯である。４は口縁直下に沈線と背割れ隆帯による波状文様が巡る。５は口縁に隆帯による半渦巻文を配し、その下に単隆線による口縁部文様が展開する。６は背割れ隆帯による口縁部文様帯の下部区画帯の上に集合沈線が、その下には蛇行する隆線が垂下する。７はくびれた胴部下に段が付く。８は底部で、底部内面は二次的火熱を強く受けて荒れている。９は浅鉢で、赤彩が一部に残る。１・２は勝坂式末期、３～６は加曽利Ｅ1式、７は勝坂式であろう。

石器

黒曜石製の石鏃未成品１点、軽石１点が出土した。

(10) SK476（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－12グリッド付近に位置する。西側は（10）SK477を切っている。平面形はほぼ円形と思われる。規模は長軸2.18m、短軸1.89m、深さ33㎝を測る。中央付近にピットが１か所ある。遺物は土器が出土した。所属時期は土器１を重視して２ａ期であろう。

土器（第216図、図版62・93）

１は北側から倒立した状態で出土した。口縁から胴上部にかけて1/2強が遺存する。推定口径40㎝、現存高21㎝を測る。口縁部文様帯には２本隆線による小型の渦巻文様を施し、頸部の無文帯は隆線で上下を区画している。胴部は縄文のみである。２は低い隆線による楕円文様が認められる。３は微隆起線文である。１は加曽利Ｅ2式古段階、２は同3式、３は同4式であろう。２・３は混在と思われる。

(10) SK477（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－12グリッド付近に位置する。東側は（10）SK476に切られている。平面形は不整楕円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.98m、短軸1.62m、底面で長軸2.03m、短軸1.92m、深さは59㎝を測る。遺物は、覆土上層から中層にかけて多くの土器・石器が出土した。所属時期は

１ａ期と考えられる。

土器（第216・217図、図版62・93）

１は隆帯による半渦巻文の口縁部文様と胴部区画帯が認められる。隆帯には縄文がかかる。２は頂部が３尖となる舌状突起の破片で、鋸歯状の沈線文様と縄文が見える。３は交互刺突文と縦位集合沈線の下に縄文のかかった背割れ隆帯が見える。４は口縁部文様帯に背割れ隆帯による円文が残る。外側の隆帯には刻みが付く。空隙には雑な集合沈線を施す。５は口縁端部が内側に突出している。６は眼鏡状突起の上に環状突起が乗る。環状突起の孔には刻みと沈線の、眼鏡状突起の孔には沈線の縁取りが付く。７は眼鏡状突起が乗る口縁部破片で、突起から派生した刻み付きの隆帯で口縁部文様帯を枠状に区画し、その中に交互刺突文や集合沈線を充填する。区画内の文様は左右でわずかに異なる。８も刻み付きの隆帯区画が認められる。９は眼鏡状突起が上下２段に重なると思われる。孔は多重の沈線で縁取りされ、突起の稜には蛇行沈線を施す。口縁部文様帯内には上下の交互刺突文間に集合沈線を充填する。10は背割れ隆帯で区画した狭い口縁部文様帯内にペン先状押引文と集合沈線を施す。11は口縁から胴下部までの1/2弱が遺存する。推定口径20㎝、現存高21㎝を測る。全体に二次的火熱を受けて荒れているが、特に口縁部は著しく右端の突起の欠損もこのためである。突出した口縁部文様帯には２条の隆帯が巡り、下段の隆帯には刻みが付く。胴部文様帯は３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を交互に施す。おそらく８単位であろう。12は半截竹管内側による平行沈線で胴部文様を施す。１は阿玉台4式、２・４～８は勝坂式末期、３・９・10はいわゆる中峠式ないしは近似のもの、11は加曽利Ｅ1式古段階、12は大木８ａ式であろう。

石器（第256図、図版117）

25は凹基無茎鏃である。先端部には欠損後の再加工が認められる。石材は神津島産黒曜石である。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(10) SK478（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－53グリッド付近に位置する。南側約1/2は (10) SK479に切られる。規模は最大径1.38ｍ、深さ23㎝を測る。遺物は加曽利Ｅ1式と考えられる小片が５点出土したが、図示できなかった

(10) SK479（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－53グリッド付近に位置する。北側は (10) SK478、西側は (10) SK480を切っている。平面形は卵円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.90m、短軸1.70m、底面で長軸2.34m、短軸2.10m、深さは74㎝を測る。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・土製品・石器が出土した。

土器（第217図、図版62・93）

１は口縁上に乗る環状突起で、環は交互刺突による小波状の文様と有節線文で縁取りし、側面は有節線文で梯子状の文様を施す。２は舌状の突起破片で、突起頂部から隆線が垂下する。突起縁辺と隆線は沈線で縁取りし、その中に沈線文様を施す。縁辺と隆線上には縄文がかかる。３は口縁下に交互刺突文が巡る。４は背割れ隆帯による口縁部クランク文が、５は胴部の懸垂文と連結する弧線文が認められる。６は浅鉢で、口縁から底部直上までの約1/2が遺存する。推定口径25㎝、現存高11㎝を測る。金雲母の含有が目立つ。１は阿玉台1b 式、２は同4式、３～５は加曽利Ｅ1式であろう。

土製品（第254図、図版113）

27は土器片錘である。周縁は比較的よく研磨されている。

石器（第256図、図版117）

26は定角式磨製石斧である。ただし、転用の可能性が高く、刃部には大きな損傷、基部には敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

(10) SK480（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－53グリッド付近に位置する。北西側は（10）SK479に切られる。平面形は不整円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で最大径1.96m、底部で長軸1.95m、短軸1.87m、深さは94㎝を測る。覆土は、下層はローム粒･ロームブロック主体である。ピットは西側に１か所ある。遺物は、覆土中層の17・18層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第217図、図版62・93）

１は口縁から胴下部までかなりの部分を欠くが、ほぼ完形に復元できた。推定口径27㎝、現存高36㎝を測る。舌状の口縁突起は３単位で中央に小孔が開く。突起には隆帯及び角押文による半渦巻文様を配し、突起間は縄文がかかった隆帯及び角押文による枠状文様を配する。胴部には縄文がかかった隆帯が２条らせん状に巡り、その一部は屈折して半渦巻文となる。隆帯には太い半截竹管による平行沈線が沿う。２は枠状隆帯により口縁部文様帯区画を施す。隆帯上及び区画に沿ってキャタピラ文を施し、その中を胴部と同じ櫛歯条線文で充填している。３は刻みの付いた環状の隆帯とその中に沈線渦巻が認められる。４・５は沈線文様の付く胴部破片である。６はコップ形の小型土器で、口縁から底部直上まで約1/3が遺存する。底部は輪積み部分で脱落している。推定口径10㎝、現存高９㎝を測る。半環状の口縁突起が付く。７は無文である。１は阿玉台4式で、口縁部文様はいわゆる七郎内Ⅱ群土器あるいは諏訪タイプそのものであろう。２・３は勝坂末期、４・５は加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK481（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.75m、短軸1.65m、深さ49㎝を測る。南東側にピットが１か所ある。遺物は、覆土中層を中心に土器が出土した。

土器（第217図、図版93）

１は縄文のみ、２は櫛歯条線文のみで、いずれも胴下部の破片である。

(10) SK482（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－51グリッド付近に位置する小竪穴である。平面形はほぼ長円形、断面形は浅い皿状である。規模は長軸2.85m、短軸2.59m、深さ32㎝を測る。ピットは東側の壁面際及び中央付近に５か所ある。いずれも径20㎝以下のものである。覆土は、下層はローム粒主体である。遺物は、覆土中層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１期と考えられる。

土器（第217図、図版93）

１は口縁端部に低突起が付き、その内側が突出する。広い口縁部無文帯の下に沈線による区画文様と縄文を施す。２は小孔を伴う突起を欠く口縁部破片である。口縁部の枠状区画には上下の交互刺突文間に沈線と刻み目を施す。３は口縁端部の内側が突出する。口縁部には背割れ隆帯による半渦巻文が付く。４は突起部分を欠く口縁部破片で、縄文のかかった隆線が認められる。５は口縁部文様帯の破片で、単隆線による波状文を施す。７は櫛歯条線文の破片で、拓影上端に区画沈線が巡る。１～３は勝坂式末期、５は加曽利Ｅ1式であろう。

石器（第256図、図版117）

27は磨製石斧の断片である。もともと定角式であったと考えられるが､側縁部には顕著な敲打痕があり､旧状をとどめていない。裏面も研磨面が打撃によって除去されており、さながら打製石斧のようである。石材は緑色岩である。図示した以外では、黒曜石の剥片が２点出土した。

(10) SK483（第172図）

遺跡北東部、17Ｔ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.59m、短軸1.47m、底部で径1.68m、深さは70㎝を測る。南東壁面際に楕円形のピットが１か所ある。遺物は、覆土中層の３層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第218図、図版93）

１は口縁から胴下部までの1/3強の破片と口縁部の1/3弱の破片からなる。推定口径25㎝、現存高29㎝を測る。二次的火熱によるあばた状の荒れが顕著に残る。全面に縄文のみを施す。２は刻みの付いた背割れ隆帯による枠状文の中に集合沈線を充填する。２は勝坂式末期であろう。

石器（第256図、図版117）

28は小型の磨製石斧である。両側縁に定角式を意図した研磨痕がある。刃部に部分的な損傷がみられる。石材は粗粒玄武岩であろう。

(10) SK486（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｓ－59グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.98m、短軸2.05m、底部で径2.20m、深さ47㎝を測る。ピットは北東・南東・北西側の壁面際に１か所ずつある。深さは16㎝～36㎝である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第218図、図版93）

１は左右と上方から孔が開く突起を持つ。左右の孔は沈線で縁取りされ、突起に続く口縁部の隆帯による枠状区画内には交互刺突文と集合沈線を施す。いわゆる中峠式であろう。

(10) SK488（第172図、図版33）

遺跡北東部､17Ｓ－99グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸1.58m、短軸1.36m、深さ33㎝を測る。ピットは北東側に１か所ある。遺物は土器･石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第218図、図版93）

１は外折した口縁部無文帯下に弧状の隆線区画が残る。２は背割れ隆帯による区画文と集合沈線が認められる。１は加曽利Ｅ式前半、２は同1式であろう。

石器（第256図、図版117）

29は小型の磨製石斧の基部片である。石材は緑色片岩である。

(10) SK494（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｔ－72グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形はフラスコ状である。規模は、開口部で長軸1.23m、短軸1.16m、底面で長軸2.07m、短軸1.85m、深さは1.15mである。開口部の南東側には深さ約20㎝の舌状の掘り込みが取り付いている。出入り口施設の可能性がある。底面は中央付近に高まりがある。北東側にピットが１か所ある。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックが主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第218図、図版93）

１は弧状の隆帯に沿って半截竹管による平行沈線を施す。２は外反した口縁が小波状となる。全体に二

次的火熱による荒れが目立つ。３は櫛歯条線文を施す。１は阿玉台4式、２は勝坂式であろう。

石器

安山岩製の石皿の断片が２点出土した。

(10) SK496（第172図、図版33）

遺跡北東部、17Ｓ－97グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は北西側が袋状である。規模は、長軸1.85m、短軸1.72m、深さ37㎝である。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第218図、図版93）

１は低い山形突起内に沈線による稚拙な半渦巻文を施す。突起左裾にも小型の半渦巻文を施す。突起下に巡る太い隆帯上には爪形状の刻みが付き、拓影下端には横位の沈線が認められる。２は低い山形突起下に２条の波状沈線が巡る。３は低い隆線により巻きのしっかりした渦巻文と枠状文を口縁部に施す。頸部は無文帯となる。４は浅鉢で、赤彩が残る。５・６は同一個体で、波状突起を持つ。複節縄文を全面に施す。１は在地の勝坂式、３は加曽利Ｅ2式古段階であろう。

石器

黒曜石の剥片が１点出土した。

(10) SK501（第173図）

遺跡北東部、19Ｒ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸2.35m、短軸2.18m、深さ62㎝を測る。ピットは３か所ある。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第218図、図版94）

１は頸部無文帯下に２条１単位の懸垂文と蛇行沈線を施す。２も懸垂文と蛇行沈線で、どちらも２条１単位らしい。３の底部も懸垂文と蛇行沈線が認められる。４は懸垂文と蛇行沈線内が磨消されているが、磨消は不完全である。１～３は加曽利Ｅ式前半、４は同2-3中間式であろう。

(10) SK506（第173図、図版34）

遺跡北東部、18Ｒ－78・79グリッドに位置する。３基の円形土坑が切り合っており、東側に位置するものほど新しく、東側からＡ、Ｂ、Ｃと呼称した。(10) SK506Aは長軸1.26m、短軸1.25m、深さ50㎝を測る。(10) SK506Bは、径1.70m、深さ49㎝を測る。中央に深さ30㎝のピットが１か所ある。(10) SK506Cは、長軸2.30m、短軸2.12m、深さ70㎝を測る。東側・西側にそれぞれ１か所ずつ大型のピットがある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第219図、図版93）

１は低い隆線による口縁部区画が認められる。加曽利Ｅ2式らしい。

(10) SK507（第173図）

遺跡北東部、19Ｒ－10グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.73m、短軸1.63m、深さ37㎝を測る。ピットは中央、北側・北西側の壁面際にそれぞれ１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第219図、図版93）

１は胴下部の破片で、底部が輪積み部分で脱落している。縄文のみ施す。

(10) SK519（第173図）

遺跡北東部、19Ｓ－02グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.99m、短軸1.75m、

深さ31㎝を測る。ピットは中央、南側の壁面際にそれぞれ１か所ある。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。土器１から所属時期は２ａ期と考えたい。

土器（第218図、図版62・63・94）

１は波状突起に半渦巻文が絡む。口縁部文様帯は隆線による巻きのしっかりした渦巻文を突起下に配し、突起頂部と短隆線でつないでいる。この渦巻文から波状に続く隆線は盛り上がって上向きの渦巻文が絡んだ小突起となる。２は口縁部に隆線による小型の半渦巻文が付く。地文の縄文は複節ＲＬＲで、１段目Ｒが多条の稀な縄文である。３は蛇行沈線の付く胴部片であるが、地文の縄文は１にきわめて似ている。１の胴部には蛇行沈線は見えないが、同一個体と見たい。４は胴下部から底部にかけて完存する。底径７㎝、現存高12㎝を測る。内面には炭化物が広く付着する。底面の縁辺に網代痕が認められる。器面調整は粗く、２条１単位の隆線と単隆線が各々対向して付く。５は底部から胴下部にかけて1/2弱が遺存する。推定底径11㎝を測る。６は同じく底部から胴下部にかけて1/2弱が遺存する。推定底径８㎝を測る。７は底部から胴下部まで一部に欠損があるがほぼ全周する。底径９㎝、現存高14㎝を測る。４～７のいずれも使用による底面の擦れや二次的火熱を受けた痕跡はほとんど認められない。７は底内面に大きいひびが入り、使用に耐えたか疑問である。１・２は加曽利Ｅ2式で、１は古段階であろう。

（10）SK520（第173図）

遺跡北東部、19Ｓ－12グリッド付近に位置する。東側を（10）SD512に切られる。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.57m、短軸1.56m、深さ73㎝を測る。ピットは北西側壁面際に１か所ある。径25㎝～40㎝、深さ48㎝を測る。遺物は、覆土上層の１・２層を中心に土器が出土した。

土器（第219図、図版63・94）

１は口縁部が外反する単純深鉢で、２条の平行沈線は蛇行文であろう。２は隆線による渦巻文の一部が残る。３の懸垂文は間の磨り消しが不明瞭である。４はミニチュア土器で、底部は完存し、口縁部は1/4弱が遺存する。推定口径７㎝、器高５㎝、底径４㎝を測る。無文で、内面は横位の調整痕が、外面は縦位の調整痕が残る。５は器台の破片である。楕円形の孔が2個残る。外面は良く磨かれている。６は底部から胴部にかけて細かに割れた破片が接合した。底径10㎝、現存高17㎝を測る。二次的火熱や使用による擦れはほとんど認められない。意図的に壊しているかもしれない。１は加曽利Ｅ式前半、２・３は同2～2-3式であろう。

（10）SK523（第173図）

遺跡北東部、19Ｒ－11グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.34m、短軸1.23m、深さ23㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第219図、図版94）

１は口縁部文様帯の２条の隆線が認められる。隆線の一部は剥がれ、その下に地文の縄文が現れている。加曽利Ｅ式前半であろう。

（10）SK525（第173図）

遺跡北東部、19Ｑ－68グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸2.05m、短軸1.82m、深さ37㎝を測る。遺物は、覆土下層の２層を中心に土器が出土した。

土器（第219図、図版94）

１は外反した口縁下にしっかりと巻かれた隆線による渦巻文を施す。２は蛇行沈線が拓影両端に残る。

２は加曽利Ｅ式前半、１は同2式であろう。

(10) SK526（第173図）

遺跡北東部、20Ｑ－05グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.33m、短軸1.29m、深さ52㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第219図、図版94）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK532（第173図、図版34）

遺跡北東部、20Ｐ－37グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は北側・南側は袋状である。規模は、開口部で長軸2.23m、短軸2.18m、底面で長軸2.70m、短軸2.33m、深さは75㎝を測る。ピットは中央やや北西寄りに１か所ある。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器が出土した。

土器（第219図、図版94）

１は厚く平坦な口縁端部に間隔の不規則な角押文を施す。口縁部文様は背割れ隆帯による縦位区画と鍵の手状の文様が認められる。隆帯に沿う沈線は一部角押文となる。２は口縁部無文帯下に粗い交互刺突文を施す。１・２ともいわゆる中峠式ないしは近縁の土器であろう。

(10) SK538（第173図、図版34）

遺跡北東部、20Ｐ－35グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形は部分的に袋状である。規模は長軸2.03m、短軸1.95m、深さ65㎝を測る。遺物は、底面上を中心に土器が出土した。４の深鉢は破片が底面に散らばった状態で出土した。所属時期は１ａ期であろう。

土器（第219図、図版63・94）

１は突起を欠く口縁部破片で、口縁下に交互刺突文が巡る。３は背割れ隆帯による渦巻状の文様が残る。４は口縁部の1/4弱、胴部の一部及び底部全部を欠くほか、ほぼ完形である。底部は輪積み部分で脱落している。口径25㎝、現存高35㎝を測る。胴下部に二次的火熱による荒れが認められる。口縁直下の太い１条の沈線と頸部の３条の沈線で口縁部文様帯を区画する。口縁部文様帯には２条１単位と単体の蛇行沈線を計８単位施すが等間隔ではない。胴部文様帯はフック状の懸垂文と蛇行沈線を施すがやはり等間隔ではなく、反時計回りで、フック状懸垂文－２条１単位の蛇行沈線－フック状懸垂文－２条１単位の蛇行沈線－単体蛇行沈線－単体蛇行沈線の順となる。５は櫛歯条線文である。１はいわゆる中峠式、３・４は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(10) SK542（第173図、図版34）

遺跡北東部、19Ｐ－90グリッド付近に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.50m、短軸1.40m、深さ51㎝である。遺物は土器。石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第220図、図版94）

１は頸部から胴上部の破片で、縄文のみ施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

石器（第256図、図版117）

30は凹基無茎石鏃である。石材はガラス質黒色安山岩である。

(10) SK543（第173図、図版34）

遺跡北東部、19Ｐ－91グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形である。規模は長軸1.89m、短軸

1.60m、深さ57㎝である。ピットは南側の壁面際に１か所ある。覆土は、上層はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は、覆土下層の２・３層を中心に土器が出土した。

土器（第220図、図版63）

１は口縁から底部にかけての1/4弱の破片と口縁部から胴上部にかけての約1/4の破片からなる。推定口径29㎝、器高45㎝を測る。内面全体に二次的火熱を強く受け、荒れて脆くなっている。おそらく４単位の波状突起で、隆帯状の口縁と口縁下を巡る隆帯が突起頂部で弧状に連結している。以下は全面縄文である。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK544（第174図、図版34）

遺跡北東部､19Ｏ－79グリッド付近に位置する。北西側は調査区外に及んでいる。平面形はほぼ楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の最大径1.95m、底面の最大径2.04m、深さ56㎝を測る。遺物は、概ね全層から土器が出土した。

土器（第220図、図版94）

１は口縁部文様帯の隆線区画が残る。２は胴部文様帯の区画沈線と蛇行沈線が残る。３は広い口縁部無文帯下に太い凹線が認められる。１・２は加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK545（第174図、図版34）

遺跡北東部、19Ｐ－81グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.21m、短軸1.97m、底面で長軸2.60m、短軸2.25m、深さは91㎝を測る。遺物は、概ね全層から土器が出土した。所属時期は１期と思われる。

土器（第220図、図版94）

１は口縁部に背割れ隆帯によるＳ字状文様を施したものであろう｡背割れの沈線には刺突文が加えられ、一部が途切れている。２は口縁下に交互刺突文を施す。３は折り返し風の無文の口縁部下に沈線が巡る。４は口縁部文様帯に隆線による波状文を施す。５は縄文のみの底部直上の破片である。６は浅鉢で、口縁部の約1/4が遺存する。推定口径40㎝を測る。無文で内傾する口縁部の調整は丁寧であるが、体部の調整は粗い。口縁部の内外面は赤彩されている。１・２はいわゆる中峠式ないしは近縁の土器、４は加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK546（第174図、図版34）

遺跡北東部、17Ｐ－70グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は長軸2.24m、短軸2.03m、深さ61㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第220図、図版94）

１は口縁部無文帯下に段を持つ。２は口縁部文様帯の縦位区画沈線と横位沈線下に交互刺突文を施す。２は勝坂式末期ないしはいわゆる中峠式近縁の土器であろう。

(10) SK547（第174図、図版34）

遺跡北東部、20Ｐ－00グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.52m、短軸1.48m、底面で長軸2.00m、短軸1.91m、深さは1.03mである。遺物は、おおむね全層から土器が出土した。31の楔形石器は北側の底面上から出土した。所属時期は土器10を重視して２ａ期と考えたい。

土器（第220図、図版63・94）

１は刻み目付きの隆帯で円文などを施し、円文内を沈線で埋めている。一部には押引文も付く。２の下段の隆線上には連続刺突が付く。３は直口口縁で、交互刺突文と沈線が巡る。４は盲孔を伴う口縁突起片である。突起下には隆線が認められる。５は左右非対称の眼鏡状突起の下と内面に各１個の孔が開く。各孔は沈線で縁取りされている。突起下には背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線が認められる。６は口縁部が屈折する。口縁部文様帯は、沈線で上下を区画した中に集合沈線を入れ、その下には縄文を施す。７・８は同一個体で、隆線による大小の半渦巻文が認められる。９は背割れ隆帯による口縁部文様帯の下部区画及び縦位区画文である。10は口縁から胴下部の各部の一部及び底部を欠くが、ほぼ完形に復元できた。口径16㎝、現存高25㎝を測る。口縁突起は４単位で大型の主突起1個、小型の従突起３個からなる。主突起は欠損していて形状は不明である。口縁は背割れ隆帯状になり、従突起には口縁側の隆線が半渦巻文を形成する。以下は全面縄文である。11は底部の大部分が遺存する。底径10㎝を測る。12は櫛歯条線による蛇行文様を施す。１～４は勝坂式、５・９は加曽利Ｅ1式古段階、７・８は同新段階、10は加曽利Ｅ2式古段階であろう。

石器（第256図、図版117）

31の楔形石器は緑色凝灰岩の扁平礫を素材としており、上下両端に特有の潰れがみられる。

(10) SK549（第174図、図版34）

遺跡北東部、19Ｐ－91グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.57m、短軸1.55m、底面で長軸1.78m、短軸1.73m、深さは65㎝である。遺物は、覆土中層を中心として土器が出土した。

土器（第221図、図版94）

１は口縁部無文帯下に段が付く。２は胴下部の破片で平行する沈線が認められる。３は粗い条線を施す。無文帯を挟んで上端にも条線が残る。１は加曽利Ｅ1式前半であろう。

(10) SK553（第174図）

遺跡北東部、17Ｔ－73グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.70m、短軸1.65m、深さは57㎝である。覆土は、下層はローム粒主体である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ｂ期と考えたい。

土器（第221図、図版94）

１は大型の山形突起に付いた襞状の隆線が口縁部文様帯へ連続する。口縁部には隆線による枠状文様や半渦巻文と集合沈線を施す。頸部と胴部は隆線で画され、胴部には懸垂文を施す。２は１の底部直上の胴部破片で、３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ1式新段階であろう。

(10) SK555（第174図、図版34）

遺跡北東部、18Ｔ－01グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.09m、短軸2.08m、底面で長軸2.31m、短軸2.23m、深さは68㎝を測る。ピットは３か所ある。覆土は、下層はローム粒・ロームブロック主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第221図、図版94）

１は波状突起で、口縁が背割れ隆帯状となる。端部外側に縄文が付く。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK556（第174図、図版34）

遺跡北東部、18Ｓ－19グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.09m、短軸1.89m、底面で長軸2.20m、短軸2.02m、深さは45㎝を測る。ピットは中央付

近及び南側壁面際にそれぞれ１か所ずつある。遺物は、覆土中層から下層の５層を中心に土器が出土した。

土器（第221図、図版95）

１は正面及び左側面に孔が開く欠損した突起を持つ。突起下には半截竹管内側による３条１単位の平行沈線が２段認められる。２は口縁直下の無文帯下に段を持つ。３は底部から胴下部の破片で、二次的火熱を受けてあばた状に荒れている。１は大木８ａ式ないしその影響を受けた土器であろう。

(10) SK557（第174図、図版34）

遺跡北東部、18Ｓ－29グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.40m、短軸2.16m、底面で長軸2.33m、短軸2.10m、深さは48㎝である。ピットは北側壁面際に２か所、東側に１か所ある。覆土はローム粒主体である。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第221図、図版95）

１は底部直上から胴下部にかけての破片で、３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(10) SK558（第174図、図版34）

遺跡北東部、18Ｔ－30グリッド付近に位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で、長軸1.85m、短軸1.79m、底面で長軸2.10m、短軸1.88m、深さは50㎝を測る。底面は南東側の一部が張り出す。ピットは東側から南東側の壁面際に２か所ある。覆土は、下層はロームブロック主体で、底面付近は炭化物を含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は２ａ期と考えられる。

土器（第221図、図版95）

１は口縁部文様帯の下半から頸部にかけての大型破片である。口縁部文様帯には隆線による小型の渦巻文が認められ、頸部は無文帯となる。２は無文の浅鉢で、口縁内面と体部下半を除き赤彩を施す。１は加曽利Ｅ2式古段階であろう。

(10) SK562（第174図、図版34）

遺跡北東部、17Ｔ－83グリッド付近に位置する。東側は（10）SK563を切る。平面形はほぼ円形である。規模は、長軸1.95m、短軸1.80m、深さは51㎝である。覆土はロームブロックを多量に含む。遺物は土器・土製品が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第221図、図版95）

１は上下に２孔が開く口縁突起の破片である。眼鏡状突起を立てたように２孔間が突出している。上の孔は沈線と刻み目で縁取りされ、下の孔は沈線のみで縁取りされる。突出した２孔の間にはペン先状工具による押引文を施す。内面にも１孔が開く。上の孔の両裾から派生する隆線は背割れである。２は波状突起片で、突起の縁辺には隆帯が巡り中に沈線を充填する。３はＹ字状の隆帯が口縁の無文帯下に付く。４は単純深鉢の口縁部に指頭状圧痕の付いた隆線が２条巡る。５は細かい撚糸文を地文として横位、縦位の沈線を施す。６・７は浅鉢である。６は口縁端部から内面にかけて赤彩を施す。７は舌状の突起中央が窪み、両端が隆帯となる。２は勝坂式末期、３は阿玉台4式、１はいわゆる中峠式近似の土器であろう。

土製品（第254図、図版113）

土器片錘が2点出土した。28は周縁がよく研磨されている。29は下半が欠損し、研磨はほとんど見られず、長方形であったと思われる。文様に交互刺突文が認められ、伴出土器と同時期と考えられる。

(10) SK563（第174図、図版34）

遺跡北東部、17Ｔ－73グリッド付近に位置する。西側は（10）SK562に切られる。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.30m、短軸1.80m、底面で長軸2.75m、短軸2.55m、深さは98㎝を測る。ピットは南西側に１か所ある。覆土は、下層はロームブロック主体で硬く締まっており、埋め戻しがなされたと考えられる。上層は焼土粒を混入する。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第221・222図、図版63・95）

１は口縁部の1/2弱が遺存する。推定口径28㎝を測る。おそらく４単位の波状突起下に眼鏡状突起を配し、その中間には盲孔を持つ小型の眼鏡状突起を配する。各孔は連続刺突文で縁取りされる。大小の眼鏡状突起は枠状隆線でつながり、枠状文内は連続刺突文と沈線で縁取りがなされた上、空隙には雑な条線を充填する。頸部は無文帯となる。２は背割れ隆帯による円文と連結する横位文様が認められる。３は口縁部文様帯の上下に交互刺突文が巡り、その中を集合沈線で埋めている。４は半截竹管内側による平行沈線文様の胴部破片である。横位の区画沈線下に右半は多条の平行沈線を垂下させ、左端には隆線に沿った蛇行沈線が認められる。５～７は浅鉢である。５は体部上手に三角形状の隆帯とこれに続く横位隆帯が認められる。６は口縁から底部縁辺までの破片である。外面は口縁部、内面は体部の大部分を赤彩している。７は口縁部内面を赤彩している。８は底部の大部分と胴下部の約1/3が遺存する。底径10㎝、現存高15㎝を測る。底部縁辺には網代痕が残る。外面は底から高さ10㎝程度まで、内面はほぼ全体が二次的火熱によりあばた状に荒れ、脆くなっている。１は勝坂式の影響を強く受けた阿玉台3式、２は加曽利Ｅ1式古段階、３はいわゆる中峠式であろう。

石器（第259図、図版117）

36・37は黒曜石製の小型凹基無茎鏃である。36は両面加工、37は周辺加工となっている。図示した以外では、流紋岩を石材とする磨石類が１点出土した。

(10) SK566（第174図、図版35）

遺跡北東部、18Ｔ－00グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.92m、短軸1.80m、底面で長軸1.86m、短軸1.85m、深さは65㎝を測る。東側は底面に段があり、約15㎝高くなっている。遺物は、おおむね覆土全層中から土器・土製品が出土した。土器６・７は底面付近から出土した。

土器（第222図、図版63・95）

１は低平な２条の隆帯間に集合沈線を施す。２は口縁部無文帯下の隆線上に指頭状圧痕が付く。３は口縁部文様帯の下部区画を２条の隆線で行い、文様帯内には背割れ隆帯と集合沈線を施す。４・５は同一個体で、いずれも口縁の肥厚帯が剥落している。肥厚帯下にはペン先状工具による押引文が巡り、口縁部文様帯には貼付隆線による半渦巻文や剣先文に近い文様が展開する。６は口縁部の1/3、胴下部の1/2及び底部全部を欠損するが、ほぼ完形に復元できた。口径22㎝、現存高31㎝を測る。底部は輪積み部分で脱落し、胴下部内面は二次的火熱により荒れて脆くなっている。無文で、器面調整は粗く、口縁部に２段の輪積み痕を残す。内面の調整も粗い。７は浅鉢片で、口縁端部から内面に赤彩が認められる。３は加曽利Ｅ1式古段階、４・５は同Ｅ2式古新段階であろう。１は勝坂式であろうか。

土製品（第254図、図版113）

30は小型の土器片錘である。周縁はよく研磨されている。

(10) SK567（第174図、図版35）

遺跡北東部、18Ｔ－12グリッドに位置する。南東側約2/3は調査区外に及んでいた。規模は最大径1.94m、深さ60㎝である。ピットは北側に１か所ある。覆土は、下層はローム粒･ロームブロック主体である。上層は焼土を混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第222図、図版95）

１は口縁突起を欠く破片で、剥落した突起から派生した突出した背割れ隆帯と隆線による矩形の区画文様が認められる。加曽利Ｅ1式であろう。

(10) SK572・(10) SK578（第175図、図版35）

遺跡北東部、19Ｐ－62グリッド付近に位置する。(10) SK572は西側で (10) SK578を切っている。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.20m、短軸2.15m、底面で長軸2.47m、短軸2.19m、深さは96㎝を測る。西側にはピットが１か所あり、深さ38㎝を測る。(10) SK578は北西側約1/4が調査区外となる。規模は、最大径2.21m、深さ57㎝を測る。覆土は全体的にローム粒･ロームブロックを多く含む。遺物は土器･石器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は、(10)SK578が３期、(10) SK572が１期と考えたい。

土器（第222図、図版95）

１は小型の山形突起下に沈線による十字状などの文様を施す。２は肥厚した口縁と刻みの付いた隆帯に沿って交互刺突文を施し、その間を短い集合沈線で埋めている。３は口縁に沿った鋸歯状沈線と懸垂文が認められる。４の隆線は口縁部文様帯の区画と考えられ、隆線の上下で縄文の回転方向が異なる。５は沈線による半渦巻文などの胴部文様が展開する。６は波状口縁で、縄文は附加条風に撚ったものである。７は低い隆線による枠状区画で、右側の枠内は縄文がない。８は口縁直下を無文帯とし、その下には右下がりの太い沈線と磨消帯が認められる。９は太い沈線による口縁部文様帯の枠状区画であろう。10は単純深鉢で、広い口縁部無文帯を太い沈線で区画し、その下には沈線による逆Ｕ字状文を施して中に櫛歯条線文を入れている。11は磨消懸垂文の胴部片である。１・３は勝坂式末期、２はいわゆる中峠式、４・５は加曽利Ｅ1式、７～11は同3式中～新段階であろう。したがって、出土土器は前後2時期に大きく分けられる。おそらく、古い１～５は (10) SK578に、新しい７～11は (10) SK572に属するのであろう。

石器

(10)SK572からは緑色凝灰岩製の磨製石斧の刃部片１点、(10)SK578からは黒曜石の石核が１点出土した。

(10) SK575（第175図）

遺跡北東部、19Ｐ－85グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.97m、短軸1.94m、深さ59㎝を測る。覆土は焼土ブロック・炭化物を混入する。遺物は土器・土製品・石器が出土した。第259図38の磨製石斧は覆土下層中より出土した。その他の出土状況は不明である。

土器（第222図、図版95）

１は厚みのある舌状の口縁突起を持つ。突起にはやや偏って円孔が開き、背割れ隆帯が突起頂部から左右に垂れて口縁を巡る。孔の下には背割れ隆帯と集合沈線が認められる。２・３は同一個体で、(10) SI574の１とも同一個体である。隆線と太く深い沈線を縦位施文し、その一部は半渦巻文となっている。４は胴部区画沈線と蛇行沈線が認められる。５は隆線による口縁部区画文様が残る。１はいわゆる中峠式、

４・５は加曽利Ｅ1式であろう。２・３はいわゆる縦位隆帯貼付文土器で同Ｅ2式古段階であろう。

土製品（第254図、図版113）

31は円板である。周縁の磨りはやや浅い。ほぼ均等な深さの両面穿孔であるが、特に裏面の穿孔は、機械的な回転によってできた真円の孔ではない。復元径約９㎝を測る大型で、厚みもある。

石器（第259図、図版117）

38は定角式磨製石斧の一部で、石材は角閃岩である。

(10) SK577（第175図、図版35）

遺跡北東部、19Ｐ－93グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.80m、短軸1.77m、底面で長軸2.02m、短軸1.80m、深さは78㎝を測る。覆土は中･下層はローム粒･ロームブロックを多く含む。ピットは南東壁面際に１か所ある。遺物は土器が出土した。覆土下層中の底面よりやや浮いた状態で出土したものが多い。所属時期は１ｂ期と考えられる。

土器（第222図、図版95）

１～３は同一個体であるが、互いに接合しない。内外面とも二次的火熱を強く受け、器面は荒れて脆くなっている。狭い口縁部文様帯に貼付隆線による半渦巻文やクランク文を組み合わせた文様が展開する。胴部は撚糸文を地文として懸垂文や蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ1式新段階であろう。

(10) SK579（第175図、図版35）

遺跡北東部、19Ｐ－84グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.70m、短軸1.50m、底面で長軸2.12m、短軸2.05m、深さは1.13mを測る。遺物は、主に覆土上層から中層から遺存状態の良好な土器が多く出土した。他時期の混在はあるが、所属時期は１ａ期と考えておきたい。

土器（第223図、図版63・64・96）

１は胴下部の破片で、外面は二次的火熱によりあばた状に荒れて脆くなっている。刻みの付いた隆線による楕円形区画文の上には弧状に区画した磨消縄文がわずかに残る。胴下部には蛇行沈線と単線の懸垂文を施す。２は低い山形突起に隆線が絡み、隆線上と口縁端部には縄文が付く。３は口縁の一部と胴上部の1/2強を欠く。口径15㎝、現存高15㎝を測る小型土器である。外面は各所に二次的火熱によるあばた状の荒れが残る。口縁部文様帯に波状の隆線を施す。胴部は縄文のみである。４は口縁部の1/4が遺存する。推定口径32㎝を測る。波状口縁の頂部に橋状突起が付く。口縁部文様は隆線によるクランク文や半渦巻文で、半渦巻文の右側にのみ集合沈線が入る。５は大型突起の破片で、外面に上下に重なる２孔、内面に左右に並ぶ２孔が開く。外面の２孔は凹線でＳ字状に縁取りされ、凹線の一部は三叉状に突き出ている。内面の２孔は沈線と隆線がＳ字様に絡む。外面の突起両裾と内面の突起頂部下には沈線による半渦巻文が付く。なお、外面右裾の半渦巻文は上孔の裏を回って内面の半渦巻文とつながる。一方、外面左裾の半渦巻文は上孔のやはり裏を回って内面の右孔の上縁から左孔の縁を巡る沈線につながる。６は交互刺突文と背割れ隆帯が見える。７は枠状区画隆線と集合沈線が見える。８は弧状の背割れ隆帯が集合する所に小型の半渦巻文が付く。９は貼付隆線の渦巻文である。10・11は頸部の破片で、10は平行沈線間に小波状文を入れ､頸部の区画文としているようである。11は背割れ隆帯による頸部と胴部の区画帯の上に波状沈線が､またその下には胴部懸垂文が認められる。12は小型の渦巻文を伴った枠状区画隆線が展開する。13は櫛歯条線文である。14は口縁の一部と底部の大部分を欠くほかは完形である。口径27㎝、器高38㎝、推定底径

9㎝を測る。底面の欠損部周辺に二次的火熱による荒れが認められる。細く段状に肥厚した口縁部とその直下を無文とし、以下全面に縄文を施す。15は肥厚した無文の口縁部幅が広い。16～20は底部及び底部から胴下部の土器である。16は磨り消されない懸垂文が認められる。17は底面とその周辺に二次的火熱を強く受けている。18は内面全体にあばた状の荒れが残る。２条１単位の隆線と単一隆線がほぼ交互に垂下している。19は底部直上からほぼ全体に二次的火熱を受けている。２条１単位の懸垂文と蛇行沈線を各４単位配している。20は浅鉢の底部と思われ、底面縁辺に使用による擦れが残る。１は勝坂式の遺風を強く残す加曽利Ｅ式、３・５～８・10・11は加曽利Ｅ1式古段階、４は同新段階、９は同2式古段階、12は同新段階であろう。

(10) SK652（第175図）

遺跡北東部、18Ｓ－14グリッド付近に位置する。平面形は不整長円形で、規模は長軸2.11m、短軸1.29m、深さ90㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第224図、図版95）

１は口縁直下に小型の隆線渦巻が認められる。２は撚糸文を施す。１は加曽利Ｅ2式古段階であろう。

(10) SK653（第175図、図版35）

遺跡北東部､18Ｓ－18グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.74m、短軸1.60m、深さ13㎝を測る。ピットは中央と東北壁面際にある。中央のものは深さ82㎝である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第224図、図版95）

１は口縁部文様帯の低い枠状隆線と胴部の磨消懸垂文が残る。加曽利Ｅ3式であろう。

(10) SK655（第175図、図版35）

遺跡北東部、17Ｔ－92グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.76m、短軸1.72m、底面で長軸2.15m、短軸1.95m、深さは84㎝を測る。ピットは東側壁面際に１か所ある。覆土は、下層はロームブロック主体で、焼土粒・炭化材を含む。遺物は土器が出土した。４は覆土下層の７層から出土した。それ以外の出土状況は不明である。

土器（第224図、図版96）

１は口縁突起を欠く破片で、肥厚した口縁直下には縄文が付く。２は上下の交互刺突文の間に短い集合沈線を施す。３は口縁部文様帯内に波状隆線を施す。４は環状突起が付く口縁部破片で、孔は沈線と短沈線で縁取りされ、裾部には三叉文が入る。口縁部文様帯には背割れ隆帯が展開する。５は小型の口縁突起に隆線による半渦巻文が絡む。６は低い背割れ隆帯による口縁部文様の破片、７は胴部の蛇行沈線の破片である。８は単純深鉢で、口縁下が無文帯となる。９は櫛歯条線による蛇行文を施す。口縁部は二次的火熱により器面が大きく剝がれている。11は底部の約1/4の破片である。推定底外径20㎝を測る。厚みのある高台の上に箍状の隆帯が乗る。高台には接地面に4個所の抉り込みが付き、底面は輪積み部分で脱落している。有孔鍔付土器の底部である。２はいわゆる中峠式、３・４・６は加曽利Ｅ1式で４は古段階であろう。

(10) SK658（第175図、図版35）

遺跡北東部、18Ｓ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸2.10m、短軸2.00m、底面で長軸2.20m、短軸1.96m、深さは53㎝を測る。ピットは中央付

近に２か所、南東壁面際に１か所ある。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第224図、図版95）

１は半截竹管内側による単一沈線の懸垂文である。加曽利Ｅ式前半であろう。

石器

チャートを石材とする剥片が１点出土した。

(11) SK1020（第175図、図版35）

遺跡中部、15Ｎ－94グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸93㎝、短軸85㎝、深さ33㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。２は微隆起線文が認められる。１は加曽利Ｅ3式中～新段階、２は同4式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(11) SK1021（第175図、図版35）

遺跡中部、16Ｎ－04グリッドに位置する陥穴である。開口部は長楕円形で、底面は長方形である。規模は長軸2.36m、短軸1.47m、深さ2.57mを測る。遺物は土器･石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は有孔鍔付土器である。加曽利Ｅ式後半であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(11) SK1025（第175図、図版35）

遺跡中部、16Ｎ－33グリッドに位置するピット状の土坑である。(11) SK1026の北西側に隣接する。開口部の平面形は楕円形である。規模は長軸97㎝、短軸80㎝、深さ1.13mを測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は厚みのある山形突起を持つ口縁部破片で、突起下には微隆起線の両側に指頭でなでた凹線が沿う。２は２条の隆線で大振りの渦巻文を描く。１・２ともいわゆる梶山類であろう。３は磨消懸垂文である。いずれも加曽利Ｅ3式で、１・２は新段階であろう。

(11) SK1026（第175図、図版35）

遺跡中部、16Ｎ－33グリッドに位置する。(11) SK1025の南東側に隣接する。平面形は不整卵円形、規模は長軸1.27m、短軸1.09mを測る。覆土は焼土を少し混入する。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第225図、図版96）

１は口縁下に沈線が巡り、その下に幅の狭い内部が磨り消された逆Ｕ字状文が付く。２は幅の狭い磨消懸垂文と思われるが、やや曲がっている。３・４は隆線による大振りの渦巻文を描くいわゆる梶山類であろう。加曽利Ｅ3式で、１・３・４は新段階であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品１点、石英斑岩製の磨石類の断片１点、ガラス質黒色安山岩の砕片１点が出土した。

(11) SK1027（第176図、図版35）

遺跡中部､16Ｎ－43グリッド付近に位置する。平面形は不整卵円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.28m、深さ91㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は縄文地に太めの沈線による逆Ｕ字状文が認められる。２は小型の山形突起を持ち、枠状の口縁部文様が見える。いずれも加曽利Ｅ3式で２は中段階であろう。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(11) SK1030（第176図、図版35）

遺跡中部、17Ｍ－06グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.29m、短軸1.16m、深さ1.03mを測る。側面は底面から中位までは直立し、上位は斜めに開く。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は幅の広い磨消懸垂文が認められる。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(11) SK1034（第176図、図版35）

遺跡中部、17Ｍ－42グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.47m、短軸1.28m、深さ65㎝を測る。覆土は上層に焼土･炭化粒を少量混入する。遺物は、覆土の上･中層の１・２層を中心に土器・土製品・石器が比較的多く出土した。所属時期は４ａ期と考えたい。

土器（第225図、図版96）

１～４は口縁部から胴部にかけて内側が無文となる逆Ｕ字状の区画文様を施すものである。１は波状口縁で、口縁下に円形刺突列と太めの沈線が巡る。２も波状口縁で、口縁下を巡る太めの沈線内に円形刺突を施す。３も波状口縁で、区画文様の角が尖り、やや複雑な文様が展開するかもしれない。４はごく低い波状口縁で、口縁下の沈線は太い。５は口縁側のＵ字状区画文と胴部側の逆Ｕ字状の区画文内に縄文を充填する。沈線は太めである。６は口縁下の沈線が細い。縄文は横位回転施文である。７・９は同一個体である。７は断面蒲鉾状の隆線で口縁部から胴部にかけて逆Ｕ字状区画文とやや幅の広い短冊状区画文を交互に施すもので、無文部がない。９は７の区画文の下端部分と思われる。８の隆線は逆Ｖ字状で７・９とは異なる区画文様である。10は隆線が渦巻状に展開する。11は口縁下の凹線内に円形刺突列を施す。凹線の下縁は低い隆線となる。12は口縁端部と口縁下の隆線上に刻み目が付く。13は断面三角形の微隆起線による区画文が見える。14は低い山形突起を持つ。口縁下に指頭による凹線を２条引くことによって、その間を微隆起線状に盛りあげている。以下は櫛歯条線文である。15は縄文と櫛歯条線文を併用している。16は無節の縄文､17は無文地に微隆起線による渦巻文を施す注口土器であろう。18はミニチュア土器である。指を差し込んで成形したようである。大部分は加曽利Ｅ3-4式で、７～10はこの時期のいわゆる梶山類の退化したものであろう。13は同4式であろう。

土製品（第254図、図版113）

32・33は小型の円板である。32は周縁の磨りはやや浅く、両面からほぼ均等に穿孔されている。器壁の厚さは一定ではない。33は表裏面から周縁にかけて全面に磨りが行われ、穿孔も表裏両面からほぼ均等になされている。

石器（第259図、図版117）

39は凹基無茎鏃である。先端が欠損している。石材は硬質頁岩である。図示した以外では、黒曜石の二次加工のある剝片１点・剝片１点・砕片２点、チャートの剝片５点・砕片６点が出土した。

(11) SK1037（第176図、図版36）

遺跡中部、17Ｎ－08グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.82m、短軸1.67m、深さ65㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版　）

１は凹線と縄文が付く。

(11) SK1039（第176図、図版36）

遺跡中部、16Ｎ－79グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.35m、短軸1.31m、深さ52㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は底部付近の破片で、左右両端に懸垂文が認められる。

(11) SK1041（第176図、図版36）

遺跡中部、18Ｍ－19グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.40m、短軸1.35m、深さ94㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器・土製品が出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は口縁直下の無文帯を浅い沈線で画する。２は同じく微隆起線で画する。３・４は断面蒲鉾状の隆起線が付く。いわゆる梶山類であろう。１・３・４は加曽利Ｅ3式新段階、２は同4式であろう。

土製品（第254図、図版113）

34は円板である。周縁の磨りはやや浅く、孔は両面穿孔であるが、裏面からの穿孔が強い。隆線文様が残り、いわゆる梶山類であることが分かる。伴出土器と同時期であろう。

(11) SK1042（第176図、図版36）

遺跡中部、16Ｏ－81グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.35m、短軸1.34m、深さ61㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１の隆線は断面三角形である。

(11) SK1045（第176図、図版36）

遺跡中部、15Ｎ－95グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.35m、深さ33㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は沈線による逆Ｕ字状区画内に縄文を充填する。加曽利Ｅ3式新段階～3-4式であろう。

(11) SK1048（第176図、図版36）

遺跡中部、16Ｎ－14グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.39m、短軸1.38m、深さ

66㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は櫛歯条線文を施す。

(11) SK1051（第176図、図版36）

遺跡中部、16Ｎ－14グリッド付近に位置する。４基の土坑が重複する。北側からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄと呼称した。(11) SK1051Aは、平面形は不整円形で、規模は長軸1.28m、短軸1.20m、深さ30㎝を測る。(11) SK1051Bは、北側をＡに切られ、南側をＤに切られている。平面形は不整楕円形で、規模は最大径1.90m、深さ33㎝を測る。(11) SK1051Cは東側をＢに切られている。規模は最大径80㎝、深さ32㎝を測る。底面にはピットが１か所ある。(11) SK1051Dは、規模は長軸59㎝、短軸50㎝、深さ12㎝を測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１の沈線は太めでU字状区画内に縄文を充填する。２は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品１点・剥片１点、黒曜石の剥片１点が出土した。

(11) SK1052（第176図、図版36）

遺跡中部、17Ｍ－39グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.39m、短軸1.35m、深さ60㎝を測る。側面は底面から中位までは直立し、上位は斜めに開く。覆土は上層に焼土を混入する。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第225図、図版96）

１は磨消懸垂文を施す。加曽利Ｅ3式であろう。

(12) SK007（第176図、図版36）

遺跡中部、19Ｏ－76グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は長軸1.15m、短軸1.08m、深さ64㎝を測る。覆土は上・中層に炭化物を含む。遺物は、覆土上・中層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１期としておきたい。

土器（第226図、図版96）

１は口縁突起である。橋状突起の上に、さらに外面１孔、内面眼鏡状の突起を乗せている。外面の上の孔を縁取った隆線は垂れ下がって口縁部文様帯の下部区画隆帯へ続く。孔の上には沈線による半渦巻文が付く。２は単純深鉢の口縁部に波状の隆帯が巡る。４・５は同一個体で、太い沈線による胴部文様が展開する。６は結節のある縄文を施す。３・７には隆帯が付く。８～10は浅鉢で、８には赤彩を施す。大部分は加曽利Ｅ1式で、１は古段階であろう。

石器（第259図、図版117）

40は石核である。黒曜石製で、サイコロ形を呈する。横長剥片の生産に関わる資料と考えられる。41は磨石類の破片である。断片的であるため、全体の形状は不明である。石材は安山岩である。

(12) SK008（第176図、図版36）

遺跡中部、19Ｏ－75グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.60m、短軸1.41m、底面で長軸1.80m、短軸1.58m、深さは80㎝を測る。北東側の壁面際に浅いピットが１か所ある。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１期としておきたい。

土器（第226図、図版97）

１は枠状の隆帯が口縁に付く。隆帯の一部は背割れになる。２は胴部文様帯の区画沈線と懸垂文が認められる。３は４条の沈線が垂下している。４は器台で、横長の孔が開く。１・２は加曽利Ｅ1式であろう。

石器

黒曜石の石核が１点出土した。

(12) SK010（第176図、図版36）

遺跡中部、19Ｏ－65グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.37m、短軸1.27m、底面で長軸1.47m、短軸1.39m、深さは47㎝を測る。遺物は土器が出土した。２は覆土中層から出土した。

土器（第226図、図版97）

１は口縁下に背割れ隆帯が認められる。２は底面の縁辺寄りに網代痕が残る。縁辺には使用による擦れが顕著である。１は加曽利Ｅ1式であろう。

(12) SK011（第177図、図版37）

遺跡中部、19Ｏ－58グリッドに位置する。平面形はほぼ卵円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.56m、短軸1.42m、底面で長軸1.91m、短軸1.80m、深さは74㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第226図、図版97）

１は胴部文様帯の区画沈線と懸垂文及び蛇行沈線が認められる。加曽利Ｅ式前半であろう。

(12) SK012（第177図、図版37）

遺跡中部、19Ｏ－48グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形は袋状である。底面は傾斜している。規模は、開口部で長軸1.68m、短軸1.50m、底面で長軸1.68m、短軸1.50m、深さ78㎝を測る。遺物は、覆土中層の２層を中心に多くの土器が出土した。混在もあるが、所属時期は１期と考えたい。

土器（第226・227図、図版64・97）

１は底部が完存し、口縁から胴下部は1/3から2/3が遺存する。推定口径16㎝、器高24㎝、底径９㎝を測る。口縁直下に１条の隆線が巡り、以下は全面縄文である。２は口縁部文様帯に波状隆線を、３は斜めの区画隆線を配する。４は背割れ隆帯による胴部区画帯下に懸垂文が認められる。５～７は胴部破片で、５は２条の横位沈線と懸垂文、６は蛇行沈線を施す。７は撚糸文である。８は口縁から胴上部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径13㎝を測る小型土器である。表裏面とも二次的火熱により荒れている。口縁部にわずかな段を持つのみの無文である。９は浅鉢である。口縁が内側に突出する。10は胴中位から底部までほぼ完存する。底径９㎝、現存高19㎝を測る。底面は使用による擦れは認められないが、内面は二次的火熱により荒れている。文様は３条ないし４条１単位の雑な懸垂文と蛇行沈線を交互に５単位施す。11は胴下部から底部が完存する。底径10㎝を測る。底面は使用による擦れが認められ、内面の胴下部破損個所付近に二次的火熱による荒れが顕著である。文様は２条から３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を交互に６単位施す。12は口縁直下の幅広の無文帯を指頭による凹線で画する。13は浅鉢か。幅広の口縁部は外反し、体上部は一旦膨らむ。欠損部下端には浅い凹線が巡る。大部分は加曽利Ｅ式前半で２～４は１式であろう。12は3式中～新段階、13もＥ式後半であろう。

(12) SK015（第177図、図版37）

遺跡中部、19O－67グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.80m、短軸1.37m、深さは80㎝を測る。遺物は、覆土の上・中層の１・２層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は１期と考えられる。

土器（第227図、図版97）

１は２尖の突起を持つらしい。口縁端部にペン先状工具による２条の押引文を突起頂部で折り返して施す。二次的火熱による荒れが左半分で顕著である。２・３には隆線による口縁部文様が認められる。４は刻み付きの隆帯と蛇行沈線が垂下する。５は３条１単位の懸垂文である。大部分が加曽利Ｅl式であろう。

石器

黒曜石の石核が１点出土した。

(12) SK025（第177図、図版37）

遺跡中部、17O－16グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.26m、短軸1.17m、深さ35㎝を測る。覆土は中層に焼土を混入する。遺物は、覆土中層を中心に土器が出土した。

土器（第227図、図版97）

１の２条の隆線は断面三角形に近い。２は底部が完存する。底径７㎝を測る。底面には使用による擦れが認められる。懸垂文の末端が数か所残るが単位は不明である。加曽利Ｅ式後半であろう。

(12) SK028（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－37グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.28m、深さ53㎝を測る。遺物は、覆土中層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第227図、図版97）

１は低い山形突起を持ち、口縁部には横に流れた隆線による枠状文を施す。胎土にすりつぶした土器片粒を少量含む。２は口縁部の枠状隆線と胴部区画の太い沈線が認められる。３は無文地に微隆起線による文様を施す。１・２は加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

石器（第259図、図版117）

42はほぼ完形の磨石類である。全体の形状は隅丸方形を呈する。全面にわたる磨耗痕のほか、上下両端に敲打痕、表裏中央に凹み痕が存する。石材は安山岩である。

(12) SK029（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－29グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸1.06m、深さ40㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第227図、図版97）

１は山形突起下に沈線による円文を配する。２は幅広の磨消懸垂文、３は櫛歯条線文である。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(12) SK030（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－29グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.08m、短軸98㎝、深さ44㎝を含む。遺物は、覆土上層から中層の１層から土器が少量出土した。

土器（第227図、図版97）

１は口縁直下の無文帯を太い沈線で画する。その下に縄文を充填した逆Ｕ字状文が展開する。逆Ｕ字状

文は２帯あるが幅が異なる。２は幅広の磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式新段階頃であろう。

(12) SK031（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－38グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸88㎝、短軸76㎝、深さ24㎝である。北側にピットが１か所ある。所属時期は３ｂ期と考えられる。遺物は、覆土全層中から土器が出土した。

土器（第227図、図版97）

１・２は同一個体である。３ないし４条１単位の浅く太い沈線で逆Ｕ字状文とＨ字状文を施す。２には蕨手文が見える。胎土にすりつぶした土器片粒をやや多く含む。加曽利Ｅ3式中2段階であろう。

(12) SK032（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－28グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸92㎝、短軸84㎝、深さ18㎝を測る。遺物は、覆土中から覆土下層を中心に土器・土製品が出土した。

土器（第227図、図版97）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

土製品（第254図、図版113）

35は小型の円板である。周縁の磨りは深く、孔はない。

(12) SK033（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－19グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸92㎝、短軸84㎝、深さ18㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第227図、図版97）

１は幅の狭い磨消懸垂文である。器面は荒れている。加曽利Ｅ3式であろう。

石器

チャートを石材とする剝片・砕片が各１点出土した。

(12) SK034（第177図、図版37）

遺跡中部、17Ｏ－30グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.57m、短軸1.08m、深さ25㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第227図、図版97）

１は口縁直下の幅広の無文帯を太めの沈線で画し、以下櫛歯条線文となる。加曽利Ｅ3式新段階頃であろう。

(12) SK035（第177図、図版37）

遺跡中部、17Ｏ－40グリッド付近に位置する。平面形は不整な隅丸方形である。規模は長軸1.12m、短軸97㎝、深さ27㎝である。覆土は、上層はロームブロック・ローム粒を含み、埋め戻しによるものと思われる。遺物は土器・石器が少量出土した。

土器（第227図、図版97）

１・２とも微隆起線文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

石器

黒曜石の砕片が１点出土した。

(12) SK039（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－39グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸66㎝、短軸47㎝、深さ16㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。

土器（第227図、図版97）

１は胴中段の破片で２段の凹点文は上部文様と下部文様を分帯する。胴下部には指頭による太い沈線で逆Ｕ字状文を施し、中に縄文を入れている。加曽利Ｅ3式中段階であろう。

(12) SK040（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－39グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸91㎝、短軸82㎝、深さ44㎝を測る。遺物は、覆土全層中より土器・土製品が出土した。

土器（第227図、図版97）

１・２は磨消懸垂文で、２はその幅が広い。３・４は櫛歯条線文で、４には下端断面に輪積み部分の接着を強化させるための刻み目が認められる。いずれも加曽利Ｅ3式であろう。

土製品（第254図、図版113）

円板が３点出土した。いずれもほぼ均等な両面穿孔で、36・37の周縁の磨りは深く、38はやや浅い。

(12) SK043（第177図、図版37）

遺跡中部、17Ｐ－72グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸2.03m、短軸1.85m、深さ70㎝を測る。遺物は、覆土全層中から土器・石器が出土した。

土器（第227図、図版97）

１は磨消懸垂文、２は太めの沈線による内部無文の逆Ｕ字状文が認められる。３の口縁直下の沈線は指頭状の凹線である。４は隆線による枠状文、５は隆線による大振りの渦巻文である。いずれも加曽利Ｅ3式で、２～５は新段階、５はいわゆる梶山類であろう。

石器

安山岩製の磨石類が１点、チャート製の石鏃未成品２点・砕片１点、黒曜石の石核１点・剥片１点が出土した。

(12) SK062（第177図、図版37）

遺跡中部、18Ｐ－40グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.09m、短軸95㎝、深さ27㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第227図、図版97）

１は磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式であろう。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(12) SK065（第177図）

遺跡中部、18Ｐ－30グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.26m、深さ43㎝を測る。遺物は土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第227図、図版97）

１・２は同一個体である。中位の太さの沈線で逆Ｕ字状文や蕨手文を施す。加曽利Ｅ3式中段階頃であろう。

土製品（第254・255図、図版113・114）

円板が２点出土した。39は周縁の磨りはやや浅く、孔はほぼ均等な両面穿孔である。ただし、孔は真円ではなく、隅丸三角形に近い形状をなる。40は周縁の磨りが深い。孔は両面に未貫通の孔が認められるが、表面の孔は中心から大きくずれている。

石器

チャート製の石鏃未成品１点・剥片２点、珪質頁岩の剥片が１点出土した。

(12) SK070（第178図、図版38）

遺跡中部、19Ｐ－11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.29m、短軸1.19m、深さ30㎝を測る。遺物は、覆土中層を中心に土器が出土した。所属時期は１ｂ期と考えられる。

土器（第228図、図版64）

１は、口縁部付近が西側、胴部が東側などから出土した。口縁の2/3、胴上部の1/3が遺存する。他に口縁部破片が多くあるが接合しない。口径25㎝、突起頂部からの現存高19㎝を測る。耳状の突起は３単位で、それぞれの突起に付く文様が異なる。左から集合沈線、３字状の隆線と集合沈線、隆線渦巻である。口縁部文様帯には貼付隆線による渦巻文やクランク状の文様が展開する。胴部は３条１単位の懸垂文と蛇行沈線を交互に施す。２は胴下部から底部がほぼ完存する。底径8㎝、現存高13㎝を測る。器表面の一部に二次的火熱による荒れが認められる。浅い縄文のみを施す。１は加曽利Ｅ1式新段階であろう。

(12) SK071（第178図、図版38）

遺跡中部、17Ｎ－78グリッドに位置する。北側を奈良・平安時代の竪穴住居跡(12)SI071に切られている。平面形は不整円形で、規模は長軸1.48m、短軸1.45m、深さ65㎝を測る。ピットは南西壁面際に１か所あり、底面から張り出す。覆土は上層に炭化物を含む。遺物は土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版97）

１はごく低い隆線による口縁部文様帯の枠状文が見え、せり上がった隆線下のみに縄文が認められる。２は隆線による大振りの渦巻文の一部であろう。３は縄文のみ、４は波状口縁で広い口縁直下の無文帯を沈線で画する。１・２は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

41は円板である。周縁の磨りはやや浅い。孔は両面からほぼ均等に穿孔される。

石器

チャートの剥片４点・砕片２点、凝灰岩の剥片１点、黒曜石の砕片１点が出土した。

(13) SK605（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－68グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.80m、短軸1.76m、底面で長軸1.93m、短軸1.83m、深さは62㎝を測る。ピットは東側に１か所ある。覆土はローム粒を多く含む層が主体である。遺物は土器が少量出土した。土器１から所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第228図、図版64・97）

１は口縁部の1/2が遺存する。推定口径18㎝、現存高20㎝を測る。内面はほぼ全体に二次的火熱により荒れている。肥厚した口縁下に交互刺突文が巡り、その下に集合沈線帯を配する。胴部との境には軽い段

を設けている。２は口縁部の1/2強が遺存する。口径17㎝を測る。口縁の無文帯下に２条の沈線が巡り、以下縄文のみとなる。縄文は全面縦位施文であるが、現状では１か所のみ懸垂文様風に縦走する縄文が認められる。３は口縁直下に２条の角押文が巡り、以下縄文となる。４は小型の鉢で、底部が輪積み部分で脱落しているほかは完存する。口径12㎝、現存高10㎝を測る。擬口縁で、現口縁端部には表裏両面に未貫通の補修孔が残る。補修をあきらめて口縁を作り直したのであろう。１は加曽利Ｅ1式古段階、３は七郎内Ⅱ群土器ないしは諏訪タイプの影響を受けた土器と思われる。

(13) SK607（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－67グリッド付近に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸2.42m、底面は1.99m、深さ59㎝を測る。ピットは２か所あり、同規模の径約40㎝、深さ23㎝を測る。覆土はローム粒を含み、焼土粒を混入する。遺物は土器・石器が少量出土した。土器１・２から所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第228図、図版97）

１・２は覆土中層の１層から出土した。１は掲載以外に多数の破片があるが接合しない。内折した無文の口縁下に幅広の押引文が乗った波状の隆帯を施すが、小破片の中には押引文が付かないものがある。地文は撚糸文である。２は口縁部と胴部の境が算盤玉状に張り出す特異な器形を持つ。口縁部の約1/5が遺存する。推定口径24㎝を測る。刻み付きの隆線が口縁と平行して巡り、半渦巻文となる所もある。３・４は口縁部文様帯に背割れ隆帯が認められる。５は口縁部文様帯の下部区画隆帯、７は口縁部文様帯の上部区画隆線の上に２条の沈線が認められる。２はいわゆる中峠式、３・４は加曽利Ｅ1式であろう。

石器

ホルンフェルス製の敲石１点、石英製の石鏃未成品１点・剥片１点、黒曜石の剥片４点が出土した。

(13) SK608（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－55グリッド付近に位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.86m、短軸1.70m、深さ42㎝である。ピットは北東側に１か所ある。平面形は眼鏡状であることから２か所以上のピットが重複したものと考えられる。深さ67㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は懸垂文と蛇行沈線が認められる。２の底部は内面に炭化物が付着している。１は加曽利Ｅ式前半であろう。

(13) SK610（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－77グリッド付近に位置する。平面形は卵円形である。規模は長軸2.12m、短軸1.85m、深さ47㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は懸垂文間に蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(13) SK611（第178図）

遺跡北東部、20Ｐ－50グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸2.00m、短軸1.84m、深さ84㎝を測る。ピットは東及び南壁面際に２か所ある。覆土中には焼土・炭化物を混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は波状突起頂部から隆線が左右に派生して垂れ、口縁との間に生まれた空間には粗雑な交互刺突文を

入れている。口縁部以下は撚糸文である。２は隆線と刻み付き隆線による円文ないしは渦巻文の一部と思われる。３は浅い沈線による多条の懸垂文と蛇行文を施す。４は底部の1/2強が遺存する。底径８㎝を測る。内面は二次的火熱により荒れている。１はいわゆる中峠式に近縁のもの、２は勝坂式、３は加曽利Ｅ式前半であろう。

(13) SK612（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－29グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸2.18m、短軸1.76m、深さ45㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は縄文のみ施す。

(13) SK615（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－36グリッド付近に位置する。平面形は円形である。規模は長軸2.11m、短軸2.06m、深さ60㎝を測る。ピットは３か所壁面際にある。覆土は中・下層はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は胴部区画隆帯の下に懸垂文と蛇行沈線を施す。加曽利Ｅ式前半であろう。

(13) SK616（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－66グリッド付近に位置する。平面形は隅丸方形である。規模は長軸1.81m、短軸1.44m、深さ37㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１は刻み付きの隆線による円文内にペン先状工具による押引文を充填する。円文の右側には大型の三叉文が認められる。２は口縁部文様帯に背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線を施す。１は勝坂式、２は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(13) SK617（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｐ－51グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸2.14m、短軸1.75m、深さ50㎝を測る。ピットは南西壁面際に２か所ある。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第228図、図版98）

１・２とも懸垂文が付くが、２は磨り消されている。１は加曽利Ｅ式前半、２は後半であろう。

(13) SK618（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｐ－40グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸2.11m、短軸1.85m、深さ59㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は口縁が背割れ隆帯状となり、山形突起上で半渦巻文を作る。口縁部は波状の隆線が展開する。２は幅広の磨消懸垂文である。１は加曽利Ｅ1式新段階、２は同3式中段階前後であろう。

(13) SK619（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－18グリッド付近に位置する。北東側1/4は調査区外に及んでいた。平面形はほぼ円形である。規模は最大径1.82m、深さ52㎝を測る。ピットは東壁面際に１か所ある。遺物は土器・石器

が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は口縁が背割れ隆帯状となり、山形突起上で半渦巻文を作る。口縁部には縄文地に沈線文様が展開する。２は２条の隆線が残る。１は加曽利Ｅ1式であろう。

石器

花崗岩製の磨石類が１点出土した。

(13) SK622（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－86グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.83m、短軸1.61m、底部で長軸1.97m、短軸1.88m、深さは43㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は山形突起片で、口縁端部に幅広の沈線を施し、その一部はキャタピラ文となる。外面も沈線で縁取っている。２は胴上部から胴下部の破片で、表面は二次的火熱であばた状の荒れが広く認められる。１はいわゆる中峠式に近縁のものであろう。

(13) SK625（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－17グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.79m、短軸1.70m、深さ50㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は蛇行沈線、２は幅の狭い磨消懸垂文を施す。１は加曽利Ｅ式前半、２は同3式であろう。

石器

砂岩製の定角式磨製石斧の胴部片が１点出土した。

(13) SK635（第178図、図版38）

遺跡北東部、20Ｏ－45グリッド付近に位置する。平面形は不整円形である。規模は長軸2.43m、短軸2.28m、深さ80㎝を測る。ピットは南東壁面際に１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は口縁部文様帯の隆線による矩形の枠状文が認められる。２は弧状と垂下する沈線が見える。３は浅鉢で弧状の沈線が残る。１・２は加曽利Ｅ式前半であろう。

(13) SK641（第178図、図版39）

遺跡北東部、20Ｏ－76グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸2.25m、短軸2.08m、深さ32㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は口縁端部と口縁部の隆帯上にささら状の多截竹管による押引文を施す。いわゆる中峠式に近縁の土器であろう。

(13) SK642（第179図、図版39）

遺跡北東部、20Ｏ－14グリッド付近に位置する。平面形は不整円形である。規模は長軸1.97m、短軸1.78m、深さ76㎝を測る。ピットは東から南側面下に２か所ある。覆土はロームブロックを多く含む。遺物

は土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第229図、図版64・98）

１は口縁から胴部まで1/3強が遺存する。推定口径21㎝、現存高19㎝を測る。口縁突起を欠く。表裏面とも二次的火熱により全面にあばた状の荒れが認められる。突起基部を巡る隆線は狭い口縁部文様帯の下部区画帯につながる。文様帯内には粗大な交互刺突文を施す。２は山形突起に背割れ隆帯による半渦巻文を配する。１はいわゆる中峠式、２は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(13) SK643（第179図、図版39）

遺跡北東部、20Ｏ－34グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形である。規模は、長軸2.60m、短軸2.31m、深さ83㎝を測る。ピットは４か所ある。長方形に配列され、規模は均一である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版98）

１は口縁部が背割れ隆帯状になり、突起頂部で渦巻文を作る。口縁部文様帯には背割れ隆帯のクランク文と隆線による剣先状の文様が認められる。加曽利Ｅ1式新段階であろう。

(13) SK644（第179図、図版39）

遺跡北東部、18Ｍ－35グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.98m、短軸1.76m、深さ60㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第229図、図版64・98）

１～３は隆線で大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類と思われる。１・３は渦巻文と口縁部区画隆線ないしは渦巻文同士を連結する短隆線が認められる。４は同種の隆線区画と広い無文部に蕨手文の一部が見える。５・６は沈線区画内に縄文を施す。６は沈線が太く、区画沈線は一部角張っている。７は橋状突起を持つ小型土器である。８は低い山形突起が付く。拓影右下端に逆Ｕ字状の磨消部がある。９は胴下部から底部にかけて約1/2が遺存する。推定底径６㎝を測る。内面は二次的火熱であばた状に荒れている。１～４は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(13) SK646（第179図、図版39）

遺跡北東部、20Ｐ－41グリッド付近に位置する。北東側約1/4は調査区外に及んでいる。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は最大径2.33m、深さ83㎝を測る。北東壁面際に１か所ある。覆土は焼土粒を混入する。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第229図、図版65・98）

１は口縁部の一部を欠くが、ほぼ全周する。口径24㎝を測る。内面のほぼ全体に二次的火熱によるあばた状の荒れが認められる。口縁突起は３単位で、耳状の突起が2個残り、主突起と思われる１個は欠失している。２個の突起は一方が大きく左右の孔が貫通するが、もう一方は小さく盲孔が1個付くのみである。文様は刻み付きの隆線が突起を縁取った後、一方は口縁直下を巡り、もう一方は口縁部文様帯の下部区画帯と文様帯内の弧状文様に別れる。下部区画帯下には波状の隆帯が巡る。２は口縁部文様帯内の背割れ隆帯による半渦巻文と集合沈線が認められる。３は口縁部の枠状隆帯の下に２条の平行沈線を施す。４は二重の半渦巻文に蛇行沈線がからむ。５は単純深鉢で、口縁下に１条の沈線のみを施す。１は在地の勝坂式、２・３は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(13) SK647（第179図、図版39）

遺跡北東部､18Ｌ－15グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.75m､短軸1.63m、深さ40㎝である。遺物は土器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第230図、図版98）

１の深鉢は底面上から破片が散らばった状態で出土した。低い山形の口縁突起を持つ。口縁部文様帯は突起下に低い隆線による円文を配し、円文間を枠状文でつないでいる。胴部文様帯は幅の広い磨消懸垂文である。２は縄文のみを施す。１は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(13) SK649（第179図）

遺跡北東部、17Ｌ－43グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.15m、短軸1.04m､深さ70㎝である。覆土は焼土粒･炭化物を含む。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。他の時期のものが混在するが、土器１～３から所属時期は４ａ期と考えたい。

土器（第230図、図版64・98）

１は口縁部が完存する。口径22㎝を測る。口縁突起は４単位で、１個は柱状、３個は波状である。柱状突起の頂部は中央が窪み、縁辺の一端が途切れて口縁直下の沈線とつながっている。口縁部文様は内部を磨消したおそらく横Ｓ字状となる区画文様が５単位展開する。沈線は中位の太さである。２は波状突起を持ち､その下に内部を磨消した弧状の沈線区画文が２条認められる。沈線は１と同様中位の太さである。３は内部に縄文を入れた逆Ｕ字状の沈線区画を施す。やはり沈線は中位の太さである。４は低い隆線によるＴ字状区画の上にＵ字状の沈線が２単位残っている。５は微隆起線文である。６は縄文のみで、口縁直下に狭い無文帯を持つ。７は櫛歯条線文である。１～３は加曽利Ｅ3-4式､４は同3式､５は同4式であろう。

(13) SK650（第179図、図版39）

遺跡北東部､20Ｏ－25グリッドに位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.95m、短軸1.90m、深さ60㎝である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。土器２・３から所属時期は１ａ期と考えたい。

土器（第230図、図版65・98）

１は段が付く口縁部無文帯と屈折する頸部に幅広の押引文を施す。２は眼鏡状突起の上に環状突起が乗る。眼鏡状突起の孔は沈線で縁取りされ、脇には背割れ隆帯が認められる。３は山形突起を持つ小型の土器で、背割れ隆帯による矩形の区画文と沈線文様を施す。４は懸垂文と蛇行沈線を施す。５は底部がほぼ完存する。底径12㎝を測る大型土器の底部で、器壁も厚い。底面全体に網代痕が残る。破損部は二次的火熱により脆くなっている。１は七郎内Ⅱ群土器に近似する。２・３は加曽利Ｅ1式古段階であろう。

(13) SK660（第179図、図版39）

遺跡北東部、18Ｌ－26グリッドに位置する。３基の円形土坑が重複する。土層断面より中央の土坑が最も新しいと判断される。北西側からＡ、Ｂ、Ｃと呼称する。(13) SK660Aは、規模は最大径1.24m、深さ68㎝を測る。(13) SK660Bは、平面形は楕円形で、規模は長軸1.30m､短軸1.07m､深さ65㎝を測る。ピットは東側に２か所ある。覆土中に焼土を混入する。(13)SK660Cは､規模は最大径1.35m､深さ60㎝を測る。ピットは中央に１か所、北側に１か所ある。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第230図、図版98）

１は隆線による口縁部区画と円文ないしは渦巻文の一部と思われる文様の一部が残る。２は低い隆線に

よる枠状区画と思われる。３は中位の太さの沈線による区画文様が認められる。いずれも加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

石器

黒曜石の剥片が1点出土した。

(14) SK123（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－17グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸99㎝、短軸90㎝、深さ30㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版98）

１は口縁直下の無文帯に指頭による凹線を施す。２は縄文のみである。１は加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(14) SK125（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－53グリッド付近に位置するピット状の小規模な土坑である。平面形はほぼ円形、断面形は漏斗状である。規模は長軸53㎝、短軸50㎝、深さ23㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版98）

１は縄文のみ施す。

(14) SK127（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－36グリッドに位置する。北東側は撹乱により失われていた。平面形は楕円形で、規模は長軸約1.33m、短軸1.05m、深さ1.23mを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土器・石器が少量出土した。

土器（第231図、図版98）

１の注口土器は覆土中層の２層下部から出土した。口縁部の1/3ほどが遺存する。推定口径12㎝を測る。口縁直下の無文帯に指頭によるごく浅い凹線を施す。口縁の右端欠損部に横渡しの橋状突起が付くようである。２の口縁直下の無文帯は浅く窪む。いずれも加曽利Ｅ3-4式であろう。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(14) SK128（第179図）

遺跡北部、18Ｋ－45グリッドに位置する。平面形は卵円形である。規模は長軸1.26m、短軸1.12m、深さ26㎝を測る。覆土はローム粒を多量に含み、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器

加曽利Ｅ式の小片が１点出土した。

石器（第259図、図版117）

43は凹基無茎鏃である。信州系黒曜石を用材としている。図示した以外では、チャートの剥片が１点出土した。

(14) SK130（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－34グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.09m、

短軸91㎝、深さ28㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版99）

１の口縁直下の無文帯は浅く窪む。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(14) SK132（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－44グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.25m、短軸1.15m、深さ76㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は土器・石器が覆土上層を中心に出土した。

土器（第231図、図版99）

１は微隆起線による区画文が見える。加曽利Ｅ4式であろう。

石器

ガラス質黒色安山岩の剝片１点、チャートの剝片１点が出土した。

(14) SK133（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－54グリッド付近に位置する。南西側に（14）SK134が近接する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.28m、短軸1.00m、深さ40㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版99）

１はやや幅広の磨消懸垂文である。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(14) SK134（第179図、図版39）

遺跡北部、18Ｋ－54グリッド付近に位置する。北東側に（14）SK133が近接する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は径1.56m、深さ90㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、３・４層を中心に土器が出土した。

土器（第231図、図版99）

１は磨消懸垂文、２は縄文のみ、３は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式であろう。

(14) SK136（第179図、図版40）

遺跡北部、18Ｋ－23グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.10m、短軸96㎝、深さ64㎝を測る。覆土中にローム粒・ロームブロックを含み、埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版99）

１は磨消懸垂文、２は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(14) SK137（第179図、図版40）

遺跡北部、18Ｋ－32グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.45m、短軸1.35m、深さ55㎝を測る。覆土中は炭化粒・焼土を含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、２～４層を中心に多量の土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第231図、図版99）

１は幅広の磨消懸垂文を施す胴下部の破片で、炭化物が付着する。２～４は同一個体である。波状突起の片側に隆線が取り巻いて凹線帯を形成し、口縁下を巡る。口縁直下には突起裾から刻み目が付く。口縁部文様は突起下に沈線による蕨手文が２個認められる。３では隆線がハ字状に付き、４では隆線がX字状に交差する。５は（14）SK146の２と同一個体である。波状突起の頂部から隆線が左右に垂れて口縁部文様となり、その下に内部が無文の沈線帯を逆U字状に施す。６は波状口縁で、口縁直下に円形刺突列が巡る。その下には内部を無文とした沈線で逆U字状文を施す。７は隆線で大振りな渦巻文を施すいわゆる梶山類であろう。８は微隆起線文の土器で、９は口縁下に大きめの刻みが付く。10は口縁から胴下部まで1/4弱が遺存する。推定口径27㎝、現存高26㎝を測る。内外面ともほぼ全面に二次的火熱によって荒れており、特に内面の胴部はあばた状の荒れが目立つ。口縁部はキャリパー状に膨らみ、口縁直下には指頭による凹線が巡る。８は加曽利Ｅ4式、他は同3式新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

円板が２点出土した。42は周縁の磨りは深く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。43は周縁の磨りはやや浅く、孔はない。薄手である。

石器（第259図、図版117）

44は流紋岩製の石鏃の一部であるが、断片的なため全体の形状は不明である。45は定角式磨製石斧の基部片である。石材は砂岩である。図示した以外では、メノウ製の楔形石器１点、チャートなどの剥片２点・砕片１点が出土した。

（14）SK138（第179図、図版40）

遺跡北部、18Ｋ－63グリッド付近に位置する。隅丸楕円形の小規模な土坑である。断面形はたらい状である。規模は長軸89㎝、短軸82㎝、深さ33㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第231図、図版99）

１は（14）SK143の３と同一個体である。

（14）SK141・（14）SK142（第180図）

遺跡中央部、18Ｋ－42グリッド付近に位置する。（14）SK142が（14）SK141を切っている。（14）SK141は、平面形はほぼ円形、規模は径87㎝、深さ38㎝を測る。（14）SK142は、平面形はほぼ円形、規模は長軸1.20ｍ、短軸1.03ｍ、深さ41㎝を測る。遺物は、（14）SK141からは出土せず、（14）SK142は南側の底面より石鏃が１点出土した。

石器（第259図、図版117）

46は凹基無茎鏃である。片脚が欠損している。石材は信州系黒曜石である。

（14）SK143（第180図、図版40）

遺跡北部、18Ｋ－52グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.25ｍ、短軸98㎝、深さ49㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体であった。上層は焼土粒を含む。遺物は、覆土上・中層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は４ａ期と考えられる。

土器（第231図、図版99）

１は波状口縁で、口縁直下に無文帯が巡るが、無文帯の下端はわずかに盛り上がって微隆起線状とな

る。２は磨消懸垂文である。３は（14）SK138の１と同一個体で、口縁から胴部の1/4が遺存する。推定口径23㎝、現存高20を測る甕型の土器である。内外面とも胴の欠損部寄りに二次的火熱によるあばた状の荒れが残る。口縁部を広い無文帯とし、以下櫛歯条線で渦巻文様を施す。４は口縁から胴上部の1/4弱が遺存する。推定口径24㎝を測る甕型の土器である。口縁部を広い無文帯とし､以下横位回転の縄文を施すが､胴部では一部縦位回転の縄文が認められる。２は加曽利Ｅ3式、他は同3-4式であろう。

石器

黒曜石の剥片１点・砕片５点、チャートの剥片２点、ガラス質黒色安山岩の砕片３点、チャートの剥片２点、ガラス質黒色安山岩の砕片３点・頁岩の砕片１点が出土した。

（14）SK145（第180図、図版40）

遺跡北部、18Ｋ－30グリッド付近に位置する。（10）SI140と重複する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.27m､短軸1.29m､深さ65㎝を測る。覆土はローム粒･ロームブロックを含む。

遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第231図、図版99）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。加曽利Ｅ4式であろう。

（14）SK146（第180図）

遺跡北部､18Ｊ－58グリッド付近に位置する。平面形は円形､断面形はたらい状である。規模は長軸1.42m、短軸1.36m、深さ75㎝を測る。覆土は、上層は焼土を多く含み、埋め戻されたものと思われる。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は、覆土上層の１層出土の１・５などと中層の３層出土の４・６・７などに分かれる。所属時期は土器１・２から３ｃ期と考えられる。

土器（第232図、図版99）

１は同様の破片がもう１点ある。推定口径16㎝の小型土器である。内外面とも二次的火熱によりあばた状の荒れが目立つ。単隆線でやや縦長な大振りの渦巻文が展開する。渦巻文は口縁下を巡る隆線や隣接する渦巻文と短隆線でつながっている。２は（14）SK137の５と同一個体である。３は口縁直下に無文帯が巡るが、縄文帯との境に段が付く。４は磨消懸垂文である。５は山形の口縁突起が付く縄文のみの土器である。突起下のみ横位回転の縄文となる。６は底部の3/4、胴部の1/4弱が遺存する。底径8㎝、胴部推定最大径32㎝を測る。底面は使用による擦れが目立つ。７は底部が完存する。底径５㎝を測る。内面は二次的火熱により荒れており、底面の縁辺は使用による擦れが顕著である。１・２は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器（第259図、図版117）

47はチャート製の凹基無茎鏃である。完形品で比較的大型である。図示した以外では、黒曜石の石核１点、チャートの剥片１点が出土した。

（17）SK009（第180図、図版40）

遺跡東部、21Ｎ－29グリッド付近に位置する。平面形は卵円形、断面形はわずかに袋状である。規模は長軸2.56m､短軸2.18m､深さ49㎝を測る。覆土はローム粒を多く含み､上層には焼土を混入する。遺物は、覆土上層を中心として土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第232図、図版65・99）

１は大型の眼鏡状突起である。突起下から隆線が垂下している。２は刻み付きの隆帯による円文ないし

は楕円文と沈線及び刻み目による文様を施す。３は粗雑な交互刺突文を施す。４は肥厚した口縁部無文帯を持つ。５は浅鉢で、口縁に赤彩が残る。６は底部が完存する。底径11㎝を測る大型土器である。底面は特に縁辺に使用による擦れが残り、内外面は二次的火熱による荒れが顕著である。１・２は勝坂式末期で、他も同時期であろう。

(17) SK011（第180図、図版40）

遺跡東部、20Ｏ－62グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.82m、短軸1.56m、底面で長軸1.93m、短軸1.92m、深さは74㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第232図、図版99）

１は波状口縁で、口縁直下の無文帯を刻み付き隆線で画する。２は口縁部文様帯の区画隆線が、３・４は胴部懸垂文が認められる。５は縄文、６は撚糸文で、６は（13）SK607の１と同一個体である。７は底部が完存する。底径7㎝を測る。底面縁辺には使用による擦れや欠けが認められ、内面は二次的火熱による荒れやひびが顕著である。８は縄文のみの胴下部破片である。いずれも加曽利Ｅ式前半であろう。６と同一個体の（13）SK607の１はいわゆる中峠式である。

(17) SK012（第180図、図版40）

遺跡東部、20Ｏ－71グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.46m、短軸1.25m、底面で長軸1.80m、短軸1.72m、深さは63㎝を測る。覆土は底面付近に粘土の分布がみられる。遺物は、覆土中層を中心に土器が出土した。２は覆土上層から出土した。

土器（第232図、図版99）

１は櫛歯条線文を施す。２は浅鉢で、口縁端部から内面に赤彩の痕跡が残る。

(17) SK014（第180図、図版40）

遺跡東部、20Ｏ－62グリッドに位置する。平面形は卵円形である。規模は長軸90㎝、短軸80㎝、深さ45㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第232図、図版99）

１は隆線に沿って沈線を施す。

(17) SK017（第180図、図版40）

遺跡東部、21Ｏ－05グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、断面形はわずかに袋状である。規模は長軸1.76m、短軸1.61m、深さ35㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第232図、図版99）

１は口縁部文様帯内に背割れ隆帯による文様が認められる。２は口縁部文様帯内の背割れ隆帯と集合沈線の文様が残る。３は隆線が付く。４は胴下部の破片で櫛歯条線文を施す。５は波状口縁の土器である。６は縄文のみの胴下部破片で、内外面とも二次的火熱による荒れが顕著である。１・２は加曽利Ｅ1式であろう。

(17) SK018（第180図）

遺跡東部、21Ｏ－23グリッドに位置する。南東側は撹乱を受けていた。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.48m、短軸1.37m、底部で長軸1.78m、短軸1.70m、深さは76㎝を測る。ピットは中央付近と北西壁面際にある。覆土は全層にわたってローム粒・ロームブロックを含む。遺物は

土器が出土した。出土状況は不明である。土器１から所属時期は３b 期と考えたい。

土器（第233図、図版100）

１は両耳壺と思われ、口縁から体下部までの約1/4が遺存する。推定口径36㎝、現存高24㎝を測る。外反する口縁部は無文で、体上部に低い隆線による枠状文と巻きの緩んだ渦巻文を施す。地文は撚糸文で、原体は０段多条のＲＬである。２は口縁部に低い区画隆線が認められる。３は磨消懸垂文、４は磨り消されない懸垂文を施す。５は櫛歯条線文である。１～３は加曽利Ｅ3式で、１は中段階であろう。

（17）SK019（第180図、図版40）

遺跡東部、21Ｏ－61グリッドに位置する。奈良・平安時代の掘立柱建物（17）SB001と重複する。平面形は不整円形、断面形は袋状である。規模は、開口部で長軸1.68m、短軸1.67m、底部で長軸2.06m、短軸1.90m、深さは75㎝を測る。遺物は、覆土の上・中層の１・２・４層を中心に土器が出土した。所属時期は１ａ期と考えられる。

土器（第233図、図版100）

１は口縁部から胴上部の大型破片で、口縁部の1/4弱が遺存する。推定口径32㎝、現存高23㎝を測る。（16）SI003の３と同一個体である。内面は二次的火熱による荒れが顕著である。口縁部文様帯内に背割れ隆帯と集合沈線を施す。２は口縁から胴下部にかけての３点の大型破片と小破片からなるが、互いに接合しない。全体を合わせると1/3強が遺存する。両耳壺状の器形をなし、推定口径40㎝を測る大型土器である。内面は二次的火熱による荒れが著しく、脆くなっている。外反する口縁部は無文で、胴上部に背割れ隆帯による枠状文と突起状に盛り上がった半渦巻文を交互に配する。半渦巻文はそれぞれ異なり、中心に貫通孔を持つもの、盲孔を持つものなどがあり、上段実測図の右端には立体突起が付いていたらしい。胴部には太い２条１単位の沈線で大振りな蛇行文様を施す。３は底部が完存する。底径7㎝を測る。内面は二次的火熱による荒れが顕著で、脆くなっている。１・２とも加曽利Ｅ1式古段階であろう。２の胴部文様は大木８ａ式の影響が考えられる。

（19）SK681（第180図、図版40）

遺跡中部、19Ｊ－59グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸2.04m、短軸1.97m、深さ97㎝を測る。覆土はローム粒を多く含み、焼土・炭化物を混入する。遺物は土器・土製品・石器が覆土上層の１・４・５層を中心に出土した。混在はあるものの所属時期は３ｃ期と考えたい。

土器（第234図、図版65・100）

１は磨消懸垂文で、沈線は指頭状の太いものである。２～４は同一個体で、上半は２条１単位の指頭による凹線で大振りのＳ字状文ないしは渦巻文を描く。凹線間は無文である。下半は単独の凹線で逆Ｕ字状文を施している。５は中位の太さの沈線で口縁直下の無文帯を画し、その下に内部無文の逆Ｕ字状区画文を施す。６は口縁から胴上部にかけての個体で、口縁部は1/2強遺存する。推定口径19㎝を測る。強いキャリパー型の器形で、内弯する口縁直下に指頭による凹帯を設けその中に２段の刺突列を施す。胴部文様は内部に縄文を入れた沈線によるＵ字状区画文と短冊文が垂下する。沈線はやや細めである。なお、縄文は磨り消しである。７は口縁部から胴下部にかけての約1/4の破片と口縁部から胴上部にかけての大型破片などからなるが、互いに接合しない。４単位の波状突起を持つキャリパー型の器形で、推定口径23㎝、現存高28㎝を測る。口縁直下の無文帯を太い沈線で画し、胴部全体に同じ太い沈線で内部を磨り消したＨ字状区画文を施す。８は胴上部の破片で、内部無文の沈線帯が渦巻ないしは横Ｓ字状に展開するものと思

われる。沈線は太めで、縄文は充填縄文である。９は沈線によるＵ字状文で、内部に縄文が入る。沈線は中位の太さである。11～15は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。11～13は同一個体で、14・15は単独隆線で文様が展開している。16は口縁部の1/4弱が遺存する。推定口径18㎝で、器壁は薄い。口縁直下の浅く窪んだ無文帯は左右からぶつかってつまみ状に盛り上がっている。縄文の走行が左右で異なる。17の底部は16と同一個体である。完存する底部の径は5㎝である。18は口縁直下の無文帯の調整が不十分である。19・20は無文地に微隆起線を施す。19には赤彩が認められる。おそらく漆に混ぜて塗布されたものであろう。21はミニチュア土器の胴部から底部の破片である。底径４㎝を測る。１～４・７・８・10～15は加曽利Ｅ3式新段階で、５・６・９・16・18は3-4式の可能性がある。

土製品（第255図、図版114）

円板が13点、土器片錘が１点出土した。円板の内、孔のあるものが44～52で、53～55は無孔である。44は表面から周縁にかけて磨りがかかり、孔は表面からの穿孔が強い。45～52の周縁は磨りが深い。45の孔は両面穿孔で裏面からの穿孔がやや強い。46～52の孔は裏面からの穿孔が主で、表面からの穿孔は弱いかごくわずかである。53・54の周縁は磨りがやや浅く、55は深い。53には裏面中央に穿孔の初期過程を示すわずかな敲きが認められる。54には平行する隆線文様が残り、伴出土器と同時期の所産であることが分かる。56は土器片錘である。下端の糸掛けは不明瞭である。磨消懸垂文の沈線が認められ、これも伴出土器とほぼ同時期と考えられる。

石器（第259図、図版117）

石鏃製作に伴う製品・未成品・剥片・砕片等が約900点出土した。石材は半数以上がチャートであった。48・49、52～56、58～70は凹基無茎鏃である。石材は硬質頁岩１点（48）、ガラス質黒色安山岩４点（49、52、62、69）、チャート14点（53～56、58～61、63、65～68、70）、信州系黒曜石１点（64）となっている。55・56は周辺加工、他は両面加工又は半両面加工である。遺存状況は、完形品７点（49、52～54、56～58）、右側縁欠損１点（55）、先端部欠損８点（48、59～65）、片脚欠損３点（66、68、69）、先端・片脚欠損１点（67）、片脚破片１点（70）となっている。51・57、72・73は石鏃未成品である。72・73については楔形石器を素材としている。石材はトロトロ石（51、73）、チャート１点（57）、ガラス質黒色安山岩１点(72)となっている。50は楔形石器である。石材はトロトロ石で石鏃未成品の可能性がある。71はチャート製の石錐である。撮み部を有する完形品である。74は緑泥片岩の剥片であるが、材質的に石棒ないしは石皿の一部の可能性が高い。

(19) SK685（第180図、図版40）

遺跡中部、19Ｋ－10グリッド付近に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.44m、短軸1.34m、深さ48㎝を測る。ピットは中央付近に１か所ある。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第234図、図版100）

１・２は同一個体で、単隆線で大振りな渦巻文を展開するいわゆる梶山類である。加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャートの石核が１点出土した。

(19) SK686（第180図、図版41）

遺跡中部、19K－11グリッドに位置する。円形のピット状の土坑である。規模は径79㎝、深さ1.15mである。遺物は土器・土製品が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第234図、図版100）

1は隆起線が間隔をあけて垂下する。いわゆる梶山類の胴下部文様と思われる。加曽利E3式新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

57は円板である。周縁の磨りは深く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。薄手である。櫛歯条線文が認められる。

(26) SK017（第181図、図版41）

遺跡西部、16F-42グリッドに位置する。平面形は不整円形である。規模は長軸1.07m、短軸95㎝、深さ51㎝を測る。遺物は、覆土上層の1・2層を中心に土器・土製品が出土した。

土器（第235図、図版101）

1は断面蒲鉾状の隆線が残る。2は拓影左下に極細の沈線区画と磨消部が見える。縄文は充填と思われる。内面に炭化物が付着する。1はいわゆる梶山類で、加曽利E3式新段階であろう。2は4式か。

土製品（第255図、図版114）

58は円板である。周縁の磨りはやや浅く、孔はほぼ均等の両面穿孔である。太い沈線による磨消懸垂文が認められ、伴出土器とほぼ同時期であることが分かる。

(26) SK019（第181図、図版41）

遺跡西部、16F－42グリッドに位置するピット状の土坑である。規模は長軸81㎝、短軸75㎝、深さ97㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

1は縄文のみである。

石器

軽石が1点出土した。

(26) SK022（第181図、図版41）

遺跡西部、16G－66グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.49m、深さ58㎝を測る。覆土は中層に炭化粒を多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

1は横位の隆線下に縦位の隆線が認められる。2は断面蒲鉾状の隆線である。3は縄文のみである。1・2はいわゆる梶山類で、加曽利E3式新段階であろう。

(26) SK026（第181図、図版41）

遺跡西部、16G－42グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.27m、短軸1.14m、深さ60㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

1は口縁直下の無文帯を太く浅い沈線で画し、その下に同じ沈線で内部が無文の逆U字状区画文を施す。2は磨消懸垂文、3は断面蒲鉾状の隆線を施す。4は櫛歯条線文である。1～3は加曽利E3式で、1・

３は新段階であろう。

(26) SK027（第181図、図版41）

遺跡西部、16Ｇ－52グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸1.40m、短軸1.28m、深さ62㎝を測る。遺物は土器・土製品・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１・２とも微隆起線が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

土製品（第255図、図版114）

59は円板である。周縁の磨りはやや浅く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。

石器

黒曜石の剝片が１点出土した。

(26) SK028（第181図、図版41）

遺跡西部、16Ｇ－52グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.30m、短軸1.16m、深さ59㎝を測る。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器が出土した。

土器（第235図、図版101）

１は器厚がきわめて厚く、大型の土器であったと思われる。波状口縁で、低い隆線による横に流れた枠状区画を施す。２は口縁直下に刺突列と太めの沈線が巡る。下端の折損部には２連の弧状沈線がわずかに残る。３は指頭による凹線内に円形刺突列を施す。４も指頭による凹線が口縁直下の無文帯を画する。５は微隆起線が口縁直下の無文帯を画する。６は口縁部文様帯の枠状文を沈線で施す。胴部には懸垂文の一部が認められる。７は太めの沈線による内部無文のＵ字状区画文と逆Ｕ字状区画文が見える。８もほぼ同様の文様が３か所に付く。９は櫛歯条線文である。大部分は加曽利Ｅ3式新段階と思われる。５は同4式であろう。

(26) SK029（第181図）

遺跡西部、16Ｆ－31グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸80㎝、短軸73㎝、深さ60㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１の隆線は断面蒲鉾状である。２は低い山形突起を持つ。矩形と弧状の沈線を施すが、内部は磨消されていない。１は加曽利Ｅ3式新段階、２は同4式に伴う西日本系の土器と思われる。

(26) SK030（第181図、図版41）

遺跡西部､16Ｇ－11グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.53m、短軸1.28m、深さ24㎝を測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は胴下部の破片で、磨消懸垂文を施す。２・３はともに波状口縁で、太めの沈線による区画文様の一部が見える。４は細い隆線が２条垂下する。５は櫛歯条線文である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(26) SK031（第181図、図版41）

遺跡西部､16Ｆ－39グリッド付近に位置する陥穴である。平面形は不整長楕円形で、規模は長軸3.20m、短軸1.43m、深さ2.03mを測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１・２ともに隆線が垂下する。胎土に長石・石英を多く含む。阿玉台4式であろう。

(29) SK715（第181図）

遺跡西部、17Ｇ－83グリッドに位置する。西側を（29）SI714に切られる。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.56m、短軸1.38m、深さ63㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は波状口縁で、口縁直下に太めの沈線が巡り、その上に刺突列を施す。その下には同じ沈線で内部が無文の逆Ｕ字状区画文を施す。２は微隆起線による逆Ｕ字状区画文を施す。１は加曽利Ｅ3-4式、２は同4式であろう。

石器

チャートの剝片が１点出土した。

(29) SK716（第181図、図版41）

遺跡西部、16Ｆ－45グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状である。規模は長軸85㎝、短軸75㎝、深さ19㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は舌状の突起で、右側縁が外側に捻り出されている。内面は口縁下に段が付き、胎土に長石・石英粒を多量に含む。阿玉台式後半であろう。

(29) SK723（第181図、図版41）

遺跡西部、16Ｆ－67グリッドに位置する。平面形は不整卵円形で、規模は長軸1.37m、短軸1.00m、深さ38㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は沈線帯内が無文となる逆Ｕ字状区画文である。沈線は細い。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK736（第181図、図版41）

遺跡西部、16Ｆ－98グリッド付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.68m、短軸93㎝、深さ27㎝を測る。ピットは南側底面から側面にかけて１か所あり、深さ17㎝を測る。覆土は灰黒色土を主体とする。遺物は土器・石器が少量出土した。

土器

加曽利Ｅ式後半の小片が５点出土した。

石器（第260図、図版118）

75は凹基無茎鏃である。チャート製で片脚が若干欠損している。

(29) SK742（第181図、図版42）

遺跡西部、17Ｇ－12グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸97㎝、深さ37㎝を測る。覆土は焼土の混入がみられる。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は断面蒲鉾状の単隆線が２条認められる。加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(29) SK743（第181図、図版42）

遺跡西部、17Ｇ－22グリッド付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸3.09m、短軸1.16m、深さ25㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。

土器（第235図、図版101）

１は隆線が口縁部から垂下し、左に巻き上がって縦長で大振りの渦巻文を形成すると思われる。加曽利Ｅ3式新段階～3-4式であろう。

石器

使用痕ある剥片が１点出土した。石材は黒曜石である。

(29) SK755（第181図、図版42）

遺跡西部、17Ｇ－41グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.44m、短軸1.38m、深さ69㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版　）

１は微隆起線で画された口縁直下の無文帯が突起部でつまみ状に盛り上がっている。突起下には沈線による内部が無文の逆Ｕ字状区画文を施す。加曽利Ｅ4式古段階であろう。

(29) SK756（第181図、図版42）

遺跡西部、17Ｇ－53グリッド付近に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.11m、短軸58㎝、深さ33㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は隆線による大振りな渦巻文の一部であろう。２は沈線帯内に細かな縄文を施す。１は加曽利Ｅ3式新段階であろう。２は称名寺式か。

(29) SK761（第181図、図版42）

遺跡西部、17Ｇ－41グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.40m、短軸1.13m、深さ56㎝を測る。覆土は焼土粒を少し混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は内部が縄文の沈線区画がＪ字状に展開する。薄手の土器である。称名寺式か。

(29) SK762（第182図）

遺跡西部、17Ｆ－49グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.34m、短軸1.23m、深さ57㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

石器（第260図、図版118）

76は信州系黒曜石製の凹基無茎鏃である。図示した以外では、メノウ製の石鏃未成品が１点出土した。

(29) SK763・(29) SK764・(29) SK765・(29) SK766（第182図、図版42）

遺跡西部､17Ｆ－38グリッド付近に位置する。４基の土坑が重複する。(29) SK763は (29) SK764を切っているが、その他の新旧関係は不明である。(29) SK763は、平面形は楕円形で、規模は長軸1.41m、短軸1.12、深さ25㎝を測る。(29) SK764は上面を (29) SK763に切られている。規模は最大径79㎝、深さ65㎝を測る。(29)SK765は､平面形は不整長円形で､４基の中では最も大型である。規模は長軸1.66m､短軸1.50m、深さ63㎝を測る。(29) SK766は、平面形は不整円形、規模は長軸94㎝、短軸83㎝、深さ20㎝を測る。遺物は、(29) SK763から土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は磨消懸垂文である。２は胴下部の破片で、凹線によるＵ字状区画文である。３は口縁直下に指頭による凹線が巡る。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(29) SK768（第182図）

遺跡西部、17Ｆ－37グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.15m、短軸1.09m、深さ29㎝を測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

石器（第260図、図版118）

77は周辺加工（片面）の凹基無茎鏃である。石材は信州系黒曜石である。

(29) SK769（第182図、図版42）

遺跡西部､17Ｆ－28グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、底面に段がある。規模は長軸1.76m、短軸1.35m、深さ最大36㎝を測る。覆土は焼土粒を混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は無文で、口縁の内側が折り返しになる。２は隆線に沿って角押文を施す。１は中期前葉、２は阿玉台1式であろう。

(29) SK770（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－27グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、底面に段がある。長軸1.76m、短軸1.35m、深さ最大54㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１は細い沈線で枠状文を施す。阿玉台式直前頃であろう。

(29) SK771（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－17グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.17m、短軸1.09m、深さ47㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第235図、図版101）

１・２の沈線はともに細めのものである。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK772（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－18グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.37m、短軸1.35m、深さ48㎝である。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器･石器が出土した。１～３、５は破片が散らばったような状態で出土した。

土器（第235・236図、図版101）

１・２は同一個体である。ともに大型破片であるが接合しない。他に大小の口縁部破片が２点ある。波状突起を持ち、突起下に沈線による楕円区画文を配し、中に縄文を施す。楕円文の左側には２個のU字状区画文を描き、中に縄文を入れる。胴下部はわずかに遺存するのみのため不明な点が多いが、全面に縄文を施すらしい。３は口縁から胴下部にかけての大型破片で、口縁部は約1/4が遺存する。推定口径26㎝、現存高34㎝を測る。広い口縁部無文帯の下に背の高い微隆起線が巡る。両耳壺ないしは広口壺と思われる。４は微隆起線文が見える。５は底部から胴下部までほぼ完存するが、底部は欠損部が多い。底径７㎝、現存高18㎝を測る。内面は二次的火熱による荒れが認められる。底部側の無文部が広く、その上は全面縄文である。１・２は加曽利Ｅ3-4式、３・４は同4式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(29) SK773（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－07グリッド付近に位置する。２基の土坑が重複したもので西側をＡ、東側をＢと呼称した。(29) SK773A は、平面形は楕円形で、長軸94㎝、短軸85㎝、深さ51㎝ を測る。(29) SK773B は、最大径63㎝、深さ34㎝ を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は微隆起線文が見える。２は底部の1/2弱が遺存する。底面縁辺に使用による擦れが顕著である。１は加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK774（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－07グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.13m、短軸1.05m、深さ51㎝ を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は微隆起線文が認められる。２は縄文のみである。１は加曽利Ｅ4式であろう。

石器

黒曜石・メノウの剝片が各１点出土した。

(29) SK775（第182図、図版42）

遺跡西部、17Ｆ－06グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.26m、短軸1.12m、深さ45㎝ を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は磨消懸垂文、２は微隆起線による区画文が認められる。１は加曽利Ｅ3式、２は同4式であろう。

(29) SK776（第182図、図版42）

遺跡西部、16Ｆ－86グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.12m、短軸1.08m、深さ36㎝ を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は縄文のみである。

(29) SK777（第182図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－98グリッド付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.23m、短軸1.20m、深さ55㎝ を測る。覆土は上層に焼土粒を混入する。遺物は土器が出土した。１・２の土器は覆土中層の１層から出土した。所属時期は４ｂ期と考えられる。

土器（第236図、図版65）

１は主突起の頂部などごく一部を除いて完存する。口径19㎝、器高24㎝、底径４㎝ の小型土器である。底面は二次的火熱を受け、あばた状に荒れている。内面の頸部くびれ個所から口縁下２㎝ の間に比較的厚く炭化物が付着する。キャリパー状に口縁部が膨らむ器形である。口縁突起は４単位で主突起は橋状でさらにその上に孔が正面から開く。対面の突起は橋状突起のみで小さい。両突起の中間にある２個の従突起は波状となり、微隆起線で画された口縁直下の無文帯は従突起部分で軽くつまみ状に盛り上がる。文様は細めの沈線で描かれ、口縁部から胴上半は内部に縄文を充填したU字状区画文、胴下半は逆U字状区画文となる。U字状文は８単位で突起の配置に合わせて等間隔に配されるが、逆U字状区画文は５単位で間隔、幅とも一定ではない。２は胴部中段から底部までほぼ完存する。底径６㎝、現存高29㎝ を測る。胴

下部外面の２か所に広く二次的火熱による荒れが残る。底面は使用による擦れが顕著に残る。文様は微隆起線で描かれ、内部に縄文を入れた胴下部まで達する逆Ｕ字状区画文と頸部までのＵ字状区画文を各４単位交互に配する。ともに加曽利Ｅ4式古段階であろう。

(29) SK778（第182図、図版43）

遺跡西部、16Ｆ－95グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.42m、短軸1.16m、深さ62㎝を測る。遺物は土器・石器が出土した。

土器（第236図、図版101）

１は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画し、以下細かな櫛歯条線文を施す。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

石器（第260図、図版118）

78は砂岩製の磨石類である。欠損品で残存率は全体の約75％である。全面に磨耗痕、下端部付近に敲打痕、表裏中央部に凹み痕があるほか、下端部、二側縁中央に刻み痕が見られる。この刻み痕の存在から錘としての転用が想起される。なお、全面が被熱により赤化している。図示した以外では、流紋岩製の楔形石器１点・剥片１点、チャート製の石錐１点、ガラス質安山岩の剥片１点が出土した。

(29) SK779（第182図、図版43）

遺跡西部、16Ｆ－84グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.23m、短軸1.03m、深さ61㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は細めの沈線による内部無文の逆Ｖ字状区画文が認められる。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK780・(29) SK781（第182図、図版43）

遺跡西部、16Ｆ－94グリッドに位置する。(29) SK780が (29) SK781を切っている。(29) SK780は、平面形は不整円形で、規模は長軸1.11m、短軸1.05m、深さ72㎝を測る。(29) SK781は、径1.12m、深さ39㎝を測る。遺物は、(29) SK780は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。(29) SK781からは出土しなかった。

土器（第236図、図版101）

１は低い口縁突起に瘤が付く。口縁下には指頭による凹線が巡り、突起の瘤下で左右の凹線が集合して盛り上がる。２は微隆起線による大振りの渦巻文が展開するようである。いわゆる梶山類である。いずれも、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(29) SK782（第182図、図版43）

遺跡西部､16Ｆ－94グリッド付近に位置する｡平面形は長楕円形で､北西側にピットが掘り込まれている。規模は長軸1.43m、短軸1.00m、深さ43㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は縄文のみの土器であるが、拓影上端には凹線らしき痕跡がある。

(29) SK784（第182図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－15グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.32m、短軸1.25m、

深さ66㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は４a期と考えられる。

土器（第236図、図版65）

１は口縁部の3/4強が遺存する。口径13㎝を測る。全体に二次的火熱によるあばた状の荒れが顕著である。口縁突起が対向して2個付く。一方は棒状、もう一方は先端が嘴状に尖ると思われる。口縁直下に無文帯が巡り以下縄文となるが、その境は不明瞭な段状となる。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK788（第182図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－37グリッドに位置する。南側は (29) SK789と重複する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.20m、短軸1.13m、深さ40㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は口縁直下に指頭による凹線が巡る。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK789（第182図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－37グリッドに位置する。北側は (29) SK789と重複する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.27m、短軸1.10m、深さ40㎝を測る。覆土は上層中に焼土粒を混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は微隆起線による区画文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK790（第182図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－46グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.33m、短軸1.18m、深さ72㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１・２は同一個体で、波状の突起下に微隆起線による逆Ｕ字状区画文を配する。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK792（第182図）

遺跡西部、17Ｆ－58グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.30m、短軸53㎝、深さ26㎝を測る。覆土は焼土粒を微量混入する。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

石器（第260図、図版118）

79は完形の磨製石斧である。刃部は両刃で、やや刃こぼれがみられる。石材は粗粒玄武岩である。

(29) SK793（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－59グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.67m、短軸1.48m、深さ45㎝を測る。覆土は炭化物を少し含む。遺物は土器が少量出土した。

土器（第236図、図版101）

１は単純深鉢で、口縁直下は無文帯となるが、凹線や沈線は付かない。

(29) SK794（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－89グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸92㎝、深さ56㎝を測る。北側にピットがある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

１は単隆線で大振りの渦巻文を描くと思われる。２は中位の太さの沈線による逆Ｕ字状区画文が展開するようである。１は加曽利Ｅ3式新段階、２は同3-4式であろう。

(29) SK795・(29) SK796（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－89グリッド付近に位置する。(29) SK795が (29) SK796を切っている。(29) SK795は、平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.29m、深さ45㎝を測る。(29) SK796は、規模は最大径1.20m、深さ25㎝を測る。遺物は、(29) SK795・(29) SK796ともに土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第236図、図版101）

(29) SK796の１は中位の太さの沈線による区画文が認められる。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK798（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－67グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.27m、短軸1.01m、深さ67㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK802（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－23グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.09m、短軸1.05m、深さ45㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１・２ともに微隆起線による区画文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品・剥片が各１点出土した。

(29) SK803（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－33グリッドに位置する。平面形は楕円形、規模は、長軸1.18m、短軸1.11m、深さ40㎝を測る。覆土は焼土粒を混入する。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１は口縁直下の狭い無文帯を雑な沈線で画する。２は微隆起線が認められる。いずれも加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK805（第183図、図版43）

遺跡西部、17Ｆ－15グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.05m、短軸98㎝、深さ30㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。キャリパー型の器形で、加曽利Ｅ4式古段階であろう。

(29) SK807（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－35グリッドに位置する。平面形は楕円形、規模は、長軸1.30m、短軸1.15m、深さ55㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１は口縁直下の無文帯を微隆起帯で画する。２は小型の蓋で、つまみが付く。推定外径８㎝を測る。１は加曽利Ｅ4式であろう。

石器（第260図、図版118）

80は薄手の分銅形打製石斧である。上端部が欠損している。石材はホルンフェルスである。

(29) SK808（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－34グリッド付近に位置する。平面形は楕円形、規模は長軸1.40m、短軸1.23m、深さ50㎝を測る。覆土はロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

１は縄文のみ施す。

(29) SK810・(29) SK811・(29) SK812（第183・237図、図版44）

遺跡西部､17Ｆ－45グリッド付近に位置する。４基の土坑が重複する。(29) SK812が (29) SK811を切っている。その他の新旧関係は不明である。(29) SK810A は、平面形はほぼ円形で、規模は長軸85㎝、短軸75㎝､深さ80㎝を測る。(29)SK810B は､規模は最大径1.15m､深さ59㎝を測る。西側にピットがある。(29) SK811は、卵円形を呈し、規模は最大径99㎝、深さ49㎝を測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックを多く含む。上層に焼土を少量混入する。(29) SK812は、平面形は不整円形で、規模は長軸1.25m、短軸1.11m、深さ35㎝を測る。遺物は、(29) SK810から土器・石器、(29) SK812から土器が少量出土した。いずれも出土状況は不明である。

土器（第237図、図版101）

(29) SK810の１～３は微隆起線文が認められる。４は板状の口縁突起で、小型の貫通孔が縦に３個開く。円形刺突列が内外面とも各貫通孔の間に付く。両側面にも付く。１～３は加曽利Ｅ4式であろう。(29) SK812の１・２も微隆起線文が認められる。ともに加曽利Ｅ4式であろう。

石器

(29) SK810から磨石類と思われる砂岩の剝片１点、ガラス質安山岩の剝片１点が出土した。

(29) SK813（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－55グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.41m、短軸1.26m、深さ59㎝を測る。覆土はローム粒を多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２は縄文のみである。１は加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK815（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－66グリッド付近に位置するピット状の土坑である。平面形はほぼ円形で、底面は段があり、北側が深く掘り込まれている。規模は長軸71㎝、短軸67㎝、深さ最大30㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１・２とも微隆起線による区画文が認められる。ともに加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK816（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－76グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m、短軸1.07m、深さ28㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。

土器（第237図、図版65）

１は北側の覆土上層より出土した。口縁から胴のくびれ部にかけて完存する。口径18㎝、現存高11㎝を測る。外面はほぼ全体に二次的火熱により荒れている。口縁直下の無文帯を微隆起線で画するが、微隆起線のほとんどが火熱により剝落している。キャリパー型の器形をなすことから加曽利Ｅ4式でも古段階

であろう。

(29) SK817（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－66グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.05m、短軸1.03m、深さ67㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は口縁部の約1/4が遺存する。口縁直下の無文帯は微隆起線で画され、低突起下で左右から集合してつまみ状に盛り上がっている。加曽利Ｅ4式古段階であろう。

(29) SK818（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－76グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.35m、短軸1.28m、深さ66㎝を測る。遺物は土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は磨消懸垂文である。２は逆Ｖ字状に沈線を施し､中を磨り消しする。沈線の太さは１と同じである。３はゆるやかな波状突起下に断面蒲鉾状の隆線が見える。おそらく口縁部文様帯の枠状文と思われる。４は断面蒲鉾状の隆線が弧状に残る。５は６の大振りな渦巻文同士を連結する短隆線であろう。７は弧状の隆線の両側に沈線が沿う。８は小型土器の橋状突起である。大部分は加曽利Ｅ3式で、３及びいわゆる梶山類の５・６は新段階であろう。４・７は梶山類でもやや異なることから3-4式の可能性がある。

土製品（第255図、図版114）

60・61は円板である。周縁の磨りは深く、孔はいずれも裏面からのみの穿孔である。

石器

緑泥片岩・黒曜石・チャートを石材とする剝片が各１点出土した。

(29) SK819（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－76・77グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.29m、短軸1.23m、深さ31㎝を測る。覆土は、下層はローム主体である。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は口縁突起である。高くせりあがった突起頂部に乗る微隆起線による半渦巻文は、突起の裾に下りて口縁直下の無文帯を画する。加曽利Ｅ4式であろう。

石器

黒曜石の剝片・砕片が各１点出土した。

(29) SK826・(29) SK827（第183図、図版44）

遺跡西部、18Ｆ－17グリッド付近に位置する。(29) SK827が (29) SK826を切っている。(29) SK826は、平面形は楕円形、規模は長軸1.36m、深さ85㎝を測る。(29) SK827は、平面形は楕円形で、規模は長軸1.69m、短軸1.60m、深さ76㎝を測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は波状口縁で、口縁直下の無文帯は器面調整が粗く、縄文施文部との境には不明瞭な段が付く。胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入している。２は幅広の磨消懸垂文で、３はＶ字状の沈線の下に磨消懸垂文と思われる文様が認められる。沈線は細い。４は小型の有孔鍔付土器で、横渡しの橋状突起の横に

貫通孔がある。２は加曽利Ｅ3式新段階、１・３は同3-4式であろう。

石器

黒曜石の剥片が２点出土した。

(29) SK828（第183図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－97グリッド付近に位置する。平面形は不整長楕円形で、規模は長軸91㎝、短軸53㎝、深さ13㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は太めの沈線、２は隆起線による区画が認められる。３は幅広の口縁部無文帯下が微隆起線となる。１・２は加曽利Ｅ3式新段階、３は同4式であろう。

(29) SK829（第184図、図版44）

遺跡西部、18Ｆ－06グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.18m、短軸88㎝、深さ22㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は小型の土器で、波状口縁である。微隆起線による逆Ｕ字状区画文を施す。加曽利Ｅ4式であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品１点、ガラス質黒色安山岩製の剥片１点が出土した。

(29) SK830（第184図、図版44）

遺跡西部、17Ｆ－86グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.32m、短軸1.25m、深さ58㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は波状口縁で、やはり微隆起線による逆Ｕ字状区画文を施す。２は底部である。胎土にすりつぶした土器片粒が少量混入する。１は加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK834・(29) SK835（第184図、図版44・45）

遺跡西部、18Ｆ－04グリッド付近に位置する。(29) SK835が (29) SK834を切っている。(29) SK834は、平面形は楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸1.08m、深さ61㎝を測る。(29) SK835は、平面形は卵円形で、底面は南側がピット状に深く掘り込まれている。規模は長軸2.06m、短軸1.69m、深さ最大74㎝を測る。遺物は、(29) SK834は土器・石器、(29) SK835は土器が出土した。

土器（第237図、図版102）

(29) SK834の１・２とも微隆起線が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。(29) SK835の１はＹ字状の隆線が認められる。２は波状口縁で、口縁直下の幅広の無文帯を微隆起線で画し、その下に短冊状区画文を微隆起線で施す。３・４も微隆起線文が認められる。５は口縁直下の無文帯と櫛歯条線文の施文部との境には段が付く。１はいわゆる梶山類で加曽利Ｅ3式新段階、５は同3-4式、２～４は4式であろう。

石器

(29) SK834からガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点・二次加工のある剥片１点、黒曜石の剥片２点、チャート・砂岩の剥片が各１点出土した。

(29) SK847（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－61グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.38m、

深さ52㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は沈線による内部に縄文を充填した逆Ｕ字状区画文、Ｕ字状区画文が認められる。２は乱れた磨消懸垂文、３は微隆起線文を施す。１・２は加曽利Ｅ3式、３は同4式であろう。

(29) SK850（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－51グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.26m、短軸1.20m、深さ58㎝を測る。遺物は土器・土製品が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第237図、図版102）

１は縄文のみ、２は櫛歯条線文のみを施す。

土製品（第255図、図版114）

62は土器片錘である。周縁は軽く研磨されている。

(29) SK856（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－22グリッド付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.10m、短軸1.05m、深さ67㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は波状口縁で、口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２の縄文はきわめて撚りのゆるい単節縄文である。３は（29）SK858の１と同一個体で、口縁下に２条の浅いキャタピラ文を施す。１は加曽利Ｅ4式、３は勝坂式であろう。

(29) SK858（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－22グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.18m、深さ19㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は(29)SK856の１と同一個体である。胴部の２条の幅広沈線は口縁部のキャタピラ文と同じ施文具で、間隔のあいた押引文になるようである。

(29) SK859（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－21グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸99㎝、短軸91㎝、深さ42㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１・２は同一個体である。微隆起線で内部に縄文を入れた長楕円文やＵ字状区画文を施す。１の口縁直下には微隆起線が集合してつまみ状に盛り上がるが、剥落している。３も類似の文様を施すが、胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入する。４は沈線による内部無文の逆Ｕ字状文が認められる。いずれも加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK861（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－11グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.31m、短軸1.10m、深さ19㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。注口土器で、微隆起線の位置に孔が開くが注口部は剥落し

ている。胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入する。加曽利Ｅ4式古段階であろう。

(29) SK871（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｅ－28グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.80m、短軸1.40m、深さ25㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は微隆起線による区画文が残る。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK872（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｅ－29グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.16m、短軸1.12m、深さ32㎝を測る。所属時期は３ｃ期と考えられる。遺物は土器･石器が主に底面に散らばった状態で出土した。

土器（第238図、図版65・102）

１は胴下部の破片で、磨消懸垂文を施す。２は波状口縁で、口縁直下に無文帯が巡る。口縁部には太めの沈線で楕円文と枠状文を施す。３は口縁から胴上部にかけて1/2弱が遺存する破片と大型の口縁部破片がある。推定口径37㎝、現存高22㎝を測る。口縁直下の無文帯を隆線で画し、口縁部から胴上部にかけては２条の隆線による４単位の大振りで縦長の渦巻文を配する。渦巻文の巻きは単位ごとに逆になる。各単位の渦巻文は口縁直下の無文帯と接する個所で連結し、胴くびれ部で弧状に連結する。４は３と同類の胴下部の破片である。いずれも加曽利Ｅ3式で、２～４は同新段階であろう。

石器（第260図、図版118）

81は、石材の特徴から、石棒の破片としたが、断片的なため定かではない。石材は緑泥片岩である。

(29) SK882（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－71グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.27m、短軸1.22m、深さ40㎝を測る。覆土は上層に焼土を混入する。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は両耳壺の把手である。上端に微隆起線が認められる。

石器

ガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品１点・剥片１点、トロトロ石製の楔形石器１点、メノウの剥片１点が出土した。

(29) SK883（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－82グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.39m、短軸1.11m、深さ21㎝を測る。ピットが２か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は微隆起線による区画文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK884（第184図、図版45）

遺跡西部、17Ｆ－82グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.43m、短軸1.10m、深さ46㎝を測る。ピットは底面中央付近に１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は口縁直下の無文帯が左右から伸びて盛り上がる。その下には刺突列が巡り、沈線による逆Ｕ字状区画文も見える。加曽利Ｅ3-4式であろう。

(29) SK885（第184図、図版45）

遺跡西部、18Ｆ－02グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.25m、深さ1.14mを測る。覆土は上層に焼土を混入する。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版66・102）

１は波状口縁で、口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２は波状突起下で微隆起線が左右から集合してつまみ状に盛り上がる。３は細い半截竹管による刺突列を口縁直下の狭い無文帯に施す。４の櫛歯条線文も口縁直下の無文帯が狭い。５は完存する底部である。丸みを持った底面の縁辺は使用による擦れが認められる。１・２は加曽利Ｅ4式、３は同3-4式であろう。

石器

黒曜石・トロトロ石の剝片が各１点出土した。

(29) SK887（第184図、図版45）

遺跡西部、18Ｆ－01グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.29m、短軸1.11m、深さ20㎝を測る。覆土は炭化物を混入する。

遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は底部付近の破片で、磨消懸垂文を施す。

(29) SK888（第184図、図版45）

遺跡西部、16Ｆ－76グリッド付近に位置する。平面形は不整長楕円形で、北東側に張り出す。規模は長軸2.57m、短軸2.05m、深さ23㎝を測る。南側にピットが１か所ある。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は低い山形突起を持つ破片で、隆線による大振りの渦巻文を施す。いわゆる梶山類で、加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(29) SK889・(29) SK923・(29) SK927・(29) SK928（第184図、図版46）

遺跡西部、18Ｆ－02グリッド付近に位置する。４基の土坑が重複する。新旧関係は不明である。(29) SK889は現存最大径1.20m、深さ20㎝を測る。(29) SK923は、平面形は不整楕円形で、規模は長軸93㎝、短軸73㎝、深さ47㎝を測る。(29) SK927は、平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.18m、短軸88㎝、深さ47㎝を測る。(29) SK928は、平面形は卵円形、規模は長軸1.43m、短軸1.15m、深さ43㎝を測る。覆土は上層に焼土を含む。遺物は、(29) SK889・(29) SK923・(29) SK928から土器が少量出土した。

土器（第238・239図、図版102）

(29) SK889の１は波状突起を持つ小型土器で、口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、その下に円形刺突列が沿う。加曽利Ｅ4式古段階であろう。(29) SK923の１は胴下部の大型破片である。縄文は２段目が均等に撚り合わされていないため、付加条風である。(29) SK928の１は胴下部の破片で、細い沈線による内部に縄文を入れた逆Ｖ字状区画文を施す。上端にはＵ字状の沈線区画が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK892（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－68グリッド付近に位置する。平面形は不整長卵円形で、規模は、長軸1.07m、短軸78㎝、深さ７㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は微隆起線による内部に縄文を入れた曲線的な区画文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK893（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－58グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.43m、短軸1.36m、深さ37㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第238図、図版102）

１は微隆起線による区画文様が見える。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK900（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－16グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.28m、短軸1.26m、深さ68㎝を測る。覆土はローム粒を多く含み、下層はローム主体であった。遺物は土器が少量出土した。

土器（第238図、図版102）

１・２とも隆線による大振りの渦巻文を施すいわゆる梶山類であろう。２の隆線は微隆起線に近い。加曽利Ｅ3式新段階、２は3-4式の可能性もある。

(29) SK912（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－66グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、側面は底面から中位までは直立し、上方は斜めに立ち上がる。規模は長軸2.26m、短軸2.04m、深さ1.29mを測る。遺物は、覆土上層から中層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第239図、図版66・102）

１は太い沈線による逆Ｕ字状区画文を施す。２～５は微隆起線による逆Ｕ字状区画文、Ｕ字状区画文を施す。６は胴下部の2/3ほど、口縁から胴上部の1/2ほどが遺存する。推定口径16㎝、器高25㎝、底径5㎝を測る。内外面及び底面のほぼ全面にへら状工具による粗い成形痕を残し、その上に粗い縄文を施す。口縁直下の無文帯を画する微隆起線は欠失した突起に沿って立ち上がる。７は大型土器の破片で、口縁直下の幅広の無文帯を微隆起線で画するが、微隆起線と縄文の間は指頭によって磨り消されている。８は胴下部の1/2ほどが遺存する破片で､細い沈線による逆Ｕ字状区画文内に縄文を施す｡９は口縁直下が浅く窪む。成形が粗い。10は無文の口縁で、成形痕が残る。11は底部で、底面には使用による擦れが顕著で、さらに二次的火熱による大きなあばた状の荒れが認められる。微隆起線による区画帯はおそらく４単位であったと思われ、その内３単位が遺存する。１は加曽利Ｅ3式新段階、その他は大部分が同4式であろう。

石器（第260図、図版118）

82～84は凹基無茎鏃である。いずれも黒曜石製である。82は片面加工、83・84は両面加工である。82は完形であるが、83は先端・片脚、84は片脚が欠損している。85は石棒の頭部破片である。再加工のため意図的に剝離されたものと考えられる。(33) SK025と同一個体で、接合する。石材は安山岩である。表面の赤化から被熱資料と推定される。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品２点、黒曜石の剝片１点・砕片１点、流紋岩製の楔形石器１点・敲石１点、花崗岩製の石皿片１点、安山岩製の磨石類１点、砂岩製の剝片１点が出土している。

(29) SK914（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－96グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.09m、短軸93㎝、深さ23㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第239図、図版102）

１は中位の太さの沈線による逆Ｕ字状区画文内に縄文を入れる。拓影右端には上方へ向かう縄文充填のＶ字状区画文がわずかに残る。２は細い沈線による区画文が、３は微隆起線による区画文が認められる。１は加曽利Ｅ3-4式、２・３は同4式であろう。

(29) SK916（第185図、図版46）

遺跡西部、18Ｅ－07グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸95㎝、深さ20㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第239図、図版102）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、その下に細い粗雑な沈線による区画文が認められる。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK917（第185図、図版46）

遺跡西部、18Ｅ－08グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.00m、短軸89㎝、深さ28㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。

土器（第239図、図版102）

１は口縁部付近の破片で、沈線区画内に縄文を充填しているが、上部の沈線は上方へ曲がり込んでいる。称名寺式ないしは前段階の西日本系の土器であろう。

石器（第260図、図版118）

86は石鏃未成品である。楔形石器を素材として、部分的な二次加工が施されている。石材はガラス質黒色安山岩である。

(29) SK920（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－44グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.48m、短軸1.35m、深さ83㎝を測る。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。

土器（第239図、図版102・103）

１～３は微隆起線による文様が認められる。４は細い沈線による区画文内に縄文を入れる。５は縄文のみである。２～５の胎土にはすりつぶした土器片粒が少量ないしは微量混入する。いずれも加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK922（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－37グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.83m、短軸1.05m、深さ91㎝を測る。陥穴であろう。遺物は、覆土下層を中心に土器が出土した。

土器（第239図、図版103）

１は微隆起線文がわずかに見える。加曽利Ｅ4式であろう。

(29) SK925（第185図、図版46）

遺跡西部、17Ｅ－87グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸83㎝、短軸76㎝、深さ43㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第239図、図版66）

１は丸みのある底部で、底面は使用による摩耗が全面に残る。

(29) SK936（第185図、図版46）

遺跡西部、18Ｅ－17グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.11m、短軸95㎝、深さ86㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。

土器（第239図、図版103）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２はおそらく隆線による大振りの渦巻文を描くいわゆる梶山類であろう。３は胴下部の破片で、細い沈線による区画文内に縄文を施すが、左の区画文は背の低い逆Ｕ字状区画文、右は口縁部付近まで達する背の高い逆Ｕ字状区画文であろう。４・５は太い沈線区画による帯状文を施す。２は加曽利Ｅ3式新段階、他は同4式で、４・５は西日本系統の土器であろう。

(29) SK937（第185図）

遺跡西部、18Ｅ－05グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.10m、短軸86m、深さ1.03ｍを測る。遺物は、覆土中から土器・石器が出土した。底面付近から３が出土した。

土器（第240図、図版103）

１は低い山形突起を持つ口縁部破片で、口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２はきわめて細い沈線による逆Ｖ字状区画文が上下に２段認められるが､区画内に縄文が納まっていない。３は胴下部の破片で、太い沈線による内部を無文とした小型のＪ字状文が認められる。１・２は加曽利Ｅ4式、３は同時期の西日本系の土器であろう。

石器（第260図、図版119）

87は石棒の端部片である。石英安山岩を用材としている。

(29) SK942（第185図、図版46）

遺跡西部、18Ｅ－29グリッドに位置する。浅い皿状の土坑である。平面形は楕円形、規模は長軸73㎝、短軸60㎝、深さ12㎝である。遺物は、覆土中から土器が出土した。

土器（第240図、図版103）

１は隆線による大振りの渦巻文を施すいわゆる梶山類であろう。２は無文地に太い沈線による区画文様を施す。壺形ないしは注口土器であろう。３は口縁直下を微隆起線で画する。１は加曽利Ｅ3式新段階、３は同4式であろう。

(29) SK944・(29) SK945・(29) SK946（第185図、図版47）

遺跡西部､18Ｆ－20グリッド付近に位置する。３基の土坑が重複する。より北側に位置する土坑が新しい。(29) SK944は、平面形は不整円形で、規模は長軸1.69m、短軸1.64m、深さ30㎝を測る。(29) SK945は北側を (29) SK944に切られている。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.20m、短軸1.14m、深さ52㎝を測る。(29) SK946は、北側を (29) SK944・(29) SK945に切られる。平面形はほぼ円形、規模は現存最大径1.45m､深さ14㎝を測る。遺物は､(29)SK944は覆土全層中から多量に土器･土製品･石器が出土した。(29) SK945からは出土しなかった。(29) SK946は土器・石器が少量出土したが図示できなかった。(29) SK944の所属時期は４ｃ期と考えられる。

土器（第240図、図版66・103）

１は波状突起の頂部が円形に窪む。太い沈線が突起頂部から左右に垂れ、さらにその下に沈線で画された縄文帯が垂下している。２～５は微隆起線で逆Ｕ字状区画文などを口縁部以下に施す。２は拓影左端に沈線による乱雑な文様が付く。６～８は沈線で逆Ｕ字状文などを口縁部以下に施す。６は環状突起が口縁

に乗る。微隆起線で画された口縁直下の無文帯は環状突起の縁をまわる。また、口縁下の細い沈線で区画された無文帯は立ち上がって環状突起の孔を巡り、その末端は半渦巻文となる。９・10は口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、以下縄文のみを施す。10は口縁から胴下部の3/4弱が遺存する。口径28㎝、現存高25㎝を測る。胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入する。微隆起線は鍔状に突出している。11～15は太い沈線による帯状区画文が多様な文様を展開する一群である。11は口縁に沿って縄文が巡り、その下に縄文を充填した胴下部まで達する大型の逆Ｊ字状区画文が展開するらしい。その左には文様の下部区画沈線から立ち上がった沈線が渦巻を形成している。また、その上の欠損部にはやはり帯状区画文による何らかの文様が展開するらしい。13は口縁端部にも縄文を施す。15は小型の山形突起を持つ破片である。口縁に沿って縄文が巡り、その下に大振りの蛇行文様を描いてその中に縄文を充填している。この文様の最下部区画沈線がわずかに残る部分があるが、その先はあばた状の荒れのため不明である。16・17は同一個体で、山形の突起を持つ小型土器である。口縁直下の無文帯を画する微隆起線は16では突起下で半渦巻文となり、17では突起頂部に乗って終わる。この微隆起線と胴くびれ部の間が文様帯となる。文様帯内は粗雑な沈線文様が展開する。微隆起線下にはこれに沿って単一の沈線が引かれ、文様帯下部区画は２条の沈線が要所で横Ｕ字状に連結しながら巡る。上下の沈線区画内は蕨手状の沈線が派生したり、直線で上下を連結したりなど無秩序な文様を施している。18は太めの沈線によるハの字が上下２段見え、刺突文と部分的に施した縄文が認められる。19は口縁から胴上部にかけて1/4弱が遺存する。推定口径34㎝を測る単純深鉢である。粗い磨き調整が行われ、部分的に縄文を施す。20は微隆起線による半渦巻文を施した口縁突起である。21はミニチュア土器で、口縁から胴下部までの1/2弱が遺存する。推定口径６㎝を測る。きわめて細かい縄文を外面全体と口縁端部内面に施す。22は小型土器の底部で、底面は上底となる。10・11・19・21には胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入する。１・４は加曽利Ｅ3式新段階、他は同4式で10は中段階であろう。11～17はこの時期の西日本系の土器と思われる。

土製品（第255図、図版114）

63は小型の円板である。下半の周縁の磨りは深いが、上半は打ち欠き時の不整形のまま浅い磨りである。微隆起線文が認められ、伴出土器と同時期であることが分かる。

石器（第260図、図版118）

88・89は石鏃未成品である。88は先端と両脚が欠損している。石材は信州系黒曜石である。89は、ガラス質黒色安山岩の楔形石器を素材として、部分的に二次加工を施している。90は石皿の破片である。石材は安山岩であるが、断片的なため、形状等の詳細は不明である。図示した以外では、(29) SK944はメノウ製の楔形石器１点、・剥片１点、安山岩製の石皿の断片１点・磨石類１点、黒曜石製の砕片２点、砂岩製の砥石１点、(29) SK946は黒曜石の剥片１点、砕片１点が出土した。

(29) SK947（第185図、図版47）

遺跡西部、18Ｆ－20グリッド付近に位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.78m、短軸1.76m、深さ74㎝を測る。壁は底面から中位までは直立し、上位は斜めに開く。覆土は焼土を混入する。遺物は、覆土下層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｃ期であろう。

土器（第241図、図版103）

１は器厚が1.2㎝を超えることから大型土器であったと考えられる。指頭による凹線で口縁部文様帯の枠状文を施す。２・３は同一個体で、単一の隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類であろう。

４は胴下部の破片で、微隆起線による区画文が認められる。５は無文地に微隆起線によるU字状文などが展開する。U字状文間は赤彩を施す。内面は二次的火熱により荒れが著しい。１～３は加曽利Ｅ3式新段階、４は同4式であろう。

土製品（第255図、図版114）

64は円板である。周縁の磨りはごく浅い。櫛歯条線文が認められる。

石器（第260図、図版118）

91・92は凹基無茎鏃である。いずれもガラス質黒色安山岩が用材となっている。91は完形品、92は先端と片脚が欠損している。図示した以外では、黒曜石・チャート等の石鏃未成品１点・剥片８点・砕片18点が出土した。

(29) SK948（第186図、図版47）

遺跡西部､18Ｆ－22グリッド付近に位置する。平面形は円形で、壁面は垂直である。規模は長軸1.24m、短軸1.16m、深さ86㎝を測る。遺物は、覆土上層を中心に土器が少量出土した。所属時期は４d期と考えられる。

土器（第241図、図版103）

１～４は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。１は波状口縁の頂部に突起が付く。この突起は筒状の突起とその下の環状貼付文からなり、Ｓ字状貼付文の祖型と思われる。２は左右の無文帯が波状突起に向かって立ち上がるが、連結しない。２・３は胎土にすりつぶした土器片粒が多量に混入する。５・６は沈線による区画文様を施す。５は上端に縄文が見えるが、垂下する沈線帯内には縄文がない。いずれも、加曽利Ｅ4式で、１～３は新段階、５・６は同時期の西日本系の土器であろう。

(29) SK955（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｆ－13グリッド付近に位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.42m、短軸1.32m、深さ55㎝を測る。断面形はたらい状である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。土器１・３から所属時期は３ｃ期と考えたい。

土器（第241図、図版103）

１は太い沈線で口縁部文様帯の楕円区画文と枠状区画文を施す。２・３は磨消懸垂文で、２は磨消部の幅が狭く、３は広い。いずれも加曽利Ｅ3式で、１・３は新段階であろう。

(29) SK956（第186図、図版47）

遺跡西部､18Ｆ－14グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.59m、短軸1.36m、深さ62㎝を測る。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第241図、図版103）

１・２は微隆起線による逆U字状区画文が、３・４は細い沈線による同種文様が展開する。４の胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。いずれも、加曽利Ｅ4式であろう。

石器

流紋岩の剥片が１点出土した。

(30) SK034（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－46グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸2.42m、短軸2.14m、深さ18㎝を測る。断面形は浅い皿状である。ピットは４か所あり、北側に分布する。遺物は土器が少量出

土した。出土状況は不明である。

土器（第241図、図版103）

１は縄文のみ施す。胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。

(30) SK035（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－39グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.16m、短軸94㎝、深さ86㎝を測る。覆土４層は焼土、５・６層は火熱による硬化面と考えられることから、１層から６層までは住居跡の炉と考えられる。土坑廃棄後、窪みを利用して炉が構築されたのであろう。なお、周辺からはこの炉に伴う柱穴は検出できなかった。遺物は、上層から中層にかけて土器・石器が多量に出土した。12のみ土坑覆土出土で、他は炉内出土である。所属時期は４ｄ期であろう。

土器（第241図、図版104）

１・２は同一個体で１は口縁から胴上部の1/2弱、２は胴下部の1/2弱が遺存する。推定口径22㎝を測る。波状突起を持ち、突起頂部は二尖となる。口縁直下の無文帯を画する微隆起線と突起間下に配されるＵ字状区画文の微隆起線はこの二尖突起部で集合する。突起下に配される微隆起線による逆Ｕ字状区画文は胴下部まで達する。３～７も類似の文様構成を採ると思われる。８は低い山形突起下に円形の貼付文が付く。口縁直下の無文帯を画する微隆起線は貼付文を避けて突起のやや裾寄りで収束している。９～16は沈線による区画文様を持つものである。９は口縁直下の無文帯を太めの沈線で画し、以下を磨消懸垂文としているらしい。10の口縁下には不明瞭な微隆起線が付く。区画沈線は逆Ｖ字状である。14は２条の沈線間が磨り消されていない。15・16は同一個体である。口縁部は太めの沈線で枠状区画を施している。17は上下に孔が開いた板状の突起片である。内外面とも微隆起線による８字状の文様が２孔に沿って展開するものと思われる。１・２、15・16の胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。９は加曽利Ｅ3式新段階、他は同4式で８は中段階、残りの大部分は新段階であろう。15・16は新段階の西日本系土器であろう。

石器（第260図、図版119）

93はチャート製の石鏃未成品である。両極剝片を素材としており、右側縁には折れ面が認められる。全周にわたって細かな加工が施されている。94はチャート製の凹基無茎鏃である。先端と片脚が欠損している。95は緑泥片岩の剝片である。石棒又は石皿の破片の可能性が考えられるが、断片的なため明確ではない。96は不整楕円形の磨石類である。磨耗痕のほか上下両端に敲打痕、表裏中央部に凹み痕がみられる。図示した以外では、安山岩製の磨石類の断片１点、黒曜石・流紋岩・トロトロ石の剝片が各１点が出土した。

(30) SK036（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｅ－41グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.55m、短軸1.45m、深さ89㎝を測る。覆土２層は焼土主体、５層は火熱による硬化面と考えられることから、１層から５層まではSK035と同様住居跡の炉と考えられる。やはり、周辺からはこの炉に伴う柱穴は検出できなかった。遺物は土器・土製品・石器が出土した。主に覆土上層と下層出土のものに分かれる。所属時期については、炉は４ｂ期、土坑はそれ以前と考えられる。

土器（第242図、図版104）

３・６・７は上層の炉から、他は下層の土坑からの出土である。１～３は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。４は波状口縁で、口縁直下の無文帯は浅く窪み、以下の縄文部との境に段が付く。５は沈線による逆Ｕ字状区画文内に縄文を施す。６も同様の構成を採ると思われるが、沈線は

細い。７は微隆起線による球状の区画文内に縄文を施す。無文部は広い。１～３は加曽利Ｅ3式新段階、４・５は同3-4式、６・７は同4式で７は古段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

65は円板である。周縁の磨りは深い。孔は均等な両面穿孔であるが、裏面からは擂り鉢状穿孔で、表面からは垂直な穿孔である。櫛歯条線文が認められる。

石器

チャートの剥片が１点出土した。

(30) SK037（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－15グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1,21m、短軸1.24m、深さ77㎝を測る。遺物は、主に覆土中層の３層から土器が出土した。

土器（第242図、図版104）

１・２は同一個体で、ともに胴下部の破片である。沈線による稚拙な枠状区画文に縄文を施す。加曽利Ｅ4式に伴う西日本系の土器であろう。

(30) SK038（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－24グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.38m、深さ55㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第242図、図版104）

１は太めの沈線区画内に細かな縄文を充填する。加曽利Ｅ4式に伴う西日本系の土器であろう。

(30) SK039（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－27グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.96m、短軸1.90m、深さ1.18mを測る。覆土は中層に炭化物を混入する。所属時期は４ｂ期と考えられる。遺物は、覆土中層を中心に多量の土器・石器が出土した。

土器（第242図、図版66・104）

１～８は微隆起線による区画文様を施す。１は山形の突起を持つ。口縁部はキャリパー状に膨らむ。２は微隆起線が口縁下で集合して舌状に突出している。４は口縁直下の無文帯が左右から集合してつまみ状に盛り上がる。左端微隆起線下に円形刺突が認められる。９～13は沈線による区画文様を施す。９は口縁直下の無文帯を画する微隆起線にも沈線が沿う。10は口縁から胴上部にかけての大型破片3点からなるが、接合しない。推定口径24㎝を測る。波状突起を持ち、微隆起線で画された口縁直下の無文帯は左右から集合して突起下でつまみ状に盛り上がる。胴上部に内部に縄文を入れたＶ字状区画文を、胴下部に同じく逆Ｖ字状区画文を施すが、両者は噛み合うように規則正しく配されていない。11は口縁直下の無文帯も沈線で画している。12の口縁直下の無文帯は４・10と同様つまみ状である。14は口縁直下に無文帯を微隆起線で画するのみである。15の口縁直下は指頭による凹線である。16は軽く外反する口縁部が無文帯となり、以下に細かい櫛歯条線文を施す。17は完存する底部で、丸みを持つ底面は二次的火熱によりあばた状に荒れている。18は基部が欠けた突起で、上端の一部が鰭状に突出する。刺突文は編み棒状の工具によるものである。19は両耳壺の把手片である。７・12の胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。19では混入は少量である。大部分は加曽利Ｅ4式で、１・２・４・10・12は古段階、15は同3-4式で混入であろう。

石器（第260図、図版118）

97はガラス質黒色安山岩製の凹基無茎鏃である。片脚が欠損している。図示した以外では、安山岩製の打製石斧の破片１点、黒曜石製の石鏃１点・石鏃未成品１点・剥片１点、チャート製の楔形石器１点・石鏃未成品１点・剥片１、ガラス質黒色安山岩の剥片２点が出土した。

(30) SK040（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｅ－19グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.03m、短軸90㎝、深さ43㎝を測る。遺物は、覆土全層中から土器が出土した。

土器（第243図、図版66・104）

１は二尖の突起になると思われる。突起頂部から口縁直下の無文帯を画する微隆起線が始まっている。２・３は微隆起線による区画文様を施す。４は２条の微隆起線が認められるが、その間は磨り消されていない。５・６は沈線による区画文様を施す。５は沈線がきわめて細い。６の沈線は太く、胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。７は底部が完存する。底径７㎝を測る。分厚い作りで、底面は使用による擦れと二次的火熱によるあばた状の荒れが目立つ。８は無文で、口縁から胴上部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径20㎝を測る。口縁部付近を除いて調整痕が残る。いずれも加曽利Ｅ4式で、６は西日本系の土器であろう。

(30) SK041（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－28グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸2.01m、短軸1.98m、深さ56㎝を測る。遺物は、上層を中心として土器が出土した。

土器（第243図、図版66・104）

１は口縁直下の無文帯が半渦巻文となって突出した貼付文となる。２～５は微隆起線による区画文様を施す胴部破片である。６は太い沈線による大型のＵ字状区画文内に縄文を施す。７・８は同一個体である。７は縄文を施す胴下部の破片で、８は底部が完存する。底径10㎝を測る。ともに内面は二次的火熱によるあばた状の荒れが著しい。９は底部から胴下部が完存する。底径９㎝を測る。外面の胴下部破損部付近は二次的火熱による荒れが特に顕著である。７～９の胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。６は加曽利Ｅ3式新段階、他は同4式であろう。

(30) SK042（第186図、図版47）

遺跡西部、18Ｄ－29グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸83㎝、短軸72㎝、深さ43㎝を測る。遺物は、覆土全層中から土器が出土した。

土器（第243図、図版105）

１・２は同一個体である。太めの稚拙な沈線による区画文を施す。３は口縁直下に微隆起線が巡る。４～６はいずれも薄手の小型土器の破片である。太めの沈線による区画文と細かな縄文を施す。７は胴下部の破片で、縄文のみを施す。胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。１・２は加曽利Ｅ3式新段階、３は同4式、４～６は同4式の西日本系土器であろう。

(30) SK044（第186図、図版48）

遺跡西部、17Ｅ－84グリッド付近に位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.55m、短軸1.46m、深さ1.20mを測る。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第243図、図版105）

１は指頭による凹線で波状文を描く。波状文の中には蕨手文らしき文様が認められる。２は太めの沈線

による逆U字状区画文を施す。３は口縁部文様帯に沈線による楕円区画文を施す。４は口縁直下に微隆起線が巡る。５～７は微隆起線による区画文様を施す。８・９は沈線による区画文様を施す。８は底部直上から胴下部の破片で、区画文様は逆U字をなすと考えられる。９は渦巻状の区画文様である。10は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式中段階、２・３は同新段階、４以降は同4式であろう。

石器

メノウ製の石鏃未成品１点、ガラス質黒色安山岩・チャート・トロトロ石の剥片４点、トロトロ石の原石１点が出土した。

(30) SK046（第187図、図版48）

遺跡西部、17Ｅ－93グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.78m、短軸1.73m、深さ1.68mを測る。所属時期は３ｃ期と考えられる。遺物は、覆土上・中層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第244図、図版105）

１～８は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。このうち、３と４、５～８はそれぞれ同一個体である。いずれも単一隆線による文様が展開するが、３・４は一部２条の隆線による単位文様になるようである。５～８の渦巻文様は縦長である。８は底部から胴下部までの大型破片で、底径10㎝、現存高17㎝を測る。９～11は口縁直下に巡る無文帯を指頭による凹線で画している。９は波状突起を持ち、胎土にはすりつぶした土器片粒が多量に混入する。10は赤彩が残るが、漆塗りによるものらしい。11はへら状工具による条線文である。12・13は櫛歯条線文である。14は有孔鍔付土器である。無文地に微隆起線による渦巻文様を施す。大部分が加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品１点、黒曜石の剥片１点が出土した。

(30) SK047（第187図、図版48）

遺跡西部、17Ｅ－92グリッドに位置する。ピット状の土坑である。規模は長軸79㎝、短軸73㎝、深さ82㎝を測る。遺物は、覆土中から土器が出土した。一括で取り上げられているため出土状況は不明である。

土器（第244図、図版105）

１は拓影上端に太めの沈線が認められる。２は底部が完存する。底径７㎝を測る。分厚い作りで、底面には使用による欠けが認められる。

(33) SK012（第187図）

遺跡北西部、19Ｇ－33グリッド付近に位置する。(33) SI093と重複する。平面形は不整円形で、規模は長軸99㎝、短軸90㎝、深さ30㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。１は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。２は細めの沈線を、３は太めの沈線を施す。１は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(33) SK013（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－06グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.03m、短軸99㎝、深さ36㎝を測る。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土が主体である。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第244図、図版105）

１・２は口縁部以下に沈線による区画文様が展開する。２は口縁部直下の無文帯をにぶい微隆起線で画

する。３・４は太い沈線で複雑な区画文様を施す。縄文は充填され、細かい。２は加曽利Ｅ4式古段階、３・４は同時期の西日本系の土器であろう。

石器

チャート製の石鏃未成品が１点出土した。

(33) SK025（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－36グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.29m、短軸1.25m、深さ87㎝を測る。覆土はローム粒を多量に含み、中層には炭化物を含む。遺物は土器・石器が出土した。いずれも東側の覆土下層の５層中から出土した。

土器（第244図、図版66・105）

１は胴部の1/4強が遺存する。胴部の最大径33㎝を測る。逆Ｕ字状と短冊状の微隆起線区画内に縄文を入れている。２は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。３は底部直上の破片で、微隆起線が左端に見える。いずれも加曽利Ｅ4式であろう。

石器（第260図、図版119）

98は石棒の頭部破片である。石棒の再加工に伴い意図的に除去されたものと思われる。(29) SK912出土の85と同一個体であり接合する。石材は安山岩である。図示した以外では、砂岩製の剝片が１点出土した。

(33) SK026（第187図）

遺跡北西部、19Ｇ－41グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は漏斗状である。規模は長軸1.20m、短軸1.10m、深さ60㎝を測る。底面中央に径約35㎝、深さ12㎝のピット状の段を有する。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第244図、図版105）

１は隆起線による大振りな渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。隆線は一部断面三角形となる。２は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。３は沈線による区画文様を施す。４・５は縄文のみである。

石器（第261図、図版118）

99はトロトロ石製の凹基無茎鏃である。表面に自然面が部分的に存在する。完形品である。

(33) SK027（第187図、図版48）

遺跡北西部、16Ｆ－69グリッド付近に位置する。近世の溝状遺構（33）SD022に切られる。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.63m、短軸1.53m、深さ66㎝を測る。覆土は、遺存するのは下層のみで、ロームブロック・ローム粒を多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第244図、図版105）

１は微隆起線による区画文様を施す。無文部が広い。加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK028（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－39グリッド付近に位置する。平面形は、開口部は不整円形、底面は隅丸方形を呈する。断面形はたらい状である。規模は長軸1.53m、短軸1.39m、深さ50㎝を測る。所属時期は３ｃ期と考えられる。遺物は、覆土上層を中心に土器･石器が出土した。第261図100の石鏃は底面上から出土した。

土器（第245図、図版105）

１は太い沈線による磨消懸垂文である。２～４は同一個体で、単隆線で大振りな渦巻文を展開するいわ

ゆる梶山類である。５も同種である。６・７は同一個体である。口縁直下に無文帯が巡り、縄文施文部との境はわずかに段が付く。(33) SK030の６とも同一個体である。８は口縁直下に指頭による凹線が巡る。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器（第261図、図版118）

100の石鏃は、凹基無茎鏃で、石材はガラス質黒色安山岩である。

(33) SK029（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－29グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.39m、短軸1.39m、深さ80mを測る。覆土は焼土粒・焼土ブロックを含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第245図、図版105）

１は口縁直下の無文帯下に隆線による枠状ないし楕円区画文様を施す。２・３は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。４は沈線による逆Ｕ字状区画文内に縄文を施す。５は口縁部が内弯する。口縁直下に無文帯が巡り、櫛歯条線による蛇行文を施す。２～５は加曽利Ｅ3式新段階であろう。１はやや古い可能性がある。

(33) SK030（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－38グリッド付近に位置する。平面形はほぼ隅丸方形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.20m、短軸1.05m、深さ47㎝を測る。覆土は下層･中層にローム粒を多量に含み、上層に焼土･炭化物を少量含む。遺物は、主に覆土上層の１層中から土器・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第245図、図版66・105）

１・２は隆線による大振りな渦巻文を展開するいわゆる梶山類である。１の渦巻は縦長となる。３・４は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。３は口縁から胴くびれ部まで1/4強が遺存する。推定口径33㎝、現存高24㎝を測る。口縁部は強いキャリパー型をなし、胴のくびれも強い。５は突起片で、頂部に２個の盲孔が付く。６は(33)SK028の６･７と同一個体である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器

黒曜石の剝片１点が出土した。

(33) SK031（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－07グリッド付近に位置する。平面形は不整楕円形、断面形はたらい状である。底面はほぼ円形である。規模は、長軸1.47m、短軸1.25m、深さ59㎝を測る。遺物は、主に覆土上層の１層中から土器が出土した。所属時期は５期と考えられる。

土器（第245図、図版105）

１は口縁から胴下部にかけて1/4強が遺存する。推定口径23㎝、現存高21㎝を測る。縄文を充填した太い沈線による区画文様が全面に展開する。Ｊ字状文が２段重なり、下段のＪ字文からはさらに下方に文様が伸びる。２もほぼ同様の文様を持つが、内外面とも二次的火熱によるあばた状の荒れが顕著である。３は縄文を充填した微隆起線による区画文が逆Ｌ字状に展開する。口縁端部にも縄文を施す。４は底部の1/2が遺存する。底径９㎝を測る。底面の縁辺は使用による欠けや擦れが認められ、胴下部及び内面は二次的火熱によるあばた状の荒れが著しい。１・２は称名寺式であろう。３は同時期の加曽利Ｅ式系土器で

あろう。

(33) SK032（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－47グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は径1.21m、深さ80cmを測る。覆土はロームブロックを含む褐色土が主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第246図、図版105）

１は縄文のみ、２は櫛歯条線文である。

(33) SK034（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－09グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。長軸1.27m、短軸1.15m、深さ55cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第246図、図版106）

１は口縁が部厚く、きわめて大型の土器であったと思われる。指頭による凹線を施す。おそらく口縁部文様帯の枠状区画文であろう。２は口縁直下の無文帯を太めの沈線で画する。３・４は同一個体で、隆線による大振りな渦巻文を展開するいわゆる梶山類である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(33) SK036（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－08グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.00m、短軸91cm、深さ27cmを測る。覆土はローム粒を多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第246図、図版106）

１は縄文のみ施す。

(33) SK037（第187図）

遺跡北西部、18Ｆ－98グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸90cm、短軸87cm、深さ47cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを少量含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第246図、図版106）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK038（第187図、図版48）

遺跡北西部、19Ｆ－07グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は円筒状である。径1.39m、深さ80cmを測る。覆土は、２層に焼土粒・炭化物を含む。遺物は土器・土製品・土製品・石器が主に２・３層から出土した。土製品の出土数が多いことが特筆される。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第246図、図版106）

１は接合しない大型破片２点からなる。推定口径33cmを測る。口縁直下の無文帯を半截竹管による太い沈線で画する。２～５は同一個体で、(33) SK039の２とも同一個体である。胴上部はU字状区画文内に縄文を施す。胴下部は同様の逆U字状区画文と蕨手文を交互に配する。ただ、３には異なった区画文様が認められる。沈線は太めで、縄文は左右の太さの異なる縄を撚り合わせている。６は低い山形突起を持つ。口縁直下の無文帯を沈線で画し、その下に逆U字状の沈線が２列見える。２列間は磨消されていないので、両者は下方でU字状につながっているのであろう。沈線は太めである。７は小型土器で他にも破片がある。

胴下部には二重の沈線で逆U字状文を施し、中を磨消している。胴上部は同様のU字状文であろう。８は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。９・10は縄文のみ施す。11は細かい櫛歯条線文である。12は底部が完存する。底径６㎝を測る。底面は丸みを帯び、縁辺は使用による欠けや擦れが認められる。内面は二次的火熱によるあばた状の荒れが顕著である。大部分は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

円板は10点出土したが､小片を除く８点を図示した(66～73)。66～68･70は孔があり､71～73は孔がない。69は不明である。周縁の磨りは66～70は深く、他はやや浅いため72・73は円形に至っていない。66は両面穿孔であるが表面からの穿孔はわずかである。67・68は裏面からの片側穿孔で、68は貫通していないように見える。70は表裏ともほぼ均等な両面穿孔である。71には平行する隆線文様が、73には磨消区画沈線が認められ、伴出土器と同時期であることが分かる。

石器

黒曜石製の石鏃１点、チャートの剝片１点が出土した。

(33) SK039（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－97グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.44m、短軸1.33m、深さ50㎝を測る。覆土は自然堆積状で、下層にロームブロックを多く含む。遺物は主に、土器・土製品・石器が１～３層を中心に出土した。

土器（第246図、図版106）

１は幅広の磨消懸垂文である。２は（33）SK038の２～５と同一個体の胴下部の破片である。３は単隆線で大振りの渦巻文を展開するいわゆる梶山類である。４の小型土器もおそらく同種で、口縁直下の無文帯を画する隆線と大振りの渦巻文を連結する短隆線が認められる。５・６は細かい櫛歯条線文である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階と思われる。

土製品（第255図、図版114）

74は円板、75は土器片錘である。74は周縁の磨りは深く、孔の表面からの穿孔はわずかである。75は下半が破損している。周縁は軽く研磨され、糸掛けは太い。薄手である。

石器

チャート・黒曜石の砕片が各１点出土した。

(33) SK040（第188図、図版49）

遺跡北西部、19Ｆ－17グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.10m、短軸1.01m、深さ48㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第246図、図版106・107）

１は微隆起線による逆U字状区画がわずかに認められる。２は縄文のみ施す。１は加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK042（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－55・56グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は円筒状であるが、壁面下方はややオーバーハングする。規模は長軸1.85m、短軸1.68m、深さ1.23mを測る。遺物は、２～５層を中心に多くの土器・土製品・石器が出土した。

土器（第247図、図版106・107）

１は低い波状突起を持つ大型破片で、口縁直下の無文帯を中位の太さの沈線で画し、以下内部に縄文を入れた沈線区画文様が展開する。突起下には楕円文を配し、その左は大型の波状文となる。胴下部は逆Ｖ字状文である。２は口縁直下の沈線で画された無文帯につまみ状の突起が付く。以下の縄文を入れた沈線区画文様は大型の逆Ｊ字状になるらしい。沈線の太さは中位である。３～６は同一個体である。４～６は胴上半の破片であろう。１とほぼ同様の文様構成を採ると思われるが、６の区画文様は円形に近い。沈線は中位の太さで、稚拙な施文である。７は小型の山形突起を持つ。狭い口縁直下の無文帯を太い沈線で画する。８は橋状突起が口縁に乗る。突起の外縁はそのまま口縁直下を画する微隆起線文となり、その下に円形刺突を施す。９～15は微隆起線文の土器である。10・11は口縁直下の無文帯の区画にのみ微隆起線を施す。他は口縁部以下に逆Ｕ字状文、Ｕ字状文が展開し、縄文を中に施す。16～18は縄文のみの破片である。19～21は櫛歯条線文の土器で、19は口縁直下に無文帯が巡る。20は櫛歯条線で短い弧状文を繰り返す。22は小型の有孔鍔付土器で、最大胴径14㎝を測る。無文地に微隆起線による渦巻状の文様が展開し、胴腹部の左端に取り付けた横渡しの橋状突起は剝落している。内外面とも赤彩されているが、ほとんど痕跡のみで、文様との関係は不明である。23は大型の両耳壺の把手である。24は口縁突起の破片である。25・26は底部が完存する。底径はそれぞれ６㎝と５㎝である。底面縁辺には25は擦れが、26は擦れと欠けが認められる。１～６・19・22・23は加曽利Ｅ3-4式、その他は大部分が4式であろう。

土製品（第255図、図版114）

76は円板である。周縁の磨りは深く、孔は裏面からの片面穿孔で、貫通していないかもしれない。

石器

チャート製の石鏃１点・砕片７点、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点・二次加工のある剝片１点・剝片６点・砕片１点、緑泥片岩の剝片３点、流紋岩の剝片１点、黒曜石の砕片４点、頁岩の砕片３点が出土した。

(33) SK043（第188図）

遺跡北西部、18Ｆ－46グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は円筒状であるが、壁面下方はややオーバーハングする。規模は長軸1.55m、短軸1.45m、深さ1.35mを測る。覆土は、暗褐色土とローム粒・ロームブロックを多く含む層が交互に堆積していた。遺物は、２～４層を中心に多くの土器・石器が出土した。

土器（第248図、図版66・107）

１・２は同一個体である。波状突起を持つ小型土器で、口縁直下の無文帯を沈線と微隆起線で画し、沈線内には編棒状工具による刺突列を施す。その下には微隆起線による区画文様を施す。３は口径35㎝程度になる平縁の大型破片で、キャリパー型の器形をなす。口縁直下の無文帯を太めの沈線で画する。その下には微隆起線による逆Ｕ字状区画文を配し、その頂部は幅のあるつまみ状の突起となる。４～10は微隆起線による文様を施すもので、４・８は口縁直下の無文帯を画する微隆起線のみを施し、他はその下に微隆起線による逆Ｕ字状区画文やＵ字状の区画文を施す。４は口縁部の約1/2、胴下部の約2/3が遺存する。胴下部以下の破片はこれと接合しない。推定口径24㎝、推定底径6㎝を測る。器高は30㎝程度であろう。外面は胴下部、内面は口縁部下のくびれ部以下に炭化物が薄く付着する。微隆起線が巡る口縁直下の無文帯は幅が広い。５は波状突起に向かって微隆起線が立ち上がっている。胎土にすりつぶした土器片粒を混

入する。６は波状突起に向かって口縁直下の無文帯がつまみ状に盛り上がる。11は隆線が付く。12は沈線によるU字状の区画文内に縄文を施す。13・14は縄文のみの大型破片で、13は内外面とも二次的火熱によるあばた状の荒れが顕著である。15は細かい櫛歯条線文を施した胴下部の破片である。16は有孔鍔付土器である。17～19は底部が完存する。17は底面に使用による欠けが認められる。18は底面に使用による擦れが顕著に残り、外側半面に二次的火熱による荒れが著しい。19は内面に炭化物が薄く付着し、二次的火熱による荒れも認められる。11のみ加曽利Ｅ3式新段階で、他は同4式であろう。１・２及び６は古段階、３は中段階、４・５・８は新段階であろう。

石器（第261図、図版118）

101～103は凹基無茎鏃である。101は精緻な加工であるが、102・103は粗雑であり、特に102は未成品の可能性もある。素材は102が主要剥離面に向かってやや湾曲した横長剥片、103が楔形石器である。石材にはチャート（101）、硬質頁岩（102）、及び流紋岩（103）があり多岐にわたる。104は石棒又は石皿の破片を再加工した打製石斧である。石材は緑泥片岩で撥形に成形されている。105は流紋岩質凝灰岩製の楔形石器である。上下両端に両極打撃による潰れの痕跡をとどめる。図示した以外では、チャート製の楔形石器３点・石鏃未成品１点・剥片８点・砕片６点、流紋岩製の石鏃未成品３点・二次加工のある剥片３点・剥片７点・砕片10点、黒曜石製の石核３点・剥片２点、ガラス質黒色安山岩の楔形石器１点・砕片２点、メノウの砕片１点など、石鏃製作に伴う未成品・剥片等が多く出土した。

(33) SK044（第188図、図版49）

遺跡北西部､18Ｆ－36付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.84m、短軸1.71m、深さ1.25mを測る。遺物は、覆土上層の２層を中心に土器・石器が出土した。第261図106の石棒片は４層中から出土した。

土器（第249図、図版107）

１～７は沈線による区画文様を施す。１は口縁直下の無文帯も沈線で画し、その下に円形竹管による刺突文を施す。沈線は細くて鋭いが、稚拙である。２は沈線以下の縄文は縦位施文であり、帯状の区画沈線にはならない。３～５は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。３の区画沈線は微隆起線の下に回り込んでおり、稚拙である。４・５は同一個体である。６は胴下部の破片で逆U字状区画文を、７は上半にV字状区画文、下半は逆U字状区画文を施す。８は口縁直下に指頭による凹線が巡り、途切れた個所は盛り上がる。９は口縁直下の無文帯が内折する。10～14は微隆起線による区画文様を施す。13は無文部が広い。14は隆線による大振りの渦巻文様が展開する。15・16は縄文のみ施す。17は底部が完存する。底部縁辺には使用による欠けが顕著である。大部分は加曽利Ｅ4式であるが、14は同3式新段階、８・９は3-4式かと思われる。

石器（第261図、図版118）

106は緑泥片岩片製の剥片である。石皿又は石棒の破片と考えられる。同様な剥片は図示した以外にも４点出土している。他に図示しなかったものとしては、黒曜石製の石鏃１点、ガラス質黒色安山岩製の楔形石器１点、トロトロ石製の楔形石器１点、砂岩製の定角式磨製石斧の基部の破片１点・石皿の断片１点が出土した。

(33) SK045（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－35グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長

軸1.65m、短軸1.53m、深さ1.58mを測る。覆土はローム粒を多く含む。遺物は、覆土中層の４層を中心に土器・石器が出土した。10の小型の深鉢は斜めに伏せた状態で出土した。

土器（第249図、図版66・107）

１の大型口縁突起は、両耳壺の把手をまねたような橋状突起である。突起上端が舌状となる。突起の両側縁は左右にのびて口縁直下の無文帯を画する微隆起線になるらしい。突起下には指頭による凹線が二重に重なる。２～４は沈線による区画文様を施す。２は波状突起を持ち、内部を磨り消した幅の狭い区画文様が認められる。３は逆く字状の区画沈線と上端に上に開いた弧状沈線が認められ、複雑な文様を構成する。５～９は微隆起線による区画文様を施す。５は橋状突起を持つ。橋状突起には内外面とも孔が開く。10～12は口縁直下の無文帯を不明瞭な微隆起線で画し、以下縄文のみ施す。10は口縁から胴上部の1/3強を欠くほかは完存する。口径18㎝、器高23㎝、底径５㎝を測る。底面は使用による擦れが著しい。11は内外面とも炭化物が付着する。13は細い櫛歯条線文である。14は両耳壺の把手部である。胎土中にすりつぶした土器片粒を混入する。15・16は底部である。15は内面にわずかに赤彩の痕跡が残る。16はミニチュア土器である。17は無文地に微隆起線文を施す。有孔鍔付土器であろう。内外面全体を赤彩する。２～４・10～12・14は加曽利Ｅ3-4式、他は同Ｅ4式であろう。

石器

ガラス質黒色安山岩製・黒曜石・チャート・硬質頁岩の剥片３点・砕片６点、石英斑岩・安山岩製の磨石類が各１点出土した。

(33) SK046（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－54グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸94㎝、短軸88㎝、深さ83㎝を測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第250図、図版107）

１～３は同一個体で、瓢形の注口土器になると思われる。推定口径12㎝を測る。口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。微隆起線に直結して横渡しの橋状突起が付く。２・３の胴部には微隆起線による区画文様を施す。４は帯状の沈線区画内に縄文を充填する。５は細い沈線による内部を磨消したＶ字状区画文である。６は縄文のみ施す。７は口縁直下に無文帯を配し、以下櫛歯条線による蛇行文様を施す。いずれも加曽利Ｅ4式で、４は同時期の西日本系の土器であろう。

石器

ガラス質黒色安山岩製の楔形石器２点・石鏃未成品１点・二次加工のある剥片１点・砕片２点、安山岩製の楔形石器１点、黒曜石製の砕片１点、チャート製の砕片１点が出土した。

(33) SK047（第188図）

遺跡北西部、18Ｆ－43グリッド付近に位置する。規模は長軸1.23m、短軸1.15m、深さ62㎝を測る。断面形はたらい状である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第250図、図版107）

１は大型土器の破片で、隆線による口縁部文様帯の枠状区画が認められる。２は磨消懸垂文、３は縄文のみの土器で口縁直下に狭い無文帯を配する。いずれも加曽利Ｅ3式であろう。

(33) SK048（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－52グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、断面形はたらい状である。規模

は長軸1.07m、短軸95cm、深さ55cmを測る。覆土はローム粒を多く含む。遺物は、１層を中心に土器・石器が出土した。土器１・２から所属時期は４c期と考えたい。

土器（第250図、図版108）

１は口縁下の逆U字状の微隆起線帯が橋状突起の下をくぐって展開している。２は口縁から胴上部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径23cmを測る。やや弱いキャリパー型の器形である。口縁直下の無文帯を微隆起線で画し、以下は縄文のみである。３は隆帯による三角形の枠状文に沿って沈線、波状沈線を施し、空隙を集合沈線で充填している。枠状文の上には連続爪形文を施す。１・２は加曽利Ｅ4式古段階、３は阿玉台３式であろう。

石器（第261図、図版119）

107は磨石類の欠損品である。下端部、両側縁、表裏に凹み痕をとどめる。石材は安山岩である。図示した以外では、チャート製の楔形石器１点、黒曜石の剥片１点が出土した。

(33) SK049（第188図）

遺跡北西部、18Ｆ－41グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。長軸93cm、短軸88cm、深さ71cmを測る。覆土は下層にロームブロックを多く含む。 遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第250図、図版107）

１は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。２は縄文のみである。１は加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK050（第188図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－64グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。南西側に長さ約18cmの張出しを有する。規模は長軸1.20m、短軸96cm、深さ84cmを測る。覆土は全般にローム粒を多く含む。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第250図、図版108）

１は口縁下を沈線で画した後、沈線で枠状文を配し、口縁直下と枠内に横位回転の縄文を施す。その下は逆U字状の区画文様となる。２は沈線が不明瞭だが磨消懸垂文であろう。３は棒状の口縁突起で、突起頂部の微隆起線による渦巻文が突起正面に垂れ下がる。４は太い沈線によるＪ字状区画文に縄文を充填する。１・２は加曽利Ｅ3式、３は同4式で４は同時期の西日本系土器ないしは称名寺式であろう。１は類例を見ない。3式中段階と考えたい。

石器

珪質頁岩・チャート・黒曜石の砕片が各１点出土した。

(33) SK051（第188図、図版49）

遺跡北西部、19Ｆ－07グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状を呈する。規模は長軸1.07m、短軸96cm、深さ71cmを測る。覆土は自然堆積状を示し、上・中層には炭化物を含む。遺物は、覆土中層の２・３層を中心に土器が出土した。

土器（第250図、図版108）

１は磨消懸垂文を施す。縄文は複節縄文である。２は口縁直下の狭い無文帯を凹線で画する。凹線内には縦長の刺突文を加えている。３は口縁直下の無文帯が左右から伸びてつまみ状に盛り上がる。その下には内部を磨消した逆U字状区画文が見える。４は内部を磨消した逆U字状区画文の一部が認められる。５

は微隆起線による区画文である。６は縄文のみ施す。７は完存する底部である。１は加曽利Ｅ3式、２・３は同3-4式、５は同4式であろう。

(33) SK053（第189図）

遺跡北西部、18Ｆ－88グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒ないしたらい状を呈する。規模は長軸99㎝、短軸89㎝、深さ50㎝を測る。底面にはピットが２か所ある。覆土は自然堆積状で、ローム粒を含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第250図、図版108）

１・２は微隆起線文を施す。３は帯状の沈線区画内に縄文を充填する。胎土にすりつぶした土器片粒を少量混入する。１・２は加曽利Ｅ4式、３は同時期の西日本系土器ないしは称名寺式であろう。

(33) SK056（第189図、図版49）

遺跡北西部、18Ｆ－63グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は円筒ないしたらい状を呈する。長軸1.01m、短軸89㎝、深さ73㎝を測る。覆土はローム粒を多量に含む。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器・土製品・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第250図、図版108）

１～５は隆線による大振りの渦巻文を展開するいわゆる梶山類である。このうち、２～４は同一個体で、３には沈線のみで小型の渦巻文様を加えている。６・７は口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画する。８は内部に縄文を施した太い沈線による逆Ｕ字状文である。９は完存する底部で、底面の中心が浅く窪む。Ｕ字状の沈線区画文が５単位残る。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

77は円板である。周縁の磨りは深く、孔はほぼ均等な両面穿孔である。

石器（第261図、図版118）

108は凹基無茎鏃である。半両面加工で、石材にはガラス質黒色安山岩を用いている。109は短冊形の打製石斧である。石材は緑泥片岩であり、石皿・石棒片の再加工品と考えられる。図示した以外では、チャート・黒曜石の剝片が各１点、軽石製品が１点出土した。

(33) SK067（第189図、図版49）

遺跡北西部、19Ｇ－32グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状を呈する。長軸1.04m、短軸94㎝、深さ49㎝を測る。覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。遺物は、覆土上層の２層を中心に土器・土製品が出土した。

土器（第251図、図版67・108）

１は、ほぼ正位の状態で出土した。胴部から底部にかけてほぼ完存する。最大胴径39㎝、現存高35㎝、底径８㎝を測る。おそらく本来の器高は60㎝を超える大型土器であろう。底面には使用による擦れなどはほとんどないが、内面はほぼ全体が二次的火熱により荒れている。幅広の磨消懸垂文を施す。磨消部は６単位で、加えて1か所に沈線が垂下する。２は隆線による口縁部文様帯の枠状区画が認められる。３は櫛歯条線文である。１は加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

土製品（第255図、図版114）

78は円板である。周縁の磨りはやや浅く、表面も磨りが全面に認められる。孔はほぼ均等な両面穿孔であるが、裏面からの孔は隅丸方形状をなす。

(33) SK068（第189図、図版49）

遺跡北西部、18G－94グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.37m、深さ40㎝を測る。底面は凹凸がある。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

1は隆線による枠状の区画文様を施す。いわゆる梶山類であろう。

(33) SK069（第189図、図版49）

遺跡北西部、18G－75グリッド付近に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.11m、短軸1.06m、深さ26㎝を測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

1は帯状の沈線区画内に縄文を充填する。右端にも縦位の沈線が認められる。2は底部の1/2弱が遺存する。底面縁辺は使用による擦れが顕著に認められる。1は加曽利3-4式であろう。

(33) SK076（第189図、図版50）

遺跡北西部、18F－78グリッド付近に位置する。平面形は不整円形、断面形は円筒ないしたらい状である。規模は長軸1.14m、短軸1.07m、深さ57㎝を測る。覆土は上・中層に炭化物を含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

1は狭い口縁直下の無文帯に小型の半截竹管による刺突列を施す。2は微隆起線による区画文様である。1は加曽利E3-4式、2は同4式であろう。

(33) SK077（第189図、図版50）

遺跡北西部、18F－26グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.31m、短軸1.17m、深さ60㎝を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

1は口縁直下の無文帯下に指頭による凹線が巡る。その下は櫛歯条線文である。加曽利E3式新段階であろう。

石器

チャート製の剥片が1点出土した。

(33) SK078（第189図、図版50）

遺跡北西部、18F－79グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸1.45m、短軸1.34m、深さ69㎝を測る。覆土は下層に焼土を多く含む。遺物は、覆土上層の2層を中心に土器が出土した。

土器（第251図、図版108）

1・2は微隆起線文を施す。3は幅の広い磨消懸垂文、4は帯状の沈線区画内に縄文を充填する。5は細かい櫛歯条線文を施す。1・2は加曽利E4式、4は同時期の西日本系土器、3は同3式のおそらく新段階であろう。

(33) SK080（第189図、図版50）

遺跡北西部、18G－70グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒状である。規模は長軸95㎝、短軸90㎝、深さ63㎝を測る。覆土は炭化材片を少量含む。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。110の石棒片は底面上から出土した。

土器（第251図、図版66・108）

１～４は微隆起線文を施す。５は帯状の沈線区画内に縄文を充填する。左の沈線区画は逆Ｌ字に屈折し、右のそれは垂下している。６は櫛歯条線文を弧状に施す。７は底部から胴下部が完存する。底面はわずかに上底となる。縁辺には使用による擦れなどないが、内面には二次的火熱による軽いあばた状の荒れが認められる。１～４は加曽利Ｅ4式であろう。

石器（第261図、図版119）

110の石棒は胴部の破片であり、下端部は研磨によって平坦に再加工されている。これに対して上端部には研磨痕はみられないが、ほぼ中央部に凹み痕が１か所存在する。石材は安山岩である。

(33) SK082（第189図、図版50）

遺跡北西部、18Ｆ－38グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は径1.30m、深さ68㎝を測る。覆土は自然堆積状を示す。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

１は微隆起線文を施す。２は口縁直下の無文帯を稚拙な細い沈線で画する。３は細かい櫛歯条線文である。１・２は加曽利Ｅ4式であろう。

石器（第261図、図版118）

111は流紋岩製の凹基無茎鏃である。先端部と片脚が欠損する。

(33) SK083（第189図、図版50）

遺跡北西部、18G－80グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.08m、短軸93㎝、深さ50㎝を測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含み、自然堆積状を示す。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

１は微隆起線による区画文様を施す。加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK084（第189図、図版50）

遺跡北西部、18G－91グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.42m、短軸1.35m、深さ44㎝を測る。底面は西側が一段深く掘り込まれ、東側にはピットが１か所ある。土層断面には切り合いが認められるため、２基の土坑が重複したものである可能性が高い。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器

加曽利Ｅ式後半の小片が５点出土した。

石器（第261図、図版118）

112はチャート製の凹基無茎鏃である。先端部の欠損はガジリによるものである。

(33) SK087（第189図、図版50）

遺跡北西部、18G－12グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.03

m、短軸1.00m、深さ35cmを測る。南側壁面際に深さ９cmのピットが１か所ある。覆土はローム粒を含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

１は太い沈線による口縁部文様帯の枠状文の下に胴部文様帯の磨消懸垂文を施す。加曽利Ｅ3式のおそらく新段階であろう。

(33) SK094（第189図、図版50）

遺跡北西部、18Ｇ－23グリッド付近に位置する。(33) SI093の炉を切っている。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。長軸1.39m、短軸1.28m、深さ70cmを測る。底面は凹凸がある。覆土は中・下層に焼土ブロックを混入する。遺物は土器・土製品・石器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

１は口縁直下の無文帯下に太めの沈線が巡る。下端破損部にも沈線が残る。加曽利Ｅ3式新段階～3-4式であろう。

土製品（第255図、図版114）

79は円板である。周縁の磨りは浅い。薄手で、磨消懸垂文が認められる。伴出土器とほぼ同時期であろう。

石器

黒曜石の石核が１点出土した。

(33) SK096（第189図）

遺跡北西部、19Ｇ－32グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸79cm、短軸77cm、深さ29cmを測る。覆土はローム粒を多量に含む。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第251図、図版108）

１は微隆起線による区画文様を施す。加曽利Ｅ4式であろう。

(33) SK098（第189図、図版50）

遺跡北西部、18Ｇ－54グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は径1.42m、深さ68cmを測る。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第251図、図版108）

１は口縁直下の無文帯下に微隆起線とへらによる刺突列が巡る。２は微隆起線のみが巡る。３は隆線、４は太めの沈線が認められる。１・２は加曽利Ｅ4式で、１は古段階、３はいわゆる梶山類で、４とともに同3式新段階であろう。

石器

斑糲岩製の石皿の断片が１点出土した。

(33) SK102（第189図、図版50）

遺跡北西部、18Ｇ－59グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は円筒ないしたらい状である。規模は径95cm、深さ45cmを測る。底面はやや凹凸があり、覆土下層の２層はソフトローム粒主体である。遺物は、覆土上層の１層を中心に土器・石器が出土した。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第252図、図版108・109）

１は大型土器で、口縁部文様帯には低い隆線による横に流れた枠状文を施し、胴部文様帯には幅の広い

磨消懸垂文を施す。拓影左側の幅の広い縄文帯は１本の沈線で二分され、左側の分帯の縄文は他の縄文と原体が異なる。２は胴上部から底部付近にかけての大破片で、下部の最大径32㎝、現存高41㎝を測る大型土器である。外面がほぼ全体、内面は部分的に二次的火熱によるあばた状の荒れが残る。文様は縄文地に指頭による沈線でなされる。胴上部は二重のＵ字状文、胴下部は渦巻文や蕨手文である。３・４は同一個体で、口縁直下が無文帯となり、以下は縄文のみである。５は口縁直下の無文帯を細い沈線で画し、以下へらによる細い集合沈線を施す。６は指頭に近い太い沈線で、口縁部文様帯には二重の枠状文を、胴部文様帯は３条１単位の懸垂文を施す。地文は櫛歯条線による蛇行文様である。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

石器（第261図、図版118）

113はチャート製の凹基無茎鏃である。先端部が欠損している。114は大型石棒の頭部片である。凹み痕が複数みとめられる。石材は安山岩である。図示した以外では、チャート製の石鏃１点・砕片６点、黒曜石の砕片２点が出土した。

(33) SK109（第190図）

遺跡北西部、18Ｆ－32グリッドに位置する。北側は近世の溝（37）SD021に切られていた。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は長軸1.36m、短軸1.30m、深さ38㎝を測る。覆土はローム粒を多く含む。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。所属時期は３ｃ期と考えられる。

土器（第252図、図版108）

１は磨消懸垂文と縦位の沈線が認められる。２は２条の太い沈線で内部を無文とした大振りの渦巻文を描く。３は隆線による大振りの渦巻文となると思われる。４・５は口縁直下に狭い無文帯を持つ。いずれも加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(35) SK021（第190図、図版50）

遺跡西部、18Ｆ－30グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.89m、短軸1.73m、深さ1.20mを測る。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。４は底面上から出土した。

土器（第253図、図版109）

１～５は微隆起線による区画文様を施す。４・５は同一個体で、内部に縄文を入れたＶ字状区画文とより大型のＵ字状区画文を交互に配する。６～８は沈線による区画文様を施す。７・８は上半がＵ字状区画文、下半が逆Ｖ字状区画文の中に縄文を施す。９は縄文のみである。いずれも加曽利Ｅ4式であろう。

(37) SK108（第190図、図版50）

遺跡北西部、21Ｆ－23グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。長軸1.20m、短軸97㎝、深さ47㎝を測る。覆土は炭化物・焼土粒を少量含む。遺物は、覆土中層の２層を中心に土器が出土した。

土器（第253図、図版108）

１は無文地に微隆起線による文様を施す。外面に炭化物が付着する。２は隆起線による大振りの渦巻文を施す。(33) SK056の２～４と同一個体である。２は加曽利Ｅ3式新段階であろう。

(39) SK003（第190図、図版50）

遺跡西部､22Ｄ－13グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸1.08m、

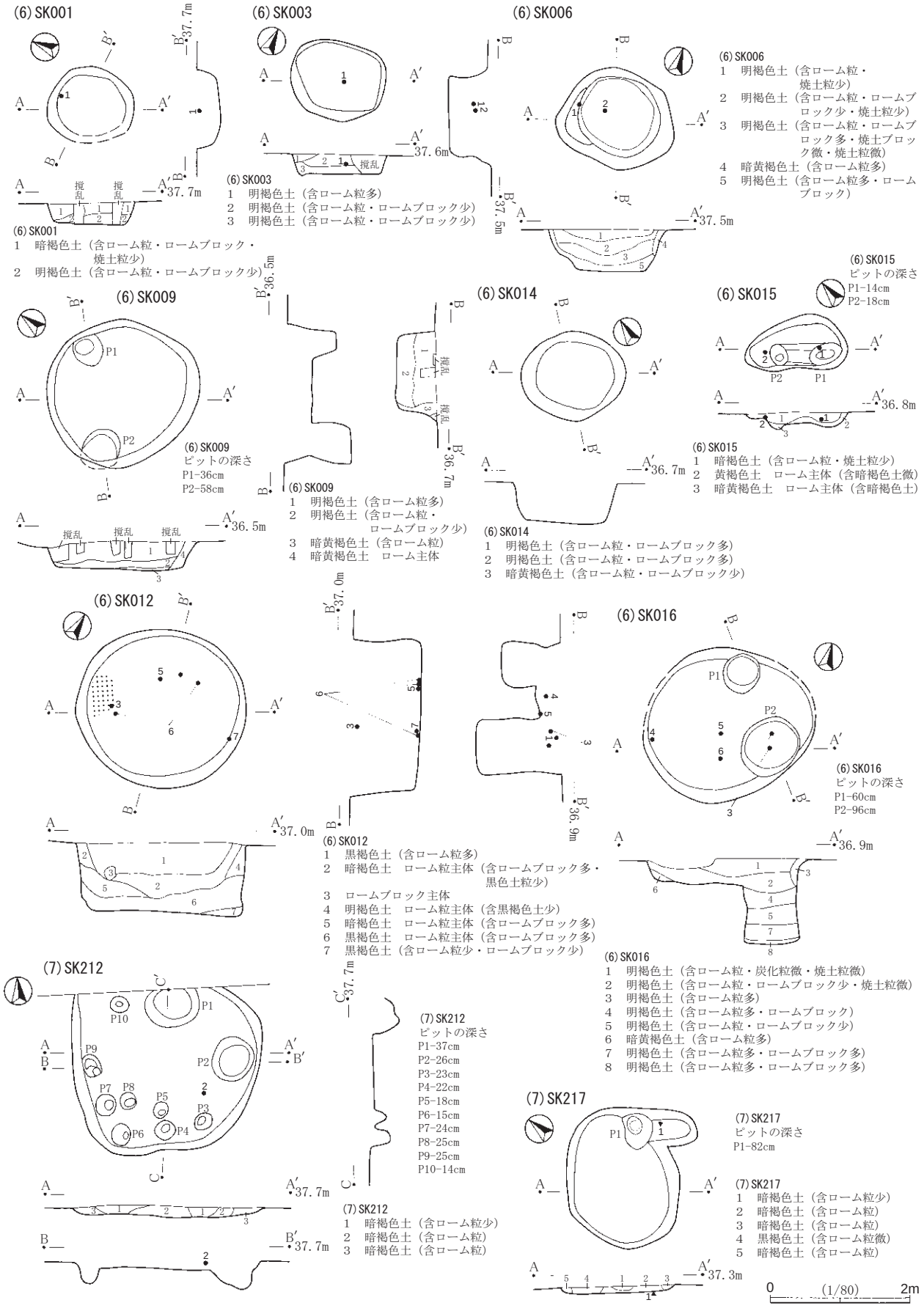
深さ47㎝を測る。覆土はローム粒・炭化物を含む。遺物は、覆土上層を中心に土器・石器が出土した。

土器（第253図、図版109）

１は口縁直下の無文帯が左右から伸びてつまみ状に盛り上がる。無文帯は沈線で画され、以下に無文帯が垂下するが、片側には区画沈線はなく磨消懸垂文にならない。２は口縁直下の無文帯の下縁がわずかに盛り上がり、その下に沈線が巡る。３は波状突起を持ち、口縁直下の無文帯下に不明瞭な沈線が巡る。４は幅広の磨消懸垂文らしい。５の磨消懸垂文も沈線が不明瞭である。６は２条の沈線で逆U字状の区画文様を施し、中を無文としている。７は縄文のみであるが、上端に不規則な沈線が認められる。文様か否か判断しがたい。８は櫛歯条線文である。１～３、５・６は加曽利Ｅ3-4式であろう。４は3式新段階であろう。

石器（第261図、図版119）

115は打製石斧である。石材は緑泥片岩であり、石皿片又は石棒片の再利用したものの可能性が高い。周辺加工である。



(6) SK001
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・焼土粒少）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）

(6) SK003
1 明褐色土（含ローム粒多）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）

(6) SK006
1 明褐色土（含ローム粒・焼土粒少）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒少）
3 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック多・焼土ブロック微・焼土粒微）
4 暗黄褐色土（含ローム粒多）
5 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）

(6) SK009
ピットの深さ
P1-36cm
P2-58cm

(6) SK009
1 明褐色土（含ローム粒多）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗黄褐色土（含ローム粒）
4 暗黄褐色土 ローム主体

(6) SK014
1 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
3 暗黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）

(6) SK015
ピットの深さ
P1-14cm
P2-18cm

(6) SK015
1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒少）
2 黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土微）
3 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）

(6) SK012
1 黒褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック多・黒色土粒少）
3 ロームブロック主体
4 明褐色土 ローム粒主体（含黒褐色土少）
5 暗褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック多）
6 黒褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック多）
7 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）

(6) SK016
ピットの深さ
P1-60cm
P2-96cm

(6) SK016
1 明褐色土（含ローム粒・炭化粒微・焼土粒微）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒微）
3 明褐色土（含ローム粒多）
4 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
5 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
6 暗黄褐色土（含ローム粒多）
7 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
8 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

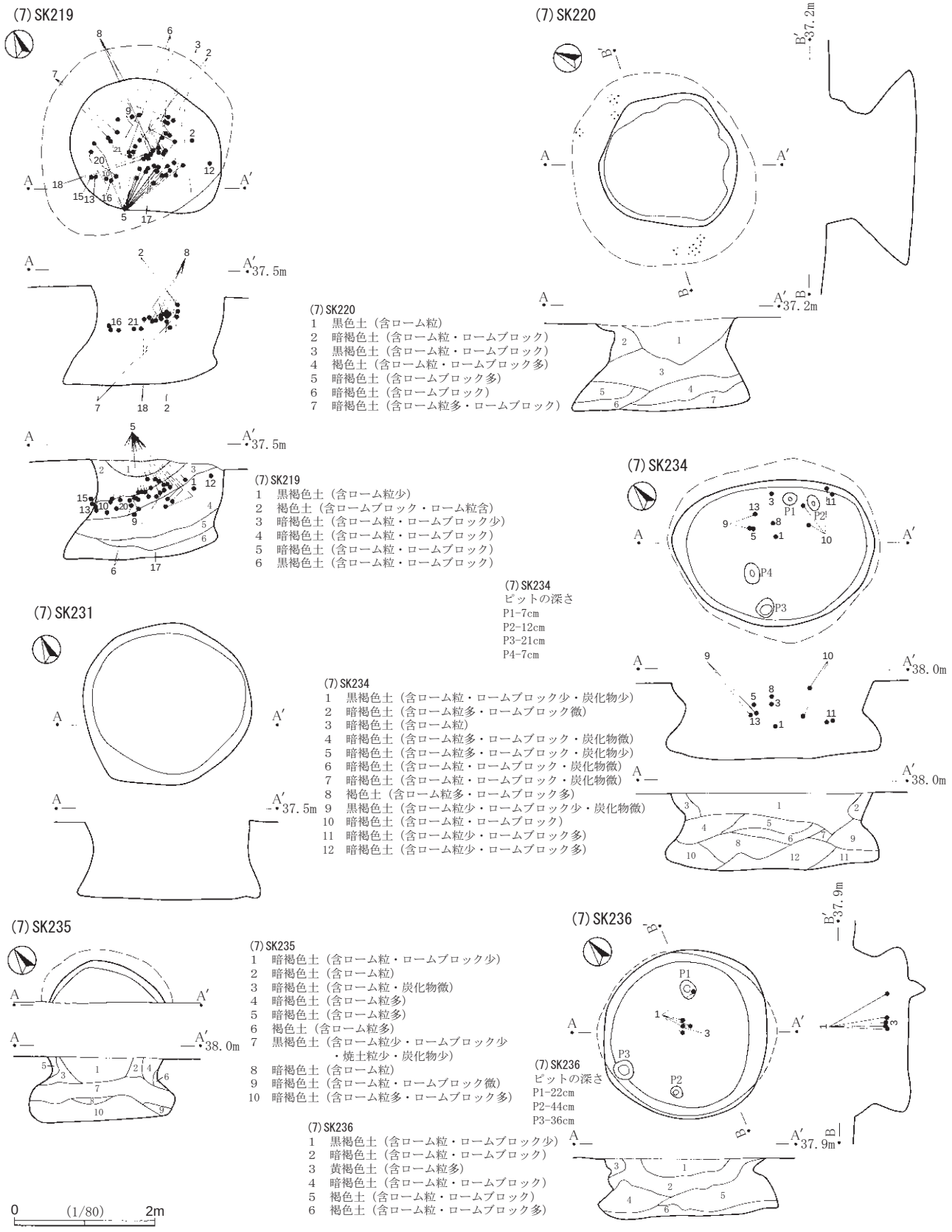
(7) SK212
ピットの深さ
P1-37cm
P2-26cm
P3-23cm
P4-22cm
P5-18cm
P6-15cm
P7-24cm
P8-25cm
P9-25cm
P10-14cm

(7) SK212
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）

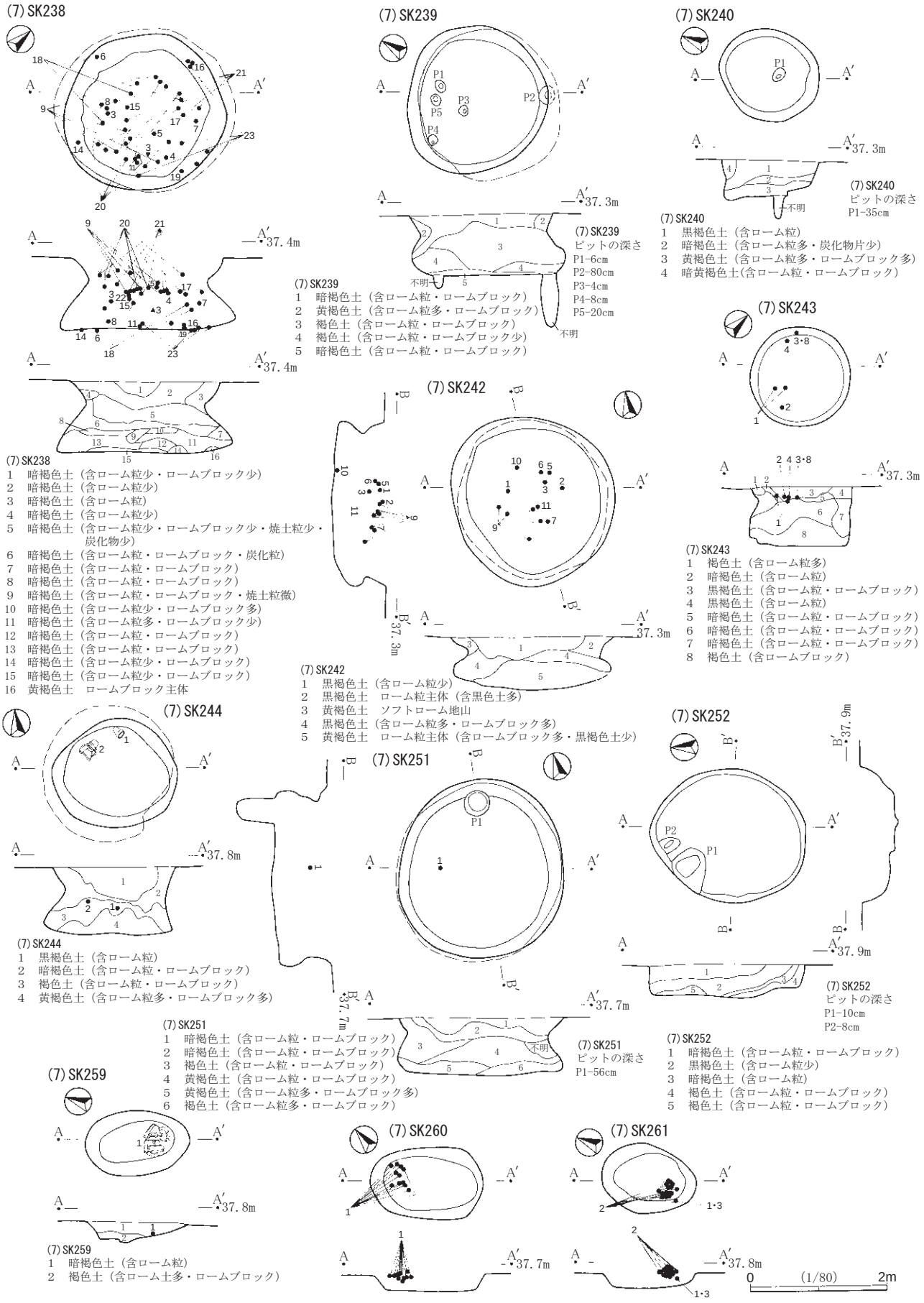
(7) SK217
ピットの深さ
P1-82cm

(7) SK217
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ローム粒微）
5 暗褐色土（含ローム粒）

第157図 土坑等（1）


(7)SK219
(7)SK220
(7)SK219
1　黒色土（含ローム粒少）
2　褐色土（含ローム粒・ローム粒含）
3　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
4　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6　黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(7)SK220
1　黒色土（含ローム粒）
2　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3　黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4　褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
5　暗褐色土（含ロームブロック多）
6　暗褐色土（含ロームブロック）
7　暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
(7)SK231
(7)SK234
ピットの深さ
P1-7cm
P2-12cm
P3-21cm
P4-7cm
(7)SK234
1　黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・炭化物少）
2　暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
3　暗褐色土（含ローム粒）
4　暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック・炭化物微）
5　暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック・炭化物少）
6　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・炭化物微）
7　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・炭化物微）
8　褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
9　黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物微）
10　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
11　暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
12　暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
(7)SK235
(7)SK235
1　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2　暗褐色土（含ローム粒）
3　暗褐色土（含ローム粒・炭化物微）
4　暗褐色土（含ローム粒多）
5　暗褐色土（含ローム粒多）
6　褐色土（含ローム粒多）
7　黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少・炭化物少）
8　暗褐色土（含ローム粒）
9　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
10　暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(7)SK236
(7)SK236
ピットの深さ
P1-22cm
P2-44cm
P3-36cm
(7)SK236
1　黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3　黄褐色土（含ローム粒多）
4　暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5　褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6　褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
0　(1/80)　2m

第158図　土坑等（2）



(7) SK238
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少・炭化物少）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・炭化粒）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
9 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・焼土粒微）
10 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
11 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
12 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
13 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
14 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
15 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
16 黄褐色土　ロームブロック主体

(7) SK239
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(7) SK239
ピットの深さ
P1-6cm
P2-80cm
P3-4cm
P4-8cm
P5-20cm

(7) SK240
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒多・炭化物片少）
3 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗黄褐色土(含ローム粒・ロームブロック)

(7) SK240
ピットの深さ
P1-35cm

(7) SK242
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土　ローム粒主体（含黒色土多）
3 黄褐色土　ソフトローム地山
4 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 黄褐色土　ローム粒主体（含ロームブロック多・黒褐色土少）

(7) SK243
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 褐色土（含ロームブロック）

(7) SK244
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(7) SK251
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）

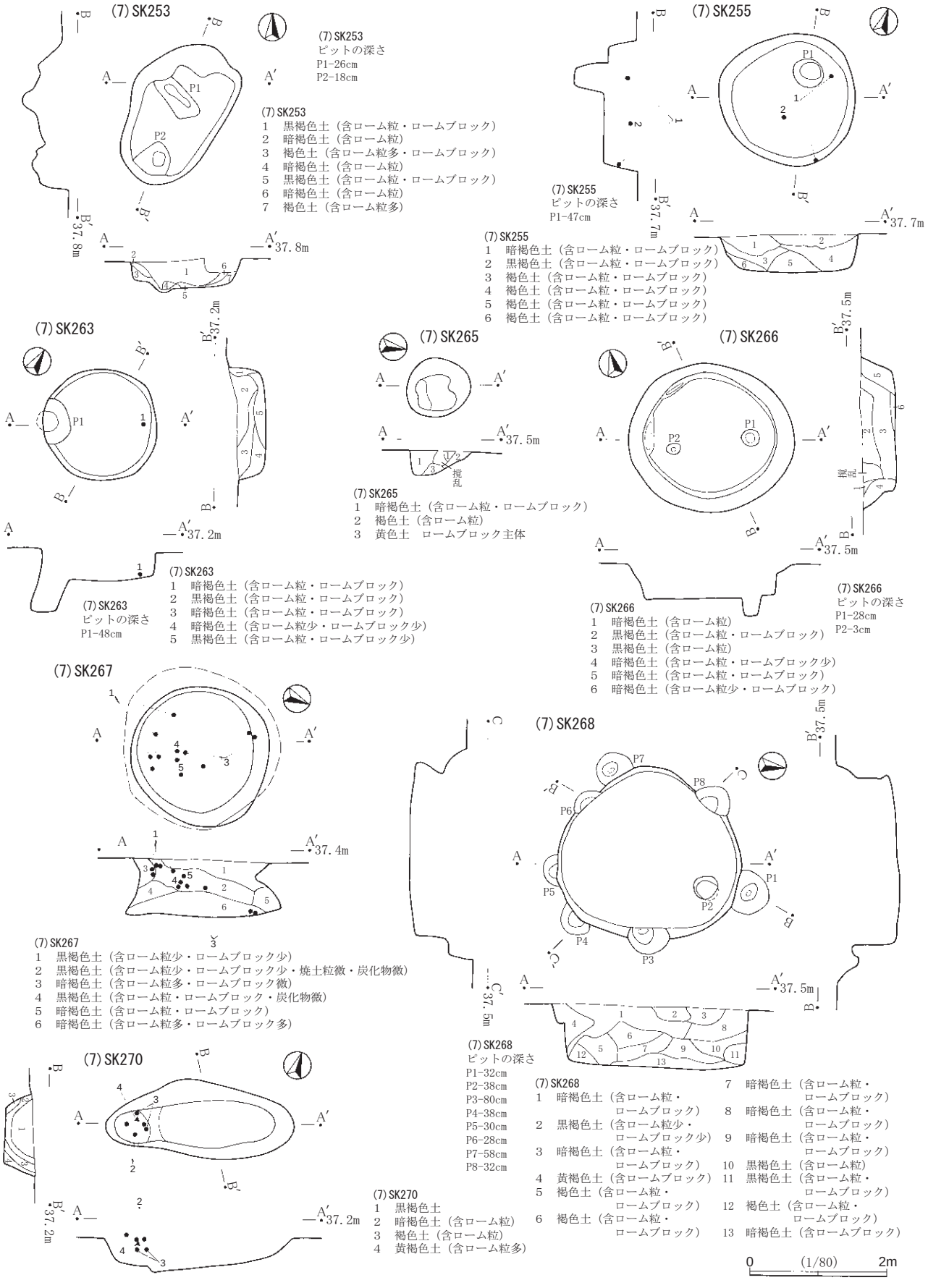
(7) SK251
ピットの深さ
P1-56cm

(7) SK252
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

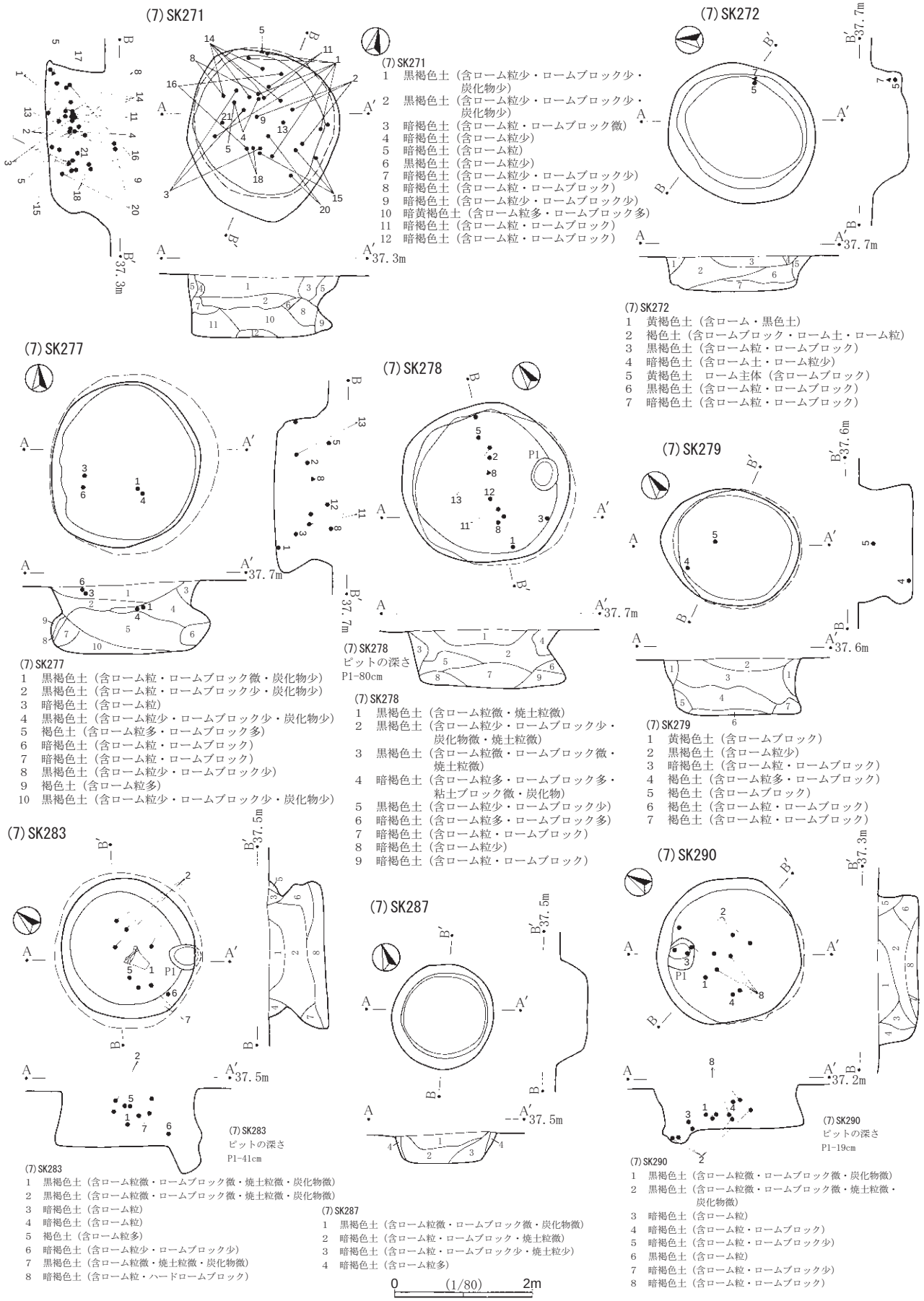
(7) SK252
ピットの深さ
P1-10cm
P2-8cm

(7) SK259
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム土多・ロームブロック）

第159図　土坑等（3）


(7)SK253
P1
P2
A
A′
B
B′
37.8m
(7)SK253
ピットの深さ
P1-26cm
P2-18cm
(7)SK253
1 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 褐色土（含ローム粒多）
(7)SK255
P1
37.7m
(7)SK255
ピットの深さ
P1-47cm
(7)SK255
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(7)SK263
P1
37.2m
(7)SK263
ピットの深さ
P1-48cm
(7)SK263
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
5 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
(7)SK265
37.5m
撹乱
(7)SK265
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 褐色土（含ローム粒）
3 黄色土 ロームブロック主体
(7)SK266
P1
P2
37.5m
撹乱
(7)SK266
ピットの深さ
P1-28cm
P2-3cm
(7)SK266
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
(7)SK267
37.4m
(7)SK267
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒微・炭化物微）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
4 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック・炭化物微）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(7)SK268
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
37.5m
(7)SK268
ピットの深さ
P1-32cm
P2-38cm
P3-80cm
P4-38cm
P5-30cm
P6-28cm
P7-58cm
P8-32cm
(7)SK268
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 黄褐色土（含ロームブロック）
5 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
9 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
10 黒褐色土（含ローム粒）
11 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
12 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
13 暗褐色土（含ロームブロック）
(7)SK270
37.2m
(7)SK270
1 黒褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒）
4 黄褐色土（含ローム粒多）
0 (1/80) 2m

第160図　土坑等（4）



(7)SK271
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物少）
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 黒褐色土（含ローム粒少）
7 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
9 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
10 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
11 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
12 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(7)SK272
1 黄褐色土（含ローム・黒色土）
2 褐色土（含ロームブロック・ローム土・ローム粒）
3 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム土・ローム粒少）
5 黄褐色土　ローム主体（含ロームブロック）
6 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(7)SK277
1 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック微・炭化物少）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・炭化物少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物少）
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
9 褐色土（含ローム粒多）
10 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物少）

(7)SK278
ピットの深さ
P1-80cm

(7)SK278
1 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化物微・焼土粒微）
3 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・焼土粒微）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・粘土ブロック微・炭化物）
5 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒少）
9 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(7)SK279
1 黄褐色土（含ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
5 褐色土（含ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(7)SK283
ピットの深さ
P1-41cm

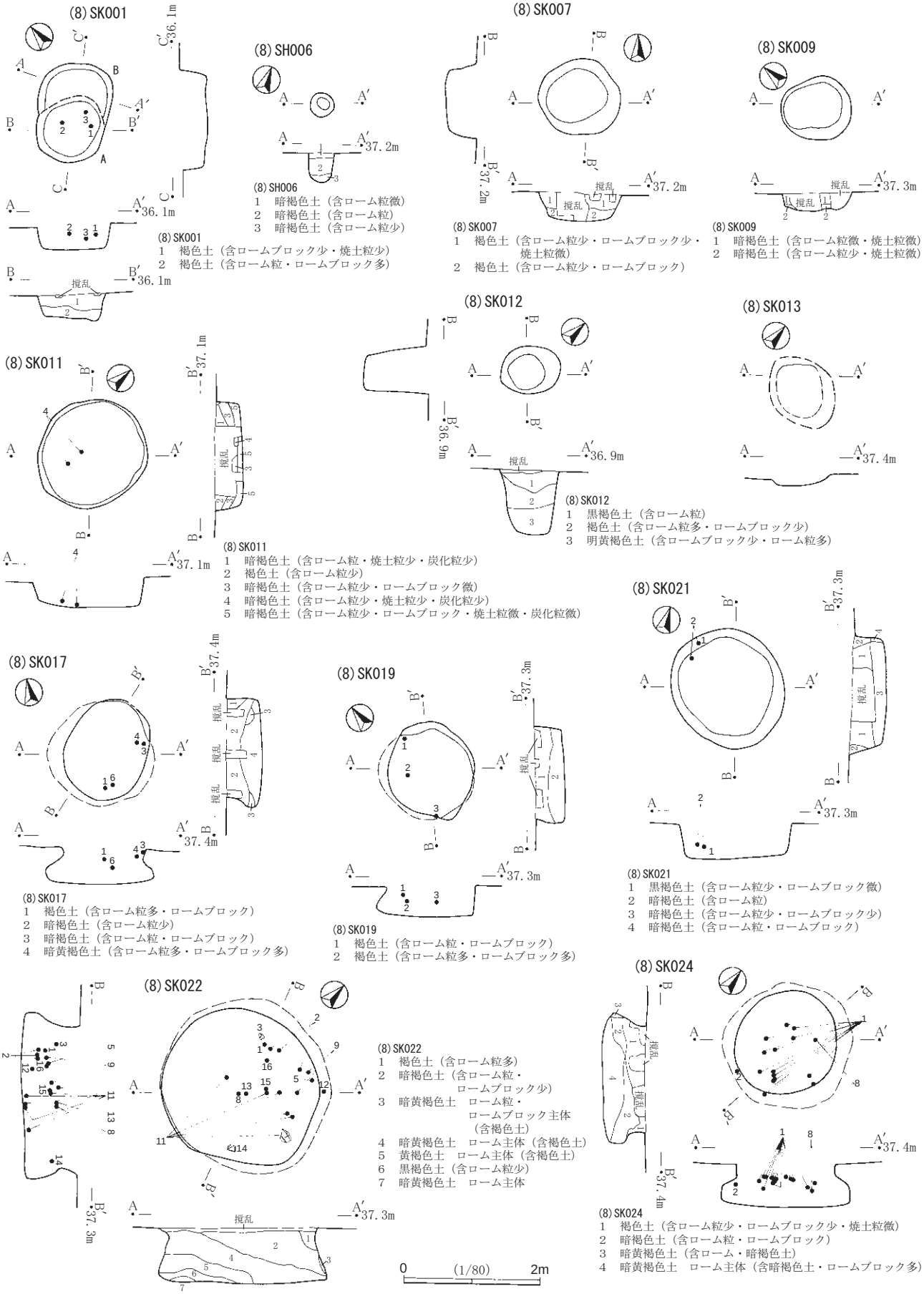
(7)SK283
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・焼土粒微・炭化物微）
2 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・焼土粒微・炭化物微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
7 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒微・炭化物微）
8 暗褐色土（含ローム粒・ハードロームブロック）

(7)SK287
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・炭化物微）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・焼土粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒多）

(7)SK290
ピットの深さ
P1-19cm

(7)SK290
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・炭化物微）
2 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・焼土粒微・炭化物微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
6 黒褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

第161図　土坑等（5）



(8) SK001
1 褐色土（含ローム粒ブロック少・焼土粒少）
2 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）

(8) SH006
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒少）

(8) SK007
1 褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒微）
2 褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）

(8) SK009
1 暗褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒微）

(8) SK012
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 明黄褐色土（含ロームブロック少・ローム粒多）

(8) SK011
1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒少・炭化粒少）
2 褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
4 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少・炭化粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック・焼土粒微・炭化粒微）

(8) SK017
1 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

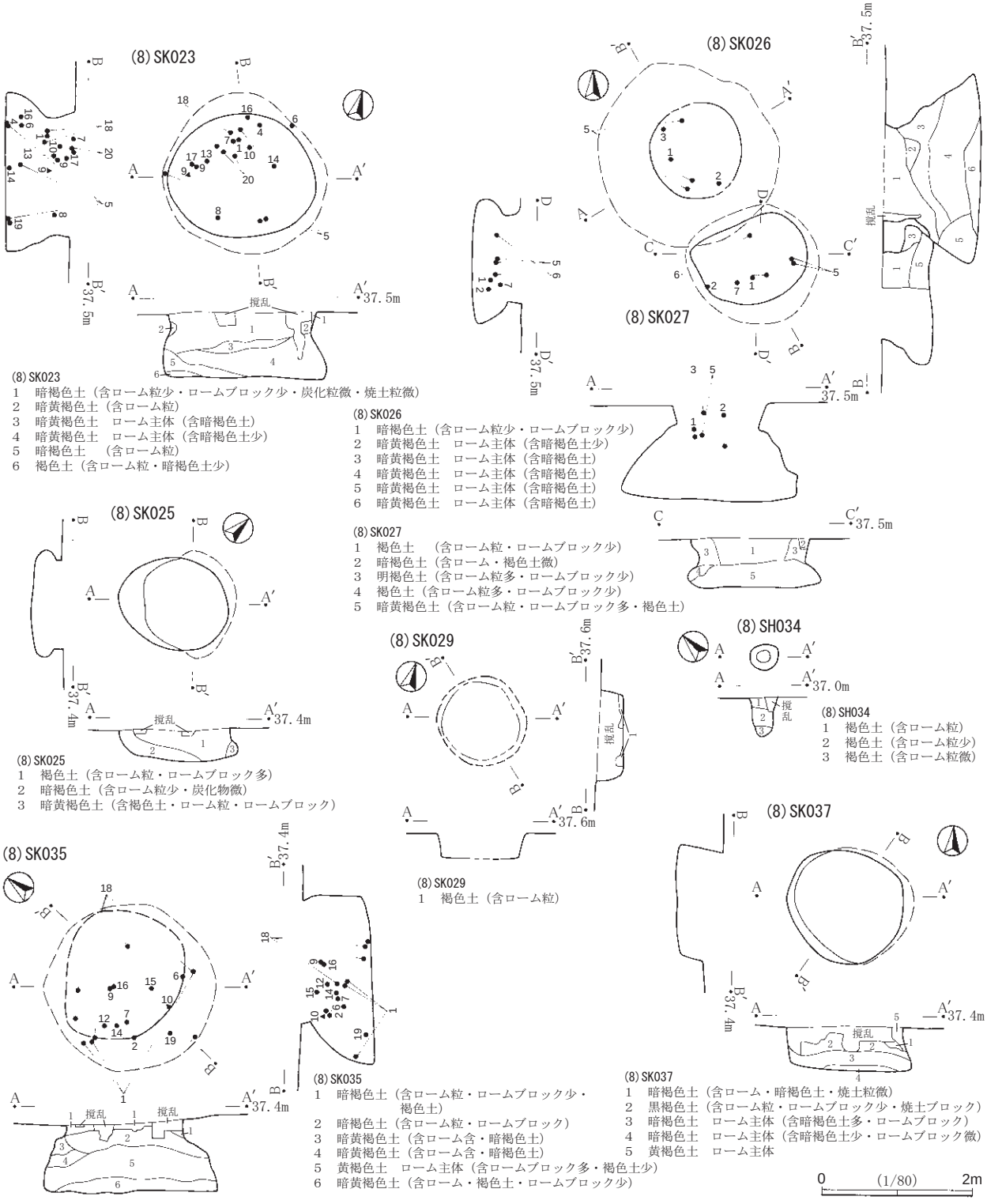
(8) SK019
1 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(8) SK021
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(8) SK022
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体（含褐色土）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含褐色土）
5 黄褐色土 ローム主体（含褐色土）
6 黒褐色土（含ローム粒少）
7 暗黄褐色土 ローム主体

(8) SK024
1 褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 暗黄褐色土（含ローム・暗褐色土）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土・ロームブロック多）

第162図 土坑等（6）



(8) SK023
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化粒微・焼土粒微）
2 暗黄褐色土（含ローム粒）
3 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土少）
5 暗褐色土 （含ローム粒）
6 褐色土（含ローム粒・暗褐色土少）

(8) SK026
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土少）
3 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）
5 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）
6 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土）

(8) SK027
1 褐色土 （含ローム粒・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム・褐色土微）
3 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
5 暗黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック多・褐色土）

(8) SK025
1 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物微）
3 暗黄褐色土（含褐色土・ローム粒・ロームブロック）

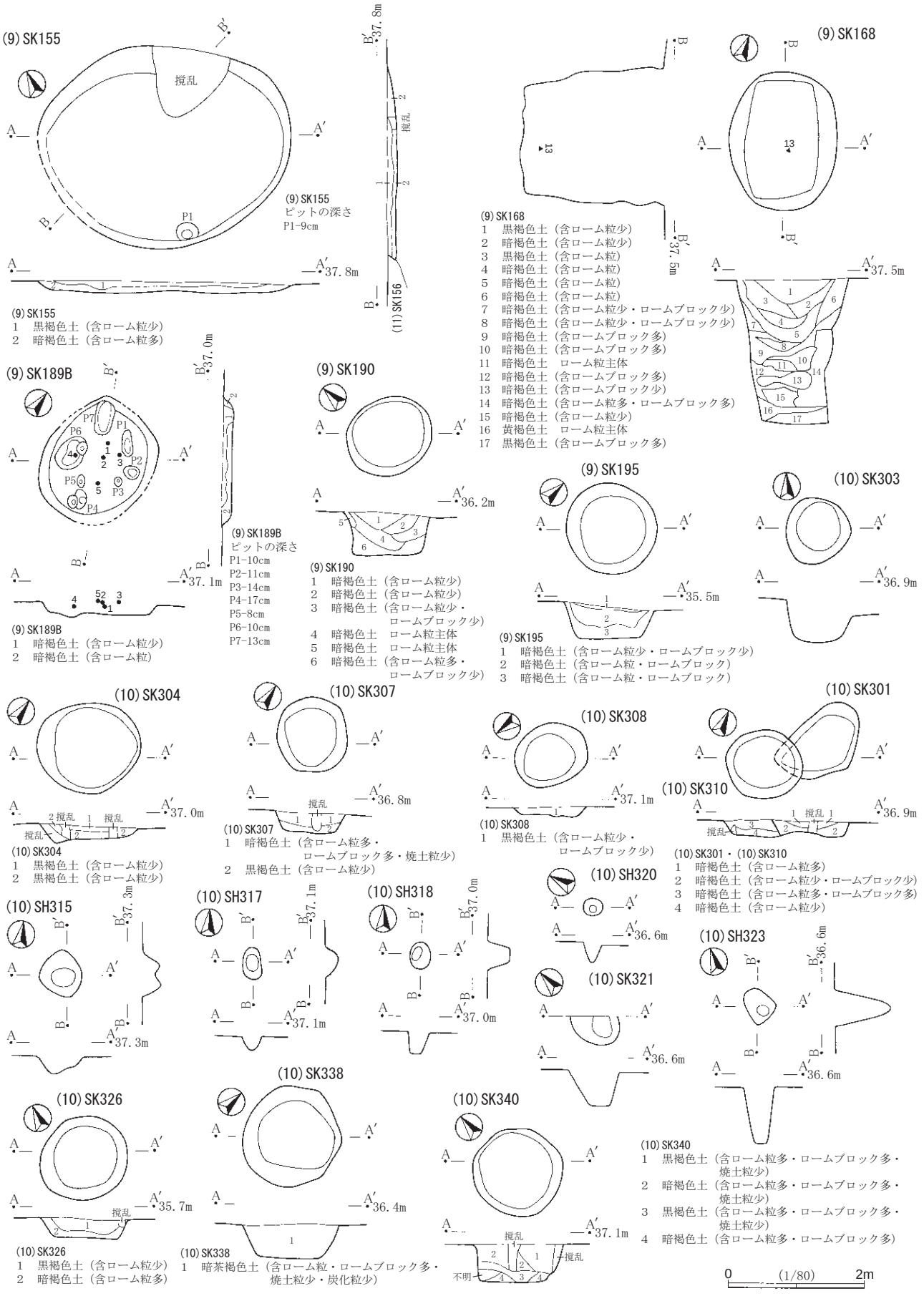
(8) SK029
1 褐色土（含ローム粒）

(8) SH034
1 褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒微）

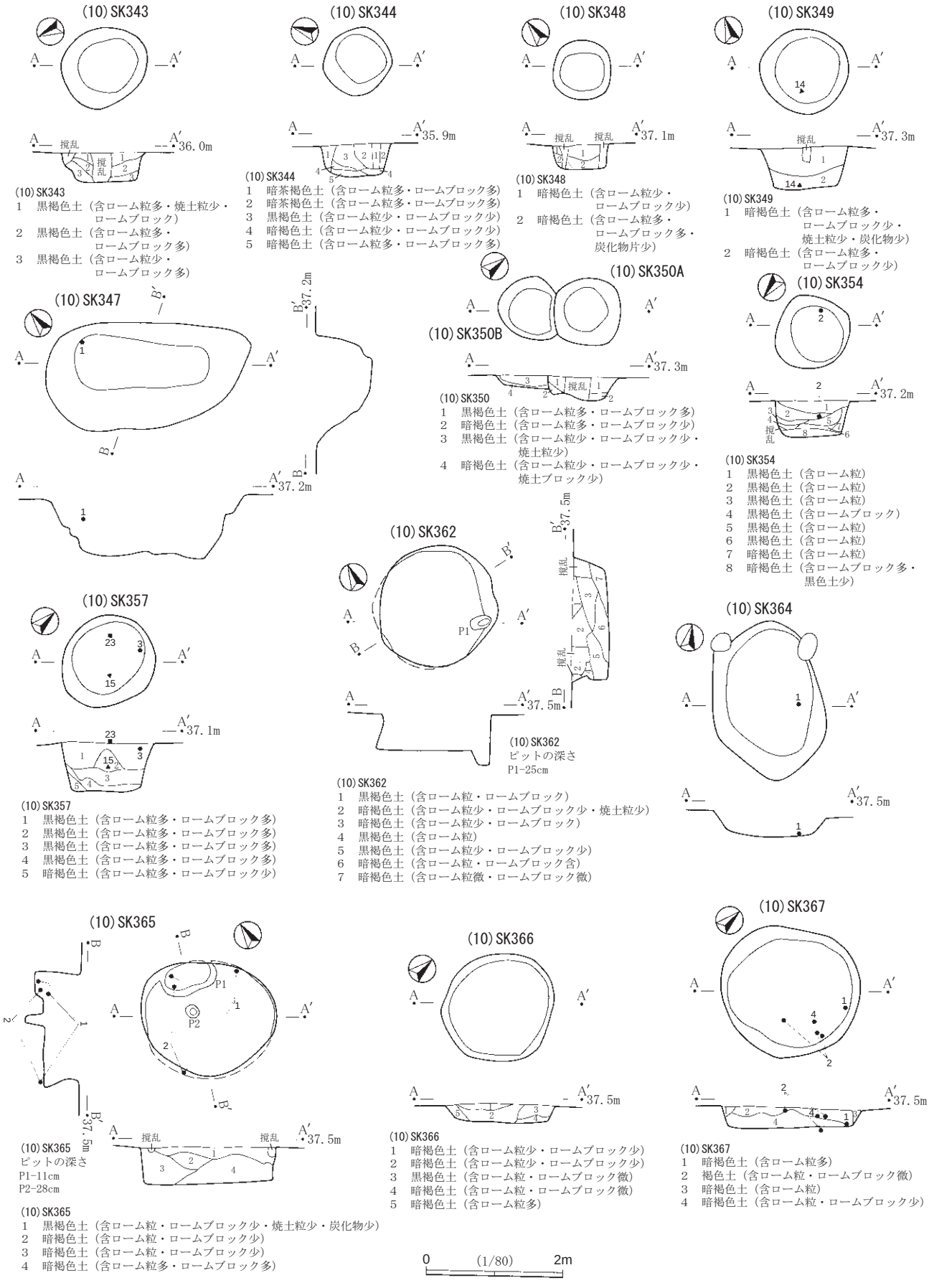
(8) SK035
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・褐色土）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 暗黄褐色土（含ローム含・暗褐色土）
4 暗黄褐色土（含ローム含・暗褐色土）
5 黄褐色土 ローム主体（含ロームブロック多・褐色土少）
6 暗黄褐色土（含ローム・褐色土・ロームブロック少）

(8) SK037
1 暗褐色土（含ローム・暗褐色土・焼土粒微）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土ブロック）
3 暗褐色土 ローム主体（含暗褐色土多・ロームブロック）
4 暗褐色土 ローム主体（含暗褐色土少・ロームブロック微）
5 黄褐色土 ローム主体

第163図 土坑等（7）


(9) SK155
撹乱
P1
(9) SK155
ピットの深さ
P1-9cm
(11) SK156
(9) SK155
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
(9) SK168
(9) SK168
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
8 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
9 暗褐色土（含ロームブロック多）
10 暗褐色土（含ロームブロック多）
11 暗褐色土 ローム粒主体
12 暗褐色土（含ロームブロック多）
13 暗褐色土（含ロームブロック少）
14 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
15 暗褐色土（含ローム粒少）
16 黄褐色土 ローム粒主体
17 黒褐色土（含ロームブロック多）
(9) SK189B
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
(9) SK189B
ピットの深さ
P1-10cm
P2-11cm
P3-14cm
P4-17cm
P5-8cm
P6-10cm
P7-13cm
(9) SK189B
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
(9) SK190
(9) SK190
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 暗褐色土 ローム粒主体
5 暗褐色土 ローム粒主体
6 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(9) SK195
(9) SK195
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(10) SK303
(10) SK304
撹乱
(10) SK304
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
(10) SK307
撹乱
(10) SK307
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒少）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
(10) SK308
(10) SK308
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(10) SK301
(10) SK310
撹乱
(10) SK301・(10) SK310
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
(10) SH315
(10) SH317
(10) SH318
(10) SH320
(10) SH321
(10) SH323
(10) SH326
撹乱
(10) SK326
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
(10) SK338
(10) SK338
1 暗茶褐色土（含ローム粒・ロームブロック多・焼土粒少・炭化粒少）
(10) SK340
撹乱
不明
(10) SK340
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒少）
3 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
0 (1/80) 2m

第164図　土坑等（8）



(10) SK343
1 黒褐色土（含ローム粒多・焼土粒少・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）

(10) SK344
1 暗茶褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗茶褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(10) SK348
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・炭化物片少）

(10) SK349
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・焼土粒少・炭化物少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）

(10) SK350
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土ブロック少）

(10) SK354
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒）
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ロームブロック）
5 黒褐色土（含ローム粒）
6 黒褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ロームブロック多・黒色土少）

(10) SK362
ピットの深さ
P1-25cm

(10) SK362
1 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック含）
7 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微）

(10) SK357
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）

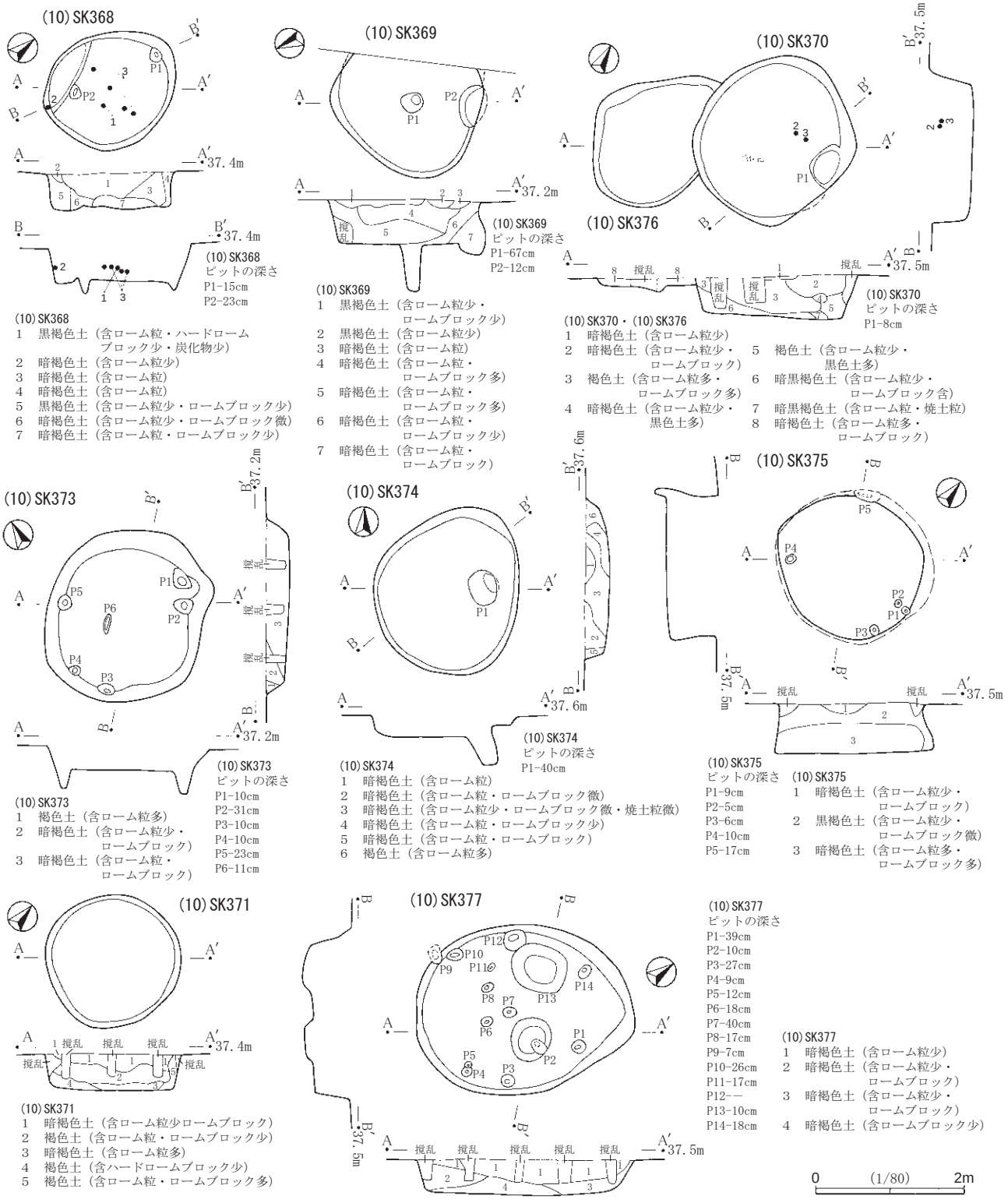
(10) SK365
ピットの深さ
P1-11cm
P2-28cm

(10) SK365
1 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒少・炭化物少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(10) SK366
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
5 暗褐色土（含ローム粒多）

(10) SK367
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）

第165図　土坑等（9）



(10) SK368
1 黒褐色土（含ローム粒・ハードローム
ブロック少・炭化物少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）

(10) SK368
ピットの深さ
P1-15cm
P2-23cm

(10) SK369
1 黒褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック多）
6 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック少）
7 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック）

(10) SK369
ピットの深さ
P1-67cm
P2-12cm

(10) SK370・(10) SK376
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒少・
黒色土多）
5 褐色土（含ローム粒少・
黒色土多）
6 暗黒褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック含）
7 暗黒褐色土（含ローム粒・焼土粒）
8 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック）

(10) SK370
ピットの深さ
P1-8cm

(10) SK373
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック）

(10) SK373
ピットの深さ
P1-10cm
P2-31cm
P3-10cm
P4-10cm
P5-23cm
P6-11cm

(10) SK374
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微・焼土粒微）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒多）

(10) SK374
ピットの深さ
P1-40cm

(10) SK375
ピットの深さ
P1-9cm
P2-5cm
P3-6cm
P4-10cm
P5-17cm

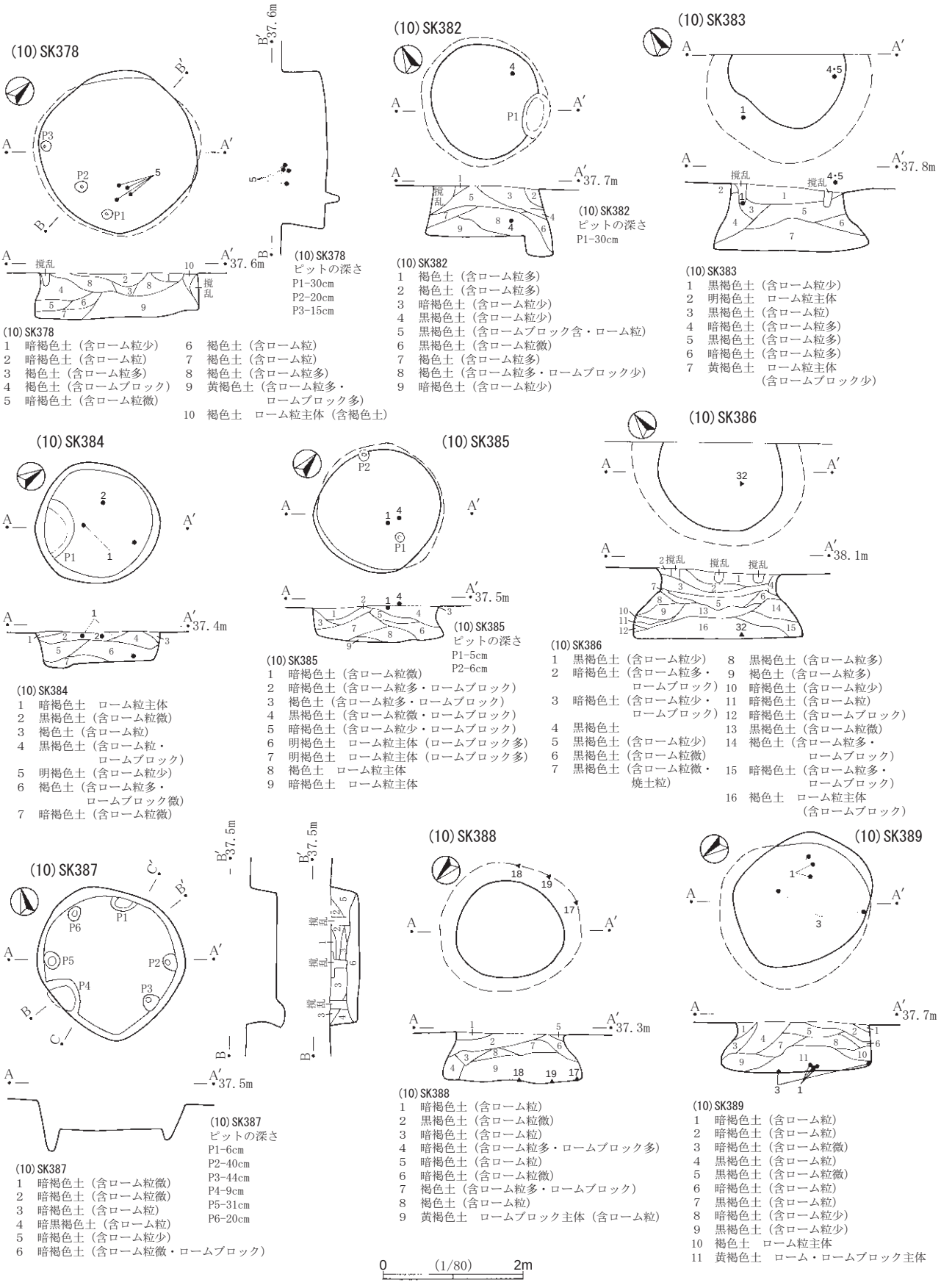
(10) SK375
1 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック微）
3 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック多）

(10) SK371
1 暗褐色土（含ローム粒少ロームブロック）
2 褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ハードロームブロック少）
5 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）

(10) SK377
ピットの深さ
P1-39cm
P2-10cm
P3-27cm
P4-9cm
P5-12cm
P6-18cm
P7-40cm
P8-17cm
P9-7cm
P10-26cm
P11-17cm
P12-—
P13-10cm
P14-18cm

(10) SK377
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック）
4 暗褐色土（含ロームブロック少）

第166図　土坑等（10）



(10) SK378
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ロームブロック）
5 暗褐色土（含ローム粒微）
6 褐色土（含ローム粒）
7 褐色土（含ローム粒）
8 褐色土（含ローム粒多）
9 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
10 褐色土　ローム粒主体（含褐色土）

(10) SK378
ピットの深さ
P1-30cm
P2-20cm
P3-15cm

(10) SK382
1 褐色土（含ローム粒多）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 黒褐色土（含ローム粒少）
5 黒褐色土（含ロームブロック含・ローム粒）
6 黒褐色土（含ローム粒微）
7 褐色土（含ローム粒多）
8 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
9 暗褐色土（含ローム粒少）

(10) SK382
ピットの深さ
P1-30cm

(10) SK383
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 明褐色土　ローム粒主体
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 黒褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土（含ローム粒多）
7 黄褐色土　ローム粒主体（含ロームブロック少）

(10) SK384
1 暗褐色土　ローム粒主体
2 黒褐色土（含ローム粒微）
3 褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 明褐色土（含ローム粒少）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
7 暗褐色土（含ローム粒微）

(10) SK385
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック）
5 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
6 明褐色土　ローム粒主体（ロームブロック多）
7 明褐色土　ローム粒主体（ロームブロック多）
8 褐色土　ローム粒主体
9 暗褐色土　ローム粒主体

(10) SK385
ピットの深さ
P1-5cm
P2-6cm

(10) SK386
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
4 黒褐色土
5 黒褐色土（含ローム粒少）
6 黒褐色土（含ローム粒微）
7 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒）
8 黒褐色土（含ローム粒多）
9 褐色土（含ローム粒多）
10 暗褐色土（含ローム粒少）
11 暗褐色土（含ローム粒）
12 暗褐色土（含ロームブロック）
13 黒褐色土（含ローム粒微）
14 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
15 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
16 褐色土　ローム粒主体（含ロームブロック）

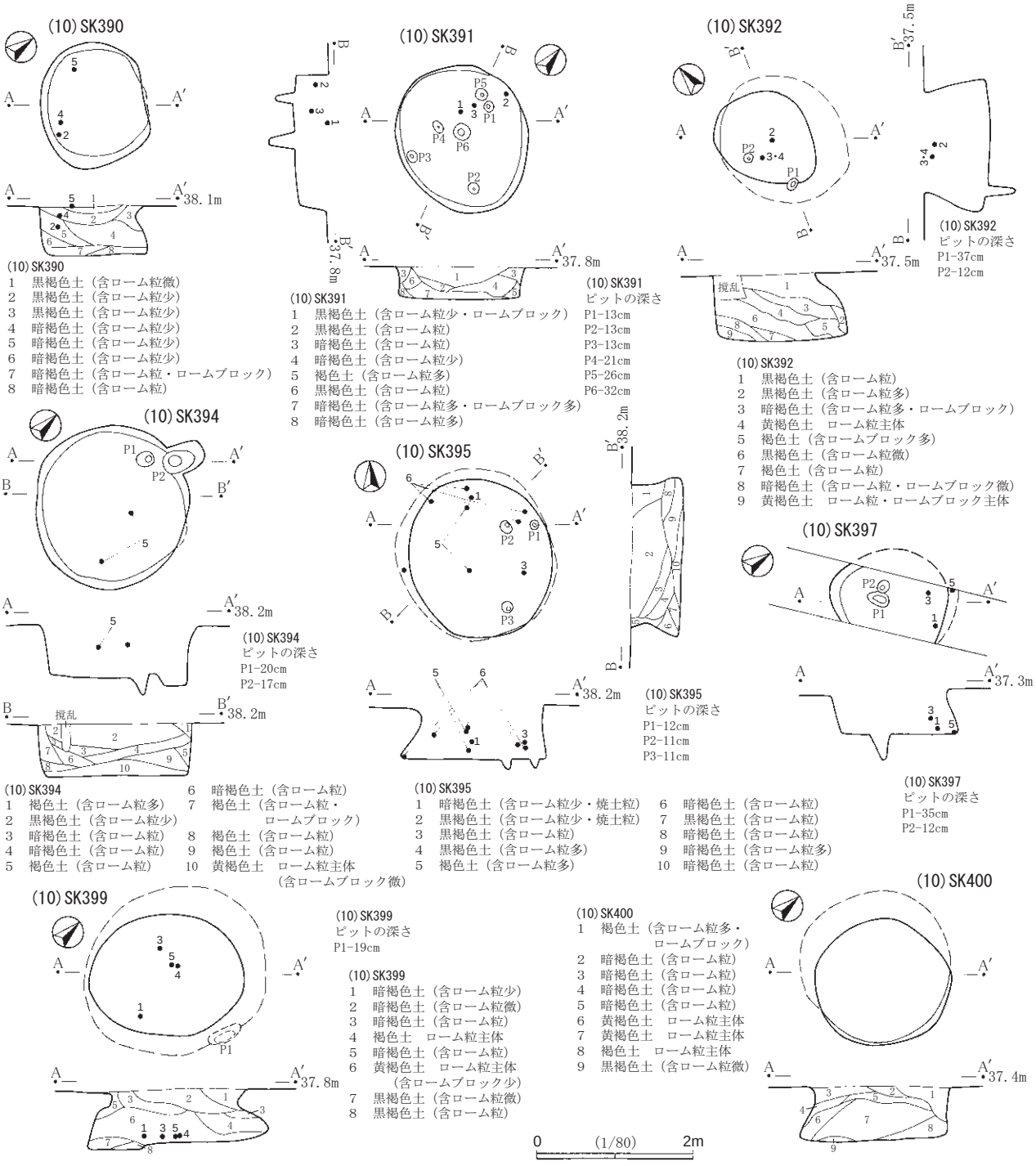
(10) SK387
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗黒褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック）

(10) SK387
ピットの深さ
P1-6cm
P2-40cm
P3-44cm
P4-9cm
P5-31cm
P6-20cm

(10) SK388
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒微）
7 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
8 褐色土（含ローム粒）
9 黄褐色土　ロームブロック主体（含ローム粒）

(10) SK389
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒微）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒微）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 黒褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒少）
9 黒褐色土（含ローム粒少）
10 褐色土　ローム粒主体
11 黄褐色土　ローム・ロームブロック主体

第167図　土坑等（11）



(10) SK390
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 黒褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒少）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒）

(10) SK391
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 黒褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
8 暗褐色土（含ローム粒多）

(10) SK391
ピットの深さ
P1-13cm
P2-13cm
P3-13cm
P4-21cm
P5-26cm
P6-32cm

(10) SK392
ピットの深さ
P1-37cm
P2-12cm

(10) SK392
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 黄褐色土 ローム粒主体
5 褐色土（含ロームブロック多）
6 黒褐色土（含ローム粒微）
7 褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
9 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体

(10) SK394
ピットの深さ
P1-20cm
P2-17cm

(10) SK394
1 褐色土（含ローム粒多）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 褐色土（含ローム粒）
9 褐色土（含ローム粒）
10 黄褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック微）

(10) SK395
ピットの深さ
P1-12cm
P2-11cm
P3-11cm

(10) SK395
1 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒）
2 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒）
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ローム粒多）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 黒褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒）
9 暗褐色土（含ローム粒多）
10 暗褐色土（含ローム粒）

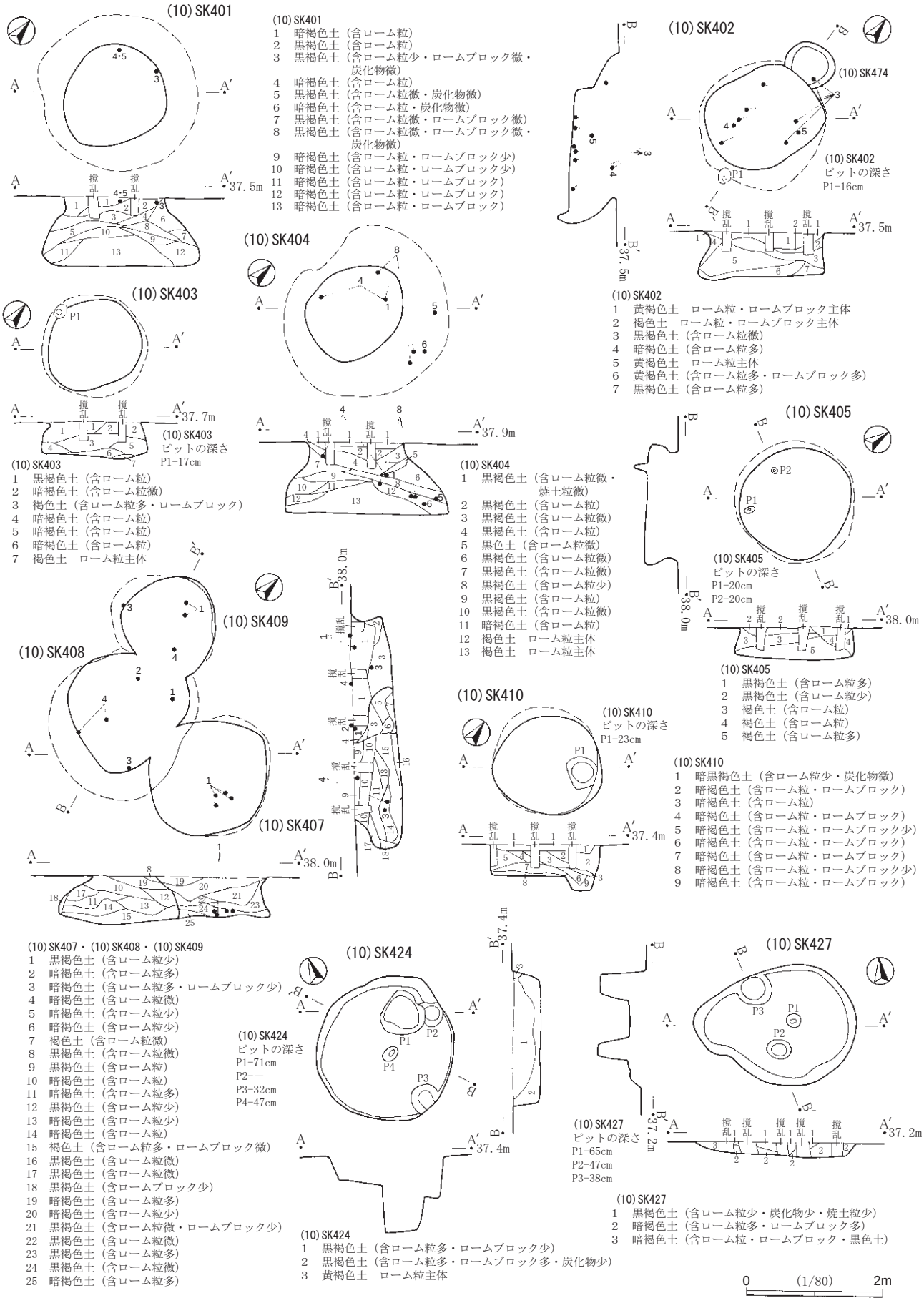
(10) SK397
ピットの深さ
P1-35cm
P2-12cm

(10) SK399
ピットの深さ
P1-19cm

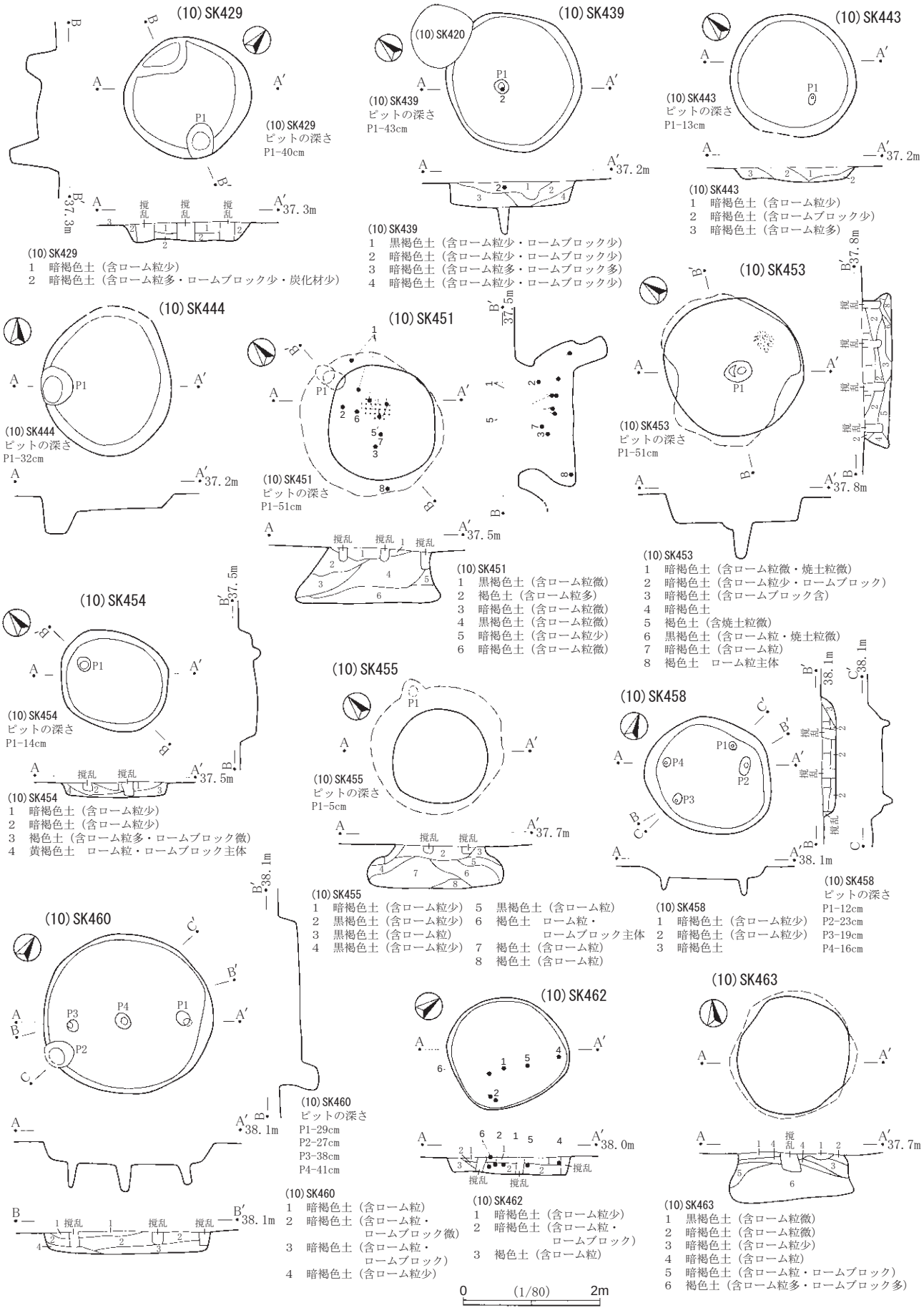
(10) SK399
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 褐色土 ローム粒主体
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 黄褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック少）
7 黒褐色土（含ローム粒微）
8 黒褐色土（含ローム粒）

(10) SK400
1 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 黄褐色土 ローム粒主体
7 黄褐色土 ローム粒主体
8 褐色土 ローム粒主体
9 黒褐色土（含ローム粒微）

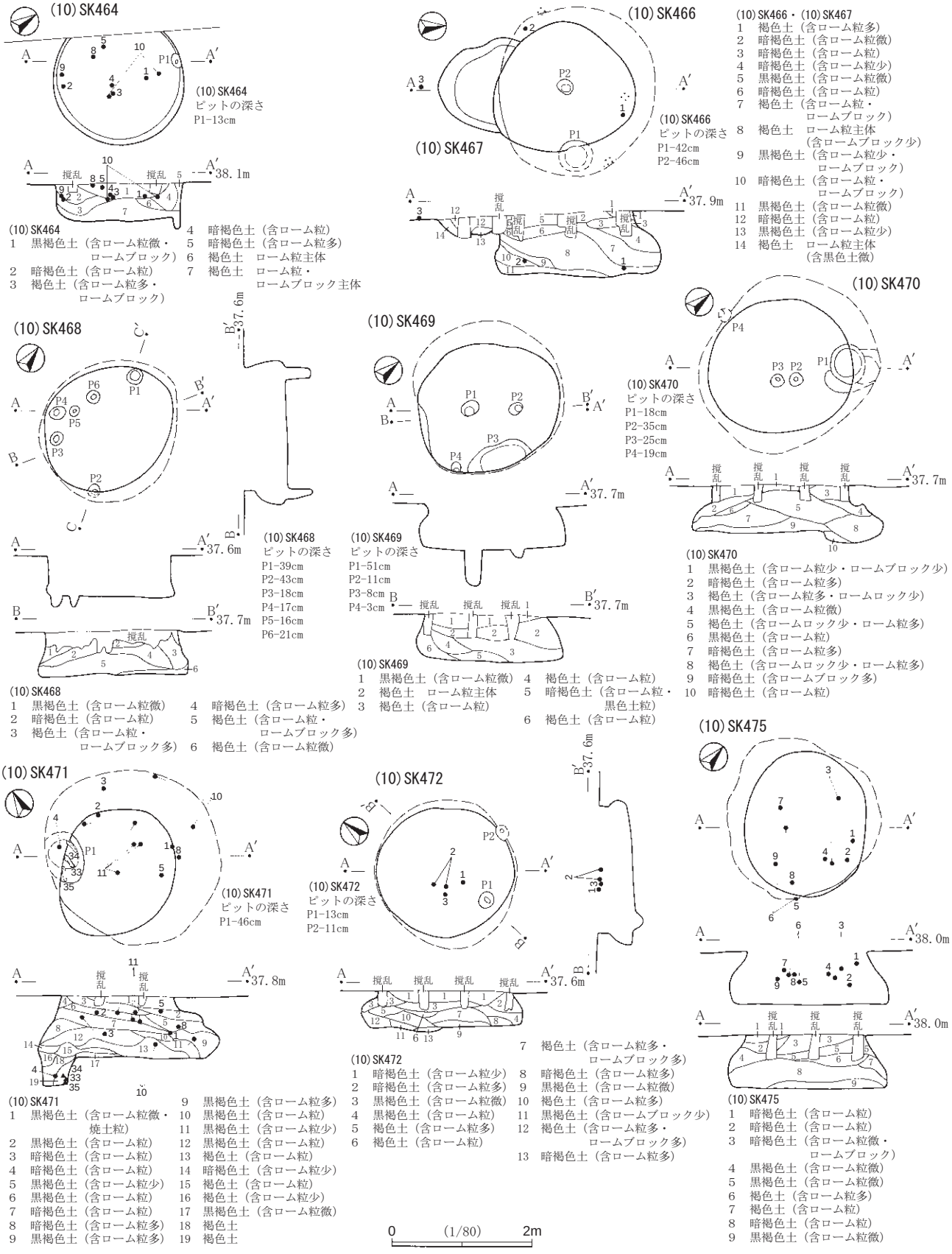
第168図 土坑等（12）


(10) SK401
(10) SK401
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒）
3 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微・炭化物微）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒微・炭化物微）
6 暗褐色土（含ローム粒・炭化物微）
7 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微）
8 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・炭化物微）
9 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
10 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
11 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
12 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
13 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(10) SK402
(10) SK474
(10) SK402
ピットの深さ
P1-16cm
(10) SK402
1 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
2 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
3 黒褐色土（含ローム粒微）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 黄褐色土 ローム粒主体
6 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
7 黒褐色土（含ローム粒多）
(10) SK403
(10) SK403
ピットの深さ
P1-17cm
(10) SK403
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 褐色土 ローム粒主体
(10) SK404
(10) SK404
1 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 黒褐色土（含ローム粒）
3 黒褐色土（含ローム粒微）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 黒色土（含ローム粒微）
6 黒褐色土（含ローム粒微）
7 黒褐色土（含ローム粒微）
8 黒褐色土（含ローム粒少）
9 黒褐色土（含ローム粒）
10 黒褐色土（含ローム粒微）
11 暗褐色土（含ローム粒）
12 褐色土 ローム粒主体
13 褐色土 ローム粒主体
(10) SK405
(10) SK405
ピットの深さ
P1-20cm
P2-20cm
(10) SK405
1 黒褐色土（含ローム粒多）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒）
4 褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含ローム粒多）
(10) SK408
(10) SK409
(10) SK407
(10) SK407・(10) SK408・(10) SK409
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒微）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒少）
7 褐色土（含ローム粒微）
8 黒褐色土（含ローム粒微）
9 黒褐色土（含ローム粒）
10 暗褐色土（含ローム粒）
11 暗褐色土（含ローム粒多）
12 黒褐色土（含ローム粒少）
13 暗褐色土（含ローム粒少）
14 暗褐色土（含ローム粒）
15 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
16 黒褐色土（含ローム粒微）
17 黒褐色土（含ローム粒微）
18 黒褐色土（含ロームブロック少）
19 暗褐色土（含ローム粒多）
20 暗褐色土（含ローム粒少）
21 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック少）
22 黒褐色土（含ローム粒微）
23 黒褐色土（含ローム粒多）
24 黒褐色土（含ローム粒微）
25 暗褐色土（含ローム粒多）
(10) SK410
(10) SK410
ピットの深さ
P1-23cm
(10) SK410
1 暗黒褐色土（含ローム粒少・炭化物微）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
9 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(10) SK424
(10) SK424
ピットの深さ
P1-71cm
P2-——
P3-32cm
P4-47cm
(10) SK424
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・炭化物少）
3 黄褐色土 ローム粒主体
(10) SK427
(10) SK427
ピットの深さ
P1-65cm
P2-47cm
P3-38cm
(10) SK427
1 黒褐色土（含ローム粒少・炭化物少・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・黒色土）
0 (1/80) 2m

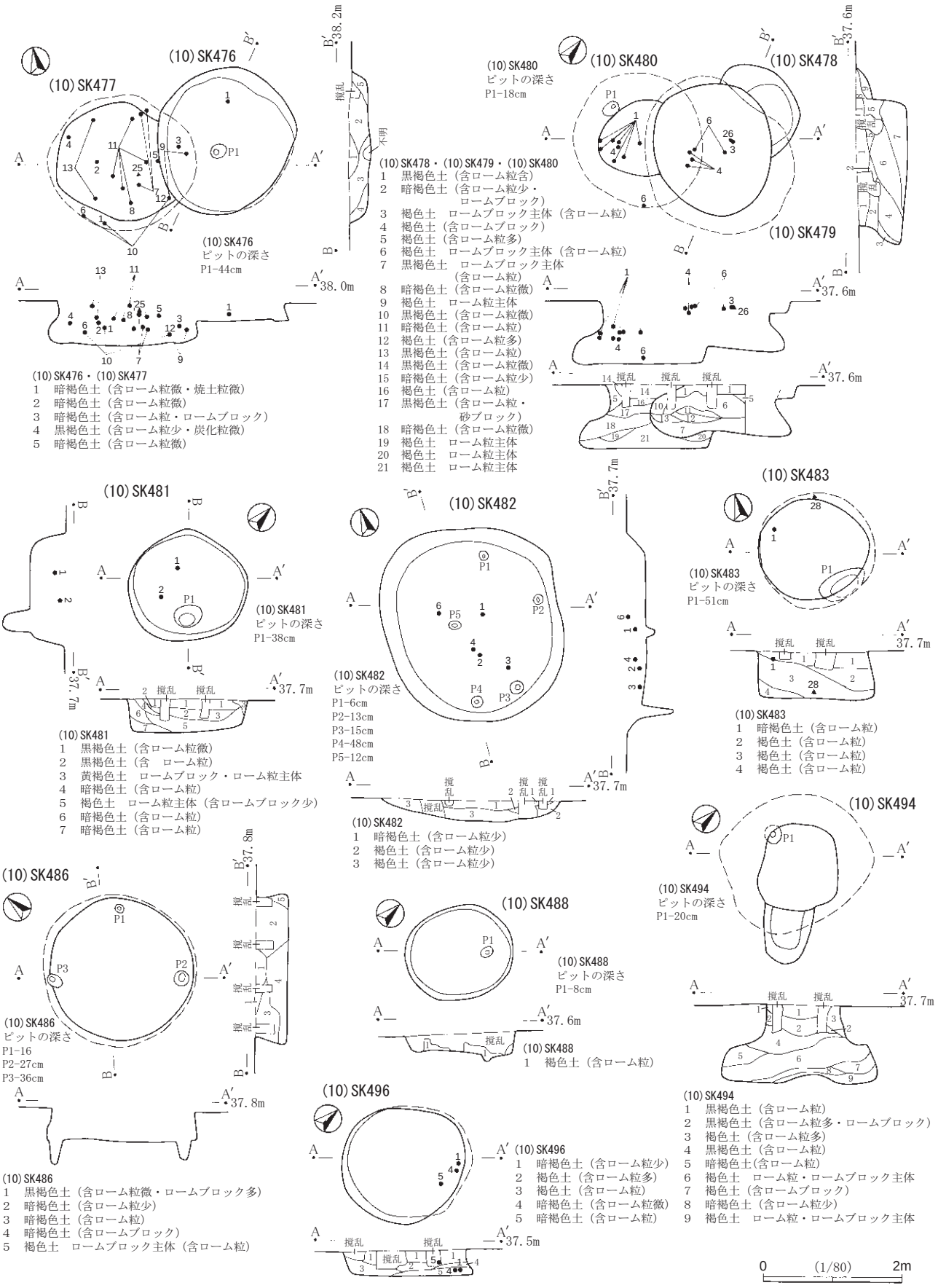
第169図 土坑等（13）


(10) SK429
(10) SK429
ピットの深さ
P1-40cm
(10) SK429
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・炭化材少）
(10) SK439
(10) SK420
(10) SK439
ピットの深さ
P1-43cm
(10) SK439
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(10) SK443
(10) SK443
ピットの深さ
P1-13cm
(10) SK443
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
(10) SK444
(10) SK444
ピットの深さ
P1-32cm
(10) SK451
(10) SK451
ピットの深さ
P1-51cm
(10) SK451
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒微）
4 黒褐色土（含ローム粒微）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒微）
(10) SK453
(10) SK453
ピットの深さ
P1-51cm
(10) SK453
1 暗褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック含）
4 暗褐色土
5 褐色土（含焼土粒微）
6 黒褐色土（含ローム粒・焼土粒微）
7 暗褐色土（含ローム粒）
8 褐色土 ローム粒主体
(10) SK454
(10) SK454
ピットの深さ
P1-14cm
(10) SK454
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
4 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
(10) SK455
(10) SK455
ピットの深さ
P1-5cm
(10) SK455
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 黒褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ローム粒少）
5 黒褐色土（含ローム粒）
6 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
7 褐色土（含ローム粒）
8 褐色土（含ローム粒）
(10) SK458
(10) SK458
ピットの深さ
P1-12cm
P2-23cm
P3-19cm
P4-16cm
(10) SK458
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土
(10) SK460
(10) SK460
ピットの深さ
P1-29cm
P2-27cm
P3-38cm
P4-41cm
(10) SK460
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
(10) SK462
(10) SK462
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒）
(10) SK463
(10) SK463
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
0 (1/80) 2m

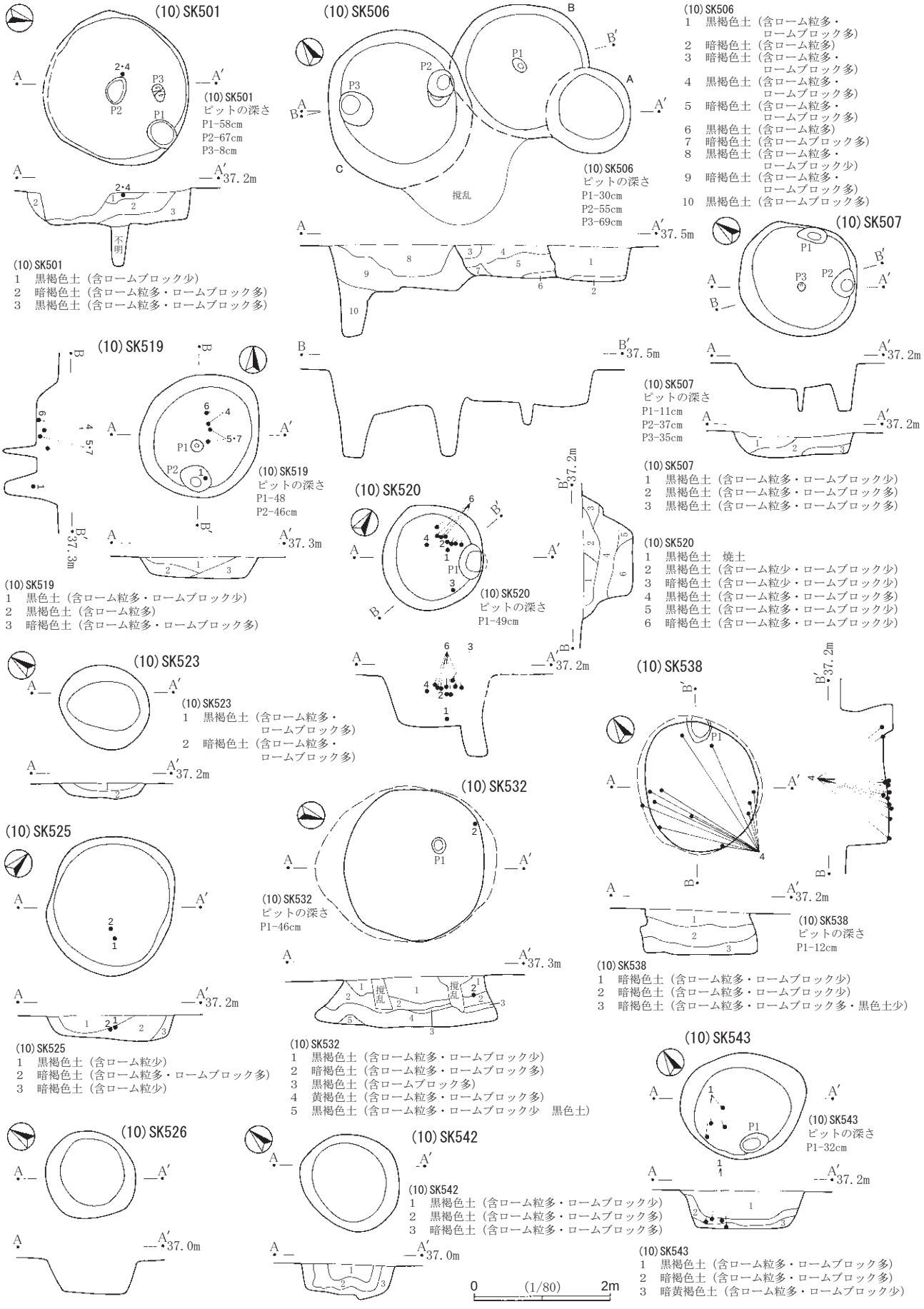
第170図　土坑等（14）


(10) SK464
(10) SK464
ピットの深さ
P1-13cm
(10) SK464
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒多）
6 褐色土 ローム粒主体
7 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
(10) SK466
(10) SK467
(10) SK466
ピットの深さ
P1-42cm
P2-46cm
(10) SK466・(10) SK467
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 黒褐色土（含ローム粒微）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
8 褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック少）
9 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
10 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
11 黒褐色土（含ローム粒微）
12 暗褐色土（含ローム粒）
13 黒褐色土（含ローム粒少）
14 褐色土 ローム粒主体（含黒色土微）
(10) SK468
(10) SK468
ピットの深さ
P1-39cm
P2-43cm
P3-18cm
P4-17cm
P5-16cm
P6-21cm
(10) SK468
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
6 褐色土（含ローム粒微）
(10) SK469
(10) SK469
ピットの深さ
P1-51cm
P2-11cm
P3-8cm
P4-3cm
(10) SK469
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 褐色土 ローム粒主体
3 褐色土（含ローム粒）
4 褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ローム粒・黒色土粒）
6 褐色土（含ローム粒）
(10) SK470
(10) SK470
ピットの深さ
P1-18cm
P2-35cm
P3-25cm
P4-19cm
(10) SK470
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームロック少）
4 黒褐色土（含ローム粒微）
5 褐色土（含ロームロック少・ローム粒多）
6 黒褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒多）
8 褐色土（含ロームロック少・ローム粒多）
9 暗褐色土（含ロームブロック多）
10 暗褐色土（含ローム粒）
(10) SK471
(10) SK471
ピットの深さ
P1-46cm
(10) SK471
1 黒褐色土（含ローム粒微・焼土粒）
2 黒褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 黒褐色土（含ローム粒少）
6 黒褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒多）
9 黒褐色土（含ローム粒多）
10 黒褐色土（含ローム粒）
11 黒褐色土（含ローム粒少）
12 黒褐色土（含ローム粒）
13 褐色土（含ローム粒）
14 暗褐色土（含ローム粒少）
15 褐色土（含ローム粒）
16 褐色土（含ローム粒少）
17 黒褐色土（含ローム粒微）
18 褐色土
19 褐色土
(10) SK472
(10) SK472
ピットの深さ
P1-13cm
P2-11cm
(10) SK472
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 黒褐色土（含ローム粒微）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 褐色土（含ローム粒）
7 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
8 暗褐色土（含ローム粒多）
9 黒褐色土（含ローム粒微）
10 褐色土（含ローム粒多）
11 黒褐色土（含ロームブロック少）
12 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
13 暗褐色土（含ローム粒多）
(10) SK475
(10) SK475
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒微）
5 黒褐色土（含ローム粒微）
6 褐色土（含ローム粒多）
7 褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒）
9 黒褐色土（含ローム粒微）
0 (1/80) 2m

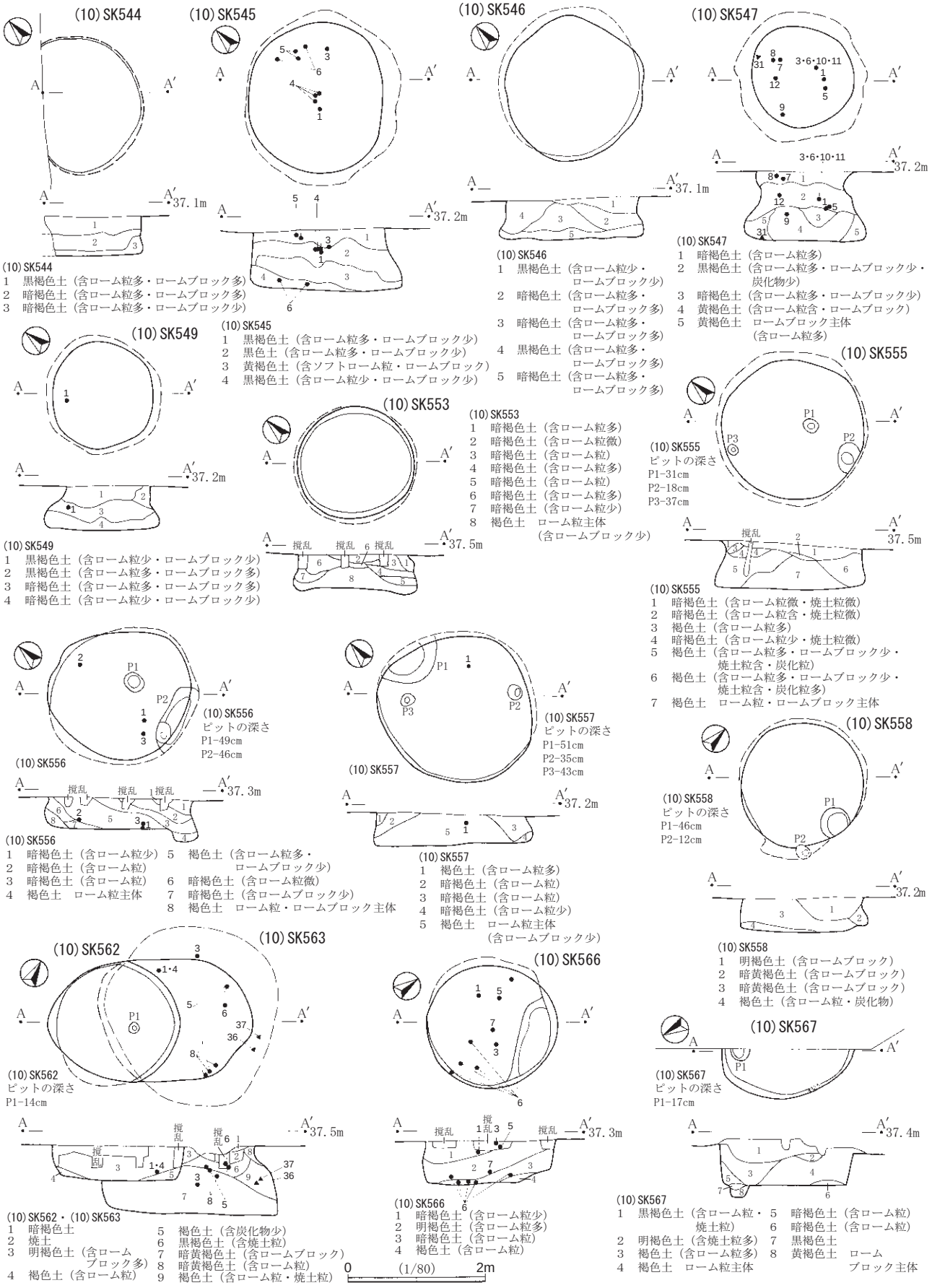
第171図　土坑等（15）


(10)SK476
(10)SK477
(10)SK476
ピットの深さ
P1-44cm
38.0m
(10)SK476・(10)SK477
1 暗褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒少・炭化粒微）
5 暗褐色土（含ローム粒微）
38.2m
(10)SK478・(10)SK479・(10)SK480
1 黒褐色土（含ローム粒含）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
3 褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒）
4 褐色土（含ロームブロック）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒）
7 黒褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒微）
9 褐色土 ローム粒主体
10 黒褐色土（含ローム粒微）
11 暗褐色土（含ローム粒）
12 褐色土（含ローム粒多）
13 黒褐色土（含ローム粒）
14 黒褐色土（含ローム粒微）
15 暗褐色土（含ローム粒少）
16 褐色土（含ローム粒）
17 黒褐色土（含ローム粒・砂ブロック）
18 暗褐色土（含ローム粒微）
19 褐色土 ローム粒主体
20 褐色土 ローム粒主体
21 褐色土 ローム粒主体
(10)SK480
ピットの深さ
P1-18cm
(10)SK480
(10)SK478
(10)SK479
37.6m
37.6m
(10)SK481
(10)SK481
ピットの深さ
P1-38cm
37.7m
(10)SK481
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 黒褐色土（含 ローム粒）
3 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒主体
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 暗褐色土（含ローム粒）
(10)SK482
37.7m
(10)SK482
ピットの深さ
P1-6cm
P2-13cm
P3-15cm
P4-48cm
P5-12cm
37.7m
(10)SK482
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒少）
(10)SK483
(10)SK483
ピットの深さ
P1-51cm
37.7m
(10)SK483
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒）
4 褐色土（含ローム粒）
(10)SK486
(10)SK486
ピットの深さ
P1-16
P2-27cm
P3-36cm
37.8m
37.8m
(10)SK486
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ロームブロック）
5 褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒）
(10)SK488
(10)SK488
ピットの深さ
P1-8cm
37.6m
(10)SK488
1 褐色土（含ローム粒）
(10)SK494
(10)SK494
ピットの深さ
P1-20cm
37.7m
(10)SK494
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土(含ローム粒)
6 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
7 褐色土（含ロームブロック）
8 暗褐色土（含ローム粒少）
9 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体
(10)SK496
(10)SK496
37.5m
(10)SK496
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒微）
5 暗褐色土（含ローム粒）
0 (1/80) 2m

第172図 土坑等（16）


(10) SK501
(10) SK501
ピットの深さ
P1-58cm
P2-67cm
P3-8cm
(10) SK501
1 黒褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(10) SK506
(10) SK506
ピットの深さ
P1-30cm
P2-55cm
P3-69cm
撹乱
(10) SK506
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
6 黒褐色土（含ローム粒多）
7 暗褐色土（含ロームブロック多）
8 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
9 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
10 黒褐色土（含ロームブロック多）
(10) SK507
(10) SK507
ピットの深さ
P1-11cm
P2-37cm
P3-35cm
(10) SK507
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(10) SK519
(10) SK519
ピットの深さ
P1-48
P2-46cm
(10) SK519
1 黒色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(10) SK520
(10) SK520
ピットの深さ
P1-49cm
(10) SK520
1 黒褐色土 焼土
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(10) SK523
(10) SK523
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(10) SK538
(10) SK538
ピットの深さ
P1-12cm
(10) SK538
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・黒色土少）
(10) SK525
(10) SK525
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
(10) SK532
(10) SK532
ピットの深さ
P1-46cm
撹乱
(10) SK532
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ロームブロック多）
4 黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少 黒色土）
(10) SK543
(10) SK543
ピットの深さ
P1-32cm
(10) SK543
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(10) SK526
(10) SK542
(10) SK542
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
0 (1/80) 2m

第173図　土坑等（17）



(10) SK544
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）

(10) SK545
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 黄褐色土（含ソフトローム粒・ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）

(10) SK546
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(10) SK547
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・炭化物少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
4 黄褐色土（含ローム粒含・ロームブロック）
5 黄褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒多）

(10) SK549
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）

(10) SK553
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒多）
7 暗褐色土（含ローム粒少）
8 褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック少）

(10) SK555
ピットの深さ
P1-31cm
P2-18cm
P3-37cm

(10) SK555
1 暗褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒含・焼土粒微）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒微）
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・焼土粒含・炭化粒）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・焼土粒含・炭化粒多）
7 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体

(10) SK556
ピットの深さ
P1-49cm
P2-46cm

(10) SK556
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 褐色土 ローム粒主体
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒微）
7 暗褐色土（含ロームブロック少）
8 褐色土 ローム粒・ロームブロック主体

(10) SK557
ピットの深さ
P1-51cm
P2-35cm
P3-43cm

(10) SK557
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
5 褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック少）

(10) SK558
ピットの深さ
P1-46cm
P2-12cm

(10) SK558
1 明褐色土（含ロームブロック）
2 暗黄褐色土（含ロームブロック）
3 暗黄褐色土（含ロームブロック）
4 褐色土（含ローム粒・炭化物）

(10) SK562
ピットの深さ
P1-14cm

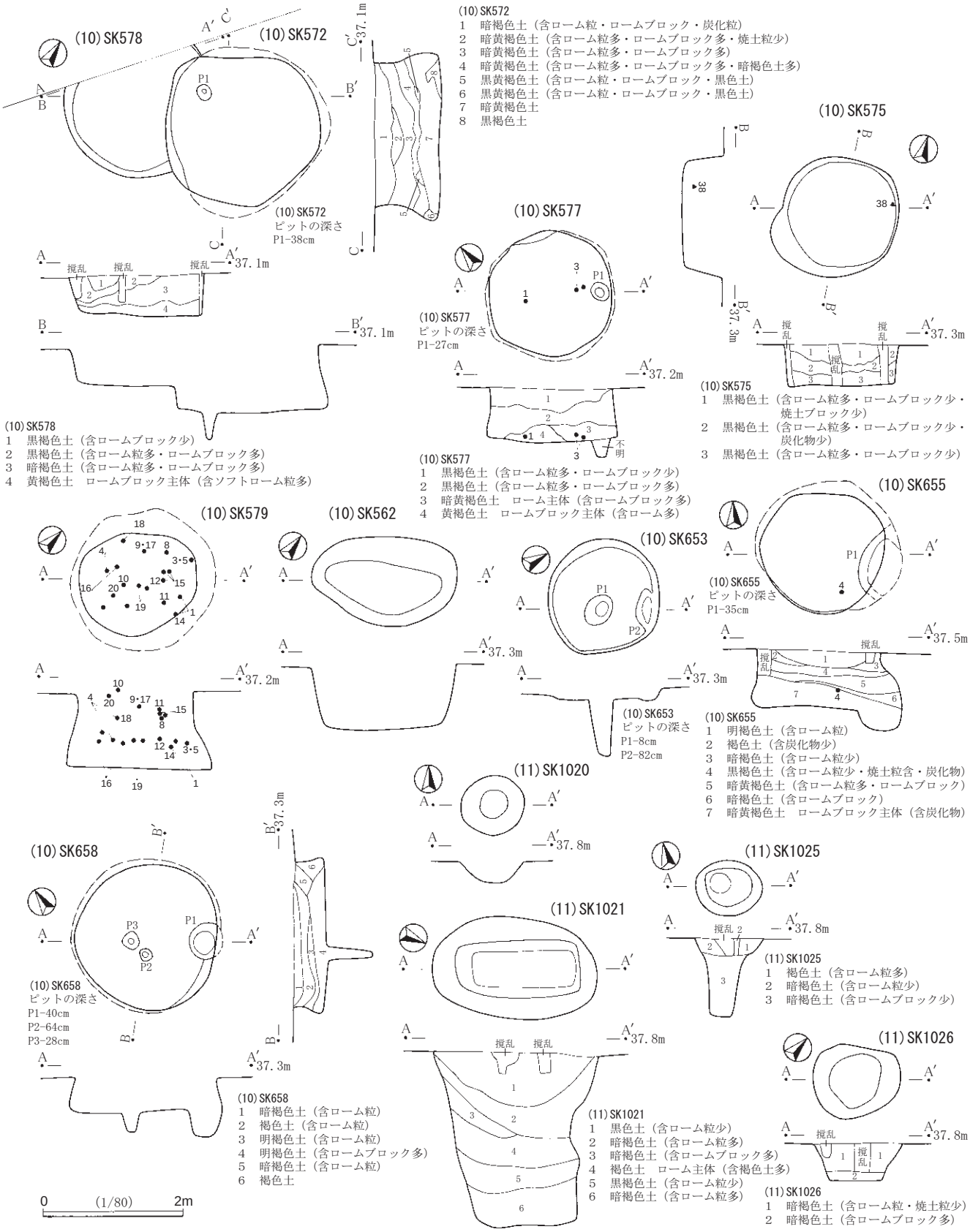
(10) SK562・(10) SK563
1 暗褐色土
2 焼土
3 明褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含炭化物少）
6 黒褐色土（含焼土粒）
7 暗黄褐色土（含ロームブロック）
8 暗黄褐色土（含ローム粒）
9 褐色土（含ローム粒・焼土粒）

(10) SK566
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 明褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 褐色土（含ローム粒）

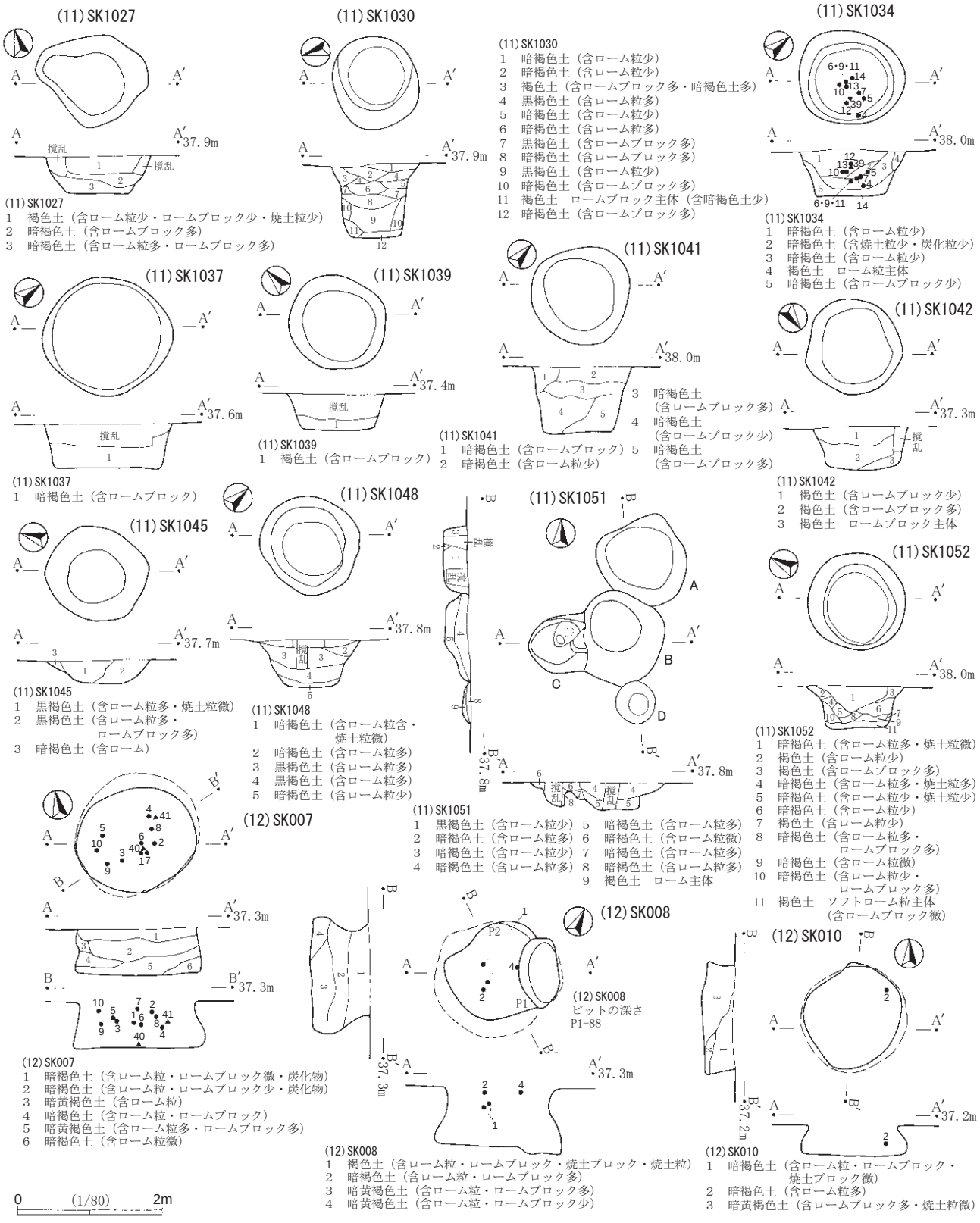
(10) SK567
ピットの深さ
P1-17cm

(10) SK567
1 黒褐色土（含ローム粒・焼土粒）
2 明褐色土（含焼土粒多）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土 ローム粒主体
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 黒褐色土
8 黄褐色土 ロームブロック主体

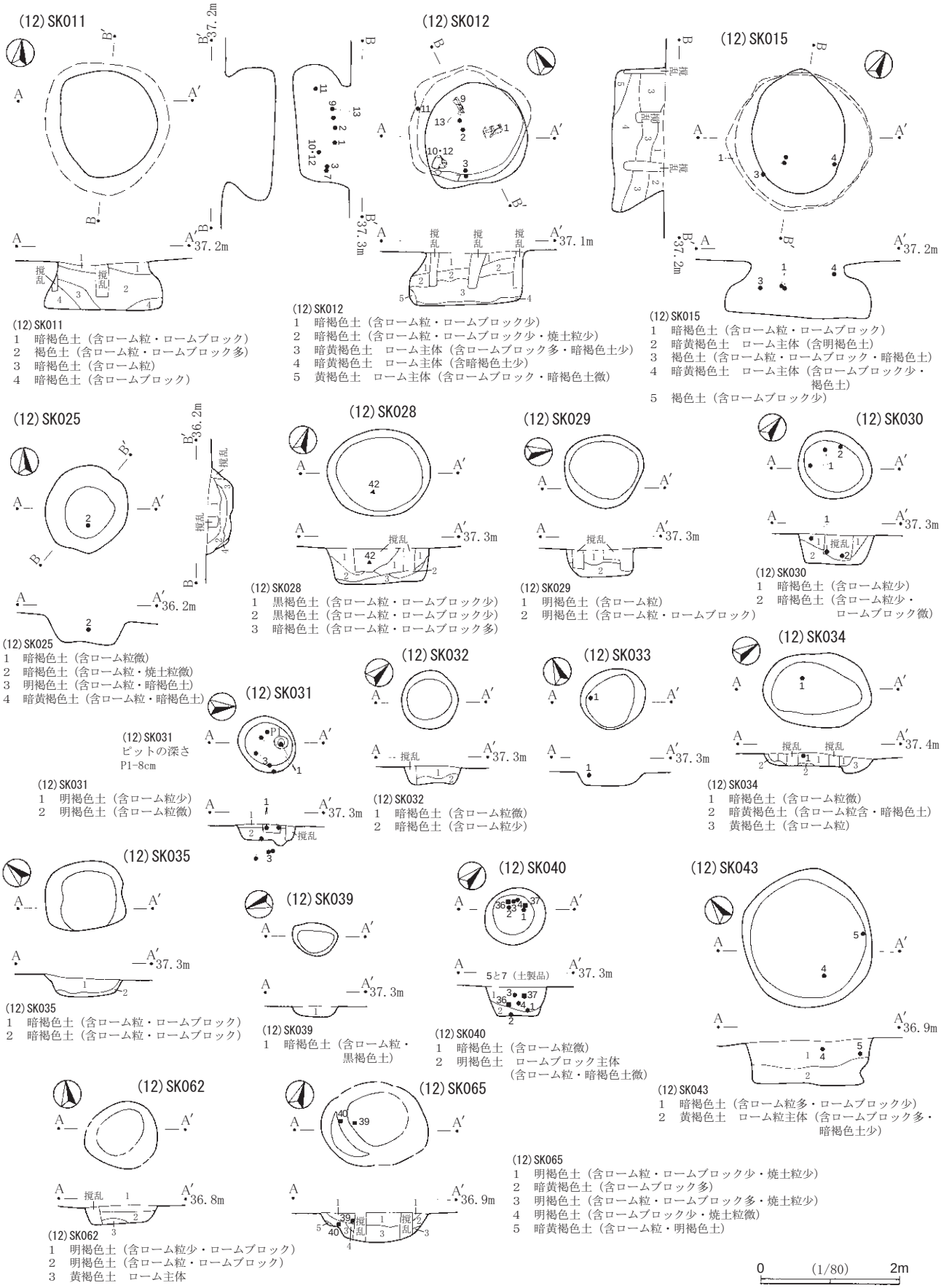
第174図 土坑等（18）


(10)SK578
(10)SK572
(10)SK572
ピットの深さ
P1-38cm
(10)SK572
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・炭化粒）
2 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒少）
3 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・暗褐色土多）
5 黒黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック・黒色土）
6 黒黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック・黒色土）
7 暗黄褐色土
8 黒褐色土
(10)SK577
(10)SK577
ピットの深さ
P1-27cm
(10)SK577
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗黄褐色土 ローム主体（含ロームブロック多）
4 黄褐色土 ロームブロック主体（含ローム多）
(10)SK575
(10)SK575
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・焼土ブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・炭化物少）
3 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(10)SK578
1 黒褐色土（含ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 黄褐色土 ロームブロック主体（含ソフトローム粒多）
(10)SK579
(10)SK562
(10)SK653
(10)SK655
(10)SK655
ピットの深さ
P1-35cm
(10)SK655
1 明褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含炭化物少）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒含・炭化物）
5 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ロームブロック）
7 暗黄褐色土 ロームブロック主体（含炭化物）
(10)SK653
ピットの深さ
P1-8cm
P2-82cm
(11)SK1020
(10)SK658
(10)SK658
ピットの深さ
P1-40cm
P2-64cm
P3-28cm
(10)SK658
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム粒）
3 明褐色土（含ローム粒）
4 明褐色土（含ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 褐色土
(11)SK1025
(11)SK1025
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
(11)SK1021
(11)SK1021
1 黒色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土 ローム主体（含褐色土多）
5 黒褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒多）
(11)SK1026
(11)SK1026
1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
0 (1/80) 2m

第175図　土坑等（19）


(11)SK1027
A
A′
37.9m
撹乱
1
2
3
(11)SK1027
1 褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(11)SK1030
37.9m
12
(11)SK1030
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ロームブロック多・暗褐色土多）
4 黒褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒多）
7 黒褐色土（含ロームブロック多）
8 暗褐色土（含ロームブロック多）
9 黒褐色土（含ローム粒少）
10 暗褐色土（含ロームブロック多）
11 褐色土 ロームブロック主体（含暗褐色土少）
12 暗褐色土（含ロームブロック多）
(11)SK1034
38.0m
6・9・11
14
(11)SK1034
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含焼土粒少・炭化粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 褐色土 ローム粒主体
5 暗褐色土（含ロームブロック少）
(11)SK1037
37.6m
撹乱
1
(11)SK1037
1 暗褐色土（含ロームブロック）
(11)SK1039
37.4m
撹乱
1
(11)SK1039
1 褐色土（含ロームブロック）
(11)SK1041
38.0m
1
2
3
4
5
(11)SK1041
1 暗褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土
（含ロームブロック多）
4 暗褐色土
（含ロームブロック少）
5 暗褐色土
（含ロームブロック多）
(11)SK1042
37.3m
撹乱
1
2
3
(11)SK1042
1 褐色土（含ロームブロック少）
2 褐色土（含ロームブロック多）
3 褐色土 ロームブロック主体
(11)SK1045
37.7m
1
2
3
(11)SK1045
1 黒褐色土（含ローム粒多・焼土粒微）
2 黒褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム）
(11)SK1048
37.8m
撹乱
1
2
3
4
5
(11)SK1048
1 暗褐色土（含ローム粒含・
焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 黒褐色土（含ローム粒多）
4 黒褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒少）
(11)SK1051
37.8m
撹乱
A
B
C
D
(11)SK1051
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土（含ローム粒微）
7 暗褐色土（含ローム粒多）
8 暗褐色土（含ローム粒多）
9 褐色土 ローム主体
(11)SK1052
38.0m
(11)SK1052
1 暗褐色土（含ローム粒多・焼土粒微）
2 褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒多・焼土粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
6 暗褐色土（含ローム粒少）
7 褐色土（含ローム粒少）
8 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック多）
9 暗褐色土（含ローム粒微）
10 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック多）
11 褐色土 ソフトローム粒主体
（含ロームブロック微）
(12)SK007
37.3m
37.3m
(12)SK007
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微・炭化物）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・炭化物）
3 暗黄褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
5 暗黄褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
6 暗褐色土（含ローム粒微）
(12)SK008
37.3m
P1
P2
(12)SK008
ピットの深さ
P1-88
(12)SK008
1 褐色土（含ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
3 暗黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
4 暗黄褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
(12)SK010
37.2m
(12)SK010
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック・
焼土ブロック微）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗黄褐色土（含ロームブロック多・焼土粒微）
0 (1/80) 2m

第176図　土坑等（20）



(12) SK011
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ロームブロック）

(12) SK012
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒少）
3 暗黄褐色土 ローム主体（含ロームブロック多・暗褐色土少）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含暗褐色土少）
5 黄褐色土 ローム主体（含ロームブロック・暗褐色土微）

(12) SK015
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗黄褐色土 ローム主体（含明褐色土）
3 褐色土（含ローム粒・ロームブロック・暗褐色土）
4 暗黄褐色土 ローム主体（含ロームブロック少・褐色土）
5 褐色土（含ロームブロック少）

(12) SK025
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒微）
3 明褐色土（含ローム粒・暗褐色土）
4 暗黄褐色土（含ローム粒・暗褐色土）

(12) SK028
1 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）

(12) SK029
1 明褐色土（含ローム粒）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(12) SK030
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）

(12) SK031
ピットの深さ
P1-8cm

(12) SK031
1 明褐色土（含ローム粒少）
2 明褐色土（含ローム粒微）

(12) SK032
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少）

(12) SK033

(12) SK034
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗黄褐色土（含ローム粒含・暗褐色土）
3 黄褐色土（含ローム粒）

(12) SK035
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）

(12) SK039
1 暗褐色土（含ローム粒・黒褐色土）

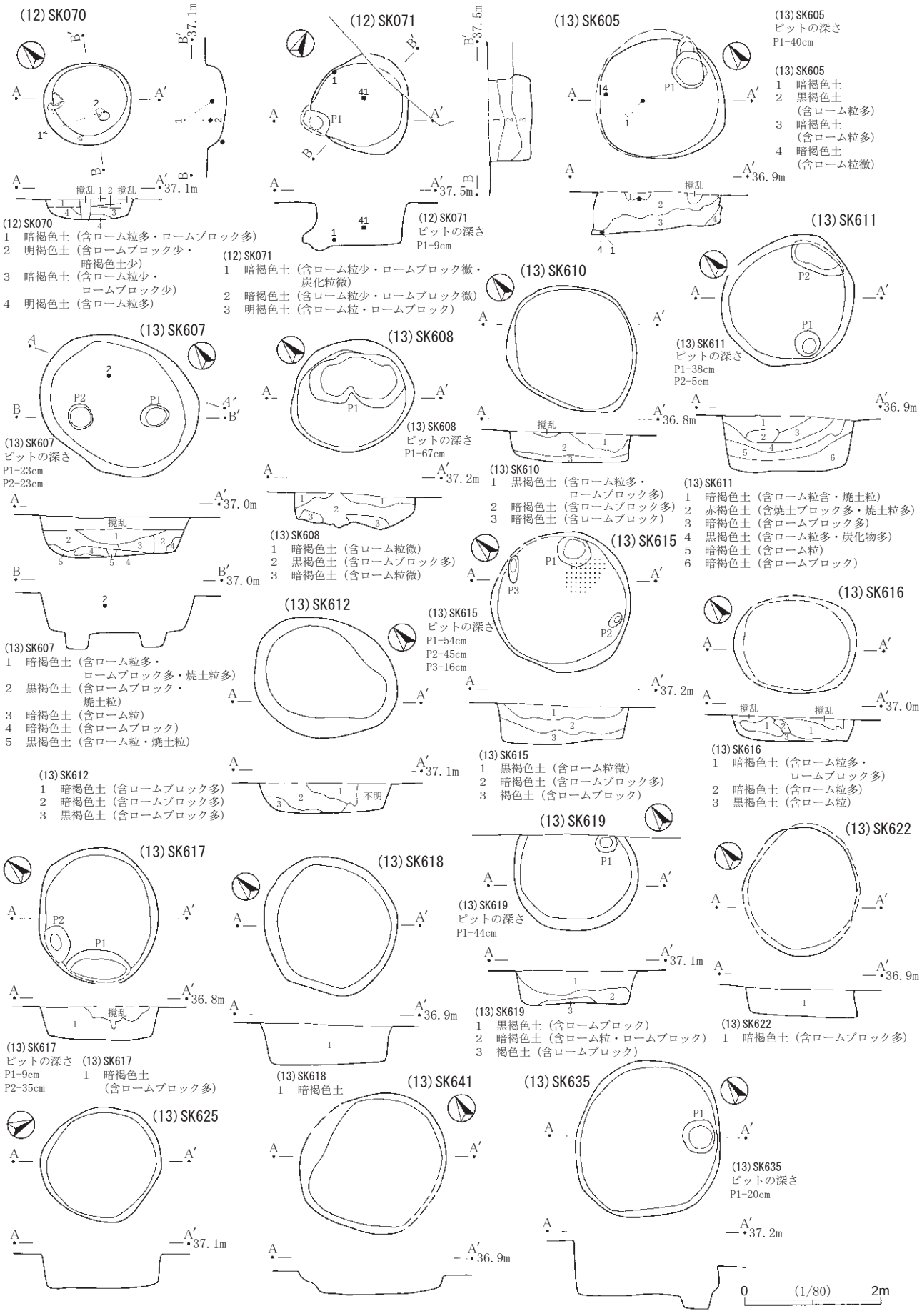
(12) SK040
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 明褐色土 ロームブロック主体（含ローム粒・暗褐色土微）

(12) SK043
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 黄褐色土 ローム粒主体（含ロームブロック多・暗褐色土少）

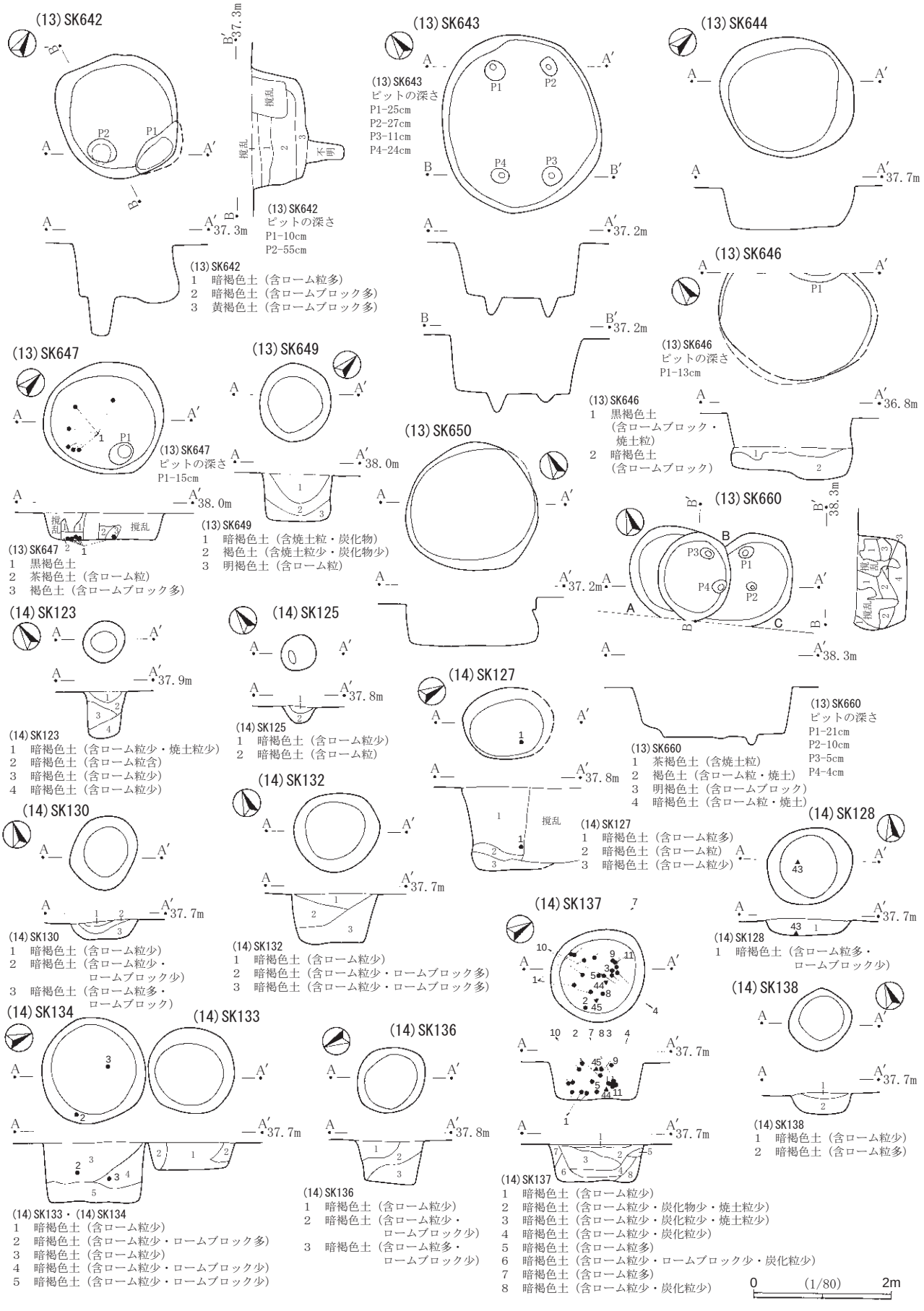
(12) SK062
1 明褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
2 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 黄褐色土 ローム主体

(12) SK065
1 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック少・焼土粒少）
2 暗黄褐色土（含ロームブロック多）
3 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック多・焼土粒少）
4 明褐色土（含ロームブロック少・焼土粒微）
5 暗黄褐色土（含ローム粒・明褐色土）

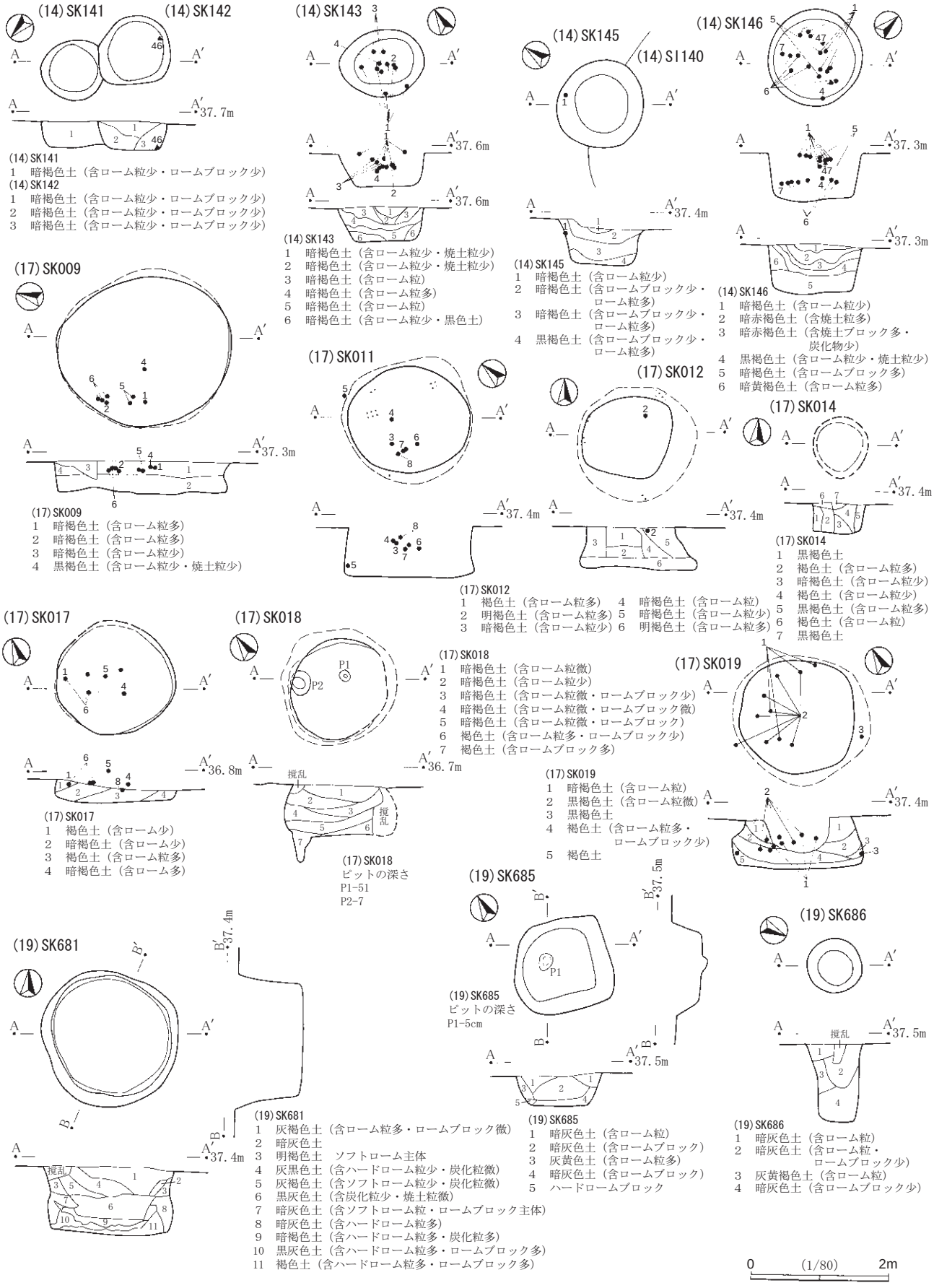
第177図 土坑等（21）


(12) SK070
(12) SK070
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 明褐色土（含ロームブロック少・暗褐色土少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 明褐色土（含ローム粒多）
(12) SK071
(12) SK071
ピットの深さ
P1-9cm
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微・炭化粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
3 明褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
(13) SK605
(13) SK605
ピットの深さ
P1-40cm
(13) SK605
1 暗褐色土
2 黒褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム粒微）
(13) SK607
(13) SK607
ピットの深さ
P1-23cm
P2-23cm
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・焼土粒多）
2 黒褐色土（含ロームブロック・焼土粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ロームブロック）
5 黒褐色土（含ローム粒・焼土粒）
(13) SK608
(13) SK608
ピットの深さ
P1-67cm
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 黒褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒微）
(13) SK610
(13) SK610
1 黒褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック）
(13) SK611
(13) SK611
ピットの深さ
P1-38cm
P2-5cm
1 暗褐色土（含ローム粒含・焼土粒）
2 赤褐色土（含焼土ブロック多・焼土粒多）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 黒褐色土（含ローム粒多・炭化物多）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ロームブロック）
(13) SK612
(13) SK612
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 黒褐色土（含ロームブロック多）
(13) SK615
(13) SK615
ピットの深さ
P1-54cm
P2-45cm
P3-16cm
1 黒褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 褐色土（含ロームブロック）
(13) SK616
(13) SK616
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 黒褐色土（含ローム粒）
(13) SK617
(13) SK617
ピットの深さ
P1-9cm
P2-35cm
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
(13) SK618
(13) SK618
1 暗褐色土
(13) SK619
(13) SK619
ピットの深さ
P1-44cm
1 黒褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 褐色土（含ロームブロック）
(13) SK622
(13) SK622
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
(13) SK625
(13) SK641
(13) SK635
(13) SK635
ピットの深さ
P1-20cm
0 (1/80) 2m

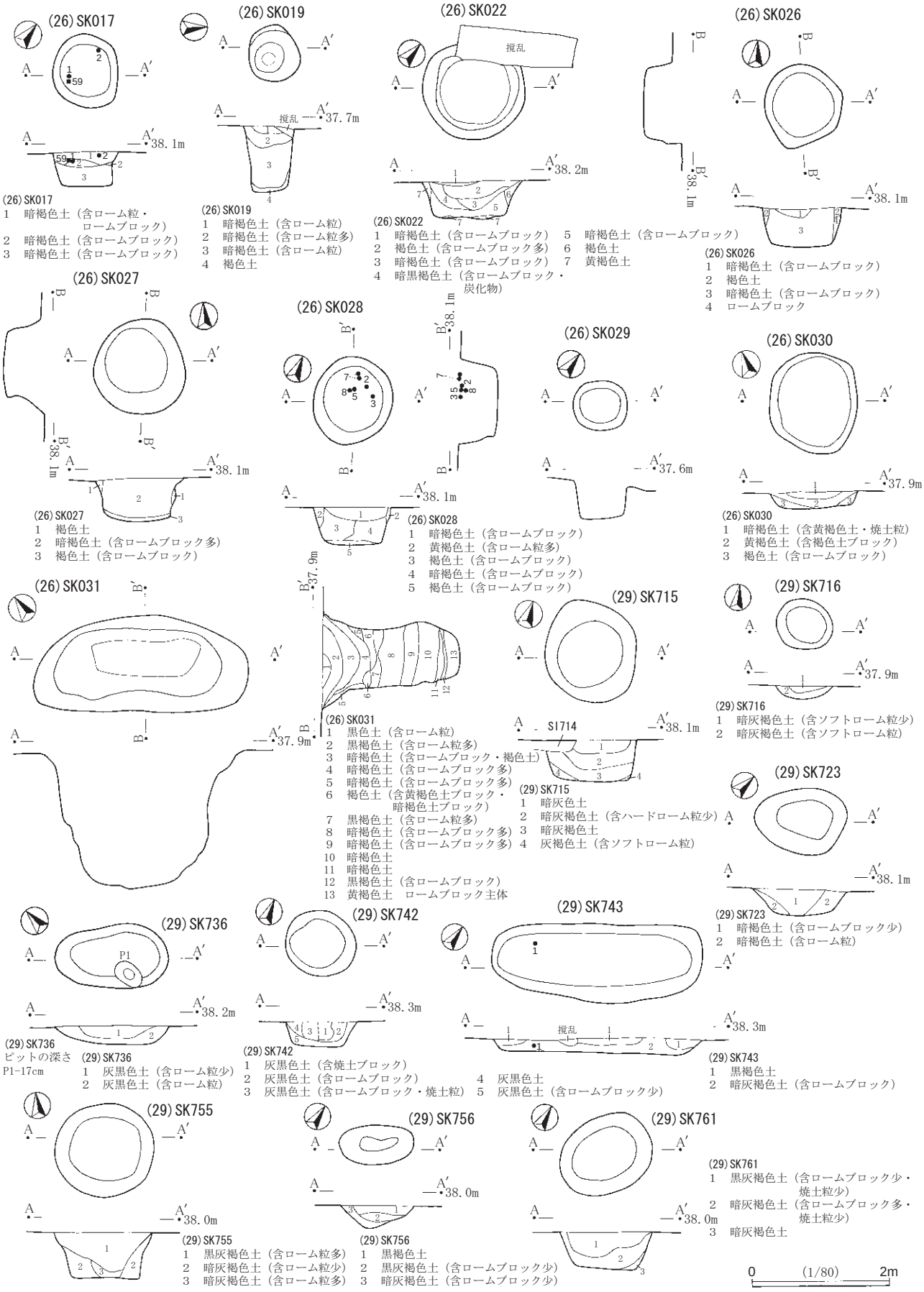
第178図　土坑等（22）


(13) SK642
P1
P2
A
A′
B
B′
37.3m
攪乱
不明
37.3m
(13) SK642
ピットの深さ
P1-10cm
P2-55cm
(13) SK642
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 黄褐色土（含ロームブロック多）
(13) SK643
P1
P2
P3
P4
(13) SK643
ピットの深さ
P1-25cm
P2-27cm
P3-11cm
P4-24cm
37.2m
37.2m
(13) SK644
37.7m
(13) SK646
P1
(13) SK646
ピットの深さ
P1-13cm
(13) SK646
1 黒褐色土
（含ロームブロック・
焼土粒）
2 暗褐色土
（含ロームブロック）
36.8m
(13) SK647
P1
(13) SK647
ピットの深さ
P1-15cm
38.0m
(13) SK647
1 黒褐色土
2 茶褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ロームブロック多）
(13) SK649
38.0m
(13) SK649
1 暗褐色土（含焼土粒・炭化物）
2 褐色土（含焼土粒少・炭化物少）
3 明褐色土（含ローム粒）
(13) SK650
37.2m
(13) SK660
P1
P2
P3
P4
38.3m
38.3m
(13) SK660
ピットの深さ
P1-21cm
P2-10cm
P3-5cm
P4-4cm
(13) SK660
1 茶褐色土（含焼土粒）
2 褐色土（含ローム粒・焼土）
3 明褐色土（含ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒・焼土）
(14) SK123
37.9m
(14) SK123
1 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒含）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少）
(14) SK125
37.8m
(14) SK125
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
(14) SK127
37.8m
(14) SK127
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒） A
3 暗褐色土（含ローム粒少）
(14) SK128
43
37.7m
(14) SK128
1 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック少）
(14) SK130
37.7m
(14) SK130
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック）
(14) SK132
37.7m
(14) SK132
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
(14) SK137
37.7m
37.7m
37.7m
(14) SK137
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物少・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・炭化粒少・焼土粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・炭化粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・炭化粒少）
7 暗褐色土（含ローム粒多）
8 暗褐色土（含ローム粒少・炭化粒少）
(14) SK138
37.7m
(14) SK138
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
(14) SK134
(14) SK133
37.7m
(14) SK133・(14) SK134
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(14) SK136
37.8m
(14) SK136
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック少）
0 (1/80) 2m

第179図　土坑等（23）


(14) SK141
(14) SK142
37.7m
(14) SK141
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(14) SK142
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(14) SK143
37.6m
37.6m
(14) SK143
1 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒少・黒色土）
(14) SK145
(14) S1140
37.4m
(14) SK145
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少・ローム粒多）
3 暗褐色土（含ロームブロック少・ローム粒多）
4 黒褐色土（含ロームブロック少・ローム粒多）
(14) SK146
37.3m
37.3m
(14) SK146
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗赤褐色土（含焼土粒多）
3 暗赤褐色土（含焼土ブロック多・炭化物少）
4 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
5 暗褐色土（含ロームブロック多）
6 暗黄褐色土（含ローム粒多）
(17) SK009
37.3m
(17) SK009
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
(17) SK011
37.4m
(17) SK012
37.4m
(17) SK012
1 褐色土（含ローム粒多） 4 暗褐色土（含ローム粒）
2 明褐色土（含ローム粒多） 5 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少） 6 明褐色土（含ローム粒多）
(17) SK014
37.4m
(17) SK014
1 黒褐色土
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 褐色土（含ローム粒少）
5 黒褐色土（含ローム粒多）
6 褐色土（含ローム粒）
7 黒褐色土
(17) SK017
36.8m
(17) SK017
1 褐色土（含ローム少）
2 暗褐色土（含ローム少）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム多）
(17) SK018
P1
P2
36.7m
撹乱
(17) SK018
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微）
5 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
7 褐色土（含ロームブロック多）
(17) SK018
ピットの深さ
P1-51
P2-7
(17) SK019
37.4m
(17) SK019
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒微）
3 黒褐色土
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
5 褐色土
(19) SK685
37.5m
P1
(19) SK685
ピットの深さ
P1-5cm
37.5m
(19) SK685
1 暗灰色土（含ローム粒）
2 暗灰色土（含ロームブロック）
3 灰黄色土（含ローム粒多）
4 暗灰色土（含ロームブロック）
5 ハードロームブロック
(19) SK686
37.5m
撹乱
(19) SK686
1 暗灰色土（含ローム粒）
2 暗灰色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 灰黄褐色土（含ローム粒）
4 暗灰色土（含ロームブロック少）
(19) SK681
37.4m
撹乱
(19) SK681
1 灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
2 暗灰色土
3 明褐色土 ソフトローム主体
4 灰黒色土（含ハードローム粒少・炭化粒微）
5 灰褐色土（含ソフトローム粒少・炭化粒微）
6 黒灰色土（含炭化粒少・焼土粒微）
7 暗灰色土（含ソフトローム粒・ロームブロック主体）
8 暗灰色土（含ハードローム粒多）
9 暗褐色土（含ハードローム粒多・炭化粒多）
10 黒灰色土（含ハードローム粒多・ロームブロック多）
11 褐色土（含ハードローム粒多・ロームブロック多）
0 (1/80) 2m

第180図　土坑等（24）



(26)SK017
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 暗褐色土（含ロームブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック）

(26)SK019
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 褐色土

(26)SK022
1 暗褐色土（含ロームブロック）
2 褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック）
4 暗黒褐色土（含ロームブロック・炭化物）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 褐色土
7 黄褐色土

(26)SK026
1 暗褐色土（含ロームブロック）
2 褐色土
3 暗褐色土（含ロームブロック）
4 ロームブロック

(26)SK027
1 褐色土
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 褐色土（含ロームブロック）

(26)SK028
1 暗褐色土（含ロームブロック）
2 黄褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ロームブロック）
4 暗褐色土（含ロームブロック）
5 褐色土（含ロームブロック）

(26)SK029

(26)SK030
1 暗褐色土（含黄褐色土・焼土粒）
2 黄褐色土（含褐色土ブロック）
3 褐色土（含ロームブロック）

(26)SK031
1 黒色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ロームブロック・褐色土）
4 暗褐色土（含ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ロームブロック多）
6 褐色土（含黄褐色土ブロック・暗褐色土ブロック）
7 黒褐色土（含ローム粒多）
8 暗褐色土（含ロームブロック多）
9 暗褐色土（含ロームブロック多）
10 暗褐色土
11 暗褐色土
12 黒褐色土（含ロームブロック）
13 黄褐色土 ロームブロック主体

(29)SK715
1 暗灰色土
2 暗灰褐色土（含ハードローム粒少）
3 暗灰褐色土
4 灰褐色土（含ソフトローム粒）

(29)SK716
1 暗灰褐色土（含ソフトローム粒少）
2 暗灰褐色土（含ソフトローム粒）

(29)SK723
1 暗褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒）

(29)SK736
ピットの深さ
P1-17cm
1 灰黒色土（含ローム粒少）
2 灰黒色土（含ローム粒）

(29)SK742
1 灰黒色土（含焼土ブロック）
2 灰黒色土（含ロームブロック）
3 灰黒色土（含ロームブロック・焼土粒）
4 灰黒色土
5 灰黒色土（含ロームブロック少）

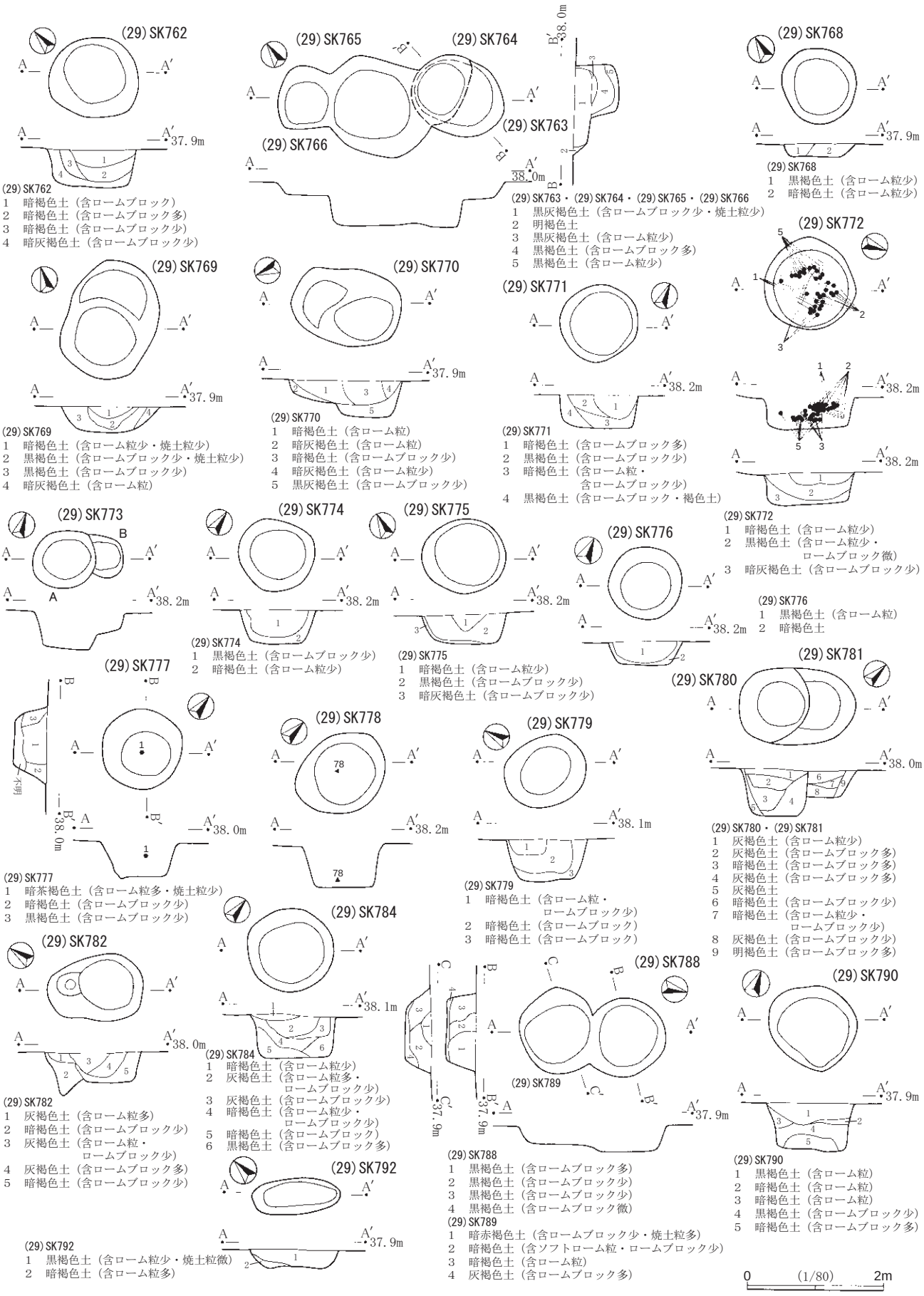
(29)SK743
1 黒褐色土
2 暗灰褐色土（含ロームブロック）

(29)SK755
1 黒灰褐色土（含ローム粒多）
2 暗灰褐色土（含ローム粒少）
3 暗灰褐色土（含ローム粒多）

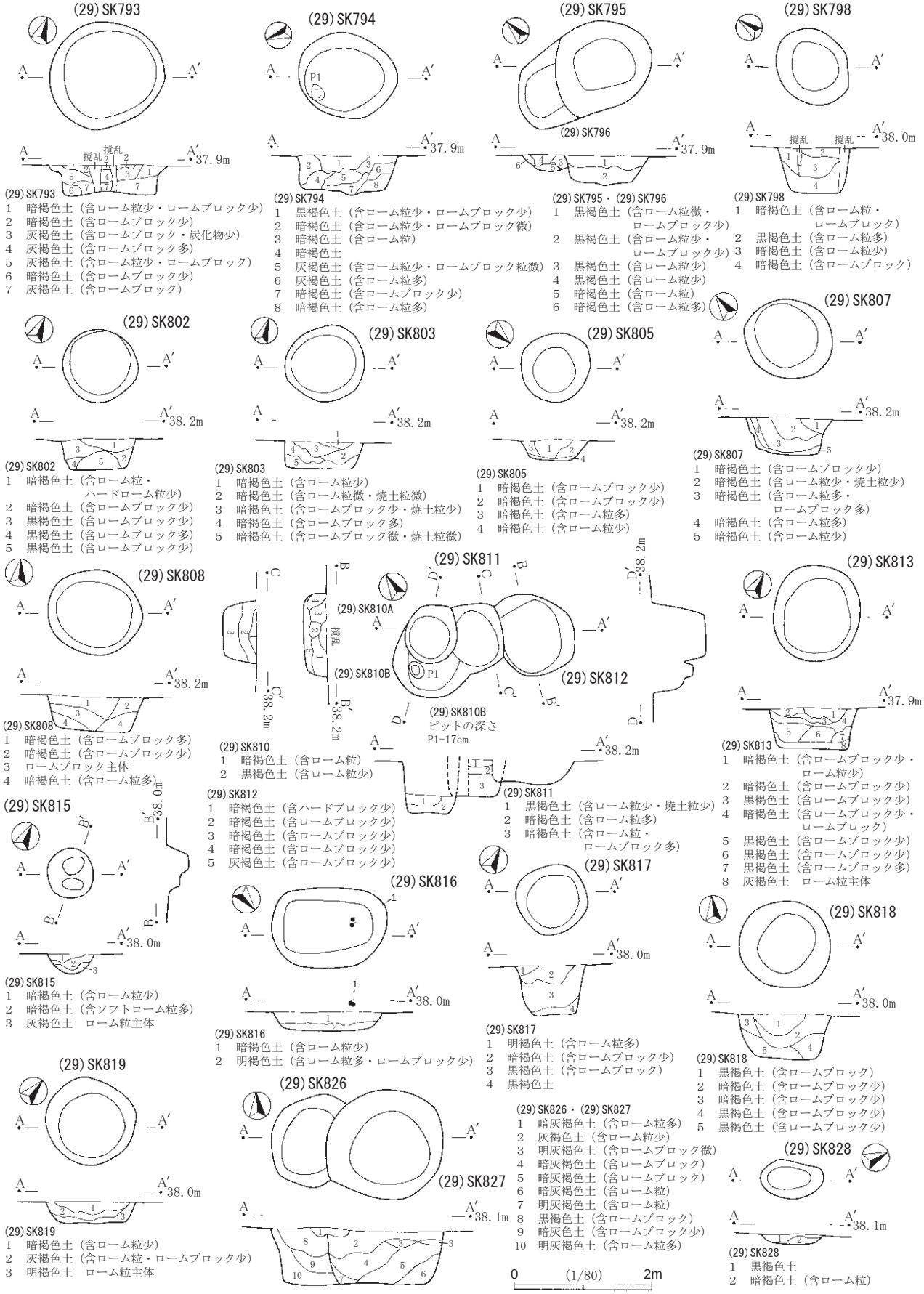
(29)SK756
1 黒褐色土
2 黒灰褐色土（含ロームブロック少）
3 暗灰褐色土（含ロームブロック少）

(29)SK761
1 黒灰褐色土（含ロームブロック少・焼土粒少）
2 暗灰褐色土（含ロームブロック多・焼土粒少）
3 暗灰褐色土

第181図　土坑等（25）


(29)SK762
1 暗褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
4 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK763・(29)SK764・(29)SK765・(29)SK766
1 黒灰褐色土（含ロームブロック少・焼土粒少）
2 明褐色土
3 黒灰褐色土（含ローム粒少）
4 黒褐色土（含ロームブロック多）
5 黒褐色土（含ローム粒少）
(29)SK768
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
(29)SK769
1 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
2 黒褐色土（含ロームブロック少・焼土粒少）
3 黒褐色土（含ロームブロック少）
4 暗灰褐色土（含ローム粒）
(29)SK770
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗灰褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
4 暗灰褐色土（含ローム粒少）
5 黒灰褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK771
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
2 黒褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒・
含ロームブロック少）
4 黒褐色土（含ロームブロック・褐色土）
(29)SK772
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック微）
3 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK773
(29)SK774
1 黒褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
(29)SK775
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土（含ロームブロック少）
3 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK776
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土
(29)SK777
1 暗茶褐色土（含ローム粒多・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK778
(29)SK779
1 暗褐色土（含ローム粒・
ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ロームブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック）
(29)SK780・(29)SK781
1 灰褐色土（含ローム粒少）
2 灰褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 灰褐色土（含ロームブロック多）
5 灰褐色土
6 暗褐色土（含ロームブロック少）
7 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック少）
8 灰褐色土（含ロームブロック少）
9 明褐色土（含ロームブロック多）
(29)SK782
1 灰褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 灰褐色土（含ローム粒・
ロームブロック少）
4 灰褐色土（含ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ロームブロック少）
(29)SK784
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 灰褐色土（含ローム粒多・
ロームブロック少）
3 灰褐色土（含ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・
ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 黒褐色土（含ロームブロック多）
(29)SK788
1 黒褐色土（含ロームブロック多）
2 黒褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ロームブロック少）
4 黒褐色土（含ロームブロック微）
(29)SK789
1 暗赤褐色土（含ロームブロック少・焼土粒多）
2 暗褐色土（含ソフトローム粒・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 灰褐色土（含ロームブロック多）
(29)SK790
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 黒褐色土（含ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ロームブロック多）
(29)SK792
1 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
0 (1/80) 2m

第182図　土坑等（26）



(29)SK793
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 灰褐色土（含ロームブロック・炭化物少）
4 灰褐色土（含ロームブロック多）
5 灰褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
6 暗褐色土（含ロームブロック少）
7 灰褐色土（含ロームブロック）

(29)SK794
1 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 暗褐色土
5 灰褐色土（含ローム粒少・ロームブロック粒微）
6 灰褐色土（含ローム粒多）
7 暗褐色土（含ロームブロック少）
8 暗褐色土（含ローム粒多）

(29)SK795・(29)SK796
1 黒褐色土（含ローム粒微・ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ローム粒少）
4 黒褐色土（含ローム粒少）
5 暗褐色土（含ローム粒）
6 暗褐色土（含ローム粒多）

(29)SK798
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
2 黒褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ロームブロック）

(29)SK802
1 暗褐色土（含ローム粒・ハードローム粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ロームブロック少）
4 黒褐色土（含ロームブロック多）
5 黒褐色土（含ロームブロック少）

(29)SK803
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒微・焼土粒微）
3 暗褐色土（含ロームブロック少・焼土粒少）
4 暗褐色土（含ロームブロック多）
5 暗褐色土（含ロームブロック微・焼土粒微）

(29)SK805
1 暗褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム粒少）

(29)SK807
1 暗褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ローム粒少）

(29)SK808
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 ロームブロック主体
4 暗褐色土（含ローム粒多）

(29)SK810
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム粒少）

(29)SK810B
ピットの深さ
P1-17cm

(29)SK811
1 黒褐色土（含ローム粒少・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック多）

(29)SK812
1 暗褐色土（含ハードブロック少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ロームブロック少）
5 灰褐色土（含ロームブロック少）

(29)SK813
1 暗褐色土（含ロームブロック少・ローム粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ロームブロック少・ロームブロック）
5 黒褐色土（含ロームブロック少）
6 黒褐色土（含ロームブロック少）
7 黒褐色土（含ロームブロック多）
8 灰褐色土 ローム粒主体

(29)SK815
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ソフトローム粒多）
3 灰褐色土 ローム粒主体

(29)SK816
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 明褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）

(29)SK817
1 明褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ロームブロック）
4 黒褐色土

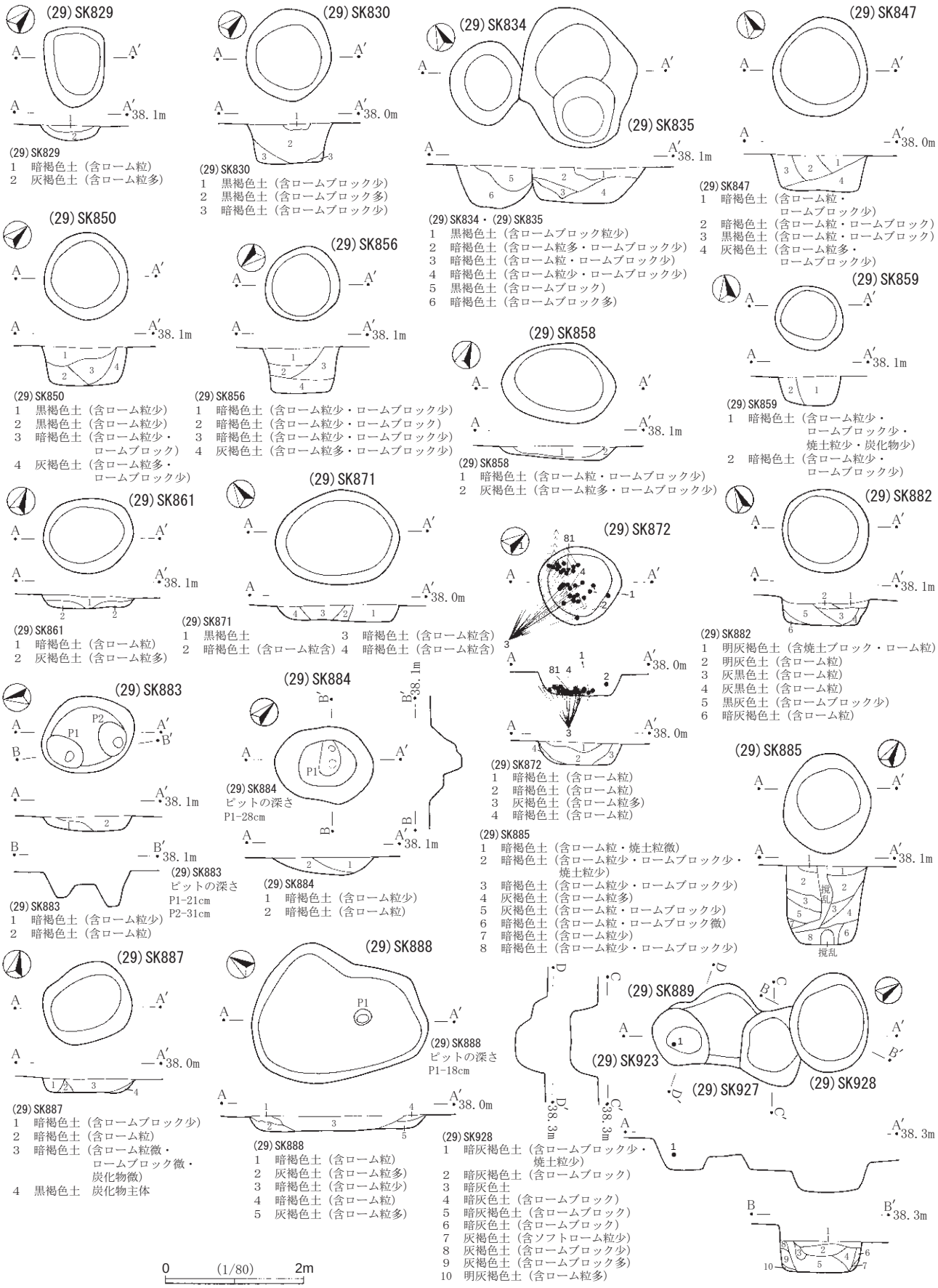
(29)SK818
1 黒褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
4 黒褐色土（含ロームブロック少）
5 黒褐色土（含ロームブロック少）

(29)SK819
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 明褐色土 ローム粒主体

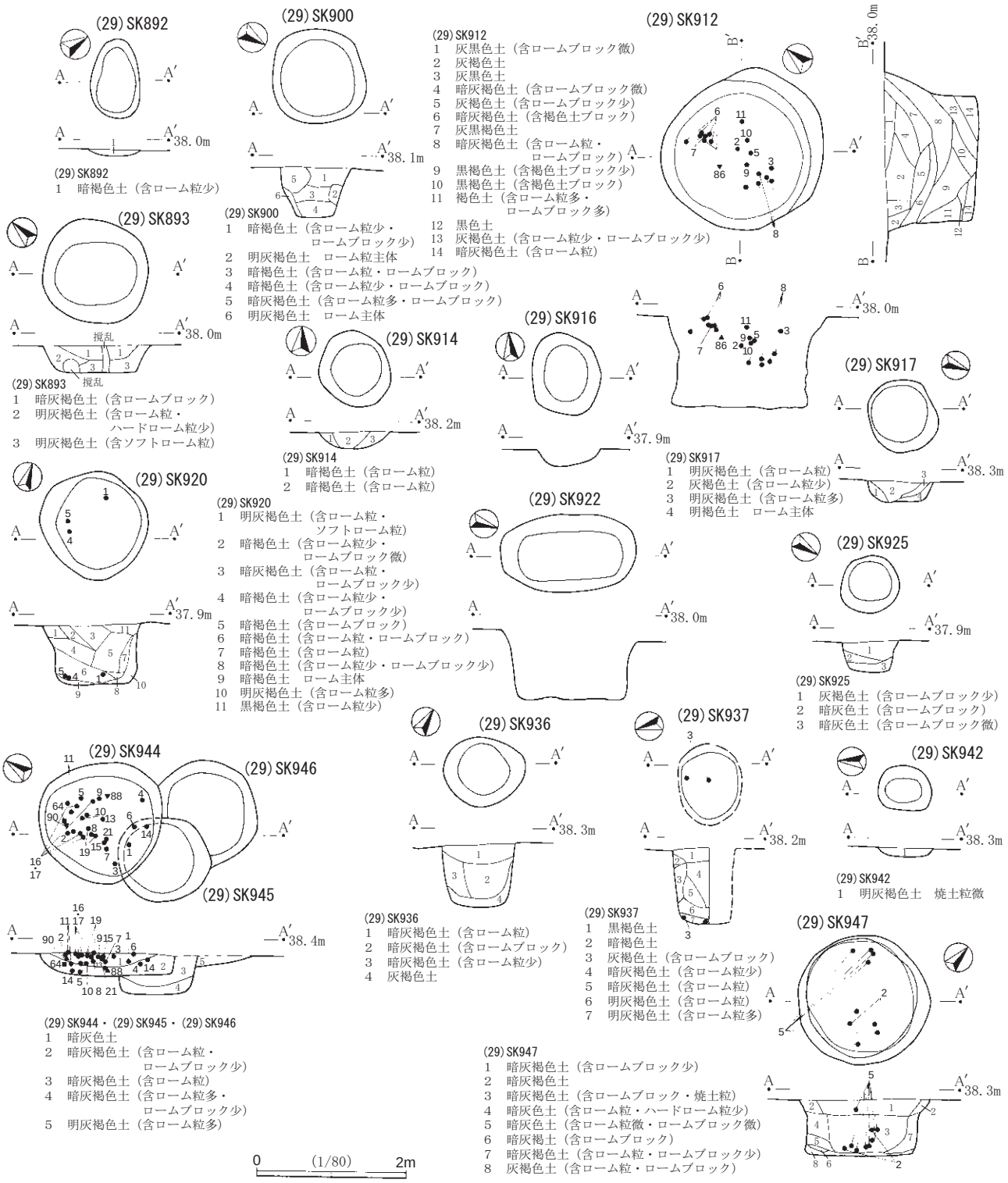
(29)SK826・(29)SK827
1 暗灰褐色土（含ローム粒多）
2 灰褐色土（含ローム粒少）
3 明灰褐色土（含ロームブロック微）
4 暗灰褐色土（含ロームブロック）
5 暗灰褐色土（含ロームブロック）
6 暗灰褐色土（含ローム粒）
7 明灰褐色土（含ローム粒）
8 黒褐色土（含ロームブロック）
9 暗灰色土（含ロームブロック少）
10 明灰褐色土（含ローム粒多）

(29)SK828
1 黒褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒）

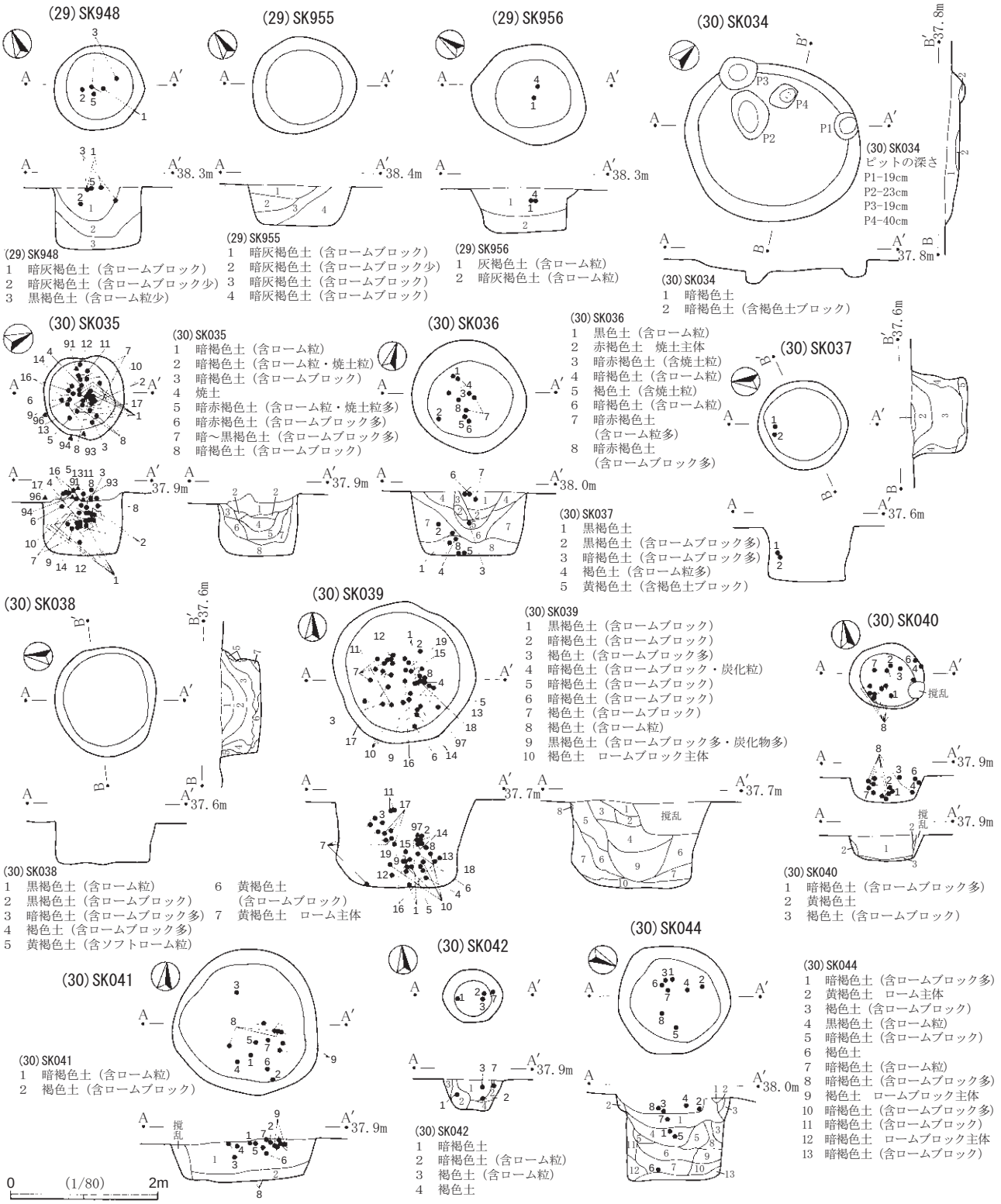
第183図　土坑等（27）


(29) SK829
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 灰褐色土（含ローム粒多）
(29) SK830
1 黒褐色土（含ロームブロック少）
2 黒褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック少）
(29) SK834・(29) SK835
1 黒褐色土（含ロームブロック粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
5 黒褐色土（含ロームブロック）
6 暗褐色土（含ロームブロック多）
(29) SK847
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
3 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(29) SK850
1 黒褐色土（含ローム粒少）
2 黒褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
4 灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(29) SK856
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(29) SK858
1 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
2 灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(29) SK859
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少・炭化物少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
(29) SK861
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 灰褐色土（含ローム粒多）
(29) SK871
1 黒褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒含）
3 暗褐色土（含ローム粒含）
4 暗褐色土（含ローム粒含）
(29) SK872
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 灰褐色土（含ローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム粒）
(29) SK882
1 明灰褐色土（含焼土ブロック・ローム粒）
2 明灰色土（含ローム粒）
3 灰黒色土（含ローム粒）
4 灰黒色土（含ローム粒）
5 黒灰色土（含ロームブロック少）
6 暗灰褐色土（含ローム粒）
(29) SK883
ピットの深さ
P1-21cm
P2-31cm
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
(29) SK884
ピットの深さ
P1-28cm
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
(29) SK885
1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
4 灰褐色土（含ローム粒多）
5 灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック微）
7 暗褐色土（含ローム粒少）
8 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
撹乱
(29) SK887
1 暗褐色土（含ロームブロック少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒微・ロームブロック微・炭化物微）
4 黒褐色土 炭化物主体
(29) SK888
ピットの深さ
P1-18cm
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 灰褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 灰褐色土（含ローム粒多）
(29) SK889
(29) SK923
(29) SK927
(29) SK928
1 暗灰褐色土（含ロームブロック少・焼土粒少）
2 暗灰褐色土（含ロームブロック）
3 暗灰色土
4 暗灰色土（含ロームブロック）
5 暗灰褐色土（含ロームブロック）
6 暗灰色土（含ロームブロック）
7 灰褐色土（含ソフトローム粒少）
8 灰褐色土（含ロームブロック少）
9 灰褐色土（含ロームブロック多）
10 明灰褐色土（含ローム粒多）
0 (1/80) 2m

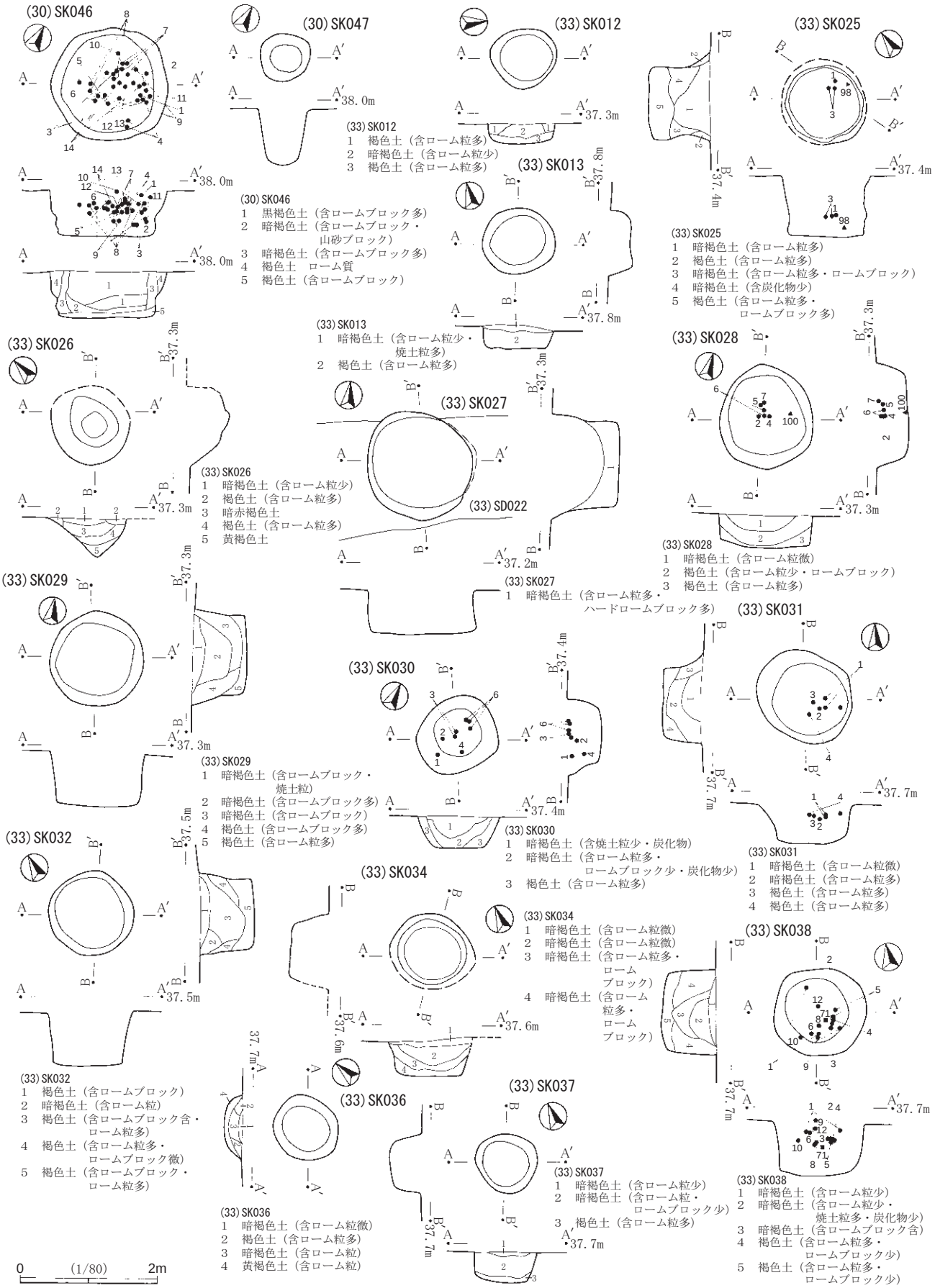
第184図　土坑等（28）


(29)SK892
1 暗褐色土（含ローム粒少）
(29)SK893
1 暗灰褐色土（含ロームブロック）
2 明灰褐色土（含ローム粒・ハードローム粒少）
3 明灰褐色土（含ソフトローム粒）
撹乱
(29)SK900
1 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
2 明灰褐色土 ローム粒主体
3 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
5 暗灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
6 明灰褐色土 ローム主体
(29)SK912
1 灰黒色土（含ロームブロック微）
2 灰褐色土
3 灰黒色土
4 暗灰褐色土（含ロームブロック微）
5 灰褐色土（含ロームブロック少）
6 暗灰褐色土（含褐色土ブロック）
7 灰黒褐色土
8 暗灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
9 黒褐色土（含褐色土ブロック少）
10 黒褐色土（含褐色土ブロック）
11 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
12 黒色土
13 灰褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
14 暗灰褐色土（含ローム粒）
(29)SK914
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
(29)SK916
(29)SK917
1 明灰褐色土（含ローム粒）
2 灰褐色土（含ローム粒少）
3 明灰褐色土（含ローム粒多）
4 明褐色土 ローム主体
(29)SK920
1 明灰褐色土（含ローム粒・ソフトローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック微）
3 暗灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
4 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
9 暗褐色土 ローム主体
10 明灰褐色土（含ローム粒多）
11 黒褐色土（含ローム粒少）
(29)SK922
(29)SK925
1 灰褐色土（含ロームブロック少）
2 暗灰色土（含ロームブロック）
3 暗灰色土（含ロームブロック微）
(29)SK936
1 暗灰褐色土（含ローム粒）
2 暗灰褐色土（含ロームブロック）
3 暗灰褐色土（含ローム粒少）
4 灰褐色土
(29)SK937
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 灰褐色土（含ロームブロック）
4 暗灰褐色土（含ローム粒少）
5 暗灰褐色土（含ローム粒）
6 明灰褐色土（含ローム粒）
7 明灰褐色土（含ローム粒多）
(29)SK942
1 明灰褐色土 焼土粒微
(29)SK944・(29)SK945・(29)SK946
1 暗灰色土
2 暗灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 暗灰褐色土（含ローム粒）
4 暗灰褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
5 明灰褐色土（含ローム粒多）
(29)SK947
1 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
2 暗灰褐色土
3 暗灰褐色土（含ロームブロック・焼土粒）
4 暗灰色土（含ローム粒・ハードローム粒少）
5 暗灰色土（含ローム粒微・ロームブロック微）
6 暗灰褐土（含ロームブロック）
7 暗灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
8 灰褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
0 (1/80) 2m

第185図　土坑等（29）


(29) SK948
(29) SK955
(29) SK956
(30) SK034
(29) SK948
1 暗灰褐色土（含ロームブロック）
2 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
3 黒褐色土（含ローム粒少）
(29) SK955
1 暗灰褐色土（含ロームブロック）
2 暗灰褐色土（含ロームブロック少）
3 暗灰褐色土（含ロームブロック）
4 暗灰褐色土（含ロームブロック）
(29) SK956
1 灰褐色土（含ローム粒）
2 暗灰褐色土（含ローム粒）
(30) SK034
ピットの深さ
P1-19cm
P2-23cm
P3-19cm
P4-40cm
(30) SK034
1 暗褐色土
2 暗褐色土（含褐色土ブロック）
(30) SK035
(30) SK035
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒）
3 暗褐色土（含ロームブロック）
4 焼土
5 暗赤褐色土（含ローム粒・焼土粒多）
6 暗赤褐色土（含ロームブロック多）
7 暗～黒褐色土（含ロームブロック多）
8 暗褐色土（含ロームブロック）
(30) SK036
(30) SK036
1 黒色土（含ローム粒）
2 赤褐色土　焼土主体
3 暗赤褐色土（含焼土粒）
4 暗褐色土（含ローム粒）
5 褐色土（含焼土粒）
6 暗褐色土（含ローム粒）
7 暗赤褐色土
（含ローム粒多）
8 暗赤褐色土
（含ロームブロック多）
(30) SK037
(30) SK037
1 黒褐色土
2 黒褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土（含ローム粒多）
5 黄褐色土（含褐色土ブロック）
(30) SK038
(30) SK038
1 黒褐色土（含ローム粒）
2 黒褐色土（含ロームブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土（含ロームブロック多）
5 黄褐色土（含ソフトローム粒）
6 黄褐色土
（含ロームブロック）
7 黄褐色土　ローム主体
(30) SK039
(30) SK039
1 黒褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ロームブロック）
3 褐色土（含ロームブロック多）
4 暗褐色土（含ロームブロック・炭化粒）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 暗褐色土（含ロームブロック）
7 褐色土（含ロームブロック）
8 褐色土（含ローム粒）
9 黒褐色土（含ロームブロック多・炭化物多）
10 褐色土　ロームブロック主体
(30) SK040
(30) SK040
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
2 黄褐色土
3 褐色土（含ロームブロック）
(30) SK041
(30) SK041
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ロームブロック）
(30) SK042
(30) SK042
1 暗褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒）
4 褐色土
(30) SK044
(30) SK044
1 暗褐色土（含ロームブロック多）
2 黄褐色土　ローム主体
3 褐色土（含ロームブロック）
4 黒褐色土（含ローム粒）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 褐色土
7 暗褐色土（含ローム粒）
8 暗褐色土（含ロームブロック多）
9 褐色土　ロームブロック主体
10 暗褐色土（含ロームブロック多）
11 暗褐色土（含ロームブロック）
12 暗褐色土　ロームブロック主体
13 暗褐色土（含ロームブロック）
0 (1/80) 2m

第186図　土坑等（30）



(30) SK046
1 黒褐色土（含ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ロームブロック・山砂ブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土 ローム質
5 褐色土（含ロームブロック）

(30) SK047
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK012
1 褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK025
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 暗褐色土（含炭化物少）
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）

(33) SK013
1 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒多）
2 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK026
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗赤褐色土
4 褐色土（含ローム粒多）
5 黄褐色土

(33) SK027
1 暗褐色土（含ローム粒多・ハードロームブロック多）

(33) SK028
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 褐色土（含ローム粒少・ロームブロック）
3 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK029
1 暗褐色土（含ロームブロック・焼土粒）
2 暗褐色土（含ロームブロック多）
3 暗褐色土（含ロームブロック）
4 褐色土（含ロームブロック多）
5 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK030
1 暗褐色土（含焼土粒少・炭化物）
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少・炭化物少）
3 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK031
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多）

(33) SK032
1 褐色土（含ロームブロック）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ロームブロック含・ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック微）
5 褐色土（含ロームブロック・ローム粒多）

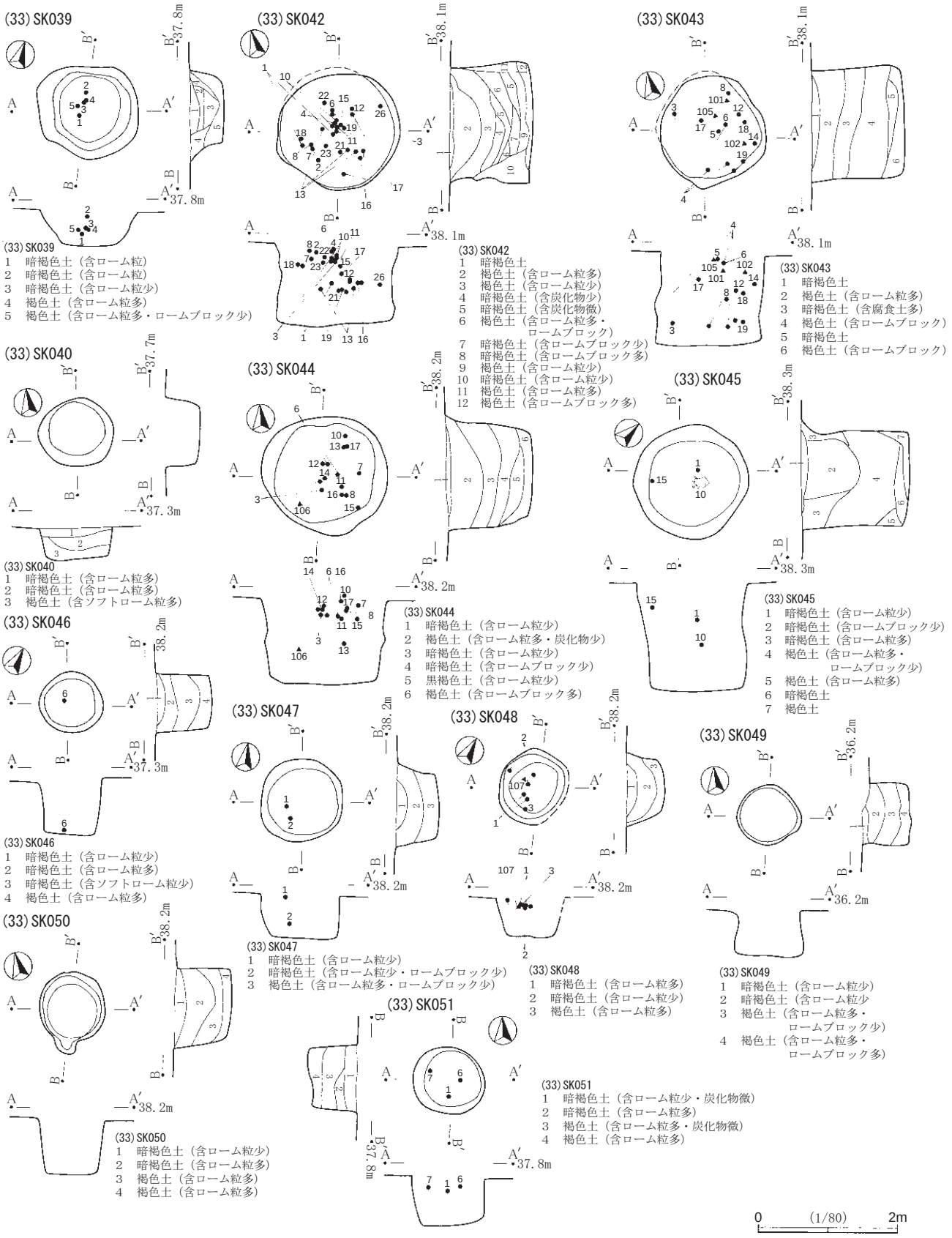
(33) SK034
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒微）
3 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）

(33) SK038
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・焼土粒多・炭化物少）
3 暗褐色土（含ロームブロック含）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）

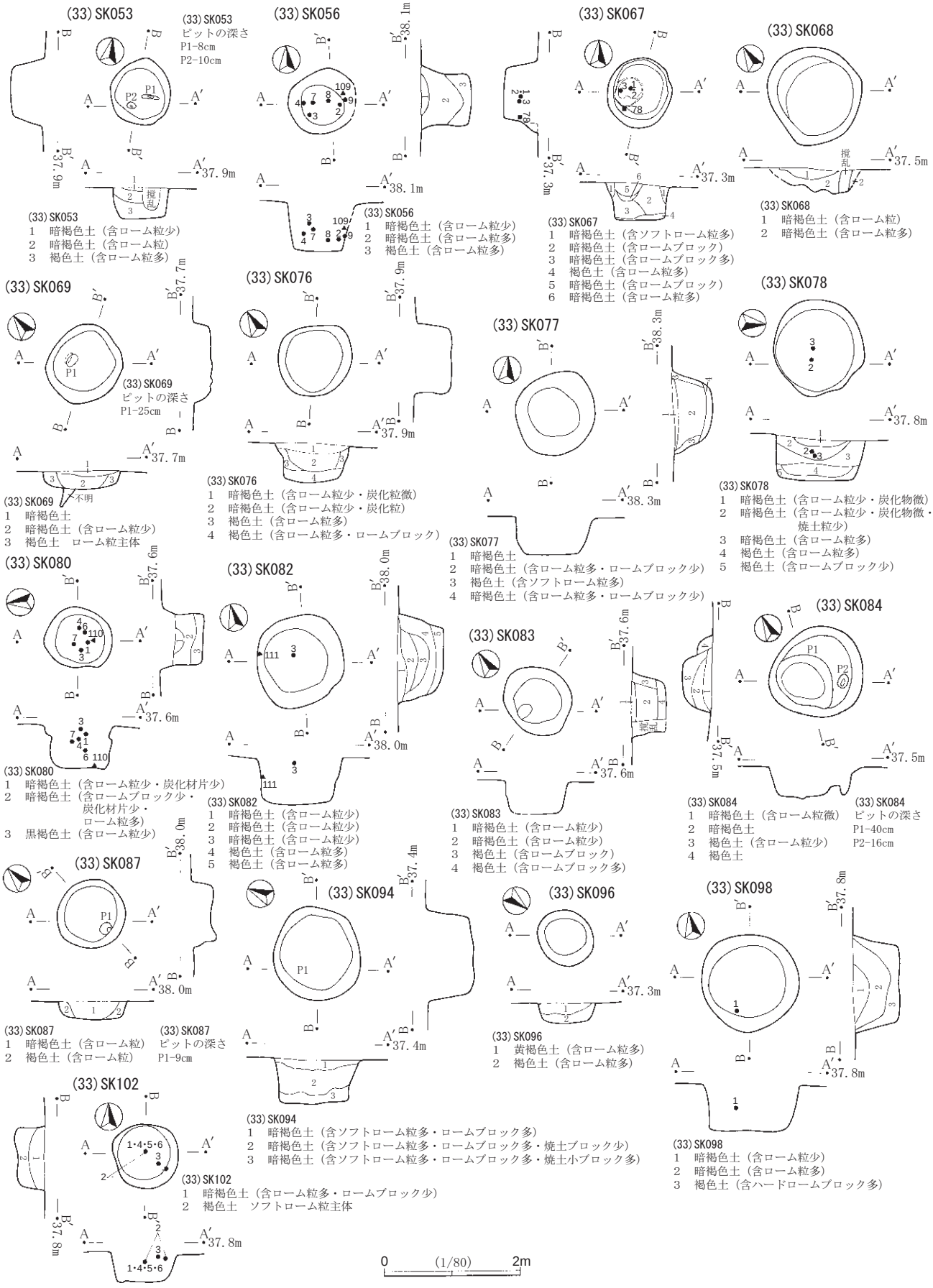
(33) SK036
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ローム粒）
4 黄褐色土（含ローム粒）

(33) SK037
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒・ロームブロック少）
3 褐色土（含ローム粒多）

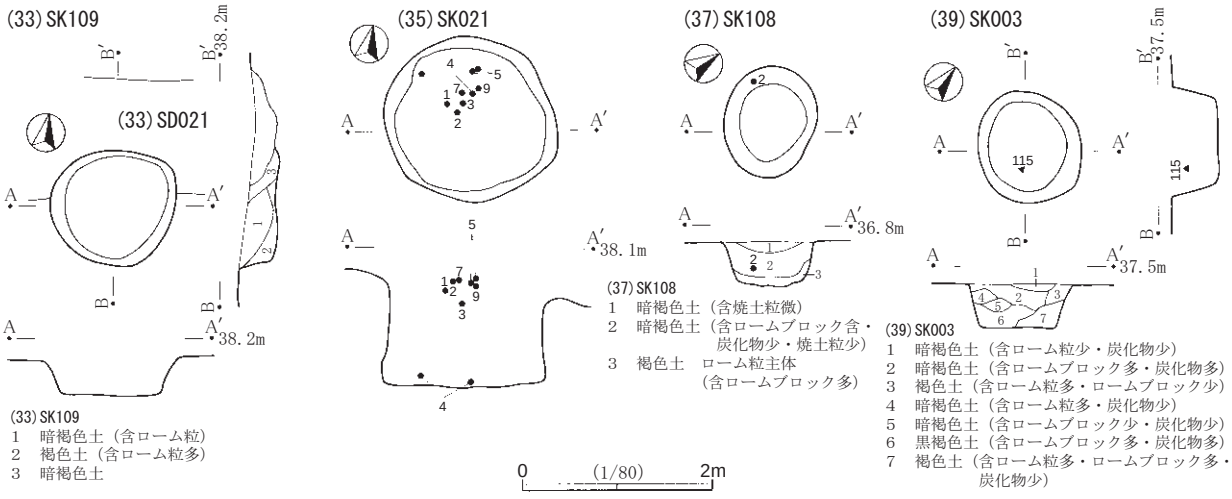
第187図　土坑等（31）


(33) SK039
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 褐色土（含ローム粒多）
5 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(33) SK042
1 暗褐色土
2 褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含炭化物少）
5 暗褐色土（含炭化物微）
6 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
7 暗褐色土（含ロームブロック少）
8 暗褐色土（含ロームブロック多）
9 褐色土（含ローム粒少）
10 暗褐色土（含ローム粒少）
11 褐色土（含ローム粒多）
12 褐色土（含ロームブロック多）
(33) SK043
1 暗褐色土
2 褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含腐食土多）
4 褐色土（含ロームブロック）
5 暗褐色土
6 褐色土（含ロームブロック）
(33) SK040
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ソフトローム粒多）
(33) SK044
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 褐色土（含ローム粒多・炭化物少）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 暗褐色土（含ロームブロック少）
5 黒褐色土（含ローム粒少）
6 褐色土（含ロームブロック多）
(33) SK045
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
5 褐色土（含ローム粒多）
6 暗褐色土
7 褐色土
(33) SK046
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 暗褐色土（含ソフトローム粒少）
4 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK047
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少・ロームブロック少）
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(33) SK048
1 暗褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK049
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少
3 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多）
(33) SK050
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK051
1 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物微）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒多・炭化物微）
4 褐色土（含ローム粒多）
0 (1/80) 2m

第188図　土坑等（32）


(33) SK053
(33) SK053
ピットの深さ
P1-8cm
P2-10cm
(33) SK053
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒）
3 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK056
(33) SK056
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK067
(33) SK067
1 暗褐色土（含ソフトローム粒多）
2 暗褐色土（含ロームブロック）
3 暗褐色土（含ロームブロック多）
4 褐色土（含ローム粒多）
5 暗褐色土（含ロームブロック）
6 暗褐色土（含ローム粒多）
(33) SK068
(33) SK068
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
(33) SK069
(33) SK069
ピットの深さ
P1-25cm
(33) SK069
1 暗褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土 ローム粒主体
(33) SK076
(33) SK076
1 暗褐色土（含ローム粒少・炭化粒微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・炭化粒）
3 褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多・ロームブロック）
(33) SK077
(33) SK077
1 暗褐色土
2 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
3 褐色土（含ソフトローム粒多）
4 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
(33) SK078
(33) SK078
1 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物微）
2 暗褐色土（含ローム粒少・炭化物微・焼土粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒多）
4 褐色土（含ローム粒多）
5 褐色土（含ロームブロック少）
(33) SK080
(33) SK080
1 暗褐色土（含ローム粒少・炭化材片少）
2 暗褐色土（含ロームブロック少・炭化材片少・ローム粒多）
3 黒褐色土（含ローム粒少）
(33) SK082
(33) SK082
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 暗褐色土（含ローム粒少）
4 褐色土（含ローム粒多）
5 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK083
(33) SK083
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土（含ロームブロック）
4 褐色土（含ロームブロック多）
(33) SK084
(33) SK084
1 暗褐色土（含ローム粒微）
2 暗褐色土
3 褐色土（含ローム粒少）
4 褐色土
(33) SK084
ピットの深さ
P1-40cm
P2-16cm
(33) SK087
(33) SK087
1 暗褐色土（含ローム粒）
2 褐色土（含ローム粒）
(33) SK087
ピットの深さ
P1-9cm
(33) SK094
(33) SK094
1 暗褐色土（含ソフトローム粒多・ロームブロック多）
2 暗褐色土（含ソフトローム粒多・ロームブロック多・焼土ブロック少）
3 暗褐色土（含ソフトローム粒多・ロームブロック多・焼土小ブロック多）
(33) SK096
(33) SK096
1 黄褐色土（含ローム粒多）
2 褐色土（含ローム粒多）
(33) SK098
(33) SK098
1 暗褐色土（含ローム粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
3 褐色土（含ハードロームブロック多）
(33) SK102
(33) SK102
1 暗褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
2 褐色土 ソフトローム粒主体
0 (1/80) 2m

第189図　土坑等（33）

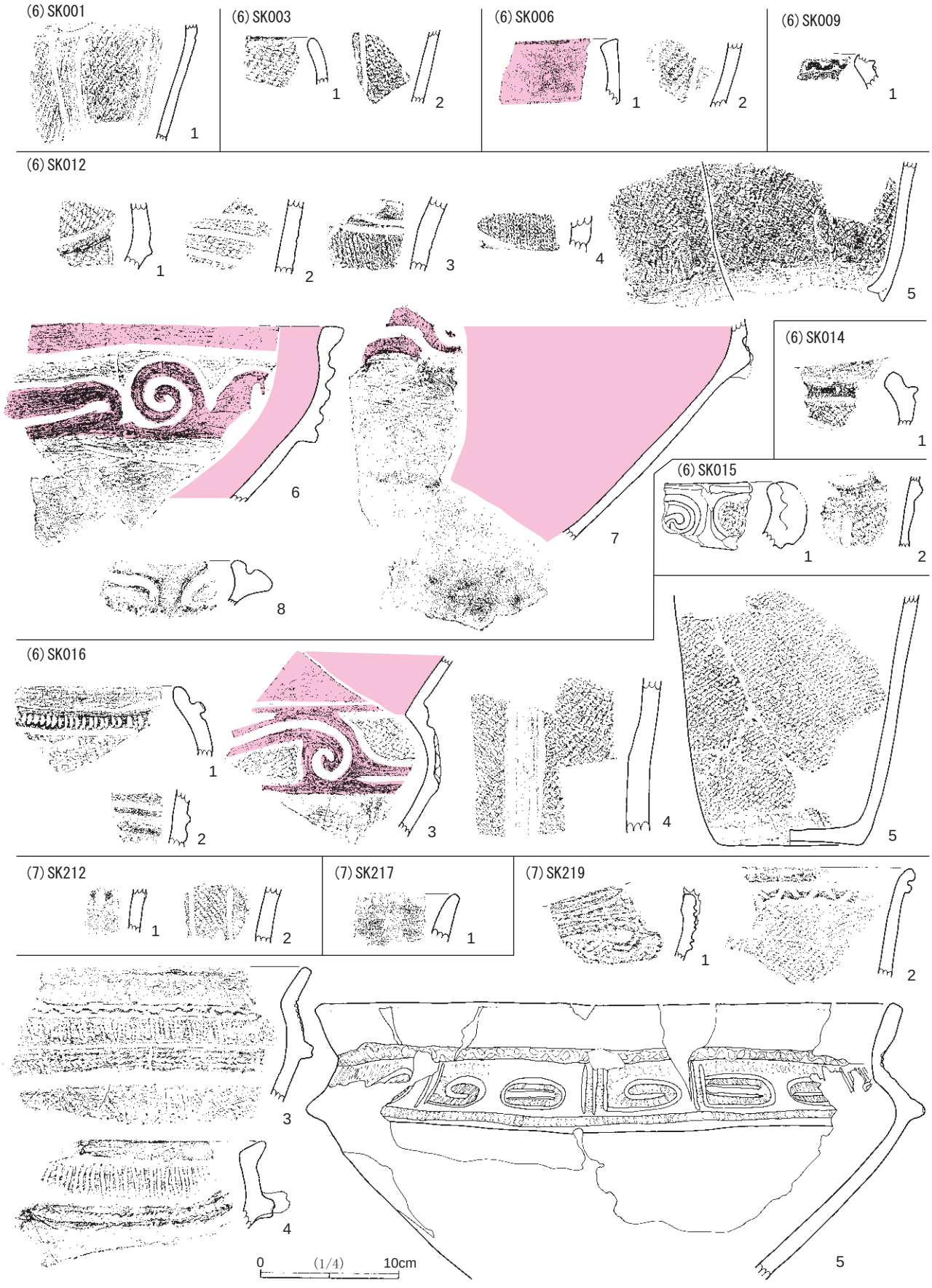


(33) SK109
1　暗褐色土（含ローム粒）
2　褐色土（含ローム粒多）
3　暗褐色土

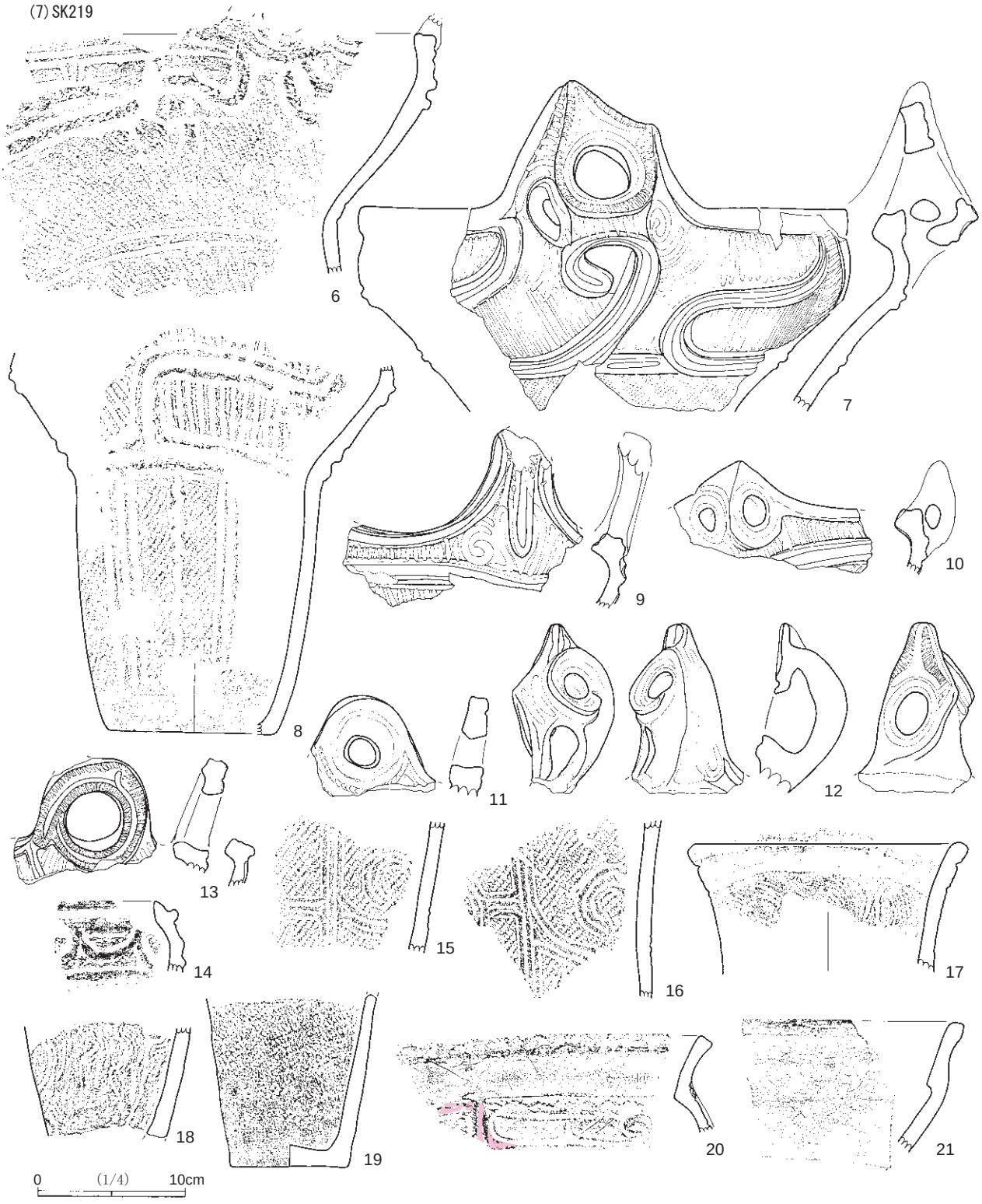
(37) SK108
1　暗褐色土（含焼土粒微）
2　暗褐色土（含ロームブロック含・炭化物少・焼土粒少）
3　褐色土　ローム粒主体（含ロームブロック多）

(39) SK003
1　暗褐色土（含ローム粒少・炭化物少）
2　暗褐色土（含ロームブロック多・炭化物多）
3　褐色土（含ローム粒多・ロームブロック少）
4　暗褐色土（含ローム粒多・炭化物少）
5　暗褐色土（含ロームブロック少・炭化物少）
6　黒褐色土（含ロームブロック多・炭化物多）
7　褐色土（含ローム粒多・ロームブロック多・炭化物少）

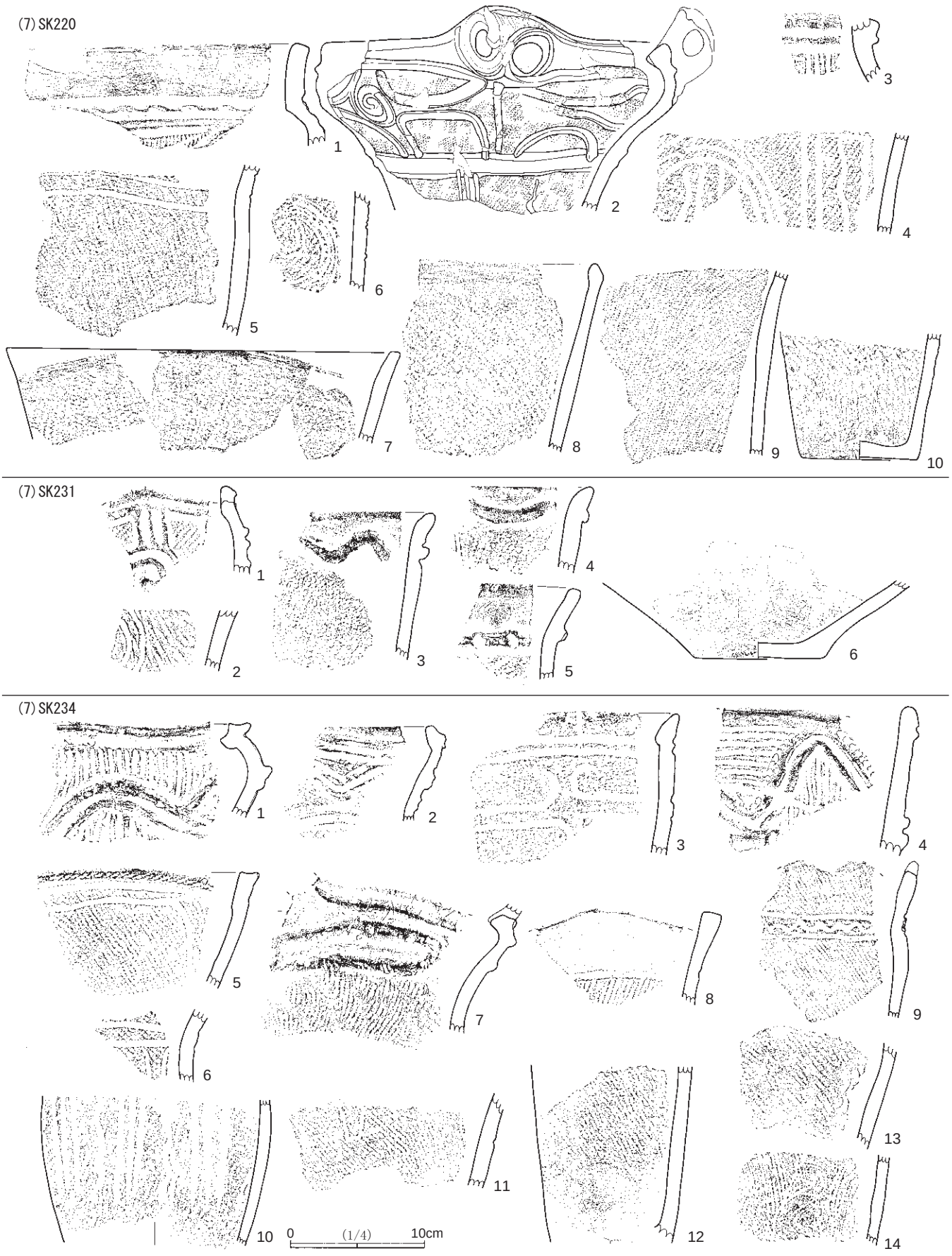
第190図　土坑等（34）



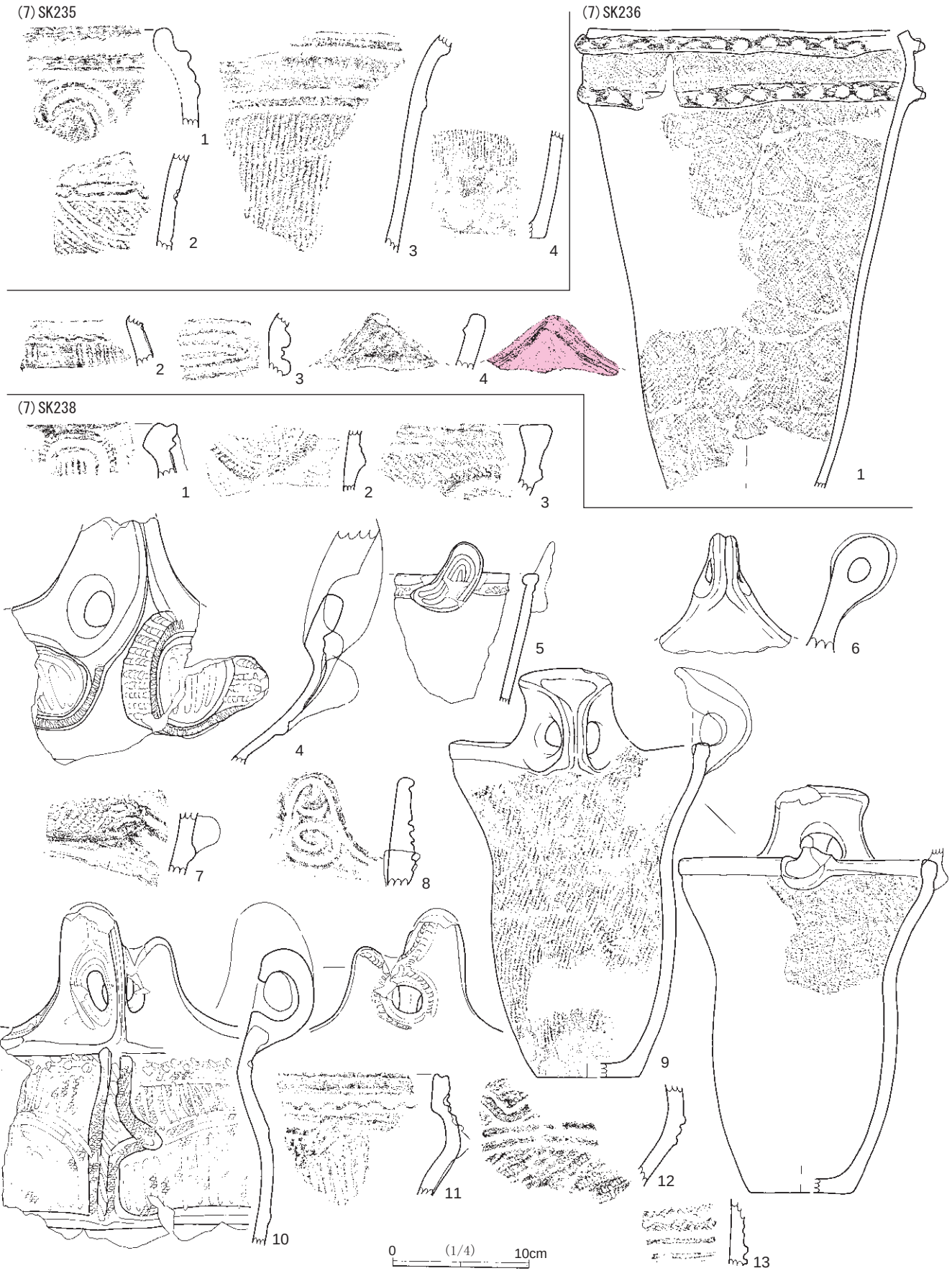
第191図　土坑等出土土器（1）



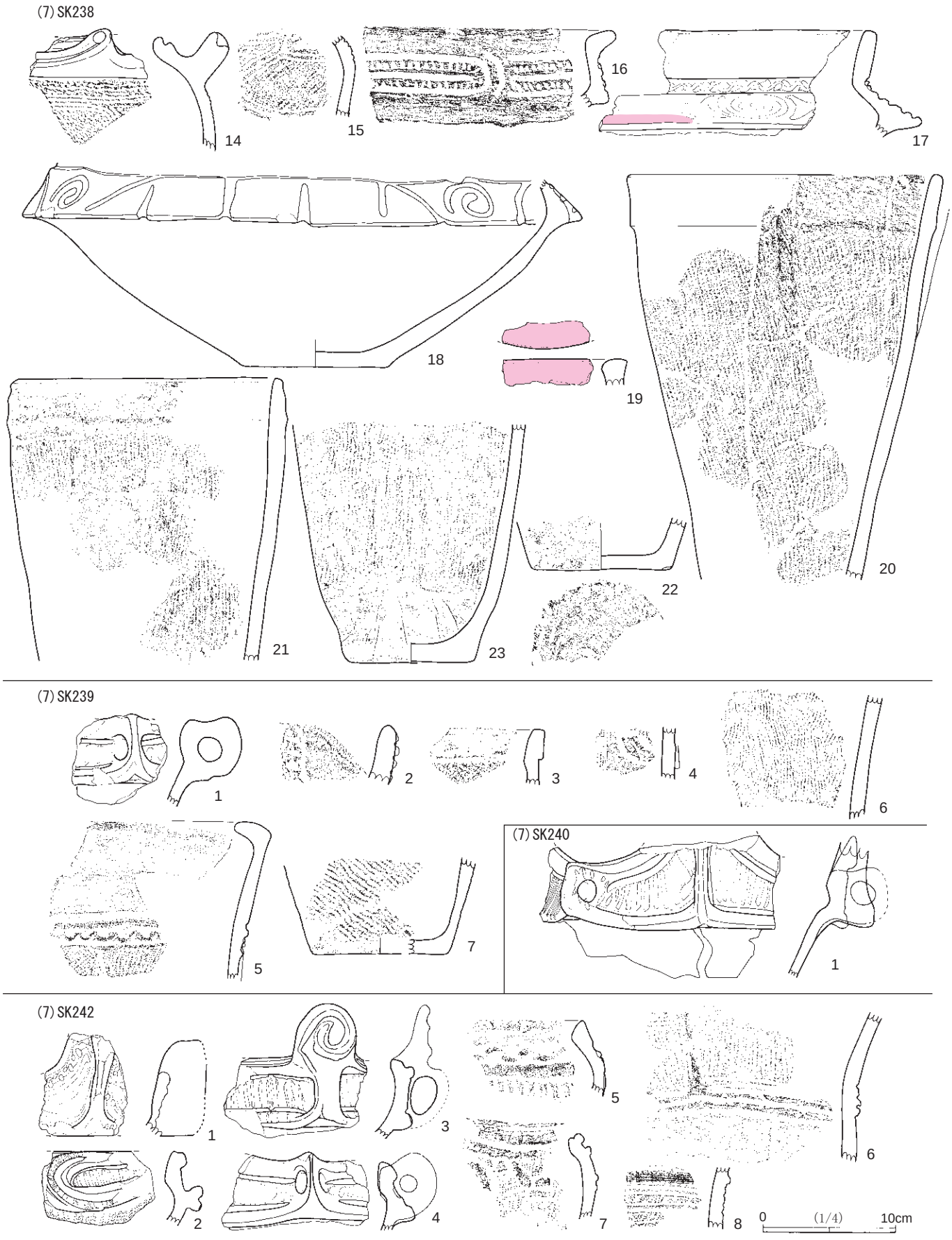
第192図　土坑等出土土器（2）



第193図　土坑等出土土器（3）



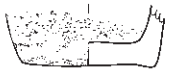
第194図　土坑等出土土器（4）



第195図　土坑等出土土器（5）

第196図　土坑等出土土器（6）

(7) SK251



1

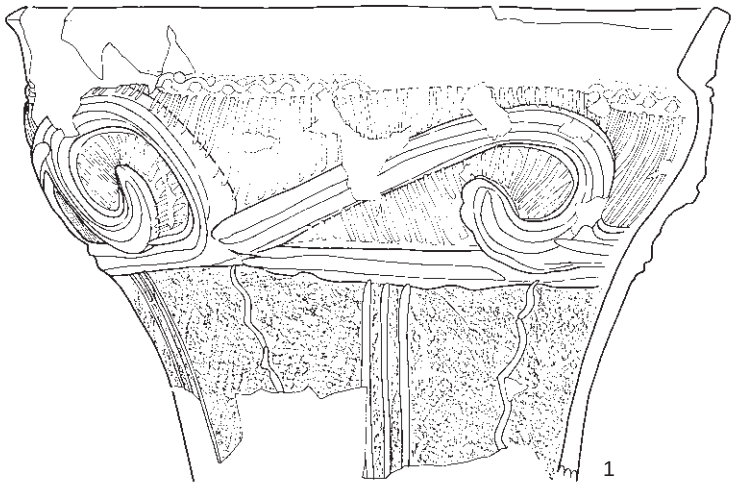
(7) SK252

1

(7) SK253

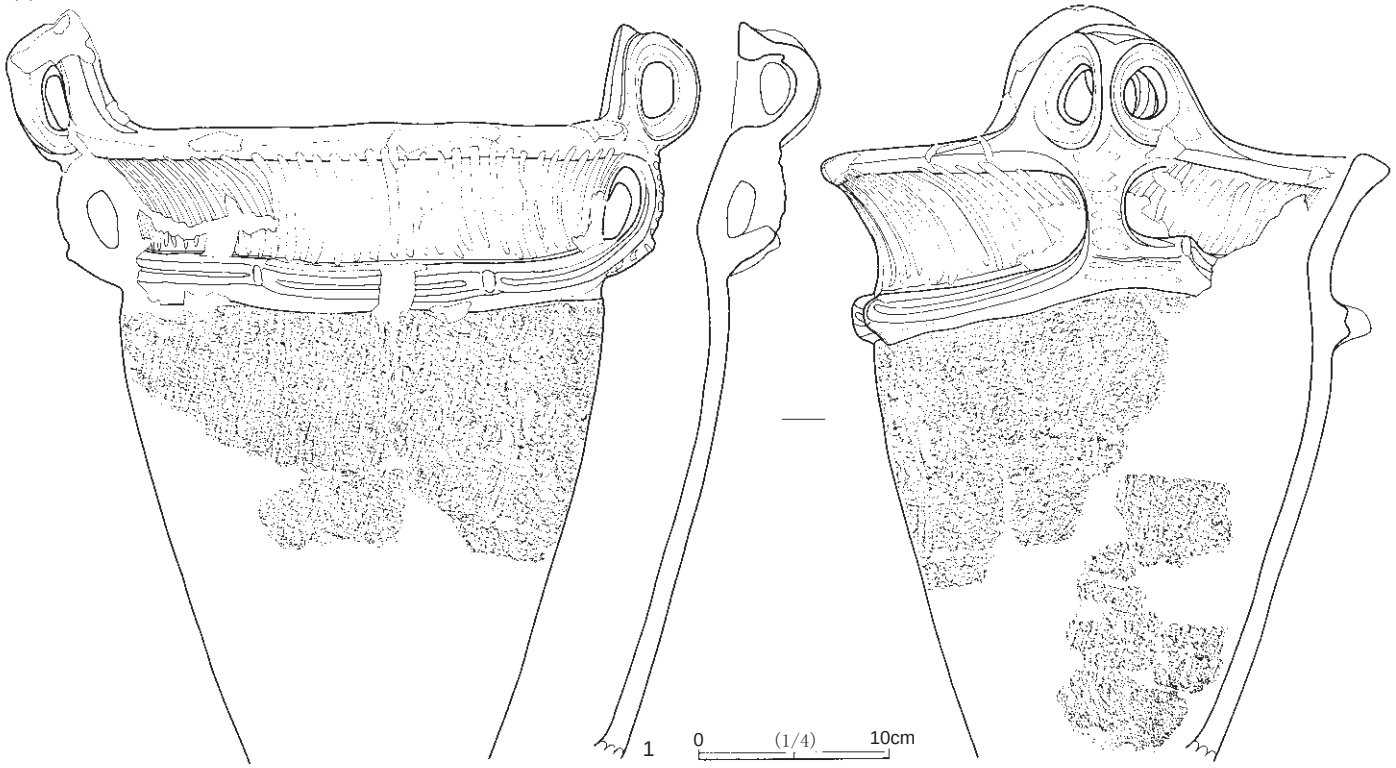
1

(7) SK259



1

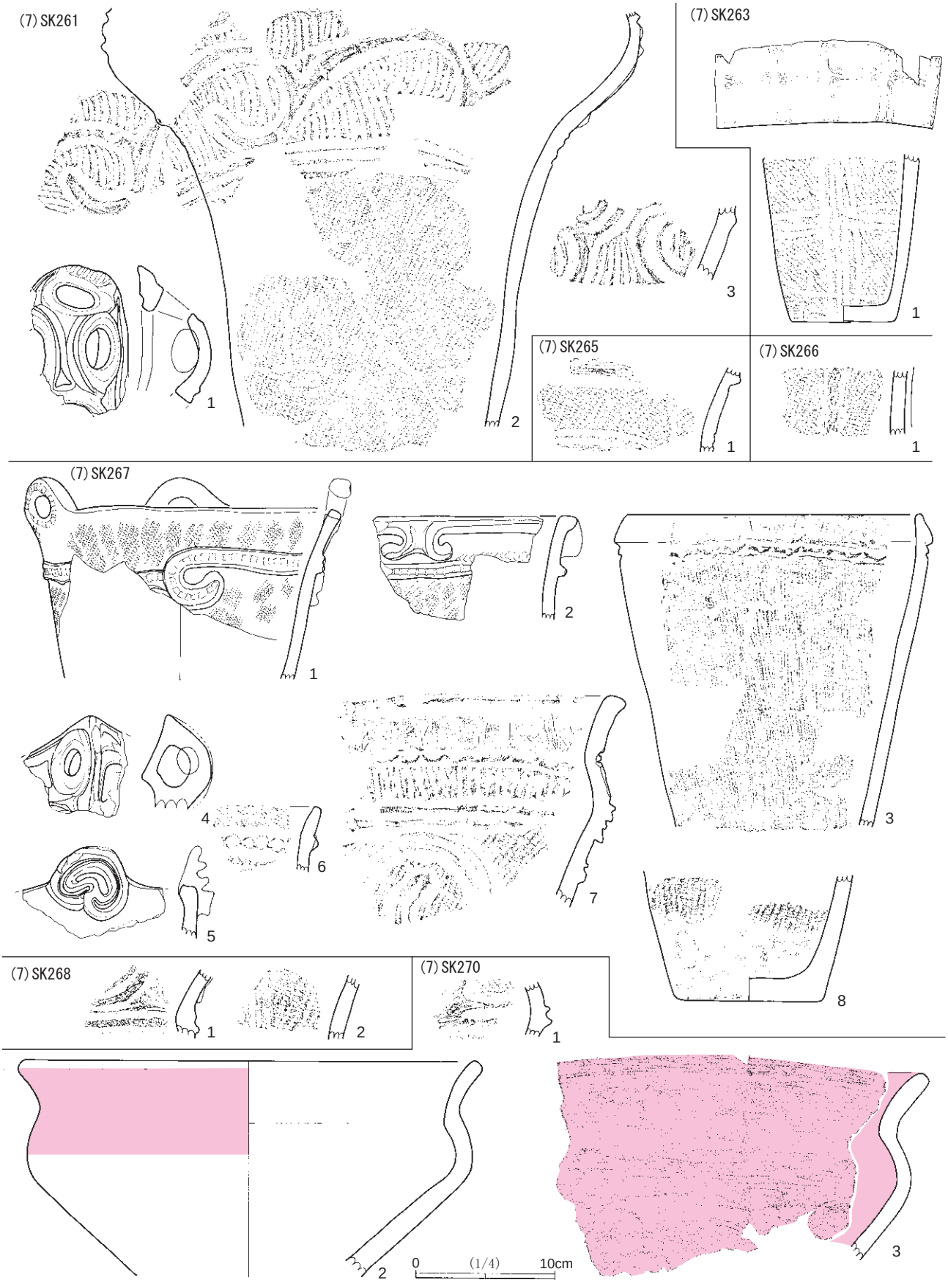
(7) SK260



1

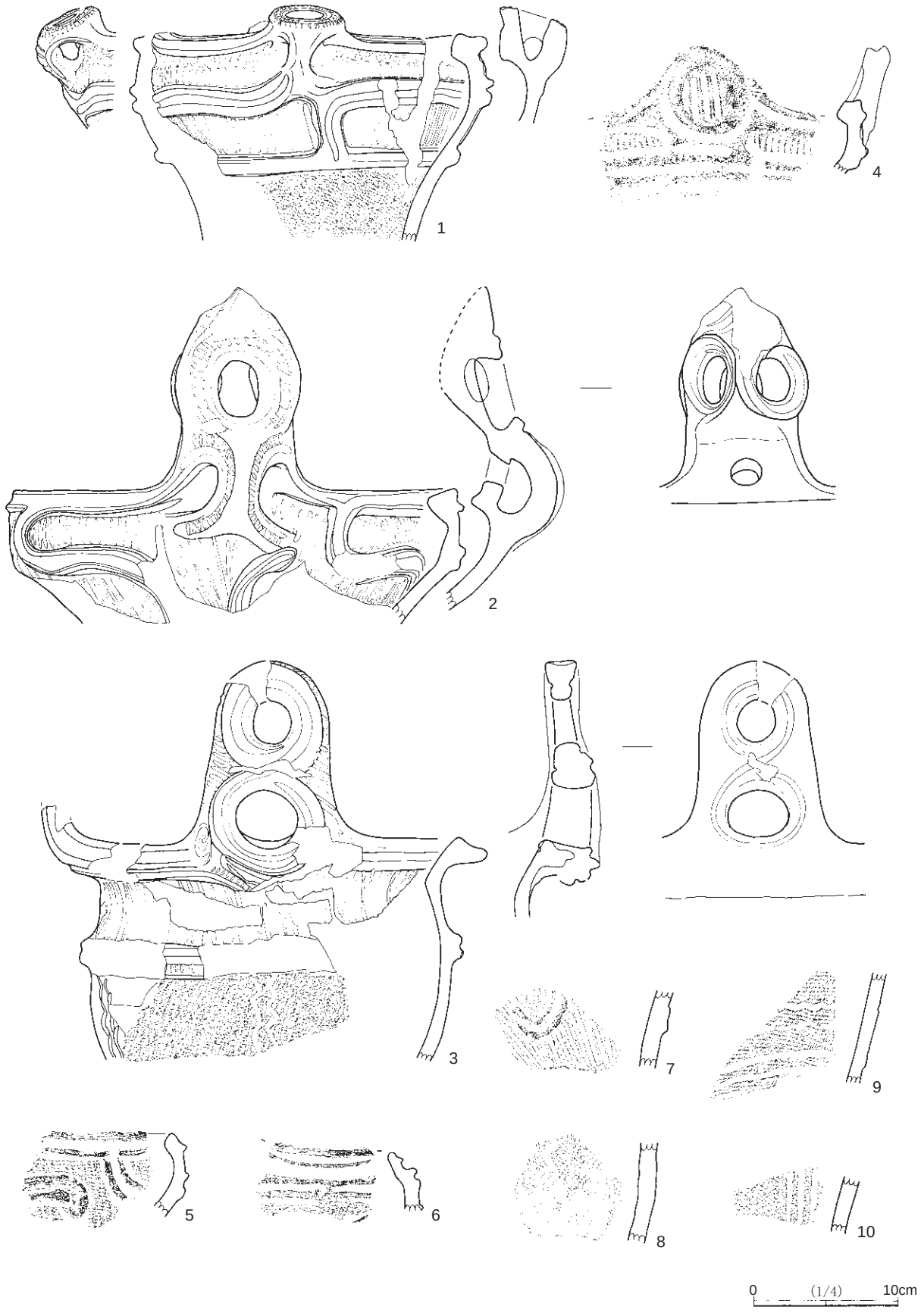
0 (1/4) 10cm

第197図　土坑等出土土器（7）

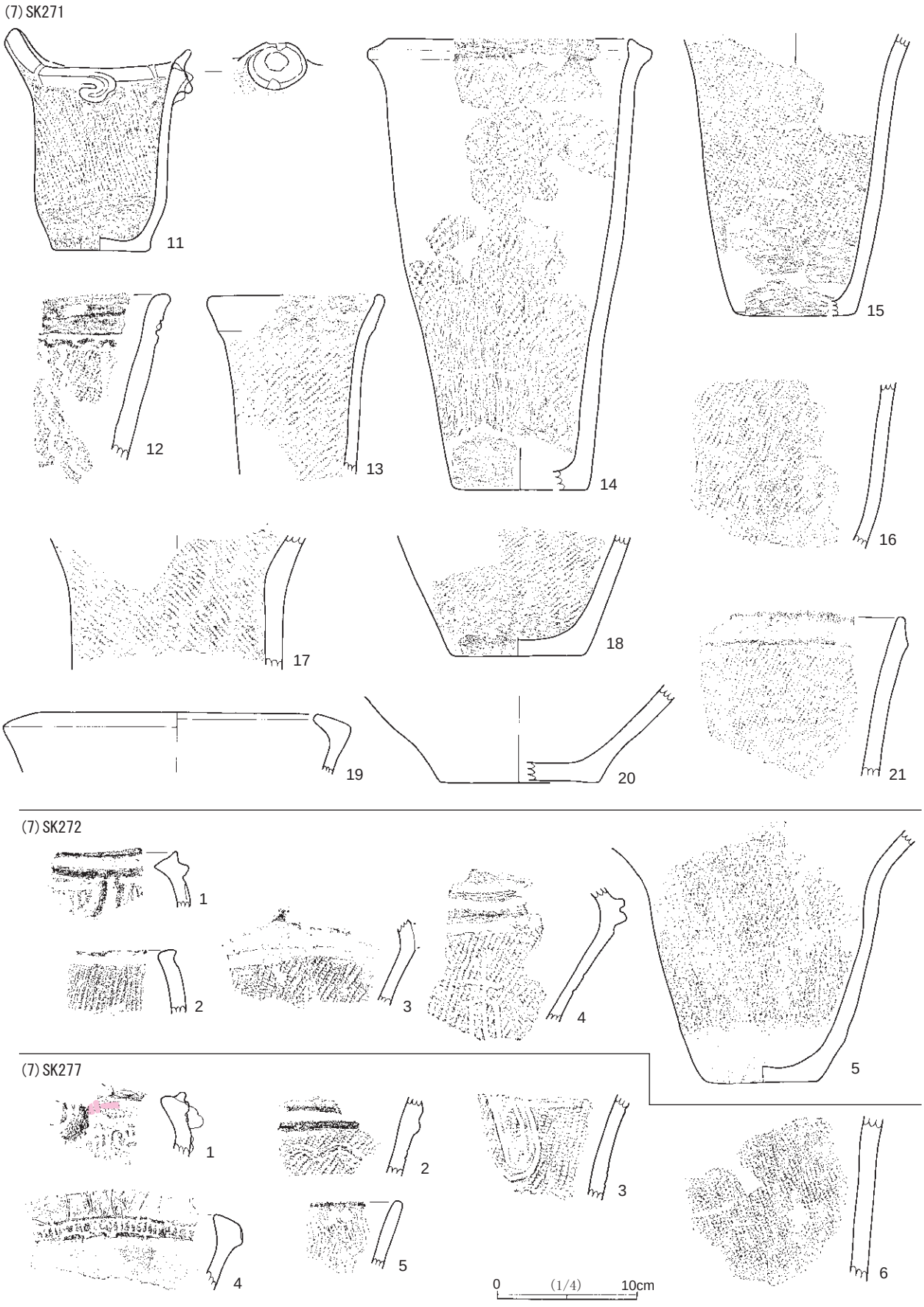


第198図　土坑等出土土器（8）

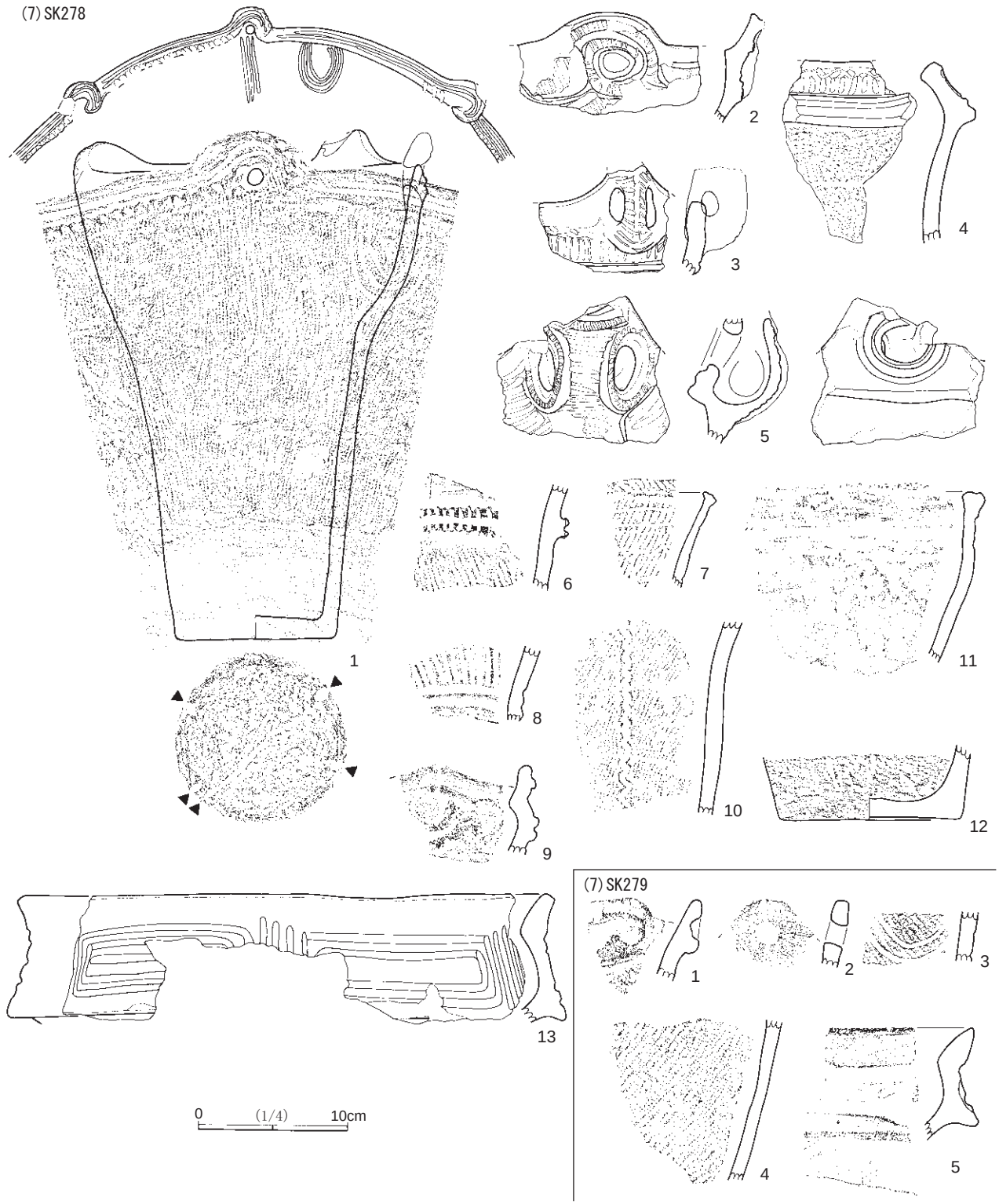
(7)SK271



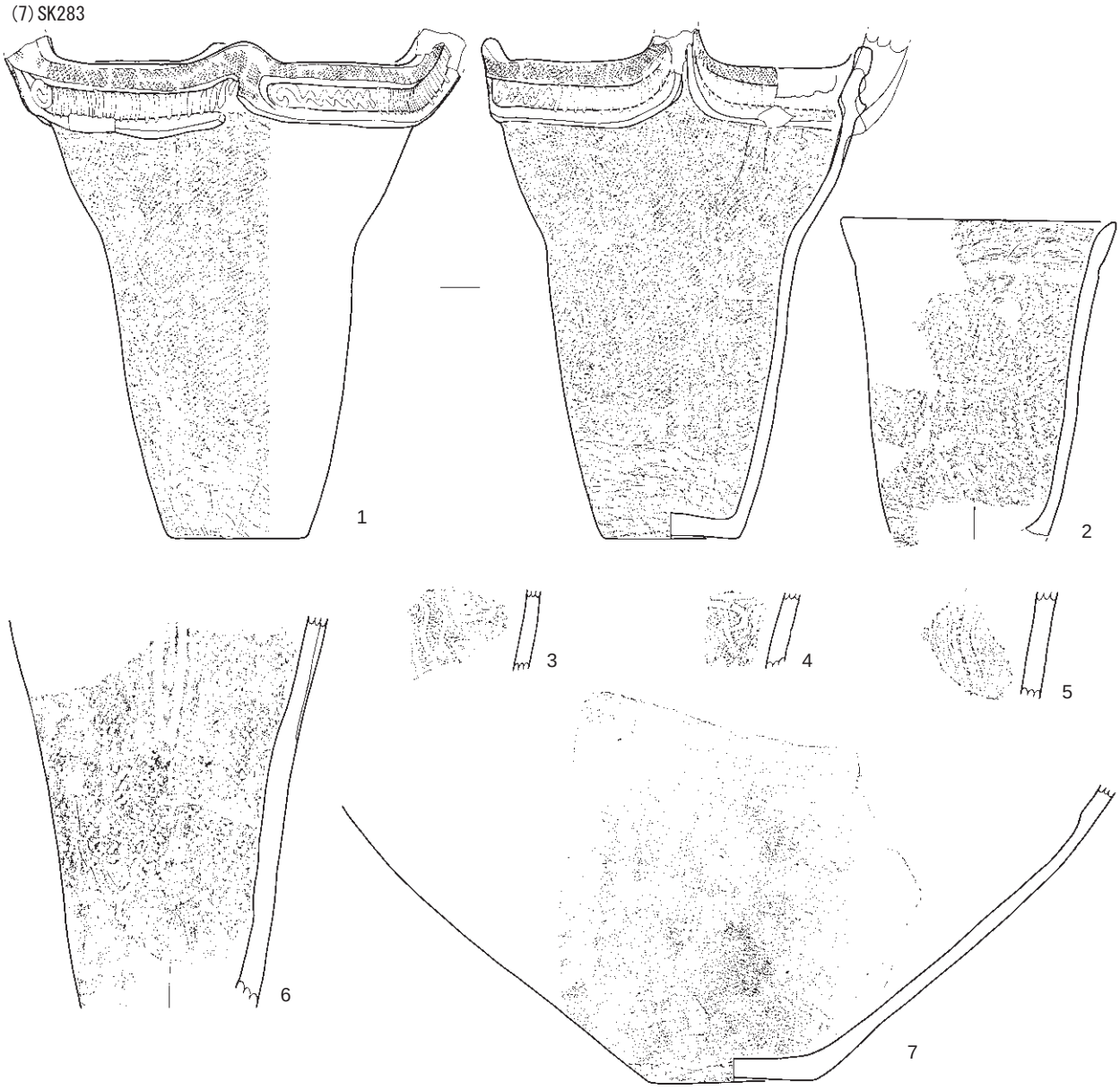
第199図　土坑等出土土器（9）



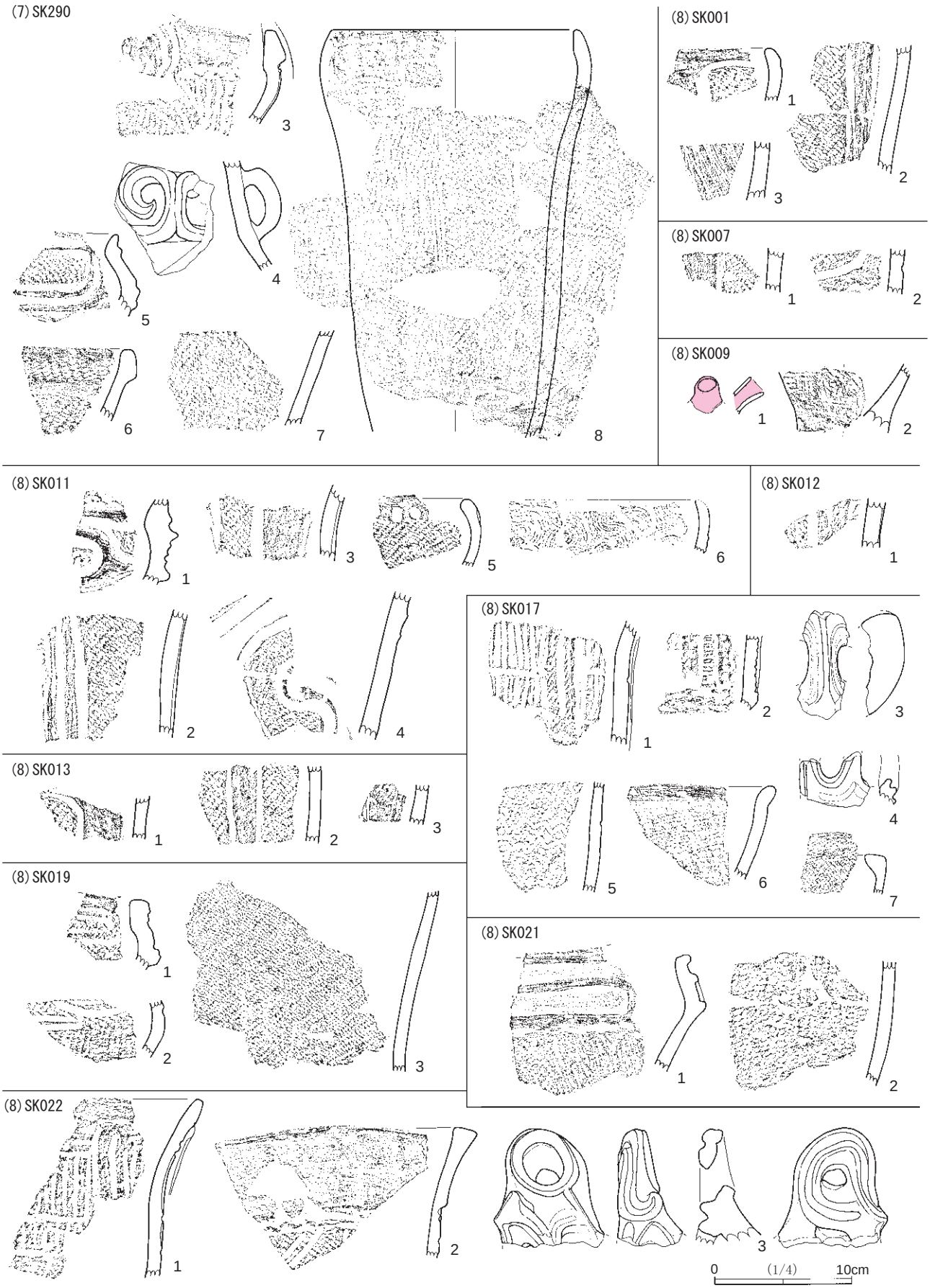
第200図　土坑等出土土器（10）



第201図　土坑等出土土器（11）

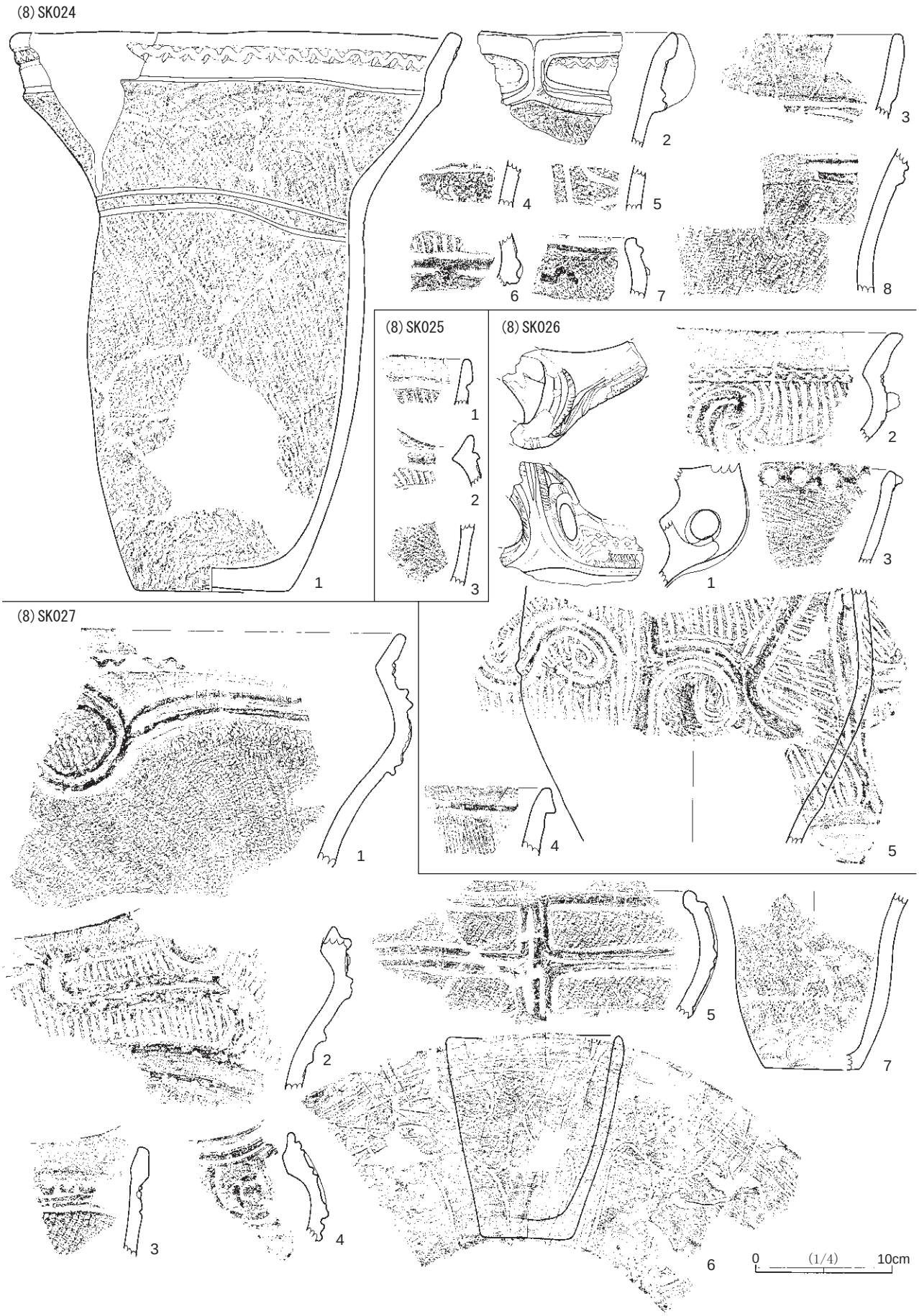


第202図　土坑等出土土器（12）

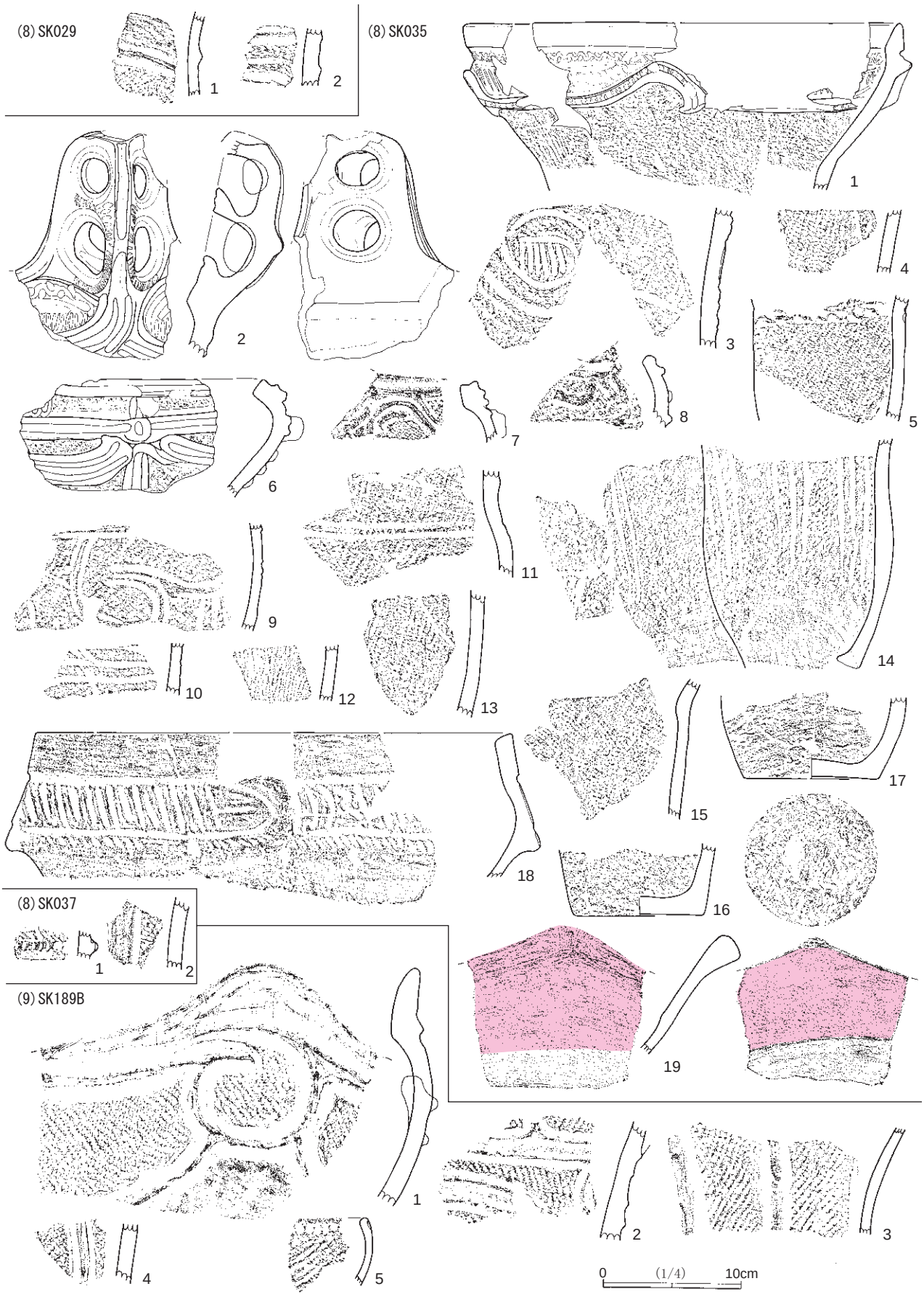


第203図　土坑等出土土器（13）

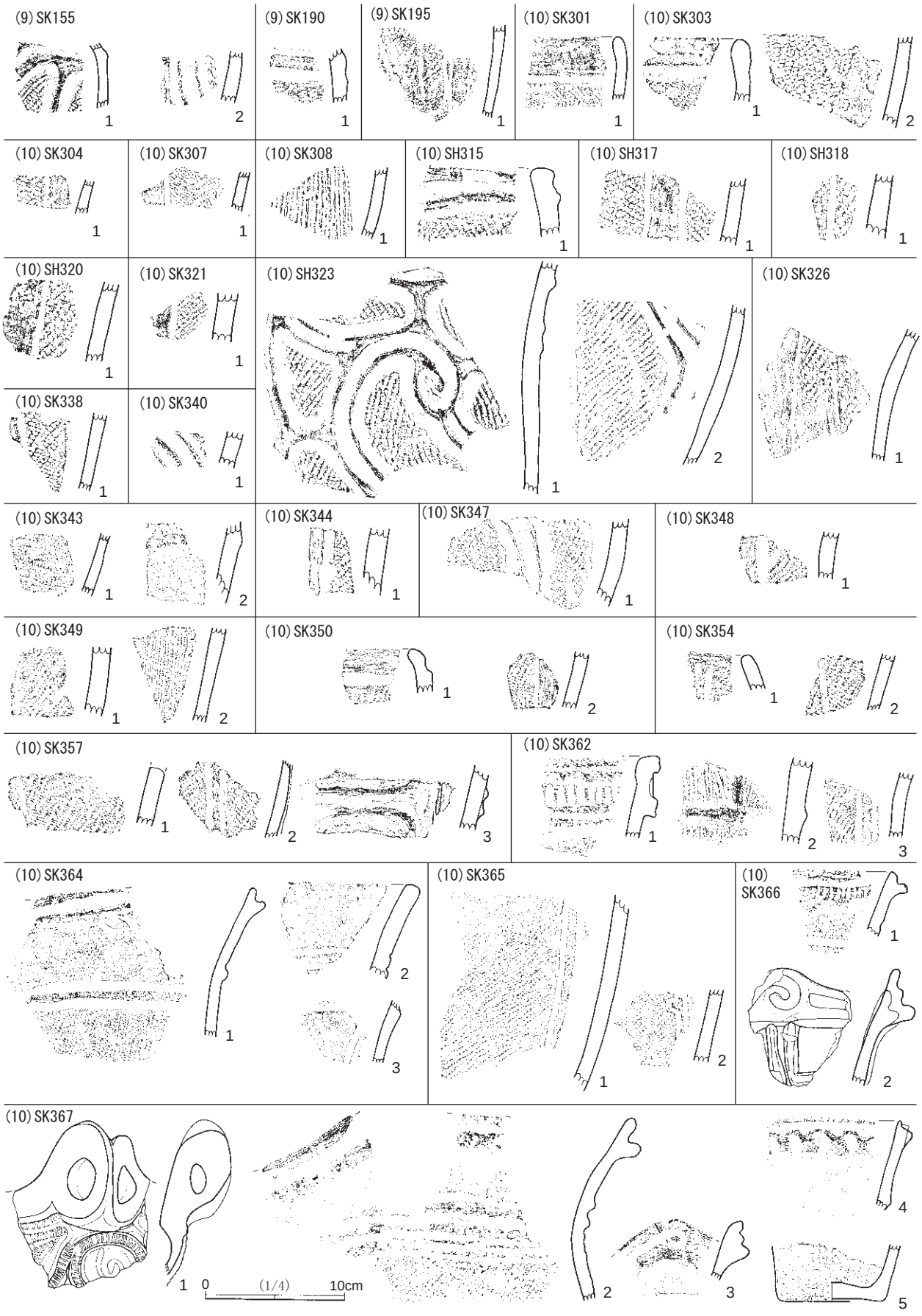
第204図　土坑等出土土器（14）



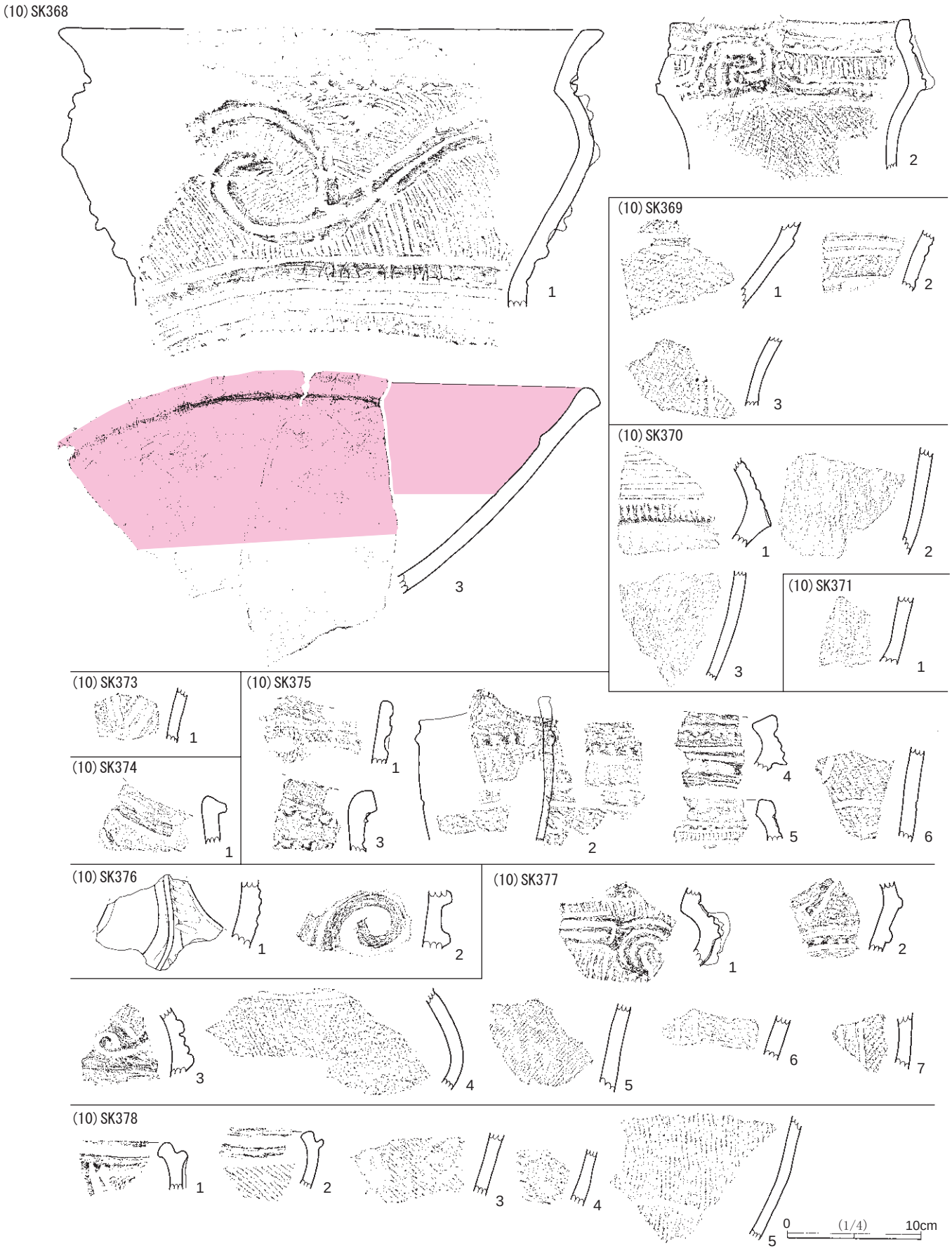
第205図　土坑等出土土器（15）



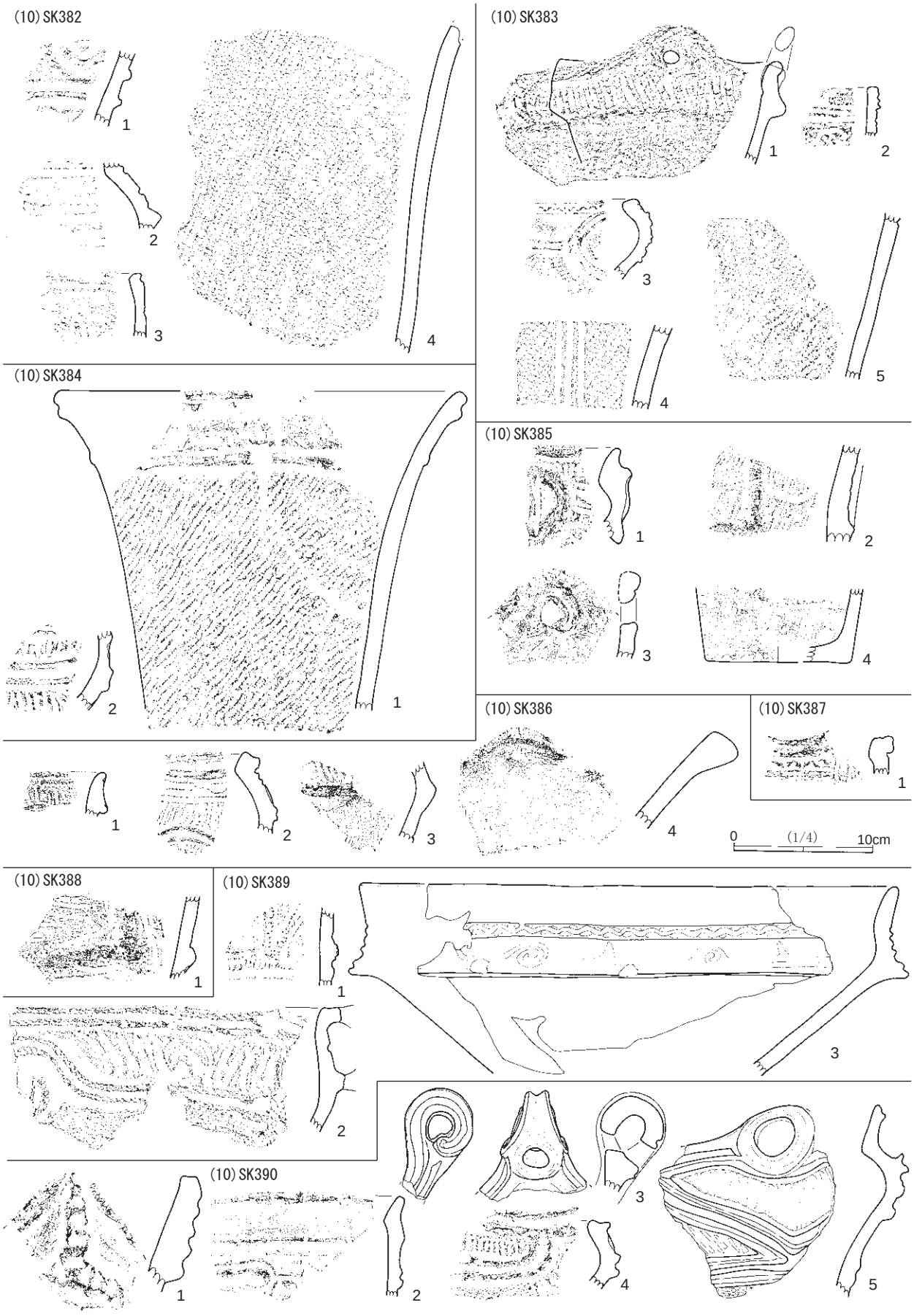
第206図　土坑等出土土器（16）



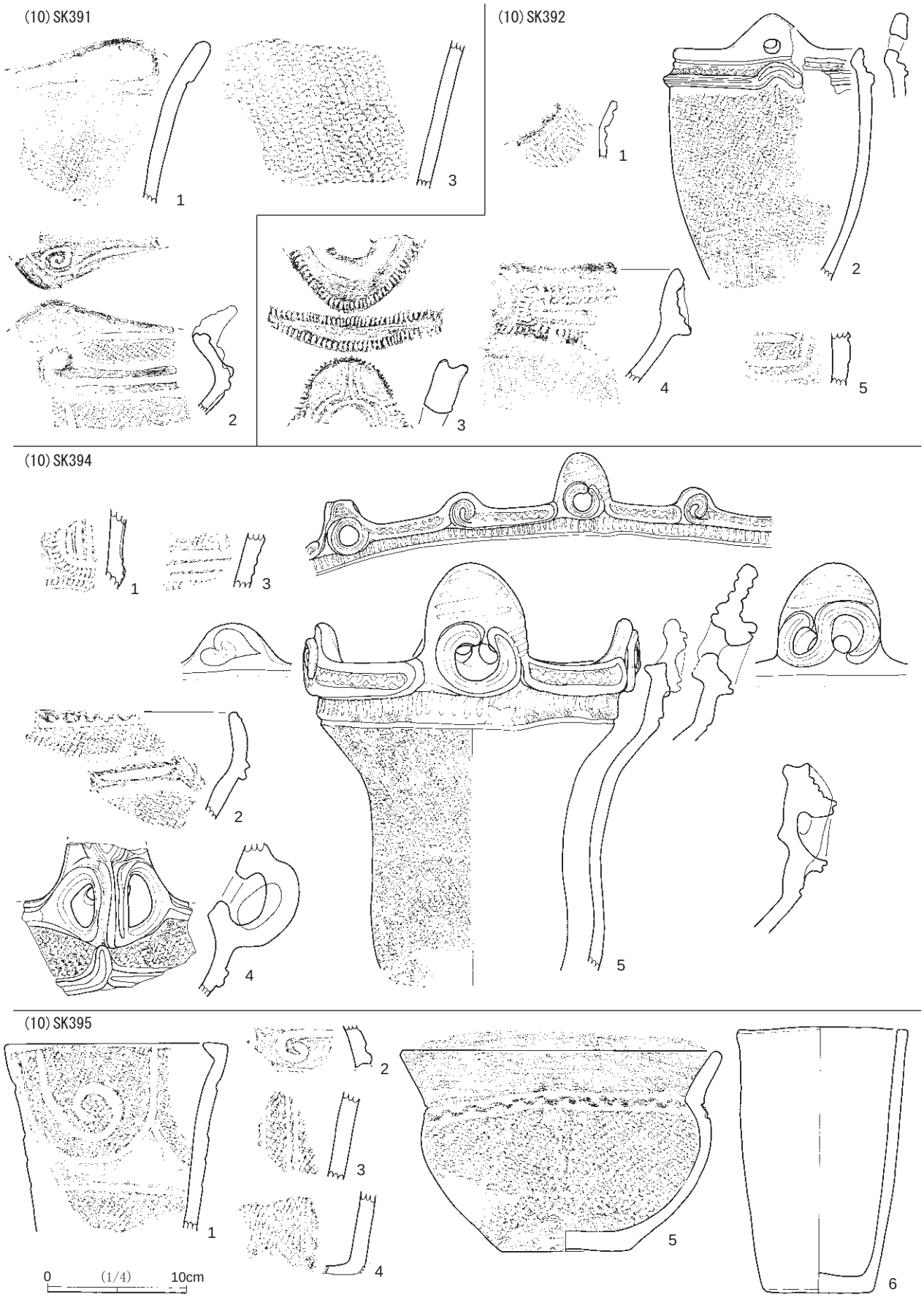
第207図　土坑等出土土器（17）



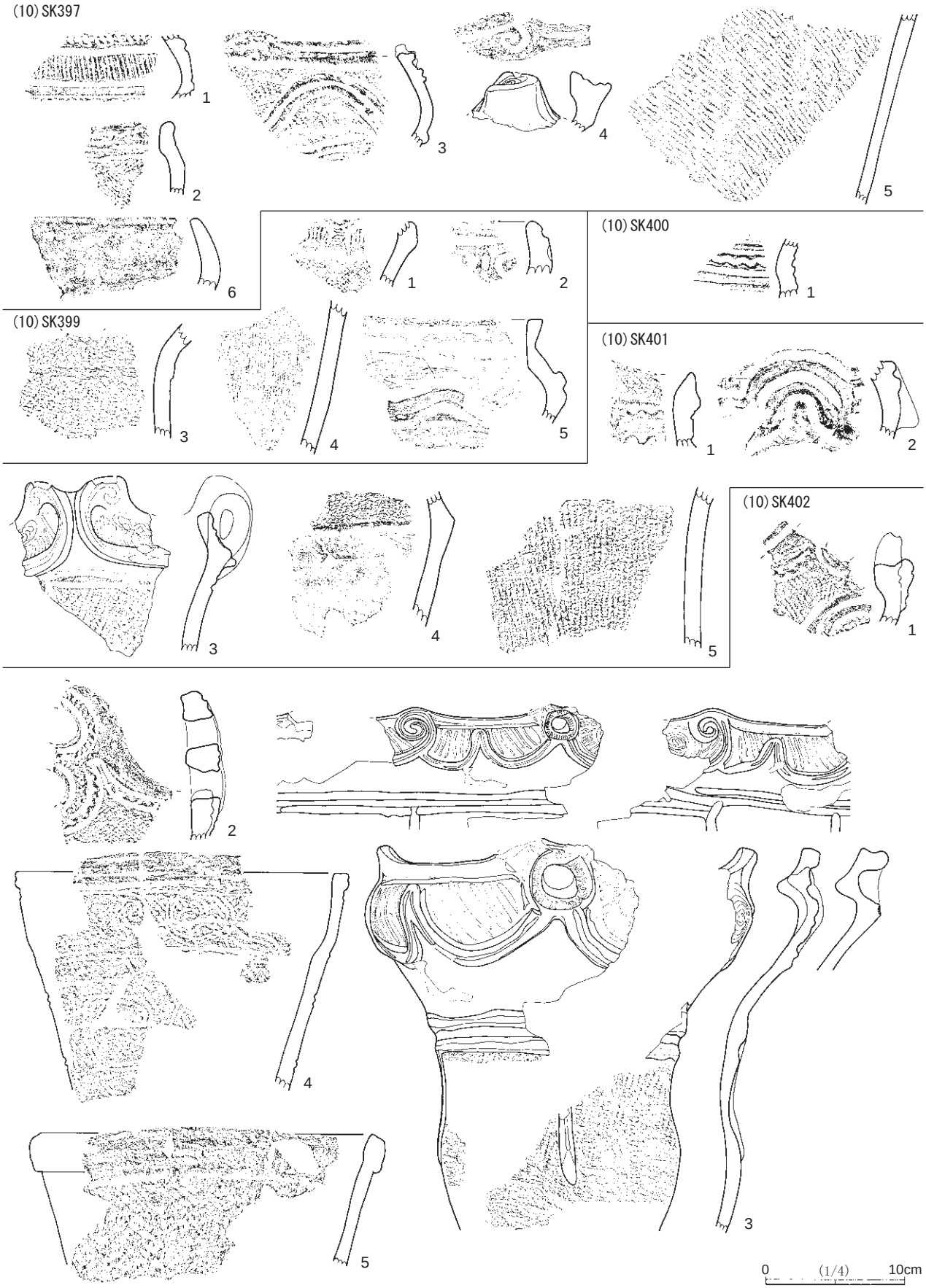
第208図　土坑等出土土器（18）



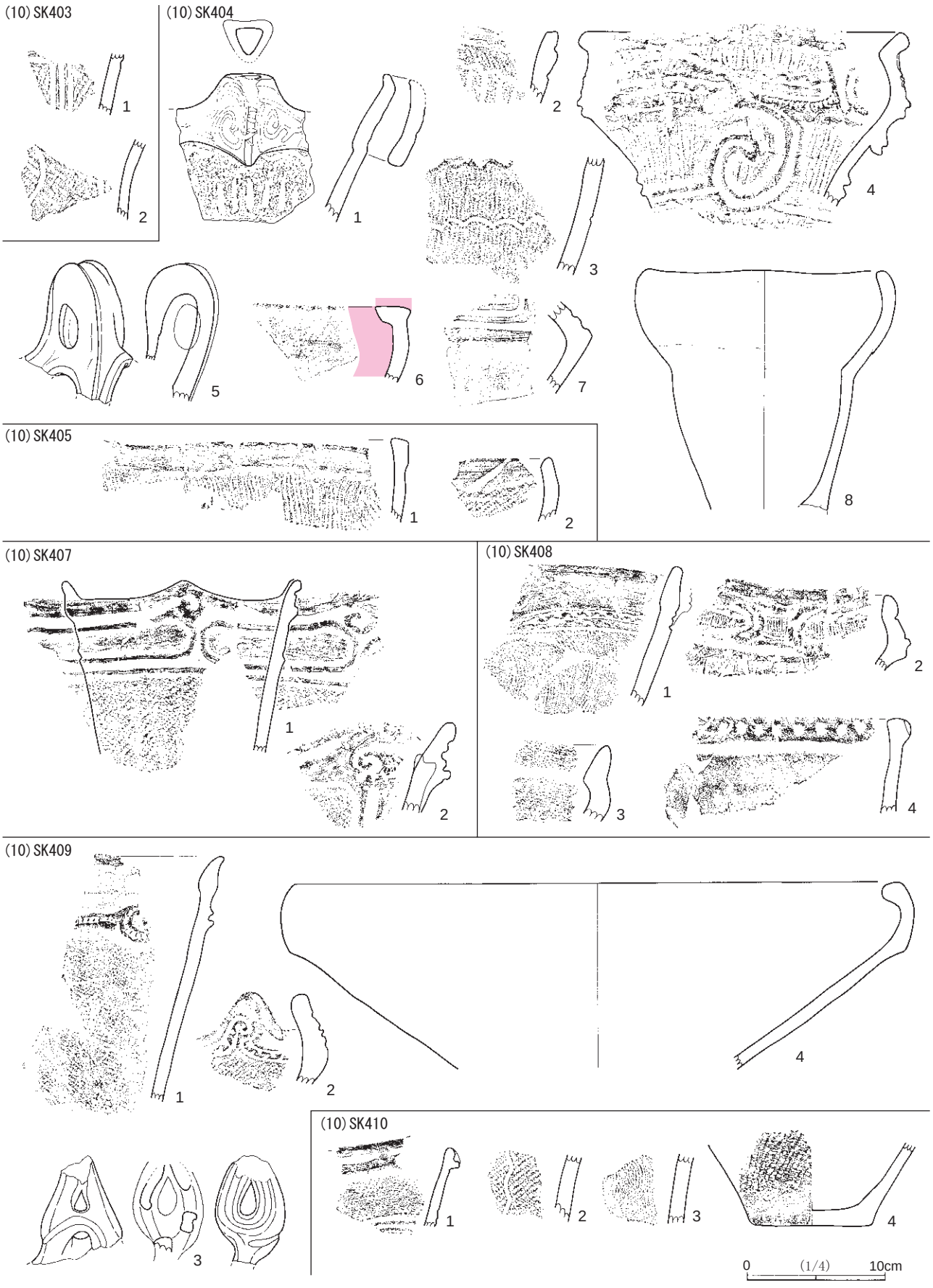
第209図　土坑等出土土器（19）



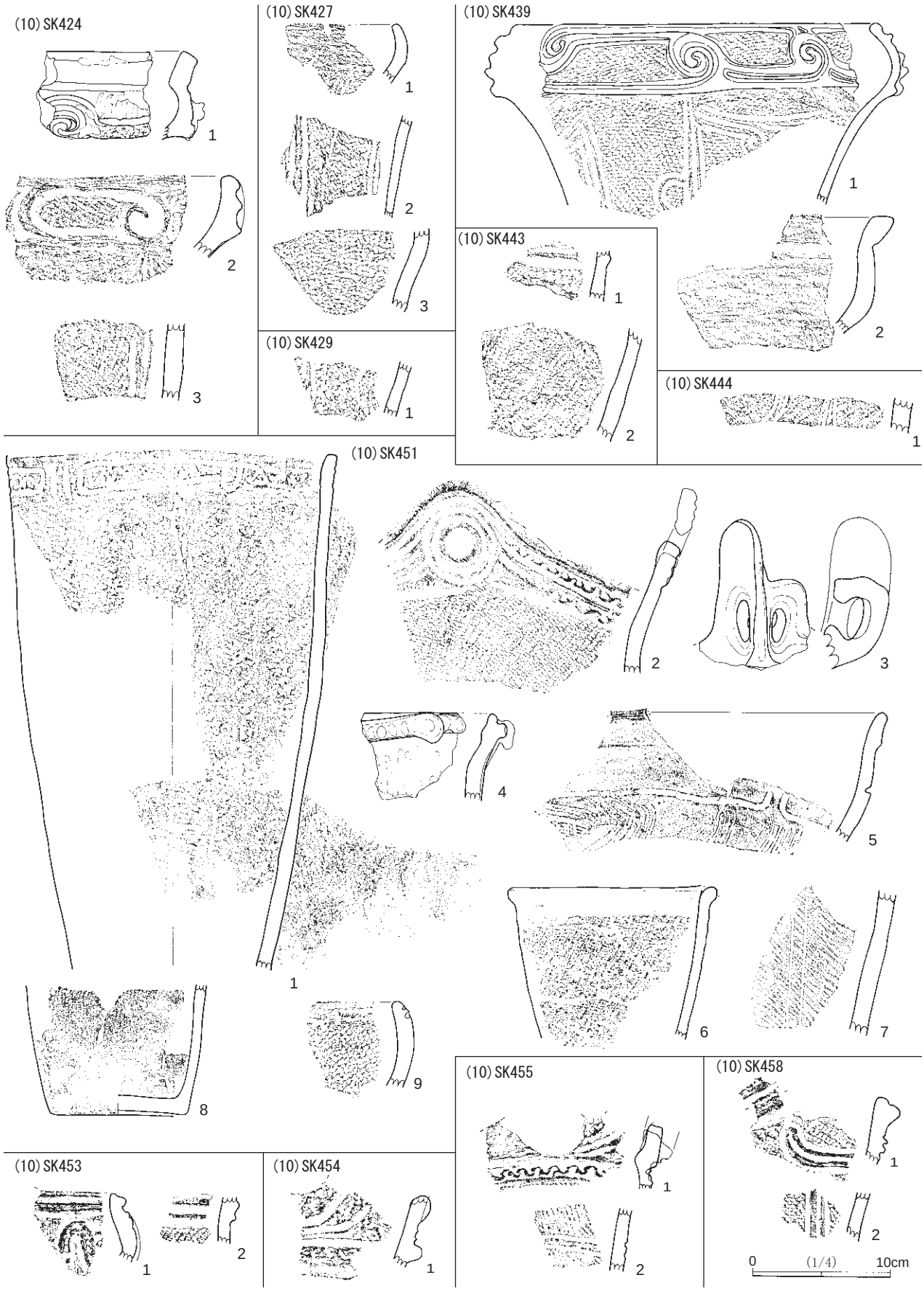
第210図　土坑等出土土器（20）



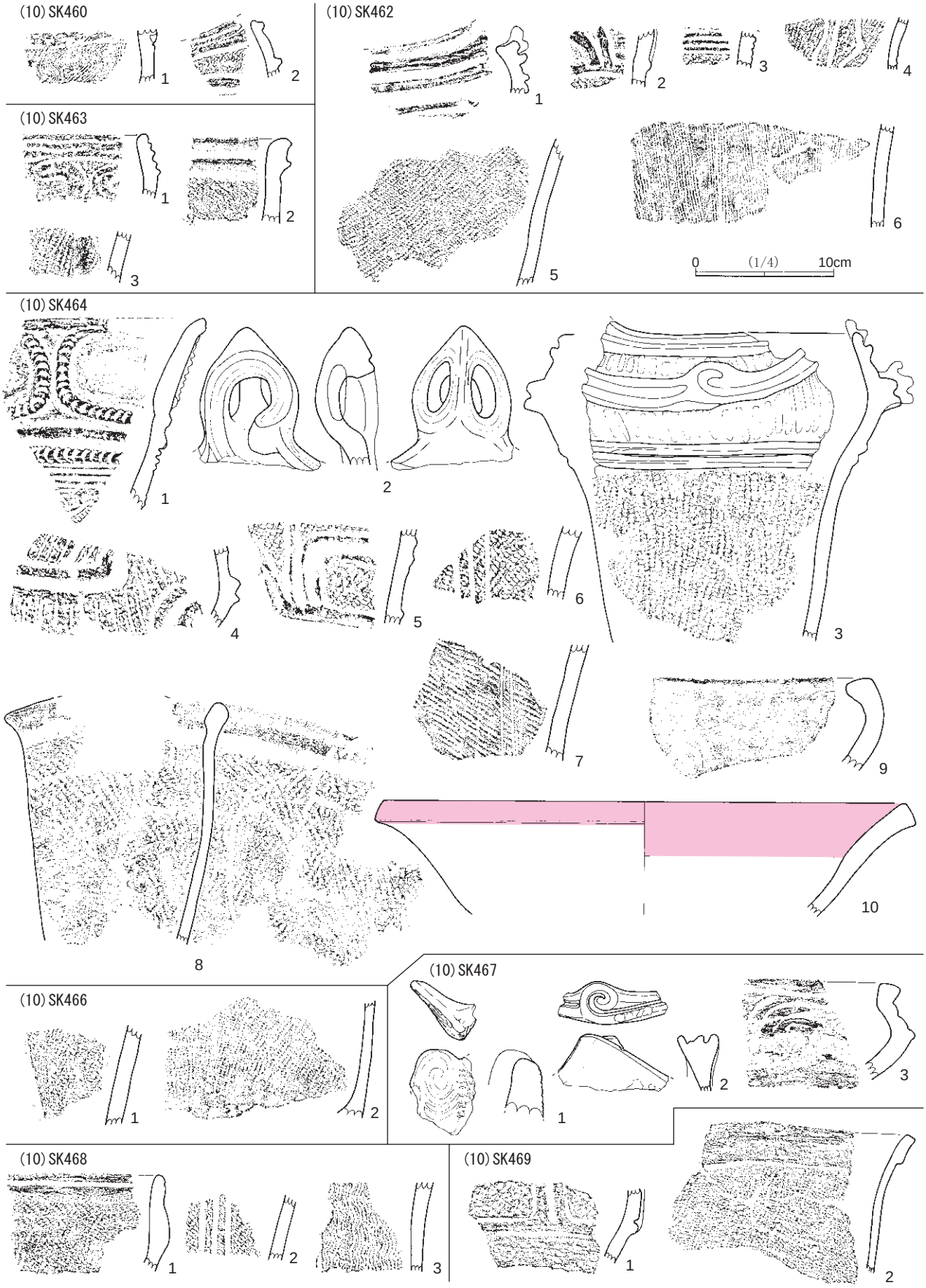
第211図　土坑等出土土器（21）



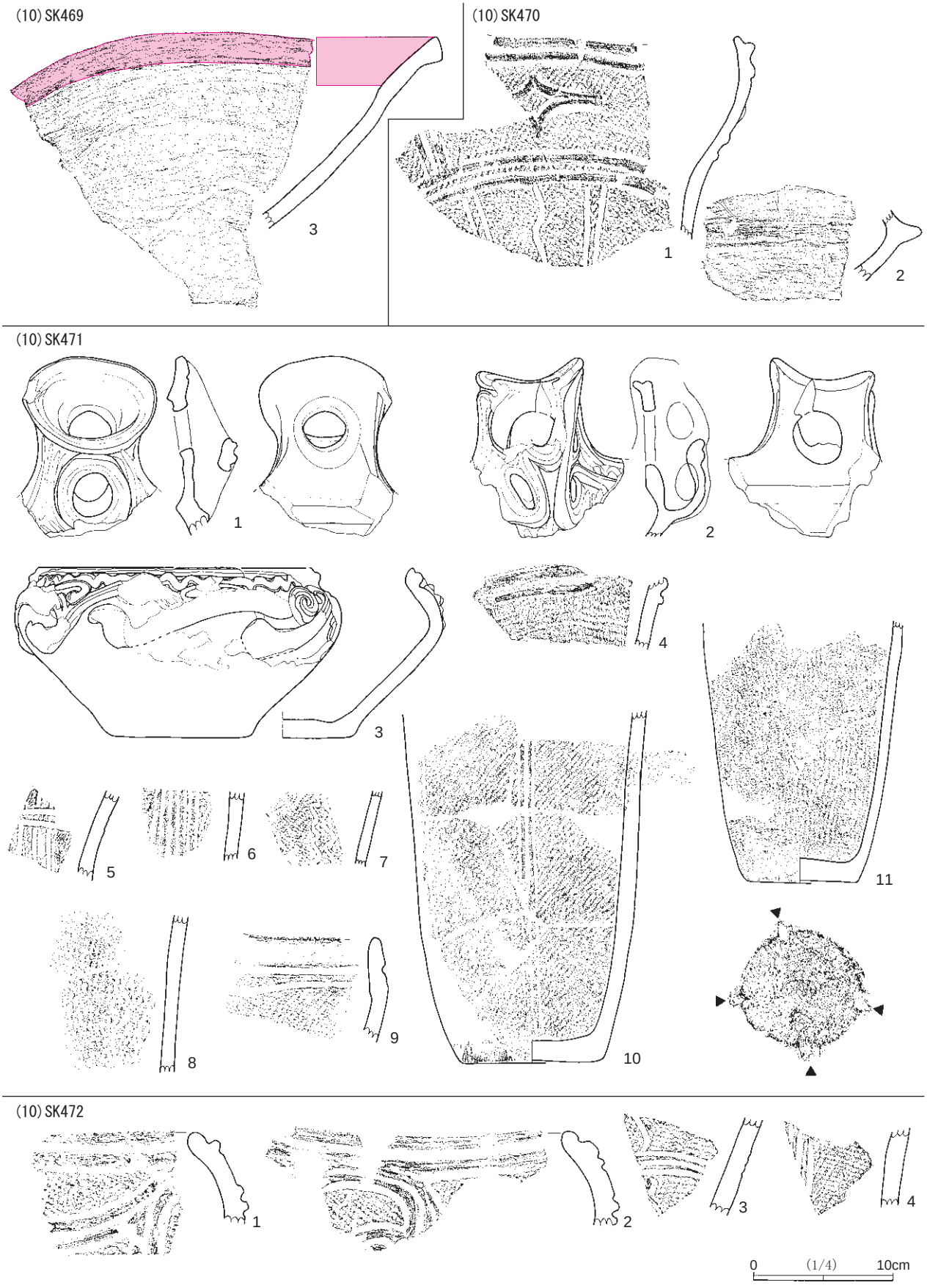
第212図　土坑等出土土器（22）



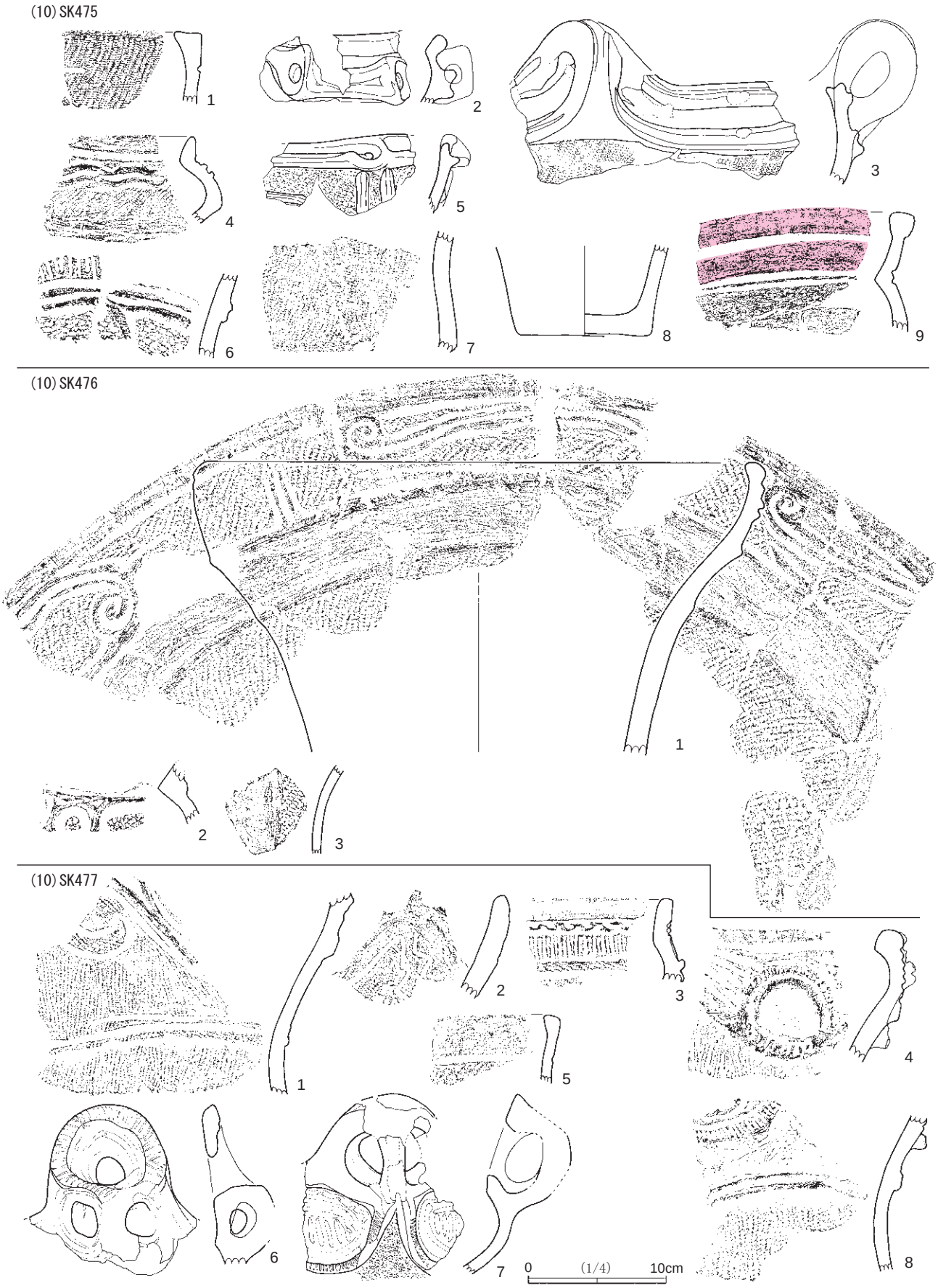
第213図　土坑等出土土器（23）



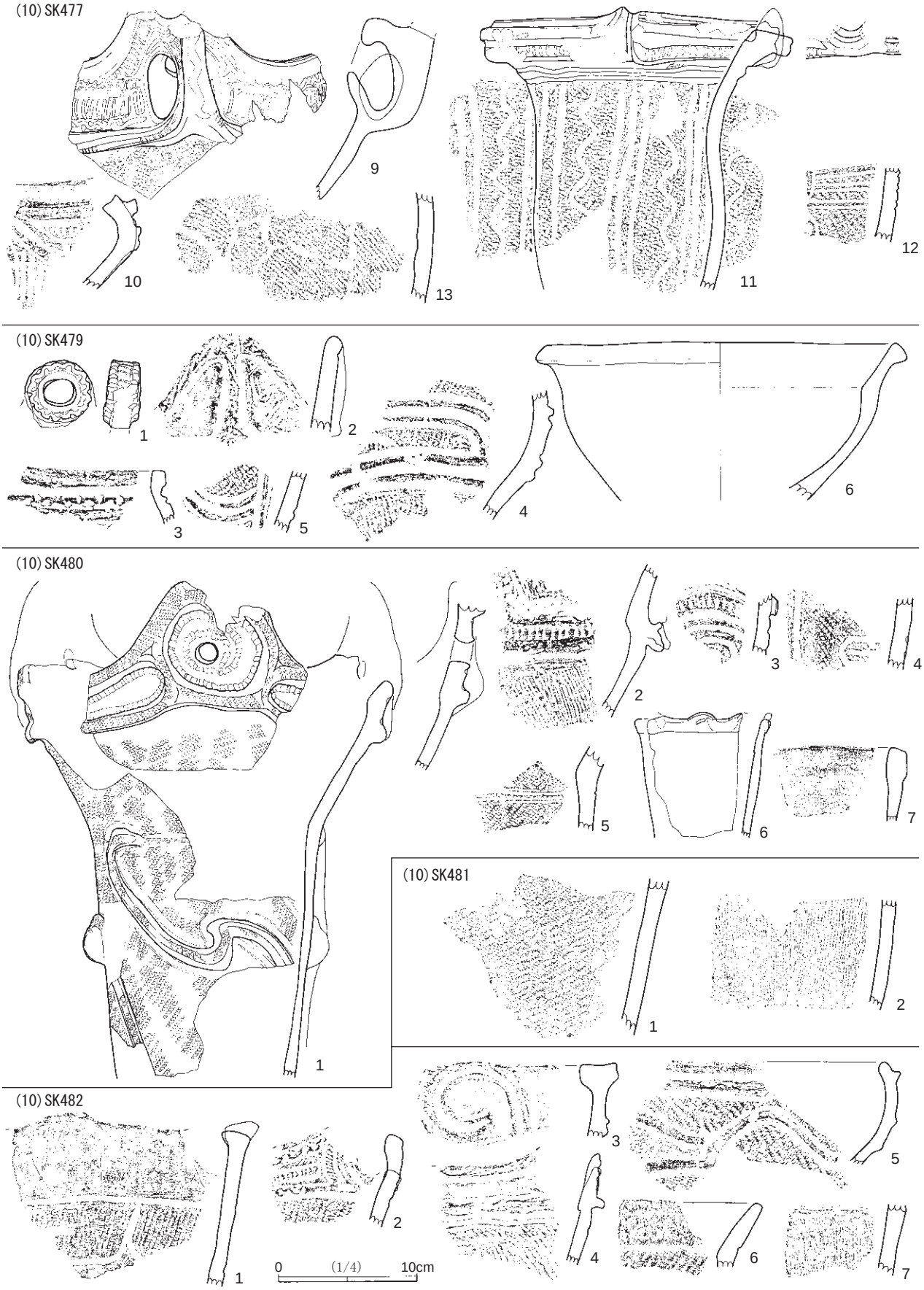
第214図　土坑等出土土器（24）



第215図　土坑等出土土器（25）

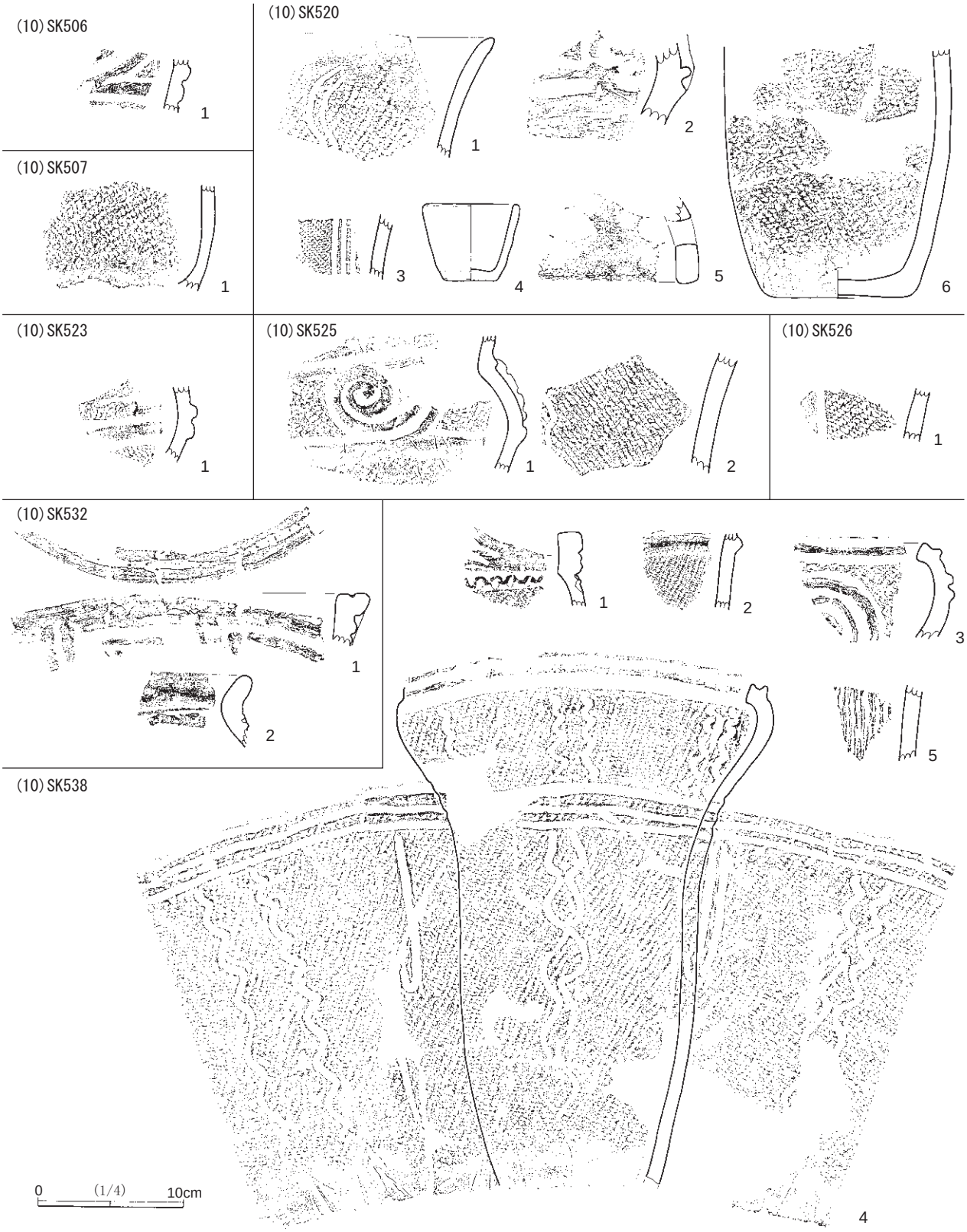


第216図　土坑等出土土器（26）

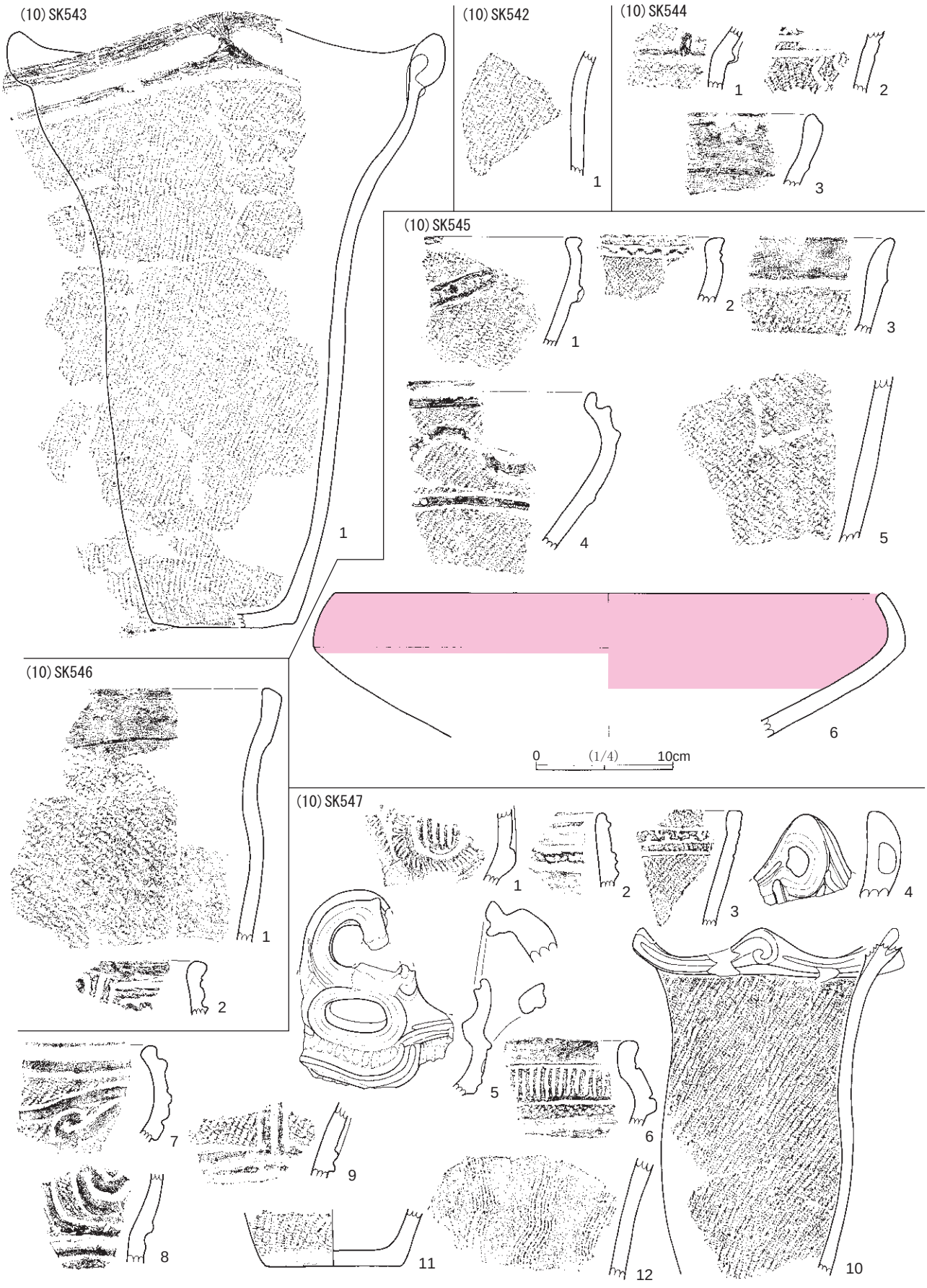


第217図　土坑等出土土器（27）

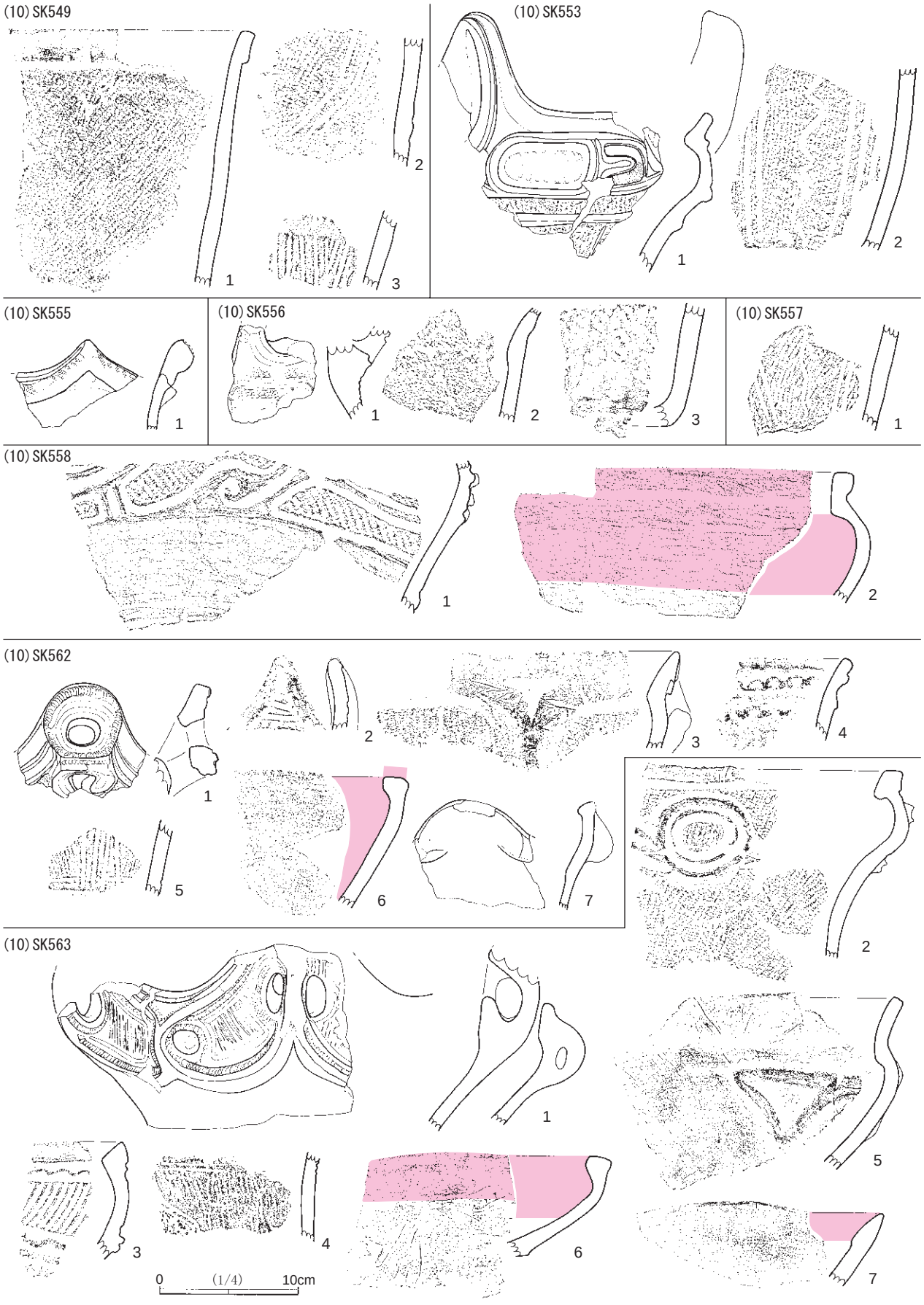
第218図　土坑等出土土器（28）



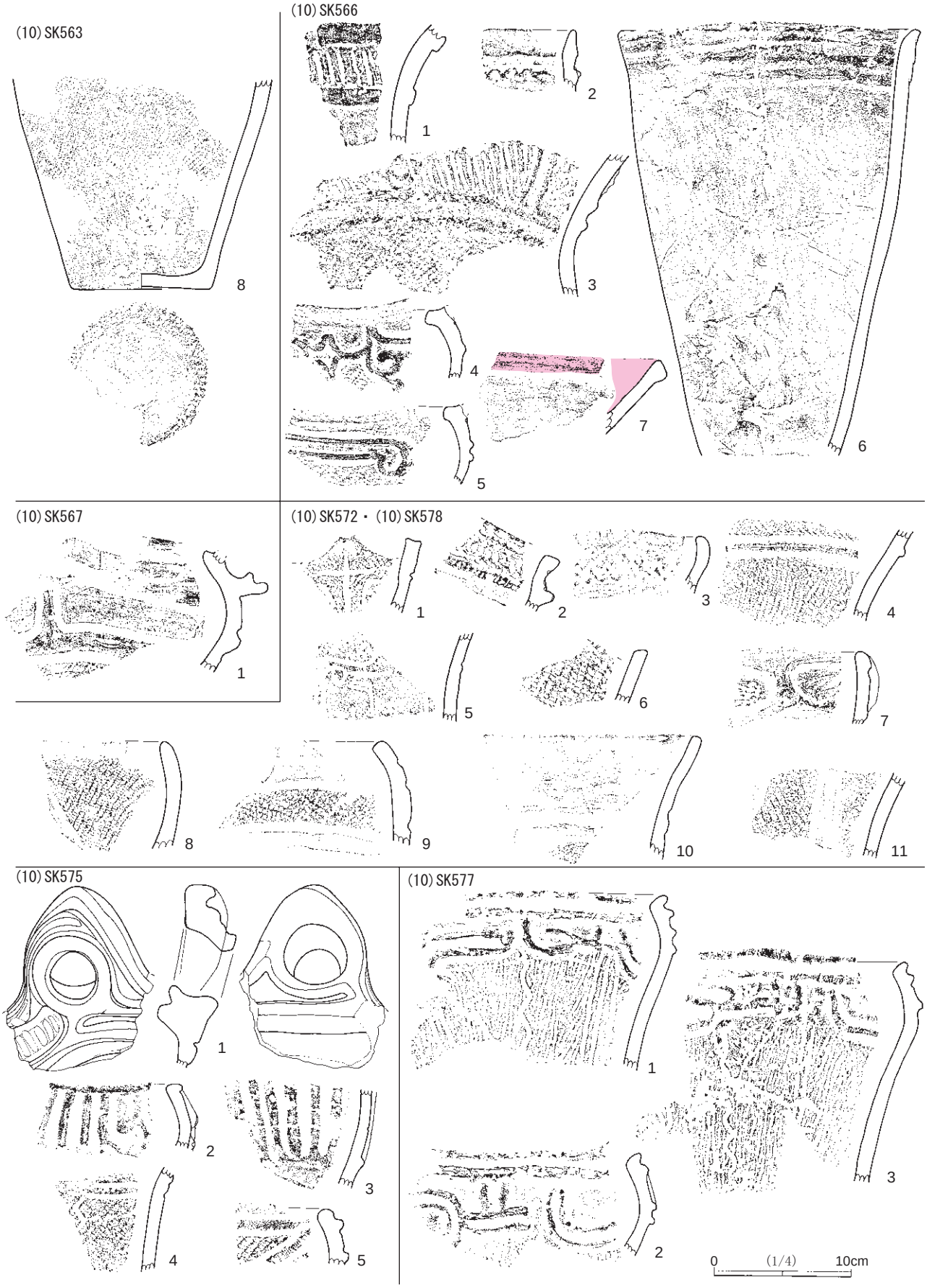
第219図　土坑等出土土器（29）



第220図　土坑等出土土器（30）



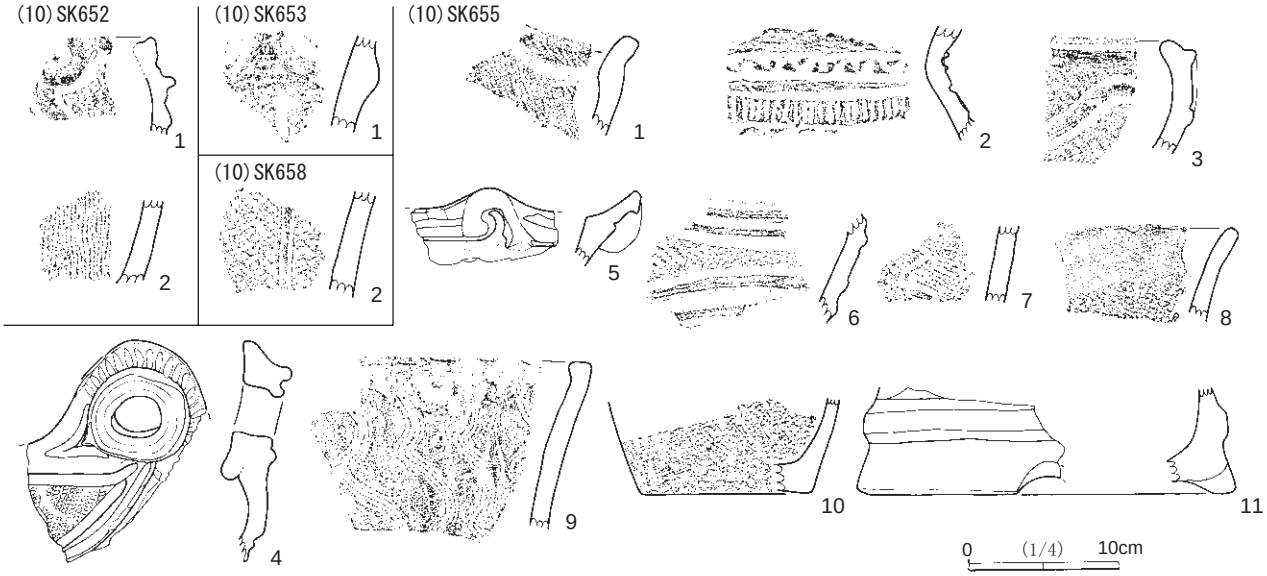
第221図　土坑等出土土器（31）



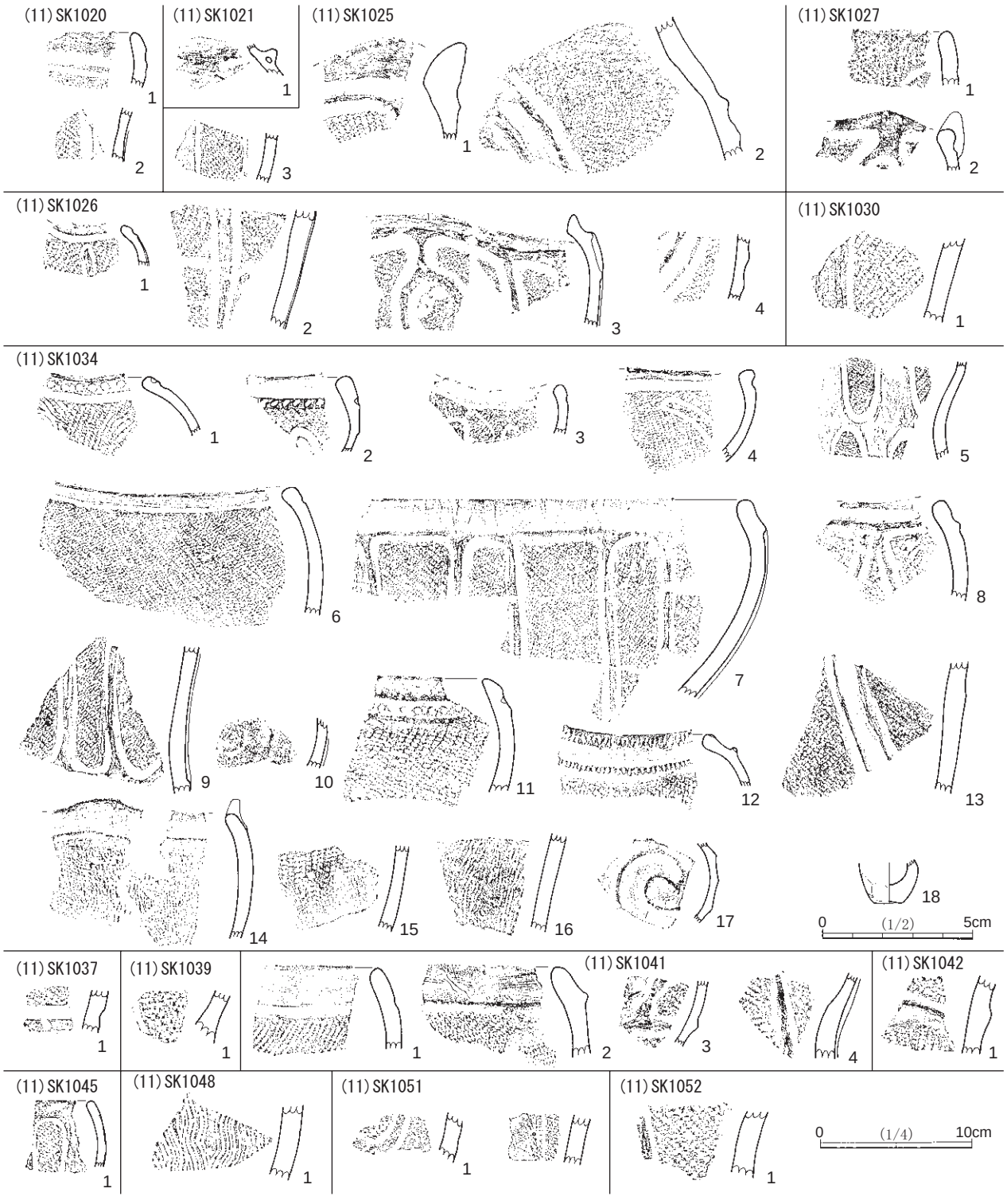
第222図　土坑等出土土器（32）

(10)SK579

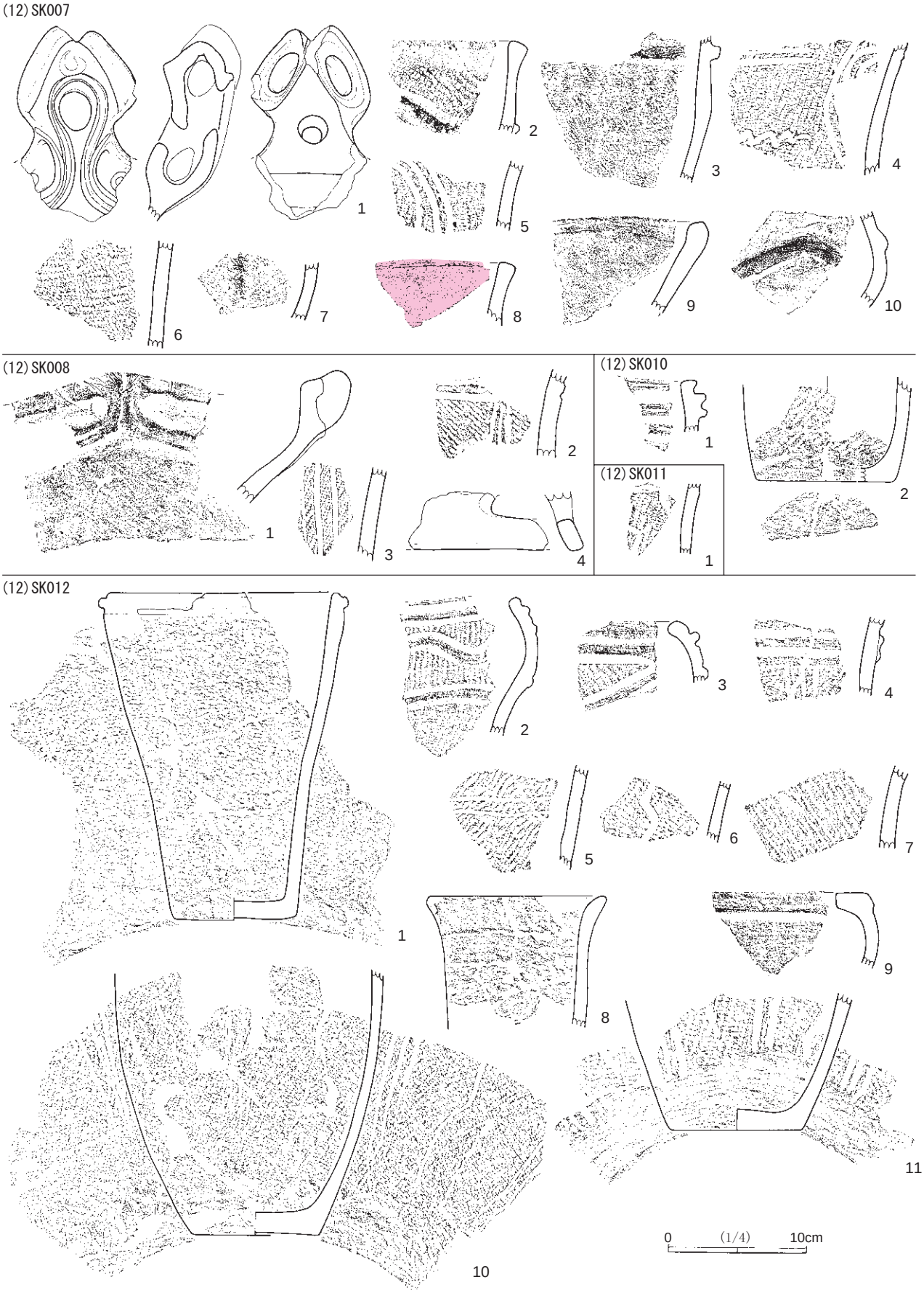
第223図　土坑等出土土器（33）



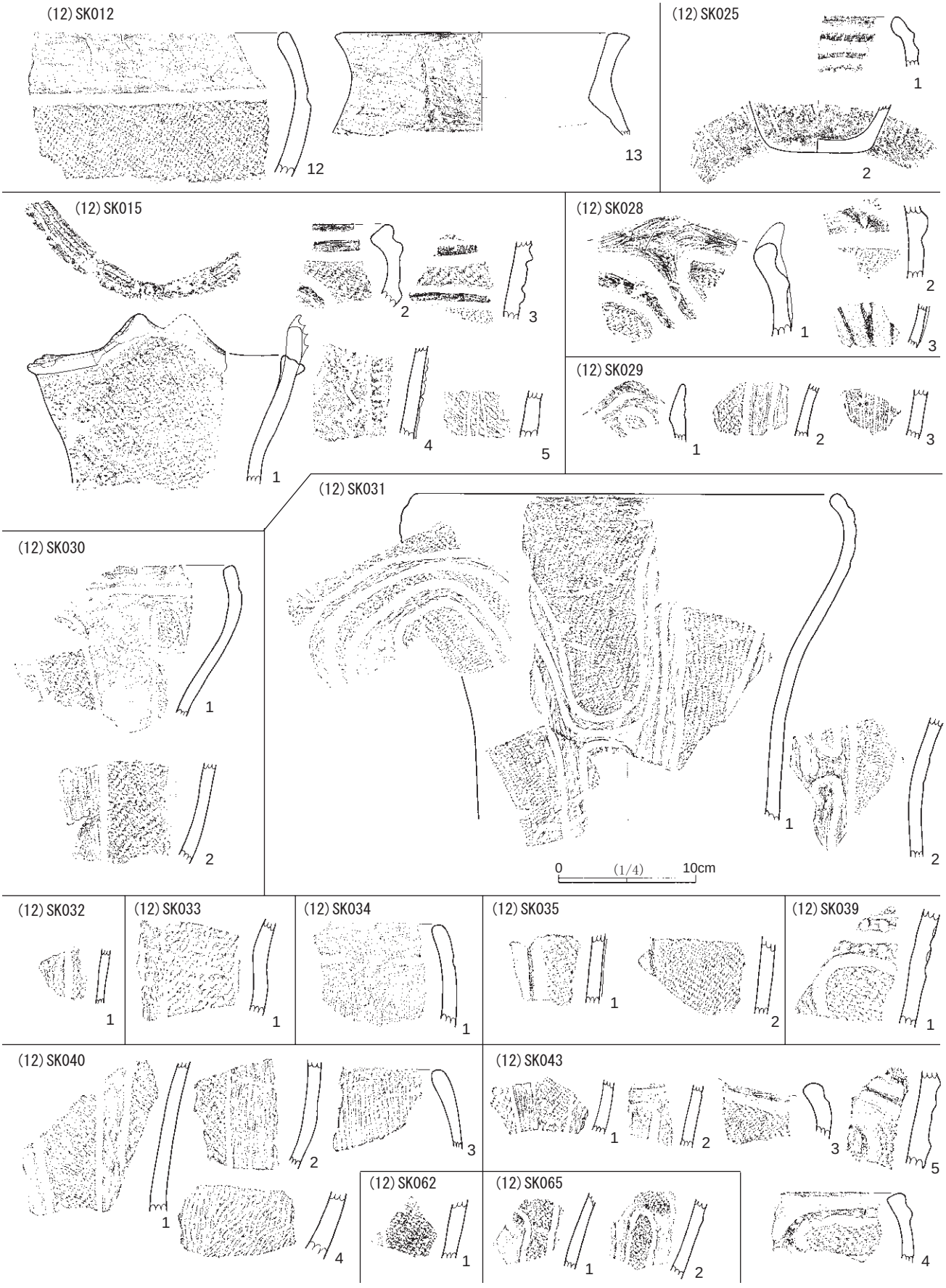
第224図　土坑等出土土器（34）



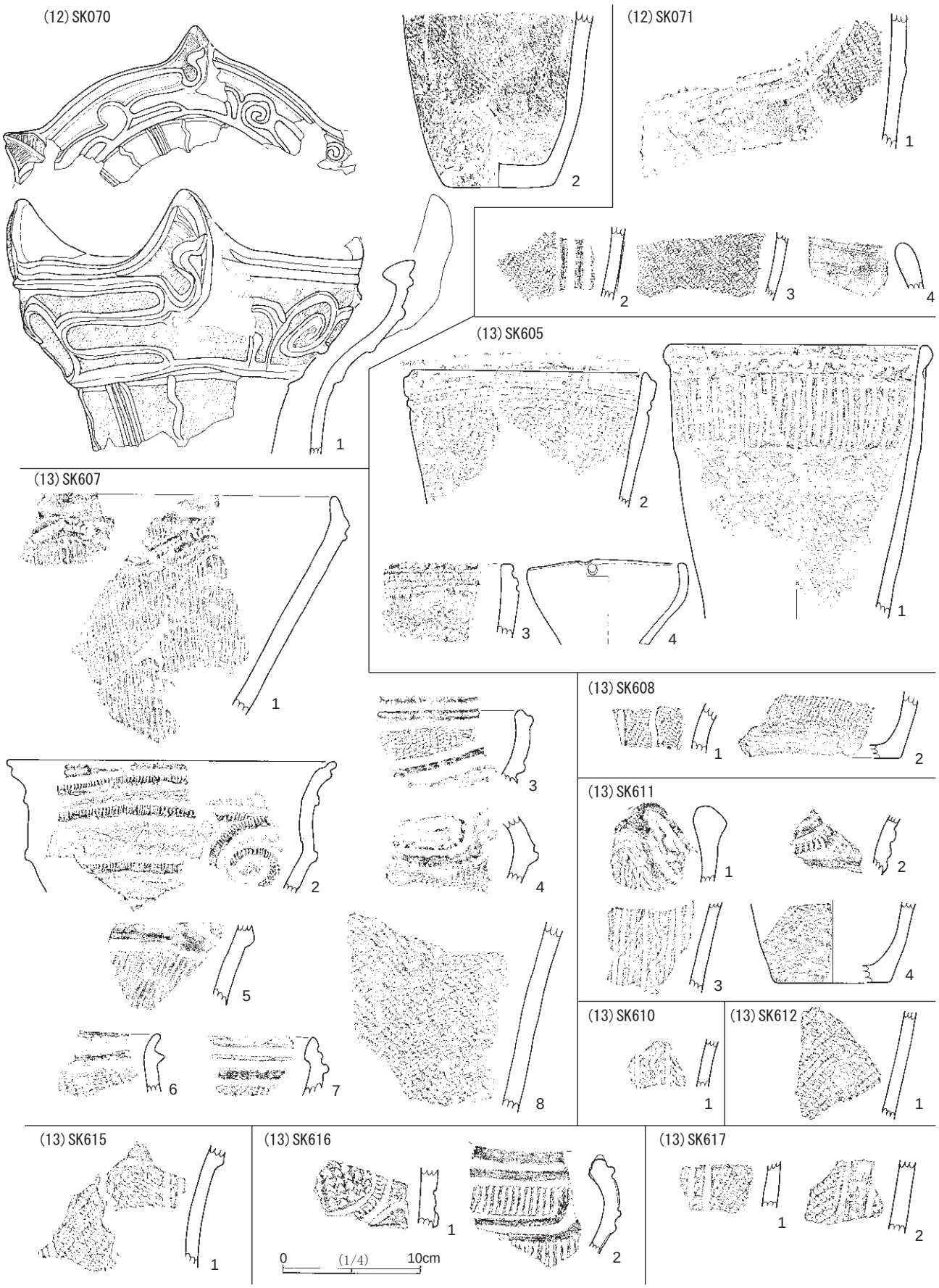
第225図　土坑等出土土器（35）



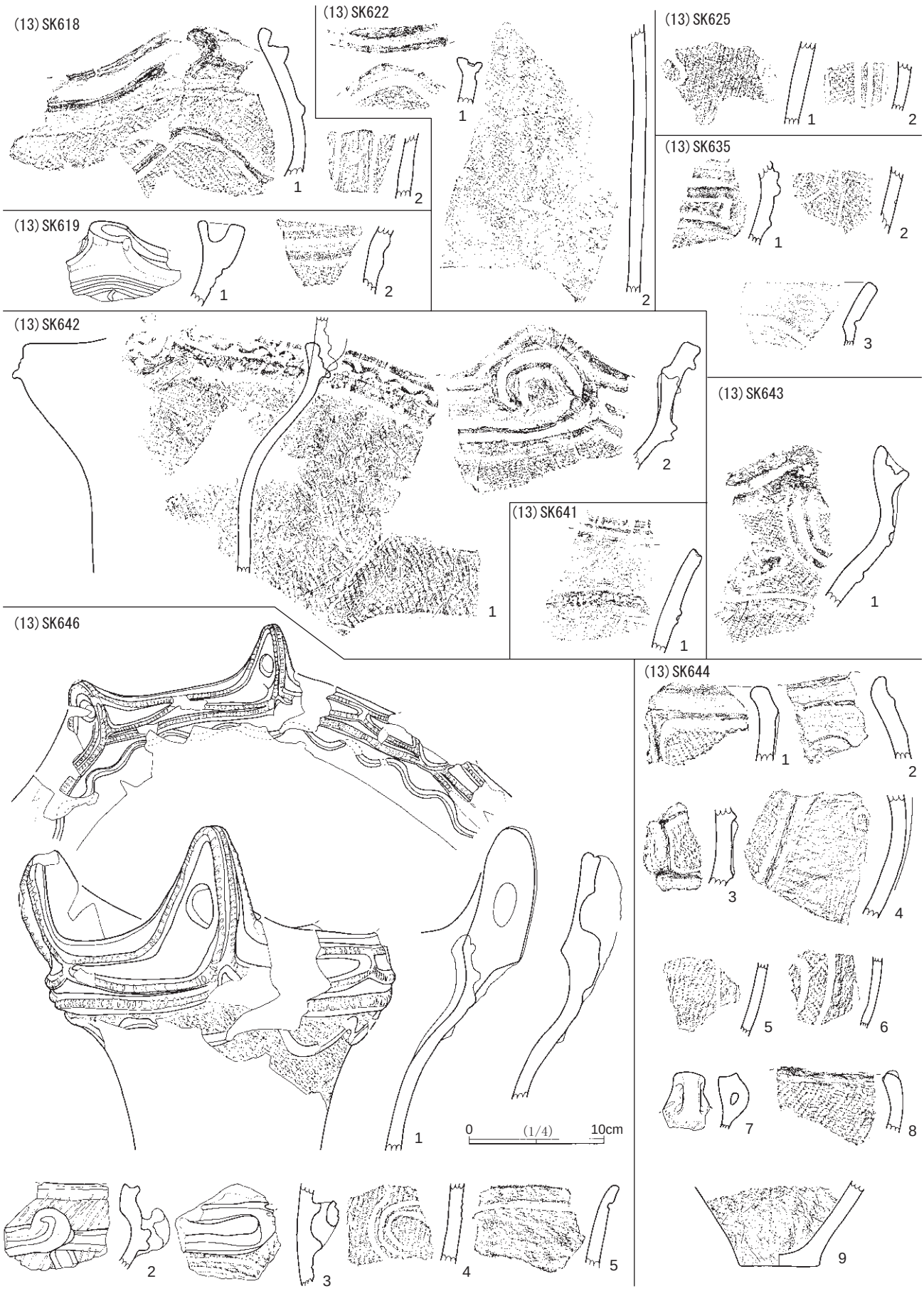
第226図　土坑等出土土器（36）



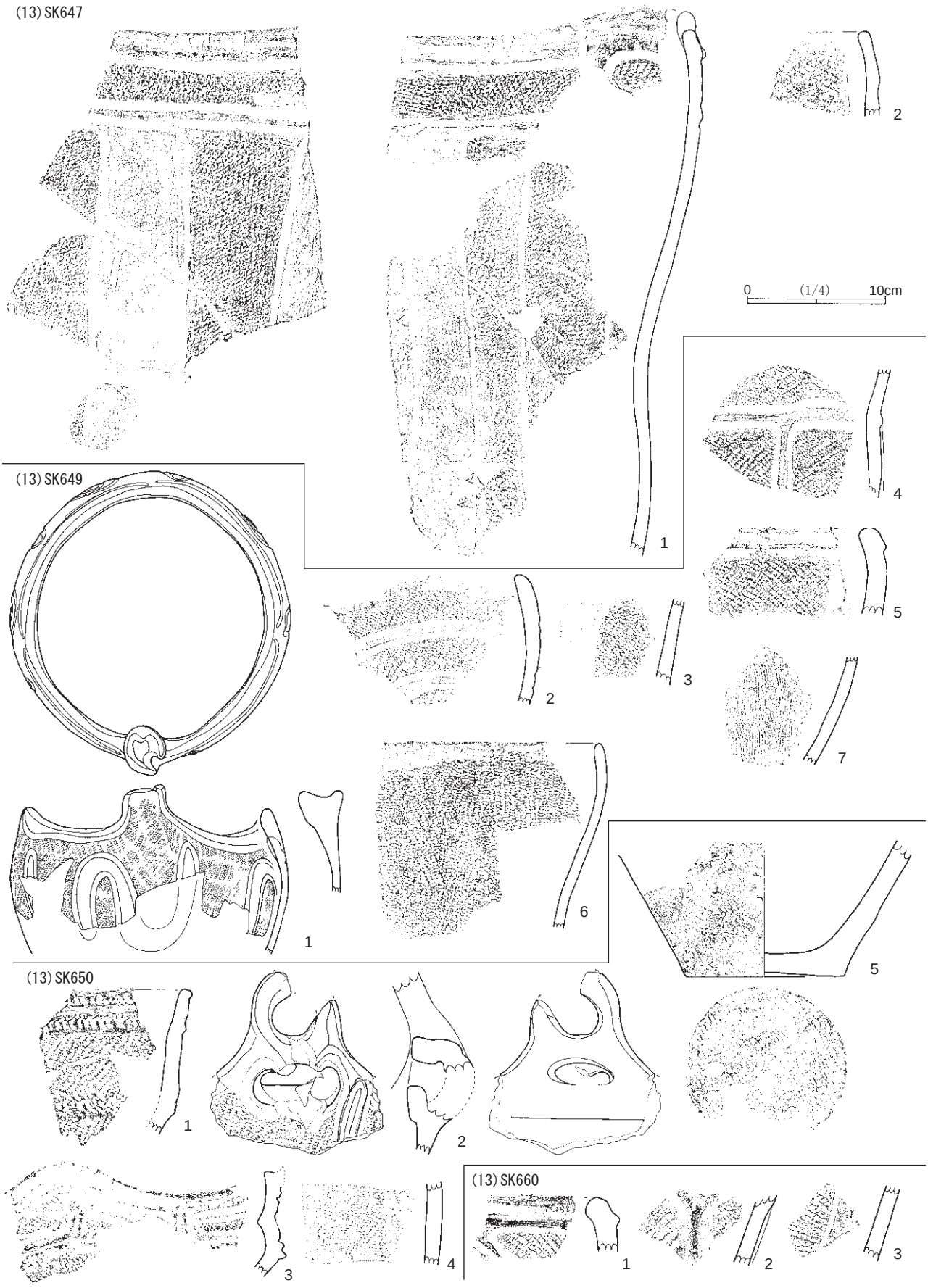
第227図　土坑等出土土器（37）



第228図　土坑等出土土器（38）

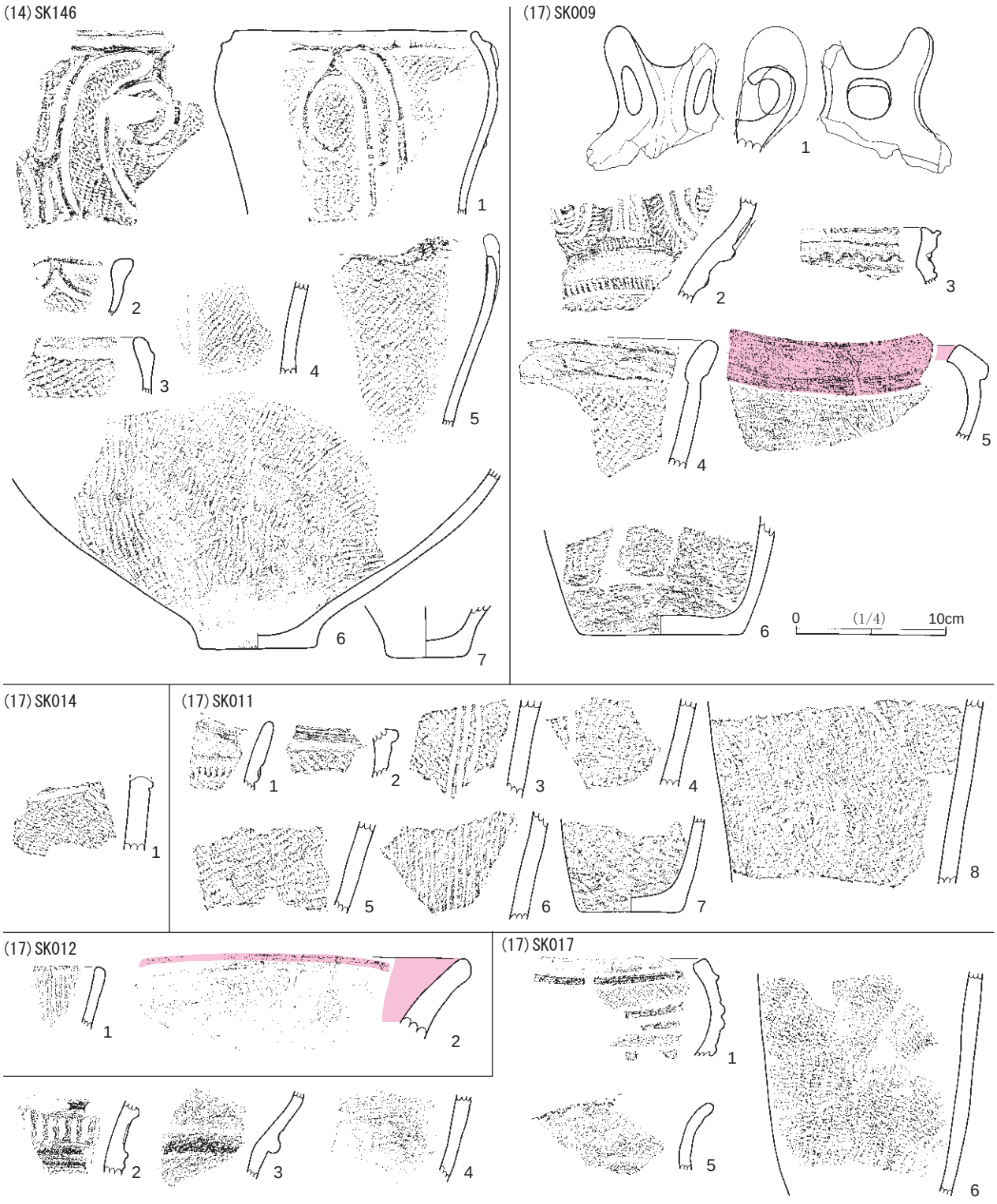


第229図　土坑等出土土器（39）

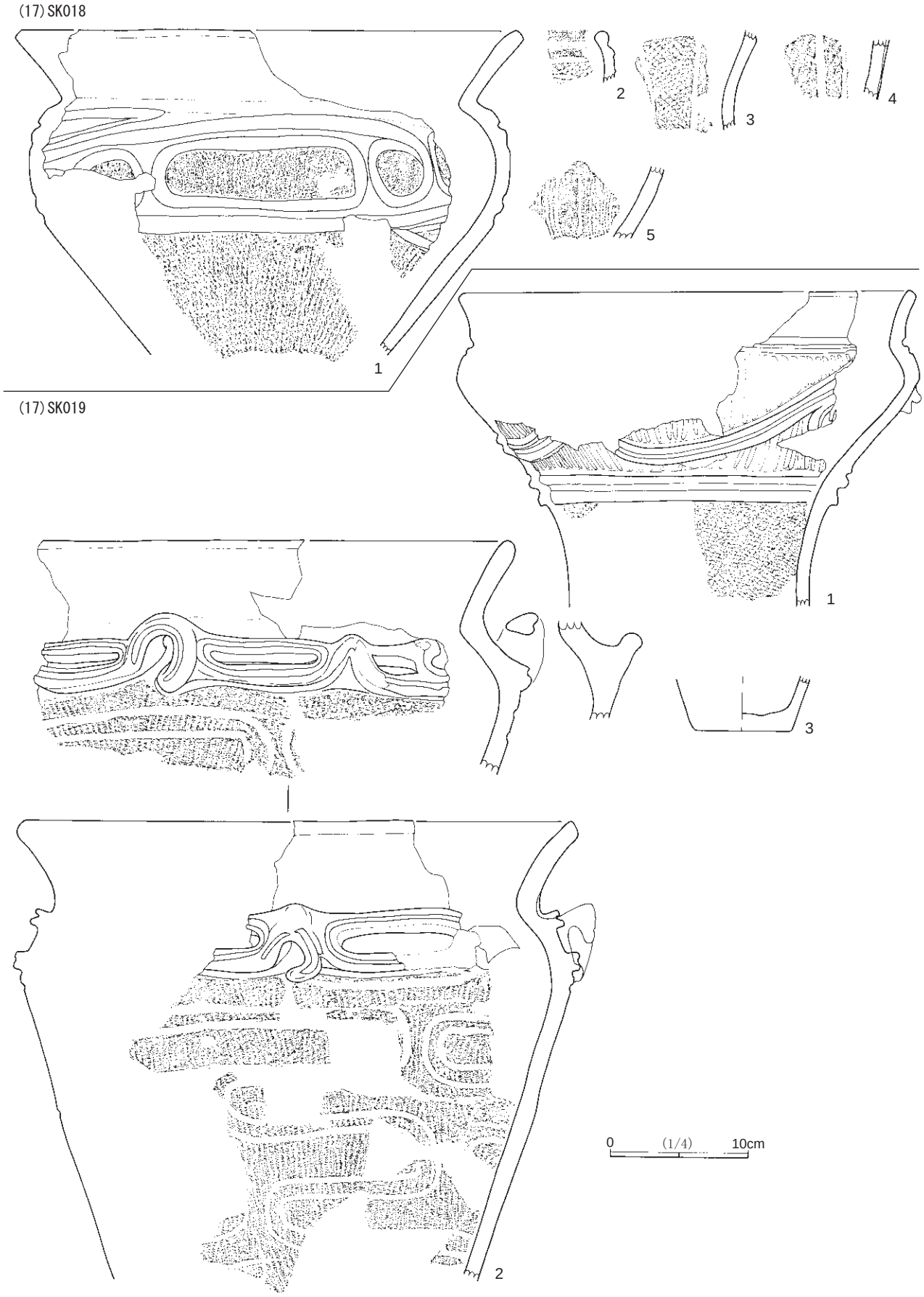


第230図　土坑等出土土器（40）

第231図　土坑等出土土器（41）

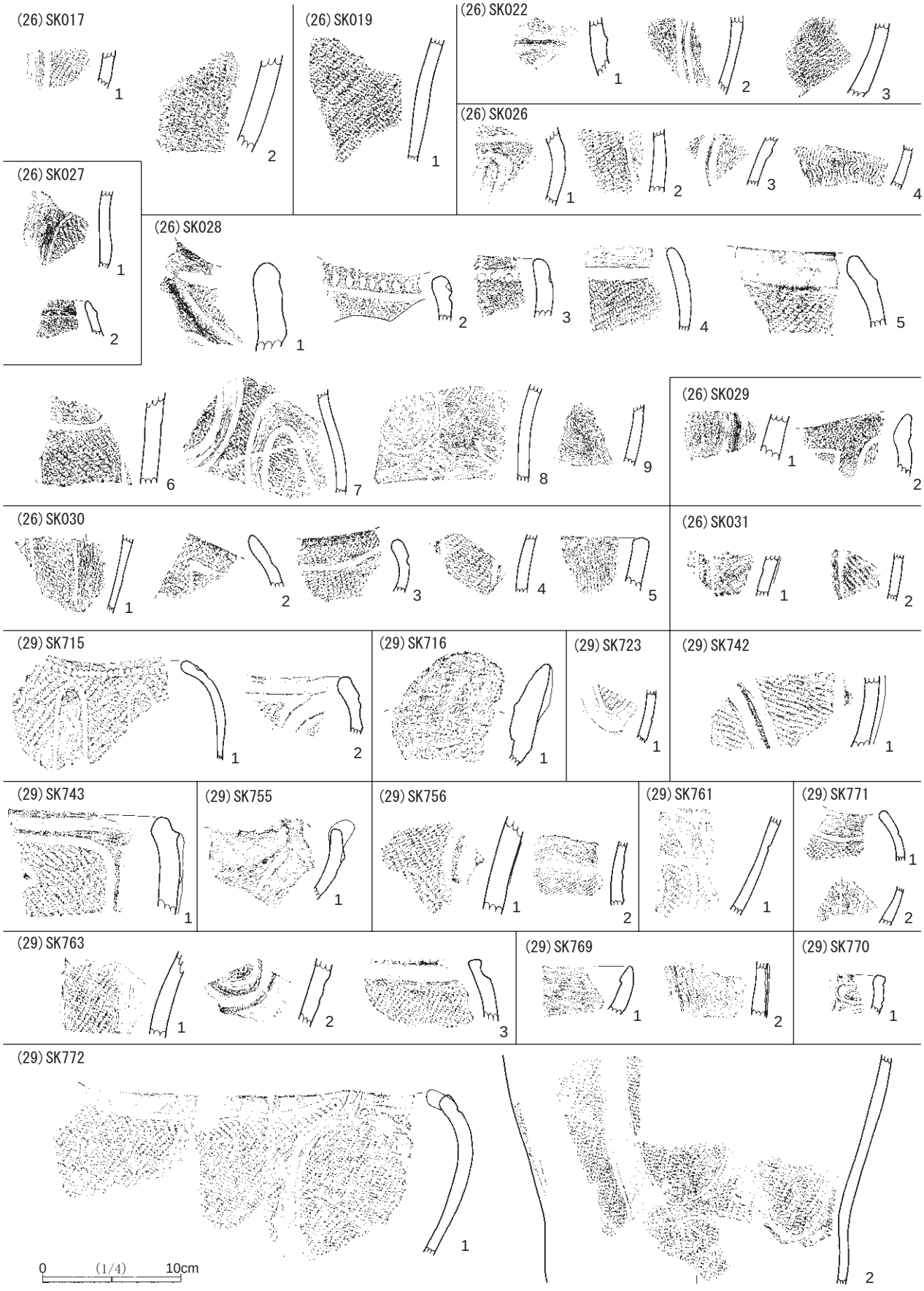


第232図　土坑等出土土器（42）

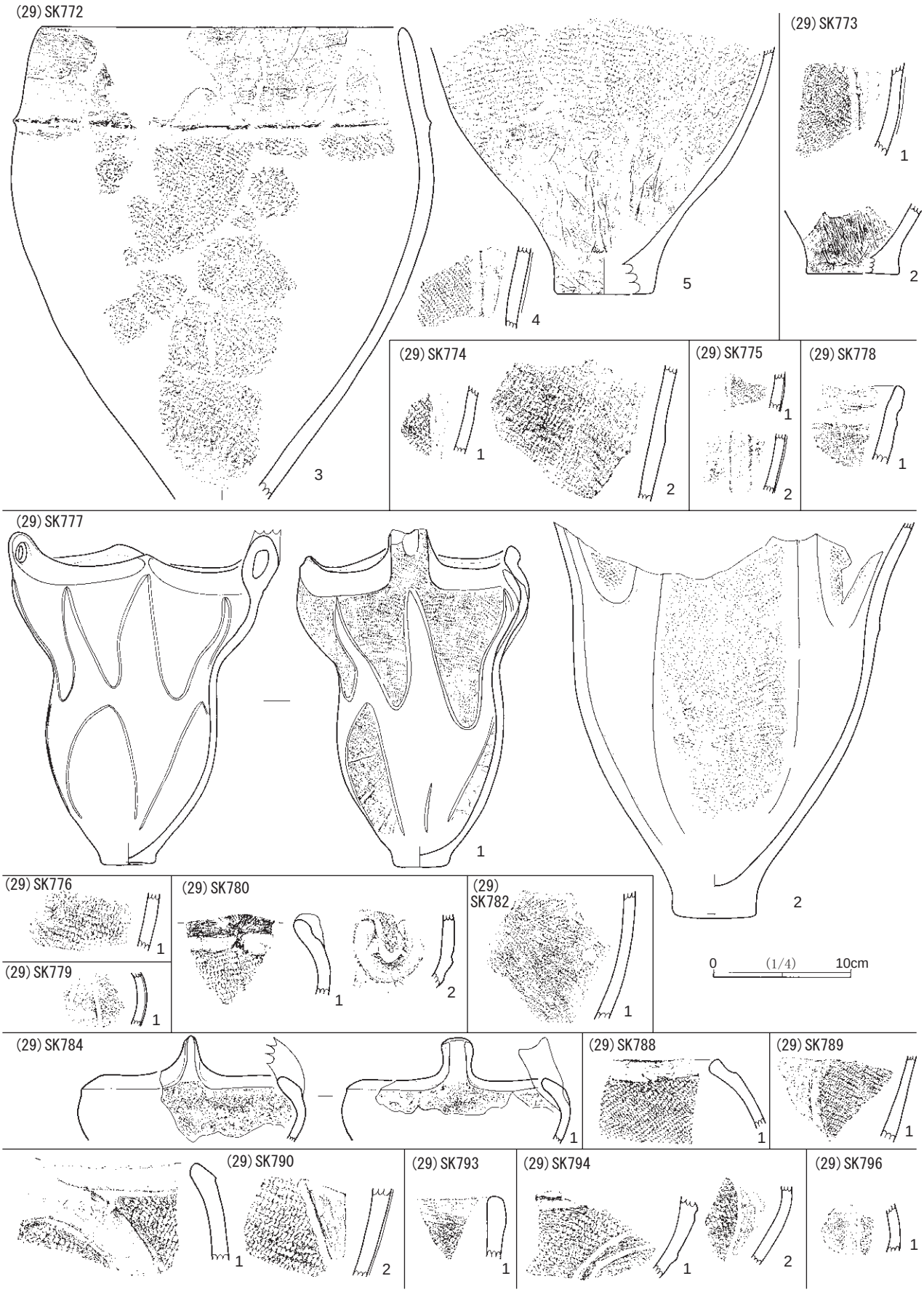


第233図　土坑等出土土器（43）

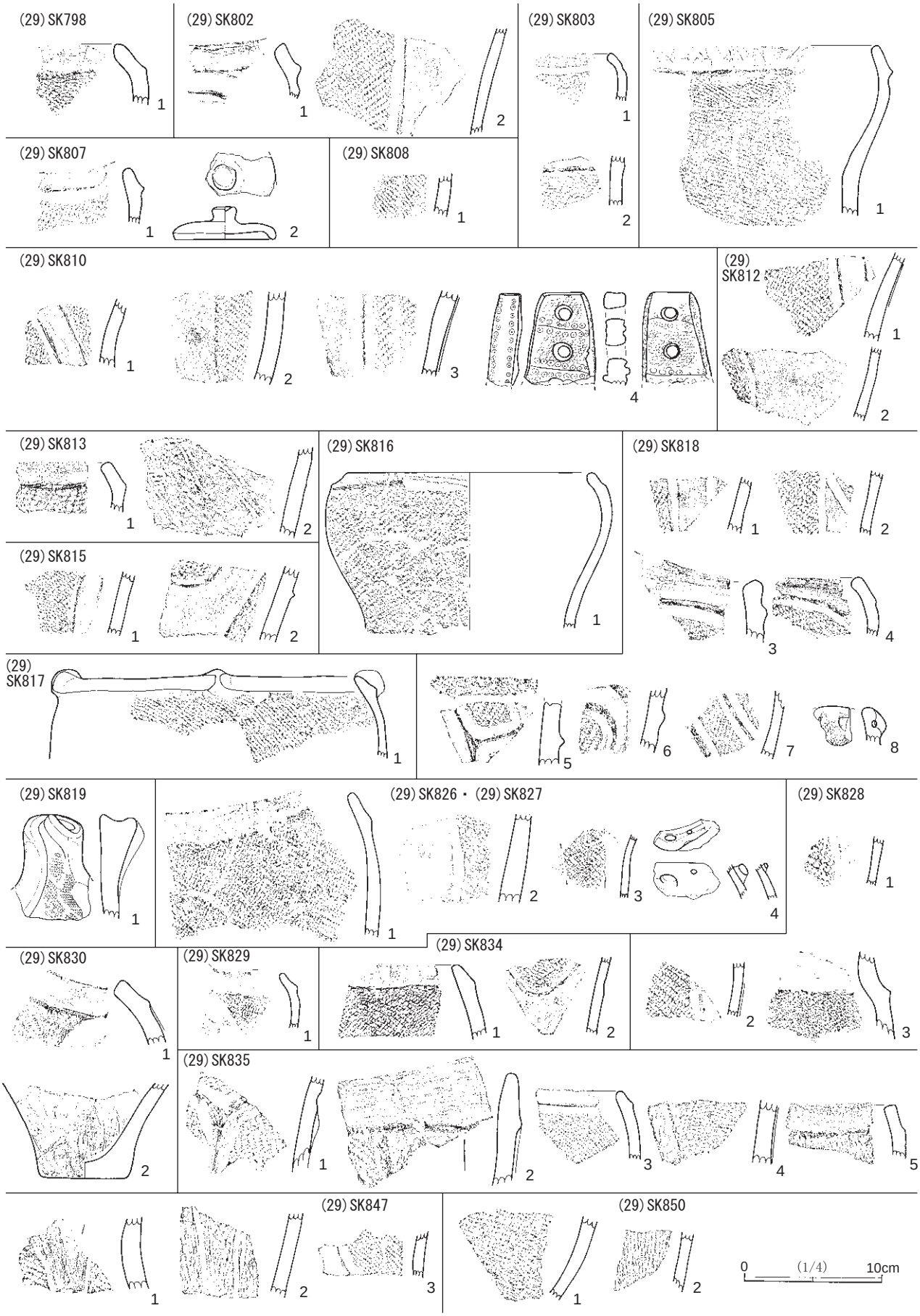
第234図　土坑等出土土器（44）



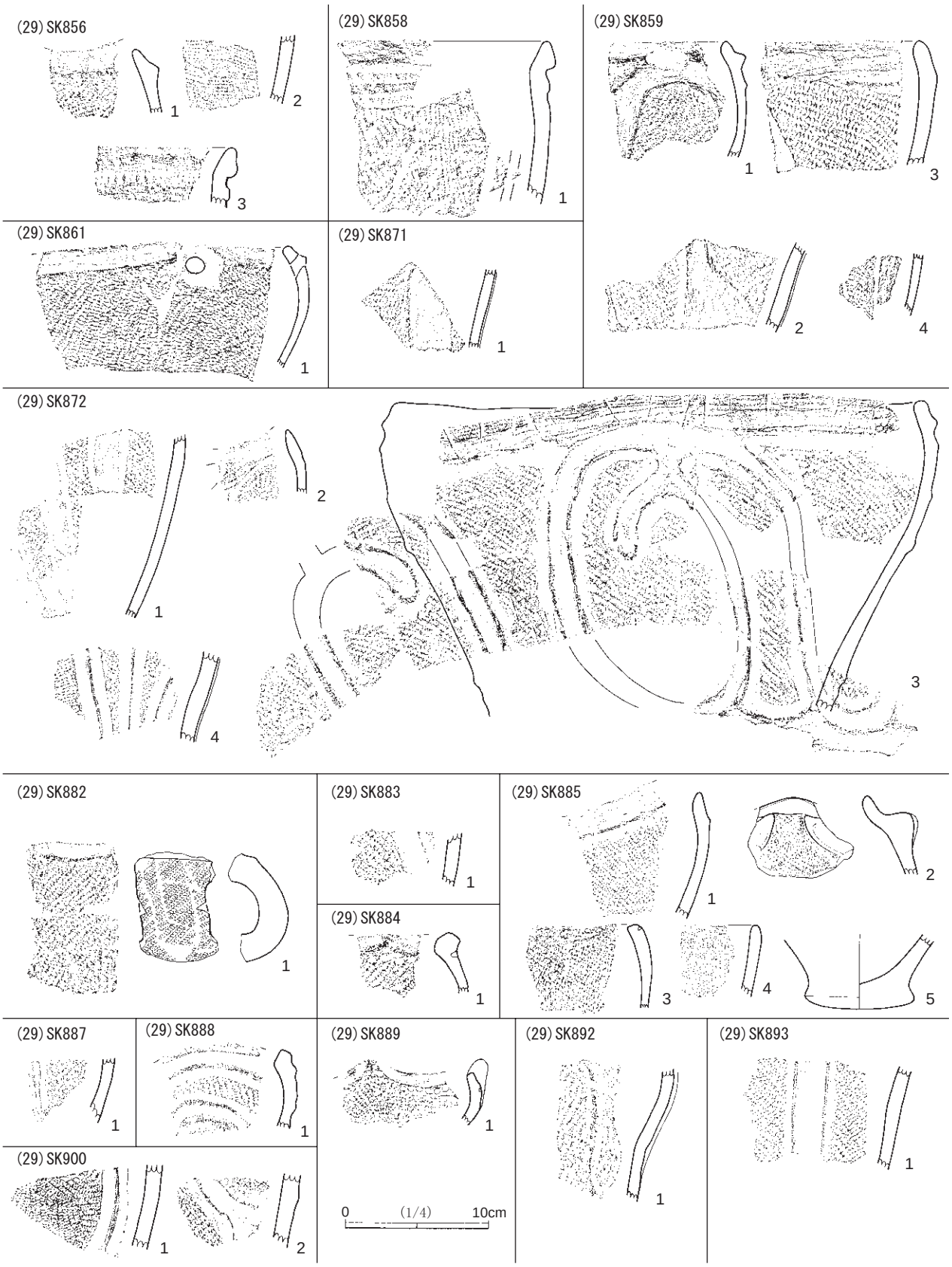
第235図　土坑等出土土器（45）



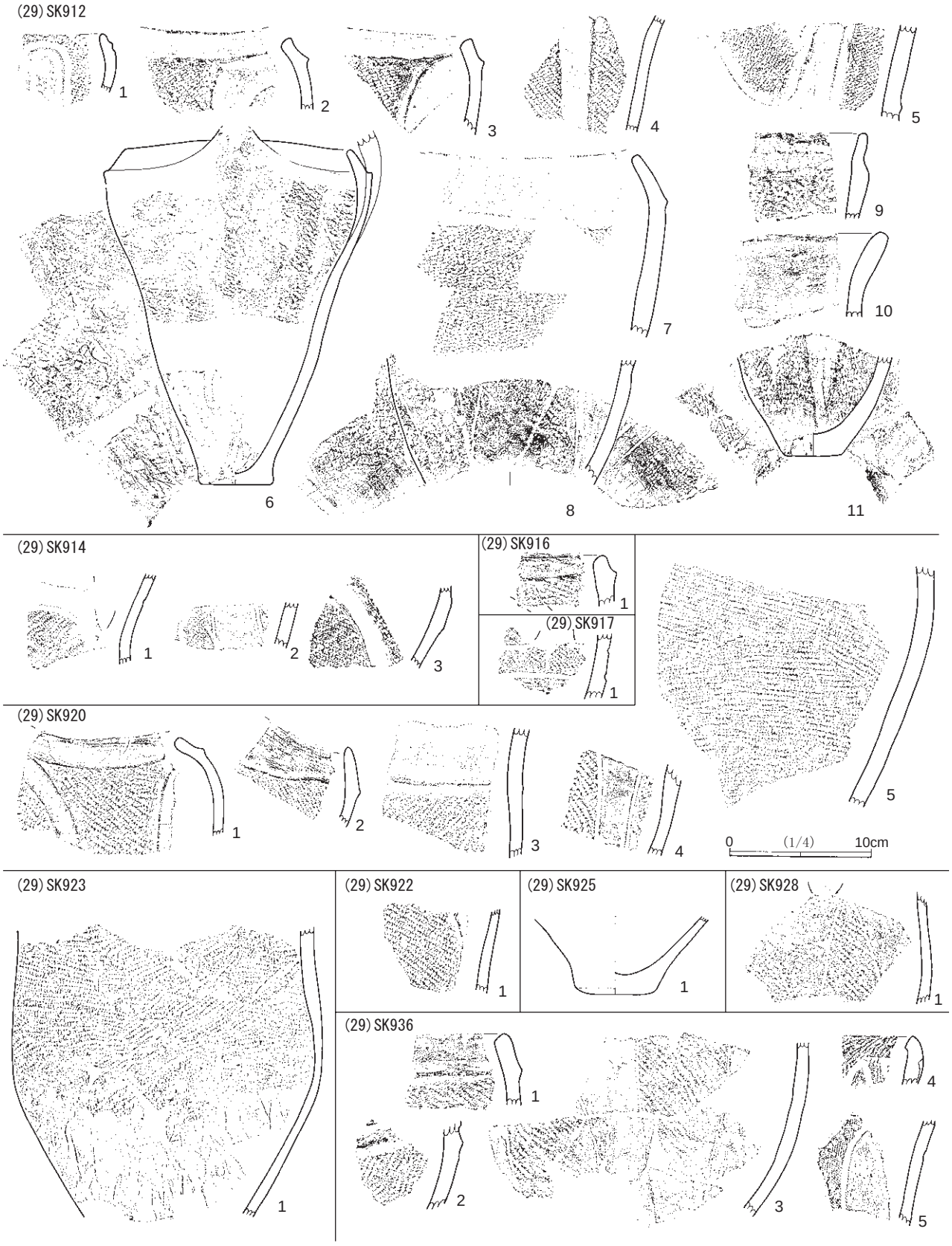
第236図　土坑等出土土器（46）



第237図　土坑等出土土器（47）

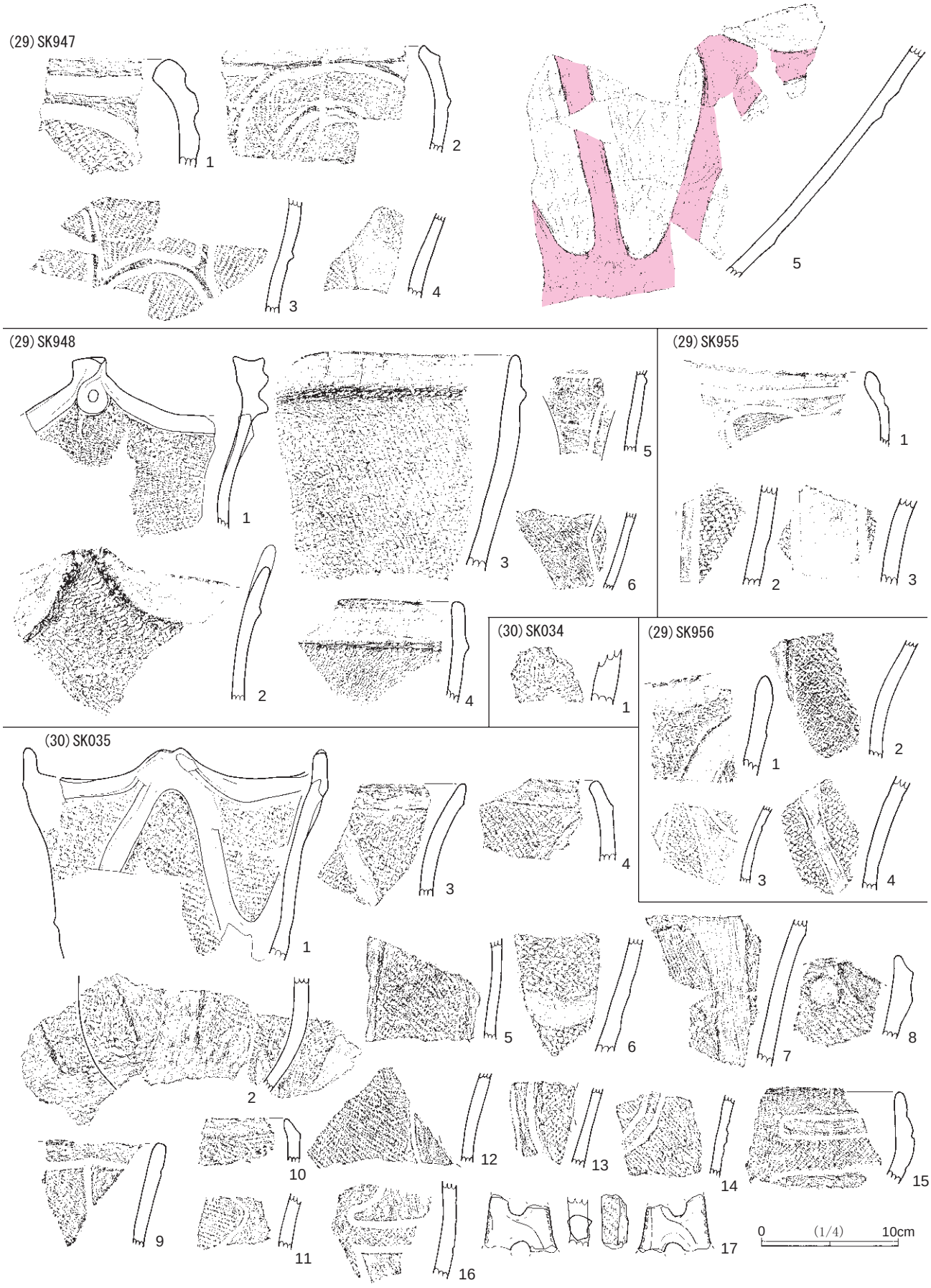


第238図　土坑等出土土器（48）



第239図　土坑等出土土器（49）

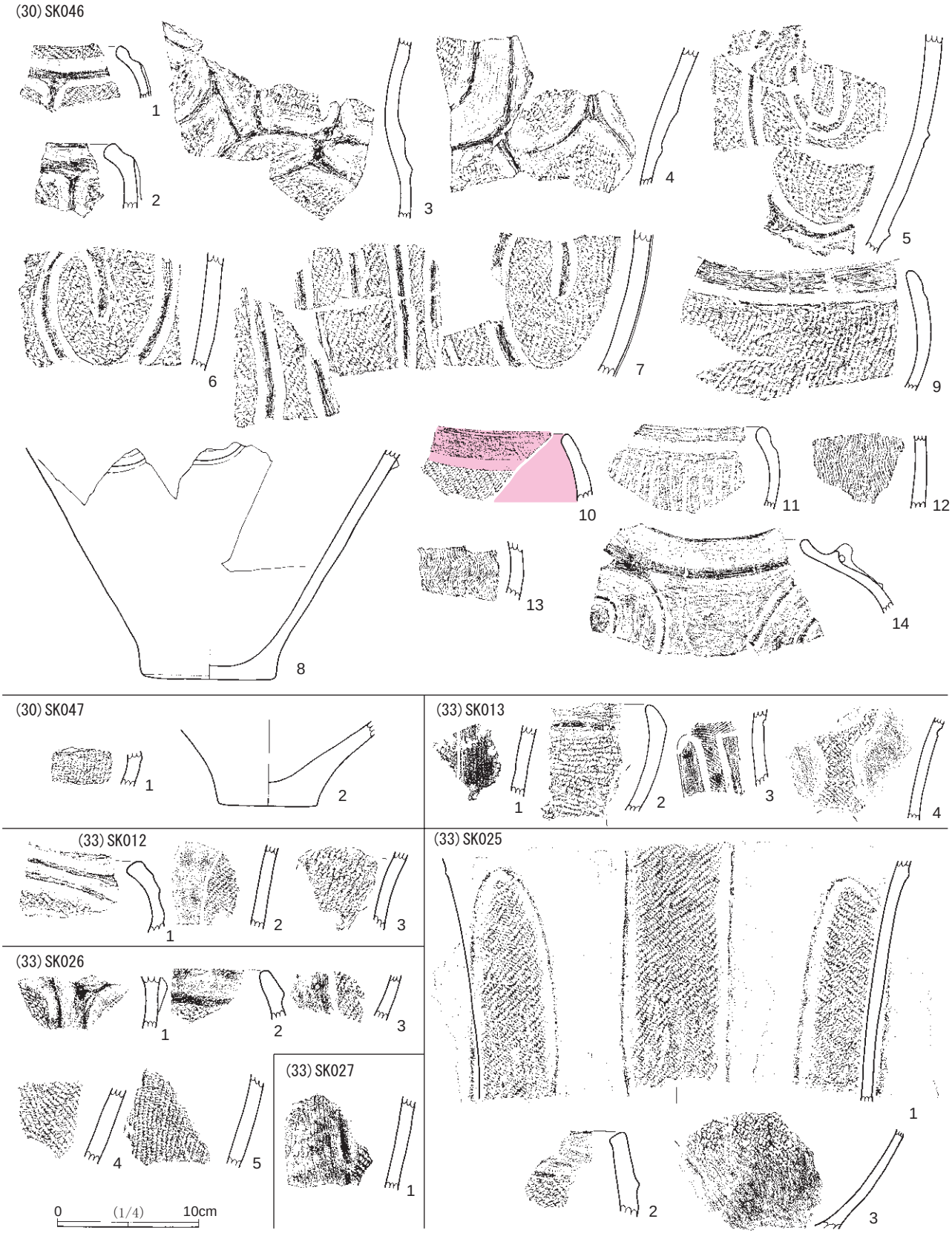
第240図　土坑等出土土器（50）



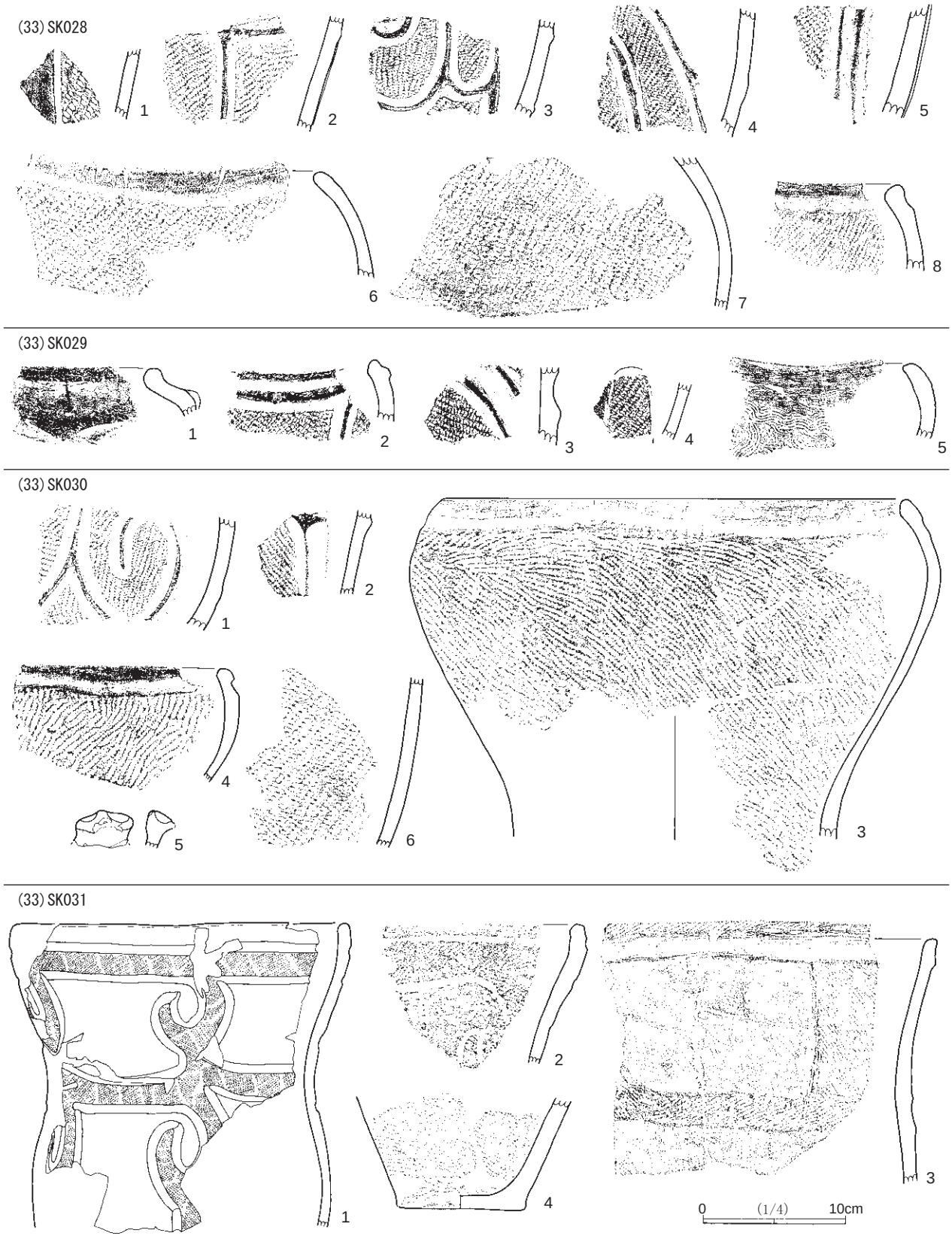
第241図　土坑等出土土器（51）

第242図　土坑等出土土器（52）

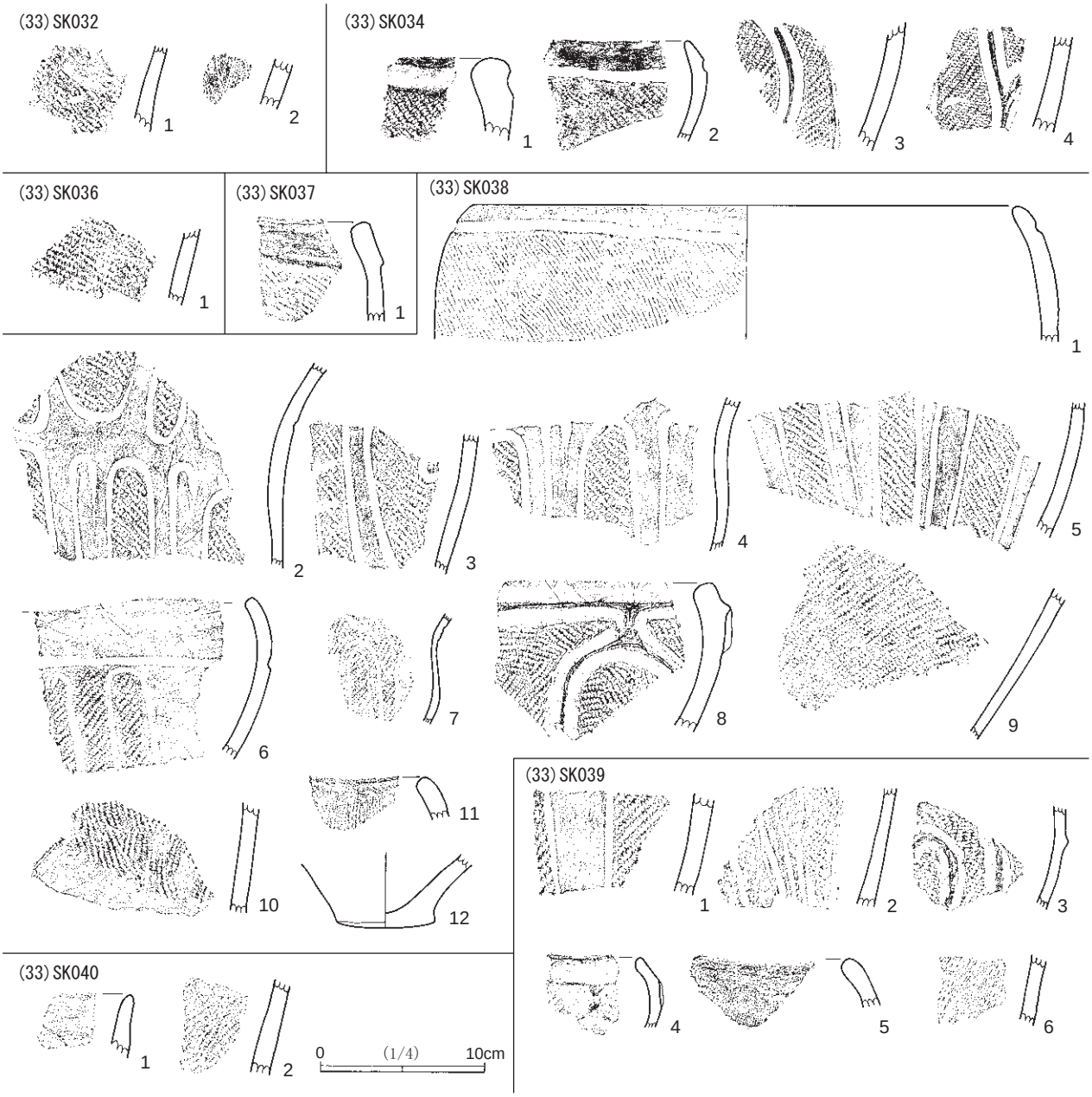
第243図　土坑等出土土器（53）



第244図　土坑等出土土器（54）

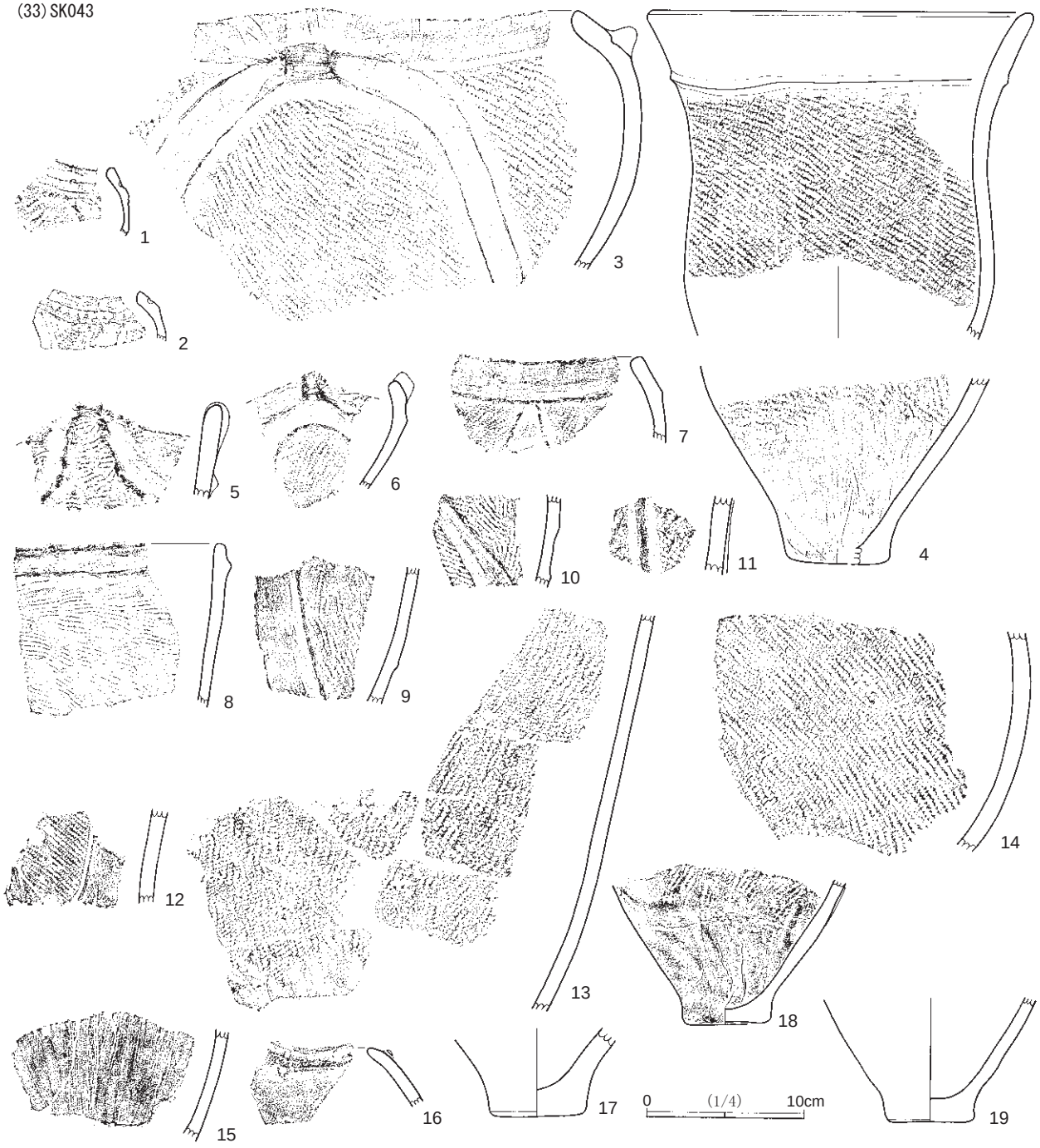


第245図　土坑等出土土器（55）



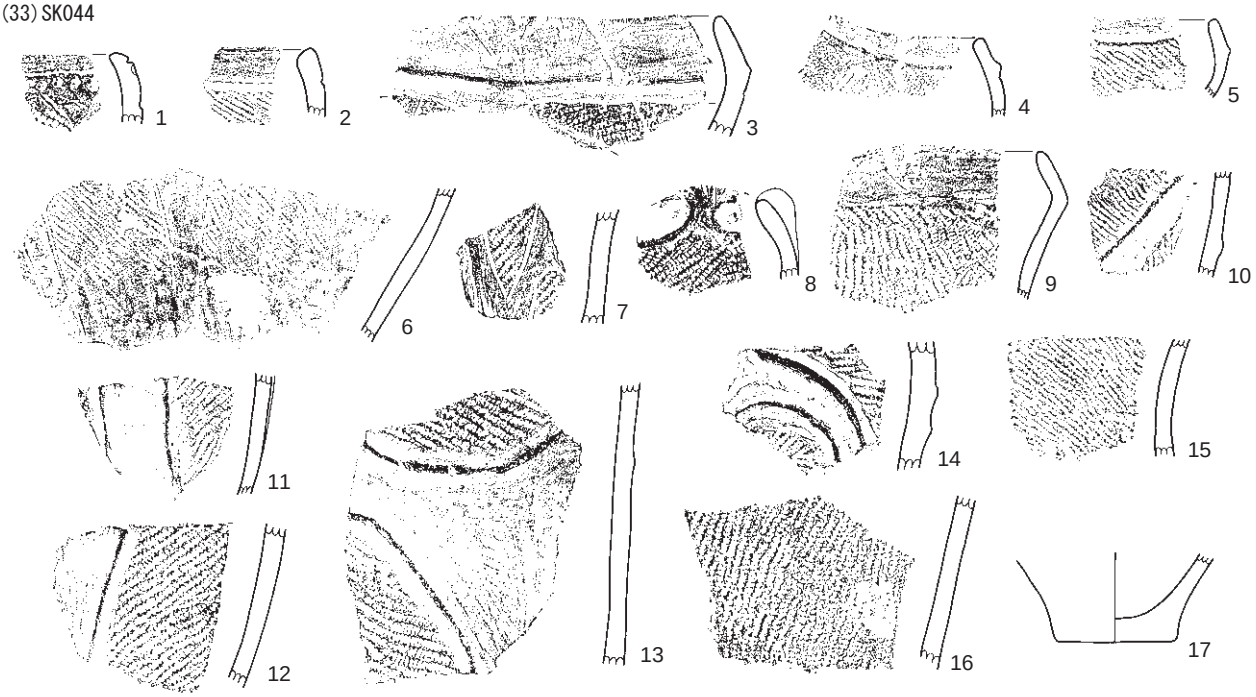
第246図　土坑等出土土器（56）

第247図　土坑等出土土器（57）

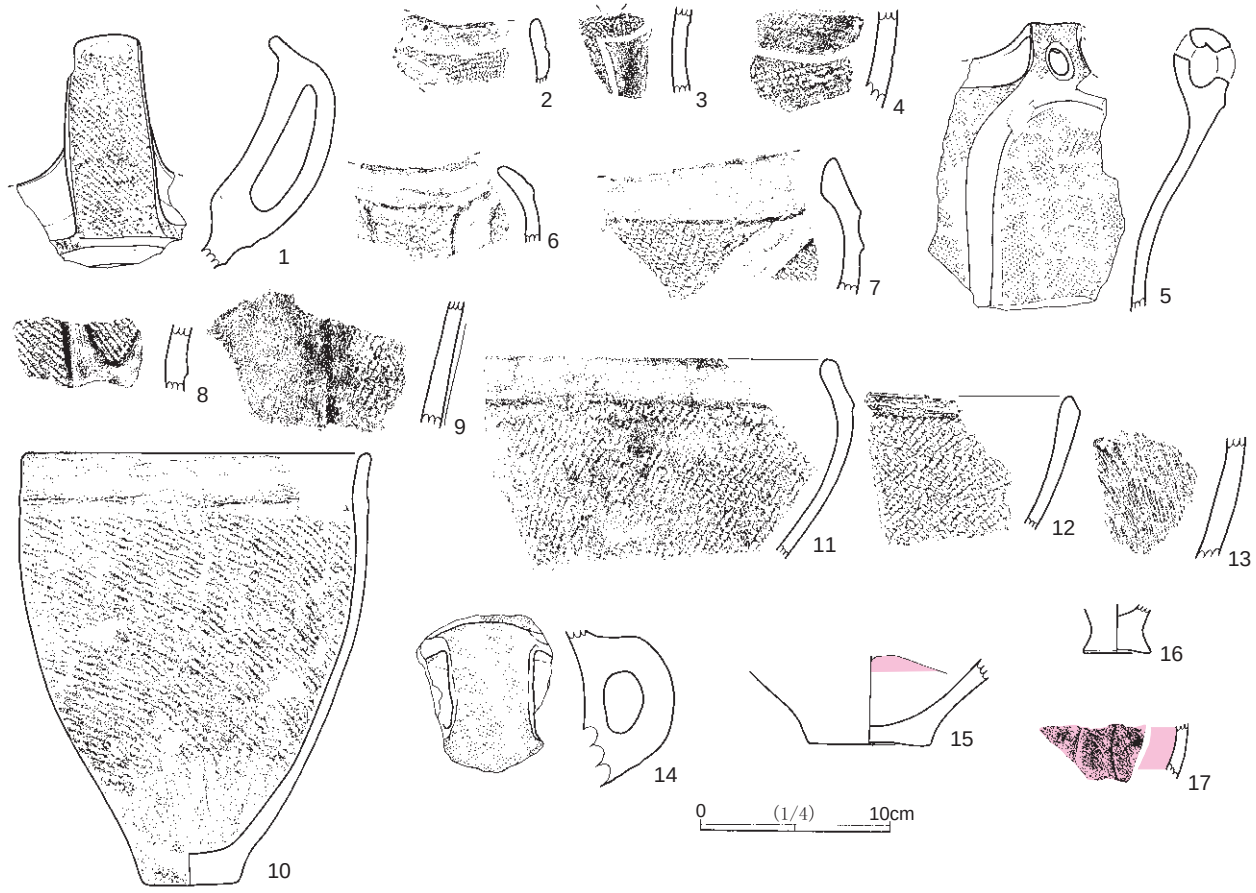


第248図　土坑等出土土器（58）

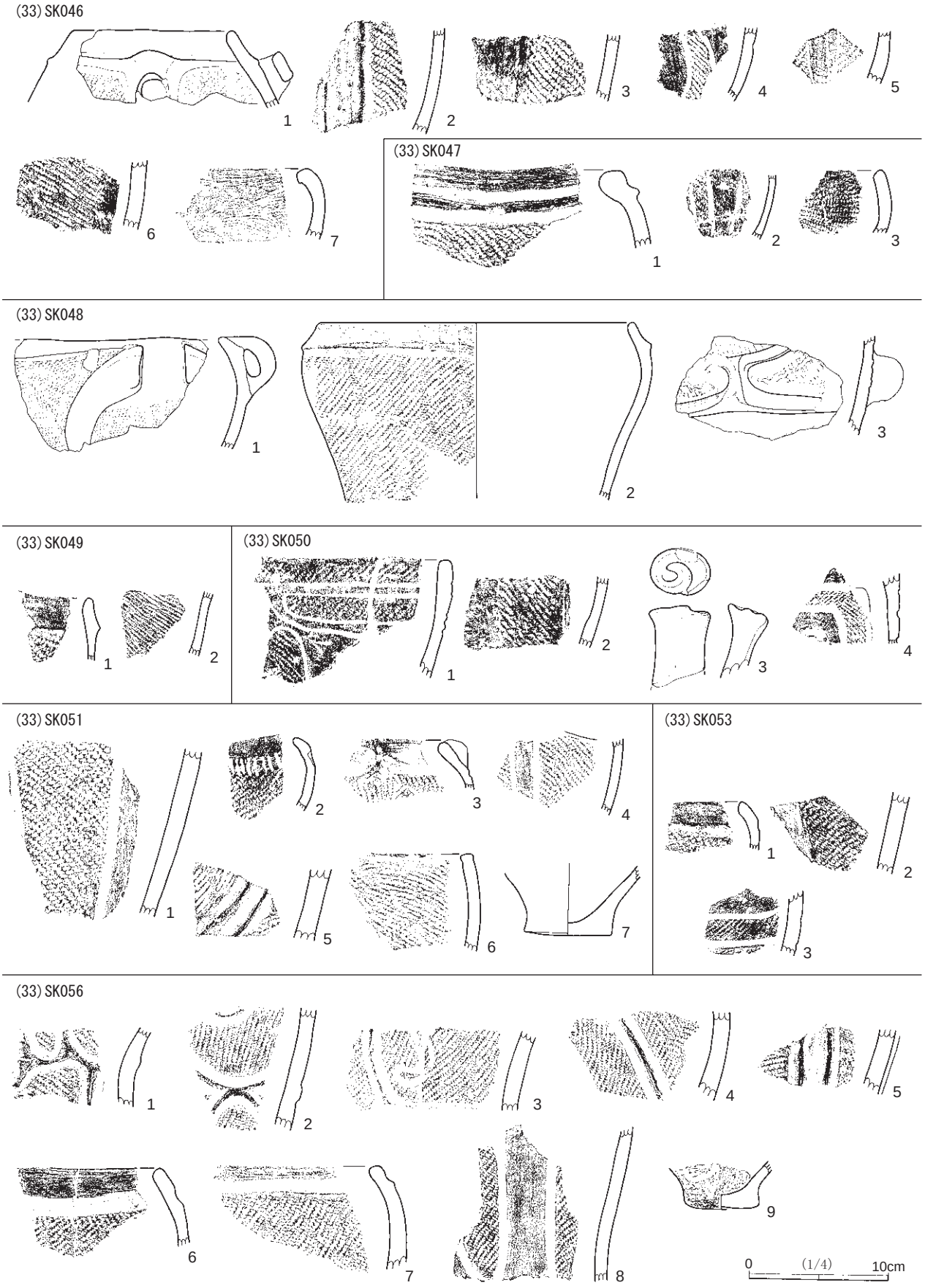
(33) SK044



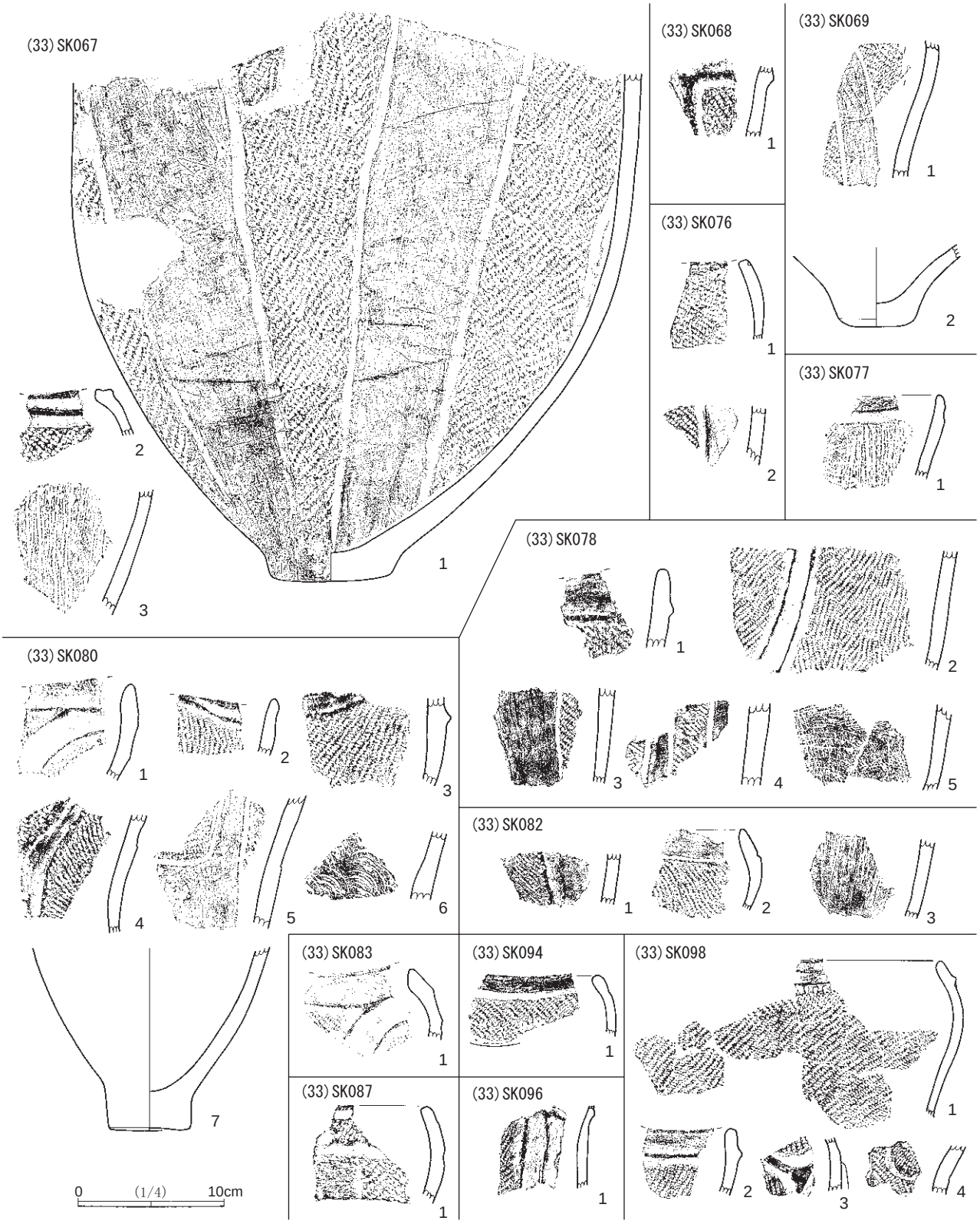
(33) SK045



第249図　土坑等出土土器（59）

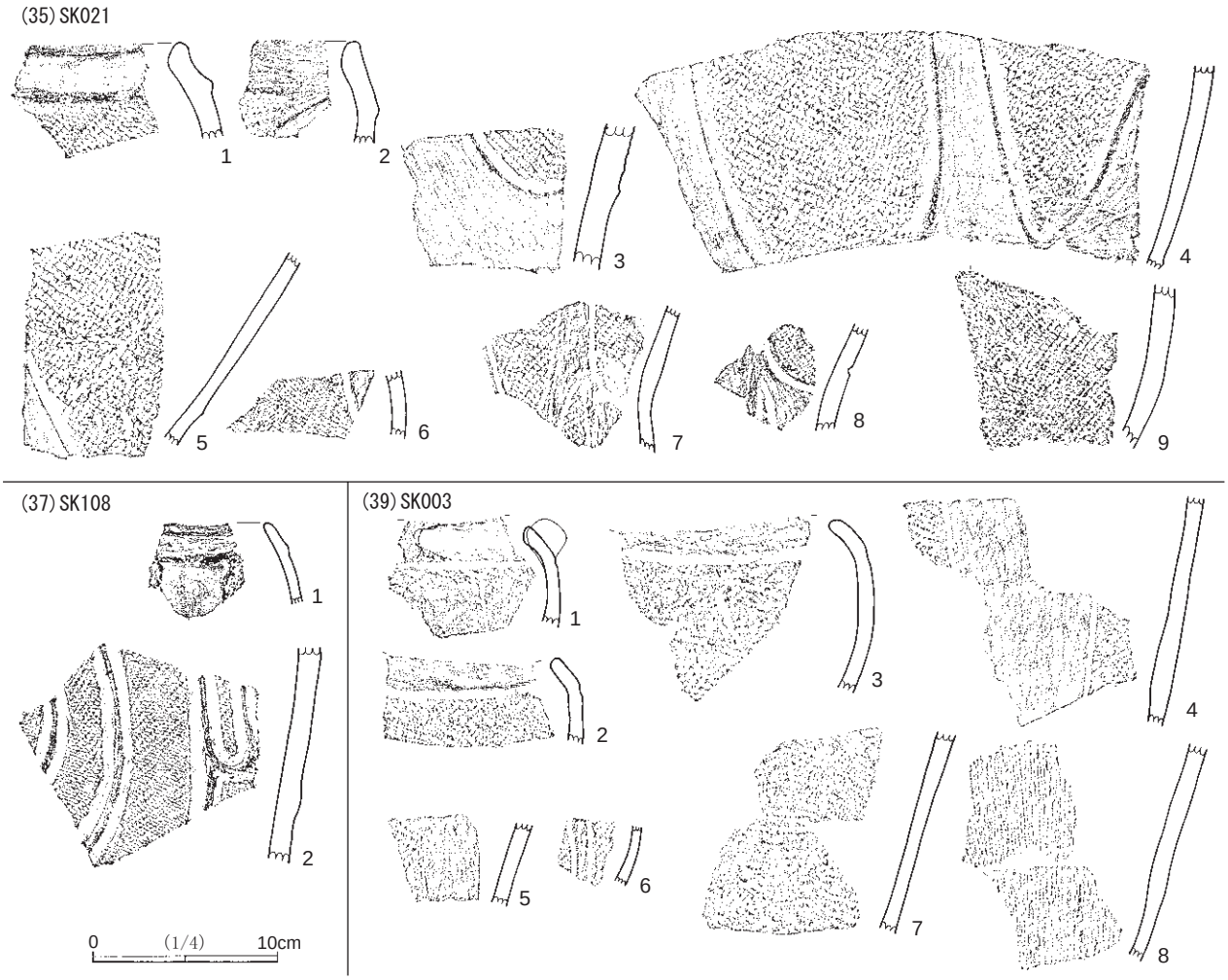


第250図　土坑等出土土器（60）

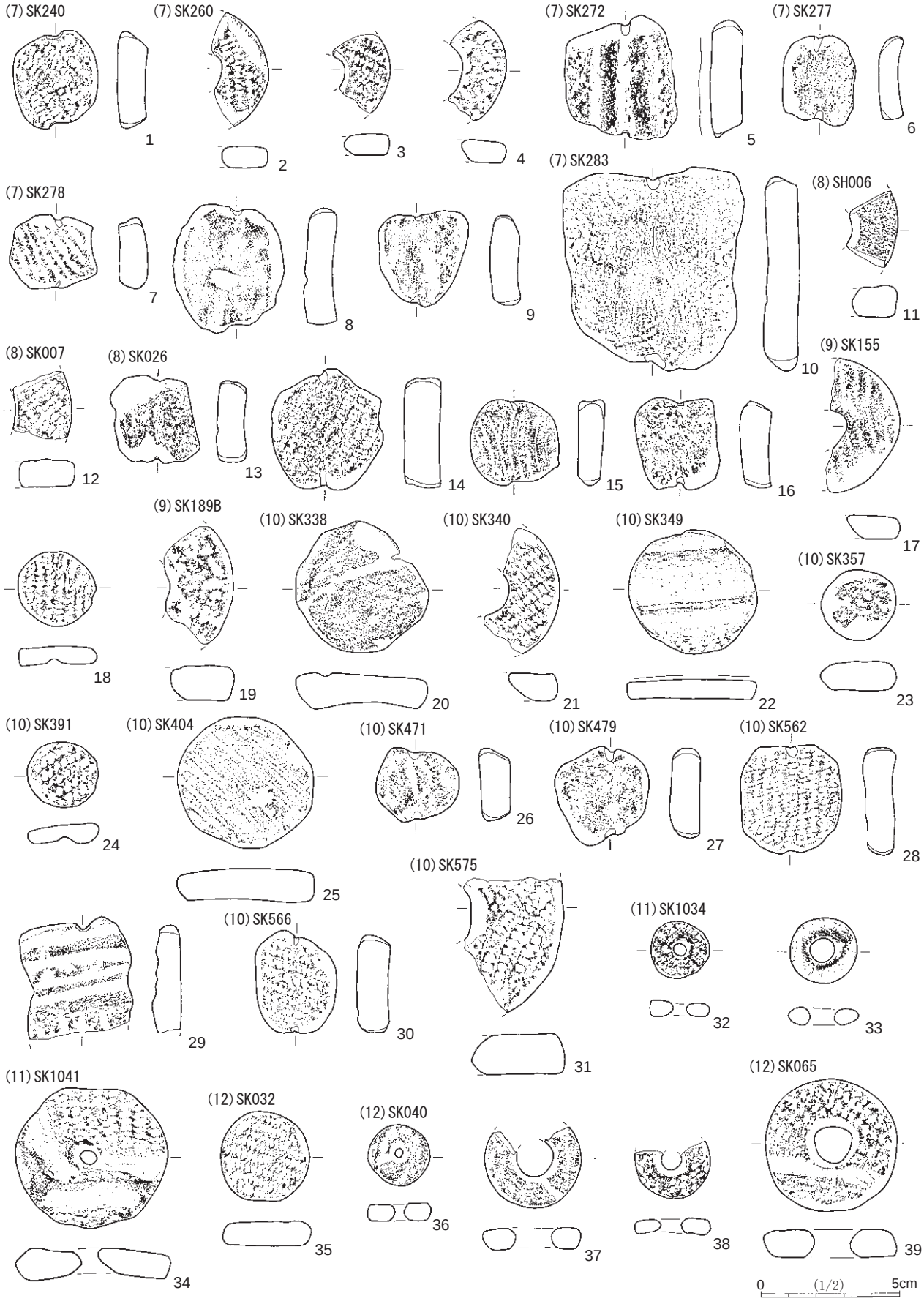


第251図　土坑等出土土器（61）

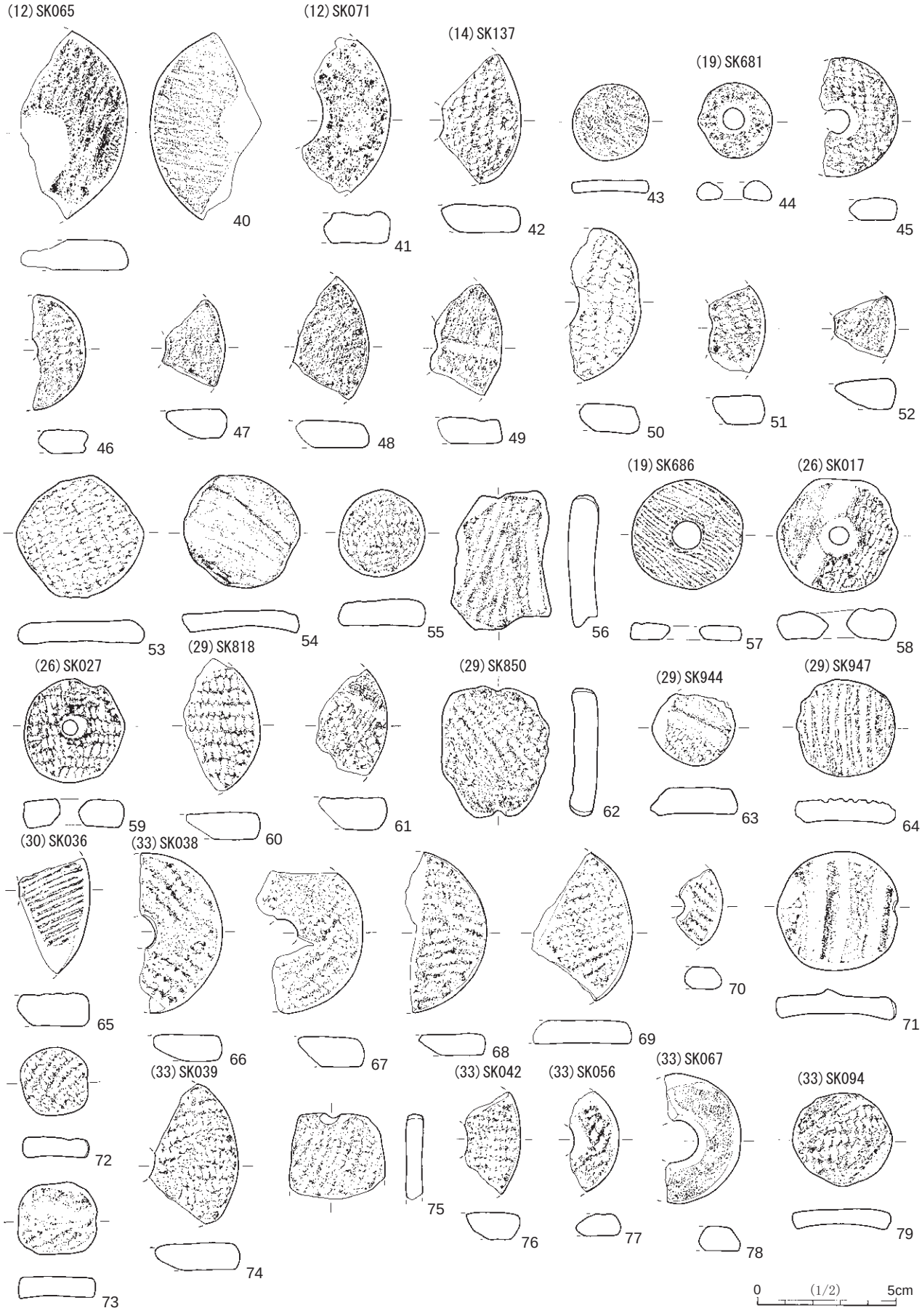
第252図　土坑等出土土器（62）



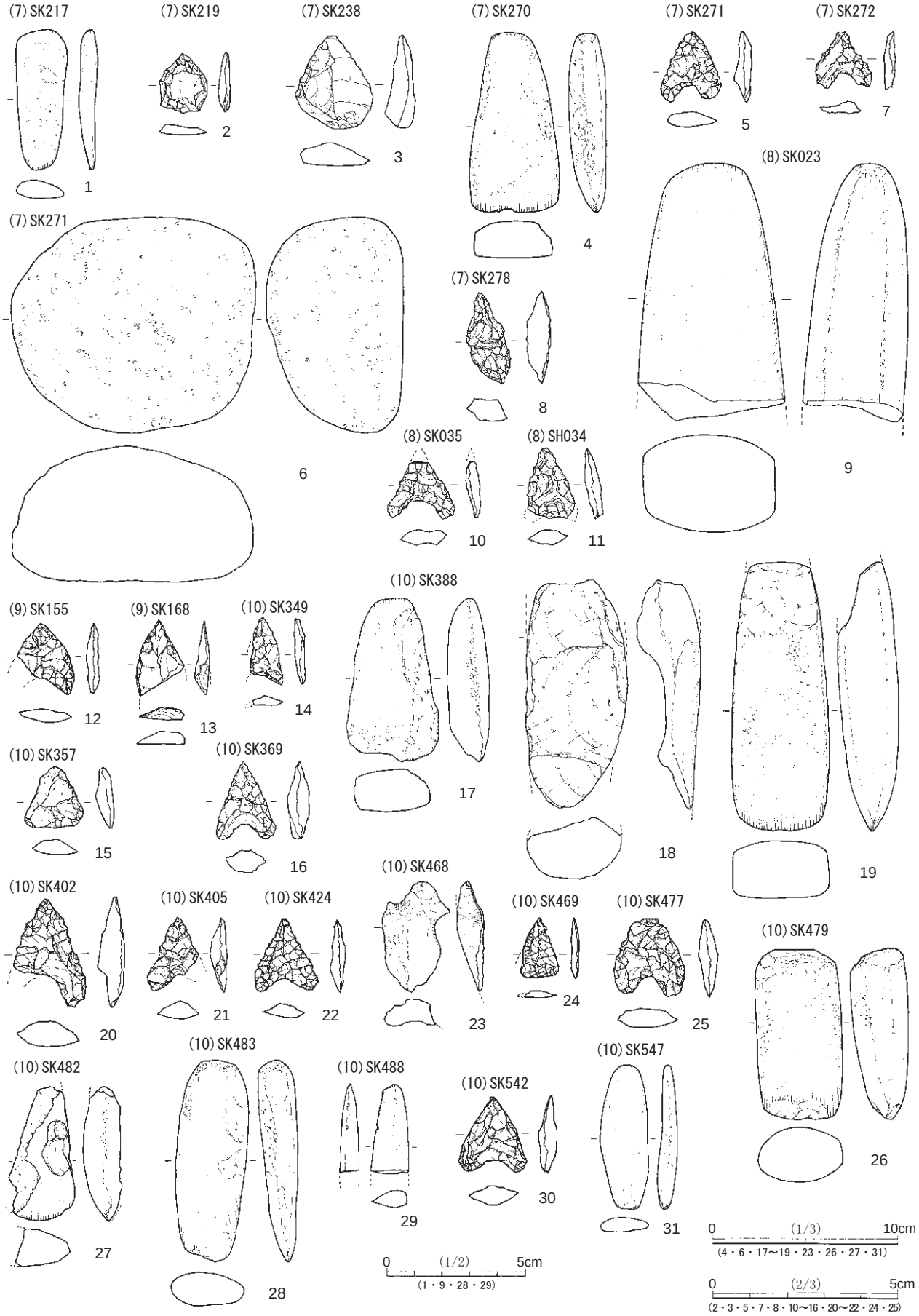
第253図　土坑等出土土器（63）



第254図　土坑等出土土製品（1）

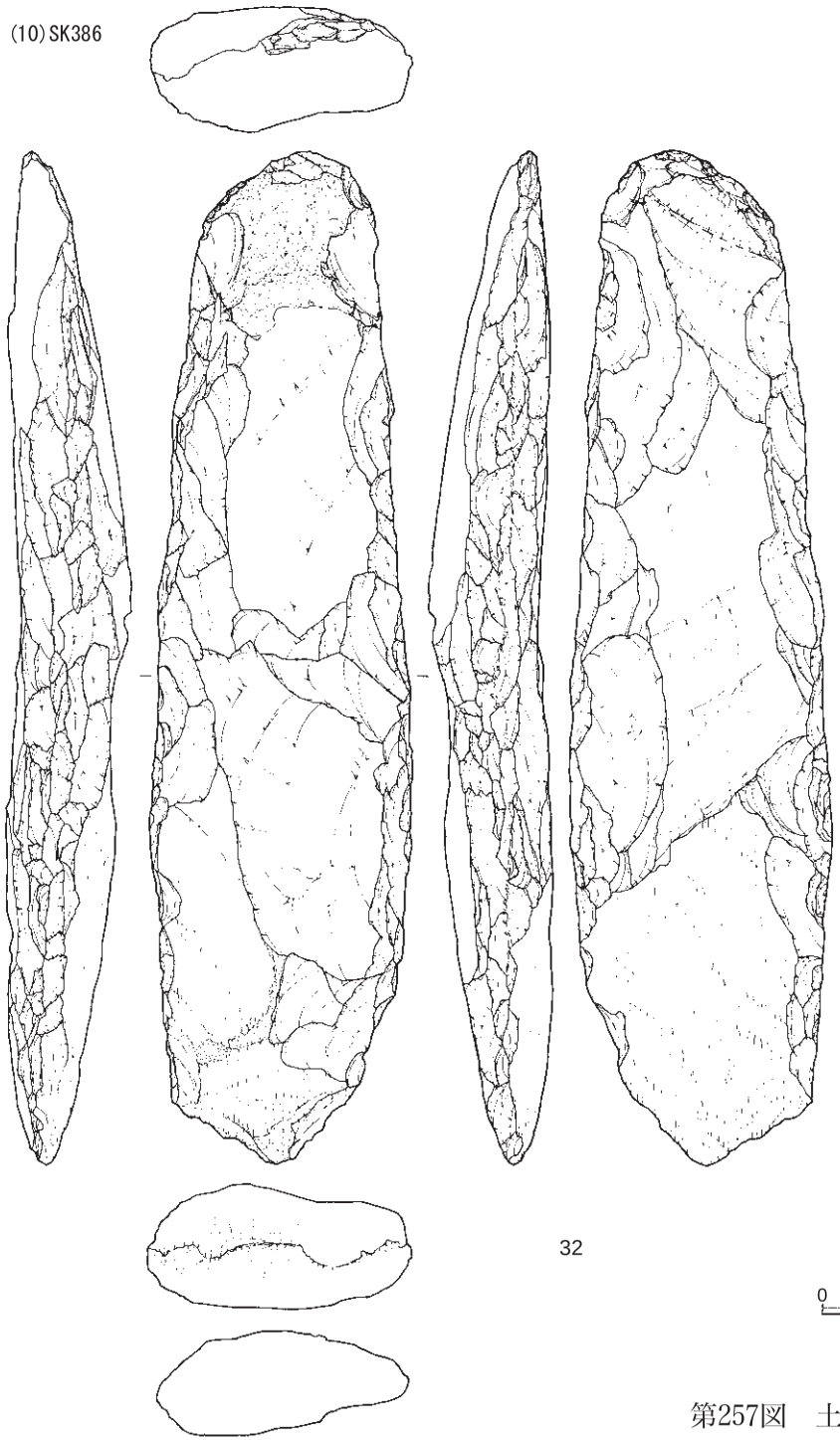


第255図　土坑等出土土製品（2）



第256図　土坑等出土石器（1）

(10) SK386



32

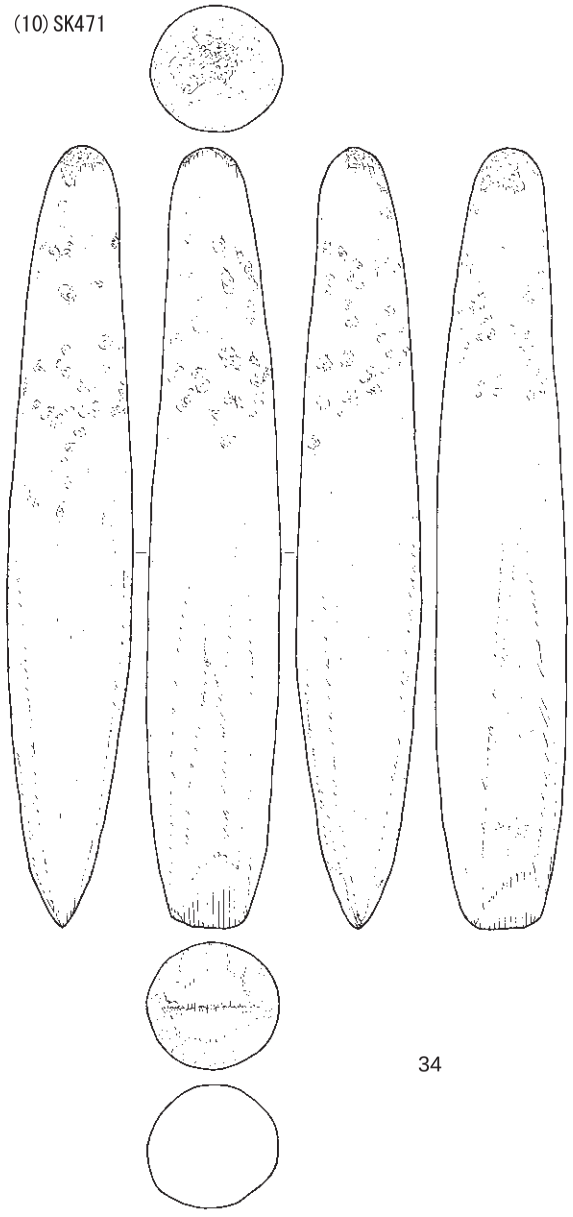
(10) SK471

33

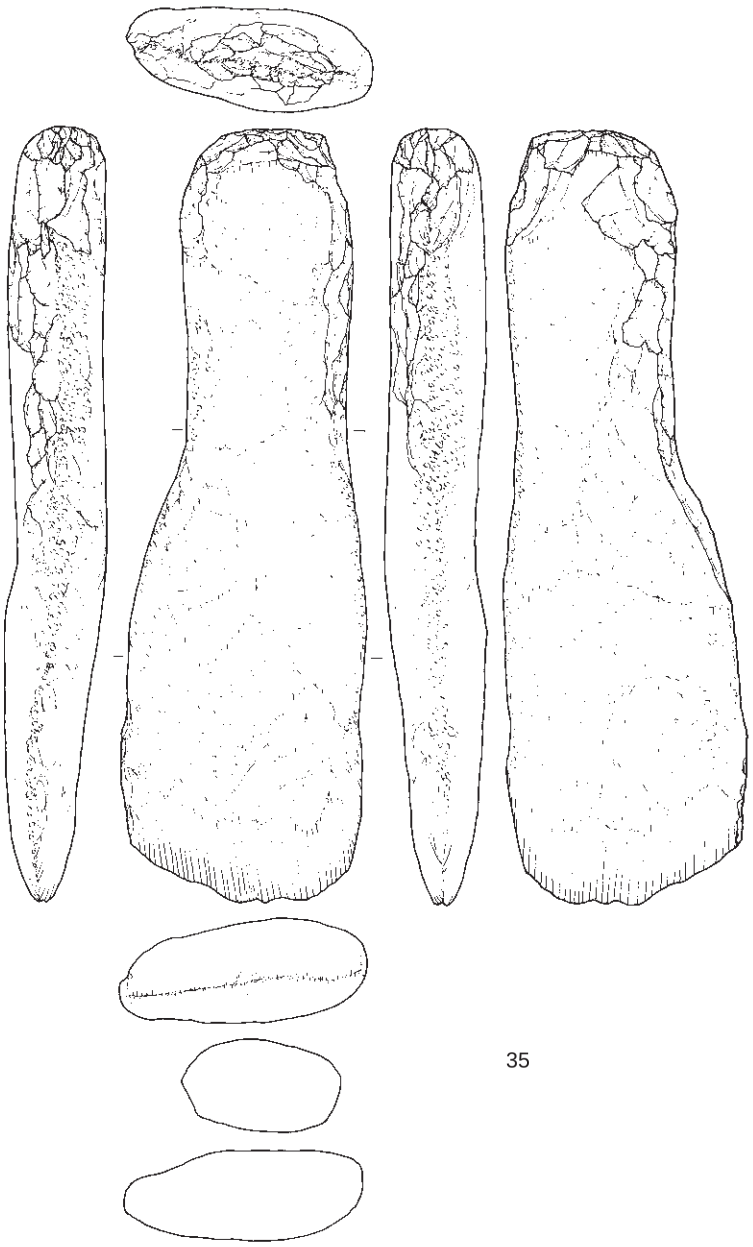
0 (1/2) 5cm

第257図　土坑等出土石器（2）

(10) SK471



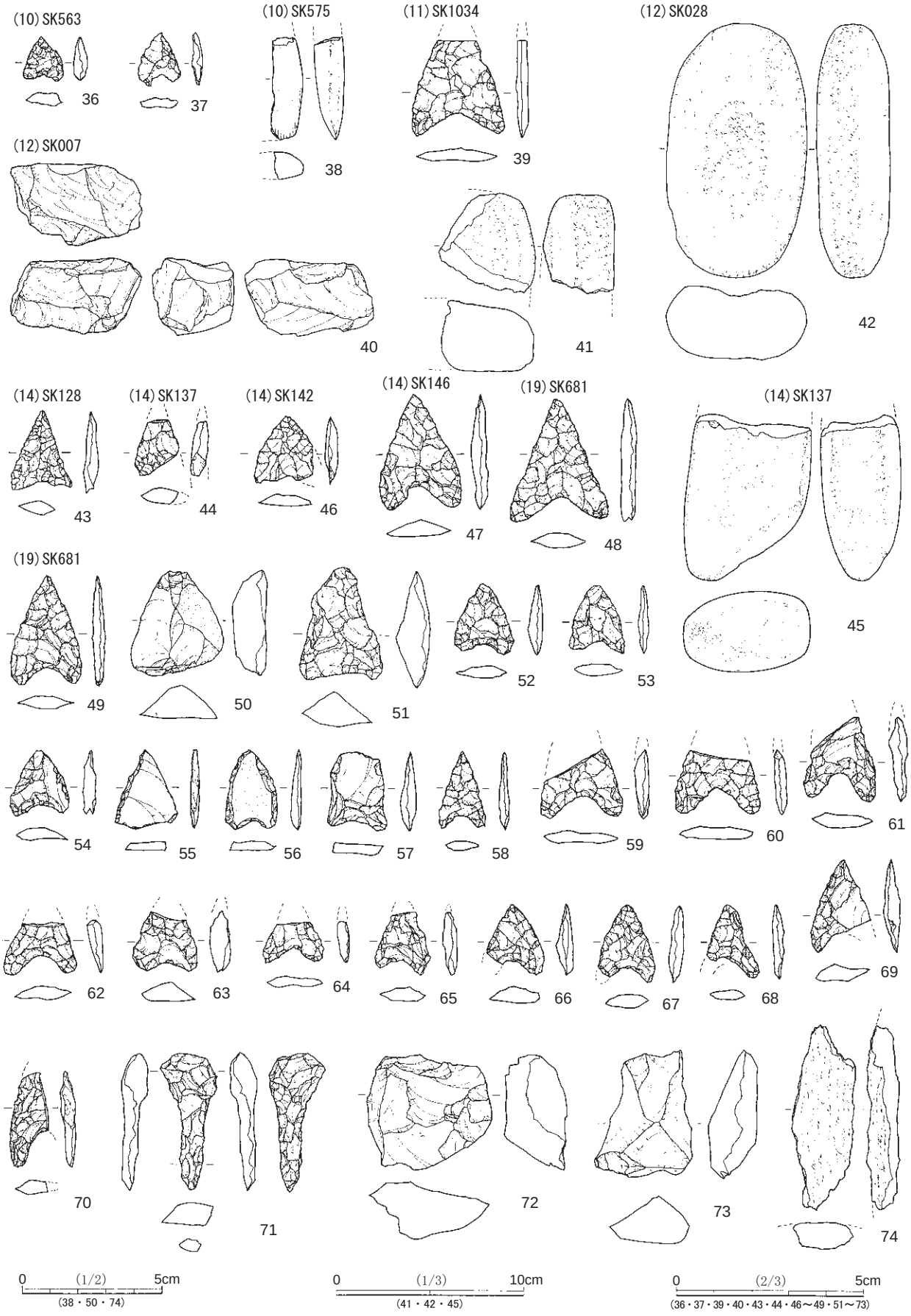
34



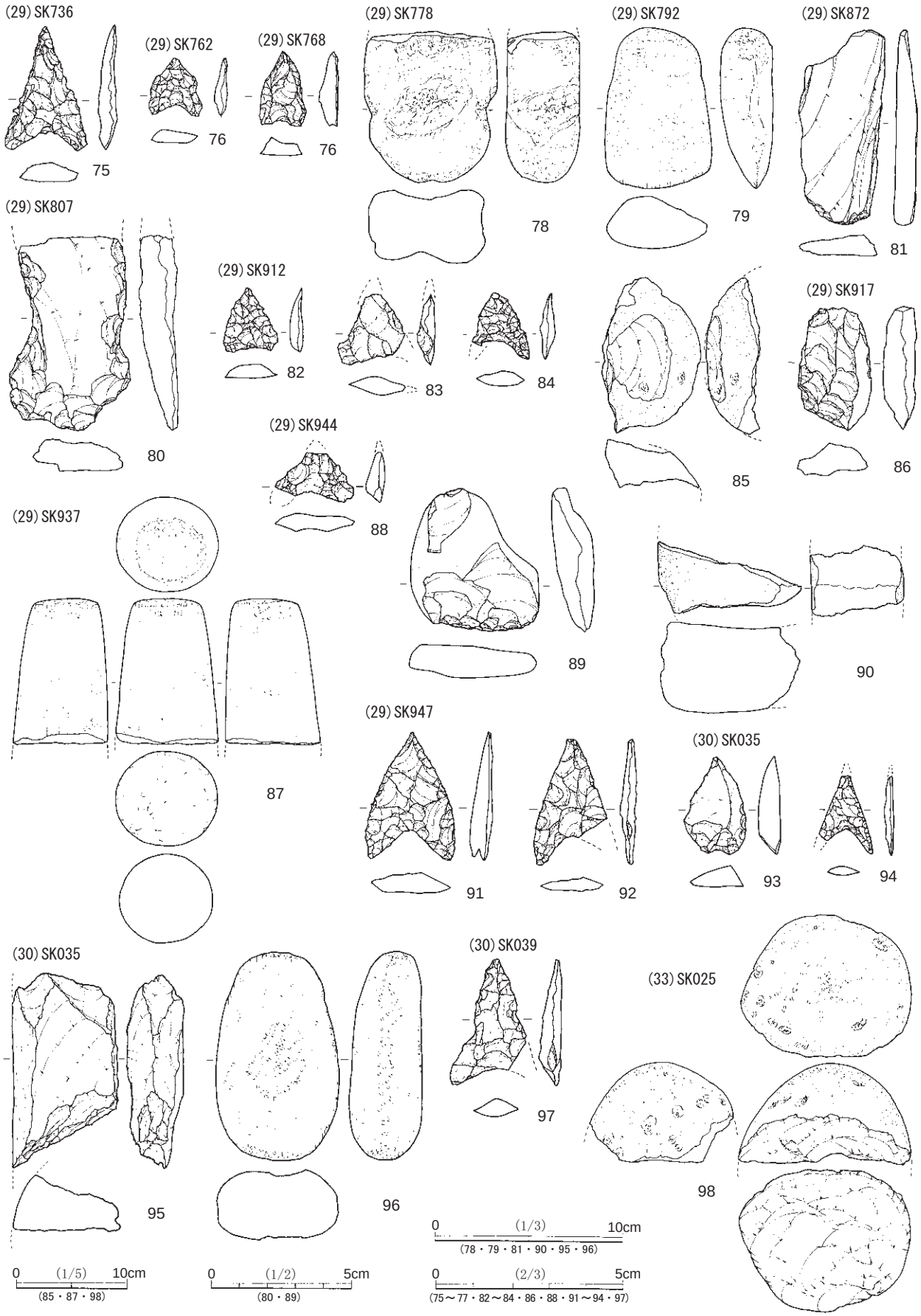
35

0 (1/2) 5cm

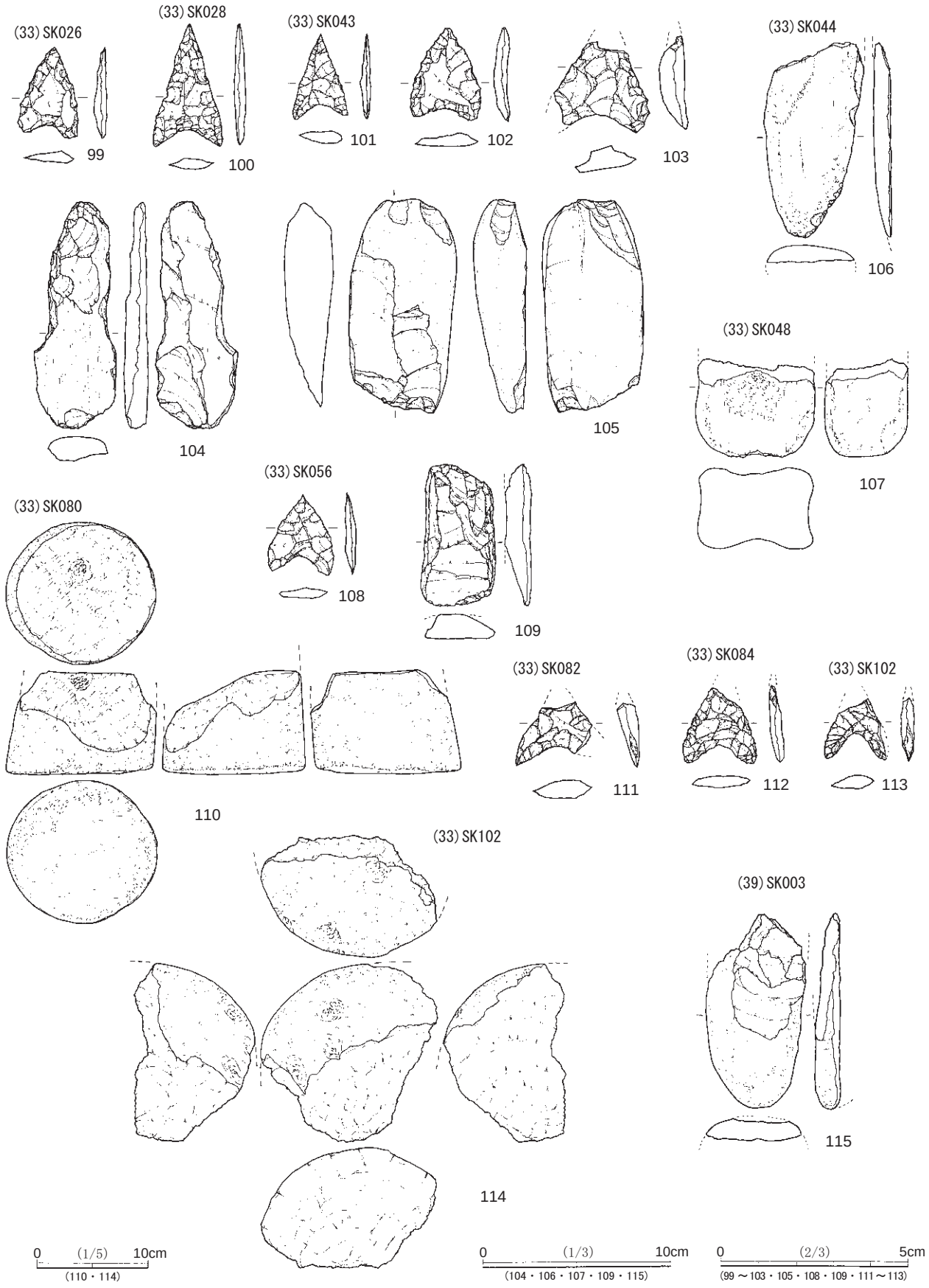
第258図　土坑等出土石器（3）



第259図　土坑等出土石器（4）



第260図　土坑等出土石器（5）



第261図　土坑等出土石器（6）

第３節　遺構外出土遺物

１　土器

遺構外からは遺構形成時期である中期後葉の土器を主体として、それ以前及び以降の土器も出土したが、いずれも出土量は少ない。地区ごとに紹介する。

(1) 区（第262図・図版109）

１は井草１式である。口縁端部に横位方向、口頸部に斜位方向の縄文を施す。口縁の内側に稜を持つ。２は五領ケ台式直後のもので、三角形の沈刻文を囲んで押引文と沈線文を施す。３・４は幅の狭い磨消縄文が認められ、加曽利Ｅ3式の古～中段階と思われる。５・６はともに櫛歯条線を施し、６には沈線区画もある。５は加曽利Ｅ3式、６は称名寺式であろう。７・８は堀之内１式の古い部分に属すると思われる。８は口縁突起に対向するＣ字状文を配し、下端とその左右に小輪を付ける。７は８と同位置の小輪と胴部の沈線文様が認められる。

(2) 区（第262図・図版67・109）

１は胴部最大径27㎝、残存高40㎝を測り、胴部は全周する。磨消懸垂文は幅が狭く、12単位である。地文は残存部上端にＲＬ、中段に０段多条のＲＬ、下段に０段多条のＬＲＬである。加曽利Ｅ3式古段階であろう。２は器台で、貫通孔がほぼ等間隔に５個開く。

(3) 区（第262図・図版109）

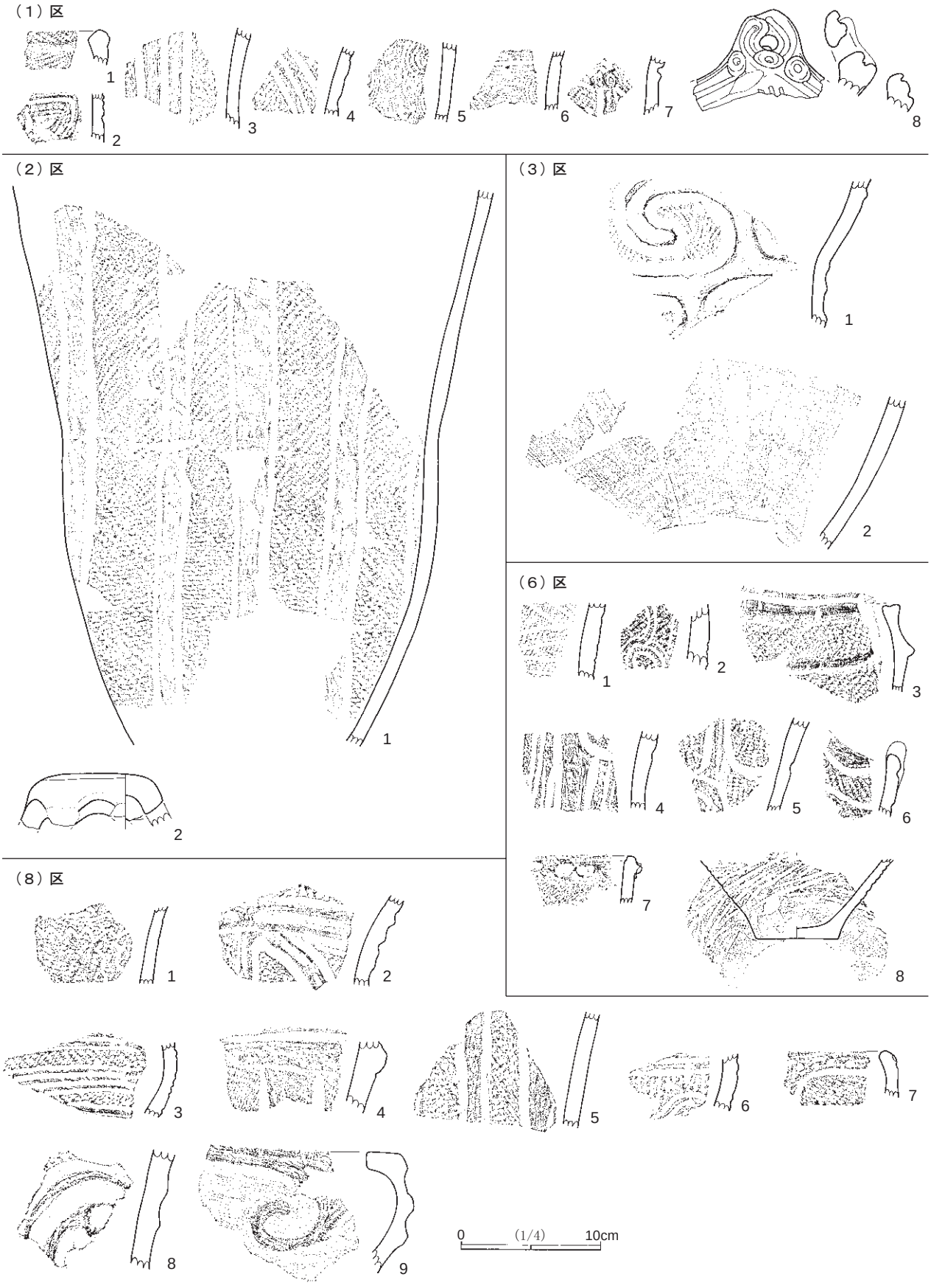
１は断面三角形の隆帯により大振りの渦巻文を施す。加曽利Ｅ3式のいわゆる梶山類・胴部隆帯文土器である。２は全面に直線の櫛歯条線文を施す胴下部の破片である。

(6) 区（第262図・図版109）

１は縄文地に多方向の沈線を施す。２は半截竹管による２条から３条1単位の沈線で大木8b 式的な胴部文様を施す。３は口縁部に隆線による枠状の区画文のみを施す。４は沈線による口縁部枠状文の一部と胴部磨消懸垂文が認められる。胴部の地文は条線である。５は不規則なＵ字、逆Ｕ字状区画文を施す。１は加曽利Ｅ式前半、２は同2式、３は同3式中～新段階、４は同3式の西関東系の土器である。５も同3式であろう。６は称名寺式の口縁部破片、７は加曽利Ｂ式の紐線文系の粗製土器、８は加曽利Ｂ2式で胴下部に綾杉状の条線を施す。

(7) 区（第263図・図版109・110）

１は隆線による渦巻文に２列の押引文が沿う。阿玉台２式であろう。２は無文の口縁部下に爪形文を２段施した隆帯が付く。勝坂式である。３は上方と左右に孔が開く左右非対称の橋状突起を持つ。突起には集合沈線文を施す。口縁部には貼り付け隆線による区画文様が認められる。４～６は立体的な突起片である。４は背割れ隆帯が孔に絡む。５は正面、左右、裏面に孔が開く突起の上に、ラッパ状に開いた管状突起が乗る。６は裏面に沈線による半渦巻文が付く環状の突起である。７は口縁部付近の破片で、交互刺突文と太い沈線による渦巻状の文様を施す。８はくずれた交互刺突文の下に櫛歯条線文、９は櫛歯状工具による刺突文列の下に刻み付きの低い隆帯が垂れ、その左右に櫛歯条線文を施す。10は縄文が付く背割れ隆帯による区画文内に沈線による小型渦巻文と鋸歯文を施す。11は2条の沈線が乗る肥厚した口縁の下に櫛歯条線を地文として横位の沈線が認められる。12は、くの字状に屈折した口縁部下に貼り付け隆帯が認められる。13は波状突起を持つ口縁下に背割れ隆帯による区画文と集合沈線文を施す。14は口縁直下の破片で、背割れ隆帯による区画文が認められる。以上、３～14はいわゆる中峠式を含む加曽利Ｅ1式古段階で



第262図　遺構外出土土器（1）

第263図　遺構外出土土器（2）

あろう。15は舌状突起下に隆線による区画文と波状文による口縁部文様帯を持つ。加曽利Ｅ1式新段階であろう。16は隆線による口縁部文様の一部が剣先文となる。18は３本１単位の沈線によるクランク状の胴部文様、19は同じ胴部文様の一部が剣先文となる。16～19は加曽利Ｅ2式古段階であろう。20は隆線による口縁部渦巻文様が認められ、21～23は比較的幅の狭い磨消懸垂文を施す。24～27は連弧文土器で、26を除き弧線間は磨り消される。28・29は曽利式系土器である。これら20～29は加曽利Ｅ3式古段階であろう。30は波状口縁上に橋状突起を付け、細い沈線によって狭い口縁直下の無文帯を画する。橋状突起下にはやはり細い沈線で繋球文を描く。加曽利Ｅ3-4式と思われる。31は堀之内１式、33はおそらく加曽利Ｂ式の精製土器の胴部破片であろう。

(8) 区（第262図・図版110）

１は胴部破片で、２列の波状沈線を横位、縦位に施す。２は２本隆線による口縁部文様帯下部区画と幅広の隆帯による胴部文様が認められる。上端には口縁部文様帯内の集合沈線文が残る。３は口縁部近くの破片で、半截竹管による平行沈線で横U字形の文様が２段施されるようである。４・５は磨消懸垂文で、４には幅のある隆線による口縁部文様帯下部区画が見える。６は連弧文土器で､弧線間を磨り消している。７は口縁下に円形の刺突列を付け、その下に太めの沈線で逆U字状文を施す。８は太い断面三角形の隆線による曲線文様を施す。９は浅鉢で、太い隆帯で渦巻文を施す。１・２は加曽利Ｅ1式、３は同2式、４～８は同3式であろう。

(9) 区（第264図・図版110）

１～３は口縁部文様帯の枠状区画文が残る。１・２の隆帯は低く、１では下部区画は沈線となり、磨消懸垂文も見られる。３は太い沈線区画である。４は太く浅い沈線による磨消懸垂文を施す。５は有孔鍔付土器である。１～３は加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。

(10) 区（第264図・図版110）

１～12は撚糸文土器である。１～８は井草１式で、いずれも口頸部は横走する縄文が認められる。１は口頸部に、２・３は口縁端部に押圧縄文を施す。９・10は井草２式で、口縁直下から縦走する縄文を施す。11はミニチュア土器で口縁端部は無文である。13・14は沈線文土器で、13は刺突列に平行する細沈線が見られる。14は無文の尖底である。

15は左右非対称の山形突起を持つ｡突起下には断面三角形の隆起線とペン先状工具による押引文を施す。阿玉台１ｂ式であろう。16・17は勝坂式で、16の口縁直下にはキャタピラ文が、17には刻み付き隆帯による半渦巻文が認められる。18は左右非対称の眼鏡状突起の破片である。突起頂部から突出して垂下した隆帯は左右に分岐して口縁部文様帯の下部区画帯となる。右側の口縁部には末端が半渦巻の交互刺突文、刻み目、沈線が見られる。19は外反した口縁下に交互刺突文、その下に背割れ隆帯によるクランク文を施す。縄文と間隔の粗い沈線文が加えられる。20は口縁下に無文帯を設け、その下に波状沈線と縄文、21は口縁下に縄文帯を設け、その下の突出した隆帯上に指頭圧痕を施す。22は内屈した口縁部に沈線文様を施す。18・19ともいわゆる中峠式、20～22も同時期と思われる。23～27は背割れ隆帯による半渦巻文やクランク文などを口縁部文様帯に施す。24・25は隆帯の先端が剣先状になる。加曽利Ｅ1式新段階～2式古段階であろう。28は１本の隆線による渦巻文がしっかりと巻く。同2式新段階～2-3式であろう。29は加曽利Ｅ式前半の磨り消されない懸垂文と蛇行沈線の胴部破片である。30は有孔鍔付土器で､孔はきわめて小さい。器表面は焼成前に赤彩されている。31は背の低くなった隆線による渦巻文が、32は断面三角形に高く突出

第264図　遺構外出土土器（3）

したやや巻きのゆるい渦巻文が認められる。加曽利Ｅ3式古段階でもやや新しいか中段階のものであろう。33は連弧文土器で弧線間は磨り消されている。34は曽利式系土器で、口縁端部には大型の爪形文、口縁部には粗雑な弧線文様を施す。加曽利Ｅ3式古段階であろう。35は低い断面蒲鉾形の隆線による大型の渦巻文様が認められる。加曽利Ｅ3式新段階のものであろう。36は口縁直下の無文帯と縄文施文部の境に段を持つ。37は指頭による凹線の上部に縄文、下部に櫛歯条線文が認められる。38は内面にＣ字状の文様を付けた口縁突起を持つ称名寺式で、沈線による区画文内は条線文である。39は口縁部に帯縄文、40は弧線状の区画内に縄文を充填する。41は口縁に紐線文を施す。いずれも加曽利Ｂ式であろう。42は低い隆線上に刻み目を施す。安行式であろう。

(11)・(12) 区（第265図・図版110）

１は隆帯に沿ってキャタピラ文を施す。阿玉台３式であろう。２は波状口縁で、口縁端部には２条の沈線が乗る。頚部に交互刺突文を配し、口縁部と胴部を区画する。いわゆる中峠式であろう。３・４は口縁部文様帯に背割れ隆帯によるクランク文や半渦巻文を施す。５は突起部に小型の半渦巻文が認められる。いずれも加曽利Ｅ1式であろう。６は器台部の破片で、位置の異なる孔が２個認められる。７～９はいずれも舌状の口縁突起を持つもので、その下に７・８は楕円文、９は巻きのゆるい渦巻文を配する。加曽利Ｅ3式中～新段階であろう。10～12は磨消懸垂文、13は指頭で描いた蕨手文を施す。14も蕨手文の付く口縁部破片、15は無文の口縁直下を沈線で画する。16は断面三角形に近い隆線が波状口縁に沿う。17・18は同様の胴部破片でともにいわゆる梶山類・胴部隆帯文土器であろう。19は連弧文土器、20は微隆起線文の施された加曽利Ｅ4式であろう。21は注口土器である。22は安行１式、23は安行式の粗製土器である。

(13) 区（第265図・図版110）

１は背割れ隆帯で口縁部文様を施す。２は両側に沈線が沿う隆線の懸垂文である。３は蛇行沈線、４は懸垂文と弧状文様が付く。５は口縁直下の無文帯と縄文施文部の境に段が付く。６はボタン状の口縁突起である。１は加曽利Ｅ1式、２～４は同前半、５は同3-4式であろう。

(14) 区（第265図・図版110）

１はやや簡素化した胴部隆線文様を持つ梶山類である。２は突起頂部が窪んだ橋状突起を持ち、口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。３・５も微隆起線を施す。４は細い沈線による区画文を持つ。６は櫛歯条線文と上部に縄文を施す。１は加曽利Ｅ3式新段階、２～５は同4式、７の底部も同時期であろう。

(16) 区（第265図・図版111）

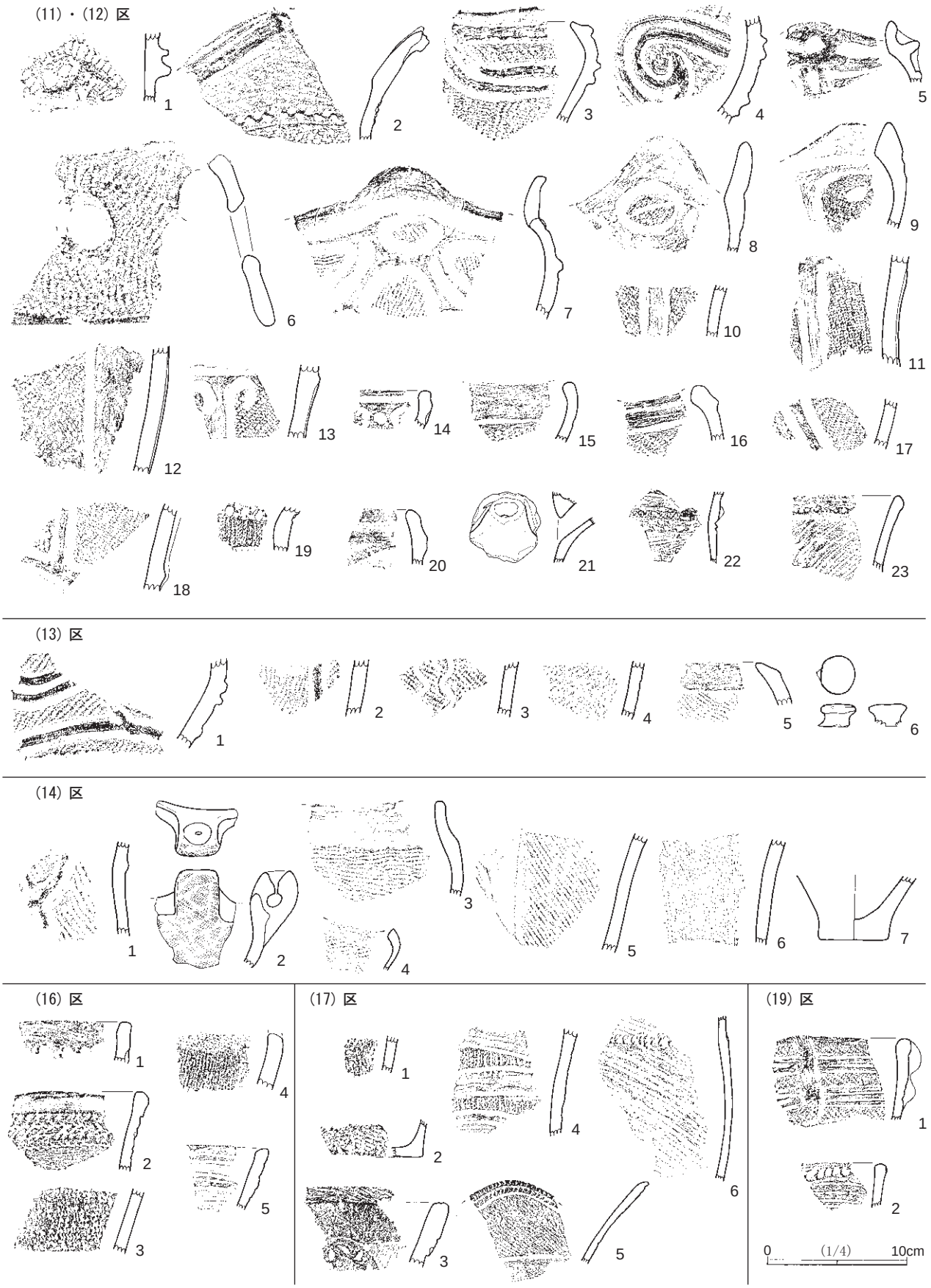
１～３は浮島式で、１は凹凸文、２は２段の変形爪形文の間に刻み目を加え、その下に平行沈線による三角形状の文様を施す。３は波状貝殻文である。４は２方向に撚糸文を施す。連弧文土器であろうか。５は縄文のかかった低い隆線と平行沈線を施す。安行１式であろう。

(17) 区（第265図・図版111）

１・２は浮島式の波状貝殻文である。３は折り返しによる幅の広い口縁部無文帯の下にℓの撚糸文を地文として幅1.2㎝の平低な環状の粘土帯を貼り付け、その上に方向の異なる刺突文を施す。口縁端部にもℓの撚糸文を施す。東北南部の大木５式であろう。４はくずれた連弧文土器で、磨消の幅が広い。５は加曽利Ｂ3式、６は安行式の粗製土器であろう。

(19) 区（第265図・図版111）

１は安行１式、２はその粗製土器であろう。



第265図　遺構外出土土器（4）

(20) 区（第266図・図版111）

1は太めの沈線によるU字状区画文内に縄文を施す。2は口縁直下の無文帯と縄文施文部の境に段が付く。どちらも加曽利E3式新段階～3-4式であろう。

(21) 区（第266図・図版111）

1は舌状の突起下に角押文が上下2段に認められる。阿玉台1b式であろう。

(25) 区（第266図・図版111）

1は波状口縁下に小輪を2個連ね、以下縄文地に沈線による区画文様を施す。堀之内1式であろう。

(26) 区（第266図・図版111）

1は黒浜式で、左半に撚糸文L、右半に撚糸文Rを施す。2・3は角押文を施す。阿玉台式直前～1a式であろう。4は無文地で、口縁部に半円状の貼り付け文が付く。口縁の断面形状は阿玉台式である。5は軽い波状口縁で、左右から延びる口縁直下の無文帯がぶつかってつまみ状に盛り上がる。無文帯の上縁及び下縁には刺突列を施す。胴上部には内部が無文の細い沈線による逆U字状区画文が認められる。加曽利E3-4式であろう。6の微隆起線下は櫛歯条線文である。7は称名寺式、8は口縁上に粘土紐を斜めに貼り付けた突起が付く。堀之内1式であろう。9は加曽利B式の胴部片であろう。

(29) 区（第266図・図版67・111）

1は撚糸文土器である。細かい撚糸文を密接して施す。2～4は同一個体で、関山式である。環付縄を多段に施し、4では羽状になる。3ではコンパス文が認められる。5・6は阿玉台式直前と思われ、隆起線に沿って角押文を施す。5の裏面には沈線が付く。7は縄文地に幅広の押引文と幅狭の角押文を施す。阿玉台3式であろう。8は胴上部に逆U字状の隆帯が認められる。勝坂式であろう。9・10は口縁部文様帯に低い隆線による枠状文を施す。10の胴部文様帯は磨消懸垂文が逆U字状につながる。11は磨消懸垂文と逆U字状の磨消帯が見られる。12は磨消懸垂文を施す底部である。これらは加曽利E3式であろう。13・14は口縁に平行して刺突文を施すもので、13は上下2帯の縄文帯が重なっている。区画沈線はやや太い。15・16は口縁直下の無文帯と縄文施文部の境に段が付く。いずれも胎土中にすりつぶした土器片粒を含む。13～16は加曽利E3-4式であろう。17～19は胴部に縄文を充填した微隆起線によるU字、逆U字状区画文を施す。加曽利E4式であろう。20はキャリパー型の器形で、全面に細い沈線区画による文様を施す。加曽利E4式古段階であろう。21は波状口縁で口縁端部に刻みを持ち、その下に太い沈線で1条の沈線と逆コ字状の区画文を施す。時期は不明である。22は瓢形土器または有孔鍔付土器の胴部橋状突起であろう。23～32は称名寺式であろう。区画沈線内に縄文を充填するが、23の縄文は細く、32は糸状のきわめて細い縄文である。

(30) 区（第267図・図版111）

1は刻みの付いた隆帯を伴う口縁突起である。右下に孔が開く。勝坂式であろう。2～5は称名寺式であろう。5は縄文帯内に刺突文が付く。

(33) 区（第267図・図版111）

1は口縁端部、胴部とも半截竹管による平行沈線文を施す。胴部には浅い縄文が付く。阿玉台2式であろう。2は断面蒲鉾形の隆線による大振りの渦巻文を施す。3は2が簡素化した単隆線による大型渦巻文となるようである。4は口縁に中央がくぼんだつまみ状突起が付く。突起左の文様区画は微隆起線であるが、微隆起線断面は蒲鉾状である。5・6は微隆起線による区画文である。2は加曽利E3式新段階、3

第266図　遺構外出土土器（5）

は同段階～3-4式、４は3-4式～4式古段階、５・６は同4式であろう。７は舌状の口縁突起下に沈線区画がある。口縁直下の無文帯を画する沈線の突起下頂部から、右下がりの無文帯を画する2条の沈線が残る。８も沈線区画の土器で、細い沈線によるU字状、逆U字状区画文内に縄文を施している。７・８とも加曽利Ｅ4式であろう。９～11は称名寺式であろう。12は安行式の粗製土器で、口縁の指頭圧痕には指先の指紋が明瞭に残る。

(36) 区（第267図・図版111）

１は舌状の突起を持つ口縁部破片で、太い沈線で口縁部文様帯の枠状文を施す。２も太めの沈線による区画である。３は磨消懸垂文、４は隆線による渦巻文様、５は微隆起線による区画文を施す。６は左右で太さの異なる縄を不均等に撚り合わせた縄文が付く。７は有孔鍔付土器である。１・２・４は加曽利Ｅ3式新段階、５は同4式であろう。

(39) 区（第267図・図版111）

１の口縁部文様は、結節沈線が乗る細隆起線とこれに沿う細かな結節沈線により三角形状の区画を作り、中を貝殻腹縁文で埋めている。頚部には同様の結節沈線で波状文を施す。田戸上層式であろう。２は口縁端部に押引文、口縁直下に細い条線を配し、その下に小型の交互刺突文を施す。３・４は同一個体で、３には交互刺突文と沈線が沿う隆線を、４には縦走する隆線を施す。薄い器壁で堅く焼成されている。５～14はいずれも地文に縄文が付く。６は山形突起の頂部に縄を深く押し付けて２尖としている。円形竹管刺突と沈線で文様を構成し、突起下には低い瘤が付く。７は山形の突起下にＹ字状の細い隆線を貼り付け、波状の口縁に沿って多条の平行沈線を施す。８は間隔の離れた２尖の突起下に隆線を配し、その下に三角形の沈刻文を中心にして沈線区画を施す。９は隆線による渦巻文と角押文による区画文が認められる。10は三叉の沈刻文を中心として三角形区画が認められる。11・12はつまみ状の突起が付く。13・14は細い隆線が付き、13には隆線上にも縄文がかかる。以上は17・18の底部直上の断面が内弯する底部とともに五領ケ台式直後であろう。15は大型土器の突起で、内面に隆帯による半渦巻文や三叉の沈刻文が表現されている。外面には突起部に半截竹管による3条の浅い押引文、その下に枠状の区画文が残る。16は隆起線の両側に細い角押文を施す。15は阿玉台式直前、16は同時期か阿玉台１ａ式であろう。19は櫛歯条線文、20は太めの沈線による区画文内に縄文を充填する。無文部分が広い。加曽利Ｅ3-4式であろう。21は安行１式の小型土器であろう。

(40) 区（第267図・図版111）

１は交互刺突文が見られる。五領ケ台式直後であろう。２は撚糸文を地文として磨消懸垂文を施す。加曽利Ｅ3式前半であろう。３は櫛歯条線文を施す。４は太い条線が口縁端部までかかる。曽利式系土器であろう。

(45) 区（第267図・図版112）

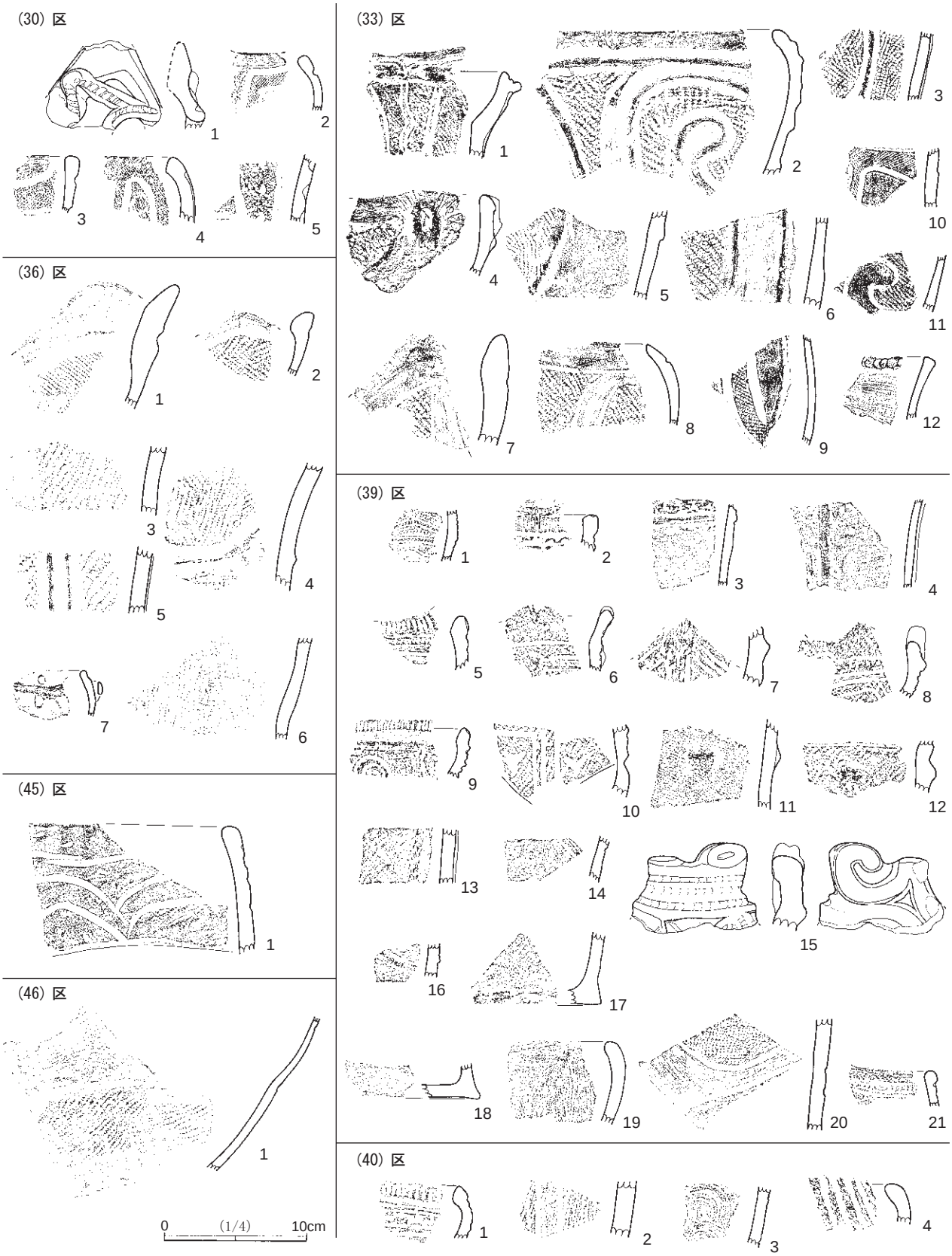
１は器面の調整が粗い。沈線で上下を画した中に２重の弧線文様を施す。沈線は太く明瞭に描かれる。安行３ｃ式であろう。

(46) 区（第267図・図版112）

１は頸部に広い無文部を持つ。鉢形になると思われる。加曽利Ｂ3式であろう。

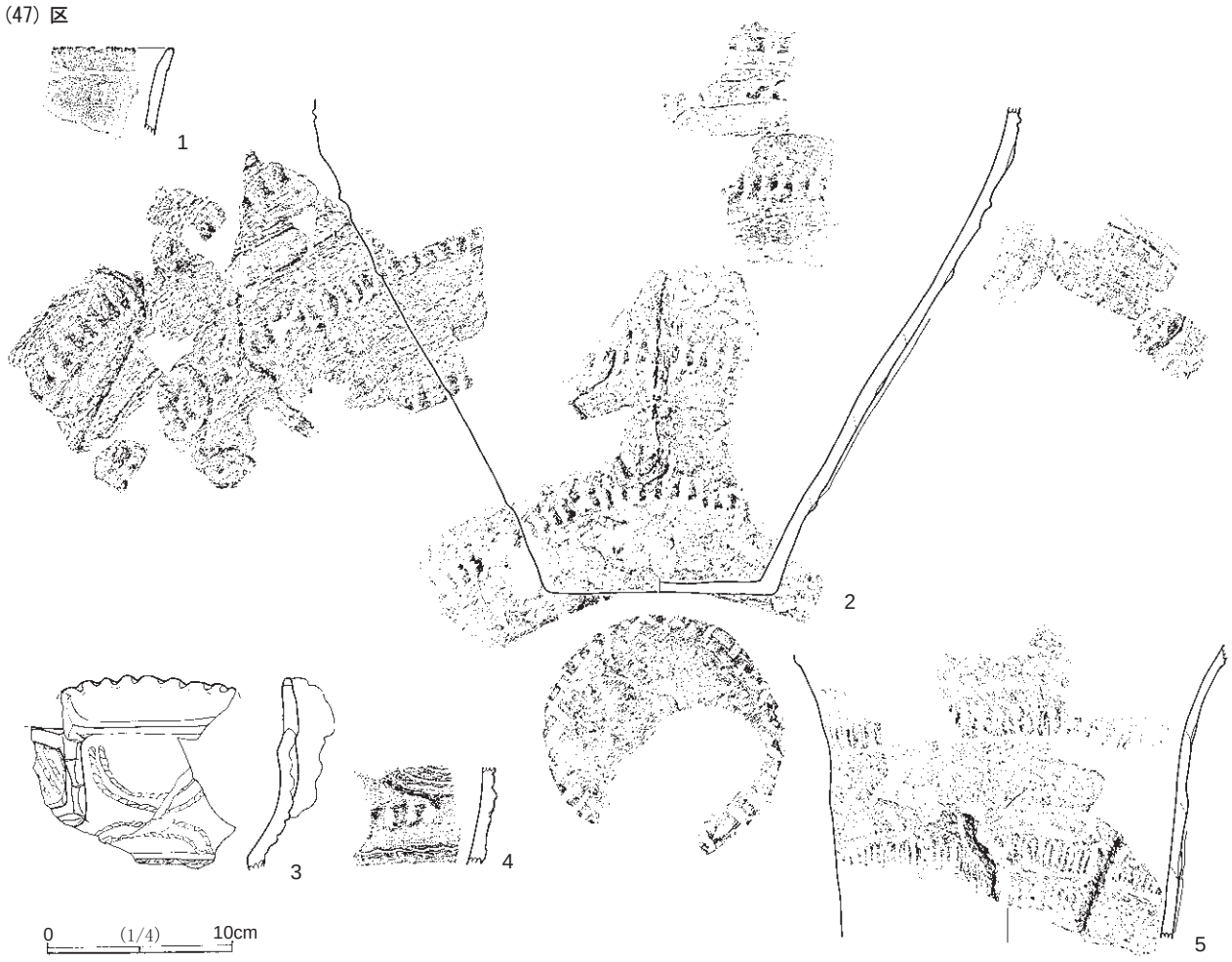
(47) 区（第268図・図版112）

１は折り返し口縁の端部に刻み目が付き、以下無文である。中期初頭であろう。２は底の広い底部を含



第267図　遺構外出土土器（6）

む胴上部にかけての大型破片の集合であるが、これ以上接合しない。底径12㎝、推定最大胴径38㎝を測る。胴上部に有節線文を伴った窓枠状文を配し、その下に底部近くまで垂下する蛇行隆線を施す。約７㎝間隔で装飾的な輪積み痕が多段に重なる。底面には網代痕が残る。３・４は同一個体で、３は大型の扇状突起を持つ。突起下には有節線文による対向した弧線文を施し、扇状突起から垂れた隆線は口縁部文様帯の下部区画帯とつながる。口縁部文様帯の区画内には有節線文を区画に沿って施し、さらに区画内に施す。５は爪形文列と蛇行隆線を施した胴部の大型破片である。２は阿玉台１ｂ式、３～５は阿玉台２式古段階であろう。



第268図　遺構外出土土器（7）

2　土製品

(3) 区（第269図・図版114）

円板が１点出土した。完存品である。１は周縁の磨りがやや浅い。孔は両面からやや斜めに穿孔している。櫛歯条線文が認められる。

(6) 区（第269図・図版114）

円板が２点出土した。ともに完存品である。１は周縁の磨りがやや浅く、２は深い。２には表裏両面に未貫通の小孔があり、磨消懸垂文が残る。

(7) 区（第269図・図版114）

土器片錘が１点、円板が17点出土した。１は土器片錘で、周縁を軽く研磨する。胎土に金雲母を含む。２～18は円板で、２・３・９・12が完存品である。２・12は周縁の磨りがやや浅い。平面形状は真円ではない。ともに磨消懸垂文が認められる。３は周縁の磨りは深く、ほぼ均等な両面穿孔であるが、孔は真円ではない。４～６・11・14～16は周縁の磨りは深く、孔は内面からの穿孔が強い。４には磨消懸垂文が残る。７・８・13・17は周縁の磨りは深く、孔はほぼ均等な両面穿孔である。９は周縁の磨りはやや浅く、無孔である。10は大型で周縁の磨りは深い。両面穿孔であるが斜めに穿孔している。18は周縁の磨りが浅い側と深い側があり、孔は両面穿孔であるが極端に偏っている。

(8) 区（第269図・図版114）

円板が４点出土した。１は周縁の磨りが深く、両面穿孔であるが表面からの穿孔がやや強い。２は完存品で、周縁の磨りは深く、表面も全体に磨りが見られる。３も完存品で、周縁の磨りはやや浅い。４は周縁の磨りは深く、両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。３・４とも磨消懸垂文が残る。

(9) 区（第269図・図版114）

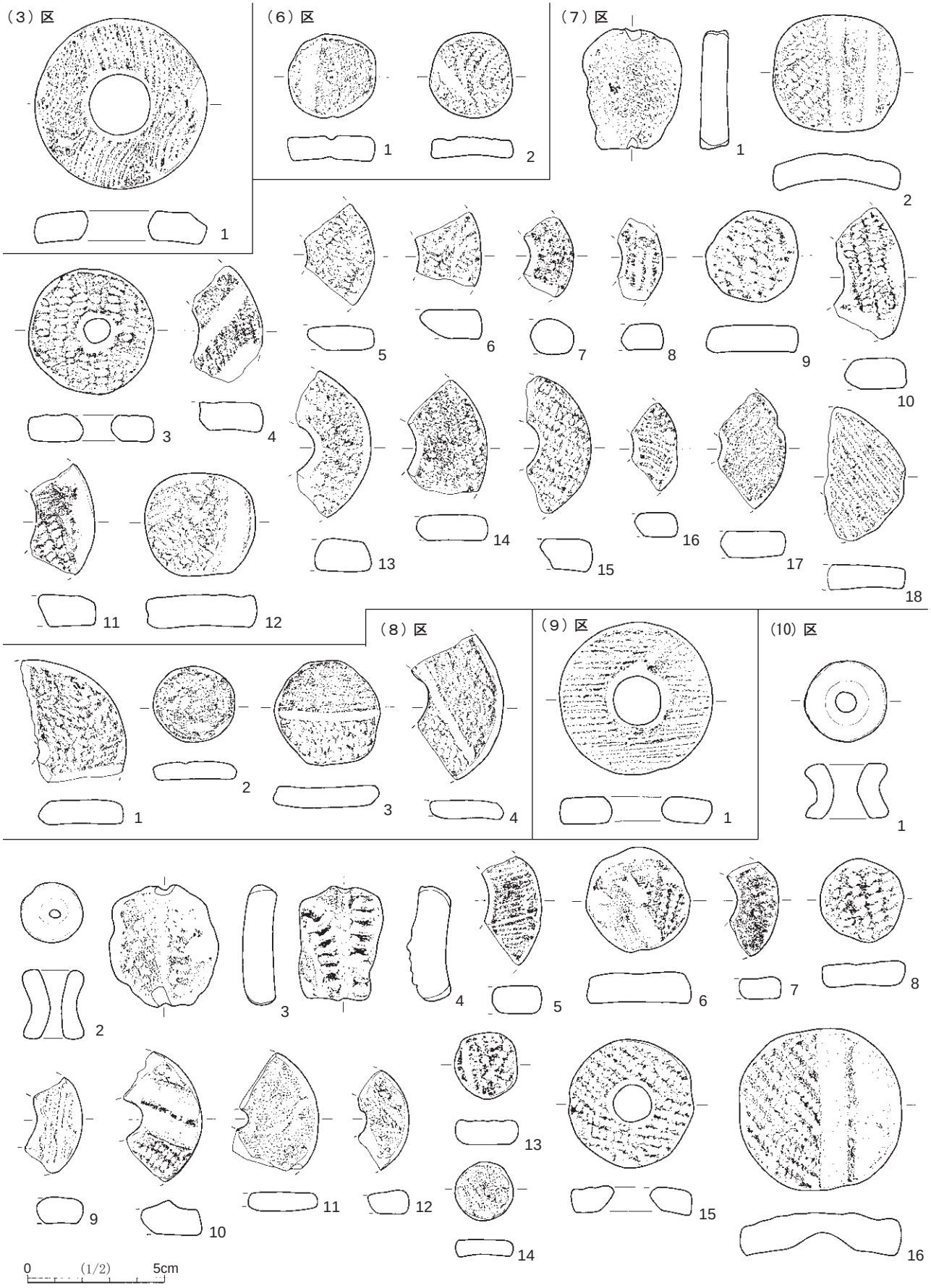
円板が１点出土した。完存品で、周縁の磨りはやや浅い。ほぼ均等な両面穿孔である。櫛歯条線文が残る。

(10) 区（第269・270図・図版114・115）

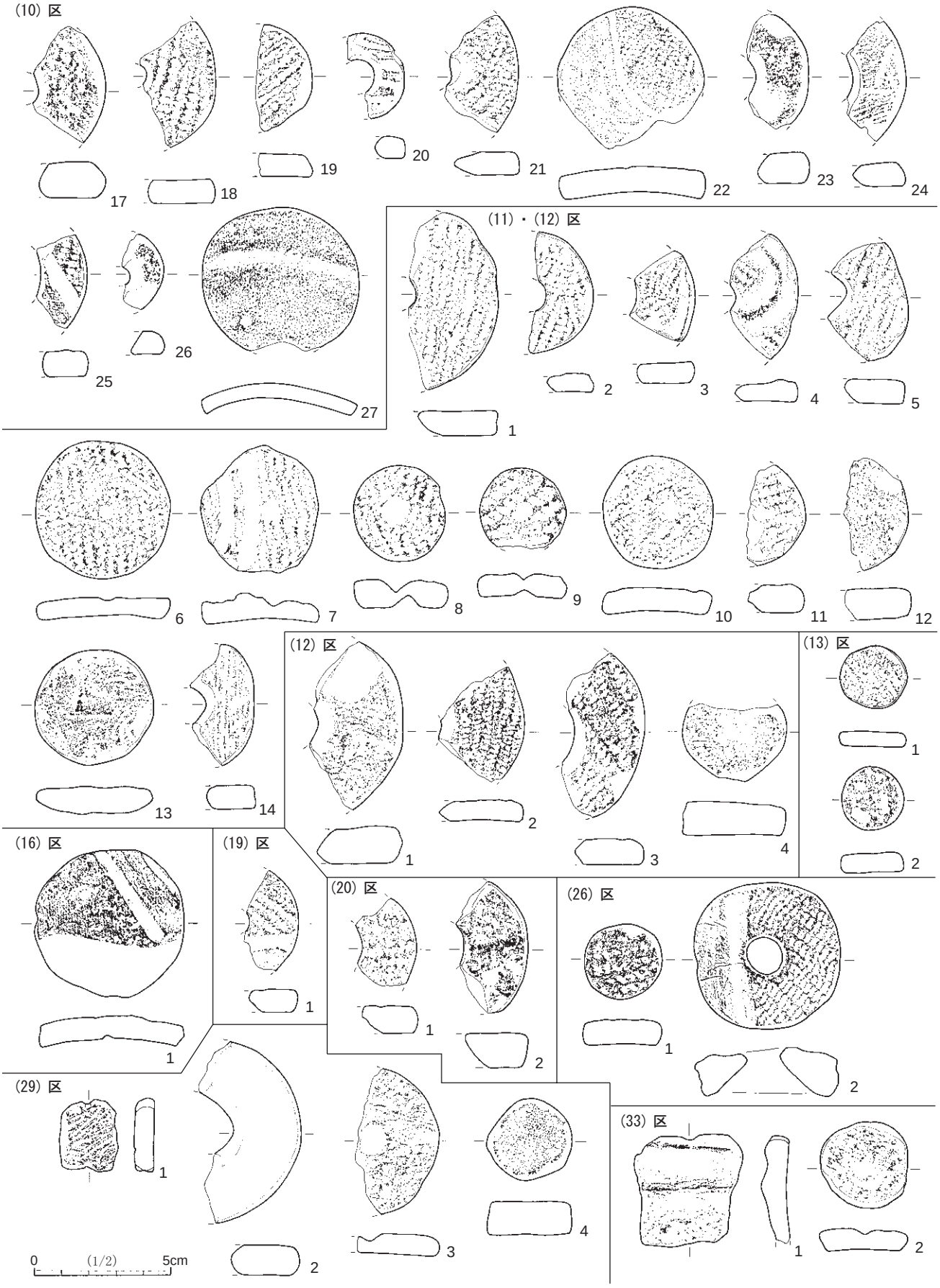
耳栓２点、土器片錘２点、円板23点が出土した。１・２は耳栓である。１は裏面の周縁にわずかな欠けがあり、２は完存品である。いずれも有孔で、１は臼形、２は鼓形をなす。ともに胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。赤彩はない。３・４は土器片錘である。３は周縁を軽く研磨し、４はよく研磨している。３は刻みの付いた隆帯が、４は半截竹管内側を連続押捺した隆帯が認められる。５～27は円板で、６・８・13～16が完存品である。６・８・13・14・22・27は無孔、19は不明、他は孔を持つ。無孔のものの内、27は周縁の磨りが深く、他はやや浅い。22には中位の太さの沈線による曲線的な区画文様が認められ、27は有孔鍔付土器ないしは瓢箪形土器の無文地に微隆起線文を施した文様が認められ、内面には赤彩が残る。有孔のものの内、５・17・18・24は周縁の磨りがやや浅く、孔は両面からほぼ均等に穿孔される。７・９・20は周縁の磨りが深く、孔は両面からほぼ均等に穿孔される。10・15は周縁の磨りがやや浅く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。なお、10には微隆起線文が残る。12・21・25は周縁の磨りが深く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。23・26は逆に表面からの穿孔が強い。なお、25には磨消懸垂文が残る。11は周縁の磨りがやや浅く、孔は小さく管状の穿孔である。16は周縁の磨りがやや浅く、内面に擂り鉢状の未貫通の孔が認められる。微隆起線文が残る。

(11)・(12) 区（第271図・図版115）

平成９年度確認調査Ｃ区・Ｄ区から出土したもので、確認トレンチが(11)区と(12)区にまたがっており、



第269図　遺構外出土土製品（1）



第270図　遺構外出土土製品（2）

どちらの区に属するか確定できないため、(11)・(12) 区出土遺物として報告する。円板が14点出土した。６～10・13が完存品である。10・13が無孔、12は不明、他は孔を持つ。10は周縁の磨りが深い。13は周縁から裏面にかけてほぼ全面凸レンズ状に磨りが認められる。１・５は周縁の磨りが浅く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。２・４・14は周縁の磨りがやや浅く、孔は両面穿孔であるが裏面からの穿孔が強い。３は周縁の磨りが深く、孔は両面からほぼ均等に穿孔している。６～９・11は孔が未貫通なものである。孔はいずれも小さく、６・７は表面のみ、８・９は両面、11は裏面のみに認められる。周縁の磨りは６・８がやや浅い程度、７はかなり浅く、他は深い。なお７には隆線が残り、いわゆる梶山類であることが分かる。

(12) 区（第271図・図版115）

４点の円板が出土した。１～３が有孔で、４は無孔である。１・２は周縁の磨りが深く、孔は両面穿孔で、表面からの穿孔が強い。３は周縁の磨りが深く、孔は両面からほぼ均等に穿孔している。４は周縁の磨りが浅い。

(13) 区（第271図・図版115）

２点の円板が出土した。いずれも小型の完存品である。無孔で、１は周縁の磨りがやや浅く、２は深い。

(16) 区（第271図・図版115）

円板が２点出土した。図示した１点は完存品である。周縁は打ち欠きのみで、表面の下半まで打剥が及んでいる。裏面に未貫通の小孔がある。平行する２条の沈線文が残る。

(19) 区（第271図・図版115）

円板が２点出土した。図示した１点は周縁の磨りは深く、両面穿孔で裏面からの穿孔が強い。磨消懸垂文が残る。

(20) 区（第271図・図版115）

２点の円板が出土した。ともに周縁の磨りは深く、両面穿孔で裏面からの穿孔が強い。

(26) 区（第271図・図版115）

４点の円板が出土した。図示した２点は完存品である。１は無孔で、周縁の磨りが深い。２の周縁の磨りはやや浅い。孔は両面穿孔であるが、裏面からの穿孔が著しく大きく擂り鉢状をなす。口縁部文様帯の区画隆線が残る。

(29) 区（第271図・図版115）

土器片錘１点、円板３点が出土した。１は小型の土器片錘である。糸掛けは明瞭である。２～４は円板である。２は周縁の磨りが深い。孔は両面からほぼ均等に穿孔しているが､孔の平面形状は真円ではない。３は周縁の磨りはやや浅く、表面に未貫通の孔が認められる。４は無孔で周縁の磨りはやや浅い。

(33) 区（第271図・図版115）

土器片錘・円板が各１点出土した。１は土器片錘で、糸掛けは上方のみに認められる。平行する２条の微隆起線文が残る。２は円板で、周縁は打ち欠きのみである。表面に未貫通の小孔がある。

3　石器

縄文時代の遺構外から4,344点の石器が出土した。以下、地区ごとに主なものを紹介する。

(1) 区（第271図、図版119）

１は黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部と両脚が欠損している。図示した以外では、チャートの二次加工のある剥片が１点出土した。いずれも地区東側の13H グリッドから出土した。

(5) 区

チャート製の石錐・剥片が各１点出土した。

(6) 区

硬質頁岩製の石鏃未成品１点、チャート・メノウ等の剥片が３点出土した。地区東側の14Q グリッドからの出土が多い。

(7) 区（第271図、図版119）

合計31点出土した。１・２は凹基無茎鏃である。いずれも信州系黒曜石である。１は破損資料であり、先端と片脚が欠損している。３～５は磨製石斧である。３・５は定角式石斧の基部破片、４は板状の不定形石斧の破片である。石材は３がホルンフェルス、４が緑泥片岩、５が粗粒玄武岩となっている。６～８は打製石斧である。このうち６と８は分銅形で、石材はそれぞれ砂岩とホルンフェルス、７は扁平礫を素材とした礫石斧で石材は砂岩である。９は石皿の破片である。二次的火熱を受け損壊が著しい。石材は花崗岩である。図示した以外では、砂岩製の磨製石斧の基部破片１点、トロトロ石製の打製石斧１点、安山岩・ホルンフェルス製等の磨石類６点、黒曜石・チャート等を石材とする石鏃製作に伴う石鏃未成品・剥片・砕片・石核等が12点出土した。

(8) 区（第271図、図版119）

合計232点出土した。出土位置は、遺構分布が比較的希薄な地区の南西側の16Q、16R、17Q グリッドに集中している。１～７は凹基無茎鏃である。１～３・４・７がチャート、４・５が黒曜石を用材としている。１・４・６・７は欠損資料である。８は本遺跡で唯一の有茎石鏃である。チャート製で茎は欠損している。９と10は石鏃未成品である。９は信州系黒曜石の楔形石器を、10は神津島産黒曜石の横長剥片を素材としている。図示した以外では、安山岩製の石皿の断片１点、砂岩製の磨石類３点・二次加工のある礫１点、チャート・黒曜石・ガラス質黒色安山岩を主な石材とする石鏃８点・石鏃未成品10点・楔形石器３点・石錐３点・剥片86点・砕片102・石核５点の石器製作に伴う資料が出土した。

(9) 区（第271図、図版119）

合計23点出土した。出土位置は15N・16M グリッド付近が多い。１はチャート製の凹基無茎鏃、２は信州系黒曜石製の凹基無茎鏃である。２は先端と片脚が欠損している。図示した以外では、メノウ・チャート等を石材とする石鏃未成品２点・剥片12点・砕片４点・石核３点、石英斑岩製の台石１点、砂質片岩製の打製石斧１点が出土した。

(10) 区（第271図、図版119）

合計344点出土した。内訳は、石鏃16点、石鏃未成品７点、尖頭器１点、石錐２点、楔形石器２点、剥片108点、二次加工のある剥片５点、砕片181点、石核３点、打製石斧１点、磨製石斧３点、石皿の断片５点、敲石１点、磨石類６点、円盤状石製品１点、軽石２点である。１～４・６～９は凹基無茎鏃である。石材はチャート４点（１・２・４・５）、ガラス質黒色安山岩１点（３）、黒曜石１点（７）、メノウ１点（９）

で構成される。2・4・6～9は欠損資料である。5はチャート製の平基無茎鏃、完形品である。10はチャート製の石錐である。撮み部を有する。11は硬質頁岩製の尖頭器で、周辺加工である。石材と技術的な特徴から旧石器の可能性もある。12は定角式の磨製石斧である。基部周辺が被熱により赤化している。ほぼ完形であるが、刃部は使用により若干損傷している。石材は流紋岩である。13は凝灰岩製の（有孔）円盤状石製品である。遺存率全体の約25％であり、一端に有孔部の痕跡がみられる。表裏側面ともよく研磨されている。機能・用途は不明である。

(11) 区（第271図・図版119）

合計15点出土した。出土位置は16N、17N グリッドである。1～3は凹基無茎鏃である。3は完形であるが、他は破損資料である。石材はチャート2点（1・2）、ガラス質黒色安山岩1点（3）となっている。4はチャート製の石鏃未成品である。楔形石器を素材としている。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品2点・剥片5点・砕片3点、黒曜石の剥片1点、赤玉石の石核が1点出土した。

(11)・(12) 区（第271・272図・図版119）

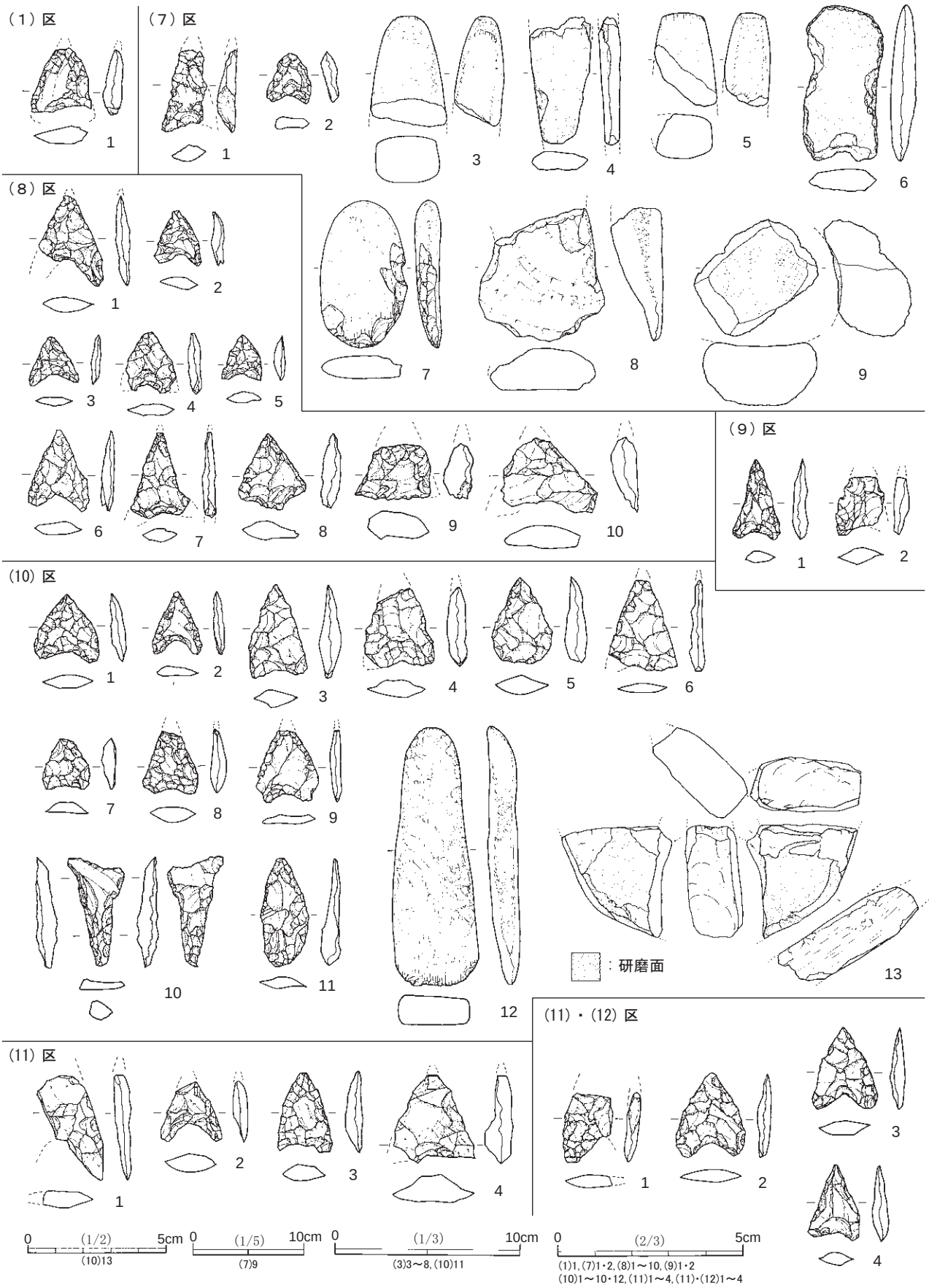
平成9年度確認調査C区、D区から出土したもので、トレンチが（11）区と（12）区にまたがっており、どちらの区に属するか確定できないため、(11)・(12) 区出土遺物として報告する。合計127点出土した。1～9は凹基無茎鏃である。1・5のみ破損資料で、他は完形品である。石材の内訳はチャート3点(3・5・8)、信州系黒曜石2点（1・6)、ガラス質黒色安山岩3点（4・7・9）となっている。10はチャート製の石鏃未成品である。先端部が未加工となっている。11は撮み部を有するガラス質黒色安山岩製の石錐である。12は定角式磨製石斧である。基部の破片で先端部が欠失している。石材は緑色岩である。13は分銅形打製石斧の一部である。安山岩で裏面に素材剥片の自然面が残存している。図示した以外では、チャート・黒曜石を主な石材とする楔形石器2点・石鏃2点・石鏃未成品7点・剥片36点、砕片57点、二次加工のある剥片3点、打製石斧2点、磨製石斧1点が出土した。

(12) 区（第272図・図版120）

合計58点出土した。出土位置は17O、17P、18P グリッドが多い。1～9は凹基無茎鏃である。石材はチャート5点（1・2・5・8・9)、黒曜石3点（3・4・6)、ガラス質黒色安山岩1点（7）で構成されている。11点のなかで完形品はわずか4点(1・8)である。9の先端部には刺突具に特徴的な使用痕(「縦溝状剥離」)がみられる。特筆すべき資料として4がある。信州系黒曜石を用材としており、表裏に精緻な平坦剥離が施されている。先端部がガジリにより、やや欠損している点が惜しまれる。大型であり非実用品の可能性が高い。10は凹基無茎鏃の未成品である。中央部に瘤状の高まりが残っている。石材は信州系黒曜石である。11は定角式磨製石斧の刃部破片である。刃部には、僅かではあるが使用による損傷が見受けられる。石材は斑糲岩である。図示した以外では、チャート・黒曜石を主な石材とする石錐1点・楔形石器1点・石鏃未成品10点・剥片類24点・砕片8点が出土した。

(13) 区（第272図・図版120）

合計21点出土した。1～5、7～9は凹基無茎鏃、6は平基無茎鏃である。このうち5点（1・3・5・7・9）は破損資料である。石材の内訳は黒曜石5点（1・3・6～8)、チャート2点（2・4)、ガラス質黒色安山岩2点（5・9）となっている。図示した以外では、チャート・黒曜石を主な石材とする楔形石器1点・石鏃未成品2点・剥片類3点・砕片2点・石核2点・原石1点、石英斑岩製の磨石類1点が出土した。



第271図　遺構外出土土石器（1）

(14) 区（第272図・図版120）

合計20点出土した。１は二次加工ある剥片である。幅広な剥片の一側縁を急角度に調整している。時代は異なるが、あたかも旧石器時代のナイフ形石器の刃潰し加工のようである。石材は良質透明な信州系黒曜石である。図示した以外では、チャート・黒曜石を主な石材とする石鏃１点・石鏃未成品２点・剥片７点・砕片８点、石英斑岩製の磨石類１点が出土した。

(15) 区

ガラス質黒色安山岩・チャート・黒曜石等の石鏃未成品２点・剥片３点が出土した。

(16) 区（第272図・図版120）

合計６点出土した。１は信州系黒曜石の凹基無茎鏃で薄造りである。片脚が欠損している。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品１点、チャート・黒曜石の石核各１点、磨石類２点が出土した。

(17) 区（第272図・図版120）

粘板岩製の定角式磨製石斧の基部断片が１点、チャートの石核が１点出土した。

(19) 区（第272図・図版120）

合計27点出土した。１～４は石鏃である。１と４は先端部破片で形態不明であるが、２・３は凹基無茎鏃である。石材は２がチャート、他は黒曜石である。図示した以外では、チャート・黒曜石を主な石材とする石鏃未成品２点・楔形石器１点・剥片10点・砕片９点、二次加工のある礫１点が出土した。

(20) 区（第272図・図版120）

合計11点出土した。１は分銅形の打製石斧である。基部が欠損している。石材は砂岩である。図示した以外では、チャート製等の楔形石器１点・剥片８点、雲母片岩製の打製石斧が１点出土した。

(21) 区

ガラス質黒色安山岩製等の剥片５点、砂岩製の敲石１点が出土した。

(26) 区（第272図・図版120）

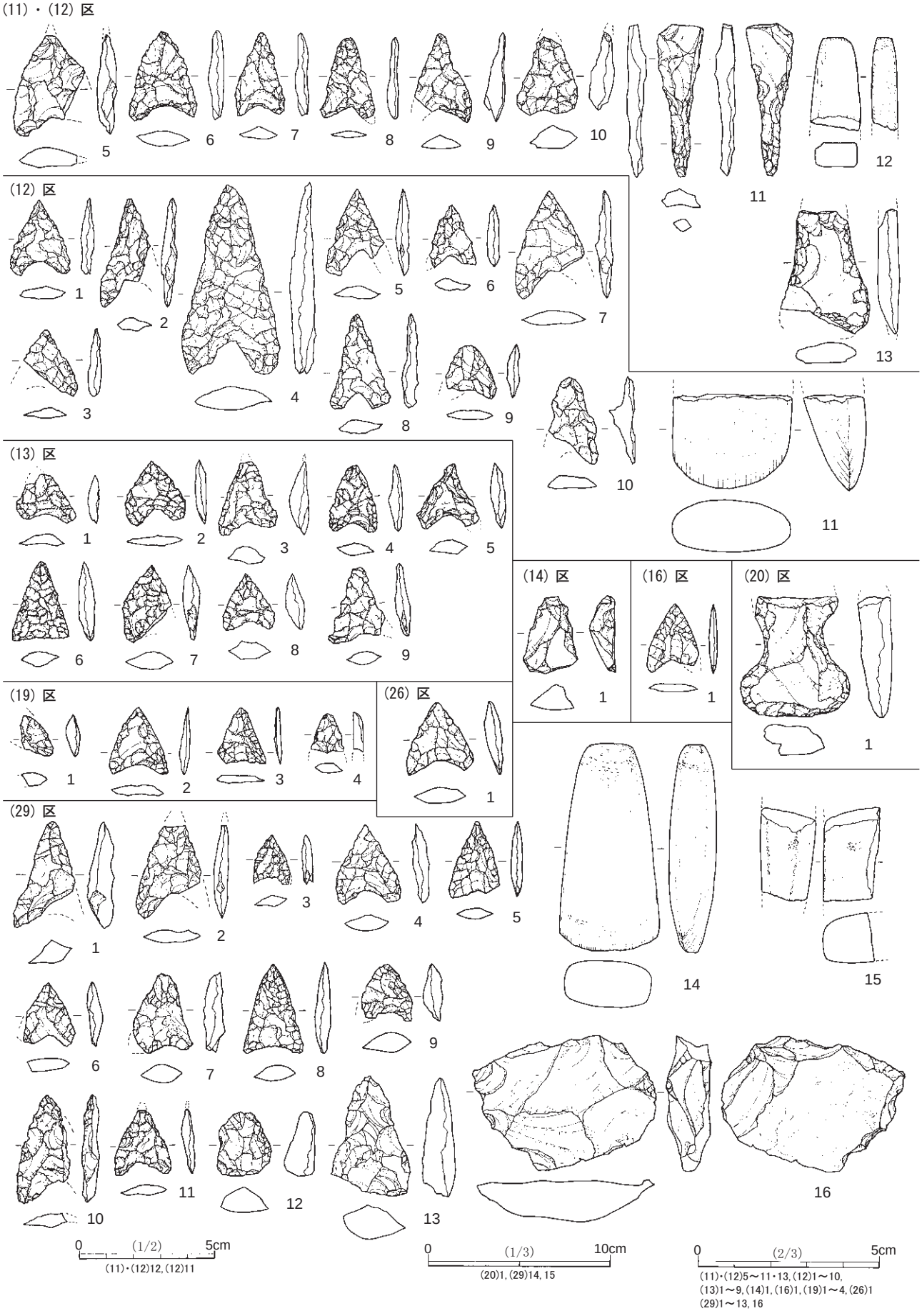
合計６点出土した。26はホルンフェルス製の凹基無茎鏃である。片脚が僅かに欠損している。図示した以外ではチャート・ガラス質黒色安山岩製の楔形石器各１点、チャートの剥片１点、流紋岩製の石鏃未成品１点、緑泥片岩製の石皿の断片１点、ホルンフェルス製の磨石類１点が出土した。

(29) 区（第272図・図版120）

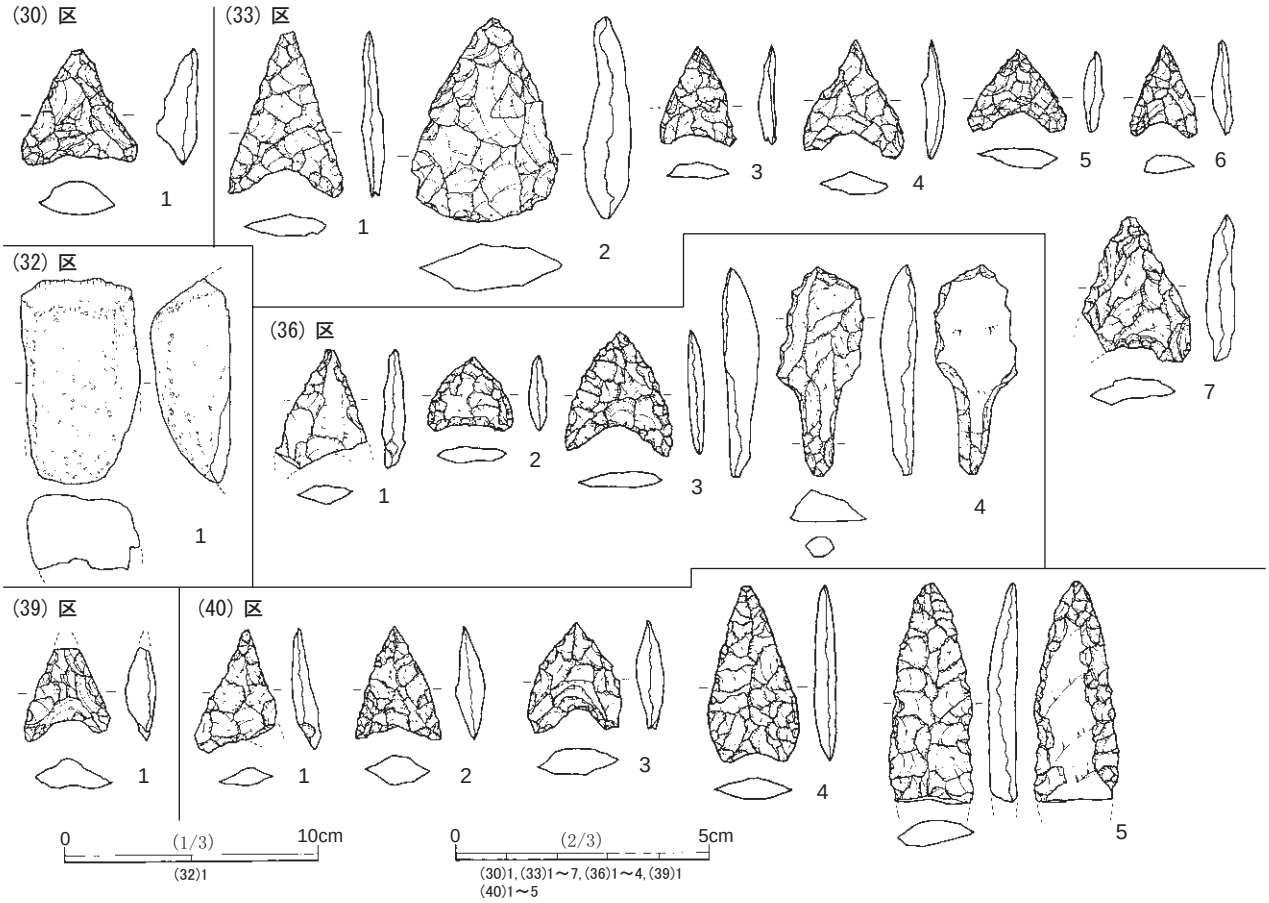
合計57点出土した。１～11は凹基無茎鏃である。うち３・４・６・８・９を除く６点には、何らかの損傷がみられる。特に11の先端部には刺突具特有の使用痕（「縦溝状剥離」）がある。石材構成は流紋岩２点（１・10)、チャート３点（２・４・５)、黒曜石５点（３・６～９)、ガラス質黒色安山岩１点（11）となっている。12・13は石鏃未成品である。いずれも中央部の高まりが残されている。14・15は定角式磨製石斧である。14は斑糲岩製でほぼ完形、15は緑色凝灰岩製で胴部の破片である。14の刃部には使用時のダメージが両面に残されている。16は黒曜石製の石核である。求心的に剥離し横長剥片を生産している。裏面には自然面が大きく残されている。図示した以外では、黒曜石・ガラス質黒色安山岩を主な石材とする楔形石器４点・石鏃未成品１点・剥片類24点・砕片類５点・石核２点、流紋岩製の石錐、砂岩製の石皿の断片１点が出土した。

(30) 区（第273図・図版120）

合計３点出土した。１は凹基無茎鏃の未成品である。中央部の高まりが瘤状に残されている。石材は



第272図　遺構外出土土石器（2）



第273図　遺構外出土土石器（3）

チャートである。図示した以外では、黒曜石の剥片１点、砂岩の磨石類１点が出土した。

(32) 区（第273図・図版120）

合計９点出土した。１は緑泥片岩製の石皿である。断片的な資料であるため形状は不明である。図示した以外では、チャート・メノウを主な石材とする剥片４点・砕片２点、安山岩製の打製石斧１点、ホルンフェルス製の砥石１点が出土した。

(33) 区（第273図・図版120）

合計39点出土した。1・３～６は凹基無茎鏃である。１の先端にガジリがみられるが,他は完形品である。石材構成はガラス質黒色安山岩１点（1）､黒曜石２点（3､5）､チャート２点（4，6）となっている。２、７はチャート製の石鏃未成品である。２は円基、７は凹基である。図示した以外では、安山岩製の石皿の断片１点、ホルンフェルス製の打製石斧１点、チャート・黒曜石を主な石材とする石鏃未成品４点・剥片類14点・砕片７点・削片１点・石核２点、流紋岩・ガラス質黒色安山岩製の楔形石器２点が出土した。

(34) 区

トロトロ石製の石鏃未成品が１点出土した。

(36) 区（第273図・図版120）

１～３は凹基無茎鏃である。１は両脚が欠損している。石材は１がチャート、２が流紋岩、３が黄玉石となっている。４はガラス質黒色安山岩製の石錐である。摘み部を有し完形である。

(38) 区

チャート・黒曜石を主な石材とする楔形石器１点・剥片類17点・砕片６点・石核１点が出土した。

(39) 区（第273図・図版120）

１はチャート製の凹基無茎鏃である。先端部が欠損している。図示した以外では、黒曜石製の石鏃１点・石鏃未成品１点・剥片類４点・砂岩製の磨石類１点が出土した。

(40) 区（第273図・図版120）

合計５点出土した。１～４は凹基無茎鏃である。１は片脚が欠損しているが、他は完形品である。石材構成はガラス質黒色安山岩２点（１・３）、白色系のメノウ１点（２）、硬質頁岩１点（４）となっている。５はチャート製の尖頭器である。先端部の破片であり、部分的なため他の器種の可能性もある。半両面加工で、裏面に主要剥離面を大きく残している。

(45) 区

合計26点出土した。チャート・黒曜石を主な石材とする石鏃２点・石鏃未成品１点・楔形石器３点・剥片13点・砕片４点・石核３点が出土した。

第3章　まとめ

今回の報告では虫食い状に未報告区が存在したままとなっている。これらの個所は次回の報告書において報告することとなっており、全貌が判明する次回の報告において出土遺物や集落の変遷過程等を詳述することとし、この章では簡略なまとめに留めることとする。

今回報告した（1）区から（50）区において検出された遺構は、住居跡132軒、掘立柱建物跡２棟、土坑等772基、ピット（群）81基であった。住居跡は円形、楕円形、卵円形基調のものがほとんどであった。土坑はフラスコ状土坑、円形土坑などの貯蔵穴と考えられるものが大部分で、他に土器を伴う楕円形の墓坑と思われるものや陥穴が少数認められた。住居跡群はフラスコ状土坑、円形土坑を伴いながら、調査対象区域のうち22大グリッドライン以北に濃淡をもって分布していたが、これを時期別に見ると明瞭に分布が異なることが判明した（第274図）。１期（加曽利Ｅ1式期）の集落は（7）・(8）区の北半から（10）区の北端にかけてが最もまとまっている。この集落は１ａ期（加曽利Ｅ1式古段階期）に属する遺構が最も多く、１ｂ期（加曽利Ｅ1式新段階期）にはわずかとなり、２期（加曽利Ｅ2式期）で終息する短期間の集落であった。(10）区南端から（17）区にかけてはさらに小規模な１期の集落があり、やはり１ａ期から２期で消滅する。この両者に挟まれた（10）区東端中央はやや時期が遅れるやはり小規模な集落で、１ｂ期から２期にかけて展開するものであった。２ｃ期（加曽利Ｅ2-3式期）から３ａ期（加曽利Ｅ3式古段階期）の時期には住居跡、土坑ともほとんど見られない。わずかに（7）SI275、(7）SK252、(7）SK253が同段階の遺構と思われる。

３ｂ期（加曽利Ｅ3式中段階期）になると集落が復活するが、１期の密集状態とは対照的に広範囲に住居跡､土坑とも分散する状況となる。その範囲は大きく２か所に分かれるが､東側は３ｂ期から４ａ期（加曽利Ｅ4式古段階期）で終わるのに対して、西側は５期（称名寺期）まで継続していることが判明した。

土器は、集落の消長と比例して勝坂式末期、いわゆる中峠式、加曽利Ｅ1式古段階のものが多く出土し、多数の完形、半完形土器が得られた。一方、加曽利Ｅ1式新段階は急激に減少し、加曽利Ｅ2式古段階、新段階ともにさらに減少していた。加曽利Ｅ2-3式、Ｅ3式古段階はほとんど認められなかった。加曽利Ｅ3式中段階は（11）SI1015、(29）SI711で良好な一括資料が得られ、同3式新段階はいわゆる梶山類の好例が多く出土している。加曽利Ｅ3-4式段階は豊富な資料が得られた。(10）SI353-8･9､(29）SK772-1･2､(33）SK042-1などこの時期の特徴的な土器をはじめ、加曽利Ｅ4式の口縁部微隆起線区画の祖形となった貼り付け微隆起線などの粗製土器が多数出土し、両者が共伴する（29）SI703、(30）SI011などの良好な一括資料が得られた。加曽利Ｅ4式も古・中・新の各段階が確認でき、称名寺式に先行する西日本由来の土器も出土した。称名寺式は（33）SK031がほとんど唯一の例である。

土製品は、円板が完存品、欠損品とも約100点ずつ出土した。有孔、無孔の両方があり、所属時期は加曽利Ｅ3式中段階から3-4式段階であることが判明した。

石器は､剥片石器では石鏃､石鏃未成品､楔形石器が多く出土し､礫石器では磨製石斧､磨石類が多かった。石器の出土状況で注目されるのは(10)SK471である。打製石斧２点､磨製石斧２点がフラスコ状土坑のピット内からまとまって出土した。いずれも長大で、最大25㎝を測る。使い減りした石斧が多い房総では類を見ない大きさであった。

第 274 図　縄文時代の集落分布図

写　真　図　版

遺跡周辺の航空写真 (S=1/10,000 昭和 47 年撮影)

図版 2

(7) 区　西から

(7) 区　北西から

(9) 区　東から

(10) 区

(10) 区　東から

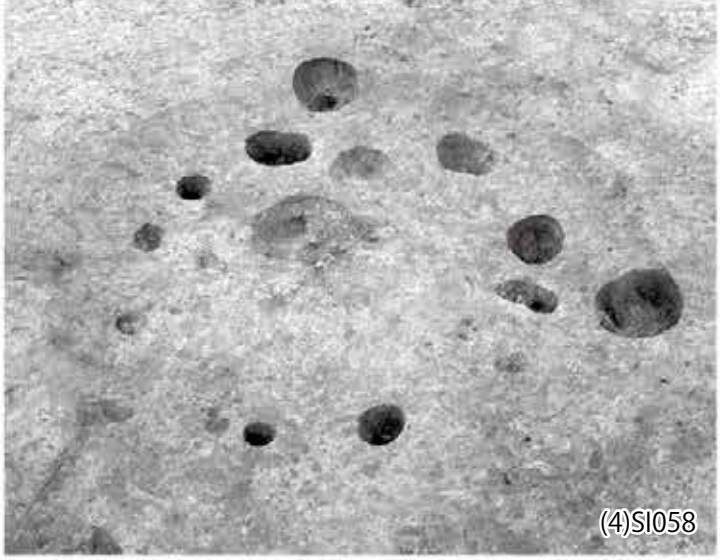
(11) 区　南から

図版 4

(29) 区

(33) 区　南から

(33) 区　北から

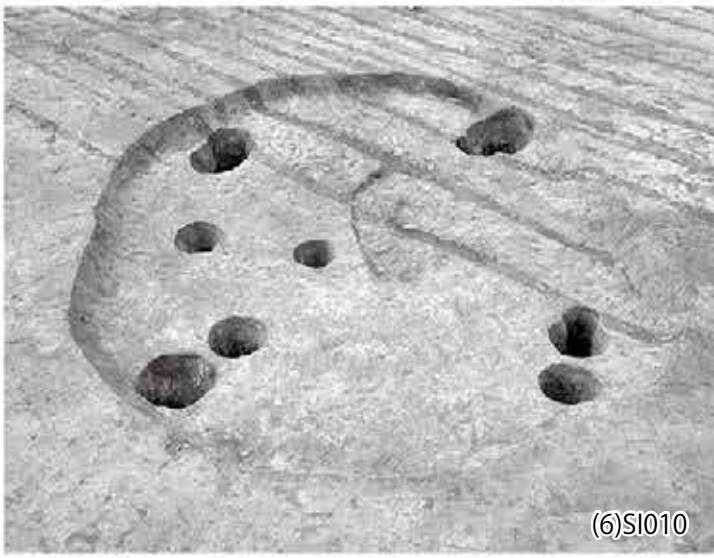

(4)SI058

(4)SI058 遺物出土状況

(6)SI004

(6)SI005

(6)SI007


(6)SI010

(6)SI011

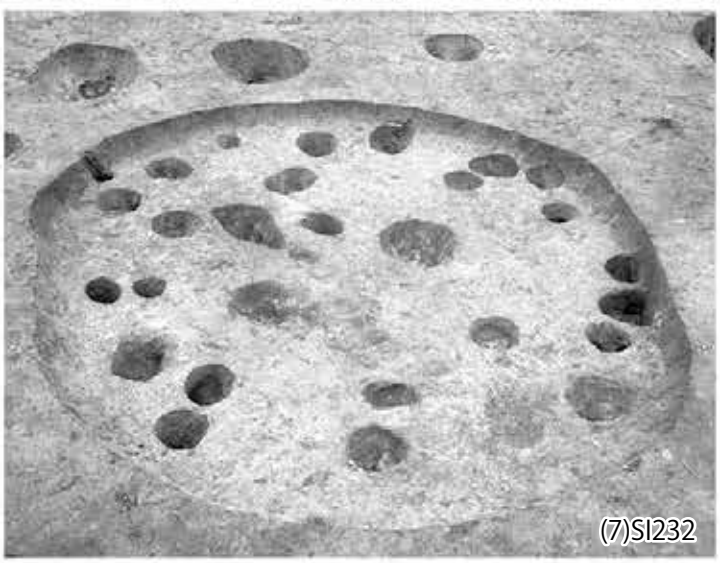
(7)SI206

図版 6

(7)SI214

(7)SI218

(7)SI226


(7)SI232

(7)SI256

(7)SI257 遺物出土状況

(7)SI262

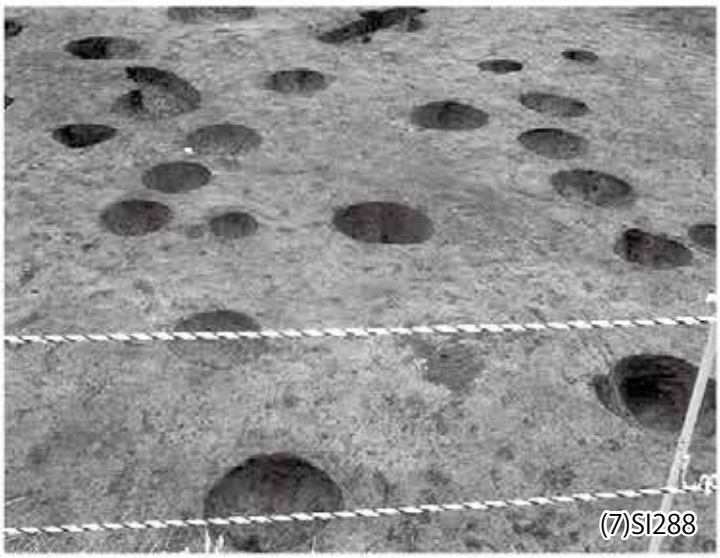
(7)SI262 遺物出土状況

(7)SI273

(7)SI275

(7)SI276

(7)SI276 遺物出土状況


(7)SI288

(7)SI289

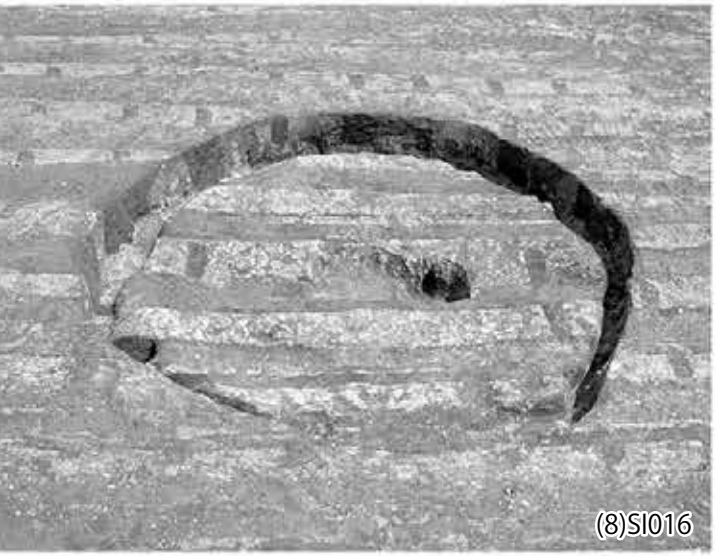
(7)SI296

(7)SI380

図版 8

(8)SI010

(8)SI015


(8)SI016

(8)SI020

(8)SI030

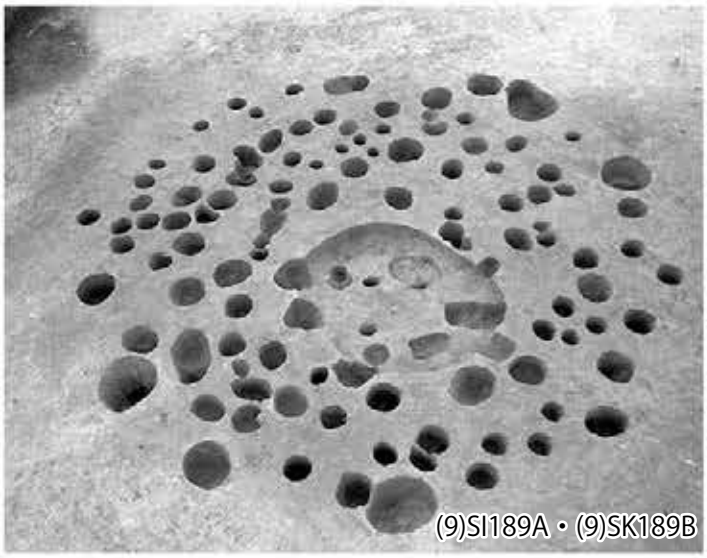
(9)SI148・(9)SK159

(9)SI182

(9)SI183

(9)SI184

(9)SI186


(9)SI189A・(9)SK189B

(9)SK189B 遺物出土状況

(10)SI312

(10)SI312　炉・遺物出土状況

(10)SI313

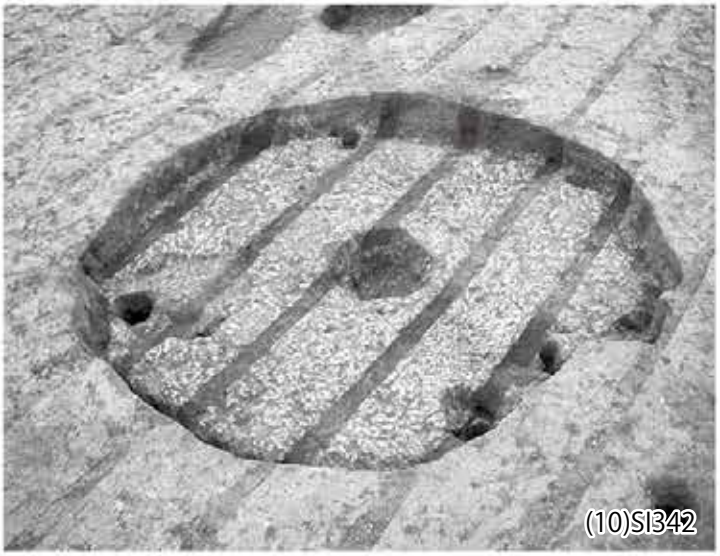
(10)SI314

図版 10

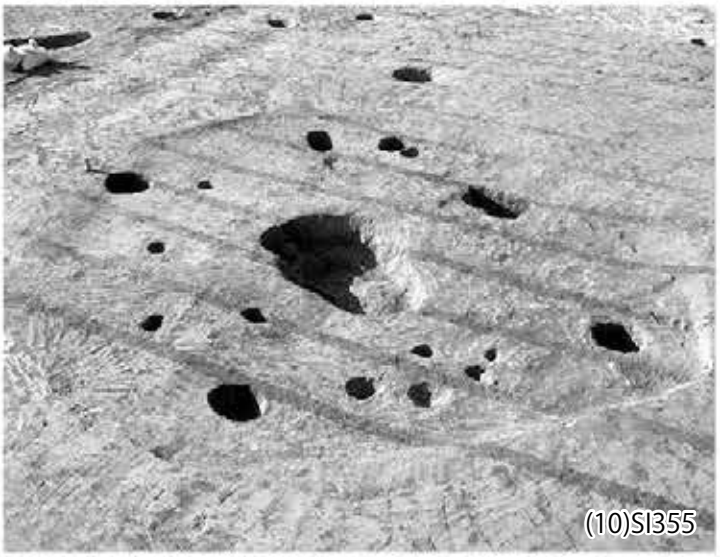
(10)SI327

(10)SI328

(10)SI341


(10)SI342

(10)SI353


(10)SI355

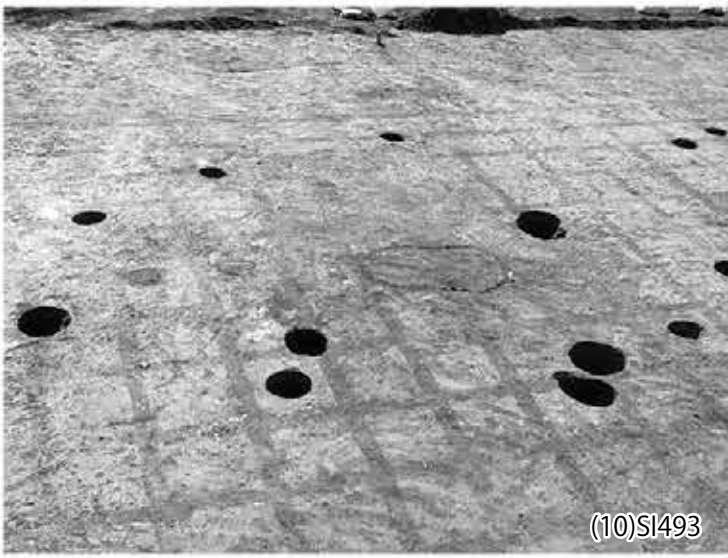
(10)SI355　炉

(10)SI356

(10)SI363・(10)SK364・(10)SK484

(10)SI489

(10)SI492


(10)SI493

(10)SI497

(10)SI522

(10)SI529

(10)SI530

図版 12

(10)SI531

(10)SI570 遺物出土状況

(10)SI574

(10)SI576

(10)SI651 遺物出土状況

(11)SI1011

(11)SI1011 遺物出土状況

(11)SI1012

(11)SI1013

(11)SI1014

(11)SI1015

(11)SI1015　炉・遺物出土状況

(11)SI1017

(11)SI1018

(12)SI014

(12)SI014　炉・遺物出土状況

図版 14

(12)SI024

(12)SI026

(12)SI039

(12)SI053

(14)SI140

(15)SI005

(15)SI005　炉

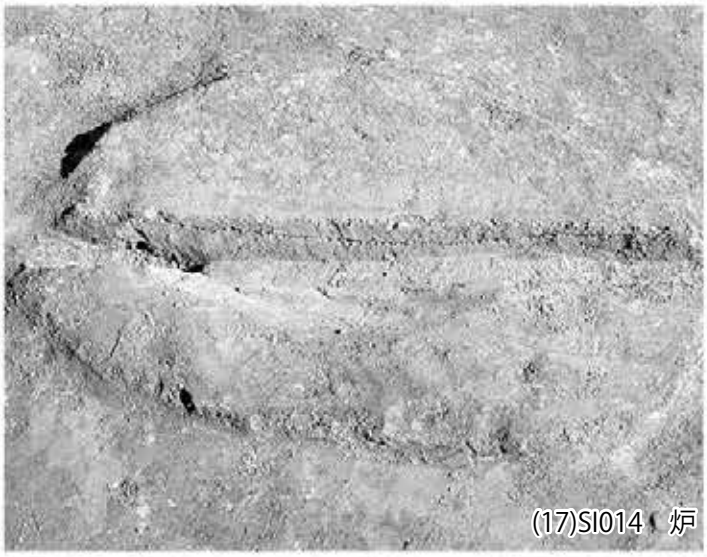
(16)SI003

(16)SI003　炉・遺物出土状況

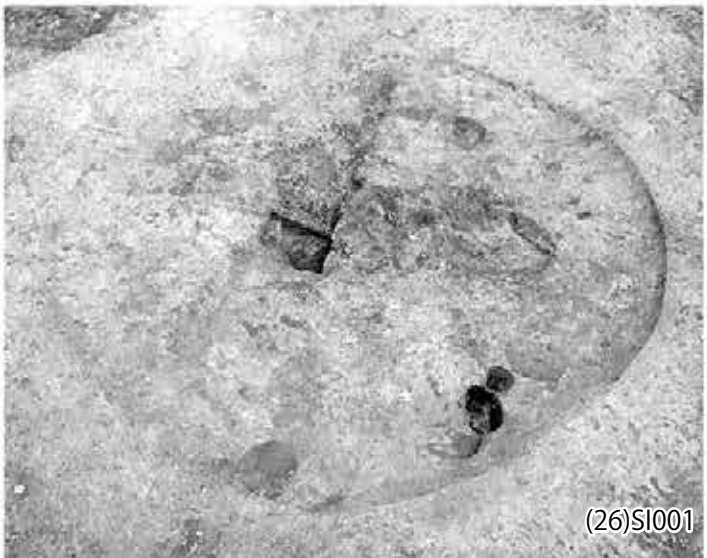
(17)SI012 遺物出土状況

(17)SI013

(17)SI014

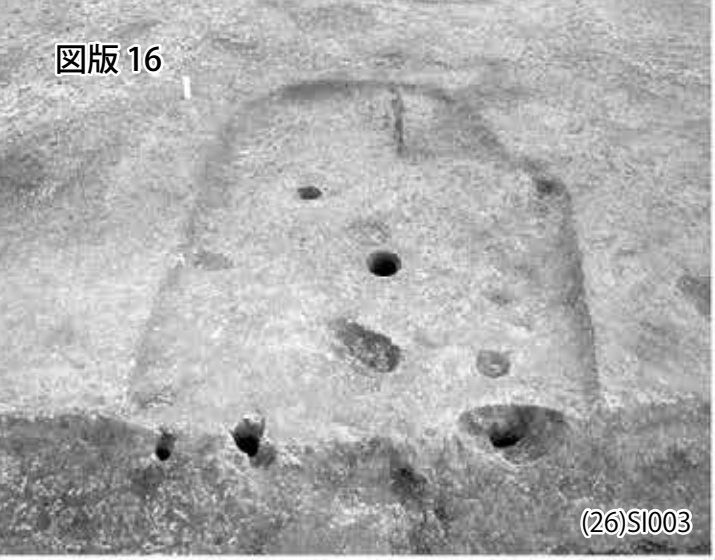

(17)SI014　炉

(17)SI015

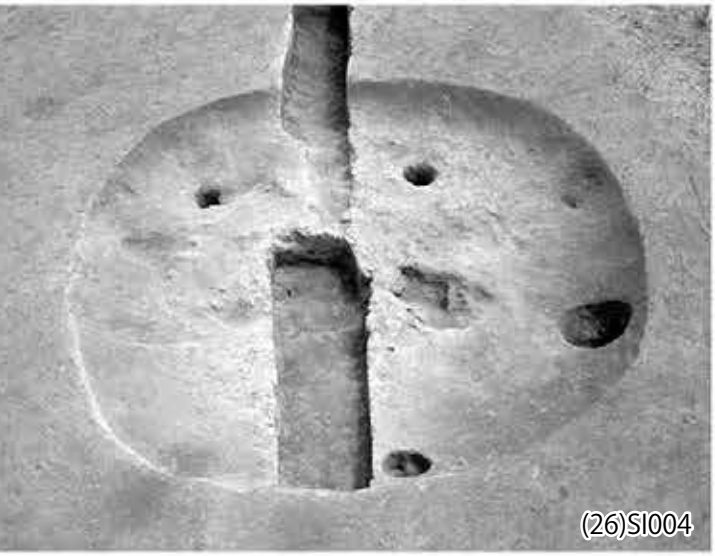

(26)SI001

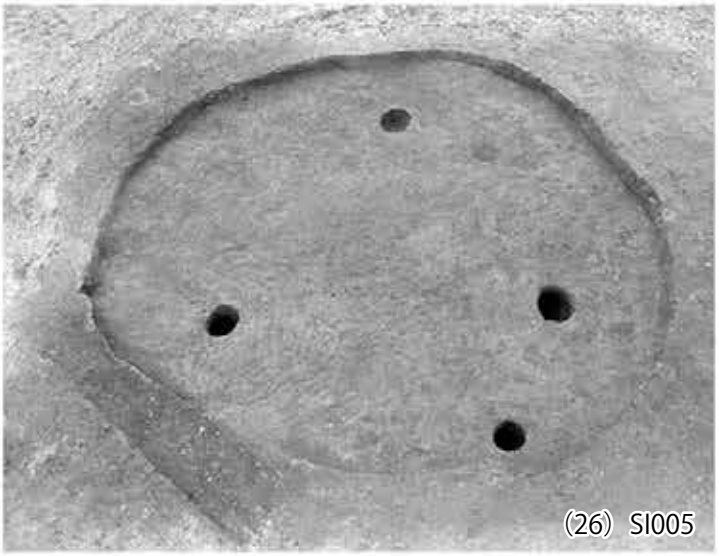
(26)SI001　炉・遺物出土状況

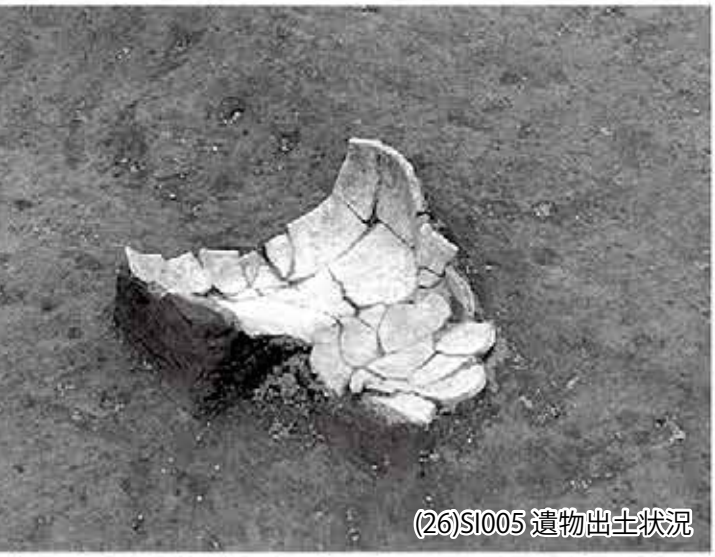
図版 16

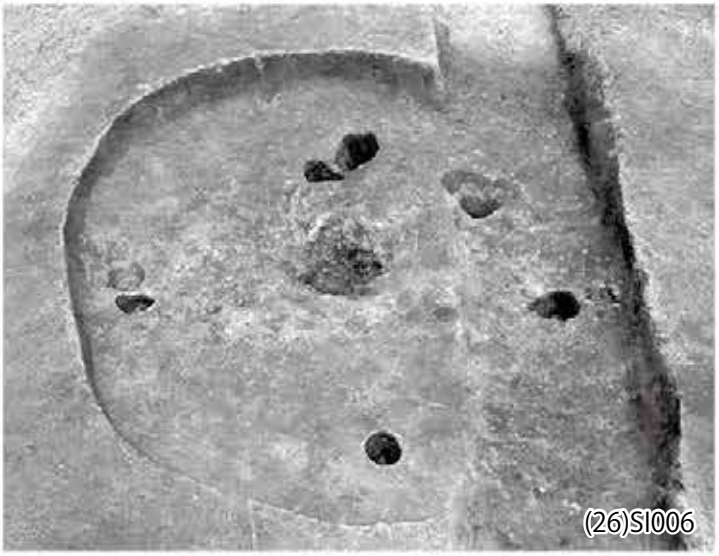

(26)SI003

(26)SI003　炉・遺物出土状況


(26)SI004


(26) SI005


(26)SI005 遺物出土状況


(26)SI006

(26)SI007

(26)SI018

(29)SI701・(29)SK926

(29)SI701　炉・遺物出土状況

(29)SI702

(29)SI703・(29)SK924・(29)SK925

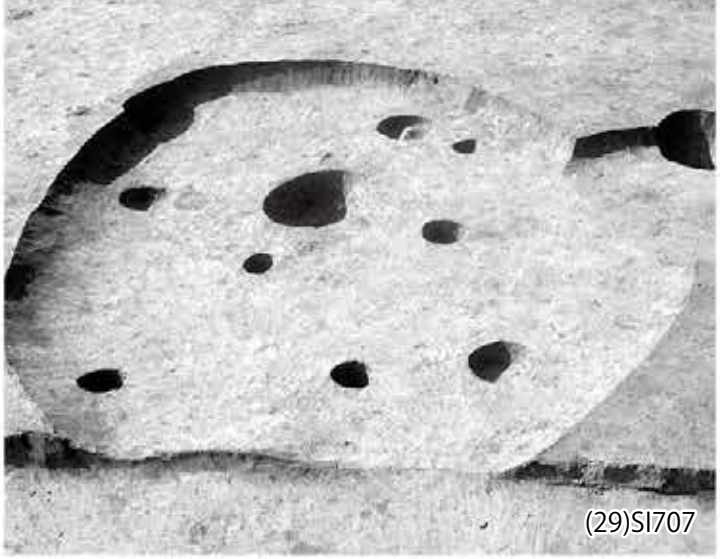
(29)SI704

(29)SI704 遺物出土状況

(29)SI705・(29)SK932

(29)SI705　炉・遺物出土状況

(29)SI706・(29)SK922


(29)SI707

(29)SI708

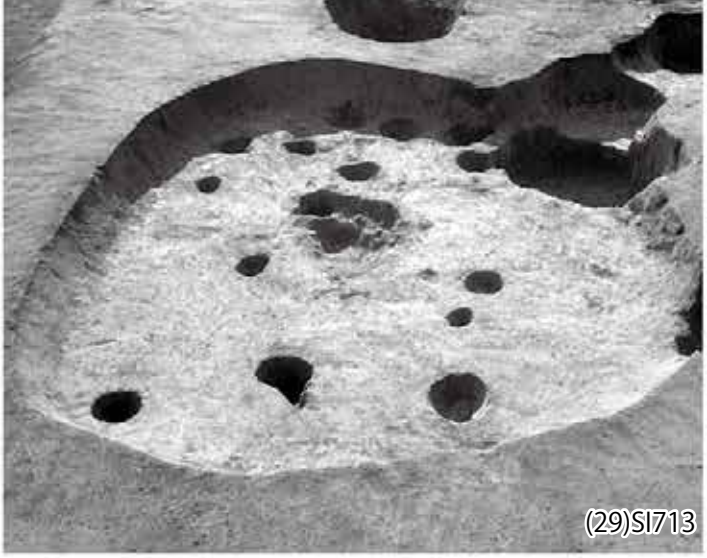
(29)SI709

(29)SI709　炉・遺物出土状況

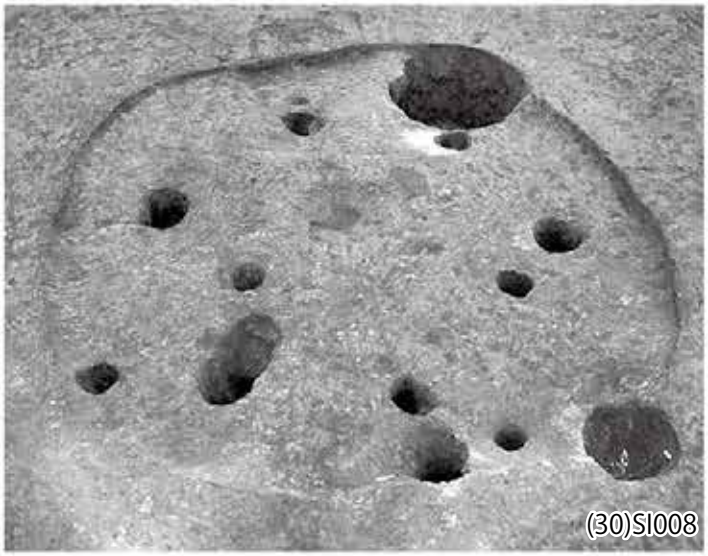
(29)SI710

(29)SI711

(29)SI711　炉・遺物出土状況


(29)SI713

(29)SI713　炉・遺物出土状況


(30)SI008

(30)SI009

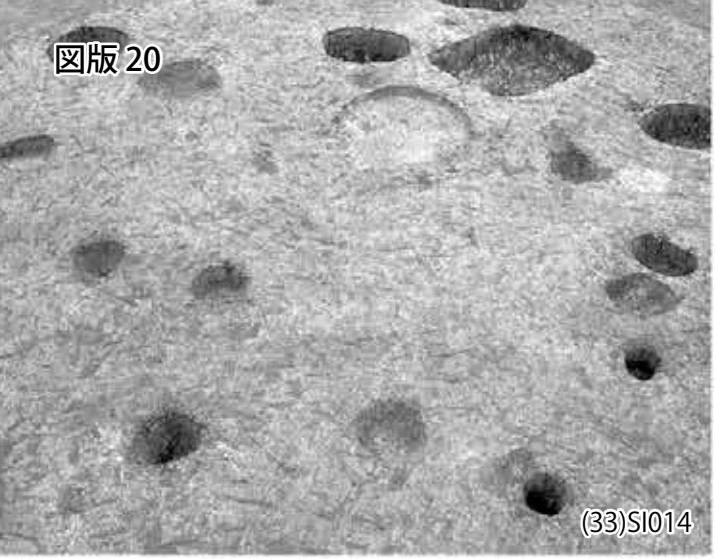
(30)SI010

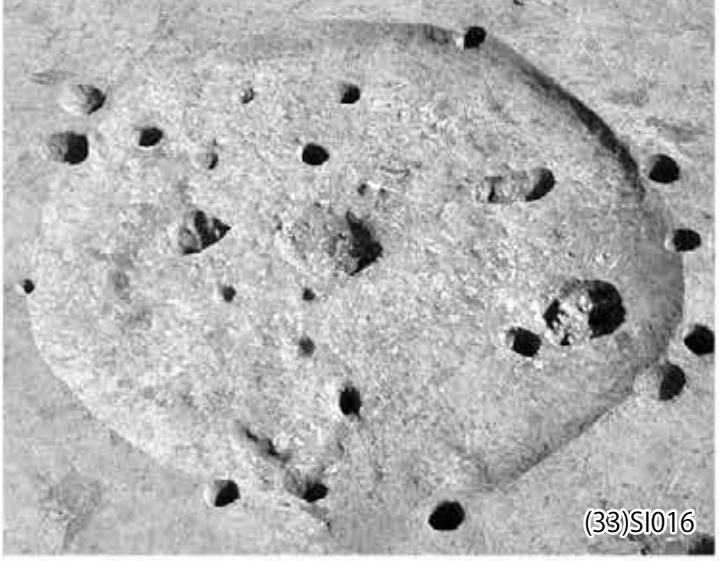
(30)SI010　炉・遺物出土状況

(30)SI011

(33)SI011・(33)SI093・(33)SB066

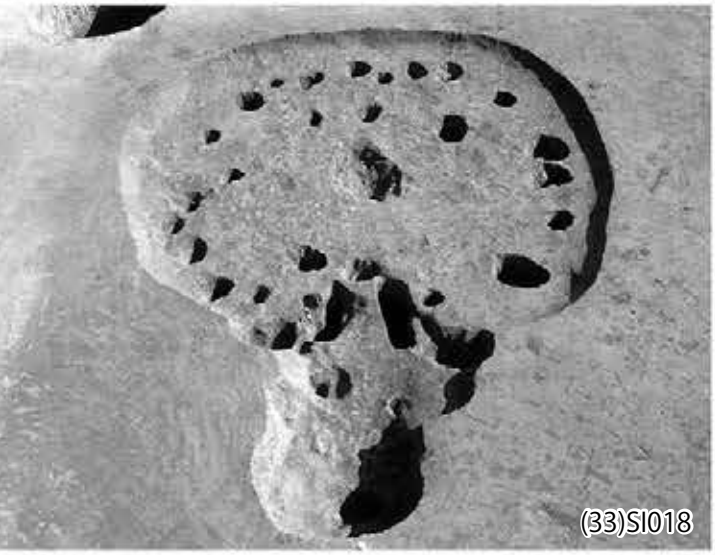
図版 20


(33)SI014


(33)SI016

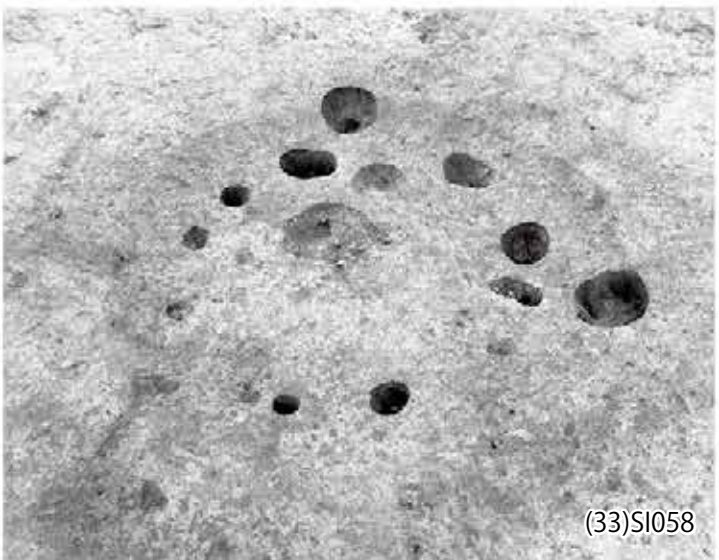
(33)SI016　炉・遺物出土状況

(33)SI017・(33)SK074


(33)SI018

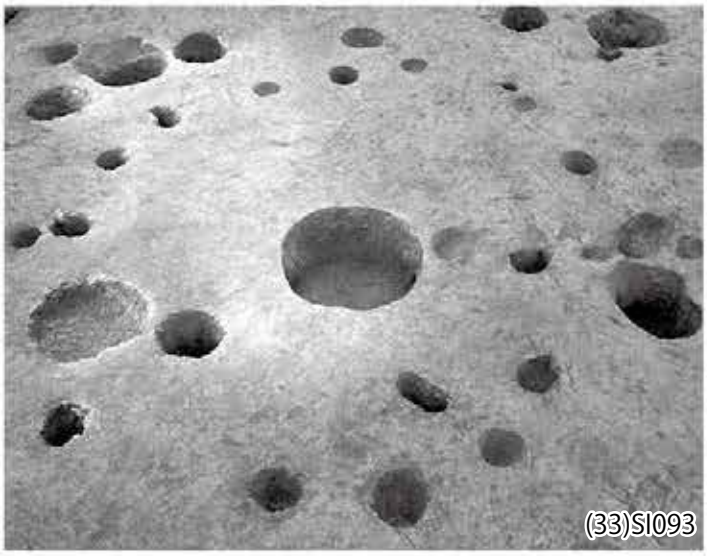
(33)SI019

(33)SI019 遺物出土状況


(33)SI058

(33)SI075

(33)SI075 遺物出土状況


(33)SI093

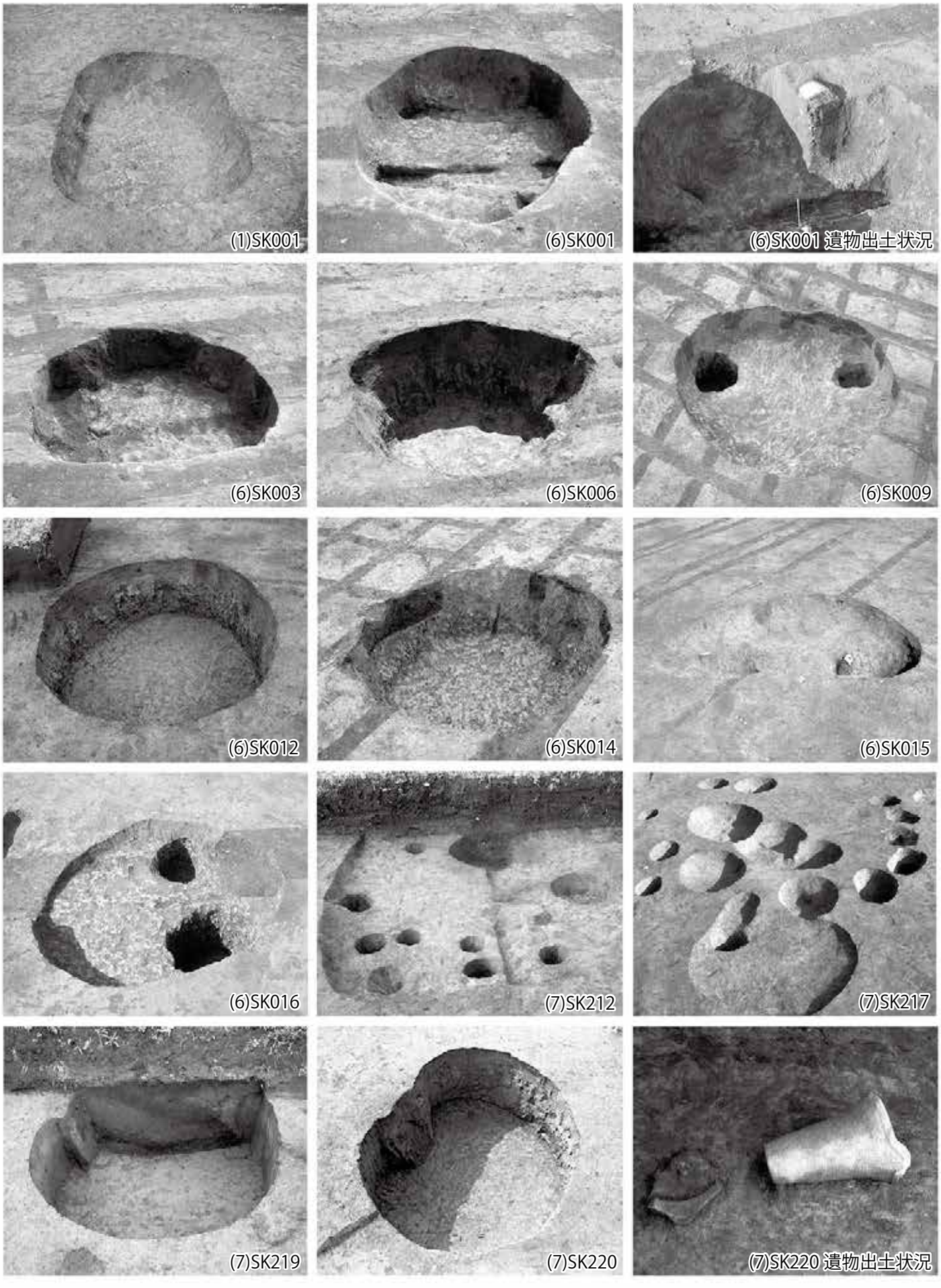
(33)SI100

(35)SI001

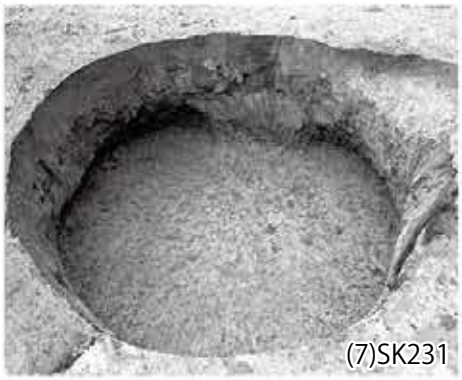
(35)SI001 遺物出土状況

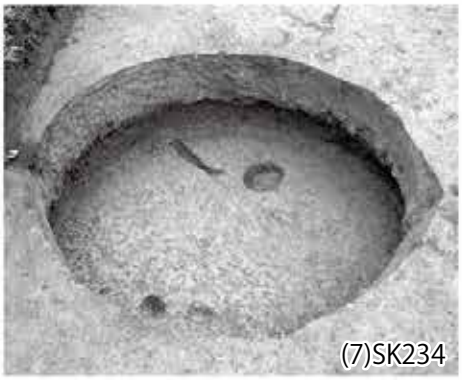
(37)SI103

(37)SI104

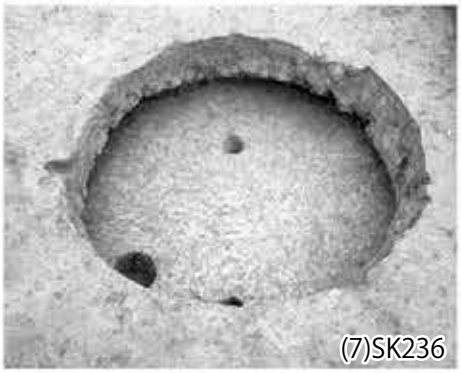

(1)SK001
(6)SK001
(6)SK001 遺物出土状況
(6)SK003
(6)SK006
(6)SK009
(6)SK012
(6)SK014
(6)SK015
(6)SK016
(7)SK212
(7)SK217
(7)SK219
(7)SK220
(7)SK220 遺物出土状況

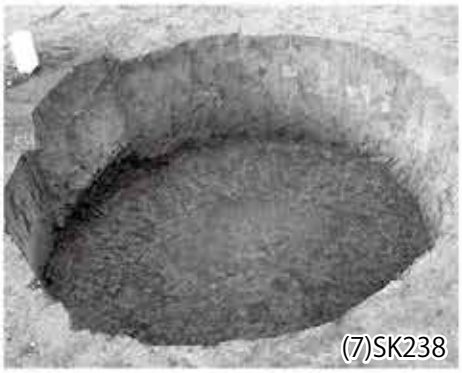
土坑等（1）

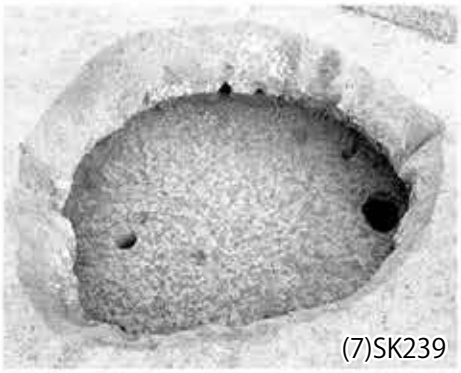

(7)SK231


(7)SK234

(7)SK235

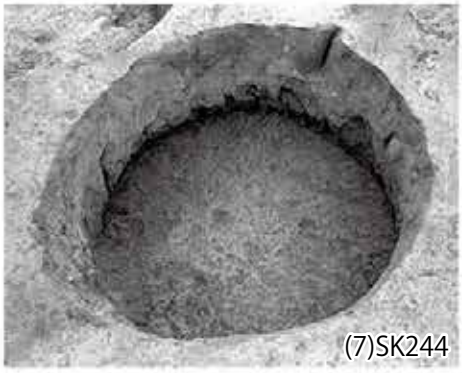

(7)SK236


(7)SK238


(7)SK239

(7)SK240

(7)SK242

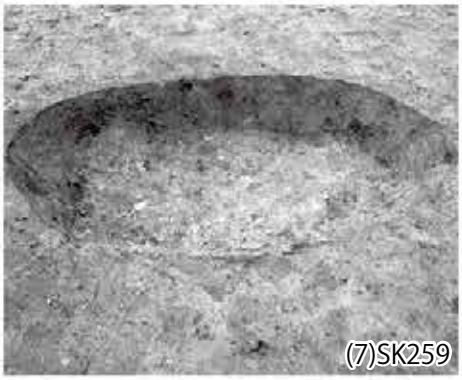

(7)SK244

(7)SK251

(7)SK252

(7)SK253

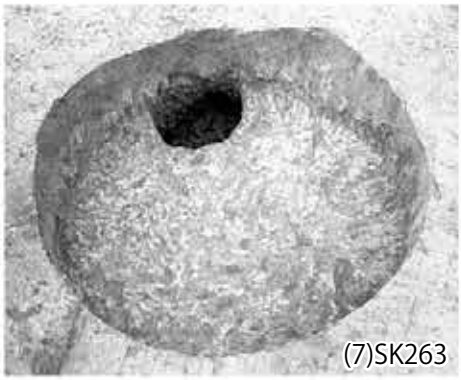
(7)SK255

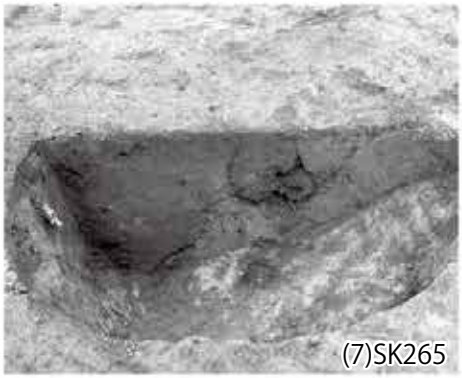

(7)SK259

(7)SK259 遺物出土状況

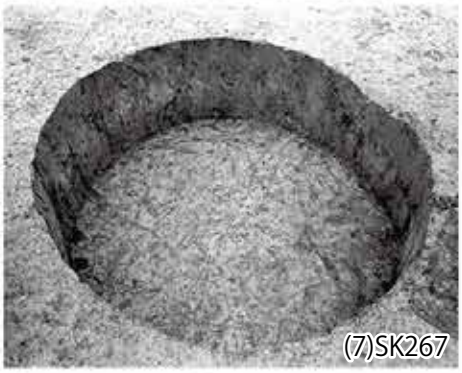
土坑等（2）

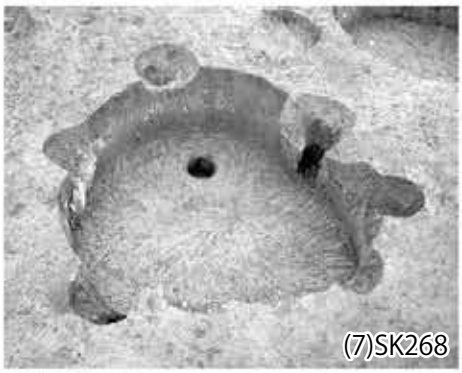
(7)SK261


(7)SK263

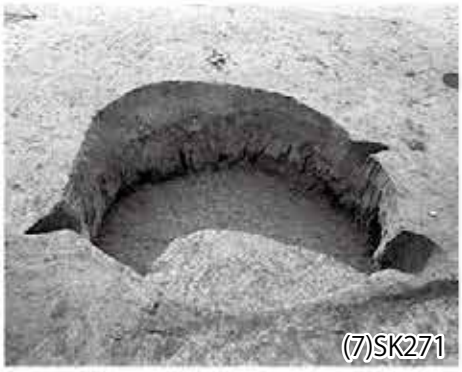

(7)SK265

(7)SK266


(7)SK267


(7)SK268

(7)SK270


(7)SK271

(7)SK272

(7)SK272 遺物出土状況

(7)SK277

(7)SK278

(7)SK278 遺物出土状況

(7)SK279

(7)SK283

土坑等（3）

(7)SK283 遺物出土状況

(7)SK287

(7)SK290

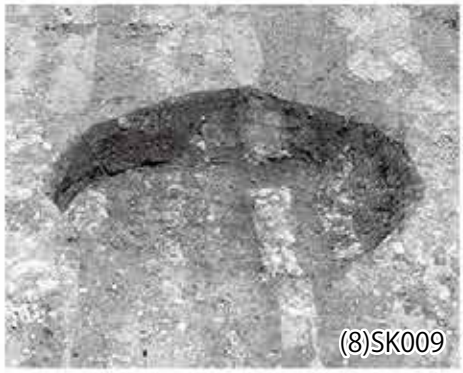
(7)SK290 遺物出土状況

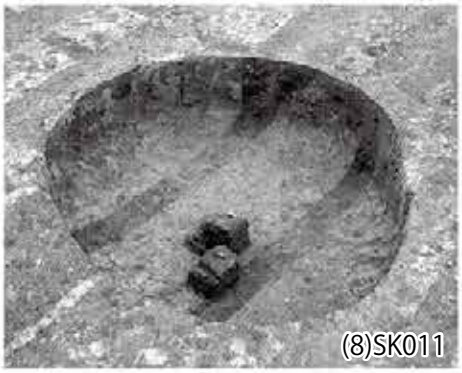
(8)SK001

(8)SK004

(8)SH006

(8)SK007


(8)SK009


(8)SK011

(8)SK012

(8)SK013

(8)SK017

(8)SK018

(8)SK019

土坑等(4)

(8)SK021

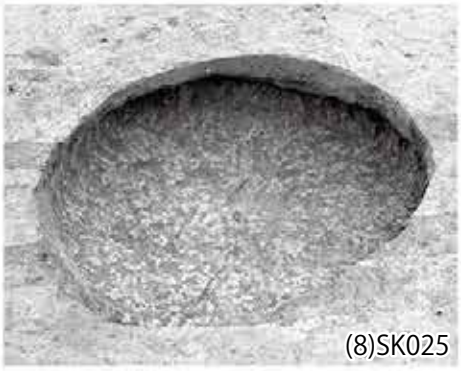
(8)SK022

(8)SK022 遺物出土状況

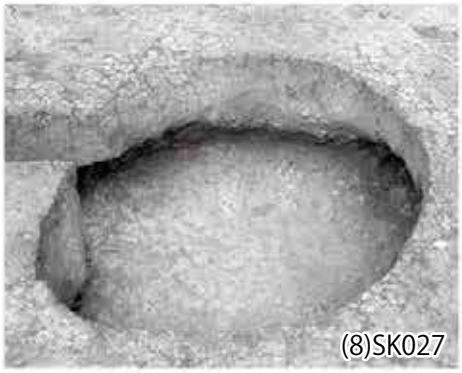
(8)SK023

(8)SK024

(8)SK024 遺物出土状況


(8)SK025

(8)SK026


(8)SK027

(8)SK027 遺物出土状況

(8)SK029

(8)SH034

(8)SK035

(8)SK035 遺物出土状況

(8)SK037

土坑等（5）

(9)SK155・(9)SK156

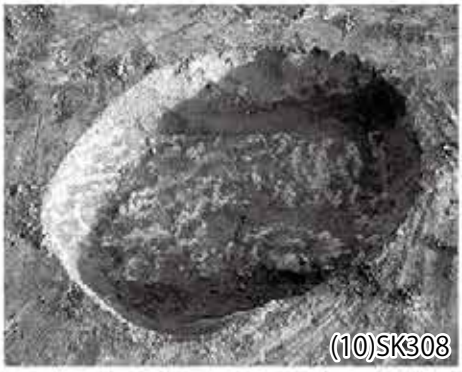
(9)SK168

(9)SK190

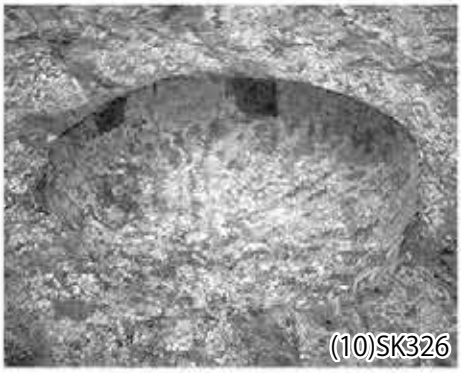
(9)SK195

(10)SK301・(10)SK310

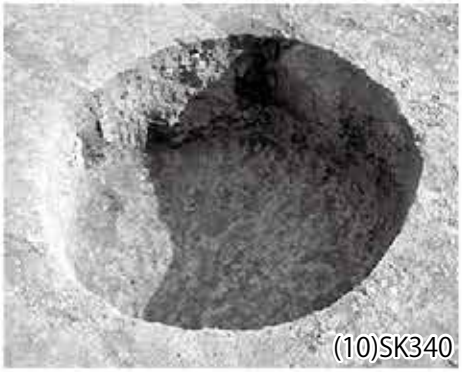
(10)SK303

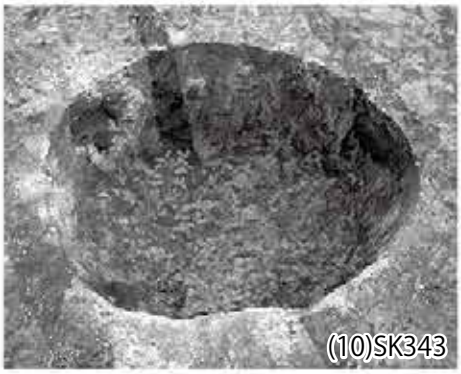

(10)SK308

(10)SH315


(10)SK326

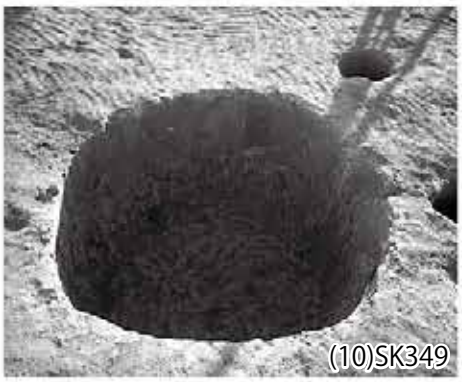
(10)SK338


(10)SK340


(10)SK343

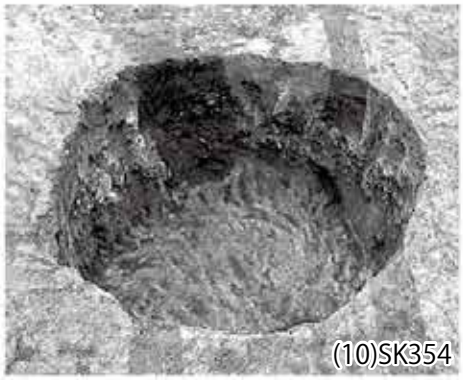
(10)SK344

(10)SK345


(10)SK349

土坑等（6）

(10)SK350


(10)SK354

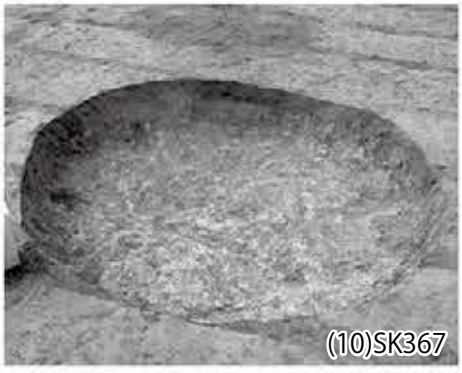
(10)SK357

(10)SK359

(10)SK361

(10)SK362

(10)SK365


(10)SK367

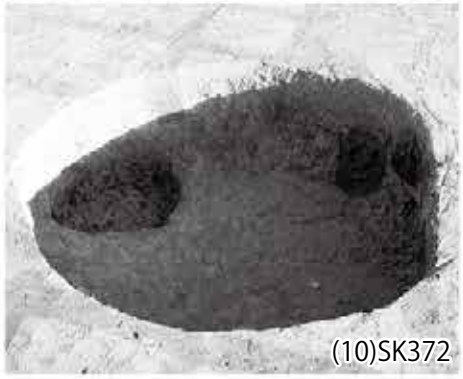
(10)SK368

(10)SK368 遺物出土状況

(10)SK369

(10)SK370・(10)SK376

(10)SK371


(10)SK372

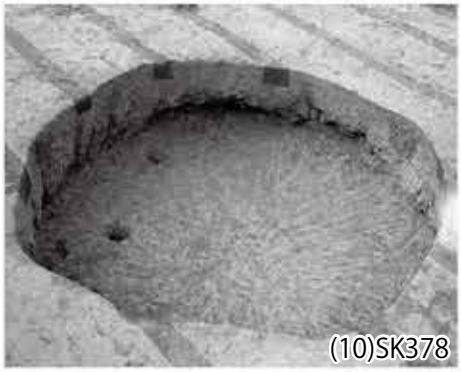
(10)SK373

土坑等(7)

(10)SK374

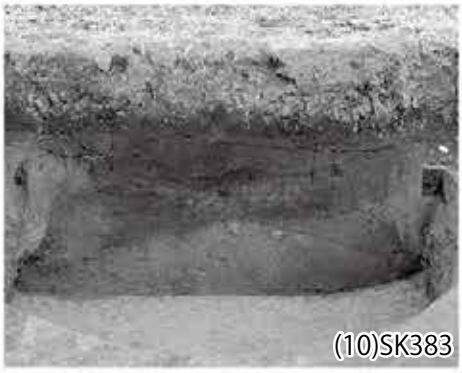
(10)SK375

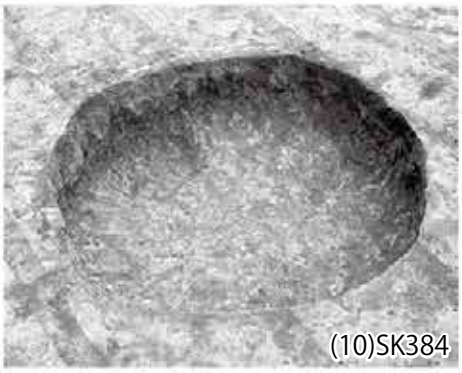
(10)SK377

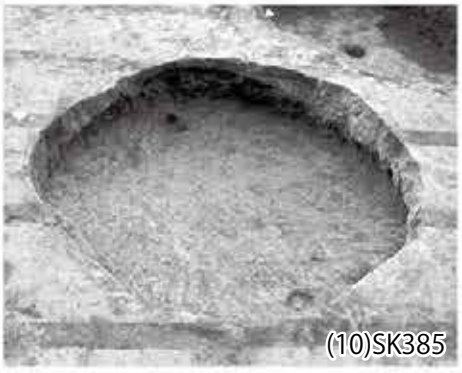

(10)SK378

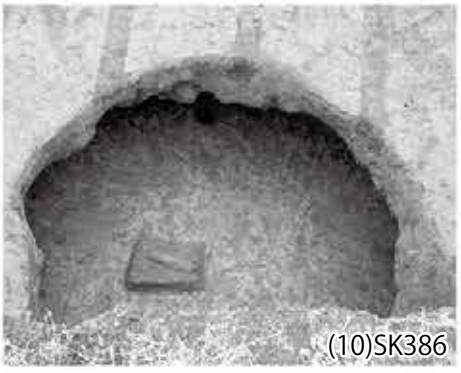
(10)SK379

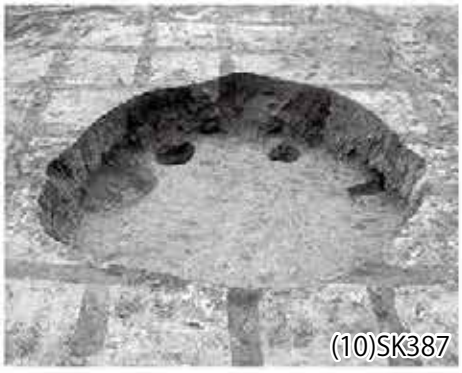
(10)SK382

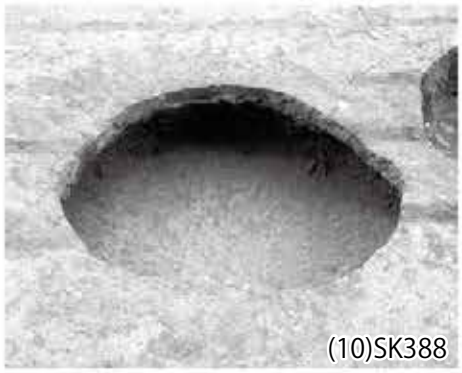

(10)SK383


(10)SK384


(10)SK385


(10)SK386

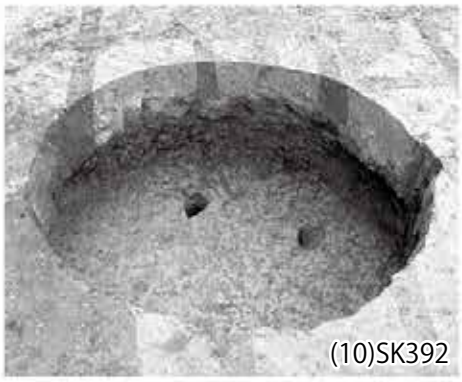

(10)SK387


(10)SK388

(10)SK389

(10)SK390

(10)SK391


(10)SK392

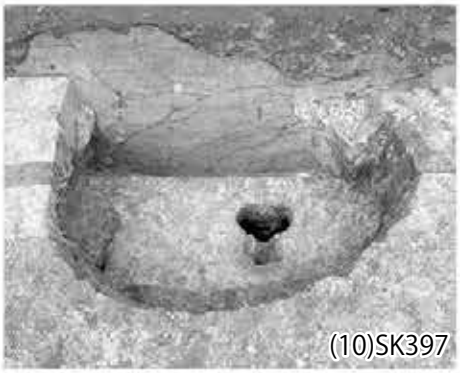
(10)SK393

(10)SK394

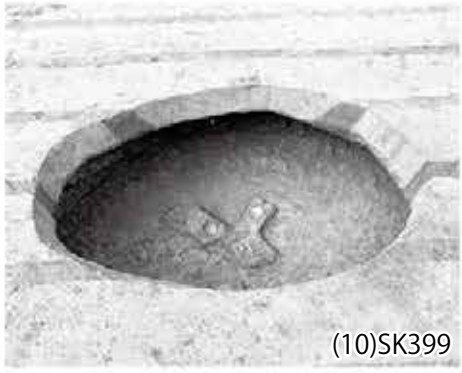
(10)SK394 遺物出土状況

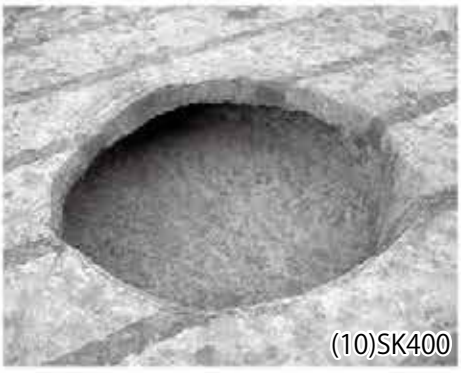
(10)SK395

(10)SK395 遺物出土状況


(10)SK397

(10)SK398


(10)SK399


(10)SK400

(10)SK401

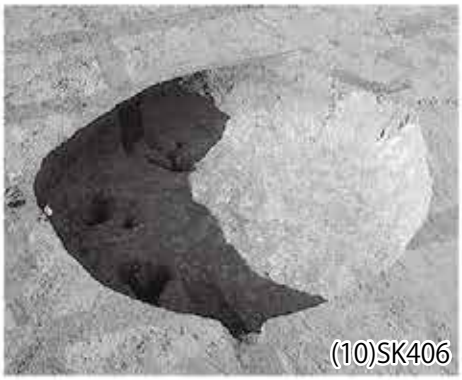
(10)SK402・(10)SK474

(10)SK403

(10)SK404

(10)SK405

土坑等(9)


(10)SK406

(10)SK407・(10)SK408・(10)SK409

(10)SK410

(10)SK415

(10)SK416

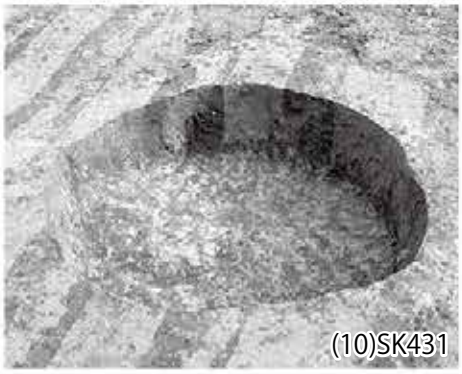
(10)SK417

(10)SK424

(10)SK425

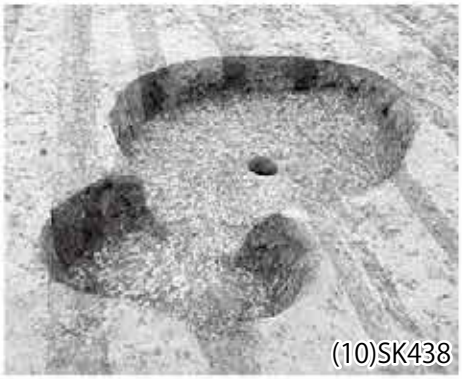
(10)SK427

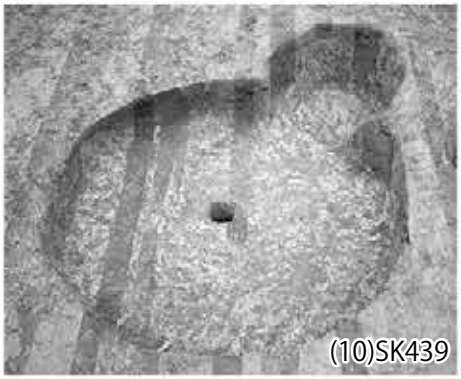
(10)SK429


(10)SK431

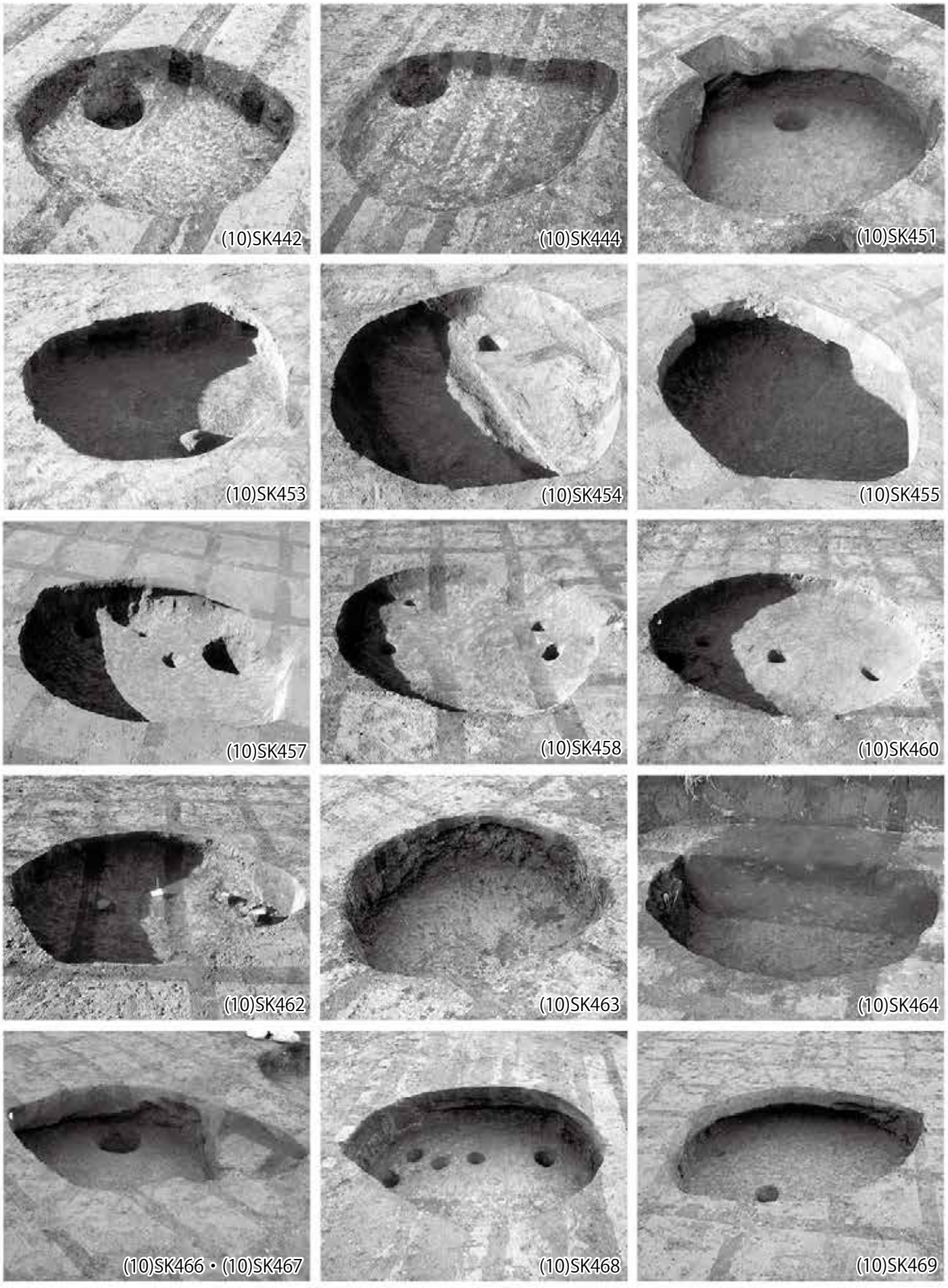
(10)SK433

(10)SK435


(10)SK438


(10)SK439

土坑等（10）


(10)SK442
(10)SK444
(10)SK451
(10)SK453
(10)SK454
(10)SK455
(10)SK457
(10)SK458
(10)SK460
(10)SK462
(10)SK463
(10)SK464
(10)SK466・(10)SK467
(10)SK468
(10)SK469

(10)SK470

(10)SK471

(10)SK471 P1 遺物出土状況

(10)SK472

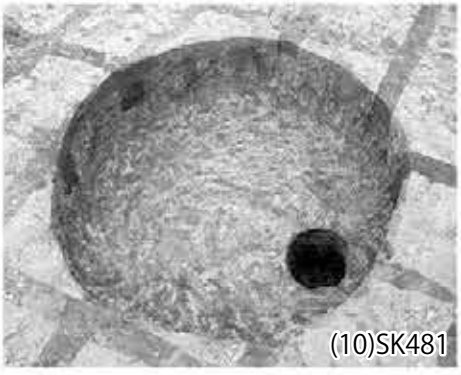
(10)SK475

(10)SK476

(10)SK476 遺物出土状況

(10)SK477

(10)SK478・(10)SK479・(10)SK480


(10)SK481

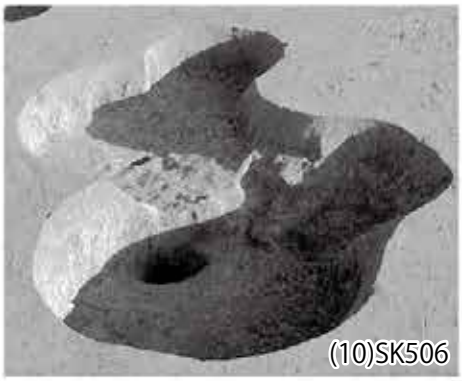
(10)SK482

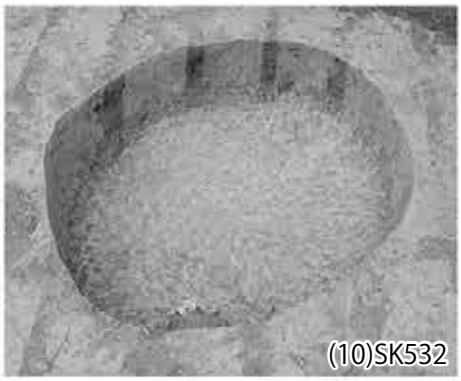
(10)SK486

(10)SK488

(10)SK494

(10)SK496


(10)SK506


(10)SK532

(10)SK538

(10)SK542

(10)SK543

(10)SK544

(10)SK545

(10)SK546

(10)SK547

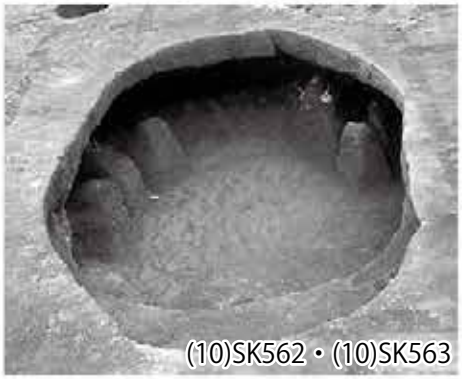
(10)SK548・(10)SK549・(10)SK550

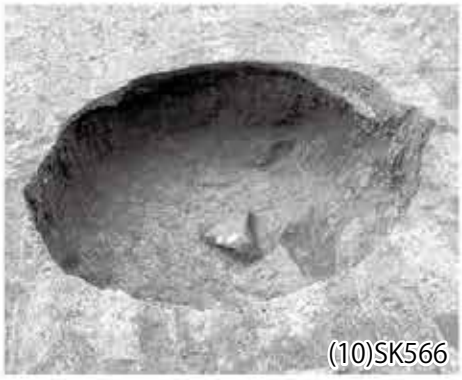
(10)SK555

(10)SK556

(10)SK557

(10)SK558


(10)SK562・(10)SK563

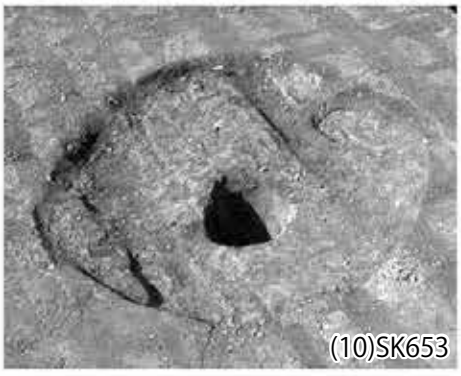

(10)SK566

(10)SK567

(10)SK572・(10)SK578

(10)SK577

(10)SK579 遺物出土状況


(10)SK653

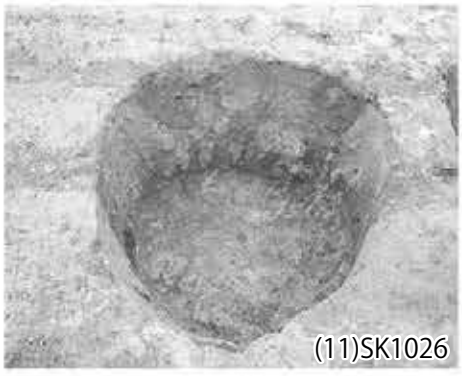
(10)SK655

(10)SK658

(11)SK1020

(11)SK1021

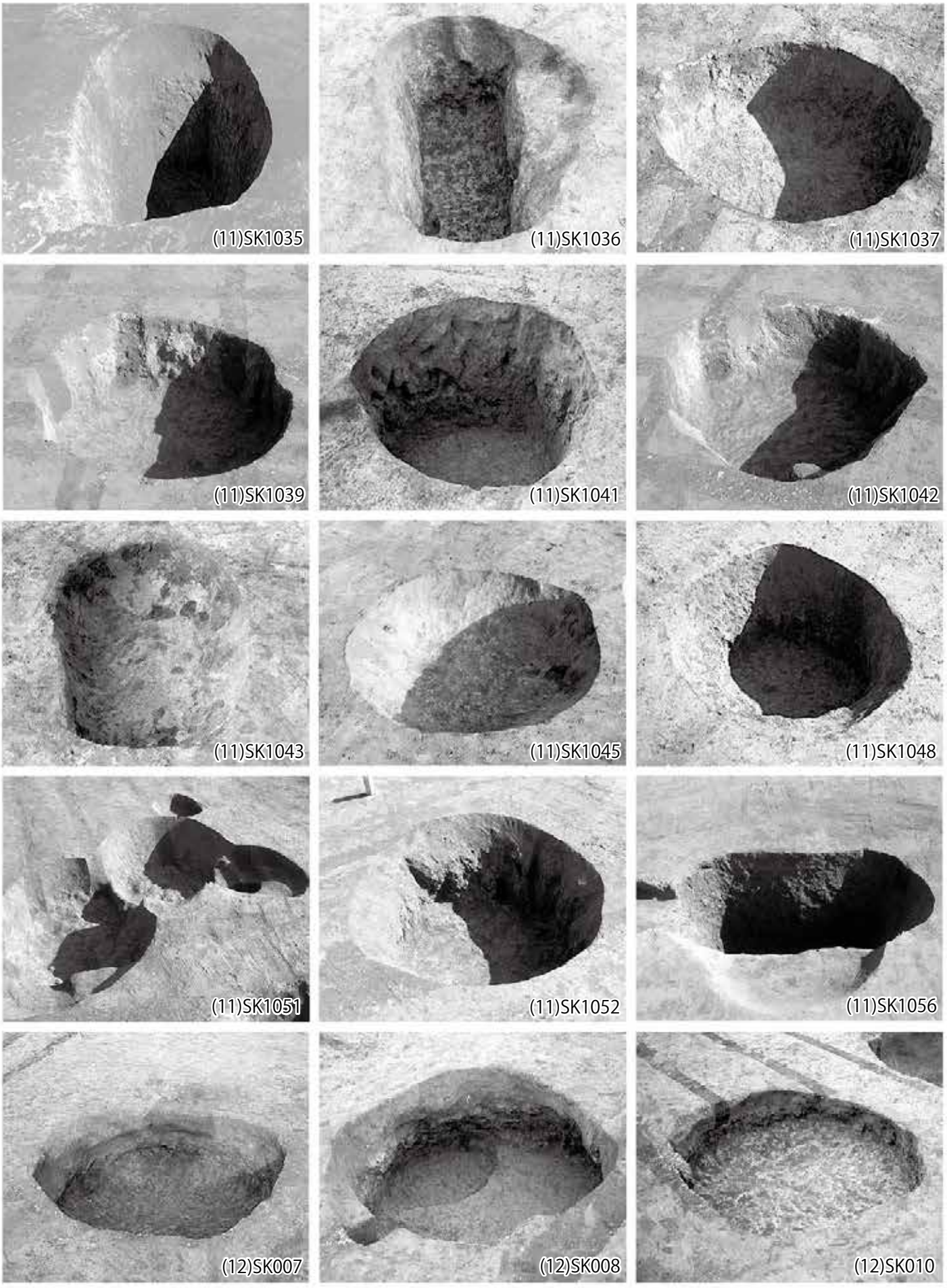
(11)SK1025


(11)SK1026

(11)SK1027

(11)SK1030

(11)SK1034


(11)SK1035
(11)SK1036
(11)SK1037
(11)SK1039
(11)SK1041
(11)SK1042
(11)SK1043
(11)SK1045
(11)SK1048
(11)SK1051
(11)SK1052
(11)SK1056
(12)SK007
(12)SK008
(12)SK010

土坑等（15）

(12)SK011

(12)SK012

(12)SK015

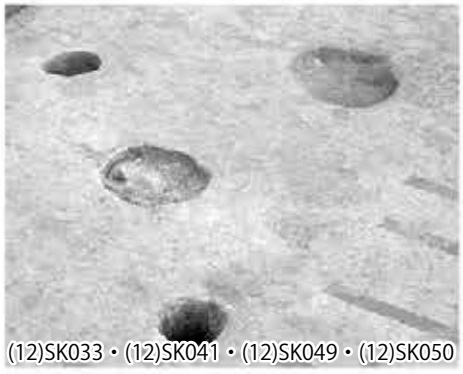
(12)SK025

(12)SK028

(12)SK029・(12)SK030・(12)SK040

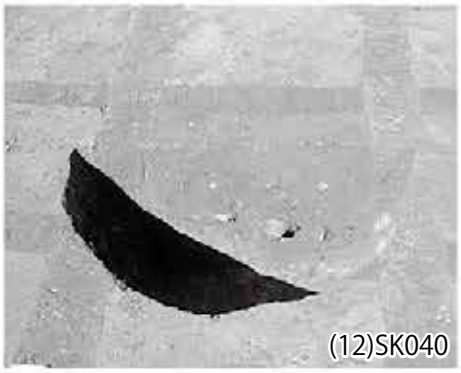
(12)SK031・(12)SK039・(12)SK054

(12)SK032・(12)SK051・(12)SK052


(12)SK033・(12)SK041・(12)SK049・(12)SK050

(12)SK034

(12)SK035


(12)SK040

(12)SK043

(12)SK059・(12)SK064・(12)SK065

(12)SK062

(12)SK070 遺物出土状況

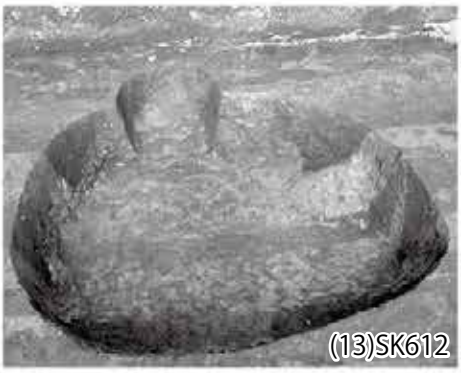
(12)SK071 遺物出土状況

(13)SK605

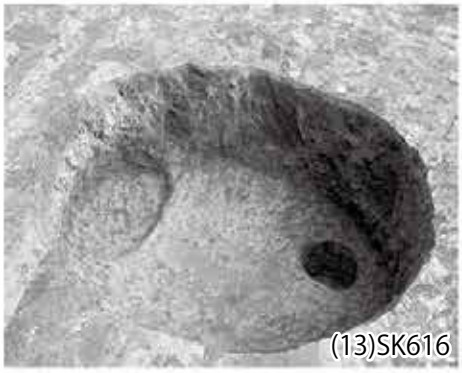
(13)SK607

(13)SK608

(13)SK610

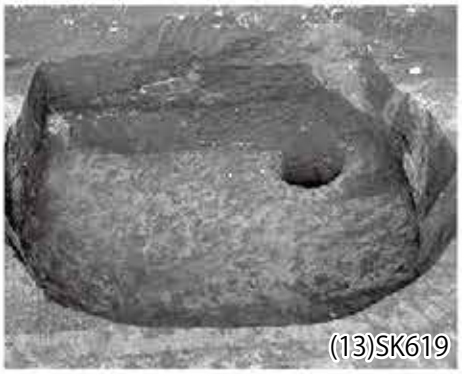

(13)SK612

(13)SK615


(13)SK616

(13)SK617

(13)SK618


(13)SK619

(13)SK622

(13)SK625

(13)SK635

(13)SK641

(13)SK642

(13)SK643

(13)SK644

(13)SK645

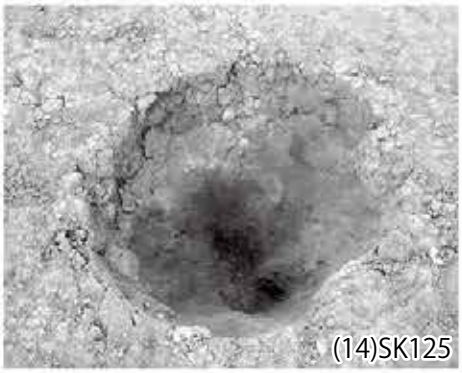
(13)SK646

(13)SK647

(13)SK650

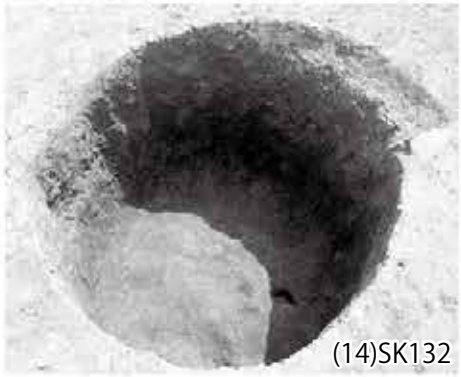
(13)SK660

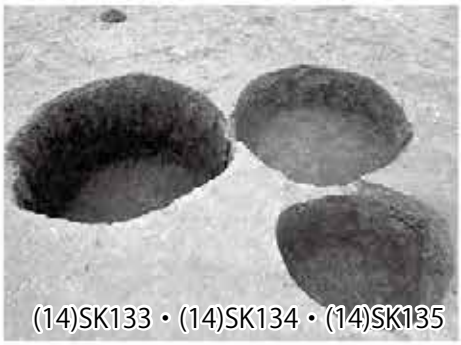
(14)SK123

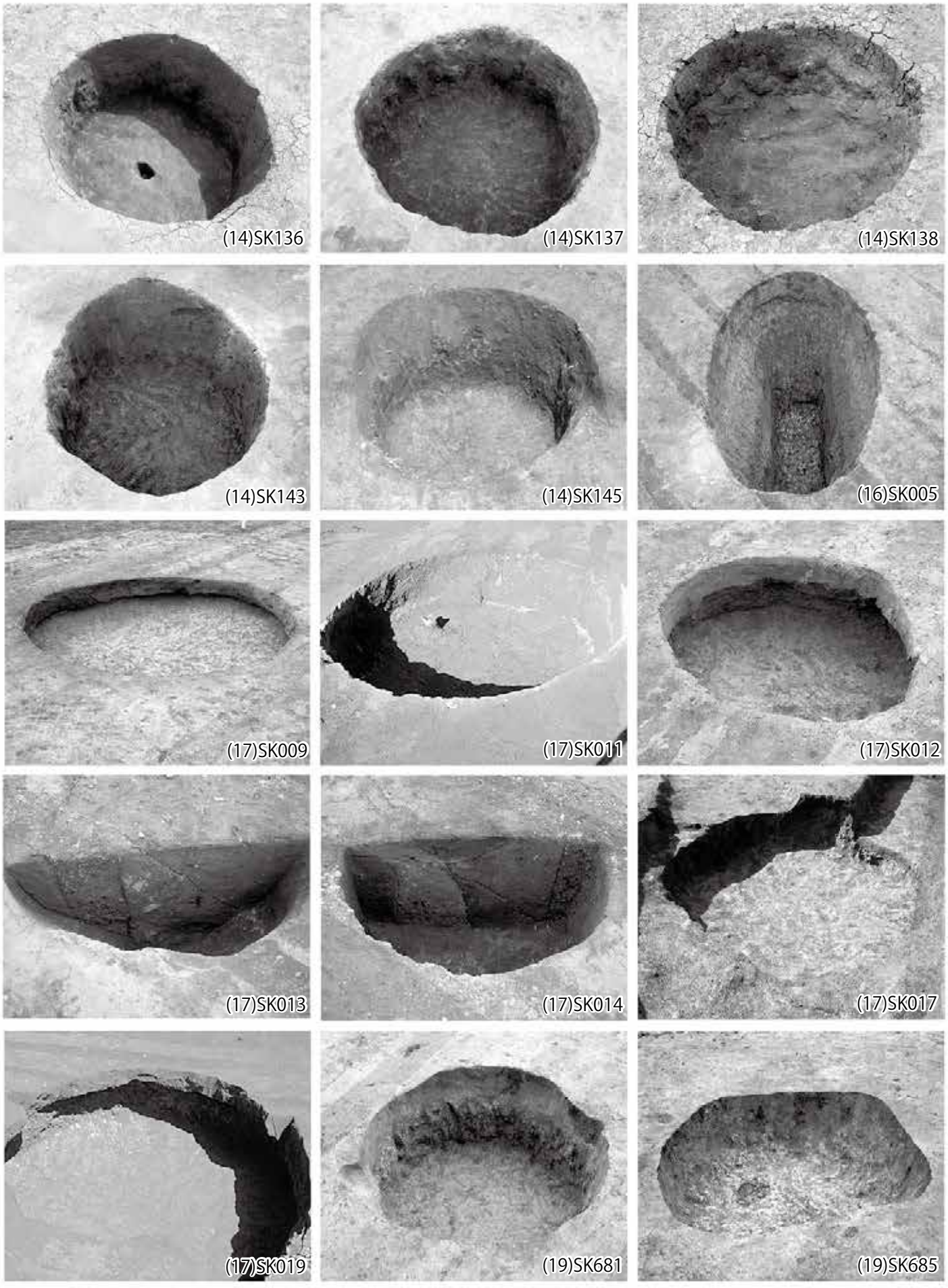

(14)SK125

(14)SK127

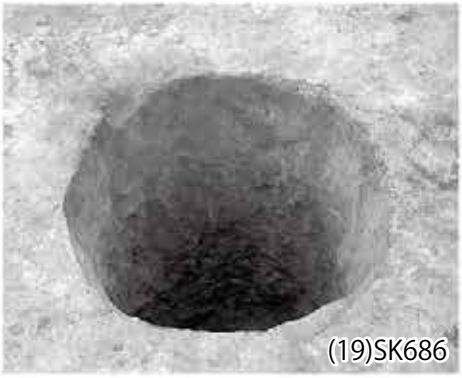
(14)SK130


(14)SK132


(14)SK133・(14)SK134・(14)SK135


(14)SK136
(14)SK137
(14)SK138
(14)SK143
(14)SK145
(16)SK005
(17)SK009
(17)SK011
(17)SK012
(17)SK013
(17)SK014
(17)SK017
(17)SK019
(19)SK681
(19)SK685

土坑等（19）

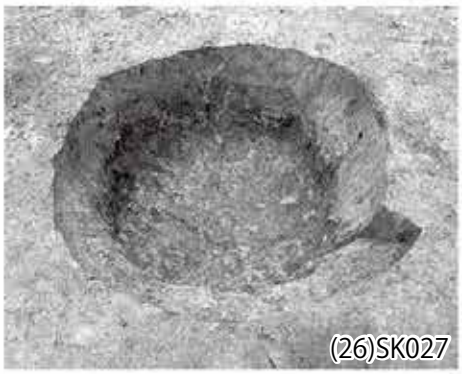

(19)SK686

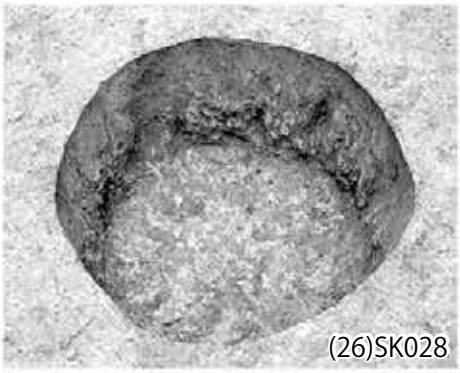
(26)SK017

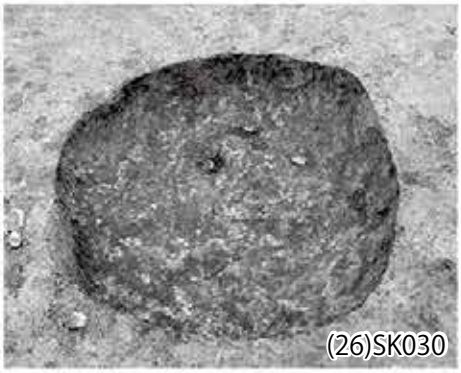
(26)SK019

(26)SK022

(26)SK026


(26)SK027


(26)SK028


(26)SK030

(26)SK031

(26)SK033

(27)SK001

(29)SK716

(29)SK723

(29)SK726・(29)SK727

(29)SK736

(29)SK742

(29)SK743

(29)SK747

(29)SK749

(29)SK755

(29)SK756

(29)SK761

(29)SK763・(29)SK764・(29)SK765・(29)SK766

(29)SK769

(29)SK770

(29)SK771

(29)SK772・(29)SK773

(29)SK774

(29)SK775

(29)SK776

(29)SK777 遺物出土状況

(29)SK778

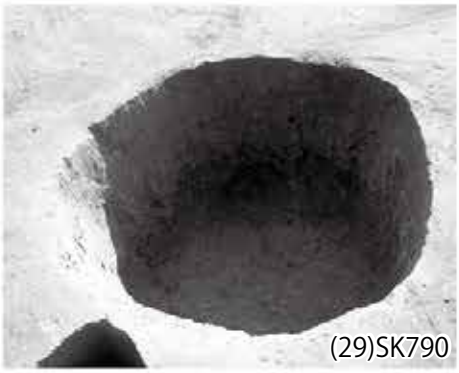
(29)SK779

(29)SK780・(29)SK781

(29)SK782

(29)SK784

(29)SK788・(29)SK789


(29)SK790

(29)SK793

(29)SK794

(29)SK795

(29)SK796

(29)SK798

(29)SK802

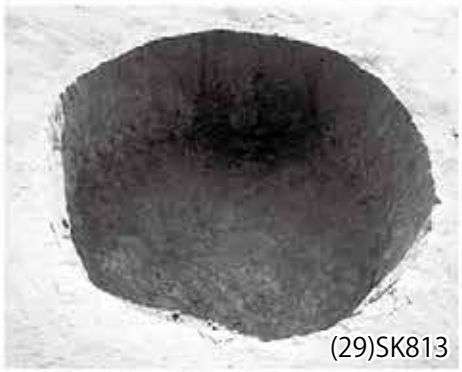
(29)SK803

(29)SK805

(29)SK807

(29)SK808

(29)SK810・(29)SK811・(29)SK812


(29)SK813

(29)SK815

(29)SK816 遺物出土状況

(29)SK817

(29)SK818

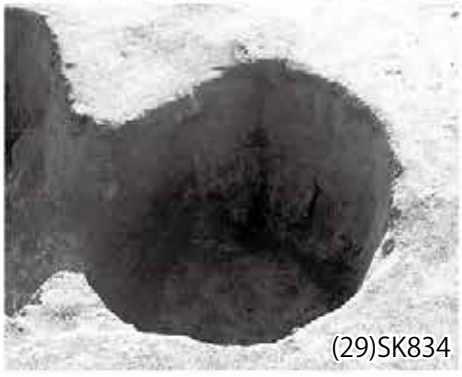
(29)SK819

(29)SK826・(29)SK827

(29)SK828

(29)SK829

(29)SK830


(29)SK834

(29)SK835

(29)SK847

(29)SK850

(29)SK856

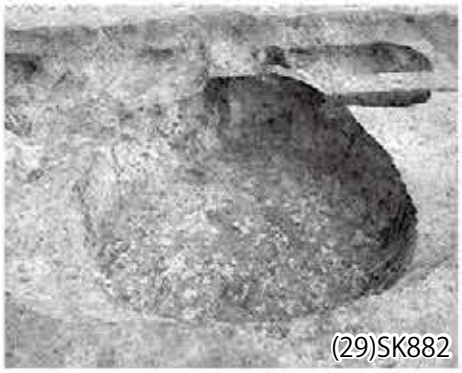
(29)SK858

(29)SK859

(29)SK861

(29)SK871

(29)SK872


(29)SK882

(29)SK883

(29)SK884

(29)SK885

(29)SK887

(29)SK888

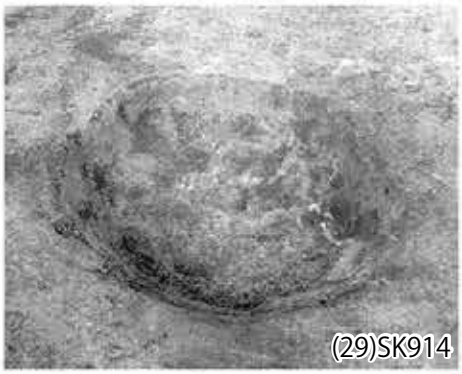
(29)SK889・(29)SK923・(29)SK927・(29)SK928

(29)SK892

(29)SK893

(29)SK900

(29)SK912


(29)SK914

(29)SK916

(29)SK917

(29)SK920

(29)SK922

(29)SK923 遺物出土状況

(29)SK925

(29)SK936

(29)SK936 遺物出土状況

(29)SK942

土坑等（25）

(29)SK944・(29)SK945・(29)SK946

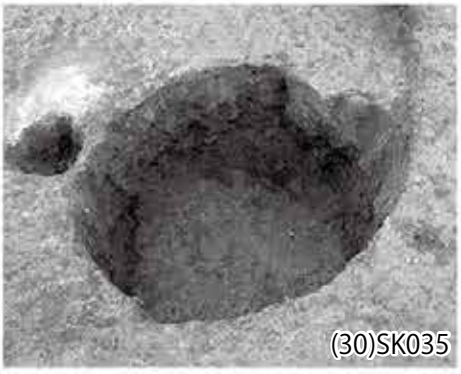
(29)SK947

(29)SK948

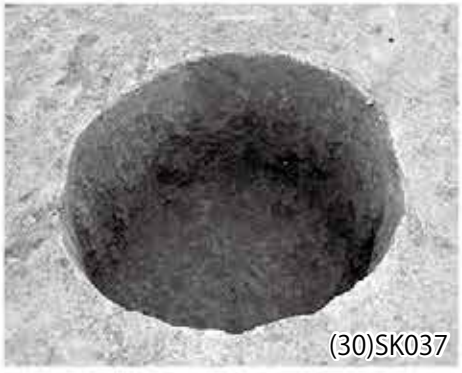
(29)SK955

(29)SK956 遺物出土状況

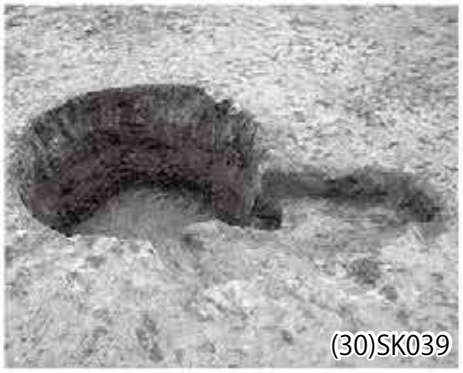
(30)SK034


(30)SK035

(30)SK036


(30)SK037

(30)SK038

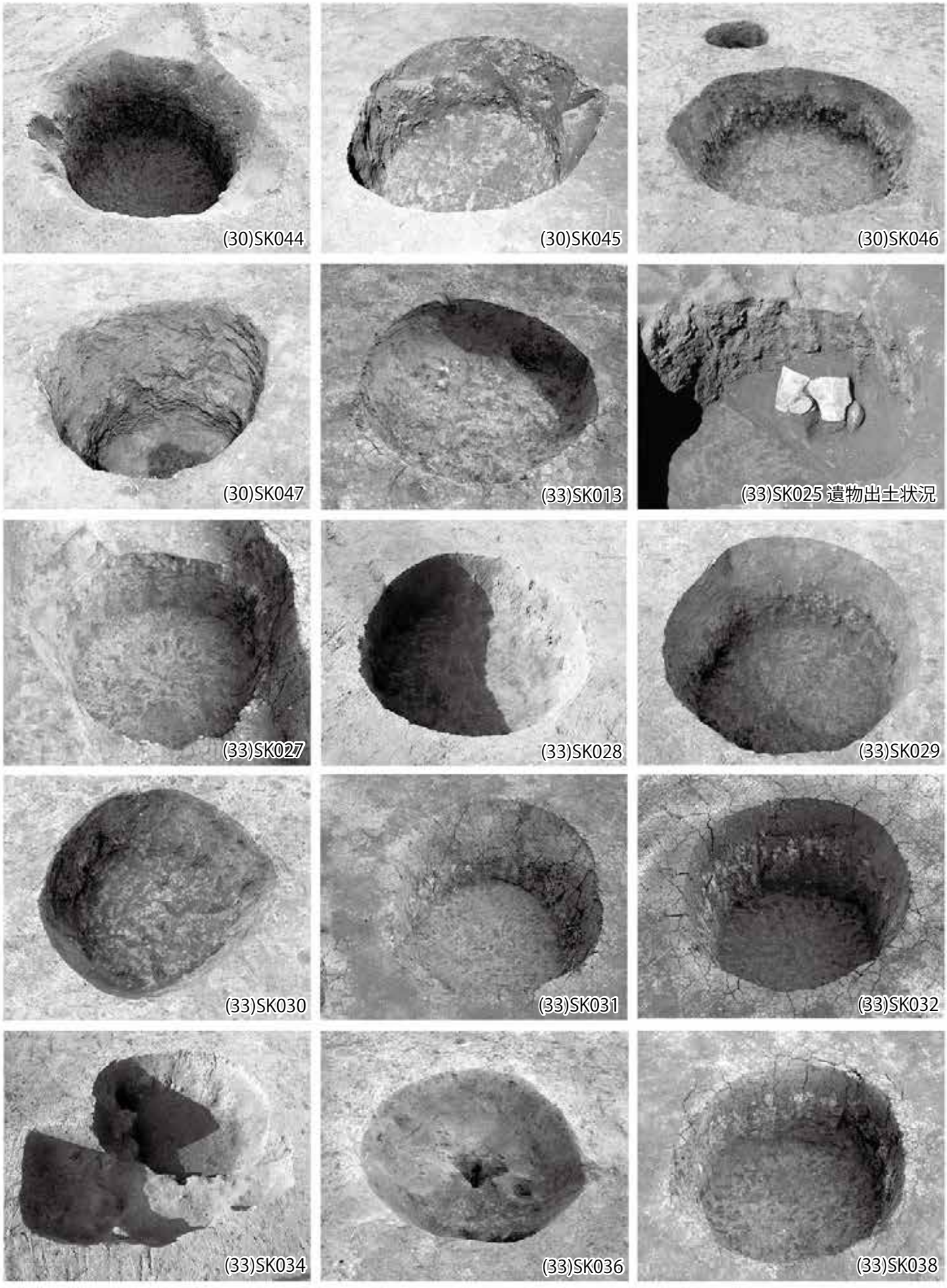

(30)SK039

(30)SK040

(30)SK041

(30)SK041 遺物出土状況

(30)SK042


(30)SK044
(30)SK045
(30)SK046
(30)SK047
(33)SK013
(33)SK025 遺物出土状況
(33)SK027
(33)SK028
(33)SK029
(33)SK030
(33)SK031
(33)SK032
(33)SK034
(33)SK036
(33)SK038

土坑等（27）

(33)SK039

(33)SK040

(33)SK042

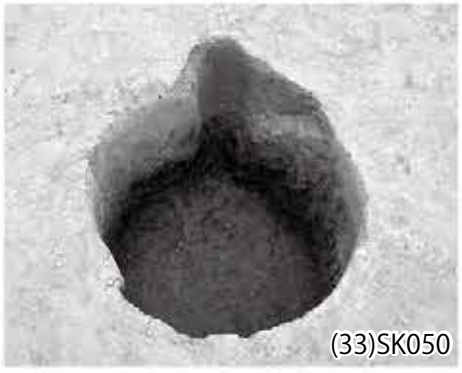
(33)SK044

(33)SK045

(33)SK045 遺物出土状況

(33)SK046

(33)SK048


(33)SK050

(33)SK051

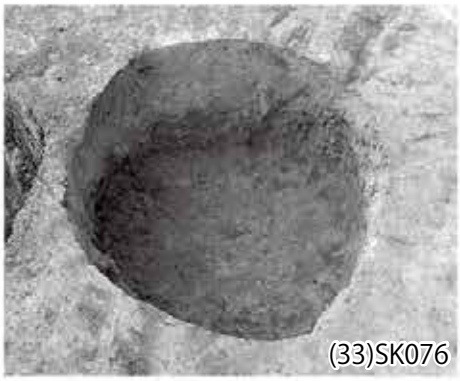
(33)SK056 遺物出土状況

(33)SK067

(33)SK067 遺物出土状況

(33)SK068

(33)SK069

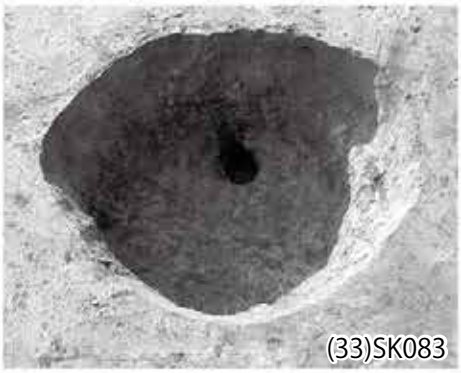

(33)SK076

(33)SK077

(33)SK078

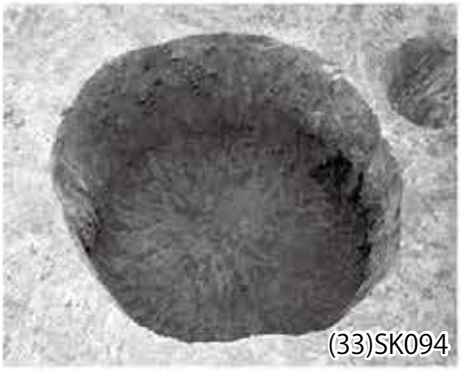
(33)SK080 遺物出土状況

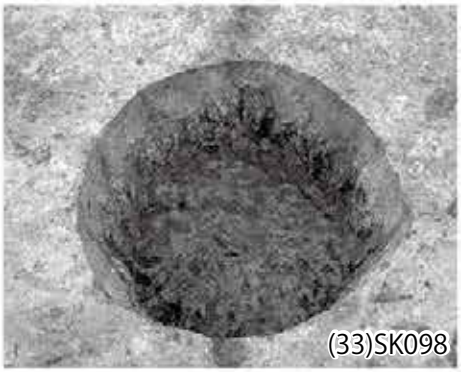
(33)SK082


(33)SK083

(33)SK084

(33)SK087


(33)SK094

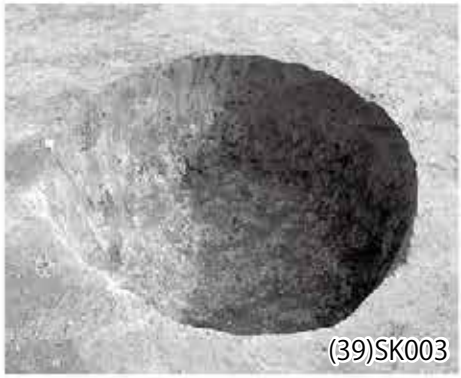

(33)SK098

(33)SK098 遺物出土状況

(33)SK102 遺物出土状況

(35)SK021

(37)SK108


(39)SK003

(4)SI058-6

(7)SI226-12

(7)SI226-16

(7)SI226-17

(7)SI226-20

(7)SI256-3

(7)SI256-4

(7)SI257-4

(7)SI257-4

(7)SI262-3

(7)SI262-3

(7)SI273-3

(7)SI273-11

住居跡出土土器(1)

(7)SI273-6

(7)SI273-6

(7)SI276-1

(8)SI020-12

(7)SI289-14

(8)SI016-20

(8)SI016-20

(8)SI020-19

(10)SI342-6

(10)SI353-8

(10)SI353-9

(10)SI353-26

(10)SI355-4

(10)SI522-4

住居跡出土土器(2)

(10)SI570-1

(10)SI570-1

(11)SI1013-14

(11)SI1013-14

(11)SI1013-20

(11)SI1015-1

(11)SI1015-2

(11)SI1015-2

(11)SI1015-7

(12)SI026-5

(14)SI140-13

(16)SI003-12

(26)SI003-1

(26)SI005-1

住居跡出土土器(3)

(29)SI701-1

(29)SI704-1

(29)SI701-3

(29)SI703-17

(29)SI705-1

(29)SI703-4

(29)SI705-2

(29)SI706-2

(29)SI703-4

(29)SI705-2

(29)SI706-2

(29)SI703-13

住居跡出土土器(4)

(29)SI708-10

(29)SI711-5

(29)SI713-4

(29)SI713-5

(29)SI709-9

(29)SI711-5

(29)SI713-9

(29)SI713-9

(29)SI711-1

(29)SI711-12

(29)SI711-4

(29)SI711-17

(30)SI010-6

(29)SI711-16

(29)SI713-10

(30)SI010-12

住居跡出土土器(5)

(30)SI010-11

(30)SI011-5

(30)SI011-13

(33)SI016-1

(33)SI016-2

(33)SI017-7

(33)SI018-6

(33)SI019-1

(33)SI019-2

(33)SI019-6

(33)SI019-23

(33)SI100-3

(35)SI001-8

(35)SI001-9

(37)SI104-17

住居跡出土土器(6)

(37)SI104-25

(7)SK219-7

(7)SK220-10

(37)SI104-29

(7)SK219-18

(7)SK231-6

(7)SK238-9

(6)SK012-5

(7)SK219-19

(6)SK016-5

(7)SK220-2

(7)SK238-21

(7)SK219-5

(7)SK238-18

住居跡出土土器(7)・土坑等出土土器(1)

(7)SK238-20

(7)SK239-7

(7)SK260-1

(7)SK244-2

(7)SK260-1

(7)SK238-23

(7)SK244-2

(7)SK261-2

(7)SK244-1

(7)SK255-6

(7)SK267-1

(7)SK259-1

(7)SK263-1

(7)SK267-8

土坑等出土土器(2)

(7)SK270-2

(7)SK271-1

(7)SK271-2

(7)SK271-3

(7)SK271-11

(7)SK271-14

(7)SK271-15

(7)SK271-18

(7)SK271-20

(7)SK272-5

(7)SK278-1

(7)SK278-1

(7)SK278-12

土坑等出土土器(3)

(7)SK283-1

(7)SK290-2

(8)SK027-6

(7)SK290-2

(8)SK035-14

(7)SK283-2

(8)SK024-1

(8)SK035-17

(7)SK283-7

(10)SK392-2

(8)SK023-18

(8)SK035-16

(10)SK392-2

(8)SK035-1

土坑等出土土器(4)

(10)SK394-5

(10)SK394-5

(10)SK394-5

(10)SK410-4

(10)SK395-5

(10)SK395-6

(10)SK404-8

(10)SK451-1

(10)SK402-3

(10)SK402-3

(10)SK402-3

(10)SK402-3

土坑等出土土器(5)

(10)SK451-8

(10)SK464-8

(10)SK471-3

(10)SK471-10

(10)SK475-8

(10)SK471-11

(10)SK477-11

(10)SK479-6

(10)SK519-5

(10)SK480-1

(10)SK480-1

(10)SK519-6

(10)SK476-1

土坑等出土土器(6)

(10)SK519-4

(10)SK519-7

(10)SK520-4

(10)SK520-6

(10)SK538-4

(10)SK543-1

(10)SK547-10

(10)SK547-11

(10)SK563-8

(10)SK579-18

(10)SK566-6

(10)SK579-3

(10)SK579-14

(10)SK579-20

土坑等出土土器(7)

(10)SK579-16

(10)SK579-17

(10)SK579-19

(12)SK012-1

(12)SK012-11

(12)SK012-10

(12)SK070-1

(12)SK070-1

(12)SK070-1

(13)SK605-2

(13)SK605-4

(12)SK070-2

(13)SK642-1

(13)SK642-1

(13)SK644-9

(13)SK649-1

(13)SK649-1

土坑等出土土器(8)

(13)SK646-1

(13)SK646-1

(13)SK650-5

(17)SK009-6

(19)SK681-6

(29)SK784-1

(29)SK772-5

(29)SK777-1

(29)SK777-1

(29)SK777-2

(29)SK816-1

(29)SK912-6

(29)SK872-3

土坑等出土土器(9)

(29)SK885-5

(29)SK912-11

(29)SK925-1

(29)SK944-9

(30)SK039-17

(30)SK040-7

(30)SK041-8

(30)SK041-9

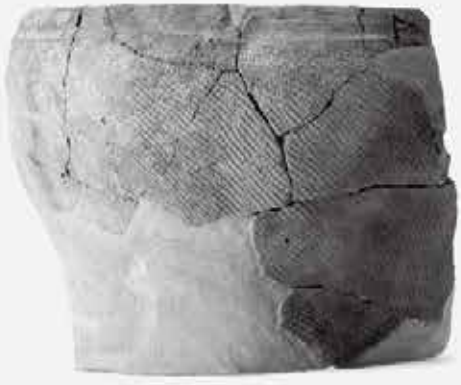
(33)SK045-10

(33)SK043-4

(33)SK043-18

(33)SK080-7

(33)SK025-1


(33)SK030-3

土坑等出土土器(10)

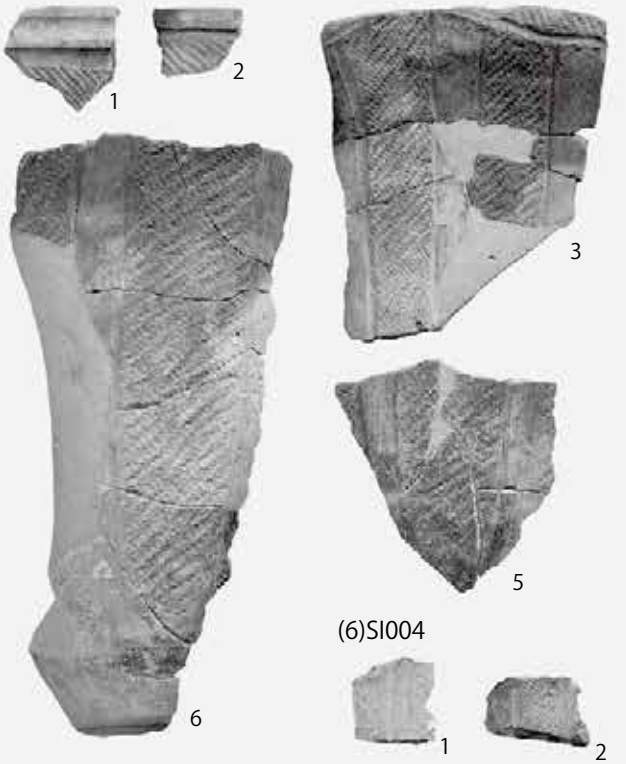
(33)SK067-1

遺構外 (2) 区 -2

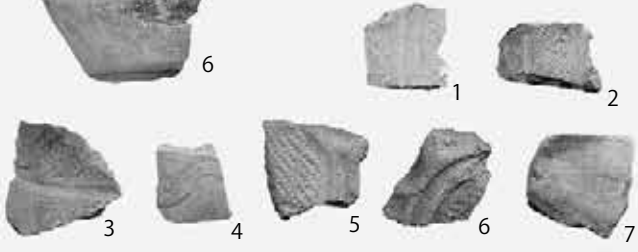
遺構外 (29) 区 -12

遺構外 (2) 区 -1

(4)SI058



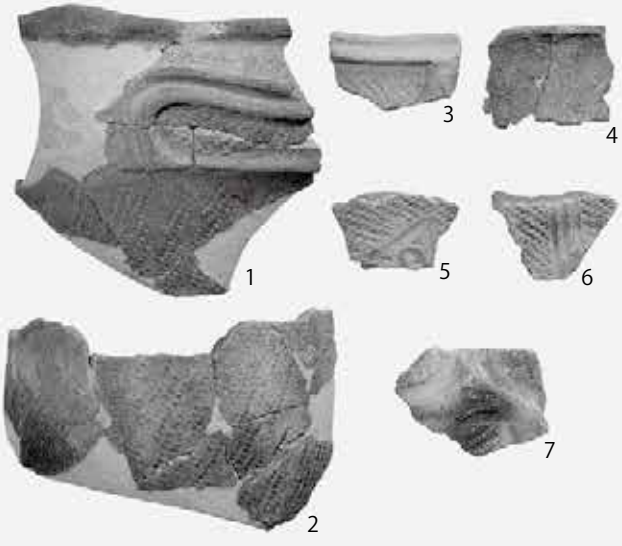
(6)SI004



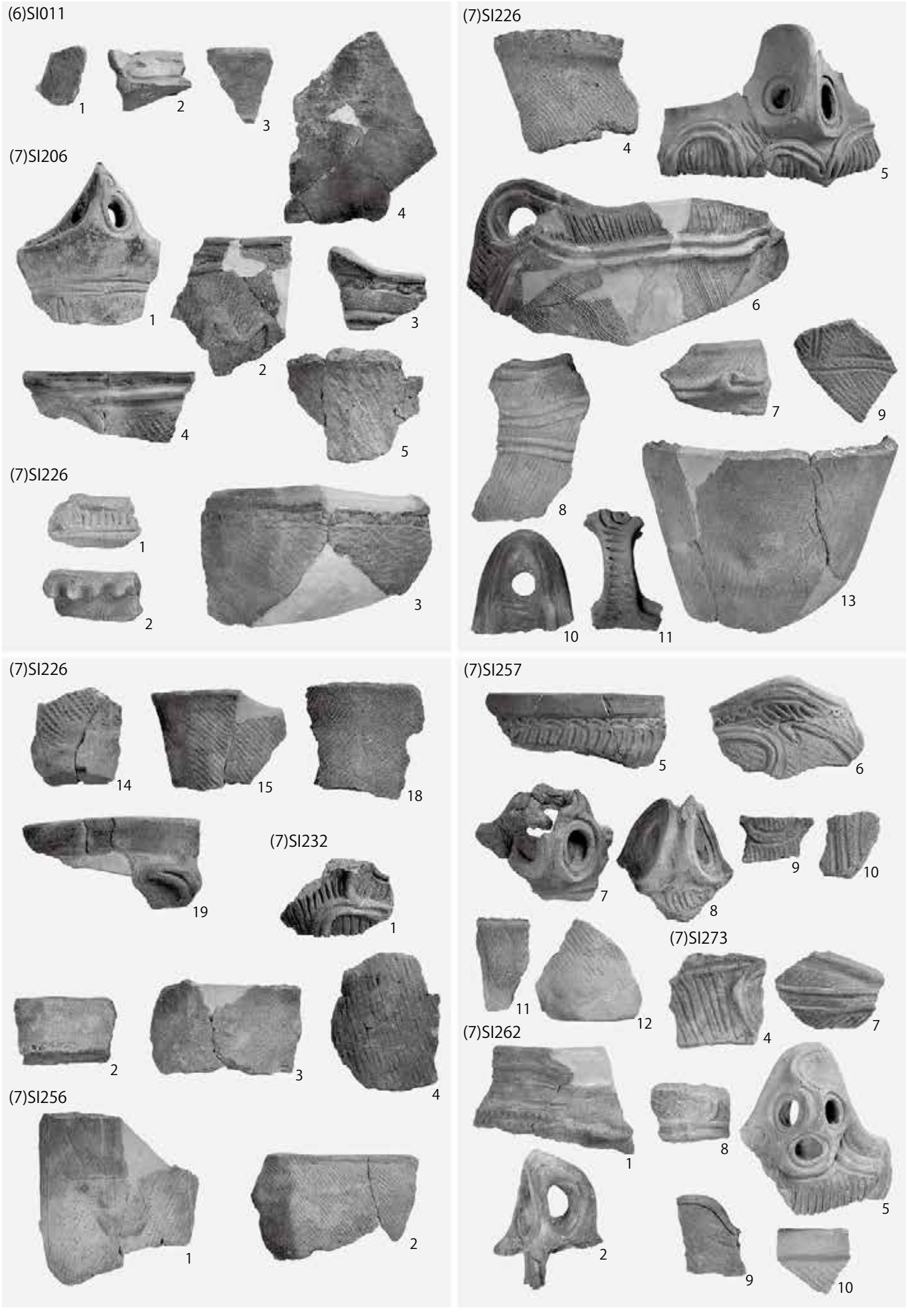
(6)SI005

(6)SI007

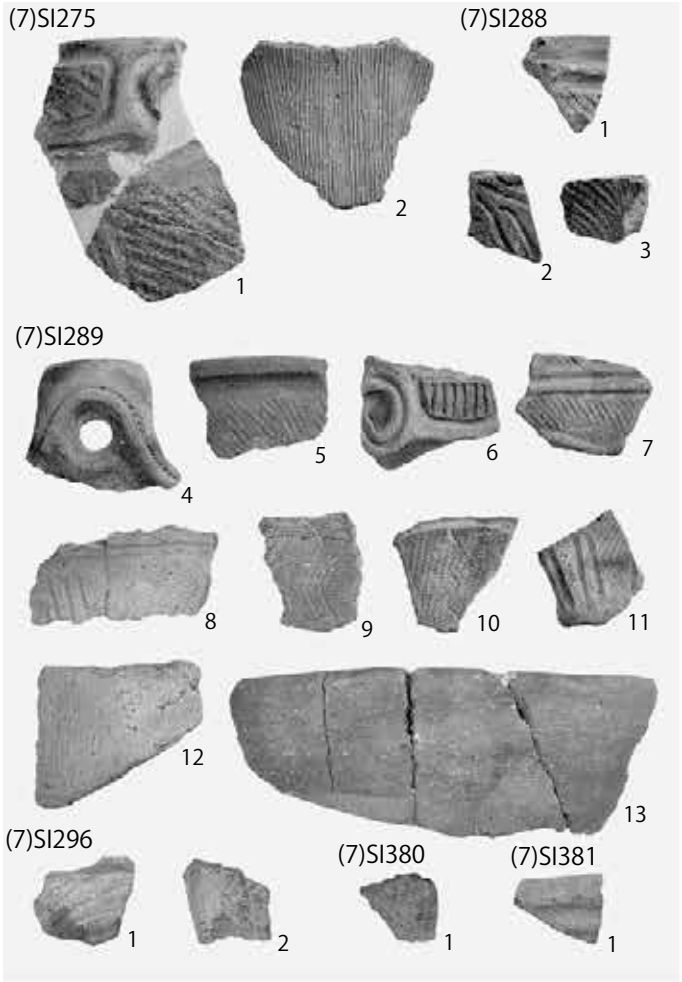
(6)SI010

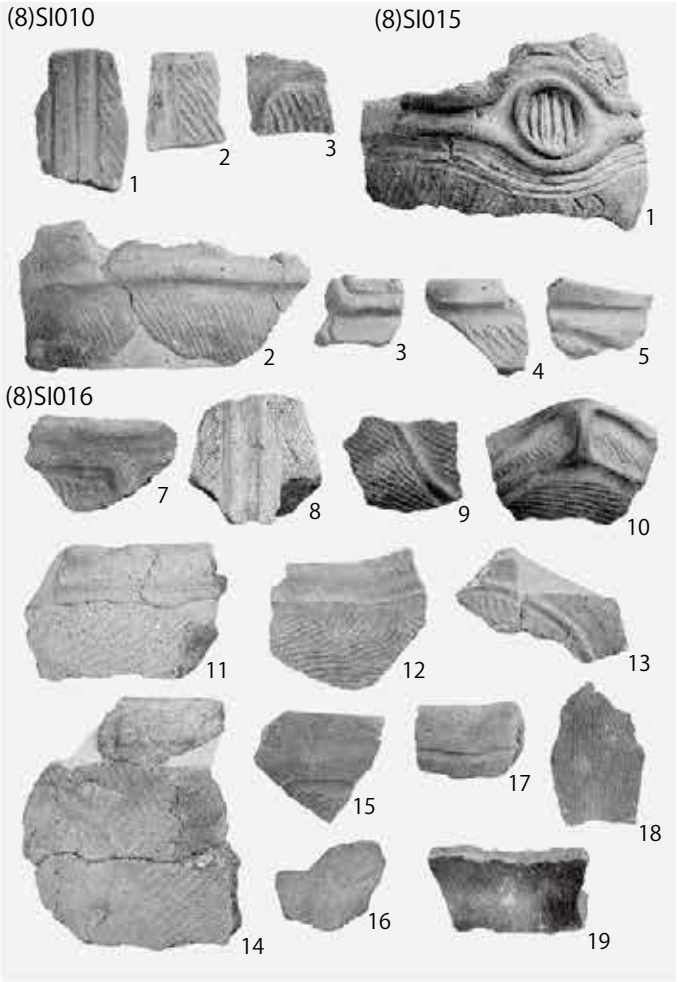


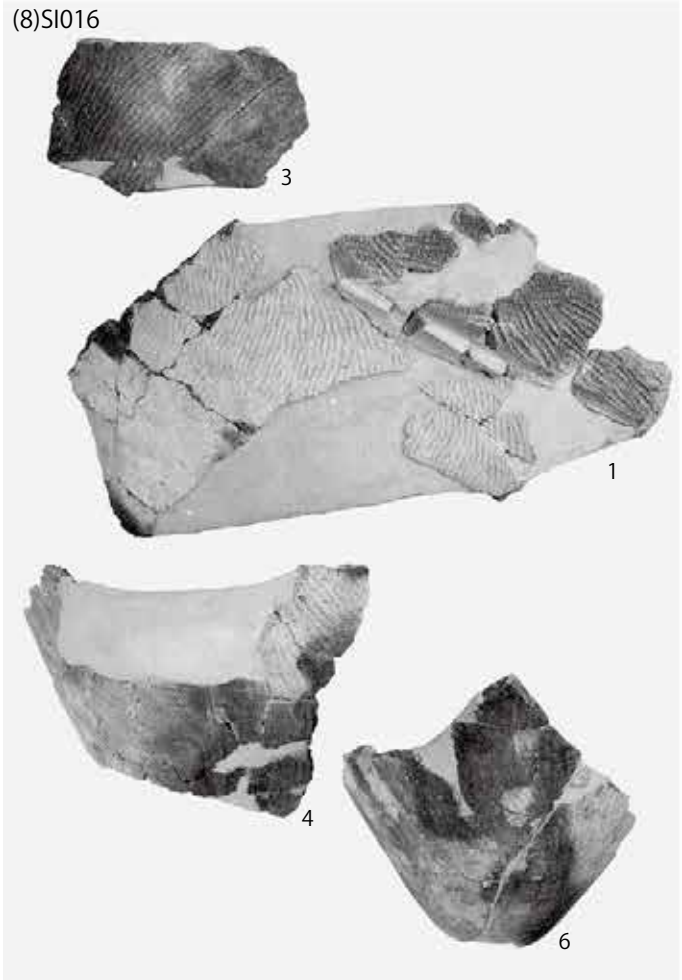
土坑等出土土器(11)・遺構外出土土器(1)・住居跡出土土器(8)

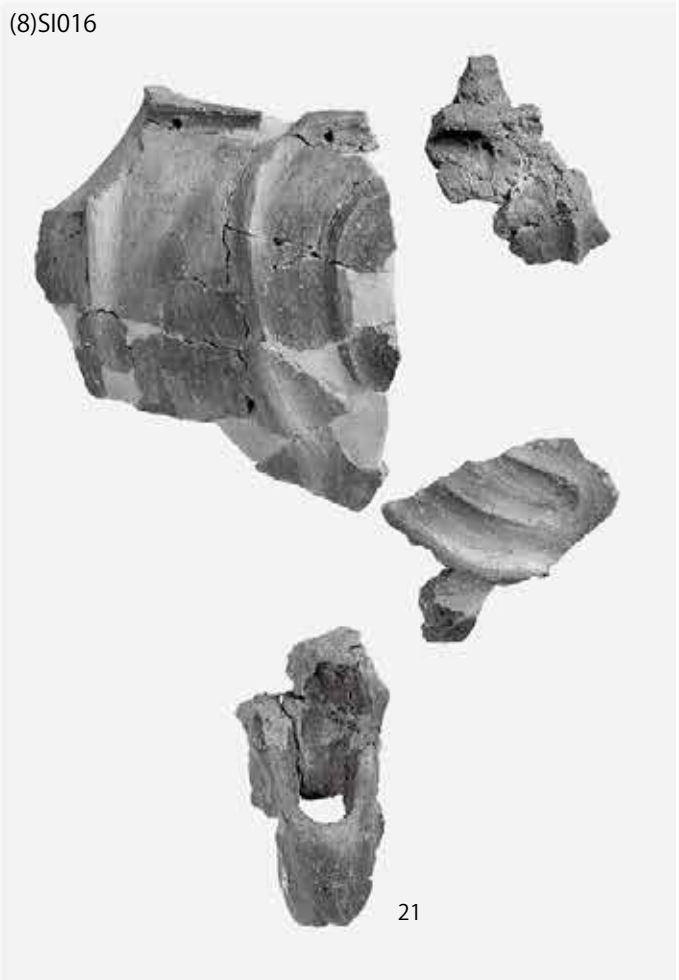

(6)SI011
1
2
3
4
(7)SI206
1
2
3
4
5
(7)SI226
1
2
3
(7)SI226
4
5
6
7
8
9
10
11
13
(7)SI226
14
15
18
19
(7)SI232
1
2
3
4
(7)SI256
1
2
(7)SI257
5
6
7
8
9
10
(7)SI273
11
12
4
7
(7)SI262
1
8
5
2
9
10

住居跡出土土器(9)


(7)SI275
(7)SI288
(7)SI289
(7)SI296
(7)SI380
(7)SI381

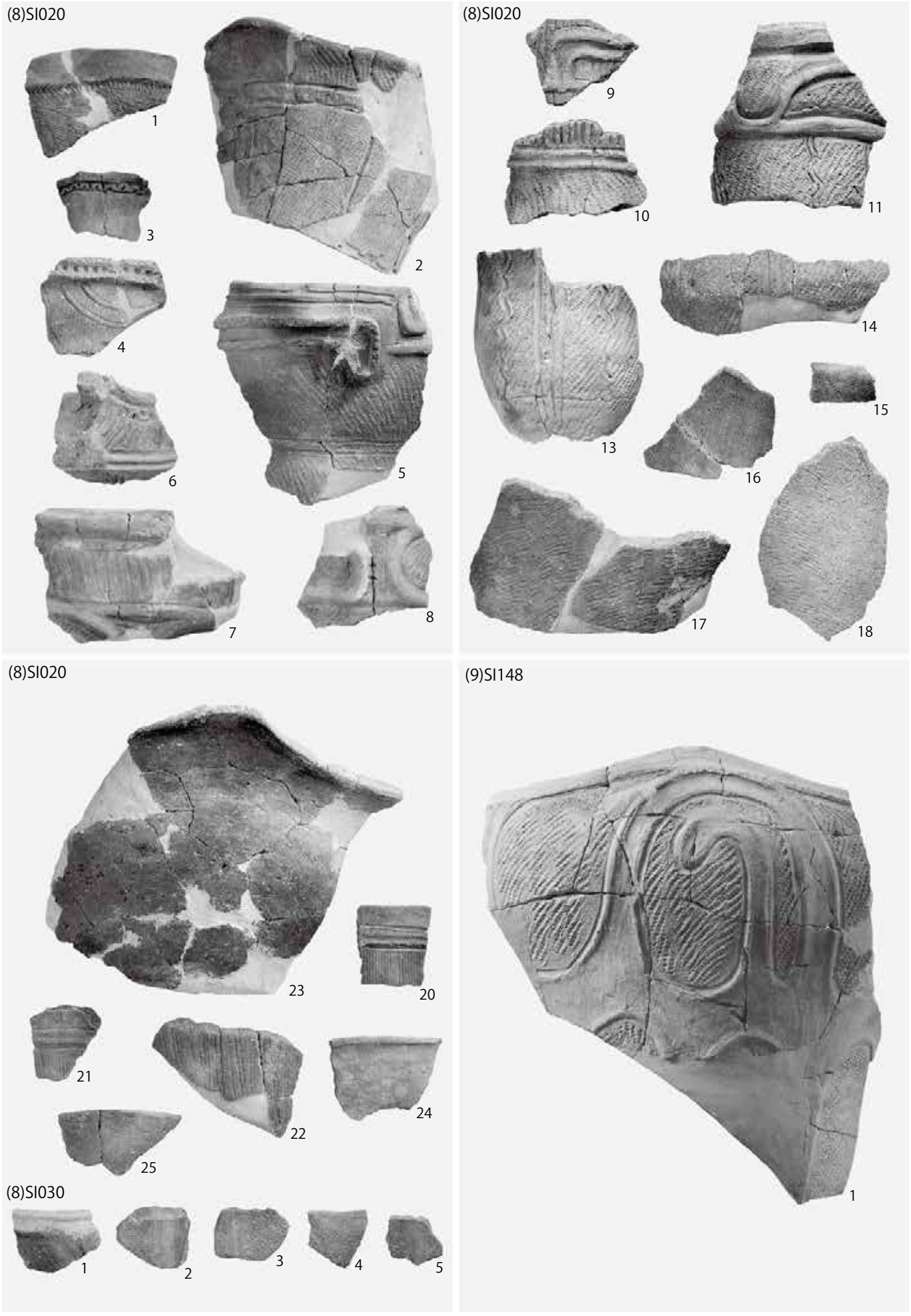

(8)SI010
(8)SI015
(8)SI016


(8)SI016

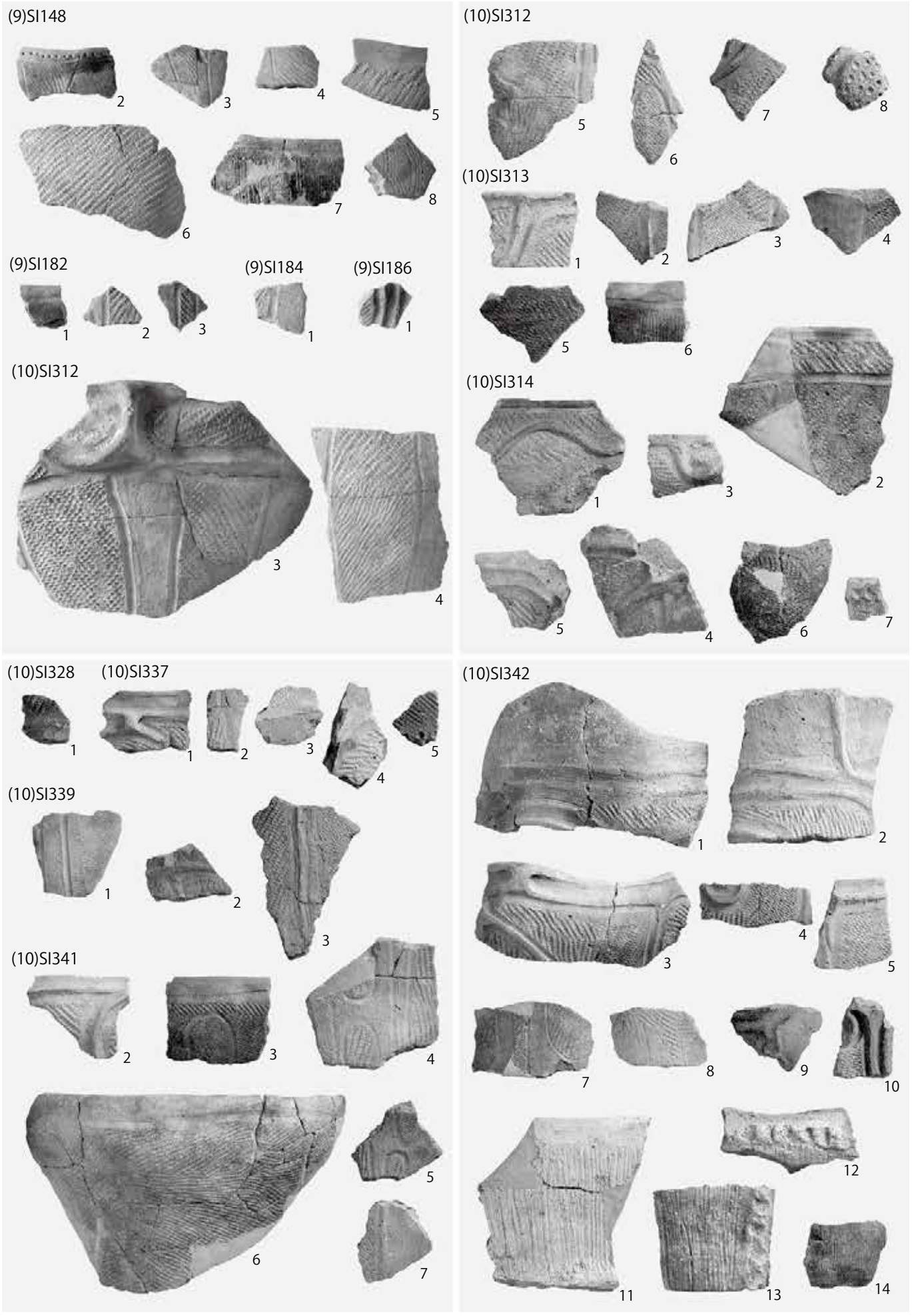

(8)SI016

住居跡出土土器(10)

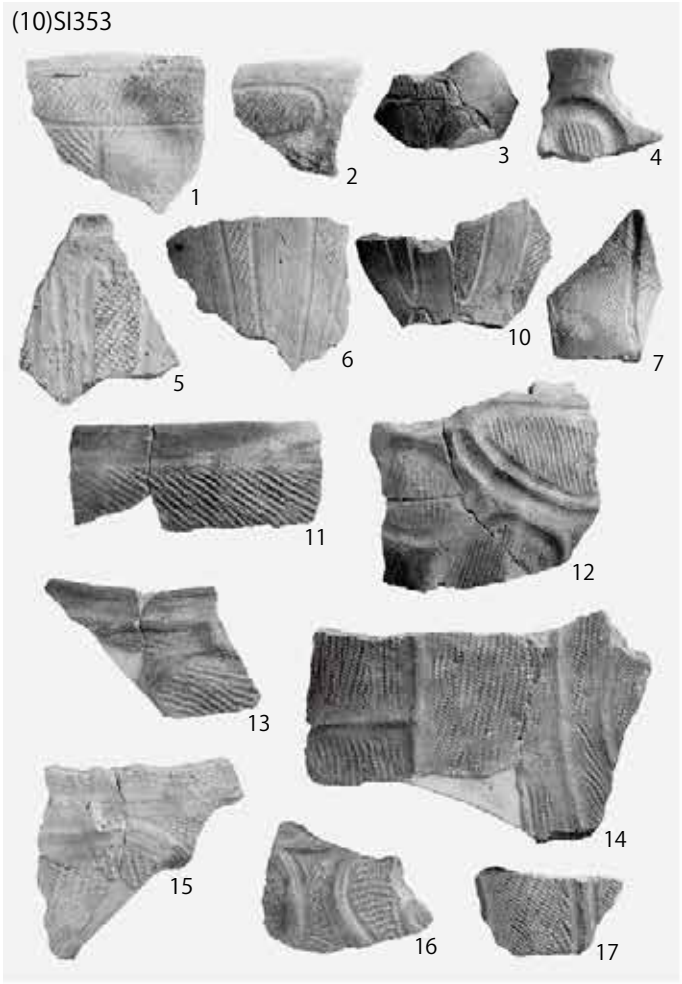
図版 70

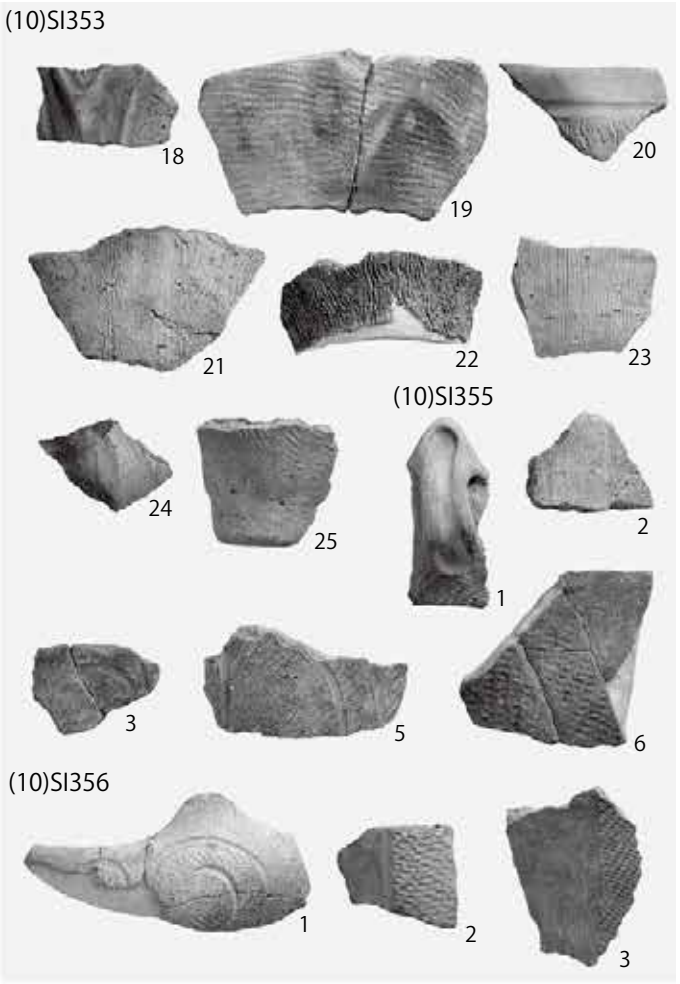


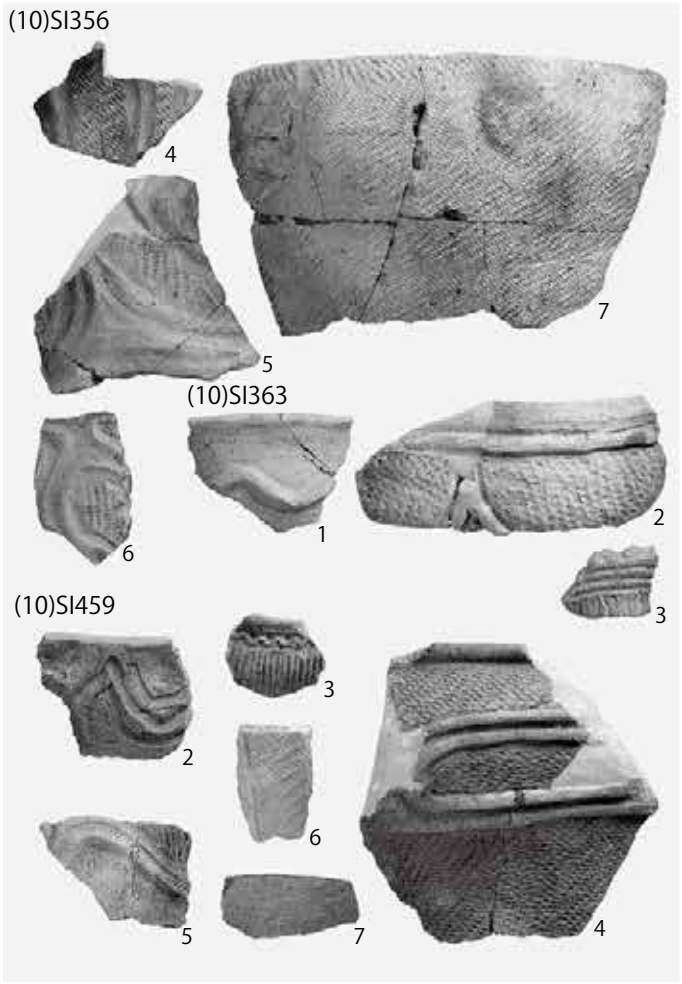
住居跡出土土器(11)

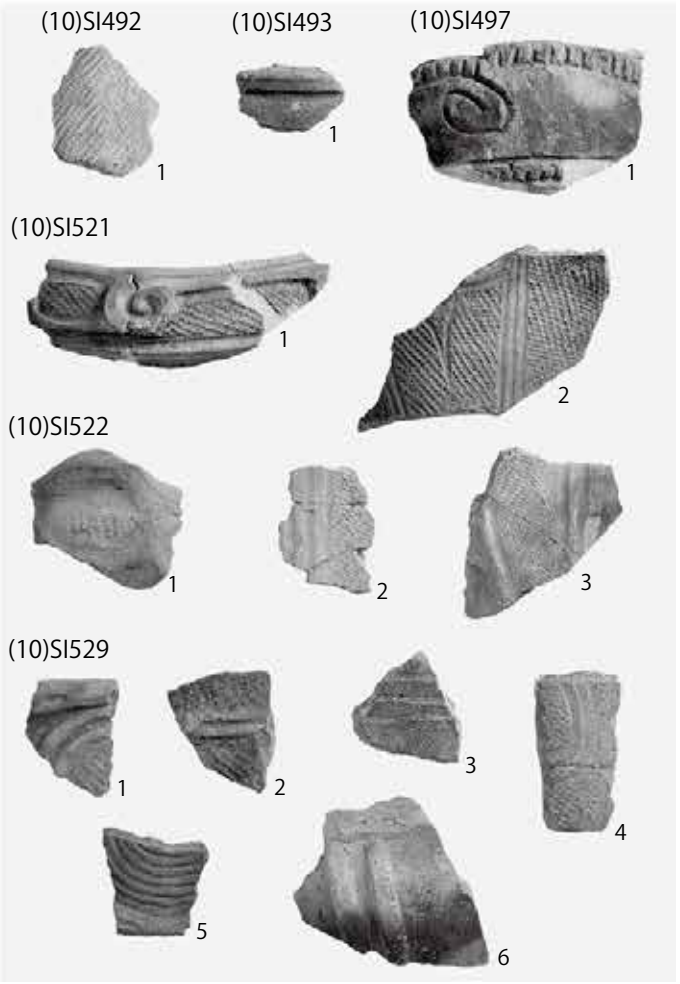

(9)SI148
(9)SI182
(9)SI184
(9)SI186
(10)SI312
(10)SI313
(10)SI314
(10)SI328
(10)SI337
(10)SI339
(10)SI341
(10)SI342

住居跡出土土器(12)

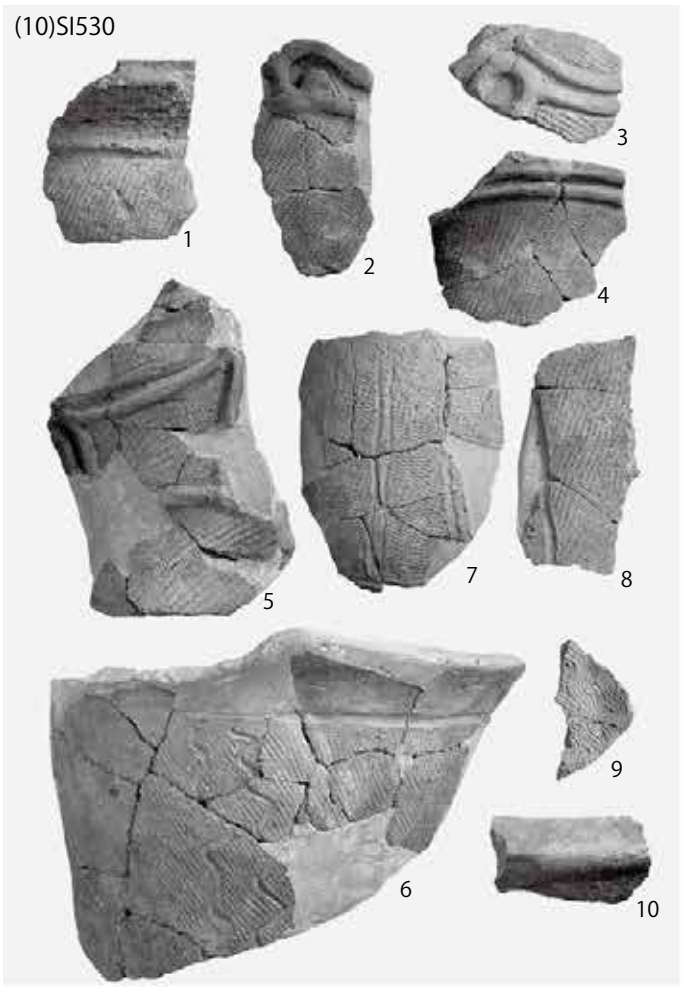

(10)SI353
1
2
3
4
5
6
10
7
11
12
13
14
15
16
17

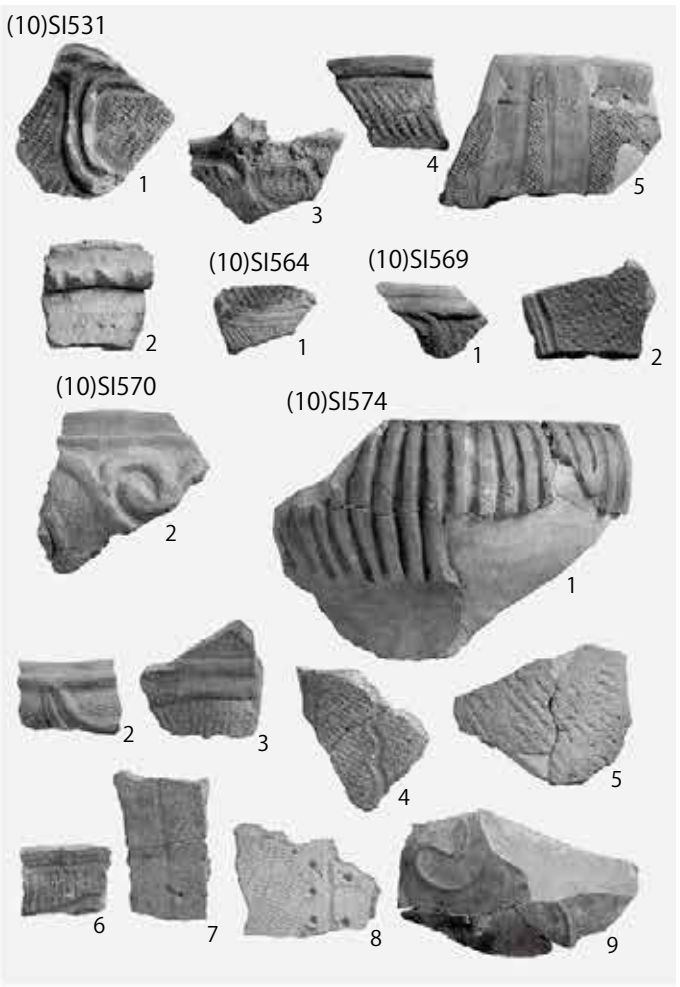

(10)SI353
18
19
20
21
22
23
(10)SI355
24
25
1
2
3
5
6
(10)SI356
1
2
3

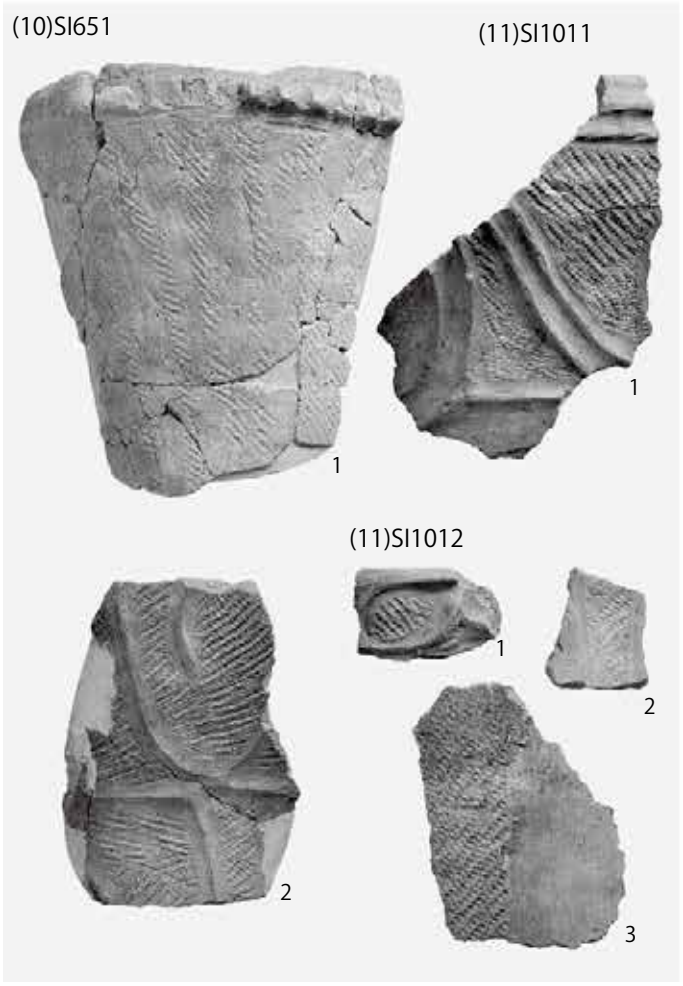

(10)SI356
4
7
5
(10)SI363
6
1
2
3
(10)SI459
2
3
6
5
7
4

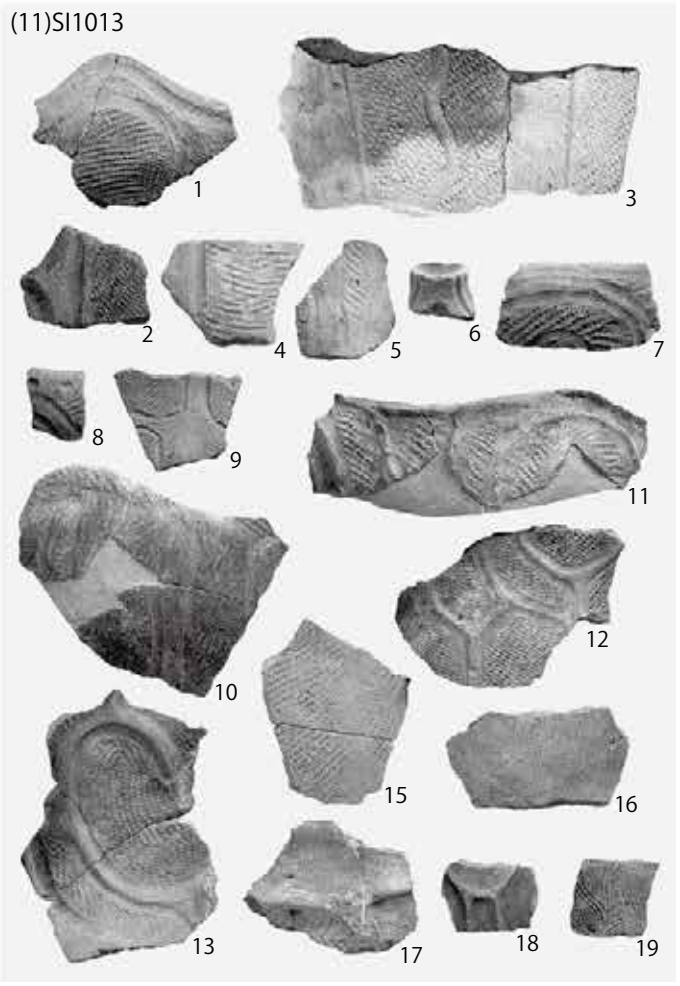

(10)SI492
1
(10)SI493
1
(10)SI497
1
(10)SI521
1
2
(10)SI522
1
2
3
(10)SI529
1
2
3
4
5
6

住居跡出土土器(13)

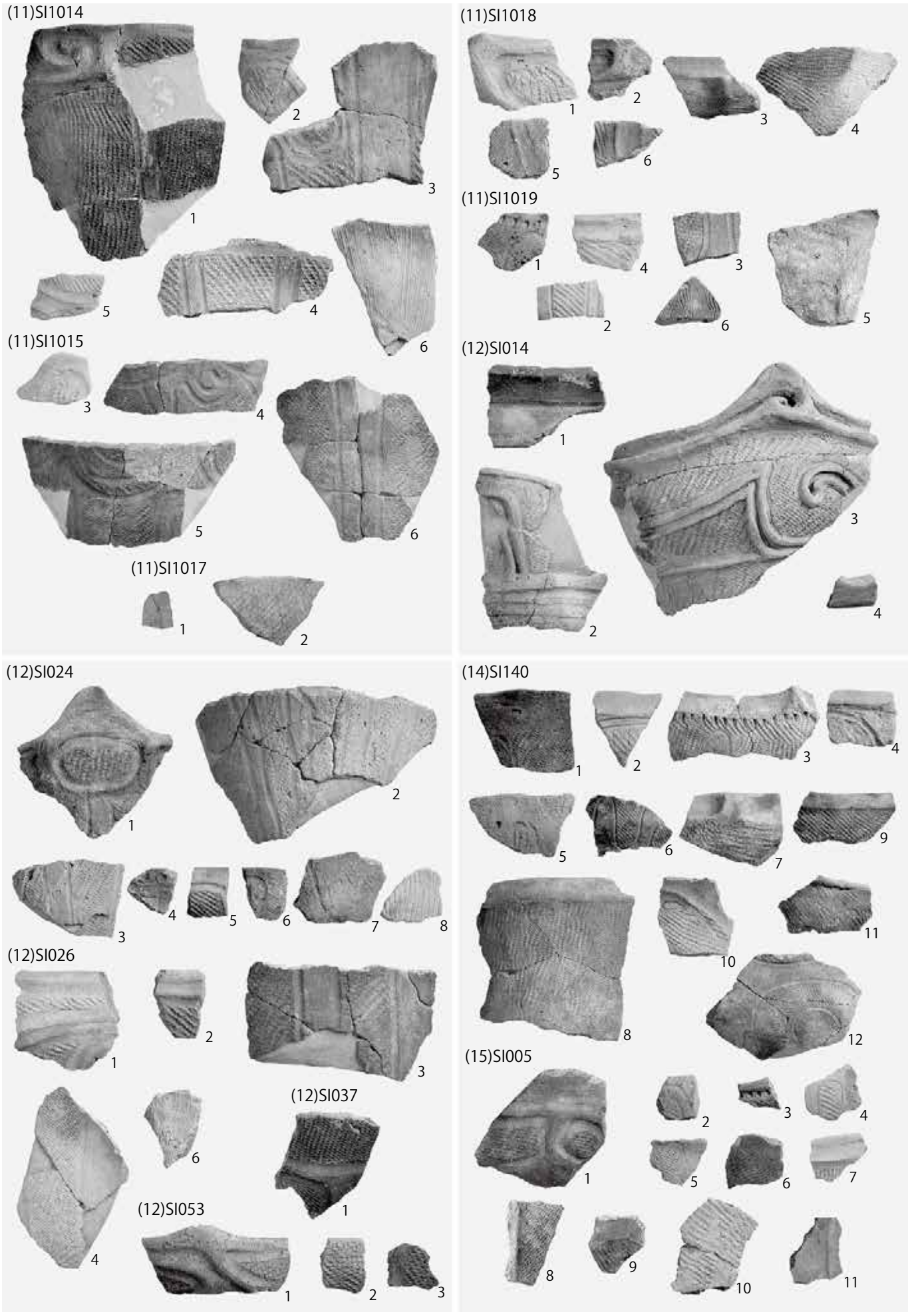

(10)SI530
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10


(10)SI531
1
3
4
5
2
(10)SI564
1
(10)SI569
1
2
(10)SI570
2
(10)SI574
1
2
3
4
5
6
7
8
9

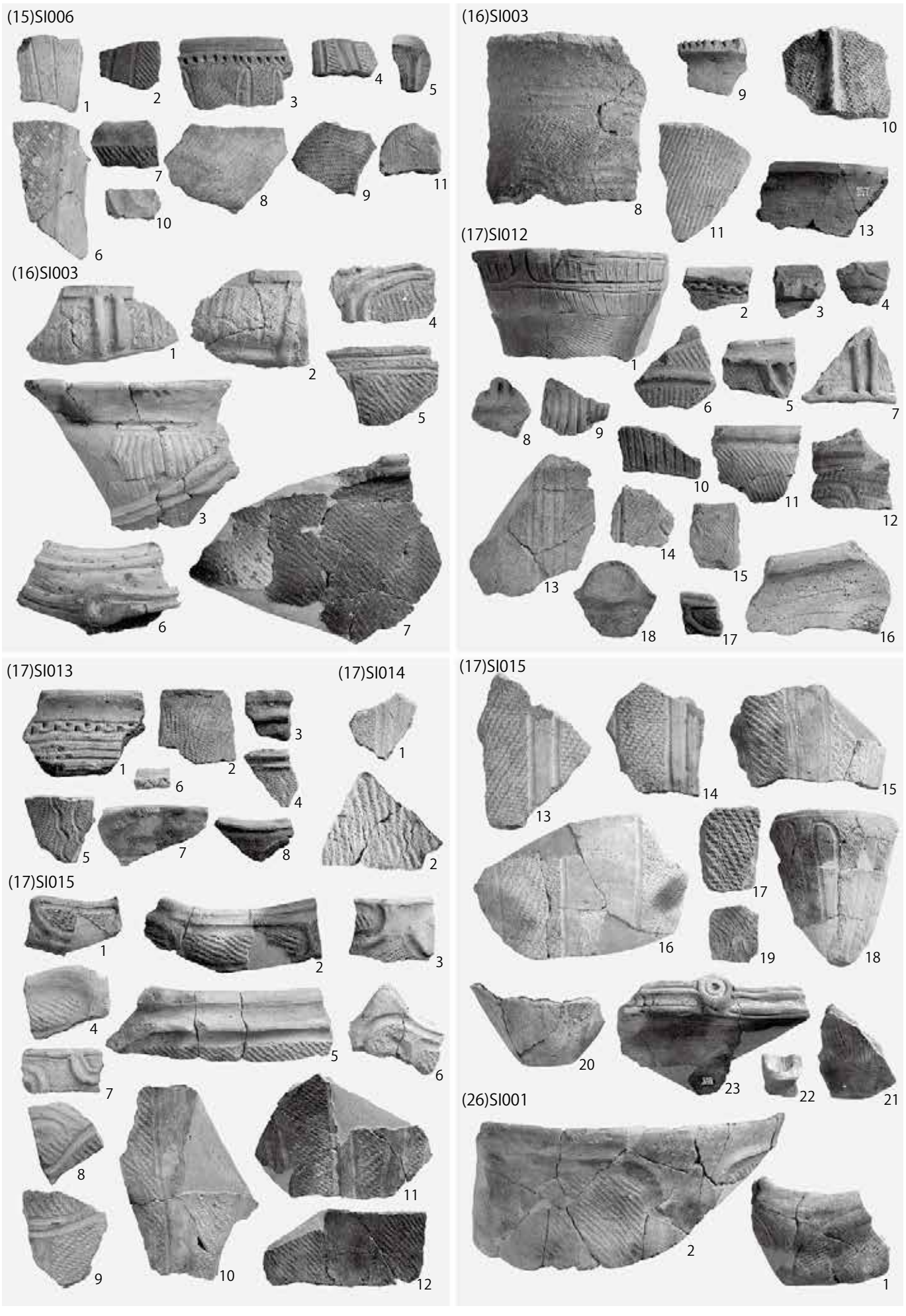

(10)SI651
1
(11)SI1011
1
(11)SI1012
1
2
2
3


(11)SI1013
1
3
2
4
5
6
7
8
9
11
10
12
15
16
13
17
18
19

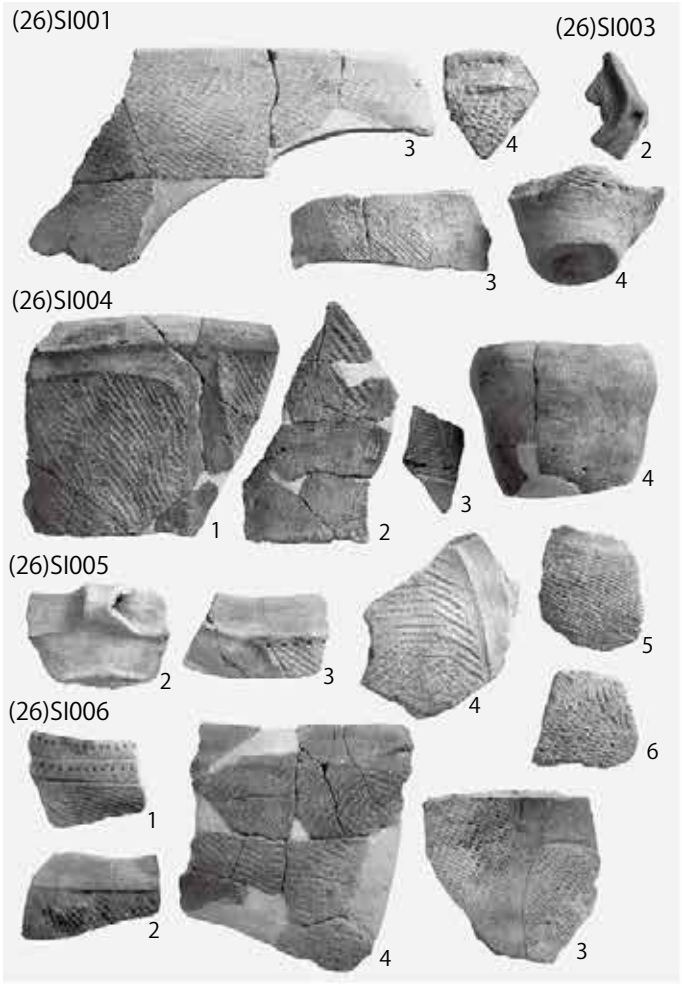
住居跡出土土器(14)

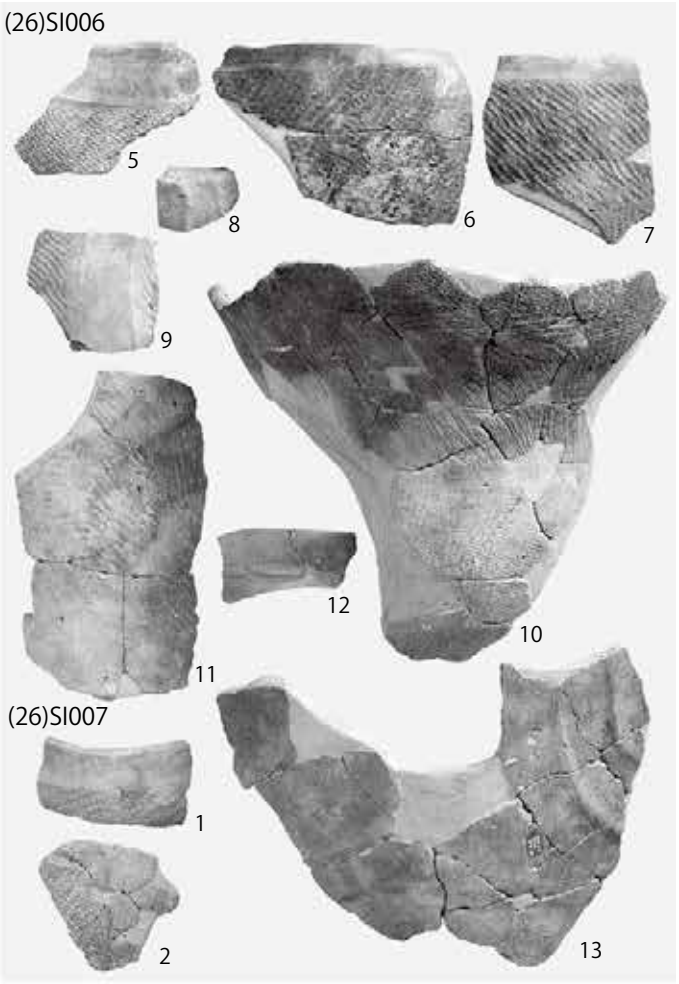

(11)SI1014
(11)SI1018
(11)SI1019
(11)SI1015
(12)SI014
(11)SI1017
(12)SI024
(14)SI140
(12)SI026
(15)SI005
(12)SI037
(12)SI053

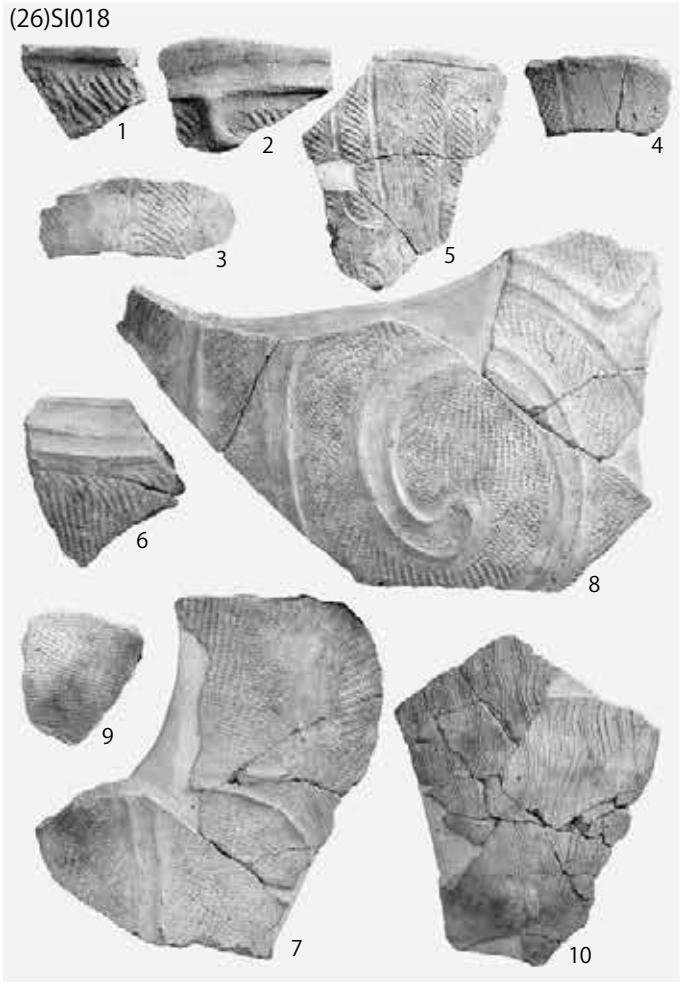
住居跡出土土器(15)

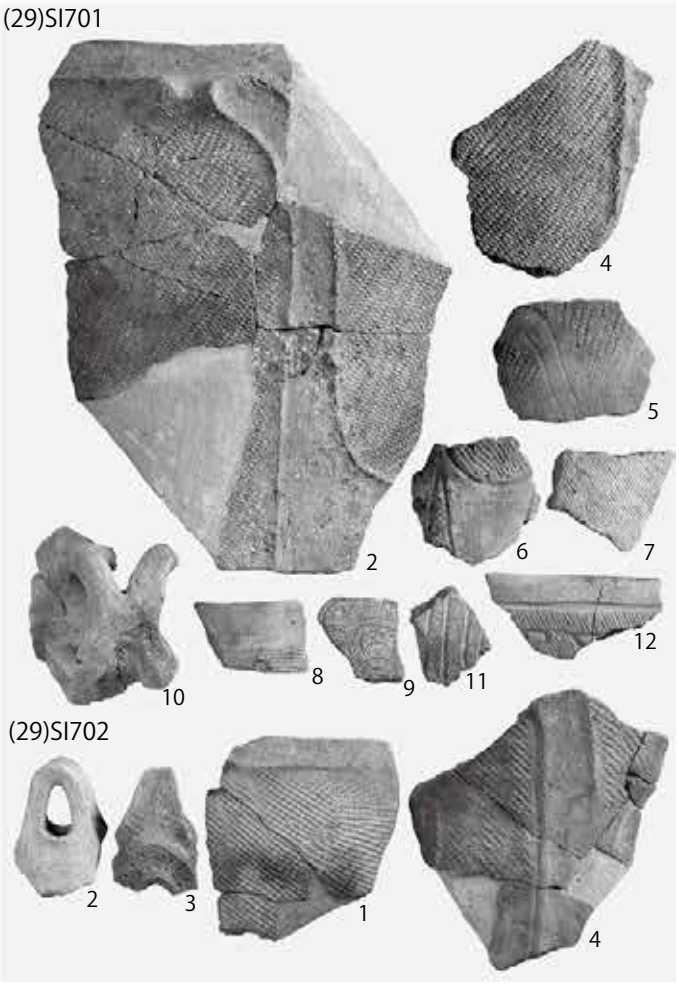

(15)SI006
(16)SI003
(16)SI003
(17)SI012
(17)SI013
(17)SI014
(17)SI015
(17)SI015
(26)SI001

住居跡出土土器(16)

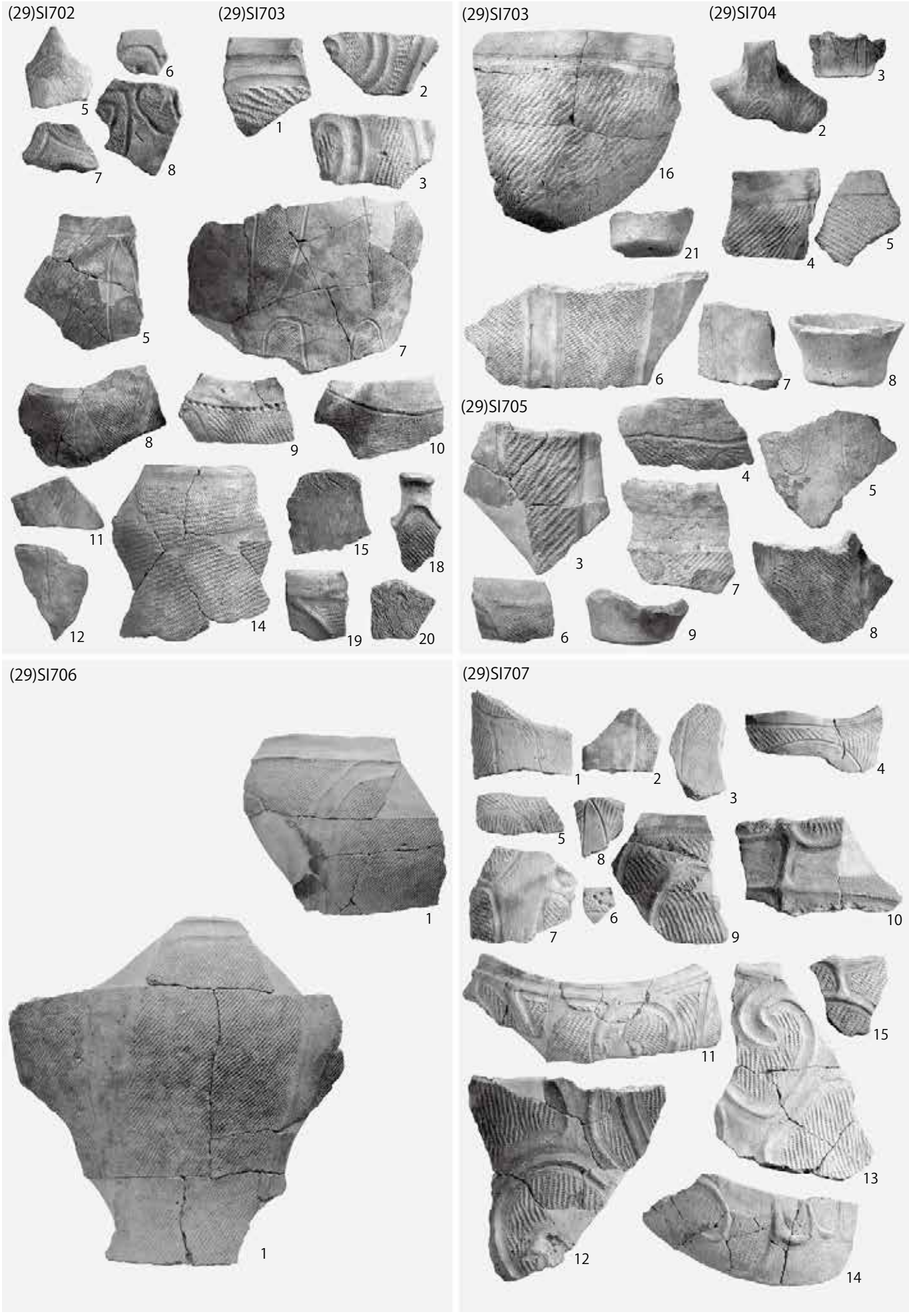

(26)SI001
(26)SI003
(26)SI004
(26)SI005
(26)SI006


(26)SI006
(26)SI007

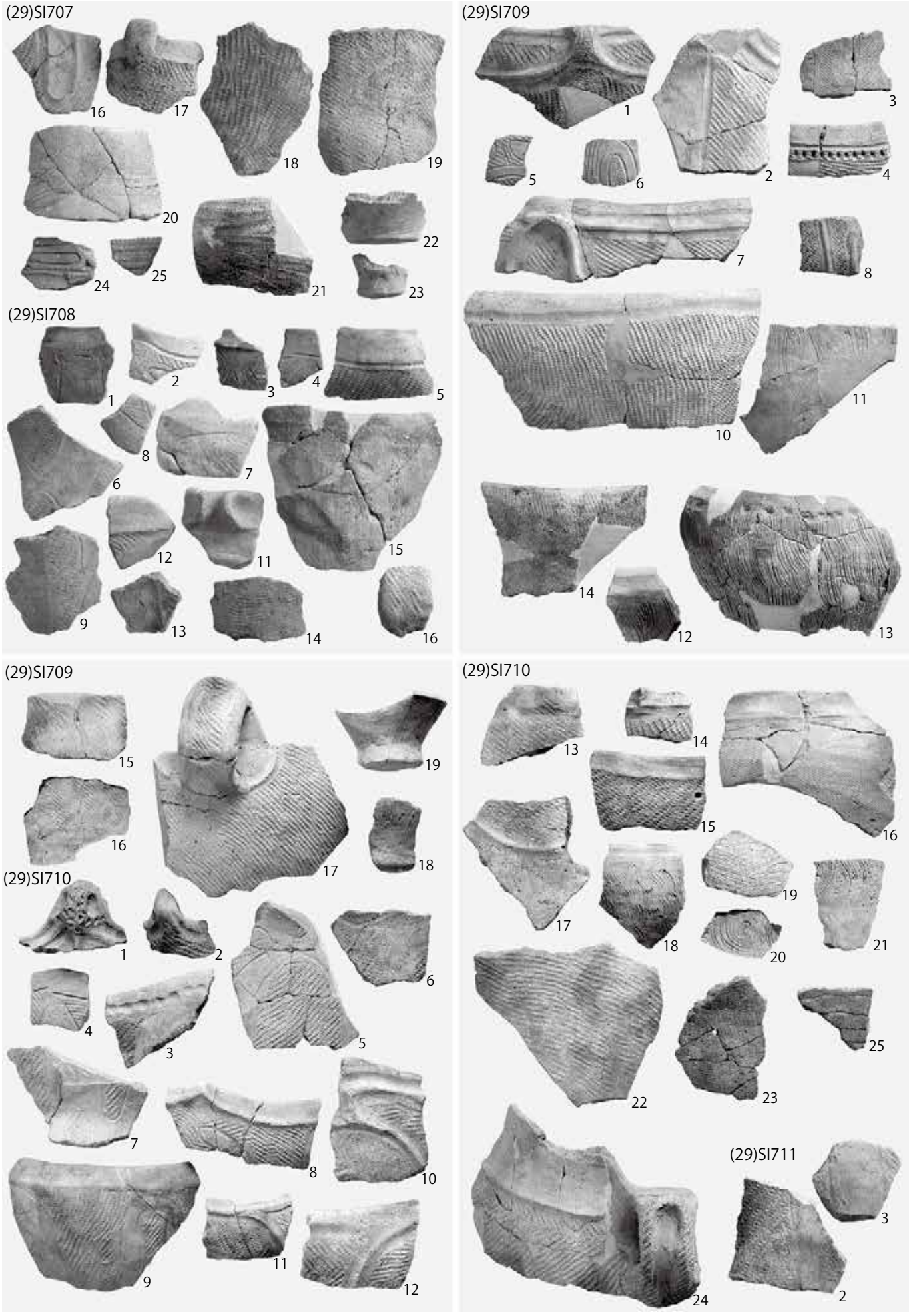

(26)SI018


(29)SI701
(29)SI702

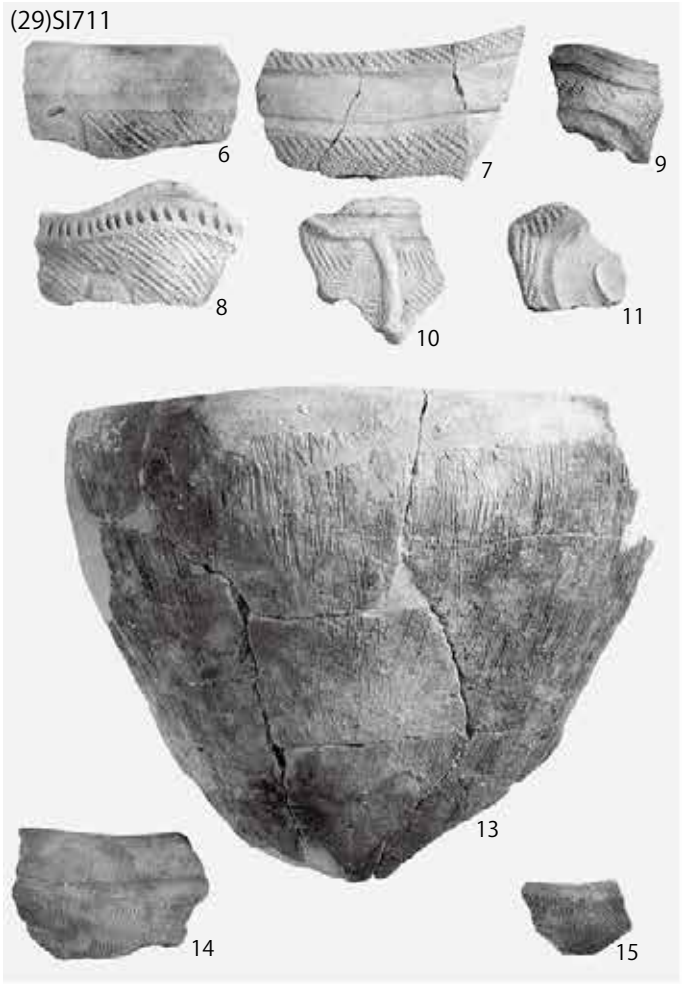
住居跡出土土器(17)

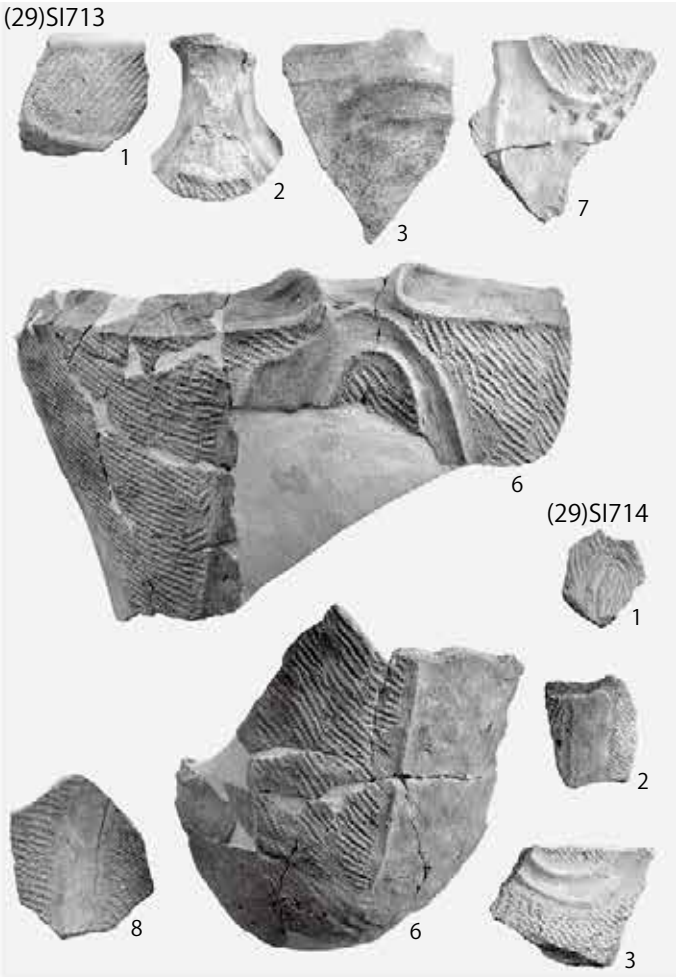


住居跡出土土器(18)

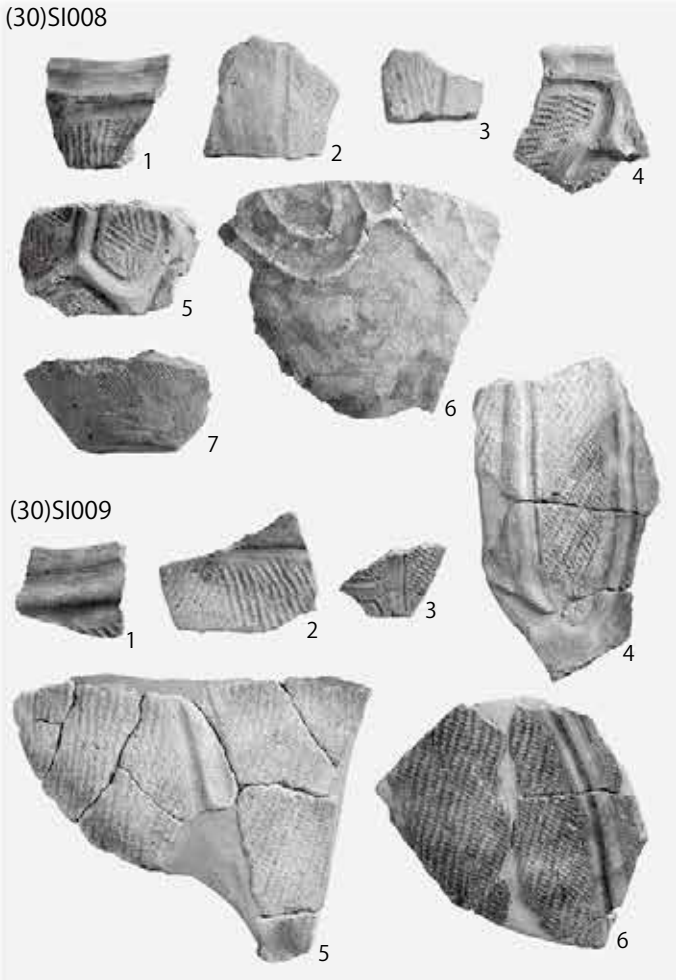


住居跡出土土器(19)

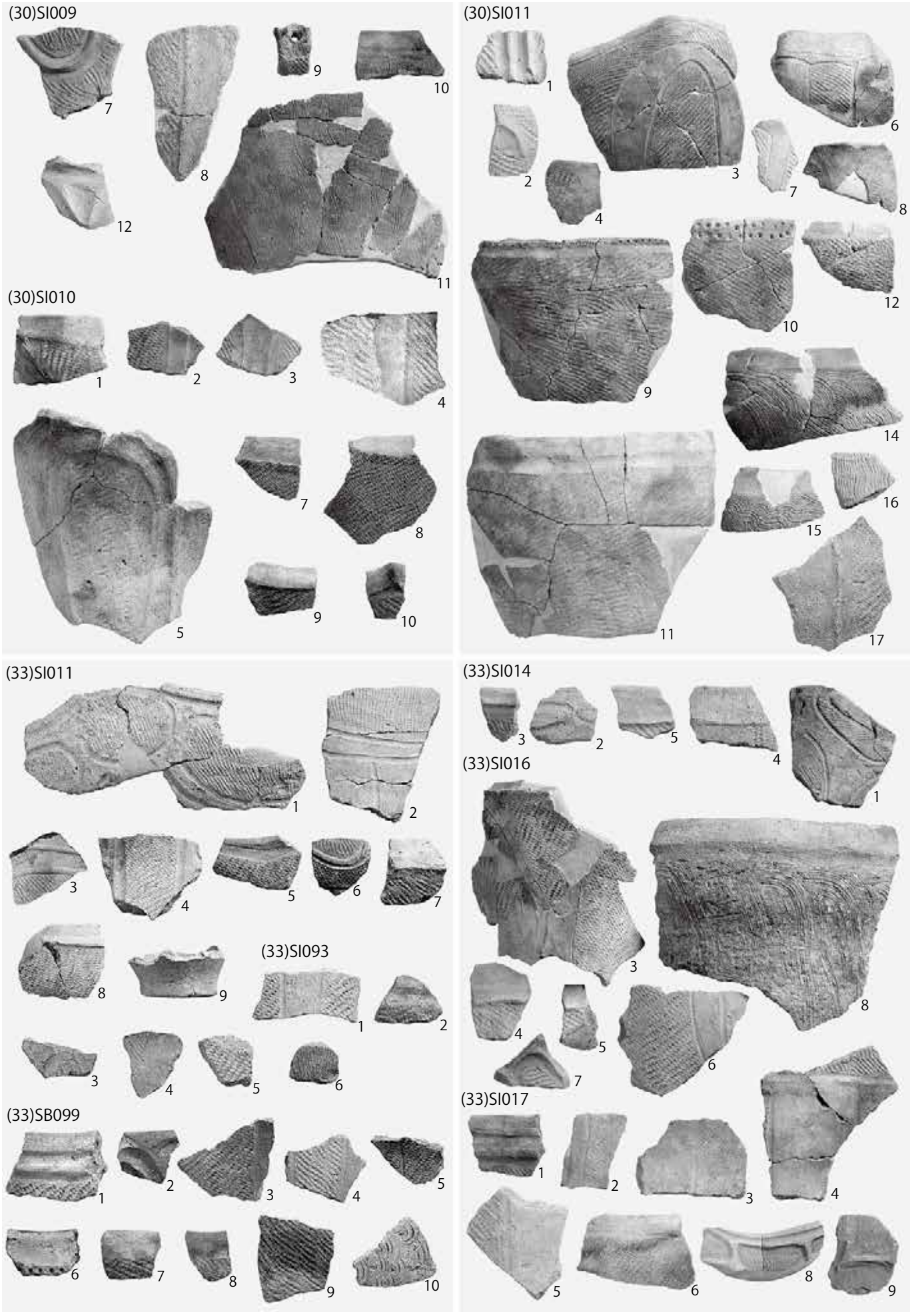

(29)SI711
6
7
9
8
10
11
13
14
15


(29)SI713
1
2
3
7
6
(29)SI714
1
2
8
6
3

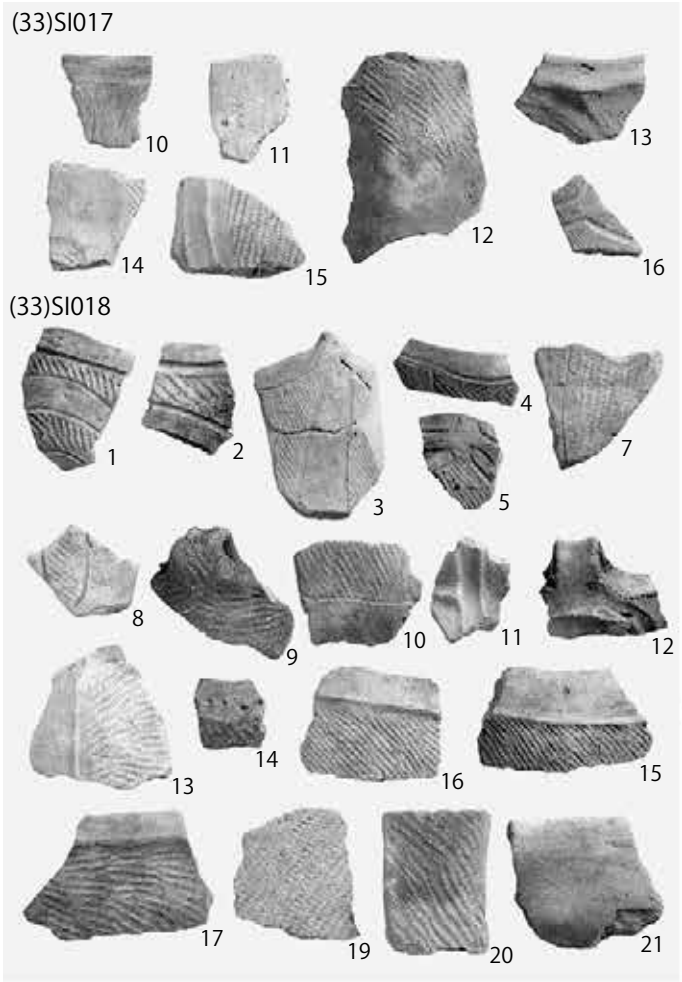
(29)SI860
2
1
3
4

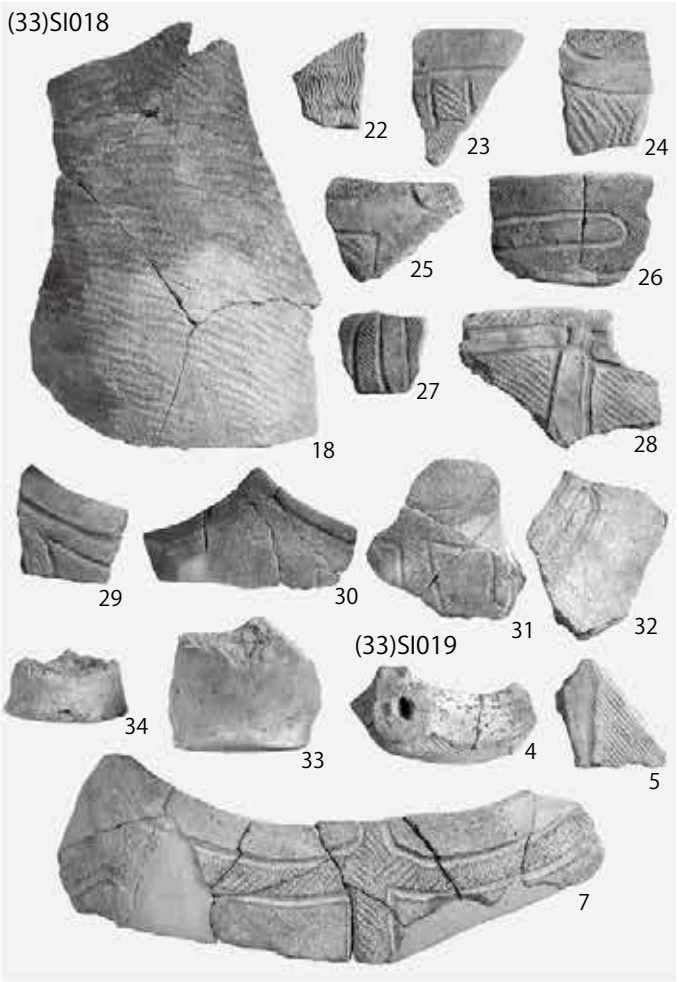

(30)SI008
1
2
3
4
5
6
7
(30)SI009
1
2
3
4
5
6

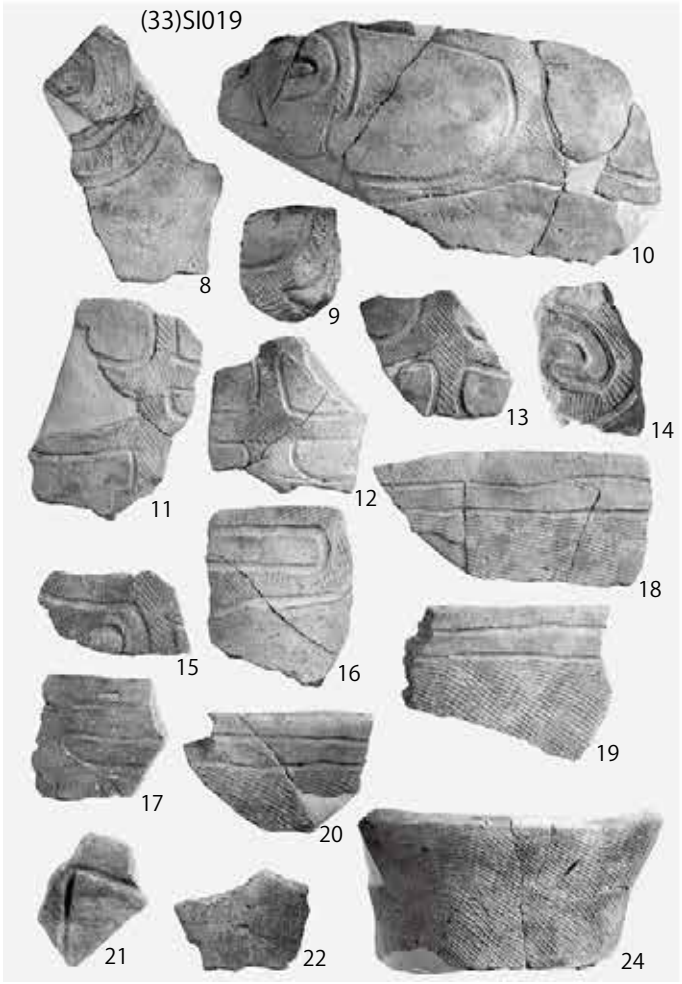
住居跡出土土器(20)

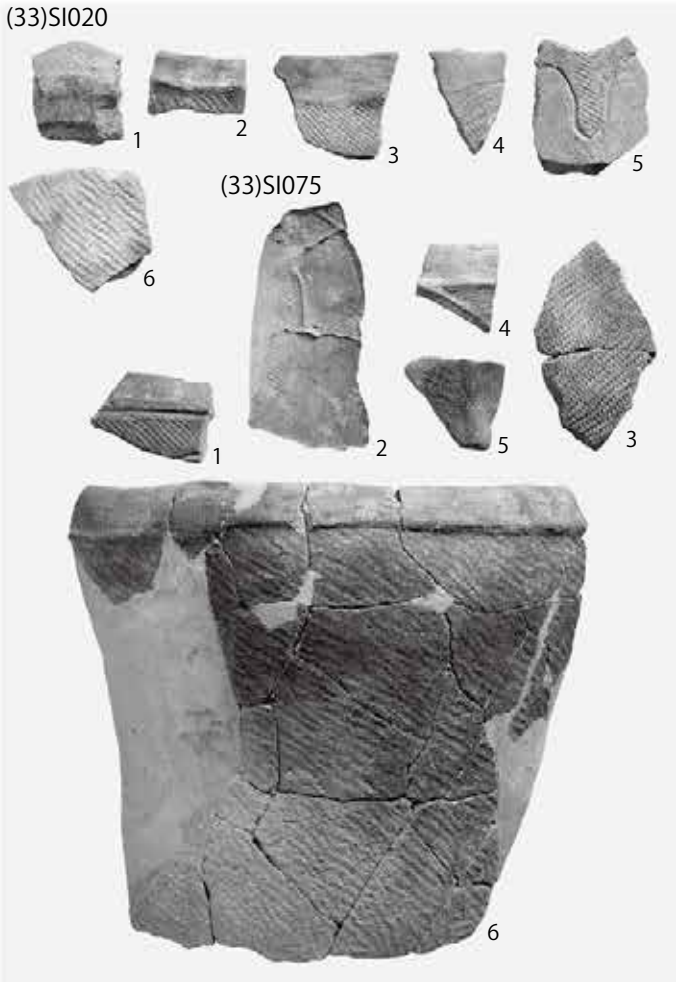


住居跡出土土器(21)・掘立柱建物跡出土土器

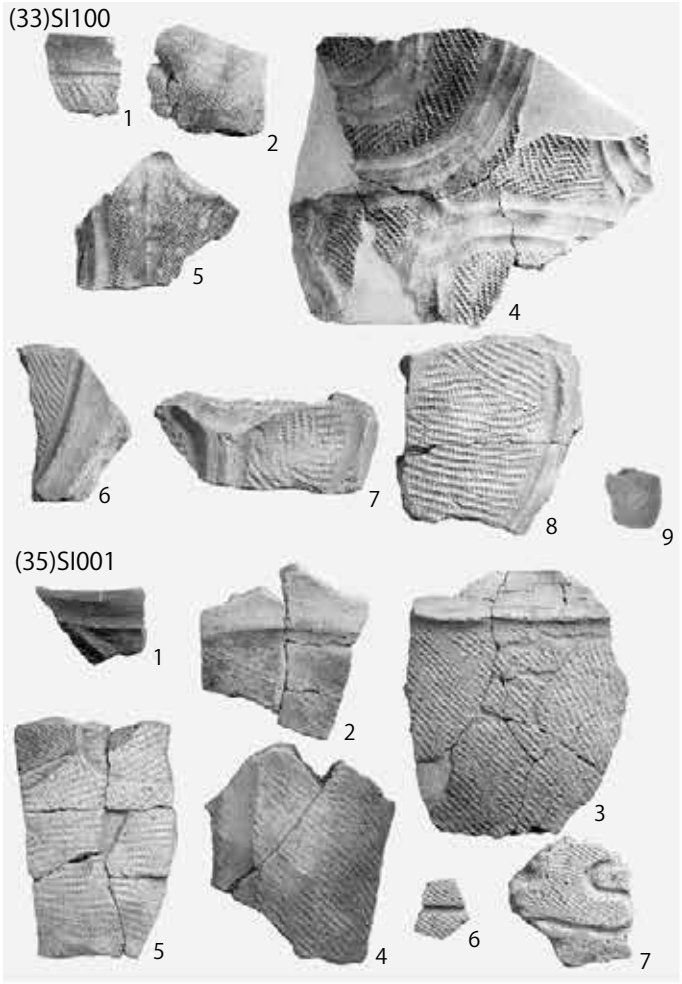

(33)SI017
10
11
12
13
14
15
16
(33)SI018
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
13
14
16
15
17
19
20
21

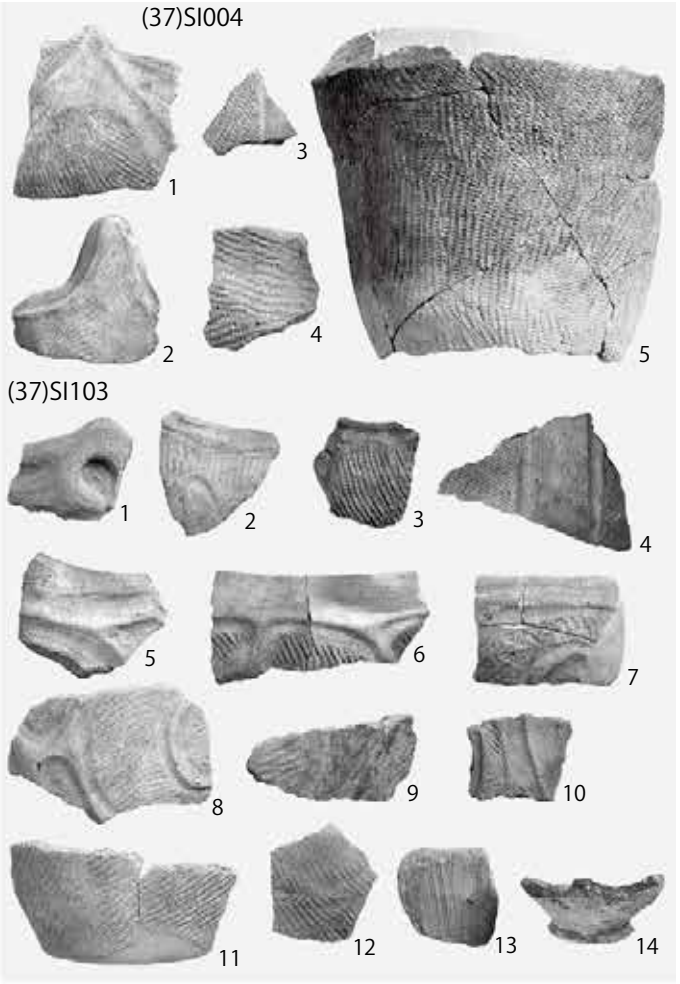

(33)SI018
22
23
24
25
26
18
27
28
29
30
31
32
34
33
(33)SI019
4
5
7

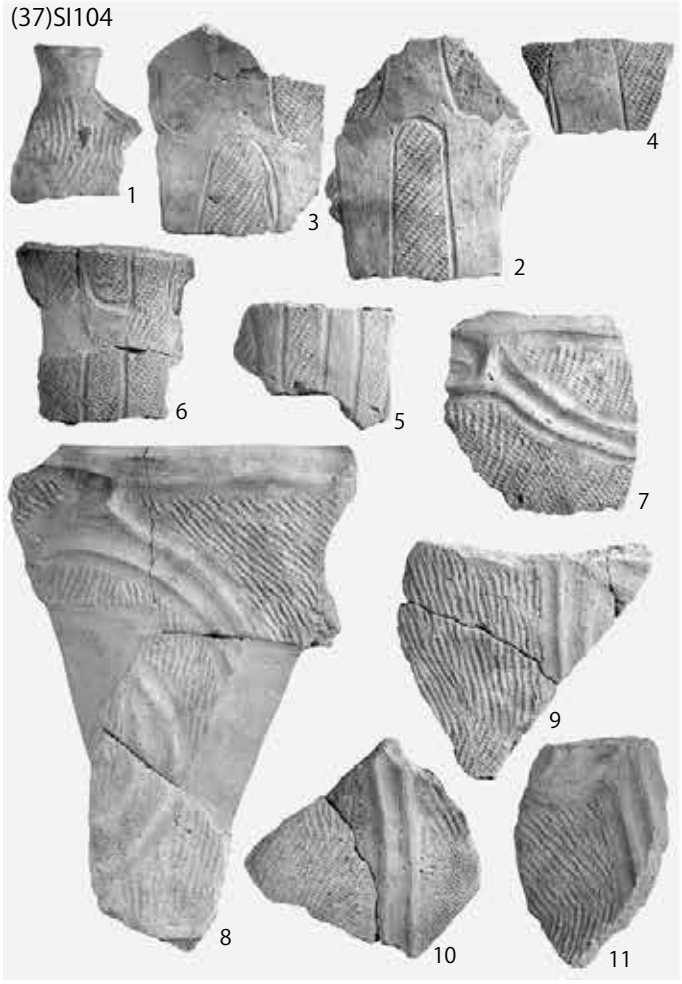

(33)SI019
8
10
9
13
14
11
12
18
15
16
19
17
20
21
22
24

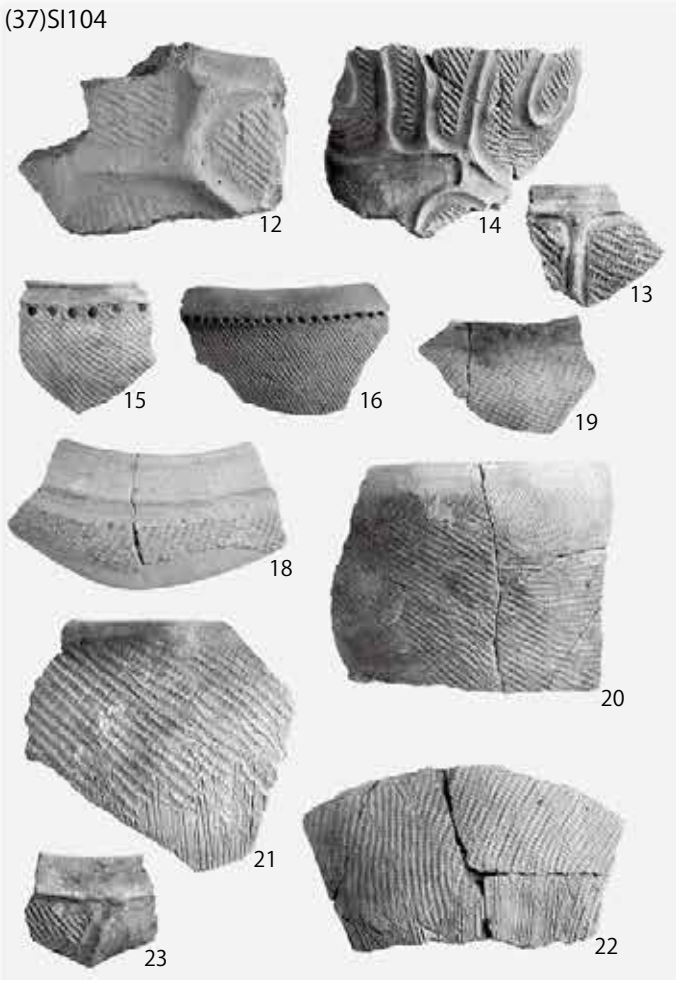

(33)SI020
1
2
3
4
5
(33)SI075
6
4
1
2
5
3
6

住居跡出土土器(22)

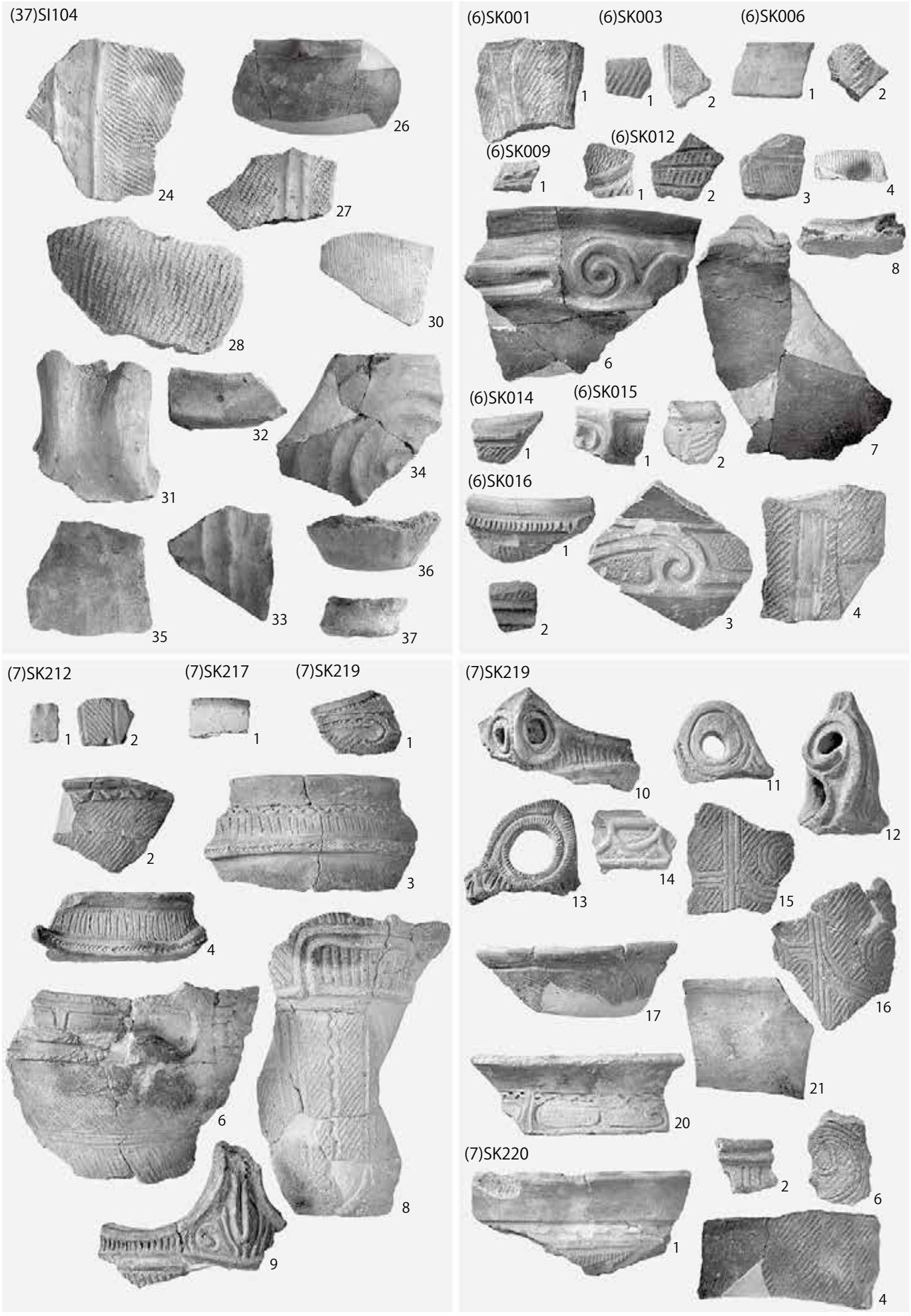

(33)SI100
1
2
3
4
5
6
7
8
9
(35)SI001
1
2
3
4
5
6
7


(37)SI004
1
2
3
4
5
(37)SI103
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

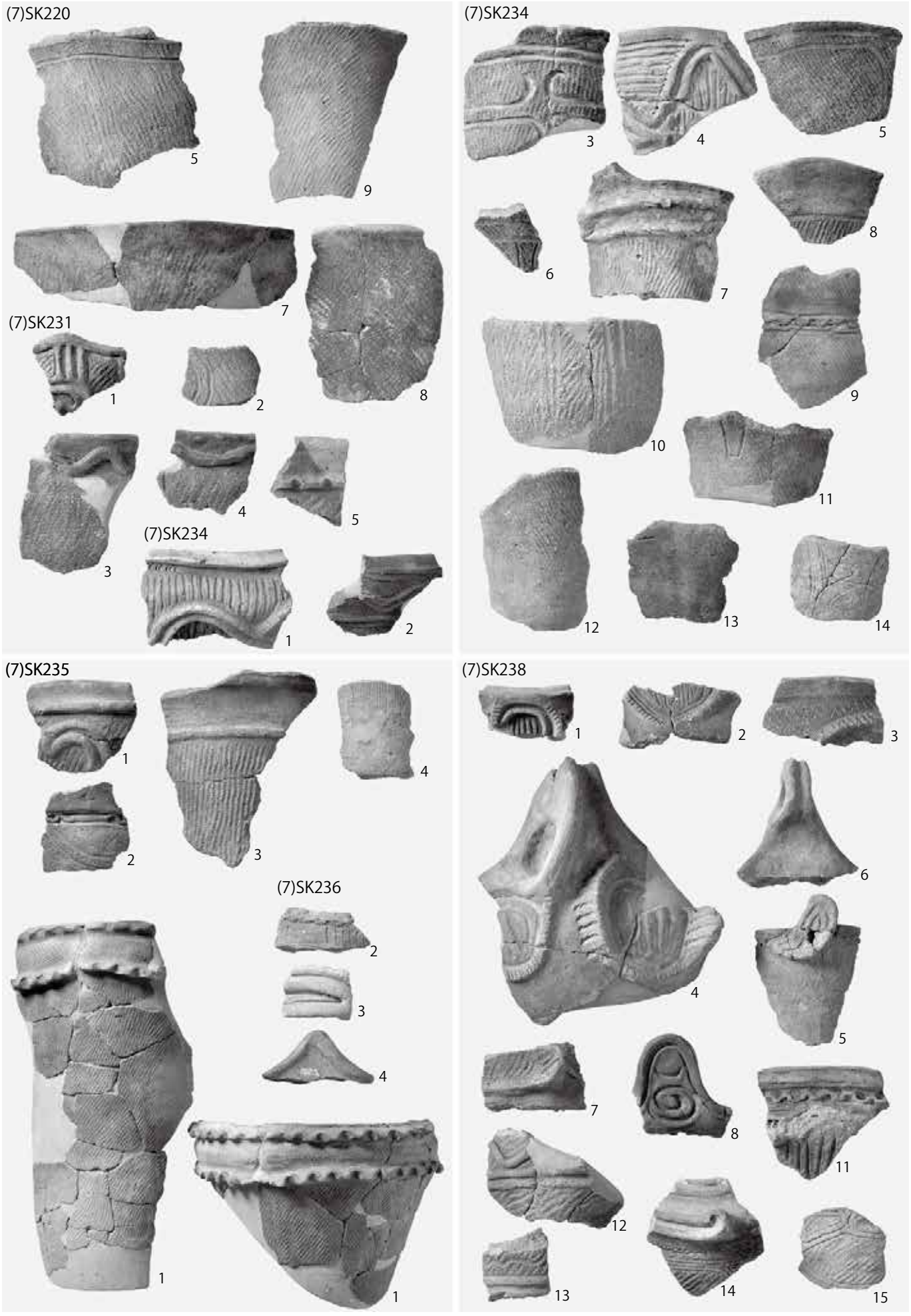

(37)SI104
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11


(37)SI104
12
13
14
15
16
18
19
20
21
22
23

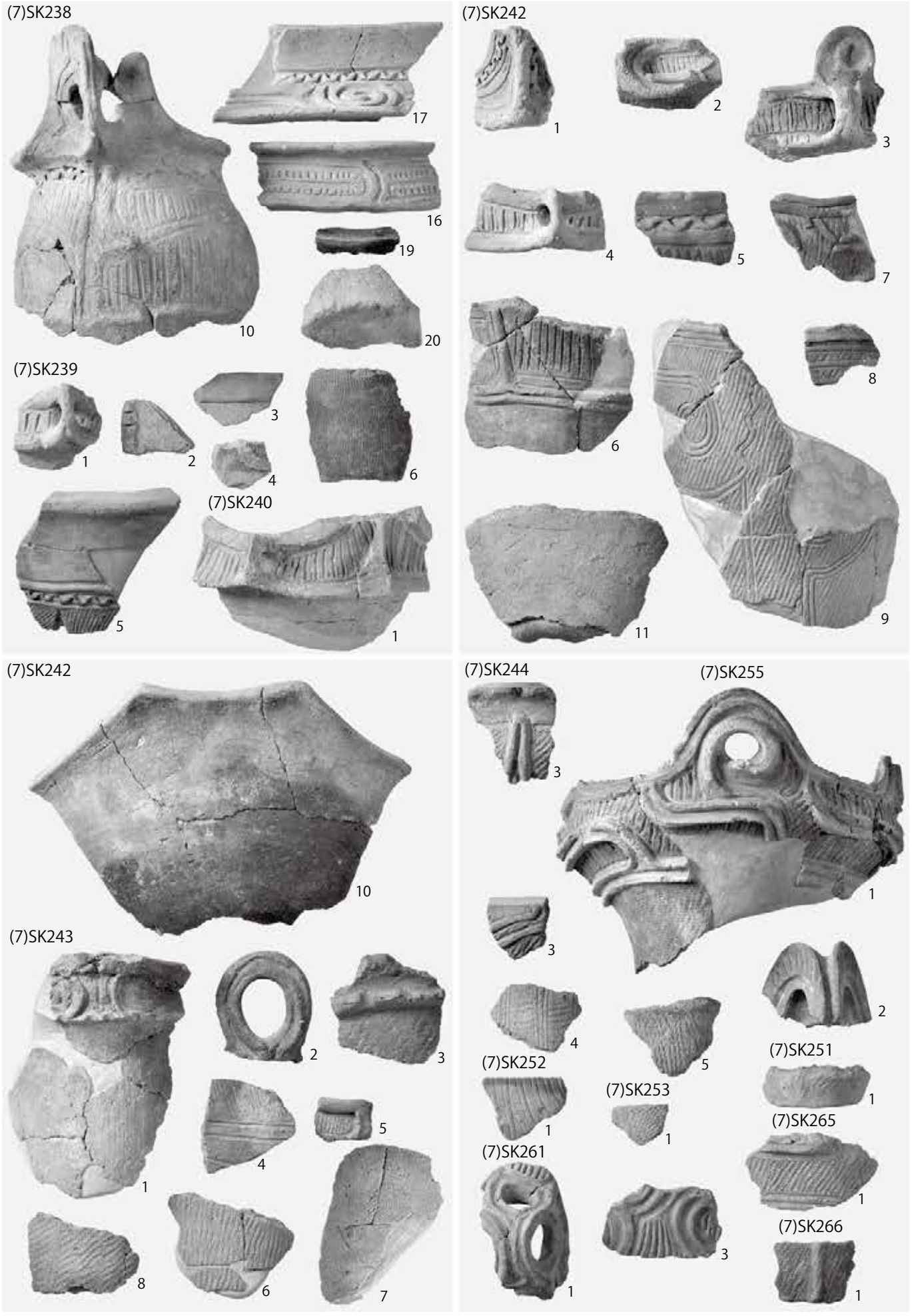
住居跡出土土器(23)



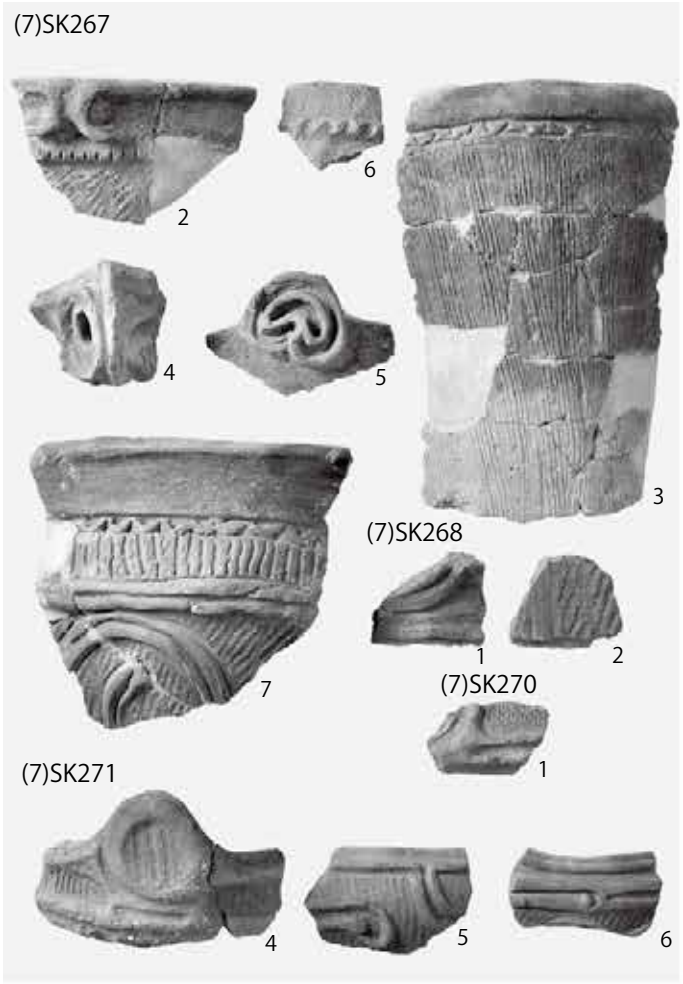
住居跡出土土器(24)　土坑等出土土器(12)

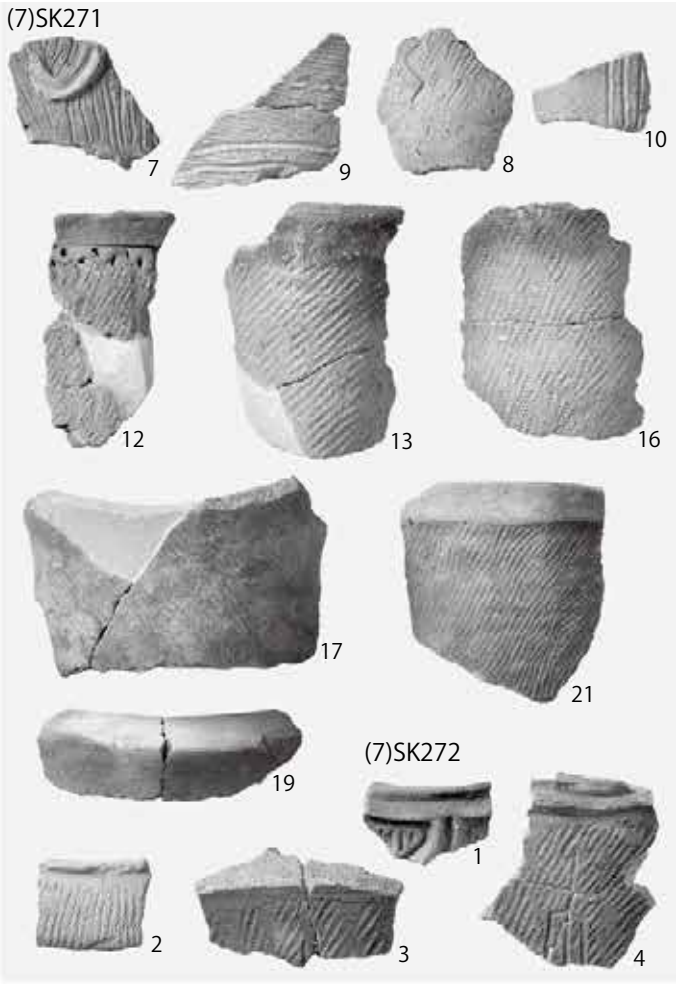

(7)SK220
5
9
7
8
(7)SK231
1
2
3
4
5
(7)SK234
1
2
(7)SK234
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
(7)SK235
1
2
3
4
(7)SK236
1
2
3
4
(7)SK238
1
2
3
4
5
6
7
8
11
12
13
14
15

土坑等出土土器(13)

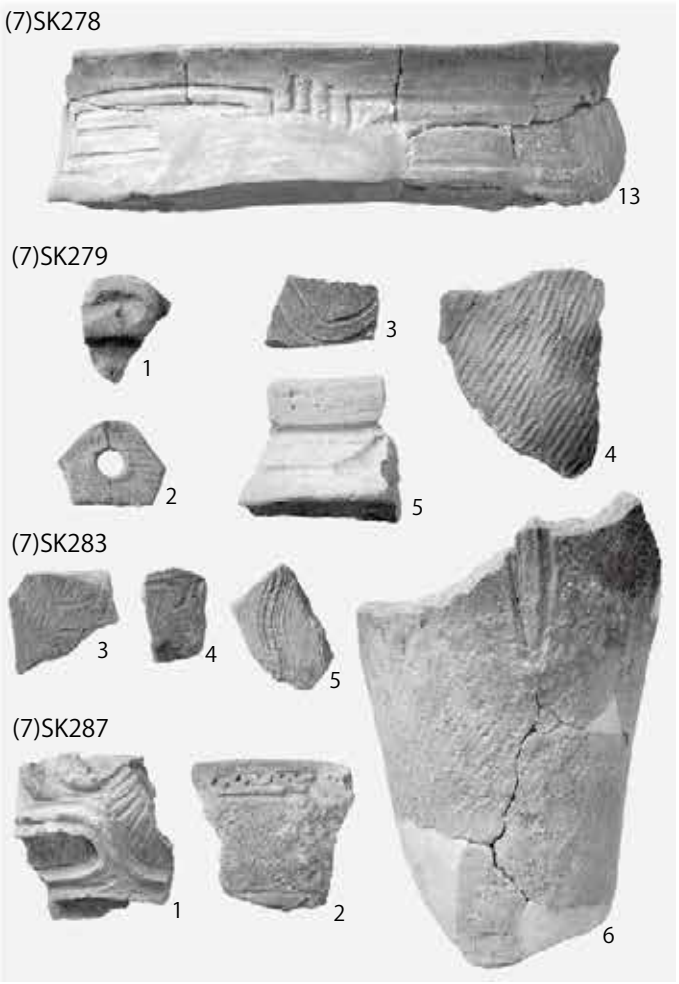

(7)SK238
17
16
19
10
20
(7)SK239
1
2
3
4
6
(7)SK240
5
1
(7)SK242
1
2
3
4
5
7
6
8
9
11
(7)SK242
10
(7)SK243
1
2
3
4
5
8
6
7
(7)SK244
3
3
4
(7)SK252
1
(7)SK255
1
2
5
(7)SK253
1
(7)SK251
1
(7)SK265
1
(7)SK261
1
3
(7)SK266
1

土坑等出土土器(14)

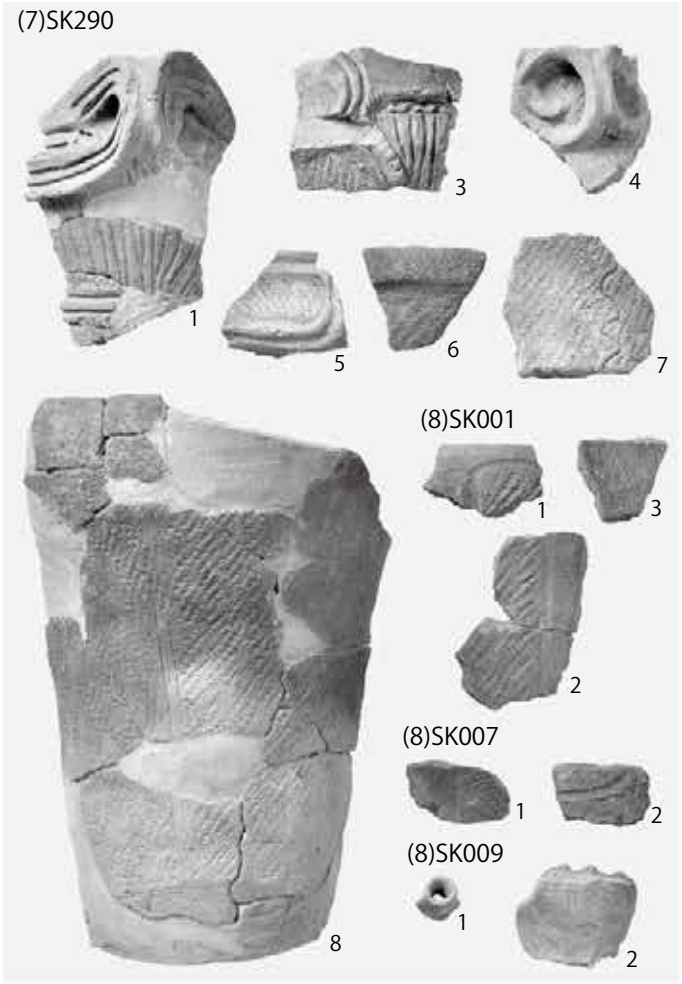

(7)SK267
2
6
3
4
5
7
(7)SK268
1
2
(7)SK270
1
(7)SK271
4
5
6

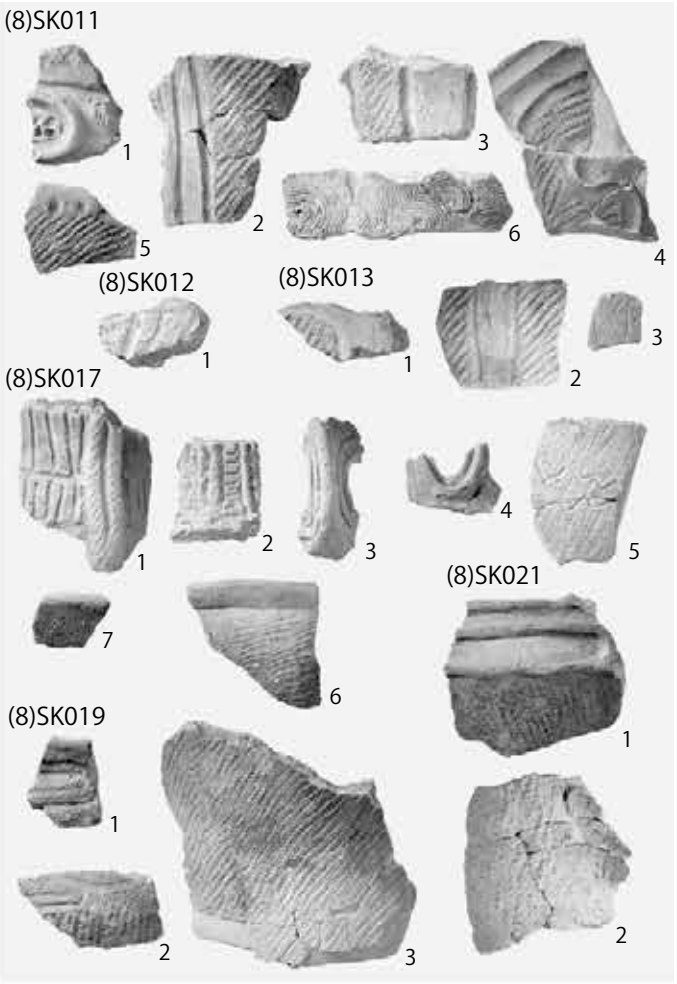

(7)SK271
7
9
8
10
12
13
16
17
21
19
(7)SK272
1
2
3
4

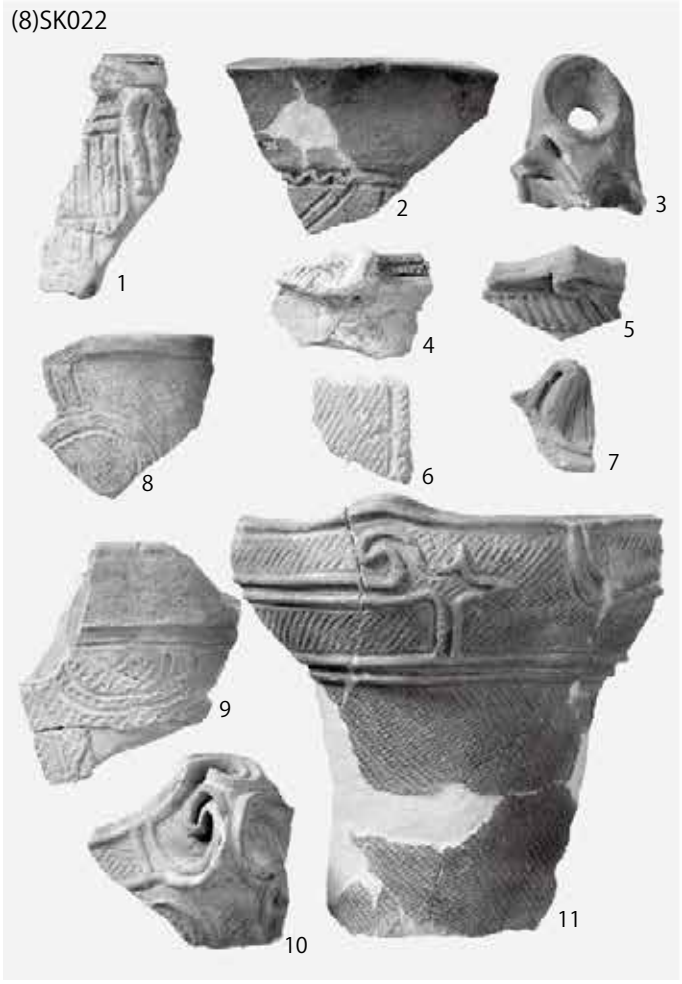
(7)SK277
1
2
3
4
5
6
(7)SK278
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

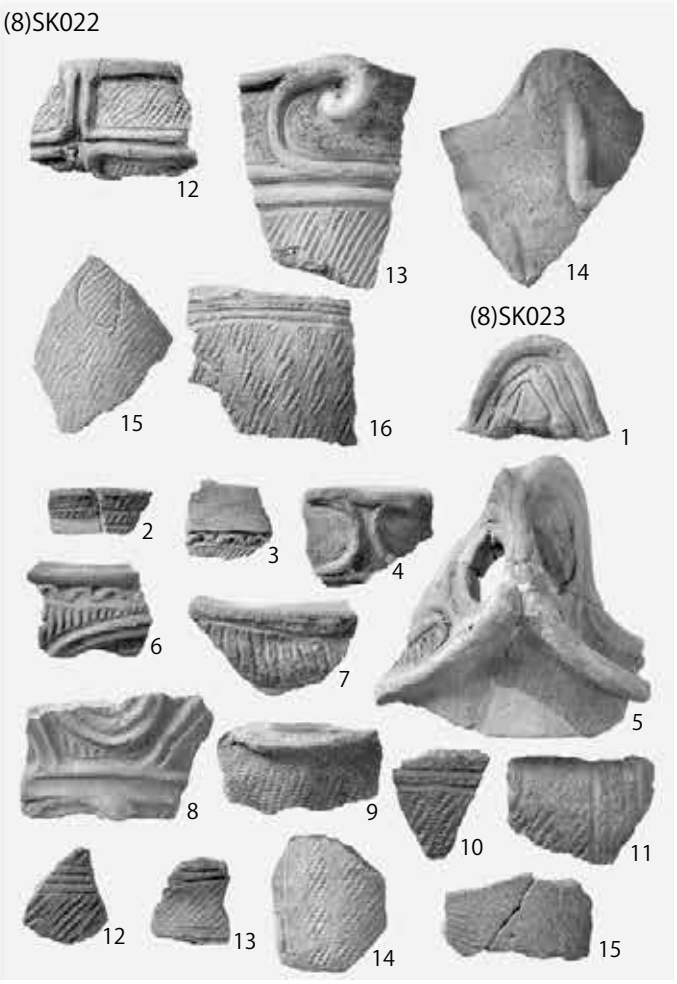

(7)SK278
13
(7)SK279
1
3
4
2
5
(7)SK283
3
4
5
6
(7)SK287
1
2

土坑等出土土器(15)

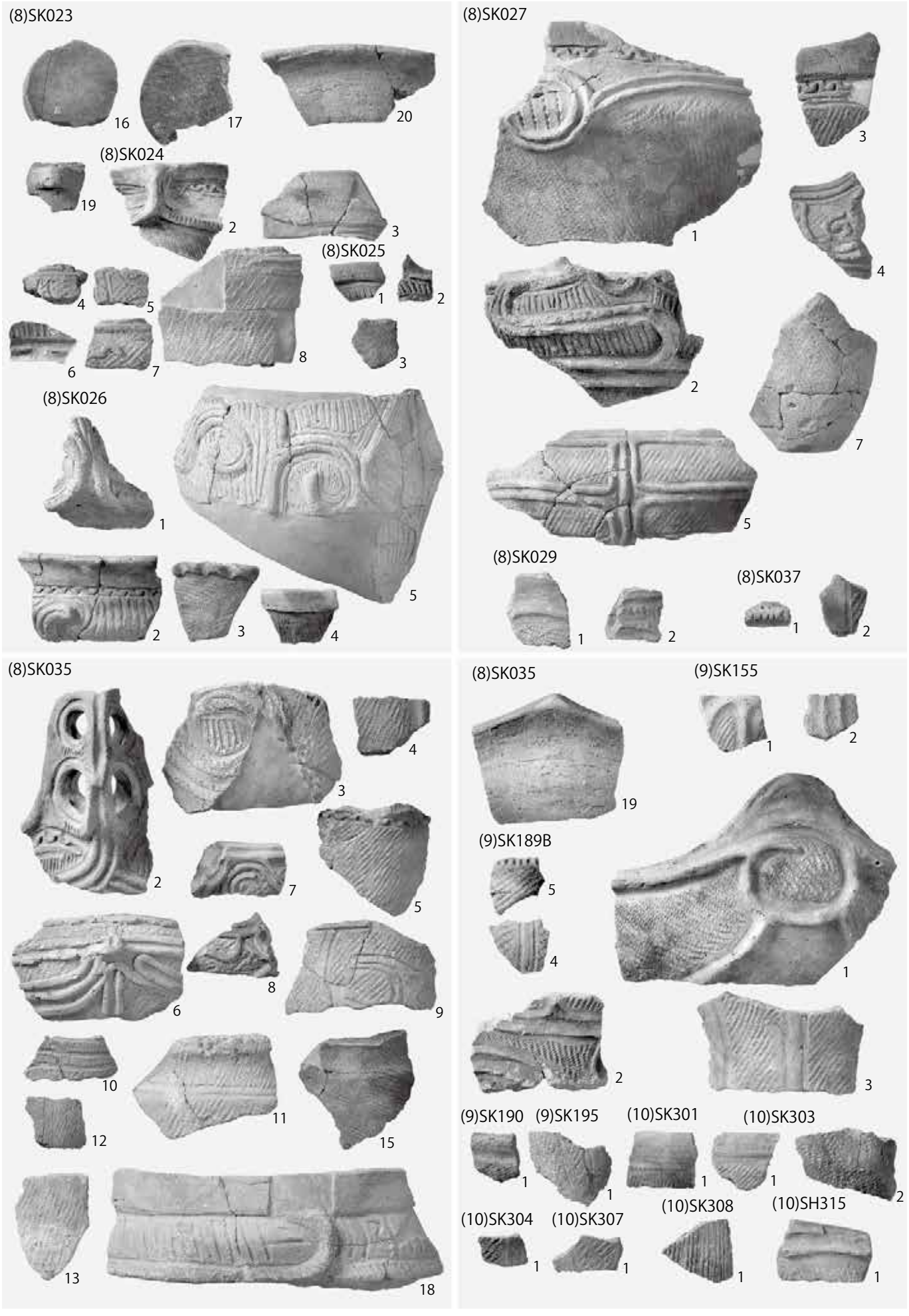

(7)SK290
1
3
4
5
6
7
(8)SK001
1
3
2
8
(8)SK007
1
2
(8)SK009
1
2


(8)SK011
1
2
3
4
5
6
(8)SK012
1
(8)SK013
1
2
3
(8)SK017
1
2
3
4
5
6
7
(8)SK021
1
(8)SK019
1
2
3
2

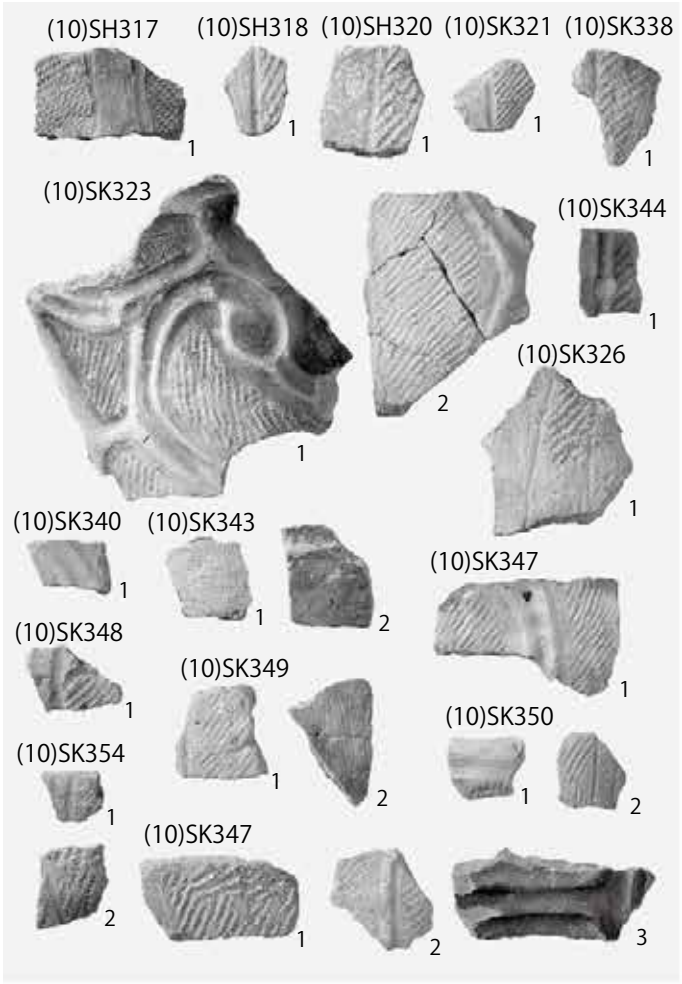

(8)SK022
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

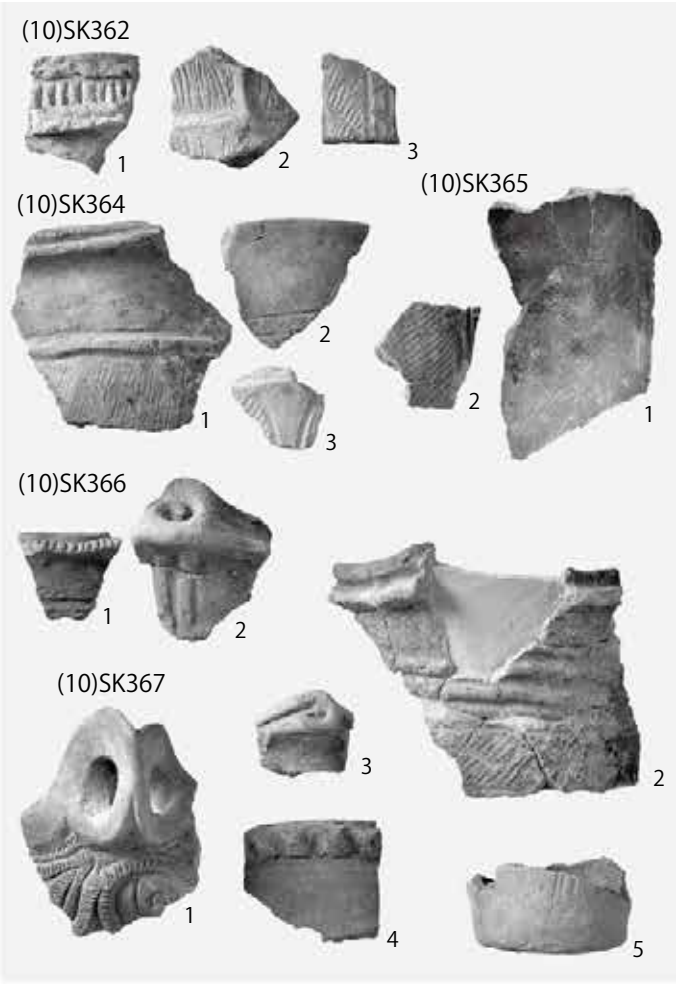

(8)SK022
12
13
14
15
16
(8)SK023
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

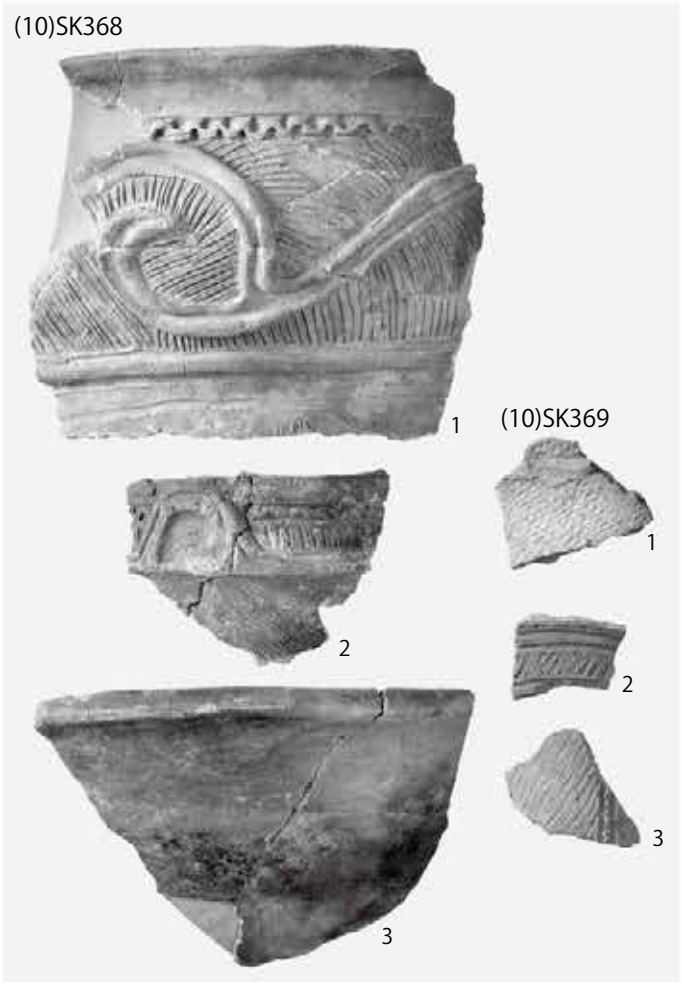
土坑等出土土器(16)

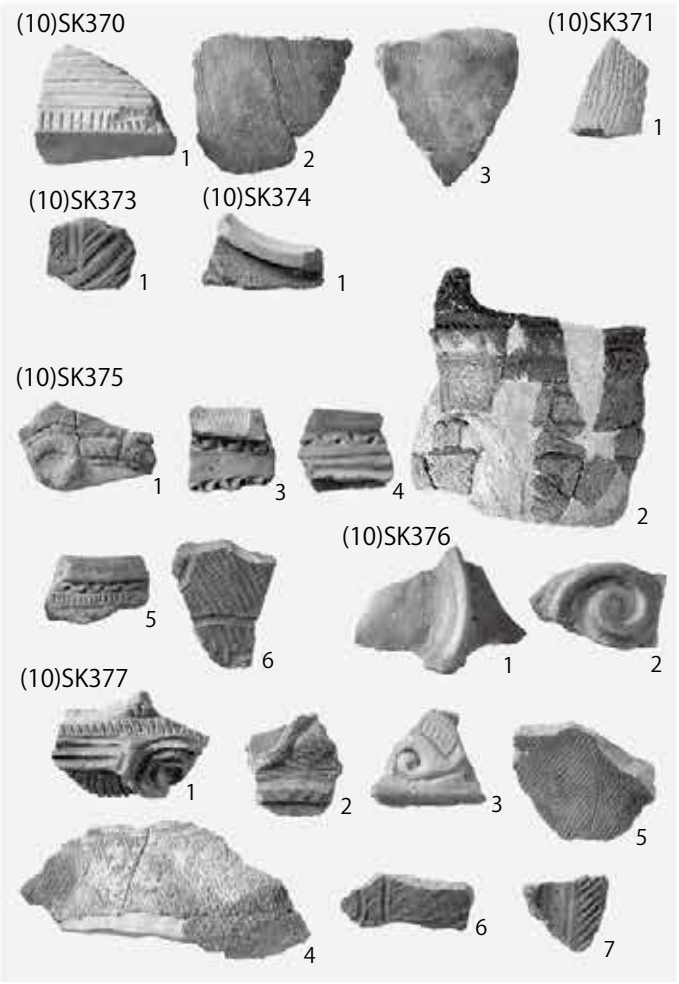

(8)SK023
16
17
20
(8)SK024
19
2
3
(8)SK025
4
5
1
2
8
6
7
3
(8)SK026
1
5
2
3
4
(8)SK027
1
3
4
2
7
5
(8)SK029
1
2
(8)SK037
1
2
(8)SK035
2
3
4
7
5
6
8
9
10
11
15
12
13
18
(8)SK035
19
(9)SK155
1
2
(9)SK189B
5
4
1
2
3
(9)SK190
1
(9)SK195
1
(10)SK301
1
(10)SK303
1
2
(10)SK304
1
(10)SK307
1
(10)SK308
1
(10)SH315
1

土坑等出土土器(17)

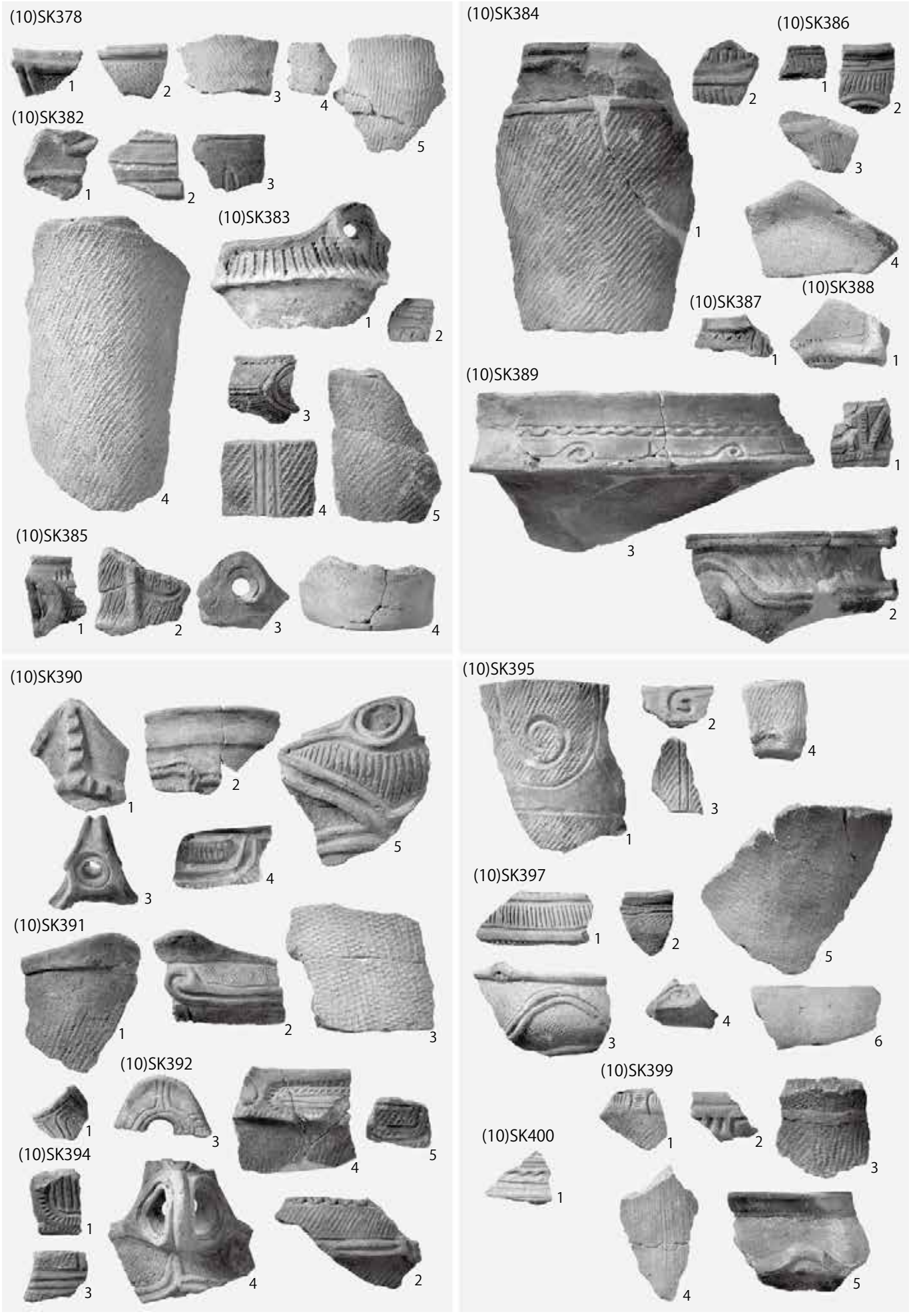

(10)SH317
(10)SH318
(10)SH320
(10)SK321
(10)SK338
(10)SK323
(10)SK344
(10)SK326
(10)SK340
(10)SK343
(10)SK347
(10)SK348
(10)SK349
(10)SK350
(10)SK354
(10)SK347


(10)SK362
(10)SK364
(10)SK365
(10)SK366
(10)SK367

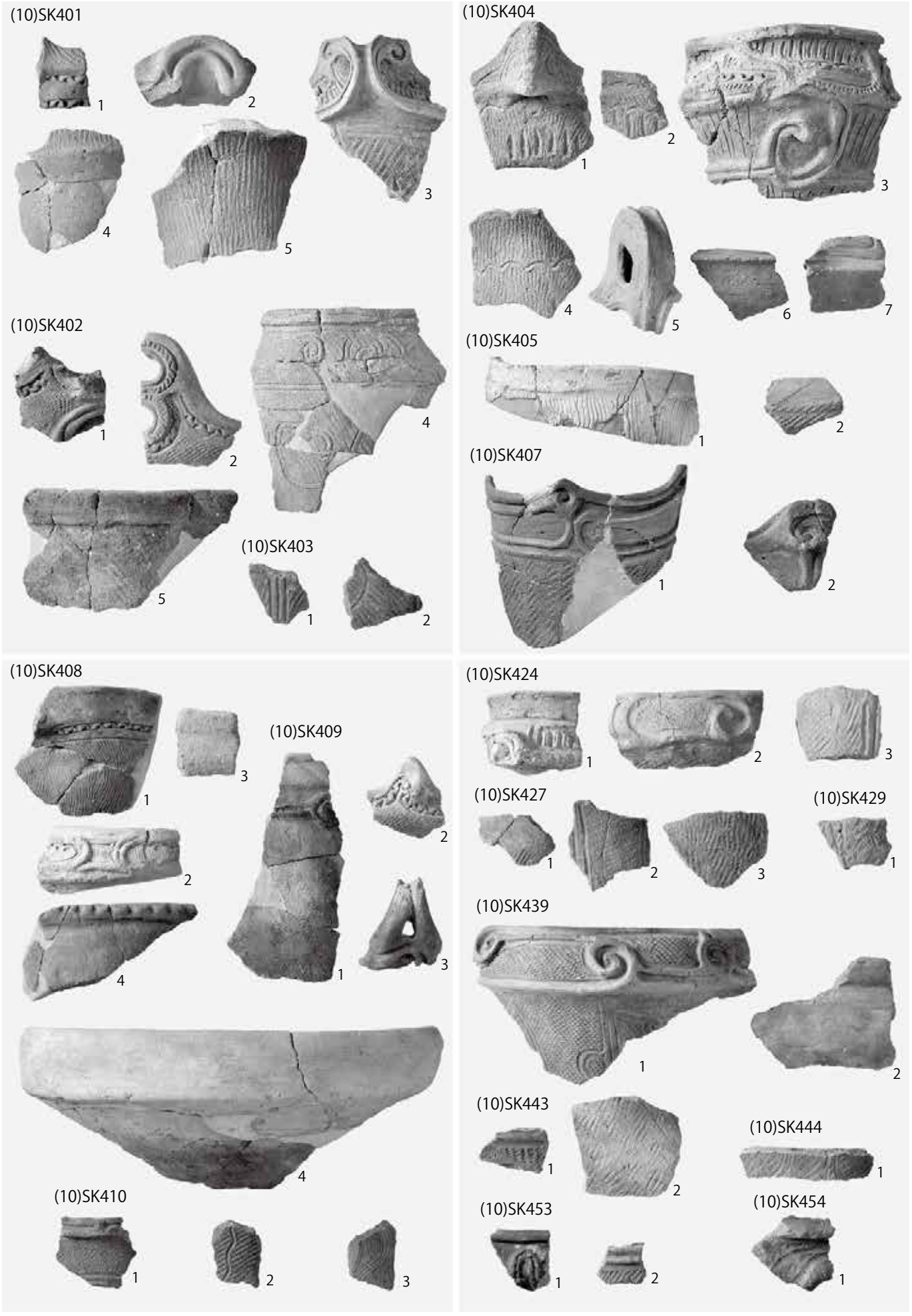

(10)SK368
(10)SK369


(10)SK370
(10)SK371
(10)SK373
(10)SK374
(10)SK375
(10)SK376
(10)SK377

土坑等出土土器(18)

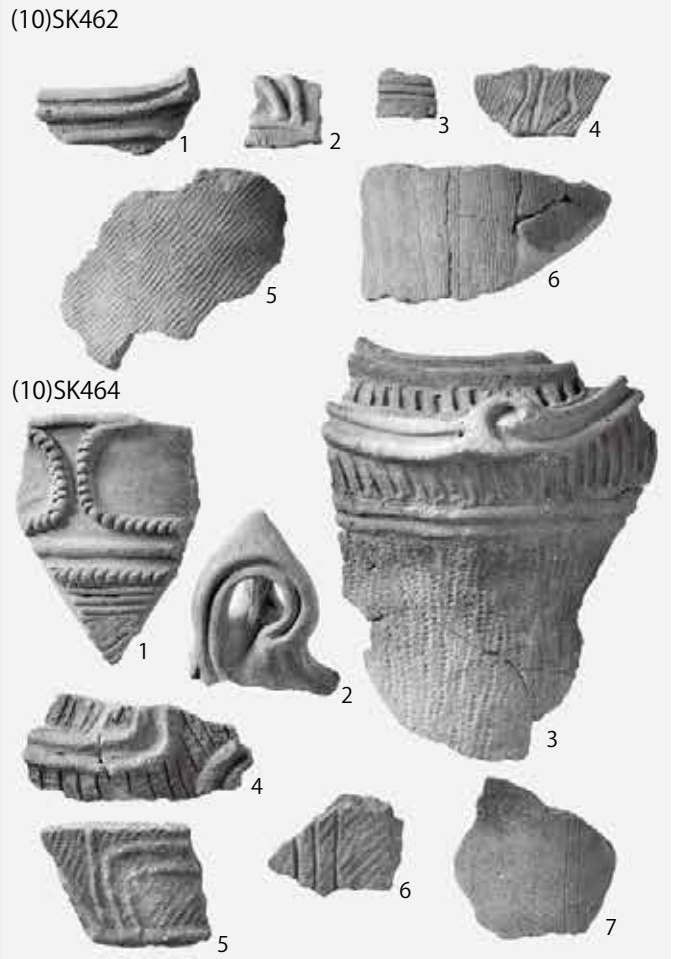

(10)SK378
(10)SK382
(10)SK383
(10)SK385
(10)SK384
(10)SK386
(10)SK387
(10)SK388
(10)SK389
(10)SK390
(10)SK391
(10)SK392
(10)SK394
(10)SK395
(10)SK397
(10)SK399
(10)SK400

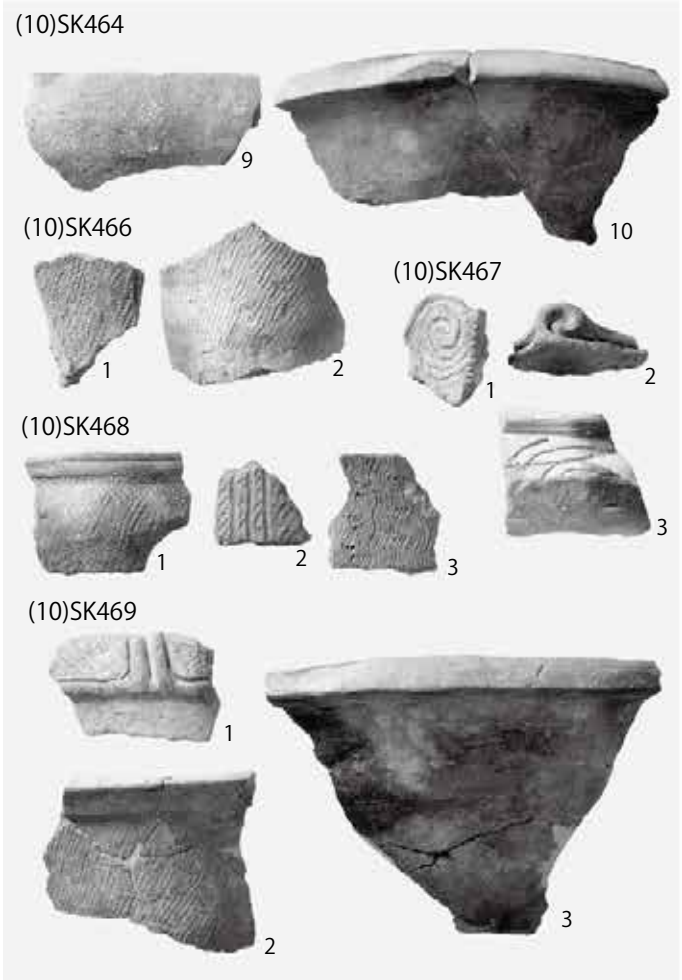
土坑等出土土器(19)


(10)SK401
1
2
3
4
5
(10)SK402
1
2
4
5
(10)SK403
1
2
(10)SK404
1
2
3
4
5
6
7
(10)SK405
1
2
(10)SK407
1
2
(10)SK408
1
3
2
4
(10)SK409
1
2
3
4
(10)SK410
1
2
3
(10)SK424
1
2
3
(10)SK427
1
2
3
(10)SK429
1
(10)SK439
1
2
(10)SK443
1
2
(10)SK444
1
(10)SK453
1
2
(10)SK454
1

土坑等出土土器(20)

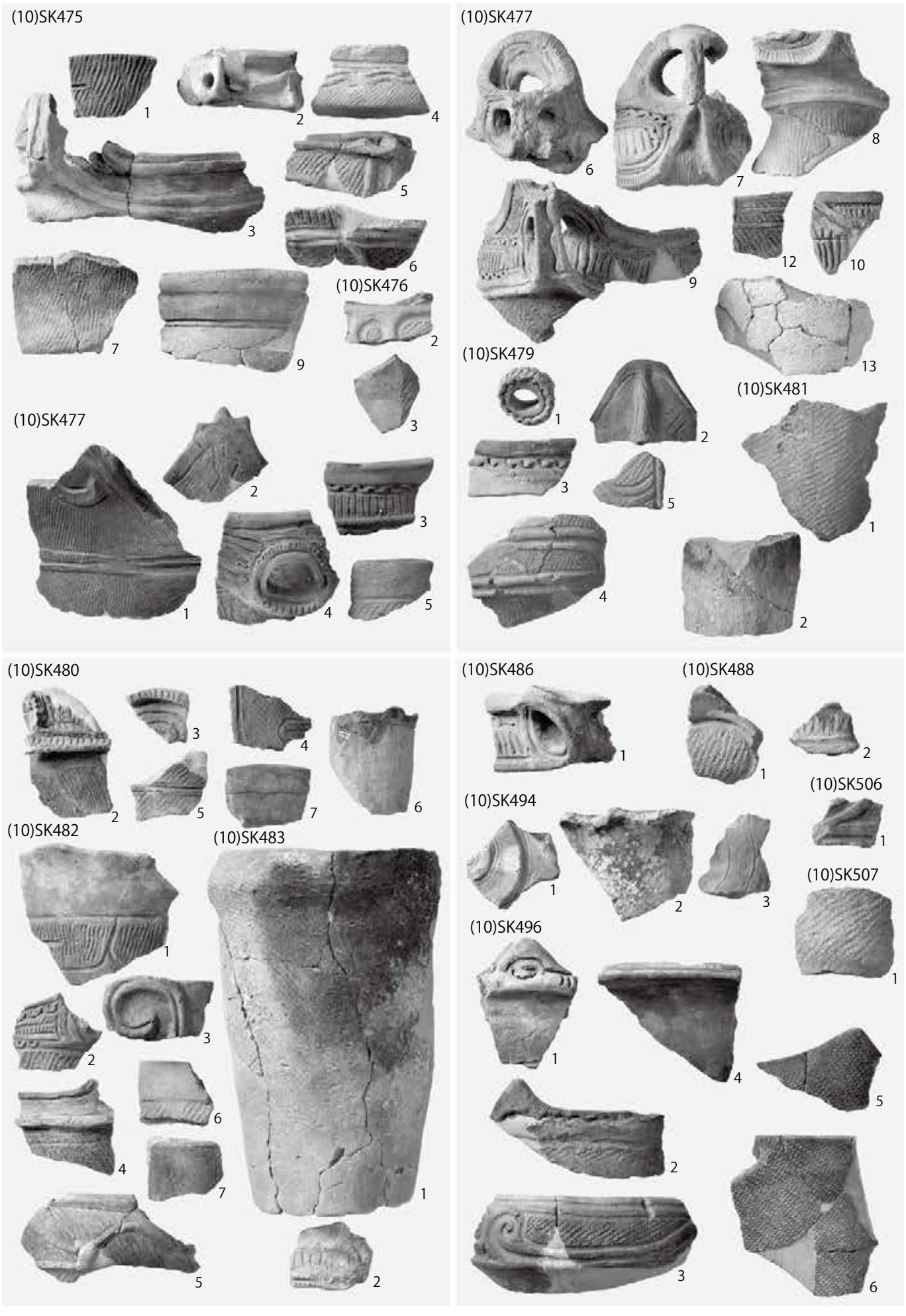
(10)SK451
(10)SK455
(10)SK460
(10)SK458
(10)SK463


(10)SK462
(10)SK464

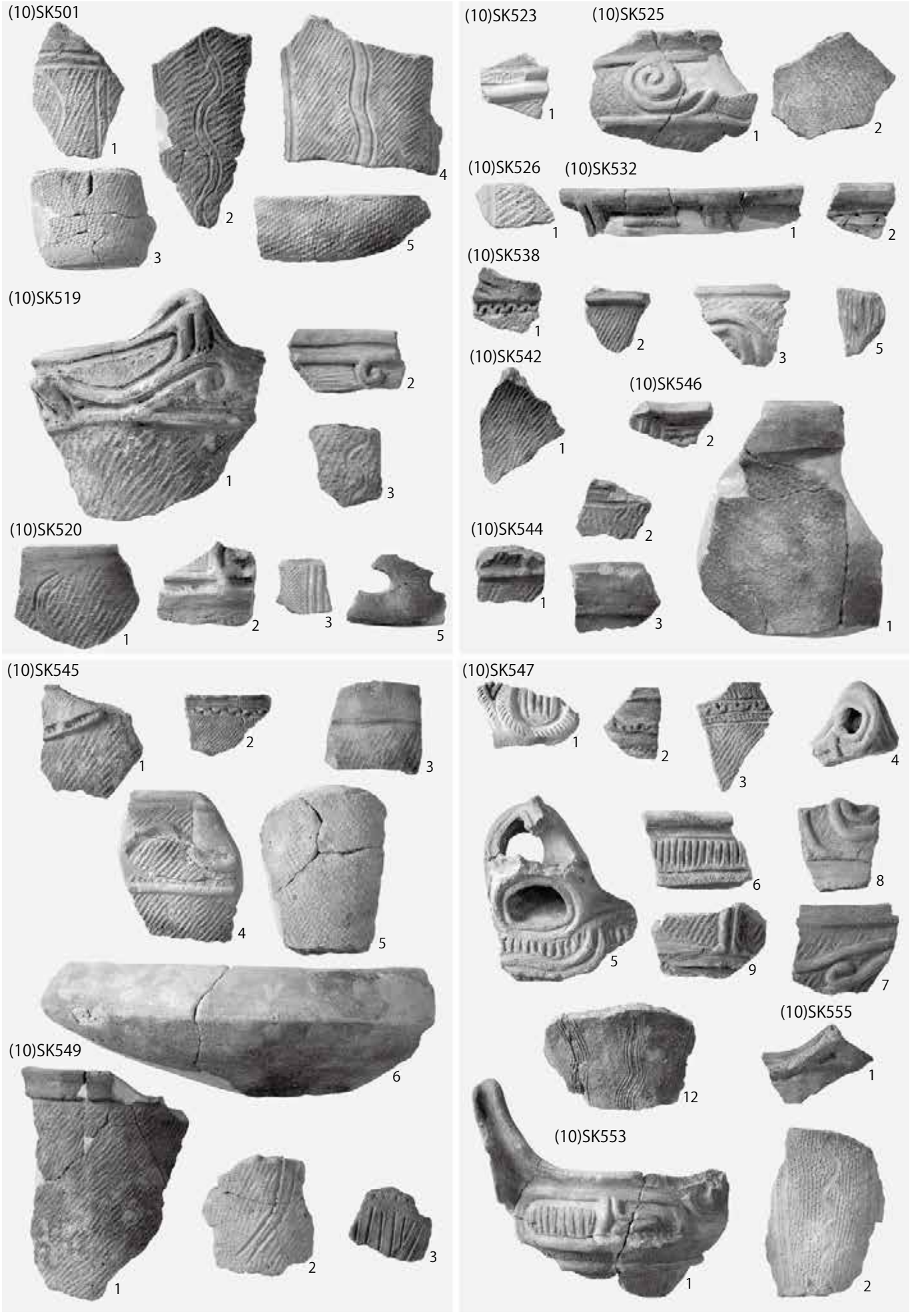

(10)SK464
(10)SK466
(10)SK467
(10)SK468
(10)SK469

(10)SK470
(10)SK471
(10)SK472

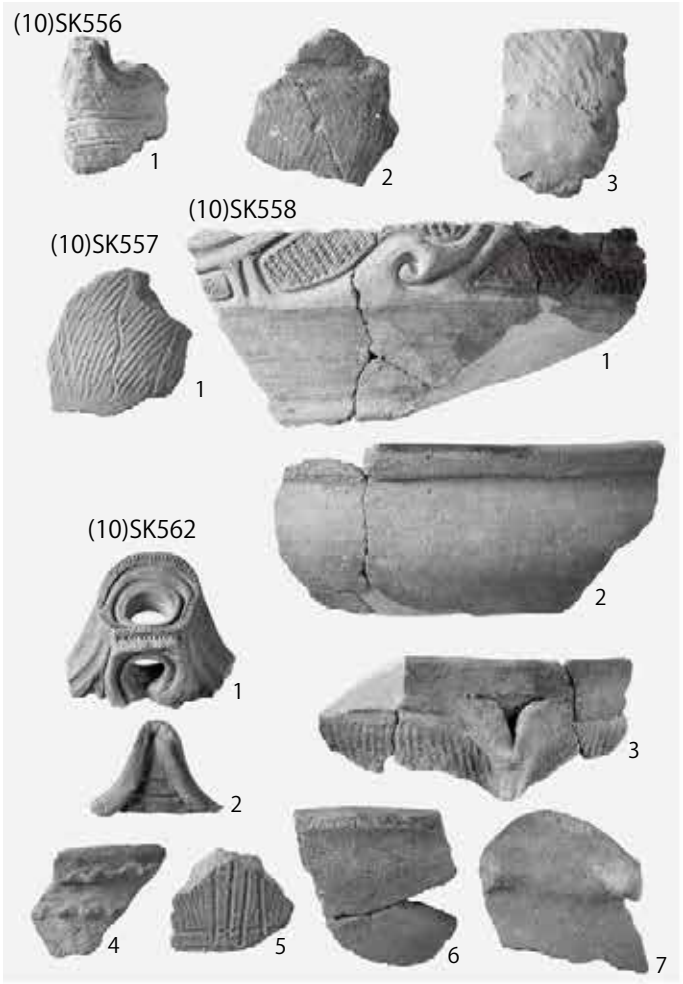
土坑等出土土器(21)

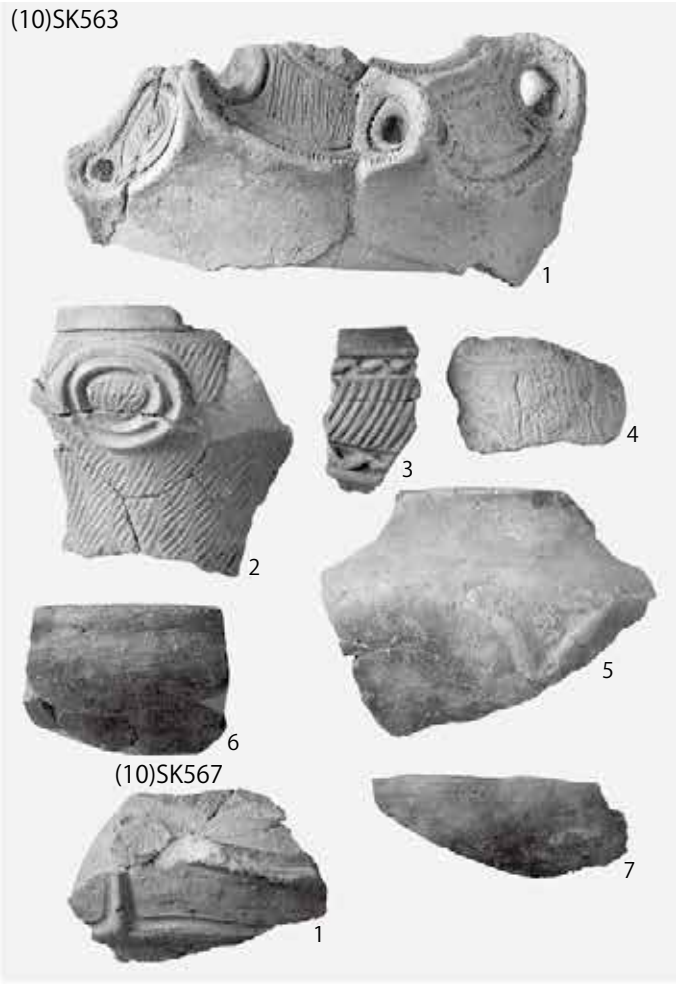

(10)SK475
(10)SK476
(10)SK477
(10)SK477
(10)SK479
(10)SK481
(10)SK480
(10)SK482
(10)SK483
(10)SK486
(10)SK488
(10)SK494
(10)SK506
(10)SK496
(10)SK507

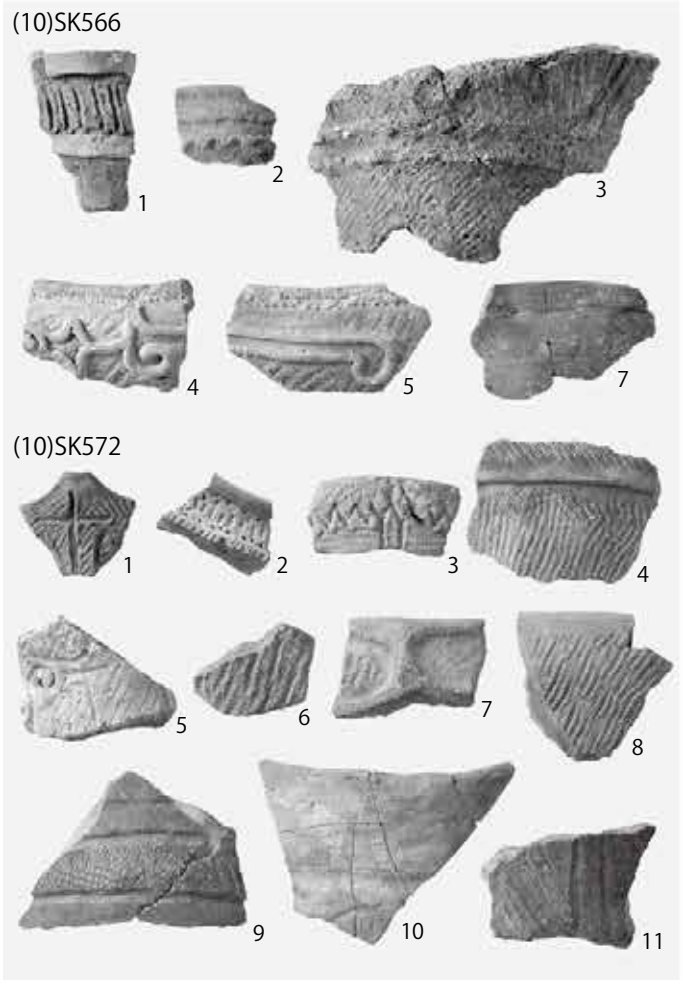
土坑等出土土器(22)

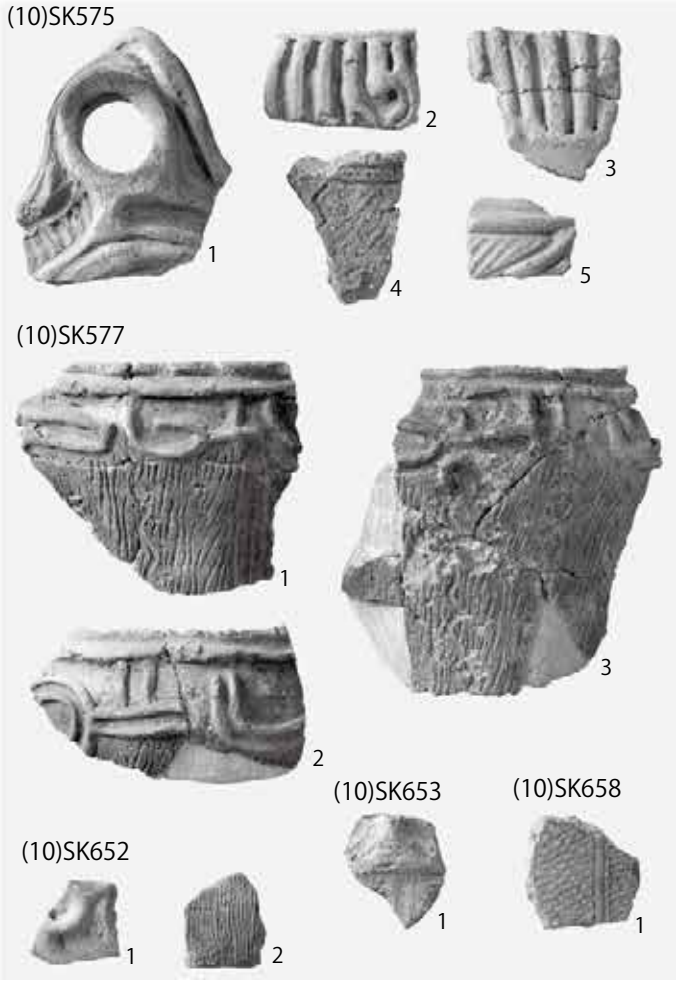

(10)SK501
(10)SK519
(10)SK520
(10)SK523
(10)SK525
(10)SK526
(10)SK532
(10)SK538
(10)SK542
(10)SK546
(10)SK544
(10)SK545
(10)SK547
(10)SK549
(10)SK555
(10)SK553

土坑等出土土器(23)

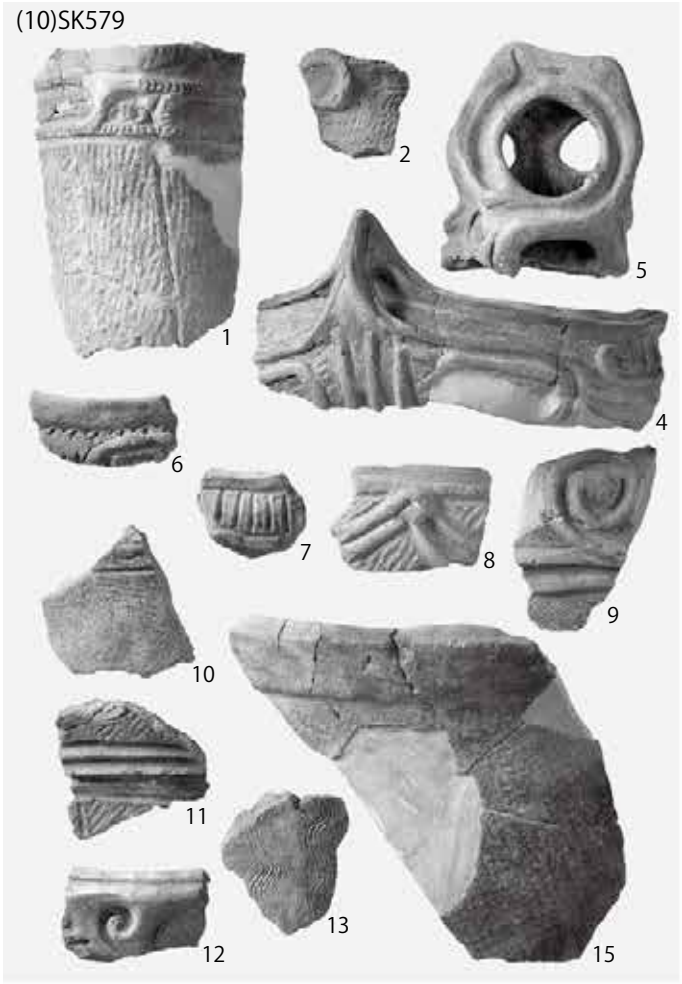

(10)SK556
1
2
3
(10)SK558
(10)SK557
1
1
2
(10)SK562
1
3
2
4
5
6
7

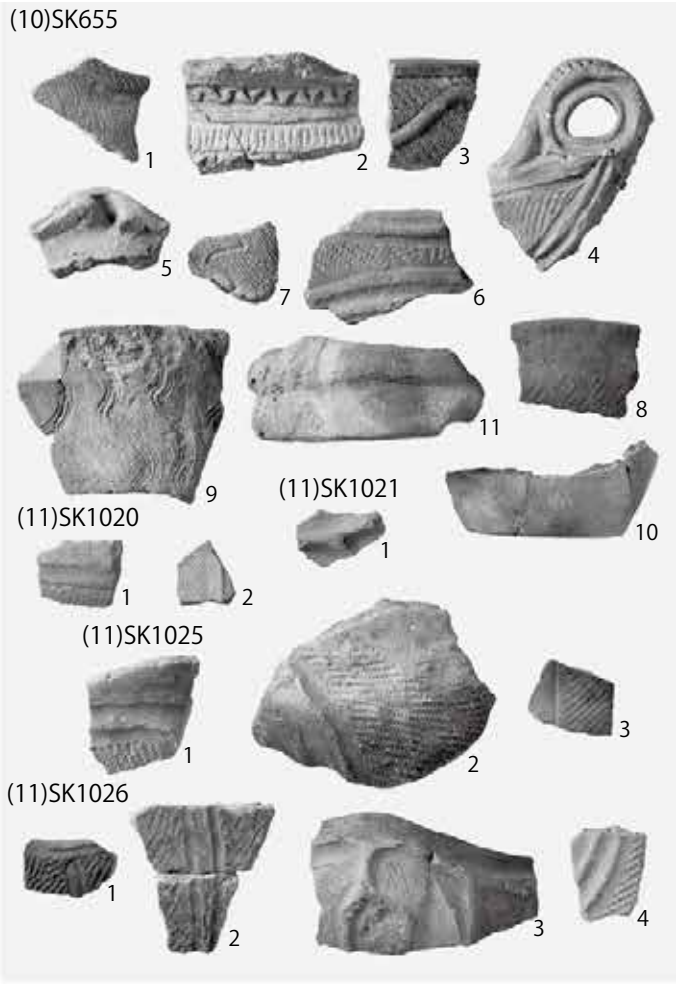

(10)SK563
1
2
3
4
5
6
(10)SK567
1
7

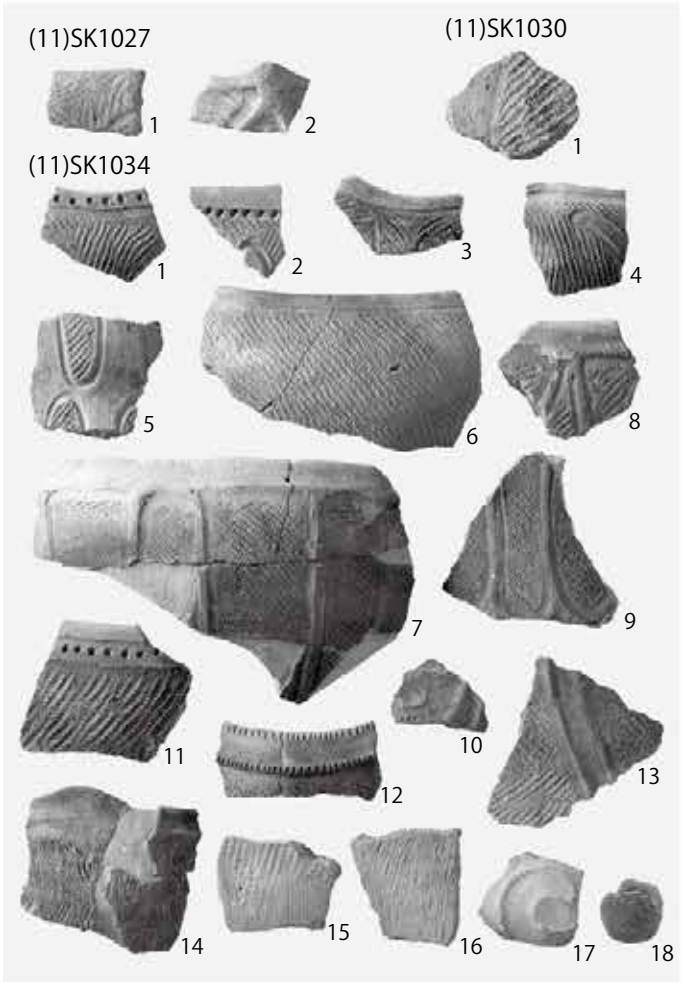

(10)SK566
1
2
3
4
5
7
(10)SK572
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

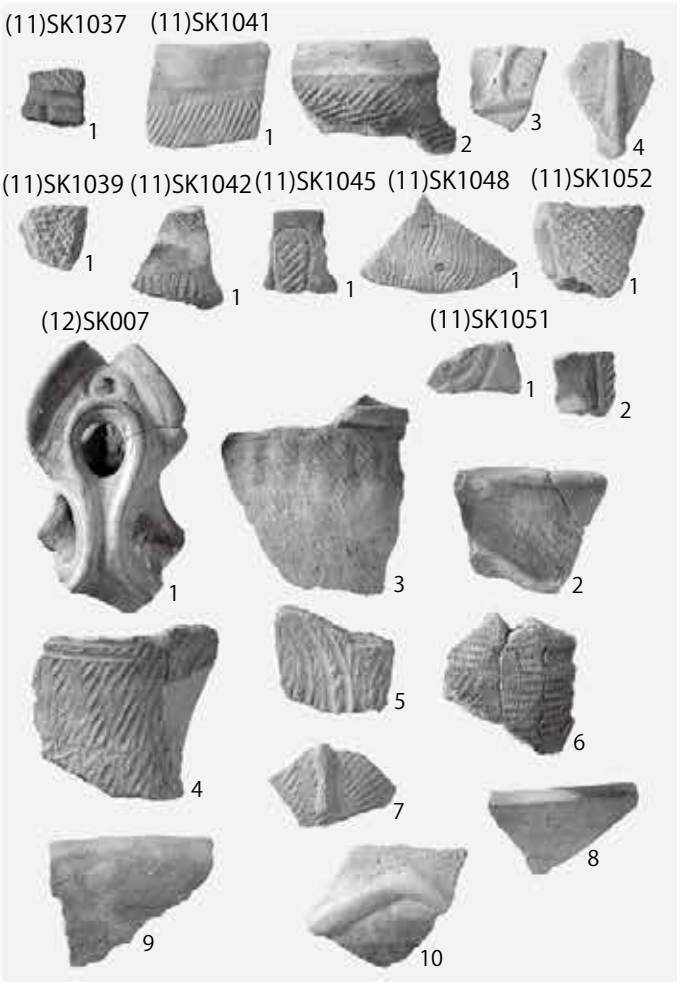

(10)SK575
1
2
3
4
5
(10)SK577
1
3
2
(10)SK653
1
(10)SK658
1
(10)SK652
1
2

土坑等出土土器(24)

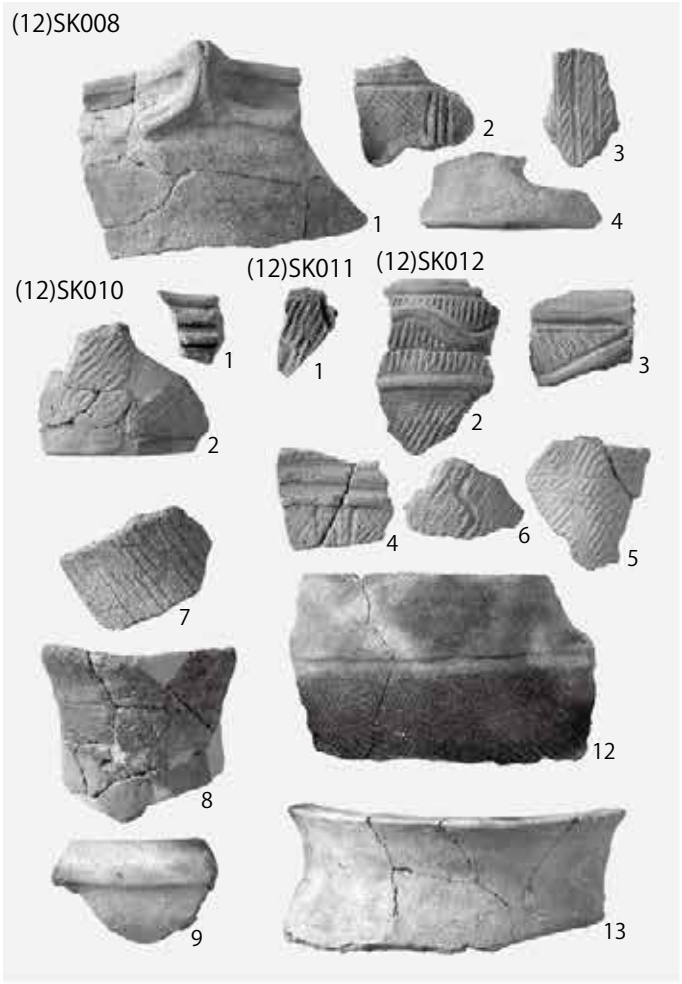

(10)SK579
1
2
5
4
6
7
8
9
10
11
12
13
15

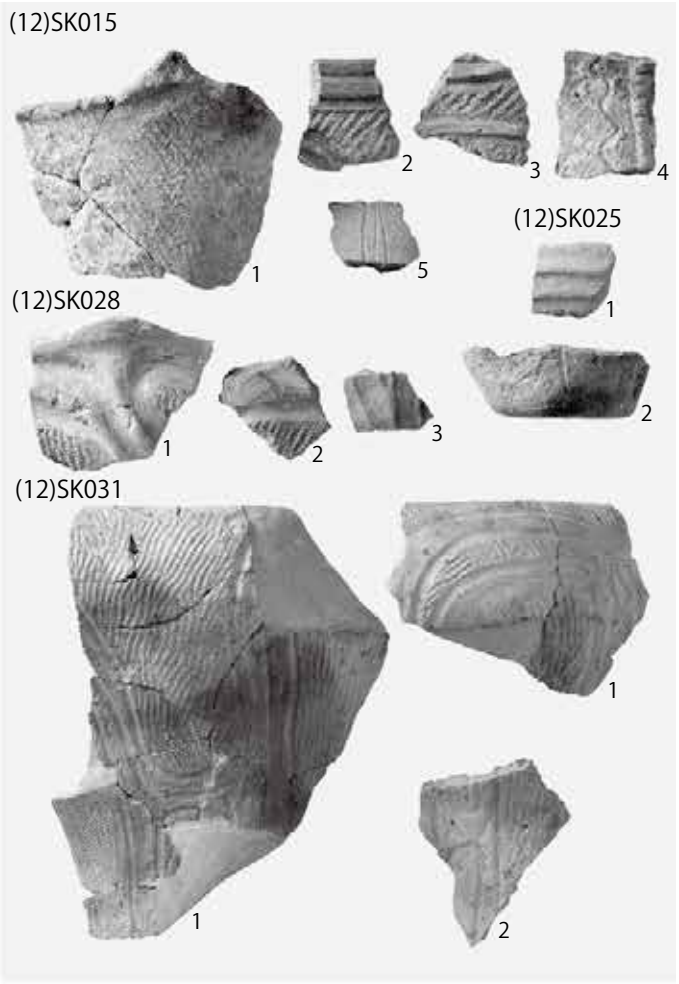

(10)SK655
1
2
3
4
5
7
6
9
11
8
10
(11)SK1021
1
(11)SK1020
1
2
(11)SK1025
1
2
3
(11)SK1026
1
2
3
4

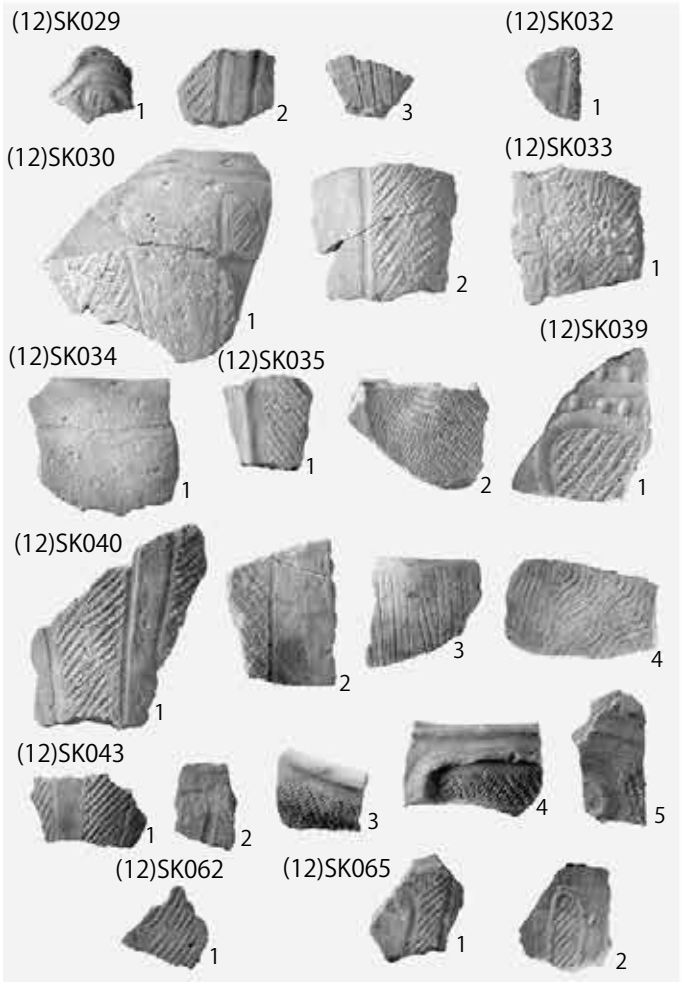

(11)SK1027
1
2
(11)SK1030
1
(11)SK1034
1
2
3
4
5
6
8
7
9
11
10
13
12
14
15
16
17
18

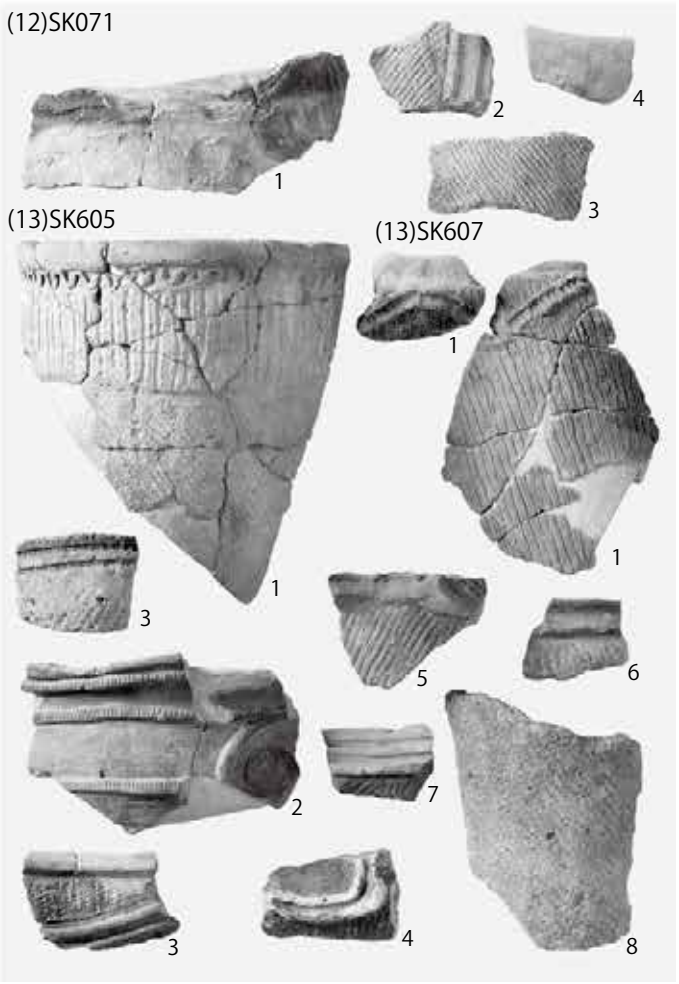

(11)SK1037
1
(11)SK1041
1
2
3
4
(11)SK1039
1
(11)SK1042
1
(11)SK1045
1
(11)SK1048
1
(11)SK1052
1
(12)SK007
(11)SK1051
1
2
1
3
2
4
5
6
7
8
9
10

土坑等出土土器(25)

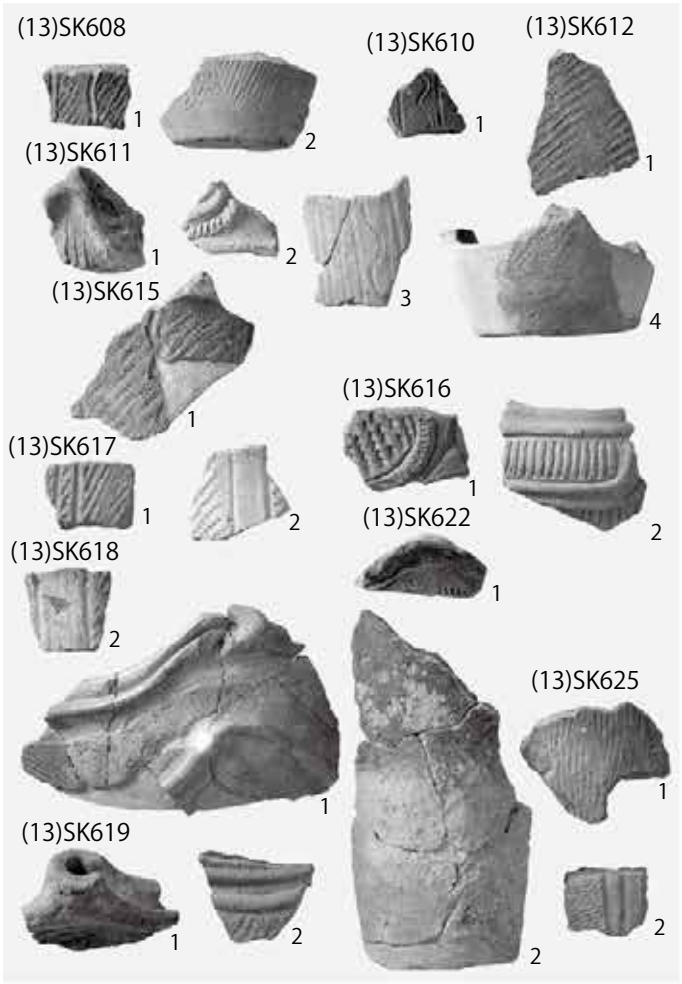

(12)SK008
(12)SK010
(12)SK011
(12)SK012

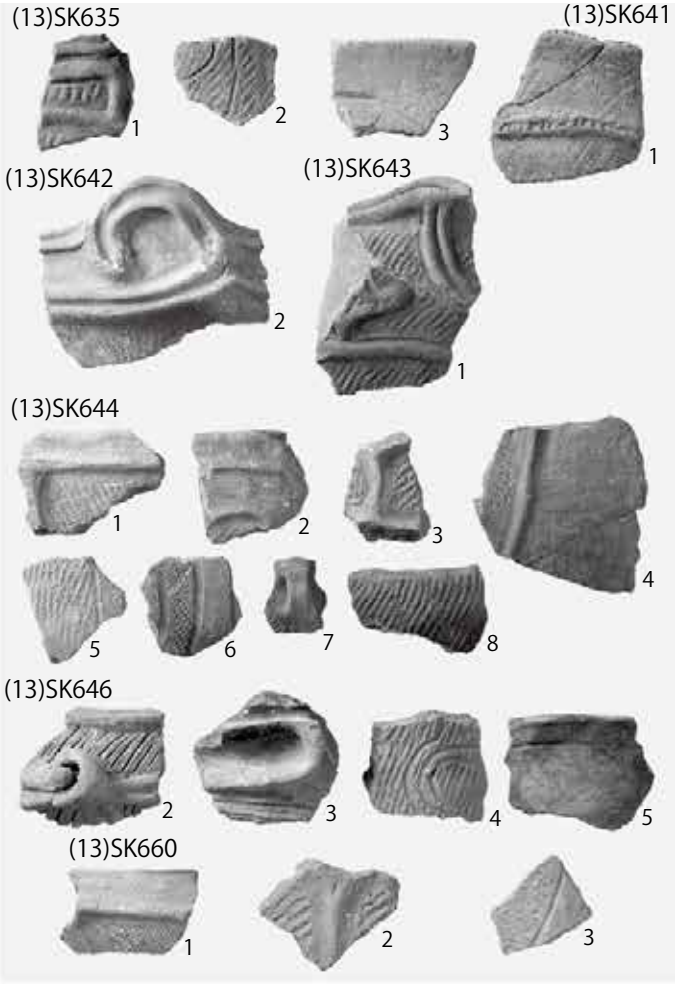

(12)SK015
(12)SK025
(12)SK028
(12)SK031

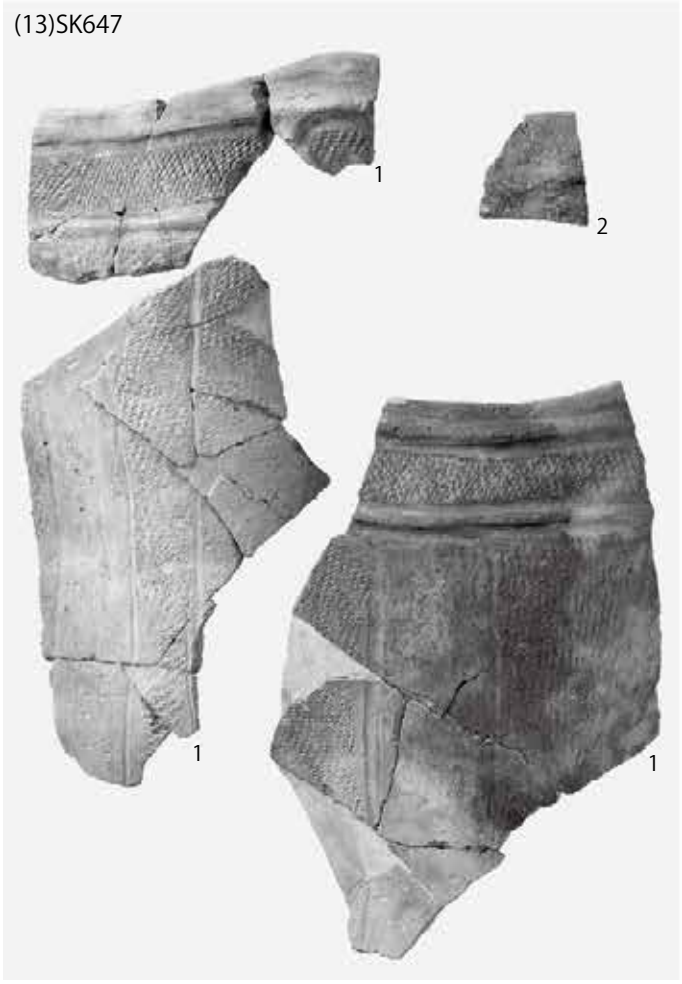

(12)SK029
(12)SK032
(12)SK030
(12)SK033
(12)SK034
(12)SK035
(12)SK039
(12)SK040
(12)SK043
(12)SK062
(12)SK065

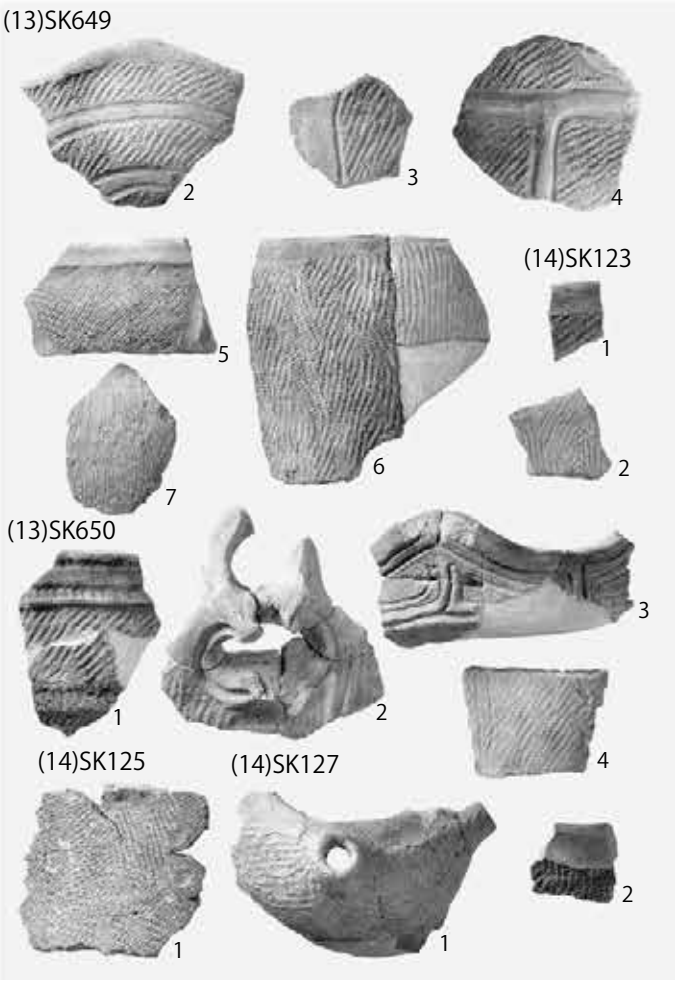

(12)SK071
(13)SK605
(13)SK607

土坑等出土土器(26)

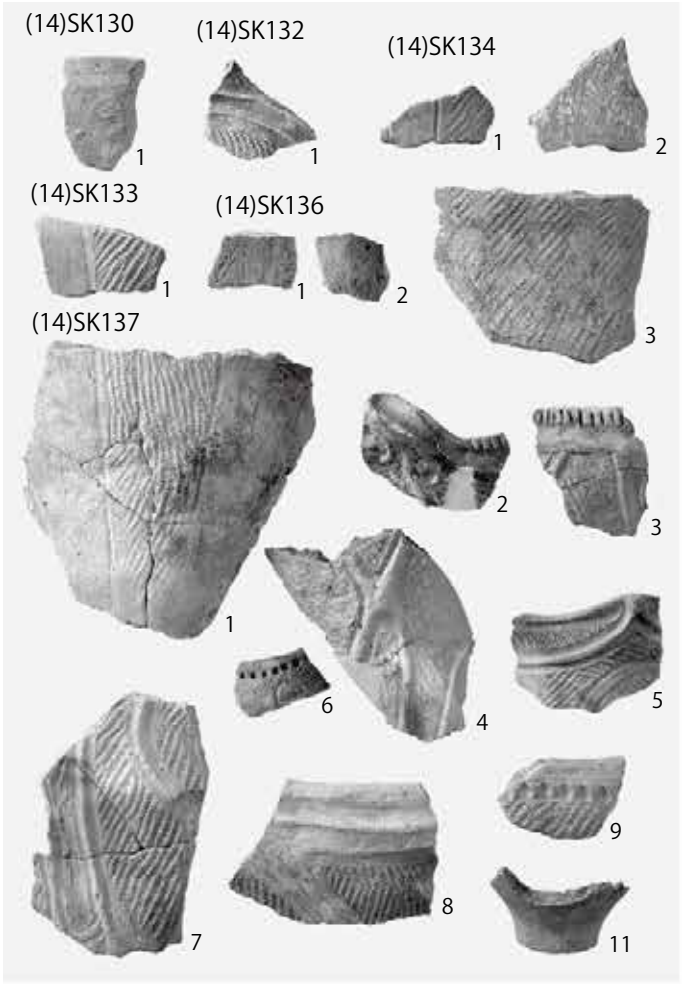

(13)SK608
(13)SK610
(13)SK612
(13)SK611
(13)SK615
(13)SK616
(13)SK617
(13)SK622
(13)SK618
(13)SK625
(13)SK619

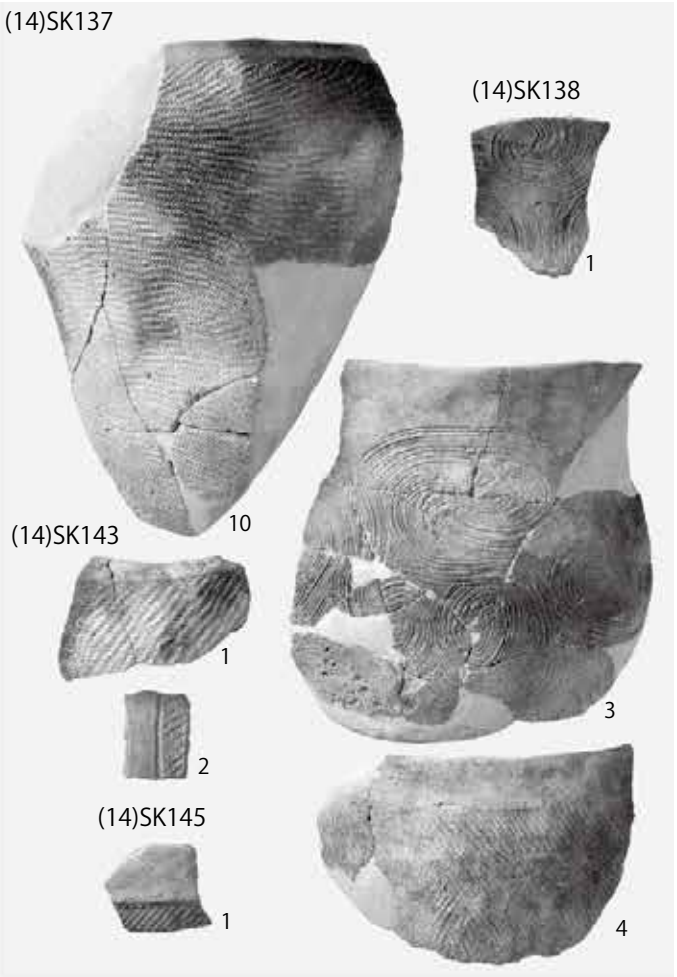

(13)SK635
(13)SK641
(13)SK642
(13)SK643
(13)SK644
(13)SK646
(13)SK660

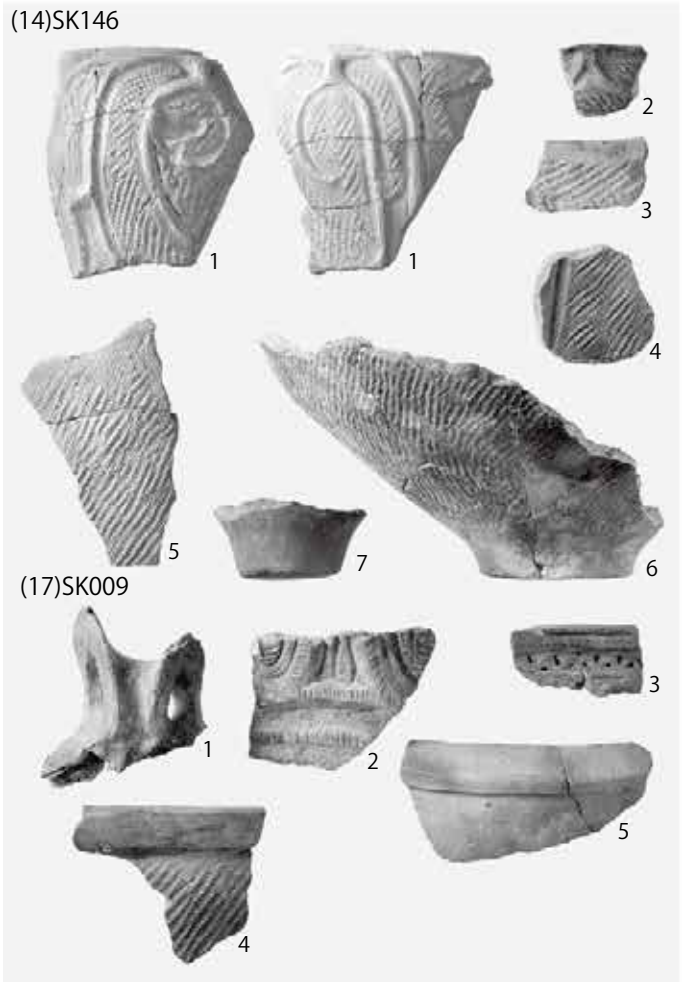

(13)SK647

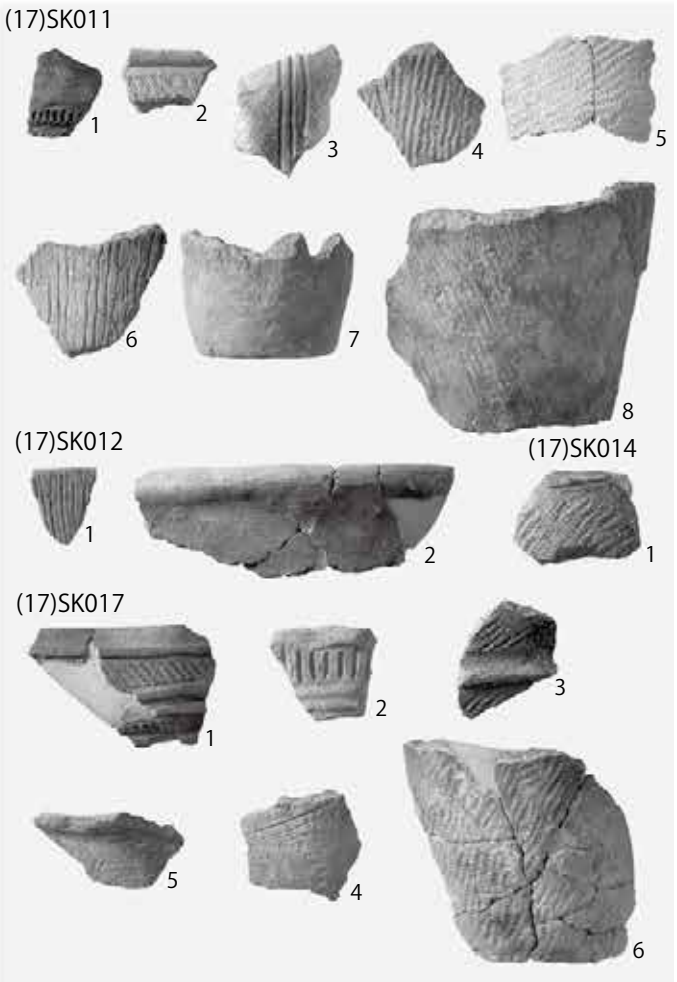

(13)SK649
(14)SK123
(13)SK650
(14)SK125
(14)SK127

土坑等出土土器(27)

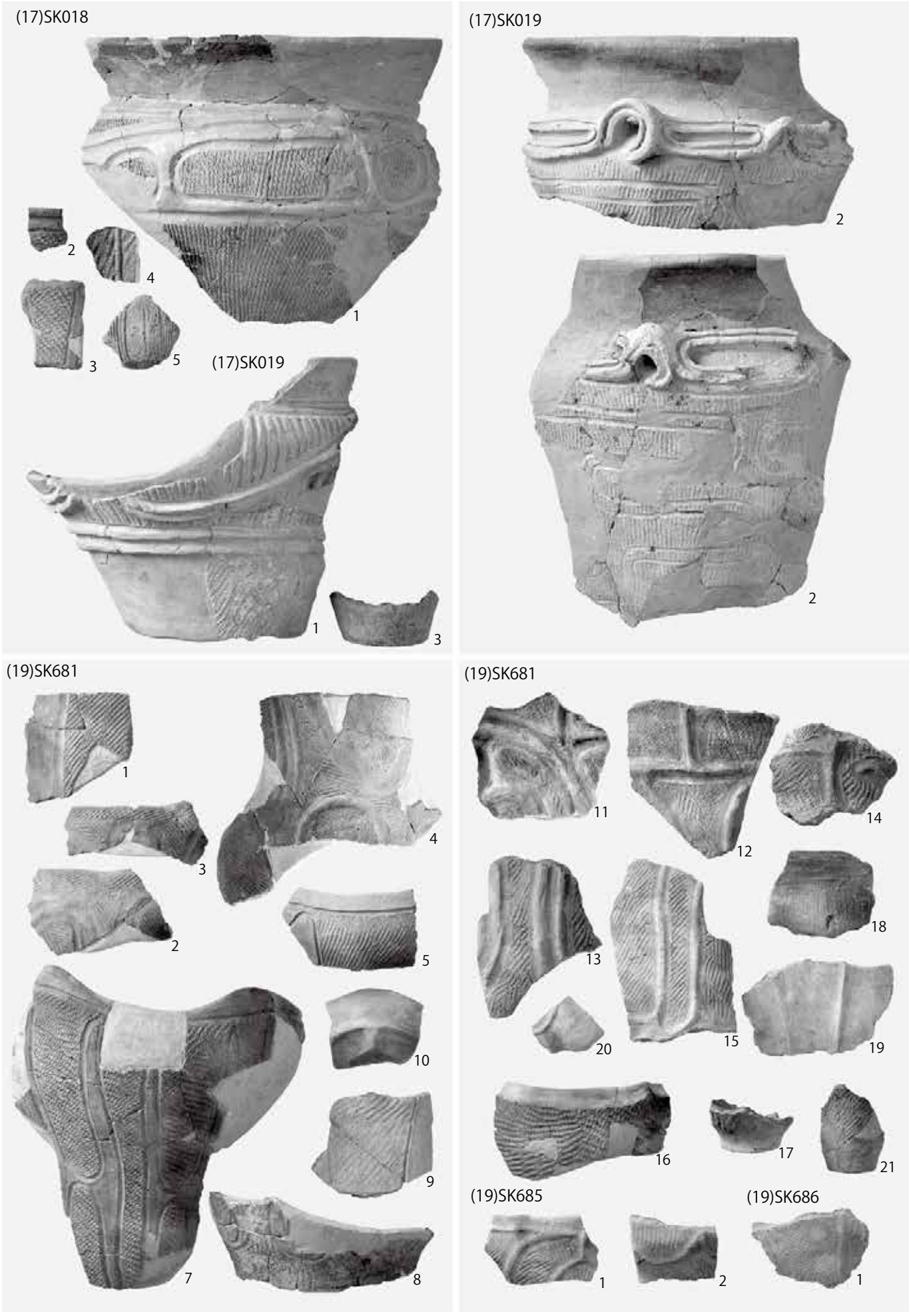

(14)SK130
1
(14)SK132
1
(14)SK134
1
2
(14)SK133
1
(14)SK136
1
2
3
(14)SK137
1
2
3
4
5
6
7
8
9
11


(14)SK137
10
(14)SK138
1
(14)SK143
1
2
3
4
(14)SK145
1

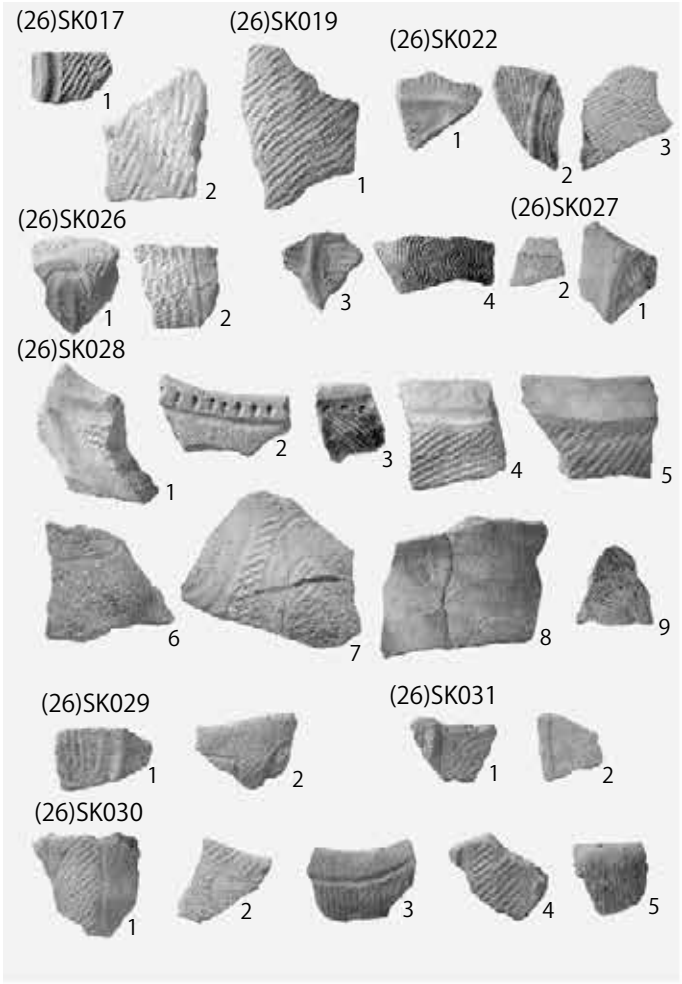

(14)SK146
1
1
2
3
4
5
6
7
(17)SK009
1
2
3
4
5

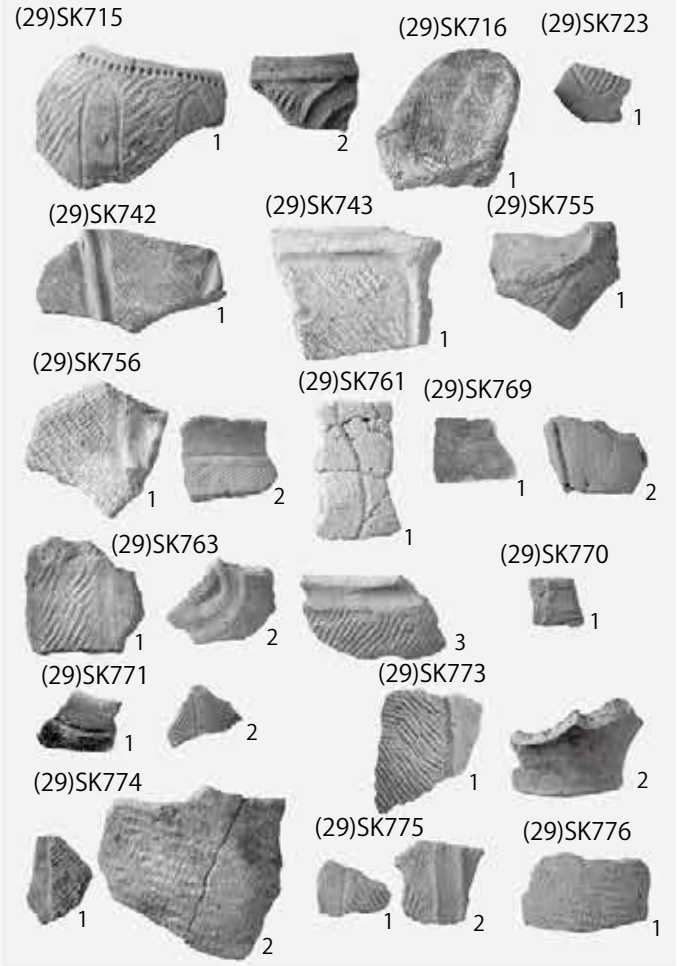

(17)SK011
1
2
3
4
5
6
7
8
(17)SK012
1
2
(17)SK014
1
(17)SK017
1
2
3
4
5
6

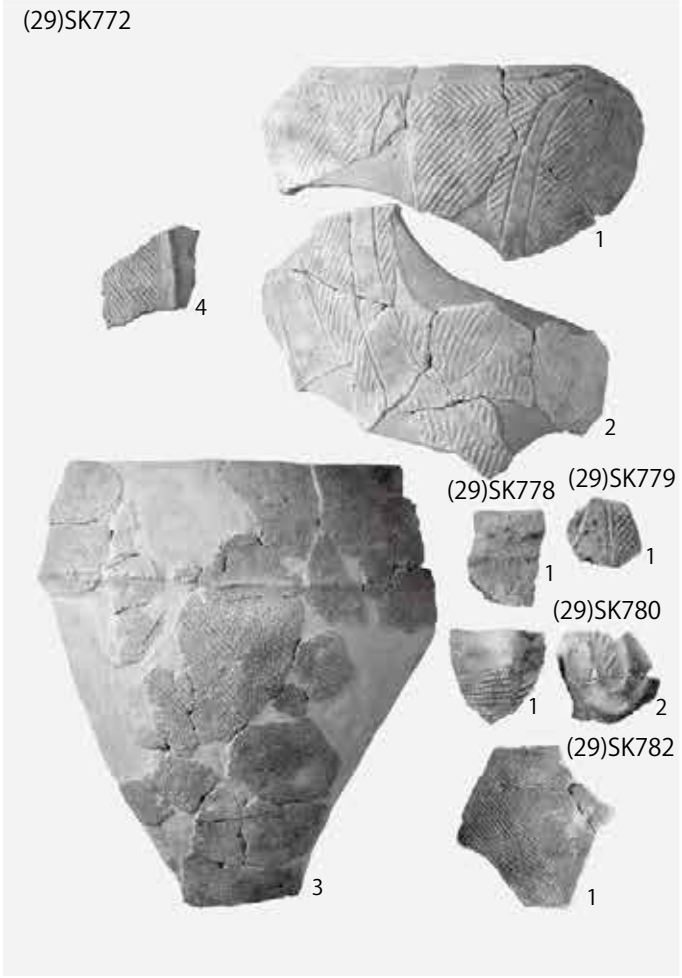
土坑等出土土器(28)

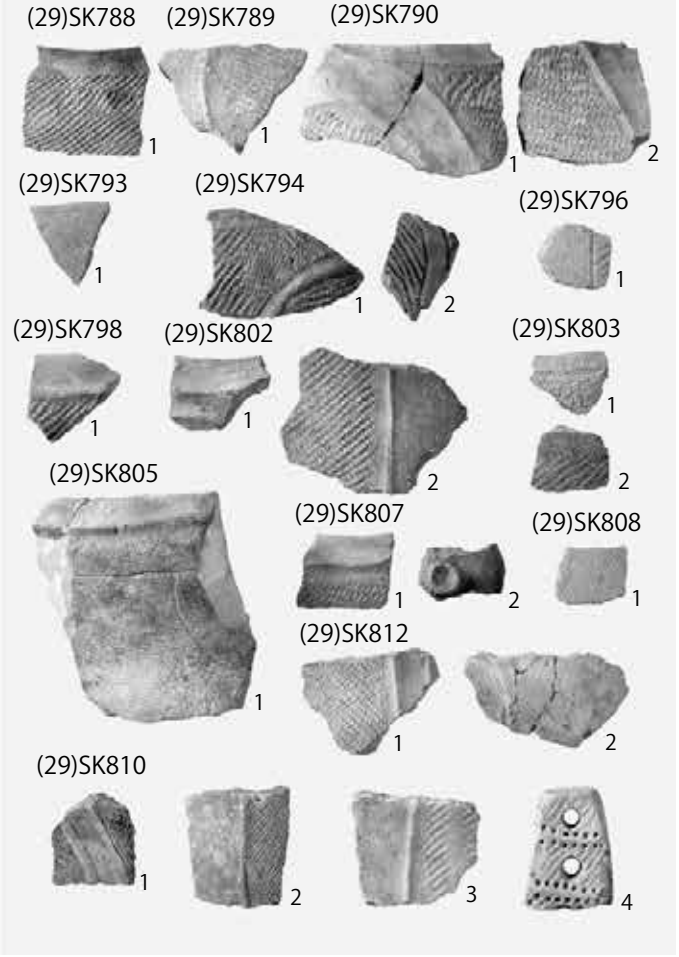

(17)SK018
1
2
3
4
5
(17)SK019
1
3
(17)SK019
2
2
(19)SK681
1
2
3
4
5
7
8
9
10
(19)SK681
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
(19)SK685
1
2
(19)SK686
1

土坑等出土土器(29)

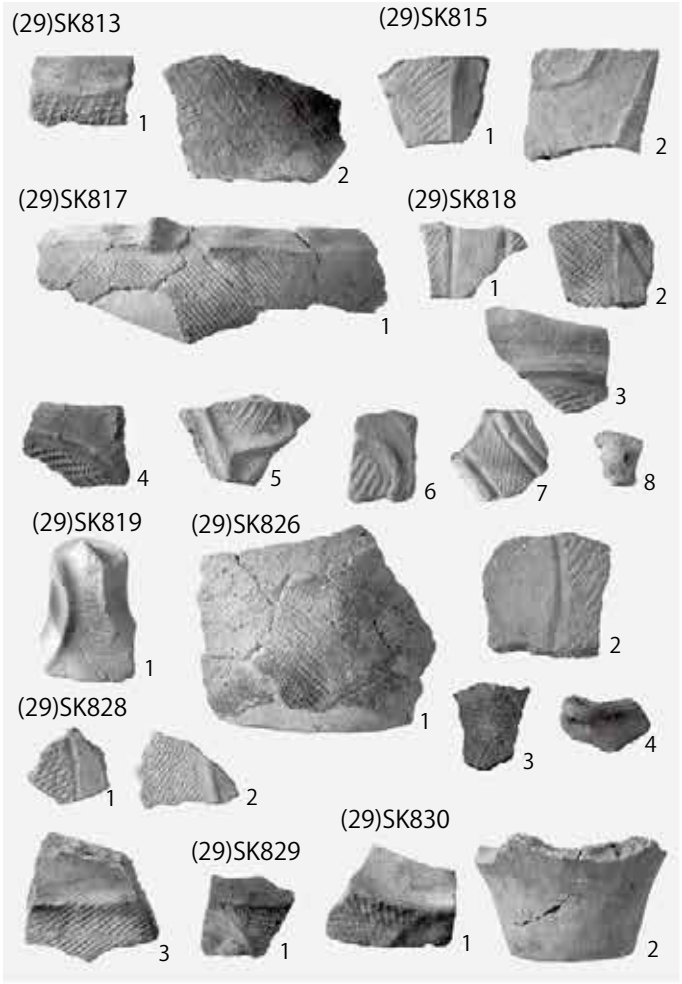

(26)SK017
(26)SK019
(26)SK022
(26)SK026
(26)SK027
(26)SK028
(26)SK029
(26)SK031
(26)SK030

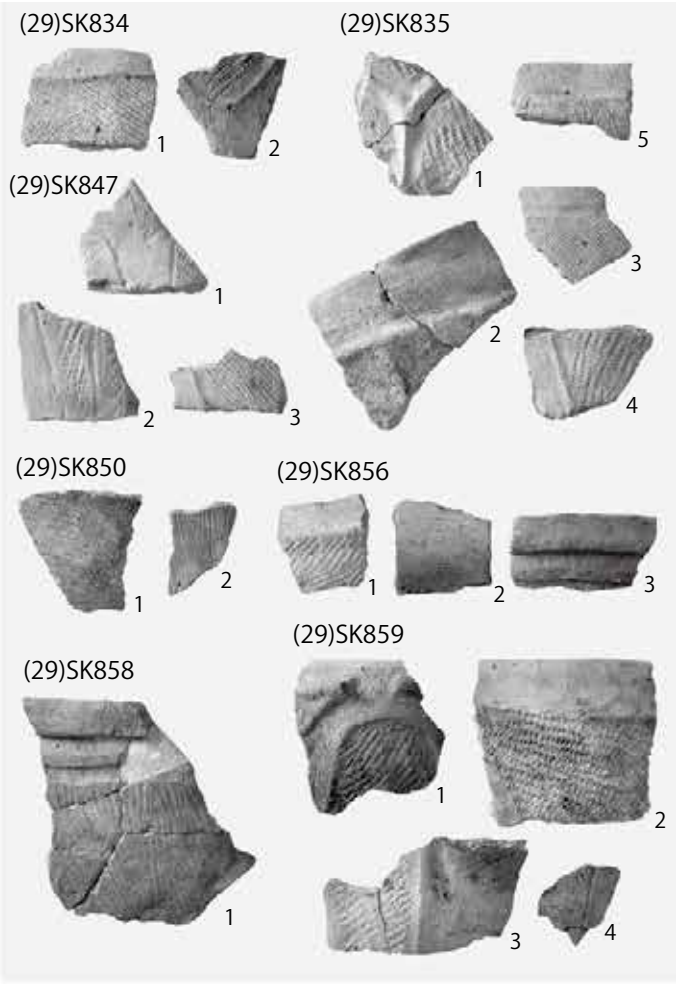

(29)SK715
(29)SK716
(29)SK723
(29)SK742
(29)SK743
(29)SK755
(29)SK756
(29)SK761
(29)SK769
(29)SK763
(29)SK770
(29)SK771
(29)SK773
(29)SK774
(29)SK775
(29)SK776

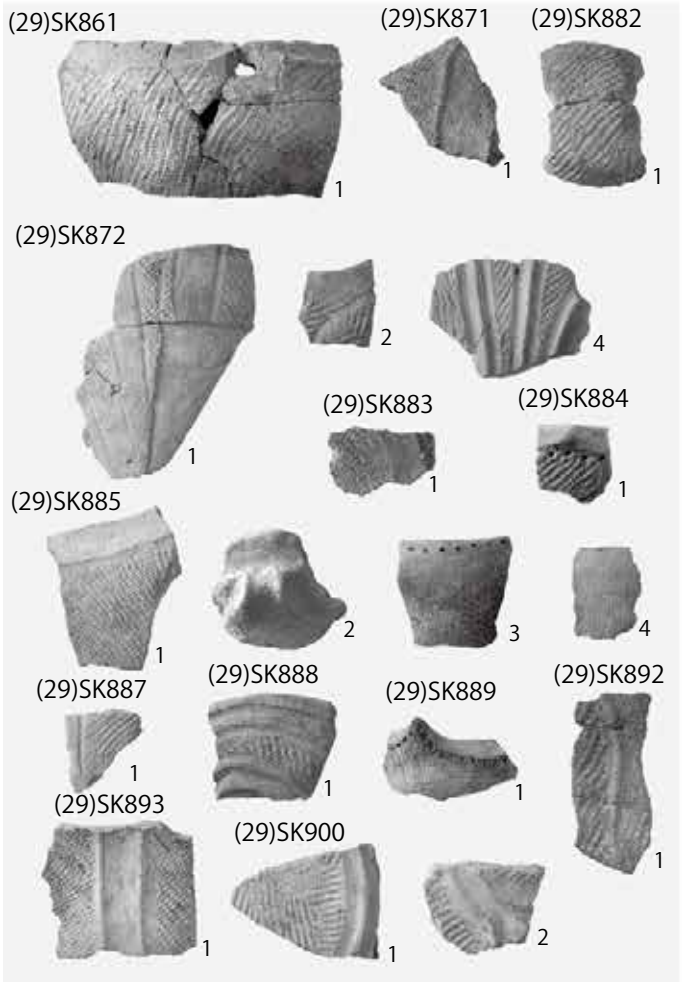

(29)SK772
(29)SK778
(29)SK779
(29)SK780
(29)SK782

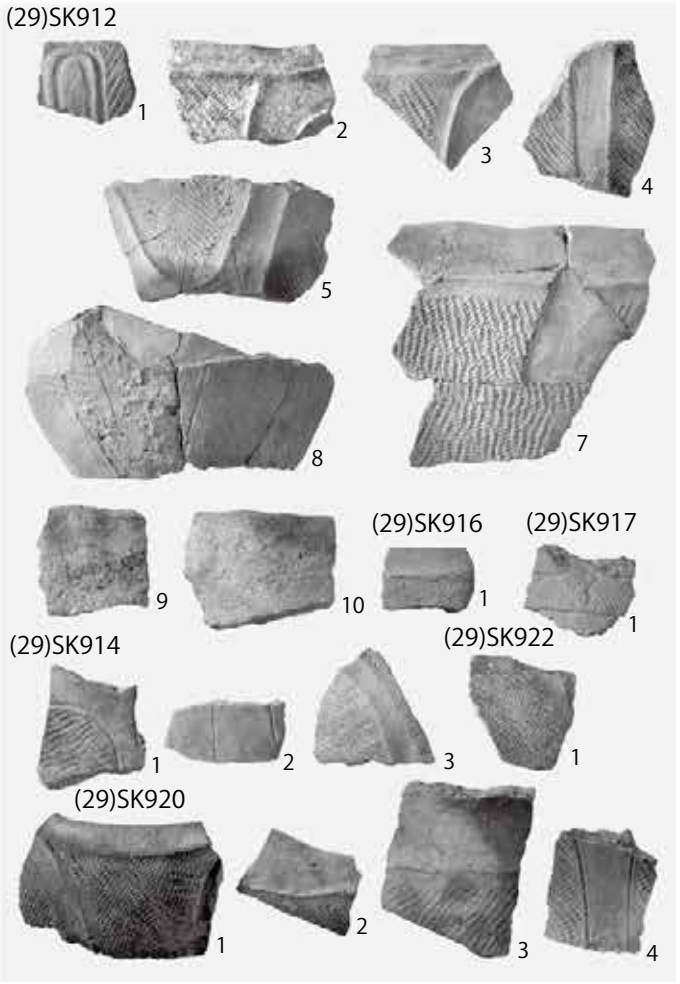

(29)SK788
(29)SK789
(29)SK790
(29)SK793
(29)SK794
(29)SK796
(29)SK798
(29)SK802
(29)SK803
(29)SK805
(29)SK807
(29)SK808
(29)SK812
(29)SK810

土坑等出土土器(30)

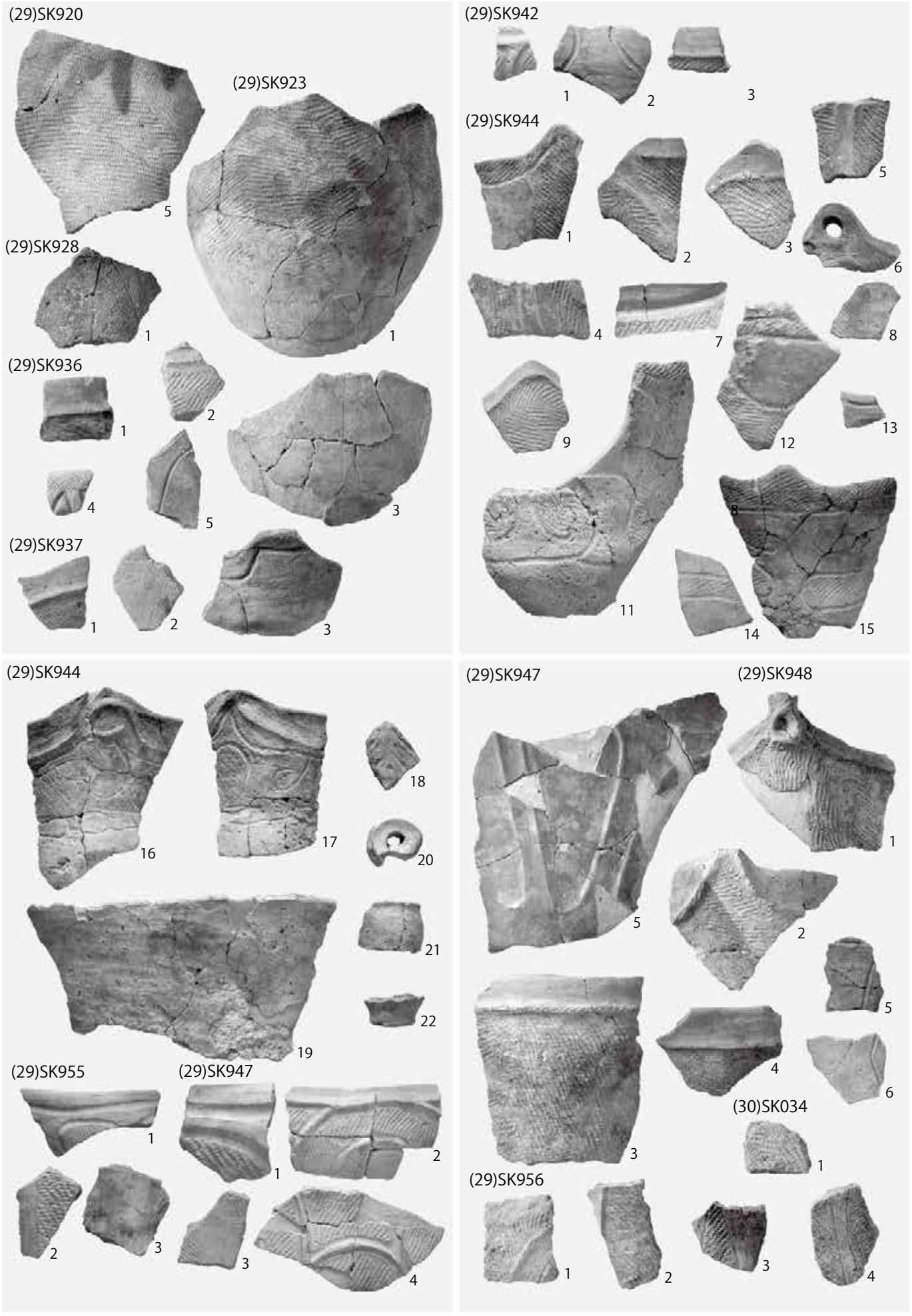

(29)SK813
(29)SK815
(29)SK817
(29)SK818
(29)SK819
(29)SK826
(29)SK828
(29)SK829
(29)SK830


(29)SK834
(29)SK835
(29)SK847
(29)SK850
(29)SK856
(29)SK858
(29)SK859

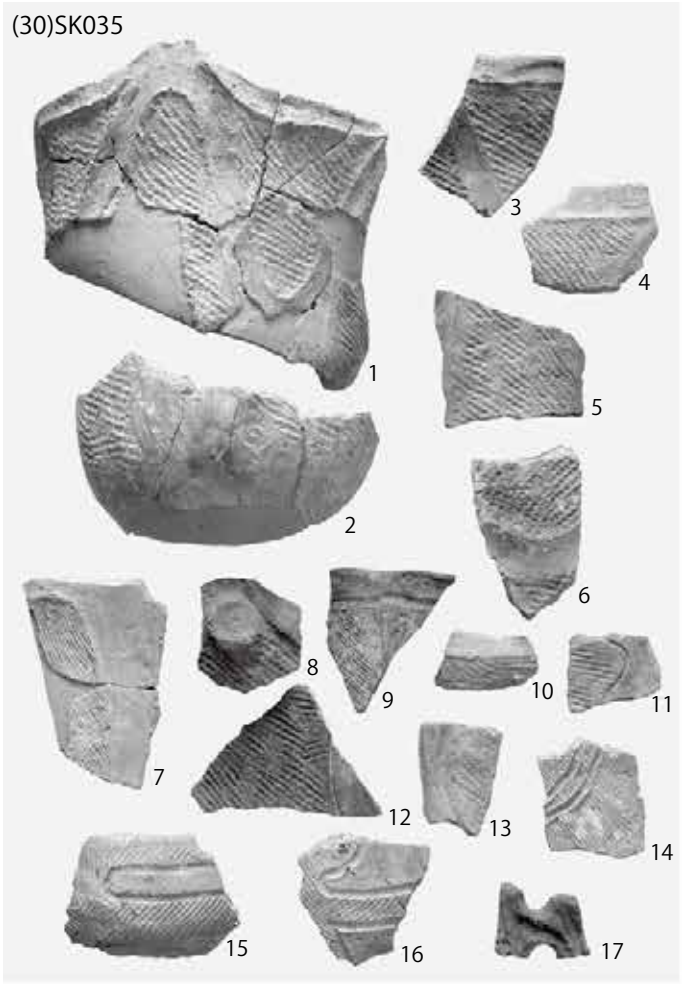

(29)SK861
(29)SK871
(29)SK882
(29)SK872
(29)SK883
(29)SK884
(29)SK885
(29)SK887
(29)SK888
(29)SK889
(29)SK892
(29)SK893
(29)SK900

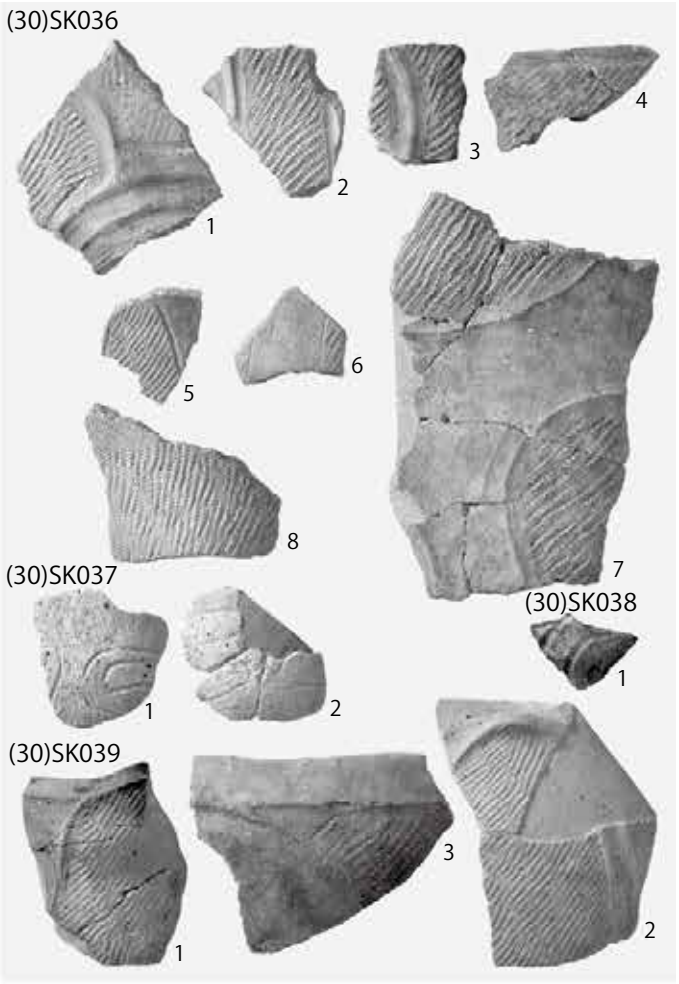

(29)SK912
(29)SK916
(29)SK917
(29)SK914
(29)SK922
(29)SK920

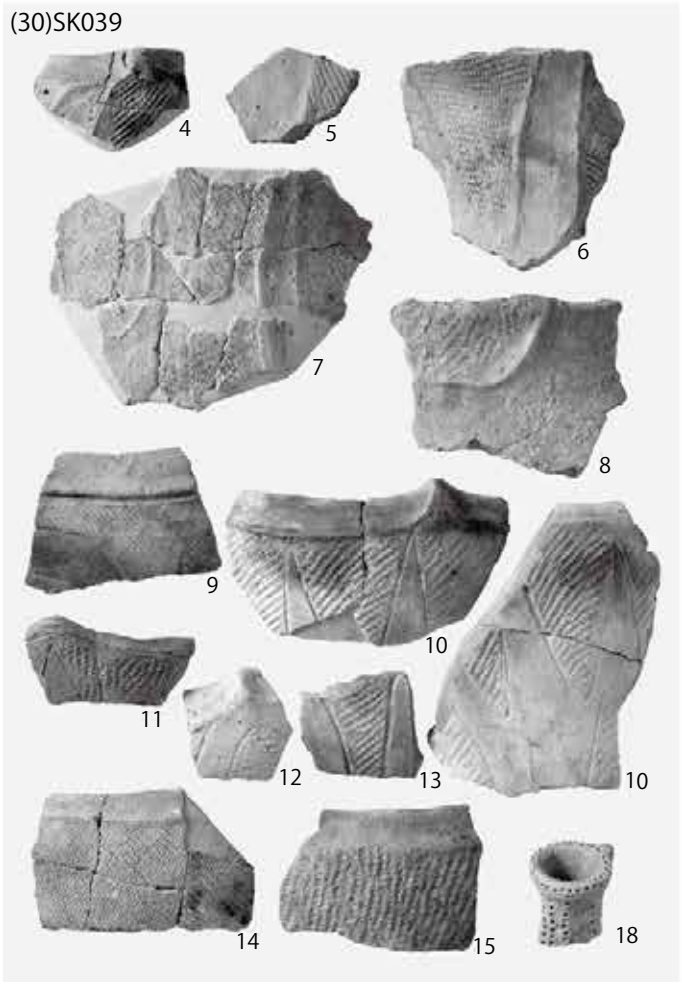
土坑等出土土器(31)

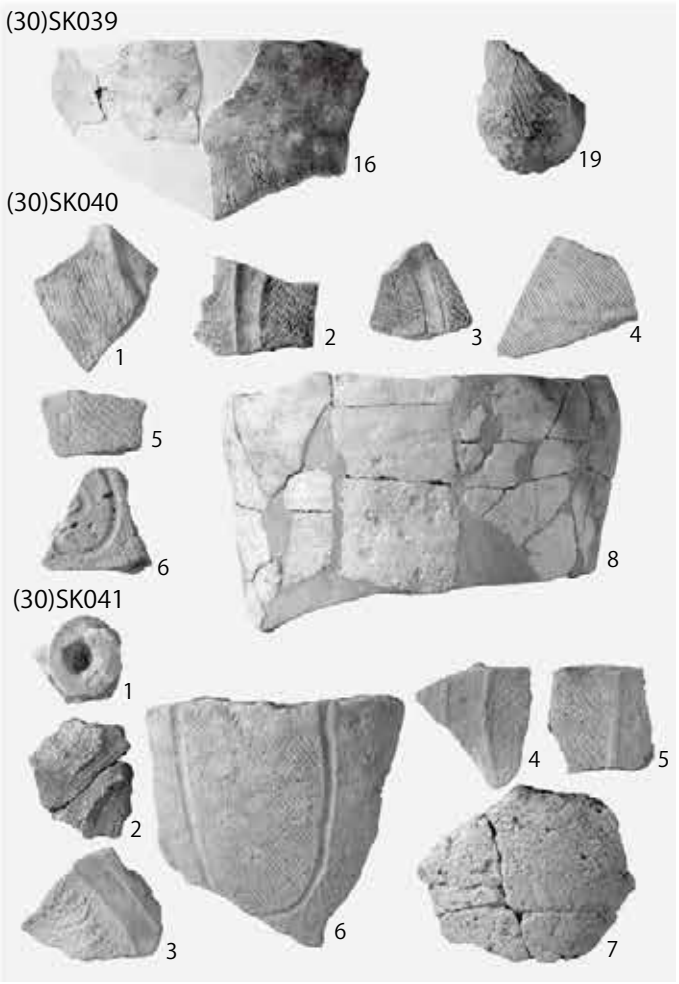

(29)SK920
5
(29)SK923
1
(29)SK928
1
(29)SK936
1
2
3
4
5
(29)SK937
1
2
3
(29)SK942
1
2
3
(29)SK944
1
2
3
4
5
6
7
8
9
11
12
13
14
15
(29)SK944
16
17
18
19
20
21
22
(29)SK947
(29)SK948
1
2
3
4
5
6
(30)SK034
1
(29)SK955
1
2
3
(29)SK947
1
2
3
4
(29)SK956
1
2
3
4

土坑等出土土器(32)

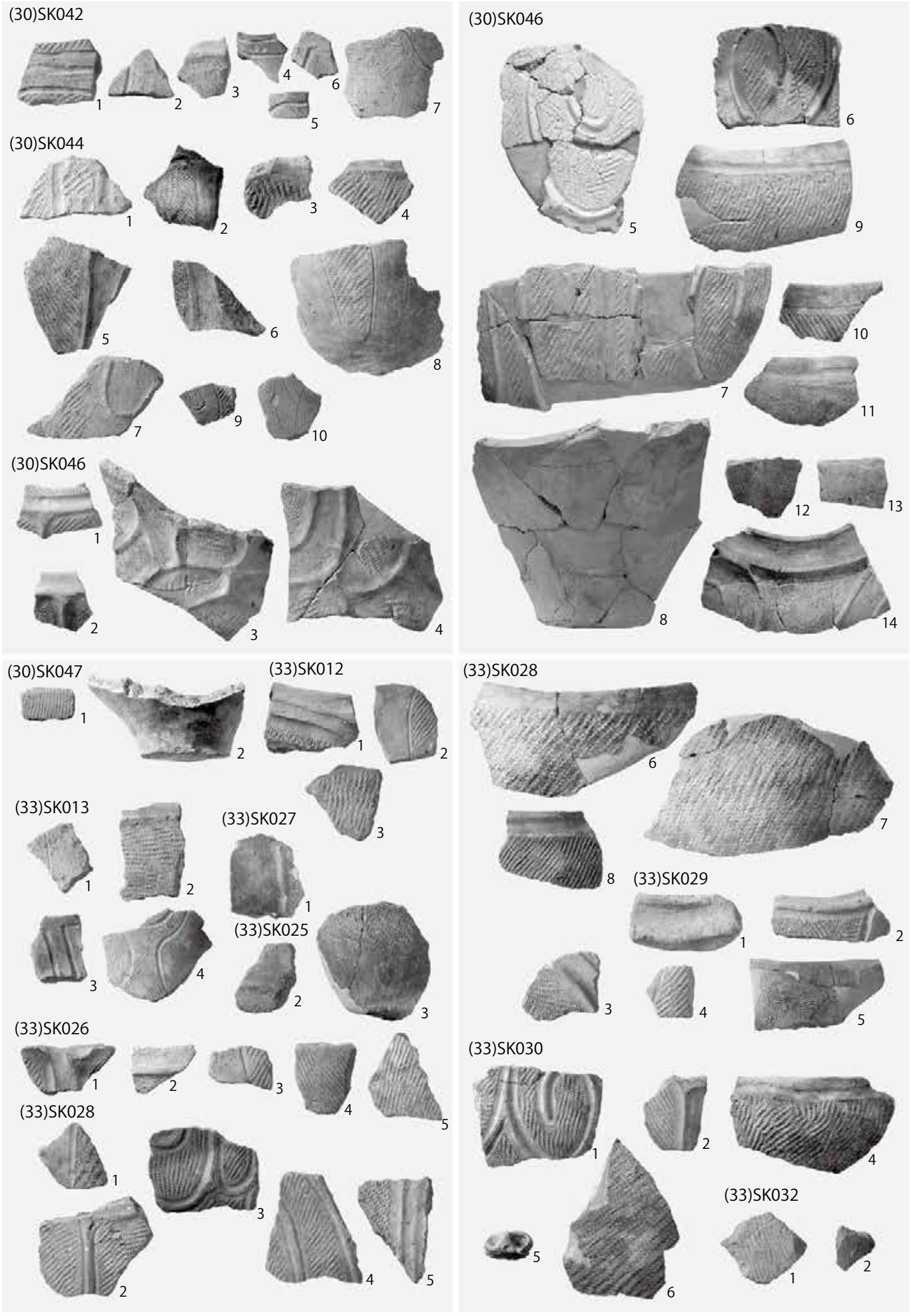

(30)SK035
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17


(30)SK036
1
2
3
4
5
6
7
8
(30)SK037
1
2
(30)SK038
1
(30)SK039
1
2
3

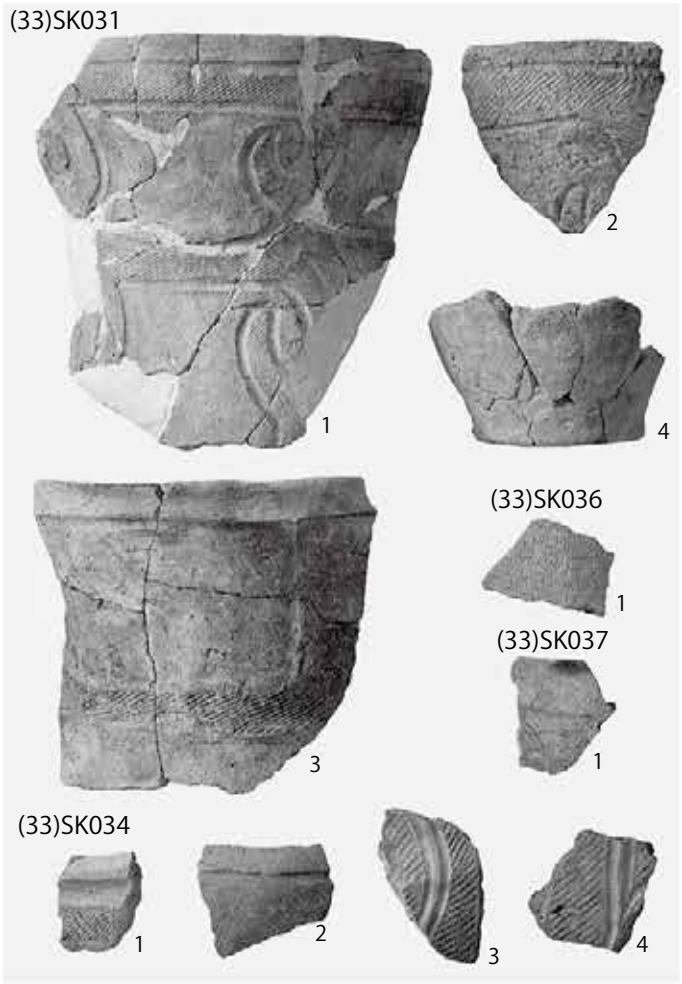

(30)SK039
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
10
14
15
18

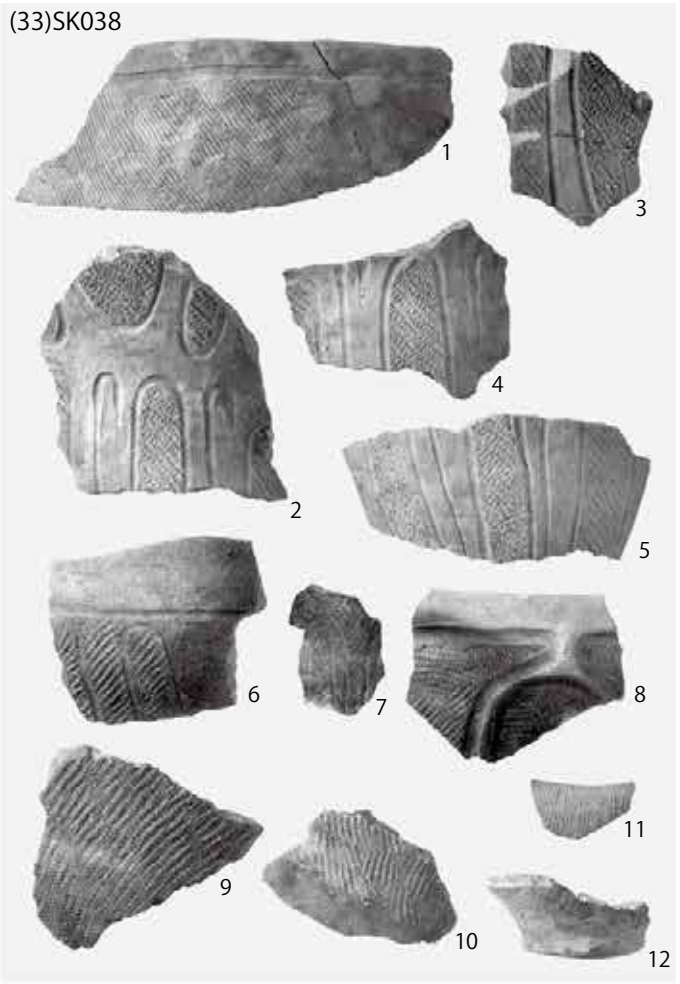

(30)SK039
16
19
(30)SK040
1
2
3
4
5
6
8
(30)SK041
1
2
3
4
5
6
7

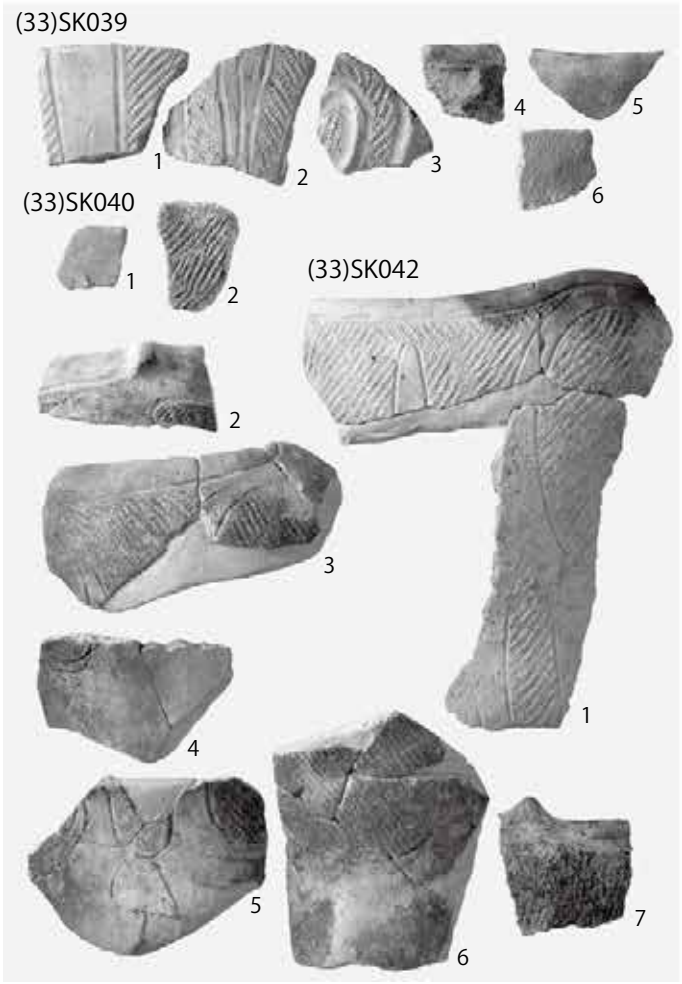
土坑等出土土器(33)

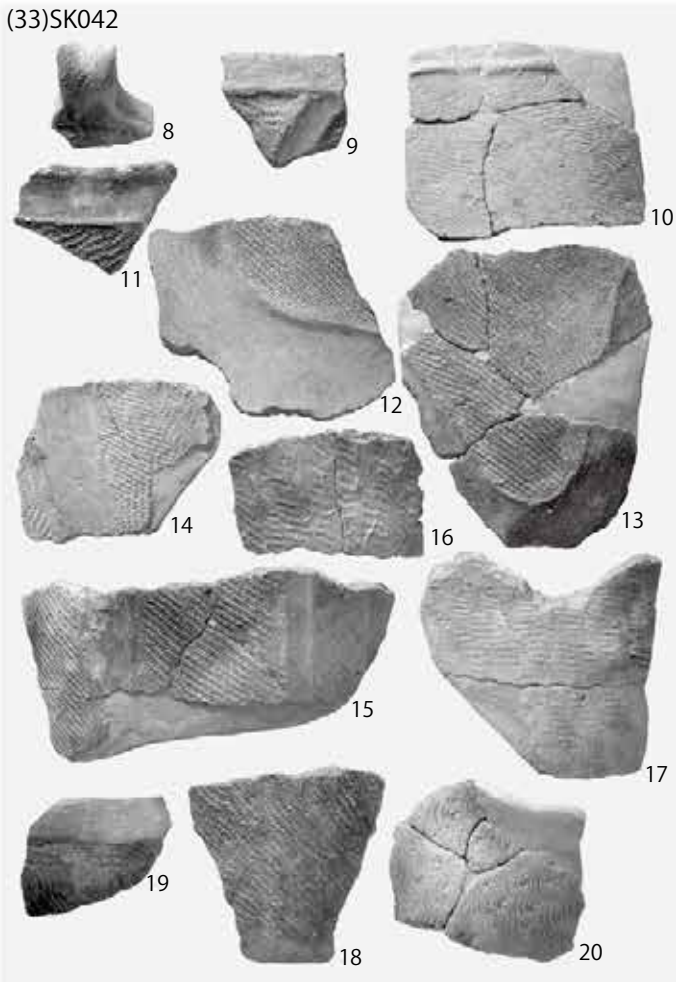

(30)SK042
(30)SK044
(30)SK046
(30)SK046
(30)SK047
(33)SK012
(33)SK013
(33)SK027
(33)SK025
(33)SK026
(33)SK028
(33)SK028
(33)SK029
(33)SK030
(33)SK032

土坑等出土土器(34)

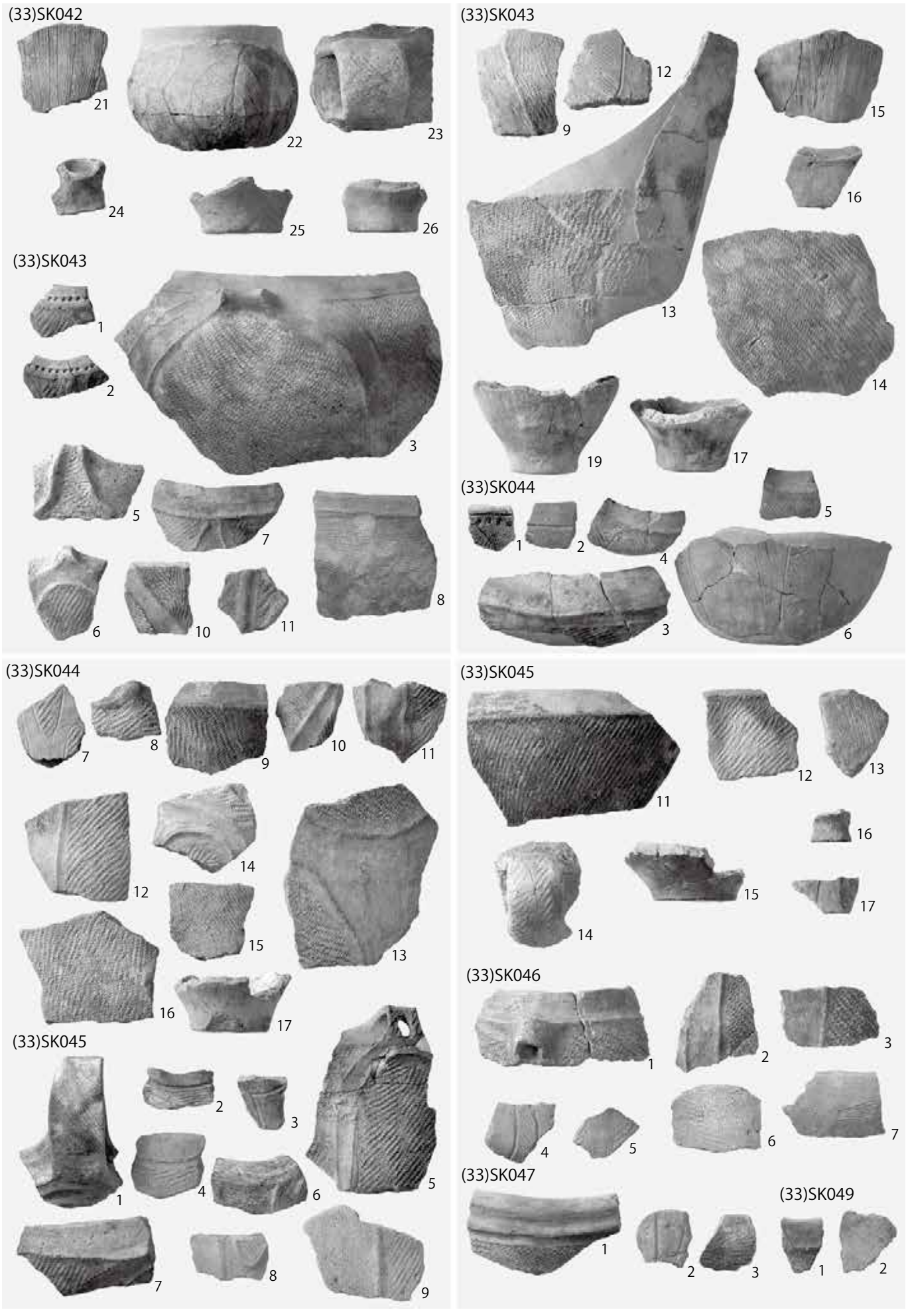

(33)SK031
1
2
4
(33)SK036
1
(33)SK037
1
3
(33)SK034
1
2
3
4


(33)SK038
1
3
4
2
5
6
7
8
9
11
10
12

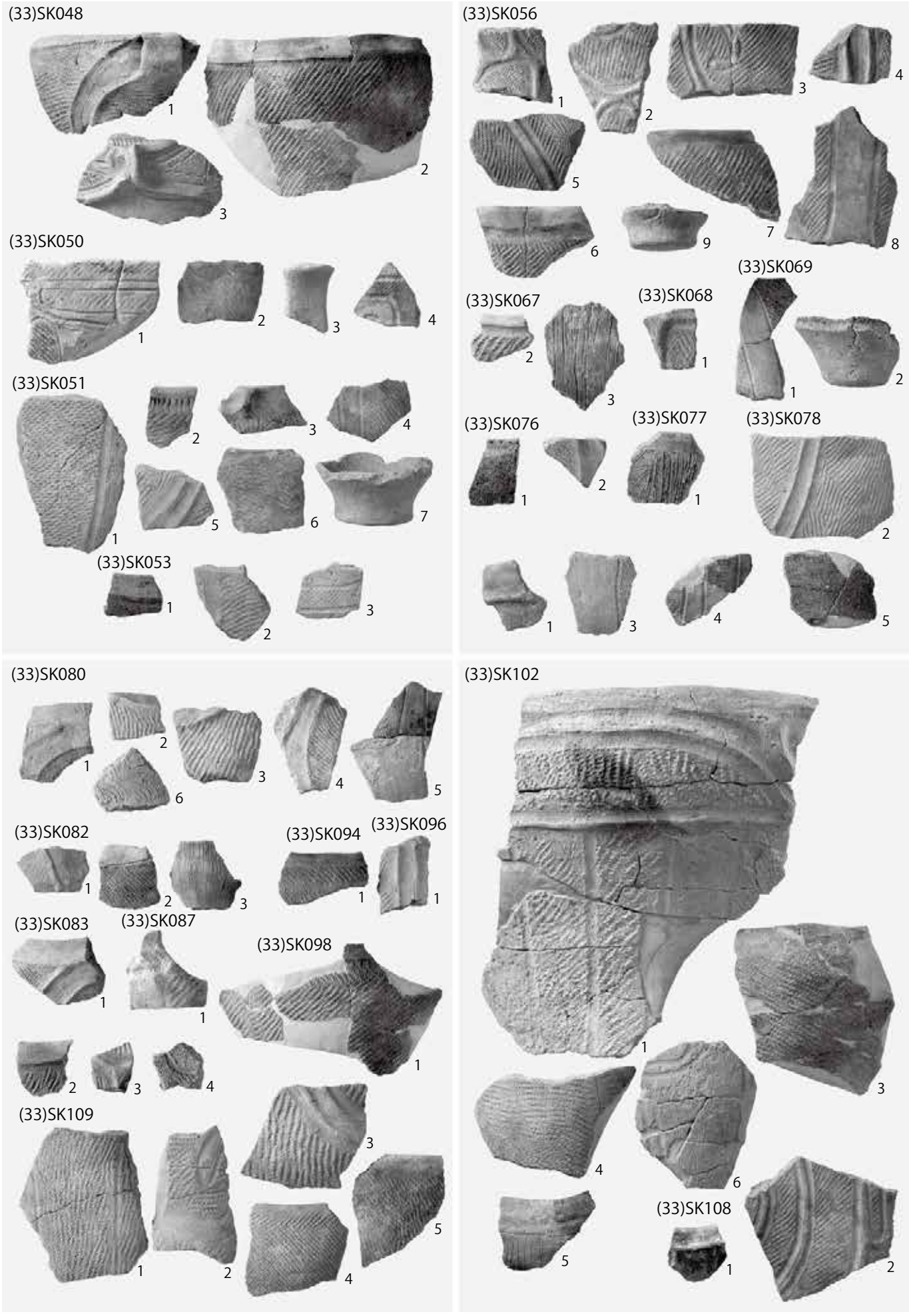

(33)SK039
1
2
3
4
5
6
(33)SK040
1
2
(33)SK042
2
3
1
4
5
6
7


(33)SK042
8
9
10
11
12
14
16
13
15
17
19
18
20

土坑等出土土器(35)


(33)SK042
21
22
23
24
25
26
(33)SK043
1
2
3
5
7
8
6
10
11
(33)SK043
9
12
15
16
13
14
19
17
(33)SK044
1
2
4
5
3
6
(33)SK044
7
8
9
10
11
12
14
15
13
16
17
(33)SK045
1
2
3
5
4
6
7
8
9
(33)SK045
11
12
13
16
14
15
17
(33)SK046
1
2
3
4
5
6
7
(33)SK047
1
2
3
(33)SK049
1
2

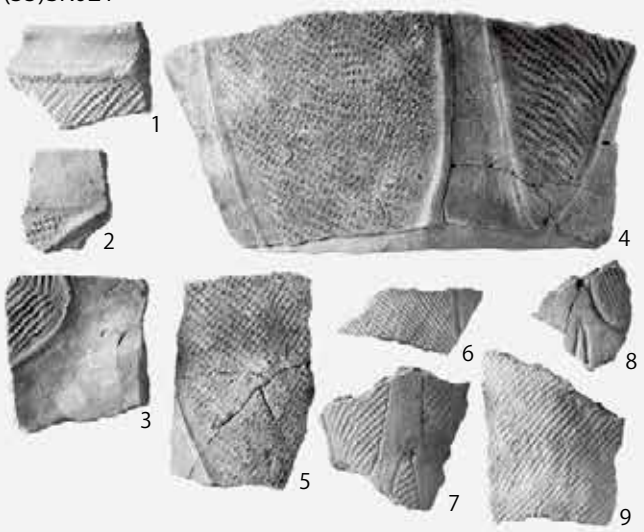
土坑等出土土器(36)


(33)SK048
(33)SK050
(33)SK051
(33)SK053
(33)SK056
(33)SK067
(33)SK068
(33)SK069
(33)SK076
(33)SK077
(33)SK078
(33)SK080
(33)SK082
(33)SK094
(33)SK096
(33)SK083
(33)SK087
(33)SK098
(33)SK102
(33)SK108
(33)SK109

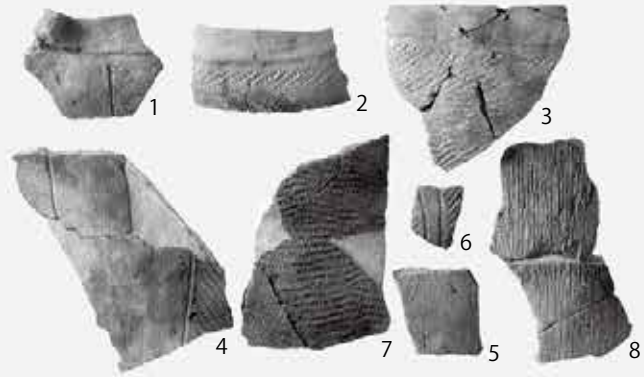
土坑等出土土器(37)

(33)SK102

(35)SK021



(39)SK003

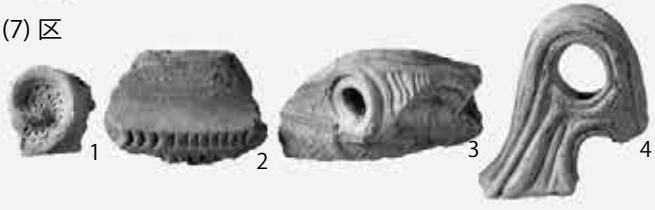


(1) 区

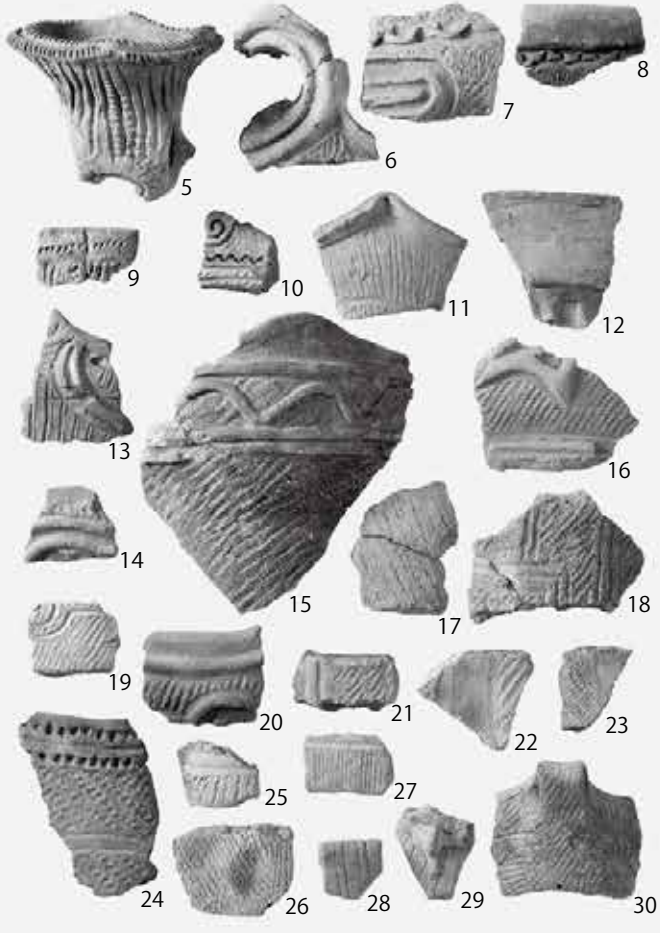
(2) 区

(6) 区

(7) 区

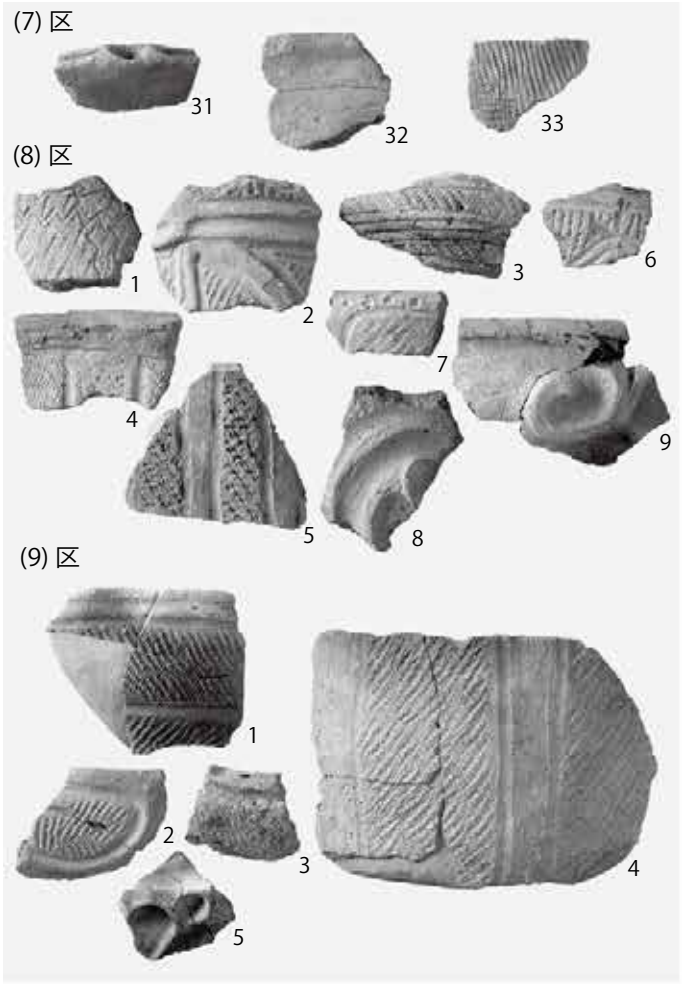


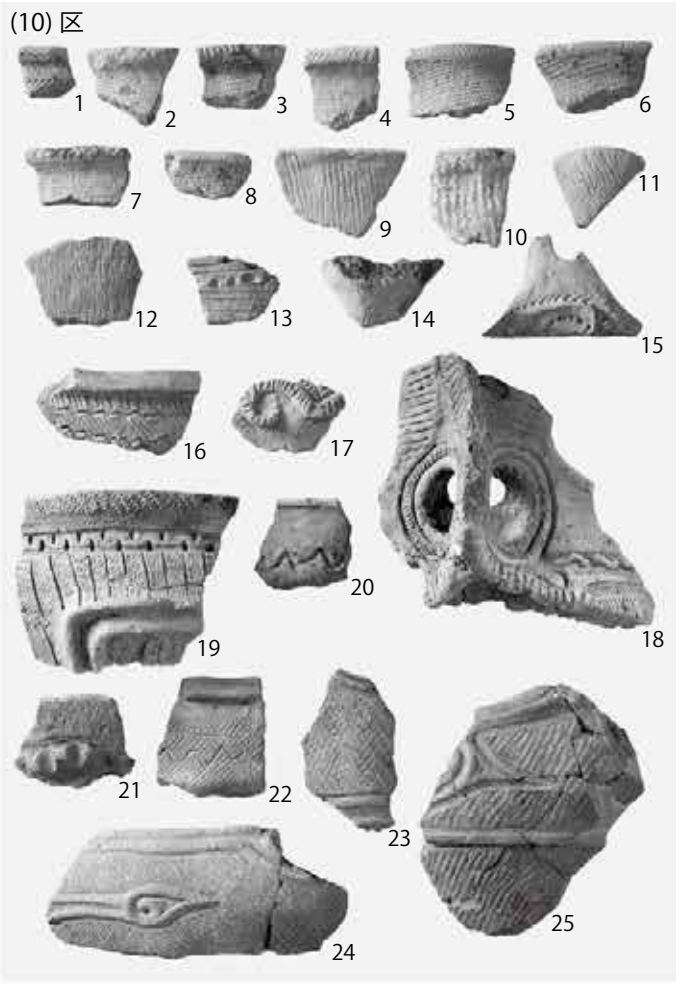
(7) 区

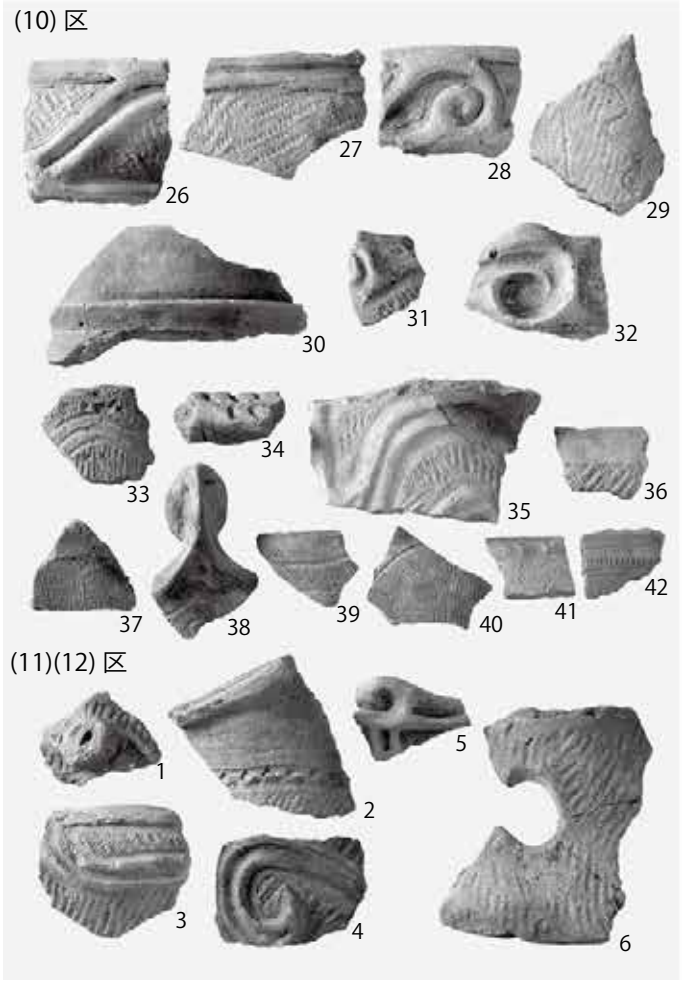


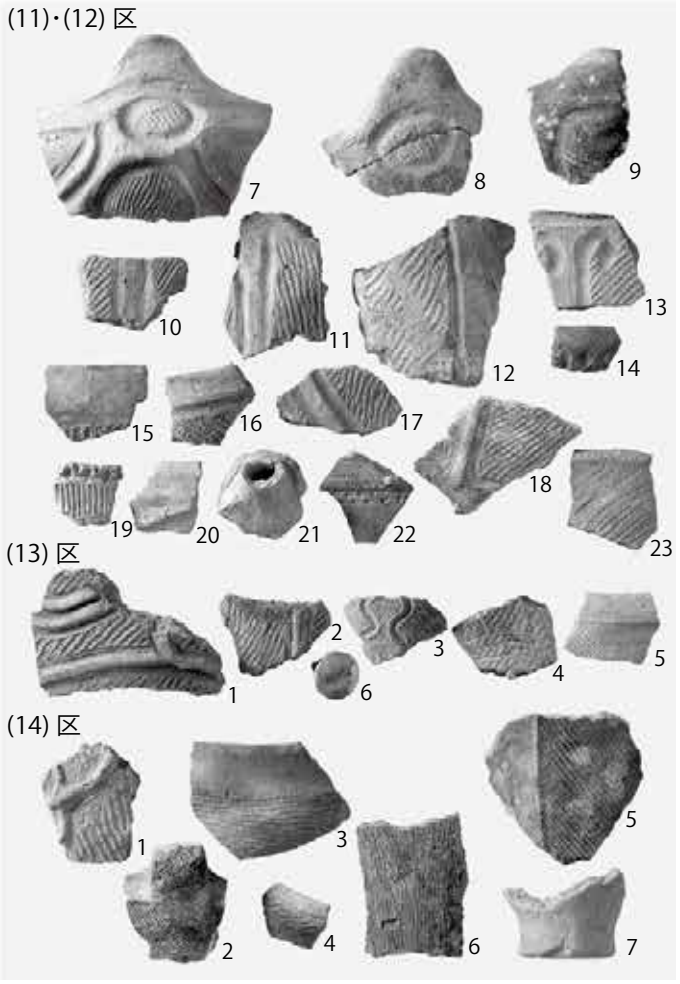
土坑等出土土器(38)・遺構外出土土器(2)

図版 110

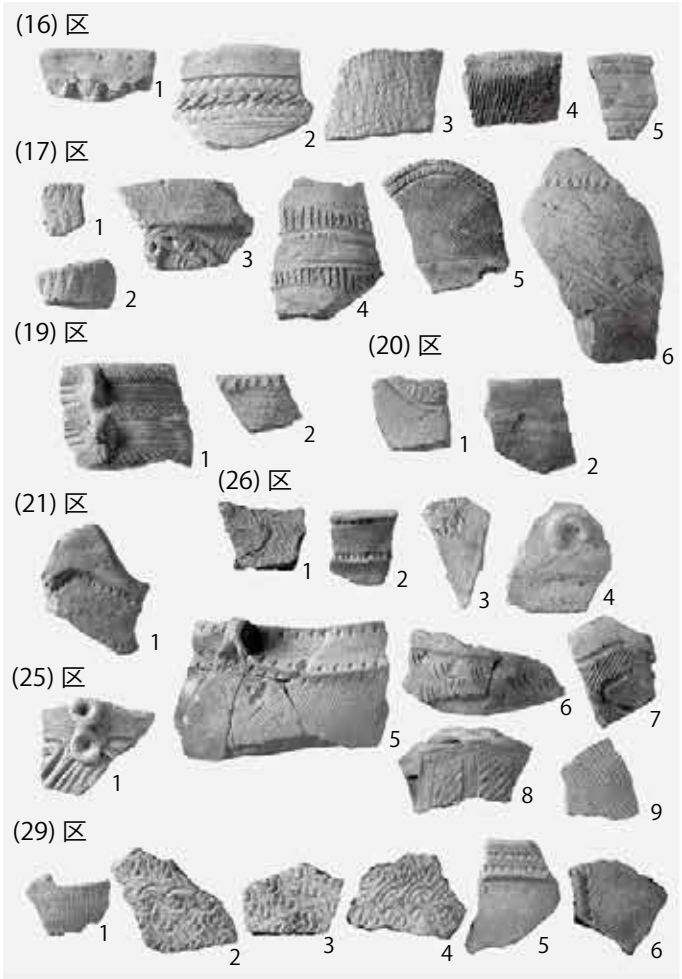


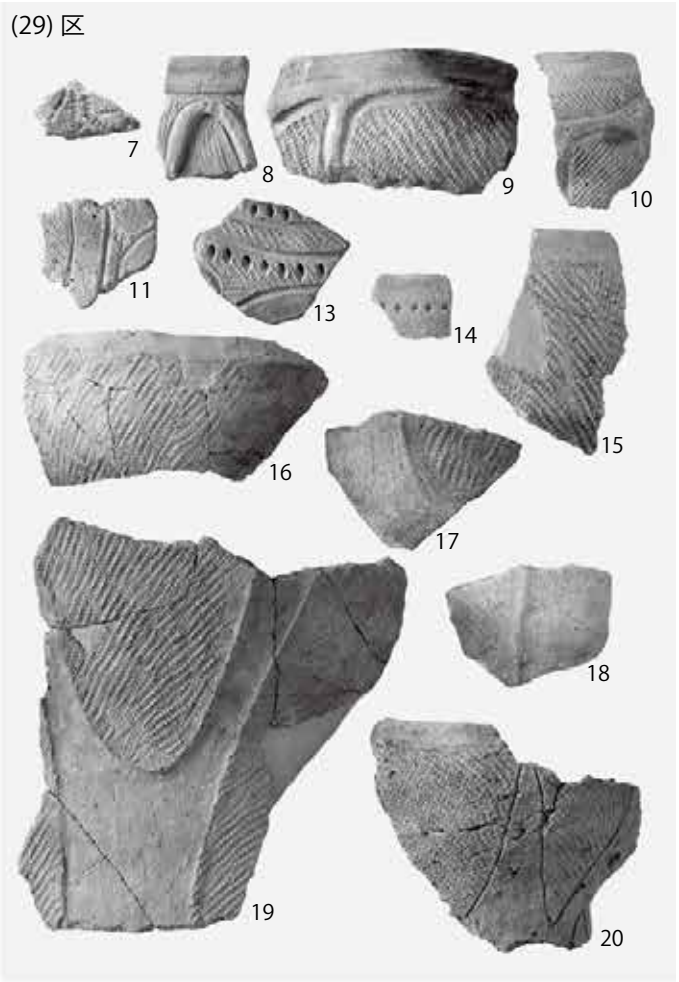


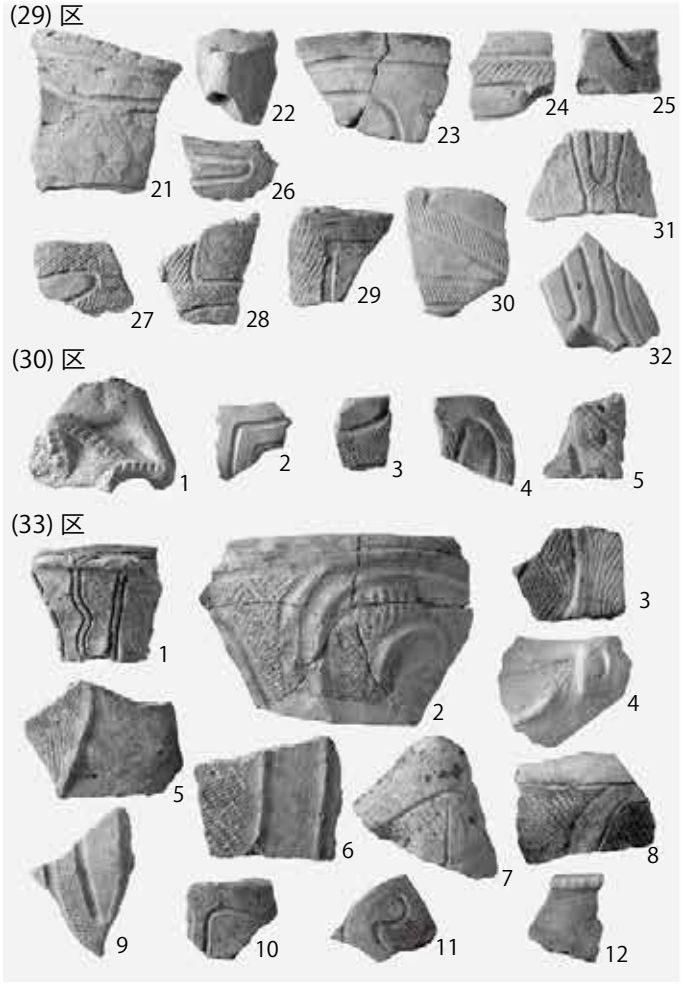


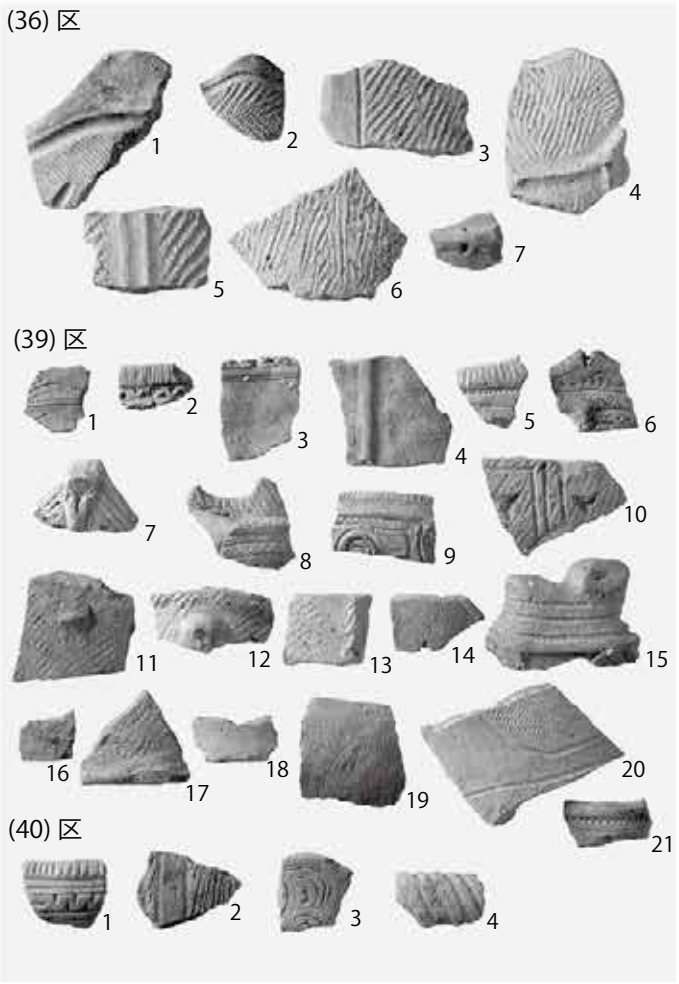


遺構外出土土器(3)



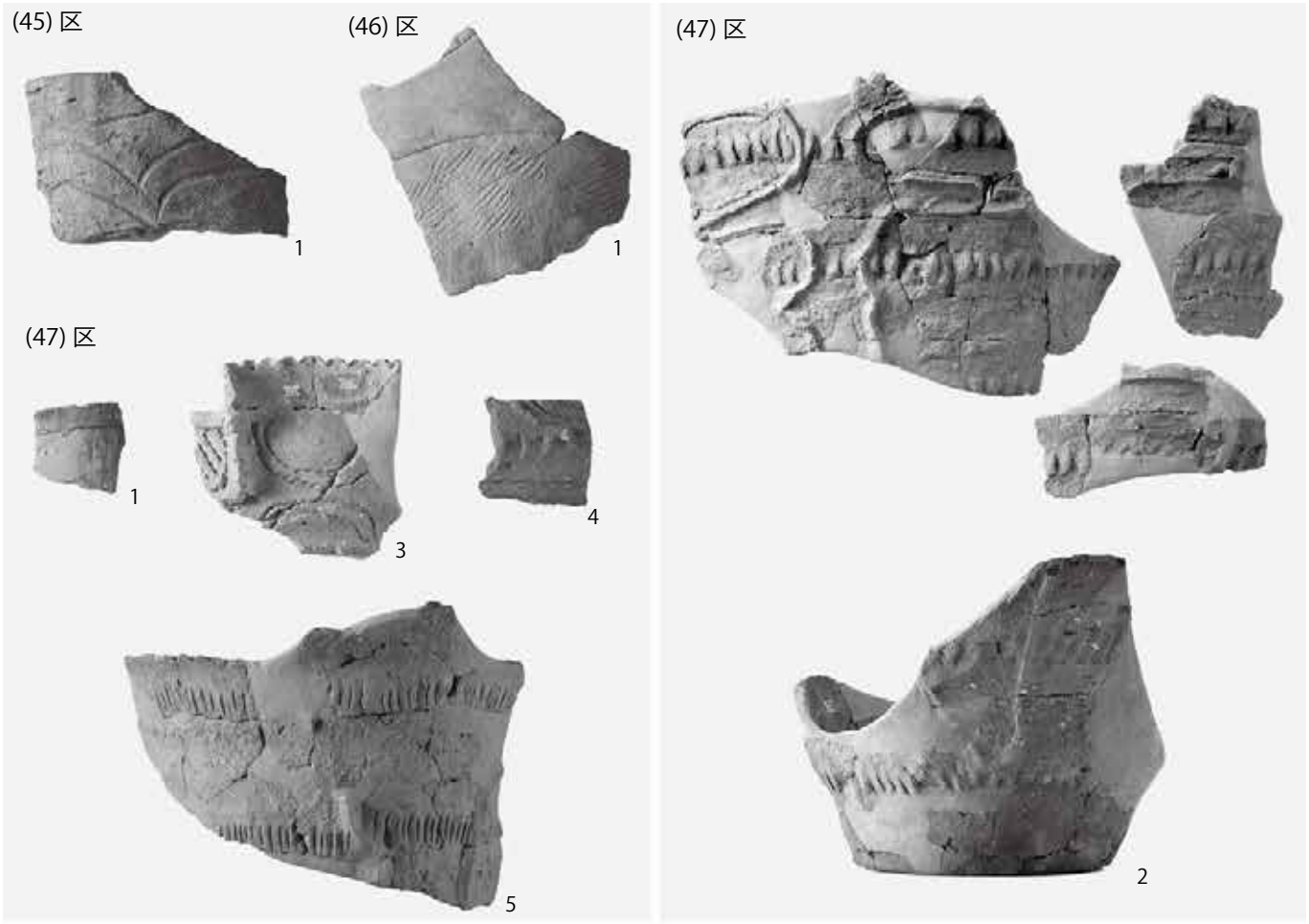




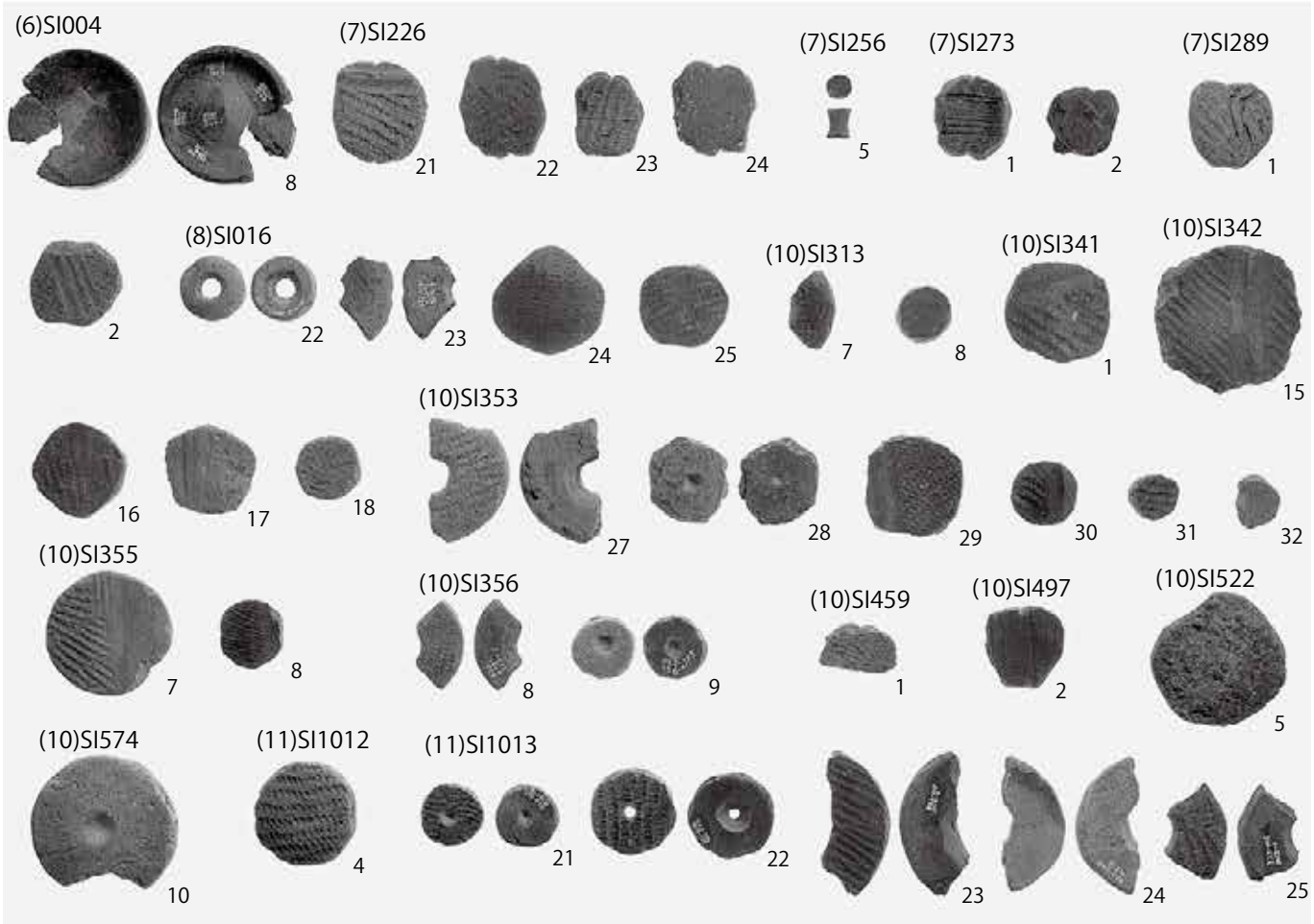


遺構外出土土器(4)

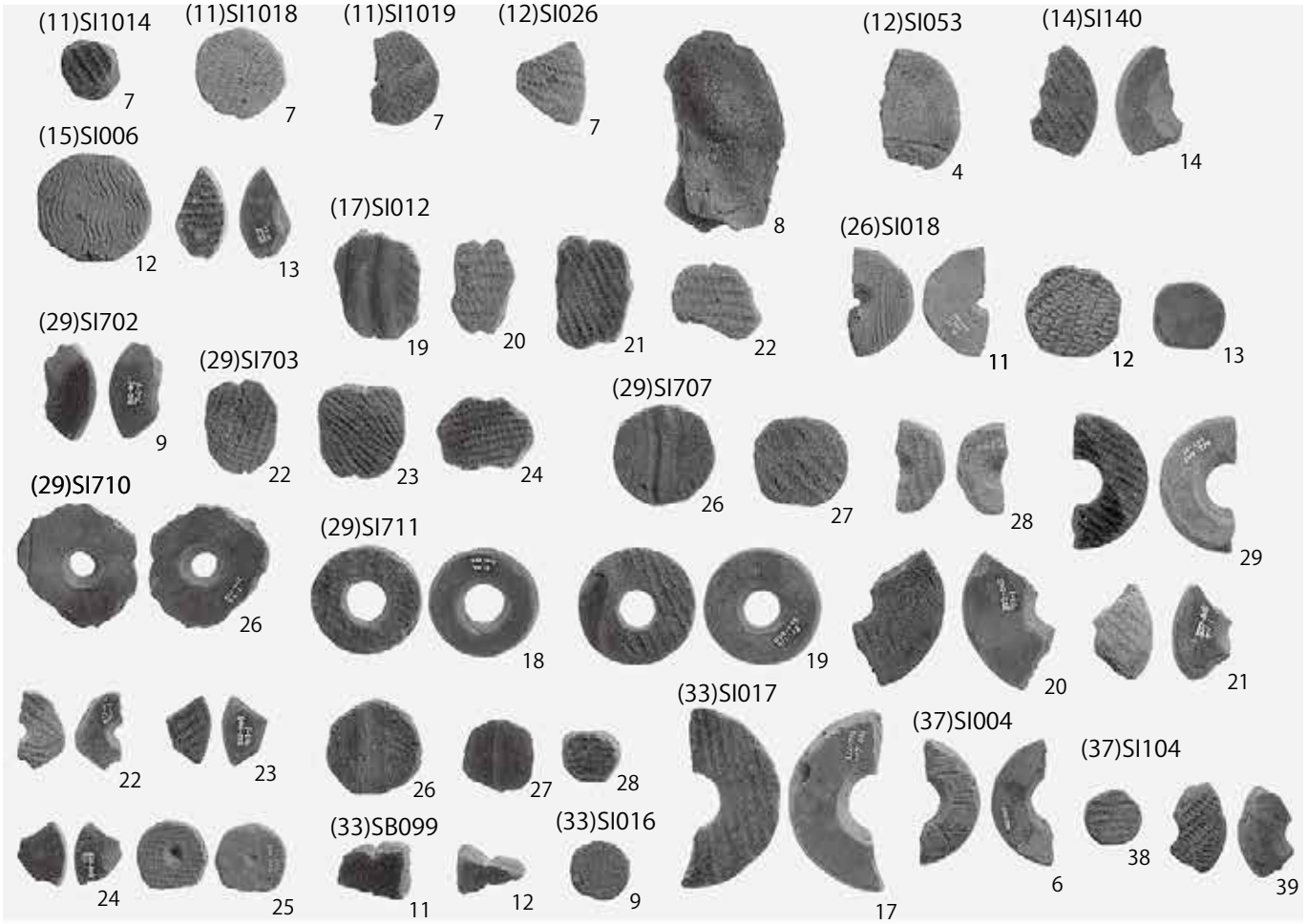
図版 112



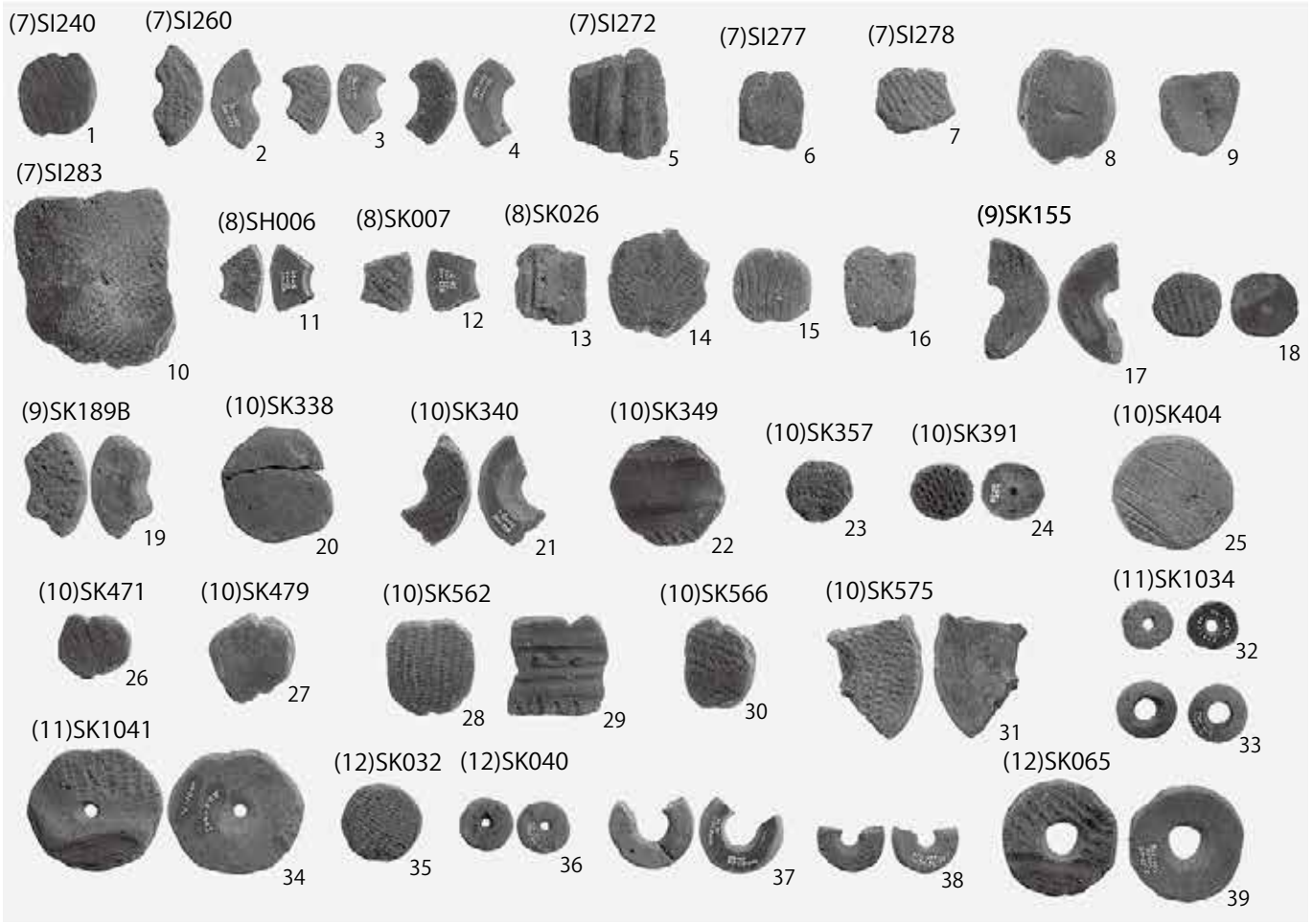
遺構外出土土器(5)



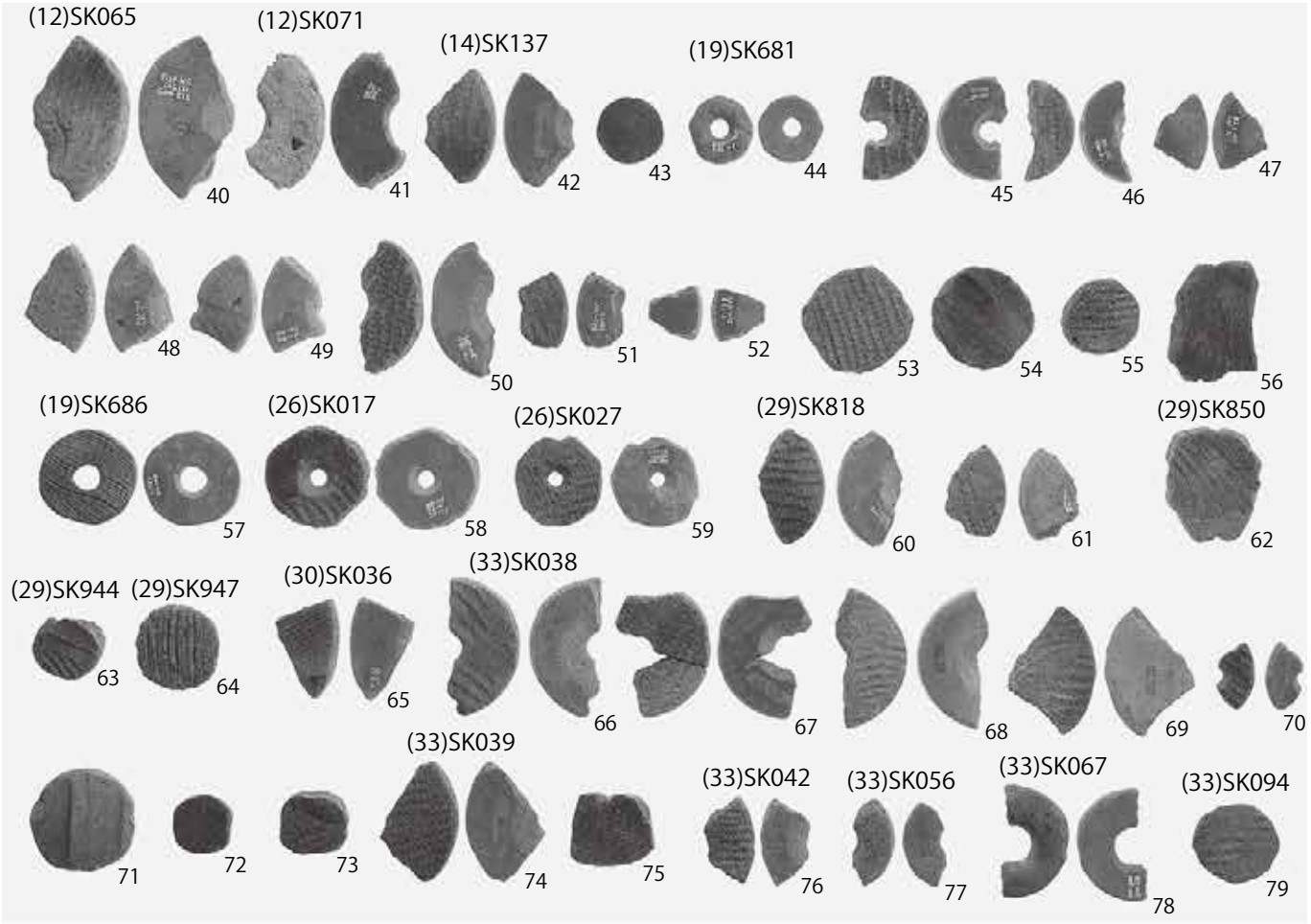
住居跡出土土製品(1)



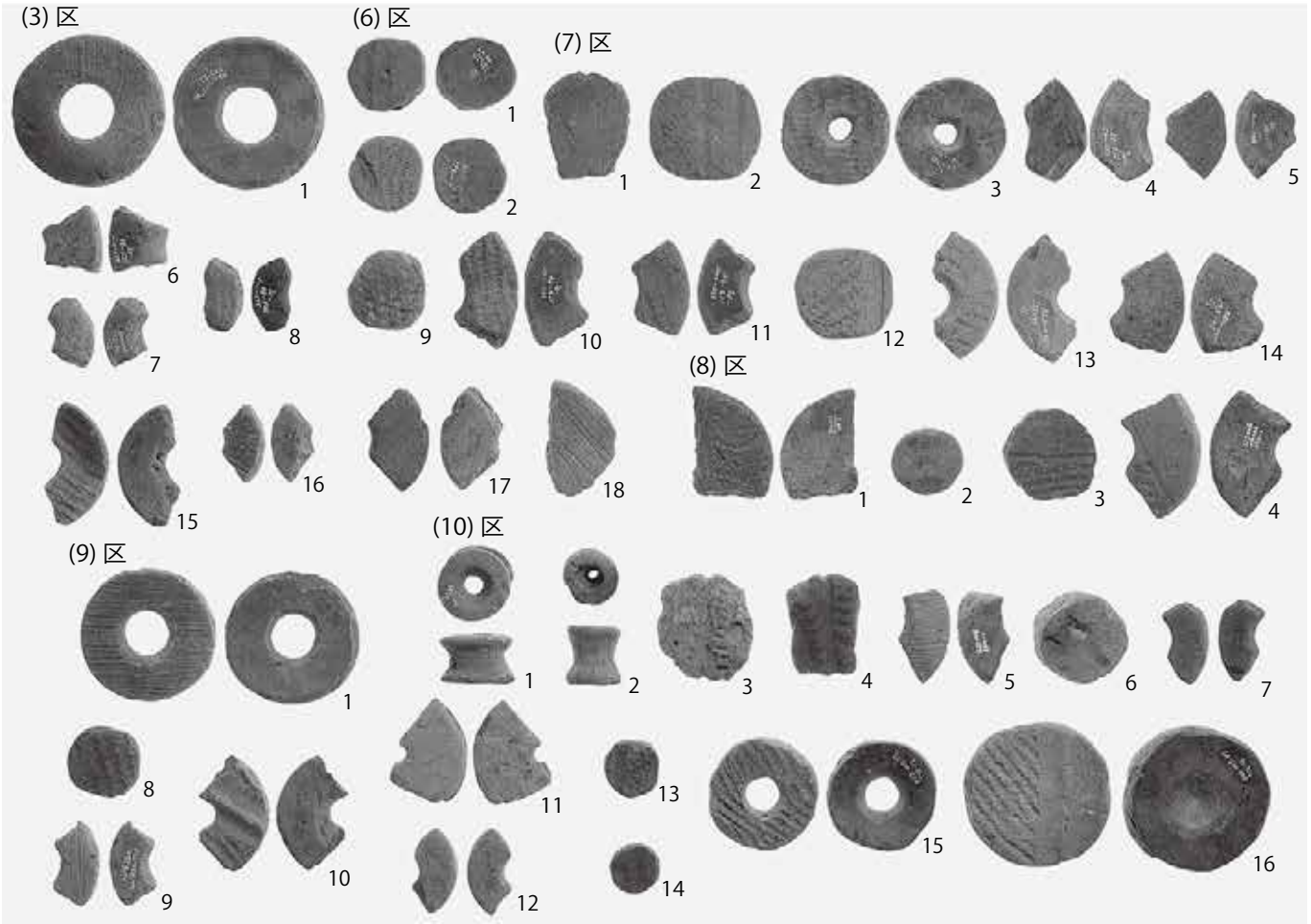
住居跡出土土製品(2)・掘立柱建物跡出土土製品



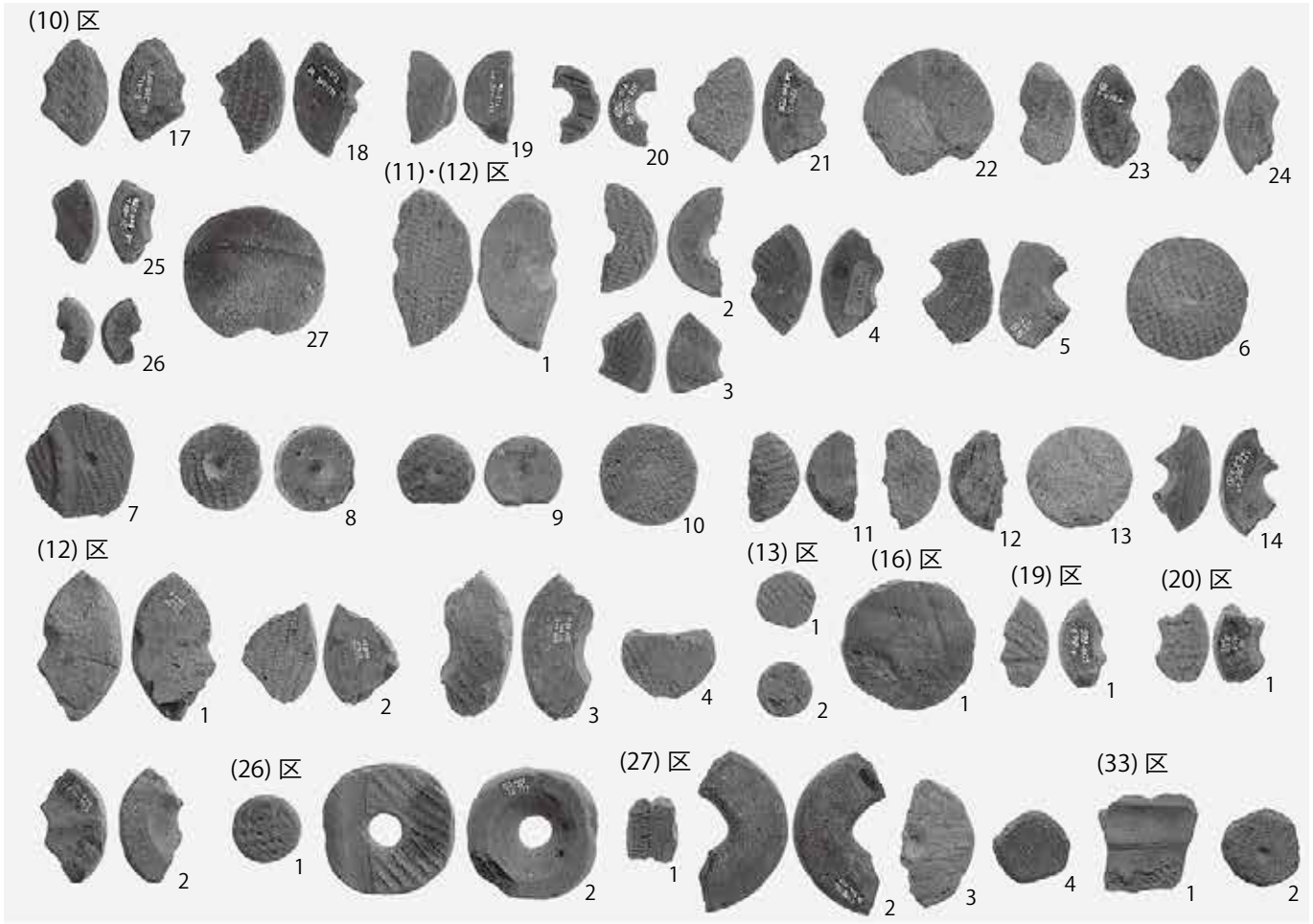
土坑等出土土製品(1)



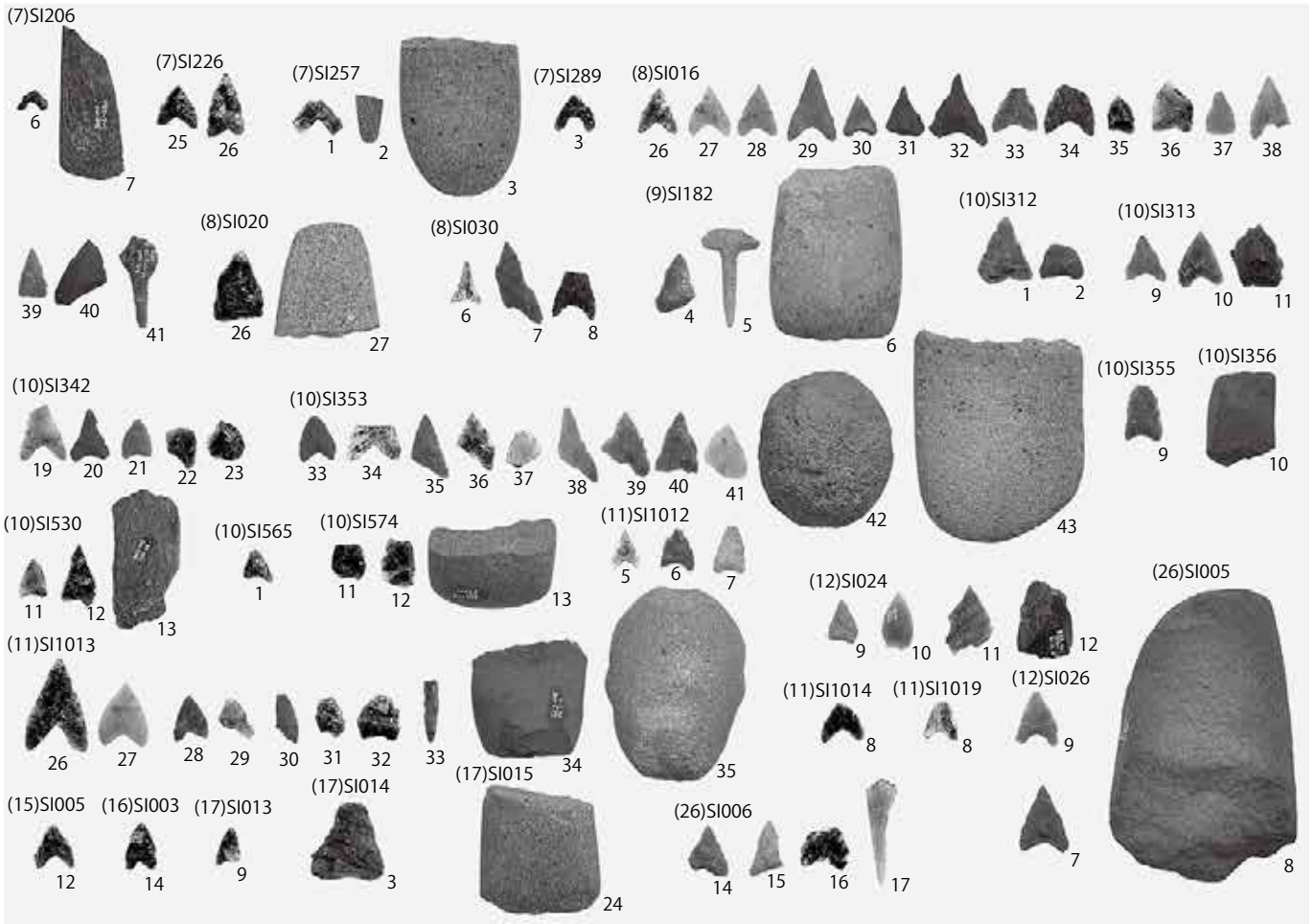
土坑等出土土製品(2)



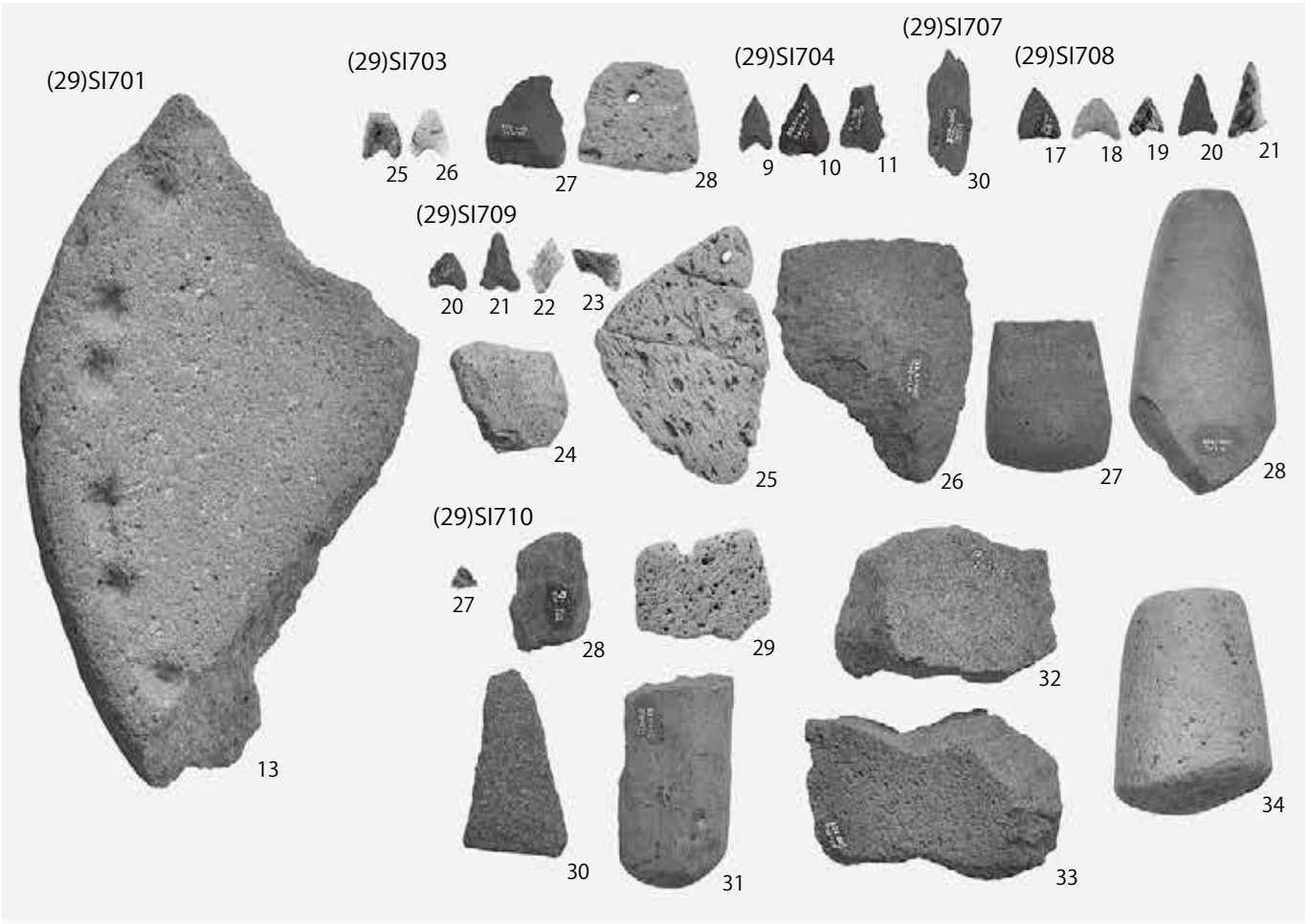
遺構外出土土製品(1)



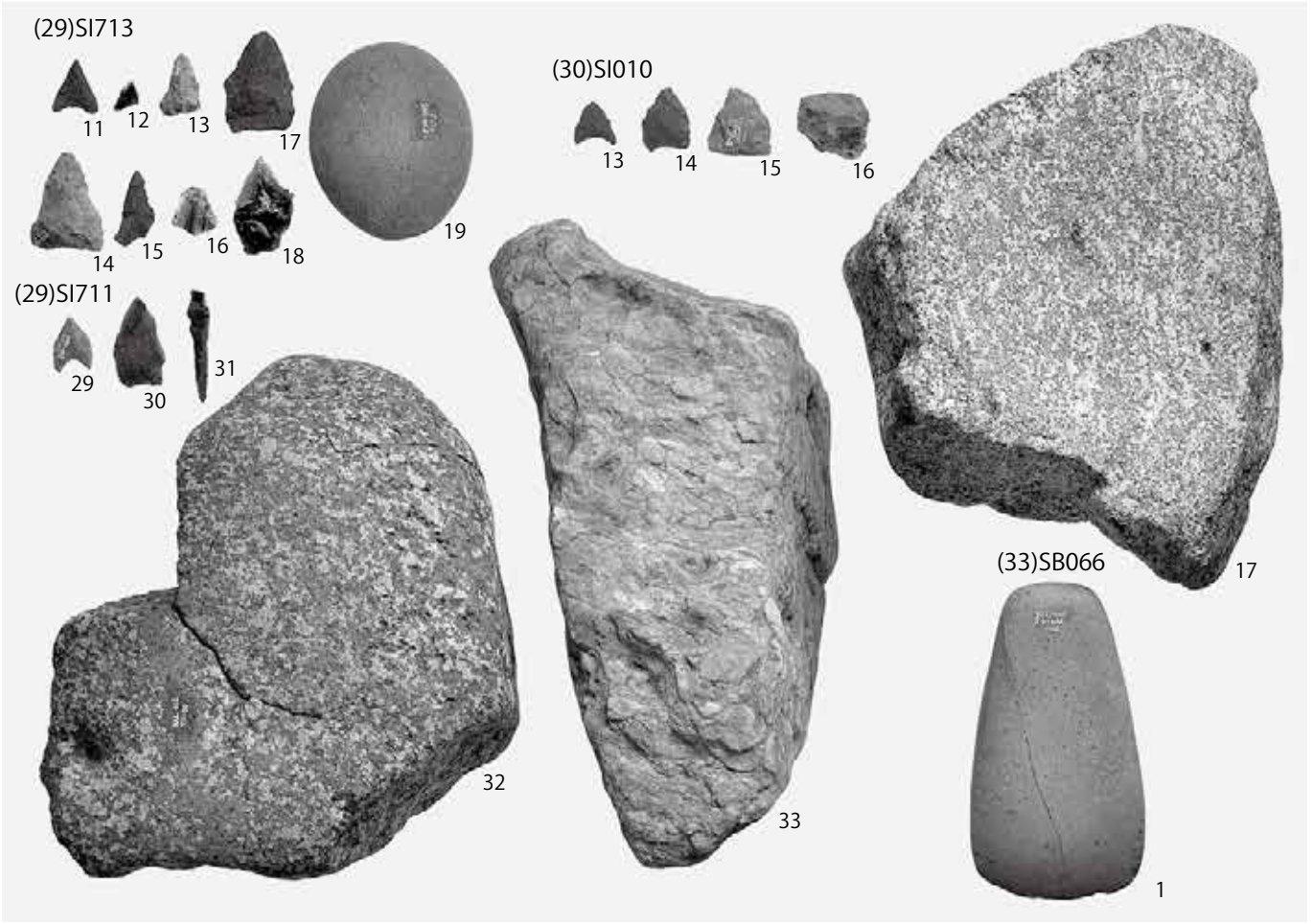
遺構外出土土製品(2)



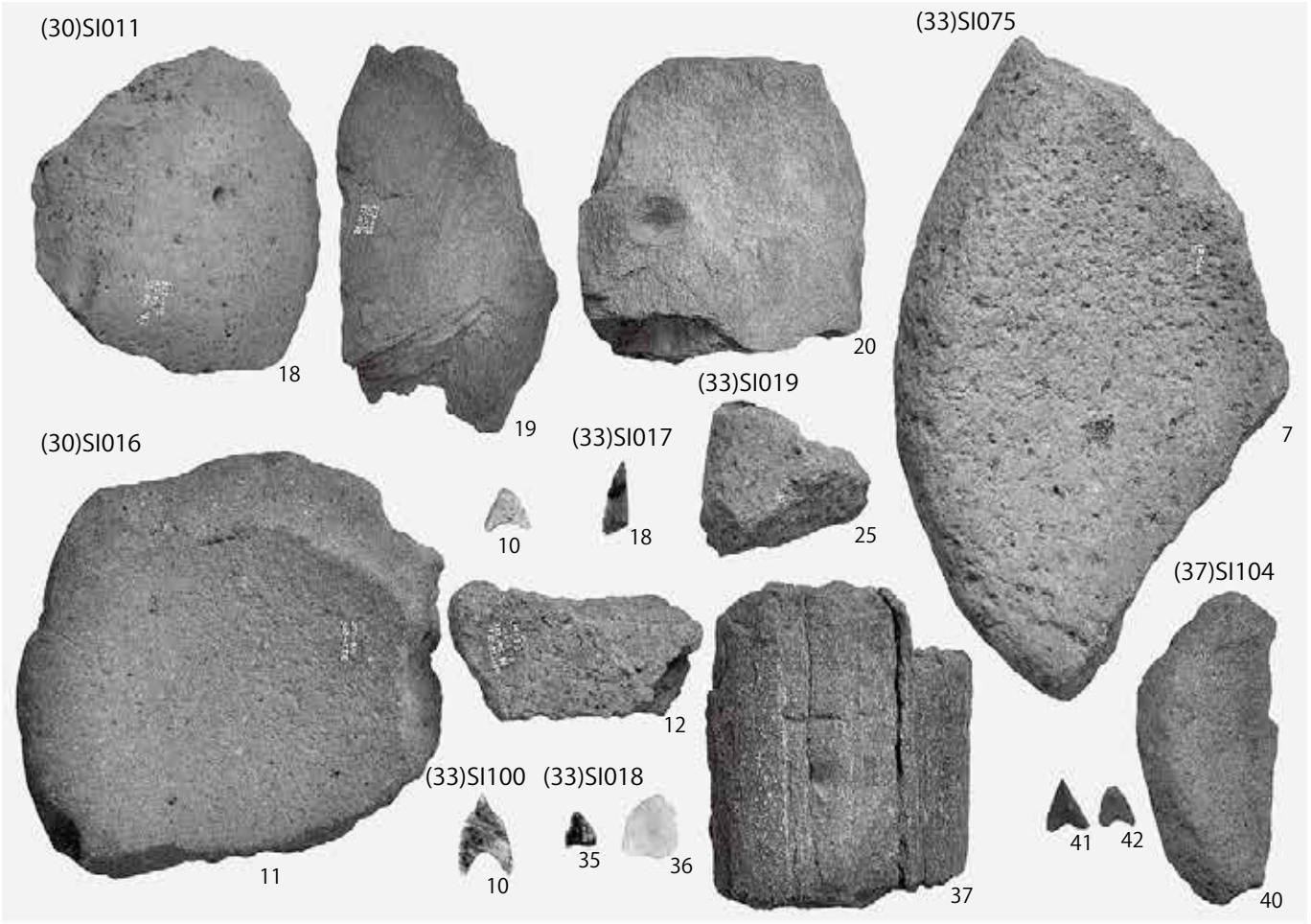
住居跡出土石器(1)



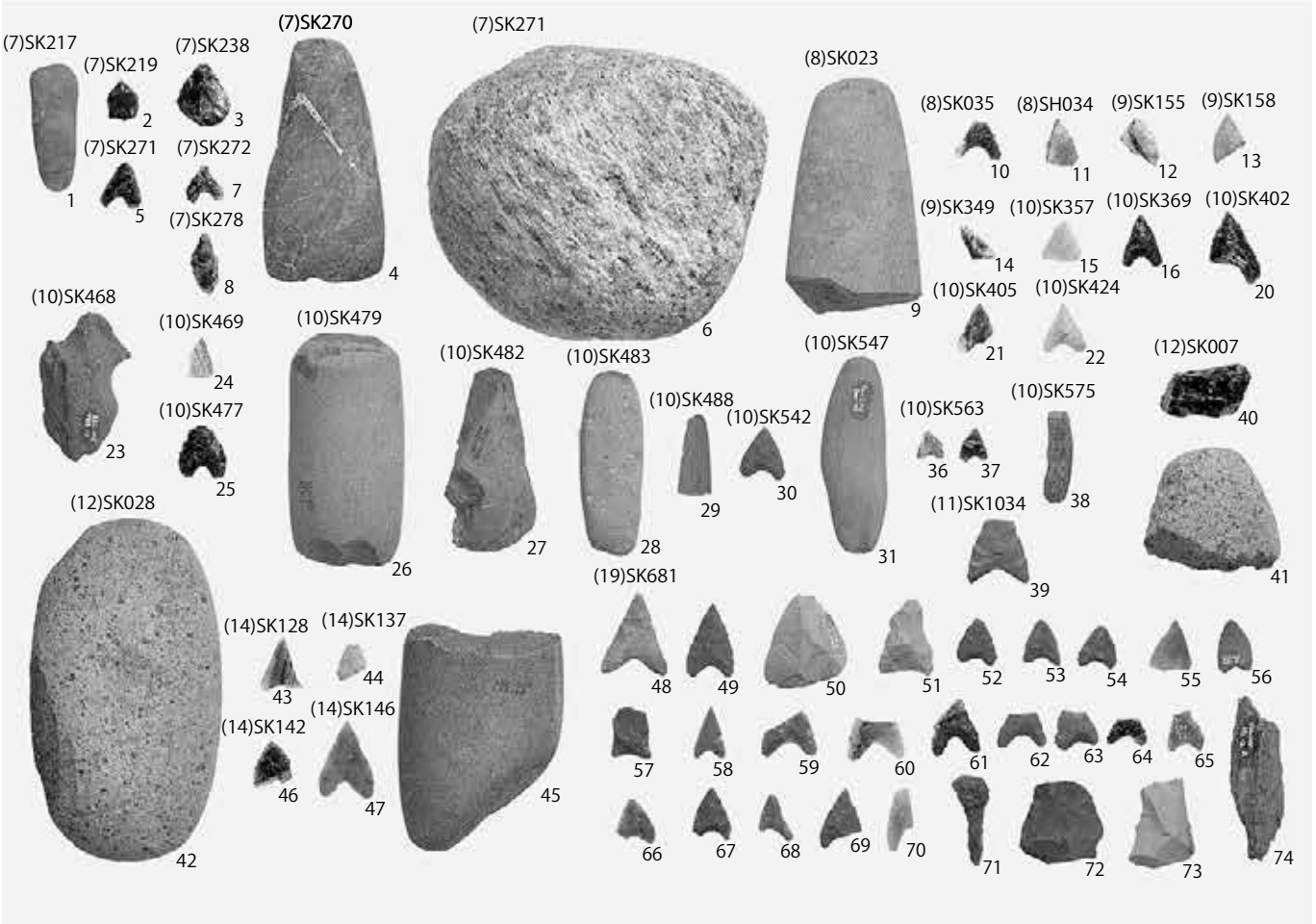
住居跡出土石器(2)



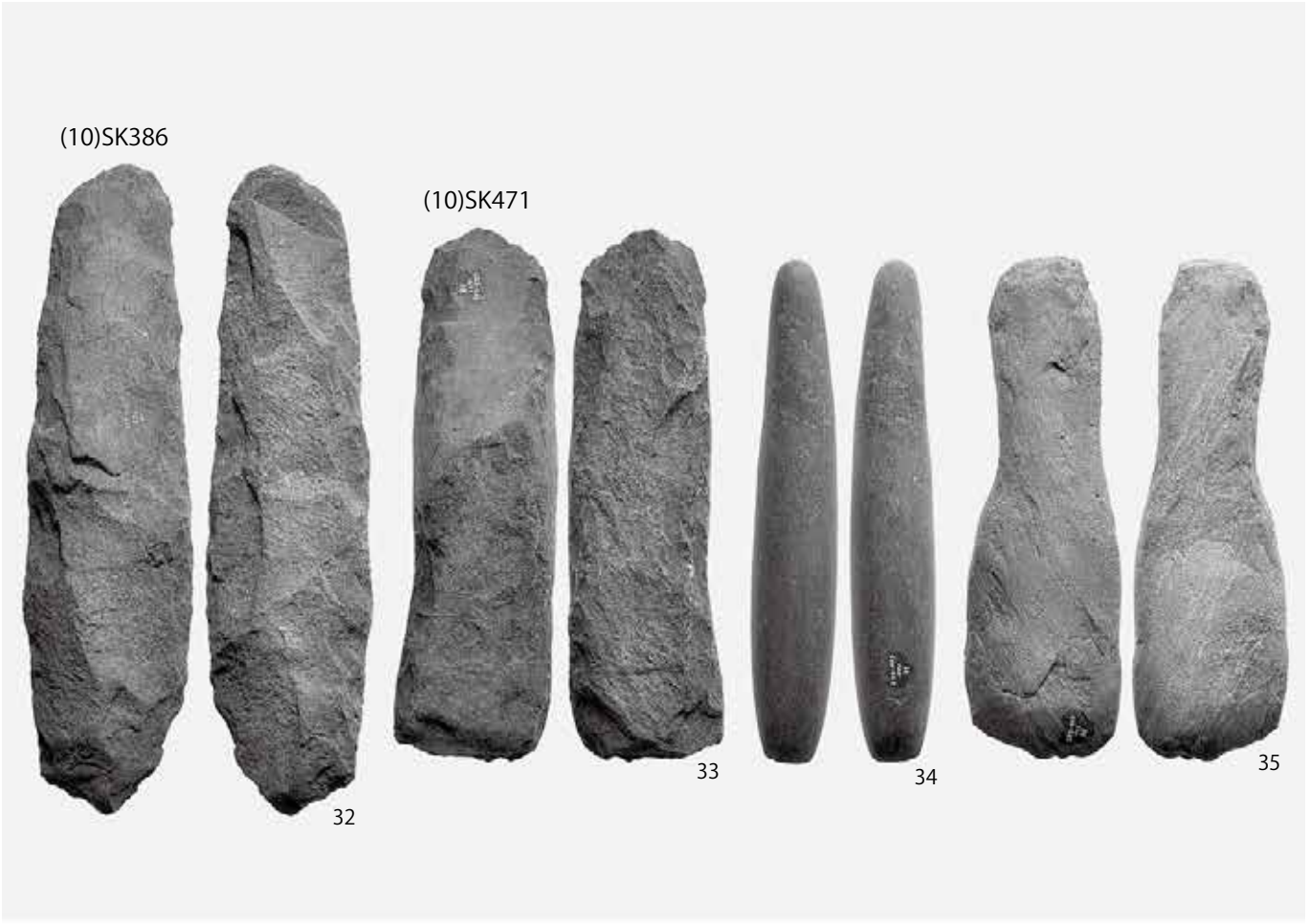
住居跡出土石器(3)・掘立柱建物跡出土石器



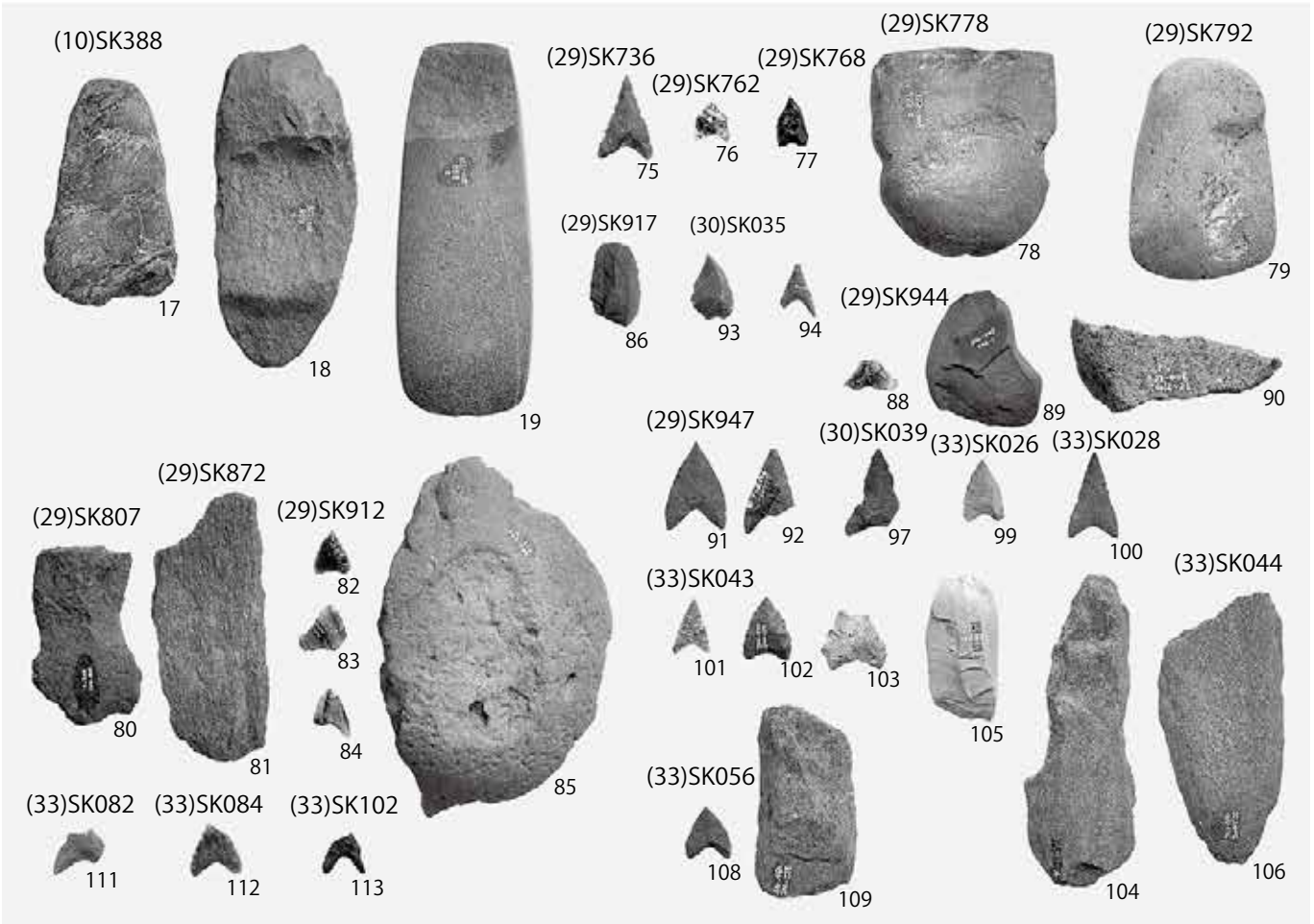
住居跡出土石器(4)



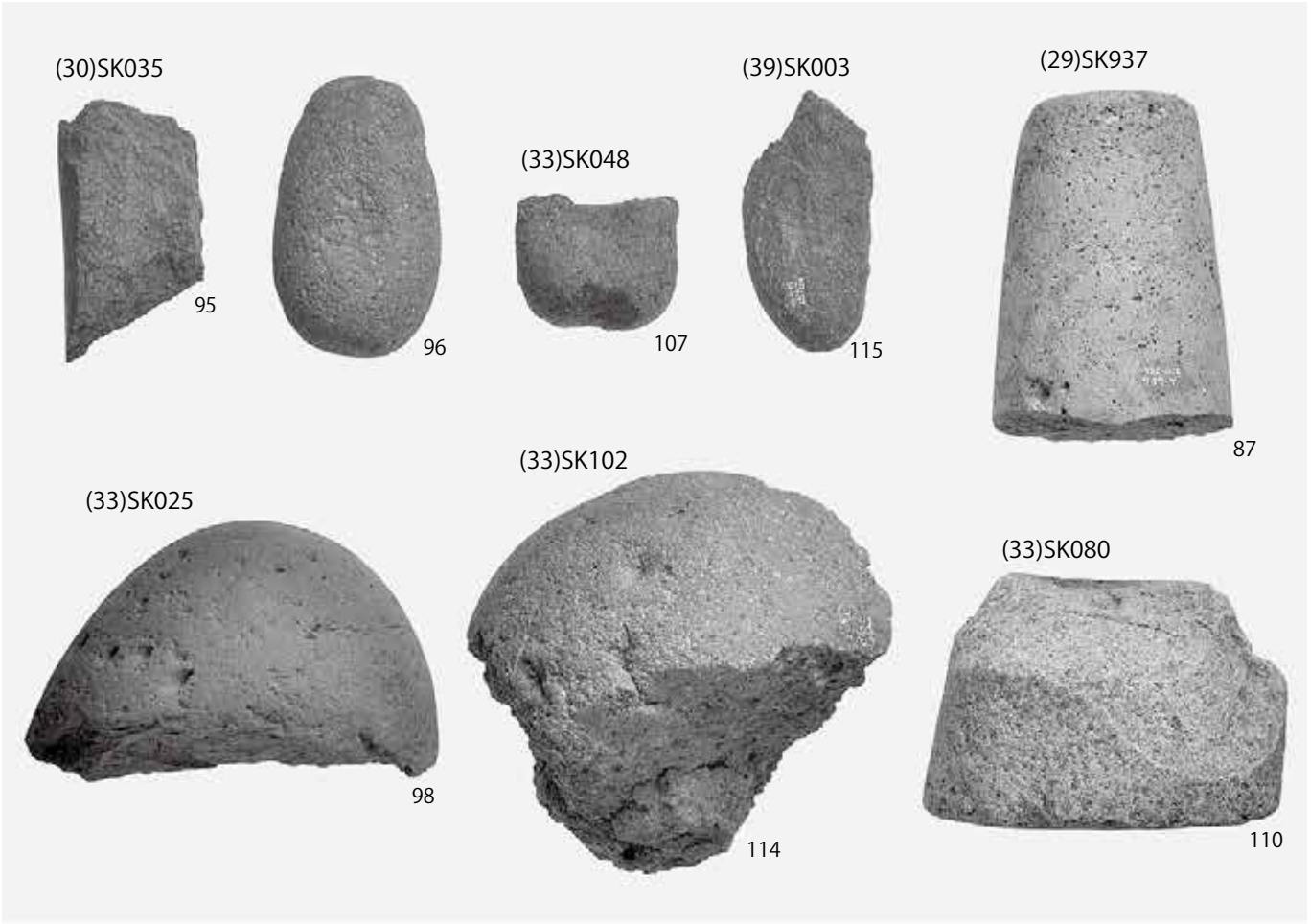
土坑等出土石器(1)



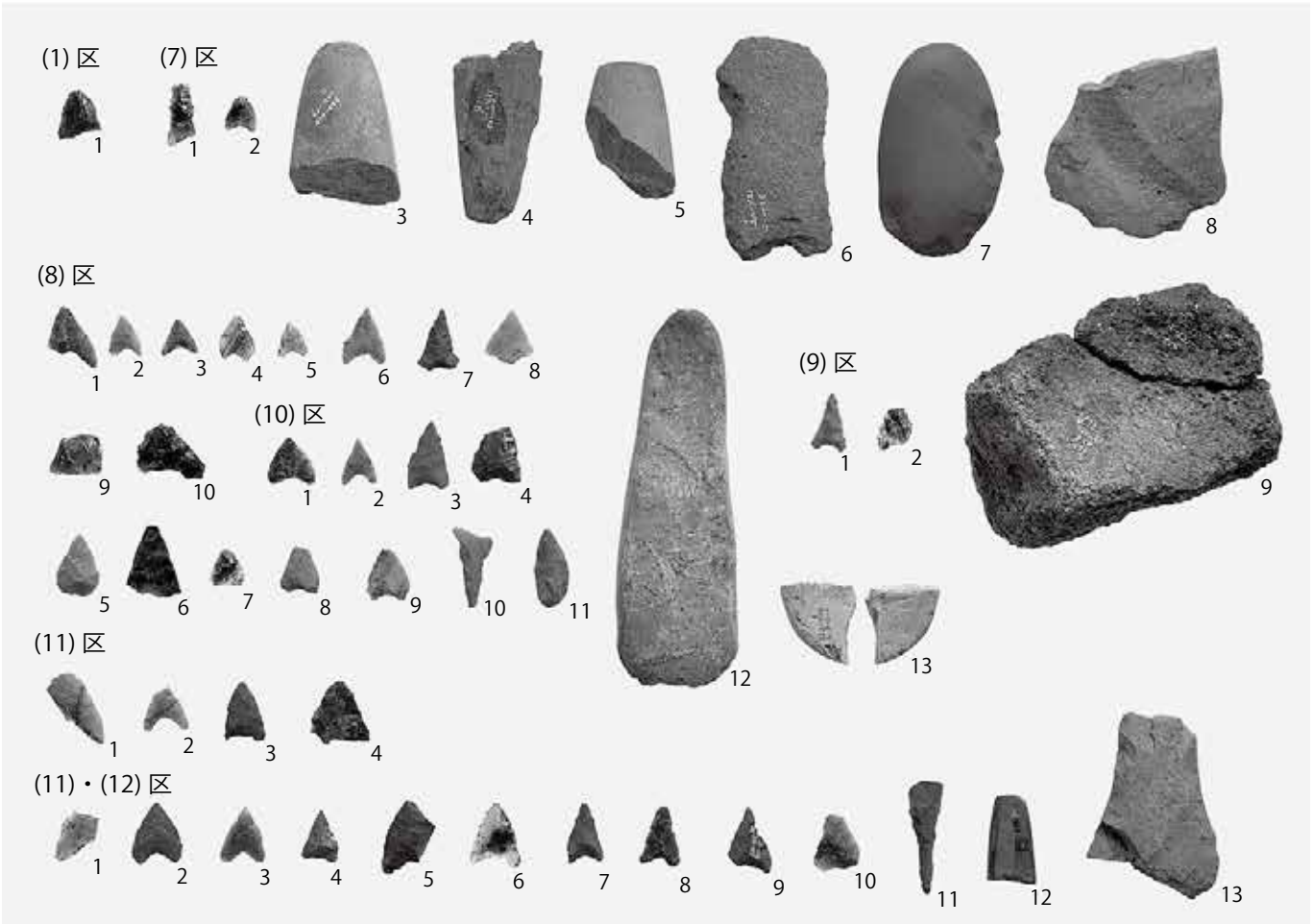
土坑等出土石器(2)



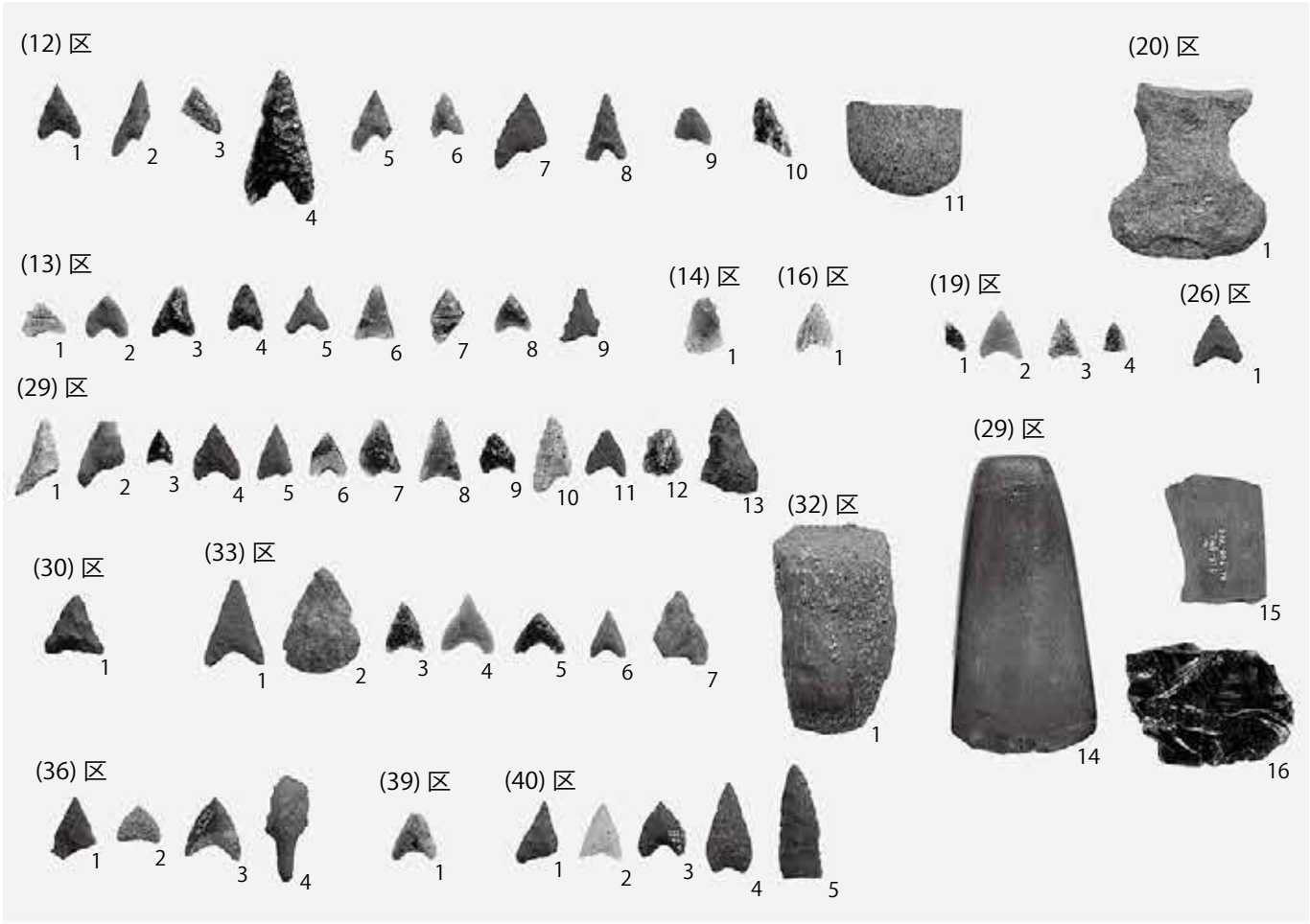
土坑等出土石器(3)



土坑等出土石器(4)



遺構外出土石器(1)



遺構外出土石器(2)

(10)SK475出土炭化堅果

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しすいまちいいづみはらやまいせき　2
書　　名	酒々井町飯積原山遺跡　2
副 書 名	酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書（縄文時代編）
巻　　次	3
シ リ ー ズ 名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第 731 集
編 著 者 名	木原高弘　西川博孝　橋本勝雄
編 集 機 関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所　在　地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2　　TEL　043（424）4848
発 行 年 月 日	西暦 2014 年 11 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いいづみはらやまいせき 飯積原山遺跡	しすいまちいいづみ 酒々井町飯積 あざみやただい 字宮田台535-2 ほか	12322	005	35 度 42 分 53 秒 （日本測地系）	140 度 17 分 43 秒	19950106～ 20060131 （調査開始日） 20110121 （本書所収調査期間終了日　その間断続的に調査　第 1 章参照）	154,240	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯積原山遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　132 軒 掘立柱建物跡　2 棟 土坑・小竪穴　744 基 陥穴　28 基 ピット (群)　81 基	縄文土器、耳栓、土製円板、土器片錘、石鏃、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、敲石、磨石類、石棒	縄文時代中期中葉から後期初頭の大規模な集落が発見された。

要　　約

飯積原山遺跡は、印旛沼に近い高崎川及びその谷部に北面する台地上に立地する。縄文時代は中期中葉から後期初頭を中心とした時期で、遺跡の北側にフラスコ状土坑、円形土坑を伴う住居跡群が展開する。今回報告した地区を時期別に見ると、加曽利Ｅ1 式期からＥ2 式期の集落は、台地縁辺に近い北東側に３か所分布する。加曽利Ｅ2-3 式からＥ3 式古段階期は遺構がほとんど見られなくなる。加曽利Ｅ3 式中段階期になると集落が復活し、広範囲に住居跡、土坑が分散する。その範囲は大きく２か所に分かれるが、東側は加曽利Ｅ4 式古段階期で終わるのに対して、西側は称名寺式期まで継続していることが判明した。

土器は、集落の消長と比例して勝坂式末期、いわゆる中峠式、加曽利Ｅ1 式古段階のものが多く出土し、多数の完形、半完形土器が得られた。加曽利Ｅ3 式中段階は梶山類の好例が出土している。加曽利Ｅ3-4 式段階は豊富な資料が得られた。この時期の特徴的な土器をはじめ、加曽利Ｅ4 式の口縁部微隆起線区画の祖形となった貼り付け微隆起線などの粗製土器が多数出土し、両者が共伴する良好な一括資料が得られた。加曽利Ｅ4 式も古・中・新の各段階が確認でき、称名寺式に先行する西日本由来の土器も出土した。

土製円板は、有孔、無孔の両方があり、所属時期は加曽利Ｅ3 式中段階から 3-4 式段階であることが判明した。

石器は、剥片石器では石鏃・石鏃未成品・楔形石器、礫石器では磨製石斧・磨石類が多く出土した。

千葉県教育振興財団調査報告第 731 集

酒々井町飯積原山遺跡　2

縄文時代編

－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書３－

平成 26 年 11 月 28 日発行

編　　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿６－５－１

公益財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡 809 番地の２

印　　刷　株式会社　東プリ
千葉県船橋市咲が丘１-11-９